

岐阜大学大学院医学系研究科・
医学部・附属病院の
現状と課題

第9号



岐阜大学

大学院医学系研究科・医学部・附属病院

2015年6月

凡 例

1. 名簿は原則として2014年12月1日の教育職員配置表の在職をもって記載した。
2. 記載した業績の期間は2012年1月1日から2014年12月31日とした。
3. 原著(欧文)の各論文のインパクトファクターはISI Web of Knowledge 2013年版を使用した。
インパクトファクターの付いていない論文においては空欄とした。



新しい医学の発展、未来に繋がる医学を目指す岐阜大学大学院医学系研究科・医学部・附属病院とこれから大きく力強く成長していく新芽と重ねてイメージしました。

新堀川の桜並木から医学部・附属病院を望む



移転 10 周年記念・ホームカミングデイ



Davao 医科大学来学



臨床研究推進支援経費研究成果発表会



市民講座「腰痛症・骨粗しょう症」



附属病院北診療棟開設式
岐阜大学医学部附属病院北診療棟開設式



附属病院





附属病院を飛び立つドクターヘリ



ホスピタルパークの藤棚から附属病院を望む



高度救命救急センターと病院所有の救急車



医学部記念会館



看護学科棟



雪の日の学舎



柳戸橋から医学図書館を望む

序 文

岐阜大学大学院医学系研究科長・医学部長 清島 満

3年ごとに発刊している「現状と課題」の9号を纏めることができた。対象期間は2012年1月～2014年12月の3年間である。1号から8号まで並べてみると次第に厚さを増してきていることが一目瞭然である。教育・研究・診療活動の状況をそれぞれの分野・診療科で活動状況を纏め、問題点を分析し、そして対策を講じるということはきわめて重要である。

さて、この3年間に医学領域においても国内外で種々の事柄が起きた。2014年2月に西アフリカでのエボラ出血熱が流行し、世界を恐怖に陥れた。現在までに4,000人以上が犠牲となったが、これまで有効な薬剤やワクチンがなく、隔離、封じ込め作戦が主体であった。しかし日本の製薬会社が抗インフルエンザ薬として開発した薬のエボラ出血熱に対して有効性が示され、米国は未承認薬のまま使用に踏み切った。この薬剤がすべての症例に有効というわけではないが、有望な治療薬として現在脚光を浴びている。日本の製薬技術の高さを世界に示した明るいニュースである。

さて、国立大学に対する国の施策が大きく変わろうとしている。これは2012年に各国立大学にミッションの再定義を求めたことに端を発する。すなわち文科省が財務省（ないしは財界）から国立大学の存在意義と地域における役割を明確に示すよう課題をつきつけられたもので、文科省から各大学に再定義を提出するように求められた。文科省HPで各医学部の再定義を確認することができる。また、2013年からは大学の改革推進の一環として、学長ガバナンス強化が強調され、実際学校教育法と国立大学法人法が改正され、2015年4月に施行された。一方で、文科省は全国の86国立大学を3つのグループに分けてそれぞれの特徴を出させようとしている。すなわちこれまでの大学規模に応じて配分されていた運営費交付金に競争原理を導入するもので、これも産業界からの意向が反映しているものと推測される。さらに研究費の面においても改革案が打ち出された。文科省、厚労省、経産省の医学研究に関する研究予算を一本化し、総務省が管轄する「日本医療研究開発機構」が2015年4月に発足した。この機構は米国のNIHを模したものであり、大型プロジェクト型の研究が主体となる。一方、従来の文科省科研費の予算は数年来減額傾向にあるが、プロジェクト型ではなく、自由な発想に基づく研究を支援するこのような予算は是非確保しておいてもらいたい。いずれにしても学長ガバナンスの強化で各大学がそれぞれ独自の方向性を打ち出し、発展していくのであれば問題はないが、ガバナンス強化を逆手にとって国の意向に背く大学を圧迫する方向に進まないことを願っている。

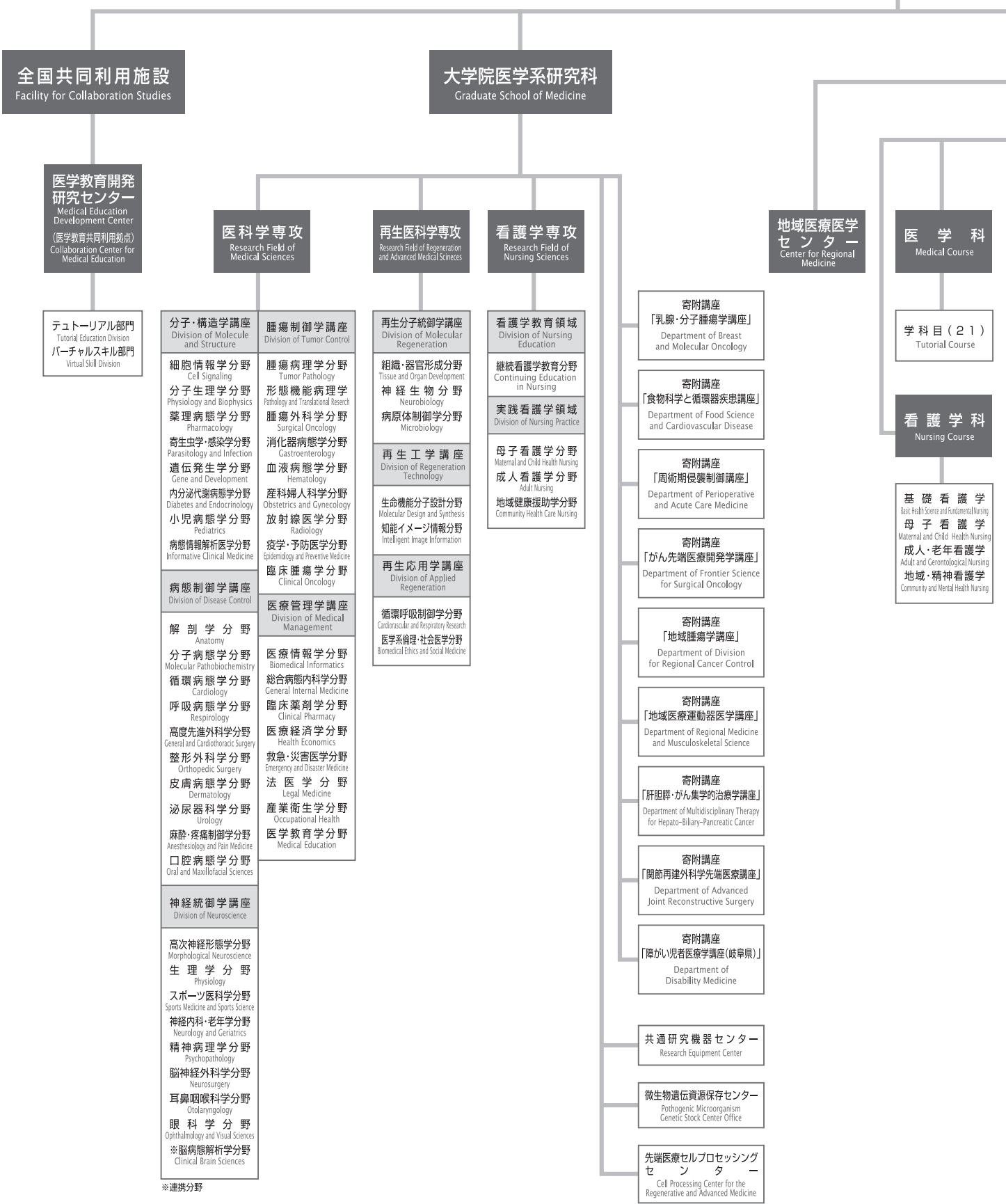
山中伸弥教授のノーベル賞受賞後、iPS細胞の今後の医学の発展に寄与するところ計り知れないものがある。しかしその一方で国内ではSTAP細胞や臨床研究における論文不正という残念な出来事もあった。当医学部の臨床研究に関しては倫理審査委員会において厳格に審査を行っているが、研究論文作成は各研究者の研究倫理観に委ねられている。研究倫理を遵守することは研究者としての基本であり義務である。したがって研究倫理に反する行為は研究者としての道が閉ざされる可能性のあることを強く認識しておく必要がある。ノーベル賞受賞者を輩出している科学大国の日本でこのような研究不正が蔓延しているとは考えたくない。

附属病院に関しては2014年度の消費税アップや厚労省の特定共同指導の影響などで赤字見込みであったが、ベッドコントロール体制の改善や各診療科の努力で年度末にかけてかなり赤字を圧縮できた。経営収支にはさまざまな要素が関与するが、病院長以下職員全員が一体となって病院経営改善に取り組むことが必要である。国内の医師不足対策としては2008年から医学部定員増加策が採られており、入学定員は9,000人を超し、すでに1,500人余りが増加したことになる。そのほとんどはいわゆる地域枠定員であり、各自治体が修学資金を貸与して卒後11年間を地域医療での活躍を期待している。当医学部における今年度の地域枠定員は28名であり、地域医療医学センターが地域医療実習を調整している。また、岐阜県医師育成確保コンソーシアムを組織し、地域枠学生が夢を持ってキャリアを積めるように支援をしている。今後、地域枠出身の医師の増加が見込まれ、10年後には十分とはいかないまでも現在よりは地域医療にたずさわる医師数は増加して充実することは間違いない。地域医療医学センターではそのほか、女性医師の支援活動も県医師会との協力的体制のもと、女子学生のみならず男子学生をも対象として地道な啓発運動を行っている。

最後に膨大なデータを冊子に纏められた自己評価委員会の原明委員長並びに事務職員に敬意を表す。岐阜大学医学部と附属病院が今後さらに発展していくための飛躍台として活用されることを心から願っている。ただ、冒頭でも述べたようにこの「現状と課題」の冊子は号を重ねるにしたがってかなり厚くなってきた。岐阜大学大学院医学系研究科/医学部のHPでバックナンバーも含めて閲覧可能であり、冊子作製費の高騰や活用度の点から今後はCDによる配布も検討したいと考えている。

機構図

岐阜大学
Gifu University



※連携分野

Organization Chart

(平成26年8月1日現在)
as of Aug. 1, 2014

医学部 School of Medicine

医学教育企画評価室
Office of Medical Education

危機管理室
Disasters Management Committee

医療安全管理室
Patient Safety Division

附属病院 University Hospital

医学系研究科・
医学部事務部
Administration Department

医学部附属病院事務部
Hospital Administration Office

診療科 Clinical Department

中央診療施設等 Central Clinical Facilities

薬剤部 Division of Pharmacy

看護部 Division of Nursing

- 事務長補佐
- 総務係
- 研究支援係
- 管理係
- 人事係
- 医学科学務係
- 看護学科学務係
- 教育企画係
- 技術室

- ### 総務課
- 課長補佐 (総務担当)
 - 課長補佐 (管理・調達担当)
 - 専門職員
 - 総務係
 - 人事労務係
 - 管理係
 - 研究推進係
 - 調達係

- ### 経営企画課
- 課長補佐 (企画担当)
 - 課長補佐 (情報担当)
 - 経営企画係
 - 臨床研修支援係
 - 医療情報係

- ### 医事課
- 課長補佐
 - 医事係
 - 診療報酬係
 - 診療情報管理係
 - 収入係

- ### 医療支援課
- 課長補佐
 - 医療支援係
 - 医療連携係
 - 診療サービス係
 - 医療安全係

- 第1内科 Internal Medicine I
- 血液内科 Hematology
- 第2内科 Internal Medicine II
- 第3内科 Internal Medicine III
- 神経内科・老年内科 Neurology and Geriatrics
- 総合内科 General Internal Medicine
- 第1外科 Surgery I
- 第2外科 Surgery II
- 産科婦人科 Obstetrics and Gynecology
- 整形外科 Orthopedic Surgery
- 脳神経外科 Neurosurgery
- 眼科 Ophthalmology
- 耳鼻咽喉科 Oto-Rhino-Laryngology
- 形成外科 Plastic and Reconstructive Surgery
- 皮膚科 Dermatology
- 泌尿器科 Urology
- 精神神経科 Psychiatry
- 小児科 Pediatrics
- 放射線科 Radiology
- 麻酔科疼痛治療科 Anesthesiology and Pain Medicine
- 歯科口腔外科 Dentistry, Oral and Maxillofacial Surgery

- 検査部 Division of Clinical Laboratory
- 手術部 Operation Division
- 放射線部 Radiology Services
- 材料部 Supplies Division
- 輸血部 Division of Transfusion Medicine and Cell Therapy
- 病理部 Pathology Division
- 総合診療部 General Medicine
- 医療情報部 Medical Information Division
- 光学医療診療部 Endoscopy Center
- 高次救命治療センター Advanced Critical Care Center
- 医療連携センター Center For Medical Cooperation
- 生体支援センター Center For Nutrition Support and Infection Control
- がんセンター Cancer Center
- エイズ対策推進センター AIDS Clinical Center
- 肝疾患診療支援センター Center for Liver Disease
- リハビリテーション部 Rehabilitation Division
- 分娩部 Birthing Center
- 医療機器センター Medical Instrument Center
- 高次画像診断センター High-level Imaging Diagnosis Center
- 新生児集中治療部 Neonatal Intensive Care Unit
- オートプシーセンター Autopsy Imaging Center
- 脳卒中センター Stroke Center
- 栄養管理室 Dietary Management Division

- 生理検査係 Physiology
- 血液検査係 Hematology
- 化学検査係 Clinical Chemistry
- 病理検査係 Surgical Pathology and Cytology
- 細菌検査係 Microbiology
- 血清検査係 Serology
- 特殊検査係 Special Laboratory
- 検査情報係 Laboratory Information
- 一般エックス線撮影部門 General Diagnostic Radiology
- 画像情報管理部門 Medical image management Section
- CT検査部門 CT Section
- MRI検査部門 MRI Section
- 特殊エックス線撮影部門 Angiography & Interventional Radiology
- 放射線治療部門 Radiation Therapy Section
- 核医学診療部門 Nuclear Medicine
- 安全管理部門 Safety Management Section
- 救急部門 Emergency Room
- 集中治療部門 Intensive Care Unit, High Care Unit/ Coronary Care Unit
- 血液浄化治療部門 Blood purification unit
- 診療連携部門 Medical Treatment Collaboration Division
- 放射線治療部門 Radiotherapy Division
- 化学療法部門 Chemotherapy Division
- 緩和ケア部門 Palliative Care Division
- 臨床研究・教育研修部門 Residency and Fellowship Training Division
- 情報管理・病診連携部門 Information Management and Hospital-Clinic Cooperation Division

- 薬務係 Pharmacy Office
- 調剤係 Dispensary
- 薬剤管理指導係 Pharmaceutical Consultation
- 製剤係 Manufacturing
- 薬品試験係 Experimental Laboratory
- 麻薬・注射係 Narcotic and Injection Management
- 薬品情報係 Drug Information
- 治験薬管理係 Trial Drugs Management

- 管理部門 Management
- 病棟部門 Wards
- 外来部門 Outpatients
- 中央診療施設等部門 Central Clinical Facilities

- 診療録管理室 Medical Record Management Division
- 医師育成推進センター Center for Clinical Training and Career Development
- 内視鏡外科手術トレーニングセンター The Minimally Invasive Surgely Center for Training and Education
- 先端医療・臨床研究推進センター Innovative and Clinical Research Promotion Center

組織及び役職員

Organization and Staff

研究科長・医学部長(併)
Dean of Graduate School of Medicine, Dean of School of Medicine

清島 満
SEISHIMA, Mitsuru

附属病院長(併)
Director of University Hospital

小倉 真治
OGURA, Shinji

地域医療医学センター長(併)
Director of Center for Regional Medicine

村上 啓雄
MURAKAMI, Nobuo

医学教育開発研究センター長(併)
Director of Medical Education Development Center

鈴木 康之
SUZUKI, Yasuyuki



医学系研究科 Graduate School of Medicine

副研究科長(併)
Deputy Dean of Graduate School of Medicine

湊口 信也
MINATOBUCHI, Shinya

原 明
HARA, Akira

医科学専攻 Research Field of Medical Sciences

分子・構造学講座 Division of Molecule and Structure

細胞情報学 Cell Signaling	教授 Professor	中島 茂 NAKASHIMA, Shigeru
分子生理学 Physiology and Biophysics	教授 Professor	恵良 聖一 ERA, Seiichi
薬理病態学 Pharmacology	教授 Professor	小澤 修 KOZAWA, Osamu
寄生虫学・感染学 Parasitology and Infection	教授 Professor	前川 洋一 MAEKAWA, Yoichi
遺伝発生学 Gene and Development	教授(併) Professor	深尾 敏幸 FUKAO, Toshiyuki
内分泌代謝病態学 Diabetes and Endocrinology	教授 Professor	武田 純 TAKEDA, Jun
小児病態学 Pediatrics	教授 Professor	深尾 敏幸 FUKAO, Toshiyuki
病態情報解析医学 Informative Clinical Medicine	教授 Professor	清島 満 SEISHIMA, Mitsuru

神経統御学講座 Division of Neuroscience

高次神経形態学 Morphological Neuroscience	教授 Professor	山口 瞬 YAMAGUCHI, Shun
生理学 Physiology	教授 Professor	森田 啓之 MORITA, Hironobu
スポーツ医学 Sports Medicine and Sports Science	教授 Professor	松岡 敏男 MATSUOKA, Toshio
神経内科・老年学 Neurology and Geriatrics	教授 Professor	犬塚 貴 INUZUKA, Takashi
精神病理学 Psychopathology	教授 Professor	塩入 俊樹 SHOIRI, Toshiaki
脳神経外科学 Neurosurgery	教授 Professor	岩間 亨 IWAMA, Toru
耳鼻咽喉科学 Otolaryngology	教授 Professor	伊藤 八次 ITO, Yatsuji
眼科学 Ophthalmology and Visual Sciences	教授 Professor	山本 哲也 YAMAMOTO, Tetsuya
※脳病態解析学 Clinical Brain Sciences	客員教授 Professor	篠田 淳 SHINODA, Jun

※連携分野

病態制御学講座 Division of Disease Control

解剖学 Anatomy	教授 Professor	千田 隆夫 SENDA, Takao
分子病態学 Molecular Pathobiochemistry	教授 Professor	長岡 仁 NAGAOKA, Hitoshi
循環病態学 Cardiology	教授 Professor	湊口 信也 MINATOBUCHI, Shinya
呼吸病態学 Respirology	教授(併) Professor	湊口 信也 MINATOBUCHI, Shinya
高度先進外科学 General and Cardiothoracic Surgery	教授 Professor	竹村 博文 TAKEMURA, Hirofumi
整形外科学 Orthopedic Surgery	教授 Professor	秋山 治彦 AKIYAMA, Haruhiko
皮膚病態学 Dermatology	教授 Professor	清島 真理子 SEISHIMA, Mariko
泌尿器科学 Urology	教授 Professor	出口 隆 DEGUCHI, Takashi
麻酔・疼痛制御学 Anesthesiology and Pain Medicine	教授 Professor	飯田 宏樹 IIDA, Hiroki
口腔病態学 Oral and Maxillofacial Sciences	教授 Professor	柴田 敏之 SHIBATA, Toshiyuki

腫瘍制御学講座 Division of Tumor Control

腫瘍病理学 Tumor Pathology	教授 Professor	原 明 HARA, Akira
形態機能病理学 Pathology and Translational Research	教授 Professor	竹内 保 TAKEUCHI, Tamotsu
腫瘍外科学 Surgical Oncology	教授 Professor	吉田 和弘 YOSHIDA, Kazuhiro
消化器病態学 Gastroenterology	分野主任事務取扱 Administration	清水 雅仁 SHIMIZU, Masahito
血液病態学 Hematology	分野主任事務取扱 Administration	清水 雅仁 SHIMIZU, Masahito
産科婦人科学 Obstetrics and Gynecology	教授 Professor	森重 健一郎 MORISHIGE, Ken-ichirou
放射線医学 Radiology	教授 Professor	星 博昭 HOSHI, Hiroaki
疫学・予防医学 Epidemiology and Preventive Medicine	教授 Professor	永田 知里 NAGATA, Chisato
臨床腫瘍学 Clinical Oncology	分野主任事務取扱 Administration	清水 雅仁 SHIMIZU, Masahito
	教授(併) Professor	伊藤 善規 ITO, Yoshinori

■ 医療管理学講座 Division of Medical Management

医療情報学 Biomedical Informatics	教授 Professor	紀ノ定保臣 KINOSADA, Yasutomi	法医学 Legal Medicine	教授 Professor	武内康雄 BUNAI, Yasuo
総合病態内科学 General Internal Medicine	教授 Professor	森田浩之 MORITA, Hiroyuki	産業衛生学 Occupational Health	准教授 Associate Professor	井奈波良一 INABA, Ryoichi
臨床薬剤学 Clinical Pharmacy	教授 Professor	伊藤善規 ITOH, Yoshinori	医学教育学 Medical Education	教授(併) Professor	鈴木康之 SUZUKI, Yasuyuki
医療経済学 Health Economics	教授(併) Professor	永田知里 NAGATA, Chisato		教授(併) Professor	藤崎和彦 FUJISAKI, Kazuhiko
救急・災害医学 Emergency and Disaster Medicine	教授 Professor	小倉真治 OGURA, Shinji		教授(併) Professor	丹羽雅之 NIWA, Masayuki

再生医学専攻 Research Field of Regeneration and Advanced Medical Sciences

■ 再生分子統御学講座 Division of Molecular Regeneration

組織・器官形成 Tissue and Organ Development	教授 Professor	國貞隆弘 KUNISADA, Takahiro	病原体制御学 Microbiology	教授 Professor	江崎孝行 EZAKI, Takayuki
神経生物学 Neurobiology	教授 Professor	中川敏幸 NAKAGAWA, Toshiyuki			

■ 再生工学講座 Division of Regeneration Technology

生命機能分子設計 Molecular Design and Synthesis	教授 Professor	大沢匡毅 OSAWA, Masatake	知能イメージ情報 Intelligent Image Information	教授 Professor	藤田廣志 FUJITA, Hiroshi
--	-----------------	-------------------------	---	-----------------	-------------------------

■ 再生応用学講座 Division of Applied Regeneration

循環呼吸制御学 Cardiovascular and Respiratory Research	准教授(併) Associate Professor	西垣和彦 NISHIGAKI, Kazuhiko	医学系倫理・社会医学 Biomedical Ethics and Social Medicine	教授 Professor	塚田敬義 TSUKATA, Yukiyo
--	-------------------------------	-----------------------------	---	-----------------	-------------------------

看護学専攻 Research Field of Nursing Science

■ 看護学教育講座 Division of Nursing Education

継続看護学 Continuing Education in Nursing
--

■ 実践看護学講座 Division of Nursing Practice

母子看護学 Maternal and Child Health Nursing	地域健康援助学 Community Health Care Nursing
成人看護学 Nursing of Adults	

地域医療医学センター Center for Regional Medicine

教授 Professor	村上啓雄 MURAKAMI, Nobuo	特任教授 Specially Appointed Professor	山田隆司 YAMADA, Takashi
-----------------	-------------------------	---------------------------------------	-------------------------

寄附講座 Department of Integral Medicine

乳腺・分子腫瘍学講座 Department of Breast and Molecular Oncology	准教授 Associate Professor	二村学 FUTAMURA, Manabu	地域医療運動器医学講座 Department of Regional Medicine and Musculoskeletal Science	准教授 Associate Professor	宮本敬 MIYAMOTO, Kei
食物科学と循環器疾患講座 Department of Food Science and Cardiovascular Disease	准教授 Associate Professor	三上敦 MIKAMI, Atsushi	肝胆膵・がん集学的治療学講座 Department of Multidisciplinary Therapy for Hepato-Biliary-Pancreatic Cancer	教授 Professor	長田真二 OSADA, Shinji
周術期侵襲制御講座 Department of Perioperative and Acute Care Medicine	准教授 Associate Professor	山本拓巳 YAMAMOTO, Takuji	関節再建外科学先端医療講座 Department of Advanced Joint Reconstructive Surgery	准教授 Associate Professor	伊藤芳毅 ITO, Yoshiki
がん先端医療開発学講座 Department of Frontier Science for Surgical Oncology	准教授 Associate Professor	松橋延壽 MATSUHASHI, Nobuhisa	障がい児者医療学講座(岐阜県) Department of Disability Medicine	准教授 Associate Professor	西村悟子 NISHIMURA, Satoko
地域腫瘍学講座 Department of Division for Regional Cancer Control	准教授(併) Associate Professor	鶴見寿 TSURUMI, Hisashi			

医学部 School of Medicine

副学部長(併)

Deputy Dean of School of Medicine

湊 口 信 也

MINATOGUCHI, Shinya

原 明

HARA, Akira

奥 村 太 志

OKUMURA, Futoshi

医学科 Medical Course

医学科長(併)

Director of Medical Course

清 島 満

SEISHIMA, Mitsuru

■ 学科目 Tutorial Course

人 体 構 造 学

神 經 構 造 機 能 学

生 命 分 子 ・ 生 体 機 能 学

病 原 体 学

薬 理 中 毒 学

病 理 学

地 域 ・ 産 業 保 健 学

循 環 器 ・ 呼 吸 器 ・ 尿 路 学

消 化 器 ・ 検 査 医 学 ・ 血 液 腫 瘍 学

内 分 泌 代 謝 学

神 經 ・ 精 神 ・ 行 動 学 ・ 医 師 患 者 関 係

成 育

生 命 倫 理 ・ 法 医 学

臨 床 遺 伝 ・ 臨 床 倫 理

皮 膚 科 学

免 疫 応 答 学

感 覚 器 医 学

運 動 器 学

麻 醉 疼 痛 制 御 ・ 救 急 災 害 医 学

放 射 線 治 療 ・ 画 像 診 断

看護学科 Nursing Course

看護学科長(併)

Director of Nursing Course

奥 村 太 志

OKUMURA, Futoshi

基礎看護学 Basic Health Science and Fundamental Nursing	教授 Professor	滝内 隆子 TAKIUCHI, Takako	成人・老年看護学 Adult and Gerontological Nursing	教授 Professor	足立 久子 ADACHI, Hisako
基礎看護学 Basic Health Science and Fundamental Nursing	教授 Professor	小松 妙子 KOMATSU, Taeko	成人・老年看護学 Adult and Gerontological Nursing	教授 Professor	西本 裕 NISHIMOTO, Yutaka
基礎看護学 Basic Health Science and Fundamental Nursing	教授 Professor	江村 正一 EMURA, Shoichi	成人・老年看護学 Adult and Gerontological Nursing	教授 Professor	松田 好美 MATSUDA, Yoshimi
基礎看護学 Basic Health Science and Fundamental Nursing	教授 Professor	武藤 吉徳 MUTOH, Yoshinori	成人・老年看護学 Adult and Gerontological Nursing	教授 Professor	松波 美紀 MATSUNAMI, Miki
母子看護学 Maternal and Child Health Nursing	教授 Professor	大法 啓子 OHNORI, Keiko	地域・精神看護学 Community and Mental Health Nursing	教授 Professor	石原 多佳子 ISHIHARA, Takako
母子看護学 Maternal and Child Health Nursing	教授 Professor	杉浦 太一 SUGIURA, Taichi	地域・精神看護学 Community and Mental Health Nursing	教授 Professor	奥村 太志 OKUMURA, Futoshi

医学教育開発研究センター Medical Education Development Center

(医学教育共同利用拠点) Collaboration Center for Medical Education

テュトリアル部門 Tutorial Education Division	教授 Professor	鈴木 康之 SUZUKI, Yasuyuki	バーチャルスキル部門 Virtual Skill Division	教授 Professor	藤崎 和彦 FUJISAKI, Kazuhiko
	教授 Professor	丹羽 雅之 NIWA, Masayuki			

事務部 Administration Office

医学系研究科・医学部 Graduate School of Medicine and School of Medicine

事務長

伊 藤 弘 司

ITO, Koji

医学部附属病院 Hospital

事務部長

生 熊 道 憲

IKUMA, Michinori

総務課長

金 永 博 行

KANENAGA, Hiroyuki

医事課長

一 井 信 吾

ICHIJII, Shingo

経営企画課長

松 村 規 義

MATSUMURA, Noriyoshi

医療支援課長

福 井 隆

FUKUI, Takashi

附属病院 University Hospital

副院長(併) 飯田 宏 樹 村上 啓 雄 水田 啓 介 廣瀬 泰 子
Deputy Director of University Hospital IIDA, Hiroki MURAKAMI, Nobuo MIZUTA, Keisuke HIROSE, Yasuko
病院長補佐(併) 犬塚 貴
Deputy of the Hospital Director INUZUKA, Takashi

診療科 Clinical Department

第1内科 Internal Medicine I	科長(併) Director		眼 科 Ophthalmology	科長(併) Director	山本 哲也 YAMAMOTO, Tetsuya
血液内科 Hematology	科長(併) Director	鶴見 寿 TSURUMI, Hisashi	耳鼻咽喉科 Oto-Rhino-Laryngology	科長(併) Director	水田 啓介 MIZUTA, Keisuke
第2内科 Internal Medicine II	科長(併) Director	湊口 信也 MINATOGUCHI, Shinya	形成外科 Plastic and Reconstructive Surgery	科長(併) Director	加藤 久和 KATO, Hisakazu
第3内科 Internal Medicine III	科長(併) Director	武田 純 TAKEDA, Jun	皮膚科 Dermatology	科長(併) Director	清島 眞理子 SEISHIMA, Mariko
神経内科・老年内科 Neurology and Geriatrics	科長(併) Director	犬塚 貴 INUZUKA, Takashi	泌尿器科 Urology	科長(併) Director	出口 隆 DEGUCHI, Takashi
総合内科 General Internal Medicine	科長(併) Director	森田 浩之 MORITA, Hiroyuki	精神神経科 Psychiatry	科長(併) Director	塩入 俊樹 SHIOIRI, Toshiki
第1外科 Surgery I	科長(併) Director	竹村 博文 TAKEMURA, Hirofumi	小児科 Pediatrics	科長(併) Director	深尾 敏幸 FUJIKAWA, Toshiyuki
第2外科 Surgery II	科長(併) Director	吉田 和弘 YOSHIDA, Kazuhiro	放射線科 Radiology	科長(併) Director	兼松 雅之 KANEMATSU, Masayuki
産科婦人科 Obstetrics and Gynecology	科長(併) Director	森重 健一郎 MORISHIGE, Ken-ichiro	麻酔科疼痛治療科 Anesthesiology and Pain Medicine	科長(併) Director	飯田 宏樹 IIDA, Hiroki
整形外科 Orthopedic Surgery	科長(併) Director	秋山 治彦 AKIYAMA, Haruhiko	歯科口腔外科 Dentistry, Oral and Maxillofacial Surgery	科長(併) Director	柴田 敏之 SHIBATA, Toshiyuki
脳神経外科 Neurosurgery	科長(併) Director	岩間 亨 IWAMA, Toru			

中央診療施設等 Central Clinical Facilities

検査部 Division of Clinical Laboratory	部長(併) Director	清島 満 SEISHIMA, Mitsuru	がんセンター Cancer Center	センター長(併) Director	吉田 和弘 YOSHIDA, Kazuhiro
手術部 Operation Division	部長(併) Director	竹村 博文 TAKEMURA, Hirofumi	エイズ対策推進センター AIDS Clinical Center	センター長(併) Director	鶴見 寿 TSURUMI, Hisashi
放射線部 Radiology Services	部長(併) Director	兼松 雅之 KANEMATSU, Masayuki	肝疾患診療支援センター Center for Liver Disease	センター長(併) Director	
材料部 Supplies Division	部長(併) Director	湊口 信也 MINATOGUCHI, Shinya	リハビリテーション部 Rehabilitation Division	部長(併) Director	秋山 治彦 AKIYAMA, Haruhiko
輸血部 Division of Transfusion Medicine and Cell Therapy	部長(併) Director	清島 満 SEISHIMA, Mitsuru	分娩部 Birthing Center	部長(併) Director	森重 健一郎 MORISHIGE, Ken-ichiro
病理部 Pathology Division	部長(併) Director	原 明 HARA, Akira	医療機器センター Medical Instrument Center	センター長(併) Director	大野 貴敏 OHNO, Takatoshi
総合診療部 General Medicine	部長(併) Director	森田 浩之 MORITA, Hiroyuki	高次画像診断センター High-level Imaging Diagnosis Center	センター長(併) Director	兼松 雅之 KANEMATSU, Masayuki
医療情報部 Medical Information Division	部長(併) Director	紀ノ定 保臣 KINOSADA, Yasutomi	治験管理センター Clinical Trials Management Center	センター長(併) Director	伊藤 善規 ITO, Yoshinori
光学医療診療部 Endoscopy Center	部長(併) Director	荒木 寛司 ARAKI, Hiroshi	新生児集中治療部 Neonatal Intensive Care Unit	部長(併) Director	深尾 敏幸 FUJIKAWA, Toshiyuki
高次救命治療センター Advanced Critical Care Center	センター長(併) Director	小倉 真治 OGURA, Shinji	オートプシーイメージングセンター Autopsy Imaging Center	センター長(併) Director	岩間 亨 IWAMA, Toru
医療連携センター Center for Medical Cooperation	センター長(併) Director	岩間 亨 IWAMA, Toru	脳卒中センター Stroke Center	センター長(併) Director	岩間 亨 IWAMA, Toru
生体支援センター Center for Nutrition Support and Infection Control	センター長(併) Director	村上 啓雄 MURAKAMI, Nobuo	栄養管理室 Dietary Management Division	室長 Director	田村 孝志 TAMURA, Takashi

医療安全管理室 Patient Safety Division

医療安全管理室 Patient Safety Division	室長(併) Director	村上 啓雄 MURAKAMI, Nobuo
------------------------------------	-------------------	--------------------------

薬剤部 Division of Pharmacy

薬剤部 Division of Pharmacy	部長(併) Director	伊藤 善規 ITO, Yoshinori
-----------------------------	-------------------	-------------------------

看護部 Division of Nursing

看護部 Division of Nursing	部長 Director	廣瀬 泰子 HIROSE, Yasuko
----------------------------	----------------	-------------------------

診療録管理室 Medical Record Management Division

診療録管理室 Medical Record Management Division	室長(併) Director	豊田 泉 TOYODA, Izumi
--	-------------------	-----------------------

医師育成推進センター Center for Clinical Training and Career Development

医師育成推進センター Center for Clinical Training and Career Development	センター長(併) Director	水田 啓介 MIZUTA, Keisuke
---	----------------------	--------------------------

内視鏡外科手術トレーニングセンター The Minimally Invasive Surgery Center for Training and Education

内視鏡外科手術トレーニングセンター The Minimally Invasive Surgery Center for Training and Education	センター長(併) Director	岩田 尚 IWATA, Hisashi
---	----------------------	------------------------

先端医療・臨床研究推進センター Innovative and Clinical Research Promotion Center

先端医療・臨床研究推進センター Innovative and Clinical Research Promotion Center	センター長(併) Director	湊口 信也 MINATOGUCHI, Shinya
--	----------------------	------------------------------

目次

序文

I 大学院医学系研究科・医学部・同附属病院の将来構想

1 医科学専攻・再生医科学専攻及び医学部医学科	1
2 看護学専攻及び医学部看護学科	6
3 医学部附属病院	8

II 大学院医学系研究科

1 専攻

[医学系研究科医科学専攻]

1. 教育・研究の理念, 目標	9
2. 医科学専攻の構成	9
(1) 分子・構造学講座	
(2) 病態制御学講座	
(3) 神経統御学講座	
(4) 腫瘍制御学講座	
(5) 医療管理学講座	
3. 学生定員と入学状況	10
4. カリキュラムの編成方針	11
(1) 履修単位基準	
(2) 教育の特色	
(3) 社会人学生のための措置	
(4) 教育研究分野, 指導教員	
(5) 大学院特別講義	
5. 教育活動	17
(1) 教育活動の実施内容と方法	
6. 研究活動	19

[分子・構造学講座]

(1) 細胞情報学分野	19
(2) 分子生理学分野	22
(3) 薬理病態学分野	26
(4) 寄生虫学・感染学分野	31
(5) 遺伝発生学分野	35
(6) 内分泌代謝病態学分野	37
(7) 小児病態学分野	50
(8) 病態情報解析医学分野	77

[病態制御学講座]

(1) 解剖学分野	84
(2) 分子病態学分野	89
(3) 循環病態学分野	92
(4) 呼吸病態学分野	106
(5) 高度先進外科学分野	111
(6) 整形外科学分野	123
(7) 皮膚病態学分野	139
(8) 泌尿器科学分野	150
(9) 麻酔・疼痛制御学分野	162
(10) 口腔病態学分野	169

〔神経統御学講座〕	
(1) 高次神経形態学分野	174
(2) 生理学分野	177
(3) スポーツ医科学分野	181
(4) 神経内科・老年学分野	186
(5) 精神病理学分野	196
(6) 脳神経外科学分野	202
(7) 耳鼻咽喉科学分野	214
(8) 眼科学分野	221
(9) 脳病態解析学（連携大学院）分野	233
〔腫瘍制御学講座〕	
(1) 腫瘍病理学分野	239
(2) 形態機能病理学分野	244
(3) 腫瘍外科学分野	246
(4) 消化器病態学分野	261
(5) 血液病態学分野	284
(6) 産科婦人科学分野	288
(7) 放射線医学分野	293
(8) 疫学・予防医学分野	303
(9) 臨床腫瘍学分野	308
〔医療管理学講座〕	
(1) 医療情報学分野	313
(2) 総合病態内科学分野	317
(3) 臨床薬剤学分野	325
(4) 医療経済学分野	330
(5) 救急・災害医学分野	333
(6) 法医学分野	341
(7) 産業衛生学分野	344
(8) 医学教育学分野	347
7. 学位の授与状況と研究成果	360
8. 学生生活支援	360
(1) 奨学金の申請・採択状況	
(2) 授業料免除実施状況	
9. 自己評価・課題と展望	360
〔医学系研究科再生医科学専攻〕	
1. 教育・研究の理念，目標	361
2. 再生医科学専攻の構成	361
(1) 再生分子統御学講座	
(2) 再生工学講座	
(3) 再生応用学講座	
3. 学生定員と入学状況	362
4. カリキュラムの編成方針	363
(1) 履修基準	
(2) 教育研究分野，指導教員	
(3) 大学院特別講義	
5. 教育活動	365
(1) 教育活動の実施内容と方法	
6. 研究活動	367
〔再生分子統御学講座〕	
(1) 組織・器官形成分野	367
(2) 神経生物分野	373
(3) 病原体制御学分野	377

〔再生工学講座〕	
(1) 生命機能分子設計分野	385
(2) 知能イメージ情報分野	392
〔再生応用学講座〕	
(1) 循環呼吸制御学分野	404
(2) 医学系倫理・社会医学分野	411
7. 学位の授与状況と研究成果	415
8. 学生生活支援	415
(1) 奨学金の申請・採択状況	
(2) 授業料免除実施状況	
9. 自己評価・課題と展望	416
〔医学系研究科看護学専攻〕	
1. 教育の理念、目標	417
2. 看護学専攻の構成	417
(1) 看護学教育領域	
(2) 実践看護学領域	
3. 学生定員と入学状況	417
4. カリキュラムの編成方針	418
(1) 履修基準	
(2) 教育研究分野、指導教員	
5. 教育活動	422
(1) 教育活動の実施内容と方法	
6. 学位の授与状況と研究成果	422
7. 学生生活支援	423
(1) 奨学金の申請・採択状況	
(2) 授業料免除実施状況	
(3) 学生の保険加入	
8. 自己評価・課題と展望	423
(1) 看護学教育領域	
(2) 実践看護学領域	
〔その他関連施設等研究活動〕	
(1) 附属病院輸血部	426
(2) 附属病院病理部	429
(3) 地域医療医学センター	434
(4) 医学教育開発研究センター（テュートリアル部門）	441
(5) 医学教育開発研究センター（バーチャルスキル部門）	449
(6) 生体支援センター	457
(7) 寄附講座「脊椎骨関節再建外科学講座」	465
(8) 寄附講座「乳腺・分子腫瘍学講座」	471
(9) 寄附講座「循環呼吸先端医学講座」	474
(10) 寄附講座「周術期侵襲制御講座」	477
(11) 寄附講座「がん先端医療開発学講座」	479
(12) 寄附講座「地域腫瘍学講座」	482
(13) 寄附講座「地域医療運動器医学講座」	490
(14) 寄附講座「肝胆膵・がん集学的治療学講座」	493
(15) 寄附講座「関節再建外科学先端医療講座」	496
(16) 寄附講座「障がい児者医療学講座（岐阜県）」	499
(17) 保健管理センター	502
(18) 生命科学総合研究支援センター（ゲノム研究分野）	509
(19) 生命科学総合研究支援センター（嫌気性菌研究分野）	515
(20) 大学院連合創薬医療情報研究科（医療情報学専攻）	519
2. 教員組織	
1. 専任教員と非常勤講師等の配置状況	526

(1) 専任教員の配置状況等	
(2) 非常勤講師の配置状況	
(3) 客員臨床系医学教授等	
(4) 臨床教授等	
2. 教育補助者と研究補助者の配置状況	528
(1) ティーチング・アシスタントの実施及び活用状況	
(2) リサーチ・アシスタントの配置状況	
3. 採用、昇任等の方法	529
(1) 採用、昇任の選考基準と選考方法	
(2) 非常勤講師の選考基準と選考方法	
4. 兼業・兼職の基準と状況	529
(1) 兼業・兼職の基準	
(2) 兼業・兼職の状況	
3 施設・設備	
1. 施設・設備の現状・整備状況	530
(1) 医学部・附属病院の移転整備の経緯	
(2) 医学研究科・医学部新施設の特徴	
(3) 附属病院の特徴等	
(4) 医学部看護学科新施設の特徴	
4 国際交流	
1. 留学生の受入れ体制と状況	532
2. 留学生の教育・研究指導の方法と体制	533
(1) 留学生センター	
(2) チューター	
3. 在学生の海外留学・研修の状況	533
4. 教員の海外渡航の状況	533
5. 外国人研究者の招致の状況	533
6. 海外の大学との学術交流協定の締結状況	536
5 社会との連携	
1. 公開講座の開設の方針と状況	536
2. 地域社会での活動状況	537
3. 生涯学習への対応状況	537
4. 奥穂高岳夏山診療所	538
6 岐阜薬科大学との連携	539
7 管理運営、財政	
1. 教授会（教授会議）、各種委員会の構成と活動状況	540
(1) 教授会（教授会議）の構成員、任務、意志決定方法、意志伝達方法	
(2) 各種委員会の設置年度、任務（運営方針）、意志決定方法、意志伝達方法	
2. 教育・研究に関する意志決定方法と体制	543
(1) 教育に関する意志決定システム	
(2) 研究に関する意志決定システム	
3. 事務組織と事務職員の配置状況	543
(1) 現状	
(2) 点検・評価	
(3) 改善・改革と展望	
4. 予算編成と執行（配分）の方針と状況	546

Ⅲ 医学部医学科

1 教育の理念・目標等	
1. 教育の理念と目標	549
2. 教育の活性化と充実の経過	549
3. 教育の将来構想	550

(1) 基本理念	
(2) 教育体制	
2 教育活動	
1. 学生の受入れ	550
(1) 学生募集の方法	
(2) 入学者選抜の方法と方針	
(3) 学生の受入れ状況	
(4) 編入学制度と実態	
(5) 研究生の受入れと実態	
2. カリキュラム	553
(1) カリキュラムの編成方針	
(2) 教育活動の実施内容と方法	
(3) 課題と展望	
3. 教育方針	557
(1) 教育改革	
(2) 全学共通教育	
(3) 各テュートリアルコースの授業計画（シラバス）の作成及び学習内容の調整	
(4) 臨床実習	
(5) 新入生合宿研修	
(6) 臨床実習資格総合判定試験（共用試験 CBT, OSCE）等	
(7) 他大学における授業科目の履修の方針と状況	
(8) 在籍, 留年, 休学, 退学の状況	
(9) 教育施設・設備の現状	
(10) 成績の評価, 認定の基準	
(11) 医師国家試験合格状況	
4. 学生生活への配慮	561
(1) 奨学金の種類と採択状況	
(2) 授業料の免除の状況	
(3) 学生生活相談の体制と実態	
(4) 課外活動の実態	

IV 医学部看護学科

1 教育・研究の理念・目標等	
1. 教育・研究の理念と目標	565
2. 教育・研究の活性化と充実の経過	565
3. 教育・研究の将来構想	565
(1) 基本理念	
(2) 教育体制	
(3) 研究体制	
2 教育活動	
1. 学生の受入れ	566
(1) 学生募集の方法	
(2) 入学者選抜の方法と方針	
(3) 学生の受入れ状況	
(4) 編入学制度と実態	
(5) 研究生の受入れと実態	
2. カリキュラム	568
(1) カリキュラムの特徴	
(2) カリキュラムの構築	
(3) 課題と展望	
3. 教育方針	569
(1) 教育改革	

(2) 全学共通教育	
(3) 専門教育	
(4) 他大学における授業科目の履修方針と状況	
(5) 在籍, 留年, 休学, 退学の状況	
(6) 教育施設・設備の現状	
(7) 成績の評価, 認定の基準	
(8) 看護師等国家試験合格状況	
(9) 学生の就職状況	
4. 学生生活への配慮	573
(1) 奨学金の種類と採択状況	
(2) 授業料の免除の状況	
(3) 学生生活相談の体制と実態	
(4) 課外活動の実態	
3 研究活動	
〔基礎看護学講座〕	
(1) 基礎看護学分野	574
(2) 生命機能学分野	578
〔母子看護学講座〕	
(1) 母性看護学分野	581
(2) 小児看護学分野	584
〔成人・老年看護学講座〕	
(1) 成人看護学分野 (慢性期)	587
(2) 成人看護学分野 (急性期)	590
(3) 老年看護学分野	596
〔地域・精神看護学講座〕	
(1) 地域看護学分野	601
(2) 精神看護学分野	606

V 附属病院の現状と課題

1 病院の理念・組織・運営等	
1. 理念・基本方針等	611
(1) 理念	
(2) 基本方針	
(3) 職業倫理・臨床指針	
2. 組織, 運営	611
(1) 組織	
(2) 科長会議	
(3) 病院運営会議	
(4) 病院経営企画会議	
(5) 附属病院各種委員会の設置年度, 任務 (運営方針), 意志決定方法, 意志伝達方法	
(6) 事務組織と事務職員の配置状況	
2 診療活動の現状と課題	
1. 診療体制	617
(1) 臓器別診療	
(2) 診療科の連携	
(3) 高度救命救急センター	
(4) 北診療棟の開設	
2. 活動状況	618
(1) 第一内科	618
(2) 血液内科	621
(3) 第二内科	623
(4) 第三内科	626

(5) 神経内科・老年内科	628
(6) 総合内科・総合診療部	630
(7) 第一外科	633
(8) 第二外科	636
(9) 産科婦人科	641
(10) 整形外科	644
(11) 脳神経外科	648
(12) 眼科	649
(13) 耳鼻咽喉科	651
(14) 形成外科	654
(15) 皮膚科	655
(16) 泌尿器科	657
(17) 精神神経科	660
(18) 小児科	661
(19) 放射線科	665
(20) 麻酔科疼痛治療科	667
(21) 歯科口腔外科	669
(22) 検査部	671
(23) 手術部	673
(24) 放射線部	675
(25) 材料部	677
(26) 輸血部	679
(27) 病理部・病理診断科	680
(28) 医療情報部	682
(29) 光学医療診療部	684
(30) 高次救命治療センター	687
(31) 医療連携センター	689
(32) 生体支援センター	692
(33) がんセンター	699
(34) エイズ対策推進センター	705
(35) 肝疾患診療支援センター	707
(36) リハビリテーション部	709
(37) 分娩部	710
(38) 医療機器センター	711
(39) 高次画像診断センター	713
(40) 新生児集中治療部	715
(41) 薬剤部	717
(42) 看護部	720
(43) 診療録管理室	723
(44) 先端医療・臨床研究推進センター	725
3. 診療スタッフ	727
(1) 診療要員の配置状況	
(2) 診療支援要員の配置状況	
(3) 看護要員の配置状況	
4. 先進医療	728
(1) 先進医療	
(2) 高度先進医療技術の開発導入	
5. 地域医療の取り組み	728
(1) 地域医療の確保	
(2) 難病医療拠点病院の指定	
(3) 都道府県がん診療連携拠点病院の指定	
(4) エイズ中核拠点病院の指定	
(5) 肝疾患診療連携拠点病院の指定	

(6) 岐阜県予防接種センターの機能	
(7) 三次周産期医療ネットワークの機能	
(8) 臓器提供連絡調整員の配置	
6. 卒後臨床研修の状況	730
(1) 初期臨床研修	
(2) 後期臨床研修	
7. 外来患者数及び入院患者数	732
(1) 外来患者数	
(2) 入院患者数, 病床稼働率及び平均在院日数	
8. 診療用施設・設備等の整備	733
9. 病院経営・財務の状況	733
(1) 病院経営について	
(2) 財務状況	
10. 各種療法等の届出状況	735
11. エイズ拠点病院としての診療体制	736
12. 医療関連(院内)感染対策	736
13. 医療安全対策	738
(1) インシデント報告とその対策	
(2) 医療安全に係る職員教育	
(3) 院内ラウンド	
(4) 医療安全マニュアルの策定	
(5) ニュース・トピックスの発行	
(6) 国立大学病院間相互チェック・医療法第25条による立入検査	
14. 入院基本料・入院時食事療養の状況	740
(1) 入院基本料	
(2) 入院時食事療養	
15. 病院ボランティア	742
16. 院内学級	742
17. 院内図書室	742
18. 医薬品の臨床試験の実施方針	742
19. 広報	743
(1) ホームページ	
(2) 広報誌「鵜舟」	

VI 自己評価

1. 医科学専攻・再生医科学専攻及び医学部医学科	745
2. 看護学専攻及び医学部看護学科	756
3. 医学部附属病院	757

I 大学院医学系研究科・医学部・
同附属病院の将来構想

1 医科学専攻・再生医科学専攻及び医学部医学科

大学院医学系研究科長・医学部長 清島 満

現状から将来構想へ

大学改革

文科省は 2012 年 6 月に大学改革実行プランを打ち出した。このプランは大きく二つに分けられ、一つは「大学機能の再構築」である。具体的には 1) 大学教育の質的転換と大学入試 2) グローバル化に対応した人材育成 3) COC (center of community) 機構 4) 研究力強化である。もう一つは「大学ガバナンス強化」である。具体的には 1) 国立大学改革 2) 大学改革を促すシステム基盤整備 3) 財政基盤の確立とメリハリのある資金配分の実施 4) 大学の質保証の徹底推進である。これらプランを実行するために学校教育法および国立大学法人法が改定され、2015 年 4 月から実施されることとなった。2 年前のミッションの再定義を求められたのも、国立大学がいったい何をしているのか、一般社会からみて非常に分かりにくいという理由からである。これは文科省として、財務省ないしは財界に対して国立大学がそれぞれ特色を持って研究活動を行っており、かつ地域に対してもさまざまな分野で貢献しており、存在価値のあるものだということを示す必要が生じたためであり、それがミッションの再定義となった。最終的に文科省と何度か意見交換をして出来上がったものは A4 紙 1 枚に要約され、2014 年に文科省の HP に掲載された。膨大な資料から作成した文書を 1 枚に纏められてしまったが、これまで医学部が何をしてきて、今後すべきことは何で、それを実行するためには何が問題になっているのかを明らかにすることができ、各学部で課題を見つけてそれを共有できたことは大学改革を進めていくうえで役立ったと思う。ミッションの再定義で定められた方向性に向かって具体的にどのように進めていくべきか、それがわれわれに与えられた今後の課題であろう。

2014 年秋に文科省はスーパーグローバル大学 37 校を選定した。これには「トップ型」と「グローバル化牽引型」の 2 種類があり、前者に選ばれた 13 校は世界ランキングでトップ 100 以内を目指し、後者 24 校は日本社会のグローバル化を推進する大学を目指すものである。1 大学あたり毎年 1~4 億円が 10 年間にわたって投入される。このように文科省においては現在「グローバル化」が一つのキーワードとなっている。これらは私立大学も含めた選定であったが、それとは別に文科省は 2016 年 4 月から始まる第 3 期中期目標において運営交付金の見直しを図ろうとしている。すなわち国立大学を「地域活性化・特定分野の重点支援を行う大学」「特定分野の重点支援を行う大学」「世界最高水準の教育研究の重点支援を行う大学」の 3 つに分類し、各大学にどの分類に入るか自ら選択させるようにする。全国国立大学法人への運営費交付金はこれまで大学の規模に応じて配分されており、2014 年度の交付金は 1 兆 1,123 億円であり、岐阜大学への交付金は 115 億円である（因みに東大は 811 億円で、岐阜大学は 86 国立大学法人中 27 位）。交付金自体は 10 年前に比べて総額で 1,300 億円の減となっている。つまり、これまでと同じ評価法では小規模大学が不利になるので 3 つの分類でそれぞれ異なる評価手法が新たに導入されることになる。大学改革の実施度と学長ガバナンス強化の達成度に応じてそれぞれ係数を付与し、交付金を配分する仕組みが提案されている。これは第 3 期中期目標に合わせた運営交付金の見直しなのでまだ評価項目などの詳細は決まっていないようであるが、改革やガバナンス強化が達成されていると評価される大学には多くの交付金が配分され、そうでない大学にはこれまでより少ない交付金しか配分されないことになる。おそらく交付金の総額がこれまでより増えるとは考えにくいので、大学間での競争が激しくなることが予想されるし、それが文科省の狙いともいえる。現在は各係数がどの程度のものか情報が伝わっておらず気がかりなところではあるが、岐阜大学としては最初のグループに位置づけられるだろうし、そのなかで医学部としては教育、研究、診療のすべてにおいて実効性をともなう改革を進めていく必要があるだろう。

これに加えて国は研究費についても新たな改革を打ち出した。医療分野の研究開発予算は 2014 年度分から集約化され、政府が示した基本方針に基づいて各省庁で執行されているが、2015 年度以降は、健康・医療戦略推進本部が作成する計画に基づいて各省庁が予算を集約化し、日本医療研究開発機構 (AMED, Japan Agency for Medical Research and Development) を通じて執行されることになる。すなわち文科省と厚労省、経産省がそれぞれに手掛けていた医療分野の研究開発予算が AMED で一元管理され、医療分野の研究成果の実用化や産業化が図られることになる。この機構はアメリカの NIH を模したものとされているが、実際はかなり異なる。日本の場合は健康・医療戦略推進本部が方針を決め、AMED が研究開発予算を配分する仕組みであり、本場 NIH のような研究機関など研究機能を持ち合わせていない。健康・医療戦略推進本部が作成した医療分野研究開発推進計画に基づき、医療分野の研究開発や研究環境の整備、助成などの実務を担う。2014 年度の予算は 1,390 億円で、アメリカ NIH が 300 兆円に比べると、格段の差があるが、今後この予算規模は

増加していくことも予想され、積極的に研究費獲得に努めなければならない。

研究

1) 研究組織

現在、岐阜大学では工学部と応用生物学部を中心に修士課程の改組を進めている。すなわち、工学部の博士前期課程の10専攻と応用生物学の修士課程の2専攻をシャッフルして工学・応用生物学総合研究科の修士課程として新たな6専攻に改組するというものである。これも岐阜大学の研究に特色を打ち出すための学長ガバナンスによる改革のひとつであり、医学研究科としてもこの改革にどのような形で関わっていくべきか、改革WGのメンバーに加わって検討中である。その一方で、大学本部では大学全体の研究体制強化の手段として、医薬獣医の3つの部局から関連する分野を纏めて、新しい研究組織を立ち上げる将来構想がある。その場合は医学研究科が中心となって今後の大学全体の研究組織のありかたを議論していくことになるであろう。また、医学部には寄附講座が設置されており2014年12月31日現在、乳腺・分子腫瘍学講座、周術期侵襲制御講座、循環呼吸先端医学講座、地域腫瘍学講座、がん先端医療開発学講座、地域医療運動器医学講座、肝胆膵・がん集学的治療学講座、関節再建外科学先端医療講座、障がい児者医療学講座（岐阜県）の全部で9つの寄附講座がある。研究、診療のこれら講座の継続のみならず、新規の寄附講座設置にも努めていかなければならない。

一方、附属病院では臨床研究が積極的に推進されている。院内の先端医療・臨床研究推進センターが正式に始動したところであり、有能なCRCを配し今後の成果が期待される。またトランスレーショナルリサーチの一環として名古屋大学を拠点とする「橋渡し研究加速ネットワークプログラム」や、京都大学を拠点とするプログラムにも参加しており、岐阜大学医学部が提案したシーズが採択されて大きな成果が得られることを期待したい。

2) 研究倫理の失墜

2013年には降圧剤臨床研究の不正、2014年はSTAP細胞疑惑など、倫理上大きな問題がある事案が続出した。さらに2014年末に医学部を中心に80本以上の論文に疑惑があるとする文科省への告発があった。指摘された各大学では調査委員会の設置も含めて検討を開始したようである。このような論文不正、研究不正が横行する背景には研究者が論文の数と質で評価されるという現実がある。このような不正が実際に増えているのか、公になる数が増えただけなのか不明であるが、いずれにしても研究者として絶対やってはならないこととしての認識が足りないと考えざるを得ない。

このような状況を鑑み、当医学部では2013年にCITI (Collaborative Institutional Training Initiative) Japanプロジェクトに参加し、医学研究科各分野から1名登録してもらった。翌2014年からは大学院入学者全員が登録してe-learningを受講してもらうようにした。これは米国の教材を土台にした研究者の行動規範に関する基盤教育のためのグローバルな教材であり、インターネットを通じてe-learning教育の全国展開を図っているもので、昨今の事情から現在はかなりの大学が参加して登録数も増加しているようである。現在では当研究科のみならず、本学の工学部、応用生物学部においても参加登録を検討している。当研究科では将来的に大学院の履修単位に組み入れることも視野に入れている。

医学部定員数の推移

現在日本の人口が減少しつつあることは周知の事実であり、しかも最近の年間出生児数は100万人余りと、戦後ベビーブームの頃の270万人はさすがに多過ぎるにしろ、かなり減少している。これは将来の18歳人口、すなわち大学進学者数を反映する。大学進学率と大学の定員数が変わらないと仮定すれば全員が入学可能となり、これが「全入問題」として2010年頃に話題として取り上げられたことがある。しかし、実際には希望しないところには行かないので、一部の私立大学の定員割れという現象となって表れ、それはそれで大きな問題となっている。医学部に関してはどうか。医学部の入学定員は1969年の新設医大ラッシュ前は4,040人で当時の18歳人口は213万人、新設ラッシュ後の1981年の定員は8,280人で18歳人口は188万人、その後定員数は国の政策で一旦削減されて2007年の定員は7,625人で18歳人口は130万人、そして定員枠などの定員増加で2015年の定員は9,134人となって18歳人口は119万人である。つまり定員数は増加しているのに対して18歳人口は減少しているのである。そこで同じ年に生まれた何人のうちの一人が医師になるかという、上記の順番に言えば527人、227人、171人、130人となる。医学部ブームによる進学希望者数の増加を考慮するにしても、倍率から言うと以前よりは入りやすくなったといえるのではないだろうか。

2000年頃から「患者のたらい回し」、「立ち去り型サボタージュ」など医療サイドの問題に「モンスターペイシャント」など患者サイドの問題が加わっていわゆる医療崩壊という言葉が紙面を賑わせた。医療事故が警察の捜査の対象とされ、医師が犯罪の被疑者として扱われる場合があり、さらに、マスコミの喧伝もあいまって医療不信が増大し、医療に対する過度の要求がされるようになった。これら問題発生の根本的な原因

は医師不足にあるとして国はまず医師を増やそうとした。しかも地域密着型の医師が必要ということで、地方自治体の修学資金を受給することを条件にした地域枠を全国国立大学法人の医学部を中心に設けた。地方自治体にとっては予算的に厳しい面もあるが、地域医療の将来を考えてむしろ積極的にこの方策を取り入れた。単なる定員増では、地域に残る医師数を確保できないからである。地域枠の基本的理念は自治医大と同一であり、毎年一定数が地域に残って働く医師が増えるので、何年かすればかなりの医師数が蓄積することになる。この地域枠制度がいつまで継続するのか不明であるが、このまま続けば将来の岐阜県内の医師不足はかなり軽減されるであろう。本学ではこれら地域枠学生が、医師となってからもキャリア形成ができるように支援をしていく体制を整えた。

地域医療への貢献

1) 地域枠学生

地域での医師不足、診療科の偏在等による医療崩壊の危機が大きな社会問題となり、国の新医師確保総合対策及び緊急医師確保対策等の一環として、一定期間、地域で勤務することを条件に医師養成の増員が認められたもので、併せて各県自治体が医学生修学資金を用意しこれを受給することを入学要件とし、全国のほとんどの国立大学でこの地域枠が導入された。定員数については医師不足の度合いに応じて各自治体はその大学に依頼するというかたちになっており、総定員の50パーセント以上を地域枠としている大学もある。

岐阜大学医学部では2008年に岐阜県の協力（修学資金貸与）のもと、地域枠10名を入学定員に加え、その後、15名、25名と増やし、2015年度にはさらに3名を増加し、28名となった。そのため一般推薦15名、前期入試32名、後期入試35名と合わせ、トータルで110名定員となった。増員前は80名定員だったので30名増加したことになる。なお、地域枠以外のいわゆる純増分は5名であり、地域枠制度がすべて廃止された場合は85名定員となる。

医学部卒業生は卒業すぐにマッチングした県内の医療機関（研修指定病院）で2年間研修を行うことになる。地域枠出身の研修医はその後9年間を原則として県知事が指定した医療機関で働くことになるが、後述するように、当医学部および岐阜県は医師育成・確保コンソーシアムを立ち上げ、各医師のキャリアについて支援し、途中で大学院に入ることも他県で研修をすることも可能な、自由度の高い制度設計を提供している。この地域枠定員がいつまで続くかについてはまだ医師偏在が十分に改善しておらず、医師不足の地域があることから文科省と厚労省は明言を避けているが、以前の話では早くても2018年までは減らさないということであった。因みに現在の本学の地域枠定員は最長10年間の時限付きなので2018年の医学部定員は15名減となり、2020年にはさらに10名減となる予定である。いずれにしても日本全体でみると、現在9,000名以上の医学部卒業生が国家試験を受けている。合格率90パーセントとすると8,100名の医師が毎年誕生することになる。地域枠出身の医師が研修期間の2年＋義務年限の9年間の11年間を地域医療に従事すれば、岐阜県内の医師不足はかなり改善されることが期待される。大学としては地域枠から一人のドロップアウトもなく、全員が地域医療に貢献できるように教育指導していかなければならない。

2) 地域医療医学センター

地域医療医学センターは、岐阜県内の医師不足と偏在の是正を目指し、地域医療を希望する医師を育てるため、2007年4月1日に設立された。2012年4月1日には本センターの体制を再構築するにあたり岐阜大学医学部附属の組織となった。本センターは「地域医療人の育成」を最大の任務と位置づけ、現状の地域医療の実態精査に基づいた「医療の確保」、および「地域医療医学研究」を3本の柱として、組織的に業務・活動を展開している。本センターは、医学部生、研修医に対して、地域医療医学の卒前卒業一貫カリキュラム（国内外留学も含む）を作製・実施する中で、地域医療の重要性や興味を持ってもらうこと、すなわち「意識改革」を重要なポイントとしており、大学病院、岐阜県総合医療センター及び国内外からの指導医師（団）派遣に加え、若手医師研修医、医学生を地域の医療現場に短期派遣し、地域医療に直に触れさせ指導する仕組みを確立し、地域住民を診療する過程で地域医療の重要性の認識や横断的総合医術の習得をすすめることとしている。

3) 岐阜県医師育成・確保コンソーシアム

岐阜県は現在極めて厳しい医師不足の状況であり、地域格差を改善するため、2010年9月その後4年間で実行する地域医療再生計画の一環として「岐阜県医師育成・確保コンソーシアム」を立ち上げることになった。本コンソーシアムは、岐阜大学医学部のほか県内の研修医が多く集まる9病院（岐阜大学医学部附属病院、岐阜県総合医療センター、岐阜市民病院、松波総合病院、木沢記念病院、大垣市民病院、中濃厚生病院、県立多治見病院及び高山赤十字病院）を中心に、それら病院と県内の各病院、医師会との連携体制で構成されている。この組織運営委員会とは別にその実行部隊としての企画調整委員会があり、それぞれに県からもオブザーバーとして会議に出席してもらい、十分な議論を重ねて運営されている。

本コンソーシアムは、岐阜県医学生修学資金受給者を主な対象者として、その返還免除条件である県内臨

床研修指定病院（22 病院）での初期臨床研修および、所定の期間、知事が指定した県内医療機関で勤務する（指定勤務）上で十分な指導体制を確保し、医師が円滑且つ効果的にキャリアアップが図れるようサポートするために組織されたものであり、岐阜県が資金援助をしている。初期臨床研修医には効果的な研修プログラムを提供し、後期研修医等には自身の将来の希望に応じたキャリアパスの提供・支援を行いながら若手医師の県内定着と育成を図るとともに、後期研修プログラムの中に一定期間の医師不足地域での勤務を含めることによる効果的な地域医療確保の役割を担っている。そして、何よりも修学資金を受給した若い医師が安心して自分自身の成長を実感できるような医療現場と教育環境・指導体制と整備するべく、研修医を受け入れる県内医療機関との連携・調整に努めている。

教育

1) 学部教育

教養教育は全学共通教育として 1 年間学んだ後、2 年次からは医学科特有のテュートリアルコースが始まる。このテュートリアル教育は一応全国の大学で実施されているが、その内容は千差万別である。本学のようにテュートリアル制を根幹に据えて教育を行っているところから、一部のみテュートリアルとして講義に重きを置いているところも少なくはない。どの方法がもっとも医師養成という観点で優れているのか現時点ではわからない。それは評価が 10 年 20 年後にされるべきものであって、決して国家試験の合格率のみで評価されるものではない。医療に真摯に取り組み、結果として患者さんから信頼される医師であることが理想である。すべてがそのような医師になれるとは限らないが、少なくともそれに近づこうとする強固な意志は必要であろう。その一方で、社会にはさまざまな職種があって、さまざまな考え方が存在することを知らなくてはならないし、コミュニケーション能力も重要である。医学部では医学的専門知識や技術を与えるのみではなく、学生が教員のみならず同級生、先輩後輩、事務職員あるいは周囲の人と係わり合うなかで、社会人としてのモラル形成ができるように教育指導していくことが大切である。

2) 大学院教育

現在、医学部を卒業してストレートに大学院に入学する者がいないばかりか、2 年の臨床研修後に入学する者もほとんどいない状況である。臨床系医学分野では社会人大学院として何とか数字合わせをしているが、それでも充足率は水準以下であり、今後一層の努力が必要である。入学者を増やすには臨床系の場合には大学を中心としたしっかりとした医局人事が必要である。これは時代逆行でも何でもなく、研究と地域医療を最大限効率的に行える方法である。その際最も重要なことは関連病院の協力である。また大学医局は当然ながら関連病院と良好な関係を保つように努めなければならない。

大学院教育ではまず、研究指向を高める環境づくりが必要である。その一歩として 2014 年から ADAMS (Advanced Doctor Course Alliance of Medical Science) を開講した。これは各分野の研究者が、英語で自分の研究成果をプレゼンテーションするもので、院生や興味のある教員が対象となる。平均して毎週 1 回、各分野の持ち回り制で行っている。さらに国際化を念頭に、研究のための海外留学も積極的に機会を見つけて支援することが必要である。すなわち官民協働海外留学支援制度の「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」などに応募することも重要である。

3) 医学教育開発研究センター (MEDC)

MEDC は 2012 年に 10 周年を迎えた。本学では 1995 年度から PBL-Tutorial を全面的に導入し、統合型カリキュラム、クリニカル・クラークシップ、医療面接実習など先駆的な取組を進めてきている。現在、多くの大学に医学教育専任部門が設立されているが、共同して「医学教育ユニットの会」を立ち上げ、ともに医学教育の改善に取り組んでいる。また、近年、歯学、薬学、看護、リハビリなど幅広い医療者教育分野でも教育改革が進行しており、多職種連携教育に力を入れて、連携を深めている。一方、医学教育は急速にグローバル化が進行している。当センターでは海外の医学教育機関・専門家と積極的に交流しており、海外の多くの大学から客員教授を招聘し、グローバルな視野で教育改革を支援している。2008 年に開設した大学院博士課程（医学教育学分野）では、世界に発信できる教育研究成果をめざして、様々な観点の研究に取り組んでいる。

当センターは 2010 年 4 月 1 日付で文科省から医学教育共同利用拠点として認定を受け、このたび 2015 年度以降も延長されることが決定した。今後も一層、拠点としての機能充実を図っていかなければならない。特に当センターで FD を受けた人や、博士課程を卒業した人たちを追跡し、その活動状況を報告できるように努めたい。

4) 医学教育分野別評価の受審

国内では医学教育のグローバル化が叫ばれている。その理由は、2023 年以降医学教育の国際認証を受けた医学部の卒業生にしか ECFMG の受験資格を与えないとする通告があったからで、現在国内では JACME (Japan Accreditation Council for Medical Education, 日本医学教育認証評価評議会) を立ち上げてこの機関で国内の全医学部を審査し、国際認証としての代替にしようと準備をしている。本学としては医学教育の拠

点であることの誇りを保つためにも 2015 年度中の受審を予定しており、まず WFME (World Federation for Medical Education, 世界医学教育連盟) 国際基準に準拠した日本版基準による自己点検評価書のまとめに取り掛かったところである。

専門医制度

日本における現行の専門医制度は、各学会が独自に試験を行い、独自の基準で判定をしており、学会間で必ずしも統一した基準が設けられているわけではない。このことが長年にわたって課題されており、国民にわかりやすい制度とするための検討が行われてきた。

2013 年 4 月、厚労省内「専門医の在り方に関する検討会」の答申が公表され、2014 年 4 月に、第三者機関である日本専門医機構が設立され、これまで学会毎に行われてきた各種専門医の認定・更新は、この新しい機構によって行われることになった。現在は各専門医の研修施設・プログラムの整備と認定作業が進められている。しかし、現段階では各学会が試験をして判定をするのに、受験料、更新料はすべて機構側に入る仕組みになっている。すなわち学会は全く収入がないにもかかわらず、試験業務のみ負わされることになっていること、また各学会代表者が社員になれないことで、双方間でまだ解決すべき点が多い。いずれにしても各学会も現在の不統一な基準で専門医を認定している状況は改善する必要であるということでの共通認識はあるようだ。あまり時間は残されていないが、双方が十分に納得する形でスタートしないと、専門医制度そのものが空中分解してしまう可能性がある。

以上、将来構想としては焦点の定まっていない部分も多々あるが、医学部を取り巻く状況とともに医学系研究科長・医学部長を約 3 年間務めてきて感じたことを述べさせていただいた。

2 看護学専攻及び医学部看護学科

医学部看護学科長 奥村 太志

医学部看護学科においては、平成13年4月に1回生を受け入れ、平成17年3月に初めての卒業生を出している。平成17年3月から26年3月までの10年間に看護学科では860人余の看護学学士の卒業生が誕生した。大学院医学系研究科看護学専攻では平成19年3月から26年3月までで計55人の看護学修士が誕生した。このように、医学部看護学科と医学系研究科看護学専攻（修士課程）は、多くの学生を送り出してきた。以下に最近3年間における看護学科の現状と今後の課題について述べたい。

1. 看護学教育の質とその現状

近年の医療・福祉を取り巻く環境、特に急速な人口減少、生活習慣病を中心とした慢性疾患の増加、健康への関心の高まり、国際化社会などの変化に対応し、多様な社会の要請に応えるため、新しい医療に向けて、豊かな感性と人間性に備え、日々進歩する知識や技術を習得し・発展させる能力や、地域に即した保健医療活動の中心的役割を果たすことのできる資質の高い看護職の育成が課題である。看護教育の現状としては、平成26年度に看護系大学が220校を超え、それに伴い実習先確保の困難など、看護師教育、助産師教育及び保健師教育を取り巻くさまざまな問題が生じている。

1) 看護学科における教育課程の改定

平成24年度の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正として、保健師教育課程を選択制の導入によって看護師課程の卒業に必要な単位数を133単位から127単位に変更した。これにより、学生がゆとりをもって学習する機会を提供し、岐阜大学が改革課題としている英語教育の強化、e-learning等を活用した主体的学習の促進を図ってきた。

英語教育では、教養科目としての4単位120時間とした。さらに、専門科目としての英語を3単位90時間積み上げ、4年一環の英語教育プログラムとして現在進行中である。また、e-learningシステムによって、開講科目の予習、復習に活用し、講義では触れられなかった部分についても学習の機会を提供し、自己学習時間の確保につなげグループワークなどを多く組み入れ、主体性の育つ授業を展開してきた。

さらには統合実習の位置づけを明確にし、4年次への配置と全分野の教員が担当することで質的な充実を図っている。「学士課程に必要な看護実践能力の卒業到達目標」に示されている、すべての目標を達成できるように科目および授業内容の調整を行い、質的向上を目指してきた。

2) 入学状況、入学者、看護師の需給の現状

入学試験の状況に関しては、大きな変化はなく、看護学科志願者数はほぼ安定してきている。平成18年度入学試験から、文系と理系の両者ともに受けやすい科目選択制にして、受験生にとって、受験しやすい条件作りをした。これまでと同様、岐阜県及び愛知県出身者が全入学者の80%以上を占めている。病院における看護体制の充実のために7対1の看護体制が取り入れられ、その結果全国的な看護師不足が生じている。岐阜県をはじめとする東海地域でも、看護師の不足は大きな社会問題化している。このような中、看護学科は、毎年卒業生の90%以上が看護師として就職し、そのうち多数の卒業生が岐阜大学医学部附属病院に就職し看護師不足に貢献している。今後、多くの卒業生が岐阜県内をはじめとして東海地域などで、看護職として活躍することを期待したい。

3) 助産師教育、保健師教育をめぐる教育の問題

助産師教育課程は、選択性となっており、看護学科の3年生のうちから8人を上限に希望者から選抜している。教育課程の運営では、必修である助産学実習は遠隔地の病院を実習施設としているため、教員および学生の負担が大きく、今後より近い場所の実習施設の確保が課題である。

保健師教育課程は、開校以来、全学生を対象に保健師教育を実施してきたが、昨今の看護系大学の急増に伴った実習先確保の困難などの問題が生じてきたこともあり、厚生労働省の指導の下、24年度入学生より20人を上限に選抜制として現在進行中である。

2. 教員に関する現状

わが国における看護系大学数は急速に増加しており、こうした看護学教育の大学化、4年制化は看護師の質の向上につながる。高度化、専門化した医療において、看護の役割を果たし、人々のQOLの向上のためには、このような教育の大学化は望ましいものであるが、適切な教員の確保に各大学が困難をきたしている。岐阜大学看護学科においても常にごく一部の分野において欠員となっているのが現状である。

教員の研究活動に関しては、地域に貢献できる人材の育成として、県内の施設との共同研究をいくつか行

っている。

3. 教育運営体制

看護学科においては、教育運営の中心は、教授会議が協議し決定を行い、実際運営は、教務厚生委員会、将来計画委員会、入試委員会、実習委員会、FD委員会、広報情報委員会などが行っている。看護学専攻の運営は学務委員会が行っている。さらに平成26年には、カリキュラム委員会を常設委員会として設置し、教育内容の充実を目指した活動を行っている。ほかにも、必要時には臨時的な委員会を設置し対応している。これらの看護学科内委員会のほかに、医学部の委員会、全学の委員会など多種多様な委員会が設置されているので、各教員は複数の委員会に所属して、多忙な状況である。

今後の課題

看護学科では平成22年度から養護教諭一種養成課程を開始し、平成26年4月にははじめて3名の修了者を送り出した。看護学科においても、広い分野で活動する看護職を育成することは、教育の理念にもかなうことである。これからも教育推進・学生支援機構の教職課程支援部門はじめ教育学部や他学部との協力のもと、充実した教育内容になるようにしたい。

また、平成26年には、保健師・助産師教育課程の教育内容を検討し、一部カリキュラムの変更申請を行った。今後は、看護師教育課程の教育内容を検討していく。

修士課程である看護学専攻においては、入学者の多くが社会人であり、ほとんどが3年間の長期履修を希望している。このような現状を鑑み、社会人である大学院生が学びやすい環境づくりや、カリキュラム運営方法について工夫していかなければならない。さらに、岐阜大学医学部看護学科卒業生が臨床経験を積み、それぞれの専門分野での研究課題を見出して、大学院へ進学されることを期待したい。教員もこれらの意欲を持つ卒業生への支援をしたいと考えている。

3 医学部附属病院

医学部附属病院長 小倉 真治

大学病院の役割は臨床・教育・研究の三本柱を全うすることにある。県内唯一の特定機能病院であることはまさにその三本柱を推進することを社会から要請されていると考えるものである。

現在第二期中期計画の途中であるが、そこでの中期目標は以下の4項目である。

1. 地域の中核となる医療人を育成する。
 2. 地域連携の基盤に立ち、高質な医療を提供する。
 3. 病院の機能を活用し、EBM (evidence based medicine) を確立するための臨床研究の推進と新規医療技術開発を遂行する。
 4. 迅速な経営判断に基づく経営基盤の強化と効率的な組織運営を行う。
-
1. 平成25年度に医師育成推進センターを設立した。これは、卒業前から後期研修までを一貫して面倒を見るという組織であり、5年生の臨床実習、6年生の選択臨床実習から始まり、初期研修医、その後の専門医研修につなげるまでを担当している。医師育成において最も重要な時期に、責任を持って関わる組織を持てるのは大学でなければ出来ないことであり、その強みを120%生かせるような仕組みを考えたい。今後大学のみならず岐阜県内で研修をする医師を増加させることで将来の岐阜県の医療を底上げしたい。MEDCとの協力の下に新しい教育手法についても提供したいと考える。
 2. 中期計画に上げたのは、「地域から期待されている先進・高度医療、難治性疾患等の拠点病院機能を整備する。また、高度な医療安全体制を維持・向上させ、5疾患に関する岐阜県の医療計画、5事業に関する国・地域からの要請に応じ、「安心・安全な医療」に積極的に参画するための機能整備を行う。」というものであった。これを具現化するためには医療内容の可視化が避けて通れない。その結果、地域の医療機関との連携も充実していくと思われる。
 3. 26年度に先端医療・臨床研究推進センターを設立した。まさに病院の機能を活用し、EBM (evidence based medicine) を確立するための臨床研究の推進と新規医療技術開発を行うための機関である。近年、専門医があればいいという医師が増加しているが、臨床で生まれた疑問をそのまま流しては良い臨床家にならない。特定機能病院としてのミッションとして、高度先進医療を行うこと及び英語論文が一定数以上(今年度では70編以上)必要となるが、基礎研究のみならず、臨床研究を展開していくことも病院としての責務だと考える。また岐阜薬科大学や獣医学科との共同研究を展開することが生命科学系の研究拠点として重要なことだと考えている。
 4. 迅速な経営判断に基づき経営基盤を強化するという目標に関しては、1) 病院機能の向上に必要な組織・手段・プロセスを継続的に点検・評価し、各種業務プロセスの有機的連携と業務改善を行う。2) 職員の貢献度の適正評価と医療情報システムのデータを活用した迅速な経営状況の把握・分析を通じ、戦略的かつ効果的な改善を行う。という計画を上げている。当院の病院経営は基本的に診療報酬の改定等の不安定な要素が存在する上に、借入金償還が常に経営を圧迫してきた。その前提の上で質の高い医療を行うために変化に直ちに対応できる柔軟な組織、制度に変革する必要がある。

II 大学院医学系研究科

1 専攻

[医学系研究科医科学専攻]

1. 教育・研究の理念、目標

本学においては、昭和36年5月に大学院医学研究科（博士課程）が設置され、これまで医学に関する高度な教育・研究組織として先端的な医学研究の遂行を通し、独創的な研究能力とともに豊かな学識と人間性を備えた医学教育者・研究者、さらにはリサーチマインドをもつ医療従事者を養成してきた。

21世紀に入り急速で著しい生命科学の変容に対応するため、平成14年に新たに再生医科学専攻と医科学専攻から成る医学研究科に改組した。改組後の医科学専攻は、旧来の小講座を軸とした縦割りの学問体系を基盤とした組織から新しい学問体系に即した大講座制に移行した。平成16年度には大きな変化があった。1つは国立大学の法人化であり、もう1つは医学部・附属病院の柳戸地区への統合移転であった。さらに、時期を同じくして部局化に踏み切り、大学院に軸足を置いた組織となり、5大講座の括りに編成変えも行った。

このような組織の編成変えの間も、1) 医療と医学研究における国際的通用性の高い人材育成システムの確立、2) 研究成果の地域並びに国際社会への発信と展開、3) 生命医科学研究の臨床医学への応用等、の達成に向けてより一層教育・研究内容を充実させてきた。高度で先端的・学際的・創造的研究を推進し、将来の医学を担うリーダーとなるべき優れた生命医科学研究者、臨床医学研究者、生命医科学教育者及び高度な医学的素養を身に付けた臨床医並びに急速に発展する現代医療に対応できる医療行政の専門家を育成することを目標としてきた。

なお、平成20年度には教育研究上の目標を「先端医学・医療の学識や技術をもち、先進的・学際的・創造的な探求心と倫理観を兼ね備えた研究者及び高度専門職業人を育成する。」と明文化している。

2. 医科学専攻の構成

前述のとおり、平成14年度の改組の際、医学研究科（博士課程）はこれまでの5専攻（形態系、機能系、社会医学系、内科系、外科系）を改めて医科学専攻の1専攻とし、3つの領域（構造機能医科学、病態制御医科学、統合情報医科学）に区分した。学生中心の教育体制を確立するとともに専攻のボーダーレス化を図ることにより、高度の独創性と国際性を併せ持った医科学研究者並びに専門職業人を育成することを目指した。

平成16年度から部局を医学部から大学院医学研究科に移行し、医科学専攻を3領域から5大講座（分子・構造学、病態制御学、神経統御学、腫瘍制御学、医療管理学）に改組して研究体制の更なる充実を図った。この部局化により、今日の医科学を解析、統合、応用それぞれの側面から、より効率的に研究を展開している。

平成20年4月には効果的な医学・医療教育を推進できる教育者及び研究者の養成を目的とした「医学教育学分野」を医療管理学講座に設置した。同年10月には独立行政法人自動車事故対策機構及び社会医療法人厚生会との間で教育研究に係る連携・協力（いわゆる「連携大学院」）に関する協定を締結して神経統御学講座に「連携分野 脳病態解析学」を設置した。

一方、「がんプロフェッショナル養成プラン」においては「東海がんプロ」に参画し、平成20年4月からは「横断的な化学療法の専門医養成コース」として、前年度に設置した腫瘍制御学講座の臨床腫瘍学分野において、実践的な教育を実施している。平成24年4月からは「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」として第2期目がスタートしている。

また、再生医科学専攻の循環病態学分野及び呼吸病態学分野について、本研究科の教育目標に沿って組織の見直しを行い、平成23年4月に医科学専攻病態制御学講座に両分野を移設した。

(1) 分子・構造学講座

細胞情報学、分子生理学、薬理病態学、寄生虫学・感染学、遺伝発生学、内分泌代謝病態学、小児病態学、病態情報解析医学の8分野で構成する。

生命機能の発現の本質ともいえるタンパク質相互反応の解析が病因解明と治療法開発に結びつくことは明らかであり、分子情報から立体構造と変異立体構造の比較に基づく新たな創薬・治療法の開発を推進し、21世紀型テーラーメイド医療を実現するとともに、先端的な教育・研究・診療を担う優れた人材を育成する。

(2) 病態制御学講座

解剖学，分子病態学，循環病態学，呼吸病態学，高度先進外科学，整形外科学，皮膚病態学，泌尿器科学，麻酔・疼痛制御学，口腔病態学の10分野で構成する。

高度に特化された専門分野からなり，それぞれの臓器構築・病態に関する新たな知見を共有し，より高度の先端的診断・治療・予防法の研究と開発を実現する。

(3) 神経統御学講座

高次神経形態学，生理学，スポーツ医科学，神経内科・老年学，精神病理学，脳神経外科学，耳鼻咽喉科学，眼科学の8分野と，連携分野 脳病態解析学を加えた計9分野で構成する。

複雑化・高齢化が進む現代社会では生産労働力の低下や医療諸資源の投入を増加させる精神・神経系疾患が増加し，社会的にも大きな問題となっている。このため，精神・神経系の機能を解析し，その治療法・予防法の確立と新しい治療法の開発を目指し，研究・教育・診療能力の高い人材を育成する。

(4) 腫瘍制御学講座

腫瘍病理学，形態機能病理学，腫瘍外科学，消化器病態学，血液病態学，産科婦人科学，放射線医学，疫学・予防医学，臨床腫瘍学の9分野で構成する。

死亡原因第1位を占める癌の克服は，わが国のみでなく先進諸国の大きな問題であり，本領域では癌の研究を進めてきた基礎・社会・臨床医学系研究者が集結し，総力を挙げて癌の治療法・予防法を確立する。

(5) 医療管理学講座

総合病態内科学，臨床薬剤学，医療経済学，救急・災害医学，法医学，産業衛生学，医学教育学の7分野で構成する。

今日では，だれでも・どこでも適切な医療を受け，健康保持・増進を進めることに対する社会的要請が高く，一方，未曾有の不測の災害に対する医療体制の整備が要請されている。その実現のためには，EBM（科学的根拠に基づく医療）を踏まえた総合的な医学・医療，医薬品，救急・災害医学のみならず，医療経済の知識を統合・管理する新たなシステムの構築が必須である。本領域では新たな医療管理に関する教育研究を推進してこれらの問題に的確に対応する体制の構築と人材の育成を行う。

3. 学生定員と入学状況

医科学専攻の入学定員，収容定員及び過去5年間の入学状況は，次表のとおりである。

定員の充足が従前からの課題であり，ホームページによる発信はもとより募集パンフレットを関連病院に配布するなどの広報活動により，定員を充足するための取り組みを行っている。また，募集期間を1週間から2週間に伸ばし，2次募集で十分な充足率が得られない場合には3次募集も行うこととした。

医科学専攻の入学定員及び収容定員

研究科	専攻	課程	入学定員	収容定員
医学系研究科	医科学専攻	博士課程	47	188

過去5年間の入試統計

年度	事項 募集 人員	志願者数		受験者数		合格者数		入学者数	
平成22年度	47	35	(11) <31> 《0》	33	(10) <29> 《0》	30	(9) <26> 《0》	30	(9) <26> 《0》
平成23年度	47	40	(6) <31> 《2》	40	(6) <31> 《2》	37	(6) <29> 《2》	37	(6) <29> 《2》
平成24年度	47	29	(3) <23> 《1》	29	(3) <23> 《1》	28	(2) <22> 《1》	27	(2) <21> 《1》
平成25年度	47	40	(9) <37> 《3》	39	(8) <36> 《3》	35	(8) <32> 《3》	34	(8) <31> 《3》
平成26年度	47	37	(10) <35> 《1》	37	(10) <35> 《1》	34	(10) <32> 《1》	33	(9) <31> 《1》

()は女子，<>は社会人，《 》は外国人留学生をすべて内数で表します。

(参考)

医科学専攻・再生医科学専攻の入学状況

年度	事項 募集 人員	志願者数		受験者数		合格者数		入学者数	
平成25年度	64	51	(12) <37> 《4》	50	(11) <36> 《4》	45	(11) <32> 《4》	44	(11) <31> 《4》
平成26年度	64	54	(12) <37> 《3》	54	(12) <37> 《3》	51	(12) <34> 《2》	50	(11) <33> 《3》

()は女子，<>は社会人，《 》は外国人留学生をすべて内数で表します。

4. カリキュラムの編成方針

平成24年度から医学の研究や実践を遂行する上で、共通して必要と考えられる「基礎技術」を共通科目とし、修了要件単位に加えることができることとした。さらに最先端の医学・医療の知識を幅広く修得することを目的に「医学先端セミナー」を共通科目として開講することとした。

(1) 履修単位基準

医科学専攻の修了に必要な履修単位は以下のとおりである。

科目区分	最低履修単位数	備考
共通科目	3	
学際科目	1	
専門科目	14	専攻分野の必修科目
自由選択科目	6	共通科目又は専門科目から選択
特別研究	6	
合計	30	

(2) 教育の特色

- ① 専攻分野の専門科目の重厚性を高める単位認定
専攻分野が開講する講義科目、演習科目、セミナー科目を併せて3年次までに14単位を修得できるような構成とし、志望分野の専門科目の重厚性を高めるカリキュラムとしている。
- ② 他専攻の授業科目を履修単位に認定
医科学専攻では、再生医科学専攻の共通科目及び専門科目を修了に必要な単位として認定している。
- ③ 生命倫理・医療倫理学の義務化
今日の医科学研究を進める上で、生命科学、遺伝発生学のみならず、多くの研究が生態系に及ぼす多大な影響を鑑み、「生命倫理関係の科目」の履修を必修としている。
- ④ 学位論文作成に必要な研究活動の単位認定
1年次から学位論文作成に必要な研究活動を、特別研究として単位化している。
- ⑤ ADAMS (Advanced Doctor Course Alliance of Medical Science)
この講義は主に英語を用いて行い、基礎から臨床まで、幅広く医学研究に触れることで最新の医学の知見を広め、自らの研究活動に生かすことを目的としている。

(3) 社会人学生のための措置

大学院設置基準の第14条特例により、夜間(6及び7時限目)、土曜日及び夏季休業期間中における集中開講で実施している。

また、社会人学生が全体の約8割近くを占めているおり、勤務の都合で留年又は休学する者が年々増加傾向にある。主に職業を有している学生を対象に、平成21年度から長期履修制度を導入するとともに、在学生(最終学年を除く)にも適用することとした。

(4) 教育研究分野、指導教員

医科学専攻における各領域別の教育研究分野、指導教員、主な研究内容は次表のとおりである。

領域 (講座)	分野	指導教員	研究内容
分子 ・ 構 造 学	細胞情報学	中 島 茂	1. 細胞生・死のシグナル伝達メカニズム 2. 細胞周期と発がんのメカニズム 3. 免疫恒常性を維持する分子メカニズム 4. 酸化ストレス応答とアンチエイジング 5. 神経細胞の死と分化メカニズム
	分子生理学	恵 良 聖 一	1. 蛋白質一般の高次構造形成過程の物理化学的研究 2. 蛋白質・ペプチドの異常凝集体形成の分子メカニズム 3. 生体内酸化ストレスとレドックス応答 4. 蛋白質と水分子間相互作用の分子メカニズム (生体系の水の分子生理) 5. MRI 情報と生体組織の分子生理・分子病理
	薬理病態学	小 澤 修	1. ストレス応答のメカニズムの解明と低分子量ストレス蛋白質の役割の解明 2. 骨粗鬆症の病態の解明と薬物の影響 3. 骨芽細胞の細胞内情報伝達機構の解明と骨調節因子の作用機序の解明 4. 肝細胞の細胞内情報伝達機構の解明と薬物の影響 5. 神経細胞・卵巣細胞の細胞内情報伝達機構の解明と薬物の影響 6. 代謝性疾患における血小板機能に関する研究 7. アポトーシス発現機序の解明と薬物の影響
	寄生虫学・感染学	前 川 洋 一	1. 免疫記憶 T リンパ球分化機構に関する研究 2. T リンパ球活性化制御機構に関する研究 3. リーシュマニア原虫感染症の病態解明に関する研究 4. 旋毛虫感染の病態生理の解明とその応用研究 5. タイ肝吸虫感染による胆管癌発ガン機構の解明研究

領域 (講座)	分野	指導教員	研究内容
分子・構造学	遺伝発生学	深尾敏幸	1. 遺伝性疾患の発症機構 2. 遺伝因子と環境の相互作用
	内分泌代謝病態学	武田純	1. 2型糖尿病の発症機構の解明研究 2. 糖尿病, 肥満, 動脈硬化などの生活習慣病の診断法の開発 3. 糖尿病治療薬の作用に関する分子生物学的研究 4. 糖尿病及び合併症の再生医療の研究 5. 下垂体副腎疾患の診断治療に関する研究 6. 高血圧症の病態解明研究 7. 内分泌腫瘍の成因に関する研究
	小児病態学	深尾敏幸	1. 先天代謝異常症の病態解明研究 2. 先天代謝異常症の治療開発研究 3. 先天性免疫不全症の病態解明研究 4. 自己炎症性疾患の病態解明研究 5. アレルギー疾患の病態解明研究 6. アレルギー疾患の予防, 治療研究 7. 小児腫瘍性疾患の病態解明研究
	病態情報解析医学	清島満	1. リポ蛋白代謝 2. ウイルス性肝炎における免疫学的機構 3. NASH の病因病態解明 4. トリプトファン代謝と病態 5. 新しい測定法の開発及び評価
病態制御学	解剖学	千田隆夫	1. Wnt シグナル伝達系の機能と制御 2. APC 遺伝子 (APC 蛋白質) の形態形成における役割 3. 鍼灸技術の科学的解析 4. ヒト血管系の肉眼解剖学的解析 5. 加齢に伴う骨微細構造の変化と骨粗鬆症発症との関連
	分子病態学	長岡仁	1. 抗体記憶形成・維持の分子機構の解明 2. B リンパ球最終分化時の運命決定機構の研究 3. 抗体遺伝子改変の分子機構の研究
	循環病態学	湊口信也	1. 心不全の成因と治療に関する基礎的・臨床的研究 2. 虚血心筋保護のメカニズム解明と治療薬開発に関する研究 3. 不整脈の先進的治療に関する研究 4. 動脈硬化の成因と治療に関する基礎的・臨床的研究 5. 高血圧・高脂血症の成因と治療に関する研究 6. 腎疾患の成因と治療に関する基礎的・臨床的研究 7. 循環器疾患に対する再生医学・再生医療
	呼吸病態学	湊口信也	1. 肺癌の病態解明と治療薬開発のための分子生物学的研究 2. 呼吸器疾患の先進的画像診断法の開発に関する研究 3. COPD の病態解明と治療薬開発のための基礎的・臨床的研究 4. 呼吸器感染症における薬物動態と有効性評価に関する臨床的研究 5. 呼吸器疾患に対する再生医学・再生医療

領域 (講座)	分野	指導教員	研究内容
病 態 制 御 学	高度先進外科学	竹村博文	<ol style="list-style-type: none"> 1. 外科手術における低侵襲化の研究 2. 心臓血管, 呼吸器, 消化器外科の再生医療, 遺伝子治療の研究 3. 人工臓器の研究 4. 心臓血管外科, 呼吸器外科におけるロボット手術の研究
	整形外科学	秋山治彦	<ol style="list-style-type: none"> 1. 関節軟骨再生治療に向けた基盤研究 2. 骨粗鬆症・骨疾患の病態と治療に関する研究 3. 骨軟部腫瘍に対する分子制御治療に関する研究 4. 脊椎椎間板再生に向けた基礎研究 5. 運動器疾患のコンピュータ動作解析研究
	皮膚病態学	清島真理子	<ol style="list-style-type: none"> 1. 乾癬治療法の開発研究 2. 自己免疫性水疱症の発症機序の解明 3. 膠原病の発症病理の分子学的研究 4. アトピー性皮膚炎の病態と治療に関する研究 5. 皮膚悪性腫瘍の診断と治療に関する基礎的及び臨床的研究 6. 皮膚感染症の原因微生物同定法の研究
	泌尿器科学	出口隆	<ol style="list-style-type: none"> 1. 尿路性器感染症の基礎的・臨床的研究 2. 尿路性器悪性腫瘍の基礎的・臨床的研究 3. 排尿障害に対する臨床的研究 4. 泌尿器科領域の内視鏡下手術手技の開発研究 5. 腎移植における臨床的研究
	麻酔・疼痛制御学	飯田宏樹	<ol style="list-style-type: none"> 1. 脳・脊髄微小循環に対する麻酔薬及び麻酔関連薬の影響の研究 2. 血管内皮機能と酸化ストレスに関する研究 3. 脳脊髄保護と NO (nitric oxide) 吸入に関する研究 4. 難治性疼痛制御に関する研究 5. グリア細胞における細胞内情報伝達に関する研究
	口腔病態学	柴田敏之	<ol style="list-style-type: none"> 1. 口腔病変の分子疫学的研究 2. 口腔がんの悪性化進展機序の検索と抑制 3. 口腔がん治療の基礎的・臨床的開発 4. 顎・口腔機能改善に対する細胞工学の応用 5. ヒト歯髄 iPS 細胞の研究
神 経 統 御 学	高次神経形態学	山口瞬	<ol style="list-style-type: none"> 1. 記憶・学習のメカニズムの解明 2. 蛍光タンパク質発現トランスジェニックマウスを用いた脳機能イメージング 3. 体内時計に関する研究 4. 遺伝子工学および光学を用いた生体现象の可視化 5. 神経細胞の老化メカニズムの解明
	生理学	森田啓之	<ol style="list-style-type: none"> 1. 血圧調節のシステム解析 2. 宇宙医学・重力生理学 3. 静脈循環支援装置の開発 4. 高齢者補助装置の開発
	スポーツ医科学	松岡敏男	<ol style="list-style-type: none"> 1. 運動処方における運動強度の研究 2. 競技選手のトレーニング効果に関する研究 3. スポーツ障害・外傷の予防の研究

領域 (講座)	分野	指導教員	研究内容
神 経 統 御 学	神経内科・老年学	犬塚 貴	<ol style="list-style-type: none"> 1. 神経障害機序の解明と再生修復・神経保護薬の開発 2. 免疫性神経疾患の成因と治療に関する研究 3. 神経変性疾患の分子病態と治療法の開発 4. 認知症の診断と治療に関する研究 5. 高齢者及び神経難病の医療・福祉に関する研究
	精神病理学	塩入 俊樹	<ol style="list-style-type: none"> 1. 精神疾患の脳機能画像研究 2. 精神疾患の自律神経研究 3. 精神科診断学に関する研究 4. 発達障害の疫学研究 5. 災害精神医学に関する研究
	脳神経外科学	岩間 亨	<ol style="list-style-type: none"> 1. 悪性脳腫瘍の病態と治療に関する研究 2. 脳卒中の病態と治療 3. MRI, PET による高次脳機能の解析 4. 神経細胞再生, 移植
	耳鼻咽喉科学	伊藤 八次	<ol style="list-style-type: none"> 1. 体平衡機能検査法の研究 2. めまい診断と治療の研究 3. 前庭障害のリハビリテーションに関する研究 4. 蝸牛・前庭感覚細胞再生の研究 5. 頭頸部腫瘍治療の研究
	眼科学	山本 哲也	<ol style="list-style-type: none"> 1. 緑内障性視神経障害の病態生理に関する研究 2. 緑内障性視神経障害の画像解析法による検討 3. 眼圧下降を介さない緑内障治療に関する基礎的研究 4. 眼内血液循環に関する生理学的及び形態学的研究 5. 黄斑疾患への画像解析法の応用による新しい治療法の開発 6. 各種レーザーの眼内組織に及ぼす影響に関する形態学的研究 7. 緑内障手術における代謝拮抗薬の応用に関する研究 8. 羊膜を利用した角膜疾患治療に関する研究 9. 眼感染症の新しい診断治療に関する研究 10. 網膜硝子体疾患の手術療法に関する研究
	※連携分野 脳病態解析学	篠田 淳 (独)自動車事故 対策機構中部療 護センター	<ol style="list-style-type: none"> 1. 遷延性意識障害・高次脳機能障害・その他臨床神経科学領域の疾患等の病態評価と治療に関する研究 2. PET, SPECT を用いて脳の機能解析, MRI を用いて脳の形態解析を行い, 病態を評価し, それらの画像データを治療効果判定に応用する。
腫 瘍 制 御 学	腫瘍病理学	原 明	<ol style="list-style-type: none"> 1. 遺伝子改変マウス作製技術を用いた大腸発がんの分子機構解明 2. がん細胞リプログラミングによるがんエピジェネティック異常の意義解明 3. DNA メチル化機構と腫瘍発生の解明 4. 再生医療, 幹細胞医学に関連する腫瘍発生の解明とその制御 5. 神経再生研究のための神経障害動物モデルの開発
	形態機能病理学	竹内 保	<ol style="list-style-type: none"> 1. 分子生物学技術の診断病理学への応用の研究 2. クロマチン再構成複合体異常がもたらす腫瘍発生の研究 3. 癌発生・増殖に関わる癌・間質相互作用の分子病理学的研究

※独立行政法人自動車事故対策機構及び社会医療法人厚生会との連携大学院

領域 (講座)	分野	指導教員	研究内容
腫瘍 制御 学	腫瘍外科学	吉田和弘	<ol style="list-style-type: none"> 1. 食道癌・胃癌・大腸癌・肝臓癌の鏡視下手術の臨床研究 2. 消化器癌・乳癌の化学療法及び分子標的治療の臨床研究と個別化療法の研究 3. 消化器癌発癌機構の分子生物学的検討及びその臨床応用 4. 抗癌剤の耐性のメカニズムの解析 5. 大腸癌多発肝転移に対する外科的切除—限界への挑戦— 6. 肝腫瘍に対する凍結療法による免疫賦活のメカニズム 7. DC細胞を用いた癌に対する免疫治療の開発
	消化器病態学	未定	未定
	血液病態学	未定	未定
	産科婦人科学	森重健一郎	<ol style="list-style-type: none"> 1. 婦人科癌における抗血管新生治療の研究 2. 子宮体癌の腹腔鏡下手術の臨床研究 3. 婦人科癌における抗癌剤耐性メカニズムの解析 4. 産科出血予防のための子宮内バルーンの開発 5. 体外受精における初期胚発生のキー・ファクターの解析
	放射線医学	星博昭	<ol style="list-style-type: none"> 1. 核医学による癌の診断・脳機能測定 2. 早期肝癌および腹部の画像診断 3. Interventional Radiology 4. 悪性腫瘍に対する定位放射線治療, IMRT, IGRT 5. コンピュータ支援診断 (CAD)
	疫学・予防医学	永田知里	<ol style="list-style-type: none"> 1. がんの疫学研究 2. 生活習慣病の疫学研究 3. 栄養疫学研究 4. 患者の行動医学研究
	臨床腫瘍学*	未定	未定

*平成19年度から始まった「がんプロフェSSIONAL養成プラン」（平成24年度からは「がんプロフェSSIONAL養成基盤推進プラン」）による化学療法を担う臨床腫瘍医の養成コースで学位とともに専門医資格を目指す。

領域 (講座)	分野	指導教員	研究内容
医療 管理 学	総合病態内科学	森田浩之	<ol style="list-style-type: none"> 1. 長寿地域における生活習慣病の疫学的研究 2. 脂肪細胞分化に関する研究 3. 発熱疾患の鑑別診断に関する研究 4. ステロイド糖尿病に関する研究 5. 膠原病の発症病態に関する研究
	臨床薬剤学	伊藤善規	<ol style="list-style-type: none"> 1. 医薬品による副作用の発現機構と対策に関する研究 2. 抗菌薬適正使用推進 (antimicrobial stewardship) のアウトカム評価に関する研究 3. 薬物間相互作用の解析に関する研究 4. 治療的薬物血中濃度モニタリングに関する研究 5. 薬学的ケアの有用性に関する臨床研究 6. 医薬品の新規剤型開発に関する研究

領域 (講座)	分野	指導教員	研究内容
医療 管理 学	医療経済学	永田知里	1. 医療における生産性及び効率性に関する研究 2. 予防医療に対する需要分析 3. 手術待機期間に関する研究 4. レセプト情報分析
	救急・災害医学	小倉真治	1. 救急災害医療体制の研究 2. 救急医療情報の研究 3. 敗血症性ショックの研究 4. 外傷に関する研究 5. 重症急性膵炎に関する研究 6. 航空医療に関する研究
	法医学	武内康雄	1. 心臓性突然死に関する病理学的研究 2. SIDSの病理学的研究 3. 交通外傷に関する研究 4. DNA多型に関する研究 5. ショック時早期に発現する諸臓器の形態学的変化の研究
	産業衛生学	永田知里 井奈波良一	1. 屋外労働の快適化に関する研究 2. 物理的環境刺激の生体影響に関する研究 3. 職場のメンタルヘルスに関する研究
	医学教育学	鈴木康彦 藤崎和彦	1. カリキュラム開発と学生評価法の研究 2. コミュニケーション教育に関する研究 3. 能動的問題基盤型学習に関する研究 4. Professionalism教育に関する研究 5. 地域基盤型医学教育に関する研究 6. シミュレーション医学教育に関する研究 7. 医学教育指導者の育成に関する研究

(5) 大学院特別講義

大学院特別講義は、随時、主として基礎医学系講座を中心に実施している。

5. 教育活動

(1) 教育活動の実施内容と方法

本研究科は医科学専攻と再生医科学専攻の両輪よりなるが、いずれも超高齢化社会を迎えようとする現在、メディカル、コメディカルを問わず、入学した大学院生にはこれからの高度な医療を支えるべく、最先端の医学教育を行うことを前提としている。

そのためには、自由度の高い履修が可能なカリキュラムを設定するとともに、研究指導教員や研究助言教員による複数指導体制を導入するなど、学生の立場にたった教育内容を提供し、学生と教員が一体となって国際的に評価されるような医科学研究を推進している。

① 教育研究分野の機能強化

5つの大講座からなる医科学専攻のうちの神経統御学講座内に、平成20年10月に、連携分野としてあらたに「脳病態解析学分野」を設置し、脳科学系の研究力の強化を図った。

また、腫瘍制御学講座内に「臨床腫瘍学分野」を設置することによって、「がんプロフェッショナル養成プラン」への対応を強化させた。平成24年度からは「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」として第2期が始まっている。

さらに平成23年度より、両専攻の組織改編により、再生医科学専攻の「循環病態学」および「呼吸制御学」の2分野を医科学専攻内へ移設した。

② カリキュラムの充実

がん治療における化学療法を担う臨床腫瘍医の養成コースとして、上述のとおり平成20年度から「がん

プロフェッショナル養成プラン」による臨床腫瘍学分野を開設し、平成 24 年度からは「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」として、大学院において学位の取得とともに専門医資格を目指している。

本学部の内外では、最先端の医学研究会や講演会、シンポジウムなどが日々開催されている。これらに加えて、学位論文発表会なども対象に、共通科目のなかに「大学院医学先端セミナー」を加えた。またどの分野に所属しようとも、基本的な研究手法のはば広い修得の必要性の再認識から、「基礎技術」を共通科目（選択）に加えた。

③ 他大学，他研究施設，他研究科との連携の強化

現在の高度化した医療を支える最先端医学は、もはや本研究科内のみで修得されるものではないことは、論をまたない。従って、他大学等との共同研究、とくに、本研究科に距離的にも近い岐阜薬科大学や本学連合創薬医療情報学科などとの共同研究等によって連携の強化が容易になるように、規則改正を行った。

④ 大学院制度の改正：MD・PhD 制度

基礎・社会医学研究者の養成を目的とし、学部在籍時から大学院教育を開始する MD・PhD プログラムを設置した。平成 26 年 12 月現在、3 名が本プログラムに入り、学業に加え、配属された研究室で研究活動に参加している。

⑤ 大学院生への経済的支援

平成 16 年度の卒後臨床研修の必修化等により医学部医学科卒業者の大学院離れ、さらには研究者離れに拍車がかかり、特に基礎・社会医学系研究者の育成が急務となっている。

このような状況から、本研究科医科学専攻の基礎医学系・社会医学系に入学した学生（社会人大学院生を除く。）に対し、入学金相当額及び在学期間中の授業料相当額を奨学金として給付する制度を平成 20 年度に設けた。

平成 21 年度からは、MD・PhD プログラム後期進学者も資格要件に加えるよう見直し、「岐阜大学大学院医学系研究科学生（博士課程・博士後期課程の基礎医学系）奨学金」と改め、応募対象者を拡大した。本奨学金創設以降、6 名に対し奨学金を支給している。

6. 研究活動

〔分子・構造学講座〕

(1) 細胞情報学分野

1. 研究の概要

血管再生の分子メカニズム、特に脂肪由来間葉系幹細胞の血管形成細胞への分化誘導とその臨床応用、さらにレドクス制御とアンチエイジング、特にレドクスシグナル制御による細胞増殖と分化誘導能をテーマに研究を進めてきた。しかし、研究室メンバーであった池亀助教の転職もあり、研究テーマはこの三年間でシフトした。細胞分裂における重要なキナーゼである Aurora-A, -B, -C (Aik, Aik2, AIK3) 遺伝子をクローニングし、それらの機能を解析してきた木村講師を新たにメンバーとして迎えた。Aurora 阻害剤の抗がん剤としての効果も検討されており、細胞分裂と発がんの分子メカニズムを明らかにするために、Aurora を中心に細胞周期制御の研究を進めている。また、レドクスシグナルの研究を細胞周期制御とドッキングさせ、相互関連性のある以下の三つのテーマを中心に研究を行っている。

- 1) 細胞周期制御の分子メカニズム
- 2) レドクスシグナルによる細胞増殖制御
- 3) 細胞増殖制御にかかわる新規分子の探索

2. 名簿

教授： 中島 茂 Shigeru Nakashima
講師： 木村正志 Masashi Kimura

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 中島 茂(分担執筆協力). 標準生化学：藤田道也編. 東京：医学書院；2012年.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

なし

総説 (欧文)

- 1) Ikegame Y, Yamashita K, Nakashima S, Nomura Y, Yonezawa S, Asano Y, Shinoda J, Hara H, Iwama T. Fate of graft cells: what should be clarified for development of mesenchymal stem cell therapy for ischemic stroke? *Front Cell Neuroci.* 2014;8/322. doi: 10.3389/fncel.2014.00322.

原著 (和文)

なし

原著 (欧文)

- 1) Tawada M, Hayashi S, Osada S, Nakashima S, Yoshida K. Human gastric cancer organizes neighboring lymphatic vessels via recruitment of bone marrow-derived lymphatic endothelial progenitor cells. *J Gastroenterol.* 2012;47:1057-1060. IF 4.020
- 2) Ikegame Y. Among mesenchymal stem cells: for the best therapy after ischemic stroke. *Stem Cell Res Ther.* 2013;4:9. IF 4.634
- 3) Tsuruma K, Yamauchi M, Sugitani S, Otsuka T, Ohno Y, Nagahara Y, Ikegame Y, Shimazawa M, Yoshimura S, Iwama T, Hara H. Progranulin, a major secreted protein of mouse adipose-derived stem cells, inhibits light-induced retinal degeneration. *Stem Cell Transl Med.* 2014;3:42-53. IF 3.596
- 4) Tawada M, Hayashi S, Ikegame Y, Nakashima S, Yoshida K. Possible involvement of tumor-producing VEGF-A in the recruitment of lymphatic endothelial progenitor cells from bone marrow. *Oncol Rep.* 2014;32:2359-2364. IF 2.191

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者名：池亀由香；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：ポリフェノールによる腫瘍幹細胞

制御機構の解明；平成 24-25 年度；4,420 千円(2,210：2,210 千円)

2) 受託研究

- 1) 中島 茂：還元水素水の抗炎症・抗アレルギーならびに抗がん作用効果の測定及び測定結果の解析；平成 21-24 年度；130 千円；桂鋹社
- 2) 中島 茂：植物マグマの放射線防御効果に関する研究；平成 24-25 年度；3,000 千円；大自然株式会社

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

中島 茂：

- 1) 日本生化学会評議員・参与(～現在)
- 2) 日本脂質生化学会幹事(～現在)
- 3) 脳心血管抗加齢研究会評議員(～現在)

池亀由香：

- 1) 日本脳神経外科学会評議員(～平成 26 年 3 月)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

中島 茂：

- 1) Metabosartan Forum in Gifu (平成 24 年 9 月，岐阜，座長)
- 2) 脳心血管抗加齢研究会 2012 (平成 24 年 12 月，大阪，シンポジウム「脂質代謝異常症の抗加齢医療」座長)
- 3) 脳心血管抗加齢研究会 2012 (平成 24 年 12 月，大阪，Young Investigator Award 審査口演 座長)
- 4) 脳心血管抗加齢研究会 2013 (平成 25 年 12 月，大阪，Young Investigator Award 審査口演 座長)
- 5) 第 14 回日本抗加齢医学会総会(平成 26 年 6 月，大阪，シンポジウム「そのあぶら大丈夫ですか？：脂質分子と疾患の関連」座長)
- 6) 第 14 回日本抗加齢医学会総会(平成 26 年 6 月，大阪，シンポジウム「そのあぶら大丈夫ですか？：脂質分子と疾患の関連」シンポジスト「そのあぶら大丈夫ですか？」)
- 7) 第 14 回日本抗加齢医学会総会(平成 26 年 6 月，大阪，会長特別企画シンポジウム「和食の文化からアンチエイジングを語る」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

中島 茂：

- 1) TIMA Foundation (Liechtenstein) Adviser (～平成 25 年 10 月)
- 2) 震災復興支援：一般社団法人 Lumiere et Espoir pour le Japon 理事(～平成 25 年 3 月)
- 3) 第 18 回国際血管生物学会準備委員(平成 24 年 11 月～平成 26 年 4 月)
- 4) 第 14 回日本抗加齢医学会プログラム委員(平成 25 年 7 月～平成 26 年 6 月)

5) 第18回国際血管生物学会ポスターアワード審査員(平成25年12月～平成26年4月)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

研究については制限されたマンパワー、予算の中で量よりも質にこだわり、きちんと評価される研究を目指してきた。研究室のメンバーが交代し、教員としては細胞周期研究がテーマの木村講師を迎えた。H26年4月から大学院生も新しくメンバーに加わった。医学科学生研究員も定期的に研究に参加するようになり、“細胞増殖の分子メカニズムの解明”というキーワードのもとにまとまりのある研究体制が構築できつつある。主な研究テーマ、そして人員が代わったので目に見える研究成果はこれからであるが、次のステップアップのためのシーズは確実に蓄積している。

現状の問題点及びその対応策

基礎系分野共通の問題である研究者・大学院生の確保は、初期研修の義務化以降ますます困難となっている。旧帝大系でも基礎研究分野への医師の入局が激減しており、各分野あるいは大学単位の努力では限界に達していると思われる。研修医の大都市集中は日本全体の問題でもあり、旧帝大系を中心に学部学生時代から基礎医学へ誘導するプロジェクトが始まったが、地方への波及効果は不明である。しかし、岐阜大学でも学生研究員制度を制定して以来、少しずつではあるが研究室に定着する学生が出てきたのは喜ばしい傾向である。また、医学科学生の英語テキストの輪読会や勉強会への参加者も微増中のようにであり、努力を続けていく必要を感じている。一方では、入学定員増加後、学業成績として評価されること以外には余り興味を示さず、夢とか希望という言葉が感じられない学生が増加しているように思われる。ゆとり教育の影響が大きいのかも知れないが、大学入学以前の家庭あるいは学校教育をきちんと見直していかなければ、医学部入学定員をいくら増やしても、本当に献身的な働きをしてくれる医師を育てるのは余り期待できないのでは、と思わざるを得ない。初等・中等教育、さらに社会システム全体の抜本的な改革がなされなければ、この国の医療体制のみならず、基礎医学研究は世界から取り残されるのではないかという強い危機感を感じている。発想の柔軟な若手研究者を確保する意味でも、これからは各分野が今以上に研究業績を内外にアピールし、学生達に研究の重要性やおもしろさを啓蒙していくことが重要になるであろう。研究資金はやりくり(創意工夫)で何とかなるが、やはり人材の確保が一番重要な問題である。また、臨床医のトレンドは研究よりも臨床スキルを上げて専門医獲得のようであるが、リサーチマインドはやはり重要ではないかと思われる。リサーチマインドを持った臨床医を育成する意味でも、基礎系が学生に向けてアピールをし続けなければ行けないのでは無いかと日々自問自答している。医学部入学定員は三割増しになっているので、そのうちに臨床の人員が充足する目処がつけば、研究指向の医師が増加することになるのではないかと密かに期待している。(あまり期待はできないかも知れないが、)明るい未来を信じて、努力することだけは続けたい(続けなければいけない)と思っている。

今後の展望

冒頭に記載した三つのテーマを中心に、細胞周期制御とそのシグナルについての研究を進める。また、学部学生に講義や選択テュートリアルを通して積極的にアピールし、学生研究員の獲得、そして育成に努める。実際に基礎医学研究の道に進む者は極めてわずかかも知れないが、リサーチマインドを持った臨床医を育てるためにも、努力を続けていく。

(2) 分子生理学分野

1. 研究の概要

1) タンパク質の高次構造と機能に関する物理化学的研究

ポストゲノムに続く研究領域はプロテオーム、メタボロームなどともいわれているが、遺伝情報の翻訳によってタンパク質が生合成されて生体内で実際にその機能を発揮するまでに、タンパク質は高次構造(二次、三次構造)を形成したあとに様々な翻訳後修飾を受ける。数あるタンパク質の中で血中に最も多く存在している血清アルブミン分子を例にして、さまざまな翻訳後修飾(酸化、カルボニル化、糖化、ニトロ化など)がアルブミンの生理機能、たとえばリガンド結合能などにどのような影響を及ぼしているかといった研究を行い、さらに翻訳後修飾と疾患との関連について研究している。

2) 生体内酸化ストレスとレドックス応答

生体はさまざまな外部環境要因によってさまざまなストレスを受けている。そのような酸化ストレスは生体高分子、すなわち核酸、タンパク質、脂質などを化学修飾することによって機能を低下させ、その結果、細胞の老化や癌化を引き起こすことが知られている。生体内のタンパク質、とくに血清アルブミンは生体内で最も多量に存在する唯一のSH基含有タンパク質で、細胞外酸化還元緩衝機能を有している。従って、血清アルブミンの酸化還元状態の動的解析によって、種々の疾患の病態解明や老化の本質解明に迫ることができる。

3) タンパク質と水分子間相互作用の分子メカニズム

水は生体の約60%を占める重要な分子集団で、さまざまな生体高分子にその活動の場を提供している。NMRという研究手段によって、タンパク質周辺の水分子集団の動的挙動、すなわちタンパク質-水分子間相互作用を検出することができる。その臨床応用としてMRIが知られているが、我々は現在、NMRとMRIとを用いて、新規の「分子・細胞イメージング法」の確立を目指して研究している。

2. 名簿

教授： 恵良聖一 Seichi Era
併任講師： 寺田知新 Tomoyoshi Terada
助教： 村山幸一 Koichi Murayama

3. 研究成果の発表

著書(和文)

- 1) 寺脇博之, 松山幸枝, 松尾七重, 小倉 誠, 三留 淳, 濱口明彦, 寺田知新, 恵良聖一, 細谷龍男. 腹膜透析患者において還元型アルブミンの低値は心血管系合併症と関連する: 腎とフリーラジカル 11集, 2013年: 93-95.
- 2) 鈴木祥史, 須田健二, 松山幸枝, 寺田知新, 恵良聖一, 副島昭典. 水素水および還元薬剤を添加した透析液を用いたアルブミンの透析とその効果: 腎とフリーラジカル 11集, 2013年: 162-167.
- 3) 寺脇博之, 中島章雄, 松本 啓, 三留 淳, 木村敬太, 小林政司, 濱口明彦, 小倉 誠, 細谷龍男, 松山幸枝, 寺田知新, 恵良聖一. 酢酸含有透析液から無酢酸透析液への切り替えが, 透析後の還元型アルブミン増加度に及ぼす影響に関する予備的検討: 腎とフリーラジカル 11集, 2013年: 168-169.
- 4) 鈴木祥史, 須田健二, 松山幸枝, 寺田知新, 恵良聖一, 副島昭典. 血漿アルブミンの還元化率を改善する還元薬剤の透析液への添加とその有効濃度: 腎とフリーラジカル 12集, 2014年: 66-70.

著書(欧文)

なし

総説(和文)

- 1) 恵良聖一, 松島 秀. MTC の原理から CEST イメージングへ. インナービジョン 2012年; 9巻: 25-28.

総説(欧文)

なし

原著(和文)

- 1) 寺脇博之, 恵良聖一. 基盤病態としてのアルブミン酸化還元比異常(S43), 日本生理学雑誌 2012年; 74巻: 245-246.
- 2) 恵良聖一. 血清アルブミンの構造・機能および酸化還元の病態生理, 日本生理学雑誌 2012年; 74巻: 246-247.
- 3) 寺田知新. ヒト白血球系株化細胞は酸化型アルブミンを還元型アルブミンに変換する: アルブミンの酸化

原著 (欧文)

- 1) Otsuki J, Nagai Y, Matsuyama Y, Terada T, Era S. The influence of the redox state of follicular fluid albumin on the viability of aspirated human oocytes. *Syst Biol Reprod Med.* 2012;58:149-153. IF 1.700
- 2) Terawaki H, Matsuyama Y, Matsuo N, Ogura M, Mitome J, Hamaguchi A, Terada T, Era S, Hosoya T. A lower level of reduced albumin induces serious cardiovascular incidence among peritoneal dialysis patients. *Clin Exp Nephrol.* 2012;16:629-635. IF 1.708
- 3) Terawaki H, Terada T, Ogura M, Era S, Hosoya T. The elevation of oxidative stress after the great East Japan earthquake. *Clin Exp Nephrol.* 2012;16:816-817. IF 1.708
- 4) Terawaki H, Yamagishi S, Funakoshi Y, Matsuyama Y, Terada T, Nakayama K, Ogura M, Hosoya T, Ito S, Era S, Nakayama M. Pigment epithelium-derived factor as a new predictor of mortality among chronic kidney disease patients treated with hemodialysis. *Ther Apher Dial.* 2013;17:625-630. IF 1.532
- 5) Terawaki H, Hayashi Y, Zhu W-J, Matsuyama Y, Terada T, Kabayama S, Watanabe T, Era S, Sato B, Nakayama M. Transperitoneal administration of dissolved hydrogen for peritoneal dialysis patients: a novel approach to suppress oxidative stress in the peritoneal cavity. *Med Gas Res.* 2013;3:14 (doi:10.1186/2045-9912-3-14).
- 6) Otsuki J, Nagai Y, Matsuyama Y, Terada T, Era S. The redox state of recombinant human serum albumin and its optimal concentration for mouse embryo culture. *Syst Biol Reprod Med.* 2013;59:53-59. IF 1.700
- 7) Terawaki H, Zhu W-J, Matsuyama Y, Terada T, Takahashi Y, Sakurai K, Kabayama S, Miyazaki M, Itami N, Nakazawa R, Ito S, Era S, Nakayama M. Effect of a hydrogen (H₂)-enriched solution on the albumin redox of hemodialysis patients. *Hemodial Int.* 2014;18:459-466. IF 1.363
- 8) Minami T, Terada T, Takahashi T, Arikawa H, Matsuyama Y, Kizaki K, Era S. Comparative studies on the heterogeneity of plasma-derived and recombinant human albumins in laboratory use. *Int J Biol Macromol.* 2014;69:79-87. IF 3.096
- 9) Matsushima S, Sato Y, Yamaura H, Kato M, Konosada Y, Era S, Takahashi K, Inaba Y. Visualization of liver uptake function using the luptake contrast-enhanced ratio in hepatobiliary phase imaging. *Magn Reson Imaging.* 2014;32:654-659. IF 2.022
- 10) Suzuki Y, Suda K, Matsuyama Y, Era S, Soejima A. Close relationship between redox state of human serum albumin and serum cysteine levels in non-diabetic CKD patients with various degrees of renal function. *Clin Nephrol.* 2014;82:320-325. IF 1.232

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 恵良聖一; 科学研究費補助金基盤研究(C): 磁気共鳴法による細胞集団の機能イメージング法への展開と臨床応用; 平成 22-24 年度; 3,100 千円(1,600 : 800 : 700 千円)
- 2) 研究代表者: 寺田知新, 研究分担者: 恵良聖一, 村山幸一; 科学研究費補助金基盤研究(C): 高親和性 IgE 受容体β鎖の構造解析と予防・治療・および創薬開発への応用; 平成 22-24 年度; 3,400 千円(1,900 : 800 : 700 千円)
- 3) 研究代表者: 寺田知新; 大学活性化経費(研究: 科研採択支援): 高親和性 IgE 受容体β鎖 D234 に会合する分子の同定と治療・創薬開発への応用; 平成 25 年度; 700 千円
- 4) 研究代表者: 富田美穂子(松本歯科大学), 研究分担者: 中野敬介, 寺田知新, 川上敏行; 科学研究費補助金基盤研究(C): 音楽が疼痛閾値に及ぼす影響と自律神経のバランスとの関係; 平成 25-27 年度; 3,900 千円(1,000 : 1,400 : 1,500 千円)
- 5) 研究代表者: 寺田知新, 研究分担者: 恵良聖一; 科学研究費補助金基盤研究(C): 高親和性 IgE 受容体β鎖 D234 に会合する分子の同定と治療・創薬開発への応用; 平成 26-28 年度; 3,800 千円(1,800 : 1,000 : 1,000 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

恵良聖一：

- 1) 日本生理学会評議員(～現在)
- 2) 日本病態生理学会監事(～現在)
- 3) 日本病態生理学会評議員(～現在)
- 4) 日本磁気共鳴医学会代議員(～現在)

寺田知新：

- 1) 日本生理学会評議員(～現在)
- 2) 日本てんかん学会評議員(平成 25 年 10 月～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

恵良聖一：

- 1) 第 89 回日本生理学会大会(平成 24 年 3 月, 松本, 「The albumin redox disorder as a fundamental pathogenicity」座長)
- 2) 第 89 回日本生理学会大会(平成 24 年 3 月, 松本, 「Serum albumin: Recent progress in the understanding of its structure and pathophysiology」シンポジスト)
- 3) もとす医師会総会講演会(平成 24 年 5 月, 瑞穂, 「酸化ストレスと疾患(体の中の酸化還元状態と病気との関わり)」演者)
- 4) 第 40 回日本磁気共鳴医学会大会(平成 24 年 9 月, 京都, 「Saturation transfer (飽和移動): CEST, APT & MT」シンポジスト)

寺田知新：

- 1) 第 89 回日本生理学会学術集会(平成 24 年 3 月, 松本, 「Human leukocytic cell lines actively convert the oxidized form of albumin to the reduced form: affect of redox state of albumin and physiological significance.」シンポジスト)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

- 1) 恵良聖一：磁気共鳴法による細胞集団の機能イメージング法への展開と臨床応用：平成 22-24 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書：1-4(平成 25 年 5 月)
- 2) 寺田知新：高親和性 IgE 受容体β鎖の構造解析と予防・治療および創薬開発への応用：平成 22-24 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書：1-5(平成 25 年 5 月)

11. 報道

- 1) 寺田知新：「研究室から 大学はいま」アレルギー疾患の予防向上：岐阜新聞(2013 年 10 月 29 日)

12. 自己評価

評価

後述するが、分野の現員が非常に少ない(実働 2 名)中で研究の activity を上げるために、他大学や他

研究施設との共同研究を積極的に進めてきたが、大学院生2名も学位（博士（医学））を修得して、ようやくその成果が実ってきた感がある。

しかしこのような状況がいつまでも続くのはやはり異常な状態であろうし、いずれ解決されなければならないと考える。

現状の問題点及びその対応策

当該分野の記録として次の2点を残しておきたい：①平成16年の国立大学法人化の年に、学内の事情（黒木登志夫元学長の裁定による（旧）人獣共通感染防御研究センターの設立）によって、当該分野の准教授ポスト1が減員されたまま既に10年が経過している。さらに②医学部長プール定員（助手）によって採用した助手の問題が発生して、学部として未解決のまま既に10年が経過している。

この間、地域医療の崩壊に関連して学生の入学定員が80名から110名まで順次増員されてきているが、教員側の増員はまったくないままで今日に至り、学部学生ならびに大学院生の教育・研究を実質2名で行ってきた。このようなアンバランスな状態で従前通りの教育・研究の質と量の確保はままならない。対応策としては、員数の増員ほかない。

今後の展望

員数が少ないという上記の問題点は単に当該の1基礎医学分野に限った特殊な状態ではない。解決策としては、学部全体として人的資源の確保に取り組むことが不可欠であろう。それもし多くの要因で実現できないのであれば、今後の展望は現状以上にますます厳しいものとなるであろう。

(3) 薬理病態学分野

1. 研究の概要

薬理学的手法、細胞生物学的手法および分子生物学的手法を用い研究を行い、代謝性疾患・血栓症・動脈硬化症・消化器系疾患の病態の解明を通してヒトに有用な新たな創薬を目指し研究を行っている。

1) 種々の病態における低分子量ストレス蛋白質の役割の解明

生体のストレス応答において中心的役割を担うと考えられているストレス蛋白質 (heat shock protein:HSP) に注目し、中でも分子量が 10-30kDa の低分子量ストレス蛋白質 (low-molecular-weight HSP:HSPB) の機能を解析している。低分子量 HSP のファミリーの中で、HSPB6 (HSP20) と HSPB5 (α B クリスタリン) が従来の細胞内シャペロンとしての機能以外にストレス応答に際し、細胞外に遊離され血小板機能を抑制することを発見し、その活性部位を見出した。さらに、血小板からの顆粒分泌を HSPB1 (HSP27) のリン酸化が制御していることを明らかとしている。

また、肝癌の病態において HSPB1 (HSP27) のリン酸化の程度および HSPB6 (HSP20) の総発現量がヒト肝細胞癌における TNM ステージと逆相関することを見出し、HSP27 および HSP20 が癌細胞の増殖の細胞内情報伝達機構を制御していることを示した。さらに、最近、HSP20 の標的蛋白質が phosphatidylinositol 3-kinase および Bax であり、それぞれ、増殖・アポトーシスの機能を制御していることを明らかとした。

現在、低分子量ストレス蛋白質 (HSPB) の中でも、種々の臓器・細胞にユビキタスに存在している HSP27・HSP20・ α B クリスタリンおよび HSP22 の細胞内 (骨芽細胞・神経細胞・血小板・肝癌細胞・卵巣癌細胞)・細胞外での機能及び役割の詳細な検討を行っている。

2) 骨芽細胞・神経細胞・血管平滑筋細胞・肝細胞の細胞内情報伝達機構の解明

初代培養細胞およびモデルクローン化細胞を用いて、細胞増殖因子・サイトカイン・ホルモン等種々の生理活性物質の細胞内情報伝達機構について検討を行っている。細胞の増殖・細胞運動・分化やアポトーシスのメカニズム・その制御における役割を解析し、骨粗鬆症・血栓症・動脈硬化症・急性冠症候群・肝癌の病態の解明を試みている。さらに、これら疾患に使用されている種々の薬物の新たな作用の解析および作用機構の検討を行っている。

3) 代謝疾患 (糖尿病・骨粗鬆症等) における血小板機能の変化と誘発される種々の病態生理の解明

糖尿病などの代謝疾患は、血栓症 (虚血性疾患) や神経・臓器障害などの 2 次的疾患の誘発率が高く、血小板機能の変化と血栓症や各臓器障害との関係を追求している。既に、骨粗鬆症の治療薬として使用されている SERM の一つであるラロキシフェンがその副作用として血小板凝集能を亢進させることを明らかとしている。現在、代謝疾患 (糖尿病・骨粗鬆症等) および頸動脈狭窄症における血小板の機能および血小板細胞内情報伝達機構の解析を行っている。

2. 名簿

教授:	小澤 修	Osamu Kozawa
教授(併任):	丹羽雅之	Masayuki Niwa
助教:	西脇理英	Rie Nishiwaki

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

なし

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

なし

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

なし

原著 (欧文)

- 1) Kato K, Otsuka T, Kondo A, Matsushima-Nishiwaki R, Natsume H, Kozawa O, Tokuda H. AMP-activated protein kinase regulates PDGF-BB-stimulated interleukin-6 synthesis in osteoblasts: involvement of mitogen-activated protein kinases. *Life Sci.* 2012;90:71-76. IF 2.296
- 2) Kawaguchi J, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Yoshioka T, Itani M, Kozawa O, Moriwaki H. UVC irradiation suppresses platelet-derived growth factor-BB-induced migration in human pancreatic cancer cells. *Oncol Rep.* 2012;27:935-939. IF 2.191
- 3) Mizutani J, Tokuda H, Matsushima-Nishiwaki R, Kato K, Kondo A, Natsume H, Kozawa O, Otsuka T. Involvement of AMP-activated protein kinase in TGF- β -stimulated VEGF synthesis in osteoblasts. *Int J Mol Med.* 2012;29:550-556. IF 1.880
- 4) Kondo A, Otsuka T, Natsume H, Matsushima-Nishiwaki R, Kato K, Kozawa O, Tokuda H. Wnt3a up-regulates prostaglandin F2 α -stimulated VEGF synthesis in osteoblasts. *Mol Med Rep.* 2012;6:421-425. IF 1.484
- 5) Kato K, Tokuda H, Matsushima-Nishiwaki R, Natsume H, Kondo A, Ito Y, Kozawa O, Otsuka T. AMPK limits IL-1-stimulated IL-6 synthesis in osteoblasts: involvement of I κ B/NF- κ B pathway. *Cell Signal.* 2012;24:1706-1712. IF 4.471
- 6) Kawaguchi J, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Nakashima M, Ohno T, Shimizu M, Yoshioka T, Itani M, Kozawa O, Moriwaki H. Cisplatin and ultra-violet-C synergistically down-regulate receptor tyrosine kinases in human colorectal cancer cells. *Mol Cancer.* 2012;11:45. IF 5.397
- 7) Tanabe K, Matsushima-Nishiwaki R, Iida M, Kozawa O, Iida H. Involvement of phosphatidylinositol 3-kinase/Akt on basic fibroblast growth factor-induced glial cell line-derived neurotrophic factor release from rat glioma cells. *Brain Res.* 2012;1463:21-29. IF 2.828
- 8) Tokuda H, Kato K, Natsume H, Kondo A, Kuroyanagi G, Matsushima-Nishiwaki R, Ito Y, Otsuka T, Kozawa O. Involvement of AMP-activated protein kinase in thrombin-stimulated interleukin-6 synthesis in osteoblasts. *J Mol Endocrinol.* 2012;49:47-55. IF 3.621
- 9) Doi T, Tokuda H, Matsushima-Nishiwaki R, Cuong NT, Kageyama Y, Iida Y, Kondo A, Akamatsu S, Otsuka T, Iida H, Kozawa O, Ogura S. Effect of antithrombin III on glycoprotein Ib/IX/V activation in human platelets: suppression of thromboxane A2 generation. *Prostag Leukotr Ess.* 2012;87:57-62. IF 1.984
- 10) Tokuda H, Kato K, Kasahara S, Matsushima-Nishiwaki R, Mizuno T, Sakakibara S, Kozawa O. Significant correlation between the acceleration of platelet aggregation and phosphorylation of HSP27 at Ser-78 in diabetic patients. *Int J Mol Med.* 2012;30:1387-1395. IF 1.880
- 11) Kondo A, Otsuka T, Kato K, Natsume H, Kuroyanagi G, Mizutani J, Ito Y, Matsushima-Nishiwaki R, Kozawa O, Tokuda H. AMP-activated protein kinase inhibitor decreases prostaglandin F2 α -stimulated interleukin-6 synthesis through p38 MAP kinase in osteoblasts. *Int J Mol Med.* 2012;30:1487-1492. IF 1.880
- 12) Kondo A, Tokuda H, Kato K, Matsushima-Nishiwaki R, Kuroyanagi G, Mizutani J, Kozawa O, Otsuka T. Rho-kinase negatively regulates thyroid hormone-stimulated osteocalcin synthesis in osteoblasts. *Biochimie.* 2013;95:719-724. IF 3.123
- 13) Osawa Y, Suetsugu A, Matsushima-Nishiwaki R, Yasuda I, Saibara T, Moriwaki H, Seishima M, Kozawa O. Liver acid sphingomyelinase inhibits growth of metastatic colon cancer. *J Clin Invest.* 2013;123:834-843. IF 13.765
- 14) Iida M, Tanabe K, Matsushima-Nishiwaki R, Kozawa O, Iida H. Adenosine monophosphate-activated protein kinase regulates platelet-derived growth factor-BB-induced vascular smooth muscle cell migration. *Arch Biochem Biophys.* 2013;530:83-92. IF 3.043
- 15) Cuong TN, Doi T, Matsushima-Nishiwaki R, Akamatsu S, Kuroyanagi G, Kondo A, Mizutani J, Wada I, Otsuka T, Tokuda H, Kozawa O, Ogura S. Thrombopoietin amplifies ADP-induced HSP27 phosphorylation in human platelets: importance of its pre-treatment. *Int J Mol Med.* 2013;31:1291-1297. IF 1.880
- 16) Kondo A, Otsuka T, Kato K, Matsushima-Nishiwaki R, Kuroyanagi G, Mizutani J, Tokuda H, Kozawa O. AMP-activated protein kinase regulates thyroid hormone-stimulated osteocalcin synthesis in osteoblasts. *Int J Mol Med.* 2013;31:1457-1462. IF 1.880
- 17) Kondo A, Tokuda H, Matsushima-Nishiwaki R, Kato K, Kuroyanagi G, Mizutani J, Fukuoka M, Wada I, Kozawa O, Otsuka T. Unphosphorylated heat shock protein 27 suppresses fibroblast growth factor-2-stimulated vascular endothelial growth factor release in osteoblasts. *Mol Med Rep.* 2013;8:691-695. IF 1.484
- 18) Kondo A, Otsuka T, Matsushima-Nishiwaki R, Kuroyanagi G, Mizutani J, Wada I, Kozawa O, Tokuda H. Inhibition of SAPK/JNK leads to enhanced IL-1-induced IL-6 synthesis in osteoblasts. *Arch Biochem Biophys.* 2013;535:227-233. IF 3.043
- 19) Osawa Y, Hoshi M, Yasuda I, Saibara T, Moriwaki H, Kozawa O. Tumor necrosis factor- α promotes cholestasis-induced liver fibrosis in the mouse through tissue inhibitor of metalloproteinase-1 production in hepatic stellate cells. *PLoS One.* 2013;8:e65251. IF 3.534
- 20) Kageyama Y, Doi T, Akamatsu S, Kuroyanagi G, Kondo A, Mizutani J, Otsuka T, Tokuda H, Kozawa O, Ogura S. Rac regulates collagen-induced HSP27 phosphorylation via p44/p42 MAP kinase in human platelets. *Int J Mol Med.* 2013;32:813-818. IF 1.880

- 21) Kuroyanagi G, Yamada K, Imaizumi T, Mizutani J, Wada I, Kozawa O, Tokuda H, Otsuka T. Leg lymphedema caused by iliopsoas bursitis associated with destruction of a rheumatoid hip joint. *Exp Ther Med*. 2013;6:887-890. IF 0.941
- 22) Kuroyanagi G, Otsuka T, Kondo A, Matsushima-Nishiwaki R, Mizutani J, Kozawa O, Tokuda H. (-)-Epigallocatechin gallate amplifies interleukin-1-stimulated interleukin-6 synthesis in osteoblast-like MC3T3-E1 cells. *Biochimie*. 2013;95:1933-1938. IF 3.123
- 23) Matsushima-Nishiwaki R, Kumada T, Nagasawa T, Suzuki M, Yasuda E, Okuda S, Maeda A, Kaneoka Y, Toyoda H, Kozawa O. Direct association of heat shock protein 20 (HSPB6) with phosphoinositide 3-kinase (PI3K) in human hepatocellular carcinoma: regulation of the PI3K activity. *PLoS One*. 2013;8:e78440. IF 3.534
- 24) Kageyama Y, Doi T, Matsushima-Nishiwaki R, Iida Y, Akamatsu S, Kondo A, Kuroyanagi G, Yamamoto N, Mizutani J, Otsuka T, Tokuda H, Iida H, Kozawa O, Ogura S. Involvement of Rac in thromboxane A₂-induced human platelet activation: regulation of sCD40 ligand release and PDGF-AB secretion. *Mol Med Rep*. 2014;10:107-112. IF 1.484
- 25) Kondo A, Otsuka T, Kuroyanagi G, Yamamoto N, Matsushima-Nishiwaki R, Mizutani J, Kozawa O, Tokuda H. Resveratrol inhibits BMP-4-stimulated VEGF synthesis in osteoblasts: suppression of S6 kinase. *Int J Mol Med*. 2014;33:1013-1018. IF 1.880
- 26) Kuroyanagi G, Tokuda H, Matsushima-Nishiwaki R, Kondo A, Mizutani J, Kozawa O, Otsuka T. Resveratrol suppresses prostaglandin F_{2α}-induced osteoprotegerin synthesis in osteoblasts: inhibition of the MAP kinase signaling. *Arch Biochem Biophys*. 2014;542:39-45. IF 3.043
- 27) Kondo A, Tokuda H, Matsushima-Nishiwaki R, Kuroyanagi G, Yamamoto N, Mizutani J, Kozawa O, Otsuka T. Rho-kinase limits BMP-4-stimulated osteocalcin synthesis in osteoblasts: regulation of the p38 MAP kinase pathway. *Life Sci*. 2014;96:18-25. IF 2.296
- 28) Iida Y, Doi T, Matsushima-Nishiwaki R, Tokuda H, Ogura S, Kozawa O, Iida H. (-)-Epigallocatechin gallate selectively inhibits ADP-stimulated human platelet activation: suppression of HSP27 phosphorylation via p38 MAP kinase. *Mol Med Rep*. 2014;10:1383-1388. IF 1.484
- 29) Nagasawa T, Matsushima-Nishiwaki R, Toyoda H, Matsuura J, Kumada T, Kozawa O. Heat shock protein 20 (HSPB6) regulates apoptosis in human hepatocellular carcinoma cells: direct association with Bax. *Oncol Rep*. 2014;32:1291-1295. IF 2.191
- 30) Tanabe K, Matsushima-Nishiwaki R, Kozawa O, Iida H. Dexmedetomidine suppresses interleukin-1β-induced interleukin-6 synthesis in rat glial cells. *Int J Mol Med*. 2014;34:1032-1038. IF 1.880
- 31) Kuroyanagi G, Mizutani J, Kondo A, Yamamoto N, Matsushima-Nishiwaki R, Otsuka T, Kozawa O, Tokuda H. Suppression by resveratrol of prostaglandin D₂-stimulated osteoprotegerin synthesis in osteoblasts. *Prostag Leukotr Ess*. 2014;91:73-80. IF 1.984
- 32) Iida M, Tanabe K, Kozawa O, Iida H. Differential effects of intravenous anesthetics on PDGF-BB-induced vascular smooth muscle cell migration. *Cell Physiol Biochem*. 2014;33:1827-1837. IF 3.550
- 33) Yamamoto N, Tokuda H, Kuroyanagi G, Mizutani J, Matsushima-Nishiwaki R, Kondo A, Kozawa O, Otsuka T. Regulation by resveratrol of prostaglandin E₂-stimulated osteoprotegerin synthesis in osteoblasts. *Int J Mol Med*. 2014;34:1439-1445. IF 1.880
- 34) Kuroyanagi G, Otsuka T, Yamamoto N, Matsushima-Nishiwaki R, Nakakami A, Mizutani J, Kozawa O, Tokuda H. Downregulation by resveratrol of basic fibroblast growth factor-stimulated osteoprotegerin synthesis through suppression of Akt in osteoblasts. *Int J Mol Sci*. 2014;15:17886-17900. IF 2.339

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：小澤 修，研究分担者：足立政治；科学研究費補助金基盤研究(C)：原発性肝細胞がんの発症・進展における低分子量ストレス蛋白質の役割に関する解析；平成 22-24 年度；3,500 千円(1,500：1,000：1,000 千円)
- 2) 研究代表者：安田一朗，研究分担者：小澤 修，足立政治；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：膵癌に対する Gemcitabine の作用発現における HSP27 の役割；平成 23-25 年度；3,900 千円(1,500：1,400：1,000 千円)
- 3) 研究代表者：田辺久美子，研究分担者：小澤 修；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：全身麻酔薬の中樞神経系に対する脳保護作用の分子機序の解析；平成 23-25 年度；4,100 千円(2,200：1,100：800 千円)
- 4) 研究代表者：赤松 繁，研究分担者：小澤 修；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：過大侵襲に対する凝固線溶系におけるストレス応答の分子基盤の解析；平成 23-25 年度；3,900 千円(1,700：1,100：1,100 千円)
- 5) 研究代表者：大澤陽介；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：トリプトファンによる肝脂肪化・脂肪肝炎発症のメカニズムに関する研究；平成 23-24 年度；3,200 千円(1,700：1,500 千円)

- 6) 研究代表者：福岡宗良，研究分担者：水谷 潤，大塚隆信，小澤 修；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：骨代謝全体における低分子量熱ショック蛋白質の役割の検討；平成 24－26 年度；4,000 千円(1,600：1,200：1,200 千円)
- 7) 研究代表者：大澤陽介；有馬・近藤記念医学財団「第 1 回学術奨励賞」：l-Tryptophan-mediated enhancement of susceptibility to nonalcoholic fatty liver disease is dependent on the mammalian target of rapamycin；平成 24 年度；1,000 千円
- 8) 研究代表者：小澤 修，研究分担者：大澤陽介(平成 25 年度)，西脇理英(平成 26－27 年度)；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：低分子量ストレス蛋白質による原発性肝がんの増殖抑制作用の分子基盤の解析；平成 25－27 年度；3,900 千円(1,500：1,200：1,200 千円)
- 9) 研究代表者：田辺久美子，研究分担者：小澤 修；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：血液・脳関門の機能維持からみた中枢神経保護の分子基盤；平成 26－28 年度；3,800 千円(1,500：1,500：800 千円)
- 10) 研究代表者：赤松 繁，研究分担者：小澤 修；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：敗血症の進展における凝固・線溶系と炎症反応のクロストークの分子基盤；平成 26－28 年度；3,700 千円(1,500：1,100：1,100 千円)
- 11) 研究代表者：徳田治彦，研究分担者：小澤 修；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：骨代謝における AMP キナーゼを介するエネルギー調節機構の役割に関する研究；平成 26－28 年度；3,700 千円(1,500：1,100：1,100 千円)

2) 受託研究

- 1) 小澤 修：高齢者の代謝疾患における血小板機能等の病態・診断・治療に関する研究；平成 24 年度；1,500 千円；独立行政法人国立長寿医療研究センター
- 2) 小澤 修：高齢者の代謝疾患における血小板機能等の病態・診断・治療に関する研究；平成 25 年度；1,500 千円；独立行政法人国立長寿医療研究センター
- 3) 小澤 修：高齢者の代謝疾患における血小板機能等の病態・診断・治療に関する研究；平成 26 年度；1,500 千円；独立行政法人国立長寿医療研究センター

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

小澤 修：

- 1) 日本薬理学会評議員(～現在)
- 2) 日本 Shock 学会評議員(～現在)

丹羽雅之：

- 1) 日本薬理学会評議員(～現在)
- 2) 日本炎症・再生学会評議員(～現在)
- 3) 日本臨床薬理学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

小澤 修：

- 1) 第 27 回日本整形外科学会基礎学術集会ランチョンセミナー(平成 24 年 10 月，名古屋，招待講演「骨

代謝とストレス蛋白質 (HSP) : 特に骨芽細胞における低分子量 HSP27 において」演者)

- 2) 第 7 回日本肝がん分子標的治療研究会(平成 25 年 1 月, 岐阜, 招待講演「肝がんとストレス蛋白質 (HSP : heat shock protein) : 特に低分子量 HSP との関連において」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 大澤陽介 : 「研究室から 大学はいま」肝臓病の新しい治療薬開発 : 岐阜新聞(2012 年 12 月 11 日)

12. 自己評価

評価

私共, 大学教員の使命は “日々遂行している研究の成果を PubMed に載る英文原著論文として公表することである” との観点から, この三年間のアウトプットは 34 報であった。論文の質としての一つの指標であるインパクトファクターの平均値は 2.799 である。この観点からアウトプットの “質” を上げることが必要と思われる。

現状の問題点及びその対応策

我が国において, 一部の大学及び一部の研究施設に予算を集中させている一方, 私共のような大学では運営交付金が毎年削減されており, この先, あと何年走っていけるのか? 一日でも長く走っていられたる状況を続けていきたい。研究を推進する上で最も重要な点は, 日々の研究を一緒に進めてくれる優秀な人材の獲得である。やはり, 研究を遂行していく上で, この一点に懸かっている。この人たちの中から, 将来, 大学および公的研究機関で医学研究を担う研究者が一人でも育成できるよう努力していきたい。

今後の展望

引き続き医学部内外との共同研究を推し進めたいと考えている。現在遂行している私共の研究成果から, 将来有効で安全な薬剤を開発すること (創薬) を目指し, いつの日か患者さんに還元したいと考えている。

(4) 寄生虫学・感染学分野

1. 研究の概要

- 1) 適応免疫応答の特徴である免疫学的記憶現象における記憶 T リンパ球の形成および維持機構の解明
- 2) リーシュマニア感染症における感染病理について宿主側および寄生体側の両面からの分子生物学的な解析
- 3) 宿主免疫応答を修飾・攪乱する旋毛虫由来分子の同定と機能についての分子構造学的な解析
- 4) 肝吸虫感染誘導性胆管がん発がんの分子基盤の解明

2. 名簿

教授： 前川洋一 Yoichi Maekawa
准教授： 長野 功 Isao Nagano
助教： 呉 志良 Zhiliang Wu

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 長野 功, 呉 志良, 高橋優三. 旋毛虫の診断: 宇賀昭二編. 寄生虫学研究材料と方法 2012年版, 名古屋: 三恵社; 2012年: 33-36.
- 2) 長野 功, 呉 志良, 高橋優三. 寄生虫由来組換えタンパク質の大腸菌での作成: 宇賀昭二編. 寄生虫学研究材料と方法 2012年版, 名古屋: 三恵社; 2012年: 121-124.
- 3) 長野 功, 高橋優三, 森田啓之, 清島真理子, 呉 志良, 今井篤志, 高岡 健, 浅野一信. 巧みな体のしくみ—ヒトの生存を脅かす要因と生き残り戦略—(第二版), 名古屋: 三恵社; 2012年: 1-105.
- 4) 呉 志良, 長野 功, 高橋優三. 旋毛虫の採取、および ES 産物を集める方法: 宇賀昭二編. 寄生虫学研究材料と方法 2012年版, 名古屋: 三恵社; 2012年: 19-22.
- 5) 呉 志良, 長野 功, 高橋優三. 旋毛虫の遺伝子診断: 宇賀昭二編. 寄生虫学研究材料と方法 2012年版, 名古屋: 三恵社; 2012年: 29-32.
- 6) 呉 志良, 長野 功, 高橋優三. 免疫組織化学の実際: 宇賀昭二編. 寄生虫学研究材料と方法 2012年版, 名古屋: 三恵社; 2012年: 77-80.
- 7) 呉 志良, 長野 功, チダラ ブンマース, 高橋優三. 学生実習用に長期保存が可能な虫卵標本の作り方: 寄生虫学研究材料と方法 2012年版, 名古屋: 三恵社; 2012年: 97-98.
- 8) 呉 志良, 長野 功, 高橋優三. 寄生虫の genomic DNA の採取: 宇賀昭二編. 寄生虫学研究材料と方法 2012年版, 名古屋: 三恵社; 2012年: 117-120.
- 9) 浅野一信, 呉 志良, 長野 功, 高橋優三, 山下弘高, 稲垣直樹. マウス耳介組織における能動的皮膚アナフィラキシー: 宇賀昭二編. 寄生虫学研究材料と方法 2012年版, 名古屋: 三恵社; 2012年: 59-62.
- 10) チダラ ブンマース, 呉 志良, 長野 功, 高橋優三. 組織における遺伝子発現の検索マイクロレーザーディセクション顕微鏡の使い方: 宇賀昭二編. 寄生虫学研究材料と方法 2012年版, 名古屋: 三恵社; 2012年: 89-90.
- 11) 長野 功, 高橋優三, 森田啓之, 清島真理子, 呉 志良, 今井篤志, 高岡 健, 浅野一信. 巧みな体のしくみ—ヒトの生存を脅かす要因と生き残り戦略—(第三版), 名古屋: 三恵社; 2013年: 1-109.
- 12) 長野 功, 高橋優三, 森田啓之, 清島真理子, 呉 志良, 今井篤志, 高岡 健, 浅野一信. 巧みな体のしくみ—ヒトの生存を脅かす要因と生き残り戦略—(第四版), 名古屋: 三恵社; 2014年: 1-110.

著書（欧文）

- 1) Takahashi Y, Nagano I, Wu Z, Boonmars T. Functional Morphology of *Trichinella*. Aichi: Sankeisha Co., Ltd.; 2012:1-60.
- 2) Wu Z, Boonmars T, Nagano I, Boonjaraspinyo S, Pinlaor S, Pairojku S, Chamgramo Y, Takahashi Y, Maekawa Y. Biomarkers of opisthorchiasis-associated cholangiocarcinoma. In: Tokoro M, Uga S, eds. Parasitic Zoonoses in Asian-Pacific Regions 2012, Dankeisha Co., Ltd.; 2013:68-74.
- 3) Asano K, Boonjaraspinyo S, Nagano I, Wu Z, Takahashi Y. Newborn larvae of *Trichinella spiralis* have immature stichosome with mature granules. In: Tokoro M, Uga S, eds. Parasitic Zoonoses in Asian-Pacific Regions 2012, Dankeisha Co., Ltd.; 2013:60-61.
- 4) Wu Z, Mochizuki K, Nagano I, Asano K, Takahashi Y. Identification and diagnosis of *Acanthamoeba* with random amplified polymorphism DNA and 18S rRNA sequences-based PCR. In: Tokoro M, Uga S, eds. Parasitic Zoonoses in Asian-Pacific Regions 2012, Dankeisha Co., Ltd.; 2013:52-53.

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著 (和文)

- 1) 大家進也, 小森伸也, 高橋伸通, 堅田利彦, 望月清文, 堀 暢英, 石橋康久, 大楠清文, 吳 志良, 高橋優三, 末松寛之. 岐阜大学およびその関連病院におけるアカントアメーバ角膜炎の 12 症例, あたらしい眼 2012 年 ; 29 巻 : 117-122.

原著 (欧文)

- 1) Wu Z, Boonmars T, Nagano I, Boonjaraspinyo S, Pinlaor S, Pairojkul C, Chamgramol Y, Takahashi Y. Alteration of galectin-1 during tumorigenesis of *Opisthorchis viverrini* infection-induced cholangiocarcinoma and its correlation with clinicopathology. *Tumor Biol.* 2012;33:1169-1178. IF 2.840
- 2) Boonjaraspinyo S, Boonmars T, Wu Z, Loilome W, Sithithaworn P, Nagano I, Pinlaor S, Yongvanit P, Nielsen PS, Pairojkul C, Khuntikeo N. Platelet-derived growth factor may be a potential diagnostic and prognostic marker for cholangiocarcinoma. *Tumor Biol.* 2012;33:1785-1802. IF 2.840
- 3) Wonkchalee O, Boonmars T, Aromdee C, Laummaunwai P, Khunkitti W, Vaeteewoottacharn K, Sriraj P, Aukkanimart R, Loilome W, Chamgramol Y, Pairojkul C, Wu Z, Juasook A, Sudsarn P. Anti-inflammatory, antioxidant and hepatoprotective effects of *Thunbergia laurifolia* Linn. on experimental opisthorchiasis. *Parasitol Res.* 2012;111:353-359. IF 2.327
- 4) Fujioka K, Kajita K, Wu Z, Hanamoto T, Ikeda T, Mori I, Okada H, Yamauchi M, Uno Y, Morita H, Nagano I, Takahashi Y, Ishizuka T. Dehydroepiandrosterone Reduces Preadipocyte Proliferation via Androgen Receptor. *Am J Physiol-Endoc M.* 2012;302:E694-704. IF 4.088
- 5) Boonjaraspinyo S, Wu Z, Boonmars T, Kaewkes S, Loilome W, Sithithaworn P, Nagano I, Takahashi Y, Yongvanit P, Bhudhisawasdi V. Overexpression of PDGFA and its receptor during carcinogenesis of *Opisthorchis viverrini*-associated cholangiocarcinoma. *Parasitol Int.* 2012;61:145-150. IF 2.111
- 6) Wonkchalee O, Boonmars T, Kaewkes S, Chamgramol Y, Aromdee C, Wu Z, Juasook A, Sudsarn P, Boonjaraspinyo S, Pairojkul C. Comparative studies on animal models for *Opisthorchis viverrini* infection: host interaction through susceptibility and pathology. *Parasitol Res.* 2012;110:1213-1223. IF 2.327
- 7) Juasook A, Boonmars T, Kaewkes S, Loilome W, Veteewuthacharn K, Wu Z, Yongvanit P. Anti-inflammatory effect of prednisolone on the growth of human liver fluke in experimental opisthorchiasis. *Parasitol Res.* 2012;110:2271-2279. IF 2.327
- 8) Boonjaraspinyo S, Boonmars T, Kaewkes S, Laummaunwai P, Pinlaor S, Loilome W, Yongvanit P, Wu Z, Puapairoj A, Bhudhisawasdi V. Down-regulated expression of HSP70 in correlation with clinicopathology of cholangiocarcinoma. *Pathol Oncol Res.* 2012;18:227-237. IF 1.806
- 9) Tantrawatpan C, Intapan PM, Thanchomnang T, Lulitanond V, Boonmars T, Wu Z, Morakote N, Maleewong W. Differential detection of *Trichinella papuae*, *T. spiralis* and *T. pseudospiralis* by real-time fluorescence resonance energy transfer PCR and melting curve analysis. *Vet Parasitol.* 2012;185:210-215. IF 2.545
- 10) Wu Z, Nagano I, Takahashi Y. *Trichinella*: What is going on during nurse cell formation? *Vet Parasitol.* 2013;194:155-159. IF 2.545
- 11) Wu Z, Nagano I, Asano K, Liu MY, Takahashi Y. Differential immunological responses induced by infection with female muscle larvae and newborn larvae of *Trichinella pseudospiralis*. *Vet Parasitol.* 2013;194:217-221. IF 2.545
- 12) Juasook A, Boonmars T, Wu Z, Loilome W, Veteewuthacharn K, Namwat N, Sudsarn P, Wonkchalee O, Sriraj P, Aukkanimart R. Immunosuppressive Prednisolone Enhances Early Cholangiocarcinoma in Syrian Hamsters with Liver Fluke Infection and Administration of N-nitrosodimethylamine. *Pathol Oncol Res.* 2013;19:55-62. IF 1.806
- 13) Wonkchalee N, Boonmars T, Laummaunwai P, Aromdee C, Hahnvajanawong C, Wu Z, Sriraj P, Aukkanimart R, Chamgramol Y, Pairojkul C, Juasook A, Sudsarn P. A combination of praziquantel and the traditional medicinal plant *Thunbergia laurifolia* on *Opisthorchis viverrini* infection and cholangiocarcinoma in a hamster model. *Parasitol Res.* 2013;112:4211-4219. IF 2.327
- 14) Okada H, Ikeda T, Kajita K, Mori I, Hanamoto T, Fujioka K, Yamauchi M, Usui T, Takahashi N, Kitada Y, Taguchi K, Uno Y, Morita H, Wu Z, Nagano I, Takahashi Y, Kudo T, Furuya K, Yamada T, Ishizuka T. Effect of nematode *Trichinella* infection on glucose tolerance and status of macrophage in obese mice. *Endocr J.* 2013;60:1241-1249. IF 2.019
- 15) Okumura Y, Yamauchi A, Nagano I, Itoh M, Hagiwara K, Takahashi K, Uezato H, Maeda M, Seishima M. A case of mucocutaneous leishmaniasis diagnosed by serology. *J Dermatol.* 2014;41:739-742. IF 2.354
- 16) Wu Z, Boonmars T, Nagano I, Loilome W, Yongvanit P, Khuntikeo N, Nielsen PS, Pairojkul C, Takahashi Y, Maekawa Y. Milk fat globule epidermal growth factor 8 serves a novel biomarker of opisthorchiasis-associated cholangiocarcinoma. *Tumor Biol.* 2014;35:1985-1995. IF 2.840

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 前川洋一; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C): メモリーTリンパ球の生存/維持を制御する Notch シグナルの標的同一とその調節; 平成 24-26 年度; 4,100 千円(1,400 : 1,400 : 1,300)

千円)

- 2) 研究代表者：前川洋一；先進医薬研究振興財団第 31 回血液医学分野一般助成：免疫制御における樹状細胞 Notch システムの役割；平成 24 年度；1,000 千円
- 3) 研究代表者：前川洋一；上原記念生命科学財団研究推進特別奨励金：リーシュマニア原虫病原性発現機構の解明；平成 24 年度；4,000 千円
- 4) 研究代表者：前川洋一，研究分担者：武田 純，竹内 保；研究科長・医学部長裁量経費(多分野共同研究)：2 型糖尿病における CD8 陽性 T リンパ球内転写制御因子 Runx3 の役割；平成 24 年度；2,000 千円
- 5) 研究代表者：長野 功，研究分担者：呉 志良，鎌足雄司；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：旋毛虫分泌タンパク質による免疫抑制作用の免疫学的小および構造生物学的解析；平成 23-25 年度；5,460 千円(2,470：1,690：1,300 千円)
- 6) 研究代表者：呉 志良，研究分担者：長野 功；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：タイ肝吸虫感染による胆管癌の新規腫瘍マーカーの同定及び検出系の確立；平成 24-26 年度；4,100 千円(1,100：1,600：1,400 千円)
- 7) 研究代表者：前川洋一；持田記念医学薬学振興財団平成 25 年度研究助成金 領域 3 免疫アレルギー炎症に関する研究：メモリー T 細胞維持機構を支える Notch シグナルシステムの全容解明；平成 25 年度；3,000 千円
- 8) 研究代表者：長野 功，研究分担者：前川洋一，呉 志良，鎌足雄司；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：旋毛虫感染による宿主の即時型アレルギー抑制機構の解明；平成 26-28 年度；5,070 千円(1,950：1,820：1,300 千円)
- 9) 研究代表者：高島康弘，研究分担者：前川洋一；学術研究助成基金助成金基盤研究(B)：バングラデシュ農村における流産原因となる人畜共通感染症の挙動；平成 26-29 年度；分担額 500 千円(総額 4,200 千円)(500 千円：未定：未定：未定)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

- 1) 研究代表者：前川洋一；長崎大学熱帯医学研究所 熱帯医学研究拠点一般共同研究：内蔵型リーシュマニア症の臓器内感染拡大様式の解明；平成 26 年度；400 千円

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

前川洋一：

- 1) 日本寄生虫学会評議員(～現在)

長野 功：

- 1) 日本寄生虫学会評議員(～現在)
- 2) 日本感染症学会評議員(～現在)

呉 志良：

- 1) International Congress for Trichinellosis；Active Member(～現在)

2) 学会開催

- 1) 第 7 回寄生虫感染免疫研究会(平成 26 年 3 月，高山)

3) 学術雑誌

呉 志良：

- 1) Journal of Bacteriology and Parasitology；編集委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

前川洋一:

- 1) The 11 the Awaji International Forum on Infection and immunity(2012.09, 淡路, 教育講演「II Parasitology」演者)
- 2) 第41回日本免疫学会学術集会(平成24年12月, 神戸, 座長)
- 3) 第82回日本寄生虫学会大会(平成25年3月, 東京, 座長)
- 4) 第83回日本寄生虫学会大会(平成26年3月, 松山, 座長)
- 5) 第70回日本寄生虫学会西日本支部大会(平成26年10月, 神戸, 座長)
- 6) 第43回日本免疫学会学術集会(平成26年12月, 京都, 座長)

呉 志良:

- 1) RGJ-PhD Congress XV(2014年5月, Pattaya, Thailand, 招待講演)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

- 1) 長野 功: 学術研究助成基金助成金基盤研究(C): 旋毛虫分泌タンパク質による免疫抑制作用の免疫学的および構造生物学的解析報告書(平成26年6月)

11. 報道

- 1) 呉 志良: 「寄生虫の善玉役を生かせ」: 岐阜新聞(2013年12月3日朝刊)

12. 自己評価

評価

新任教授が着任し分野が新たな体制となったため業績を出すまでに一定の準備期間が必要であった。現在成果がまとまりつつあるため、徐々に業績を出すことができるようになってきている。

医学教育においては従来不十分であった基礎免疫学について学習できるよう担当テュートリアルコースの内容の一部変更を行った。

現状の問題点及びその対応策

現在、前任教授時代の研究テーマから新規研究テーマに移行しているが、新たな研究を始めるための各種障壁があるため完全に移行が完了しているわけではない。研究の発展のためにはより一層の人的および研究環境の充実を図る必要がある。スタッフ個々人のさらなる努力を求めるとともに、大学院生や研究生など研究を遂行する人的補給にも務める必要がある。

医学教育については基礎免疫学に関して未だ不十分であると考えている。担当テュートリアルコース内の改編を行い免疫学の学習時間を増やす。

今後の展望

寄生虫感染における免疫応答には多細胞生物対多細胞生物でしか観察されない興味深い現象が未解明のまま残されていると考えられる。生物学的あるいは基礎医学的に興味深い現象の本質を追求することはより実学的・実践的な領域にブレークスルーを齎すと考えられるため、新体制による新規研究テーマへの移行を確実に実施し成果を上げていく。

医学教育については担当テュートリアルコース内の改編を行い基礎免疫学の学習をより充実させる予定である。

(5) 遺伝発生学分野

1. 研究の概要

遺伝発生分野の研究目的は生命を遺伝と発生の視点から解明し、さらにそれを疾患の解明と診断治療に応用すること、およびこの目的を遂行できる人材を育成することである。

研究面では、アレルギー、先天性免疫不全症、先天性代謝異常、癌、ヒトの発生、分化、神経などについて、分子遺伝学的に解析している。基礎研究において、幾つかの分野に絞ることにより、奥深い研究が進められている。アレルギー、免疫不全、代謝異常の各分野で幾つかの疾患の病因遺伝子が当講座で世界に先駆けてクローニングされ、世界をリードする成果が幾つも輩出されている。各テーマに共通することは、各分野の疾患の病因と病態の解明であり、その成果を診断・治療・予知・予防に適応していくことである。さらにこれらを通じて、ヒトの遺伝・発生、成長・発達の新たな解明につなげている。2004年春より新たに遺伝学発生分野として独立したのを機会に、さらに研鑽に努めている。ヒトの出生前期の遺伝・発生及び、出生後の成長・発達における生理的かつ病的状態を対象としている。

また、2003年には日本人類遺伝学会新制度による研修指定を獲得した。病院においては2014年10月に遺伝子診療部が設立された。近年、遺伝性疾患は診断、治療のみでなく、カウンセリング、インフォームドコンセント、心理的ケア、社会的サポートを含めた総合的フォローアップの重要性が叫ばれている。遺伝病診療がなされ、定期的な症例カンファレンスを開催し、より良い遺伝診療を目指して活動している。その内容は主に、患者およびクライアントに対する情報提供、カウンセリング方針の検討、臨床遺伝に関する最新知見、諸課題についての情報意見交換、臨床各科の相談への対応などである。

2. 名簿

教授(併任)： 深尾敏幸 Toshiyuki Fukao
臨床准教授(併任)： 松井永子 Eiko Matsui

3. 研究成果の発表

小児病態学参照

4. 研究費獲得状況

小児病態学参照

5. 発明・特許出願状況

小児病態学参照

6. 学会活動

小児病態学参照

7. 学会招待講演、招待シンポジスト、座長

小児病態学参照

8. 学術賞等の受賞状況

小児病態学参照

9. 社会活動

小児病態学参照

10. 報告書

小児病態学参照

11. 報道

小児病態学参照

12. 自己評価

評価

総合的にはそれなりの評価はできる。今後も引き続き研究成果と業績の更なる維持, 向上が望まれる。

現状の問題点及びその対応策

小児病態学と共同している。全領域をカバーする小児科の臨床からわき出る疑問とテーマの全てに着手することは困難であるが、アレルギー・免疫・代謝に加えて環境や感染と遺伝子のような新たなプロジェクトを立ち上げて進めている。

今後の展望

現在のテーマと方向性の更なる充実と拡大。さらに、これらの成果を医療に直接的に応用する

(6) 内分泌代謝病態学分野

1. 研究の概要

日本人2型糖尿病の主たる病態は、膵ラ氏島の機能不全である。肥満など不適切な生活習慣に基づくインスリン抵抗性が加わることによって、膵β細胞のインスリン分泌障害が惹起される。さらに、膵α細胞のグルカゴン分泌の調節機構にも障害が生じて血糖上昇に寄与する。血糖コントロールの破綻状態を知るためには、膵ラ氏島の機能不全だけではなく、同機能に関与する臓器連関の機能障害も同時に理解することが重要である。したがって、糖代謝の恒常性の中心に位置する膵島と肝臓を対象とした包括的研究が求められる。

当教室の研究戦略として、若年糖尿病の感受性遺伝子とそのコード蛋白機能を解析し、第一に膵β細胞のインスリン分泌不全の発症機序の解明を試みてきた。特に、日本人2型糖尿病のモデル疾患MODYのコード蛋白であるHNF転写因子群を中心に研究を進めてきた。一方、同じくHNF転写因子や共役因子を発現する肝臓は膵島と並んで血糖コントロールにおいて中心的な役割を果たすのみならず、脂質代謝の中心臓器でもある。一連のHNF転写因子群は肝の脂質代謝も同時に制御することから、両組織におけるHNF下流分子の解析は病態の表現型を理解することのみならず、新規の疾患感受性素因の同定においても有用である。中でも、分泌蛋白の解析は臨床応用に直結し、治療薬の創薬基盤にもなると期待される。

2. 名簿

教授：	武田 純	Jun Takeda
教授(併任)：	山本眞由美	Mayumi Yamamoto
臨床教授(併任)：	堀川幸男	Yukio Horikawa
准教授：	諏訪哲也	Tetsuya Suwa
講師(併任)：	飯塚勝美	Katsumi Iizuka
講師：	川地慎一	Shin-ichi Kawachi
臨床講師：	塩谷真由美	Mayumi Enya
臨床講師：	廣田卓男	Takuo Hirota
臨床講師：	橋本健一	Ken-ichi Hashimoto
医員：	丹羽啓之	Hiroyuki Niwa
医員：	服部泰輔	Taisuke Hattori
医員：	水野正巳	Masami Mizuno
医員：	村松奈々恵	Nanae Muramatu
医員：	平手祐子	Yuko Hirate
医員：	藤澤太郎	Taro Fujisawa
医員：	山本友理	Yuri Yamamoto

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 塩谷真由美, 堀川幸男, 武田 純. 2章網膜症の成因・病態生理・診断 遺伝: ヴィジュアル糖尿病臨床のすべて 糖尿病網膜症のすべて, 東京: 中山書店; 2012年: 78-84.
- 2) 堀川幸男. 遺伝子異常が同定されている糖尿病: 最新臨床糖尿病学 上 - 糖尿病学の最新動向 -, 大阪: 日本臨床社; 2012年; 70巻増刊号3: 408-413.
- 3) 富田礼子, 堀川幸男, 武田 純. インスリン分泌-我が国と外国: 糖尿病予防と治療のエビデンス, 東京: 中山書店; 2012年: 94-99.
- 4) 堀川幸男, 武田 純. GLP-1受容体作動薬と他経口剤の併用療法: 糖尿病治療薬のコンビネーションセラピー, 大阪: 医薬ジャーナル社; 2012年: 191-198.
- 5) 堀川幸男, 塩谷真由美, 廣田卓二, 飯塚勝美, 諏訪哲也, 橋本健一, 丹羽啓之, 武田 純. インクレチン関連薬と実臨床-DPP4阻害薬の使い方: インクレチンインパクト, 東京: 日経メディカル開発; 2014年: 59-114.

著書 (欧文)

- 1) Iizuka K. The Feedforward and Feedback Loop between ChREBP and its Target Genes in the Regulation of Glucose and Lipid Metabolism. In: Leon V Berhardr ed. Advances in medicine and Biology, Volume 63. Nova Science Publishers, Inc; 2013:155-168.

総説 (和文)

- 1) 山本眞由美. 留学生の健康管理支援について, CAMPUS HEALTH 2012年; 49巻: 49-52.

- 2) 武田 純. 患者指導から病診連携まで「オール岐阜」による糖尿病対策活動, 病院新時代 Medical Network 2012年; 57巻: 2-7.
- 3) 武田 純. Doctor's view vol.28 糖尿病と遺伝について(その4), 岐阜の国保 2012年; 304巻: 20-21.
- 4) 武田 純. 岐阜大学医学部附属病院 医療連携センターの役割, 岐阜大学医学部 記念会館だより 2012年; 98巻: 4-6.
- 5) 堀川幸男, 武田 純. インクレチン関連薬の体重への影響 特集インクレチン療法, 月刊糖尿病 2012年; 4号: 131-141.
- 6) 諏訪哲也. サブクリニカルクッシング症候群と副腎不全, 岐阜県医師会医学雑誌 2012年; 25巻: 29-32.
- 7) 武田 純. 糖尿病チーム医療の重要性ーコメディカルスタッフの役割ー, メディカル・ビューポイント 2013年; 34巻: 1-2.
- 8) 堀川幸男. 岐阜糖尿病地域連携パスについてーシンプルな統一型パスが一番ー, DM Ensemble 2013年; 2巻: 23-27.
- 9) 塩谷真由美, 堀川幸男. 次世代シーケンサーを用いた糖尿病遺伝子同定戦略, Diabetes Frontier 2013年; 24巻: 321-326.
- 10) 堀川幸男. 脂質異常とインスリン分泌不全-β細胞の脂肪毒性-, Diabetes Frontier 2013年; 24巻: 396-401.
- 11) 飯塚勝美, 武田 純. グルカゴン受容体とグルコースによる発現調節-転写因子ChREBPを介した経路, 生体の科学 2013年; 64巻: 406-407.
- 12) 堀川幸男. 若年糖尿病 MODYにおける遺伝的背景と子宮内環境, 糖尿病と妊娠 2014年; 14巻: 51-54.
- 13) 武田 純. 糖尿病の地域医療連携~岐阜モデルのインフラ整備~, UBUNE 2014年; 21巻: 3.
- 14) 武田 純. チーム医療における糖尿病療養指導師の役割, 糖尿病の最新治療 2014年; 5巻: 92-96.
- 15) 諏訪哲也. 副腎不全, 臨床雑誌 2014年; 113巻: 1597-1598.
- 16) 武田 純. 座談会 糖尿病チーム医療ー糖尿病日常診療に関する工夫ー, 糖尿病診療マスター 2014年; 12巻(増刊号): S1-S8.
- 17) 武田 純. 学会レポート 第29回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会, 糖尿病の最新治療 2014年; 5巻: 164.
- 18) 武田 純. 第332回医科研究会報告 食後血糖管理のために「食べる」を考え直す, 岐阜県保険医新聞 2014年; 437号: 5.
- 19) 武田 純. 【巻頭言】炭水化物を考える, 日本糖尿病・妊娠学会会報 2014年; 16巻: 1.
- 20) 武田 純. 地域の課題を考えた新しい医療連携のかたち(第4回 糖尿病地域連携講演会 報告), 高山赤十字病院 地域医療連携だより やまびこ 2014年; 9号: 4.
- 21) 武田 純. 学会レポート 第29回糖尿病・妊娠学会年次学術集会, 糖尿病の最新治療 2014年; 5巻: 164.

総説 (欧文)

- 1) Iizuka K. Recent progress on the role of ChREBP in glucose and lipid metabolism. *Endocr J.* 2013;60:543-555.

原著 (和文)

- 1) 田中生雅, 佐渡忠洋, 磯村有希, 加納亜紀, 臼井るり子, 高井郁恵, 清水克時, 山本眞由美. 大学生の健康への取り組みと QOL, *CAMPUS HEALTH* 2012年; 49巻: 258-260.
- 2) 佐渡忠洋, 田中生雅, 磯村有希, 宮地幸雄, 臼井るり子, 高井郁恵, 加納亜紀, 清水克時, 山本眞由美. 回答方法の変化が UPI 得点に与える影響についての検討, *CAMPUS HEALTH* 2012年; 49巻: 268-270.
- 3) 磯村有希, 鶴見広美, 田中生雅, 佐渡忠洋, 臼井るり子, 高井郁恵, 加納亜紀, 宮地幸雄, 清水克時, 山本眞由美. 大学生の AIDS/HIV に関する知識の実態調査, *CAMPUS HEALTH* 2012年; 49巻: 408-410.
- 4) 佐渡忠洋, 鈴木 壯, 田中生雅, 山本眞由美. バウムの描画プロセスに関する研究: バウムはどこから描かれ, 幹はどのように構成されるのか, *臨床心理身体運動学研究* 2012年; 14巻: 59-68.
- 5) 佐渡忠洋, 伊藤宗親, 田中生雅, 山本眞由美. 日本におけるロールシャッハ法黎明期の研究の特徴, *岐阜大学カリキュラム開発研究* 2012年; 29巻 別冊: 24-38.
- 6) 佐渡忠洋, 田口多恵, 伊藤宗親, 田中生雅, 山本眞由美. 本邦におけるロールシャッハ法に関する文献一覧ー1959年までの黎明期ー, *岐阜大学カリキュラム開発研究* 2012年; 29巻 別冊: 39-45.
- 7) 田中生雅, 佐渡忠洋, 山本眞由美. 大学でのメンタルヘルスに係るトラブルとリスク管理上の課題, *愛知教育大学保健環境センター紀要* 2012年; 11巻: 35-39.
- 8) 吉田 敏, 山本眞由美. ヒト顔面皮膚の *in situ* 赤外スペクトル分析による代謝的状態の診断, *生体医工学* 2012年; 50巻: 390.
- 9) 加納亜紀, 松永美紀, 田中生雅, 西尾彰泰, 佐渡忠洋, 磯村有希, 臼井るり子, 邦 千富, 榎原 愛, 堀田容子, 山本眞由美. 唾液中コルチゾール濃度測定を用いた大学女性職員のストレス調査の試み, *CAMPUS HEALTH* 2013年; 50巻: 289-291.
- 10) 磯村有希, 田中生雅, 西尾彰泰, 佐渡忠洋, 臼井るり子, 邦 千富, 榎原 愛, 堀田容子, 松永美紀, 加納亜紀, 宮地幸雄, 山本眞由美. 大学生の喫煙と飲酒に関する知識と認識の実態調査, *CAMPUS HEALTH* 2013年; 50巻: 383-385.
- 11) 田中生雅, 三宅恵子, 松井真一, 松藤淑美, 佐渡忠洋, 磯村有希, 加納亜紀, 林 正子, 山本眞由美. 岐阜大学女性研究者支援「メンター制度」取組と課題, *CAMPUS HEALTH* 2013年; 50巻: 397-399.
- 12) 佐渡忠洋, 田中生雅, 西尾彰泰, 磯村有希, 加納亜紀, 臼井るり子, 松永美紀, 榎原 愛, 邦 千富, 堀田容

- 子, 山本眞由美. BMI と自我強度尺度および UPI との関連についての検討, *CAMPUS HEALTH* 2013 年; 50 巻: 513-515.
- 13) 山本眞由美. 英国大学保健管理協会(Student Health Association) 第 64 回年次集会に参加して, *CAMPUS HEALTH* 2013 年; 50 巻: 231-235.
- 14) 吉川弘明, 山本眞由美, 足立由美, 山縣然太郎. 妊娠出産の視点からの大学生の健康支援の必要性 全国大学保健管理施設の調査, *日本公衆衛生学会総会抄録集* 2013 年; 72 巻: 361.
- 15) 山本眞由美, 吉川弘明. 日本, 米国, 英国における大学保健管理, *CAMPUS HEALTH* 2013 年; 50 巻: 141-195.
- 16) 岡安伸二, 堀 聡納, 北市清幸, 諏訪哲也, 堀川幸男, 山本眞由美, 武田 純, 伊藤善規. メトホルミン塩酸塩による下痢発現のリスク要因の解析と下痢予防のための対策立案, *医薬ジャーナル* 2013 年; 49 巻: 1533-1540.
- 17) 山本眞由美. 禁煙のためのポピュレーションアプローチ, *呼吸* 2014 年; 33 巻: 248-251.
- 18) 山本眞由美. 生活習慣病・メタボリック症候群, *CAMPUS HEALTH* 2014 年; 51 巻: 27-32.
- 19) 加納亜紀, 松永美紀, 西尾彰泰, 佐渡忠洋, 磯村有希, 臼井るり子, 高井郁恵, 宮地幸雄, 邦 千富, 堀田容子, 山本眞由美. 大学教職員における感染症 4 種抗体価の検討, *CAMPUS HEALTH* 2014 年; 51 巻: 256-258.
- 20) 山本眞由美. 2013 年米国大学保健管理協会年次集会に参加して, *CAMPUS HEALTH* 2014 年; 51 巻: 233-238.
- 21) 武田 純. 生活習慣病の予防のために「食べる」を考える, *CAMPUS HEALTH* 2014 年; 51 巻: 61-64.
- 22) 西尾彰泰, 佐渡忠洋, 加納亜紀, 磯村有希, 臼井るり子, 高井郁恵, 邦 千富, 堀田容子, 松永美紀, 浅野千保, 加藤義弘, 安藤和子, 河田紀子, 齊藤さおり, 田中浩子, 塩内美香, 片岡祐美, 山本眞由美. 岐阜県下大学生の SOC(Sense of Coherence)に関する実態調査, *CAMPUS HEALTH* 2014 年; 51 巻: 527-529.
- 23) 佐渡忠洋, 西尾彰泰, 磯村有希, 加納亜紀, 臼井るり子, 松永美紀, 高井郁恵, 宮地幸雄, 邦 千富, 堀田容子, 山本眞由美. 大学生の夢見に関する研究調査-夢見頻度と質問紙との関連-, *CAMPUS HEALTH* 2014 年; 51 巻: 572-574.
- 24) 磯村有希, 西尾彰泰, 佐渡忠洋, 加納亜紀, 臼井るり子, 松永美紀, 高井郁恵, 宮地幸雄, 邦 千富, 堀田容子, 山本眞由美. 教員による障害学生支援のニーズ実態調査の報告, *CAMPUS HEALTH* 2014 年; 51 巻: 578-580.
- 25) 山本眞由美, 西尾彰泰, 吉川弘明, 中川 克, 林多喜王, 佐藤 武, 河邊博史, 森山敏樹, 鈴木眞理, 馬場久光, 鎌野 寛, 大塚盛男, 富樫 整, 立身政信. 全国大学保健管理協会(JUHA)と米国大学保健管理協会(ACHA)との交流経過報告, *CAMPUS HEALTH* 2014 年; 51 巻: 584-586.
- 26) 山本眞由美. 生涯健康の基礎を築く学校保健活動, *東海学校保健研究* 2014 年; 38 巻: 1-2.

原著 (欧文)

- 1) Iizuka K, Tomita R, Takeda J, Horikawa Y. Rat glucagon receptor mRNA is directly regulated by glucose through transactivation of the carbohydrate response element binding protein. *Biochem Biophys Res Commun*. 2012;417:1107-1112. IF 2.281
- 2) Iizuka K, Tomita R, Horikawa Y, Takeda J. Normalization of fasting hyperglycemia is beneficial for successful introduction of small amount of the GLP-1 analog liraglutide in an obese patient with type 2 diabetes mellitus. *Diabetol Int*. 2012;3:61-64.
- 3) Murase H, Suzuki E, Tajima Y, Hayashi K, Nakamura T, Noritake N, Takeda J. Associations of plasma von Willebrand factor ristocetin cofactor activity and 5-hydroxyindole acetic acid concentrations with blood flow in lower-leg arteries in Japanese type 2 diabetic patients with normal ankle-brachial index. *J Diabetes Complications*. 2012;26:113-117. IF 1.925
- 4) Iizuka K, Tomita R, Horikawa Y, Takeda J. Effectiveness of the glucagon test in estimating islet function for liraglutide treatment in a lean diabetic patient with impaired insulin response to glucose. *Diabetol Int*. 2012;3:103-108.
- 5) Okayasu S, Kitaichi K, Hori A, Suwa T, Horikawa Y, Yamamoto M, Takeda J, Itoh Y. The evaluation of risk factors associated with adverse drug reactions by metformin in type 2 diabetes mellitus. *Biol Pharm Bull*. 2012;35:933-937. IF 1.778
- 6) Iizuka K, Tomita R, Horikawa Y, Takeda J. A case of glycemic instability and insulin allergy due to anti-insulin antibodies in a patient with type 2 diabetes. *Diabetol Int*. 2012;3:233-238.
- 7) Ido-Kitamura Y, Sasaki T, Kobayashi M, Kim HJ, Lee YS, Kikuchi O, Yokota-Hashimoto H, Iizuka K, Accili D, Kitamura T. Hepatic FoxO1 integrates glucose utilization and lipid synthesis through regulation of chrebp O-glycosylation. *PLOS ONE*. 2012;7:e47231. IF 3.534
- 8) Hamaguchi M, Takeda N, Kojima T, Ohbora A, Kato T, Satui H, Fukui M, Nagata C, Takeda J. Identification of individuals with non-alcoholic fatty liver disease by the diagnostic criteria for the metabolic syndrome. *World J Gastroenterol*. 2012;18:1508-1516. IF 2.433
- 9) Ulzii-Orshikh L, Hirai I, Niki M, Nakata A, Yoshinaga A, Yamamoto A, Yamamoto M, Toyoshima H, Kawakami F, Matsuura N, Yamamoto Y. Fecal carriage of CTX-M β -lactamase-producing Enterobacteriaceae in nursing homes in the Kinki region of Japan. *Infection and Drug Resistance*. 2013;6:67-70.

- 10) Yoshida S, Yoshida M, Yamamoto M, Takeda J. Optical screening of diabetes mellitus using non-invasive Fourier-transform infrared spectroscopy technique for human lip. *J Pharmaceut Biomed.* 2013;76:169-176. IF 2.829
- 11) Kawamoto R, Nazir A, Kameyama A, Ichiomiya T, Yamamoto K, Tamura S, Yamamoto M, Hayamizu S, Kinoshita Y. Hidden Markov model for analyzing time-series health checkup data. *Stud Health Technol Inform.* 2013;192:491-495.
- 12) Mune T, Suwa T, Morita H, Isomura Y, Takada N, Yamamoto Y, Hayashi M, Yamakita N, Sasaki A, Takeda N, Takeda J, White PC, Kaku K. Longer HSD11B2 CA-repeat in impaired glucose tolerance and type 2 diabetes. *Endocr J.* 2013;60:671-678. IF 2.019
- 13) Mune T, Morita H, Takada N, Yamamoto Y, Isomura Y, Suwa T, Takeda J, White PC, Kaku K. HSD11B2 CA-repeat and sodium balance. *Hypertens Res.* 2013;36:614-619. IF 2.936
- 14) Iizuka K, Wu W, Horikawa Y, Saito M, Takeda J. Feedback looping between ChREBP and PPAR α in the regulation of lipid metabolism in brown adipose tissues. *Endocr J.* 2013;60:1145-1153. IF 2.019
- 15) Iizuka K, Wu W, Horikawa Y, Takeda J. Role of glucose-6-phosphate and xylulose-5-phosphate in the regulation of glucose-stimulated gene expression in the pancreatic β cell line, INS-1E. *Endocr J* 2013;60:473-482. IF 2.019
- 16) Nishimura H, Iizuka K, Takeda J. Protamine-containing insulin but not analog insulin and duration of insulin use are risk factors for the production of insulin autoantibodies in insulin-treated patients with diabetes mellitus. *Endocr J.* 2014;61:635-640. IF 2.019
- 17) Hattori T, Iizuka K, Horikawa Y, Takeda J. LHR-1 heterozygous knockout mice are prone to mild obesity. *Endocr J.* 2014;61:471-480. IF 2.019
- 18) Horikawa Y, Enya M, Fushimi N, Takeda J. Screening of diabetes of youth for hepatocyte nuclear factor 1 mutations: clinical phenotype of HNF1 β -related maturity-onset diabetes of the young and HNF1 α -related maturity-onset diabetes of the young in Japanese. *Diabetic Med.* 2014;31:721-727. IF 3.064
- 19) Iizuka K, Niwa H, Takahashi Y, Takeda J. Liraglutide normalised glucose tolerance and the response of insulin to glucose in a non-obese patient with newly diagnosed type-2 diabetes mellitus. *Diabetology Int.* 2014;5:254-259.
- 20) Daido H, Horikawa Y, Takeda J. The effects of pitavastatin on glucose metabolism in patients with type 2 diabetes with hypercholesterolemia. *Diabetes Res Clin Pr.* 2014;106:531-537. IF 2.536
- 21) Enya M, Horikawa Y, Iizuka K, Takeda J. Association of genetic variants of the incretin-related genes with quantitative traits and occurrence of type 2 diabetes in Japanese. *Molecular Genet Metab Rep.* 2014;1:350-361.
- 22) Oba S, Suzuki E, Yamamoto M, Horikawa Y, Nagata C, Takeda J. Active and passive exposure to tobacco smoke in relation to insulin sensitivity and pancreatic β -cell function in Japanese subjects. *Diabetes and Metab.* 2014;41:160-167. IF 2.845

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：武田 純；厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業：MODY1-6 の病態調査と鑑別的診断基準の策定；平成 22-24 年度；40,300 千円(18,200：13,000：9,100 千円)
- 2) 研究代表者：武田 純；科学研究費補助金基盤研究(B)：体脂肪分解と肝糖取り込みを促進させる糖尿病治療の開発；平成 22-24 年度；18,330 千円(7,020：6,110：5,200 千円)
- 3) 研究代表者：田中生雅，研究分担者：山本眞由美，佐渡忠洋，塩入俊樹；科学研究費補助金基盤研究(C)：大学生のセルフメディケーション及び補完代替医療の利用実態とコストパフォーマンス；平成 22-24 年度；5,080 千円(2,540：700：1,840 千円)
- 4) 研究代表者：堀川幸男；独立行政法人科学技術振興機構：日本人とデンマーク人のタンパクコード領域集中型シーケンシング法による若年発症家族性糖尿病(MODY)の新規原因因子固定；平成 22-25 年度；14,905 千円(6,600：4,950：2,860：495 千円)
- 5) 研究代表者：飯塚勝美；科学研究費補助金基盤研究(C)：グルコースによる時計遺伝子発現調節機構に注目した代謝異常症候群予防法の開発；平成 22-25 年度；4,160 千円(1,170：1,040：1,040：910 千円)
- 6) 研究代表者：山本眞由美；岐阜大学活性化経費(教育)：キャンパスライフの健康科学 ー生涯健康のためにー(全学共通教育 健康科学・スポーツ演習)；平成 24 年度；500 千円
- 7) 研究代表者：山本眞由美，研究分担者：田中生雅；科学研究費補助金基盤研究(C)：大学生の生涯健康指導必要性の科学的根拠を示す～肥満と将来の糖尿病発症の関係から～；平成 21-25 年度；4,520 千円(1,430：1,170：520：900：500 千円)
- 8) 研究代表者：山縣然太郎(山梨大学)，研究分担者：山本眞由美；厚生労働科学研究費補助金成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業：母子保健事業の効果的実施のための妊婦健診，乳幼児健診データの

- 利活用に関する研究；平成 24 年度；17,000 千円
- 9) 研究代表者：飯塚勝美；リリー・インクレチン基礎研究助成金：高血糖状態における GLP-1 receptor および GIP receptor 発現低下の分子メカニズムの解明；平成 24 年度；1,000 千円
 - 10) 研究代表者：堀川幸男；ノボ ノルディスク ファーマ インスリン研究助成金：日本人家系に適した連鎖解析法による若年発症糖尿病遺伝子の同定と機能解析；平成 24 年度；1,000 千円
 - 11) 研究代表者：飯塚勝美；研究科長裁量経費研究費重点配分：食事の質とタイミングに注目した肥満合併 2 型糖尿病治療法の開発グルコース感受性転写因子 ChREBP の機能に注目した解析；平成 24 年度；1,000 千円
 - 12) 研究代表者：武田 純；MSD 研究助成金：日本人の新 MODY 遺伝子の探索；平成 24 年度；3,000 千円
 - 13) 研究代表者：飯塚勝美；花王健康科学研究会第 10 回研究助成：食事の質とタイミングに注目した 2 型糖尿病治療法の開発：グルコース感受性転写遺伝子 ChREBP の機能に注目した解析；平成 24 年度；1,000 千円
 - 14) 研究代表者：飯塚勝美；the 9th IDF-WPR Congress & 4th AASD Scientific Meeting Travel Support:Glucagon Receptor and Incretin Receptors mRNA Expression are Inversely Regulated by Glucose Through ChREBP Activation；平成 24 年度；50 千円
 - 15) 研究代表者：武田 純；科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究)：膵細胞の内分泌細胞への文化能変換因子の網羅的探索；平成 25-26 年度；3,770 千円(2,210：1,560 千円)
 - 16) 研究代表者：堀川幸男；文部科学省科学研究費基盤研究(B)：ゲノムコピー数低下領域に特化した日本人若年糖尿病の発症機構の解明；平成 25-27 年度；18,590 千円(9,620：5,720：3,250 千円)
 - 17) 研究代表者：塩谷真由美；日本糖尿病協会若手研究者助成：ゲノムコピー数変異領域に特化した、メチル化異常探索による新規 MODY 遺伝子の同定；平成 25 年度；1,000 千円
 - 18) 研究代表者：山本真由美；科学研究費補助金基盤研究(C)：大学生の生涯健康指導必要性の科学的根拠を示す-肥満と将来の糖尿病発症の関係から-；平成 21-25 年度；4,790 千円(1,430：1,170：520：1,170：500 千円)
 - 19) 研究代表者：福重八恵(阪南大学)，研究分担者：浅田孝幸(立命館大学)，山本真由美，前田 利(阪南大学)，金ジェウク(広島大学)；科学研究費補助金基盤研究(C)：医療におけるサービス品質の測定と品質マネジメントへのフィードバックモデルの研究；平成 25-27 年度；3,700 千円(1,100：1,600：1,000 千円)
 - 20) 研究代表者：山本真由美；岐阜大学活性化経費(教育)：自己健康管理能力を養成する実践教育-国際化に対応できる能力育成をめざして-；平成 25 年度；500 千円
 - 21) 研究代表者：山本真由美；厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業)：若い男女の結婚・妊娠時期計画支援に関するプロモーションプログラムの開発に関する研究；平成 25-26 年度；平成 25 年度 6,200 千円
 - 22) 研究代表者：武田 純；科学研究費補助金基盤研究(B)：MODY における膵ベータ細胞の代償性インスリン分泌の惹起経路の解明；平成 26-28 年度；16,250 千円(6,370：5,460：4,420 千円)
 - 23) 研究代表者：飯塚勝美；科学研究費補助金基盤研究(C)：小腸フルクトース代謝に注目した新規代謝症候群治療法の開発；平成 26-28 年度；4,940 千円(1,820：1,560：1,560 千円)
 - 24) 研究代表者：堀川幸男；アストラゼネカ萌芽研究グラント：2 型糖尿病と認知症の分子リンク解明から治療への展開；平成 26 年度；500 千円
 - 25) 研究代表者：堀川幸男；MSD 研究助成金：地域連携パスの電子化による糖尿病医療連携の推進；平成 26 年度；500 千円

2) 受託研究

- 1) 武田 純：ソマバート特定使用成績調査-長期使用に関する調査-(プロトコール No.A6291023；平成 20-25 年度；128,708 円：ファイザー株式会社
- 2) 加納克徳：アクテムラ特定使用成績調査(全例調査)関節リウマチ-多関節に活動性を有する若年性突発性関節炎-；平成 20-25 年度；94,500 円：中外製薬株式会社
- 3) 加納克徳：アクテムラ特定使用成績調査(長期フォローアップ調査) 関節リウマチ；平成 20-25 年度；31,500 円：中外製薬株式会社
- 4) 武田 純：ノルディトロピン特定使用成績調査；平成 22-26 年度；189 千円：ノボ ノルディスク ファーマ株式会社
- 5) 武田 純：アピドラ注 長期使用に関する特定使用成績調査；平成 22-25 年度；315 千円：サノフ

イ株式会社

- 6) 武田 純：アピドラ注 長期使用成績調査；平成 22-24 年度；210 千円；サノフィ株式会社
- 7) 武田 純：2 型糖尿病患者を対象とした OPC-262 の併用療法長期投与試験；平成 22-24 年度；1,669,500 円；大塚製薬株式会社
- 8) 武田 純：リピトール錠 特定使用成績調査；平成 22-24 年度；630 千円；ファイザー株式会社
- 9) 武田 純：プログラフィカプセル ループス腎炎長期使用に関する特定使用成績調査；平成 20-24 年度；283,500 円；アステラス製薬株式会社
- 10) 諏訪哲也：エクア錠 50mg 特定使用成績調査；平成 23-25 年度；315 千円；ノバルティスファーマ株式会社
- 11) 諏訪哲也：ゴナトロピン 5000 使用成績調査；平成 23-27 年度；21 千円；あすか製薬株式会社
- 12) 武田 純：2 型糖尿病の治療における、SYR-472(100mg)の第 3 相単独長期投与又は併用長期投与試験；平成 23-25 年度；1,234,800 円；武田薬品工業株式会社
- 13) 武田 純：ネシーナ錠 特定使用調査「2 型糖尿病ビッグアナイド系薬剤使用」；平成 24-26 年度；157,500 円；武田薬品工業株式会社
- 14) 諏訪哲也：ソマバート特定使用成績調査-長期使用に関する調査-；平成 24-25 年度；252 千円；ファイザー株式会社
- 15) 武田 純：アクトス有害事象詳細報告；平成 24-25 年；21 千円；武田薬品工業株式会社
- 16) 諏訪哲也：グロウジェクトの成人成長ホルモン分泌不全(重症に限る)における使用成績調査；平成 24-27 年度；105 千円；JCR ファーマ株式会社
- 17) 武田 純：ピクトーザ副作用・感染症詳細研究；平成 25 年度；21 千円；ノボ ノルディスク ファーマ株式会社
- 18) 諏訪哲也：エクア特定使用成績調査(2 型糖尿病)；平成 25-28 年度；1,890 千円；ノバルティスファーマ株式会社
- 19) 諏訪哲也：ソマチュリン皮下 60mg、90mg、100mg 長期使用に関する特定使用成績調査；平成 25-30 年度；283 千円；帝人ファーマ株式会社
- 20) 諏訪哲也：ソマバート特定使用成績調査-長期使用に関する調査-(プロトコール No.A6291023)；平成 25-27 年度；126 千円；ファイザー株式会社
- 21) 廣田卓男：タイロゲン筋注用 0.9mg 使用成績調査(全例調査)；平成 25-29 年度；210 千円；ジェンザイム・ジャパン株式会社
- 22) 武田 純：テネリア錠 20mg 特定使用成績調査；平成 25-31 年度；210 千円；田辺三菱製薬株式会社
- 23) 武田 純：プログラフィカプセル安全管理情報詳細調査；平成 25-26 年度；21 千円；アステラス製薬株式会社
- 24) 武田 純：テネリア錠 20mg 特定使用成績調査；平成 25-30 年度；1,575 千円；田辺三菱製薬株式会社
- 25) 武田 純：プログラフィカプセル安全管理情報詳細調査；平成 25-26 年度；21 千円；アステラス製薬株式会社
- 26) 武田 純：グルファスト錠 特定使用成績調査「血糖降下薬併用に関する特定使用成績調査」；平成 26-28 年度；259 千円；武田薬品工業株式会社
- 27) 武田 純：スーグラ錠 高齢者を対象とした特定使用成績調査(全例調査) STELLA-ELDER(プロトコール No.SGL001)；平成 26-27 年度；129 千円；アステラス製薬株式会社
- 28) 武田 純：プログラフィカプセル 0.5mg、0.1mg 多発性筋炎・皮膚筋炎に合併する間質性肺炎患者に対する長期特定使用成績調査(プロトコール No.PRGI01)；平成 26-30 年度；64 千円；アステラス製薬株式会社
- 29) 諏訪哲也：ルセフィ錠 2.5mg、5mg 高齢者における特定使用成績調査(全例調査)；平成 26-29 年度；64 千円；大正富山医薬品株式会社
- 30) 武田 純：スーグラ錠 長期特定使用成績調査 STELLA-LONG TERM(プロトコール No.SGL002)；平成 26-29 年度；97 千円；アステラス製薬株式会社
- 31) 諏訪哲也：リキスミア皮下注 300µg 特定使用成績調査；平成 26-30 年度；1,458 千円；サノフィ株式会社
- 32) 飯塚勝美：副作用詳細報告；平成 26 年度；21 千円；ノボ ノルディスク ファーマ株式会社
- 33) 武田 純：スーグラ錠 安全管理情報詳細調査；平成 26-27 年度；21 千円；アステラス製薬株式会社

3) 共同研究

- 1) 武田 純：(複)血糖測定システム；平成 25-26 年度；909 千円：三和化学工業株式会社

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

武田 純：

- 1) 日本内科学会理事，評議員(～現在)
- 2) 日本糖尿病学会評議員(～現在)
- 3) 日本糖尿病合併症学会評議員(～現在)
- 4) 日本糖尿病・妊娠学会理事，評議員(～現在)
- 5) 日本病態栄養学会評議員(～現在)
- 6) 日本内分泌学会評議員(～現在)
- 7) 日本老年病学会評議員(～現在)
- 8) 日本糖尿病眼学会理事(～現在)
- 9) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)
- 10) 日本糖尿病情報学会副理事長，評議員(～現在)
- 11) 日本糖尿病協会理事(～現在)
- 12) 日本糖尿病療養指導士認定機構理事(～現在)

堀川幸男：

- 1) 日本病態栄養学会評議員(～現在)
- 2) 日本糖尿病学会評議員(～現在)
- 3) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)
- 4) 日本内分泌学会評議員(～現在)
- 5) 日本内科学会東海地方会評議員(～現在)
- 6) 日本糖尿病情報学会評議員(～現在)

山本眞由美：

- 1) 日本内科学会東海地方会評議員(～現在)
- 2) 日本糖尿病学会評議員(～現在)
- 3) 日本内分泌学会代議員(～平成 24 年 3 月)
- 4) 日本内分泌学会評議員(平成 24 年 4 月～現在)
- 5) 日本内分泌学会女性医師専門医育成・再教育委員会委員(～平成 26 年 12 月)
- 6) 日本臨床栄養学会評議員(～現在)
- 7) 日本病態栄養学会学術評議員(～現在)
- 8) 日本油化学会代議員(～現在)
- 9) 日本油化学会東海支部常任幹事(～現在)
- 10) 東海学校保健学会理事(～現在)

諏訪哲也：

- 1) 日本内分泌学会代議員(～現在)
- 2) 日本内科学会東海地方会評議員(～現在)

飯塚勝美：

- 1) 日本内分泌学会評議員(～現在)
- 2) 日本病態栄養学会評議員(～現在)
- 3) 日本内科学会東海地方会評議員(～現在)

川地慎一：

- 1) 日本内分泌学会評議員(～現在)

- 2) 日本内科学会東海地方会評議員(～現在)

塩谷真由美：

- 1) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)

2) 学会開催

武田 純：

- 1) 第1回日本糖尿病協会療養指導学術集会(平成25年7月, 京都)
- 2) 第29回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会(平成25年11月, 岐阜)
- 3) 第14回日本糖尿病情報学会年次学術集会(平成26年8月, 岐阜)

山本眞由美：

- 1) 第51回全国大学保健管理研究集会(平成25年11月, 岐阜)
- 2) 第57回東海学校保健学会(平成26年9月, 岐阜)

3) 学術雑誌

武田 純：

- 1) 日本人類遺伝学会；Journal of Human Genetics 編集委員(～現在)
- 2) 日本糖尿病協会；DM Ensemble 編集委員長(～現在)
- 3) Diabetes Frontier；編集委員(～現在)

山本眞由美：

- 1) 学校保健研究；査読委員(～現在)
- 2) CAMPUS HEALTH；査読委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

武田 純：

- 1) 第46回糖尿病学の進歩(平成24年3月, 京都, 「糖尿病診療と療養指導に必要な知識」2型糖尿病はなぜ増えているか、「糖尿病診療と療養指導に必要な知識」カンパセーションマップの活用 座長)
- 2) 第85回日本内分泌学会学術総会(平成24年4月, 名古屋, 糖尿病・低血糖2・ランチョンセミナー 座長)
- 3) 第85回日本内分泌学会学術総会(平成24年4月, 糖尿病・低血糖2・ランチョンセミナー 座長)
- 4) 第55回日本糖尿病学会年次学術集会(平成24年5月, シンポジウム9「CDEJの展開と深化に向けて Certified Diabetes Educators of Japan(CDEJ):Working Toward Their Expansino and Intensification」座長)
- 5) 第55回日本糖尿病学会年次学術集会(平成24年5月, シンポジウム9「CDEJの展開と深化に向けて 糖尿病地域医療連携の構築に向けたCDEJ活動のあり方」演者)
- 6) 第9回日本フットケア学会(平成24年9月, 岐阜, 岐阜秋季セミナー 座長)
- 7) 第86回日本糖尿病学会中部地方会(平成24年10月, 名古屋, 専門医更新指定講演 座長)
- 8) 第18回日本糖尿病眼学会総会(平成24年11月, モーニングセミナー3「2型糖尿病の経口血糖降下薬治療における最近の話題」座長)
- 9) 第28回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会(平成24年11月, 東京, シンポジウムA「母児の長期予後を知ろう」, ランチョンセミナーD「糖尿病と癌」座長)
- 10) 第16回日本病態栄養学会(平成25年1月, 京都, 「糖尿病⑨」座長)
- 11) 第47回糖尿病学の進歩(平成25年2月, 四日市, 招待講演「家族性の若年糖尿病の見つけ方」演者, シンポジウムS1「療養指導外来に期待する!!」座長)
- 12) 第110回日本内科学会総会(平成25年4月, 東京, 「内分泌・代謝⑩」座長)
- 13) 第56回日本糖尿病学会年次学術集会(平成25年5月, 熊本, 「CDEのネットワーク構築に向けて」演者, シンポジウム18「糖尿病とエピジェネティクス」座長)
- 14) 第1回日本糖尿病協会療養指導学術集会(平成25年7月, 京都, 会長講演「地域における糖尿病医療の課題と展望～岐阜県の現状と取り組み」演者)
- 15) 第13回日本糖尿病情報学会(平成25年8月, 徳島, 「透析予防の実現をめざした多職種共同連携」座長)

- 16) 第 28 回日本糖尿病合併症学会(平成 25 年 9 月, 旭川, 「透析予防指導 2」座長)
- 17) 第 17 回日本病態栄養学会年次学術集会(平成 26 年 1 月, 大阪, 「慢性疾患の療養指導Ⅱ・糖尿病」座長)
- 18) 第 111 回日本内科学会講演会(平成 26 年 4 月, 東京, ポスターセッション「内分泌・代謝⑨」座長)
- 19) 第 57 回日本糖尿病学会年次学術集会(平成 26 年 5 月, 東京, 「ランチョンセミナー 10」・「1 ポイント異常の妊娠糖尿病をどこまで管理するか?」・「教育講演 8」座長)
- 20) 第 2 回日本糖尿病協会療養指導医学術集会(平成 26 年 7 月, 京都, モーニングセミナー「糖尿病治療ケアにおける地域連携と日糖協活動」座長)
- 21) 第 14 回日本糖尿病情報学会年次学術集会(平成 26 年 8 月, 岐阜, 「地域連携と職域連携を支援する医療情報システムのあり方」・「超高齢社会を支援する医療情報連携」座長)
- 22) 第 29 回糖尿病合併症学会(平成 26 年 10 月, 東京, 「ワークショップ 26 疫学・EBM2」座長)
- 23) 第 30 回日本糖尿病・妊娠学会(平成 26 年 11 月, 長崎, 一般演題「IV18~23」座長)

堀川幸男 :

- 1) 第 85 回日本糖尿病学会中部地方会(平成 24 年 4 月, 三重, 座長)
- 2) 第 85 回日本内分泌学会学術総会(平成 24 年 4 月, 名古屋, 座長)
- 3) Danish Life Science Seminar(2012.07, Tokyo, Strategy to find novel T2DM gene in the post GWAS era; Invited speaker)
- 4) 第 86 回日本糖尿病学会中部地方会(平成 24 年 10 月, 名古屋, 日本糖尿病学会専門医更新指定講演「糖尿病遺伝素因の解剖」演者)
- 5) 第 57 回日本人類遺伝学会(平成 24 年 10 月, 東京, シンポジウム 糖尿病におけるゲノム医学「若年発症家族性糖尿病(MODY)の新規原因遺伝子同定の現状」演者)
- 6) 日本内科学会第 16 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 24 年 10 月, 名古屋, 「糖尿病遺伝子素因の解明と臨床的意義」演者)
- 7) 第 47 回糖尿病学の進歩(平成 25 年 2 月, 四日市, 招待講演「2 型糖尿病の遺伝素因解明の現状」演者)
- 8) Beta Cell Workshop (2013.04, Kyoto, Genetic dissection of early-onset non-type 1 diabetes in Japanese; invited speaker)
- 9) 第 56 回日本糖尿病学会学術集会(平成 25 年 5 月, 熊本, シンポジウム「岐阜地域統一の糖尿病連携パスの作成と運用」演者)
- 10) 第 56 回日本糖尿病学会学術集会(平成 25 年 5 月, 熊本, 「その他の糖尿病 4」座長)
- 11) 第 1 回日本糖尿病協会療養指導学術集会(平成 25 年 7 月, 京都, 「療養指導の地域連携」座長)
- 12) 第 1 回日本糖尿病協会療養指導学術集会(平成 25 年 7 月, 京都, 「高齢者の糖尿病 インスリン導入」ファシリテーター)
- 13) 第 87 回日本糖尿病学会中部地方会(平成 25 年 10 月, 金沢, 座長)
- 14) 第 29 回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会(平成 25 年 11 月, 岐阜, シンポジウム「若年糖尿病 MODY における遺伝的背景と子宮内環境」演者)
- 15) 第 23 回臨床内分泌代謝 Update (平成 26 年 1 月, 名古屋, 「糖尿病 MODY」座長)
- 16) 第 57 回日本糖尿病学会年次学術集会(平成 26 年 5 月, 大阪, 「糖尿病療養指導(チーム治療 3)」座長)
- 17) 第 2 回日本糖尿病協会療養指導学術集会(平成 26 年 7 月, 京都, 「歯科医科連携」ファシリテーター)
- 18) 第 59 回日本人類遺伝学会(平成 26 年 10 月, 東京, シンポジウム「日本人若年糖尿病(MODY)の遺伝素因の解明」演者)
- 19) 第 88 回日本糖尿病学会中部地方会(平成 26 年 10 月, 名古屋, 座長)

山本眞由美 :

- 1) 第 14 回フィジカルヘルス・フォーラム(PHF)(平成 24 年 3 月, 仙台, 「岐阜大学の敷地内全面禁煙の経験—7 年を経過して—」シンポジスト)
- 2) 第 11 回日本内分泌学会東海支部学術集会(平成 24 年 3 月, 名古屋, 女性会員が企画するセミナー「JES We Can Tokai 企画セッション(東海支部委員からの報告: JES We Can の経緯と活動報告)」追加発言)
- 3) American College Health Association 2012 ANNUAL MEETING(2012.05, Chicago USA, Student Health Care on Campuses in Japan: The Approach to Care for the Japanese College Student; Special Session)

- 4) Student health association 64th Annual Conference(2012.07, York, England, Introduction of Japan University Health Association (JUHA); Invited lecture)
- 5) 第 50 回全国大学保健管理研究集会(平成 24 年 10 月, 神戸, 国際シンポジウム「日本, 米国, 英国における大学保健管理」司会)
- 6) 第 12 回日本内分泌学会東海支部学術集会(平成 25 年 2 月, 静岡, 女性会員が企画するセミナー「JES We Can Tokai 企画セッション」座長)
- 7) 第 12 回日本内分泌学会東海支部学術集会(平成 25 年 2 月, 静岡, 「大学生(日本人と留学生)における糖尿病高リスク者抽出方法の検討-インスリン抵抗性と体重変化-」座長)
- 8) 第 15 回フィジカルヘルス・フォーラム(PHF)(平成 25 年 3 月, 岡山, 「健康危機管理: 大学への期待」座長)
- 9) 第 56 回日本糖尿病学会年次学術集会(平成 25 年 5 月, 熊本, 「薬物療法(ビッグアナイド薬)」座長)
- 10) 第 51 回全国大学保健管理研究集会(平成 25 年 11 月, 岐阜, 「海外の大学保健管理事情」座長)
- 11) 第 57 回日本糖尿病学会年次学術集会(平成 26 年 5 月, 大阪, 「薬物療法(GLP-1 受容体作動薬 1)」座長)
- 12) 第 1 回日本糖尿病協会療養指導学術集会(平成 25 年 7 月, 京都, 「療養指導の院内連携」座長, 「高齢者の糖尿病・栄養」ファシリテーター)
- 13) 第 2 回日本糖尿病協会療養指導学術集会(平成 26 年 7 月, 京都, 「運動療法」座長)
- 14) 第 2 回日本糖尿病協会療養指導学術集会(平成 26 年 7 月, 京都, 「SMBG/高齢者の糖尿病 服薬指導」ファシリテーター)
- 15) 第 52 回全国大学保健管理研究集会(平成 26 年 9 月, 東京, 「『国境なき医師団』海外医療援助活動に参加して」座長)

諏訪哲也:

- 1) 第 221 回日本内科学会東海地方会(平成 25 年 10 月, 岐阜, 「内分泌・代謝 3」座長)

飯塚勝美:

- 1) 第 221 回日本内科学会東海地方会(平成 25 年 10 月, 岐阜, 「内分泌・代謝 2」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 山本真由美: 優秀発表表彰: 「Promotion for Japanese University Students to Prioritize Career and Family Equally」: The 29th International Congress of the Medical Women's International Association, Seoul, Korea(平成 25 年度)

9. 社会活動

武田 純:

- 1) 日本臨床内科医会岐阜県会長(～現在)
- 2) 日本糖尿病協会岐阜県支部長(～現在)
- 3) 岐阜県糖尿病対策推進評議会副会長(～現在)
- 4) 日本糖尿病協会療養指導委員会委員長(～平成 24 年 3 月)
- 5) 岐阜県医師会理事(～現在)
- 6) 岐阜大学医師会副会長(～現在)
- 7) 日本学術振興会科学研究費委員会委員(～現在)
- 8) 岐阜県 CDE ネットワーク会長(～現在)

堀川幸男:

- 1) 岐阜地域医療連携研究会幹事(～現在)
- 2) 岐阜地域医師会連携パス運営委員会委員(～現在)
- 3) 岐阜県医師会糖尿病対策委員会委員(～現在)
- 4) 岐阜県医師会糖尿病地域連携パスイニシアティブグループ委員長(～現在)
- 5) 岐阜県医師会医療保険・地域連携委員会委員(～現在)
- 6) 岐阜県 CDE ネットワーク役員(～現在)

山本眞由美：

- 1) 岐阜県医師会代議員(平成 24 年度～現在)
- 2) 岐阜県医師会糖尿病対策委員会委員長(～現在)
- 3) 岐阜県医師会男女共同参画委員会委員(～現在)
- 4) 岐阜県糖尿病対策推進協議会幹事(～平成 24 年度)
- 5) 岐阜県糖尿病対策推進協議会 世界糖尿病デー記念事業「糖尿病県民セミナー」ワーキンググループ委員(～現在)
- 6) 岐阜医学研究協議会 専務理事(～現在)
- 7) 日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員(～現在)
- 8) 国立大学法人保健管理施設協議会国際交流特別委員会委員長(～現在)
- 9) 国立大学法人保健管理施設協議会禁煙対策の推進に関する特別委員会(～現在)
- 10) 国立大学法人保健管理施設協議会食と心身の健康に関する調査研究班委員(～現在)
- 11) 学校法人誠広学園評議員(平成 24 年度～現在)
- 12) 岐阜県食育推進会議委員(～現在)
- 13) 岐阜県大学保健管理研究会会長(～現在)
- 14) 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(平成 26 年度～現在)
- 15) 岐阜県国民健康保険団体連合会保健事業支援・評価委員会委員(平成 26 年度～現在)
- 16) 学校法人誠広学園外部理事(～現在)
- 17) 全国大学保健管理協会評議員(～平成 24 年 11 月), 理事(～現在)
- 18) 全国大学保健管理協会理事東海・北陸地方部会幹事(～現在)
- 19) 国立大学法人保健管理施設協議会(国際交流特別委員会委員長)(～現在)
- 20) 国立大学法人保健管理施設協議会(禁煙対策の推進に関する特別委員会委員)(～平成 25 年)
- 21) 国立大学法人保健管理施設協議会(食と心身の健康に関する調査研究班委員)(～現在)
- 22) 全国大学保健管理協会国際連携委員会委員長(～現在)
- 23) 第 50 回全国大学保健管理研究会運営委員会委員(平成 24 年)
- 24) 第 51 回全国大学保健管理研究会運営委員会副委員長(平成 25 年)
- 25) 第 52 回全国大学保健管理研究会運営委員会委員(平成 26 年 1 月～現在)
- 26) 第 57 回東海学校保健学会総会会長(平成 26 年)

10. 報告書

- 1) 中野 功, 山本眞由美: 大学における感染症予防の専門性の向上と連携の促進: 全国大学保健管理協会 東海・北陸地方部会報告書(平成 23 年度): 48-50(平成 24 年)
- 2) 山本眞由美: 大学における感染症予防の取り組みの現状と問題点: 全国大学保健管理協会 東海・北陸地方部会報告書(平成 23 年度): 51-55(平成 24 年)
- 3) 山本眞由美: 女性医師専門医育成・再教育(Jes We Can)便り: 日本内分泌学会雑誌 Vol.88: 21-22(平成 24 年 2 月)
- 4) 飯塚勝美: 肥満症合併 2 型糖尿病におけるコレステラミン+メトホルミン併用療法の有用性の検討: 研究科長裁量経費研究費重点配分(平成 24 年 3 月)
- 5) 飯塚勝美: グルコース活性化転写因子 ChREBP の機能制御に基づく高尿酸血症治療法の開発: 平成 22 年度研究助成に対する概要報告書(24)公益財団法人 痛風財団(平成 24 年 3 月)
- 6) 武田 純: MODY1-6 の病態調査と識別的診断基準の策定: 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 総括研究報告書(平成 24 年 4 月)
- 7) 武田 純: 体脂肪分解と肝糖取り込みを促進させる糖尿病治療の開発: 平成 23 年度科学研究費補助金基盤研究(B) 実績報告書(平成 24 年 4 月)
- 8) 飯塚勝美: グルコースによる時計遺伝子発現調節機構に注目した代謝異常症候群予防法の開発: 平成 23 年度科学研究費補助金基盤研究(C) 実績報告書(平成 24 年 4 月)
- 9) 山本眞由美: 大学生の生涯健康指導必要性の科学的根拠を示す～肥満と将来の糖尿病発症の関係から～: 平成 23 年度科学研究費補助金基盤研究(C) 実績報告書(平成 24 年 4 月)
- 10) 堀川幸男: 日本人とデンマーク人のタンパクコード領域集中型シークエンス法による若年発症家族性糖尿病(MODY)の新規原因因子固定: 平成 23 年度独立行政法人科学技術振興機構実績報告書(平成 24 年 4 月)
- 11) 山本眞由美: 平成 23 年度第 59 期卒業生を祝う会: 岐阜大学医学部記念会館だより(発行; 岐阜医学研究協議会): 30-31(平成 24 年 5 月)

- 12) 草田典子, 脇 昌子, 山本眞由美 : 女性医師専門医育成・再教育(Jes We Can)便り : 内分泌学会雑誌 JES News Vol.88 : 19-20(平成 24 年 6 月)
- 13) 山本眞由美 : 岐阜大学の敷地内全面禁煙の経験-7 年を経過して- : 第 14 回フィジカルヘルス・フォーラム報告書 : 37-38(平成 25 年 1 月)
- 14) 吉川弘明, 山本眞由美, 足立由美, 笹川寿之, 埴 清美, 北村邦夫 : 大学における女子学生の健康に関する実態と対策に関する研究:母子保健事業の効果的実施のための妊婦健診, 乳幼児健診データの利活用に関する研究 : 平成 24 年度総括・分担研究報告書 : 155-176(平成 25 年 3 月)
- 15) 堀川幸男 : 日本人とデンマーク人のタンパクコード領域集中型シーケンス法による若年発症家族性糖尿病(MODY)の新規原因因子固定:平成 24 年度独立行政法人科学技術振興機構実績報告書(平成 25 年 4 月)
- 16) 飯塚勝美 : 食事の質とタイミングに注目した肥満合併 2 型糖尿病治療法の開発グルコース感受性転写因子 ChREBP の機能に注目した解析 : 研究科長裁量経費研究費重点配分(平成 25 年 3 月)
- 17) 飯塚勝美 : グルコースによる時計遺伝子発現調節機構に注目した代謝異常症候群予防法の開発 : 平成 23 年度科学研究費補助金基盤研究(C)実績報告書(平成 25 年 4 月)
- 18) 山本眞由美 : A Note From Immediate Past President Jenny Haubenreiser : COLLEGE HEALTH IN Action Vol.53, NO.1 : 8(平成 25 年 9 月) (English)
- 19) 山本眞由美 : 優秀賞(Award for Excellence)を授与されて : 日本女医会誌 復刊第 216 号 : 6-7(平成 25 年 10 月)
- 20) 山本眞由美 : 議事 : 報告事例(2)各種委員会・研究班報告・質疑 : 国立大学法人保健管理施設協議会 総会 議事概要 : 27-28(平成 25 年 11 月)
- 21) 堀川幸男 : ノボ ノルディスク ファーマ インスリン研究助成金 : 日本人家系に適した連鎖解析法による若年発症糖尿病遺伝子の同定と機能解析(平成 25 年 11 月)
- 22) 飯塚勝美 : 花王健康科学研究会第 10 回研究助成 : 食事の質とタイミングに注目した 2 型糖尿病治療法の開発 : グルコース感受性転写遺伝子 ChREBP の機能に注目した解析(平成 25 年 11 月)
- 23) 横田千津子, 脇 昌子, 山本眞由美 : 女性医師専門医育成・再教育委員会・クロストーク WG より報告 : 日本内分泌学会雑誌 Vol.89 : 14-15(平成 25 年 12 月)
- 24) 山本眞由美 : 満足度ベスト授業 スポーツ・健康科学科目 : 学生による授業満足度ベスト授業『教員による授業の工夫集』 : 66-67(平成 26 年 1 月)
- 25) 山本眞由美 : 肥満に関する疾患とその管理 : 全国大学保健管理協会 東海・北陸地方部会報告書 : 8-10(平成 26 年)
- 26) 堀川幸男 : 日本人とデンマーク人のタンパクコード領域集中型シーケンス法による若年発症家族性糖尿病(MODY)の新規原因因子固定:平成 25 年度独立行政法人科学技術振興機構実績報告書(平成 26 年 4 月)

11. 報道

- 1) 諏訪哲也 : 「研究室から 大学はいま」 ホルモン過剰分泌で高血圧 : 岐阜新聞(2012 年 1 月 3 日)
- 2) 稲垣暢也, 伊藤 浩, 武田 純, 平野 勉, 塩谷真由美, 中村一文, 山本剛史 : 糖尿病・循環器疾患を合併している患者の全身管理に有用な薬剤はなにか~チアグリジン誘導体・ビッグアナイド薬・インクレチン関連~ : Diabetes Strategy 2012 年 ; vol.2 no.1.
- 3) 武田 純 : 平成 24 年経営者セミナー : GIFU ビルメン NEWS 2012 年 ; 5 月号 No.79 : 2.
- 4) 武田 純, 米田昭子, 岩崎真宏, 朝倉俊成, 高野直久 : 糖尿病療養指導の新たな展望・連携による質向上を目指して- : DM Ensemble 2012 年 5 月 20 日 ; Vol.1 No.1 : 10-17
- 5) 堀川幸男 : 生活習慣病のゲノム研究から臨床的に意味のある結果を出す研究戦略 : 日経バイオテック (2012 年 7 月 6 日)
- 6) 川地慎一 : 「研究室から 大学はいま」 糖尿病臨床の最前線を紹介 : 岐阜新聞(2012 年 9 月 18 日)
- 7) 武田 純 : 糖尿病患者に IC カード : 岐阜新聞(2012 年 10 月 5 日)
- 8) 堀川幸男 : IC カードで糖尿病情報を共有 : キャリアブレイン 医療介護 CB ニュース(2012 年 10 月 12 日)
- 9) 山本眞由美 : 岐阜大の取り組みを視察-英、米国の大学保健管理協会長- : 岐阜新聞(2012 年 10 月 17 日)
- 10) 山本眞由美 : 岐阜大のメンタルサポート施設視察 : 中日新聞(2012 年 10 月 20 日)
- 11) 武田 純 : 11 月 14 日は世界糖尿病デー「オール岐阜」で医療連携 : 岐阜新聞(2012 年 11 月 10 日)
- 12) 武田 純 : あなた糖尿病かもしれません! : 岐阜新聞(2012 年 11 月 14 日)

- 13) 山本眞由美:岐阜大の保健管理の取組を視察－英・米国の大学保健管理協会長が訪問:文教速報(2012年11月16日)
- 14) 山本眞由美:岐阜大学の保健管理の取り組み－米英両国の大学保健管理協会長が視察－:文教ニュース(2012年11月19日)
- 15) 山本眞由美:健康的な食生活知って－岐阜大 新入生対象に講義－:岐阜新聞(2013年4月17日)
- 16) 山本眞由美:第51回全国大学保健管理研究集会:教育医事新聞第349号(2013年9月25日)
- 17) 武田 純:11月14日は世界糖尿病デー「オール岐阜」体制万全:岐阜新聞(2013年11月12日)
- 18) 山本眞由美:大学保健管理協会,米英の元会長視察:中日新聞(2013年11月13日)
- 19) 山本眞由美:大学生の健康管理,全国の担当者研究:中日新聞(2013年11月15日)
- 20) 山本眞由美:大学の禁煙:中日新聞(2013年11月19日)
- 21) 山本眞由美:岐阜大,学生相談対応者研修会(FD/SD):文教ニュース(2014年7月7日)
- 22) 山本眞由美:岐阜大学講演会,キャンパスライフに取り入れるアーユルヴェーダ健康法:文教ニュース(2014年7月7日)

12. 自己評価

評価

研究活動では、国際的にインパクトがある論文発表が少なかったことは反省点であるが、研究費取得においては、文部科学省と厚生労働省の科研費を確保できたことは次段階に向けての及第点ではないかと思う。

学会等の活動としては、第1回日本糖尿病協会療養指導学術集会(平成24年)を初代会長として京都市で、第29回日本糖尿病妊娠学会(平成25年)と第14回日本糖尿病情報学会(平成25年)を岐阜市で開催できた。また、来る平成27年の第21回日本糖尿病眼学会と第43回内科学の展望の会長に内定したことは評価に値する。

社会活動では、糖尿病の療養指導に関して、CDEJとCDELの連携を目指した「CDEネットワーク」(日本糖尿病協会)の担当理事として全国拡大を推進してきた。療養指導に特化した協会機関誌である「DM Ensemble」も初代編集長として継続して担当し、定期購読数も3,000部を超えることができた。岐阜県内においても、岐阜県糖尿病協会の活動の一環として「岐阜県CDEネットワーク」を平成26年に新規に設立し、第1回の「CDE岐阜」の認定試験を実施した。現時点で、200名を超える認定者が登録されており、既設の「登録医療養指導医」の制度と両輪となって糖尿病の地域チーム医療の質向上に寄与できるものと見込んでいる。

現状の問題点及びその対応策

研究成果が不十分である背景の一つに、附属病院における診療活動に教室員のエフォートが過度に偏っている点がある。最近、大学院生の増員が得られているが、研究時間の確保のために根本的な診療状況の改善が求められる。病院収益の改善には周術期の血糖管理が重要であるが、当科の往診による対応では人的シーズに限界がある。病院レベルでの診療科横断的な対策が必要であり、その議論はようやく端緒についた。

今後の展望

研究に関しては、日本人の新規MODY遺伝子の探索研究を続けると共に、膵島トランスクリプトームなどHNF下流の候補解析研究も平行させる。また、膵島と肝臓の糖脂質代謝に関する機能連関の研究を継続する。臨床的には、治療薬に関する調査研究や生活習慣に関する地域コホート研究が継続されている。

学会活動では、とりあえずは、平成27年度に内定している2つの学術集会について、学問的にインパクトのある内容の企画に努める。

地域の糖尿病医療連携に関しては、日糖協の会員増強に尽力すると共に、「登録医療養指導医」と「岐阜県CDEネットワーク」の2つの制度の充実を目指し、全県下の糖尿病診療の底上げと質の均てん化を図る。さらに、岐阜県糖尿病対策推進協議会を活動の中心に据えて、市民の予防啓発事業の企画と実践にも注力する方針である。

(7) 小児病態学分野

1. 研究の概要

当講座における基礎研究・臨床研究はいずれも臨床に立脚し、基礎的な追求がなされ、その成果は臨床に還元されるものである。出生前小児期の遺伝・発生及び、小児の成長・発達と全臨床分野にわたる病的状態のすべてを対象としている。

基礎研究においては、幾つかの分野に絞ることにより、奥深い研究が進められている。アレルギー、免疫不全、代謝異常の各分野で幾つかの疾患の病因遺伝子が当講座で世界に先駆けクローニングされてきた。各テーマに共通することは、各分野の疾患の病因と病態の解明であり、その成果を診断・治療・予知・予防に適応していくことである。さらにこれらを通じて、ヒトの遺伝・発生、成長・発達の新たな解明につなげている。以下の主な項目を挙げる。

1) アレルギー，免疫不全症，自己炎症性疾患

- ①アレルギーの予知予防
- ②経口免疫寛容を誘導する治療法確立のため“食べて治す食品の開発”プロジェクト
- ③先天性免疫不全症と DNA 修復
- ④自己炎症性疾患の病因，病態解析

2) 先天代謝異常症

- ①先天性ケトン体代謝異常症の診断と病態の解明
- ②先天性脂肪酸代謝異常症の診断と病態の解明
- ③遺伝性ムコ多糖症の診断と病態の解明，あらたな治療法の開発
- ④ペルオキシソーム病の診断と病態の解明

3) 血液疾患，悪性腫瘍

- ①血管腫，リンパ管腫症，ゴーハム病の診断と病態の解明，新規治療法の開発
- ②高発癌症候群の診断

4) 新生児

新生児低血糖とケトン体代謝

5) 重症心身障害児，発達障害

寄附講座 障がい児者医療学講座と共同で、よりよきシステム作りの研究

6) タンパク立体構造解析

小児の疾患関連蛋白質の立体構造解析に基づいた病態解析・治療法の開発などを行う“構造医学”の確立

2. 名簿

教授：	深尾敏幸	Toshiyuki Fukao
教授(併任)：	加藤善一郎	Zenichiro Kato
准教授：	折居建治	Kenji Orii
准教授：	西村悟子	Satoko Nishimura
臨床准教授：	松井永子	Eiko Matsui
講師：	大西秀典	Hidenori Ohnishi
併任講師：	川本典生	Norio Kawamoto
併任講師：	小関道夫	Michio Ozeki
臨床講師：	浅野 勉	Tsutomu Asano
臨床講師：	堀 友博	Tomohiro Hori
助教：	山本崇裕	Takahiro Yamamoto
医員：	笹井英雄	Hideo Sasai
医員：	小野 学	Manabu Ono
医員：	篠原示和	Miwa Shinohara
医員：	川本美奈子	Minako Kawamoto
医員：	神田香織	Kaori Kanda
医員：	伊藤裕子	Yuko Ito
教授(併任)：	下澤伸行	Nobuyuki Shimozawa

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 深尾敏幸. 遺伝子検査の実際 2) 先天性代謝異常症:有波忠雄, 太田敏子, 清水淑子, 福嶋亜紀子, 三村邦裕編集. メディカルサイエンス遺伝子検査学, 東京:近代出版;2012年:122-128.
- 2) 深尾敏幸. ミトコンドリアβ酸化異常症:大関武彦, 古川 漸, 横田俊一郎, 水口 雅総編集. 今日の小児治療指針 第15版, 東京:医学書院;2012年:208-209.
- 3) 近藤直実. 経口免疫寛容を利用した食物アレルギーの治療:京都健康フォーラム監修, 上野川修一, 吉川正明編集. 人と食と自然シリーズ1:食と健康のための免疫学入門, 東京:建帛社;2012年:83-94.
- 4) 近藤直実編集. アレルギー疾患の免疫療法と分子標的治療, 東京:診断と治療社;2012年:1-154.
- 5) 近藤直実. アレルギー疾患における免疫療法と分子標的治療の位置づけ:近藤直実編集. アレルギー疾患の免疫療法と分子標的治療, 東京:診断と治療社;2012年:2-9.
- 6) 加藤善一郎, 近藤直実. 分子標的治療とその機序:近藤直実編集. アレルギー疾患の免疫療法と分子標的治療, 東京:診断と治療社;2012年:21-26.
- 7) 近藤直実. アレルギーのテラーメイド治療:近藤直実編集. アレルギー疾患の免疫療法と分子標的治療, 東京:診断と治療社;2012年:27-35.
- 8) 金子英雄, 大西秀典, 近藤直実. 食物アレルギーに対する抗原改変牛乳による経口免疫療法:近藤直実編集. アレルギー疾患の免疫療法と分子標的治療, 東京:診断と治療社;2012年:100-104.
- 9) 松井永子. 免疫異常疾患に対する免疫療法と抗体療法—その1—生物学的製剤の総論:近藤直実編集. アレルギー疾患の免疫療法と分子標的治療, 東京:診断と治療社;2012年:128-130.
- 10) 寺本貴英. 免疫異常疾患に対する免疫療法と抗体療法—その2—リウマチ性疾患に対する生物学的製剤:近藤直実編集. アレルギー疾患の免疫療法と分子標的治療, 東京:診断と治療社;2012年:131-135.
- 11) 大西秀典. 免疫異常疾患に対する免疫療法と抗体療法—その3—自己炎症性疾患に対する生物学的製剤:近藤直実編集. アレルギー疾患の免疫療法と分子標的治療, 東京:診断と治療社;2012年:136-139.
- 12) 近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:1-279.
- 13) 近藤直実, 大西秀典, 渡邊倫子. 原発性免疫不全症の概念と分類, および自己炎症性疾患・自己免疫不全症・近縁疾患の位置づけ:近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:2-31.
- 14) 大西秀典. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症の病因・病態と診断フローチャート:近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:53-59.
- 15) 加藤善一郎, 大西秀典, 近藤直実. 自己炎症性疾患 総論:近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:62-66.
- 16) 松井永子. 化膿性無菌性関節炎・壊疽性膿皮症・アクネ(PAPA)症候群:近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:84-85.
- 17) 深尾敏幸. Majeed 症候群(慢性反復性多発性骨髄炎と先天性赤血球生成不全性貧血):近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:90-92.
- 18) 大西秀典. 自然免疫不全症総論:近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:103-107.
- 19) 加藤善一郎, 大西秀典, 近藤直実. 自然免疫不全症 4, ヒトパピローマウイルス易感染症(WHIM 症候群・疣贅状表皮発育異常症):近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:115-116.
- 20) 久保田一生, 山本崇裕, 大西秀典. (家族性)単純ヘルペス脳炎(UNC93B1, TLR3, TRAF3, TRIF および TBK1 の異常):近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:117-120.
- 21) 堀 友博, 大西秀典. 慢性皮膚粘膜カンジダ症を伴う免疫不全症(CARD9, IL-17RA, IL-17F, STAT1 異常):近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:121-125.
- 22) 金子英雄. 色素脱失を伴う免疫不全症:近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:156-158.
- 23) 堀 友博, 大西秀典. カンジダ感染と外胚葉異形成を伴う自己免疫性多腺性内分泌不全症(APECED):近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:169-171.
- 24) 寺本貴英, 大西秀典, 近藤直実. Castleman 病:近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:185-187.
- 25) 船戸道徳. 補体異常症:近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:190-192.
- 26) 堀 友博, 大西秀典. 慢性皮膚粘膜カンジダ症(STAT1 異常症):近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:218-219.
- 27) 大西秀典. 肺炎球菌易感染症:近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:242-243.
- 28) 木村 豪. 炎症性サイトカインと分子標的治療:近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京:診断と治療社;2012年:244-247.

- 29) 金子英雄. DNA 修復障害:近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京: 診断と治療社; 2012 年: 248.
- 30) 金子英雄. 毛細血管拡張性小脳失調症(ataxia-telangiectasia): 近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京: 診断と治療社; 2012 年: 249-250.
- 31) 金子英雄. Bloom 症候群:近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京: 診断と治療社; 2012 年: 251-252.
- 32) 小関道夫. Li-Fraumeni 症候群:近藤直実, 平家俊男編集. 自己免疫炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京: 診断と治療社; 2012 年: 253.
- 33) 久保田一生, 大西秀典. MEFV 遺伝子と炎症性疾患:近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京: 診断と治療社; 2012 年: 258-259.
- 34) 近藤直実. 毛細血管拡張性小脳失調症:「小児内科」「小児外科」編集. 小児疾患の診断治療基準 第4版 小児内科, 東京: 東京医学社; 2012 年: 232-233.
- 35) 加藤善一郎, 近藤直実. 非てんかん性良性けいれん(憤怒けいれん, 軽症胃腸炎に伴うけいれん):「小児内科」「小児外科」編集. 小児疾患の診断治療基準 第4版 小児内科, 東京: 東京医学社; 2012 年: 736-737.
- 36) Driessen E, 吉村 学, 鈴木康之. Portfolio in Medical Education: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 岐阜大学医学教育開発研究センター監修. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 194-199.
- 37) 鈴木康之, 加藤智美. 小児 OSCE: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 岐阜大学医学教育開発研究センター監修. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 216-221.
- 38) 鈴木康之, 加藤智美. 教務事務職員に知ってほしい 10 のポイント 問題基盤型学習: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 岐阜大学医学教育開発研究センター監修. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 44-48.
- 39) 鈴木康之, 下澤伸行. 副腎白質ジストロフィーの造血幹細胞移植療法: 鈴木則宏, 祖父江元, 荒木信夫, 宇川義一, 川原信隆編集. Annual Review 神経 2012, 東京: 中外医学社; 2012 年: 241-245.
- 40) 鈴木康之. 小児科医の役割: 遠藤文夫総編集. 小児科診療ガイド, 東京: 中山書店; 2012 年: 2-4.
- 41) 鈴木康之. 身体診察の基本: 遠藤文夫総編集. 小児科診療ガイド, 東京: 中山書店; 2012 年: 8-11.
- 42) 鈴木康之. 副腎白質ジストロフィー: 大生定義編集. すべての内科医が知っておきたい神経疾患の診かた. 考え方とその対応, 東京: 羊土社; 2012 年: 265-266.
- 43) 深尾敏幸. β -ケトチオラーゼ欠損症: 遠藤文夫, 奥山虎之, 大浦敏博, 山口清次編集. 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013 年: 80-81.
- 44) 深尾敏幸. ミトコンドリア HMG-CoA 合成酵素欠損症: 遠藤文夫, 奥山虎之, 大浦敏博, 山口清次編集. 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013 年: 90-91.
- 45) 深尾敏幸. サクシニル-CoA:3-ケト酸 CoA 転移酵素(SCOT)欠損症: 遠藤文夫, 奥山虎之, 大浦敏博, 山口清次編集. 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013 年: 92-93.
- 46) 深尾敏幸. 2-メチル 3-ヒドロキシブチリル-CoA 脱水素酵素(HSD10)欠損症: 遠藤文夫, 奥山虎之, 大浦敏博, 山口清次編集. 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013 年: 112-113.
- 47) 深尾敏幸. カルニチンアシルカルニチントランスロカーゼ(CACT)欠損症: 遠藤文夫, 奥山虎之, 大浦敏博, 山口清次編集. 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013 年: 128-129.
- 48) 深尾敏幸. Majeed 症候群(慢性反復性多発性骨髄炎と先天性赤血球形成異常症): 近藤直実, 平家俊男編. 最近注目される疾患 自己炎症性疾患・自然免疫不全症・近縁疾患, 東京: 診断と治療社; 2013 年: 90-92.
- 49) 深尾敏幸. 3-ヒドロキシ-3-メチルグルタル酸血症: 山口清次編集. タンデムマス・スクリーニングガイドブック, 東京: 診断と治療社; 2013 年: 102-103.
- 50) 深尾敏幸. マルチプルカルボキシラーゼ欠損症: 山口清次編集. タンデムマス・スクリーニングガイドブック, 東京: 診断と治療社; 2013 年: 104-105.
- 51) 深尾敏幸. グルタル酸血症 I 型: 山口清次編集. タンデムマス・スクリーニングガイドブック, 東京: 診断と治療社; 2013 年: 106-107.
- 52) 深尾敏幸. 3-ケトチオラーゼ欠損症: 山口清次編集. タンデムマス・スクリーニングガイドブック, 東京: 診断と治療社; 2013 年: 108-109.
- 53) 深尾敏幸. 極長鎖アシル-CoA 脱水素酵素(VLCAD)欠損症: 山口清次編集. タンデムマス・スクリーニングガイドブック, 東京: 診断と治療社; 2013 年: 118-119.
- 54) 深尾敏幸. 短鎖アシル-CoA 脱水素酵素(SCAD)欠損症: 山口清次編集. タンデムマス・スクリーニングガイドブック, 東京: 診断と治療社; 2013 年: 120-121.
- 55) 深尾敏幸. ミトコンドリア三頭酵素(TFP)欠損症: 山口清次編集. タンデムマス・スクリーニングガイドブック, 東京: 診断と治療社; 2013 年: 122-123.
- 56) 深尾敏幸. カルニチンパルミトイルトランスフェラーゼ I(CPT1)欠損症: 山口清次編集. タンデムマス・スクリーニングガイドブック, 東京: 診断と治療社; 2013 年: 124-125.
- 57) 深尾敏幸. カルニチンパルミトイルトランスフェラーゼ II(CPT2)欠損症: 山口清次編集. タンデムマス・スクリーニングガイドブック, 東京: 診断と治療社; 2013 年: 126-127.
- 58) 深尾敏幸. カルニチントランスロカーゼ(CACT)欠損症: 山口清次編集. タンデムマス・スクリーニングガイドブック, 東京: 診断と治療社; 2013 年: 128-129.
- 59) 近藤直実. アレルギー疾患における免疫療法と分子標的治療の位置付け: 近藤直実編. 最新 アレルギー疾患の免疫療法と分子標的治療—理論と実践, 東京: 診断と治療社; 2013 年: 2-9.
- 60) 加藤善一郎, 近藤直実. 分子標的治療とその機序: 近藤直実編. 最新 アレルギー疾患の免疫療法と分子標

- 的治療—理論と実践, 東京: 診断と治療社; 2013年: 21-26.
- 61) 近藤直実. アレルギーのテラーメイド治療: 近藤直実編. 最新 アレルギー疾患の免疫療法と分子標的治療—理論と実践, 東京: 診断と治療社; 2013年: 27-35.
 - 62) 金子英雄, 大西秀典, 近藤直実. 食物アレルギーに対する抗原改変牛乳による経口免疫療法: 近藤直実編. 最新 アレルギー疾患の免疫療法と分子標的治療—理論と実践, 東京: 診断と治療社; 2013年: 100-104.
 - 63) 近藤直実, 松井永子. 日常診療にすぐに活かせる 喘息・アレルギーのテラーメイド治療, 東京: 診断と治療社; 2013年.
 - 64) 下澤伸行. ペルオキシソーム病ハンドブック 2013 ~全てのペルオキシソーム病患者の診断治療を目指して~, 大阪: 日本臨床社; 2013年.
 - 65) 下澤伸行監修. 副腎白質ジストロフィー診療ハンドブック 2013 作成委員会編集. 副腎白質ジストロフィー診療ハンドブック 2013 ~ALD患者を支えている関係者の皆様へ~, 岐阜: 西濃印刷; 2013年.
 - 66) 下澤伸行. 原発性高シュウ酸血症 I 型・II 型: 遠藤文夫, 奥山虎之, 大浦敏博, 山口清次編集. 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013年: 106-107.
 - 67) 下澤伸行. Zellweger spectrum: 遠藤文夫, 奥山虎之, 大浦敏博, 山口清次編集. 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013年: 248-249.
 - 68) 下澤伸行. rhizomelic chondrodysplasia punctate (RCDP) type 1: 遠藤文夫, 奥山虎之, 大浦敏博, 山口清次編集. 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013年: 250-251.
 - 69) 下澤伸行. 副腎白質ジストロフィー: 遠藤文夫, 奥山虎之, 大浦敏博, 山口清次編集. 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013年: 252-253.
 - 70) 下澤伸行. ペルオキシソームβ酸化酵素欠損症: 遠藤文夫, 奥山虎之, 大浦敏博, 山口清次編集. 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013年: 254-256.
 - 71) 下澤伸行. Refsum 病, rhizomelic chondrodysplasia punctate (RCDP) type 2・3: 遠藤文夫, 奥山虎之, 大浦敏博, 山口清次編集. 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013年: 257-259.
 - 72) 下澤伸行. ペルオキシソーム病: 水澤英洋, 鈴木則宏, 梶 龍兜, 吉良潤一, 神田 隆, 齊藤延人編. 今日の神経疾患治療指針 第2版, 東京: 医学書院; 2013年: 652-653.
 - 73) 深尾敏幸. 脂肪酸代謝異常症・カルニチンサイクル異常症を含む: 日本先天代謝異常学会編. 引いて調べる先天性代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2014年: 18-21.
 - 74) 深尾敏幸. 3-ヒドロキシアシル-CoA 脱水素酵素(HAD): 日本先天代謝異常学会編. 引いて調べる先天性代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2014年: 55.
 - 75) 深尾敏幸.(ミトコンドリア)β酸化系: 日本先天代謝異常学会編. 引いて調べる先天性代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2014年: 61.
 - 76) 堀 友博, 深尾敏幸. 横紋筋融解症: 日本先天代謝異常学会編. 引いて調べる先天性代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2014年: 65.
 - 77) 深尾敏幸. 長鎖脂肪酸β酸化異常症基本3病型: 日本先天代謝異常学会編集委員. 引いて調べる先天性代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2014年: 80.
 - 78) 堀 友博, 深尾敏幸. Reye 様症候群: 日本先天代謝異常学会編. 引いて調べる先天性代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2014年: 92.
 - 79) 深尾敏幸. イムノブロット: 日本先天代謝異常学会編集委員. 引いて調べる先天性代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2014年: 95.
 - 80) 深尾敏幸. ケトアシドーシス: 日本先天代謝異常学会編. 引いて調べる先天性代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2014年: 104.
 - 81) 青山友佳, 深尾敏幸. ケトン性ジカルボン酸尿と非(低)ケトン性ジカルボン酸尿: 日本先天代謝異常学会編. 引いて調べる先天性代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2014年: 104.
 - 82) 青山友佳, 深尾敏幸. 非(低)ケトン性低血糖症: 日本先天代謝異常学会編. 引いて調べる先天性代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2014年: 126.
 - 83) 深尾敏幸. 遊離脂肪酸/総ケトン体比: 日本先天代謝異常学会編. 引いて調べる先天性代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2014年: 131.
 - 84) 深尾敏幸. 長鎖脂肪酸β酸化系の治療法の原則: 日本先天代謝異常学会編. 引いて調べる先天性代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2014年: 160.
 - 85) 下澤伸行. ペルオキシソーム病: 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No28 神経症候群(第2版)III, 東京: 日本臨床社; 2014年: 728-736.
 - 86) 下澤伸行. ペルオキシソーム病: 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No31 神経症候群(第2版)VI, 東京: 日本臨床社; 2014年: 229-236.
 - 87) 下澤伸行. ペルオキシソーム病: 日本先天代謝異常学会編. 引いて調べる先天性代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2014年: 34-37.
 - 88) 折居建治. ETF 脱水素酵素、脂肪酸β酸化系酵素、ETF-α、ETF-β(グルタル酸血症 II 型): 引いて調べる先天代謝異常症 日本先天代謝異常学会編, 東京: 診断と治療社; 2014年: 45.
 - 89) 折居建治. グルタルル-CoA 脱水素酵素(グルタル酸血症 I 型): 引いて調べる先天代謝異常症 日本先天代謝異常学会編, 東京: 診断と治療社; 2014年: 50-51.
 - 90) 下澤伸行. ペルオキシソーム: プログレッシブ生命科学, 東京: 南山堂; 2014年: 60-63.

著書 (欧文)

- 1) Tomatsu S, Montaña AM, Oikawa H, Giugliani R, Harmatz P, Smith M, Suzuki Y, Orii T. Impairment of Body Growth in Mucopolysaccharidoses. In: Preedy VR ed. Handbook of Growth and Growth Monitoring in Health and Disease. Heidelberg: Springer; 2012.
- 2) Suzuki Y. Perspective for the future medical education in Japan. In: 日本の医学教育の挑戦. Tokyo: 篠原出版新社; 2012: 9-15.
- 3) Fukao T. Cryptic Splice Sites and Cryptic Splicing. In: Maloy S, Hughes K ed. Brenner's Encyclopedia of Genetics, vol. 2. New York: Elsevier; 2013:245-248.

総説 (和文)

- 1) 近藤直実, 寺本貴英, 松井永子, 加藤善一郎, 赤坂 徹, 赤澤 晃, 伊藤浩明, 足立雄一, 今井孝成, 大矢幸弘, 勝沼俊雄, 南部光彦, 藤澤隆夫, 二村昌樹, 松井猛彦, 三浦克志, 森川みき, 佐久間真帆. II. 支援活動報告 4)日本小児アレルギー学会としての取り組み, アレルギー・免疫 2012年; 19巻: 72-76.
- 2) 山岡明子, 阿部 弘, 渡邊庸平, 角田文彦, 梅林宏明, 稲垣徹史, 虻川大樹, 柳田紀之, 箕浦貴則, 森川みき, 近藤直実, 三浦克志. 速報 東日本大震災におけるアレルギー児の保護者へのアンケート調査, 日本小児アレルギー学会誌 2012年; 25巻: 801-809.
- 3) 下澤伸行. ペルオキシソーム病(Zellweger 症候群, 原発性高シュウ酸尿症1型), 日本臨床 別冊 新領域別症候群シリーズ 腎臓症候群(第2版) 2012年; 17巻: 369-373.
- 4) 大西秀典, 寺本貴英, 久保田一生, 近藤直実. 皮膚症状からみた自己炎症性症候群, 小児科 2012年; 53巻: 1201-1209.
- 5) 大西秀典, 寺本貴英, 久保田一生, 山本崇裕, 渡邊倫子, 加藤善一郎, 金子英雄, 近藤直実. 原発性(先天性)免疫不全症の分類-2012 update-, 小児科診療 2012年; 75巻: 134-151.
- 6) 大西秀典, 松井永子, 木全かおり, 加藤善一郎, 近藤直実. 周産期環境とアレルギー アレルギー疾患と関連する自然免疫のシグナル伝達経路における遺伝子多型(Gene polymorphisms in innate immune signaling pathways associated with allergic disease), 日本小児アレルギー学会誌 2012年; 26巻: 113-119.
- 7) 松井永子, 木全かおり, 大西秀典, 加藤善一郎, 金子英雄, 近藤直実. 喘息/COPDの基礎研究最前線 遺伝子検索による喘息, アレルギー疾患発症のテラーメイド的予知および予防指導の試み, International Review of Asthma & COPD 2012年; 14巻: 23-28.
- 8) 近藤直実. clinical topics 小児喘息の段階で寛解・治癒を目指す. 発症予知・予防指導とテラーメイド型治療の確立が鍵, Medical Tribune 2012年; 45巻: 30.
- 9) 大西秀典, 山本崇裕. IRAK4 欠損・MyD88 欠損をはじめとする Toll 様受容体(TLR)シグナル伝達の異常症に関する最近の知見, 小児内科 2012年; 44巻: 1227-1233.
- 10) 近藤直実. 小児気管支喘息の長期管理, アレルギー 2012年; 61巻: 771-784.
- 11) 近藤直実, 松井永子, 大西秀典, 寺本貴英, 加藤善一郎, 川本典生, 大鋸愛美. 小児喘息の治癒を獲得するために-新たな提言 両輪療法-, アレルギー 2012年; 60巻: 1736-1743.
- 12) 鈴木康之. 成人学習, 日本小児科学会雑誌 2012年; 116巻: 133-135.
- 13) 鈴木康之, 関口進一郎. カリキュラムの基本, 日本小児科学会雑誌 2012年; 116巻: 813-815.
- 14) 西屋克己, 鈴木康之. 学習者評価の基本, 日本小児科学会雑誌 2012年; 116巻: 1197-1198.
- 15) 鈴木康之. よりよい後進育成は全ての医療者の責任であり, 今こそティーチャー・トレーニングが求められている. 医療羅針盤・私の提言, 月刊新医療 2012年; 449巻: 18-21.
- 16) 鈴木康之. モルキオ症候群. VIII代謝-ムコ多糖症-, 内科増大号 知っておきたい内科症候群 2012年; 109巻: 1361-1362.
- 17) 鈴木康之. ムコ多糖症III型, 日本臨床 新領域別症候群シリーズ 2012年; 20巻: 539-542.
- 18) 鈴木康之. ムコ多糖症の治療とケア, 難病と在宅ケア 2012年; 18巻: 20-23.
- 19) 鈴木康之. ムコ多糖症, Brain Medical 2012年; 24巻: 247-254.
- 20) 近藤直実. 特集 アレルギー疾患における特異的抗体の意義. I. 免疫学的側面 1. IgE 抗体産生のメカニズム: 遺伝素因と環境の影響, アレルギー・免疫 2012年; 20巻: 14-23.
- 21) 深尾敏幸. Alu 配列の関連した遺伝子異常が遺伝性疾患を引き起こす, 実験医学 2012年; 9巻: 2240-2246.
- 22) 深尾敏幸. HMG-CoA リアーゼ欠損症, 日本臨床 別冊 先天代謝異常症候群(上) -病因・病態研究, 診断・治療の進歩-(第2版) 2012年; 19巻: 378-380.
- 23) 深尾敏幸. HMG-CoA 合成酵素欠損症, 日本臨床 別冊 先天代謝異常症候群(上) -病因・病態研究, 診断・治療の進歩-(第2版) 2012年; 19巻: 381-385.
- 24) 深尾敏幸, 大西秀典. メバロン酸キナーゼ欠損症, 日本臨床 別冊 先天代謝異常症候群(上) -病因・病態研究, 診断・治療の進歩-(第2版) 2012年; 19巻: 386-391.
- 25) 深尾敏幸. β -ケトチオラーゼ欠損症, 日本臨床 別冊 先天代謝異常症候群(上) -病因・病態研究, 診断・治療の進歩-(第2版) 2012年; 19巻: 392-396.
- 26) 深尾敏幸. 3-ヒドロキシイソ酪酸-CoA ヒドロラーゼ欠損症, 日本臨床 別冊 先天代謝異常症候群(上) -病因・病態研究, 診断・治療の進歩-(第2版) 2012年; 19巻: 397-400.
- 27) 深尾敏幸. 3-ヒドロキシイソ酪酸尿症, 日本臨床 別冊 先天代謝異常症候群(上) -病因・病態研究, 診断・治療の進歩-(第2版) 2012年; 19巻: 401-404.
- 28) 深尾敏幸. エチルマロン酸脳症, 日本臨床 別冊 先天代謝異常症候群(上) -病因・病態研究, 診断・治療

- の進歩—(第2版) 2012年; 19巻: 409-412.
- 29) 堀友博, 深尾敏幸. サクシニル-CoA:3-ケト酸 CoA トランスフェラーゼ欠損症, 日本臨床 別冊 先天代謝異常症候群(上) —病因・病態研究, 診断・治療の進歩—(第2版) 2012年; 19巻: 451-454.
 - 30) 深尾敏幸. 遺伝病遺伝子診断のビットフォール, 小児内科 2012年; 44巻: 1614-1618.
 - 31) 深尾敏幸. 脂肪酸代謝異常症, ケトン体代謝異常症の最近の進歩, 日本小児科学会雑誌 2012年; 116巻: 1801-1812.
 - 32) 近藤直実. 特集 アレルギー疾患における特異的抗体の意義. I. 免疫学的側面 1. IgE 抗体産生のメカニズム: 遺伝素因と環境の影響, アレルギー・免疫 2013年; 20巻: 14-23.
 - 33) 船戸道徳, 近藤直実. Li-Fraumeni 症候群の新知見, 癌と科学療法 2013年; 40巻: 148-153.
 - 34) 近藤直実, 大鋸愛美. 特集 喘息・アレルギーと遺伝子 Up-To-Date 小児気管支喘息と遺伝子多型, 喘息 2013年; 26巻: 48-59.
 - 35) 大西秀典, 山本崇裕, 久保田一生, 堀 友博. <新しく発見された疾患>自然免疫関連分子の異常による免疫不全, 小児内科 2013年; 45巻: 1142-1145.
 - 36) 近藤直実. 特集II アレルギー疾患に対する免疫療法の効果と展望 アレルギー疾患に対する免疫療法の基礎的背景, 臨床免疫・アレルギー科 2013年; 60巻: 161-168.
 - 37) 近藤直実, 小玉ひとみ, 熊田ますみ, 松野ゆかり. 食物アレルギーの現状. 特集 日常生活とアレルギー, 公衆衛生 2013年; 77巻: 790-795.
 - 38) 近藤直実, 大鋸愛美. 小児気管支喘息と遺伝子多型. 特集 喘息・アレルギーと遺伝子 Up-To-Data, 喘息 2013年; 26巻: 48-59.
 - 39) 河野陽一, 近藤直実, 森川昭廣, 西牟田敏之, 西間三馨, 佐々木香織. 診療 保護者からみた小児気管支喘息の実態 インターネット調査の結果, 小児科 2013年; 54巻: 912-922.
 - 40) 近藤直実, 寺本貴英, 松井永子, 佐久間真帆, 赤坂 徹, 赤澤 晃, 伊藤浩明, 足立雄一, 今井孝成, 大矢幸弘, 勝沼俊雄, 南部光彦, 藤澤隆夫, 二村昌樹, 松井猛彦, 三浦克志, 森川みき. 4. アレルギー患児への対応. 東日本大震災—小児科医の足跡—, 日本小児科医会 2013年; 132-138.
 - 41) 大西秀典, 久保田一生. 遺伝性自己炎症性疾患の臨床像と診断フローチャート, 日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会雑誌 2013年; 7巻: 169-176.
 - 42) 金子英雄, 近藤直実. 食物アレルギーにおける経口免疫療法, 小児科診療 2013年; 76巻: 857-861.
 - 43) 鈴木康之. 医学・歯学教育者の人材育成, 日本歯科医学教育学会雑誌 2013年; 29巻: 7-10.
 - 44) 下澤伸行. ペルオキシソーム病, 小児科診療 2013年; 76巻: 35-43.
 - 45) 大西秀典, 山本崇裕, 久保田一生, 堀 友博. 自然免疫関連分子の異常による免疫不全, 小児内科 2013年; 45巻: 1142-1145.
 - 46) 大西秀典, 久保田一生. 遺伝性自己炎症疾患の臨床像と診断フローチャート, 日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会雑誌 2013年; 7巻: 169-176.
 - 47) 加藤善一郎. 【小児の痛みについて考える】 小児神経と痛み 泣き入りひきつけ(憤怒けいれん)への対応, 小児科臨床 2013年; 66巻: 2481-2485.
 - 48) 加藤善一郎. 先端医学講座 アレルギー性疾患の病態解析のための構造医学の応用, アレルギーの臨床 2013年; 33巻: 856-859.
 - 49) 藤野明浩, 上野 滋, 岩中 督, 木下義晶, 小関道夫, 森川康英, 黒田達夫. リンパ管種, 小児外科 2014年; 46巻: 1181-1186.
 - 50) 大西秀典, 加藤善一郎. 細胞内寄生菌に脆弱性を示す免疫不全症(MSMD など), 小児内科 2014年; 46巻: 1492-1498.
 - 51) 下澤伸行. 小児の治療指針 ペルオキシソーム病(副腎白質ジストロフィー, ペルオキシソーム形成異常症), 小児科診 2014年; 77巻: 548-551.
 - 52) 川本典生. 【小児食物アレルギー診療 UP DATE-診る前に確認したい最新知見-】 (1章)発症メカニズム 食物アレルギーの遺伝, 小児科 2014年; 55巻: 518-526.

総説 (欧文)

- 1) Tomatsu S, Mackenzie WG, Theroux MC, Mason RW, Thacker MM, Shaffer TH, Montano AM, Rowan D, Sly W, Alméciga-Díaz CJ, Barrera LA, Chinen Y, Yasuda E, Ruhnke K, Suzuki Y, Orii T. Current and emerging treatments and surgical interventions for Morquio A syndrome: a review. Research and Reports in Endocrine Disorders. 2012;2:65-77.
- 2) Suzuki Y, Niwa M. e-PBL: possibilities and limitations. J Med Education. 2012;16:1-8.
- 3) Kondo N, Maspero J, Ebisawa M. Early intervention and individualized treatment in pediatric Asthma. Round table discussion. International Review of Asthma & COPD. 2012;14:105-119.
- 4) Tomatsu S, Alméciga-Díaz CJ, Barbosa H, Montano AM, Barrera LA, Shimada T, Yasuda E, Mackenzie WG, Mason RW, Suzuki Y, Orii KE, Orii T. Therapies of mucopolysaccharidosis IVA (Morquio A syndrome). Expert Opinion on Orphan Drugs. 2013;1:805-818.
- 5) Okumura A, Nakagawa S, Kawashima H, Morichi S, Muguruma T, Saito O, Fujimoto J, Toida C, Kuga S, Imamura T, Shimizu T, Kondo N, Morishima T. Severe form of encephalopathy associated with 2009 pandemic influenza A (H1N1) in Japan. J Clin Virol. 2013;56:25-30.
- 6) Ebisawa M, Kondo N, Ohnishi H, Nishima S. Pediatric Allergy Immunology in Japan. Pediatric Allergy and Immunology. 2013;24:704-714.

原著 (和文)

- 1) 南部光彦, 車谷典男, 大矢幸弘, 勝沼俊雄, 亀田 誠, 坂本龍雄, 三浦克志, 濱崎雄平, 近藤直実. 小児気管支喘息長期管理薬に関する病院および診療所小児科医と内科医の比較, 日本小児科学会誌 2012 年; 116 巻: 1503-1511.
- 2) 西城卓也, 久保田伊代, 鈴木康之. 認知的徒弟制に基づいた、学生による臨床指導医評価: マーストリヒト臨床教育評価表(The Maastricht Clinical Teaching Questionnaire (MCTQ))日本語版, 医学教育 2012 年; 43 巻: 86.
- 3) 阿部恵子, 若林英樹, 西城卓也, 川上ちひろ, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之. Trait Emotional Intelligence Que-SF と Jefferson Scale of Physician Empathy の日本語版開発と信頼性・妥当性の検討, 医学教育 2012 年; 43 巻: 351-359.
- 4) 吉原重美, 藤沢隆夫, 栗原和幸, 宇理須厚雄, 濱崎雄平, 西傘田敏之, 西間三馨, 森川昭廣, 近藤直実. 軽症~中等症持続型の小児気管支喘息の長期管理におけるツロブテロール貼付薬の有用性-ツロブテロール貼付薬追加投与と吸入ステロイド増量の多施設共同群間比較オープンラベル試験 PEACOC-, 日本小児アレルギー学会誌 2013 年; 27 巻: 107-115.
- 5) 阿部恵子, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之. 医学生 of Emotional Intelligence (EI) と Empathy: 性差および学年差の検討, 医学教育 2013 年; 44 巻: 315-326.
- 6) 奥村陽子, 加納宏行, 大西秀典, 清島真理子. BCG 接種後に生じた丘疹状結核疹の 1 小児例, 日本小児皮膚科学会雑誌 2013 年; 32 巻: 61-64.
- 7) 近藤直実, 吉原重美, 松井永子. アイピーディ鼎談企画 ここまで来た小児気管支喘息のテーラーメイド治療-遺伝子診断による薬剤選択と発症予防-, 別冊 Medical ASAHI 2013 年; 42 巻: 1-7.
- 8) 近藤直実, 望月博之. 2013 学会アップデート SPECIAL 第 62 回日本小児アレルギー学会秋季学術大会教育セミナー 小児気管支喘息と末梢気道病変, 日経メディカル シリーズ広告企画 2013 年: 1-6.
- 9) 松井永子. 小児喘息におけるテーラーメイド医療と薬剤選択, AIR 2013 年; 12 巻: 4-5.
- 10) 松井永子. 講演 3 喘息・アレルギーのテーラーメイド治療について, 第 13 回喘息 Early Intervention 研究会 2013 年.
- 11) 塩田睦記, 舟塚 真, 小田絵里, 白戸由理, 竹下暁子, 石垣景子, 斉藤加代子, 下澤伸行, 大澤眞木子. 極長鎖脂肪酸の反復検査で診断し得た D-bifunctional protein 欠損症の 1 例, 東京女子医科大学雑誌 2013 年; 83 巻: E103-106.

原著 (欧文)

- 1) Morita H, Kaneko H, Ohnishi H, Kato Z, Kubota K, Yamamoto T, Matsui E, Teramoto T, Fukao T, Kasahara K, Kondo N. Structural property of soybean protein P34 and specific IgE response to recombinant P34 in patients with soybean allergy. *Int J Mol Med.* 2012;29:153-158. IF 1.880
- 2) Ohnishi H, Miyata R, Suzuki T, Nose T, Kubota K, Kato Z, Kaneko H, Kondo N. A rapid screening method to detect autosomal-dominant ectodermal dysplasia with immune deficiency syndrome. *J Allergy Clin Immunol.* 2012;129:578-580. IF 11.248
- 3) Katsunuma T, Matsui T, Iwata T, Nambu M, Kondo N. Hospitalizations associated with pandemic influenza A(H1N1)2009 in asthmatic children in Japan. *Allergol Int.* 2012;61:75-82.
- 4) Ohnishi H, Tochio H, Kato Z, Kawamoto N, Kimura T, Kubota K, Yamamoto T, Funasaka T, Nakano H, Wong RW, Shirakawa M, Kondo N. TRAM Is Involved in IL-18 Signaling and Functions as a Sorting Adaptor for MyD88. *PLoS One.* 2012;7:e38423. IF 3.534
- 5) Ohnishi H, Teramoto T, Iwata H, Kato Z, Kimura T, Kubota K, Nishikomori R, Kaneko H, Seishima M, Kondo N. Characterization of NLRP3 variants in Japanese cryopyrin-associated periodic syndrome patients. *J Clin Immunol.* 2012;32:221-229. IF 2.654
- 6) Omoya K, Naiki Y, Kato Z, Yoshioka S, Uchida Y, Taga T, Aoki Y, Deguchi H, Kondo N. Sweet's syndrome in a neonate with non-B54 types of human leukocyte antigen. *World J Pediatr.* 2012;8:181-184. IF 1.048
- 7) Fukao T, Maruyama S, Ohura T, Hasegawa Y, Toyoshima M, Haapalainen AM, Kuwada N, Imamura M, Yuasa I, Wierenga RK, Yamaguchi S, Kondo N. Three Japanese patients with beta-ketothiolase deficiency who share a mutation, c. 431A > C(H144P) in ACAT1: subtle abnormality in urinary organic acid analysis and blood acylcarnitine analysis using tandem mass spectrometry. *JIMD reports.* 2012;3:107-115.
- 8) Kawamoto N, Fukao T, Kaneko H, Hirayama K, Sakurai S, Arai T, Kondo M, Kawamoto M, Matsui E, Teramoto T, Kasahara K, Bai C, Zhang G, Omoya K, Matsukuma E, Morimoto M, Suzuki H, Aoki Y, Kimura T, Nada M, Morita H, Tokumi T, Takemura M, Seishima M, Shiraki M, Iwasa S, Kondo N. Risk factors for infantile atopic dermatitis and recurrent wheezing. *J Invest Allerg Clin.* 2012;22:116-125. IF 2.642
- 9) Kanzawa N, Shimozawa N, Wanders RJ, Ikeda K, Murakami Y, Waterham HR, Mukai S, Fujita M, Maeda Y, Taguchi R, Fujiki Y, Kinoshita T. Defective lipid remodeling of GPI anchors in peroxisomal disorders, Zellweger syndrome and rhizomelic chondrodysplasia punctata. *J Lipid Res.* 2012;53:653-663. IF 4.730
- 10) Teramoto T, Matsui E, Fukao T, Sakai K, Yonezawa H, Kato Z, Ohnishi H, Kaneko H, Kondo N, Azuma J, Nishima S. Repeated-Dose Pharmacokinetics of Inhaled Ciclesonide (CIC-HFA) in Japanese

- Children with Bronchial Asthma: A Phase I Study. *Allergol Int.* 2012;61:619-624.
- 11) Hori T, Ohnishi H, Teramoto T, Tsubouchi K, Naiki T, Hirose Y, Ohara O, Seishima M, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. Autosomal-Dominant Chronic Mucocutaneous Candidiasis with STAT1-Mutation can be Complicated with Chronic Active Hepatitis and Hypothyroidism. *J Clin Immunol.* 2012;32:1213-1220. IF 2.654
 - 12) Nada M, Ohnishi H, Tochio H, Kato Z, Kimura T, Kubota K, Yamamoto T, Kamatari YO, Tsutsumi N, Shirakawa M, Kondo N. Molecular analysis of the binding mode of Toll/interleukin-1 receptor (TIR) domain proteins during TLR2 signaling. *Mol Immunol.* 2012;52:108-116. IF 4.185
 - 13) Kuramitsu M, Matsubara A, Morio T, Takagi M, Toki T, Terui K, RuNan W, Kanno H, Ohga S, Ohara A, Kitoh T, Sugita K, Kudo T, Matsubayashi T, Mizue N, Ozeki M, Masumi A, Momose H, Takizawa K, Mizukami T, Yamaguchi K, Ogawa S, Ito E, Hamaguchi I. Extensive gene deletions in Japanese patients with Diamond-Blackfan anemia. *Blood.* 2012;119:2376-2384. IF 9.775
 - 14) Kato H, Kanematsu M, Kato Z, Teramoto T, Kondo N, Hoshi H. Computed tomographic findings of Kawasaki disease with cervical lymphadenopathy. *J Comput Assist Tomo.* 2012;36:138-142. IF 1.602
 - 15) Katsunuma T, Ohya Y, Fujisawa T, Akashi K, Imamura N, Ebisawa M, Daikoku K, Kondo N, Terada A, Doi S, Nishimuta T, Noma T, Hamasaki Y, Kurihara K, Masuda K, Yamada T, Yamada M, Yoshihara S, Watanabe K, Watanabe T, Kitabayashi T, Morikawa A, Nishima S. Effects of the tulobuterol patch on the treatment of acute asthma exacerbations in young children. *Allergy Asthma Proc.* 2012;33:28-34. IF 3.353
 - 16) Fujisawa T, Murase K, Kanoh H, Takemura M, Ohnishi H, Seishima M. Adsorptive depletion of CD14+ CD16+ proinflammatory monocyte phenotype in patients with generalized pustular psoriasis: clinical efficacy and effects on cytokines. *Ther Apher Dial.* 2012;16:436-444. IF 1.532
 - 17) Tanaka A, Okuyama T, Suzuki Y, Sakai N, Takakura H, Sawada T, Tanaka T, Otomo T, Ohashi T, Ishige-Wada M, Yabe H, Ohura T, Suzuki N, Kato K, Adachi S, Kobayashi S, Mugishima H, Kato S. Long-term efficacy of hematopoietic stem cell transplantation on brain involvement in patients with mucopolysaccharidosis type II: A nationwide survey in Japan. *Mol Genet Metab.* 2012;107:513-520. IF 2.827
 - 18) Kato H, Kanematsu M, Kato Z, Teramoto T, Mizuta K, Aoki M, Makita H, Kato K. Necrotic cervical nodes: Usefulness of diffusion-weighted MR imaging in the differentiation of suppurative lymphadenitis from malignancy. *Eur J Radiol.* 2012;82:e28-35. IF 2.160
 - 19) Purevsuren J, Hasegawa Y, Fukuda S, Kobayashi H, Mushimoto Y, Yamada K, Takahashi T, Fukao T, Yamaguchi S. Clinical and Molecular Aspects of Japanese Children with Medium Chain Acyl-CoA Dehydrogenase Deficiency. *Mol Genet Metab.* 2012;107:237-240. IF 2.827
 - 20) Yamaguchi S, Li H, Purevsuren J, Yamada K, Furui M, Takahashi T, Mushimoto Y, Kobayashi H, Taketani T, Fukao T, Fukuda S. Bezafibrate can be a new treatment option for mitochondrial fatty acid oxidation disorder: evaluation by in vitro probe acylcarnitine assay. *Mol Genet Metab.* 2012;107:87-91. IF 2.827
 - 21) Hori T, Fukao T, Murase K, Sakaguchi N, Harding CO, Kondo N. Molecular Basis of Two-Exon Skipping (Exons 12 and 13) by c.1248+5g>a in *OXCT1* gene: Study on Intermediates of *OXCT1* Transcripts in Fibroblasts. *Hum Mutat.* 2013;34:473-480. IF 5.122
 - 22) Yamamoto T, Tsutsumi N, Tochio H, Ohnishi H, Kubota K, Kato Z, Shirakawa M, Kondo N. Functional assessment of the mutational effects of human IRAK4 and MyD88 genes. *Mol Immunol.* 2013;58:66-76.
 - 23) Kubota K, Ohnishi H, Teramoto T, Matsui E, Murase K, Kanoh H, Kato Z, Kaneko H, Seishima M, Kondo N. In Vitro Analysis of the Functional Effects of an NLRP3 G809S Variant with the co-Existence of MEFV Haplotype Variants in Atypical Autoinflammatory Syndrome. *J Clin Immunol.* 2013;33:325-334. IF 2.654
 - 24) Kato Z, Sasai H, Funato M, Asano T, Kondo N. Acute cerebellitis associated with rotavirus infection. *World J Pediatr.* 2013;9:87-89.
 - 25) Ozeki M, Kanda K, Kawamoto N, Ohnishi H, Fujino A, Hirayama M, Kato Z, Azuma E, Fukao T, Kondo N. Propranolol as an alternative treatment option for pediatric lymphatic malformation. *Tohoku J Exp Med.* 2013;229:61-66. IF 1.283
 - 26) Kato H, Kanematsu M, Kato Z, Teramoto T, Mizuta K, Aoki M, Makita H, Kato K. Necrotic cervical nodes: usefulness of diffusion-weighted MR imaging in the differentiation of suppurative lymphadenitis from malignancy. *Eur J Radiol.* 2013;82:e28-35. IF 2.160
 - 27) Funato M, Kaneko H, Sasai H, Kubota K, Ozeki M, Kanda K, Kato Z, Kondo N. Peripheral blood stem cell transplantation in a significant body weight difference between a smaller donor and a larger recipient: a case report. *Transfus Apher Sci.* 2013;49:504-506. IF 1.072
 - 28) Yoshioka T, Nishikomori R, Hara J, Okada K, Hashii Y, Okafuji I, Nodomi S, Kawai T, Izawa K, Ohnishi H, Yasumi T, Nakahata T, Heike T. Autosomal dominant anhidrotic ectodermal dysplasia with immunodeficiency caused by a novel NFKBIA mutation, p.Ser36Tyr, presents with mild ectodermal dysplasia and non-infectious systemic inflammation. *J Clin Immunol.* 2013;7:33. IF 2.654
 - 29) Kawamoto N, Ohnishi H, Kondo N. Strominger JL. The role of dendritic cells in the generation of CD4+ CD25HI Foxp3+ T cells induced by amino acid copolymers. *Int Immunol.* 2013;25:53-65. IF 3.181
 - 30) Purevsuren J, Kobayashi H, Hasegawa Y, Yamada K, Takahashi T, Takayanagi M, Fukao T, Fukuda S,

- Yamaguchi S. Intracellular in vitro acylcarnitine cylcarnitine assay for identifying deficiencies of carnitine transporter and carnitine palmitoyltransferase-1. *Anal Bioanal Chem.* 2013;405:1345-1351.
- 31) Shafqat N, Kavanagh KL, Sass JO, Christensen E, Fukao T, Lee WH, Oppermann U, Yue WW. A structural mapping of mutations causing succinyl-CoA:3-ketoacid CoA transferase (SCOT) deficiency. *J Inherit Metab Dis.* 2013;36:983-987. IF 4.138
- 32) Buhaş D, Bernard G, Fukao T, Lortie A, Décarie J-C, Chouinard S, Mitchell GA. A treatable new cause of cholea:beta-ketothiolase deficiency. *Movement Disord.* 2013;28:1054-1056. IF 5.634
- 33) Kawamoto N, Fukao T, Kaneko H, Hirayama K, Sakurai S, Arai T, Kondo M, Kawamoto M, Matsui E, Orii K, Kasahara K, Takemura M, Seishima M, Shiraki M, Iwasa S, Kondo N. Total IgE at 6 months predicts remittance or persistence of atopic dermatitis at 14 months. *Allergy Asthma Proc.* 2013;34:362-369. IF 3.353
- 34) Fukao T, Aoyama Y, Murase K, Hori T, Wierenga R, Boneh A, Kondo N. Development of MLPA for Human ACAT1 Gene and Identification of a Heterozygous Alu-mediated Deletion of Exons 2 and 3 in a Patient with Mitochondrial Acetoacetyl-CoA Thiolase (T2) Deficiency. *Mol Genet Metab.* 2013;110:184-187. IF 2.827
- 35) Fukushima T, Kaneoka H, Yasuno T, Sasaguri Y, Tokuyasu T, Tokoro K, Fukao T, Saito T. Three novel mutations in the carnitine-acylcarnitine translocase (CACT) gene in patients with CACT deficiency and in healthy individuals. *J Hum Genet.* 2013;58:788-793. IF 2.526
- 36) Yamaguchi S, Purevusren J, Kobayashi H, Hasegawa Y, Mushimoto Y, Yamada K, Takahashi T, Furui M, Taketani T, Fykuda S, Fukao T, Shigematsu Y. Expanded newborn mass screening with MS/MS and medium-chain acyl-CoA dehydrogenase (MCAD) deficiency in Japan. *J Jap Soc Mass-screening.* 2013;23:270-276.
- 37) Abe K, Evans P, Austin JE, Suzuki Y, Fujisaki K, Niwa M, Aomatsu M. Expressing one's feelings and listening to others increases emotional intelligence: a pilot study of Asian medical students. *Bmc Med Educ.* 2013;13:82. IF 1.409
- 38) Dũng VC, Tomatsu S, Montaño AM, Gottesman G, Bober MB, Mackenzie W, Maeda M, Mitchell GA, Suzuki Y, Orii T. Mucopolysaccharidosis IVA: Correlation between genotype, phenotype and keratin sulfate levels. *Mol Genet Metab.* 2013;110:129-138. IF 2.827
- 39) Tomatsu S, Fujii T, Fukushi M, Oguma T, Shimada T, Maeda M, Kida K, Shibata Y, Futatsumori H, Montaño AM, Mason RW, Yamaguchi S, Suzuki Y, Orii T. Newborn screening and diagnosis of mucopolysaccharidoses. *Mol Genet Metab.* 2013;110:42-53. IF 2.827
- 40) Yasuda E, Fushimi K, Suzuki Y, Shimizu K, Takami T, Zustin J, Patel P, Ruhnke K, Shimada T, Boyce B, Kokas T, Barone C, Theroux M, Mackenzie W, Nagel B, Ryerse JS, Orii KE, Iida H, Orii T, Tomatsu S. Pathogenesis of Morquio A syndrome: an autopsied case reveals systemic storage disorder. *Mol Genet Metab.* 2013;109:301-311. IF 2.827
- 41) Vu Chi Dung, Shimozawa N, Nguyen Ngoc Khanh, Bui Phuong Thao, Can Thi Bich Ngoc, Nguyen Phu Dat, Nguyen Thi Hoan. Mutations of ABCD1 gene and phenotype of Vietnamese patients with X-linked adrenoleukodystrophy (X-ALD). *International Journal of Pediatric Endocrinology.* 2013; Suppl 1: 127.
- 42) Ohba C, Osaka H, Iai M, Yamashita S, Suzuki Y, Aida N, Shimozawa N, Takamura A, Doi H, Tomita-Katsumoto A, Nishiyama K, Tsurusaki Y, Nakashima M, Miyake N, Eto Y, Tanaka F, Matsumoto N, Saito H. Diagnostic utility of whole exome sequencing in patients showing cerebellar and/or vermis atrophy in childhood. *Neurogenetics.* 2013;14:225-232.
- 43) Hama K, Nagai T, Nishizawa C, Ikeda K, Morita M, Satoh N, Nakanishi H, Imanaka T, Shimozawa N, Taguchi R, Inoue K, Yokoyama K. Molecular Species of Phospholipids with Very Long Chain Fatty Acids in Skin Fibroblasts of Zellweger Syndrome. *Lipids.* 2013;48:1253-1267.
- 44) Matsui S, Funahashi M, Honda A, Shimozawa N. Newly identified milder phenotype of peroxisome biogenesis disorder caused by mutated PEX3 gene. *Brain Dev-JPN.* 2013;35:842-848. IF 1.542
- 45) Mizuno Y, Ninomiya Y, Nakachi Y, Iseki M, Iwasa H, Akita M, Tsukui T, Shimozawa N, Ito C, Toshimori K, Nishimukai M, Hara H, Maeba R, Okazaki T, Nasser A, Alodaib A, Amoudi MA, Jacob M, Alkuraya FS, Horai Y, Watanabe M, Motegi H, Wakana S, Noda T, Kurochkin IV, Mizuno Y, Schönbach C, Okazaki Y. Tysnd1 deficiency in mice interferes with the peroxisomal localization of PTS2 enzymes, causing lipid metabolic abnormalities and male infertility. *PLoS Genet.* 2013;9:e1003286. IF 8.167
- 46) Morita M, Kobayashi J, Yamazaki K, Kawaguchi K, Honda A, Sugai K, Shimozawa N, Koide R, Imanaka T. A novel double mutation in the ABCD1 gene in a patient with X-linked adrenoleukodystrophy: Analysis of the stability and function of the mutant ABCD1 protein. *JIMD Reports.* 2013;10:95-102.
- 47) Iwasa M, Yamagata T, Mizuguchi M, Itoh M, Matsumoto A, Hironaka M, Honda A, Momoi M, Shimozawa N. Contiguous ABCD1 DXS1357E deletion syndrome: Report of an autopsy case. *Neuropathology.* 2013;33:292-298.
- 48) Yamada M, Tanaka M, Takagi M, Kobayashi S, Taguchi Y, Takashima S, Tanaka K, Touge T, Hatsuta H, Murayama S, Hayashi Y, Kaneko M, Ishiura H, Mitsui J, Atsuta N, Sobue G, Shimozawa N, Inuzuka T, Tsuji S, Hozumi I. Evaluation of SLC20A2 mutations that cause idiopathic basal ganglia

- calcification in Japan. *Neurology*. 2014;82:705-712.
- 49) Kamemura N, Kawamoto N, Nakamura R, Teshima R, Fukao T, Kido H. Low-affinity allergen-specific IgE in cord blood and affinity maturation after birth. *J Allergy Clin Immunol*. 2014;133:904-905. IF 11.248
 - 50) Akella RR, Aoyama Y, Mori C, Lingappa L, Cariappa R, Fukao T. Metabolic encephalopathy in beta-ketothiolase deficiency: the first report from India. *Brain Dev*. 2014;536-537. IF 1.542
 - 51) Kubota K, Ozeki M, Hori T, Kanda K, Funato M, Asano T, Fukao T, Kondo N. Facial palsy as an unusual presenting symptom associated with acute myeloid leukemia. *Pediatr Int*. 2014;56:e37-40. doi: 10.1111/ped.12384. IF 0.735
 - 52) Patel P, Suzuki Y, Tanaka A, Yabe H, Kato S, Shimada T, Mason RW, Orii KE, Fukao T, Orii T, Tomatsu S. Impact of Enzyme Replacement Therapy and Hematopoietic Stem Cell Therapy on Growth in Patients with Hunter Syndrome. *Mol Genet Metab*. 2014;1:184-196. IF 2.287
 - 53) Shimada T, Kelly J, LaMarr WA, van Vlies N, Yasuda E, Mason RW, Mackenzie W, Kubaski F, Giugliani R, Chinen Y, Yamaguchi S, Suzuki Y, Orii KE, Fukao T, Orii T, Tomatsu S. Novel heparan sulfate assay by using automated high-throughput mass spectrometry: Application to monitoring and screening for mucopolysaccharidoses. *Mol Genet Metab*. 2014;113:92-99. doi: 10.1016/j.ymgme.2014.07.008. Epub 2014 Jul 21 IF 2.827
 - 54) Fujisawa T, Fukao T, Shimomura Y, Seishima M. A novel TRPS1 mutation in a family with tricho-rhino-phalangeal syndrome type 1. *J Dermatol*. 2014;41:514-517. doi: 10.1111/1346-8138.12511.
 - 55) Fukao T, Akiba K, Goto M, Kuwayama N, Morita M, Hori T, Aoyama Y, Venkatesan R, Wierenga R, Moriyama Y, Hashimoto T, Usuda N, Murayama K, Ohtake A, Hasegawa Y, Shigematsu Y, Hasegawa Y. The first case in Asia of 2-methyl-3-hydroxybutyryl-CoA dehydrogenase deficiency (HSD10 disease) with atypical presentation. *J Hum Genet*. 2014;59:609-614. doi: 10.1038/jhg.2014.79. Epub 2014 Sep 18. IF 2.526
 - 56) Vatanavicharn N, Yamada K, Aoyama Y, Fukao T, Densupsoontorn N, Jirapinyo P, Sathienkijkanchai A, Yamaguchi S, Wasant P. Carnitine-acylcarnitine translocase deficiency: Two neonatal cases with common splicing mutation and in vitro bezafibrate response. *Brain Dev*. 2014. pii: S0387-7604(14)00253-8. doi: 10.1016/j.braindev.2014.10.005. IF 1.542
 - 57) Kiema TR, Harijan RK, Strozyk M, Fukao T, Alexson SE, Wierenga RK. The crystal structure of human mitochondrial 3-ketoacyl-CoA thiolase (T1): insight into the reaction mechanism of its thiolase and thioesterase activities. *Acta Crystallogr D*. 2014;70:3212-3225. doi: 10.1107/S1399004714023827. Epub 2014 Nov 22. IF 7.232
 - 58) Wang SP, Yang H, Wu JW, Gauthier N, Fukao T, Mitchell GA. Metabolism as a tool for understanding human brain evolution: lipid energy metabolism as an example. *J Hum Evol*. 2014;77:41-49. doi: 10.1016/j.jhevol.2014.06.013. Epub 2014 Dec 6. IF 3.867
 - 59) Yamada M, Tanaka M, Takagi M, Kobayashi S, Taguchi Y, Takashima S, Tanaka K, Touge T, Hatsuta H, Murayama S, Hayashi Y, Kaneko M, Ishiura H, Mitsui J, Atsuta N, Sobue G, Shimozawa N, Inuzuka T, Tsuji S, Hozumi I. Evaluation of SLC20A2 mutations that cause idiopathic basal ganglia calcification in Japan. *Neurology*. 2014;82:705-712. IF 8.303
 - 60) Aihara Y, Oh-oka K, Kondo N, Sharma J, Ishimaru K, Hara M, Yamagata Z, Nakao A. Comparison of colostrum TGF- β 2 levels between lactating women in Japan and Nepal. *Asian Pac J Allergy Immunol*. 2014;32:178-184.
 - 61) Hamasaki Y, Kohno Y, Ebisawa M, Kondo N, Nishima S, Nishimuta T, Morikawa A, Aihara Y, Akasawa A, Adachi Y, Arakawa H, Ikebe T, Ichikawa K, Inoue T, Iwata T, Urisu A, Ohya Y, Okada K, Odajima H, Katsunuma T, Kameda M, Kurihara K, Sakamoto T, Shimojo N, Suehiro Y, Tokuyama K, Nambu M, Fujisawa T, Matsui T, Matsubara T, Mayumi M, Mochizuki H, Yamaguchi K, Yoshihara S. Japanese pediatric guideline for the treatment and management of bronchial asthma 2012. *Pediatr Int*. 2014;56:441-450. IF 0.731
 - 62) Urisu A, Ebisawa M, Ito K, Aihara Y, Ito S, Mayumi M, Kohno Y, Kondo N. Committee for Japanese Pediatric Guideline for Food Allergy, Japanese Society of Pediatric Allergy, Clinical Immunology, Japanese Society of Allergology: Japanese Guideline for Food Allergy 2014. *Allergol Int*. 2014;63:399-419.
 - 63) Katayama I, Kohno Y, Akiyama K, Aihara M, Kondo N, Saeki H, Shoji S, Yamada H, Nakamura K. Japanese Society of Allergology: Japanese Guideline for Atopic Dermatitis 2014. *Allergol Int*. 2014;63:377-398.
 - 64) Hamasaki Y, Kohno Y, Ebisawa M, Kondo N, Nishima S, Nishimuta T, Morikawa A. Japanese Society of Allergology, Japanese Society of Pediatric Allergy, Clinical Immunology: Japanese Guideline for Childhood Asthma 2014. *Allergol Int*. 2014;63:335-356.
 - 65) Yamamoto T, Tsutsumi N, Tochio H, Ohnishi H, Kubota K, Kato Z, Shirakawa M, Kondo N. Functional assessment of the mutational effects of human IRAK4 and MyD88 genes. *Mol Immunol*. 2014;58:66-76. IF 3.003
 - 66) Kimura T, Tsutsumi N, Arita K, Ariyoshi M, Ohnishi H, Kondo N, Shirakawa M, Kato Z, Tochio H. Purification, crystallization and preliminary X-ray crystallographic analysis of human IL-18 and its extracellular complexes. *Acta Crystallogr F Struct Biol Commun*. 2014;70:1351-1356. doi: 10.1107/S2053230X14016926. Epub 2014 Sep 25.

- 67) Funato M, Uemura O, Ushijima K, Ohnishi H, Orii K, Kato Z, Yamakawa S, Nagai T, Ohara O, Kaneko H, Kondo N. A Complement factor B mutation in a large kindred with atypical hemolytic uremic syndrome. *J Clin Immunol.* 2014;34:691-695. IF 2.654
- 68) Tsutsumi N, Kimura T, Ariyoshi M, Ohnishi H, Yamamoto T, Zuo X, Maenaka K, Park EY, Kondo N, Shirakawa M, Tochio H, Kato Z. The structural basis for receptor recognition of human interleukin-18. *Nat Commun.* 2014;5:5340. IF 10.742
- 69) Kamemura N, Kawamoto N, Nakamura R, Teshima R, Fukao T, Kido H. Low-affinity allergen-specific IgE in cord blood and affinity maturation after birth. *J Allergy Clin Immunol.* 2014;133:904-905.
- 70) Tamura K, Matsubara K, Ishiwada N, Nishi J, Ohnishi H, Suga S, Ihara T, Chang B, Akeda Y, Oishi K. Japanese IPD Study Group: Hyporesponsiveness to the infecting serotype after vaccination of children with seven-valent pneumococcal conjugate vaccine following invasive pneumococcal disease. *Vaccine.* 2014;32:1444-1450. IF 3.485
- 71) Ohkuma Y, Hayashi T, Yoshimine S, Tsuneoka H, Terao Y, Akiyama M, Ida H, Ohashi T, Okumura A, Ebihara N, Murakami A, Shimozaawa N. Retinal Ganglion Cell Loss in X-linked Adrenoleukodystrophy with an ABCD1 Mutation (Gly266Arg). *Neuro-Ophthalmology.* 2014;38:331-335.
- 72) Isogawa M, Yoshida S, Shimozaawa N. Evaluation of fourier transform infrared spectroscopy for diagnosis of peroxisomal diseases with abnormal very-long-chain fatty acid metabolism. *Am J Analytical Chemistry.* 2014;5:359-366.
- 73) Kubota K, Ohnishi H, Teramoto T, Kawamoto N, Kasahara K, Ohara O, Kondo N. Clinical and genetic characterization of Japanese sporadic cases of periodic Fever, aphthous stomatitis, pharyngitis and adenitis syndrome from a single medical center in Japan. *J Clin Immunol.* 2014;34:584-593. IF 2.654
- 74) Niwa M, Yoshida S, Takamizawa K, Nagaoka S, Kawakubo N, Takahashi Y, Suzuki Y. Facilitation of web-based internet PBL: what is an adequate group size? *International e-Journal of Science, Medicine & Education.* 2014;8:4-11.
- 75) Patel P, Suzuki Y, Maeda M, Yasuda E, Shimada T, Orii KE, Orii T, Tomatsu S. Growth charts for patients with Hunter Syndrome. *Mol Genet Metab.* 2014;1:5-18. IF 2.827
- 76) Tomatsu S, Shimada T, Mason RW, Kelly J, LaMarr WA, Yasuda E, Shibata Y, Futatsumori H, Montañó AM, Yamaguchi S, Suzuki Y, Orii T. Assay for Glycosaminoglycans by Tandem Mass Spectrometry and its Applications. *J Anal Bioanal Tech.* 2014;(Suppl 2):006 Published online 2014 Mar 1.
- 77) Shimada T, Kelly J, LaMarr WA, van Vlies N, Yasuda E, Mason RW, Mackenzie W, Kubaski F, Giugliani R, Chinen Y, Yamaguchi S, Suzuki Y, Orii KE, Fukao T, Orii T, Tomatsu S. Novel heparan sulfate assay by using automated high-throughput mass spectrometry: Application to monitoring and screening for mucopolysaccharidoses. *Mol Genet Metab.* 2014;113:92-99. IF 2.827
- 78) Shimada T, Tomatsu S, Yasuda E, Mason RW, Mackenzie WG, Shibata Y, Kubaski F, Giugliani R, Yamaguchi S, Suzuki Y, Orii K, Orii T. Chondroitin 6-Sulfate as a Novel Biomarker for Mucopolysaccharidosis IVA and VII. *JIMD Rep.* 2014;16:15-24. doi: 10.1007/8904_2014_311.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：加藤善一郎；科学研究費補助金基盤研究(C)：新規に発見されたインターロイキン 18 阻害剤等によるアレルギー免疫病態解析治療開発；平成 22-24 年度；4,420 千円(1,690：1,430：1,300 千円)
- 2) 研究代表者：松井永子；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：遺伝、環境要因の相互作用がアレルギー発症に及ぼす影響；平成 23-25 年度；4,680 千円(1,820：1,430：1,430 千円)
- 3) 研究代表者：金子英雄；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：抗体産生不全症における臨床経過の多様性とその病態解析—新規治療法の基礎的検討—；平成 23-25 年度；5,200 千円(2,470：1,430：1,300 千円)
- 4) 研究代表者：大西秀典；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：Toll-インターロイキン 1 受容体ドメインの結合特異性を利用した免疫抑制法の開発；平成 23-25 年度；4,160 千円(1,820：1,170：1,170 千円)
- 5) 研究代表者：小関道夫；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：MRP1 モジュレーターのスクリーニング解析方法の確立；平成 23-24 年度；4,030 千円(2,080：1,950 千円)
- 6) 研究代表者：近藤直実；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：アレルギー発症憎悪における体内時計遺伝子と環境相互の分子遺伝学的解析と臨床展開；平成 24-26 年度；5,200 千円(2,080：2,080：1,040 千円)
- 7) 研究代表者：深尾敏幸；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：ケトン体代謝とその異常症の解析—SCOT 発現調節機構の解明を中心にして—；平成 24-26 年度；5,330 千円(1,950：1,690：1,690 千円)

- 8) 研究代表者：深尾敏幸；科学研究費補助金新学術領域研究：Alu 配列と遺伝性疾患の病態に関する研究；平成 24-25 年度；11,440 千円(5,590：5,850 千円)
- 9) 研究代表者：船戸道徳；学術研究助成基金助成金基盤研究(B)：L-アスパラギナーゼによる薬剤性急性膵炎に対する試験管内疾患モデルの開発；平成 24-25 年度；4,160 千円(2,080：2,080 千円)
- 10) 研究代表者：金子英雄，研究分担者：深尾敏幸，加藤善一郎；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：遺伝子修復異常症(Bloom 症候群，Rothmund-thomson 症候群，Baller-Gerold 症候群)の実態調査、早期診断法の確立に関する研究；平成 23-24 年度；1,500 千円(500：1,000 千円)
- 11) 研究代表者：大西秀典，研究分担者：大西秀典，加藤善一郎；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：インターロイキン 1 受容体関連キナーゼ 4(IRAK4)欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニング・治療法開発に関する研究；平成 22-24 年度；40,950 千円(17,550：13,000：10,400 千円)
- 12) 研究代表者：原 寿郎，研究分担者：近藤直実，加藤善一郎；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：原発性免疫不全症候群に関する調査研究；平成 23-25 年度；4,500 千円(1,500：1,500：1,500 千円)
- 13) 研究代表者：海老澤元宏，研究分担者：近藤直実；厚生労働省免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業：小児期の食物アレルギーの新しい診断法・管理法の確立と治療法の開発に関する研究；平成 24-25 年度；2,500 千円(1,000：1,500 千円)
- 14) 研究代表者：大田 健，研究分担者：近藤直実；厚生労働省免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業：気管支喘息に対する喘息死の予防や自己管理手法の普及に関する研究；平成 24-25 年度；2,000 千円(1,000：1,000 千円)
- 15) 研究代表者：平家俊男，研究分担者：近藤直実；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：自己炎症疾患とその類縁疾患に対する新規診療基盤の確立；平成 24-25 年度；3,500 千円(2,000：1,500 千円)
- 16) 研究代表者：小関道夫，研究分担者：小関道夫，近藤直実；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：リンパ管腫症の全国症例数把握及び診断・治療法の開発に関する研究；平成 24-25 年度；5,226 千円(2,950：2,276 千円)
- 17) 研究代表者：遠藤文夫，研究分担者：深尾敏幸；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：新しい新生児代謝スクリーニング時代に適応した先天代謝異常症の診断基準作成と治療ガイドラインの作成および新たな薬剤開発に向けた調査研究；平成 24 年度；3,500 千円
- 18) 研究代表者：山口清次，研究分担者：深尾敏幸；厚生労働省成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業：タンデムマス導入による新生児マスマスクリーニング体制の整備と質的向上に関する研究；平成 24 年度；200 千円
- 19) 研究代表者：川本典生；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：臍帯血を用いた出生コホート研究によるアレルギー疾患に関わる遺伝子のスクリーニング；平成 24 年度；770 千円
- 20) 研究代表者：船戸道徳；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：Li-Fraumeni 様症候群患者疾患特異的 iPS 細胞を用いた発癌機構の解明；平成 24 年度；770 千円
- 21) 研究代表者：大西秀典；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：悪性リンパ腫発生に関与する MyD88 体細胞変異の構造学的検討；平成 24 年度；770 千円
- 22) 研究代表者：小関道夫；森永奉仕会研究奨励金：抗癌剤耐性機構の解析と多剤耐性関連蛋白質(MRP1)モジュレーターの開発；平成 23 年度；50 万円
- 23) 研究代表者：近藤直実；独立行政法人環境保全機構委託業務：気管支ぜん息発症予防のための客観的かつテーラーメイド的予知のスクリーニング基準の確立；平成 24-26 年度；10,400 千円(5,200：5,200 千円)
- 24) 研究代表者：近藤直実；糧食研究会：牛乳アレルギーなどの新規治療開発と予知予防；平成 23-25 年度；1,600 千円
- 25) 研究代表者：臼井規朗，研究分担者：小関道夫；厚生労働科学研究費補助金難治性疾患等政策研究事業：小児呼吸器形成異常・低形成疾患に関する実態調査ならびに診療ガイドライン作成に関する研究；平成 26 年度；250 千円
- 26) 研究代表者：三村秀文，研究分担者：小関道夫；厚生労働科学研究費補助金難治性疾患等政策研究事業：難治性血管腫・血管奇形・リンパ管種・リンパ管種症および関連疾患についての調査研究；平成 26 年度；850 千円
- 27) 研究代表者：田口智章，研究分担者：小関道夫；厚生労働科学研究費補助金難治性疾患等政策研究事業：小児期からの希少難治性消化管疾患の移行期を包含するガイドラインの確立に関する研究；平成 26 年度；200 千円
- 28) 研究代表者：藤野明浩，研究分担者：小関道夫；厚生労働科学研究委託費難治性疾患実用化研究事業：先天性リンパ管疾患の診療指針作成および病理・細胞生物学的知見の臨床応用へ向けた研究；

- 平成 26 年度；1000 千円
- 29) 研究代表者：岡 明, 研究分担者：松井永子；厚生労働省科学研究費補助金食品の安全確保推進研究事業：母乳のダイオキシン類汚染の実態調査と乳幼児の発達への影響に関する研究；平成 26 年度；400 千円
 - 30) 研究代表者：深尾敏幸, 研究分担者：深尾敏幸；厚生労働省科学研究費補助金難治性疾患等政策研究事業：HSD10 病の発症形態と患者数の把握、診断基準の作成に関する研究；平成 26 年度；1,400 千円
 - 31) 研究代表者：遠藤文夫, 研究分担者：深尾敏幸；厚生労働省研究費補助金難治性疾患等政策研究事業：新しい先天代謝異常症スクリーニング時代に適応した治療ガイドラインの作成および生涯にわたる診療体制の確立に向けた調査研究；平成 26 年度；1,200 千円
 - 32) 研究代表者：深尾敏幸；厚生労働省科学研究委託費難治性疾患実用化研究事業：新生児タンデムマスキリーニング対象患者の診療ガイドライン改訂、診療の質を高めるための研究；平成 26 年度；29,900 千円
 - 33) 研究代表者：佐藤典宏, 研究分担者：深尾敏幸；厚生労働省研究費補助金医療技術実用化総合研究事業：新規医薬品・医療機器等の創出、難治性疾患の治療法の開発および最適な治療法の確立に関する研究；平成 26 年度；400 千円
 - 34) 研究代表者：平家俊男, 研究分担者：大西秀典；厚生労働省研究費補助金難治性疾患等政策研究事業：自己炎症性疾患とその類縁疾患の診断基準、重症度分類、診療ガイドライン確立に関する研究；平成 26 年度；1,000 千円
 - 35) 研究代表者：斎藤加代子, 研究分担者：加藤善一郎；厚生労働省研究費補助金難治性疾患等実用化研究事業：小児期発症脊髄性筋萎縮症に対するバルプロ酸ナトリウム多施設共同医師主導治験準備研究；平成 26 年度；1,000 千円
 - 36) 研究代表者：野々山恵章, 研究分担者：加藤善一郎；厚生労働省研究費補助金難治性疾患等政策研究事業：原発性免疫不全症候群の診断基準・重症度分類および診療ガイドラインの確立に関する研究；平成 26 年度；500 千円
 - 37) 研究代表者：野々山恵章, 研究分担者：加藤善一郎；厚生労働省科学研究委託費難治性疾患等政策研究事業：原発性免疫不全症候群の病態解明と新規治療法開発への応用に関する研究；平成 26 年度；1,000 千円
 - 38) 研究代表者：船戸道徳, 研究分担者：加藤善一郎；厚生労働省研究委託費難治性疾患等克服研究事業：脊髄性筋萎縮症患者細胞により新たに同定した薬剤候補により iPS 細胞を用いた非臨床試験及び薬剤臨床治験準備研究；平成 26 年度；2,500 千円
 - 39) 研究代表者：川本典生；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：免疫寛容誘導に関わるバイオマーカーの網羅的探索とその診断技術の確立；平成 26-27 年度；4,030 千円(1,820：2,210 千円)
 - 40) 研究代表者：久保田一生；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：アレルギー疾患発症の解明に向けた Toll 様受容体 10 を介したシグナル伝達経路解析；平成 25-27 年度；4,030 千円(1,690：1,170：1,170 千円)
 - 41) 研究代表者：堀 友博；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：スプライシングオーダー解析による組織特異的な選択的スプライシング機構の解明；平成 26-27 年度；3,900 千円(1,950：1,950 千円)
 - 42) 研究代表者：加藤善一郎；科学研究費補助金基盤研究(C)：新規 IL18 阻害剤臨床応用研究及びβ-trefoil 型サイトカイン分子標的薬探索；平成 25-27 年度；5,070 千円(1,820：1,690：1,560 千円)
 - 43) 研究代表者：折居建治；科学研究費補助金基盤研究(C)：ムコ多糖症に対する新薬治療薬の安全性と効果に関する研究；平成 26-28 年度；4,680 千円(1,950：1,300：1,430 千円)
 - 44) 研究代表者：大西秀典；科学研究費補助金基盤研究(C)：クライオパイリン関連周期熱症候群の発症機序の構造生物学的解明；平成 26-28 年度；4,810 千円(1,950：1,430：1,430 千円)
 - 45) 研究代表者：小関道夫；科学研究費補助金基盤研究(C)：難治性血管腫・リンパ管種に対するプロプラノロール療法の確立；平成 25-27 年度；3,800 千円(1,400：1,400：1,000 千円)
 - 46) 研究代表者：深尾敏幸；科学研究費補助金新学術領域研究：ヒトゲノムにおける Alu 配列の遺伝性疾患、遺伝的多様性に与える影響に関する研究；平成 26-27 年度；9,900 千円(5,460：3,540 千円)
 - 47) 研究代表者：野坂俊介, 研究分担者：小関道夫；成育医療研究開発費：小児リンパ管疾患の実態調査および鑑別診断基準・治療指針の作成；平成 26 年度；300 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

近藤直実：

- 1) 日本小児科学会代議員(～現在)
- 2) 日本小児科学会施設認定・指導責任医(～現在)
- 3) 日本小児科学会専門医(～現在)
- 4) 日本小児科学会東海地方会理事長(～現在)
- 5) 日本小児科学会東海地方会理事(～現在)
- 6) 日本小児科学会東海地方会幹事(～現在)
- 7) 日本アレルギー学会常務理事(財務担当, 専門医制度担当)(～現在)
- 8) 日本アレルギー学会理事(～現在)
- 9) 日本アレルギー学会施設認定・指導医(～現在)
- 10) 日本アレルギー学会専門医(～現在)
- 11) 日本アレルギー学会アトピー性皮膚炎ガイドライン専門部委員(～現在)
- 12) 日本小児アレルギー学会理事(～現在)
- 13) 日本小児アレルギー学会理事長(～現在)
- 14) 日本小児アレルギー学会喘息治療・管理ガイドライン委員(～現在)
- 15) 日本小児アレルギー学会食物アレルギー委員(～現在)
- 16) 日本人類遺伝学会施設認定・指導医(～現在)
- 17) 日本人類遺伝学会専門医(～現在)
- 18) 日本小児保健協会評議員・支部長(～現在)
- 19) 食物アレルギー研究会世話人(～現在)

深尾敏幸：

- 1) 日本先天代謝異常学会評議員(～現在)
- 2) 日本先天代謝異常学会理事(～現在)
- 3) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)
- 4) 日本小児科学会東海地方会幹事(～現在)
- 5) 日本人類遺伝学会指導医(～現在)
- 6) 日本小児科学会代議員(～現在)
- 7) 日本マスキリーニング学会評議員(～現在)
- 8) 日本マスキリーニング学会理事(平成 25 年度～現在)
- 9) 日本アレルギー学会代議員(～現在)
- 10) 東海臨床遺伝・代謝懇話会世話人(～現在)

金子英雄：

- 1) 日本アレルギー学会代議員(～現在)
- 2) 日本小児科学会東海地方会幹事(～現在)
- 3) 日本小児科学会代議員(～現在)

加藤善一郎：

- 1) 日本小児科学会代議員(～現在)
- 2) 日本アレルギー学会代議員(～現在)
- 3) 日本アレルギー学会広報委員(～現在)
- 4) 日本アレルギー学会化粧品中のタンパク加水分解物の安全性に関する特別委員(～現在)
- 5) 日本小児アレルギー学会選挙管理委員(～現在)
- 6) 日本小児神経学会評議員(～現在)

- 7) 日本小児神経学会東海地方会世話人(～現在)
- 8) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)
- 9) 日本小児科学会東海地方会幹事(～現在)

寺本貴英：

- 1) 日本小児科学会東海地方会幹事(～現在)
- 2) 日本アレルギー学会代議員(～現在)

松井永子：

- 1) 日本アレルギー学会代議員(～現在)
- 2) 日本小児科学会代議員(～現在)
- 3) 日本小児科学会東海地方会幹事(～現在)

折居建治：

- 1) 日本小児科学会東海地方会幹事(～現在)

2) 学会開催

- 1) 第15回岐阜小児感染症懇話会(平成24年3月, 岐阜)
- 2) 第155回岐阜県小児科懇話会(平成24年3月, 岐阜)
- 2) 第155回岐阜県小児科懇話会(平成24年3月, 岐阜)
- 3) 第5回岐阜免疫・感染・川崎病研究会(平成24年7月, 岐阜)
- 4) 第16回東海小児感染症研究会(平成24年10月, 名古屋)
- 5) 岐阜県小児保健協会総会・岐阜県こどもの健康を考えるつどい(平成24年10月, 岐阜)
- 6) 第16回岐阜県小児感染症懇話会(平成25年1月, 岐阜)
- 7) 第10回岐阜小児血液免疫アレルギー難治疾患研究会(平成25年2月, 岐阜)
- 8) 第2回岐阜県小児臨床アレルギー研究会(平成25年2月, 岐阜)
- 9) 第8回岐阜小児アレルギー・喘息研究会(平成25年6月, 岐阜)
- 10) 岐阜県小児保健協会総会・第24回岐阜県こどもの健康を考えるつどい(平成25年10月, 岐阜)
- 11) 第259回日本小児科学会東海地方会(平成25年10月, 岐阜)
- 12) 第3回岐阜小児臨床アレルギー研究会(平成26年3月, 岐阜)
- 13) 第11回岐阜小児血液免疫アレルギー難治疾患研究会(平成26年6月, 岐阜)
- 14) 第7回岐阜免疫・感染・川崎病研究会(平成26年7月, 岐阜)
- 15) 障がい児者医療従事者育成シンポジウム(平成26年7月, 岐阜)
- 16) 第45回岐阜エPILEPSY研究会(平成26年9月, 岐阜)
- 17) 岐阜県小児保健協会総会・第25回岐阜県こどもの健康を考えるつどい(平成26年10月, 岐阜)

3) 学術雑誌

近藤直実：

- 1) Journal of Investigational Allergology & Clinical Immunology ; 編集委員(～現在)
- 2) アレルギーの領域 ; 編集顧問(～現在)
- 3) International Review of Asthma ; 編集委員(～現在)
- 4) Pediatric Allergy for Clinicians ; 顧問(～現在)
- 5) Pediatric Allergy Immunology ; Editorial Board(～現在)

深尾敏幸：

- 1) Case Reports in Medicine ; Editorial Board(～現在)
- 2) Intractable & Rare Diseases Research ; Editorial Board(～現在)

加藤善一郎：

- 1) Journal of Pediatric Neurology ; Asian Editor(～現在)

大西秀典：

- 1) The Scientific World JOURNAL ; Editorial Board(～現在)

7. 学会招待講演、招待シンポジスト、座長

近藤直実：

- 1) 第18回岐阜アレルギー疾患治療研究会(平成24年1月, 岐阜, 特別講演I「小児の慢性咳嗽の病態と治療」座長)
- 2) 第5回日本免疫不全症研究会(平成24年1月, 東京, 一般口演D 座長)
- 3) 第9回岐阜小児血液免疫アレルギー難治疾患研究会(平成24年2月, 岐阜, 特別講演「原発性免疫不全症候群の疫学と病態」座長)
- 4) 第12回食物アレルギー研究会(平成24年2月, 東京, 特別講演「食物アレルギー診療ガイドライン2012(JPGFA2012)作成を振り返って」座長)
- 5) 第1回岐阜小児臨床アレルギー研究会(平成24年2月, 岐阜, 特別講演「アトピー性皮膚炎に関する最近の話題」座長)
- 6) 第1回名古屋西臨床アレルギー研究会(平成24年3月, 名古屋, 特別講演「喘息、アレルギー治療の現在から近未来へ」演者)
- 7) 第15回岐阜小児感染症懇話会(平成24年3月, 岐阜, 特別講演「自然免疫異常と小児疾患」座長)
- 8) 第9回日本喘息・COPDフォーラム総会(平成24年3月, 東京, 基調講演「New strategy targeted to individual treatment」座長)
- 9) 第11回 Kinki Hokuriku Airway disease Conference(平成24年4月, 大阪, session2「アレルギー疾患のピットホール」座長)
- 10) 第115回日本小児科学会学術集会(平成24年4月, 福岡, 分野別シンポジウム1「食物アレルギーの日常管理と問題点(診断と治療)」座長)
- 11) 第115回日本小児科学会学術集会(平成24年4月, 福岡, 教育セミナー21「アトピー性皮膚炎におけるアレルギーの意味と治療的介入の実際」座長)
- 12) 第24回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成24年5月, 大阪, シンポジウム1「小児喘息から成人喘息治療への移行」演者)
- 13) 第161回東三河小児科医会学術講演会(平成24年5月, 豊橋, 特別講演「喘息・アレルギーの治療の現在から近未来へ」演者)
- 14) 第24回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成24年5月, 大阪, ランチプログラム6「食物アレルギー診療ガイドライン2012の実地臨床への応用」座長)
- 15) 第24回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成24年5月, 大阪, ランチプログラム12「食物アレルギーの日常診療における特異的IgE検査の活用」座長)
- 16) 第24回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成24年5月, 大阪, シンポジウム27「食物アレルギー診療ガイドライン」座長)
- 17) 第4回小児気道アレルギーフォーラム(平成24年6月, 京都, セッション2「小児喘息における新たな治療をどう考えるか」座長)
- 18) 第7回岐阜小児アレルギー・喘息研究会(平成24年6月, 岐阜, 特別講演「食物アレルギー診療ガイドライン2012のポイント」座長)
- 19) アドエア発売5周年記念講演会(平成24年6月, 岐阜「小児領域から：小児喘息患児のQOL向上を目指して～合剤の役割とその普及～」座長)
- 20) 第43回日本職業・環境アレルギー学会総会・学術大会ーアレルギーの原点をめざしてー(平成24年6月, 東京, 特別講演「気管支喘息の発症要因とその遺伝的背景ー職業環境アレルゲンを中心としてー」座長)
- 21) The 22nd Congress of Interasma Japan / North Asia(2012.07, Fukuoka, ランチョンセミナーI「小児喘息の長期管理」演者)
- 22) 第36回日本小児皮膚科学会学術大会(平成24年7月, 群馬, モーニングセミナー「アトピー性皮膚炎ー治療の工夫ー」座長)
- 23) 第5回岐阜免疫・感染・川崎病研究会(平成24年7月, 岐阜, 特別講演「小児における抗菌薬の適生使用」座長)
- 24) Premium Symposium for pediatric practices 2012～小児呼吸器疾患のトータルマネジメント～(平成24年8月, 東京, 学術講演「小児軽症喘息における“Early Supporting Use”ー新たなエビデンスからの問題提起と今後の課題ー. 小児咳嗽マネジメントの最前線」座長)
- 25) 小児軽症喘息マネジメント2012(平成24年8月, 岐阜, 「小児気管支喘息治療・管理ガイドライン2012を紐解く. 小児軽症喘息の新たな展開ーEarly Supporting Useを中心にー」座長)
- 26) 第48回中部日本小児科学会ランチョンセミナー(平成24年8月, 福井, 特別講演「アレルギー性鼻

- 炎の基礎と臨床」座長)
- 27) 滋賀県小児アレルギー研究会(平成 24 年 9 月, 滋賀, 特別講演 2「喘息・アレルギーの治療の現在から近未来へ」演者)
 - 28) 第 49 回日本小児アレルギー学会(平成 24 年 9 月, 大阪, 教育セミナー12「小児気管支喘息の寛解と治癒を獲得するために—新たな戦略—」演者)
 - 29) 第 49 回日本小児アレルギー学会(平成 24 年 9 月, 大阪, 招待講演 1「The human microbiome in the origins of asthma and atopy」座長)
 - 30) 第 49 回日本小児アレルギー学会(平成 24 年 9 月, 大阪, シンポジウム 8「なでしこシンポジウム—女性研究者支援を考える—」座長)
 - 31) Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiriology & Immunology 2012 (APAPARI 2012)(2012.10, Taiwan, symposium4: Drug Allergy and Anaphylaxis in the New Century; moderator)
 - 32) 第 16 回東海小児感染症研究会(平成 24 年 10 月, 名古屋, 特別講演「ラボからみた予防接種の方法」座長)
 - 33) Symposium for Pediatrics 2012(平成 24 年 10 月, 東京, 「第 1 部 小児科医療の Hot Topics」座長)
 - 34) 第 15 回東葛地区喘息懇話会(平成 24 年 11 月, 千葉, 特別講演「喘息のテーラーメイド医療—治癒を獲得するための新たな戦略—」演者)
 - 35) 第 62 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 24 年 11 月, 大阪, シンポジウム 5「思春期喘息—小児科・内科のスムーズな連携を目指して—」座長)
 - 36) 第 62 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 24 年 12 月, 大阪, 教育セミナー20「小児気管支喘息と末梢気道病変」座長)
 - 37) 第 62 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 24 年 12 月, 大阪, 招請講演「From a sneeze to wheeze and dyspnea」座長)
 - 38) 第 16 回岐阜小児感染症懇話会(平成 25 年 1 月, 岐阜, 特別講演「小児感染症の診断法とそのピットホール—適切な治療のために—」座長)
 - 39) 第 50 回アレルギー Q&A 研究会(平成 25 年 1 月, 大阪, 特別講演 2「アレルギー治療の近未来—治癒を獲得するための新たな提言—」演者)
 - 40) 第 13 回食物アレルギー研究会(平成 25 年 1 月, 東京, 特別講演「食物アレルギー診療はまさに個別化医療」演者)
 - 41) 第 2 回岐阜県小児内分泌・代謝研究会(平成 25 年 2 月, 岐阜, 特別講演「リソソーム病の臨床と研究の進歩」座長)
 - 42) 第 10 回岐阜小児血液免疫アレルギー難治疾患研究会(平成 25 年 2 月, 岐阜, 特別講演「プロテオミクスと iPS 細胞の医学研究における位置付け—疾患関連タンパク質の構造生物学的研究と分子イメージング法の開発—」座長)
 - 43) 第 2 回岐阜小児臨床アレルギー研究会(平成 25 年 2 月, 岐阜, 特別講演「アトピー性皮膚炎とタクロリムス軟膏」座長)
 - 44) 小児気管支喘息ファーストキプレス細粒 4mg 発売 5 周年記念講演会(平成 25 年 2 月, 熊本, 特別講演「喘息・アレルギー治療の近未来—癒を獲得するための新たな提言—」演者)
 - 45) 第 63 回東海小児アレルギー談話会(平成 25 年 3 月, 名古屋, 特別講演「喘息, アレルギーの治療を獲得するために—新たな提言—両輪療法—」演者)
 - 46) 第 12 回 Kinki Hokuriku Airway disease Conference(KiHAC)(平成 25 年 4 月, 大阪, Session2「アレルギー疾患のピットホール」座長)
 - 47) 第 116 回日本小児科学会学術集会(平成 25 年 4 月, 広島, 教育セミナー23「小児喘息の現状と課題」座長)
 - 48) 第 25 回日本アレルギー学会(平成 25 年 5 月, 横浜, シンポジウム 1「アレルギーの発症メカニズムと予防」座長)
 - 49) 第 25 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 25 年 5 月, 横浜, 教育セミナー16「小児アレルギー疾患における Th2 阻害療法の位置づけ」座長)
 - 50) 第 8 回岐阜小児アレルギー・喘息研究会(平成 25 年 6 月, 岐阜, シンポジウム「喘息におけるロイコトリエン受容体拮抗薬の役割—新たな視点から—」座長)
 - 51) 第 3 回岐阜小児臨床アレルギー研究会(平成 26 年 3 月, 岐阜, 特別講演 1「食物アレルギーの診療の実際—乳児期発症のアトピー性皮膚炎も含めて—」座長)

深尾敏幸：

- 1) 第 115 回日本小児科学会学術集会(平成 24 年 4 月, 福岡, 分野別シンポジウム 4-3「有機酸代謝異常症の治療戦略」演者)
- 2) The 8th Congress of Asian Society for Pediatric Research(2012.05, Korea, Free Paper2: Genetics and Metabolism; 座長)
- 3) 第 24 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 24 年 5 月, 大阪, ミニシンポジウム 5「小児気管支喘息 1」座長)
- 4) Annual symposium of Society for the Study of Inborn Errors of Metabolism(2012.09, Birmingham, An Exonic splicing enhancer mutation indentified in German beta-ketothiolase deficient patients; 演者)
- 5) 第 54 回日本先天代謝異常学会総会/第 11 回アジア先天代謝異常症シンポジウム(平成 24 年 11 月, 岐阜, 学会賞受賞講演「ケトン体代謝異常症の病態解明に関する研究」演者)
- 6) 第 54 回日本先天代謝異常学会総会/第 11 回アジア先天代謝異常症シンポジウム(平成 24 年 11 月, 岐阜, シンポジウム「若手の人材育成, 臨床能力の修得戦略」演者)
- 7) 第 54 回日本先天代謝異常学会総会/第 11 回アジア先天代謝異常症シンポジウム(平成 24 年 11 月, 岐阜, イブニングセミナー「Fatty acid oxidation and carnitine」座長)
- 8) 12th International Congress of Inborn Errors of Metabolism(2013.09, Barcelona, Workshop; Keton body metabolism and its defects; 演者)
- 9) 第 18 回日本神経感染症学会(平成 25 年 10 月, 宮崎, シンポジウム 4「ケトン代謝異常症と急性脳症」演者)
- 10) The 3rd Asian Congress for Inherited Metabolic Diseases(ACIMD)/The 55th Annual Meeting of the Japanese Society for Interited Metabolic Diseases(JSIMD)(2013.11, Maihama, Chiba, Educatipnal lecture9; Inborn errors of ketogenesis and ketone body utilization; 演者)
- 11) The 3rd Asian Congress for Inherited Metabolic Diseases(ACIMD)/55th Annual Meeting of the Japanese Society for Interited Metabolic Diseases(JSIMD)(2013.11, Maihama, Chiba, O-31; The first case of HSD10 disease(2-Methyl-3-Hydroxybutyryl-CoA dehydrogenase deficiency) from Asia; 演者)
- 12) In 1st Asia Pacific IEM course(2014.01, Tokyo, Keton body metabolism and its defrccts; 演者)
- 13) 平成 25 年度岐阜県医師会アレルギーフォーラム(平成 26 年 3 月, 岐阜, 特別講演「食物アレルギーとアナフィラキシーへの対応」座長)
- 14) 第 11 回岐阜小児血液免疫アレルギー難治疾患研究会(平成 26 年 6 月, 岐阜, 特別講演「小児てんかん治療の考え方」座長)
- 15) 第 9 回岐阜小児アレルギー・喘息研究会(平成 26 年 6 月, 岐阜, 講演「アレルギー児への予防接種と投薬への注意」座長)
- 16) 第 7 回岐阜免疫・感染・川崎病研究会(平成 26 年 7 月, 岐阜, 特別講演「当院における難治性川崎病の治療戦略～冠動脈後遺症ゼロを目指して～」座長)
- 17) International Conference on Inborn Errors of Metabolism and 3rd National Conference of ISIEM(2014.11, Hyderabad, 招待講演; Clinical Importance of ketone body metabolism abnd its defects; 演者)
- 18) Seminar in National Hospital of Pediatrics(2014.11, Hanoi, 招待講演; Ketone body metabolism and its defects; 演者)

加藤善一郎：

- 1) 第 15 回岐阜小児感染症懇話会(平成 24 年 3 月, 岐阜, 講演「感染免疫関連分子のタンパク構造解析」演者)
- 2) 第 54 回日本小児神経学会総会(平成 24 年 5 月, 札幌, 講演「Thyrotropin-releasing hormone therapy in spinal muscular atrophy -3D motion analysis-」演者)
- 3) 第 67 回岐阜臨床神経集談会(平成 24 年 7 月, 岐阜, 講演「脊髄性筋萎縮症における TRH 療法一定量の評価法としての 3 次元運動解析の応用」演者)
- 4) 第 49 回日本小児アレルギー学会(平成 24 年 9 月, 大阪, シンポジウム 4「Pros and Cons : バリア障害か炎症か」座長)
- 5) 第 57 回日本人類遺伝学会(平成 24 年 10 月, 東京, 講演「脊髄性筋萎縮症における TRH 療法-New outcome measure ととしての 3 次元運動解析の応用」演者)

- 6) 第 68 回岐阜臨床神経集談会(平成 24 年 12 月, 岐阜, 講演「脊髄性筋萎縮症における TRH 療法— 定量的評価法としての 3 次元運動解析の応用 第 2 報—」 演者)
- 7) 第 49 回中部日本小児科学会(平成 25 年 8 月, 四日市, 一般講演「アレルギー免疫不全」 座長)

寺本貴英 :

- 1) 第 24 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 24 年 5 月, 大阪, 講演「血清病様の経過をとったアセトアミノフェンによる薬剤アレルギーの一例」 演者)
- 2) 第 29 回日本小児難治喘息アレルギー疾患学会(平成 24 年 6 月, 大阪, シンポジウム「学校におけるアレルギー疾患のある子どもの支援の在り方」 座長)
- 3) Abbott Japan 小児軽症喘息マネジメント 2012(平成 24 年 8 月, 岐阜, 講演 I 「小児気管支喘息・管理ガイドライン 2012 を紐解く」 演者)
- 4) 予防接種講演会(平成 24 年 10 月, 揖斐, 特別講演「最近の小児予防接種について パートⅢ」 演者)

折居建治 :

- 1) 第 54 回日本小児神経学会総会(平成 24 年 5 月, 札幌, 講演「著明な低カルニチン血症と胆汁うっ滞肝障害をきたしたミオチューブラーミオパチーの 1 例」 演者)
- 2) 第 48 回中部日本小児科学会(平成 24 年 8 月, 福井, 講演「新生児期発症のミトコンドリア呼吸鎖 ComplexIV 欠損症の一例」 演者)

松井永子 :

- 1) 第 24 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 24 年 5 月, 大阪, ミニシンポジウム 17「気管支喘息のテーラーメイド的予知および予防指導の試み」 演者)
- 2) 第 49 回日本小児アレルギー学会(平成 24 年 9 月, 大阪, シンポジウム 8「アレルギー疾患のテーラーメイド医療をめざして」 演者)
- 3) 第 25 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 25 年 5 月, 横浜, シンポジウム 1「アレルギー発症のテーラーメイド予知予防」 演者)
- 4) 第 25 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 25 年 5 月, 横浜, イブニングシンポジウム 2「発症予防の遺伝子ターゲット」 演者)
- 5) 第 26 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 26 年 5 月, 京都, ミニシンポジウム口演 12「抗原感作」 座長)

船戸道徳 :

- 1) 第 115 日本小児科学会学術集会(平成 24 年 4 月, 福岡, 「新規 B 因子機能獲得型変異を有する非典型的溶血性尿毒症症候群の 1 家系」 演者)
- 2) 第 54 回日本小児血液・がん学会学術総会(平成 24 年 11 月, 横浜, 講演「Li-Fraumeni 症候群及び Li-Fraumeni 様症候群のがん対策に向けた実態調査」 演者)

大西秀典 :

- 1) 第 255 回日本小児科学会東海地方会(平成 24 年 1 月, 津, 講演「有熱症状を認めず長期間原因不明であった Castleman 病の一例」 演者)
- 2) 第 5 回日本免疫不全症研究会(平成 24 年 1 月, 東京, 講演「STAT1 遺伝子に変異を有する常染色体優性慢性皮膚粘膜カンジダ症に合併した慢性活動性肝炎の病態について」 演者)
- 3) 第 9 回岐阜小児血液免疫アレルギー難治疾患研究会(平成 24 年 2 月, 岐阜, 講演「難治性免疫異常症の診断戦略について—当科で長期間にわたり診断困難であった 3 症例をモデルケースに—」 演者)
- 4) 8th International Congress on Autoimmunity(2012.05, Spain, Characterization of NLRP3 Variants in Japanese Cryopyrin-associated Periodic Syndrome Patients; 演者)
- 5) 第 54 回日本小児神経学会総会(平成 24 年 5 月, 札幌, 講演「頭蓋内出血を繰り返した Hoyeraal-Hreidarsson Syndrome が疑われる男児例」 演者)
- 6) The 22nd Congress of Interasma Japan / North Asia(2012.07, Fukuoka, Molecular analysis of signal transduction pathway of IL-18, related with allergic condition; 演者)
- 7) Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiritology & Immunology (APAPARI) 2012(2012.10, Taiwan, The functional assessments of mutational effect of human IRAK4 and MyD88 gene; 演者)

- 8) 第 63 回日本皮膚科学会中部支部学術大会(平成 24 年 10 月, 大阪, 講演「遺伝性自己炎症疾患の臨床像と診断フローチャート」 演者)
- 9) 第 16 回東海小児感染症研究会(平成 24 年 10 月, 名古屋, 講演「自然免疫異常症(IRAK4 欠損症・MyD88 欠損症)の全国症例実態調査について」 演者)
- 10) 第 26 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 26 年, 5 月, 東アジア・アレルギーシンポジウム 2014 「Structural basis for the receptor recognition of interleukin-18」 演者)

川本典生 :

- 1) 第 61 回東海小児アレルギー談話会(平成 24 年 3 月, 名古屋, 講演「臍帯血を用いた出生コホート研究-3 歳のアレルギー性疾患の発症に関わる因子の検討-」 演者)
- 2) 第 24 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 24 年 5 月, 大阪, ミニシンポジウム 17「臍帯血を用いた出生コホート研究-3 歳のアレルギー性鼻炎の発症に関わる因子の検討-」 演者)
- 3) 第 49 回日本小児アレルギー学会(平成 24 年 9 月, 大阪, 講演「末梢血のサイトカインプロファイルから見た IgE 症例のスクリーニングについての検討」 演者)
- 4) Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiratory & Immunology (APAPARI) 2012 (2012.10, Taiwan, The Role of Myeloid Cells in the Generation of Regulatory T Cells Induced by Amino Acid Copolymers; 演者)
- 5) 第 62 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 24 年 11 月, 大阪, 講演「新規多発性硬化症治療薬 poly[Y, F, A, K] の骨髄系細胞に対する効果についての検討」 演者)
- 6) 第 63 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 25 年 11 月, 東京, シンポジウム 5 食物アレルギー最前線「「食べて治す」免疫学的抗原改変食品の開発と治療法の確立」 演者)

戸松俊治 :

- 1) 第 9 回血管腫・血管奇形研究会(平成 24 年 7 月, 長崎「乳児血管腫に対するプロプラノロール療法とリンパ管腫に対する治療経験」 演者)
- 2) 第 54 回日本先天代謝異常学会(平成 24 年 11 月, 岐阜, 講演「Establishment of Morquio tissue repository bank」 演者)
- 3) 第 54 回, 日本先天代謝異常学会(平成 24 年 11 月, 岐阜, 講演「Newborn screening and biomarkers for mucopolysaccharidoses」 演者)
- 4) 第 54 回日本先天代謝異常学会(平成 24 年 11 月, 岐阜, Comparison of liquid chromatography-tandem mass spectrometry and sandwich ELISA for determination of keratan sulfate in plasma and urine. u T, Orii T. Comparison of liquid chromatography-tandem mass spectrometry and sandwich ELISA for determination of keratan sulfate in plasma and urine; 演者)

神田香織 :

- 1) 第 54 回日本小児血液・がん学会学術集会/第 10 回日本小児がん看護学会/第 17 回公益財団法人がんの子どもを守る会シンポジウム(平成 24 年 12 月, 横浜, 講演「小脳髄芽腫早期再発に対し大量化学療法および再放射線治療を行った 5 歳男児例」 演者)

小関道夫 :

- 1) 第 115 回日本小児科学会(平成 24 年 4 月, 福岡, 講演「小児血管腫・血管奇形に対するプロプラノロール療法の有効性と血漿中 VEGF 値の意義」 演者)
- 2) 第 9 回血管腫・血管奇形研究会(平成 24 年 7 月, 長崎, パネルディスカッション「乳児血管腫に対するプロプラノロール療法とリンパ管腫に対する治療経験」 演者)
- 3) 第 54 回日本小児血液・がん学会学術集会/第 10 回日本小児がん看護学会/第 17 回公益財団法人がんの子どもを守る会シンポジウム(平成 24 年 12 月, 横浜, 講演「乳児血管腫とリンパ管腫に対する Propranolol 療法および血管新生因子の臨床的意義」 演者)
- 4) 第 54 回日本小児血液・がん学会学術集会/第 10 回日本小児がん看護学会/第 17 回公益財団法人がんの子どもを守る会シンポジウム(平成 24 年 12 月, 横浜, 講演「同種移植後完全ドナータイプの骨髄不全症をきたした Refractory cytopenia of childhood の 1 例」 演者)

久保田一生 :

- 1) 8th International Congress on Autoimmunity(2012.05, Spain, Atypical periodic autoinflammatory

syndrome patients with a mutation the leucine-rich repeat domain of NLRP3 in Japanese children; 演者)

- 2) The 22nd Congress of Interasma Japan / North Asia(2012.07, Fukuoka, 気管支喘息のテーラーメイド的予知および予防指導の試み; 演者)

堀 友博 :

- 1) Annual symposium of Society for the Study of Inborn Errors of Metabolism(SSiEM) (2012.09, Birmingham, Molecular basis of two exon skipping (exons 12 and 13) by c. 1248+5G>A in fibroblasts from a SCOT deficient patient. Study of splicing order in SCOT transcripts in fibroblasts from controls and the patient. Annual symposium of Society for the Study of Inborn Errors of Metabolism; 演者)
- 2) 第14回東海小児内分泌セミナー(平成26年5月, 名古屋, 一般講演 座長)

山本崇裕 :

- 1) 第62回日本アレルギー学会秋季大会(平成24年11月, 大阪, 講演「IRAK4欠損症, MyD88欠損症の全国症例調査及び診断・治療方法の確立に向けた解析」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 川本典生 : 岐阜医学奨励賞(平成26年度)
- 2) 大西秀典 : 岐阜大学藤原賞(平成26年度)

9. 社会活動

近藤直実 :

- 1) 日本アレルギー学会評議員(～現在)
- 2) 岐阜県小児保健協会会長(～現在)
- 3) 日本小児アレルギー学会理事長(～現在)
- 4) 日本小児科学会東海地方会理事長(～現在)
- 5) 日本アレルギー学会常務理事(財務, 専門医制担当)(～現在)
- 6) 日本小児科学会代議員(～現在)
- 7) 日本小児科学会中部地区資格認定委員会委員(～現在)

深尾敏幸 :

- 1) 岐阜県小児保健協会常任理事(～現在)
- 2) 岐阜県小児保健協会会長(平成26年～現在)
- 3) 岐阜県予防接種健康被害調査専門医師集団専門医師(～現在)
- 4) 岐阜市保育所児童の健康を考える会委員(委員長) (～平成25年度)
- 5) 岐阜市こどもの健康を考えるつどい委員長(～平成25年度)
- 6) 岐阜市保健医療審議会委員(～現在)
- 7) 岐阜市予防接種健康被害調査委員会委員(～現在)
- 8) 岐阜市遺伝相談医(～現在)

加藤善一郎 :

- 1) 岐阜圏域小児救急医療協議会(～現在)
- 2) 岐阜市小児救急医療体制運営部会委員(～現在)
- 3) 岐阜県児童虐待対応リーフレット作成検討会委員(～現在)

折居建治 :

- 1) 岐阜市小児慢性特定疾患対策協議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県小児慢性特定疾患対策協議会委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 大西秀典, 久保田一生, 山本崇裕, 加藤善一郎, 金子英雄, 近藤直実: IKBA 遺伝子に新規変異を有する外胚葉形成不全免疫不全症の病態解析と迅速診断スクリーニングについて : 平成23年度厚生労働

- 科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 原発性免疫不全症候群に関する調査研究 総括・分担研究報告書(原班)：91-95(平成24年3月)
- 2) 大西秀典, 谷内江昭宏, 大石和徳, 加藤善一郎, 高田英俊, 西小森隆太, 桁尾豪人: インターロイキン1受容体関連キナーゼ4(IRAK4)欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニング・治療法開発に関する研究: 平成23年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 総括研究報告書(大西班)：1-12(平成24年3月)
 - 3) 大西秀典, 山本崇裕, 久保田一生, 松井永子, 寺本貴英, 加藤善一郎, 金子英雄, 近藤直実: IRAK4欠損症及びMyD88欠損症の全国症例調査(二次調査)結果について: 平成23年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 インターロイキン1受容体関連キナーゼ4(IRAK4)欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニング・治療法開発に関する研究 分担研究報告書(大西班)：13-16(平成24年3月)
 - 4) 大西秀典, 堤尚孝, 桁尾豪人, 山本崇裕, 久保田一生, 木村豪, 加藤善一郎, 近藤直実: Myddosome異常症で同定されるIRAK4及びMyD88遺伝子型のin vitro機能解析法の確立: 平成23年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 インターロイキン1受容体関連キナーゼ4(IRAK4)欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニング・治療法開発に関する研究 分担研究報告書(大西班)：17-21(平成24年3月)
 - 5) 大西秀典, 山本崇宏, 久保田一生, 加藤善一郎, 金子英雄, 近藤直実: 新規に同定された常染色体優性遺伝無汗性外胚葉形成不全免疫不全症(AD-EDA-ID)症例におけるIKBA遺伝子型の機能解析について: 平成23年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 インターロイキン1受容体関連キナーゼ4(IRAK4)欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニング・治療法開発に関する研究 分担研究報告書(大西班)：22-25(平成24年3月)
 - 6) 大西秀典, 山本崇宏, 久保田一生, 加藤善一郎, 金子英雄, 近藤直実: 新規に同定された常染色体優性遺伝無汗性外胚葉形成不全免疫不全症(AD-EDA-ID)症例におけるIKBA遺伝子型の機能解析について: 平成23年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 インターロイキン1受容体関連キナーゼ4(IRAK4)欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニング・治療法開発に関する研究 分担研究報告書(大西班)：22-25(平成24年3月)
 - 7) 加藤善一郎, 桁尾豪人, 久保田一生, 木村豪, 川本典生, 大西秀典, 近藤直実: IRAK4と関連する分子群の相互作用解析について: 平成23年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 インターロイキン1受容体関連キナーゼ4(IRAK4)欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニング・治療法開発に関する研究 分担研究報告書(大西班)：41-44(平成24年3月)
 - 8) 金子英雄, 田内久道, 山崎直也, 滝田順子, 内田靖, 清河信敬, 谷内江昭宏, 深尾敏幸: 遺伝子修復異常症(Bloom症候群、Rothmund-Thomson症候群、RAPADILINO症候群、Baller-Gerold症候群)の実態調査、早期診断法の確立に関する研究: 平成23年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 総括研究報告書(金子班)：1-12(平成24年3月)
 - 9) 深尾敏幸: Bloom症候群の最近の海外の報告: 平成23年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 遺伝子修復異常症(Bloom症候群、Rothmund-Thomson症候群、RAPADILINO症候群、Baller-Gerold症候群)の実態調査、早期診断法の確立に関する研究 分担研究報告書(金子班)：37-38(平成24年3月)
 - 10) 深尾敏幸, 堀川玲子, 新宅治夫, 高柳正樹, 重松陽介, 山口清次: 先天性ケトン体代謝異常症(HMG-CoA合成酵素欠損症、HMG-CoAリアーゼ欠損症、 β -ケトチオラーゼ欠損症、SCOT欠損症)の発症形態と患者数の把握、診断治療指針に関する研究: 平成23年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 総括研究報告書(深尾班)：1-15(平成24年3月)
 - 11) 深尾敏幸: 過去5年間のケトン体代謝異常症に関する相談、活性測定、遺伝子解析に関する検討: 平成23年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 先天性ケトン体代謝異常症(HMG-CoA合成酵素欠損症、HMG-CoAリアーゼ欠損症、 β -ケトチオラーゼ欠損症、SCOT欠損症)の発症形態と患者数の把握、診断治療指針に関する研究 分担研究報告書(深尾班)：17-19(平成24年3月)
 - 12) 深尾敏幸: SCOT欠損症の遺伝子診断に関する研究 MLPA法の確立: 平成23年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 先天性ケトン体代謝異常症(HMG-CoA合成酵素欠損症、HMG-CoAリアーゼ欠損症、 β -ケトチオラーゼ欠損症、SCOT欠損症)の発症形態と患者数の把握、診断治療指針に関する研究 分担研究報告書(深尾班)：33-34(平成24年3月)
 - 13) 深尾敏幸, 山口清次, 重松陽介, 高柳正樹, 新宅治夫, 堀川玲子: 先天性ケトン体代謝異常症(HMG-CoA合成酵素欠損症、HMG-CoAリアーゼ欠損症、 β -ケトチオラーゼ欠損症、SCOT欠損症)の発症形態

- と患者数の把握、診断治療指針に関する研究：平成 22～23 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 統括総合研究報告書(深尾班)：1-15(平成 24 年 3 月)
- 14) 深尾敏幸：ケトン体代謝異常症の患者調査、酵素遺伝子診断. 平成 22～23 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 先天性ケトン体代謝異常症(HMG-CoA 合成酵素欠損症、HMG-CoA リアーゼ欠損症、 β -ケトチオラーゼ欠損症、SCOT 欠損症)の発症形態と患者数の把握、診断治療指針に関する研究 分担総合研究報告書(深尾班)：17-21(平成 24 年 3 月)
 - 15) 船戸道徳, 小島勢二, 鶴澤正仁, 水谷修紀, 金子英雄, 永船建二：Li-Fraumeni 症候群とその類縁症候群の実態調査及び悪性腫瘍の発症予防法と治療法の確立に関する研究：平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 総括研究報告書(船戸班)：1-16(平成 24 年 3 月)
 - 16) 船戸道徳, 松井永子, 近藤直実：Li-Fraumeni 症候群とその類縁症候群の実態調査について：平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 Li-Fraumeni 症候群とその類縁症候群の実態調査及び悪性腫瘍の発症予防法と治療法の確立に関する研究 分担研究報告書(船戸班)：17-20(平成 24 年 3 月)
 - 17) 深尾敏幸：確定診断技術の向上 HMG-CoA リアーゼ欠損症の遺伝子解析体制の検討. 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金 成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業 タンデムマス導入による新生児マスマスクリーニング胎生の整備と質的向上に関する研究 総括・分担研究報告書(山口班)：34-35(平成 24 年 3 月)
 - 18) 近藤直実, 松井永子, 木全かおり：気管支ぜん息発症予防のための客観的かつテーラーメイド的予知のスクリーニング基準マニュアル(案)：平成 24 年度独立行政法人環境再生保全機構委託業務 気管支ぜん息発症予防のための客観的かつテーラーメイド的予知のスクリーニング基準の確立 マニュアル(近藤班)：1-7(平成 25 年 2 月)
 - 19) 近藤直実, 松井永子, 加藤善一郎, 篠田紳司, 福富 悌：気管支ぜん息発症予防のための客観的かつテーラーメイド的予知のスクリーニング基準の確立：平成 24 年度独立行政法人 環境再生保全機構委託業務 報告書(近藤班)：1-152(平成 25 年 3 月)
 - 20) 近藤直実, 大西秀典, 加藤善一郎, 川本典生, 木村 豪, 久保田一生, 山本崇裕：TIR ドメイン含有アダプター分子 TRAM の新規機能の解明：平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 原発性免疫不全症候群に関する調査研究 分担研究報告書(原班)：1-26(平成 25 年 3 月)
 - 21) 金子英雄, 深尾敏幸, 谷内江昭宏, 清河信敬, 内田 靖, 滝田順子, 山崎直也, 田内久道, 加藤善一郎：遺伝子修復異常症(Bloom 症候群、Rothmund-Thomson 症候群、RAPADILINO 症候群、Baller-Gerold 症候群)の実態調査、早期診断法の確立に関する研究：平成 23～24 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 総合研究報告書(金子班)：1-26(平成 25 年 3 月)
 - 22) 金子英雄, 谷内江昭宏, 田内久道, 加藤善一郎：Bloom 症候群の全国調査の解析：平成 23～24 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 遺伝子修復異常症(Bloom 症候群、Rothmund-Thomson 症候群、RAPADILINO 症候群、Baller-Gerold 症候群)の実態調査、早期診断法の確立に関する研究 分担研究報告書(金子班)：27-30(平成 25 年 3 月)
 - 23) 金子英雄, 深尾敏幸：本邦 Bloom 症候群における BLM 遺伝子変異の解析：平成 23～24 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 遺伝子修復異常症(Bloom 症候群、Rothmund-Thomson 症候群、RAPADILINO 症候群、Baller-Gerold 症候群)の実態調査、早期診断法の確立に関する研究 分担研究報告書(金子班)：34-36(平成 25 年 3 月)
 - 24) 小関道夫, 藤野明浩, 黒田達夫, 近藤直実：リンパ管腫症の全国症例数把握及び診断・治療法の開発に関する研究：平成 24 年度厚生労働か開く研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 リンパ管腫症の全国症例数把握及び診断・治療法の開発に関する研究 総括研究報告書(小関班)：1-23(平成 25 年 3 月)
 - 25) 小関道夫, 神田香織, 東 英一, 加藤善一郎, 深尾敏幸, 近藤直実：リンパ管腫症、リンパ管奇形に対する新規治療開発に関する研究：平成 24 年度厚生労働か開く研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 リンパ管腫症の全国症例数把握及び診断・治療法の開発に関する研究 分担研究報告書(小関班)：25-27(平成 25 年 3 月)
 - 26) 近藤直実, 神田香織, 小関道夫, 松井永子, 加藤善一郎, 深尾敏幸：乳児血管腫に対するプロプラノロール療法について：平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 リンパ管腫症の全国症例数把握及び診断・治療法の開発に関する研究 分担研究報告書(小関班)：28-30(平成 25 年 3 月)
 - 27) 大西秀典, 谷内江昭宏, 加藤善一郎, 高田英俊, 西小森隆太, 桁尾豪人, 大石和徳, 明田幸宏：インターロイキン 1 受容体関連キナーゼ 4(IRAK4)欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニン

- グ・治療法開発に関する研究：平成 23～24 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 総合研究報告書(大西班)：1-105(平成 25 年 3 月)
- 28) 大西秀典, 谷内江昭宏, 加藤善一郎, 高田英俊, 西小森隆太, 桁尾豪人, 明田幸宏: インターロイキン 1 受容体関連キナーゼ 4(IRAK4)欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニング・治療法開発に関する研究:平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 総括研究報告書(大西班)：1-4(平成 25 年 3 月)
- 29) 大西秀典, 山本崇裕, 堤 尚孝, 桁尾豪人, 木村 豪, 久保田一生, 加藤善一郎, 近藤直実: Myddosome 異常症で同定される IRAK4 及び MyD88 遺伝子型の in vitro 機能解析法の確立:平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 インターロイキン 1 受容体関連キナーゼ 4(IRAK4)欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニング・治療法開発に関する研究 分担研究報告書(大西班)：5-8(平成 25 年 3 月)
- 30) 大西秀典, 堀 友博, 寺本貴英, 近藤直実:STAT1 機能獲得型変異により発症した慢性皮膚粘膜カンジダ症の 1 家系:平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 インターロイキン 1 受容体関連キナーゼ 4(IRAK4)欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニング・治療法開発に関する研究 分担研究報告書(大西班)：9-13(平成 25 年 3 月)
- 31) 加藤善一郎, 大西秀典:自然免疫関連分子を標的とした薬剤開発研究:平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 インターロイキン 1 受容体関連キナーゼ 4(IRAK4)欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニング・治療法開発に関する研究 分担研究報告書(大西班)：31-3(平成 25 年 3 月)
- 32) 深尾敏幸:代表的疾患における診断基準策定のための検討と先天性ケトン体代謝異常症の研究:平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服事業 新しい新生児代謝スクリーニング時代に適応した先天代謝異常症の診断基準作成と診療ガイドラインの作成および新たな薬剤開発に向けた調査研究 平成 24 年度 総括・分担研究報告書(研究代表者 遠藤文夫)：61-66(平成 25 年 3 月)
- 33) 深尾敏幸:Rothmund-Thompson 症候群の Clinical utility gene card に関する検討:平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服事業 遺伝子修復異常症(Bloom 症候群、Rothmund-Thomson 症候群、PARADILINO 症候群、Baller-Gerold 症候群)の実態調査, 早期診断法の確立に関する研究 総括・分担研究報告書：28-31(平成 25 年 3 月)
- 34) 金子英雄, 深尾敏幸:本邦 Bloom 症候群における BLM 遺伝子変異の解析:平成 23～24 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服事業 遺伝子修復異常症(Bloom 症候群、Rothmund-Thomson 症候群、PARADILINO 症候群、Baller-Gerold 症候群)の実態調査, 早期診断法の確立に関する研究 総合研究報告書：34-36(平成 25 年 3 月)
- 35) 深尾敏幸, 青山友佳:確定診断技術の向上(GC/MS, 酵素診断、遺伝子診断) CPT2, CACT 欠損症のための MLPA 法の確立に関する研究:平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金 成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業 タンデムマス導入による新生児マススクリーニング胎生の整備と質的向上に関する研究 平成 24 年度 総括・分担研究報告書(研究代表者 山口清次)：36-37(平成 25 年 3 月)
- 36) 近藤直実:NLRP3 バリエントと MEFV ハプロタイプバリエントの共保有症例における自己炎症性疾患発症の可能性について:平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 自己炎症疾患とその類縁疾患に対する新規診療基盤の確立 総括・分担研究報告書(平家班)：99-103(平成 25 年)
- 37) 近藤直実, 松井永子, 金子英雄, 大西秀典, 加藤善一郎, 川本典生:食物アレルギーの新規予知診断法と免疫学的改変食品による治療法の確立:平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 小児期の食物アレルギーの新しい診断法・管理法の確立と治療法の開発に関する研究 総括・分担研究報告書(海老澤班)：25-27(平成 25 年)
- 38) 加藤善一郎:分類不能型免疫不全症における遺伝子・分子病態解析:平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 原発性免疫不全症候群に関する調査研究 総括・分担研究報告書(原班)：60-63(平成 26 年)
- 39) 小関道夫:リンパ管種症, リンパ管奇形に対する新規治療開発に関する研究:平成 24～25 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 難治性疾患克服研究事業 リンパ管種症の全国症例数把握及び診断・治療法の開発に関する研究 平成 24, 25 年度総合研究報告書(小関班)：43-45(平成 26 年)
- 40) 近藤直実:乳児血管腫に対するプロプラノロール療法について:平成 24～25 年度厚生労働科学研究

- 費補助金 難治性疾患等克服研究事業 難治性疾患克服研究事業 リンパ管種症の全国症例数把握及び診断・治療法の開発に関する研究 平成 24, 25 年度総合研究報告書(小関班) : 46-48(平成 26 年)
- 41) 小関道夫: リンパ管種症およびゴーハム病の全国調査結果: 平成 24~25 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 難治性疾患克服研究事業 リンパ管種症の全国症例数把握及び診断・治療法の開発に関する研究 平成 24, 25 年度総合研究報告書(小関班) : 53-66(平成 26 年)
- 42) 小関道夫: リンパ管種症およびゴーハム病の診断基準・治療指針作成: 平成 24~25 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 難治性疾患克服研究事業 リンパ管種症の全国症例数把握及び診断・治療法の開発に関する研究 平成 24, 25 年度総合研究報告書(小関班) : 67-73(平成 26 年)
- 43) 小関道夫: 乳児血管腫に対するプロプラノロール療法と血漿中 VEGF 値: 平成 24~25 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 難治性疾患克服研究事業 リンパ管種症の全国症例数把握及び診断・治療法の開発に関する研究 平成 24, 25 年度総合研究報告書(小関班) : 74-77(平成 26 年)
- 44) 小関道夫: リンパ管種症(ゴーハム病)の全国調査と診断基準・治療指針作成: 平成 24~25 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 難治性疾患克服研究事業 リンパ管種症の全国症例数把握及び診断・治療法の開発に関する研究 平成 25 年度総括・分担研究報告書(小関班) : 1-11(平成 26 年)
- 45) 小関道夫: リンパ管種症およびゴーハム病の全国調査結果: 平成 24~25 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 難治性疾患克服研究事業 リンパ管種症の全国症例数把握及び診断・治療法の開発に関する研究 平成 25 年度総括・分担研究報告書(小関班) : 19-32(平成 26 年)
- 46) 小関道夫: リンパ管種症およびゴーハム病の診断基準・治療指針作成: 平成 24~25 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 難治性疾患克服研究事業 リンパ管種症の全国症例数把握及び診断・治療法の開発に関する研究 平成 25 年度総括・分担研究報告書(小関班) : 33-39(平成 26 年)
- 47) 小関道夫: 乳児血管腫に対するプロプラノロール療法と血漿中 VEGF 値: 平成 24~25 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業 難治性疾患克服研究事業 リンパ管種症の全国症例数把握及び診断・治療法の開発に関する研究 平成 25 年度総括・分担研究報告書(小関班) : 40-43(平成 26 年)
- 48) 松井永子: 乳幼児の健康影響調査: 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 食品の安全確保推進研究事業 母乳のダイオキシン類汚染の実態調査と乳幼児の発達への影響に関する研究 平成 25 年度総括・分担研究報告書(岡班) : 65-67(平成 26 年)
- 49) 深尾敏幸: 代表的疾患における診療ガイドライン案策定のための検討と先天性ケトン代謝異常症の診療ガイドライン案の作成: 平成 24~25 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服事業 新しい新生児代謝スクリーニング時代に適応した先天代謝異常症の診断基準策士絵と診療ガイドラインの作成および新たな薬剤開発に向けた調査研究 平成 25 年度総括・分担研究報告書(遠藤班) : 61-63(平成 26 年)
- 50) 深尾敏幸: 代表的疾患における診断基準, 診療ガイドライン案策定のための検討と先天性ケトン代謝異常症の診療ガイドラインと総合的な対策について: 平成 24~25 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服事業 新しい新生児代謝スクリーニング時代に適応した先天代謝異常症の診断基準策士絵と診療ガイドラインの作成および新たな薬剤開発に向けた調査研究 平成 24-25 年度総合研究報告書(遠藤班) : 93-96(平成 26 年)
- 51) 加藤善一郎: IL-18 リガンド受容体複合体タンパク立体構造情報を基盤とした抗 IL-18 薬の設計に関する研究: 平成 26 年度厚生労働科学研究委託事業 難治性疾患等実用化研究事業 原発性免疫不全症候群の病態解明と新規治療法開発への応用に関する研究 平成 26 年度分担研究報告書(野々山班) : 79-82(平成 26 年)
- 52) 加藤善一郎: 免疫不全を伴う特徴的な症候群 Bloom 症候群、シムケ症候群における診断基準・診断フローチャート試案に関する研究: 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等政策研究事業実 原発性免疫不全症候群の診断基準・重症度分類および診療ガイドラインの確立に関する研究 平成 26 年度総括・分担研究報告書(野々山班) : 28-29(平成 26 年)
- 53) 加藤善一郎: 自然免疫不全症の診断基準の作成について: 平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等政策研究事業実 原発性免疫不全症候群の診断基準・重症度分類および診療ガイドラインの確立に関する研究 平成 26 年度総括・分担研究報告書(野々山班) : 51-52(平成 26 年)

11. 報道

- 1) 近藤直実, 寺本貴英, 松井永子: 2月20日はアレルギーの日ー日常生活の質向上目指すー: 岐阜新聞(2012年2月20日)
- 2) 近藤直実: 治癒と予防を: 岐阜新聞(2012年2月25日)
- 3) 松井永子: 患者に応じた「個別化医療」普及へー薬剤反応性を3つに分類し表に QOL 調査票簡易改訂版も作成ー: 教育医事新聞(2012年2月25日)
- 4) 松井永子: 教えてホームドクター 子どもの湿疹ー清潔がケアの基本ー: 岐阜新聞(2012年3月5日)
- 5) 加藤善一郎: 大学はいまー研究室からー 構造医学で疾病の原因解明: 岐阜新聞(2012年3月20日)
- 6) 折居建治: 新生児医療「集中治療部」を新設ーNICU など12床ー: 中日新聞(2012年3月30日)
- 7) 折居建治: 新生児の集中治療充実ー1日に部を新設ー: 岐阜新聞(2012年3月30日)
- 8) 折居建治: 岐阜大病院に新生児 ICU: 朝日新聞(2012年3月30日)
- 9) 近藤直実, 折居建治: 新生児集中治療部の開設にあたって: 鶴舟(2012年4月1日)
- 10) 寺本貴英: 教えてホームドクター 気管支喘息ーアレルギーが主因ー: 岐阜新聞(2012年5月14日)
- 11) 寺本貴英: 教えてホームドクター 子どもの不慮の事故ー死因の筆頭、予防を: 岐阜新聞(2012年7月23日)
- 12) 寺本貴英: 教えてホームドクター 不活化ポリオワクチン導入ー少ない副反応、利点ー: 岐阜新聞(2012年9月24日)
- 13) 近藤直実: 第23回県こどもの健康を考えるつどい: 岐阜新聞(2012年9月27日)
- 14) 寺本貴英: 子の病気予防テーマに講演ー岐阜でつどいー: 岐阜新聞(2012年10月5日)
- 15) 深尾敏幸: 「謎の病」診断法解けたー先天性ケトン体代謝異常症ー: 中日新聞(2012年11月15日)
- 16) 深尾敏幸: ケトン体代謝異常の原因特定ー深尾岐阜大教授に学会賞ー: 岐阜新聞(2012年11月16日)
- 17) 寺本貴英: 教えてホームドクター 食物アレルギー: 岐阜新聞(2013年4月1日)
- 18) 金子英雄, 船戸道徳: iPS で治療薬研究: 岐阜新聞(2013年8月25日)
- 19) 折居建治: 県内 NICU 連携が不可欠: 岐阜新聞(2013年12月11日)
- 20) 深尾敏幸: 障害者医療講座開設へ: 中日新聞(2014年1月8日)
- 21) 下澤伸行: 難病患者の家族, 岐阜大医学部で講演: 岐阜新聞(2014年1月15日)
- 22) 川本典生: 食物アレルギー学ぶ: 岐阜新聞(2014年2月18日)
- 23) 深尾敏幸: 正しい理解でアレルギー克服を: 岐阜新聞(2014年2月20日)
- 24) 大西秀典: 大学はいま研究室から「自然免疫異常症の病態解析»: 岐阜新聞(2014年3月4日)
- 25) 近藤直実: アドレナリン自己注射薬の使い方ー日本小児アレルギー学会の見解, info Allergy June, No.68(2014年6月)
- 26) 堀 友博: からだにスマイル 子どもの身長が気になったら早めに小児科へ: 幼稚園児とママの情報誌 あんふあん東海版(2014年7月)
- 27) 西村悟子: 「若手小児科医が語る障がい児医療への思い」座談会: 岐阜新聞(2014年7月12日)
- 28) 西村悟子: 発達障害児の親支援. 県内の女性小児科医研究会が初会合: 岐阜新聞(2014年7月14日)
- 29) 小関道夫: 複数の診療科で遭遇しうる「リンパ管種」の実像: 日経メディカル(2014年7月25日)
- 30) 西村悟子: 障害児者医療の課題探る 岐阜市で従事者シンポ: 岐阜新聞(2014年7月29日)
- 31) 深尾敏幸: 新生生前診断, 来春にも開始 県内初, 岐阜大病院に遺伝子診療部: 岐阜新聞(2014年10月2日)
- 32) 深尾敏幸: 県初の出生前診断, 来春から岐阜大病院遺伝子診療部を新設: 中日新聞(2014年10月2日)
- 33) 川本典生: エピペン実習: 岐阜新聞(2014年10月17日)
- 34) 深尾敏幸: 子どもの事故予防を, 岐阜市でつどい保健師が実践発表: 岐阜新聞(2014年10月18日)
- 35) 川本典生: 病児の食事、知識深める, 岐阜市保育士らが研修会: 岐阜新聞(2014年11月28日)
- 36) 山本崇裕: 介護やリハビリに熱視線, 岐阜大4年生が障がい児者医療実習: 岐阜新聞(2014年12月6日)
- 37) 山本崇裕: 来年9月「希望が丘こども医療福祉センター」座談会, 障がい児にかける夢: 岐阜新聞(2014年12月13日)
- 38) 加藤善一郎, 大西秀典: 岐阜大, 立体構造を解明リウマチ, アレルギーの原因物質: 岐阜新聞, 岐阜新聞 WEB (2014年12月16日)
- 39) 加藤善一郎: リウマチ, アトピー治療に光, 原因タンパク質構造解明: 中日新聞(2014年12月16日)

日)

- 40) リウマチ、アレルギー原因物質の立体構造解明 新薬の開発に前進：47NEWS(2014年12月16日)
- 41) 岐阜大、立体構造を解明 リウマチ、アレルギー原因物質：Yahoo!ニュース(2014年12月16日)
- 42) IL-18と受容体 α 、 β との複合体構造を解明 副作用の出にくい新薬の開発に期待：バイオの杜(2014年12月16日)
- 43) 関節リウマチなど免疫・神経難病の原因物質となる立体構造を解明 - 岐阜大：マイナビニュース、Yahoo!ニュース、excite ニュース、woman.excite ニュース、livedoor news,infoseek ニュース、goo ニュース、Yomerumo ニュース、Mapion ニュース、ニコニコニュース、アメーバニュース、トピックジャーニー、グノシー(2014年12月17日)
- 44) 岐阜大・京大、免疫誘導たんぱく質「インターロイキン18」の受容体との結合構造解明：日刊工業新聞 Business Line(2014年12月17日)
- 45) 木村 豪：リウマチなどの原因物質を解明：NHK 東海 NEWS WEB(2014年12月19日)

12. 自己評価

評価

総合的にはそれなりの評価はできるが、今後も引き続き研究成果と業績のさらなる維持、向上が望まれる。

現状の問題点及びその対策

これまでいくつかの分野で世界をリードした研究がおこなわれてきており、それを継続、発展させていくことが重要であるが、研究を目指す小児科医が少なくなっている点が問題である。リサーチマインドを持った臨床医をそだてるためにも研究は必要であり、積極的に働きかけていきたい。

今後の展望

国の目指す薬の開発につながる研究を行っていくことが重要であり、各分野においてシーズを開拓していく。

(8) 病態情報解析医学分野

1. 研究の概要

1) スタチン製剤の副作用としての筋障害

コレステロール低下薬である HMGCoA reductase 阻害剤であるいわゆるスタチン系薬剤の副作用である筋障害と遺伝子多型との関連性について検討し、さらに副作用発症機序の解明。

2) 肝炎発症機序

CH-B (B 型慢性肝炎) における Impaired CTL proliferation の機序の解明及び IDO の肝炎発症における役割。

3) NASH の発症機序について

動物モデルを用いて、分子生物学的見地からアポトーシス、オートファジーおよび線維化を評価。

4) 心筋細胞におけるオートファジー

オートファジーの役割と心機能に与える影響を絶食および心筋梗塞モデルを用いて検討。

5) プロテオーム解析

種々疾患における血清を解析し、病態を反映する新しいマーカーを見出し同定する。

2. 名簿

教授：	清島 満	Mitsuru Seishima
講師：	伊藤弘康	Hiroyasu Ito
併任講師：	金森寛充	Hiromitsu Kanamori
臨床講師：	白上洋平	Yohei Shirakami
助教(検査部)：	岩佐将充	Masamitsu Iwasa
助教：	加藤 卓	Taku Kato
助教：	有岡祐子	Yuko Arioka

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 林 晃司, 保科ひづる, 稲垣勇夫, 清島 満監修. 髄液細胞検査尿門編～これだけは理解しよう～サムソン法細胞数算定と分類, 名古屋: 臨床一般検査研究会; 2012 年.
- 2) 篠田貢一. 心電図—心臓の構造と正常心電図: 藤井徹也, 佐藤道子編. 看護学生のための看護技術 よくわかる BOOK, 東京: メヂカルフレンド社; 2012 年: 8—17.
- 3) 篠田貢一. 心電図の異常: 藤井徹也, 佐藤道子編. 看護学生のための看護技術 よくわかる BOOK, 東京: メヂカルフレンド社; 2012 年: 18—28.
- 4) 篠田貢一. 血圧の異常—高血圧と心臓の構造—: 藤井徹也, 佐藤道子編. 看護学生のための看護技術 よくわかる BOOK, 東京: メヂカルフレンド社; 2012 年: 35—42.
- 5) 清島 満. 「脂質・リポ蛋白」: 高木 康・山田俊幸編. 標準臨床検査医学 第 4 版, 東京: 医学書院; 2013 年: 163—175.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 佐藤正夫, 竹村正男, 渡邊恒夫, 福岡大輔, 清水克時. 超音波三次元イメージングを用いた関節リウマチ手指関節内血流量量化の試み, 別冊整形外科 2012 年; 62 巻: 188—193.
- 2) 清島 満. 脂質異常症の治療～動脈硬化予防の戦略として～, 臨床病理 2013 年; 61 巻: 334—341.
- 3) 兼村信宏, 鶴見 寿, 森脇久隆. 「血小板輸血不応症」, 日本臨床 血液症候群(第 2 版)(II), 別冊日本臨床 2013 年; 393—395.
- 4) 佐藤正夫, 竹村正男, 渡邊恒夫, 福岡大輔. 超音波三次元イメージングによる手指関節内血流量量化, 日本臨床 2014 年; 72 巻: 258—261.

総説 (欧文)

- 1) Murakami Y, Hoshi M, Imamura Y, Arioka Y, Yamamoto Y, Saito K. Remarkable role of indoleamine 2,3-dioxygenase and tryptophan metabolites in infectious diseases: potential role in macrophage-mediated inflammatory diseases. Mediators of Inflammation. 2013;2013:391984.

原著 (和文)

- 1) 佐藤正夫, 竹村正男, 渡邊恒夫, 福岡大輔, 関根綾子, 清島 満, 松岡敏男, 清水克時. 超音波 3D イメージングを用いた関節リウマチの手指関節炎評価, 日本整形外科超音波研究会会誌 2012 年; 23 巻: 40

- 2) 足立真理子, 星 雅人, 牛丸星子, 服部高幸, 林 麻実, 稲垣勇夫, 伊藤弘康, 清島 満. 多項目自動血球分析装置 XE-5000 による体腔液細胞測定の検討—夜間・休日対応への取り組み—, 医学検査 2012 年; 61 巻: 133-139.
- 3) 山岸由佳, 三鴨廣繁, 末松寛之, 澤村治樹, 波多野正和, 太田浩敏, 浅野裕子, 石郷潮見. 岐阜県下および愛知県北部における肺炎球菌の疫学解析~2009 年~, THE JAPANESE JOURNAL OF ANTIBIOTICS 2012 年; 65 巻: 27-47.
- 4) 寺林伸夫, 伊藤芳毅, 松本 和, 瀧上伊織, 清水克時, 渡邊恒夫, 関根綾子. 夜間痛を伴う腱板断裂患者に対する超音波ドブラ血流評価, 肩関節 2012 年; 36 巻: 507-510.
- 5) 太田浩敏, 宮崎 崇, 仲本賢太郎, 米玉利 準, 竹村正男. 当院で分離された血液由来カンジダ属の検出状況および薬剤感受性について, 岐阜県臨床検査技師会雑誌 2012 年; 41 巻: 1-3.
- 6) 奥村陽子, 大楠清文, 宮崎 崇, 太田浩敏, 永井美貴, 清島真理子. 犬口傷後に生じた *Mycobacterium chelonae* 皮膚感染症の一例, 皮膚科の臨床 2012 年; 54 巻: 365-368.
- 7) 村上啓雄, 深尾亜由美, 丹羽 隆, 太田浩敏, 伊藤善規. 大学病院での取り組み 適切なチーム医療活動と各職種メンバーの役割 -岐阜大学医学部附属病院 ICT における抗菌薬適正使用の取り組み-, 月刊地域医学 2012 年; 26 巻: 316-321.
- 8) 丹羽 隆, 篠田康孝, 鈴木昭夫, 大森智史, 太田浩敏, 深尾亜由美, 安田 満, 北市清幸, 松浦克彦, 杉山 正, 村上啓雄, 伊藤善規. Infection Control Team による全入院患者を対象とした注射用抗菌薬適正使用 推進実施体制の確立とアウトカム評価, 医療薬学 2012 年; 38 巻: 273-281.
- 9) 寺林伸夫, 福田 雅, 伊藤芳毅, 松本 和, 瀧上伊織, 渡邊恒夫, 関根綾子, 清水克時. 肩関節周囲血流と臨床症状との関連—超音波ドブラ法を用いた夜間痛のある腱板断裂の血流評価—, 関節外科 2012 年; 31 巻: 734-740.
- 10) 石田秀和, 宮崎 崇, 鍋谷洋介, 中山純里, 浅野栄太, 安藤航平, 小池紀子, 古田伸行, 竹村正男, 伊藤弘康, 清島 満. ADVIA Centaur XP によるプロカルシトニン測定試薬「ケミルミ BRAHMS プロカルシトニン」の基礎的検討, 医学と薬学 2012 年; 68 巻: 519-528.
- 11) 林 麻実, 星 雅人, 牛丸星子, 足立真理子, 古田伸行, 伊藤弘康, 清島 満. 全自動血液凝固測定装置 CS-5100 と全自動凝固線溶装置 STA-R Evolutio の比較検討, Sysmex Journal 2012 年; 35 巻(Suppl.1): 45-56.
- 12) 牛丸星子, 稲垣勇夫, 足立真理子, 星 雅人, 古田伸行, 竹村正男, 伊藤弘康, 清島 満. 上皮円柱の検証と意義について—上皮円柱を円柱内上皮細胞 3 個以上とする妥当性に関する検討—, 医学検査 2012 年; 61 巻: 736-740.
- 13) 石田秀和, 宮崎 崇, 鍋谷洋介, 中山純里, 浅野栄太, 安藤航平, 小池紀子, 古田伸行, 竹村正男, 伊藤弘康, 清島 満. ケミルミ ADVIA Centaur XP によるプロカルシトニン測定試薬「ケミル BRAHM プロカルシトニン」の基礎的検討, 医学と薬学 2012 年; 68 巻: 519-528.
- 14) 渡邊恒夫, 竹村正男, 斎藤邦明, 伊藤弘康, 服部高幸, 関根綾子, 山田鉄也, 加藤則廣, 富田栄一, 松岡敏男, 清島 満. 非アルコール性脂肪肝(non-alcoholic steatohepatitis; NASH)における血清 Cytokeratin-18(CK-18)測定の臨床意義について, 臨床病理 2013 年; 61 巻: 19-24.
- 15) 足立真理子, 星 雅人, 牛丸星子, 林 麻実, 仲本賢太郎, 神戸 歩, 古田伸行, 稲垣勇夫, 伊藤弘康, 清島 満. CKD 重症度分類(KDIGO2009)における尿中硝子円柱の臨床的意義について, 臨床病理 2013 年; 61 巻: 104-111.
- 16) 石田秀和, 中山純里, 宮崎 崇, 小池紀子, 古田伸行, 竹村正男, 伊藤弘康, 清島 満. プロカルシトニン測定試薬「ミュータスワコー プラームス PCT」および PCT 半定量試薬「プラームス PCT-Q」の評価, JCCLA 2013 年; 38 巻: 304-311.
- 17) 石田秀和, 古田伸行, 中山純里, 浅野栄太, 安藤航平, 小池紀子, 伊藤弘康, 清島 満. 検体前処理装置 MPAM2 台並列運用と大型検体回収装置 RAA を利用した生化学・免疫総合緊急検査システムの構築, 医学検査 2013 年; 62 巻: 470-476.
- 18) 金森寛充, 竹村元三, 今井 一, 鈴木貴史, 高杉信寛, 久保田知希, 牛越博昭, 服部有博, 青山琢磨, 川崎雅規, 西垣和彦, 湊口信也. 心肥大の成因確定に苦慮した Fabry 病の 1 例, 心臓 2013 年; 45 巻: 440-445.
- 19) 村上啓雄, 深尾亜由美, 渡邊珠代, 土屋麻由美, 太田浩敏, 丹羽 隆. 厚生労働省モデル事業における院内感染対策地域支援ネットワーク, INFECTION CONTROL 2013 年; 22 巻: 80-83.
- 20) 渡邊珠代, 土屋麻由美, 丹羽 隆, 太田浩敏, 鈴木智之, 深尾亜由美, 村上啓雄. 感染制御における地域ネットワークの実際, 感染症 2013 年; 254 巻: 217-222.
- 21) 鍋谷洋介, 渡邊恒夫, 寺林伸夫, 廣瀬あゆみ, 野久 譲, 篠田貢一, 古田伸行, 伊藤弘康, 松岡敏男, 清島 満. 超音波検査による肩腱板断裂診断能の検討 —US 所見と MRI 所見との比較—, 臨床病理 2014 年; 62 巻: 31-37.
- 22) 寺林伸夫, 渡邊恒夫, 伊藤芳毅, 松本 和, 瀧上伊織, 清水克時, 秋山治彦. 変形性膝関節症における中膝動脈血流評価, 日本整形超音波学会誌 2014 年; 25 巻: 42-47.
- 23) 渡邊恒夫, 寺林伸夫, 名和寛文, 福岡大輔, 辛 紹熙, 松岡敏男. ロコモティブシンドローム定量評価のための腓腹筋 3 次元超音波画像解析, 日本整形超音波学会誌 2014 年; 25 巻: 100-105.
- 24) 石田秀和, 竹村正男, 浅野栄太, 中山純里, 片野由里子, 田内里奈, 中村真大, 古田伸行, 四戸隆基, 佐藤正夫, 伊藤弘康, 清島 満. マトリックスメタロプロテイナーゼ-3 測定試薬「LZ テスト'栄研'MMP-3」の基礎的検討と臨床的有用性, 日本臨床検査自動化学会誌 2014 年; 39 巻: 128-134.

- 25) 大瀧博文, 大楠清文, 中山麻美, 米玉利 準, 安藤航平, 宮崎 崇, 太田浩敏, 古田伸行, 渡邊珠代, 伊藤弘康, 村上啓雄, 清島 満. 中心静脈ライン関連血流感染の判定における細断法を用いた中心静脈カテーテル先端培養の菌量および血液培養結果に関する後方視的な検討, 臨床微生物迅速診断研究会誌 2014年; 24巻: 39-43.
- 26) 寺林伸夫, 伊藤芳毅, 松本 和, 瀧上伊織, 大野貴敏, 渡邊恒夫. 体位変換・肩関節加温下での肩周囲血流変化: 健常肩での検討. 肩関節 2014年; 38巻: 407-410.
- 27) 田内里奈, 石田秀和, 片野由里子, 中山純里, 中村真大, 古田伸行, 伊藤弘康, 清島 満. ラテックス免疫比濁法による H-FABP 測定試薬「ラテックス H-FABP キット「ヤマサ」」の基礎的検討, 岐阜県臨床検査技師会誌 2014年; 43巻: 1-5.
- 28) 米玉利 準, 大瀧博文, 中山麻美, 安藤航平, 宮崎 崇, 太田浩敏, 古田伸行, 渡邊珠代, 兼村信宏, 伊藤弘康, 大楠清文, 村上啓雄, 清島 満. 血液培養好気ボトルより *Leptotrichia trevisanii* を分離した多発性骨髄腫患者における菌血症の1例, 日本臨床微生物学雑誌 2014年; 24巻: 3201-3206.
- 29) 丹羽 隆, 外海友規, 鈴木景子, 渡邊珠代, 土屋麻由美, 太田浩敏, 村上啓雄. Defined daily dose (DDD) と Days of therapy (DOT) を用いた抗菌薬使用量の評価, 環境感染学会誌 2014年; 29巻: 333-339.
- 30) 廣瀬あゆみ, 渡邊恒夫, 鍋谷洋介, 野久 謙, 古田伸行, 川地慎一, 伊藤弘康, 松岡敏男, 清島 満. 臨床検査データからみた2型糖尿病患者における末梢神経障害の評価: アルブミン尿とABIの関連性, 臨床病理 2014年; 62巻: 538-545.

原著 (欧文)

- 1) Kimura A, Sakurai T, Yamada M, Koumura A, Hayashi Y, Tanaka Y, Hozumi I, Ohtaki H, Chousa M, Takemura M, Seishima M, Inuzuka T. Antibodies against the Tom40 subunit of the translocase of the outer mitochondrial membrane complex and cognitive impairment in Alzheimer's disease. J Alzheimers Dis. 2012;29:373-377. IF 3.612
- 2) Watanabe T, Sakakibara N, Sugimori H, Yabumoto T, Takeyama T, Takemura M, Seishima M, Matsuoka T. Effect of long-term physical exercise of peripheral nerve: comparison of nerve conduction study and ultrasonography. J Sport Med Phys Fit. 2012;52:212-220. IF 0.757
- 3) Kawamoto N, Fukao T, Kaneko H, Hirayama K, Sakurai S, Arai T, Kondo M, Kawamoto M, Matsui E, Teramoto T, Kasahara K, Bai C, Zhang G, Omoya K, Matsukuma E, Morimoto M, Suzuki H, Aoki Y, Kimura T, Nada M, Morita H, Tokumi T, Takemura M, Seishima M, Shiraki M, Iwasa S, Kondo N. Risk factors for infantile atopic dermatitis and recurrent wheezing. J Invest Allerg Clin. 2012;22:116-125. IF 2.642
- 4) Murakami Y, Hoshi M, Hara A, Takemura M, Arioka Y, Yamamoto Y, Funato T, Matsunami H, Seishima M, Saito K. Inhibition of increased indoleamine 2,3-dioxygenase activity attenuates *Toxoplasma gondii* replication in the lung during acute infection. Cytokine. 2012;59:245-251. IF 2.874
- 5) Takeyama T, Takemura G, Kanamori H, Kawaguchi T, Ogino A, Watanabe T, Morishita K, Tsujimoto A, Goto K, Maruyama R, Ushikoshi H, Kawasaki M, Yamada K, Nikami H, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Asialoerythropoietin, a nonerythropoietic derivative of erythropoietin, displays broad anti-heart failure activity. Circ-Heart Fail. 2012;5:274-285. IF 5.945
- 6) Ogawa K, Hara T, Shimizu M, Ninomiya S, Nagano J, Sakai H, Hoshi M, Ito H, Tsurumi H, Saito K, Seishima M, Tanaka T, Moriwaki H. Suppression of azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in rats by 1-methyltryptophan, an inhibitor of indoleamine 2,3-dioxygenase. Cancer Sci. 2012;103:951-958. IF 3.534
- 7) Nakashima T, Takasugi N, Kubota T, Takasugi M, Kanamori H, Ushikoshi H, Hattori A, Aoyama T, Kawasaki M, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S. 'False-positive' intrathoracic impedance monitor alarm caused by amiodarone-induced hypothyroidism in a patient with Cardiac resynchronization therapy-defibrillator. Europace. 2012;14:768-769. IF 3.050
- 8) Ninomiya S, Hara T, Tsurumi H, Goto N, Saito K, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Indoleamine 2,3-dioxygenase expression and serum kynurenine concentrations in patients with diffuse large B-cell lymphoma. Leukemia Lymphoma. 2012;53:1143-1145. IF 2.605
- 9) Fujigaki H, Seishima M, Saito K. Posttranslational modification of indoleamine 2,3-dioxygenase. Anal Bioanal Chem. 2012;403:1777-1782. IF 3.578
- 10) Takasugi N, Kubota T, Kawamura I, Takasugi M, Kanamori H, Ushikoshi H, Hattori A, Aoyama T, Kawasaki M, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S. Sudden reversible pacemaker failure in a patient with cardiac sarcoidosis: an unfortunate case of ventricular septal pacing. Europace. 2012;14:1061-1062. IF 3.050
- 11) Hoshi M, Matsumoto K, Ito H, Ohtaki H, Arioka Y, Osawa Y, Yamamoto Y, Matsunami H, Hara A, Seishima M, Saito K. L-tryptophan-kynurenine pathway metabolites regulate type I IFNs of acute viral myocarditis in mice. J Immunol. 2012;188:3980-3987. IF 5.362
- 12) Goto N, Tsurumi H, Takemura M, Kanemura N, Kasahara S, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Yamada T, Sawada M, Takahashi T, Yamada T, Seishima M, Moriwaki H, Takami T. Serum soluble CD27 level is associated with outcome in diffuse large B-cell lymphoma patients treated with R-CHOP. Leukemia Lymphoma. 2012;53:1494-1500. IF 2.605
- 13) Kawaguchi T, Takasugi N, Kubota T, Takasugi M, Kanamori H, Ushikoshi H, Hattori A, Aoyama T,

- Kawasaki M, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S, Verrier RL. In-hospital monitoring of T-wave alternans in a case of amiodarone-induced torsade de pointes: clinical and methodologic insights. *Europace*. 2012;14:1372-1374. IF 3.050
- 14) Ohtaki H, Ito H, Hoshi M, Osawa Y, Takamatsu M, Hara A, Ishikawa T, Moriwaki H, Saito K, Seishima M. High susceptibility to lipopolysaccharide-induced lethal shock inencephalomyocarditis virus-infected mice. *Sci Rep*. 2012;2:367. IF 5.078
- 15) Ito H, Iida N, Klinman M. Antibiotics delay wound healing: an effect reversed by co-administering TLR 7 and TLR 9 Ligands. *Curr Angiogen*. 2012;1:46-51.
- 16) Sekine A, Takahashi N, Watanabe T, Osawa Y, Ikeda T, Mori I, Kajita K, Morita H, Hirose Y, Seishima M, Ishizuka T. Adult itussusception of the descending colon due to inflammatory myofibroblastic proliferation. *Clin J Gastroenterol*. 2012;5:74-78.
- 17) Arioka Y, Yamamoto Y, Hoshi M, Natsumoto K, Takamatsu M, Hara A, Seishima M, Saito K. Pre-administration of L-tryptophan improved ADR-induced early renal failure in mice. *Life Sci*. 2012;91:100-106. IF 2.296
- 18) Watanabe T, Takemura M, Sato M, Sekine A, Fukuoka D, Seishima M, Shimizu K, Matsuoka T. Quantitative analysis of vascularization in the finger joints in patients with rheumatoid arthritis using three-dimensional volumetric ultrasonography with power Doppler. *Clin Rheumatol*. 2012;31:299-307. IF 1.774
- 19) Niwa T, Shinoda Y, Suzuki A, Ohmori T, Yasuda M, Ohta H, Fukao A, Kitaichi K, Matsuura K, Sugiyama T, Murakami N, Itoh Y. Outcome measurement of extensive implementation of antimicrobial stewardship in patients receiving intravenous antibiotics in a Japanese university hospital. *Int J Clin Pract*. 2012;66:999-1008. IF 2.538
- 20) Ogawa K, Hara T, Shimizu M, Nagano J, Ohno T, Hoshi M, Ito H, Tsurumi H, Saito K, Seishima M, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin gallate inhibits the expression of indoleamine 2,3-dioxygenase in human colorectal cancer cells. *Oncol Lett*. 2013;4:546-550. IF 0.987
- 21) Kimura A, Sakurai T, Yamada M, Koumura A, Hayashi Y, Tanaka Y, Hozumi I, Ohtaki H, Chousa M, Takemura M, Seishima M, Inuzuka T. Anti-endothelial cell antibodies in patients with cerebral small vessel disease. *Curr Neurovasc Res*. 2013;9:296-301. IF 2.735
- 22) Kawaguchi T, Takemura G, Kanamori H, Takeyama T, Watanabe T, Morishita K, Ogino A, Tsujimoto A, Goto K, Maruyama R, Kawasaki M, Mikami A, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Prior starvation mitigates acute doxorubicin cardiotoxicity through restoration of autophagy in affected cardiomyocytes. *Cardiovasc Res*. 2013;96:456-465. IF 5.808
- 23) Shirakami Y, Shimizu M, Moriwaki H. Cancer chemoprevention with green tea catechins: from bench to bed. *Curr Drug Targets*. 2013;13:1842-1857. IF 3.597
- 24) Osawa Y, Suetsugu A, Matsushima-Nishiwaki R, Yasuda I, Saibara T, Moriwaki H, Seishima M, Kozawa O. Liver acid sphingomyelinase inhibits growth of metastatic colon cancer. *J Clin Invest*. 2013;123:834-843. IF 13.765
- 25) Kanamori H, Takemura G, Goto K, Tsujimoto A, Ogino A, Takeyama T, Kawaguchi T, Watanabe T, Morishita K, Kawasaki M, Mikami A, Fujiwara T, Fujiwara H, Seishima M, Minatoguchi S. Resveratrol reverses remodeling in hearts with large, old myocardial infarctions through enhanced autophagy-activating AMP kinase pathway. *Am J Pathol*. 2013;182:701-713. IF 4.602
- 26) Ohtaki H, Ohkusu K, Ohta H, Miyazaki T, Yonetamari J, Usui T, Mori I, Ito H, Ishizuka T, Seishima M. A case of sepsis caused by *Streptococcus canis* in a dog owner: a first case report of sepsis without dog bite in Japan. *J Infect Chemother*. 2013;19:1206-1209. IF 1.384
- 27) Takamatsu M, Hirata A, Ohtaki H, Hoshi M, Hatano Y, Tomita H, Kuno T, Saito K, Hara A. IDO1 plays an immunosuppressive role in 2,4,6-trinitrobenzene sulfate-induced colitis in mice. *J Immunol*. 2013;191:3057-3064. IF 5.362
- 28) Kawamoto N, Fukao T, Kaneko H, Hirayama K, Sakurai S, Arai T, Kondo M, Kawamoto M, Matsui E, Orii K, Kasahara K, Takemura M, Seishima M, Shiraki M, Iwasa S, Kondo N. Total IgE at 6 months predicts remittance or persistence of atopic dermatitis at 14 months. *Allergy Asthma Proc*. 2013;34:362-369. IF 3.353
- 29) Kawasoe M, Yamamoto Y, Okawa K, Funato T, Takeda M, Hara T, Tsurumi H, Moriwaki H, Arioka Y, Takemura M, Matsunami H, Markey SP, Saito K. Acquired resistance of leukemic cells to AraC is associated with the upregulation of aldehyde dehydrogenase 1 family member A2. *Exp Hematol*. 2013;41:597-603. IF 2.806
- 30) Nagano J, Shimizu M, Hara T, Shirakami Y, Kochi T, Nakamura N, Ohtaki H, Ito H, Tanaka T, Tsurumi H, Saito K, Seishima M, Moriwaki H. Effects of indoleamine 2,3-dioxygenase deficiency on high-fat diet-induced hepatic inflammation. *PLoS One*. 2013;8:e73404. IF 3.534
- 31) Ando T, Ito H, Ohtaki H, Seishima M. Toll-like Receptor agonists and alpha-galactosylceramide synergistically enhance the production of interferon-gamma in murine splenocytes. *Sci Rep*. 2013;3:2559. IF 5.078
- 32) Nakamura N, Goto N, Tsurumi H, Takemura M, Kanemura N, Kasahara S, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Sawada M, Yamada T, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Serum level of soluble tumor necrosis

- factor receptor 2 is associated with the outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with the R-CHOP regimen. *Eur J Haematol.* 2013;91:322-331. IF 2.414
- 33) Ohtaki H, Ohkusu K, Ohta H, Miyazaki T, Yonetamari J, Mori I, Ito H, Ishizuka T, Seishima M. A case of sepsis caused by *Streptococcus canis* in a dog owner: a first case report of sepsis without dog bite in Japan. *J Infect Chemother.* 2013;19:1206-1209. IF 1.384
- 34) Shi B, Watanabe T, Shin S, Yabumoto T, Takemura M, Matsuoka T. Effect of hypoxic training on inflammatory and metabolic risk factors: a cross-over study in healthy subjects. *Physiol Rep.* 2014;2:doi: 10.1002/phy2.198
- 35) Ito H, Ando T, Ando K, Ishikawa T, Saito K, Moriwaki H, Seishima M. Induction of hepatitis B virus surface antigen-specific cytotoxic T lymphocytes can be up-regulated by the inhibition of indoleamine 2, 3-dioxygenase activity. *Immunology.* 2014;142:614-623. IF 3.735
- 36) Nakamura N, Kanemura N, Shibata Y, Matsumoto T, Mabuchi R, Nakamura H, Kitagawa J, Goto N, Hara T, Tsurumi H, Moriwaki H. Lenalidomide-induced cytokine release syndrome in a patient with multiple myeloma. *Leukemia Lymphoma.* 2014;55:1691-1693. IF 2.605
- 37) Ohtaki H, Ito H, Ando K, Ishikawa T, Hoshi M, Ando T, Takamatsu M, Hara A, Moriwaki H, Saito K, Seishima M. Kynurenine production mediated by indoleamine 2,3-dioxygenase aggravates liver injury in HBV-specific CTL-induced fulminant hepatitis. *BBA-Mol Basis Dis.* 2014;1842:1464-1471. IF 5.089
- 38) Hoshi M, Osawa Y, Ito H, Ohtaki H, Ando T, Takamatsu M, Hara A, Saito K, Seishima M. Blockade of indoleamine 2,3-dioxygenase reduces mortality from peritonitis and sepsis in mice by regulating functions of CD11b+ peritoneal cells. *Infect Immun.* 2014;82:4487-4495. IF 4.156
- 39) Terabayashi N, Watanabe T, Matsumoto K, Takigami I, Ito Y, Fukuta M, Akiyama H, Shimizu K. Increased blood flow in the anterior humeral circumflex artery correlates with night pain in patients with rotator cuff tear. *J Orthop Sci.* 2014;19:744-749. IF 1.008
- 40) Watanabe T, Yabumoto T, Shin S, Shi B, Matsuoka T. Effect of short-term whole-body vibration training on metabolic risk factors, inflammatory markers, and arterial stiffness. *Adv Biosci Biotech.* 2014;5:438-445.
- 41) Shin S, Demura S, Watanabe T, Shi B, Yabumoto T, Matsuoka T. Differences between fallers by tripping and nonfallers in the OSFS Test. *Adv Aging Res.* 2014;3:124-129.
- 42) Shirakami Y, Shimizu M, Kubota M, Araki H, Tanaka T, Moriwaki H, Seishima M. Chemoprevention of colorectal cancer by targeting obesity-related metabolic abnormalities. *World J Gastroentero.* 2014;20:8939-8946. IF 2.433
- 43) Niwa T, Watanabe T, Suzuki A, Ohmori T, Tsuchiya M, Suzuki T, Ohta H, Murakami N, Itoh Y. Reduction of linezolid-associated thrombocytopenia by the dose adjustment based on the risk factors such as basal platelet count and body weight. *Diagn Micr Infec Dis.* 2014;79:93-97. IF 2.568

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：清島 満，研究分担者：伊藤弘康，金森寛充，大澤陽介，斉藤邦明；科学研究費補助金基盤研究(B)：スタチン製剤による筋障害予防のためのスクリーニング法と遺伝子解析；平成 21-24 年度；14,600 千円(4,500：5,000：3,100：2,000 千円)
- 2) 研究代表者：清島 満；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：肝炎ウィルス感染症におけるインドールアミン酸素添加酵素の役割と新規治療法の開発；平成 24-25 年度；2,900 千円(1,500:1,400 千円)
- 3) 研究代表者：伊藤弘康；科学研究費補助金研究活動スタート支援：転移性腫瘍に対する NKT 細胞免疫と免疫抑制因子の制御を用いた新規癌免疫療法の開発；平成 24 年度；1,200 千円
- 4) 研究代表者：金森寛充；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：心筋オートファジー制御による左室リモデリング改善効果と治療応用；平成 24-25 年度；3,200 千円(1,900：1,300 千円)
- 5) 研究代表者：金森寛充；かなえ医薬振興財団第 41 回助成金：糖尿病心筋におけるオートファジーの病態生理解明と治療応用；平成 23-24 年度；1,000 千円
- 6) 研究代表者：白上洋平；Liver Forum in Kyoto：肝発癌過程における肝レチノイド貯蔵の役割に関する研究；平成 24 年度；1,000 千円
- 7) 研究代表者：伊藤弘康，研究分担者：清島 満，白上洋平；科学研究費補助金基盤研究(C)：NKT 細胞活性化と免疫抑制因子の制御を用いた癌転移に対する新規免疫療法の開発；平成 25 年度；1,690 千円
- 8) 研究代表者：有岡祐子；科学研究費補助金スタートアップ：iPS 細胞樹立過程には組織ごとの特異的な指向性があるのか；平成 25 年度；1,430 千円
- 9) 研究代表者：白上洋平；大学活性化経費(研究：科研採択支援)：肝発癌過程における肝星細胞と肝レチノイド貯蔵の役割に関する研究；平成 25 年度；700 千円

- 10) 研究代表者：安達達也；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：NKT 細胞の活性化と Toll 様受容体リガンドを用いた新規癌免疫療法の開発；平成 25 年度；1,000 千円
- 11) 研究代表者：伊藤弘康；科学研究費補助金基盤研究(C)：NKT 細胞活性化と免疫抑制因子の制御を用いた癌転移に対する新規免疫療法の開発；平成 26 年度；1,560 千円
- 12) 研究代表者：白上洋平；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：非アルコール性脂肪肝疾患と肝レチノイドシグナルの関連性の解明；平成 26 年度；1,300 千円
- 13) 研究代表者：伊藤弘康；血液医学分野一般研究助成先進医薬研究振興財団：肝再生における免疫担当細胞内インフラマソームの活性化とその役割；平成 26 年度；1,000 千円
- 14) 研究代表者：安藤達也；笹川科学研究助成金：無菌状態で生じる炎症反応が肝再生を促進するのか？～肝再生におけるインフラマソームの関与とメカニズム解明～；平成 26 年度；650 千円
- 15) 研究代表者：伊藤弘康；岐阜大学活性化経費(研究：若手研究支援)：肝再生過程におけるインフラマソーム群の解析と治療への応用；平成 26 年度；1,850 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

清島 満：

- 1) 日本臨床検査医学会評議員(～現在)
- 2) 日本臨床化学会評議員(～現在)
- 3) 日本臨床化学会国際交流委員(～現在)
- 4) 日本臨床検査自動化学会評議員(～現在)
- 5) 日本動脈硬化学会評議員(～現在)
- 6) 日本臨床分子医学会評議員(～現在)
- 7) 日本臨床検査医学会理事(平成 26 年 1 月～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

清島 満：

- 1) 医療と検査機器試薬；編集同人(～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

清島 満：

- 1) 第 4 回日本臨床一般検査学会学術集会(平成 24 年 10 月，岐阜，招待講演「検査情報を生かすための病態情報解析医学に学ぶ」)
- 2) 第 59 回日本臨床検査医学会学術集会(平成 24 年 12 月，京都，教育講演「脂質異常症の治療～動脈硬化予防の戦略として」)
- 3) 第 46 回日本臨床自動化学会大会(平成 26 年 10 月，神戸，教育講演「脂質代謝異常と動脈硬化」)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 金森寛充：岐阜医学奨励賞「心筋オートファジーの病態生理解明と虚血性心疾患への治療応用」(平成 24 年度)
- 2) 白上洋平：岐阜医学奨励賞「肝レチノイド貯蔵と肝発癌」(平成 26 年度)

9. 社会活動

清島 満：

- 1) 国立大学医学部長会議会員(平成 24 年 4 月～現在)
- 2) 岐阜県地方独立行政法人評価委員会委員長(平成 24 年 4 月～現在)
- 3) 岐阜県産業保健推進連絡事務所運営協議会委員(平成 24 年 4 月～現在)
- 4) 岐阜県医療対策協議会委員(平成 24 年 4 月～現在)
- 5) 岐阜県医師育成・確保コンソーシアム組織運営委員会議長(平成 24 年 4 月～現在)
- 6) 岐阜県精度管理専門委員(~現在)
- 7) 岐阜市精度管理専門委員(~現在)
- 8) 岐阜県医師会臨床検査精度管理委員会委員(~現在)
- 9) 公益信託 稲原記念医・歯学留学生援助基金運営委員(平成 24 年 4 月～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

研究業績は質、量ともに目標レベルに達したと自己評価しているが、なるべく IF 5 以上のジャーナルを目指す。

現状の問題点及びその対応策

院生は現在 2 名（当分野所属院生 1 名と他分野からの社会人大学院生 1 名）であり、更なる院生もしくは研究生確保に努める。研究資金は科研費を中心にその他助成金獲得に努める。研究テーマについてはある程度継続性のあるものを優先する。

今後の展望

研究テーマは多岐にわたるが、他分野他施設との共同研究も積極的に行い、効率的な研究を目指したい。

〔病態制御学講座〕

(1) 解剖学分野

1. 研究の概要

(1) APC 蛋白質の多彩な機能の解析

Adenomatous polyposis coli(APC)蛋白質は大腸癌抑制遺伝子として知られ、細胞増殖シグナルを伝える Wnt シグナル系を負に制御することで、癌化を抑制する。APC は消化管以外でも広く発現しており、特に脳での発現が顕著である。私たちは、APC がシナプスに濃縮していることを見出し、それを契機に APC がシナプス足場蛋白質 PSD-95 を介して、グルタミン酸受容体の 1 つである AMPA 受容体の後シナプス膜へのクラスタリングに重要であることを明らかにした。ついで、1639 アミノ酸以降の C 末端側が欠損した変異 APC 蛋白質を発現するマウスである APC1638T ノックインマウスの多角的な解析を行い、発育障害、統合失調症様行動異常、歩行異常、消化管の形態異常、甲状腺ホルモン分泌異常など、多くの異常を明らかにした。APC1638T マウスにおけるこれらの異常の原因を追及することで、APC の多彩な機能の解析を進めている。

(2) 新規人体解剖実習プロトコルの開発

人体解剖実習は医学教育における必須の実習であるが、急速な医学の進歩に伴う医学部カリキュラムの過密化に伴い、実習時間数は年々減少している。しかし、現在国内各医科系大学で使用されている人体解剖実習の“プロトコル”は、実習時間数が豊富にあった時代に考案されたものであり、現状には合っていない。つまり、従来の“プロトコル”では剖出作業が詳細すぎるために時間がかかり、現行の実習カリキュラム内では消化しきれない状態になっている。このような現状にかんがみ、現代の医学教育カリキュラムに適合した“新規解剖実習プロトコル”の開発を、学生たちの協力を得ながら進めている。

(3) 骨組織の機能解析

骨組織を構成する骨芽細胞、破骨細胞、骨細胞などの分化・活性化に関与するホルモン、転写因子などの重要性が明らかにされつつある。しかし、骨代謝の全貌は未だに明らかになっていない。骨粗鬆症をはじめとする代謝性骨疾患の発症機序、評価法並びにその予防と治療に関する基礎研究に取り組んでいる。また、脂肪組織 - 中枢神経系 - 骨組織 - 膵臓等という多臓器間クロストークの存在が明らかになり、骨組織を中心とした多臓器間ネットワークによる糖・脂質代謝の制御機構の解明を進めている。

2. 名簿

教授：	千田隆夫	Takao Senda
准教授：	早川大輔	Daisuke Hayakawa
講師：	東 華岳	Kagaku Azuma

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 千田隆夫, 小村一也. プラクティカル解剖実習 脳, 東京: 丸善出版; 2012 年.
- 2) 千田隆夫, 東 華岳, 清水洋二. 免疫組織化学の原理と基礎「組織細胞化学 2013」, 京都: 日本組織細胞化学会; 2013 年: 1-16.

著書（欧文）

- 1) Chen H, Hayashi T, Zhou X, Fujita H, Onozuka M, Kubo KY. Sophisticated imaging technology in the assessment of osteoporosis risk. In: Dionysiotis Y, ed. Osteoporosis. Rijeka, Croatia: InTech; 2012:181-194.
- 2) Chen H, Shoumura S. Parathyroid gland, skeletal muscle, tendon and periosteum in SAMP6. In: Takeda T, ed. The senescence-accelerated mouse (SAM): Achievements and future directions. Elsevier; 2013:85-94.
- 3) Kubo KY, Chen H, Onozuka M. The relationship between mastication and cognition. In: Wang Z, Inuzuka H, eds. Senescence and senescence-related disorders, Rijeka, Croatia: InTech; 2013:115-132.
- 4) Hayashi T, Chen H, Miyamoto K, Zhou X, Hara T, Fujita H. Computer-aided image analysis for vertebral anatomy on X-ray CT images. In: Suzuki K, ed. Computational Intelligence in Biomedical Imaging, New York: Springer; 2014:159-184.

総説（和文）

なし

総説 (欧文)

- 1) Chen H, Kubo KY. Bone three-dimensional microstructural features of the common osteoporotic fracture sites. *World J Orthopedics*. 2014;5:486-495.
- 2) Inuma M, Kondo H, Kurahashi M, Tamura Y, Chen H, Kubo KY. Relationship between the early toothless condition and hippocampal functional morphology. *Anatomy & Physiology*. 2014;4:3.

原著 (和文)

- 1) 山口昌太郎, 周 向荣, 陳 華岳, 原 武史, 姜 慧研, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志. CT画像における体幹部の解剖学的構造のデータベース構築法に関する考察, 電子情報通信学会技術報告 2013年; 112巻: MI2012-78, 83-88.
- 2) 神谷直希, 村松千左子, 周 向荣, 陳 華岳, 原 武史, 星 博昭, 藤田広志. 皮下脂肪領域の除去によるCT画像の仮想展開と腹直筋領域の自動認識, 電子情報通信学会技術報告 2013年; 112巻: MI2012-99, 197-200.
- 3) 渡辺篤人, 周 向荣, 陳 華岳, 原 武史, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志. 症例の類似性を考慮した複数臓器確率的アトラス構築と評価, 電子情報通信学会技術報告 2013年; 113巻: MI2013-35, 77-81.
- 4) 岩崎雄二, 陳 華岳. 停留チューブに形成された涙石を伴う涙囊炎の1例, 眼科手術 2014年; 27巻: 607-613.
- 5) 青木隆明, 浅野昭裕, 林 典雄, 曾田直樹, 東 華岳, 早川大輔, 千田隆夫, 秋山治彦. 肩鎖関節脱臼肩甲骨 Rockwood 分類の解剖学的検討, *J Clin Rehabilitation* 2014年; 23巻: 95-96.
- 6) 伊藤隆晃, 周 向荣, 原 武史, 姜 慧研, 横山龍二郎, 陳 華岳, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志. 臓器位置検出と GrabCut による 3次元 CT 画像からの複数臓器領域の自動抽出, 電子情報通信学会技術報告 2014年; 113巻: MI2013-61, 31-36.
- 7) 守田翔一, 周 向荣, 陳 華岳, 原 武史, 姜 慧研, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志. 機械学習に基づく大規模な CT 画像データベースからの複数の臓器位置の自動検出と性能評価, 電子情報通信学会技術報告 2014年; 113巻: MI2013-62, 37-41.

原著 (欧文)

- 1) Kamiya N, Zhou X, Chen H, Muramatsu C, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Automated segmentation of psoas major muscle in X-ray CT images by use of a shape model: preliminary study. *Radiol Phys Technol*. 2012;5:5-14.
- 2) Wu M, Zhao S, Ren L, Wang R, Bai X, Han H, Li B, Chen H. Effects of psoralen on the expressions of receptor activator of nuclear factor- κ B ligand and osteoprotegerin in murine osteoblasts in vitro. *Chinese J Gerontol*. 2012;32:66-69.
- 3) Chen H, Kubo K. Segmental variations in trabecular bone density and microstructure of the spine in senescence-accelerated mouse (SAMP6): A murine model for senile osteoporosis. *Exp Gerontol*. 2012;47:317-322. IF 3.529
- 4) Chen H, Emura S, Nagasaki S, Kubo K. Double inferior vena cava with interiliac vein: A case report and literature review. *Okajimas Folia Anat Jpn*. 2012;88:147-151.
- 5) Zhou X, Wang S, Chen H, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Fujita H. Automatic localization of solid organs on 3D CT images by a collaborative majority voting decision based on ensemble learning. *Comput Med Imag Grap*. 2012;36:304-313. IF 1.496
- 6) Chen H, Wu M, Kubo K. Combined treatment with a traditional Chinese medicine, Hachimi-jio-gan (Ba-Wei-Di- Huang-Wan) and alendronate improves bone microstructure in ovariectomized rats. *J Ethnopharmacol*. 2012;142:80-85. IF 2.939
- 7) Emura S, Okumura T, Chen H. Scanning electron microscopic study on the tongue in the scarlet macaw (*Ara macao*). *Okajimas Folia Anat Jpn*. 2012;89:57-60.
- 8) Emura S, Okumura T, Chen H. Morphology of the lingual papillae in the Egyptian rousette bat (*Rousettus aegyptiacus*). *Okajimas Folia Anat Jpn*. 2012;89:61-66.
- 9) Onouchi T, Takamori N, Senda T. Colocalization of APC and PSD-95 in the nerve fiber as well as in the post-synapse of matured neurons. *Med Mol Morphol*. 2012;45:152-160. IF 1.070
- 10) Yokoyama A, Nomura R, Kurosumi M, Shimomura A, Onouchi T, Iizuka-Kogo A, Smits R, Fodde R, Itoh M, Senda T. Some fine-structural findings on the thyroid gland in *Apc1638T/1638T* mice that express C-terminus lacking truncated *Apc*. *Med Mol Morphol*. 2012;45:161-167. IF 1.070
- 11) Emura S, Okumura T, Chen H. Morphology of the lingual papillae in the jaguar. *Okajimas Folia Anat Jpn*. 2013; 89:93-97.
- 12) Emura S, Okumura T, Chen H. Morphology of the lingual papillae in the giraffe. *Okajimas Folia Anat Jpn*. 2013;89:99-103.
- 13) Chen H, Senda T, Emura S, Kubo K. An update on the structure of the parathyroid gland. *The open Anatomy Journal*. 2013;5:1-9.
- 14) Chen H, Zhou X, Fujita H, Onozuka M, Kubo K. Age-related changes in trabecular and cortical bone microstructure. *Int J Endocrinol*. 2013;2013:1-9. IF 1.515
- 15) Kamiya N, Zhou X, Chen H, Muramatsu C, Hara T, Fujita H. Model-based approach to recognize the

- rectus abdominis muscle in CT images. IEICE T Inf Syst. 2013;E-96-D:869-871. IF 0.191
- 16) Zhang M, Zhou X, Chen H, Muramatsu C, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Fujita H. Pulmonary emphysema classification based on an improved texton learning model by sparse representation. Proc. SPIE Medical Imaging 2013: Computer-Aided Diagnosis. 2013;8670:86700F-1-86700F-7.
- 17) Shimomura A, Takasaki A, Nomura R, Hayashi N, Senda T. Identification of DNA-dependent protein kinase catalytic subunit as a novel interaction partner of lymphocyte enhancer factor 1. Med Mol Morphol. 2013;46:14-19. IF 1.070
- 18) Kogo A, Akiyama A, Senda T. Decreased Apoptosis and Persistence of the Common Nephric Duct During the Development of an Aberrant Vesicoureteral Junction in Dlg1 Gene-Targeted Mice. Anat Rec. 2013;296:1936-1942. IF 1.530
- 19) Onouchi T, Kobayashi K, Sakai K, Shimomura A, Smits R, Sumi-Ichinose C, Kurosumi M, Takao K, Nomura R, Iizuka-Kogo A, Suzuki H, Kondo K, Akiyama T, Miyakawa T, Fodde R, Senda T. Targeted deletion of the C-terminus of the mouse adenomatous polyposis coli tumor suppressor results in neurologic phenotypes related to schizophrenia. Mol Brain. 2014;7:21. IF 4.345
- 20) Ueda M, Li S, Itoh M, Hayakawa-Yano Y, Wang MX, Hayakawa M, Hasebe-Matsubara R, Ohta K, Ohta E, Mizuno A, Matsumoto M, Chen H, Hida Y, Nakagawa T. Polyglutamine expansion disturbs the endoplasmic reticulum formation, leading to caspase-7 activation through Bax. Biochem Bioph Res Co. 2014;443:1232-1238. IF 2.281
- 21) Akazaki S, Takahashi T, Nakano Y, Nishida T, Mori H, Takaoka A, Aoki H, Chen H, Kunisada T, Koike K. Three-dimensional analysis of melanosomes isolated from B16 melanoma cells by using ultra high voltage electron microscopy. Microscopy Research. 2014;2:1-8.
- 22) Furuzawa M, Chen H, Fujiwara S, Yamada K, Kubo KY. Chewing smeliorates chronic mild stress-induced bone loss in senescence-accelerated mouse (SAMP8), a murine model of senile osteoporosis. Exp Gerontol. 2014;55:12-18. IF 3.529
- 23) Emura S, Okumura T, Chen H. Morphology of the lingual papillae in the fishing cat. Okajimas Folia Anat Jpn. 2014;90:79-83.
- 24) Emura S, Okumura T, Chen H. Morphology of the lingual papillae in the brush-tailed rat kangaroo. Okajimas Folia Anat Jpn. 2014;90:85-88.
- 25) Mishiro K, Imai T, Sugitani S, Kitashoji A, Suzuki Y, Takagi T, Chen H, Oumi Y, Tsuruma K, Shimazawa M, Hara H. Diabetes mellitus aggravates hemorrhagic transformation after ischemic stroke via mitochondrial defects leading to endothelial apoptosis. PLoS One. 2014;9:e103818. IF 3.534
- 26) Zhou X, Ito T, Zhou X, Chen H, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. A universal approach for automatic organ segmentations on 3D CT images based on organ localization and 3D GrabCut. Proc. of SPIE Medical Imaging 2014: Computer-Aided Diagnosis. 2014;9035:90352V-1-8.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：千田隆夫；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：APC蛋白質の形態形成と細胞分化に対する新規機能の解明；平成24-26年度；4,100千円(1,400：1,200：1,500千円)
- 2) 研究者代表：東華岳；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：チューイングによるストレス性骨粗鬆症進行抑制機構の賦活；平成23-25年度；5,070千円(2,080：1,950：1,040千円)
- 3) 研究者代表：東華岳；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：チューイングによるストレス性骨粗鬆症胎児期発症の抑制機構の賦活化；平成26-28年度；3,800千円(1,400：1,300：1,100千円)
- 4) 研究者代表：東華岳；第10回リリー研究助成：椎体の構造解析による骨粗鬆症の進行と新規骨折の予測；平成26年度；800千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

千田隆夫：

- 1) 日本解剖学会理事(～現在)
- 2) 日本解剖学会解剖体委員(～現在)
- 3) 日本解剖学会倫理委員(～現在)
- 4) 日本臨床分子形態学会理事(～現在)

東 華岳：

- 1) 日本臨床分子形態学会評議員(～現在)
- 2) 日本顕微鏡学会評議員(～現在)
- 3) SAM 研究協議会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

千田隆夫：

- 1) Medical Molecular Morphology ; Editorial Board (平成 24 年～現在)
- 2) Medical Molecular Morphology ; Editor-in-Chief (平成 26 年～現在)

東 華岳：

- 1) The Open Anatomy Journal ; Editorial Advisory Board (～現在)
- 2) Advances in Anatomy ; Editorial Advisory Board (平成 25 年～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 千田隆夫：日本臨床分子形態学会論文賞(平成 24 年度)

9. 社会活動

千田隆夫：

- 1) 篤志解剖全国連合会理事(平成 24 年 4 月～現在)

東 華岳：

- 1) 岐阜県准看護師試験委員(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 早川大輔：「(公社)東洋療法学校協会 第 36 回教員研修会」模擬授業でより良い教授法を模索 ガイドラインまとめ解剖実習認可要望を：鍼灸柔整新聞(2012 年 8 月 25 日)
- 2) 千田隆夫：「研究室から 大学はいま」からだ作り、指令系統解明へ：岐阜新聞(2012 年 11 月 27 日)
- 3) 東 華岳：「Biting strength」Chewing may help to reduce bone loss caused by stress and aging: THE WALL STREET JOURNAL(2014 年 4 月 28 日)

12. 自己評価

評価

もともと解剖学は教育負担の大きい分野であり、少ない教員でこの教育負担をこなしていくことは相当な労力を必要とする。最近のホルマリン暴露に対する規制が厳しくなったことに対応するために、大学や同窓会の協力を得て、解剖実習室の環境を一新できたことは高く評価できる。研究活動については、

教員ひとりひとりの価値観と興味の対象に差がありすぎるため、必ずしも効果的には進められていない。最低限必要な研究費を自力で獲得できる能力は評価できる。

現状の問題点及びその対応策

平成 23 年 8 月に千田が教授として着任してから 3 年半が経過した。この間に 3 名の大学院生 (2 人は社会人大学院生) と 1 名の研究生が入室し、マンパワーは多少向上した。一方、教員 3 名がいずれも 50 歳代半ばであり、分野の持続的な発展が不安視される。人事の固定は惰性と倦怠を生むだけである。新しい環境に移ってそこに適用すれば、自身の未知の能力に気づく。勇気を持って、一步踏み出して欲しい。研究室の設備・機器は、現代の医学研究遂行には甚だ不十分である。今後、形態学を基盤としたダイナミックな研究の展開をめざし、ライブイメージング、細胞培養、基本的な分子生物学・生化学テクニックの導入を急ぎたい。

今後の展望

教育においては、学生の知的好奇心を刺激する明快でインパクトのあるテュトリアル、講義、実習を実践していきたい。学部学生が教室に来やすいアットホームな雰囲気を作り、将来的な人材確保を目指したい。遺伝子・分子を扱いながらも、常に個体レベルの構造と機能を追究する研究を進めていく。臨床医やコメディカルスタッフの臨床現場からの研究の要請に答えるために、肉眼解剖学、各科臨床医学、画像診断学等の総合的な知識と理解のブラッシュアップを常に心がけたい。

(2) 分子病態学分野

1. 研究の概要

1) 抗体記憶の形成維持機構の解明

免疫記憶は、特異性免疫の最も重要な特徴であり、その人工的付与であるワクチン療法は感染症対策、さらには抗腫瘍免疫療法として期待されている。また、近年ヒト型抗体医薬による B リンパ球除去療法の SLE、慢性関節リウマチ、多発性硬化症等自己免疫疾患での有効例が示唆する様に、ある種の自己免疫病の病態にはスイッチ型の自己抗体産生が関わっており、慢性難治性の本態に記憶 B リンパ球の形成が関連している可能性がある。従って免疫記憶の生成と消退の分子機構を解明する事は、医学・医療の進歩に寄与する所大である。

B リンパ球は末梢で抗原と出会い、T リンパ球からのヘルプを受け、胚中心を形成する。その際 B リンパ球に Activation induced cytidine deaminase(AID)が発現し、自らの抗体遺伝子を改変し、高親和性のスイッチ型抗体をコードした遺伝子へと作り変えてゆく。胚中心 B リンパ球のうち、一部が形質細胞に分化、更にその一部が骨髄の微小環境で長期生存形質細胞として長期にわたる血清抗体価の維持に貢献する。また、別の一部は休止状態で長期生存する記憶 B リンパ球となると考えられている。その運命決定の原理や、その長期生存の本態等、記憶 B リンパ球に関する基本的な事項は、未だ十分に明らかではない。我々は、抗体記憶の形成維持機構を分子レベルで進め、そこから免疫記憶制御の基礎を築く事を目指している。

2) AID 遺伝子 (*Aicda*) 発現調節の分子機構の解明

AID は活性化 B 細胞内で起こる抗体遺伝子の改変に必須の分子だが、その変異導入の標的には抗体遺伝子のみならずがん関連遺伝子を含む多様な遺伝子が含まれる。そのため AID は内因性的の変異源として一部の B リンパ腫の発生に関わると考えられている。また、AID の発現は、通常は活性化 B リンパ球に特異的とされているが、感染や炎症に伴う外的刺激に反応して B リンパ球以外の細胞でも発現することが知られており、AID がリンパ腫に限らず広く腫瘍の発生に関わっている可能性がある。また、AID は酵素としてメチル化シトシンを脱メチル化させる反応を触媒する活性を持っており、そのことから広く細胞のエピジェネティックな制御にも関わることが提唱されている。そこで、我々は *Aicda* 遺伝子の発現調節の分子機構を明らかにするために、遺伝子編集の技術などを用い、調節に関わる多数の転写因子群の役割を解析している。

2. 名簿

教授： 長岡 仁 Hitoshi Nagaoka
助教： 佐藤克哉 Katsuya Sato

3. 研究成果の発表

著書 (和文)
なし

著書 (欧文)

- 1) Begum N, Nagaoka H, Kobayashi M, Honjo T. Molecular Mechanisms of AID Function In: Alt FW, Honjo T, Radbruch A, Reth M, eds. Molecular Biology of B Cells, 2nd ed. London: Academic Press; 2014:305-344.

総説 (和文)
なし

総説 (欧文)

- 1) Honjo T, Kobayashi M, Begum N, Kotani A, Sabouri S, Nagaoka H. The AID Dilemma: Infection, or Cancer? Adv Cancer Res. 2012;113:1-44.

原著 (和文)
なし

原著 (欧文)

- 1) Kawamata T, Lu J, Sato T, Tanaka M, Nagaoka H, Agata Y, Toyoshima T, Yokoyama K, Oyaizu N, Nakamura N, Ando K, Tojo A, Kotani A. Imatinib mesylate directly impairs class switch recombination through down-regulation of AID: its potential efficacy as an AID suppressor. Blood.

- 2012;119:3123-3127. IF 9.775
- 2) Sato K, Handa H, Kimura M, Okano Y, Nagaoka H, Nagase T, Sugiyama T, Kitade Y, Ueda H. Identification of a Rho family specific guanine nucleotide exchange factor, FLJ00018, as a novel actin-binding protein. Cell Signal. 2012;25:41-49. IF 4.471
 - 3) Matsushashi A, Ohno T, Kimura M, Hara A, Saio M, Nagano A, Kawai G, Saitou M, Takigami I, Yamada K, Okano Y, Shimizu K. Growth suppression and mitotic defect induced by JNJ-7706621, an inhibitor of cyclin-dependent kinases and aurora kinases. Curr Cancer Drug Tar. 2012;12:625-639. IF 3.582
 - 4) Huong le T, Kobayashi M, Nakata M, Shioi G, Miyachi H, Honjo T, Nagaoka H. In Vivo Analysis of Aicda Gene Regulation: A Critical Balance between Upstream Enhancers and Intronic Silencers Governs Appropriate Expression. PLoS One. 2013;8:e61433. IF 3.534
 - 5) Kimura M, Yoshioka T, Saio M, Banno Y, Nagaoka H, Okano Y. Mitotic catastrophe and cell death induced by depletion of centrosomal proteins. Cell Death Dis. 2013;4:e603. IF 5.177
 - 6) Sato K, Suzuki T, Yamaguchi Y, Kitade Y, Nagase T, Ueda H. PLEKHG2/FLJ00018, a Rho family-specific guanine nucleotide exchange factor, is tyrosine phosphorylated via the EphB2/cSrc signaling pathway. Cell Signal. 2014;26:691-696. IF 4.471
 - 7) Sato K, Sugiyama T, Nagase T, Kitade Y, Ueda H. Threonine 680 phosphorylation of FLJ00018/PLEKHG2, a Rho family-specific guanine nucleotide exchange factor, by epidermal growth factor receptor signaling regulates cell morphology of Neuro-2a cells. J Biol Chem. 2014;289:10045-10056. IF 4.600

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：長岡 仁；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：Cre マウスを用いた新たな in vivo 分子機能解析法の確立；平成 23-25 年度；3,770 千円(1,430：1,170：1,170 千円)
- 2) 研究代表者：長岡 仁；科学研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)：B リンパ球終末分化機構の解明；平成 23-24 年度；3,910 千円(1,700：2,210 千円)
- 3) 研究代表者：木村正志；科学研究費補助金基盤研究(C)：オーロラキナーゼの細胞分裂における機能とがんにおける異常の解明；平成 21-24 年度；3,700 千円(1,000：900：900：900 千円)
- 4) 研究代表者：長岡 仁；科学研究費補助金基盤研究(C)：細胞リプログラミングへのシチジンアミナーゼの関与；平成 26-28 年度；4,940 千円(1,690：1,690：1,560 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

長岡 仁：

- 1) 日本生化学会評議員(~現在)
- 2) 日本免疫学会評議員(~現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

長岡 仁：

- 1) 第 41 回日本免疫学会学術集会(平成 24 年 12 月, 神戸, シンポジウム「B cell activation」座長)
- 2) 第 42 回日本免疫学会学術集会(平成 25 年 12 月, 幕張, ワークショップ「B cell activation and regulation」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

主要テーマの免疫記憶形成の分子機構に加えて、従来からの継続的に取り組みつつあった *Aicda* 制御の分子機構に関して、ここ数年用いられるようになってきた新技術である遺伝子編集法を導入し、効率的に結果を得ることができるようになった。技術的には必要があれば常に最新のものを導入し活発に研究活動を進めて成果をあげつつある。また、教育面においても、講義資料のインターネット上での閲覧環境を整え、実習手順の予習用動画を作成するなど、環境変化に対応した方策を取り、教育効果の向上を図っている。

現状の問題点及びその対応策

本年度より佐藤助教が着任したが、入れ替わるように木村併任講師が異動により分野を離れたため、人数としては変動していない。本来の体制より人員不足であり、スタッフの努力で補おうとしている。欠員を補うためスタッフの選考を進める必要があるが、一分野の問題にとどまらない問題であると理解しており、単純ではない。対応策として優秀な大学院生の獲得が必要である。学生研究員制度などを利用し学部学生に研究に参加してもらい、研究思考の学生を育てるとともに実際に研究活動への有形無形の貢献を得ている。

今後の展望

分子免疫学研究の立ち上げからコンスタントに新たな知見を発信できる体制を構築し、基礎系・臨床系各分野との連携で岐阜大学発のユニークな研究を作り上げて行く。研究志向を持つ学生の掘り起こしと、その育成を通じて若い医師・研究者が身を投じてみたいと思わせるような環境を作り上げ、最終的には岐阜大学から次世代を担う研究者を育てる事が最終目標である。そのための展望としては常に最新の研究法を取り入れ、野心的な学生を積極的に引き込んだ形で研究体制を構築し、その一層の充実を図ることで、目標に近づいて行きたい。

(3) 循環病態学分野

1. 研究の概要

1. 再生医学・再生医療

- 1) G-CSF (顆粒球コロニー刺激因子) を用いた狭心症, 心筋梗塞・心不全・閉塞性動脈硬化症に対する再生療法
- 2) Erythropoietin を用いた心筋梗塞・心不全・閉塞性動脈硬化症, に対する再生療法の開発
- 3) 抗がん剤, 5-FU 等を用いた心筋梗塞後の再生療法の開発
- 4) Gelatin hydrogel sheet あるいは粒子の Drug Delivery System を用いた G-CSF と erythropoietin による心筋梗塞・心不全・閉塞性動脈硬化症に対する心臓組織再生あるいは血管再生療法の開発
- 5) ナノリポソームを用いた G-CSF と erythropoietin による心筋梗塞後心筋組織修復再生療法の開発, 下肢閉塞性動脈疾患に対する血管再生療法に関する研究
- 6) ホーミング分子で修飾された内皮前駆細胞あるいは筋芽細胞による心血管再生治療法の開発
- 7) 骨髄細胞移植ならびに G-CSF を用いた COPD 等の肺疾患に対する再生療法
- 8) LOX 遺伝子改変マウスを用いた下肢虚血モデルにおける LOX-1 の血管新生血における LOX の関与に関する研究
- 9) Erythropoietin を用いた重症下肢閉塞性動脈硬化症に対する臨床研究
- 10) Erythropoietin と gelatin hydrogel 粒子を用いた重症下肢閉塞性動脈硬化症に対する臨床研究

2. 遺伝子治療

- 1) 心不全に対する HGF, sFas, 可溶性 TGF- β II 型受容体, Decorin の遺伝子治療
- 2) 糖尿病性腎症に対する sFas, HGF 遺伝子治療

3. アポトーシス, オートファジー

- 1) 循環器疾患とアポトーシス
筋繊維芽細胞のアポトーシスのブロックによる左室リモデリング予防
- 2) 腎疾患とアポトーシス
糖尿病性腎症の発症メカニズムにおけるアポトーシスの役割の解明
- 3) 循環器疾患とオートファジー
心筋梗塞・心不全の際のオートファジーの病態生理解明と治療法の開発

4. 虚血心筋保護のメカニズム解明と new drug の開発

- 1) 抗糖尿病薬 miglitol, acarbose, voglibose など α -glucosidase 阻害薬, ピオグリタゾン, ナテグリニド, グリクラジドによる虚血心筋保護作用のメカニズム解明とその臨床応用
- 2) 抗高脂血症薬スタチンの pleiotropic effect としての虚血心筋保護作用のメカニズム解明
- 3) 各種心血管薬 (ARB, Ca 拮抗薬, 抗血小板薬, β 遮断薬) の虚血心筋保護作用のメカニズム解明

5. 心不全

- 1) 不全心筋における angiotensin II type 2 受容体の病態生理学的意義の解明
- 2) 心筋細胞変性の分子病理
- 3) アシアロエリスロポエチンの抗心不全作用の解明
- 4) LOX-1 遺伝子改変マウスを用いた左室圧負荷モデルでの LOX-1 の心筋肥大への関与に関する研究
- 5) LOX-1 遺伝子改変マウスを用いたドクソビシン誘導性心筋症による心不全に対する LOX-1 関与に関する研究
- 6) インスリン抵抗性改善薬, 食後高血糖改善薬の心不全に対する保護効果

6. IB-IVUS, IB-エコー, および光干渉波断層画像

- 1) 冠動脈プラーク progression のメカニズムの解明
- 2) 急性冠症候群発症のメカニズムの解明
- 3) 冠動脈プラークの動態と組織性状の関連の解明
- 4) 脂質低下療法が冠動脈・頸動脈プラークの組織性状に及ぼす影響の解明
- 5) 頸動脈プラークの組織性状と脳梗塞発症の関連の解明と核磁気共鳴画像との比較
- 6) 頸動脈プラークの組織性状と頸動脈ステント合併症の関連の解明
- 7) 光干渉波断層画像による冠動脈・頸動脈プラークの不安定性の評価
- 8) 光干渉波断層画像のステレオ三次元化
- 9) Velocity vector imaging による心房機能の評価と心房細動発症の予測
- 10) 糖尿病治療と動脈硬化改善の関連の解明
- 11) 頸動脈硬化と予後の関連の解明

- 12) PET-CTによる頸動脈硬化の評価
- 7. MDCTによる冠動脈病変診断**
- 1) MDCT画像とIB-IVUS画像との組織性状診断比較
- 8. カテーテルアブレーションによる各種頻脈性不整脈治療**
- 1) 心房細動患者における肺静脈のIB-IVUSによる組織性状診断
- 9. T波交互現象を用いた心室性致死性不整脈による心臓突然死のリスク層別化に関する研究**
- 1) 急性心筋梗塞発症時の超短期予後の予測に関する研究
- 2) 慢性維持透析患者における心臓突然死の予測に関する研究
- 10. 安定労作性冠動脈疾患に対する治療法に関する研究**
- 1) 低リスク安定労作性狭心症に対する薬物療法とインターベンション療法の予後に関する無作為介入試験 (JSAP Study) の長期予後調査研究 (JSAP: Seven year outcome study)
- 2) 経皮的冠動脈形成術の高血圧患者におけるカルシウム拮抗薬の臓器保護効果に関する研究 (benidipine vs nifedipine, CACOT Trial)
- 3) 冠動脈疾患合併慢性動脈閉塞症患者に対するサルボグレラート塩酸塩の心機能改善効果に関する研究 (アンブラーグ, SCAPA Study)
- 4) COPD合併冠動脈疾患に対するセリプロロールの効果に関する研究 (ECCAP Study)
- 5) 薬剤溶出ステントに対する抗血小板療法—シロスタゾールの有用性に関する研究 (MUGIC-CYPHER Study)
- 11. 冠攣縮性狭心症に対する薬物治療に関する研究**
- 1) 冠攣縮性狭心症患者における主要心血管イベントに対するカルシウム拮抗薬の効果に関する研究—メタ解析 (VSA-meta Study)
- 2) 切迫冠攣縮性狭心症 (Urgent vasospastic angina: UVA) の実態と臨床的特徴に関する研究
- 12. 慢性腎臓病合併心疾患に対する薬物治療に関する研究**
- 1) 冠動脈造影による造影剤腎症発症予防に対するニコランジルの有用性に関する研究 (ニコランジル-CKD study)
- 2) 冠動脈疾患を有する慢性維持透析患者に対する経口ニコランジル投与の心血管イベントに及ぼす影響に関する研究 (PRECON Trial HD)
- 3) CKD合併高血圧患者におけるN型CCBの効果に関する研究 (NAGARA study, azelnidipine vs. cilnidipine)
- 13. 急性冠症候群に対する薬物治療に関する研究**
- 1) 急性心筋梗塞患者におけるアンジオテンシン II受容体拮抗薬の炎症性マーカーに及ぼす影響に関する研究 (INMAT-AMI Study)
- 2) 急性冠症候群に対する抗血小板療法と予後に関する研究 (シロスタゾール vs プレタール)
- 3) 急性冠症候群における内因性サイトカインの役割とその予後予測
- 14. 臨床核医学**
- 1) 心筋梗塞, 狭心症, 肥大型心筋症, 二次性心筋疾患 (サルコイドーシスなど) の核医学的検討
- 2) α -グルコシダーゼ阻害薬の虚血心筋保護作用の核医学的検討
- 15. 高血圧についての基礎的および臨床的研究**
- 1) SHRにおいて塩分負荷が心臓・腎臓組織レニン, プロレニンに与える影響に関する研究
- 2) 高血圧症患者におけるレニン, プロレニンの関与に関する研究
- 3) 家庭血圧測定的重要性と降圧薬の評価に関する臨床研究, DOHSAM研究, GAIN研究, GIFT研究
- 16. 閉塞性動脈硬化症に対する治療法の開発**
- 1) エリスロポエチン, G-CSF注射による下肢閉塞性動脈疾患の治療
- 2) エリスロポエチン含浸ゲラチンハイドロゲル筋注による下肢閉塞性動脈疾患の治療
- 17. 東洋医学的アプローチ**
- 1) パーキンソン病に対する鍼治療
- 2) 天台烏薬の腎疾患に対する効果の検討
- 3) 天台烏薬の動脈硬化に対する効果に関する実験的検討
- 4) 入院循環器重症患者のICUせん妄に対する東洋医学の効果の検討

2. 名簿

教授：	湊口信也	Shinya Minatoguchi
准教授：	西垣和彦	Kazuhiko Nishigaki
講師：	川崎雅規	Masanori Kawasaki
併任講師：	村田一知朗	Ichijiro Murata
併任講師：	金森寛充	Hiromitsu Kanamori
臨床講師：	山田好久	Yoshihisa Yamada
臨床講師：	久保田知希	Tomoki Kubota
臨床講師：	高杉信寛	Nobuhiro Takasugi
臨床講師：	田中俊樹	Toshiki Tanaka
医員：	名和隆英	Takahide Nawa
医員：	伊藤文隆	Fumitaka Ito
医員：	吉田学郎	Gakuro Yoshida
医員：	柳瀬恒明	Komei Yanase
医員：	宮崎 渚	Nagisa Miyazaki
医員：	中島 孝	Takashi Nakashima
医員：	畑佐匡紀	Masanori Hatasa
医員：	馬場慎也	Shinya Baba
医員：	湊口信吾	Shingo Minatoguchi
医員：	垣内大蔵	Daizo Kaito
医員：	木野村祐二郎	Yujiro Kinomura
医員：	成瀬元気	Genki Naruse
医員：	西脇亜由子	Ayuko Nishiwaki
医員：	新美香織	Kaori Niimi
医員：	豊吉紘之	Hiroyuki Toyoshi
医員：	豊吉沙耶香	Sayaka Toyoshi
医員(パート)：	森下めぐみ	Megumi Morishita

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 西垣和彦, 湊口信也. 高安動脈炎(大動脈炎症候群): 堀 正二, 永井良三編集. 循環器疾患 最新の治療 2012-2013, 東京: 南光堂; 2012年: 393-399.
- 2) 西垣和彦, 湊口信也. 6. 慢性心不全の非薬物療法 3. minimally invasive therapy Q2 PTMC について注意しないといけないことを教えてください: 北風政史編集. 心不全診療 Q&A エキスパート 106 人からの回答, 東京: 中外医学社; 2012年: 322-324.
- 3) 西垣和彦, 湊口信也. 10. 心不全を全体としてどうとらえるか -from bench to bedside- Q2 CRAS について教えてください: 北風政史編集. 心不全診療 Q&A エキスパート 106 人からの回答, 東京: 中外医学社; 2012年: 427-429.
- 4) 和泉 徹, 西垣和彦. 巻頭トピックス 5. 臓器移植法改正後の心臓移植: 堀 正二, 永井良三編集. 循環器疾患 最新の治療 2012-2013, 東京: 南江堂; 2012年: 21-28.
- 5) 西垣和彦. 第 5 章 大学生のための病気の知識-大学生に比較的多い病気を中心に- 第 2 節 心臓の病気: 岐阜県大学保険管理研究会企画, 山本眞由美監修. 2012 大学生の健康ナビ キャンパスライフの健康管理 改訂版, 岐阜: 岐阜大学; 2012年: 108-112.
- 6) 西垣和彦. 12. 重症心不全患者の治療とケア, TOPICS 心臓移植に関する動向(改正臓器移植法): 誠茅みゆき, 池亀俊美, 加藤尚子編集. 心不全ケア教本, 東京: メディカル・サイエンス・インターナショナル; 2012年: 246-251.
- 7) 川崎雅規. IB-IVUS によるプラーク評価: Annual Review 循環器 2012, 東京: 中外医学社; 2012年: 97-102.
- 8) 川崎雅規. IB-IVUS で冠動脈組織性状をどこまで評価できるか?: Heart View 増刊号 Vol.17, メジカルビュー社; 2013年: 255-261.
- 9) 牛越博昭(分担). 第三章 手技 8: 中心静脈/肺動脈カテーテルは重症患者管理に有用である? Pro もちろん! 使用しなければ集中治療ではない: 集中治療の最新論点 -Pro & Con ディベート, 救急・集中治療 vol 25 No 9/10 2013, 東京: 総合医学社; 2013年: 1099-1103.
- 10) 西垣和彦. 2. PCI/CABG ガイドライン: 平山治雄, 横井宏佳, 一色高明監修, 専門医認定医制度審議会 手引き書制作委員会編. CVIT 専門医試験準拠『インターベンション必携』, 2013年: 6-9.
- 11) 西垣和彦. 3. わが国のガイドラインを踏まえた左主幹部の治療(ACS を含む): 平山治雄, 横井宏佳, 一色高明監修, 専門医認定医制度審議会 手引き書制作委員会. CVIT 専門医試験準拠『インターベンション必

携』, 2013年: 121-123.

- 12) 西垣和彦. 5. 安定労作性狭心症: 浦部晶夫ら編. 今日の処方 改訂第5版, 南江堂; 2013年: 132-136.
- 13) 西垣和彦. 8. 陳旧性心筋梗塞: 浦部晶夫ら編. 今日の処方 改訂第5版, 南江堂; 2013年: 142-146.
- 14) 西垣和彦. 第5章 大学生のための病気の知識-大学生に比較的多い病気を中心に-第2節 心臓の病気: 岐阜県大学保健管理研究会企画, 山本眞由美監修. 2013 大学生の健康ナビ キャンパスライフの健康管理 改訂版, 岐阜大学; 2013年: 108-112.
- 15) 西垣和彦, 湊口信也. 心膜液貯留、心タンポナーデ: 堀 正二, 永井良三編集. 循環器疾患 最新の治療 2014-2015, 南江堂; 2014年: 194-197.
- 16) 小川俊一, 鮎澤 衛, 石井正浩, 荻野廣太郎, 佐地 勉, 西垣和彦, 濱岡建城, 深澤隆治, 落 雅美, 神山浩, 高橋 啓, 津田悦子, 横井宏佳. 川崎病心臓血管後遺症の診断と治療に関するガイドライン(2013年改訂版): 循環器病の診断と治療に関するガイドライン(2012年度合同研究班報告) http://www.j-circ.or.jp/guideline/pdf/JCS2013_ogawas_h.pdf
- 17) 井澤英夫, 西垣和彦, 長田尚彦, 平敷安希博, 伊藤義浩, 吉田俊子, 池亀俊美, 高橋哲也, 森尾裕志, 河野裕治, 小林聖典, 宮澤 靖, 山田純生. 心臓リハビリテーション標準プログラム(2013年版)-心筋梗塞急性期・回復期-http://square.umin.ac.jp/jacr/program_std/doc/program2013.pdf
- 18) 牛越博昭(分担). 第IV章 こんなとき、どうしたらいい? 低体温療法, 適応と実際: 田邊健吾, 中澤 学編. 救急・集中治療, vol26-1・2, かゆいとところに手が届く循環器救急, 東京: 総合医学社; 2014年: 178-183.
- 19) 牛越博昭(分担). 救急処置のトラブルとリカバリー, 4.電気ショック(同期・非同期), 救急医学 vol38, No 6, 東京: へるす出版; 2014年: 635-639.
- 20) 西垣和彦. 第5章 心不全の特殊な治療とは? 2. 心臓移植: 佐藤幸人編. あなたも名医! ゼットイ答えがみつかる心不全, 一人でGo! チームでGo!, 日本医事新報社; 2014年: 142-149.
- 21) 西垣和彦, 湊口信也. 池亀俊美, 長山雅俊, 大宮一人編, 伊東春樹監修. 心臓リハチーム医療 先導施設のノウハウとクリニカルパス集, NPO 法人ジャパンハートクラブ; 2014年: 34-40.
- 22) 西垣和彦. 第6章 重症心不全の特殊な治療 53 究極の重症心不全治療-心臓移植とその本質-: 佐藤幸人編. 臨床心不全のいちばん大事なところ 60-そうだったのか! ストンと胸に落ちる基礎知識 (CIRCULATION Up-to-Date Books 03), 株式会社メディカ出版; 2014年: 302-308.

著書 (欧文)

- 1) Kawasaki M. Chapter 3: Integrated Backscatter Intravascular Ultrasound. In: Intravascular Ultrasound, Croatia: INTECH; 2012:41-52.
- 2) Kawasaki M. Tissue Characterization of Carotid Plaques, Carotid Stenosis, Croatia: INTECH; 2013:19-29.
- 3) JCS Joint Working Group: Daida H, Hirayama A, Isshiki T, Kimura T, Masuda I, Mitsudo K, Miyazaki S, Nishida H, Nishigaki K, Ochi M, Ogawa S, Ohno T, Sakata R, Shiba T, Sumiyoshi T, Suzuki T, Takamoto S, Yaku H, Yamazaki T. Guidelines for elective percutaneous coronary intervention in patients with stable coronary artery disease (JCS 2011) published in 2012--digest version. Circ J. 2013;77:1590-1607.
- 4) JCS Joint Working Group: Amano A, Arai H, Asai T, Daida H, Fujiwara H, Horii T, Isshiki T, Kawasuji M, Kimura T, Kobayashi J, Masuda I, Niinami H, Nishida H, Nishigaki K, Ogawa S, Ohno T, Okabayashi H, Okamura Y, Sakata R, Shiba T, Suma H, Sumiyoshi T, Takamoto S, Tashiro T, Yaku H, Yamamoto F, Yamazaki T, Watanabe G. Guidelines for the clinical application of bypass grafts and the surgical techniques (JCS 2011) published in 2012--digest version. Circ J. 2013;77:1608-1641.
- 5) Kawasaki M. Chapter 7: Optical Coherence Tomography for Coronary Artery Plaques-A Comparison with Intravascular Ultrasound. In: Optical Coherence Tomography, Croatia: INTECH; 2013:127-135.
- 6) JCS Joint Working Group: Ogawa S, Ayusawa M, Fukazawa R, Hamaoka K, Ishii M, Nishigaki K, Ogino H, Saji T. Guidelines for diagnosis and management of cardiovascular sequelae in Kawasaki disease. (JCS 2013) -Digest Version-. Circ J. 2014;78:2521-2562.
- 7) Kawasaki M. Chapter 7: Vulnerable Plaques. In: Mizuno K, ed. Coronary Angioscopy, USA: Springer; 2014:41-52.

総説 (和文)

- 1) 西垣和彦. CORE4 安定狭心症患者の予後改善としての治療選択はPシカ薬物療法か?, CORE JOURNAL 2012年; 1巻: 26-31.
- 2) 石塚達夫, 袴田康弘, 中村真潮, 林 登志雄, 森田 浩, 西垣和彦. 第14回東海支部専門医部会教育セミナー 生活習慣病への治療戦略, 日本内科学会雑誌 2012年; 101巻: 2342-2349.
- 3) 西垣和彦. 予後を考慮した狭心症の治療戦略-冠攣縮性狭心症に対するメタ解析の結果から-, 西尾幡豆医師会報 2012年; 410号: 6-8.
- 4) 和泉 徹, 磯部光章, 伊藤 浩, 北風政史, 澤 芳樹, 清野精彦, 筒井裕之, 平山篤志, 百村伸一, 山崎健二, 吉川 勉, 青山直善, 安達 仁, 安斉俊久, 猪俣孝元, 大西勝也, 小澤竹俊, 加藤真帆人, 加藤倫子, 絹川真太郎, 後藤 一, 坂田泰史, 佐藤直樹, 佐藤幸人, 中村一文, 西垣和彦, 庭野慎一, 植村一彦, 眞茅みゆき, 安村良男, 山本一博, 横山広行. 循環器病の診断と治療に関するガイドライン(班長: 和泉徹, 2010年度合同研究班報告), 『急性心不全治療ガイドライン(2011年改訂版)』 掲載: 日本循環器学会ホームページ公開のみ(2012年公開, <http://www.j-circ.or.jp/guideline/index.htm>)

- 5) 藤原久義, 一色高明, 大野貴之, 小川 聡, 落 雅美, 木村 剛, 坂田隆造, 柴 輝男, 鈴木孝彦, 住吉徹哉, 代田浩之, 高本眞一, 西垣和彦, 西田 博, 平山篤志, 榊田 出, 光藤和明, 宮崎俊一, 夜久 均, 山崎 力. 循環器病の診断と治療に関するガイドライン(班長: 藤原久義, 2010 年度合同研究班報告), 『安定冠動脈疾患における待機 PCI のガイドライン(2011 年改訂版)』 掲載: 日本循環器学会ホームページ公開のみ(2012 年公開、<http://www.j-circ.or.jp/guideline/index.htm>)
- 6) 落 雅美, 浅井 徹, 天野 篤, 荒井裕国, 一色高明, 大野貴之, 岡林 均, 小川 聡, 川筋道雄, 木村 剛, 小林順二郎, 坂田隆造, 柴 輝男, 須磨久善, 鈴木孝彦, 住吉徹哉, 代田浩之, 高本眞一, 田代 忠, 新浪博, 西垣和彦, 西田 博, 藤原久義, 堀井泰浩, 榊田 出, 夜久 均, 山崎 力, 山本文雄, 渡邊 剛, 北村惣一郎, 鈴木友彰, 田鎖 治, 田林暁一, 土井 潔, 富田重之, 中嶋博之, 西見 優, 羽生道弥, 藤井正大. 循環器病の診断と治療に関するガイドライン(2010 年度合同研究報告), 『虚血性心疾患に対するバイパスグラフトと手術術式の選択ガイドライン(班長: 落 雅美, 2011 年版)』 掲載: 日本循環器学会ホームページ公開のみ(2012 年公開、<http://www.j-circ.or.jp/guideline/index.htm>)
- 7) 川崎雅規. IVUS による冠動脈病変評価, *CARDIAC PRACTICE* 2012 年; 23 卷: 83-89.
- 8) 川崎雅規. Tissue characterization of coronary plaques using a new integrated backscatter IVUS and three dimensional reconstruction, *日本心臓病学会誌* 2012 年; 7 卷: 136-141.
- 9) 川崎雅規. 特色ある診療内容: 診療科・部門紹介 第二内科(循環器内科), *病院広報 UBUNE MARCH* 2012 年; 19 卷: 2.
- 10) 川崎雅規. IB-IVUS による冠動脈疾患の診断, *INTERVENTION* 2013 年: 97-102.
- 11) 川崎雅規, 湊口信也. 心内膜炎, *医学と薬学* 2013 年; 69 卷: 879-884.
- 12) 西垣和彦. 特集 慢性心不全の薬物療法-それぞれのステージでの長期予後を見据えた早期介入-I-2 I. 1 次予防と薬物療法(心イベント前での薬物療法)『虚血性心臓病の心不全予防 ~急性心筋梗塞後の対処法~』, *月刊循環器 CIRCULATION* 2013 年; 3 卷: 13-20.
- 13) 川崎雅規. IVUS の臨床的意義 予後改善をもたらしたか?, *呼吸と循環* 2013 年; 61 卷: 612-617.
- 14) 和泉 徹, 西垣和彦. 第 40 回内科学の展望『臓器移植の現状と将来展望』5. 心臓移植について, *日本内科学会雑誌* 2013 年; 102 卷: 565-572.
- 15) 西垣和彦. 特集 心筋症: 診断と治療の進歩 IV. 予後・QOL の改善を目指す治療法の選択『心臓移植の現状・未来』, *日本内科学会雑誌* 2014 年; 103 卷: 399-407.
- 16) 西垣和彦, 湊口信也. 特集 心臓リハビリテーション Now: 包括的リハビリテーションと疾病管理プログラムを識る 5. 診る 『外来心臓リハビリテーションをどう立ち上げ、どう運営するか?』, *Heart View* 2014 年; 18 卷: 34-43.
- 17) 西垣和彦. 特集 『高齢者における抗血栓療法』1. 抗血小板療法 4) 抗血小板薬の副作用対策, *Geriatric Medicine 老年医学* 2014 年; 52 卷: 1433-1438.
- 18) 川崎雅規. 診断法の up date 血管内エコーの有用性と今後の展望, *最新医学* 2014 年; 69 卷: 1673-1680.
- 19) 川崎雅規. IB-IVUS を PCI に活かす, *Coronary Intervention* 2014 年; 10 卷: 42-50.
- 20) 田中新一郎. 定期健康診断の重要性について, *経済月報* 2014 年; 711 卷: 22-23.

総説 (欧文)

- 1) Nishigaki K. Qualitative plaque stabilization but not quantitative plaque regression. *Circulation Journal*. 2012;76:809-811.
- 2) Takemura G, Kanoh M, Minatoguchi S, Fujiwara H. Cardiomyocyte apoptosis in the failing heart -A critical review from definition and classification of cell death-. *Int J Cardiol*. 2013;167:2373-2386.

原著 (和文)

- 1) 田中生雅, 佐渡忠洋, 磯村有希, 加納亜紀, 臼井るり子, 高井郁恵, 清水克時, 山本眞由美. 大学生の健康への取り組みと QOL, *CAMPUS HEALTH* 2012 年; 49 卷: 258-260.
- 2) 佐渡忠洋, 田中生雅, 磯村有希, 宮地幸雄, 臼井るり子, 高井郁恵, 加納亜紀, 清水克時, 山本眞由美. 回答方法の変化が UPI 得点に与える影響についての検討, *CAMPUS HEALTH* 2012 年; 49 卷: 268-270.
- 3) 磯村有希, 鶴見広美, 田中生雅, 佐渡忠洋, 臼井るり子, 高井郁恵, 加納亜紀, 宮地幸雄, 清水克時, 山本眞由美. 大学生の AIDS/HIV に関する知識の実態調査, *CAMPUS HEALTH* 2012 年; 49 卷: 408-410.
- 4) 田中新一郎, 皆川太郎, 湊口信也. 事業場における心疾患患者の運動療法導入の試み, *心臓リハビリテーション* 2012 年; 17 卷: 266-270.
- 5) 田中新一郎, 皆川太郎, 湊口信也. カンデサルタン 8mg からアジルサルタン 20 への切替えにて有効な降圧を認めた高血圧患者 2 例, *Therapeutic Research* 2012 年; 33 卷: 1711-1714.
- 6) 西垣和彦, 名和隆英, 服部有博, 鈴木貴史, 東 賢志, 今井 一, 山田好久, 高杉信寛, 久保田知希, 青山琢磨, 川崎雅規, 竹村元三, 湊口信也. 造影剤腎症に対する Nicorandil の持続点滴静注効果の検討, *Therapeutic Research* 2013 年; 34 卷: 340.
- 7) 金森寛充, 竹村元三, 今井 一, 鈴木貴史, 高杉信寛, 久保田知希, 牛越博昭, 服部有博, 青山琢磨, 川崎雅規, 西垣和彦, 湊口信也. 心肥大の成因確定に苦慮した Fabry 病の一例, *心臓* 2013 年; 45 卷: 440-445.
- 8) 田中新一郎, 皆川太郎, 湊口信也. 日本人労働者男性のカンデサルタン 8 mg からアジルサルタン 20 mg への切り替えにおける降圧効果の検討, *Therapeutic Research* 2013 年; 34 卷: 781-786.
- 9) 田中新一郎, 皆川太郎, 平野高弘, 青山琢磨, 長野俊彦, 山本典孝, 越路正敏, 後藤尚己, 安江隆夫, 杉下総

吉, 所 俊彦, 加藤文男, 伊東祐二, 横山仁美, 廣瀬 功, 竹田智雄, 谷島進太郎, 高井國之, 川瀬幸典, 小嶋昭次郎, 森 矩尉, 湊口信也. ロサルタン/ヒドロクロロチアジド配合錠による積極的降圧治療と降圧目標達成の実態-岐阜県における高血圧患者の実態と積極的降圧治療に関する調査 GIFT(GIFU INVESTIGATION FOR HYPERTENSIVE PATIENTS BY STRICT TREATMENT)-, 血圧 2013年;20巻:234-240.

- 10) 加納亜紀, 松永美紀, 田中生雅, 西尾彰泰, 佐渡忠洋, 磯村有希, 臼井るり子, 邦 千富, 榊原 愛, 堀田容子, 山本眞由美. 唾液中コルチゾール濃度測定を用いた大学女性職員のストレス調査の試み, *CAMPUS HEALTH* 2013年;50巻:289-291.
- 11) 磯村有希, 田中生雅, 西尾彰泰, 佐渡忠洋, 臼井るり子, 邦 千富, 榊原 愛, 堀田容子, 松永美紀, 加納亜紀, 宮地幸雄, 山本眞由美. 大学生の喫煙と飲酒に関する知識と認識の実態調査, *CAMPUS HEALTH* 2013年;50巻:383-385.
- 12) 田中生雅, 三宅恵子, 松井真一, 松藤淑美, 佐渡忠洋, 磯村有希, 加納亜紀, 林 正子, 山本眞由美. 岐阜大学女性研究者支援「メンター制度」取組と課題, *CAMPUS HEALTH* 2013年;50巻:397-399.
- 13) 佐渡忠洋, 田中生雅, 西尾彰泰, 磯村有希, 加納亜紀, 臼井るり子, 松永美紀, 榊原 愛, 邦 千富, 堀田容子, 山本眞由美. BMI と自我強度尺度および UPI との関連についての検討, *CAMPUS HEALTH* 2013年;50巻:513-515.

原著 (欧文)

- 1) Yoshimura S, Kawasaki M, Yamada K, Enomoto Y, Egashira Y, Hattori A, Nishigaki K, Minatoguchi S, Iwama T. Visualization of internal carotid artery atherosclerotic plaques in symptomatic and asymptomatic patients: A comparison of optical coherence tomography and intravascular ultrasound. *Am J Neuroradiol.* 2012;33:308-313. IF 3.675
- 2) Kawaguchi T, Takemura G, Kanamori H, Takeyama T, Watanabe T, Morishita K, Ogino A, Tsujimoto A, Goto K, Maruyama R, Kawasaki M, Mikami A, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Prior starvation mitigates acute doxorubicin cardiotoxicity through restoration of autophagy in affected cardiomyocytes. *Cardiovasc Res.* 2012;96:456-465. IF 5.808
- 3) Kubota T, Kawasaki M, Takasugi N, Imai H, Ishihara Y, Okubo M, Takahashi S, Sato H, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S. Left atrial pathological degeneration assessed by integrated backscatter transesophageal echocardiography as a predictor of progression to persistent atrial fibrillation: Results from a prospective study of three-years follow-up. *Cardiovasc Ultrasoun.* 2012;10:28-34. IF 1.283
- 4) Ishihara Y, Kawasaki M, Hattori A, Imai H, Takahashi S, Sato H, Kubota T, Okubo M, Ojio S, Nishigaki K, Takemura G, Fujiwara H, Minatoguchi S. Relationship among coronary plaque compliance, coronary risk factors and tissue characteristics evaluated by integrated backscatter intravascular ultrasound. *Cardiovasc Ultrasoun.* 2012;10:32. IF 1.283
- 5) Yamaki T, Kawasaki M, Jang IK, Raffel OC, Ishihara Y, Okubo M, Kubota T, Hattori A, Nishigaki K, Takemura G, Fujiwara H, Minatoguchi S. Comparison between integrated backscatter intravascular ultrasound and 64-slice multi-detector row computed tomography for tissue characterization and volumetric assessment of coronary plaques. *Cardiovasc Ultrasoun.* 2012;10:33. IF 1.283
- 6) Ono K, Iwama M, Kawasaki M, Tanaka R, Watanabe T, Onishi N, Warita S, Kojima T, Kato T, Goto Y, Arai M, Nishigaki K, Takemura G, Noda T, Watanabe S, Minatoguchi S. Motion of left atrial appendage as a determinant of thrombus formation in patients with a low CHADS2 score receiving warfarin for persistent nonvalvular atrial fibrillation. *Cardiovasc Ultrasoun.* 2012;10:50. IF 1.283
- 7) Takeyama T, Takemura G, Kanamori H, Kawaguchi T, Ogino A, Watanabe T, Morishita K, Tsujimoto A, Goto K, Maruyama R, Ushikoshi H, Kawasaki M, Yamada K, Nikami H, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Asialoerythropoietin, a nonerythropoietic derivative of erythropoietin, displays broad anti-heart failure activity. *Circ-Heart Fail.* 2012;5:274-285. IF 5.945
- 8) Ohta M, Kawasaki M, Ismail TF, Hattori K, Serruys PW, Ozaki Y. A histological and clinical comparison of new and conventional integrated backscatter intravascular ultrasound. (IB-IVUS) *Circ J.* 2012;76:1678-1686. IF 3.685
- 9) Warita S, Kawasaki M, Tanaka R, Ono K, Kojima T, Hirose T, Iwama M, Watanabe T, Nishigaki K, Takemura G, Noda T, Watanabe S, Minatoguchi S. Effects of pitavastatin on cardiac structure and function and on prevention of atrial fibrillation in elderly hypertensive patients: a prospective study of 2-years' follow-up. *Circ J.* 2012;76:2755-2762. IF 3.685
- 10) Kojima T, Kawasaki M, Tanaka R, Ono K, Hirose T, Iwama M, Watanabe T, Noda T, Watanabe S, Takemura G, Minatoguchi S. Left atrial global and regional function in patients with paroxysmal atrial fibrillation has already been impaired before enlargement of left atrium: velocity vector imaging echocardiography study. *Eur Heart J-Card Img.* 2012;13:227-234. IF 3.669
- 11) Hirose T, Kawasaki M, Tanaka R, Ono K, Watanabe T, Iwama M, Noda T, Watanabe S, Takemura G, Minatoguchi S. Left atrial function assessed by speckle tracking echocardiography as a predictor of new-onset nonvalvular atrial fibrillation: Results from a prospective study in 580 adults. *Eur Heart J-Card Img.* 2012;13:243-250. IF 3.669
- 12) Nakashima T, Takasugi N, Kubota T, Takasugi M, Kanamori H, Ushikoshi H, Hattori A, Aoyama T, Kawasaki M, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S. 'False-positive' intrathoracic impedance

- monitor alarm caused by amiodarone-induced hypothyroidism in a patient with cardiac resynchronization therapy-defibrillator. *Europace*. 2012;14:768-769. IF 3.050
- 13) Takasugi N, Kubota T, Kawamura I, Takasugi M, Kanamori H, Ushikoshi H, Hattori A, Aoyama T, Kawasaki M, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S. Sudden reversible pacemaker failure in a patient with cardiac sarcoidosis: an unfortunate case of ventricular septal pacing. *Europace*. 2012;14:1061-1062. IF 3.050
- 14) Kawaguchi T, Takasugi N, Kubota T, Takasugi M, Kanamori H, Ushikoshi H, Hattori A, Aoyama T, Kawasaki M, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S, Verrier RL. In-hospital monitoring of T-wave alternans in a case of amiodarone-induced torsade de pointes: clinical and methodologic insights. *Europace*. 2012;14:1372-1374. IF 3.050
- 15) Tearney GJ, Regar E, Akasaka T, Adriaenssens T, Barlis P, Bezerra HG, Bouma B, Bruining N, Cho JM, Chowdhary S, Costa MA, de Silva R, Dijkstra J, Di Mario C, Dudeck D, Falk E, Feldman MD, Fitzgerald P, Garcia H, Gonzalo N, Granada JF, Guagliumi G, Holm NR, Honda Y, Ikeno F, Kawasaki M, Kochman J, Koltowski L, Kubo H, Kubo T, Kume T, Kyono H, Lam CC, Lamouche G, Lee DP, Leon MB, Maehara A, Manfrini O, Mintz GS, Mizuno K, Morel MA, Nadkarni S, Okura H, Otake H, Pietrasik A, Prati F, Räber L, Radu MD, Rieber J, Riga M, Rollins A, Rosenberg M, Sirbu V, Serruys PW, Shimada K, Shinke T, Shite J, Siegel E, Sonada S, Suter M, Takarada S, Tanaka A, Terashima M, Troels T, Uemura S, Ughi GJ, van Beusekom HM, van der Steen AF, van Es GA, van Soest G, Virmani R, Waxman S, Weissman NJ, Weisz G. Consensus standards for acquisition, measurement, and reporting of intravascular optical coherence tomography studies: a report from the international working group for intravascular optical coherence tomography standardization and validation. *J Am Coll Cardiol*. 2012;59:1058-1072. IF 15.343
- 16) Iwama M, Kawasaki M, Tanaka R, Ono K, Watanabe T, Hirose T, Nagaya M, Noda T, Watanabe S, Minatoguchi S. Left atrial appendage emptying fraction assessed by a feature-tracking echocardiographic method is a determinant of thrombus in patients with nonvalvular atrial fibrillation. *J Cardiol*. 2012;59:329-336. IF 2.566
- 17) Endo J, Iihara H, Yamada M, Yanase K, Kamiya F, Ito F, Funaguchi N, Ohno Y, Minatoguchi S, Itoh Y. A randomized controlled non-inferiority study comparing the antiemetic effect between intravenous granisetron and oral azasetron based on estimated 5-HT₃ receptor occupancy. *Anticancer Res*. 2012;32:3939-3947. IF 1.872
- 18) Baila B, Ohno Y, Nagamoto H, Kotosai K, Yabuuchi Y, Funaguchi N, Ito F, Endo J, Mori H, Takemura G, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Tetomilast attenuates elastase-induced pulmonary emphysema through inhibition of oxidative stress in rabbits. *Biol Pharm Bull*. 2012;35:494-502. IF 1.778
- 19) Ono K, Iwama M, Kawasaki M, Tanaka R, Watanabe T, Onishi N, Warita S, Kojima T, Kato T, Goto Y, Arai M, Nishigaki K, Takemura G, Noda T, Watanabe S, Minatoguchi S. Motion of left atrial appendage as a determinant of thrombus formation in patients with a low CHADS₂ score receiving warfarin for persistent nonvalvular atrial fibrillation. *Cardiovasc Ultrasound*. 2012;10:50. IF 1.283
- 20) Nishigaki K. Ehlers-Danlos syndrome type IV as the etiology of spontaneous coronary artery rupture. *Journal of Cardiology Cases*. 2012;5:171-172.
- 21) Kanamori H, Takemura G, Goto K, Tsujimoto A, Ogino A, Takeyama T, Kawaguchi T, Watanabe T, Morishita K, Kawasaki M, Mikami A, Fujiwara T, Fujiwara H, Seishima M, Minatoguchi S. Resveratrol reverses remodeling in hearts with large, old myocardial infarctions through enhanced autophagy-activating AMP kinase pathway. *Am J Pathol*. 2013;182:701-713. IF 4.602
- 22) Yamada Y, Kobayashi H, Iwasa M, Sumi S, Ushikoshi H, Aoyama T, Nishigaki K, Takemura G, Fujiwara T, Fujiwara H, Kiso M, Minatoguchi S. Post-infarct active cardiac-targeted delivery of erythropoietin by liposomes with Sialyl Lewis X repairs infarcted myocardium in rabbits. *E-Emu J Physiol-Heart C*. 2013;304:1124-1133. IF 4.012
- 23) Maeda H, Nagai H, Takemura G, Shintani-Ishida K, Komatsu M, Ogura S, Aki T, Shirai M, Kuwahira I, Yoshida KI. Intermittent-hypoxia induced autophagy attenuates contractile dysfunction and myocardial injury in rat heart. *BBA-Mol Basis Dis*. 2013;1832:1159-1166. IF 5.089
- 24) Minatoguchi S, Aoyama T, Kawai N, Iwasa M, Oda M, Kida K, Kojima S, Goto N, Goto M, Sugishita F, Takai K, Tanaka R, Hiei K, Minagawa T, Yamamoto N, Watanabe I, Yasue T, Kobayashi H. Comparative effect of candesartan and amlodipine, and effect of switching from valsartan, losartan, telmisartan and olmesartan to candesartan, on early morning hypertension and heart rate. *Blood Pressure*. 2013;22 Suppl 1:29-37. IF 1.605
- 25) Hattori A, Kawamura I, Yamada Y, Kanamori H, Aoyama T, Ushikoshi H, Kawasaki M, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S. Elevated plasma GLP-1 levels and enhanced expression of cardiac GLP-1 receptors as markers of left ventricular systolic dysfunction: a cross-sectional study. *BMJ Open*. 2013;3:e003201. IF 2.063
- 26) Ichihara S, Yamamoto K, Asano H, Nakatochi M, Sukegawa M, Ichihara G, Izawa H, Hirashiki A, Takatsu F, Umeda H, Iwase M, Inagaki H, Hirayama H, Sone T, Nishigaki K, Minatoguchi S, Cho MC, Jang Y, Kim HS, Park JE, Tada-Oikawa S, Kitajima H, Matsubara T, Sunagawa K, Shimokawa H, Kimura A, Lee JY, Murohara T, Inoue I, Yokota M. Identification of a glutamic acid repeat

- polymorphism of ALMS1 as a novel genetic risk marker for early-onset myocardial infarction by genome-wide linkage analysis. *Circ-Cardiovasc Gene*. 2013;6:569-578. IF 5.337
- 27) Tanaka S, Noda T, Iwama M, Tanihata S, Kawasaki M, Nishigaki K, Minagawa T, Watanabe S, Minatoguchi S. Long-term changes in neointimal hyperplasia following implantation of bare metal stents assessed by integrated backscatter intravascular ultrasound. *Heart Vessels*. 2013;28:415-423. IF 2.109
- 28) Watanabe T, Kawasaki M, Tanaka R, Ono K, Nishigaki K, Takemura G, Arai M, Noda T, Watanabe S, Minatoguchi S. Association among blood pressure control in elderly patients with hypertension, left atrial structure and function and new-onset atrial fibrillation: a prospective 2-years study in 234 patients. *Hypertens Res*. 2013;36:799-806. IF 2.936
- 29) Ohi Y, Uno Y, Oohira T, Itakura K, Nishigaki K, Minatoguchi S. Cerebral microembolism following coronary angiography—a prospective comparative study between left cardiac catheterization and multidetector computed tomography. *Internal Med*. 2013;52:1869-1874. IF 0.967
- 30) Kawasaki M, Yoshimura S, Yamada K, Hattori A, Ishihara Y, Nishigaki K, Takemura G, Iwama T, Minatoguchi S. Carotid artery OCT in cerebral infarction. *JACC-Cardiovasc Imag*. 2013;6:1215-1216. IF 6.986
- 31) Nagaya M, Kawasaki M, Tanaka R, Onishi N, Sato N, Ono K, Watanabe T, Minatoguchi S, Miwa H, Goto Y, Hirose T, Arai M, Noda T, Watanabe S, Minatoguchi S. Quantitative validation of left atrial structure and function by two-dimensional and three-dimensional speckle tracking echocardiography: a comparative study with three-dimensional computed tomography. *J Cardiol*. 2013;62:188-194. IF 2.566
- 32) Yoshimura S, Yamada K, Kawasaki M, Asano T, Kanematsu M, Miyai M, Enomoto Y, Egashira Y, Iwama T. Selection of carotid artery stenting or endarterectomy based on magnetic resonance plaque imaging reduced periprocedural adverse events. *J Stroke Cerebrovasc*. 2013;22:1082-1087. IF 1.993
- 33) Enomoto Y, Yoshimura S, Yamada K, Kawasaki M, Nishigaki K, Minatoguchi S, Iwama T. Silent coronary artery disease in Japanese patients undergoing carotid artery stenting. *J Stroke Cerebrovasc*. 2013;22:1163-1168. IF 1.993
- 34) Okuda J, Niizuma S, Shioi T, Kato T, Inuzuka Y, Kawashima T, Tamaki Y, Kawamoto A, Tanada Y, Iwanaga Y, Narazaki M, Matsuda T, Adachi S, Soga T, Takemura G, Kondoh H, Kita T, Kimura T. Persistent overexpression of phosphoglycerate mutase, a glycolytic enzyme, modifies energy metabolism and reduces stress resistance of heart in mice. *PLoS One*. 2013;8:e72173. IF 3.534
- 35) Sato Y, Minatoguchi S, Nishigaki K, Hirata K, Masuyama T, Furukawa Y, Uematsu M, Yoshikawa J, Otsuji S, Iida M, Fujiwara H. SHYOGI study investigators. Design of prospective study of acute coronary syndrome hospitalization after smoking ban in public places in Hyogo prefecture: comparison with Gifu, a prefecture without a public smoking ban. *J Cardiol*. 2014;63:165-168. IF 2.566
- 36) Takemura G, Takatsu Y, Okubo M, Hattori A, Kawasaki M, Fujiwara H, Minatoguchi S. Unusual growth of calcium lime with imbrication pattern in human coronary artery. *Int J Cardiol*. 2014;172:471-472. IF 6.175
- 37) Onishi N, Kawasaki M, Tanaka R, Sato H, Saeki M, Nagaya M, Sato N, Minatoguchi S, Watanabe T, Ono K, Arai M, Noda T, Amano K, Goto K, Watanabe S, Minatoguchi S. Comparison between left atrial features in well-controlled hypertensive patients and normal subjects assessed by three-dimensional speckle tracking echocardiography. *J Cardiol*. 2014;63:291-295. IF 2.566
- 38) Watanabe T, Takemura G, Kanamori H, Goto K, Tsujimoto A, Okada H, Kawamura I, Ogino A, Takeyama T, Kawaguchi T, Morishita K, Ushikoshi H, Kawasaki M, Mikami A, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Restriction of food intake prevents postinfarction heart failure by enhancing autophagy in the surviving cardiomyocytes. *Am J Pathol*. 2014;184:1384-1394. IF 4.602
- 39) Matsumoto-Miyazaki J, Miyazaki N, Ushikoshi H, Nawa T, Yoshida G, Murata I, Ogura S, Minatoguchi S. Traditional thermal therapy with indirect moxibustion decreases renal arterial resistive index. *J Altern Complem Med*. 2014;20:693-697. IF 1.518
- 40) Miyazaki N, Murata I, Takemura G, Okada H, Kanamori H, Matsumoto-Miyazaki J, Yoshida G, Izumi K, Kashi H, Niimi K, Nishiwaki A, Miyazaki T, Ohno M, Ohashi H, Suzuki F, Minatoguchi S. Expression of prorenin receptor in renal biopsies from patients with IgA nephropathy. *Int J Clin Exp Pathol*. 2014;7:7485-7496. IF 1.783
- 41) Iwama M, Tanaka S, Noda T, Segawa T, Kawasaki M, Nishigaki K, Minagawa T, Watanabe S, Minatoguchi S. Impact of tissue characteristics on luminal narrowing of mild angiographic coronary stenosis: assessment of integrated backscatter intravascular ultrasound. *Heart Vessels*. 2014;29:750-760. IF 2.109
- 42) Kawasaki M, Tanaka R, Ono K, Minatoguchi S, Watanabe T, Iwama M, Hirose T, Arai M, Noda T, Watanabe S, Zile MR, Minatoguchi S. A novel ultrasound predictor of pulmonary capillary wedge pressure assessed by the combination of left atrial volume and function: A speckle tracking echocardiography study. *J Cardiol*. 2014 Dec 26. pii: S0914-5087(14)00342-6. IF 2.566
- 43) Shiraki T, Aoyama T, Yokoyama C, Hayakawa Y, Tanaka T, Nishigaki K, Sawamura T, Minatoguchi S. LOX-1 plays an important role in ischemia-induced angiogenesis of limbs. *PLoS One*. 2014;9:e114542. IF 3.534

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：服部有博, 研究分担者：湊口信也；科学研究費補助金基盤研究(C)：内因性 GLP-1 の虚血心筋保護作用の分子メカニズム解明とその臨床的重要性の研究；平成 22-24 年度；4,550 千円(1,950：1,690：910 千円)
- 2) 研究代表者：大野 康, 研究分担者：湊口信也；科学研究費補助金基盤研究(C)：エリスロポイエチンによる COPD 再生治療；平成 22-24 年度；4,160 千円(2,470：910：780 千円)
- 3) 研究代表者：西垣和彦；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：ニコランジルを用いた慢性腎臓病合併冠動脈疾患患者に対する総合的治療法の開発；平成 24-26 年度；5,330 千円(3,250：910：1,170 千円)
- 4) 研究代表者：川崎雅規；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：超音波と光干渉を組み合わせた新しい冠動脈不安定プラーク診断装置の開発；平成 24-26 年度；4,680 千円(1,560：1,430：1,690 千円)
- 5) 研究代表者：湊口信也, 研究分担者：赤尾幸博, 金森寛充, 東 賢志；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：microRNA145 による梗塞心筋組織修復再生療法の開発；平成 24 年度；1,000 千円
- 6) 研究代表者：湊口信也；臨床研究推進支援経費：左室機能障害患者における血漿アデノシン濃度動態の解明；平成 24 年度；500 千円
- 7) 研究代表者：青山琢磨；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：左室収縮及び拡張機能障害心不全患者における血漿アデノシン濃度動態の解明に関する研究；平成 24 年度；500 千円
- 8) 研究代表者：湊口信也, 研究分担者：宮崎 渚, 金森寛充, 宮崎龍彦；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：腎障害における(pro)renin が果たす役割の解明；平成 25 年度；1,550 千円
- 9) 研究代表者：青山琢磨；臨床研究推進支援経費：両心室収縮及び拡張機能障害心不全患者における血漿アデノシン濃度動態の解明に関する研究；平成 25 年度；1,000 千円
- 10) 研究代表者：岡田英志；研究科長・医学部長裁量経費(国内外留学帰学者支援)；平成 25 年度；500 千円
- 11) 研究代表者：岩佐将充；研究科長・医学部長裁量経費(国内外留学帰学者支援)；平成 25 年度；500 千円

2) 受託研究

- 1) 湊口信也：マイクロ RNA の心筋虚血再灌流障害に対する効果とその作用機序の検討；平成 24 年度；1,360 千円：大塚製薬(株)
- 2) 湊口信也：第三の多能性幹細胞 Muse 細胞を用いた心筋再生による心不全治療法開発に関する研究；平成 24-25 年度；9,000 千円(4,000：5,000 千円)：国立大学法人名古屋大学
- 3) 湊口信也：ウサギ心筋梗塞モデルを用いた Muse 細胞移植の有用性と安全性に関する研究；平成 24-25 年度；30,000 千円(17,000：13,000 千円)：独立行政法人医薬基盤研究所
- 4) 湊口信也：ブタ心筋梗塞モデルを用いた Muse 細胞移植の有用性と安全性に関する研究；平成 26 年度；11,000 千円：独立行政法人医薬基盤研究所
- 5) 湊口信也：次世代機能代替技術の研究開発/次世代再生医療技術の研究開発/少量の細胞により生体内で自己組織の再生を促す自律成熟型再生デバイスの開発(Muse 細胞を用いた in situ stem cell therapy の実用化研究開発)；平成 25-26 年度；43,657 千円(26,378：17,279 千円)：(株)Clio
- 6) 湊口信也：非腫瘍性多能性幹細胞 Muse 細胞を用いた心筋再生による心不全治療法に関する研究；平成 26 年度；50,000 千円：文部科学省
- 7) 湊口信也：地域・へき地医療支援人材の確保事業；平成 24 年度；1,320 千円
- 8) 湊口信也：献血ベニコロンー I 使用成績調査(チャージ・ストラウス症候群, アレルギー性肉芽腫性血管炎)(追加分)；平成 22-26 年度；168 千円：帝人ファーマ(株)
- 9) 湊口信也：献血ベニコロンー I 使用成績調査(チャージ・ストラウス症候群, アレルギー性肉芽腫性血管炎)；平成 22-26 年度；84 千円：帝人ファーマ(株)
- 10) 村田一知朗：エポジン注透析導入前の腎性貧血特定使用成績調査(JET-STREAM)(実施要綱 No.EPO0901)；平成 22-25 年度；787.5 千円：中外製薬(株)
- 11) 村田一知朗：ネスブ注射液プランシリンジ特定使用成績調査保存期慢性腎臓患者における腎性貧血；平成 23-27 年度；252 千円：協和発酵キリン(株)
- 12) 青山琢磨：ノルバスク錠, ノルバスク OD 錠使用成績調査(プロトコール No:A0531097)；平成 23-

- 24年度；210千円：ファイザー(株)
- 13) 青山琢磨：スロンノン HI 注 10mg/2ml 使用成績調査(全例調査)；平成 24-27 年度；21 千円：ファイザー(株)
 - 14) 西垣和彦：プラザキカプセル特定使用成績調査(長期使用に関する調査)；平成 23-27 年度；630 千円：日本ベーリンガーインゲルハイム(株)
 - 15) 竹村元三：リプレガル特定使用成績調査(長期使用に関する調査)；平成 22-24 年度；31.5 千円：大日本住友製薬(株)
 - 16) 西垣和彦：クリアクター静注用 特定使用成績調査「急性肺塞栓症に対する全例調査」(第三期)；平成 23-26 年度；94.5 千円：エーザイ(株)
 - 17) 森下健太郎：ネクサバール錠副作用報告；平成 25 年度；21 千円：バイエル薬品(株)
 - 18) 西垣和彦：イオパーク注使用成績調査；平成 25-26 年度；420 千円：コニカミノルタ(株)
 - 19) 西垣和彦：エリキユース錠 2.5mg, 5mg 特定使用成績調査(長期使用)；平成 25-30 年度；630 千円：ファイザー(株)
 - 20) 村田一知朗：サムスカ使用成績調査(ADPKD)全例調査；平成 26-30 年度；194.4 千円：大塚製薬(株)
 - 21) 西垣和彦：クリアクター静注用 特定使用成績調査「急性肺塞栓症に対する前例調査」(第三期)；平成 26 年度；97.2 千円：エーザイ(株)
 - 22) 湊口信也：サムスカ錠副作用・感染症報告；平成 26 年度；21.6 千円：大塚製薬(株)
 - 23) 湊口信也：サムチレール内用懸濁液 15%使用成績調査(非 HIV 患者調査)(前例調査)；平成 26-29 年度；194.4 千円：グラクソ・スミスクライン(株)

3) 共同研究

- 1) 湊口信也, 大野 康：in vivo および in vitro 試験による閉塞性呼吸器疾患におけるテトミラストの効果の検証；平成 25-26 年度；2,000 千円：大塚製薬(株)
- 2) 湊口信也：再生医療の産業化に向けた細胞製造・加工システムの開発 / ヒト間葉系幹細胞由来の再生医療製品製造システムの開発 / Muse 細胞を用いた再生医療の実現に向けた製剤製造システムの研究開発 / ⑤Muse 細胞製剤の疾患モデル動物でも実証研究開発；平成 26 年度；10,000 千円：(株)Clio

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

湊口信也：

- 1) 日本循環器学会理事・評議員(～現在)
- 2) 日本循環器学会東海支部評議員(～現在)
- 3) 日本循環制御医学会評議員(～現在)
- 4) 日本心不全学会理事・評議員(～現在)
- 5) 日本心臓病学会評議員(～現在)
- 6) 日本内科学会評議員および東海支部評議員(～現在)
- 7) 日本高血圧学会評議員(～現在)
- 8) 日本心臓リハビリテーション学会理事・評議員(～現在)

西垣和彦：

- 1) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本循環器学会幹事：心臓移植委員会・心臓移植適応検討小委員会(～現在)
- 3) 日本循環器学会東海支部評議員(～現在)
- 4) 日本循環器学会正会員代表(～現在)
- 5) 日本心血管インターベンション治療学会評議員(～現在)
- 6) 日本心血管インターベンション治療学会東海北陸支部代議員(～現在)
- 7) 日本心血管インターベンション治療学会専門医試験問題策定委員会委員(～現在)
- 8) 日本心不全学会評議員(～現在)
- 9) 日本心臓病学会評議員(～現在)

- 10) 日本心臓リハビリテーション学会評議員(～現在)
- 11) 日本心臓リハビリテーション学会『急性心筋梗塞の入院心臓リハビリテーション標準プログラム策定部会』委員(～現在)
- 12) 東海地区心臓移植適応症例検討会委員(～現在)
- 13) 心臓移植関連学会協議会委員(日本循環器学会代表)(～現在)
- 14) 心臓移植施設認定審議委員会委員(日本循環器学会代表)(～現在)
- 15) 冠動脈血行再建術協議会(循環器内科代表)委員(～現在)

川崎雅規：

- 1) 日本循環器学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 3) 日本心血管画像動態学会評議員(～現在)
- 4) 日本超音波医学会評議員(～現在)
- 5) 日本心血管画像動態学会評議員(～現在)

青山琢磨：

- 1) 日本循環器学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)

服部有博：

- 1) 日本循環器学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

西垣和彦：

- 1) 日本心血管インターベンション治療学会雑誌『CVIT the official journal of Cardiovascular Intervention and Therapeutics』編集顧問(～現在)

7. 学会招待講演、招待シンポジスト、座長

湊口信也：

- 1) 第76回日本循環器学会総会・学術集会(平成24年3月, 福岡, ランチョンセミナー17「循環器バイオマーカー最前線ー海外最新情報と国内検討結果よりー」座長)
- 2) 第76回日本循環器学会総会・学術集会(平成24年3月, 福岡, ランチョンセミナー「心血管疾患の発症・進展阻止を目指した糖尿病の薬物治療ー心筋保護からみた α -GIの新たな可能性を中心にー」演者)
- 3) 第76回日本循環器学会総会・学術集会(平成24年3月, 福岡, Meet the Expert 6「新研修医制度による地方医療の崩壊」座長)
- 4) 第76回日本循環器学会総会・学術集会(平成24年3月, 福岡, ランチョンセミナー54「アスピリン消化管傷害の新たな課題ーカプセル内視鏡が据えた小腸病変をどう扱うか?ー」座長)
- 5) 第18回日本心臓リハビリテーション学会(平成24年7月, 大宮, ランチョンセミナー10「The role of beta-blocker in the treatment of chronic heart failure 慢性心不全の治療における β 遮断薬の役割」座長)
- 6) 第60回日本心臓病学会(平成24年9月, 金沢, 特別企画4「放射線被曝と医療」座長)
- 7) 第35回日本高血圧学会総会(平成24年9月, 名古屋, ディベート7「高齢者高血圧治療の第一選択薬としてのCa拮抗薬」演者)
- 8) 第1回日本肺循環学会学術集会(平成24年9月, 東京, ランチョンセミナー17「左室系肺疾患PH」座長)
- 9) The 64th Annual Meeting of Korean Physiological Society in conjunction with KOJACH(2012.10, Pusan, Symposium II: The Next Advance in Cardioprotection Alpha-Glucosidase Inhibitor and Cardioprotection; Lecture)

- 10) 第 77 回日本循環器学会総会・学術集会(平成 25 年 3 月, 横浜, Meet the Expert7 「関連学会のガイドラインに学ぶ II(透析学会, 動脈硬化学会, 老年病学会)」座長)
- 11) International Symposium Anatomical Science for advance in health and clinical therapy 2013 (2013.8, Sendai, Post-infarct treatment with combination of G-CSF and erythropoietin-liposome with Siaryl Lewis X repairs infarcted myocardium via mobilization of EPCs and activation of pro-survival signals; Lecture)
- 12) 第 51 回全国大学保健管理研究集会(平成 25 年 11 月, 岐阜, ランチョンセミナー「食塩と高血圧」演者)
- 13) 日本鍼灸師会, 岐阜県鍼灸師会学術研修会・共催研修会(平成 25 年 12 月, 岐阜, 「先端医療と統合医療の共存」演者)
- 14) 第 143 回日本循環器学会東海地方会(平成 26 年 7 月, 岐阜, ランチョンセミナー「急性心不全症候群」座長)
- 15) 第 18 回日本心不全学会学術集会(平成 26 年 10 月, 大阪, ランチョンセミナー「肥満メタボ型糖尿病の病態と治療 ~ GLP-1 受容体作動薬への期待 ~」座長)
- 16) 日本鍼灸師会第 10 回全国大会 in 岐阜(平成 26 年 10 月, 岐阜, 「先端医療と統合医療の共存」演者)

西垣和彦：

- 1) 第 76 回日本循環器学会総会・学術集会(平成 24 年 3 月, 福岡, 第 8 回心臓移植セミナー「心臓移植レシピエントと補助人工心臓の適応年齢」 講演 1「心臓移植の現況：現在の心臓移植レシピエント適応年齢と補助人工新心臓適応年齢」演者)
- 2) 第 76 回日本循環器学会総会・学術集会(平成 24 年 3 月, 福岡, トピックス 05 冠動脈疾患における冠攣縮の新知見, 講演 5「Characteristics and Prognosis of Patients with Urgent Vasospastic Angina」演者)
- 3) 第 76 回日本循環器学会総会・学術集会(平成 24 年 3 月, 福岡, ランチョンセミナー62「日本人における冠攣縮性狭心症の重要性」講演 I「予後を考慮した狭心症の治療戦略ー冠攣縮性狭心症に対するメタ解析の結果からー」演者)
- 4) 日本麻酔科学会第 59 回学術集会(平成 24 年 6 月, 神戸, 共催セミナーL11「薬理的プレコンディショニングを活用した臓器保護戦略」ニコランジルによる薬理的プレコンディショニング：心腎を含めた臓器保護 演者)
- 5) 第 53 回日本脈管学会総会(平成 24 年 10 月, 東京, 第 4 回 JCAC シンポジウム 脈管疾患におけるガイドラインを考える 第 2 部 虚血行再建術の適応に関するガイドライン 2012 講演 I「安定冠動脈疾患に対する待機的 PCI もガイドライン」演者)
- 6) 第 77 回日本循環器学会総会・学術集会(平成 25 年 3 月, 横浜, ファイアサイドセミナー20 演題「心腎保護を考慮した PCI 治療 -Vascular Organ Protection(VOP)-」演者)
- 7) 第 77 回日本循環器学会総会・学術集会(平成 25 年 3 月, 横浜, 第 9 回心臓移植セミナー 我が国の小児心臓移植の発展に向けて 講演 1「心臓移植の現況」演者)
- 8) 第 22 回日本心血管インターベンション治療学会(CVIT2013)(平成 25 年 7 月, 神戸, パネルディスカッション 6 造影剤腎症の新しい治療#3「腎機能障害患者の造影剤腎症に対するニコランジルの持続静注投与の効果」演者)
- 9) 第 19 回日本心臓リハビリテーション学会(平成 25 年 7 月, 仙台, パネルディスカッション 4 心臓リハビリテーションの医療職卒前・卒後教育の現状と課題「卒前教育での心臓リハビリ教育の実態～卒前教育改革部会部会 卒前教育での心臓リハビリ教育実態調査から～」演者)
- 10) 第 20 回日本心血管インターベンション治療学会九州・沖縄地方会(平成 25 年 8 月, 石橋, ランチョンセミナー2「今、再び注目される高純度 EPA 製剤 ～PCI 専門医だからこそしておきたいエビデンス～」演者)
- 11) 第 49 回日本移植学会総会(平成 25 年 9 月, 京都, ワークショップ 10.心移植候補症例における術前臓器機能評価.「心臓移植レシピエント候補者における臓器障害評価の現況」演者)
- 12) 第 61 回日本心臓病学会学術集会(平成 25 年 9 月, 熊本, モーニングレクチャー4「安定冠動脈疾患に対する待機的 PCI のガイドラインを活かす」演者)
- 13) 第 61 回日本心臓病学会学術集会(平成 25 年 9 月, 熊本, ファイアサイドシンポジウム 5 冠攣縮の最新知見 講演 1「冠攣縮性狭心症の治療と予後」演者)
- 14) 日本心血管インターベンション治療学会第 30 回東海北陸地方会(平成 25 年 10 月, 静岡, シンポジウム I「冠動脈複雑病変のインターベンション」講演 1「冠動脈複雑病変のインターベンションと PCI

ガイドライン～その正しい解釈」演者)

- 15) 第 78 回日本循環器学会学術集会(平成 26 年 3 月, 東京, 第 10 回心臓移植セミナー「心臓移植レシピエントの登録希望者における補助人工心臓使用の現状と問題点 ～日本循環器学会心臓移植委員会報告」演者)

川崎雅規 :

- 1) 第 22 回日本心血管画像動態学会(平成 24 年 1 月, 名古屋, パネルディスカッション「IB-IVUS と OCT の有用性と臨床応用」演者)
- 2) 第 85 回日本超音波医学会(平成 24 年 5 月, 東京, シンポジウム「超音波 integrated backscatter で評価した冠動脈プラークの機能評価と組織性状との関連」演者)
- 3) The 6th Coronary Intravascular Ultrasound 2012(2012.06, Seoul, Invited Guest Lecture 「Tissue Characterization of Carotid Plaques before Carotid Artery Stenting Using Integrated Backscatter Ultrasound and Optical Coherence Tomography.」演者)
- 4) 第 21 回日本心血管インターベンション治療学会(平成 24 年 7 月, 新潟, シンポジウム「Assessment of Atherosclerotic Lesions Using Integrated Backscatter Ultrasound and Comparison with optical coherence tomography and Magnetic Resonance Imaging」演者)
- 5) 第 18 回日本血管内治療学会(平成 24 年 7 月, 東京, シンポジウム「超音波と光で冠動脈プラークの病態を解明する」演者)
- 6) 第 23 回日本心血管画像動態学会(平成 25 年 1 月, 東京, シンポジウム「IVUS の将来とリアルタイム IB-IVUS の可能性」演者)
- 7) The 62nd American College of Cardiology (2013.03, San Francisco, Symposium: Why is IVUS used in Japan so much higher than in the rest of the world?; Lecturer)
- 8) 第 76 回日本循環器学会総会(平成 25 年 3 月, 横浜, シンポジウム「Assessment of Formation of Atherosclerotic Plaques Using Integrated Backscatter Ultrasound」演者)
- 9) 平成 25 年度日本病態栄養学会教育セミナー(平成 25 年 5 月, 岐阜, 教育セミナー「循環器疾患・腎疾患」演者)
- 10) 第 29 回日本心血管インターベンション治療学会東海北陸地方会(平成 25 年 5 月, 名古屋, ミニレクチャー「IVUS は PCI の予後をどのように改善させるか-エビデンス・レビュー-」演者)
- 11) The 7th Coronary Intravascular Ultrasound 2013(2013.06, Seoul, Korea, Symposium: Understanding Coronary Bifurcation Lesions IVUS Assessment; Lecturer)
- 12) The 7th Coronary Intravascular Ultrasound 2013(2013.06, Seoul, Korea, Invited lecture: Tissue Characterization of Coronary Plaques and Assessment of Thickness of Fibrous cap Using IB-IVUS Comparison with histology and OCT; Lecturer)
- 13) 第 28 回日本心臓血管内視鏡学会(平成 26 年 6 月, 名古屋, シンポジウム「IB-IVUS の臨床的有用性と IVUS がめざす今後の展望」演者)
- 14) 第 29 回日本心血管インターベンション治療学会(平成 26 年 7 月, 名古屋, シンポジウム「冠疾患病態解明における Integrated BackscatterIVUS の役割 -OCT との比較-」演者)
- 15) 第 62 回日本心臓病学会(平成 26 年 9 月, 仙台, シンポジウム「Integrated Backscatter 血管内超音波による組織性状診断と力学的ストレス解析によるプラーク破綻の解明」演者)
- 16) 第 16 回循環器ディベイト・カンファレンス(平成 26 年 11 月, 東京, 招待講演「拡張性心不全(HFpEF) に RAA 系阻害薬/ β 遮断薬を積極的に投与するか(Con 派)」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 湊口信也 : 公益財団法人先進医薬研究振興財団一般研究助成(平成 24 年度)
- 2) 高杉信寛 : 日本心臓財団第 6 回 Cardiac Rhythm Management 短期海外研修助成(平成 24 年度)
- 3) 渡邊崇量 : 日本循環器学会 AHA 年次学術集会の発表に対する国際交流助成(平成 24 年度)
- 4) 東 賢志 : 日本循環器学会 AHA 年次学術集会の発表に対する国際交流助成(平成 25 年度)

9. 社会活動

湊口信也 :

- 1) 岐阜県社会福祉審議会委員(～現在)
- 2) 岐阜市社会福祉審議会委員(～現在)
- 3) 厚生労働省医政局研究開発振興課「ヒト幹細胞臨床研究に関する審査委員会」委員(～現在)

- 4) 先端医療振興財団 文部科学省「再生医療の実現化ハイウェイ」課題運営委員会外部有識者委員
(～現在)

10. 報告書

- 1) 服部有博, 湊口信也: 内因性 GLP-1 の虚血心筋保護作用の分子メカニズム解明とその臨床的重要性の研究: 平成 22-24 年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書(平成 24 年 3 月)
- 2) 大野 康, 湊口信也: エリスロポイエチンによる COPD 再生治療: 平成 22-24 年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書(平成 24 年 3 月)
- 3) 西垣和彦: ニコランジルを用いた慢性腎臓病合併冠動脈疾患患者に対する総合的治療法の開発: 平成 24-26 年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書(平成 26 年 3 月)
- 4) 川崎雅規: 超音波と光干渉を組み合わせた新しい冠動脈不安定プラーク診断装置の開発: 平成 24-26 年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書(平成 26 年 3 月)

11. 報道

- 1) 湊口信也: 「つなごう医療」心臓保護と再生医療: 中日新聞(2012 年 2 月 20 日)
- 2) 湊口信也: 心臓血管病の再生医学: 熊野新聞(2012 年 10 月 30 日)
- 3) 青山琢磨: 「研究室から 大学はいま」心臓が悪いと言われたら: 岐阜新聞(2012 年 10 月 30 日)

12. 自己評価

評価

循環器, 呼吸器及び腎臓内科とも研究が順調に進行している。その結果, 一流のジャーナルにも多数 publish され, 2012 年は英文論文数 22 編でインパクトファクターが 72.088 点, 2013 年は英文論文数 23 編でインパクトファクターが 67.545 点, 2014 年英文論文数 10 編でインパクトファクターが 29.779 点であった。

現状の問題点及びその対応策

多数の大学院生や研究者を抱えているため, デスクやスペースの確保, 十分な研究費を確保することが課題である。臨床, 教育, 研究のいずれにも時間を費やすため, 研究のみに十分な時間があるとは言い難い。デスクやスペースの確保については工夫を行うことにより, また研究費確保についてはより質の高い研究成果を発信することにより科研費など多くの公的資金を獲得できるように努力する。

今後の展望

高齢化と生活様式の欧米化により, 循環器疾患, 腎疾患は増加の一途を辿っている。循環器疾患, 腎疾患の発生メカニズムを動物実験, 臨床研究を通じて解明し, その治療法を開発し臨床応用につなげていくことが重要であると思う。今後は, 分子生物学的手法, 遺伝子的手法を駆使し, 当該領域における骨髄幹細胞, 間葉系幹細胞, サイトカイン, DDS, ナノテクノロジーなどを用いた効率的な再生医療の開発, microRNA を利用した組織修復医療の開発などの translational research が益々重要になると予測され, 時代の最先端を走るべくさらに活発な研究活動を行っていかなくてはならないと考えている。

(4) 呼吸病態学分野

1. 研究の概要

1. 再生医学・再生医療

- 1) Erythropoietin を用いた COPD モデルマウスおよび培養肺胞上皮細胞に対する再生医学的研究
- 2) PDE-4 阻害薬を用いた COPD モデルマウスに対する再生医学的検討
- 3) PDE-4 阻害薬を用いた気管支喘息モデルマウスに対する再生医学的検討
- 4) 肺癌移植モデルマウスの抗癌剤 (CDDP) 投与下における G-CSF の腫瘍増殖における影響についての検討

2. アポトーシス, オートファジー

- 1) 呼吸器疾患とアポトーシス : COPD における FAS の役割の解明
- 2) COPD における気道上皮, 肺血管上皮, 肺胞上皮細胞のオートファジーの役割の解明

3. 東洋医学的アプローチ

- 1) 気管支喘息患者, COPD 患者に対する鍼治療の有効性の評価
- 2) 癌化学療法後の副作用軽減療法としての鍼治療の有効性の評価
- 3) 気管支喘息モデル, ヒト花粉症患者, 気管支喘息患者におけるじゃばらみかんの抗アレルギー作用の解明, 抗アレルギー薬, 抗喘息薬の開発
- 4) 人工呼吸器装着患者のウィーニングに対する鍼治療の有効性の評価

4. 呼吸器内視鏡を用いた臨床研究

- 1) 肺癌手術症例における腫瘍組織の超音波内視鏡下 IB-IVUS による組織性状診断法の開発
- 2) 蛍光内視鏡: NBI (Narrow Banding Image 法) を用いて HRCT, 病理組織所見と対比し, 良性疾患 (サルコイドーシス等), 悪性疾患 (原発性肺癌, 転移性肺癌, 気管発生肉腫等) の鑑別および進達度診断法の開発
- 3) 超音波内視鏡, NBI 法および HRCT および病理組織と対比し食道癌の気管浸潤の有無, 手術適応の有無の評価法の開発
- 4) BALF (Broncho-aleveolar-fluid) による免疫機能測定による肺 MAC 症の病態の解明, 免疫応答および診断的意義の検討

5. MDCT による気道, 腫瘍病変の臨床研究

- 1) COPD 症例の MDCT における AZE 気道解析ソフトを用いた ICS /LABA による気道病変への有効性の検討
- 2) 肺 MAC 症例における MDCT による AZE 気道解析ソフトを用いた気道病変による重症度分類の開発
- 3) 肺線維症例における MDCT による AZE 気道解析ソフトを用いた牽引性気管支拡張末梢気道から肺胞病変の病態の解明
- 4) 肺癌, 良性肺腫瘍症例における MDCT による AZE 腫瘍解析ソフト, IB-IVUS を用いた腫瘍組織性状の検討

6. 肺癌治療法の開発

- 1) II, IIIA 期非小細胞肺癌術後化学療法における CDDP+VNB Bi-weekly 療法の意義の検討
- 2) IIIB, IV 期非小細胞肺癌症例における CBDCA+GEM Bi-weekly 療法の意義の検討
- 3) 肺癌患者における末梢リンパ球を用いた免疫治療法および予後予測法の開発
- 4) 進行期肺癌患者のプラチナ製剤を含む化学療法時における塩酸アザセトロンとグラニセトロンの有効性の無作為割り付け比較試験
- 5) 肺癌化学療法時の骨髄抑制と骨塩量の関係についての検討

7. 肺真菌感染症治療法の開発

- 1) 肺アスペルギル症患者におけるポリコナゾールとイトラコナゾールの有効性比較の無作為割り付け多施設共同研究

8. 気管支喘息治療法の開発

- 1) 気管支喘息患者の SABA レスキューユースにおける ADL の評価, 多施設共同研究

9. COPD, 肺線維症, 肺がんにおける Pro-renin の関与

- 1) 呼吸器疾患での手術標本 (気胸, 肺がん等) や気管支鏡生検組織を用いて Pro-renin の発現や関連蛋白の発現を調べ, COPD, 間質性肺炎, 肺がんの病態における Pro-renin の関与を明らかにする。

2. 名簿

教授： 湊口信也 Shinya Minatoguchi
講師： 大野 康 Yasushi Ohno

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 大野 康. 学びのヒント 2013-2014 呼吸器病態学分野, 岐阜大学消費生活協同組合; 2013 年.
- 2) 大野 康. 第 5 章, 大学生のための病気の知識-大学生に比較的多い病気を中心に, 肺の病気: 山本真由美監修. 岐阜県大学保健管理研究会企画. 大学生の健康ナビ-キャンパスライフの健康管理 (2014), 岐阜新聞社; 岐阜新聞情報センター; 2014 年.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 大野 康. 大学生のための病気と知識-大学生に比較的多い病気を中心に, ナビ岐阜新聞 2012 年; 5 章: 102-105.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 大野 康. ブデソニド/ホルメテロール配合剤がもたらす喘息治療の新ステージ, Medical Tribune 2013 年; 特別企画.
- 2) 森下めぐみ, 大野 康, 柳瀬恒明, 伊藤文隆, 遠渡純輝, 湊口信也. 経過中に出産を経験した肺類上皮血管内皮腫の 1 例, 日本呼吸器学会誌 2014 年; 3 巻: 685-689.
- 3) 舟口祝彦, 大野 康, 湊口信也, 藤原久義. アトピー性皮膚炎モデルマウスの皮膚炎症状に対する『じゃばら』果汁の効果, 臨床免疫・アレルギー科 2014 年; 62 巻: 455-458.

原著 (欧文)

- 1) Endo J, Iihara H, Yamada M, Yanase K, Kamiya F, Ito F, Funaguchi N, Ohno Y, Minatoguchi S, Itoh Y. A randomized controlled non-inferiority study comparing the antiemetic effect between intravenous granisetron and oral azasetron based on estimated 5-HT₃ receptor occupancy. *Anticancer Res.* 2012;32:3939-3947. IF 1.872
- 2) Baila B, Ohno Y, Nagamoto H, Kotosai K, Yabuuchi Y, Funaguchi N, Ito F, Endo J, Mori H, Takemura G, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Tetomilast attenuates elastase-induced pulmonary emphysema through inhibition of oxidative stress in rabbits. *Biol Pharm Bull.* 2012;35:494-502. IF 1.778
- 3) Ono K, Iwama M, Kawasaki M, Tanaka R, Watanabe T, Onishi N, Warita S, Kojima T, Kato T, Goto Y, Arai M, Nishigaki K, Takemura G, Noda T, Watanabe S, Minatoguchi S. Motion of left atrial appendage as a determinant of thrombus formation in patients with a low CHADS₂ score receiving warfarin for persistent nonvalvular atrial fibrillation. *Cardiovasc Ultrasoun.* 2012;10:50. IF 1.283
- 4) Mori H, Yamada O, Ohno Y, Kaito D, Yanase K, Ito F, Endo J, Morishita M, Funaguchi N, Minatoguchi S. Paraneoplastic neurological syndrome in a patient with squamous cell lung cancer. *Internal Med.* 2013;52:1967-1970. IF 0.967
- 5) Hayashi S, Tanaka H, Kajiura Y, Ohno Y, Hoshi H. Stereotactic body radiotherapy for very elderly patients (age, greater than or equal to 85 years) with stage I non-small cell lung cancer. *Radiat Oncol.* 2014;9:138. IF 2.360

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 大野 康, 研究分担者: 湊口信也; 科学研究費補助金基盤研究(C): エリスロポイエチンによる COPD 再生治療; 平成 22-24 年度; 4,160 千円(2,470: 910: 780 千円)

2) 受託研究

- 1) 大野 康: 気腫病変を有する慢性閉塞性肺疾患(COPD)患者を対象とした OPC-6535 の第 II 相, 国際共同, 多施設, 無作為化, 二重盲検, プラセボ対照, 並行群間容量検討試験; 平成 21-24 年度; 22,176 千円: 大塚製薬(株)
- 2) 大野 康: タダラフィル(アドシルカ錠)特定使用成績調査(長期使用に関する調査); 平成 22-26 年度; 94.5 千円: 日本新薬(株)

- 3) 大野 康：トラクリア錠 62.5 mg 特定使用成績調査(長期)；平成 21-26 年度；157.5 千円：アクテリオンファーマシューティカルズジャパン(株)
- 4) 大野 康：ペメトレキセド非小細胞肺癌特定使用成績調査；平成 21-24 年度；189 千円：日本イーライリリー(株)
- 5) 大野 康：アズマネックスツイストヘラー特定使用成績調査(長期使用)；平成 22-26 年度；94.5 千円：シュERINGプラウ(株)
- 6) 大野 康：トラクリア錠 62.5 mg 特定使用成績調査(長期)(追加配分)；平成 20-26 年度；315 千円：アクテリオンファーマシューティカルズジャパン(株)
- 7) 大野 康：リコモジュリン点滴静注用 12800 特定使用成績調査(固定癌 DIC に対する調査)；平成 22-25 年度；94.5 千円：旭化成ファーマシ(株)
- 8) 大野 康：オキシコチン錠 40 mg/日以上投与症例に関する特定使用成績調査；平成 22-24 年度；157.5 千円：塩野義製薬(株)
- 9) 大野 康：ヴォリブリス錠 2.5 mg 使用成績調査；平成 23-26 年度；315 千円：グラクソ・スミスクライン(株)
- 10) 大野 康：ペメトレキセド非小細胞肺癌特定使用成績調査(追加配分)；平成 23-24 年度；189 千円：日本イーライリリー(株)
- 11) 大野 康：ザーコリカプセル 特定使用成績調査(全例調査)-ALK 融合遺伝子陽性の非小細胞肺癌に対する調査-(プロトコール No. A8081031)(追加配分)；平成 24-27 年度；283.5 千円：ファイザー(株)
- 12) 大野 康：ザーコリカプセル 特定使用成績調査(全例調査)-ALK 融合遺伝子陽性の非小細胞肺癌に対する調査-(プロトコール No. A8081031)；平成 24-27 年度；94.5 千円：ファイザー(株)
- 13) 大野 康：ランマーク皮下注 120mg 長期使用に関する特定使用成績調査；平成 24-28 年度；472.5 千円：第一三共(株)
- 14) 大野 康：ネクサバール錠 副作用報告；平成 24 年度；21 千円：バイエル薬品(株)
- 15) 大野 康：トラクリア錠 62.5 mg 特定使用成績調査(長期)(追加配分)；平成 24-26 年度；630 千円：アクテリオンファーマシューティカルズジャパン(株)
- 16) 大野 康：クラビット点滴静注バッグ 500mg/100mL, 点滴静注 500mg/20mL 使用成績調査；平成 23-25 年度；105 千円：第一三共(株)
- 17) 大野 康：アズマネックスツイストヘラー使用成績調査；平成 22-25 年度；105 千円：シュERINGプラウ(株)
- 18) 大野 康：ユナシン-S(キット)静注用特定使用成績調査-肺炎、肺膿瘍、腹膜炎に対する高用量(1日 6g 超)投与に関する調査-(プロトコール No.:A9231002)；平成 25-26 年度；472.5 千円：ファイザー(株)
- 19) 大野 康：タルセバ、アバスチン有害事象詳細報告；平成 25-26 年度；63 千円：中外製薬(株)
- 20) 大野 康：フィズリン錠 30mg 使用成績調査(全例調査)；平成 25-27 年度；21 千円：大塚製薬(株)
- 21) 大野 康：ジオトリフ錠特定使用成績調査(-EGFR 遺伝子変異陽性の手術不能又は再発非小細胞肺癌患者、長期使用下における調査-)；平成 26-29 年度；486 千円：日本ベーリンガーインゲルハイム(株)
- 22) 大野 康：アレセンサカプセル使用成績調査(全例調査)；平成 26-29 年度；129.6 千円：中外製薬(株)
- 23) 大野 康：フルティフォーム特定使用成績調査(長期使用に関する調査)；平成 26-28 年度；324 千円：杏林製薬(株)
- 24) 大野 康：フィルグラスチム BS 注シリンジ「モチダ」使用成績調査；平成 26-27 年度；64.8 千円：持田製薬(株)
- 25) 大野 康：ジオトリフ錠特定使用成績調査(-EGFR 遺伝子変異陽性の手術不能又は再発非小細胞肺癌患者、長期使用下における調査-)；平成 26-29 年度；486 千円：日本ベーリンガーインゲルハイム(株)

3) 共同研究

- 1) 湊口信也, 大野 康：in vivo および in vitro 試験による閉塞性呼吸器疾患におけるテトミラストの効果の検証；平成 25-27 年度；2,000 千円：大塚製薬(株)

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

大野 康 :

- 1) 日本呼吸器学会代議員・プログラム委員(～現在)
- 2) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 3) 日本肺癌学会評議員・気管支鏡所見分類委員(～現在)
- 4) 日本肺癌学会肺癌取扱い規約委員会・画像診断委員(～現在)
- 5) 日本呼吸器内視鏡学会評議員(～現在)

2) 学会開催

大野 康 :

- 1) 第 120 回日本結核病学会東海地方学会(平成 24 年 11 月, 岐阜)
- 2) 第 102 回日本呼吸器学会東海地方学会(平成 24 年 11 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

大野 康 :

- 1) 第 49 回日本放射線学会秋季臨床大会, 第 27 回胸部放射線研究会(平成 25 年 10 月, 名古屋, 「間質性肺炎」臨床コメンテーター(シンポジスト))

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 垣内大蔵 : 第 218 回日本内科学会東海地方会優秀演題賞(平成 24 年度)

9. 社会活動

なし

10. 報告書

- 1) 大野 康, 湊口信也 : エリスロポイエチンによる COPD 再生治療 : 平成 22-24 年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書(平成 24 年 3 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

呼吸器領域の中でも肺癌, COPD, 気管支喘息, 感染症を中心に研究を行った。動物実験では再生医学を用いた治療薬の開発, ヒトでは新たな診断法の開発, 治療法の実験を行った。成果は国内, 海外雑誌に出版され, 国際学会でも発表し, 多くの研究費を獲得した。臨床研究として超音波内視鏡, 蛍光内視鏡等を用いた肺癌の診断を行い, 県内外から依頼を受け, 症例の蓄積を行っている。

現状の問題点及びその対応策

呼吸病態学は小人数にて多くの研究を行っているが, デスクやスペースを確保することが困難な状態である。また, 臨床, 教育, 研究のいずれにも多くの時間を費やすため, 研究に十分な時間があるとは言いがたい。研究スペースの確保と研究者の増員が急務である。

今後の展望

急速な高齢化社会の到来により肺癌, COPD, 肺線維症, 呼吸器感染症は増加の一途を辿っている。それぞれの病気のメカニズム, 病態を動物実験, 臨床研究を通じて解明し, 診断, 治療に応用していくことが重要である。今後, 呼吸器疾患分野において, 細胞死 (アポトーシス), 細胞変性 (オートファジー) および細胞, 組織の再生を行うことがますます重要なテーマとなることが予測される。さらに, レニンの前駆体である Pro-renin は各種臓器の線維化や細胞障害のメカニズムに関与する可能性が示唆されて

おり，肺組織の線維化や気腫化，癌化にも関与する可能性があり，生検組織や手術標本を用いて正常組織部分とこれらの各種病態での関連蛋白の発現やや遺伝子の発現を調べることを目標とする。我々はこの点を十分認識し，細胞，分子生物学的手法を駆使し新しいデバイスを導入して，さらに活発な研究活動を行っていく。

(5) 高度先進外科学分野

1. 研究の概要

冠動脈バイパス術におけるグラフト選択は重要な課題であり、長期予後を決定する。内胸動脈は既に長期開存率が良好であることが証明されているが、その使用には数の制限、年齢による制限がある。一方静脈グラフトの長期開存率は不良であるが、未だに有用なグラフトである。その静脈グラフトの長期開存の改善のために、内皮増殖、内膜増殖を抑制できれば画期的な研究になる。教室では動脈バイパスモデルを作製し、抗癌剤、抗生物質の投与が内膜増殖を抑制することを証明した。今後臨床応用への発展を図る。また縦隔炎の制御は臨床上也重要であり、当教室ではカプトムシディフェンシンというペプチドを用いて局所制御に取り組んでおり良好な結果を得ている。一方大動脈瘤の瘤拡大の制御は臨床においても重要であり、ラット腹部大動脈瘤モデルを作製し FGF 徐放シートによって制御できることを明らかにして、現在論文作成中である。

消化器外科では、肝切除後の肝再生促進に関する検討を多方面から行っている。ラット肝切除モデルを用いて漢方薬または PGI₂ の投与による肝再生促進効果を確認した。また肝循環の効果的な制御による肝再生促進効果を検討している。門脈を二次的に処理することで肝再生が促進されることを明らかにしており、病的肝（肝硬変、脂肪肝）にもこの方法が応用できるか否かを検討し良好な結果を得ている。

肺葉切除後の肺動脈血管床減少による右心負荷はしばしば遭遇する合併症である。動物での肺葉切除モデルを作製し、G-CSF を用いた肺切除後の肺再生効果を検討した結果、右心負荷の軽減、右室心筋重量増加の抑制ができ、肺動脈新生の証明ができた。現在、大量肺切除後にエリスロポエチン投与による右心不全を改善することを明らかにし論文作成中である。

以上、臨床上の課題に対して基礎実験を行いつつ、心臓血管外科、呼吸器外科、消化器外科の領域で臨床応用を目指した研究を行っている。

2. 名簿

教授：	竹村博文	Hirofumi Takemura
臨床教授：	岩田 尚	Hisashi Iwata
准教授：	關野考史	Takafumi Sekino
臨床准教授：	島袋勝也	Katsuya Shimabukuro
講師：	村瀬勝俊	Katsutoshi Murase
臨床講師：	白橋幸洋	Koyo Shirahashi
臨床講師：	石田成吏洋	Narihiro Ishida
臨床講師：	木村真樹	Masaki Kimura
臨床講師：	名知 祥	Sho Nachi
臨床講師：	關野誠史郎	Seishiro Sekino
医員：	中嶋慎治	Shinji Nakashima
医員：	山本裕崇	Hiroataka Yamamoto

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 竹村博文. [ワンポイント・アドバイス] 内視鏡によるグラフト採取：高本眞一監修，坂田隆造編. 心臓外科 Knack&Pitfalls 冠動脈外科の要点と盲点 第2版，東京：文光堂；2012年：149-150.
- 2) 竹村博文. [ワンポイント・アドバイス] 止血材料の使い方：高本眞一監修，坂田隆造編. 心臓外科 Knack&Pitfalls 冠動脈外科の要点と盲点 第2版，東京：文光堂；2012年：161-162.
- 3) 竹村博文. 鵜飼法による Heartstring へのマウント方法：川副浩平責任編集. わが国で生まれた心臓血管外科手術 先達の創意工夫に学ぶ，東京：メジカルビュー社；2013年：72-73.
- 4) 竹村博文. 樹枝状グラフトを用いた弓部置換法：川副浩平責任編集. わが国で生まれた心臓血管外科手術 先達の創意工夫に学ぶ，東京：メジカルビュー社；2013年：120-121.
- 5) 岩田 尚. 第1章呼吸器外科・看護の総論 (5)胸腔鏡下手術・ロボット手術：岡田守人編. ナースのためのパーフェクトガイド 呼吸器外科の術前術後ケア，大阪：メディカ出版；2014年：49-58.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 竹村博文. 岐阜大学医学部附属病院医療機器センターの役割，岐阜大学医学部記念会館だより 2012年；97巻：8-11.

- 2) 大西佳文, 村瀬勝俊. Zollinger-Ellison 症候群, 消化器内視鏡 2012 年; 24 卷: 1770-1771.
- 3) 竹村博文. [オープニングリマークス] 冠動脈血行再建術の進歩と問題点 - CABG の進歩と問題点 -, 日本冠疾患学会雑誌 2013 年; 19 卷: 277.

総説 (欧文)

- 1) Takemura H. Selection of artificial valve for the patients on hemodialysis. *Gen Thorac Cardiovasc Surg.* 2013;61:314-319.
- 2) Iwata H. Minimally invasive pulmonary surgery for lung cancer, up to date. *Gen Thorac Cardiovasc Surg.* 2013;61:449-454.
- 3) Takemura H. Robot-Assisted Coronary Artery Bypass. *Circ J.* 2014;78:313-314. IF 3.685

原著 (和文)

- 1) 石田成吏洋, 島袋勝也, 松野幸博, 竹村博文. 左前側方開胸アプローチ, 左内胸動脈-橈骨動脈 I-composite graft を用いた redo CABG の 1 例, 日本冠疾患学会雑誌 2012 年; 18 卷: 36-38.
- 2) 木村真樹, 山田卓也, 加藤喜彦, 關野考史, 阪本研一, 竹村博文. 脾臓合併脾体尾部切除術を施行した甲状腺乳頭癌の脾尾部転移の 1 例, 日本消化器外科学会雑誌 2012 年; 45 卷: 203-209.
- 3) 松本真介, 森 義雄, 滝谷博志, 岩田 尚, 白橋幸洋. 膵臓リウマチに合併した多房性胸腺嚢胞, 胸部外科 2012 年; 65 卷: 205-208.
- 4) 木村真樹, 關野考史, 荒川信一郎, 小椋弘樹, 東 敏弥, 關野誠史郎, 名知 祥, 村瀬勝俊, 竹村博文. 75 歳以上の高齢者に対する膵頭十二指腸切除術の安全性の検討, 日本外科系連合学会誌 2013 年; 38 卷: 203-208.
- 5) 東 敏弥, 關野考史, 木村真樹, 關野誠史郎, 村瀬勝俊, 竹村博文. 双孔式 S 状結腸ストーマに発生した傍ストーマヘルニアに対し腹腔鏡下に modified Sugarbaker technique で修復した 1 例, 日本内視鏡外科学会雑誌 2014 年; 19 卷: 91-95.
- 6) 松井雅史, 岩田 尚, 白橋幸洋, 水野吉雅, 荒川友希, 竹村博文. 肺切除後創感染に対し Vacuum Assisted Closure (VAC) therapy system が有効であった 1 例, 日本呼吸器外科学会雑誌 2014 年; 28 卷: 601-607.
- 7) 水野吉雅, 三ツ田翔平, 山本裕崇, 白橋幸洋, 岩田 尚, 竹村博文. 胸腔鏡下右中葉切除術を施行した iceberg tumor growth pattern を呈した気管支型肺平滑筋腫の 1 例, 日本呼吸器外科学会雑誌 2014 年; 28 卷: 933-936.

原著 (欧文)

- 1) Matsuno Y, Ishida N, Fukumoto Y, Shimabukuro K, Takemura H. Simultaneous endovascular aneurysm repair and distal gastrectomy in a patient with concomitant abdominal aortic aneurysm and advanced gastric cancer. *Ann Vasc Dis.* 2012;5:69-72.
- 2) Miyahara T, Umeda Y, Yoshikawa S, Matsuno Y, Iwata H, Takemura H. Selective blockade of apoptosis by in vivo electroporation-mediated gene transfer combined with portal infusion of plasmid DNA attenuates liver cirrhosis. *Minerva Chir.* 2012;67:249-255. IF 0.707
- 3) Mizuno Y, Iwata H, Shirahashi K, Takamochi K, Oh S, Suzuki K, Takemura H. The importance of intraoperative fluid balance for the prevention of postoperative acute exacerbation of idiopathic pulmonary fibrosis after pulmonary resection for primary lung cancer. *Eur J Cardio-Thorac.* 2012;41:e161-165. IF 3.048
- 4) Matsuno Y, Shimabukuro K, Ishida N, Fukumoto Y, Takemura H. Staged hybrid debranching and thoracic endovascular aneurysm repair for multiple aortic aneurysms after conventional open repair of the descending aorta: a case report. *Ann Vasc Dis.* 2012;5:225-228.
- 5) Matsuno Y, Ishida N, Shimabukuro K, Takemura H. An unusual case of the right subclavian artery aneurysm resulting from long-term repetitive blunt chest trauma. *J Vasc Surg.* 2012;56:219-222. IF 2.980
- 6) Matsuno Y, Ishida N, Fukumoto Y, Shimabukuro K, Takemura H. Acute type A aortic dissection complicated by persistent left superior vena cava. *Asian Cardiovasc Thorac Ann.* 2012;20:466-468.
- 7) Matsuno Y, Shimabukuro K, Ishida N, Takemura H. Off-pump complete pericardiectomy for an unusual case of annular constrictive pericarditis. *Ann Thorac Surg.* 2012;94:e45-47. IF 3.631
- 8) Matsuno Y, Ishida N, Fukumoto Y, Shimabukuro K, Takemura H. Successful repair of abdominal aortic aneurysm with double inferior vena cava: a case report. *Gazzetta Medica Italiana Archivio per le Scienze Mediche.* 2012;171:665-668.
- 9) Mizuno Y, Iwata H, Shirahashi K, Matsui M, Takemura H. Persistent spontaneous pneumothorax for four years: a case report. *Prague Med Rep.* 2012;113:303-308.
- 10) Hatano Y, Otsuka S, Chousa M, Saito S, Nollet KE, Ohto H, Shimabukuro K, Takemura H, Hara A. Fatal delayed hemolytic transfusion reaction associated with anti-Di(b) and anti-E. *Transfus Apher Sci.* 2012;47:263-268. IF 1.072
- 11) Matsuno Y, Fukumoto Y, Ishida N, Shimabukuro K, Takemura H. Mycotic left main coronary artery aneurysm following double-valve replacement for active infective endocarditis. *Ann Thorac Cardiovasc Surg.* 2013;19:70-72. IF 0.687
- 12) Iwata H, Shirahashi K, Mizuno Y, Matsui M, Takemura H. Surgical technique of lung segmental

- resection with two intersegmental planes. *Interact Cardio Th.* 2013;16:423-425. IF 1.109
- 13) Iwata H, Shirahashi K, Mizuno Y, Matsui M, Yamamoto H, Takemura H. Left lower apical segmentectomy after video-assisted left upper lobectomy for relapse in lung cancer: benefit to avoid completion pneumonectomy. *Gen Thorac Cardiovasc Surg.* 2013;61:359-361.
- 14) Goshima S, Kanematsu M, Kondo H, Kawada H, Kojima T, Sakurai K, Watanabe H, Shimabukuro K, Matsuno Y, Ishida N, Takemura H, Bae KT. Preoperative planning for endovascular aortic repair of abdominal aortic aneurysms: feasibility of nonenhanced MR angiography versus contrast-enhanced CT angiography. *Radiology.* 2013;267:948-955. IF 6.214
- 15) Ishida N, Shimabukuro K, Matsuno Y, Arakawa Y, Takemura H. Tumorectomy with right thoracotomy for synchronous left atrial myxomas from Carney complex: report of a case. *Surg Today.* 2014;44:185-187. IF 1.208
- 16) Mizuno Y, Iwata H, Shirahashi K, Takemura H. One-stage bilateral pulmonary resections for pulmonary metastases. *Gen Thorac Cardiovasc Surg.* 2014;62:53-57.
- 17) Tawada C, Oshitani Y, Kimura M, Seishima M. Successful treatment of anal and perianal condyloma acuminata with imiquimod. *Acta Derm-Venereol.* 2014;94:118-119. IF 4.244
- 18) Ishida N, Shimabukuro K, Matsuno Y, Ogura H, Takemura H. Single coronary artery with bicuspid aortic valve stenosis and aneurysm of the ascending aorta: report of a case. *Surg Today.* 2014;44:550-552. IF 1.208
- 19) Wu H, Iwata H, Kimura M, Sekino T, Yamada T, Takemura H. Use of Shigyaku-san to improve liver function and regeneration after hepatectomy in rats. *Chirurgia.* 2014;27:143-149.
- 20) Iwata H, Shirahashi K, Mizuno Y, Yamamoto H, Takemura H. Feasibility of segmental resection in non-small-cell lung cancer with ground-glass opacity. *Eur J Cardio-Thorac.* 2014;46:375-379. IF 3.048
- 21) Ishida N, Shimabukuro K, Matsuno Y, Higashi T, Takemura H. Mitral valve repair for *Staphylococcus lugdunensis* infective endocarditis: report of a case. *Surg Today.* 2014;44:1946-1948. IF 1.208
- 22) Yano M, Iwata H, Hashizume M, Shigemitsu K, Adachi K, Tokui T, Matsuyama T. Adverse events of lung tissue stapling in thoracic surgery. *Ann Thorac Cardiovas.* 2014;20:370-377. IF 0.687

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：岩田 尚，研究分担者：白橋幸洋，水野吉雅，松井雅史；科学研究費補助金基盤研究(C)：肺気腫症に対する肺切除後の残存肺組織再生に関する実験的検討；平成 22-24 年度；3,800 千円(3,000：400：400 千円)
- 2) 研究代表者：關野考史，研究分担者：村瀬勝俊，木村真樹，關野誠史郎；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：細菌性腹膜炎に対するマイクロバブル生理食塩水による腹腔内灌流洗浄の有効性；平成 23-24 年度；2,400 千円(1,500：900 千円)
- 3) 研究代表者：島袋勝也，研究分担者：松野幸博，竹村博文；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：*Bartonella henselae* を用いた重症虚血肢に対する治療法の確立；平成 24-26 年度；4,100 千円(2,900：600：600 千円)
- 4) 研究代表者：村瀬勝俊，研究分担者：木村真樹，關野誠史郎；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：熱変成性生分解化合物を用いたステントレス胆管吻合法の開発；平成 24-25 年度；1,900 千円(1,000：900 千円)
- 5) 研究代表者：石田成史洋；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：慢性虚血心におけるエリスロポエチン投与下大網充填術による新たな外科治療の確立；平成 24-25 年度；3,300 千円(2,300：1,000 千円)
- 6) 研究代表者：松野幸博，研究分担者：竹村博文，島袋勝也；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：低酸素応答システムを標的とした超音波遺伝子導入による病的心筋リモデリングの制御；平成 25-27 年度；3,800 千円(2,400：600：800 千円)

2) 受託研究

- 1) 竹村博文，島袋勝也，福本行臣，松野幸博，石田成史洋：アンブラーグ特定使用成績調査；平成 21-25 年度；787,500 円：田辺三菱製薬(株)
- 2) 竹村博文，關野考史：Stage IIIb 大腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法としての UFT/Leucovorin 療法と TS-1/Oxaliplatin 療法のランダム化比較第 III 相試験；平成 22-32 年度；605,770 円：大鵬薬品工業(株)
- 3) 山田卓也，關野考史，木村真樹，加藤喜彦：ベクティビックス特定使用成績調査 - KRAS 遺伝子野生型の切除不能な進行・再発の結腸・直腸癌に関する調査 -；平成 22-24 年度；157,500 円：武田薬品(株)

- 4) 竹村博文, 島袋勝也, 松野幸博, 石田成吏洋: ゴア TAG 胸部大動脈ステントグラフトシステム使用成績調査(全例調査); 平成 23-28 年度; 1,155 千円: 日本ゴア(株)
- 5) 竹村博文, 岩田 尚, 白橋幸洋, 松井雅史: タコシール組織接着用シート特定使用成績調査; 平成 25 年度; 157,500 円: CSL ベーリング(株)
- 6) 竹村博文, 關野考史, 島袋勝也, 村瀬勝俊, 石田成吏洋, 松野幸博, 木村真樹, 名知 祥, 關野誠史郎: タコシール組織接着用シート使用成績調査; 平成 25 年度; 168,000 円: CSL ベーリング(株)
- 7) 竹村博文, 關野誠史郎: エルプラット点滴静注液 50mg, 100mg, 200mg 副作用・感染症自発報告調査; 平成 26 年度; 21,600 円: (株)ヤクルト本社
- 8) 關野考史, 村瀬勝俊, 木村真樹, 關野誠史郎: ユナシン- S (キット) 静注用 特定使用成績調査 - 肺炎, 肺腫瘍, 腹膜炎に対する高用量(1 日 6g 超)投与に関する調査-; 平成 26-27 年度; 97,200 円: ファイザー(株)
- 9) 兼村信宏, 關野考史, 島袋勝也: クリオシールシステム使用成績調査; 平成 26-27 年度; 216,600 円: 旭化成メディカル(株)

3) 共同研究

- 1) 木村真樹: 医療技術習熟用模擬シミュレーターの開発; 平成 23-28 年度; 200 千円: (株)タナック

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

竹村博文:

- 1) 日本外科学会代議員(~現在)
- 2) 日本外科学会指定施設指定委員会/指導医選定委員会委員(~現在)
- 3) 日本胸部外科学会評議員(~現在)
- 4) 日本胸部外科学会総務・渉外委員会委員(平成 24 年度)
- 5) 日本胸部外科学会選挙管理委員会委員(平成 26 年度)
- 6) 日本胸部外科学会 COI 委員会委員(平成 26 年度)
- 7) 日本心臓血管外科学会理事(平成 24 年 4 月~現在)
- 8) 日本心臓血管外科学会評議員(~現在)
- 9) 日本心臓血管外科学会学会誌編集委員会副委員長(平成 26 年 4 月~現在)
- 10) 日本心臓血管外科学会「啓発活動」推進部会部会長(平成 25 年 4 月~現在)
- 11) 日本心臓血管外科学会広報啓発委員会委員長(平成 24 年 4 月~現在)
- 12) 日本心臓血管外科学会専門医制度委員会委員(平成 24 年 4 月~現在)
- 13) 日本心臓血管外科学会将来構想・企画委員会委員(平成 24 年 6 月~現在)
- 14) 日本心臓血管外科学会規約改定委員会委員(平成 24 年 4 月~現在)
- 15) 日本心臓血管外科学会 COI(利益相反)委員会委員(平成 24 年 7 月~現在)
- 16) 日本心臓血管外科学会施設集約化委員会委員(平成 24 年 4 月~平成 26 年 3 月)
- 17) 日本心臓血管外科学会理念検討委員会委員(平成 24 年 4 月~平成 26 年 3 月)
- 18) 日本循環器学会社員(~現在)
- 19) 日本循環器学会専門医実務委員会委員(平成 24 年 6 月~現在)
- 20) 日本循環器学会東海支部評議員(~現在)
- 21) 日本血管外科学会評議員(~現在)
- 22) 日本血管外科学会東海北陸地方会世話人(~現在)
- 23) 日本冠動脈外科学会理事(平成 26 年 1 月~現在)
- 24) 日本冠動脈外科学会評議員(~現在)
- 25) 日本冠疾患学会評議員(~現在)
- 26) 日本冠疾患学会編集委員会委員(平成 24 年 9 月~平成 26 年 1 月)
- 27) 日本冠疾患学会編集委員会副委員長(平成 26 年 2 月~現在)
- 28) 日本冠疾患学会合同プログラム小委員会委員(平成 25 年 12 月~現在)
- 29) 日本冠疾患学会ハートチームのあり方検討委員会委員(平成 25 年 12 月~現在)
- 30) 日本冠疾患学会 FJCA 委員会委員(平成 24 年 9 月~現在)

- 31) 日本脈管学会評議員(～現在)
- 32) 日本ロボット外科学会監事(～現在)
- 33) 日本甲状腺外科学会評議員(～現在)
- 34) 関西胸部外科学会評議員(～現在)
- 35) 東海外科学会評議員(～現在)
- 36) 日本 Advanced Heart & Vascular Surgery/OPCAB 研究会幹事(～現在)
- 37) 日本心臓血管外科手術データベース機構(JCVSDO)幹事(～現在)
- 38) 3学会構成心臓血管外科専門医認定機構委員(平成 24 年 1 月～現在)

岩田 尚 :

- 1) 日本外科学会代議員(～現在)
- 2) 日本胸部外科学会評議員(～現在)
- 3) 日本呼吸器外科学会評議員(～現在)
- 4) 日本呼吸器外科学会編集委員会委員(～現在)
- 5) 日本呼吸器外科学会国際委員会委員(平成 25 年 5 月～現在)
- 6) 日本呼吸器外科学会手術教育部会部員(平成 25 年 5 月～現在)
- 7) 日本内視鏡外科学会評議員(～現在)
- 8) 関西胸部外科学会評議員(～現在)
- 9) 東海外科学会評議員(～現在)

關野考史 :

- 1) 東海外科学会評議員(～現在)
- 2) 日本外科学会代議員(平成 26 年 2 月～現在)

島袋勝也 :

- 1) 日本血管外科学会評議員(～現在)
- 2) 日本脈管学会評議員(～現在)
- 3) 日本血管外科学会東海北陸地方会世話人(～現在)
- 4) 東海外科学会評議員(～現在)

村瀬勝俊 :

- 1) 日本臨床外科学会評議員(～現在)
- 2) 日本肝胆膵外科学会評議員(～現在)

木村真樹 :

- 1) 日本肝胆膵外科学会評議員(～現在)

2) 学会開催

竹村博文 :

- 1) 第 218 回岐阜外科集談会(平成 24 年 6 月, 岐阜)
- 2) 第 8 回循環器治療: 内科外科 Joint Forum(平成 24 年 9 月, 名古屋)
- 3) 第 219 回岐阜外科集談会(平成 24 年 10 月, 岐阜)
- 4) 岐阜弁膜症ワークショップ(平成 24 年 11 月, 岐阜)
- 5) 第 18 回岐阜胸部疾患治療研究会(平成 25 年 3 月, 岐阜)
- 6) 岐阜弁膜症ワークショップ(平成 25 年 10 月, 岐阜)
- 7) 第 143 回日本循環器学会東海地方会(平成 26 年 7 月, 岐阜)
- 8) 第 30 回健脚を血管病から守る公開シンポジウム(平成 26 年 9 月, 岐阜)

岩田 尚 :

- 1) 第 76 回岐阜県肺癌研究会・第 86 回岐阜胸部疾患読影研究会(平成 25 年 7 月, 岐阜)
- 2) 中部胸腔鏡セミナー2014(平成 26 年 9 月, 岐阜)

村瀬勝俊：

- 1) 第 85 回岐阜県膵・胆道研究会(平成 25 年 9 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

竹村博文：

- 1) 日本冠疾患学会雑誌；編集委員(平成 24 年 9 月～平成 26 年 1 月)
- 2) 日本冠疾患学会雑誌；編集委員会副委員長(平成 26 年 2 月～現在)
- 3) 日本心臓血管外科学会雑誌；編集委員会副委員長(平成 26 年 4 月～現在)

岩田 尚：

- 1) 日本呼吸器外科学会雑誌；編集委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

竹村博文：

- 1) 第 12 回葉山ハートセミナー(平成 24 年 3 月, 神奈川, シンポジウム「ACS に対する CABG 戦略」シンポジスト)
- 2) 岐阜県眼科医会談話会(平成 24 年 6 月, 岐阜, 講演「最近の心臓大血管外科-オフポンプバイパス手術、ステント治療、小切開手術-」演者)
- 3) 第 218 回岐阜外科集談会(平成 24 年 6 月, 岐阜, 特別講演「鏡視下手術を教室のテーマとして-教育と臨床の実際-」座長)
- 4) West Japan MICS Summit ～Lessons from experts～(平成 24 年 6 月, 大阪, ビデオライブおよびラウンドテーブルディスカッション「MICS-MITRAL up-to-date in Japan」座長)
- 5) 第 11 回福島周術期循環動態研究会(平成 24 年 7 月, 福島, 特別講演「冠動脈バイパス術の術中グラフ評価-内胸動脈バイパスを極める-」演者)
- 6) 第 17 回日本冠動脈外科学会学術大会(平成 24 年 7 月, 東京, ランチョンセミナー「Building of successful robotic revascularization program」座長)
- 7) 心臓血管外科サマースクール 2012(平成 24 年 8 月, 神奈川, 模擬手術ライブデモンストレーション「上行大動脈、大動脈弁置換術(人工心臓・心筋保護を含む)」コメンテーター)
- 8) 心臓血管外科サマースクール 2012(平成 24 年 8 月, 神奈川, ウェットラボ実技初期研修医コース「人工血管・大動脈弁置換術」講師)
- 9) 第 8 回循環器治療：内科外科 Joint Forum(平成 24 年 9 月, 名古屋, 講演「透析患者の弁膜症に対する手術適応と弁選択における EBM REVIEW」演者)
- 10) 第 219 回岐阜外科集談会(平成 24 年 10 月, 岐阜, 教育講演「外科領域における抗菌薬の使い方について」座長)
- 11) 第 219 回岐阜外科集談会(平成 24 年 10 月, 岐阜, 教育講演「急性期栄養管理の基本と実際」座長)
- 12) 第 65 回日本胸部外科学会定期学術集会(平成 24 年 10 月, 福岡, ランチョンセミナー「当科における弓部大動脈瘤治療の変遷」演者)
- 13) 第 65 回日本胸部外科学会定期学術集会(平成 24 年 10 月, 福岡, Case Report Award(成人心臓)「再冠動脈バイパス術における高周波心外膜エコーの役割」コメンテーター)
- 14) CCT2012 Surgical(平成 24 年 11 月, 神戸, Surgical Live Demonstration「ウシ心膜を用いた大動脈弁再建術」「MICS 僧帽弁形成術」コメンテーター)
- 15) 第 2 回熊本 Cardiovascular Forum(平成 24 年 11 月, 熊本, 特別講演「冠動脈バイパスにおけるクオリティコントロール」演者)
- 16) 第 26 回日本冠疾患学会学術集会(平成 24 年 12 月, 東京, 冠動脈外科技術講習会「in-situ 動脈グラフで OPCAB を完遂する」Basic コース「冠動脈バイパス術者としての第一歩」講師)
- 17) 第 26 回日本冠疾患学会学術集会(平成 24 年 12 月, 東京, 外科ワークショップ「CABG 周術期の stroke 対策-術前評価と治療戦略-」座長)
- 18) 第 84 回岐阜循環器疾患研究会(平成 25 年 2 月, 岐阜, 特別講演「虚血性心筋症の外科治療」座長)
- 19) 第 43 回日本心臓血管外科学会学術総会(平成 25 年 2 月, 東京, ワークショップ「遠隔成績から見た弁形成手術を検証する」座長)
- 20) 再生医療と創薬の最前線第 1 回シンポジウム(平成 25 年 3 月, 岐阜, 講演「心臓血管外科の最新治療」座長)
- 21) 第 18 回岐阜胸部疾患治療研究会(平成 25 年 3 月, 岐阜, 特別講演「呼吸器外科医からみたびまん性

- 肺疾患 - 怖くてチャレンジングな疾患 -」座長)
- 22) 岐阜外科トロンボモデュリン研究会(平成 25 年 3 月, 岐阜, 特別講演「炎症と凝固からみた重症患者の治療戦略」座長)
 - 23) 第 37 回東海プロスタグランディン研究会(平成 25 年 5 月, 名古屋, 特別講演「重症虚血肢に対する治療戦略はいかにあるべきか - 静脈グラフトの可能性を追求する -」座長)
 - 24) 第 16 回日本 AHVS/OPCAB 研究会(平成 25 年 7 月, 福岡, 特別講演「Technique Overview of MICS CABG」座長)
 - 25) 第 18 回日本冠動脈外科学会学術大会(平成 25 年 7 月, 福岡, 第 9 回 OPCAB コンテスト審判)
 - 26) Japan MICS Summit in Osaka(平成 25 年 7 月, 大阪, ディスカッション「MICS を始める際のピットフォール～それぞれの立場から」座長)
 - 27) 第 33 回可茂循環器セミナー(平成 25 年 7 月, 岐阜, 特別講演「最新の心臓大血管手術」演者)
 - 28) 関中央病院開院 130 周年記念祝賀会(平成 25 年 7 月, 岐阜, 記念シンポジウム「関市の医療を考える～これまで、これから～」パネリスト)
 - 29) 心臓血管外科サマースクール 2013(平成 25 年 8 月, 神奈川, 初期研修医コース「手術手技体験 実技 I・実技 II」指導教官)
 - 30) 心臓血管外科サマースクール 2013(平成 25 年 8 月, 神奈川, 模擬手術ライブデモンストレーション「CABG」術者)
 - 31) 岐阜弁膜症ワークショップ(平成 25 年 10 月, 岐阜, 基調講演「大動脈弁手術の最近の動向」演者)
 - 32) 岐阜弁膜症ワークショップ(平成 25 年 10 月, 岐阜, 特別講演「大動脈弁形成術」座長)
 - 33) 東北信心臓血管外科懇話会(平成 25 年 11 月, 長野, 特別講演「冠動脈バイパス術の品質管理と最近の取り組み(MICS、open stent)」演者)
 - 34) the 4th Sendai/New Tokyo LIVE(平成 25 年 11 月, 宮城, 講演「日本の心臓外科治療のエビデンスを作る」演者)
 - 35) 第 27 回日本冠疾患学会学術集会(平成 25 年 12 月, 和歌山, 冠動脈外科技術講習会 Basic course「ITA 採取と吻合の基本手技」講師)
 - 36) 第 27 回日本冠疾患学会学術集会(平成 25 年 12 月, 和歌山, 冠動脈外科技術講習会 Premium course「OPCAB を極める」講師)
 - 37) 第 27 回日本冠疾患学会学術集会(平成 25 年 12 月, 和歌山, 外科パネルディスカッション「RA, GEA, SVG の遠隔成績」座長)
 - 38) 第 28 回心臓血管外科ウインターセミナー学術集会(平成 26 年 1 月, 長野, イブニングセミナー「オフポンプ CABG プレコン中に LAD を切断し、救命し得た 1 例」演者)
 - 39) 第 44 回日本心臓血管外科学会学術総会(平成 26 年 2 月, 熊本, 招請講演「Improving Results in Coronary Surgery : Surgical Skill or Standardized Procedure?」座長)
 - 40) 第 38 回北陸血管症例検討会(平成 26 年 3 月, 金沢, 特別講演「弓部大動脈瘤に対する治療戦略」演者)
 - 41) 第 25 回日本心エコー図学会学術集会(平成 26 年 4 月, 金沢, ライブセッション「ビデオライブ」コメンテーター)
 - 42) 東海心臓外科フォーラム(平成 26 年 5 月, 名古屋, Lecture「拡張型・虚血性心筋症に対する外科的介入」座長)
 - 43) 揖斐郡医師会学術講演会(平成 26 年 5 月, 岐阜, 特別講演「最新の心臓大血管手術」演者)
 - 44) 第 33 回十八会講演会(平成 26 年 5 月, 岐阜, 講演「心臓手術における低侵襲への試み」演者)
 - 45) 第 222 回岐阜外科集談会(平成 26 年 5 月, 岐阜, 特別講演「直腸癌に対する腹腔鏡下手術」座長)
 - 46) 第 87 回岐阜循環器疾患研究会(平成 26 年 6 月, 岐阜, 特別講演「僧帽弁逆流を完璧に制御するための僧帽弁形成法の工夫」座長)
 - 47) 第 44 回可茂循環器セミナー(平成 26 年 6 月, 岐阜, 特別講演「冠動脈疾患の治療～バイパス術とカテーテル治療の比較」座長)
 - 48) 第 57 回関西胸部外科学会学術集会(平成 26 年 6 月, 大阪, シンポジウム「瀰漫性多枝冠動脈病変に対する外科的冠血行再建術の工夫と遠隔成績」座長)
 - 49) JAPAN MICS SUMMIT 2014(平成 26 年 6 月, 大阪, ビデオライブ「MICS up-to-date」座長)
 - 50) 第 19 回日本冠動脈外科学会学術大会(平成 26 年 7 月, 東京, ランチョンセミナー「ITA-LAD 吻合のストラテジー」演者)
 - 51) 第 19 回日本冠動脈外科学会学術大会(平成 26 年 7 月, 東京, Video Symposium「次世代に向けた CABG の展望 - MICS, Robotic, Hybrid CABG などの新たな手術手技のアイデア」座長)

- 52) 第 19 回日本冠動脈外科学会学術大会(平成 26 年 7 月, 東京, Invited Lecture「The future of surgical coronary revascularization」座長)
- 53) 心臓血管外科サマースクール 2014(平成 26 年 8 月, 神戸, 「初期研修医コース」指導教官)
- 54) Complex Cardiovascular Therapeutics 2014(平成 26 年 10 月, 神戸, 講演「この症例は、是非××科でやって欲しい LMT」演者)
- 55) 第 76 回日本臨床外科学会総会(平成 26 年 11 月, 福島, ワークショップ「超高齢者に対する冠動脈外科治療戦略」座長)
- 56) 第 223 回岐阜外科集談会(平成 26 年 11 月, 岐阜, 特別講演「食道がん治療の変遷」座長)
- 57) the 5th Sendai/New Tokyo LIVE(平成 26 年 12 月, 東京, Session「CABG vs PCI; Current Status」コメンテーター)
- 58) 第 28 回日本冠疾患学会学術集会(平成 26 年 12 月, 東京, 冠動脈外科技術講習会 Advanced course「美しい冠動脈吻合の秘訣」講師)
- 59) 第 28 回日本冠疾患学会学術集会(平成 26 年 12 月, 東京, 外科シンポジウム「MICS-CABG の適応、方法、位置づけ」座長)

岩田 尚:

- 1) 第 29 回日本呼吸器外科学会総会(平成 24 年 5 月, 秋田, ビデオシンポジウム「当科の区域切除術の検討」シンポジスト)
- 2) 第 29 回日本呼吸器外科学会総会(平成 24 年 5 月, 秋田, ランチョンセミナー「解剖に沿った根治的領域切除術～質の高い低侵襲手術を目指して～」演者)
- 3) 第 29 回日本呼吸器外科学会総会(平成 24 年 5 月, 秋田, ブースセミナー「VATS Lobectomy における当科の工夫～安全安心に手術器械を使用するために～」講師)
- 4) 第 25 回日本内視鏡外科学会総会(平成 24 年 12 月, 横浜, シンポジウム「原発性肺癌における hybrid VATS 区域切除術」シンポジスト)
- 5) 本巣地域医療連携講演会(平成 25 年 1 月, 岐阜, 特別講演「肺癌の疫学と治療」演者)
- 6) 肺区域切除講習会(平成 25 年 4 月, 上海(中国), 講義「肺区域切除術の基本」演者)
- 7) 肺区域切除講習会(平成 25 年 4 月, 上海(中国), Animal Lab「犬を用いた左肺区域切除術」講師)
- 8) 肺区域切除講習会(平成 25 年 4 月, 上海(中国), ビデオクリニック座長)
- 9) 日本呼吸器外科学会第 20 回中部・北陸地区胸腔鏡手術セミナー(平成 25 年 6 月, 静岡, 講義「胸腔鏡下手術を安全にかつ緻密に行うための工夫」演者)
- 10) 第 56 回関西胸部外科学会学術集会(平成 25 年 6 月, 広島, 教育講演「肺腺癌の区域切除の問題点」演者)
- 11) 第 56 回関西胸部外科学会学術集会(平成 25 年 6 月, 広島, Young Investigator Award「呼吸器」審査員)
- 12) 第 76 回岐阜県肺癌研究会・第 86 回岐阜胸部疾患読影研究会(平成 25 年 7 月, 岐阜, 特別講演「胸腔鏡下肺癌手術の現状と問題点」座長)
- 13) 平成 25 年度第 4 回岐阜大学病院研修医セミナー(平成 25 年 7 月, 岐阜, 講演「縫合セミナー」演者)
- 14) 呼吸器外科サマースクール 2013(平成 25 年 7 月, 神戸, 「アドバンスコース(研修医)」講師)
- 15) 呼吸器外科サマースクール 2013(平成 25 年 7 月, 神戸, 「ベーシックコース開胸グループ(学生)」講師)
- 16) 第 36 回呼吸器外科胸腔鏡セミナー(平成 25 年 8 月, 静岡, 「安全な胸腔鏡手術のために-新しいデバイスに触れる」講師)
- 17) 第 29 回中濃臨床懇話会(平成 25 年 9 月, 岐阜, 特別講演「原発性肺癌に対する外科治療の現状と将来」演者)
- 18) 第 26 回日本小切開・鏡視外科学会(平成 25 年 11 月, 東京, シンポジウム「原発性肺癌における hybrid VATS 区域切除術」シンポジスト)
- 19) 第 111 回大岐医会(平成 25 年 11 月, 岐阜, 講演「原発性肺癌に対する外科治療の現状と今後」演者)
- 20) 第 13 回岐阜胸部外科フォーラム特別講演会(平成 25 年 11 月, 岐阜, 特別講演「呼吸器外科ロボット手術を上手に行うための工夫」座長)
- 21) 第 26 回日本内視鏡外科学会総会(平成 25 年 11 月, 福岡, シンポジウム「臨床病期 I 期原発性肺癌の手術アプローチごとの再発形式、予後に関する検討」シンポジスト)
- 22) 第 3 回ヘルスケア産業・医療機器等開発人材養成セミナー(現場実践コース)(平成 26 年 2 月, 岐阜, 講義「内視鏡外科手術トレーニングセンターの紹介」演者)

- 23) 第 114 回日本外科学会定期学術集会(平成 26 年 4 月, 京都, ディベート「区域切除は、Hybrid か Complete VATS か?」 「Hybrid」 演者)
- 24) 広島胸腔鏡下肺区域切除セミナー(平成 26 年 4 月, 広島, 講演「当院における胸腔鏡下肺区域切除について」 演者)
- 25) 第 27 回岐阜プライマリ・ケアカンファレンス(平成 26 年 5 月, 岐阜, 特別講演「肺癌の外科治療の最前線」 演者)
- 26) 第 31 回日本呼吸器外科学会総会(平成 26 年 5 月, 東京, ランチョンセミナー「胸腔鏡下肺癌手術における Tips・手技の工夫と Energy Device の使用法」 演者)
- 27) 第 57 回関西胸部外科学会学術集会(平成 26 年 6 月, 大阪, シンポジウム「胸腔鏡下肺がん手術のトラブル予防と対策」 座長)
- 28) 第 13 回岐阜呼吸器治療セミナー(平成 26 年 9 月, 岐阜, 教育講演「肺癌外科治療の最新の知見」 演者)
- 29) 第 1 回呼吸器外科胸腔鏡教育セミナー(平成 26 年 10 月, 東京, 講義「VATS 手技セミナー2」 演者)

關野考史 :

- 1) 第 11 回養老地域医療連携セミナー(平成 24 年 2 月, 岐阜, 講演「最新の大腸癌治療」 演者)
- 2) 第 37 回日本外科系連合学会学術集会(平成 24 年 6 月, 福岡, ビデオシンポジウム「腹腔鏡下結腸右半切除 D3 リンパ節郭清における工夫」 シンポジスト)
- 3) 第 10 回岐阜平成消化管疾患研究会(平成 24 年 7 月, 岐阜, 講演「最適な大腸癌外科治療をめざして」 演者)
- 4) 第 2 回岐阜消化器外科症例検討会(平成 24 年 9 月, 岐阜, 特別講演「直腸がんにおける腹腔鏡下手術の現状と今後の展望～ISR の手技の工夫を含めて～」 座長)
- 5) Colorectal Cancer Meeting in GIFU(平成 25 年 3 月, 岐阜, ディスカッション「Aggressive approach としての抗 EGFR 抗体薬をどう使いこなすか?」 ディスカッサー)
- 6) 第 286 回東海外科学会(平成 25 年 10 月, 岐阜, 若手奨励賞「消化器 2」 審査員)
- 7) Chugai Colorectal Cancer Seminar(平成 26 年 12 月, 岐阜, 特別講演「直腸癌・肛門管扁平上皮癌に対する化学放射線療法」 座長)

島袋勝也 :

- 1) 第 83 回岐阜循環器疾患研究会(平成 24 年 6 月, 岐阜, 教育講演「胸部・腹部大動脈瘤に対するステントグラフト治療の適応と限界」 演者)
- 2) 第 39 回岐阜糖尿病病診連携懇話会(平成 25 年 3 月, 岐阜, 特別講演「胸部・腹部大動脈瘤に対するステントグラフト治療法」 演者)
- 3) 揖斐郡医師会学術講演会(平成 25 年 3 月, 岐阜, 特別講演「当科における胸部・腹部大動脈瘤および閉塞性動脈硬化症に対する治療の現状」 演者)
- 4) TEVAR and EVAR meeting with Aichi Medical University and Fujita Health University(平成 25 年 4 月, 愛知, 講演「当科で経験した胸部・胸腹部領域における TEVAR の検討」 演者)
- 5) 第 14 回養老地域医療連携セミナー(平成 26 年 9 月, 岐阜, 講演「大動脈瘤治療の最前線と下肢静脈瘤治療について」 演者)
- 6) ステントグラフト研究会 In GIFU 2014(平成 26 年 10 月, 岐阜, 講演「当院におけるステントグラフト内挿術の経験」 演者)
- 7) 名古屋胸部大動脈治療研究会(平成 26 年 11 月, 名古屋, 講演「慢性解離性大動脈瘤に対する治療戦略」 演者)

村瀬勝俊 :

- 1) 第 76 回日本臨床外科学会総会(平成 26 年 11 月, 福島, ワークショップ「膝頭十二指腸切除術後早期退院にむけての取り組み」 演者)

白橋幸洋 :

- 1) 第 30 回呼吸器外科胸腔鏡セミナー(平成 24 年 1 月, 静岡, 胸腔鏡手術手技に関する講義/アニマルラボ指導)
- 2) 第 32 回呼吸器外科胸腔鏡セミナー(平成 24 年 7 月, 静岡, 胸腔鏡手術手技に関する講義/アニマルラボ指導)

- 3) 第 56 回関西胸部外科学会学術集会(平成 25 年 6 月, 広島, シンポジウム「当科における病理病期 I 期原発性肺癌に対する区域切除術の適応と予後」シンポジスト)
- 4) 第 57 回関西胸部外科学会学術集会(平成 26 年 6 月, 大阪, シンポジウム「当科の原発性肺癌に対する胸腔鏡下手術手技の安全性と安定化」シンポジスト)

石田成吏洋 :

- 1) 第 8 回循環器治療 : 内科外科 Joint Forum(平成 24 年 9 月, 名古屋, 講演「出血性消化管疾患を合併した慢性維持透析導入後大動脈弁狭窄症の一例」演者)
- 2) 第 26 回日本冠疾患学会学術集会(平成 24 年 12 月, 東京, 外科ワークショップ「CABG 周術期における動脈硬化性病変由来の脳梗塞予防」演者)
- 3) 岐阜弁膜症ワークショップ(平成 25 年 10 月, 岐阜, 講演「自己心膜を用いた大動脈弁再建術の一手術例」演者)
- 4) 第 86 回岐阜循環器疾患研究会(平成 26 年 2 月, 岐阜, 教育講演「心臓手術における周術期合併症軽減と手術低侵襲化への取り組み」演者)
- 5) 第 10 回循環器治療 : 内科外科 Joint Forum(平成 26 年 6 月, 名古屋, 講演「低左心機能、中等度僧帽弁閉鎖不全を合併した重症三枝病変症例の長期成績」演者)
- 6) 第 76 回日本臨床外科学会総会(平成 26 年 11 月, 福島, ワークショップ「75 歳以上の超高齢者における待機的初回単独冠動脈バイパス術の術後早期成績の検討」演者)

木村真樹 :

- 1) 第 37 回日本外科系連合学会学術集会(平成 24 年 6 月, 福岡, パネルディスカッション「75 歳以上の高齢者に対する臍頭十二指腸切除術は安全である」パネリスト)

關野誠史郎 :

- 1) 第 37 回日本外科系連合学会学術集会(平成 24 年 6 月, 福岡, パネルディスカッション「80 歳以上の超高齢者における結腸・直腸癌に対する腹腔鏡下手術の検討」パネリスト)
- 2) 第 62 回日本輸血・細胞治療学会総会(平成 26 年 5 月, 奈良, シンポジウム「消化器外科領域における自己フィブリン糊の使用経験」シンポジスト)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 小椋弘樹 : 第 284 回東海外科学会若手奨励賞(平成 24 年度)
- 2) 豊田和孝, 岡本 淳, 川村和也, 小林 洋, 竹村博文, 藤江正克 : 心拍同期機能を有したマスク・スレーブ型手術ロボットシステムの開発(位置同期性能および同期縫合操作性の評価), 日本機械学会論文集(C 編) 2011 年 ; 77 卷 778 号 : 195-207 : 日本機械学会賞(論文)(平成 24 年度)
- 3) 栃井航也 : 第 113 回日本外科学会定期学術集会 Young Researcher Award(平成 25 年度)

9. 社会活動

竹村博文 :

- 1) 岐阜県身体障害者厚生相談所身体障害者医学判定非常勤医師(~現在)
- 2) 岐阜県社会福祉審議会委員(~現在)
- 3) 岐阜市社会福祉審議会委員(~現在)
- 4) 西日本医科学学生体育連盟理事(平成 25 年度)

關野考史 :

- 1) 岐阜地域医師会連携パス大腸がん運営委員(~現在)

島袋勝也 :

- 1) 岐阜県医師会糖尿病医療連携研究会委員(~現在)

10. 報告書

- 1) 白橋幸洋 : 肺気腫に対する伸縮性コラーゲンのラッピング法の開発 : 平成 21-23 年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書(平成 24 年 5 月)
- 2) 松野幸博 : 骨髄由来平滑筋細胞を標的とした病的血管リモデリングに対する遺伝子治療 : 平成 22-

23年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書(平成24年5月)

- 3) 水野吉雅：MRSA DNA ワクチンによる人工血管感染予防：平成22-23年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書(平成24年5月)
- 4) 木村真樹：成人間生体部分肝移植におけるうっ血を伴うグラフト肝再生の改善：平成22-23年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書(平成24年5月)
- 5) 岩田 尚：肺気腫症に対する肺切除後の残存肺組織再生に関する実験的検討：平成22-24年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書(平成25年5月)
- 6) 關野考史：細菌性腹膜炎に対するマイクロバブル生理食塩水による腹腔内灌流洗浄の有効性：平成23-24年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)研究成果報告書(平成25年5月)
- 7) 村瀬勝俊：熱変成性生分解化合物を用いたステントレス胆管吻合法の開発：平成24-25年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)研究成果報告書(平成26年5月)
- 8) 石田成吏洋：慢性虚血心におけるエリスロポエチン投与下大網充填術による新たな外科治療の確立：平成24-25年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)研究成果報告書(平成26年5月)

11. 報道

- 1) 竹村博文：美濃加茂の木沢記念病院 心臓血管手術に成功 50代男性大動脈弁を人工弁に「新たな一歩、責任は大」：中日新聞(2012年1月25日)
- 2) 岩田 尚：「研究室から 大学はいま」からだにやさしい肺がん手術：岐阜新聞(2012年2月28日)
- 3) 岩田 尚：内視鏡手術支援「ダ・ヴィンチ」使用 呼吸器外科の手術成功 美濃加茂 県内初、木沢記念病院で：岐阜新聞(2012年3月15日)
- 4) 岩田 尚：3D内視鏡カメラ装着 医療ロボでミリ単位操作 肺がん切除手術に成功 岐阜大附属と木沢記念病院チーム 執刀医「患者負担の軽減期待」：中日新聞(2012年3月16日)
- 5) 岩田 尚：最先端の外科手術 高校生44人が体験 岐阜大医学部講座：中日新聞(2012年8月13日)
- 6) 岩田 尚：「ブラックジャックを探せ」呼吸器疾患に立ち向かう岩田医師 胸腔鏡で地方に最先端医療を：夕刊フジ(2012年12月21日)
- 7) 島袋勝也：「研究室から 大学はいま」動脈瘤の新たな治療法応用：岐阜新聞(2013年1月29日)
- 8) 竹村博文：地域医療担い130年 関中央病院が記念式典：岐阜新聞(2013年7月28日)
- 9) 岩田 尚：医師志す高校生が模擬手術 岐阜大病院 外科セミナーに36人：読売新聞(2013年7月29日)
- 10) 岩田 尚：外科医を目指して 高校生たち手術模擬体験 岐阜大病院 電気メスや縫合練習：中日新聞(2013年7月30日)
- 11) 岩田 尚：外科医のやりがい実感 高校生が岐阜大病院で体験セミナー 模擬手術、内視鏡操作に挑戦：岐阜新聞(2013年8月4日)
- 12) 竹村博文：人工弁使わず心臓手術 大動脈弁形成、岐阜大病院が県内初 心膜で代用感染症リスク低減：岐阜新聞(2013年8月7日)
- 13) 村瀬勝俊：「研究室から 大学はいま」2段階で門脈閉塞し肝切除：岐阜新聞(2013年11月12日)
- 14) 岩田 尚：手術ロボットで肺がん切除 米国人医師が指導 美濃加茂木沢記念病院：中日新聞(2013年11月21日)
- 15) 岩田 尚：手術ロボで肺がん手術 美濃加茂の木沢記念病院 米の名医指導「痛み減少」：岐阜新聞(2013年12月21日)
- 16) 岩田 尚：病院の実力～岐阜編79 肺がん 薬剤の種類増加 ロボット手術 他院と連携：読売新聞(2014年8月3日)
- 17) 岩田 尚：高校生が外科手術"体験" 岐阜大病院セミナー 切開装置を操作：岐阜新聞(2014年8月9日)

12. 自己評価

評価

新研修医制度や地域医療における医師不足が医局運営にも影を落としており、研究と臨床の両立が迫られている。その中で心臓血管外科、消化器外科、呼吸器外科領域で研究が進んでいる。心臓血管外科領域では腹部動脈瘤発生機序からみた瘤拡大抑制、縦隔炎に対する抗菌剤以外の治療法の模索を行ってきた。呼吸器外科領域では肺葉切除後の右心不全予防の研究が進んできた。消化器外科領域では拡大肝切除の肝再生促進の研究で様々な要因を用いた研究が進んできた。これらの研究課題で科学研究費を含めて外部資金も獲得してきた。

現状の問題点及びその対応策

社会人大学院の増加で研究は進んでいるが、大学院専属の学生に比べて研究に費やせる時間が制限される。臨床系医師が研究するにあたっては基礎教室と十分な連携と協力を頂きながら研究を行わなければならない。今後も大学院生数の確保が重要で、基礎教室ともさらなる連携を図り内外に報告できる研究成果を上げていかなければならない。

今後の展望

これまでの教室の研究成果を踏まえつつ、新しい研究テーマに展開していきたい。動物実験施設は充実しており、自由な研究環境は整っていると考える。多くの大学院生が今後も集まり、心臓血管外科、消化器外科、呼吸器外科それぞれの領域がお互いに刺激し合い総合的外科教室としての研究を進めていきたい。

(6) 整形外科学分野

1. 研究の概要

1) EWS/Fli-1 と VEGF の関連の解明

EWS/Fli-1 は VEGF の発現を促進していることを示した。加えて RNA 干渉を用いて VEGF-A の発現を抑制することにより、ヒト Ewing 肉腫の担癌マウスモデルにおいて腫瘍増大抑制効果が得られることを示した。

2) EWS/Fli-1 を標的とした small interfering RNA(siRNA)の治療効果の解明

EWS/Fli-1 を標的とした siRNA を合成し、RNA 干渉を用いてヒト Ewing 肉腫細胞の EWS/Fli-1 の発現を抑制した。さらにヒト Ewing 肉腫細胞およびその担癌マウスモデルにおける抗腫瘍効果を示した。

3) Aurora kinase と CDK の抑制による抗腫瘍効果の検討

Aurora kinase 及び CDK の二重阻害剤である JNJ-7706621(JNJ)は細胞周期を停止させることにより Ewing 肉腫細胞の増殖を抑制した。JNJ により分裂期の細胞は、チェックポイント機構の破綻をきたし、染色体分離が行われなまま分裂期後期へと進んでいた。分裂期制御タンパクの細胞内局在の異常により細胞質分裂が障害されたと考えられた。

4) EWS/ATF1 トランスジェニックマウスの作製と遺伝子機能の解析

明細胞肉腫に特異的に発現する EWS/ATF1 を組み込んだ EWS/ATF1 発現トランスジェニックマウスを作製し、軟部腫瘍を形成するモデルマウスの樹立に成功した。そしてモデルマウスの解析結果から c-FOS 蛋白が明細胞肉腫において特異的に過剰発現していることを明らかにした。

5) 遺伝性多発性外骨腫の実態把握と遺伝子多型に関する基盤研究

岐阜大学で新たに外骨腫外来を開設し、患者集約とともに遺伝子サンプルを採取し解析を行なった。

6) 遺伝性多発性外骨腫の実態把握と遺伝子多型に関する基盤研究

岐阜大学で外骨腫専門外来を開設し、患者集約とともに遺伝子サンプルを採取し解析を行なっている。

7) 多発性外骨腫と骨粗鬆症との相関に関する研究

外骨腫専門外来に訪れた患者を対象に、骨密度を測定し、血液検査とともに疾患と骨粗鬆症に関する関係を解析中。

8) 変形性膝関節症とコンドロイチン硫酸の相関に関する研究

コンドロイチン硫酸鎖長の相関関係およびコンドロイチン硫酸合成酵素群の遺伝子異常スクリーニングをおこなうシステムの確立を目指している。

9) 椎間板細胞外基質代謝におけるカルパインの役割と解明

ウシおよびヒトの椎間板を用い、炎症・椎間板変性という局面においてカルパインが椎間板基質分解にいかに関与するかについて研究を進めている。

10) ヒト腰椎荷重負荷における椎間板・椎間関節の形態変化に関する研究

ヒト腰椎の立位荷重状態をシミュレートする装置を使用し、CT 撮影によって得られた腰椎画像を 3 次元解析し、椎間板・椎間関節の 3 次元的形態変化を解析した。

11) 腰椎装具の体幹位置覚、スポーツパフォーマンスに与える影響の検討

腰椎装具がもつ体幹位置覚向上効果がスポーツパフォーマンス(ゴルフ、ウォーキング等)に及ぼす影響をあたえるかを 3 次元画像解析により検証した。

12) 腰椎変性側彎症に対する後方椎体間固定術による変形矯正の 3 次元解析

腰椎変性側彎症に対するブーメラン型スペーサーを用いた後方椎体間固定術による変形矯正が椎間板角、椎間関節形態に与える効果を 3 次元画像解析により検証している。

13) ヒト頸椎の屈曲伸張動態における硬膜管・頸部脊髄の 3 次元動態解析

脊髄造影検査後のファンクショナル CT を用い、ヒト頸椎の屈曲伸張動態における硬膜管・頸部脊髄の 3 次元動態解析を各種病態との関連にて検証している。

14) 椎間板のアンチエイジングを具現し得る新しい生物学的治療の開発

カルパインが椎間板細胞の細胞外マトリックス分解に関与することに着目し、その働きを制御することにより椎間板の老化予防を図る新しい生物学的治療を開発している。

15) 腰椎経椎間孔後方椎体間固定術前後の椎間孔形態 3 次元解析

片側進入による腰椎経椎間孔後方椎体間固定術は低侵襲が特徴であるが、その術前術後の進入反対側椎間孔形態 3 次元解析を行い、椎間孔狭窄発生のリスクなど、合併症の軽減を図る尺度を検証している。

16) 腰椎低侵襲後方除圧術の中期長期成績に与える因子の検討

腰部脊柱管狭窄症に対する腰椎低侵襲後方除圧術(片側進入両側除圧)の中期長期成績について、椎間板変性、側弯、多椎間罹患、年齢等の多因子を対象に多変量解析による検証を行っている。

17) 超音波を用いた頸椎前方・後方除圧術後の脊髓形態変化

頸椎変性疾患における脊髓前方除圧法、後方除圧法の意義を術中超音波による脊髓形態観察および臨床成績との関連を調査し、検証している。

18) ゴルフスイングにおける体幹装具が腰椎挙動に与える影響の3次元解析

ゴルフスイングは非対称な腰椎回旋動作であり、椎間関節への過負荷による腰痛発症が問題となっている。体幹装具装着による腰椎3次元運動への影響の解析を行い、腰痛発症予防への効果の検証を行っている。

19) 頸椎前方除圧固定体位における頸椎形態の3次元解析

頸椎前方除圧固定体位における軸椎下の回旋挙動を頸椎変性疾患を有する臨床症例を対象に解析を行い、正確かつ安全な除圧術を施行するうえでの指標を作成している。

20) 明細胞肉腫に対するマイクロRNAを標的とした新治療法の確立

明細胞肉腫に特異的に発現するEWS/ATF1によるマイクロRNA発現プロファイルの変化をマイクロアレイで解析し、治療標的となりうるマイクロRNAの探索を行っている。

21) 逆動力学的三次元解析による人工股関節置換術後の歩行およびインプラント応力の解析

人工股関節置換術後の歩行を3次的に解析し、逆動力学的に詳細な解析を行っている。

22) 多発性外骨腫症の発症メカニズムに関する研究

疾患モデルマウスを使用し、発生を詳細に調査することにより、その発症メカニズムの解明を試みている。

23) 変形性関節症とヘパラン硫酸の相関に関する基礎研究

ヘパラン硫酸を関節軟骨特異的に欠損させることによって、変形性関節症へどのような影響が見られるのかを研究する。

2. 名簿

教授：	秋山治彦	Haruhiko Akiyama
教授：	西本 裕	Yutaka Nishimoto
准教授：	大野貴敏	Takatoshi Ohno
講師：	青木隆明	Takaaki Aoki
講師：	松本 和	Kazu Matsumoto
臨床講師：	永野昭仁	Akihito Nagano
臨床講師：	増田剛宏	Takahiro Masuda
臨床講師：	平川明弘	Akihiro Hirakawa
臨床講師：	寺林伸夫	Nobuo Terabayashi
臨床講師：	瀧上伊織	Iori Takigami
医員：	宮川貴樹	Takaki Miyagawa
医員：	川島健志	Kenji Kawashima
医員：	小川貴大	Takahiro Ogawa
医員：	蔵満紀成	Norishige Kuramitsu
医員：	花松利昌	Toshiaki Hanamatsu

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 大野貴敏. II. 病態・疾患別のガイドライン, 骨腫瘍 Ewing 肉腫の診断・治療指針: 中村耕三編. 運動器診療最新ガイドライン, 東京: 総合医学社; 2012年: 286-288.
- 2) 寺林伸夫. 上腕骨近位端骨折 手術法解説 人工骨頭置換術: 整形外科 Surgical Techniqu Vol.4 No.1, メディカ出版; 2014年.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 安田善治郎, 喜久生明男, 西本裕, 西脇勝巳, 高木永悟. スポーツ医科学レポート第1回, ぎふ体協 2012年; 81巻: 66-71.
- 2) 糸川保二郎, 船橋建司, 西本裕, 高木永悟, 岸田梨加. スポーツ医科学レポート第2回, ぎふ体協 2012年; 81巻: 72-76.
- 3) 秋山治彦, 瀧上伊織. 本邦における National Arthroplasty Register の現状, リウマチ科 2014年; 51巻:

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 寺島宏明, 青木隆明, 清水克時, 伊達和人. 器具型表面電極 FES 装置(NESS H200®)を用いて手指挫滅損傷後の拘縮改善を図った 1 症例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2012 年; 55 巻: 133-134.
- 2) 増田剛宏, 鈴木直樹, 山田喜久, 伏見一成, 清水克時, 宮本 敬. MRSA 脊椎炎に対する手術治療, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2012 年; 55 巻: 275-276.
- 3) 大野貴敏, 大島康司, 永野昭仁, 大野義幸, 西本 裕, 清水克時. 処理骨を用いて再建を行った悪性骨腫瘍の治療成績, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2012 年; 55 巻: 491-492.
- 4) 永野昭仁, 大野貴敏, 大島康司, 西本 裕, 河村真吾, 清水克時. 脂肪腫に対して超音波破碎吸引装置(CUSA)を用いた小皮切手術の治療成績, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2012 年; 55 巻: 503-504.
- 5) 佐藤正夫, 四戸隆基, 清水克時. 関節リウマチに対するメトトレキサートの使用状況, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2012 年; 55 巻: 563-564.
- 6) 松本 和, 松本茂美, 伊藤芳毅, 瀧上伊織, 寺林伸夫, 清水克時. 末期変形性膝関節症に対する末梢神経高周波熱凝固法の検討, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2012 年; 55 巻: 1087-1088.
- 7) 松本 和, 森 敦幸, 伊藤芳毅, 瀧上伊織, 寺林伸夫, 清水克時. 大腿骨髄外ガイドを使用した大腿骨インプラント設置の評価と術者間の相違の検討, 日本人工関節学会誌 2012 年; 42 巻: 369-370.
- 8) 寺林伸夫, 伊藤芳毅, 松本 和, 瀧上伊織, 清水克時, 渡邊恒夫, 関根綾子. 夜間痛を伴う腱板断裂患者に対する超音波ドップラ血流評価, 肩関節 2012 年; 36 巻: 507-510.
- 9) 加藤博基, 星 博昭, 兼松雅之, 出原啓一, 久世文也, 青木光広, 水田啓介, 大野貴敏. 頭頸部領域のデスマイド腫瘍(デスマイド型線維腫症)の 3 例, 臨床放射線 2012 年; 57 巻: 436-441.
- 10) 仙石昌也, 大島康司, 大野貴敏, 清水克時, 西本 裕, 浅野奈美, 齊郷智恵美, 廣瀬善信. 左大腿軟部腫瘍の 1 例, 東海骨軟部腫瘍 2012 年; 24 巻: 1-2.
- 11) 青木隆明, 服部 良, 日石智之, 尾藤貴宣, 宮本 敬, 清水克時. 高齢者の脊椎後弯変形と固有背筋の超音波による変化評価, 運動療法と物理療法 2012 年; 23 巻: 21-24.
- 12) 青木隆明. 障害者スポーツ医の役割, JSAD SPORTS 2012 年; 49 巻: 13-14.
- 13) 青木隆明. 脊椎から下肢に至る保存的疼痛治療の考え方—脊椎リハビリ—, 整形外科リハビリテーション学会誌 2012 年; 14 巻: 10-13.
- 14) 伏見一成, 宮本 敬, 日置 暁, 細江英夫, 清水克時. 後方除圧術後に重度の椎麻痺を発症した上位胸椎後縦靭帯骨化症 2 例の検討, 臨床整形外科 2012 年; 47 巻: 159-164.
- 15) 濱田 知, 日置 暁, 伏見一成, 高澤 真, 宮本 敬, 清水克時. 特発性硬膜外血腫(SSEH)に対する治療法選択, 臨床整形外科 2012 年; 47 巻: 659-663.
- 16) 川井 豪, 伊藤芳毅, 小倉真治, 清水克時. 整形外科最前線/あなたならどうする?(11), 臨床整形外科 2012 年; 47 巻: 1099-1102.
- 17) 山下達也, 田村哲嗣, 速水 悟, 林 賢二, 西本 裕. 実環境における喀痰検出と肺音解析, 薬理と臨床 2012 年; 22 巻: 69-74.
- 18) 井上俊之, 清水克時, 西本 裕. 軟骨マトリックス分解酵素としてのカルパイン 成長軟骨板, 変形性膝関節症軟骨でのカルパインによるアグリカン分解について, 岐阜県医師会医学雑誌 2012 年; 25 巻: 71-73.
- 19) 佐藤正夫, 四戸隆基, 清水克時. 生物学的製剤使用中に発生した呼吸器疾患の検討, 関節の外科 2012 年; 39 巻: 6-9.
- 20) 佐藤正夫, 清水克時, 竹村正男. 強直性脊椎炎に対するインフリキシマブ療法の検討, 日本脊椎関節炎学会 2012 年; Vol.IV: 35-39.
- 21) 佐藤正夫, 竹村正男, 渡辺恒夫, 福岡大輔, 清水克時. 超音波三次元イメージングを用いた関節リウマチ手指関節内血流数値化の試み, 別冊整形外科 運動器疾患の画像診断 2012 年; 62 巻: 188-193.
- 22) 佐藤正夫, 清水克時, 竹村正男, 四戸隆基. 関節リウマチに対するアバタセプトの有効性の検討, 臨床リウマチ 2012 年; 24 巻: 193-198.
- 23) 清水克時. 二分脊椎と脊椎短縮術, Brain And Spinal Cord 2012 年; 19 巻.
- 24) 清水克時. 脊椎感染症とのたたかい, 教養ブックレット 世紀の発明・発見 2012 年; 4 巻: 82-83.
- 25) 貞升 彩, 宮本 敬, 田中健一郎, 細江英夫, 清水克時. 頸椎後縦靭帯骨化症に対する手術治療成績の検討, 岐阜大学医学部紀要 2012 年; 57 巻: 5-14.
- 26) 清水克時. スポーツ選手の腰椎分離症, 理学療法学 2012 年; 41 巻: 7-9.
- 27) 宮本 敬, 伊藤芳毅, 清水克時. 脊柱外科 Q&A, THE SPINE 2012 年: 8-10.
- 28) 青木隆明. ロンドンパラリンピック医務報告, 日本障害者スポーツ学会誌 2013 年; 22 号: 94-95.
- 29) 大野貴敏, 大島康司, 平川明弘, 西本 裕, 清水克時, 齊郷智恵美, 鬼頭勇輔, 廣瀬善信. 橈骨骨腫瘍の一例, 東海骨軟部腫瘍 2013 年; 25 巻: 9-10.
- 30) 櫻井幸太, 加藤博基, 川田紘資, 兼松雅之, 永野昭仁, 大島康司, 大野貴敏, 廣瀬善信. 隆起性皮膚線維肉腫. 画像診断 2013 年; 33 巻: 542-543.
- 31) 河村真吾, 山田一成, 大野貴敏, 大西紘太郎, 松田 穰, 山田泰広. がんモデルマウス・ラットライブラリ 12 回 遺伝子発現調節システムを使用した発がんモデルマウス, 細胞工学 2013 年; 32 巻: 808-811.

- 32) 川田紘資, 加藤博基, 櫻井幸太, 兼松雅之, 寺林伸夫, 永野昭仁, 大島康司, 大野貴敏, 廣瀬善信. 画像診断と病理 胞巣状軟部肉腫, 画像診断 2013年; 5巻: 404-405.
- 33) 宮本 敬, 下川哲哉, 日置 暁, 増田剛宏, 清水克時, 大野貴敏. 脊柱矢状面アライメントの異常とその矯正 HAS - HAT9 を用いた胸腰椎骨盤広範囲固定症例の矢状断アライメントの評価, 整形・災害外科 2013年; 56巻: 839-843.
- 34) 佐竹崇志, 大野貴敏, 大島康司, 永野昭仁, 清水克時. Jaffe - Campanacci syndrome に osteosarcoma を発症した1例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2013年; 56巻: 383-384.
- 35) 下川哲哉, 日置 暁, 増田剛宏, 大野貴敏, 角島元隆, 小原 明, 小池 玲, 前田雅人, 清水克時, 宮本 敬. 上位胸椎 OPLL に対し Sundaresan アプローチにて前方除圧固定術を施行した1例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2013年; 56巻: 1059-1060.
- 36) 榮祐裕文, 西本 裕, 青木隆明, 川崎晴久, 毛利哲也, 粥川正康. 前腕切断者を対象にした筋電義手に関する研究 表面筋電信号による筋電義手制御の実験, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2013年; 56巻: 103-104.
- 37) 加島卓磨, 山下達也, 田村哲嗣, 速水 悟, 林 賢二, 西本 裕. 心音と環境雑音の低減手法の検討と評価, 電子情報通信学会技術研究報告(ME とバイオサイバネティクス) 2013年; 113巻: 93-98.
- 38) 秋山治彦, 松本 和. 骨・軟骨疾患と再生 軟骨発生と破壊の分子機序, Clinical Calcium 2013年; 23巻: 1777-1783.
- 39) 兼氏 歩, 松本忠美, 比江島欣慎, 杉山 肇, 秋山治彦, 渥美 敬, 石井政次, 泉キヨ子, 市堰 徹, 伊藤浩, 大川孝浩, 大園健二, 大塚博巳, 岸田俊二, 小林千益, 澤口 毅, 菅野伸彦, 中島育昌, 中村 茂, 長谷川幸治, 福田寛二, 藤井玄二, 馬渡太郎, 森 論史, 安永裕司, 山口昌男, 日本整形外科学会診断・評価等基準委員会股関節疾患小委員会. 日本整形外科学会股関節疾患評価質問票 Japanese Orthopaedic Association Hip Disease Evaluation Questionnaire(JHEQ)の開発, 日本整形外科学会雑誌 2013年; 87巻: 1073-1096.
- 40) 秋山治彦, 松本 和. [骨・関節疾患の基礎と臨床] 変形性関節症の診断と治療(解説/特集), Medical Science Digest 2013年; 39巻: 567-570.
- 41) 永野昭仁, 大野貴敏, 大島康司, 西本 裕, 松本 和, 秋山治彦. 遺伝性多発性外骨腫症に伴う前腕変形に対して延長術を施行した5例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2014年; 57巻: 759-760.
- 42) 松本 和, 秋山治彦. 【整形外科の手術手技-私はこうしている】 下肢 膝関節 髓外ガイドを使用した人工膝関節全置換術 私の工夫, 別冊整形外科 2014年; 66号: 106-109.
- 43) 松本 和, 伊藤芳毅, 瀧上伊織, 寺林伸夫, 秋山治彦. AMK 型人工膝関節置換術後の再置換術症例の検討, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2014年; 57巻: 1267-1268.
- 44) 寺村易予, 加藤博基, 櫻井幸太, 兼松雅之, 大野貴敏, 西本 裕, 大島康司, 永野昭仁, 小林一博, 廣瀬善信. 血管平滑筋腫の5例 MRI 所見とアザン染色を含めた病理所見の対比, Japanese Journal of Clinical Radiology 2014年; 59巻: 449-453.
- 45) 後藤篤史, 大野貴敏, 西本 裕, 大島康司, 永野昭仁, 秋山治彦. Tumoral calcinosis の4例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2014年; 57巻: 629-630.
- 46) 青木隆明, 浅野昭裕, 林 典雄, 曾田直樹, 東 華岳, 早川大輔, 千田隆夫, 秋山治彦. 肩鎖関節脱臼 Rockwood 分類の解剖学的検討, Journal of Clinical Rehabilitation(0918-5259) 2014年; 23巻: 95-96.
- 47) 寺林伸夫, 伊藤芳毅, 松本 和, 瀧上伊織, 大野貴敏, 渡邊恒夫. 体位変換・肩関節加温下での肩周囲血流変化: 健常肩での検討, 肩関節 2014年; 38巻: 407-410.
- 48) 寺林伸夫, 渡邊恒夫, 松本 和, 瀧上伊織, 伊藤芳毅, 清水克時, 秋山治彦. 変形性膝関節症に対する中膝動脈血流評価, 日本整形外科超音波学会誌 2014年; 25巻: 42-47.
- 49) 山口良大, 川井 豪, 鈴木浩大, 小倉真治, 寺林伸夫, 清水克時. 肩甲関節窩骨折を伴った肩甲骨体部骨折の観血的治療経験の1例, 骨折 2014年; 36巻: 853-856.
- 50) 櫻井健司, 砂子俊晴, 佐藤夏実, 寺林伸夫, 日石智紀, 福田 雅, 竹田賢一. 中学3年生の野球肘検診における調査結果, 東海スポーツ傷害研究会 2014年; 32巻: 15-16.
- 51) 鍋谷洋介, 渡邊恒夫, 寺林伸夫, 廣瀬あゆみ, 野久 謙, 篠田貢一, 古田伸行, 伊藤弘康, 松岡敏男, 清島満. 超音波検査による肩腱板断裂診断能の検討: US 所見と MRI 所見との比較, 臨床病理: 日本臨床検査医学会誌 2014年; 62巻: 31-37.
- 52) 森 博美, 松本 和, 伊藤芳毅, 瀧上伊織, 寺林伸夫, 小林源博, 秋山治彦. 若年の長距離走者に発症した転位を伴う大腿骨頸基部疲労骨折の1例, 臨床整形外科 2014年; 49巻: 295-299.
- 53) 松本 和, 伊藤芳毅, 瀧上伊織, 寺林伸夫, 秋山治彦. AMK 型人工膝関節置換術後の再置換術症例の検討, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2014年; 57巻: 1267-1268.
- 54) 後藤篤史, 松本 和, 伊藤芳毅, 瀧上伊織, 寺林伸夫, 秋山治彦. TKA 後の著明な膝蓋骨低位による anterior knee pain に対し膝蓋骨置換が奏効した1例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2014年; 57巻: 1273-1274.
- 55) 平川明弘, 蔵満紀成, 大野義幸, 秋山治彦. 橈骨遠位端骨折に対する VA-TCP を用いた治療成績-APTUS 2.5 との比較を含めて-, 日本手外科学会雑誌 2014年; 31巻: 7-9.
- 56) 川島健志, 宮川貴樹, 金森茂雄, 仁枝祐一, 近藤祐一, 高澤 真, 伏見一成. 足関節外果骨折に対する後外側用 locking plate の使用経験, 骨折 2014年; 36巻: 729-731.
- 57) 川島健志, 伏見一成, 宮川貴樹, 金森茂雄, 近藤祐一, 高澤 真. 軽度の骨破壊を伴った化膿性脊椎炎に対する治療法の検討 保存的治療と後方固定術の比較, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2014年; 57

原著 (欧文)

- 1) Matsuhashi A, Ohno T, Kimura M, Hara A, Saio M, Nagano A, Kawai G, Saitou M, Takigami I, Yamada K, Okano Y, Shimizu K. Growth Suppression and Mitotic Defect Induced by JNJ-7706621, an Inhibitor of Cyclin-Dependent Kinases and Aurora Kinases. *Curr Cancer Drug Tar.* 2012;12:625-639. IF 3.582
- 2) Cho TJ, Matsumoto K, Fano V, Dai J, Kim OH, Chae JH, Yoo WJ, Tanaka Y, Matsui Y, Takigami I, Monges S, Zabel B, Shimizu K, Nishimura G, Lausch E, Ikegawa S. TRPV4-pathway manifesting both skeletal dysplasia and peripheral neuropathy: a report of three patients. *Am J Med Genet A.* 2012;158A:795-802. IF 2.048
- 3) Hioki A, Miyamoto K, Sadamasu A, Nozawa S, Ogawa H, Fushimi K, Hosoe H, Shimizu K. Repair of pars defects by segmental transverse wiring for athletes with symptomatic spondylolysis: relationship between bony union and postoperative symptoms. *Spine (Phila Pa 1976).* 2012;37:802-807. IF 2.447
- 4) Kato H, Kanematsu M, Ohno T, Nishimoto Y, Oshima K, Hirose Y, Nishibori H. Is "black geode" sign a characteristic MRI finding for extracranial schwannomas?, *J Magn Reson Imaging* 2012;37:830-835. IF 2.788
- 5) Ishimaru D, Ogawa H, Wakahara K, Sumi H, Sumi Y, Shimizu K. Hip pads reduce the overall risk of injuries in recreational snowboarders. *Brit J Sport Med.* 2012;46:1055-1058. IF 4.171
- 6) Ishimaru D, Nozawa S, Maeda M, Shimizu K. Intertrochanteric fracture of the ankylosed hip joint treated by a gamma nail: a case report. *Case Rep Orthop.* 2012:278156.
- 7) Ogawa H, Hatano S, Sugiura N, Nagai N, Sato T, Shimizu K, Kimata K, Narimatsu H, Watanabe H. Chondroitin sulfate synthase-2 is necessary for chain extension of chondroitin sulfate but not critical for skeletal development. *PLoS One.* 2012;7:e43806. IF 3.534
- 8) Watanabe T, Takemura M, Sato M, Sekine A, Fukuoka D, Seishima M, Shimizu K, Matsuoka T. Quantitative analysis of vascularization in the finger joints in patients with rheumatoid arthritis using three-dimensional volumetric ultrasonography with power Doppler. *Clin Rheumatol.* 2012;31:299-307. IF 1.774
- 9) Kouda K, Furusawa K, Sugiyama H, Sumiya T, Ito T, Tajima F, Shimizu K. Does 20-min arm crank ergometer exercise increase plasma interleukin-6 in individuals with cervical spinal cord injury?. *Eur J Appl Physiol.* 2012;112:597-604. IF 2.298
- 10) Komura S, Miyamoto K, Hosoe H, Iinuma N, Shimizu K. Lower incidence of adjacent segment degeneration after anterior cervical fusion found with those fusing C5-6 and C6-7 than those leaving C5-6 or C6-7 as an adjacent level. *J Spinal Disord Tech.* 2012;25:23-29. IF 1.888
- 11) Ishimaru D, Ogawa H, Maeda M, Shimizu K. Outcomes of elderly patients with proximal femoral fractures according to positive criteria for surgical treatment. *Orthopedics.* 2012;35:e353-358. IF 0.977
- 12) Fushimi K, Miyamoto K, Fukuta S, Hosoe H, Masuda T, Shimizu K. The surgical treatment of pyogenic spondylitis using posterior instrumentation without anterior debridement. *J Bone Joint Surg Br.* 2012;94:821-824. IF 2.801
- 13) Yamada K, Ohno T, Aoki H, Semi K, Watanabe A, Moritake H, Shiozawa S, Kunisada T, Kobayashi Y, Toguchida J, Shimizu K, Hara A, Yamada Y. EWS/ATF1 activates Fos and induces soft tissue sarcomas from neural crest-derived cells. EWS/ATF1 expression induces sarcomas from neural crest-derived cells in mice. *J Clin Invest.* 2013;123:600-610. IF 13.765
- 14) Hashimoto K, Miyamoto K, Yanagawa T, Hattori R, Aoki T, Ohno T, Matsuoka T, Shimizu K. Lumbar corsets can decrease lumbar motion in golf swing. *J Sport Sci Med.* 2013;12:80-87. IF 0.898
- 15) Kawai G, Ohno T, Kawaguchi T, Nagano A, Saito M, Takigami I, Matsuhashi A, Yamada K, Hosono K, Tezuka K, Kunisada T, Hara A, Shimizu K. Human dental pulp facilitates bone regeneration in a rat bone defect model. *Bone and Tissue Regeneration Insights.* 2013;4:1-10.
- 16) Tsugita M, Yamada N, Noguch S, Yamada K, Moritake H, Shimizu K, Akao Y, Ohno T. Ewing Sarcoma Cells Secrete EWS/Fli-1 Fusion mRNA via Microvesicles. *PLoS ONE* 2013;8:e77416. IF 3.534
- 17) Iwata T, Miyamoto K, Hioki A, Fushimi K, Ohno T, Shimizu K. Morphological Changes in Contralateral Lumbar Foramen in Unilateral Cantilever Transforaminal Lumbar Interbody Fusion Using Kidney-type Intervertebral Spacers. *J Spinal Disord Tech.* 2013.
- 18) Tanahashi H, Miyamoto K, Hioki A, Iinuma N, Ohno T, Shimizu K. Alterations in axial curvature of the cervical spine with a combination of rotation and extension in the conventional anterior cervical approach. *Eur Spine J.* 2013;22:2850-2856. IF 2.473
- 19) Anower-E-Khuda MF, Matsumoto K, Habuchi H, Morita H, Yokochi T, Shimizu K, Kimata K. Glycosaminoglycans in the blood of hereditary multiple exostoses patients: Half reduction of heparan sulfate to chondroitin sulfate ratio and the possible diagnostic application. *Glycobiology.* 2013;23:865-876. IF 3.747
- 20) Takigami I, Ito Y, Matsumoto K, Ogawa H, Terabayashi N, Shimizu K. Primary total hip arthroplasty with a spongy metal surface acetabular component for hip dysplasia. *J Arthroplasty.* 2013;28:172-177. IF 2.369
- 21) Mizutani N, Watanabe T, Yano K, Aoki T, Nishimoto Y, Kobayashi Y. A wheelchair operation assistance control for a wearable robot using the user's residual function. *IEEE Int Conf Rehabil Robot.* 2013:1-6.
- 22) Mizutani N, Yamane M, Kato N, Yano K, Aoki T, Nishimoto Y, Kobayashi Y. Control of wearable

- motion assist robot for upper limb based on the equilibrium position estimation. *Conf Proc IEEE Eng Med Biol Soc.* 2013;2013:334-337.
- 23) Nagano A, Ohno T, Nishimoto Y, Oshima K, Shimizu K. Malignant solitary fibrous tumor of the lumbar spinal root mimicking schwannoma: a case report. *Spine J.* 2013;14:e17-20. IF 2.800
 - 24) Hamada T, Matsumoto K, Ishimaru D, Sumi H, Shimizu K. Comparison of tibial shaft ski fractures in children and adults. *Clin J Sport Med.* 2014;24:380-384. IF 2.012
 - 25) Matsumoto K, Iwamoto K, Mori N, Yamasaki T, Ito Y, Takigami I, Terabayashi N, Ogawa H, Tomita T, Akiyama H. In vivo kinematics of a low contact stress rotating platform total knee arthroplasty system under weight bearing and non-weight bearing condition. *J Orthop Sci.* 2014;19:750-755. IF 1.008
 - 26) Nagano A, Ohno T, Nishimoto Y, Oshima K, Shimizu K. Malignant solitary fibrous tumor of the lumbar spinal root mimicking schwannoma: a case report. *Spine J.* 2014;14:e17-20. IF 2.800
 - 27) Ohno T. Minimized surgery for patients with malignant bone tumor treated by continuous intra-arterial infusion chemotherapy. *The 24th Japanese-Korean Combined Orthopaedic Symposium. Hakone, Japan Program and Abstracts.* 2014:56
 - 28) Kawasaki H, Ito S, Nishimoto Y, Ueki S, Ishigure Y, Mouri T. Hand Motion Assist Robot for Rehabilitation Therapy. *Journal of Robotics and Mechatronics.* 2014;26:103-104.
 - 29) Sugano N, Iida H, Akiyama H, Takatori Y, Nagoya S, Hasegawa M, Kabata T, Hachiya Y, Yasunaga Y. Nationwide investigation into adverse tissue reactions to metal debris after metal-on-metal total hip arthroplasty in Japan. *J Orthop Sci. Jan 2014;19:85-89.* IF 1.008
 - 30) Shimokawa T, Miyamoto K, Hioki A, Masuda T, Akiyama H, Shimizu K. Thorachea-Thoracic Vertebral Body Fistula Causing Spinal Cord Injury: A Case Report. *Spine.* 2014;39:E657-659.
 - 31) Tateuchi H, Tsukagoshi R, Fukumoto Y, Akiyama H, So K, Kuroda Y, Ichihashi N. Compensatory turning strategies while walking in patients with hip osteoarthritis. *Gait Posture.* 2014;39:1133-1137. IF 2.299
 - 32) Raft S, Andrade LR, Shao D, Akiyama H, Henkemeyer M, Wu DK. Ephrin-B2 governs morphogenesis of endolymphatic sac and duct epithelia in the mouse inner ear. *Dev Biol.* 2014;390:51-67. IF 3.637
 - 33) Ito A, Aoyama T, Iijima H, Nagai M, Yamaguchi S, Tajino J, Zhang X, Akiyama H, Kuroki H. Optimum temperature for extracellular matrix production by articular chondrocytes. *Int J Hyperther.* 2014;30:96-101. IF 2.769
 - 34) Iijima H, Aoyama T, Ito A, Tajino J, Nagai M, Zhang X, Yamaguchi S, Akiyama H, Kuroki H. Immature articular cartilage and subchondral bone covered by menisci are potentially susceptible to mechanical load. *BMC Musculoskelet Disord.* 2014;15:101. IF 1.898
 - 35) Tanimizu N, Nishikawa Y, Ichinohe N, Akiyama H, Mitaka T. Sry HMG box protein 9-positive (Sox9+) epithelial cell adhesion molecule-negative (EpCAM-) biphenotypic cells derived from hepatocytes are involved in mouse liver regeneration. *J Biol Chem.* 2014;289:7589-7598. IF 4.600
 - 36) Iijima H, Aoyama T, Ito A, Tajino J, Nagai M, Zhang X, Yamaguchi S, Akiyama H, Kuroki H. Destabilization of the medial meniscus leads to subchondral bone defects and site-specific cartilage degeneration in an experimental rat model. *Osteoarthritis Cartilage.* 2014;22:1036-1043. IF 4.663
 - 37) Alanis DM, Chang DR, Akiyama H, Krasnow MA, Chen J. Two nested developmental waves demarcate a compartment boundary in the mouse lung. *Nat Commun.* 2014;5:3923. IF 10.742
 - 38) Ito A, Aoyama T, Tajino J, Nagai M, Yamaguchi S, Iijima H, Zhang X, Akiyama H, Kuroki H. Evaluation of reference genes for human chondrocytes cultured in several different thermal environments. *Int J Hyperthermia.* 2014;30:210-216. IF 2.769
 - 39) Yanger K, Knigin D, Zong Y, Maggs L, Gu G, Akiyama H, Pikarsky E, Stanger BZ. Adult Hepatocytes Are Generated by Self-Duplication Rather than Stem Cell Differentiation. *Cell Stem Cell.* 2014;15:340-349. IF 22.151
 - 40) Nagai M, Aoyama T, Ito A, Iijima H, Yamaguchi S, Tajino J, Zhang X, Akiyama H, Kuroki H. Contributions of biarticular myogenic components to the limitation of the range of motion after immobilization of rat knee joint. *BMC Musculoskelet Disord.* 2014;15:224. IF 1.898
 - 41) Soggia A, Ramond C, Akiyama H, Scharfmann R, Duvillie B. von Hippel-Lindau gene disruption in mouse pancreatic progenitors and its consequences on endocrine differentiation in vivo: importance of HIF1- α and VEGF-A upregulation. *Diabetologia.* 2014;57:2348-2356. IF 6.880
 - 42) Kawai T, Takemoto M, Fujibayashi S, Tanaka M, Akiyama H, Nakamura T, Matsuda S. Comparison between alkali heat treatment and sprayed hydroxyapatite coating on thermally-sprayed rough Ti surface in rabbit model: Effects on bone-bonding ability and osteoconductivity. *J Biomed Mater Res B Appl Biomater.* 2014.
 - 43) Minegishi Y, Sakai Y, Yahara Y, Akiyama H, Yoshikawa H, Hosokawa K, Tsumaki N. Cyp26b1 Within the Growth Plate Regulates Bone Growth in Juvenile Mice. *Biochem Biophys Res Commun.* 2014;454:12-18. IF 2.281
 - 44) Terabayashi N, Watanabe T, Matsumoto K, Takigami I, Ito Y, Fukuta M, Akiyama H, Shimizu K. Increased blood flow in the anterior humeral circumflex artery correlates with night pain in patients with rotator cuff tear. *J Orthop Sci.* 2014;19:744-749. IF 1.008

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：國貞隆弘，研究分担者：大野貴敏；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：遺伝子改変マウスによる疾患のメカニズム解明のための共同研究；平成 24 年度；2,000 千円
- 2) 研究代表者：大野貴敏；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：悪性軟部腫瘍に対する新たな分子標的治療法の開発；平成 24-26 年度；5,330 千円(2,860：2,210：260 千円)
- 3) 研究代表者：松本 和；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：コンドロイチン硫酸合成酵素に着目した変形性膝関節症の新たな病態の解明；平成 24-26 年度；4,100 千円(1,400：1,900：800 千円)
- 4) 研究代表者：松本嘉寛，研究分担者：松本 和；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：軟骨肉腫幹細胞に注目した、新規軟骨肉腫治療法の開発；平成 23-26 年度；4,100 千円(1,700：800：800：800 千円)
- 5) 研究代表者：川崎晴久，研究分担者：西本 裕，他；平成 24 年度総務省戦略的情報通信研究開発推進制度：意志合意形成に基づくロボットハンド遠隔操作システムの研究開発；平成 24 年度；19,981 千円
- 6) 研究代表者：瀧上伊織；科学研究費補助金研究活動スタート支援：骨粗鬆症に及ぼすヘパラン硫酸の役割の解明；平成 23-24 年度；2,300 千円(1,200：1,100 千円)
- 7) 瀧上伊織；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：X 線透視画像を用いた人工膝関節の生体内三次元動態解析；平成 24 年度；770 千円
- 8) 研究代表者：松本 和；文部科学省科学研究補助金基盤研究(C)：コンドロイチン硫酸合成酵素に着目した変形性膝関節症の新たな病態の解明；平成 24-26 年度；4,100 千円(1,400：1,900：800 千円)
- 9) 研究代表者：伊藤芳毅，研究分担者：石丸大地；文部科学省研究補助金基盤研究(C)：遺伝性多発外骨腫症モデルマウスを用いた骨軟骨腫発生に関するヘパラン硫酸の機能解析；平成 25-27 年度；3,800 千円(1,400：1,200：1,200 千円)
- 10) 研究代表者：永野昭仁；文部科学省科学研究補助金若手研究(B)：淡明細胞肉腫に対するマイクロ RNA を標的とした新治療法の確立；平成 26-27 年度；3,770 千円(1,820：1,950 千円)
- 11) 研究代表者：松本 和；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：変形性関節症の発症におけるヘパラン硫酸の役割についての研究；平成 26 年度；800 千円
- 12) 研究代表者：岩本幸英，研究分担者：大野貴敏；厚生労働科学研究費補助金：高悪性度骨軟部腫瘍に対する標準治療確立のための研究；平成 23-25 年度；740 千円(250：220：270 千円)

2) 受託研究

- 1) 大野貴敏：Ewing 肉腫に対する新たな診断、治療法の開発；平成 25 年度；300 千円；武田薬品(株)
- 2) 大野貴敏：骨軟部肉腫に対する分子標的治療；平成 25 年度；500 千円；協和発酵キリン株式会社
- 3) 大野貴敏：淡明細胞肉腫に対するマイクロ RNA を標的とした新治療法の確立；平成 26 年度；500 千円；武田薬品(株)
- 4) 研究代表者：岩本幸英，研究分担者：大野貴敏；高悪性度骨軟部腫瘍に対する標準治療確立のための研究；平成 26 年度；650 千円

3) 共同研究

- 1) 青木隆明：片脚式歩行支援機の評価開発；平成 24-26 年度；0 千円；今仙技術研究所
- 2) 伊藤芳毅：人工関節全置換術における表面酸化処理ジルコニウム合金(OXIMUM)の耐摩耗性に関する多施設共同研究；平成 24-29 年度；6,000 千円；スミス・アンド・ネフュー オーソペデックス株式会社

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

清水克時：

- 1) 日本軟骨代謝学会理事(~現在)

- 2) 日本小児整形外科学会理事(～現在)
- 3) 日本小児整形外科学会評議員(～現在)
- 4) 愛知骨軟部組織移植振興財団理事(平成 24 年 6 月～現在(再任))
- 5) (財)整形災害外科学研究助成財団理事(～平成 25 年 5 月)

西本 裕 :

- 1) 日本整形外科学会代議員(～現在)
- 2) 中部日本整形外科災害外科学会評議員(～現在)

秋山治彦 :

- 1) 日本整形外科学会代議員(～平成 25 年 8 月)
- 2) 中部整形外科災害外科学会評議員(～平成 25 年 8 月)
- 3) 日本人工関節学会幹事・評議員・金属対金属人工股関節合併症調査委員(～平成 25 年 8 月)
- 4) 日本骨代謝学会評議員(～平成 25 年 8 月)
- 5) 日本軟骨代謝学会評議員(～平成 25 年 8 月)
- 6) 厚生労働省体内埋植型医療機器患者登録システムの在り方に関する検討会構成員(～平成 25 年 8 月)
- 7) 日本人工関節学会 日本人工関節登録制度運営委員会事務局委員(平成 25 年 9 月～現在)
- 8) 第 27 回日本整形外科学会専門医試験口頭試験委員(平成 25 年 9 月～現在)
- 9) 日本軟骨代謝学会理事(平成 25 年 9 月～現在)
- 10) 岐阜県整形外科集談会会長(平成 25 年 9 月～現在)
- 11) 岐阜整形外科セミナー顧問：大橋俊郎先生の会(平成 25 年 9 月～現在)
- 12) 岐阜人工関節フォーラム顧問：大橋俊郎先生の会(平成 25 年 9 月～現在)
- 13) 東海整形外科外傷研究会顧問(平成 25 年 9 月～現在)
- 14) 東海小児整形外科懇話会顧問(平成 25 年 9 月～現在)
- 15) 東海脊椎脊髄病研究会顧問(平成 25 年 9 月～現在)
- 16) 東海足と靴の研究会顧問(平成 25 年 9 月～現在)
- 17) 東海人工関節研究会顧問(平成 25 年 9 月～現在)
- 18) 東海地区整形外科教育研修会世話人(平成 25 年 9 月～現在)
- 19) 整形外科集談会東海地方会世話人(平成 25 年 9 月～現在)
- 20) 東海地区整形外科研修会世話人(平成 25 年 9 月～現在)
- 21) 東海運動器フォーラム世話人(平成 25 年 9 月～現在)
- 22) Orthopedic Research Club 世話人(平成 25 年 9 月～現在)
- 23) 岐阜東洋医学研究会幹事(平成 25 年 9 月～現在)
- 24) 日本骨折治療学会評議員(～現在)
- 25) 東海関節鏡研究会顧問(～現在)
- 26) Hip Forum 世話人(平成 26 年 7 月)
- 27) 第 26 回日本整形外科学会専門医試験口頭試験委員(平成 25 年)
- 28) 第 27 回日本整形外科学会専門医試験口頭試験委員(平成 26 年)
- 29) 第 32 回日本骨代謝学会学術集会プログラム選定委員(平成 26 年度)

大野貴敏 :

- 1) 中部日本整形外科災害外科学会評議員(～現在)
- 2) 日本運動器移植・再生医学研究会幹事(～現在)
- 3) 日本骨軟部肉腫治療研究会幹事(～現在)
- 4) 東海骨軟部腫瘍研究会幹事(～現在)
- 5) 骨軟部腫瘍治療法検討会幹事(～現在)
- 6) 日本整形外科学会骨軟部腫瘍委員(平成 25 年 7 月～現在)

伊藤芳毅 :

- 1) 東海足と靴の研究会幹事(～現在)
- 2) 中部日本整形外科災害外科学会評議員(～現在)
- 3) 日本人工関節学会評議員(～現在)

- 4) 日本股関節学会評議員(～現在)
- 5) 東海関節外科研究会幹事(～現在)
- 6) 東海小児整形外科懇話会常任幹事(～現在)
- 7) 東海人工関節研究会常任世話人(～現在)
- 8) 関西膝関節鏡研究会幹事(～現在)
- 9) 東海股関節研究会代表幹事(～現在)
- 10) 岐阜人工関節フォーラム幹事(～現在)

青木隆明：

- 1) 日本リハビリテーション医学会代議員(～現在)
- 2) 日本義肢装具学会評議員会則検討委員(～現在)
- 3) 日本義肢装具学会評議員(～現在)
- 4) 日本リハビリテーションネットワーク研究会理事(～現在)
- 5) 整形外科リハビリテーション学会顧問(～現在)
- 6) 日本リハビリテーション医学会中部東海地方会幹事(～現在)
- 7) 岐阜リハビリテーション研究会代表幹事(～現在)
- 8) 人工関節フォーラム幹事(～現在)
- 9) 運動器科学学会編集委員(～現在)
- 10) 日本リハビリテーション医学会国際委員会委員長(～現在)
- 11) 中部整形外科災害外科学会評議員(～現在)
- 12) 日本運動器科学学会編集委員(～現在)

松本 和：

- 1) 日本軟骨代謝学会評議員(平成 24 年 3 月～現在)
- 2) 軟骨代謝学会評議員(平成 24 年 3 月～現在)
- 3) 岐阜人工関節フォーラム幹事(平成 26 年～現在)

寺林伸夫：

- 1) 東海関節鏡研究会幹事(～現在)

2) 学会開催

青木隆明：

- 1) 第 12 回岐阜リハビリテーション研究会(平成 26 年 2 月)
- 2) 第 13 回岐阜リハビリテーション研究会(平成 26 年 11 月)

3) 学術雑誌

清水克時：

- 1) Journal of Orthopaedic Science ; Deputy Editor(平成 24 年～現在)
- 2) Orthopaedics Today ; Editor(～現在)
- 3) Journal of Bone and Joint Surgery British Volume ; Reviewer(～現在)
- 4) Journal of Orthopaedic Surgery ; Editor(～現在)
- 5) 臨床整形外科 ; 編集委員(～現在)

秋山治彦：

- 1) 骨粗鬆症治療 ; 編集委員(平成 25 年 9 月～現在)
- 2) JBMR 日本語版 ; 編集委員(平成 25 年 9 月～現在)

大野貴敏：

- 1) Cancer ; Reviewer(～現在)
- 2) International Journal of Cancer Research ; Reviewer(～現在)
- 3) Molecular Cancer Therapeutics ; Reviewer(～現在)
- 4) Molecular Medicine ; Reviewer(～現在)

- 5) Carcinogenesis ; Reviewer(～現在)
- 6) J. Orthopaedic Science ; Editorial Board Member(平成 21 年 4 月～現在)
- 7) International J. Clinical Oncology ; Editorial Board Member(平成 24 年 3 月～現在)
- 8) Case Reports in Orthopaedics ; Editorial Board Member(平成 25 年 4 月～現在)

松本 和 :

- 1) Current Orthopaedic Practice ; Reviewer(～現在)
- 2) SPINE ; Reviewer(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

清水克時 :

- 1) OSTEOPOROSIS Face to Face Seminar in GIFU(平成 24 年 1 月, 岐阜, 座長)
- 2) 整形外科リバーサイドフォーラム(平成 24 年 1 月, 岐阜, 特別講演「痛みをとるとのことー慢性痛の薬物治療の方向性ー」座長)
- 3) 第 247 回南予一水会(平成 24 年 3 月, 特別講演「脊椎感染症に対する二期的手術法」演者)
- 4) 第 25 回日本軟骨代謝学会(平成 24 年 3 月, 愛知, ランチョンセミナー「運動器の慢性の痛みにおける課題と対応」座長)
- 5) 痛みと炎症 2012(平成 24 年 3 月, 岐阜, 特別講演「脊椎がんに対する新しい根治手術の開発」座長)
- 6) 岐阜県テリボン発売記念講演会(平成 24 年 3 月, 岐阜, 特別講演「成長期から考える骨粗鬆症予防と治療-PTH を中心に-」座長)
- 7) 第 2 回岐阜県慢性疼痛講演会(平成 24 年 4 月, 岐阜, 特別講演「運動器慢性疼痛に対する保存療法の実際」座長)
- 8) 第 85 回日本整形外科学会学術総会(平成 24 年 5 月, 京都, ランチョンセミナー22「日常診療に生かす頸椎症性脊髄症診療ガイドライン」座長)
- 9) 第 14 回岐阜大学整形外科教育研修会(平成 24 年 5 月, 岐阜, 特別講演「最近の脊柱側彎症の診断と治療」座長)
- 10) 岐阜骨粗鬆症研修会(平成 24 年 6 月, 岐阜, 特別講演「骨代謝動態を考慮した骨粗鬆症治療薬の選択～骨モデリングの安全域を保つために～」座長)
- 11) 第 22 回日韓合同整形外科シンポジウム(平成 24 年 6 月, 栃木, ランチョンセミナーB「Lumbar foraminal stenosis-clinical diagnosis and endoscopic treatment」座長)
- 12) 第 45 回東海地区整形外科教育研修会(平成 24 年 6 月, 愛知, 座長)
- 13) 運動器フォーラム in Gifu(平成 24 年 7 月, 岐阜, 特別講演「なぜ高い骨密度でも骨折するのか-タイプ別骨粗鬆症例に対するテーラーメイド治療の実際-」座長)
- 14) 第 45 回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会(平成 24 年 7 月, 東京, ランチョンセミナー7: 座長)
- 15) 熊本県臨床整形外科医会教育研修講演会(平成 24 年 7 月, 熊本, 特別講演「脊椎感染症に対する二期的手術法」演者)
- 16) 長良リバーサイドセミナー(平成 24 年 8 月, 特別講演「脊椎感染症に対する二期的手術法」演者)
- 17) 整形外科長良リバーサイドフォーラム(平成 24 年 9 月, 岐阜, 特別講演「日本人変股症に対する人工関節置換術～疼痛管理も含めて～」座長)
- 18) 岐阜腰痛フォーラム(平成 24 年 9 月, 岐阜, 特別講演「障害神経から見た腰部脊柱管狭窄症の病態」座長)
- 19) 薬剤起因性消化管傷害を考える会～日常診療の落とし穴～(平成 24 年 10 月, 岐阜, 特別講演「変形性膝関節症の基礎と臨床」座長)
- 20) 第 46 回東海地区整形外科教育研修会(平成 24 年 10 月, 愛知, 講演「中高年の後弯変形の手術適応-骨粗鬆症を含む-」座長)
- 21) 岐阜地区リウマチ教育研修会(平成 24 年 10 月, 岐阜, 座長)
- 22) 第 47 回日本脊髄障害医学会(平成 24 年 10 月, 静岡, イブニングセミナー「脊椎インストゥルメンテーションの過去・現在・未来」座長)
- 23) 第 27 回日本整形外科学会基礎学術集会(平成 24 年 10 月, 名古屋, 教育研修講演 I : 座長)
- 24) 岐阜地区医療連携セミナー(平成 24 年 11 月, 岐阜, 特別講演「連携パスは分析しなければ意味がない～地域全体の医療ケアを向上させた大腿骨頸部骨折連携パスの分析～」座長)

- 25) 第2回岐阜運動器疾患の疼痛を考える会(平成24年11月, 岐阜, 特別講演「慢性腰痛に対する各種新規鎮痛薬の位置付け」座長)
- 26) 岐阜トシリズマブ講演会(平成24年11月, 岐阜, 特別講演「リウマチの新しい動きとクリニックの役割-リウマチ診療におけるエコーの有用性-」座長)
- 27) 第23回日本小児整形外科学会学術集会(平成24年11月, 福岡, ランチョンセミナー「小児の膝関節: 診断と治療」座長)

秋山治彦:

- 1) 第8回岡山骨・関節セミナー(平成25年9月, 岡山, 特別講演「股関節外科治療における最新トピックス」演者)
- 2) 第3回レギュラトリーサイエンス学会学術大会(平成25年9月, 東京, シンポジウム: 高齢化社会を支える医療機器開発の最前線とレギュラトリーサイエンスの役割「人工関節登録の Up-to-date」演者)
- 3) 岐阜人工関節フォーラム(平成25年9月, 岐阜, 特別講演「股関節外科治療における最新トピックス」演者)
- 4) 第28回日本整形外科学会基礎学術集会(平成25年10月, パネルディスカッション3「セメント人工股関節置換術における基礎から臨床へのfeedback「白蓋側 IBG 法(KT plate)における力学的検討」演者)
- 5) 第3回岐阜県慢性疼痛講演会(平成25年11月, 特別講演「新しくなった腰痛診療ガイドライン概説と各種薬剤の使い分け」座長)
- 6) 岐阜地域医療連携セミナー(平成25年11月, 岐阜, 特別講演「大腿骨頸部骨折地域連携パスの分析結果から見える今後の課題」座長)
- 7) 第24回股関節研究セミナー(平成25年11月, 広島, 平成22年度研究助成金による研究成果報告「人工関節(股および膝)の耐用性と安全性評価のための全国的登録体制の確立」演者)
- 8) 第2回PTH骨粗鬆症治療研究会(平成25年12月, 長崎, 特別講演「PTHとPTHrP~骨軟骨代謝への作用~」演者)
- 9) 岐阜県医師会労災指定医部会秋季研修総会(平成25年12月, 美濃, 特別講演「変形性股関節症と人工股関節置換術」演者)
- 10) Oswteoporosis Forum 2014 in Gifu(平成26年1月, 岐阜, 特別講演「骨粗鬆症治療の発展~基礎から臨床まで~」座長)
- 11) 整形外科長良リバーサイドフォーラム(平成26年1月, 岐阜, 特別講演「関節疾患の疼痛制御-最小侵襲手術と疼痛管理-」座長)
- 12) 女性の骨粗鬆症を考える会(平成26年2月, 岐阜, 特別講演「多様化した骨粗鬆症治療薬の選択~合併症にも注目して~」座長)
- 13) The 8th Bone Research Seminar(平成26年2月, 東京, セッション1「骨芽細胞」座長)
- 14) 第44回日本人工関節学会(平成26年2月, 沖縄, 招待講演1「1st and 2nd generation HXLPE hip and knee implants: Lessons from retrieval analysis」 「The National Joint Registry of England and Wales. What does the Refistry do and what does it tell us?」座長)
- 15) 第44回日本人工関節学会(平成26年2月, 沖縄, 特別企画1 レジストリーの現状「人工関節登録調査の実施要領」 「How does the National Joint Registry assess outlier performance?」座長)
- 16) 第44回日本人工関節学会(平成26年2月, 沖縄, 特別企画1 レジストリーの現状「日本人工関節登録制度とその課題」演者)
- 17) 第44回日本人工関節学会(平成26年2月, 沖縄, 特別企画2「我が国で20年以上前より使用されてきた人工関節手術の成績とその分析」座長)
- 18) 第27回日本軟骨代謝学会(平成26年2月, 京都, 一般講演3「腱・椎間板・半月板」座長)
- 19) 骨・関節フォーラム in 岐阜 2014(平成26年3月, 岐阜, 特別講演「実臨床からみた骨粗鬆症と薬物治療の重要性」座長)
- 20) 岐阜県 Bone Conference(平成26年3月, 岐阜, 特別講演「骨粗鬆症性骨折の問題点」座長)
- 21) 第58回日本リウマチ学会総会・学術集会(平成26年4月, ワークショップ W19「骨軟骨と滑膜・変形性関節症」座長)
- 22) 第3回岐阜運動器疾患の疼痛を考える会(平成26年4月, 岐阜, 「慢性痛の捉え方と集学的アプローチの実際」座長)

- 23) 第16回岐阜大学整形外科教育研修会(平成26年5月, 特別講演「臨床応用をめざした低侵襲軟骨再生治療法の開発」座長)
- 24) 第87回日本整形外科学会学術総会(平成26年5月, ランチョンセミナー27「骨粗鬆症治療薬ラッシュの中での各薬剤のオーバービュー: 骨形成促進剤の役割」座長)
- 25) 第87回日本整形外科学会学術総会(平成26年5月, 招待講演23「Acetabular Component Positioning Using Anatomical Landmarks of the Acetabulum」 「Preoperative Planning for Complex Total Hip Arthroplasty Using Rapid Prototype Model」座長)
- 26) 整形外科リバーサイドフォーラム(平成26年6月, 岐阜, 特別講演「分子標的治療薬によるRA治療: その使い分けは?」座長)
- 27) Osteoporosis Seminar in Gifu(平成26年7月, 岐阜, 「骨粗鬆症治療薬ラッシュの中での各薬剤の最新レビュー〜正しく使い分けて骨折を予防するために〜」座長)
- 28) 第2回Gifu Joint Seminar(平成26年8月, 岐阜, 講演2「膝スポーツ外傷・障害の治療-最新の動向- ~急性期から保存期まで」座長)
- 29) 11th Meeting of Bone Biology Forum(平成26年8月, 裾野, Session III 「Mechanism of bone destruction in Rheumatoid Arthritis」 「Arid5b promotes chondrogenesis via the recruitment of histone demethylase Phf2 to Sox9-regulated chondrogenic gene promoters」座長)
- 30) 第4回岐阜県慢性疼痛講演会(平成26年9月, 岐阜, 特別講演「腰痛治療の最前線〜腰曲がりのサイエンス〜」座長)
- 31) 岐阜骨疾患・骨代謝研究会(平成26年9月, 岐阜, 特別講演「全身性リウマチ性疾患と骨粗鬆症について」 「ビスホスホネートによる骨粗鬆症治療のブラックボックス」座長)
- 32) 整形外科長良リバーサイドフォーラム(平成26年9月, 岐阜, 特別講演「スポーツ外傷・障害 -診療の実際-」座長)
- 33) ISTA2014 Kyoto(平成26年9月, Session 1 「Hip Robotics and Navigation」, Session 3 「Hip Revision I」座長)
- 34) 岐阜骨粗鬆症治療セミナー(平成26年10月, 岐阜, 特別講演「骨粗鬆症の分子機序」座長)
- 35) 第50回東海地区整形外科教育研修会(平成26年10月, 「慢性痛の神経メカニズム-基礎および臨床医学的観点から-」座長)
- 36) 岐阜地域医療連携セミナー(平成26年10月, 岐阜, 特別講演「名古屋八事地区における整形地域医療連携-地域連携パス作成からNPO設立へ-」座長)
- 37) 第13回岐阜リハビリテーション研究会(平成26年11月, 岐阜, 「阪神淡路大震災から19年」座長)
- 38) Osteoporosis Forum in Gifu(平成26年11月, 岐阜, 「骨粗鬆症治療に関する最新の話題」座長)
- 39) 動作解析研究会(平成26年11月, 岐阜, 講演1「股関節疾患患者における機器を用いた動作解析」講演2「股関節疾患の歩行動作を考える」座長)
- 40) Orthopedic Research Club(平成26年11月, 木更津, 「骨肉腫同種移植も出るマウスによる、新規治療開拓に向けた研究」 「Bcl6による骨代謝制御」座長)
- 41) 岐阜県骨粗鬆症病診連携を考える会(平成26年12月, 岐阜, 「病院勤務医が考える骨粗鬆症治療と病診連携」座長)

西本 裕:

- 1) 岐阜県認定上級指導者インテレクトラルトレーナー養成講習会(平成24年6月, 岐阜, 講演「アスリートの外傷・障害と対策」演者)
- 2) 羽島郡スポーツ少年団認定員養成講習会(平成24年6月, 平成25年6月, 平成26年5月, 岐阜, 講演「スポーツ指導者に必要な医学的知識」演者)
- 3) 岐阜県ドーピング防止研修会(平成25年8月, 平成26年6月, 平成26年8月, 岐阜, 講演「ドーピングを犯さないために」演者)
- 4) 第3回岐阜県保健担当者会議(平成26年12月, 岐阜, 「学校における運動器検診を実施するに当たって」演者)

大野貴敏:

- 1) 整形外科リバーサイドフォーラム(平成24年6月, 岐阜, 特別講演「骨粗鬆症診療の進歩と宇宙での骨量減少」座長)
- 2) 第32回日本整形外科学会骨軟部腫瘍特別研修会(平成24年10月, 名古屋, 特別講演「軟部腫瘍の

治療」演者)

- 3) 岐阜地域医療連携セミナー(平成24年11月, 岐阜, 特別講演「骨形成促進剤 フォルテオ導入のこつ」座長)
- 4) 第6回金沢骨軟部腫瘍セミナー(平成24年12月, 金沢, 特別講演「EWS融合遺伝子のバイオロジーに基づいた治療の展望」演者)
- 5) スポーツ整形 Up to Date・若年者～高齢者の健康向上を目指して(平成25年2月, 岐阜, 特別講演 I 「柔道におけるスポーツ傷害・障害」座長)
- 6) 愛知県整形外科医会教育研修講演会(平成25年4月, 名古屋, 「骨軟部腫瘍診療の要点と盲点」演者)
- 7) 痛みの臨床 in Gifu(平成25年5月, 岐阜, 「脊椎脊髄疾患に伴う痛みの治療－質的診断をふまえて－」座長)
- 8) 第9回本巣地域医療連携講演会(平成25年9月, 本巣, 「骨軟部腫瘍と骨粗鬆症治療について」演者)
- 9) 長良リバーサイドフォーラム(平成25年9月, 岐阜, 「矢状面アラインメント異常を伴う高齢者の腰痛に対する診断、薬物治療、手術治療」宮本 敬 座長)
- 10) 第28回日本整形外科学会基礎学術集会(平成25年10月, 千葉, ポスター「26 軟部腫瘍:病態・治療」座長)
- 11) 岐阜地域医療連携セミナー(平成25年11月, 岐阜, 「当院におけるフォルテオの導入状況」座長)
- 12) 第30回豊川市・新城市整形外科医会学術講演会(平成25年11月, 豊川, 「骨軟部腫瘍診療の要点と盲点」演者)
- 13) 第31回骨軟部腫瘍治療法検討会(平成26年6月, 名古屋, 座長)
- 14) 第47回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会(平成26年7月, 大阪, シンポジウム3「分子標的治療の時代へ:基礎編」座長)
- 15) 第12回東海小児整形外科研修会(平成26年12月, 名古屋, 「小児の骨軟部腫瘍」演者)

伊藤芳毅:

- 1) 第23回名古屋股関節セミナー(平成24年2月, 名古屋, 講演「カップサポータを用いた臼蓋再建術」演者)
- 2) 第24回名古屋股関節セミナー(平成24年6月, 名古屋, 講演「変形性股関節症に対する関節温存手術(総論)」演者)
- 3) 第28回中濃整形外科研修会(平成24年9月, 美濃加茂, 講演「形成不全性股関節症に対するTHA」演者)
- 4) 市民公開講座『運動器の10年・骨と関節の日 健康セミナー』(平成24年10月, 大垣, 講演「ロコモティブシンドロームの要因としての骨折と治療」演者)
- 5) 第26回岐阜リウマチ研究会(平成25年2月, 岐阜, 座長)
- 6) 第43回日本人工関節学会(平成25年2月, 京都, ポスター「セメントレスステム1」座長)
- 7) 岐阜HTOセミナー(平成25年4月, 岐阜, 座長)
- 8) 第86回日本整形外科学術総会(平成25年5月, 広島, ポスター「股関節7」座長)
- 9) Gifu Joint Seminar(平成25年7月, 岐阜, 座長)
- 10) 第11回東海小児整形外科研修会(平成25年12月, 名古屋, 座長)

青木隆明:

- 1) 日本リハビリテーション学会市民公開講座(平成24年4月, 名古屋市, 講演「日々の暮らしから見た認知症の早期発見と予防」座長)
- 2) 日本超音波医学会第34回中部地方会学術集会(平成25年9月, 岐阜, 特別講演「整形外科分野での超音波の利用」演者)
- 3) 第27回東濃整形外科懇話会(平成25年10月, 多治見, 特別講演「高齢者における日常診療の運動療法の評価」演者)
- 4) 第27回東濃整形外科懇話会(平成25年10月, 多治見, 特別講演「高齢者における日常診療の運動療法の評価」演者)
- 5) 彦根骨粗鬆症講演会(平成26年3月, 彦根, 特別講演「骨粗鬆症の薬物治療の考え方」演者)
- 6) 第51回日本リハビリテーション医学会学術集会(平成26年6月, 名古屋, 主題「関節リウマチ」座長)
- 7) 市民公開講座(平成26年6月, 岐阜, 特別講演「いつまでも歩こう 膝痛と腰痛に対する予防法」

座長)

- 8) 第44回糖尿病よろず相談会(平成26年10月, 岐阜, 「サルコペニアとリハビリテーション」座長)
- 9) 全日本鍼灸学会認定研修会(平成26年11月, 稲沢, 特別講演「鍼灸師が知っておきたいリハビリテーションの知識」演者)
- 10) 第9回日本リハビリテーション医学会専門医会学術集会(平成26年11月, 鹿児島, 教育講演「障害者スポーツ選手への帯同と対応」演者)

松本 和:

- 1) 第32回中濃整形外科研修会(平成26年9月, 美濃加茂, 講演「私の考える変形性膝関節症の治療」演者)
- 2) 市民公開講座(平成26年9月, 岐阜, 講演「膝の健康講座」演者)

寺林伸夫:

- 1) 第20回東海関節鏡研究会(平成26年1月, 名古屋, セッション, 座長)
- 2) 第36回東海スポーツ外傷研究会(平成26年2月, 名古屋, セッション, 座長)
- 3) 第2回 Gifu Joint Seminar(平成26年8月, 岐阜, 講演, 「肩関節外科におけるリバー型人工肩関節の導入と安全性について」座長)
- 4) 第5回岐阜整形外科エコセミナー(平成26年11月, 岐阜, 特別講演「整形外科外来診療に活かす超音波ガイド下インターベンション」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 伊藤 聡, 上木 論, 西本 裕, 毛利哲也, 青木隆明, 石樽康彦, 水元 淳, 川崎晴久: 第42期支部賞研究賞 2011 計測自動制御学会 脳卒中急性期患者を対象とした手指リハビリ支援システムの開発研究(平成24年1月)
- 2) 寺林伸夫, 渡邊恒夫, 松本 和, 瀧上伊織, 伊藤芳毅, 清水克時, 秋山治彦: 日本整形外科超音波学会優秀論文賞 変形性膝関節症に対する中膝動脈血流評価: 日本整形外科超音波学会会誌 2014; 25巻: 42-47(平成26年7月)

9. 社会活動

清水克時:

- 1) ツアーオブジャパン美濃ステージ大会参与(~現在)

秋山治彦:

- 1) 平成26年度科研費審査委員(平成25年9月~現在)
- 2) 公益財団法人日本股関節研究振興財団評議員(平成26年6月~現在)
- 3) 愛知骨軟部組織移植振興財団理事(平成26年6月~現在)
- 4) 独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(平成26年12月~現在)
- 5) 岐阜県社会福祉審議会委員(平成26年7月~現在)
- 6) 厚生労働省体内埋植型医療機器患者登録システムの在り方に関する検討会構成員(~現在)
- 7) 科学研究費委員会専門委員(平成26年12月~現在)

西本 裕:

- 1) 岐阜県社会保険診療報酬支払基金診療報酬請求審査委員会委員(~現在)
- 2) 岐阜県スポーツドクター協議会理事(~現在)
- 3) 岐阜県体育協会スポーツ医科学委員(~平成25年3月)
- 4) 岐阜県労働局労災保険診療協議会委員(~現在)
- 5) 岐阜県国民健康保険等柔道整復療養費審査委員会委員(平成24年4月~現在)
- 6) 岐阜県体育協会スポーツ医科学協議会委員(平成25年4月~現在)
- 7) 岐阜市松籟団地自主防災隊(平成25年4月~現在)
- 8) 岐阜県体育協会理事(平成25年6月~現在)
- 9) 岐阜県スポーツ推進審議会委員(平成26年10月~現在)
- 10) 平成24年度岐阜県高校総体ボクシング競技医務(平成24年5月20日)

- 11) 平成 24 年度国民体育大会ボクシング競技岐阜県最終選考会医務(平成 24 年 8 月 24 日)
- 12) 第 67 回国民体育大会ぎふ清流国体ボクシング競技会医事委員(平成 24 年 10 月 3-8 日)
- 13) 平成 24 年岐阜県高等学校新人体育大会空手道競技救護(平成 24 年 10 月 20 日)
- 14) 第 25 回いびがわマラソン救護係(平成 24 年 11 月 11 日)
- 15) 平成 25 年度岐阜県高校総体ボクシング競技医務(平成 24 年 5 月 17 日)
- 16) 第 28 回長良川国際トライアスロン大会救護(平成 25 年 7 月 28 日)
- 17) 平成 25 年度国民体育大会ボクシング競技岐阜県最終選考会医務(平成 24 年 8 月 15 日)
- 18) 第 6 回岐阜県民スポーツ大会空手道競技救護(平成 25 年 9 月 15 日)
- 19) 第 68 回国民体育大会スポーツ祭東京 2013 岐阜県選手団総務(平成 25 年 10 月 2-4 日)
- 20) 平成 25 年岐阜県高等学校新人体育大会空手道競技救護(平成 25 年 10 月 13 日)
- 21) 第 26 回いびがわマラソン救護係(平成 25 年 11 月 10 日)
- 22) 2014 ジャパンパラ陸上競技大会医務(平成 26 年 9 月 5-7 日)
- 23) 第 7 回岐阜県民スポーツ大会空手道競技救護(平成 26 年 9 月 21 日)
- 24) 第 69 回国民体育大会長崎がんばらば国体岐阜県選手団総務(平成 26 年 10 月)

大野貴敏：

- 1) 愛知骨軟部組織移植振興財団評議員(平成 24 年 4 月～現在)
- 2) 日本整形外科学会骨軟部腫瘍委員(平成 25 年 7 月～現在)

伊藤芳毅：

- 1) 岐阜県社会福祉審議会委員(～現在)
- 2) 岐阜市社会福祉審議会委員(～現在)
- 3) 愛知骨軟部組織移植振興財団評議員(～現在)

青木隆明：

- 1) ドーピングコントロールオフィサー(～現在)
- 2) 日本障害者水泳連盟顧問医師(～現在)
- 3) アジアパラリンピック医学委員(～現在)

寺林伸夫：

- 1) 超音波ハンズオンセミナー2014(岐阜会場，平成 26 年 10 月 18 日，インストラクター)

10. 報告書

- 1) 大野貴敏：高悪性度骨軟部腫瘍に対する標準治療確立のための研究：厚生労働科学研究費補助金 がん臨床研究事業平成 23 年度 総括・分担研究報告書：91-93(平成 24 年 3 月)
- 2) 大野貴敏：高悪性度骨軟部腫瘍に対する標準治療確立のための研究：厚生労働科学研究費補助金 がん臨床研究事業平成 24 年度 総括・分担研究報告書：74-76(平成 25 年 3 月)
- 3) 大野貴敏：高悪性度骨軟部腫瘍に対する標準治療確立のための研究：厚生労働科学研究費補助金 がん臨床研究事業平成 25 年度 総括・分担研究報告書：75-76(平成 26 年 3 月)

11. 報道

- 1) 青木隆明 他：ACSIVE 装具の開発：朝日新聞(2014 年 7 月 4 日)

12. 自己評価：

評価

新入医局員が減少傾向にある中，各研究班の努力により，学会活動，論文発表などが概ね目標に達したと思われるが，より質の高い成果をあげるべく努力を続けたい。臨床業務においては，難易度の高い手術症例が増加しており，大学としての社会貢献を適切に果たしていると評価する。

現状の問題点及びその対応策

増加する患者数に対応するため，臨床業務の負担が増している一方で，決められた手術枠しか与えられないため，手術待機期間が長くなっている。また，大学院生の数が減少し，基礎研究の activity の低下が

懸念される。より効率的な研究・診療体制を確立する必要がある。

今後の展望

益々整形外科医のニーズが高まる中で、徐々にではあるが新入医局員が増加しつつあり、今後の研究・診療体制の充実が期待される。関節研究分野では、変形性関節症の病態の解析を進め、新規治療法の開発を目指す。脊椎研究分野においては、椎間板変性のメカニズムを追究する。腫瘍研究分野では、多発性外骨腫の病態の解明や、分子標的治療の多施設共同研究をスタートさせたい。

(7) 皮膚病態学分野

1. 研究の概要

1) 難治性皮膚疾患に対するアフレルシス治療の奏効機序に関する研究

皮膚科稀少難治性疾患の一つである好中球性皮膚症の新しい治療として、アフレルシス治療、特に好中球・単球吸着療法の臨床的研究およびその奏効機序を研究している。この治療の作用機序を白血球のサイトカイン産生能および接着因子発現レベルで検討し、欧州研究皮膚科学会、日本研究皮膚科学会、日本乾癬学会で報告した。また、欧文誌 (*The Apher Dial* および *Acta Derm Venereol*) でも報告している。今後さらに臨床的および研究的観点から発展させたい。本研究は、清島真理子教授、藤澤智美助教、守屋智枝医員、水谷陽子大学院生を中心に行っている。

2) アトピー性皮膚炎における角層バリア機能に関する研究

スフィンゴ脂質、とくにセラミド (Cer) は表皮角質層において皮膚バリア機能を担うことが知られている。岐阜薬科大学との共同研究により、アトピー性皮膚炎の角質層のバリア機能を解析し、アトピー性皮膚炎 (AD) および尋常性乾癬の患者角層 Cer では短鎖脂肪酸 Cer が相対的に増加していること、培養ケラチノサイトでインターフェロン (IFN) γ が脂肪酸伸長酵素の発現を抑制することを見出し、すでに欧文誌 (*J Invest Dermatol*) で報告している。この研究を基にして、さらにアトピー性皮膚炎モデルマウスにおける角層セラミドおよびセラミド生成酵素の解析を行っている。本研究は加納宏行准教授、坂野喜子非常勤講師により行われている。

3) 皮膚悪性腫瘍における micro RNA の発現およびその制御機構の解明

岐阜大学連合創薬医療情報研究科との共同研究で悪性黒色腫をはじめとする皮膚悪性腫瘍における各種 microRNA の発現プロファイルを検討している。この分野はすでにイヌなどの動物においてはがん抑制性 microRNA を投与することによる腫瘍抑制効果が発表されており、今後の治療に発展できると考えている。本研究は、周 円講師、松山かなこ大学院生が行っている。

4) 皮膚筋炎における特異的自己抗体の抗体価と臨床病型および重症度との相関に関する研究

皮膚筋炎では抗アミノアシル tRNA 合成酵素抗体、抗 Mi-2 抗体、抗 TIF1 γ 抗体、抗 MDA5 抗体など種々の自己抗体が検出され、自己抗体特異的な臨床像を呈することが近年明らかになってきた。その結果は、実際の臨床において診断および治療の選択に役立っている。さらに抗体価の経時的変化を測定することにより、抗体価と重症度との相関を検討している。この成果は適切な治療計画作成につながると期待できる。本研究は清島真理子教授、加納宏行准教授、周 円講師により行われている。

2. 名簿

教授：	清島真理子	Mariko Seishima
准教授：	加納宏行	Hiroyuki Kanoh
講師：	周 円	En Shu
助教：	藤澤智美	Tomomi Fujisawa
助教：	佐藤三佳	Mika Sato
助教：	加藤元一	Genichi Kato
助教：	徳住正隆	Masataka Tokuzumi
医員：	守屋智枝	Chie Moriya
医員：	安達由祐子	Yuko Adachi
医員：	伊藤 満	Mitsuru Ito
医員(パート)：	奥村陽子	Yoko Okumura
医員(パート)：	佐々木真喜子	Makiko Sasaki
医員(パート)：	水谷陽子	Yoko Mizutani
医員(パート)：	松山かなこ	Kanako Matsuyama
医員(パート)：	木村奈苗	Nanae Kimura

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 清島真理子. 天疱瘡, 類天疱瘡, 疱疹状皮膚炎—私はこう治療している—: 山口 徹, 北村光夫, 福井次矢総編集. 今日の治療指針 2012年版, 東京: 医学書院; 2012年: 1012-1014.
- 2) 清島真理子. 皮膚科領域のアフレルシス—臨床皮膚科学「治療」—: 宮地良樹編. WHAT'S NEW in 皮膚科学 2012-2013, 東京: メディカルレビュー社; 2012年: 164-165.
- 3) 清島真理子. 伝染性膿痂疹 (とびひ): 大関武彦, 古川 漸, 横田俊一郎, 水口 雅総編集. 今日の小児

治療指針 第15版, 東京: 医学書院; 2012年: 790-791.

- 4) 清島真理子. 小児によくみられる皮膚疾患—プライマリケアのための鑑別診断のポイント—: 塩原哲夫, 宮地良樹, 渡辺晋一, 佐藤伸一編集. 今日の皮膚疾患治療指針 第4版, 東京: 医学書院; 2012年: 8-14.
- 5) 清島真理子. 妊婦に多い皮膚疾患—プライマリケアのための鑑別診断のポイント—: 塩原哲夫, 宮地良樹, 渡辺晋一, 佐藤伸一編集. 今日の皮膚疾患治療指針 第4版, 東京: 医学書院; 2012年: 16-18.
- 6) 清島真理子. アミロイドーシス—代謝異常症—: 塩原哲夫, 宮地良樹, 渡辺晋一, 佐藤伸一編集. 今日の皮膚疾患治療指針 第4版, 東京: 医学書院; 2012年: 499-502.
- 7) 清島真理子. 膠様稗粒腫—代謝異常症—: 塩原哲夫, 宮地良樹, 渡辺晋一, 佐藤伸一編集. 今日の皮膚疾患治療指針 第4版, 東京: 医学書院; 2012年: 502.
- 8) 清島真理子. 妊婦でみられる皮膚徴候にはどんなものがある?—総論—: 宮地良樹編集. 女性の皮膚トラブルFAQ, 東京: 診断と治療社; 2012年: 8-15.
- 9) 清島真理子. 生理用品による皮膚トラブルとは?—女性に特有の皮膚疾患—: 宮地良樹編集. 女性の皮膚トラブルFAQ, 東京: 診断と治療社; 2012年: 89-91.
- 10) 清島真理子. エトレチナート内服療法—治療—: 古江増隆編集, 大槻マミ太郎専門編集. 診る・わかる・治す皮膚科臨床アセット10—ここまでわかった乾癬の病態と治療—, 東京: 中山書店; 2012年: 234-236.
- 11) 清島真理子. 皮膚は外敵から体を守る: 長野 功編集. 巧みな体のしくみ—ヒトの生存を脅かす要因と生き残り戦略— 改訂第2版, 名古屋: 三恵社; 2012年: 19-28.
- 12) 清島真理子. 尋常性乾癬・膿疱性乾癬—自己炎症性疾患—: 近藤直実, 平家俊男編集. 自己炎症性疾患・自然免疫不全症とその近縁疾患, 東京: 診断と治療社; 2012年: 96-99.
- 13) 清島真理子. 皮膚癢痒症: 山口 徹, 北原光夫, 福井次矢総編集. 今日の治療指針 2013年版, 東京: 医学書院; 2013年: 1035-1036.
- 14) 清島真理子. 皮疹から探る呼吸器, 消化器疾患(肝・胆・膵を含む): 日本皮膚科学会認定皮膚科専門医講習会テキスト(平成25年度第112回日本皮膚科学会総会教育講習会—必須コース), 東京: 日本皮膚科学会刊; 2013年: 1-5.
- 15) 清島真理子. Langerhans 細胞組織球症—腫瘍性疾患 D その他—: 瀧川雅浩, 渡辺晋一編集. 皮膚疾患最新の治療 2013-2014, 東京: 南江堂; 2013年: 229.
- 16) 清島真理子. 新生児の皮膚疾患—全身と皮膚—: 橋本 隆, 岩月啓氏, 照井 正編集. 標準皮膚科学 第10版, 東京: 医学書院; 2013年: 560-562.
- 17) 清島真理子. アナフィラクトイド紫斑 誤診?—本当はヒトパルボウイルス B19 感染症: 宮地良樹編集. 誤診されている皮膚疾患—皮膚科+フォトクリニックシリーズ—, 東京: メディカルレビュー社; 2013年: 260-263.
- 18) 清島真理子. 皮膚疾患「薬疹・中毒疹」: 永井良三, 大田 健総編集. 今日の治療と看護 改定第3版, 東京: 南江堂; 2013年: 1086-1089.
- 19) 清島真理子. 表皮母斑と考えたとき忘れてはならない症候群—中枢神経系・骨格系異常から疑う表皮母斑症候群—: 古江増隆総編集, 土田哲也専門編集. 診る・わかる・治す皮膚科臨床アセット20—日常診療において忘れてはならない皮膚科症候群—, 東京: 中山書店; 2013年: 128-131.
- 20) 藤澤智美, 清島真理子. 顆粒球吸着療法—最近のトピックス—: 五十嵐敦之ゲスト編集, 宮地良樹, 清水宏常任編集. 1冊でわかる最新皮膚科治療—皮膚科サブスペシャリティ—シリーズ, 東京: 文光堂; 2013年: 279-281.
- 21) 清島真理子. 帯状疱疹—私はこう治療している—: 福井次矢, 高木 誠, 小室一成総編集. 今日の治療指針 2014年版, 東京: 医学書院; 2014年: 1116-1117.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 奥村陽子, 清島真理子. 皮膚細菌・ウイルス感染症—伝えておきたい外用療法のコツ: 匠に学ぶ皮膚科外療法—古きを生かす, 最新を使う—, Monthly Book Derma15周年記念書籍 2012年: 89-94.
- 2) 清島真理子. 白血球除去療法(Leukocytapheresis:LCAP), 日本アフェレシス学会雑誌 2013年; 32号: 130-134.
- 3) 清島真理子. 紫斑—見逃したくない皮膚症状—全身疾患を診断するための考え方—, Modern Physician 2013年; 33号: 943-946.
- 4) 清島真理子. BCG 肉芽腫—忘れるな! 皮膚結核: 真正結核・結核疹・BCG 副反応を中心に—, Visual Dermatology 2013年; 12巻: 952-953.
- 5) 加納宏行. 皮膚症状から診断する全身性血管炎・血管障害, 日本臨床皮膚科医会雑誌 2013年; 30巻: 504-508.
- 6) 周 円, 清島真理子. ウイルス性発疹症のスキルアップ「診断方法および最近の知見」—皮膚診療スキルアップ30ポイント, Monthly Book Derma 2013年; 203号: 95-99.
- 7) 藤澤智美, 小関道夫, 寺本貴英, 清島真理子. 川崎病とBCG—忘れるな! 皮膚結核: 真正結核・結核疹・BCG 副反応を中心に—, Visual Dermatology 2013年; 12巻: 956-957.
- 8) 水谷陽子, 清島真理子. Bowen 病の病理組織検査: 有棘細胞癌(日光角化症・Bowen 病)—皮膚悪性腫瘍: 基礎と臨床の最新研究動向—, 日本臨床 2013年; 71巻(増刊4): 553-557.

- 9) 清島真理子. 膿疱, 潰瘍: 皮疹の種類とその発症機序—内科医のための皮疹の診かたのロジック, *Medicina* 2014年; 51巻: 826–830.
- 10) 清島真理子. 女性医師のキャリアパスにおける皮膚科教育—マイオピニオン, *臨床皮膚科* 2014年; 68巻: 104–105.
- 11) 清島真理子. 皮膚疾患の外用薬処方—私の処方, *Modern Physician* 2014年; 34巻: 430.
- 12) 清島真理子. 紫斑をみたとき: 皮膚科診断学—ベテラン直伝 一生役立つ皮膚科の基本, *Visual Dermatology* 2014年; 13巻: 412–415.
- 13) 清島真理子. 感染症診断の進め方—編集企画にあたって, *Monthly Book Derma* 2014年; 215号: 前付1.
- 14) 清島真理子. 皮膚良性腫瘍を対象として **QI** を考える—皮膚科の「医療の質」を考える—**QI** を知っていますか?, *Visual Dermatology* 2014年; 13巻: 1148.
- 15) 加納宏行. いわゆる下腿腫瘍の **QI**—皮膚科の「医療の質」を考える—**QI** を知っていますか?, *Visual Dermatology* 2014年; 13巻: 1202.
- 16) 太和田知里, 清島真理子. ヘルペスウイルス感染症診断の進め方—感染症診断の進め方, *Monthly Book Derma* 2014年; 215号: 52–58.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 石井則久, 四津里英, 浅野裕子, 圓純一郎, 清島真理子, 常深祐一郎, 中永和枝, 濱田利久, 星野仁彦, 渡邊徹心. ブルーリ潰瘍, *日本臨床皮膚科医会雑誌* 2012年; 29巻: 376–383.
- 2) 奥村陽子, 大楠清文, 宮崎 崇, 太田浩敏, 永井美貴, 清島真理子. 犬咬傷後に生じた *Mycobacterium chelonae* 皮膚感染症の1例, *皮膚科の臨床* 2012年; 54巻: 365–368.
- 3) 奥村陽子, 清島真理子. 染毛剤による接触皮膚炎, *皮膚と美容* 2012年; 44巻: 8–12.
- 4) 藤澤智美, 村瀬香奈, 太和田知里, 清島真理子, 石井文人, 濱田尚宏, 橋本 隆. 単純型表皮水疱症の孤発例, *日本小児皮膚科学会雑誌* 2012年; 31巻: 113–116.
- 5) 渋谷佳直, 押谷陽子, 齋藤真理子, 加納宏行, 清島真理子. 眼瞼部基底細胞癌の3例, *日本皮膚外科学会雑誌* 2012年; 16巻: 64–65.
- 6) 小川陽子, 野村昌代, 前田 学, 岩田 仁, 清島真理子. 脂腺母斑からの発生が疑われた基底細胞癌と有棘細胞癌の併発例, *皮膚科の臨床* 2012年; 54巻: 895–900.
- 7) 齋藤真理子, 藤澤智美, 佐藤三佳, 清島真理子, 濱田尚宏, 橋本 隆. 肛囲に局限した Hailey-Hailey 病, *皮膚科の臨床* 2012年; 54巻: 718–720.
- 8) 村瀬香奈, 棚橋華奈, 加納宏行, 清島真理子. 血清 TARC/CCL17 値が臨床症状と相関した non-episodic angioedema with eosinophilia, *皮膚科の臨床* 2012年; 54巻: 855–858.
- 9) 奥村優香, 岩田浩明, 青山裕美, 市來善郎, 清島真理子. 治療前後の血清中 TNF- α 濃度を測定した multicentric reticulohistiocytosis の1例, *皮膚科の臨床* 2012年; 54巻: 553–558.
- 10) 山本真由美, 渋谷佳直, 加納宏行, 清島真理子, 荒木麻里, 和泉智子, 福本 瞳, 片野晴隆. メルケル細胞ポリオーマウイルスが検出されたメルケル細胞癌の3例, *皮膚科の臨床* 2012年; 54巻: 1152–1157.
- 11) 奥村陽子, 加納宏行, 大西秀典, 清島真理子. BCG 接種後に生じた丘疹状結核疹の1小児例, *日本小児皮膚科学会雑誌* 2013年; 32巻: 61–64.
- 12) 周 円, 加納宏行, 清島真理子, 濱口儒人, 藤本 学. 抗 Th/To 抗体が検出された筋炎合併汎発型モルフェア, *皮膚病診療* 2013年; 35巻: 945–948.
- 13) 藤澤智美, 藤田博己, 角坂照貴, 安藤秀二, 小笠原由美子, 高野 愛, 川端寛樹, 清島真理子. *Rickettsia africae* による旅行者感染症, *皮膚病診療* 2013年; 35巻: 673–676.
- 14) 渋谷佳直, 加納宏行, 清島真理子, 野中健一, 早崎 容. 薄筋皮弁にて骨盤底再建を行った再発外陰癌の1例, *日本皮膚外科学会誌* 2013年; 17巻: 110–111.
- 15) 山中新也, 渋谷佳直, 加納宏行, 清島真理子, 高橋智子. ステロイド製剤の変更と血漿交換が有効であった難治性水疱性類天疱瘡, *皮膚科の臨床* 2013年; 55巻: 837–840.
- 16) 太和田知里, 藤澤智美, 大西秀典, 鹿野由紀子, 清島真理子. 経過中に症状が変化した小児発症サルコイドーシス, *皮膚病診療* 2013年; 35巻: 51–54.
- 17) 太和田知里, 加納宏行, 大瀧博文, 米玉利準, 宮崎 崇, 清島真理子. *Trichophyton tonsurans* によるケルスス禿瘡の学童例, *日本小児皮膚科学会雑誌* 2013年; 32巻: 65–68.
- 18) 徳住正隆, 前田 学, 岩田 仁, 清島真理子. 表皮囊腫様の外観を呈した基底細胞癌, *皮膚科の臨床* 2013年; 55巻: 124–125.
- 19) 徳住正隆, 中屋敷典久, 中嶋 貴, 白井 修, 中野晃久, 清島真理子. 透析シャント部に生じた Pseudo-Kaposi's sarcoma, *皮膚科の臨床* 2013年; 55巻: 217–221.
- 20) 浅野由祐子, 周 円, 立山 尚, 望月寿人, 桑山直人, 山口竜三. 頭部皮下腫瘍を契機に発見された S 状結腸癌の1例, *皮膚科の臨床* 2013年; 55巻: 1052–1055.
- 21) 大橋優文, 押谷陽子, 齋藤真理子, 加納宏行, 清島真理子. ヒドロクロロチアジド配合剤による光線過敏型薬疹の2例, *皮膚病診療* 2013年; 35巻: 1161–1164.
- 22) 守屋智枝, 藤澤智美, 加納宏行, 清島真理子. カルボシステインを主剤とした薬剤による固定薬疹の1例, *皮膚科の臨床* 2013年; 55巻: 133–136.

- 23) 守屋智枝, 藤澤智美, 渋谷佳直, 中村信彦, 廣瀬善信, 清島真理子. 腸管アミロイドーシスを併発した膿疱性乾癬の1例, 皮膚科の臨床 2013年; 55巻: 1139-1143.
- 24) 山本真由美, 加納宏行, 清島真理子, 濱田尚宏, 橋本 隆. エトレチナートが有効であった Hailey-Hailey 病, 皮膚科の臨床 2013年; 55巻: 845-847.
- 25) 山本真由美, 清島真理子. メルケル細胞癌とメルケル細胞ポリオーマウイルス, 臨床皮膚科 2013年; 67巻: 52-56.
- 26) 望月舞子, 安部真由, 平光裕子, 清島真理子. 母親からの感染が考えられた尖圭コンジローマの2幼児例, 日本小児皮膚科学会雑誌 2013年; 32巻: 51-54.
- 27) 浅野由祐子, 周 円, 高橋利通, 立山 尚, 戸田興介, 大島久明. 呼吸管理を要した中毒性表皮壊死症の1例, 皮膚科の臨床 2014年; 56巻: 413-417.
- 28) 安部真由, 奥村陽子, 長野 功, 赤尾信明, 清島真理子. 剛棘顎口虫による creeping disease の1例, 皮膚科の臨床 2014年; 56巻: 269-274.
- 29) 安部真由, 押谷陽子, 清島真理子, 中村 博, 原 武志, 後藤尚絵, 竹内 保. 壊疽性膿皮症様の臨床像を呈した原発性皮膚未分化大細胞リンパ腫の1例, 皮膚科の臨床 2014年; 56巻: 951-954.
- 30) 望月舞子, 清島真理子, 齊郷智恵美, 廣瀬善信, 大野貴敏. 下腹部に発症した明細胞肉腫の1例, 皮膚科の臨床 2014年; 56巻: 19-21.
- 31) 望月舞子, 安部真由, 守屋智枝, 大橋優文, 加納宏行, 清島真理子, 中村政志, 矢上晶子. 加水分解小麦による即時型アレルギー症例の診断法の検討, 臨床皮膚科 2014年; 68巻: 294-297.
- 32) 秦 舞子, 周 円, 藤澤智美, 加納宏行, 清島真理子, 濱口儒人. 生物学的製剤・副作用: TNF- α 阻害薬投与中に発症した overlap 症候群, 皮膚病診療 2014年; 36巻: 421-424.

原著 (欧文)

- 1) Fujimoto M, Hamaguchi Y, Kaji K, Matsushita T, Ichimura Y, Kodera M, Ishiguro N, Ueda-Hayakawa I, Asano Y, Ogawa F, Fujikawa K, Miyagi T, Mabuchi E, Hirose K, Akimoto N, Hatta N, Tsutsui K, Higashi A, Igarashi A, Seishima M, Hasegawa M, Takehara K. Myositis-specific anti-155/140 autoantibodies target transcriptional intermediary factor 1 family proteins. *Arthritis Rheum.* 2012;64:513-522. IF 7.871
- 2) Naiki M, Mizuno S, Yamada K, Yamada Y, Kimura R, Oshiro M, Okamoto N, Makita Y, Seishima M, Wakamatsu N. MBTPS2 mutation causes BRESEK/BRESHECK syndrome. *Am J Med Genet A.* 2012;158A:97-102. IF 2.048
- 3) Hori T, Ohnishi H, Teramoto T, Tsubouchi K, Naiki T, Hirose Y, Ohara O, Seishima M, Kaneko H, Fukao H, Kondo N. Autosomal-dominant chronic mucocutaneous candidiasis with *STAT7*-mutation can be complicated with chronic active hepatitis and hypothyroidism. *J Clin Immunol.* 2012;32:1213-1220. IF 2.654
- 4) Iwata H, Okumura Y, Seishima M, Aoyama Y. Overexpression of monocyte chemoattractant protein-1 (MCP-1) in the overlying epidermis of multicentric reticulohistiocytosis lesions: a case report. *Int J Dermatol.* 2012;51:492-494. IF 1.227
- 5) Ohnishi H, Teramoto T, Iwata H, Kato Z, Kimura T, Kubota K, Nishikomori R, Kaneko H, Seishima M, Kondo N. Characterization of NLRP3 variants in Japanese cryopyrin-associated periodic syndrome patients. *J Clin Immunol.* 2012;32:221-229. IF 2.654
- 6) Shu E, Ichiki Y, Moriya C, Iwata H, Kitajima Y, Seishima M. Three siblings with systemic lupus erythematosus. *J Dermatol.* 2012;39:164-167. IF 2.354
- 7) Fujisawa T, Kadosaka T, Fujita H, Ando S, Takano A, Ogasawara Y, Kawabata H, Seishima M. *Rickettsia africae* infection in a Japanese traveller with many tick bites. *Acta Derm-Venereol.* 2012;92:443-444. IF 4.244
- 8) Fujisawa T, Shu E, Ikeda T, Seishima M. Primary localized cutaneous nodular amyloidosis that appeared in a patient with severe atopic dermatitis. *J Dermatol.* 2012;39:312-314. IF 2.354
- 9) Fujisawa T, Murase K, Kanoh H, Takemura M, Ohnishi H, Seishima M. Adsorptive depletion of CD14(+) CD16(+) proinflammatory monocyte phenotype in patients with generalized pustular psoriasis: clinical efficacy and effects on cytokines. *Ther Apher Dial.* 2012;16:436-444. IF 1.532
- 10) Sato M, Ishitsuka A, Shibuya Y, Kanoh H, Koga H, Hashimoto T, Seishima M. Time-course of the change in the titre of antibodies against type VII collagen in a patient with epidermolysis bullosa acquisita. *Acta Derm-Venereol.* 2012;92:693-694. IF 4.244
- 11) Murase K, Ito H, Kanoh H, Sudo K, Iwamoto I, Morishita R, Soubeyran P, Seishima M, Nagata K. Cell biological characterization of a multidomain adaptor protein, ArgBP2, in epithelial NMuMg cells, and identification of a novel short isoform. *Med Mol Morphol.* 2012;45:22-28. IF 1.070
- 12) Ohashi M, Moriya C, Kanoh H, Kinomura Y, Terakura Y, Kasahara S, Hamaguchi Y, Fujimoto M, Seishima M. Adult-onset Still's disease with dermatomyositis-like eruption. *J Dermatol.* 2012;39:958-960. IF 2.354
- 13) Ikeda S, Takahashi H, Suga Y, Eto H, Etoh T, Okuma K, Takahashi K, Kanbara T, Seishima M, Morita A, Imai Y, Kanekura T. Therapeutic depletion of myeloid lineage leukocytes in patients with generalized pustular psoriasis indicates a major role for neutrophils in the immunopathogenesis of psoriasis. *J Am Acad Dermatol.* 2013;68:609-617. IF 5.004

- 14) Kubota K, Ohnishi H, Teramoto T, Matsui E, Murase K, Kanoh H, Kato Z, Kaneko H, Seishima M, Kondo N. In vitro analysis of the functional effects of an NLRP3 G809S variant with the co-existence of MEFV haplotype variants in atypical autoinflammatory syndrome. *J Clin Immunol.* 2013;33:325-334. IF 2.654
- 15) Moriyama T, Yanagihara M, Yano E, Kimura G, Seishima M, Tani H, Kanno T, Nakamura-Hirota T, Hashimoto K, Tatefuji T, Ogawa T, Kawamura Y. Hypoallergenicity and immunological characterization of the enzyme-treated royal jelly from *Apis mellifera*. *Biosci Biotech Bioch.* 2013;77:789-795. IF 1.206
- 16) Kawahara S, Otsuji Y, Nakamura M, Murakami M, Murate T, Matsunaga T, Kanoh H, Seishima M, Banno Y, Hara A. Sphingosine kinase 1 plays a role in the upregulation of CD44 expression through extracellular signal-regulated kinase signaling in human colon cancer cells. *Anti-Cancer Drug.* 2013;24:473-483. IF 1.891
- 17) Igawa S, Kishibe M, Honma M, Murakami M, Mizuno Y, Suga Y, Seishima M, Ohguchi Y, Akiyama M, Hirose K, Ishida-Yamamoto A, Iizuka H. Aberrant distribution patterns of corneodesmosomal components of tape-stripped corneocytes in atopic dermatitis and related skin conditions (ichthyosis vulgaris, Netherton syndrome and peeling skin syndrome type B). *J Dermatol Sci.* 2013;72:54-60. IF 3.335
- 18) Hamaguchi Y, Fujimoto M, Matsushita T, Kaji K, Komura K, Hasegawa M, Kodera M, Muroi E, Fujikawa K, Seishima M, Yamada H, Yamada R, Sato S, Takehara K, Kuwana M. Common and distinct clinical features in adult patients with anti-aminoacyl-tRNA synthetase antibodies: heterogeneity within the syndrome. *PLoS One.* 2013;8:e60442. IF 3.534
- 19) Takahashi Y, Isogai Z, Mizokami F, Furuta K, Nemoto T, Kanoh H, Yoneda M. Location-dependent depth and undermining formation of pressure ulcers. *J Tissue Viability.* 2013;22:63-67. IF 1.812
- 20) Fujisawa T, Moriya C, Shibuya Y, Kanoh H, Seishima M. Combination therapy of infliximab and granulocyte/monocyte adsorption apheresis for refractory pustular psoriasis with psoriatic arthritis. *Acta Derm-Venereol.* 2013;93:364-365. IF 4.244
- 21) Fujisawa T, Okumura Y, Shibuya Y, Kato G, Seishima M. Squamous cell carcinoma possibly originating from a granuloma following vaccination with Bacille Calmette-Guérin. *Eur J Dermatol.* 2013;23:706-707. IF 1.953
- 22) Mizutani Y, Ito H, Iwamoto I, Morishita R, Kanoh H, Seishima M, Nagata K. Possible role of a septin, SEPT1, in spreading in squamous cell carcinoma DJM-1 cells. *Biol Chem.* 2013;394:281-290. IF 3.123
- 23) Mochizuki M, Fujine E, Tawada C, Kanoh H, Seishima M. Pemphigoid nodularis possibly induced by etanercept. *J Dermatol.* 2013;40:578-579. IF 2.354
- 24) Kaneko S, Seishima M, Asano Y, Chinuki Y, Morita E. *Mycobacterium marinum* infection in a case of psoriasis treated with antitumor necrosis factor α antibody detected by QuantiFERON[®]-TB test. *Int J Dermatol.* 2014;53:e187-189. IF 1.227
- 25) Kanno Y, Kawashita E, Kokado A, Kuretake H, Ikeda K, Okada K, Seishima M, Ueshima S, Matsuo O, Matsuno H. α 2AP mediated myofibroblast formation and the development of renal fibrosis in unilateral ureteral obstruction. *Sci Rep.* 2014;4:5967. IF 5.078
- 26) Shu E, Kanoh H, Seishima M. Scleroderma renal crisis following pericardial effusion in a Japanese female. *J Dermatol.* 2014;41:824-826. IF 2.354
- 27) Okumura Y, Yamauchi A, Nagano I, Itoh M, Hagiwara K, Takahashi K, Uezato H, Maeda M, Seishima M. A case of mucocutaneous leishmaniasis diagnosed by serology. *J Dermatol.* 2014;41:739-742. IF 2.354
- 28) Fujisawa T, Fukao T, Shimomura Y, Seishima M. A novel *TRPS1* mutation in a family with tricho-rhino-phalangeal syndrome type 1. *J Dermatol.* 2014;41:514-517. IF 2.354
- 29) Fujisawa T, Tawada C, Mizutani Y, Doi T, Yoshida S, Ogura S, Seishima M. Efficacy of granulocyte and monocyte adsorption apheresis for treatment of palmoplantar pustulosis. *Ther Apher Dial.* 2014;18:238-243. IF 1.532
- 30) Tawada C, Oshitani Y, Kimura M, Seishima M. Successful treatment of anal and perianal condyloma acuminata with imiquimod. *Acta Derm Venereol.* 2014;94:118-119. IF 4.244
- 31) Tawada C, Kanoh H, Nakamura M, Mizutani Y, Fujisawa T, Banno Y, Seishima M. Interferon- γ decreases ceramides with long-chain fatty acids: possible involvement in atopic dermatitis and psoriasis. *J Invest Dermatol.* 2014;134:712-718. IF 6.372
- 32) Mizutani Y, Iwamoto I, Kanoh H, Seishima M, Nagata K. Expression of drebrin, an actin binding protein, in basal cell carcinoma, trichoblastoma and trichoepithelioma. *Histol Histopathol.* 2014;29:757-766. IF 2.236
- 33) Kawase K, Oshitani Y, Mizutani Y, Shu E, Fujine E, Seishima M. Inflammatory epidermolysis bullosa acquisita effectively treated with minocycline. *Acta Derm Venereol.* 2014;94:615-616. IF 4.244
- 34) Ohashi M, Moriya C, Tanahashi K, Nakano H, Sawamura D, Seishima M. A new EDA gene mutation in a family of X-linked hypohidrotic ectodermal dysplasia. *J Dermatol Sci.* 2014;74:175-177. IF 3.335
- 35) Ishituka A, Fujine E, Mizutani Y, Tawada C, Kanoh H, Banno Y, Seishima M. FTY720 and cisplatin synergistically induce the death of cisplatin-resistant melanoma cells through the downregulation of the P13K pathway and the decrease in epidermal growth factor receptor expression. *Int J Mol Med.* 2014;34:1169-1174. IF 1.880

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究者代表：大沢匡毅，研究分担者：清島真理子；平成 23 年度岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究プロジェクト：新規アトピー性皮膚炎治療法開発のための共同研究；平成 23 年度；2,000 千円
- 2) 研究者代表：清島真理子；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：悪性黒色腫における生理活性脂質の抗がん剤耐性調節機序の解明；平成 24-26 年度；5,330 千円(3,640：1,040：650 千円)
- 3) 研究者代表：藤澤智美；平成 24 年度岐阜大学大学院医学系研究科長・医学部長裁量経費：難治性皮膚疾患患者に対する顆粒球吸着療法的作用機序の解明；平成 24 年度；1,000 千円
- 4) 研究者代表：藤澤智美；平成 24 年度岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同プロジェクト：好中球性皮膚症の顆粒球吸着療法的作用機序と奏効過程の病態を解明する；平成 24 年度；1,000 千円
- 5) 研究者代表：加納宏行；平成 25 年度岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同プロジェクト：炎症性皮膚疾患における新しい角層バリア機構の解明とその制御；平成 25 年度；1,550 千円
- 6) 研究者代表：藤澤智美；文部科学省研究費補助金若手研究(B)：好中球性皮膚症に対する顆粒球吸着療法的作用機序の解明；平成 25-26 年度；4,030 千円(2,860：1,170 千円)
- 7) 研究者代表：藤澤智美；平成 25 年度岐阜大学大学院医学系研究科長・医学部長裁量経費：抗 TNF α 阻害薬および顆粒球吸着療法における膿疱性乾癬の治療反応性予測因子の検討；平成 25 年度；1,000 千円
- 8) 研究者代表：加納宏行；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：炎症性皮膚疾患における新しい角層バリア機構の解明とその制御；平成 26-28 年度；4,940 千円(1,820：1,820：1,300 千円)
- 9) 研究者代表：藤澤智美；平成 26 年度岐阜大学大学院医学系研究科長・医学部長裁量経費：乾癬における血管内皮増殖因子産生機序の解明；平成 26 年度；1,300 千円

2) 受託研究

- 1) 清島真理子：(特定使用成績調査)トラクリア錠 62.5mg(長期)全例調査；平成 22-26 年度；315,000 円：アクテリオン
- 2) 清島真理子：(副作用詳細報告)「セレコックス錠」有害事象詳細調査；平成 24-25 年度；21,000 円：アステラス製薬
- 3) 清島真理子：(副作用詳細報告)「セファメジン α 点滴用キット 1g」有害事象詳細調査；平成 24-25 年度；21,000 円：アステラス製薬
- 4) 清島真理子：(第 3 相臨床試験)中等症から重症の日本人乾癬患者を対象とした LY2439821 の有効性及び安全性を評価する多施設共同非盲検長期投与試験；平成 24-27 年度；1,732,500 円：日本イーライリリー
- 5) 清島真理子：(使用成績調査)ベセルナクリーム 5%(日光角化症)使用成績調査；平成 24-27 年度；63,000 円：持田製薬
- 6) 清島真理子：(有害事象詳細報告)「エンブレル」有害事象詳細報告；平成 24-25 年度；42,000 円：武田薬品工業
- 7) 清島真理子：(使用成績調査)アダカラム使用成績調査(膿疱性乾癬)(全例調査)；平成 24-28 年度；315,000 円：JIMRO
- 8) 清島真理子：(特定使用成績調査)プロトピック軟膏 0.03%小児用；平成 23-25 年度；126,000 円：マルホ
- 9) 清島真理子：(第 3 相臨床試験)TA-650；平成 24-26 年度；888,300 円：田辺三菱製薬
- 10) 清島真理子：(第 2 相臨床試験)KHK4827(二重盲検比較試験)；平成 24-26 年度；2,457,000 円：協和発酵キリン
- 11) 清島真理子：(第 3 相臨床試験)KHK4827(継続長期投与試験)；平成 24-27 年度；2,419,200 円：協和発酵キリン
- 12) 清島真理子：(使用成績調査)献血グロベニン γ I 静注用；平成 24-27 年度；42,000 円：日本製薬
- 13) 清島真理子：(有害事象詳細調査)ネオーラルカプセル；平成 25 年度；21,000 円：ノバルティスファーマ
- 14) 清島真理子：(特定使用成績調査)ステラーラ皮下注 45mg シリンジ；平成 23-27 年度；259,200 円：ヤンセンファーマ
- 15) 清島真理子：(第 3 相臨床試験)中等症から重症の日本人乾癬患者を対象とした LY2439821 の有効性及び安全性を評価する多施設共同非盲検長期投与試験；平成 24-27 年度；486,000 円：日本イーラ

イリリー

- 16) 清島真理子：(使用成績調査)サムチレール内服懸濁液 15%；平成 25-29 年度；147,000 円：グラクソ・スミスクライン
- 17) 清島真理子：(第 3 相臨床試験)MK-3222；平成 25-31 年度；1,768,200 円：MSD
- 18) 清島真理子：(第 3 相臨床試験)KHK4827(継続長期投与試験)；平成 25-28 年度；888,300 円：協和発酵キリン
- 19) 清島真理子：(使用成績調査)エムラクリーム；平成 26-28 年度；216,000 円：佐藤製薬
- 20) 清島真理子：(特定使用成績調査)プログラフカプセル；平成 26-30 年度；64,800 円：アステラス製薬
- 21) 清島真理子：(使用成績調査)オブジーボ点滴静注(全例調査)；平成 26-30 年度；648,000 円：ヤンセンファーマ

3) 共同研究

- 1) 清島真理子，加納宏行：皮膚筋炎関連自己抗体検出試薬の臨床的有用性の確認；平成 23-28 年度；442,000 円；株式会社医学生物学研究所

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

清島真理子：

- 1) 日本医真菌学会評議員(～現在)
- 2) 日本研究皮膚科学会評議員(～現在)
- 3) 日本皮膚科学会中部支部評議員(～現在)
- 4) 日本乾癬学会評議員(～現在)
- 5) 日本皮膚悪性腫瘍学会評議員(～現在)
- 6) 日本皮膚科学会専門医制度資格認定・指導専門医制度委員会委員(～現在)
- 7) 日本皮膚科学会東海地方会会長(～平成 24 年 3 月)
- 8) 日本皮膚脈管・膠原病研究会世話人(～現在)
- 9) 日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会評議員(～現在)
- 10) 日本アフェレンス学会評議員(～現在)
- 11) 日本褥瘡学会中部支部評議員(～現在)
- 12) 日本皮膚病理組織学会理事(平成 25 年～現在)
- 13) 日本小児皮膚科学会評議員(平成 26 年～現在)
- 14) 日本皮膚科学会血管炎・血管障害ガイドライン委員会改訂委員(平成 26 年～現在)

加納宏行：

- 1) 日本褥瘡学会評議員(～現在)
- 2) 日本皮膚科学会東海地方会評議員(～平成 25 年 7 月)
- 3) 日本褥瘡学会教育委員会ガイドライン策定作業部会ガイドライン改訂委員(～現在)
- 4) 第 16 回日本褥瘡学会学術総会運営委員(～平成 26 年 8 月)
- 5) 日本皮膚科学会創傷・熱傷ガイドライン委員会改訂委員(平成 26 年 8 月～)

周 円：

- 1) 日本皮膚科学会東海地方会評議員(平成 25 年 8 月～)

2) 学会開催

清島真理子：

- 1) 東海地区(愛知・岐阜・三重)合同皮膚科医会(平成 24 年 2 月，名古屋)
- 2) 第 261 回日本皮膚科学会東海地方会(平成 24 年 9 月，名古屋)
- 3) 2013 年日本褥瘡学会公認 第 1 回中部地方会教育セミナー(平成 25 年 3 月，岐阜)
- 4) 第 9 回日本褥瘡学会中部地方会学術集会(平成 25 年 3 月，岐阜)

- 5) 第 270 回日本皮膚科学会東海地方会(平成 26 年 12 月, 名古屋)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

清島真理子:

- 1) 山梨県皮膚科医会学術講演会(平成 24 年 2 月, 甲府, 特別講演「乾癬治療最前線～しなやかな治療戦略～」演者)
- 2) 第 51 回大阪皮膚科医会・学術講演会(平成 24 年 2 月, 大阪, 特別講演「皮膚細菌感染症－困った時のために」演者)
- 3) 日本女医会総会学術講演会(平成 24 年 5 月, 岐阜, 特別講演「難知性皮膚疾患の治療最前線－しなやかな治療戦略－」演者)
- 4) 第 179 回日本皮膚科学会信州地方会(平成 24 年 7 月, 松本, 特別講演「自己炎症性症候群－診断のポイント」演者)
- 5) 第 76 回日本皮膚科学会東部支部学術大会(平成 24 年 9 月, 札幌, ランチョンセミナー「伴存疾患を見据えた乾癬治療」座長)
- 6) 日本臨床皮膚科医会東海北陸ブロック学術集会(平成 24 年 10 月, 名古屋, 特別講演「乾癬治療最前線－最近のトピックス」演者)
- 7) 第 63 回日本皮膚科学会中部支部学術大会(平成 24 年 10 月, 大阪, スイーツセミナー「アトピー性皮膚炎の治療ストラテジー」座長)
- 8) 第 100 回兵庫県皮膚科医会学術講演会(平成 25 年 3 月, 神戸, 招請講演「最近のウイルス発疹症－ヒトパルボウイルス B19 感染症を中心に－」演者)
- 9) 第 9 回日本褥瘡学会中部地方会学術集会(平成 25 年 3 月, 岐阜, 特別講演「高齢者医療の中での褥瘡チーム医療」座長)
- 10) 第 29 回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会(平成 25 年 4 月, 名古屋, ランチョンセミナー「皮膚科医がおこなう今日からのスキンケア指導」座長)
- 11) 第 112 回日本皮膚科学会総会(平成 25 年 6 月, 横浜, 教育講習会「皮疹から探る呼吸器, 消化器疾患(肝・胆・膵を含む)」演者)
- 12) 第 112 回日本皮膚科学会総会(平成 25 年 6 月, 横浜, 教育講習会「皮疹から探る呼吸器, 消化器疾患(肝・胆・膵を含む)」座長)
- 13) 第 28 回日本乾癬学会(平成 25 年 9 月, 東京, ランチョンセミナー「膿疱性乾癬に対する GMA/GCAP 治療の実際: 膿疱性乾癬に対する GMA/GCAP 治療の幕開け」演者)
- 14) The 17th Annual Meeting of the Korean Society for Psoriasis(平成 25 年 9 月, Seoul(Korea), 特別講演「Optimal management of psoriasis: Are there any biomarkers/predictors of treatment efficacy and adverse effects?」演者)
- 15) 第 64 回日本皮膚科学会中部支部学術大会(平成 25 年 11 月, 名古屋, ランチョンセミナー「乾癬治療と患者 QOL－「早く、きれいに、親切に、適切な医療費で治す」ことができているのか: 乾癬の治療効果をどのように評価するか」演者)
- 16) 第 64 回日本皮膚科学会中部支部学術大会(平成 25 年 11 月, 名古屋, Quality Indicator 講演「Quality Indicator を考える－皮膚良性腫瘍を対象として: 皮膚良性腫瘍」演者)
- 17) 第 64 回日本皮膚科学会中部支部学会(平成 25 年 11 月, 名古屋, ランチョンセミナー「全身性炎症疾患としての乾癬の積極的治療の必要性と治療の工夫」座長)
- 18) 第 30 回日本臨床皮膚科医会・臨床学術大会(平成 26 年 4 月, 横浜, セミナー「皮膚科医が知っている」と役に立つ情報」座長)
- 19) 第 113 回日本皮膚科学会総会(平成 26 年 5 月, 京都, ランチョンセミナー「日光角化症の診断と治療」座長)
- 20) 第 113 回日本皮膚科学会総会(平成 26 年 5 月, 京都, 教育講演「急性発疹症－最近の話題」座長)
- 21) 第 64 回日本皮膚科学会高知地方会(平成 26 年 7 月, 高知, 特別講演「乾癬治療最前線－しなやかな治療戦略」演者)
- 22) 第 29 回日本乾癬学会(平成 26 年 9 月, 高知, シンポジウム「皮膚科における顆粒球・単球吸着療法演者)
- 23) 第 35 回日本アフェレシス学会(平成 26 年 9 月, 東京, シンポジウム「アフェレシス－皮膚科領域で

のさらなる臨床応用をめざして」演者)

- 24) 第 35 回日本アフェレシス学会(平成 26 年 9 月, 東京, ランチョンセミナー「アフェレシスによる物質除去の原理～凝固因子第 13 因子に与える影響」座長)
- 25) 第 35 回日本アフェレシス学会(平成 26 年 9 月, 東京, シンポジウム「皮膚疾患に対するアフェレシスー現在と未来ー」座長)
- 26) 第 65 回日本皮膚科学会中部支部学術大会(平成 26 年 10 月, 大阪, 教育講演「足の皮膚疾患と患者指導: フットケアの懇切丁寧な指導」座長)
- 27) 第 44 回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会(平成 26 年 11 月, 仙台, スイーツセミナー「アダカラム治療の最適化にむけた症例の検討」演者)

加納宏行:

- 1) 東海地区(愛知・岐阜・三重)合同皮膚科医会(平成 24 年 2 月, 名古屋, 特別講演「アトピー性皮膚炎: 最近の話題」演者)
- 2) 第 24 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 24 年 5 月, 大阪, ミニシンポジウム「特異な皮疹を呈したインスリン製剤中の硫酸プロタミンによる薬疹」演者)
- 3) 第 9 回日本褥瘡学会中部地方会学術集会(平成 25 年 3 月, 岐阜, ランチョンセミナー「知らなきや損する! 褥瘡診療ストラテジーーあなたに伝えたい真実、そして都市伝説ー」座長)
- 4) 第 29 回日本臨床皮膚科医会(平成 25 年 4 月, 名古屋, シンポジウム「皮膚症状から診断する全身性血管炎・血管障害」演者)
- 5) 第 64 回日本皮膚科学会中部支部学会(平成 25 年 11 月, 名古屋, Quality Indicator 講演「いわゆる下腿潰瘍の QI: 下腿潰瘍・循環障害」演者)
- 6) 第 16 回日本褥瘡学会(平成 26 年 8 月, 名古屋, 教育講演「高齢者の皮膚特性を考慮した褥瘡診療」演者)
- 7) 第 16 回日本褥瘡学会(平成 26 年 8 月, 名古屋, シンポジウム「高齢者医療と褥瘡」座長)
- 8) 平成 26 年度日本皮膚科学会東海地方会(平成 26 年 12 月, 名古屋, 生涯教育講演「皮膚科医として身に付けておきたい褥瘡の考え方」演者)

周 円:

- 1) 日本褥瘡中部地方会(平成 25 年 3 月, 岐阜, 教育セミナー「DESIGN-R と褥瘡治癒過程」演者)

藤澤智美:

- 1) 第 20 回ダニと疾患のインターフェースに関するセミナー(平成 24 年 7 月, 新野, ワークショップ「*Rickettsia africae*による旅行者感染」演者)
- 2) Psoriasis 2013-4th Congress of the Psoriasis International Network(平成 25 年 7 月, Paris (France), Workshop「Maintenance therapy with granulocyte/monocyte adsorption apheresis for generalized pustular psoriasis: How would I treat it?」演者)
- 3) 第 34 回日本アフェレシス学会(平成 25 年 11 月, 軽井沢, シンポジウム「顆粒球単球吸着療法による膿疱性乾癬の維持療法: 最近の皮膚科アフェレシスの話題」演者)
- 4) 第 64 回日本皮膚科学会中部支部学会(平成 25 年 11 月, 名古屋, スイーツセミナー「顆粒球単球吸着療法のエビデンス: 膿疱性乾癬に対するアダカラムの最適化を求めて」演者)
- 5) 第 35 回日本アフェレシス学会(平成 26 年 9 月, 東京, シンポジウム「皮膚疾患における好中球・単球吸着療法ー掌蹠膿疱症を中心として」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 清島真理子: 日本女医会吉岡弥生賞(医学に貢献された部門)
- 2) 藤澤智美: 第 3 回 2013 年度「鳥居・帝國乾癬研究奨励賞」国外学会発表部門

9. 社会活動

清島真理子:

- 1) 岐阜県医師会男女参画委員会副委員長(～現在)
- 2) 厚生労働省医師国家試験試験委員(～現在)
- 3) 日本専門医制評価・認定機構(研修施設訪問調査)サーベイヤ(～平成 25 年 10 月)
- 4) 岐阜県公害審査委員会委員(平成 24 年 11 月～現在)

- 5) ぎふ輝く女性ネットワーク【パネルディスカッション】働く女性応援グループ「仕事と家庭の両立支援」(平成24年7月13日)
- 6) あいち乾癬患者友の会 第10回総会・学習懇談会 相談医(平成24年7月22日)
- 7) 平成24年度難病ふれあい教室(平成24年10月20日)
- 8) 平成25年度難病なんでも医療相談テレフォン・メールサービス(平成25年5月24日)
- 9) 平成25年度難病医療講演会(平成25年10月18日)
- 10) 平成26年度難病ふれあい教室(平成26年10月19日)
- 11) 国・地方連携会議ネットワークを活用した男女共同参画推進事業(平成26年12月21日)
- 12) 日本女性科学者の会理事(平成26年7月～)

加納宏行：

- 1) 岐阜県特定疾患等対策協議会員(～現在)

奥村陽子：

- 1) 日本臨床皮膚科医会・岐阜皮膚科医会「皮膚の日」市民講座(平成24年11月10日)

周 円：

- 1) 日本臨床皮膚科医会・岐阜皮膚科医会「皮膚の日」市民講座(平成25年11月10日)

藤澤智美：

- 1) ぎふ中日文化センター2014年開講講座：ドクターが教える肌の常識・非常識，女性の肌トラブル編(第1回平成26年5月29日・第2回平成26年6月5日・第3回平成26年7月3日)
- 2) ぎふ中日文化センター2014年開講講座：ドクターが教える肌の常識・非常識，秋冬編(第1回平成26年10月2日・第2回平成26年11月6日・第3回平成26年12月4日)
- 3) 市民公開講座「乾癬の治療」(平成26年11月30日)

佐藤三佳：

- 1) 日本臨床皮膚科医会・岐阜皮膚科医会「皮膚の日」市民講座(平成26年11月9日)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 加納宏行：たかが水虫？治療する意識大切「教えてホームドクター」：岐阜新聞(2012年5月21日)
- 2) 加納宏行：蕁麻疹とアレルギー「教えてホームドクター」：岐阜新聞(2012年7月30日)
- 3) 加納宏行：褥瘡(寝だこ・床ずれ)「教えてホームドクター」：岐阜新聞(2012年10月1日)
- 4) 加納宏行：皮膚バリアと免疫、深い関係「研究室から一大学はいま」：岐阜新聞(2012年10月23日)
- 5) 清島真理子：皮膚の病気ー正しい知識持って、最適な治療選んで：読売新聞(2013年1月6日)
- 6) 加納宏行：レイノー現象と強皮症「教えてホームドクター」：岐阜新聞(2013年2月11日)
- 7) 奥村陽子：口唇ヘルペス「教えてホームドクター」：岐阜新聞(2013年4月8日)
- 8) 清島真理子：水虫とはどんな病気なのか、教えて下さい：TBS ラジオ健康番組(2013年6月10日)
- 9) 清島真理子：水虫にかかりやすいのは、どんな人でしょうか：TBS ラジオ健康番組(2013年6月11日)
- 10) 清島真理子：水虫と診断されたら、どんな治療をするのでしょうか：TBS ラジオ健康番組(2013年6月12日)
- 11) 清島真理子：水虫に症状が似ている、別の病気があるそうですね：TBS ラジオ健康番組(2013年6月13日)
- 12) 清島真理子：水虫の予防について、教えて下さい：TBS ラジオ健康番組(2013年6月14日)
- 13) 奥村陽子：伝染性軟属腫(みずいぼ)教えてホームドクター」：岐阜新聞(2013年6月17日)
- 14) 奥村陽子：紫外線対策について(みのひだ情報局)：NHK 岐阜放送局(2013年7月26日)
- 15) 奥村陽子：異所性蒙古斑「教えてホームドクター」：岐阜新聞(2013年8月19日)
- 16) 奥村陽子：水疱性類天疱瘡「教えてホームドクター」：岐阜新聞(2013年10月21日)
- 17) 奥村陽子：イチゴ状血管腫「教えてホームドクター」：岐阜新聞(2013年12月30日)
- 18) 清島真理子：3月は要注意？しもやけの予防について：CBC ラジオ(2014年2月18日)

- 19) 周 円：糖尿病足病変の早期発見「教えてホームドクター」：岐阜新聞(2014年2月24日)
- 20) 周 円：薬の副作用、薬疹「教えてホームドクター」：岐阜新聞(2014年4月28日)
- 21) 周 円：足のうっ滞「教えてホームドクター」：岐阜新聞(2014年6月30日)
- 22) 清島真理子：知っていますか？「かんせん」のことー新たな薬剤登場で進歩する乾癬治療(2014年8月20日)
- 23) 佐藤三佳：<ほくろのがん>悪性黒色腫「教えてホームドクター」：岐阜新聞(2014年9月8日)
- 24) 佐藤三佳：ダニが引き起こす<疥癬>「教えてホームドクター」：岐阜新聞(2014年9月8日)
- 25) 清島真理子：乾癬：患者さんを悩ます慢性の皮膚疾患「患者さんの Quality of Life の向上を目指して」：朝日新聞(2014年9月26日)
- 26) 藤澤智美：膿疱症治療に好中球を研究「研究室からー大学はいま」：岐阜新聞(2014年11月11日)

12. 自己評価

評価

平成24年から26年の3年間に3件の科学研究費を獲得した。英文原著は国際英文誌に35報掲載され、平成18-20年の20報、平成21-23年の29報と比較して増加している。研究費獲得、学会活動、論文作成、社会活動、報道面とも一定の成果を得ることができたと評価している。

現状の問題点及びその対応策

診療および学生教育に費やす時間が長く、研究者が研究活動に全力投球できる十分な研究環境が整えられていないため、研究の質的および量的低下が問題である。研究活動の効率化および研究補助員の確保により研究成果をあげるよう努力したい。

今後の展望

「難治性皮膚疾患に対するアフェレシス治療の奏効機序に関する研究」および「皮膚筋炎特異的自己抗体の抗体価と臨床型および重症度との相関に関する研究」はすでに研究結果が集積しつつあり、今度は解析を行い、成果を発表したい。一方、「アトピー性皮膚炎における角層バリア機能に関する研究」および「皮膚悪性腫瘍における microRNA の研究」は臨床応用への第一歩となる基礎的研究であり、長期的な見通しに立って十分な研究成果を積み重ねたい。

(8) 泌尿器科学分野

1. 研究の概要

- 1) 尿路生殖器腫瘍の治療と予後に関する基礎的・臨床的研究
 - ①前立腺癌の抗癌剤耐性機序の基礎的研究
ホルモン療法耐性前立腺癌に対する抗癌剤治療の確立を目指し、培養細胞及び実験動物を用いた抗癌剤耐性に関連した遺伝子の同定と、その発現阻止についての基礎研究を行っている。
 - ②前立腺癌治療に関する臨床的研究
日本における前立腺癌に対するヨウ素 125 密封小線源永久挿入療法に関する前向きコホート研究および限局性前立腺癌に対するホルモン療法の有効性に関する観察研究を行っている。
 - ③転移性腎細胞癌に対する 1 次インターロイキン 2+インターフェロン α 併用/2 次アキシチニブ逐次療法群と 1 次スニチニブ/2 次アキシチニブ逐次療法群の有効性・安全性に関するランダム化比較試験
 - ④筋層浸潤性膀胱癌に対する膀胱全摘除術 術前補助化学療法の有用性及び安全性に関する研究
- 2) 尿路感染症の基礎的・臨床的研究
 - ①大規模調査による起因菌の臨床的研究
関連施設を含めて毎年複雑性尿路感染症の起因菌を収集し、また、臨床背景や臨床病状との関連を研究している。さらに 4 年毎に女子急性単純性膀胱炎の総合調査を継続中である。
 - ②薬剤耐性菌の出現状況、耐性機序の解明
臨床例より得られた起因菌を用いて、突然変異などの遺伝子レベルでの薬剤耐性機序を研究している。また、抗菌剤の使用と遺伝子変異との関連も研究している。
 - ③尿路感染症に対する薬物療法についての臨床的研究
関連病院と協力し尿路感染症に対する各種抗菌剤の有効性について検討を行っている。
 - ④三学会合同抗菌薬感受性サーベイランスへの参加
日本化学療法学会、日本感染症学会および日本臨床微生物学会が合同で行っている三学会合同抗菌薬感受性サーベイランスに参加し、複雑性尿路感染症分離株の収集を行っている。
- 3) 男子尿道炎の基礎的・臨床的研究
 - ①分子生物学的手法を用いた起炎菌の検出法の開発
現在までに解明されていない非淋菌性尿道炎の起炎菌の同定と、その診断法の開発、特に核酸増幅を用いた手法を研究している。
 - ②薬剤耐性菌淋菌の疫学研究
関連施設を含めて年次的に臨床分離株を収集し、それらの抗菌剤感受性を測定し、年次的な変移を研究している。
 - ③薬剤耐性 *Mycoplasma genitalium* の薬剤耐性機序の解明
非淋菌性尿道炎起炎菌として注目させている *M. genitalium* のマクロライド系およびキノロン系薬剤の耐性機序を遺伝子レベルで研究している。
 - ④男子尿道炎に対する薬物療法についての臨床的研究
関連病院と協力し男子尿道炎に対する各種抗菌剤の有効性について検討を行っている。
 - ⑤三学会合同抗菌薬感受性サーベイランスへの参加
日本化学療法学会、日本感染症学会および日本臨床微生物学会が合同で行っている三学会合同抗菌薬感受性サーベイランスに参加している。
- 4) 腎移植における臨床的研究
 - ①免疫抑制剤の適正化
拒絶反応を防ぎ、日和見感染症を引き起こさない適正な免疫抑制剤の投与方法に関する臨床的研究を行っている。
 - ②移植腎の病理学的研究
移植腎に対して定期的な生検を施行して、移植腎機能に及ぼす潜在的な拒絶反応、ウイルス感染を病理像から研究している。さらに、病理組織像から移植腎の長期生着を目指したテーラーメイドな免疫抑制療法を行っている。
- 5) 鏡視下手術手技の開発研究
腹腔鏡下副腎摘出術、腹腔鏡下腎摘出術は、すでに標準術式となりつつある本手技を安全かつ確実に行うための手技および本術式を応用した新たな術式の開発、ならびに器具、器材の開発研究を行っている。
- 6) 排尿障害分野における臨床的研究

男性前立腺肥大症患者の下部尿路症状に対する薬剤の効果について、前立腺肥大症に伴う過活動膀胱症状、前立腺肥大症患者に合併する夜間頻尿、前立腺肥大症に対する治療抵抗性の不定愁訴に対する薬物療法を自覚的、他覚的に評価し、最適な投与方法を検討している。

2. 名簿

教授：	出口 隆	Takashi Deguchi
准教授：	仲野正博	Masahiro Nakano
講師：	横井繁明	Shigeaki Yokoi
講師：	安田 満	Mitsuru Yasuda
助教：	土屋朋大	Tomohiro Tsuchiya
助教：	清家健作	Kensaku Seike
助教：	水谷晃輔	Kosuke Mizutani
医員：	菊地美奈	Mina Kikuchi
医員：	堀江憲吾	Kengo Horie
医員：	高木公暁	Kimiaki Takagi
医員：	亀山紘司	Koji Kameyama
医員：	河田 啓	Kei Kawada
医員：	高井 学	Manabu Takai

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 出口 隆. 膀胱炎 Cystitis : 山口 徹, 北原光夫, 福井次矢総編集. TODAY' S THERAPY 2012 今日の治療指針, 東京: 医学書院; 2012年: 958-959.
- 2) 出口 隆監修. 病気がみえる 8巻 腎・泌尿器, 東京: メディックメディア; 2012年: 244-257.
- 3) 出口 隆. 性感染症(尿道炎): 山口 徹, 北原光夫, 福井次矢総編集. TODAY' S THERAPY 2013 今日の治療指針, 東京: 医学書院; 2013年: 990-991.
- 4) 出口 隆. 107G53: 第107回医師国家試験問題解説, 東京: メディックメディア; 2013年: 433-434.
- 5) 出口 隆. 107I37: 第107回医師国家試験問題解説, 東京: メディックメディア; 2013年: 523.
- 6) 出口 隆. 包茎, 亀頭包皮炎: 福井次矢, 高木 誠, 小室一成総編集. TODAY' S THERAPY 2014 今日の治療指針, 東京: 医学書院; 2014年: 1058-1059.
- 7) 出口 隆. 性感染症: 榎野博史, 秋澤忠男, 山縣邦弘編集. 腎疾患・透析 最新の治療 2014-2016, 東京: 南江堂; 2014年: 233-237.
- 8) 出口 隆. 第4章 尿路性器感染症: 抗菌薬使用の基礎 I. 抗菌薬の基礎知識: 2014年 卒後教育テキスト, 東京: 日本泌尿器科学会; 2014年: 85-90.
- 9) 出口 隆. 108A46: 第108回医師国家試験問題解説, 東京: メディックメディア; 2014年: 67-69.
- 10) 安田 満. 第4章 尿路性器感染症: 抗菌薬使用の基礎 I. 抗菌薬の基礎知識: 2014年 卒後教育テキスト, 東京: 日本泌尿器科学会; 2014年: 91-99.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 出口 隆. 【腎臓症群(第2版)下-その他の腎臓疾患を含めて-】 各種病態にみられる腎障害 感染症 気腫性腎盂腎炎, 日本臨床 2012年; 別冊 新領域別症候群シリーズ No. 18: 669-672.
- 2) 出口 隆. 性感染症 診断・治療ガイドライン 2011 を読んで 非クラミジア性非淋菌性尿道炎について, 泌尿器外科 2012年; 25巻: 1815-1820.
- 3) 出口 隆. 【高齢者における感染症】 高齢者に多くみられる尿路感染症の特徴と疫学, Geriatric Medicine 2012年; 11巻: 1279-1284.
- 4) 出口 隆. 【泌尿器科の変遷-過去から未来へ-】 感染症 男子尿道炎の新たな起炎菌と新たな耐性菌, 泌尿器外科 2012年; 25巻特別号: 590-592.
- 5) 出口 隆. 診断法と治療法の進歩がもたらした落とし穴 性感染症の場合, SRL 感染症フォーラム講演集 2012年; 16巻: 18-23.
- 6) 横井繁明. 泌尿器科領域におけるトラブルシューティング(第28回) T3a 右腎癌を腹腔鏡下に摘出する場合のトラブルシューティング, 泌尿器外科 2012年; 25巻: 369-371.
- 7) 安田 満. 抗菌薬の選択と使い方 尿路・泌尿器・婦人科領域 非淋菌性尿道炎における抗菌薬の選択と使い方, 化学療法の領域 2012年; 28巻: 318-324.
- 8) 安田 満. 【Q&A で学ぶ尿路性器感染症 基礎知識と最近の話題】 男子性器感染症の基礎知識, 泌尿器ケア 2012年; 17巻: 182-184.
- 9) 安田 満. 【Q&A で学ぶ尿路性器感染症 基礎知識と最近の話題】 泌尿器科領域の性感染症の基礎知識,

泌尿器ケア 2012年;17巻:185-188.

- 10) 安田 満.【性感染症 update-検査・診断・治療の最新知見-】 性感染症の検査・診断・治療の実際 マイコプラズマおよびウレアプラズマ感染症, Medical Technology 2012年;40巻:276-280.
- 11) 安田 満.【泌尿器科ベッドサイドマニュアル】 ベッドサイドトラブル対処法 院内感染, 臨床泌尿器科 2012年;66巻:165-169.
- 12) 安田 満. Pros & Cons 膀胱炎治療薬の投与回数について, 感染症道場 2012年;1巻:34-37.
- 13) 安田 満.【腎疾患治療マニュアル 2012-13】 泌尿器科疾患 前立腺炎・精巣炎・精巣上体炎, 腎と透析 2012年;72巻増刊:489-491.
- 14) 安田 満.【古くて新しい前立腺炎の臨床】 慢性前立腺炎/慢性骨盤疼痛症候群に対する治療 α 1 交感神経遮断薬, 臨床泌尿器科 2012年;66巻:853-857.
- 15) 出口 隆.【感染症症候群(第2版)[下]-症候群から感染性単一疾患までを含めて-】 性感染症 性感染症(概論), 日本臨床 2013年;別冊 感染症症候群(下):455-460.
- 16) 出口 隆.【泌尿器疾患の病態と診断・治療(III)】 尿路・性器感染症, 医学と薬学 2013年;70巻:455-462.
- 17) 出口 隆.【妊婦の実地内科日常診療 内科外来での診かた・薬の使いかた・留意すること】 セミナー 妊婦の内科疾患の実地診療のすすめかた ポイントと留意点 尿路感染症, Medical Practice 2013年;30巻:1586-1588.
- 18) 出口 隆.【後期研修医がおさえておきたい泌尿器疾患 TOP 30】 疾患 尿路感染症(膀胱炎と腎盂腎炎)、前立腺炎、精巣上体炎, 泌尿器外科 2013年;26巻 特別号:179-195.
- 19) 出口 隆.【学会好事 日本性感染症学会第25回学術大会】, Urology Today 2013年;20巻:102-103.
- 20) 仲野正博, 出口 隆.【陰茎癌の診断と治療】 ガイドラインからみた陰茎癌に対する治療方針, 泌尿器外科 2013年;26巻:917-926.
- 21) 安田 満, 丹羽 隆.【切り取って使える保存版泌尿器科薬剤ノート(1)排尿障害・結石・感染の薬】 性感染症に用いられる薬, 泌尿器ケア 2013年;18巻:968-972.
- 22) 安田 満.【感染症症候群(第2版)-症候群から感染性単一疾患までを含めて-[上]] マイコプラズマ感染症、リケッチア感染症、クラミジア感染症 マイコプラズマ感染症 マイコプラズマ・ウレアプラズマ感染症(肺炎マイコプラズマ感染症を除く), 日本臨床 2013年;別冊 感染症症候群(上):284-287.
- 23) 安田 満.【泌尿器科診療ベスト NAVI】 疾患・病態の診療 尿路・性器の感染症 性感染症 尖圭コンジローマ, 臨床泌尿器科 2013年;67巻:200-201.
- 24) 安田 満.【泌尿器科診療ベスト NAVI】 疾患・病態の診療 尿路・性器の感染症 性感染症 性器ヘルペスウイルス感染症, 臨床泌尿器科 2013年;67巻:197-199.
- 25) 仲野正博, 出口 隆.【前立腺癌の診療ナビゲーション-わかりやすく丁寧に!】 前立腺癌の病期別治療法 TNM 分類 I 期の前立腺癌の治療法 TNM 分類 I 期前立腺癌の治療法のポイント, 注意点について教えてください, 臨床泌尿器科 2014年;68巻:220-224.
- 26) 安田 満, 宮崎 淳, 松崎純一.【長期留置尿路ステントの現状と展望】 尿路ステント留置・交換時の感染症対策, Japanese Journal of Endourology 2014年;27巻:68-70.
- 27) 松崎純一, 安田 満, 宮崎 淳.【長期留置尿路ステントの現状と展望】 尿管ステントの合併症, Japanese Journal of Endourology 2014年;27巻:71-78.
- 28) 植田 健, 滑川剛史, 佐藤陽介, 高木公暁, 大關孝之, 小林将行, 小丸 淳, 深沢 賢.【明解!! 必携 泌尿器科診療の手引き】 前立腺癌, 泌尿器外科 2014年;27巻(特別号):56-67.
- 29) 出口 隆, 高井 学, 堀江憲吾, 永井真吾.【糖尿病診療と感染症-全身をめぐる諸連関-】 尿路感染症, プラクティス 2014年;31巻:768-773.

総説 (欧文)

- 1) Deguchi T, Ito S, Hagiwara N, Yasuda M, Maeda S. Antimicrobial chemotherapy of *Mycoplasma genitalium*-positive non-gonococcal urethritis. Expert Rev Anti Infect Ther. 2012;10:791-803.

原著 (和文)

- 1) 土屋朋大, 永井真吾, 安田 満, 横井繁明, 仲野正博, 出口 隆, 今西義紀, 伊藤慎一. 維持期におけるタクロリムス徐放性製剤への切り替えの有用性, 今日の移植 2012年;25巻:542-544.
- 2) 山田 徹, 土屋邦洋, 河合篤史, 加藤成一, 亀井信吾, 谷口光宏, 玉木正義, 出口 隆. 膀胱 CIS に対する, 2nd line BCG 株交替療法 of 検討, 泌尿器外科 2012年;25巻:774-776.
- 3) 清家健作, 亀山紘司, 加藤 卓, 土屋朋大, 安田 満, 横井繁明, 仲野正博, 林 秀治, 出口 隆, 廣瀬善信. 膀胱より発生した Solitary fibrous tumor の 1 例, 泌尿器科紀要 2012年;58巻:105-108.
- 4) 清家健作, 水谷晃輔, 久保田恵章, 前田真一, 仲野正博, 出口 隆. PSA 再検にて 4.0ng/ml 以下に低下した患者における前立腺生検の意義に関する検討, 泌尿器外科 2012年;25巻:2059-2063.
- 5) 石川りえ, 木下幸子, 加藤 卓, 増栄孝子, 出口 隆. 尿管皮膚瘻周囲に偽上皮腫性肥厚を形成した精神疾患患者への介入, 東海ストーマ・排泄リハビリテーション研究会誌 2012年;32巻:23-27.
- 6) 丹羽 隆, 篠田康孝, 鈴木昭夫, 大森智史, 太田浩敏, 深尾亜由美, 安田 満, 北市清幸, 松浦克彦, 杉山正, 村上啓雄, 伊藤 善規. Infection Control Team による全入院患者を対象とした注射用抗菌薬適正使用推進実施体制の確立とアウトカム評価, 医療薬学 2012年;38巻:273-281.
- 7) 堀江憲吾, 高橋義人, 石田健一郎, 土屋邦洋, 萩原徳康, 岩田 仁, 江原英俊. 前立腺肥大症に対する手術後の病理診断で Stromal tumor of uncertain malignant potential (STUMP) であった 1 例, 泌尿器科

紀要 2012年;58巻:255-258.

- 8) 小島圭太郎, 上田陽子, 高木公暁, 亀井信吾, 柚原一哉. カテコラミン抵抗性ショックを伴う尿路敗血症に対しエンドトキシシン吸着療法が奏功した1例, 高山赤十字病院紀要 2012年;36号:33-36.
- 9) 高木公暁, 小島圭太郎, 柚原一哉, 柴田悠平. 尿管皮膚瘻によって治癒しえた Cyclophosphamide 低用量長期内服による出血性膀胱炎の1例, 泌尿器科紀要 2012年;58巻:687-690.
- 10) 土屋朋大, 堀江憲吾, 永井真吾, 安田 満, 横井繁明, 仲野正博, 出口 隆, 伊藤 慎一. 当科における腎移植後妊娠症例に関する検討, 日本臨床腎移植学会雑誌 2013年;1巻:69-73.
- 11) 伊藤 晋, 安田 満, 前田真一, 出口 隆. 男子尿道炎における淋菌、*Chlamydia trachomatis*、*Mycoplasma genitalium*、*Ureaplasma urealyticum* およびインフルエンザ菌の検出率, 日本性感染症学会誌 2013年;24巻:90-96.
- 12) 宇野裕巳, 齊藤昭弘, 仲野正博, 出口 隆. 前立腺立体再生検法による再生検方法の検討, 泌尿器外科 2013年;26巻:1267-1269.
- 13) 東郷容和, 田岡利宜也, 山本新吾, 桧山佳樹, 上原央久, 橋本次朗, 栗村雄一郎, 高橋 聡, 塚本泰司, 宮崎淳, 西山博之, 清田 浩, 矢澤 聰, 大家基嗣, 安田 満, 出口 隆, 石川清仁, 星長清隆, 松本 穰, 重村克巳, 田中一志, 荒川創一, 藤澤正人, 和田耕一郎, 上原慎也, 渡辺豊彦, 公文裕巳, 小林加直, 松原昭郎, 松本正広, 庄 武彦, 濱砂良一, 松本哲朗, 速見浩士, 山根隆史, 中川昌之, UTI 共同研究会ガイドラインワーキンググループ. 泌尿器科領域における周術期感染症予防抗菌薬の使用状況についてのアンケート調査報告, 日本泌尿器科学会雑誌 2013年;104巻:579-588.
- 14) 和田耕一郎, 上原慎也, 吉良慎一郎, 松本正広, 庄 武彦, 栗村雄一郎, 橋本次朗, 上原央久, 山根隆史, 金丸聰淳, 東郷容和, 田岡利宜也, 高橋 彰, 山田祐介, 横溝 晃, 安田 満, 田中一志, 濱砂良一, 高橋 聡, 速見浩士, 渡辺豊彦, 門田晃一, 清田 浩, 出口 隆, 内藤誠二, 塚本泰司, 荒川創一, 藤澤正人, 山本新吾, 公文裕巳, 松本哲朗, UTI 共同研究会. 「泌尿器科領域における周術期感染予防ガイドライン」に関する多施設共同研究, 日本泌尿器科学会雑誌 2013年;104巻:505-512.
- 15) 山田 徹, 高木公暁, 土屋邦洋, 河合篤史, 加藤 成一, 谷口光宏, 玉木正義, 出口 隆. 膀胱 CIS における BCG -refractory, -resistant, -relapsing への 2nd line BCG 療法の検討, 泌尿器外科 2013年;26巻:325-327.
- 16) 高木公暁, 柚原一哉, 南館 謙, 岡本清尚. 膀胱小細胞癌の1例, 高山赤十字病院紀要 2013年;37号:7-11.
- 17) 和田耕一郎, 谷本竜太, 能勢宏幸, 上原慎也, 渡辺豊彦, 速見浩士, 永井真吾, 安田 満, 出口 隆, 茂田啓介, 矢澤 聰, 菊地栄次, 大家基嗣, 橋本次朗, 上原央久, 栗村雄一郎, 桧山佳樹, 高橋 聡, 塚本泰司, 庄武彦, 濱砂良一, 宮崎 淳, 東郷容和, 田岡利宜也, 中尾 篤, 山本新吾, 小林加直, 松原昭郎, 石川清仁, 公文裕巳, 松本哲朗. 泌尿器科領域における抗癌化学療法に伴う発熱性好中球減少症に関する多施設共同調査, 日本化学療法学会雑誌 2014年;62巻:374-381.
- 18) 堀江憲吾, 亀山紘司, 水谷晃輔, 菅原 崇, 清家健作, 土屋朋大, 安田 満, 横井繁明, 仲野正博, 出口 隆, 酒々井夏子, 広瀬善信. 集学的治療にて比較的長期予後を得られている前立腺小細胞癌の1例, 泌尿器科紀要 2014年;60巻:517-521.
- 19) 菊地美奈, 亀山紘司, 堀江憲吾, 水谷晃輔, 清家健作, 加藤 卓, 菅原 崇, 土屋朋大, 安田 満, 横井繁明, 仲野正博, 出口 隆, 近藤浩史, 守山洋司, 江原英俊. 保存的治療を行った III 型鈍的腎外傷後の尿嚢腫の3例, 泌尿器科紀要 2014年;60巻:615-620.
- 20) 守山洋司, 藤広 茂, 仲野正博, 江原英俊, 明石高明, 出口 隆. 前立腺小細胞癌の1例:本邦報告例を用いた予後解析, 泌尿器科紀要 2014年;60巻:645-650.

原著 (欧文)

- 1) Deguchi T, Yasuda M, Ito S. Management of pharyngeal gonorrhoea is crucial to prevent the emergence and spread of antibiotic-resistant *Neisseria gonorrhoeae*. Antimicrob Agents Ch. 2012;56:4039-4040. IF 4.451
- 2) Ito S, Yasuda M, Seike K, Sugawara T, Tsuchiya T, Yokoi S, Nakano M, Deguchi T. Clinical and microbiological outcomes in treatment of men with non-gonococcal urethritis with a 100-mg twice-daily dose regimen of sitafloxacin. J Infect Chemother. 2012;18:414-418. IF 1.384
- 3) Tsuchiya T, Ishida K, Ito S, Deguchi T. Effect of conversion from twice-daily to once-daily tacrolimus on glucose intolerance in stable kidney transplant recipients. Transpl P. 2012;44:118-120. IF 0.984
- 4) Kato T, Fujita Y, Nakane K, Kojima T, Nozawa Y, Deguchi T, Ito M. ETS1 promotes chemoresistance and invasion of paclitaxel-resistant, hormone-refractory PC3 prostate cancer cells by up-regulating MDR1 and MMP9 expression. Biochem Bioph Res Co. 2012;417:966-971. IF 2.281
- 5) Ito S, Tsuchiya T, Yasuda M, Yokoi S, Nakano M, Deguchi T. Prevalence of genital mycoplasmas and ureaplasmas in men younger than 40 years-of-age with acute epididymitis. Int J Urol. 2012;19:234-238. IF 1.798
- 6) Nakane K, Fujita Y, Terazawa R, Atsumi Y, Kato T, Nozawa Y, Deguchi T, Ito M. Inhibition of cortactin and SIRT1 expression attenuates migration and invasion of prostate cancer DU145 cells. Int J Urol. 2012;19:71-79. IF 1.798
- 7) Masue T, Wada K, Hayashi M, Takeda N, Yasuda K, Deguchi T, Nagata C. Associations of urinary 6-sulfatoxymelatonin with biomarkers related to cardiovascular disease in Japanese women. Metabolism. 2012;61:70-75.
- 8) Lahra MM, Limnios EA, Dorji D, Bakar HM, Guillard B, Sopheak H, Ping YY, Buadromo EM, Kumar

- P, Singh S, Lo J, Lo A, Bala M, Risbud A, Deguchi T, Tanaka M, Watanabe Y, Lee K, Chong Y, Noikaseumsy S, Phouthavane T, Sam IC, Tundev O, Lwin KM, Eh PH, Goarant C, Goursaud R, Bathgate T, Brokenshire M, Toliman P, Yoannes M, Latorre L, Velemu E, Carlos C, Lagrada M, Leano S, Telan EO, Tan AL, Goh SS, Mananwatte S, Piyanoot N, Lokpichat S, Sirivongranson P, Fakahau M, Sitanilei H, Hung le V. Surveillance of antibiotic resistance in *Neisseria gonorrhoeae* in the WHO Western Pacific and South East Asian Regions. 2010. Commun Dis Intell Q Rep. 2012;36:95-100.
- 9) Shinohara N, Nonomura K, Abe T, Maruyama S, Kamai T, Takahashi M, Tatsugami K, Yokoi S, Deguchi T, Kanayama H, Oba K, Naito S. A new prognostic classification for overall survival in Asian patients with previously untreated metastatic renal cell carcinoma. Cancer Sci. 2012;103:1695-700. IF 3.534
 - 10) Matsumoto T, Hamasuna R, Ishikawa K, Takahashi S, Yasuda M, Hayami H, Tanaka K, Muratani T, Monden K, Arakawa S, Yamamoto S. Sensitivities of major causative organisms isolated from patients with acute uncomplicated cystitis against various antibacterial agents: results of subanalysis based on the presence of menopause. J Infect Chemother. 2012;18:597-607. IF 1.384
 - 11) Niwa T, Shinoda Y, Suzuki A, Ohmori T, Yasuda M, Ohta H, Fukao A, Kitaichi K, Matsuura K, Sugiyama T, Murakami N, Itoh Y. Outcome measurement of extensive implementation of antimicrobial stewardship in patients receiving intravenous antibiotics in a Japanese university hospital. Int J Clin Pract. 2012;66:999-1008. IF 2.538
 - 12) Kato T, Fujita Y, Nakane K, Mizutani K, Terazawa R, Ehara H, Kanimoto Y, Kojima T, Nozawa Y, Deguchi T, Ito M. CCR1/CCL5 interaction promotes invasion of taxane-resistant PC3 prostate cancer cells by increasing secretion of MMPs 2/9 and by activating ERK and Rac signaling. Cytokine. 2013;64:251-257. IF 2.874
 - 13) Taoka R, Togo Y, Kubo T, Kido M, Miki K, Kiyota H, Egawa S, Sugawara T, Yasuda M, Nakano M, Deguchi T, Nishino M, Ishikawa K, Shiroki R, Matsumoto M, Shigemura K, Tanaka K, Arakawa S, Fujisawa M, Wada K, Watanabe T, Kumon H, Kobayashi K, Matsubara A, Sho T, Hamasuna R, Matsumoto T, Hayami H, Nakagawa M, Yamamoto S. Assessment of antimicrobial prophylaxis to prevent perioperative infection in patients undergoing prostate brachytherapy: multicenter cohort study. J Infect Chemother. 2013;19:926-930. IF 1.384
 - 14) Yamaguchi Y, Takei M, Kishii R, Yasuda M, Deguchi T. Contribution of topoisomerase IV mutation to quinolone resistance in *Mycoplasma genitalium*. Antimicrob Agents Ch. 2013;57:1772-1776. IF 4.451
 - 15) Seike K, Maeda S, Kubota Y, Tamaki M, Yasuda M, Deguchi T. Prevalence and morbidity of urethral *Trichomonas vaginalis* in Japanese men with or without urethritis. Sex Transm Infect. 2013;89:528-530. IF 3.078
 - 16) Terazawa R, Akimoto N, Kato T, Itoh T, Fujita Y, Hamada N, Deguchi T, Inuma M, Noda M, Nozawa Y, Ito M. A kavalactone derivative inhibits lipopolysaccharide-stimulated iNOS induction and NO production through activation of Nrf2 signaling in BV2 microglial cells. Pharmacol Res. 2013;71:34-43. IF 3.976
 - 17) Hamasuna R, Yasuda M, Ishikawa K, Uehara S, Takahashi S, Hayami H, Yamamoto S, Matsumoto T, Minamitani S, Watanabe A, Iwamoto A, Totsuka K, Kadota J, Sunakawa K, Sato J, Hanaki H, Tsukamoto T, Kiyota H, Egawa S, Tanaka K, Arakawa S, Fujisawa M, Kumon H, Kobayashi K, Matsubara A, Naito S, Tatsugami K, Ito S, Narita H, Kanokogi M, Sumii T, Ito K, Hosobe T, Kawai S, Kawano H, Takayama K, Yamaguchi T, Endo K, Yamauchi T, Maeda S, Yoh M, Horie M, Chokyu H, Ihara H, Akiyama K, Uno S, Monden K, Kaji S, Nishimura H, Kawahara M, Sato T, Konishi T, Nishi S, Ishihara S, Yoshioka M. Nationwide surveillance of the antimicrobial susceptibility of *Neisseria gonorrhoeae* from male urethritis in Japan. J Infect Chemother. 2013;19:571-578. IF 1.384
 - 18) Takahashi S, Hamasuna R, Yasuda M, Ito S, Ito K, Kawai S, Yamaguchi T, Satoh T, Sunaoshi K, Takeda K, Suzuki N, Maeda S, Nishimura H, Fukuda S, Matsumoto T. Clinical efficacy of sitafloxacin 100 mg twice daily for 7 days for patients with non-gonococcal urethritis. J Infect Chemother. 2013;19:941-945. IF 1.384
 - 19) Hayami H, Takahashi S, Ishikawa K, Yasuda M, Yamamoto S, Uehara S, Hamasuna R, Matsumoto T, Minamitani S, Watanabe A, Iwamoto A, Totsuka K, Kadota J, Sunakawa K, Sato J, Hanaki H, Tsukamoto T, Kiyota H, Egawa S, Tanaka K, Arakawa S, Fujisawa M, Kumon H, Kobayashi K, Matsubara A, Naito S, Tatsugami K, Yamaguchi T, Ito S, Kanokogi M, Narita H, Kawano H, Hosobe T, Takayama K, Sumii T, Fujii A, Sato T, Yamauchi T, Izumitani M, Chokyu H, Ihara H, Akiyama K, Yoshioka M, Uno S, Monden K, Kano M, Kaji S, Kawai S, Ito K, Inatomi H, Nishimura H, Ikuyama T, Nishi S, Takahashi K, Kawano Y, Ishihara S, Tsuneyoshi K, Matsushita S, Yamane T, Hirose T, Fujihira S, Endo K, Oka Y, Takeyama K, Kimura T, Uemura T. Nationwide surveillance of bacterial pathogens from patients with acute uncomplicated cystitis conducted by the Japanese surveillance committee during 2009 and 2010: antimicrobial susceptibility of *Escherichia coli* and *Staphylococcus saprophyticus*. J Infect Chemother. 2013;19:393-403. IF 1.384
 - 20) Sawada A, Komori S, Udo K, Suemori S, Mochizuki K, Yasuda M, Ohkusu K. Case of endogenous endophthalmitis caused by *Klebsiella pneumoniae* with *magA* and *rmpA* genes in an immunocompetent patient. J Infect Chemother. 2013;19:326-329. IF 1.384
 - 21) Ishida K, Ito S, Tsuchiya T, Imanishi Y, Deguchi T. Clinical experience with once-daily tacrolimus in de novo kidney transplant recipients from living donors in Japan: 1-year follow up. Cent European J

- Urol. 2013;66:344-349.
- 22) Kamiya Y, Shimada Y, Ito S, Kikuchi M, Yasuda M, Kawamura Y, Deguchi T. Analysis of the quinolone-resistance determining region of the *gyrA* gene and the analogous region of the *parC* gene in *Ureaplasma parvum* and *Ureaplasma urealyticum* detected in first-void urine of men with non-gonococcal urethritis. *J Antimicrob Chemother.* 2013;68:480-482. IF 5.439
 - 23) Tsuchiya T, Ishida H, Tanabe T, Shimizu T, Honda K, Omoto K, Tanabe K. Comparison of pharmacokinetics and pathology for low-dose tacrolimus once-daily and twice-daily in living kidney transplantation: prospective trial in once-daily versus twice-daily tacrolimus. *Transplantation.* 2013;96:198-204. IF 3.535
 - 24) Shimada Y, Ito S, Mizutani K, Sugawara T, Seike K, Tsuchiya T, Yokoi S, Nakano M, Yasuda M, Deguchi T. Bacterial loads of *Ureaplasma urealyticum* contribute to development of urethritis in men. *Int J STD AIDS.* 2014;25:294-298. IF 1.037
 - 25) Ito S, Kikuchi M, Seike K, Tsuchiya T, Yasuda M, Yokoi S, Nakano M, Deguchi T. Prevalence of genital mycoplasmas in asymptomatic male partners of women diagnosed as having chlamydial infections. *J Infect Chemother.* 2014;20:143-145. IF 1.384
 - 26) Ito S, Mizutani K, Seike K, Sugawara T, Tsuchiya T, Yasuda M, Yokoi S, Nakano M, Deguchi T. Prediction of the persistence of *Mycoplasma genitalium* after antimicrobial chemotherapy by quantification of leukocytes in first-void urine from patients with non-gonococcal urethritis. *J Infect Chemother.* 2014;20:298-302. IF 1.384
 - 27) Hamasuna R, Tanaka K, Hayami H, Yasuda M, Takahashi S, Kobayashi K, Kiyota H, Yamamoto S, Arakawa S, Matsumoto T; Japanese Research Group for UTI (JRGU). Treatment of acute uncomplicated cystitis with faropenem for 3 days versus 7 days: multicentre, randomized, open-label, controlled trial. *J Antimicrob Chemother.* 2014;69:1675-1680. IF 5.439
 - 28) Deguchi T, Yasuda M, Tsuchiya T, Yokoi S, Ito S. Decreased susceptibility to cephalosporins among gonococci? *Lancet Infect Dis.* 2014;14:185-186. IF 19.446
 - 29) Togo Y, Kubo T, Taoka R, Hiyama Y, Uehara T, Hashimoto J, Kurimura Y, Takahashi S, Tsukamoto T, Miyazaki J, Nishiyama H, Kira S, Kiyota H, Yazawa S, Niwa N, Hongo H, Oya M, Kato T, Yasuda M, Deguchi T, Ishikawa K, Hoshinaga K, Matsumoto M, Shigemura K, Tanaka K, Arakawa S, Fujisawa M, Wada K, Uehara S, Watanabe T, Kumon H, Kobayashi K, Matsubara A, Matsumoto M, Sho T, Hamasuna R, Matsumoto T, Hayami H, Nakagawa M, Yamamoto S. Occurrence of infection following prostate biopsy procedures in Japan: Japanese Research Group for Urinary Tract Infection (JRGU) - a multi-center retrospective study. *J Infect Chemother.* 2014;20:232-237. IF 1.384
 - 30) Deguchi T, Matsumoto T. Antimicrobial stewardship in urology. *Int J Urol.* 2014;21:628-629. IF 1.798
 - 31) Hattori S, Kojima K, Minoshima K, Yamaha M, Horie M, Sawamura T, Kikuchi A, Deguchi T. Detection of bladder cancer by measuring CD44v6 expression in urine with real-time quantitative reverse transcription polymerase chain reaction. *Urology.* 2014;83:1443.e9-15. IF 2.132
 - 32) Kikuchi M, Ito S, Yasuda M, Tsuchiya T, Hatazaki K, Takanashi M, Ezaki T, Deguchi T. Remarkable increase in fluoroquinolone-resistant *Mycoplasma genitalium* in Japan. *J Antimicrob Chemother.* 2014;69:2376-2382. IF 5.439
 - 33) Yasuda M, Ito S, Kido A, Hamano K, Uchijima Y, Uwatoko N, Kusuyama H, Watanabe A, Miyamura R, Miyata K, Deguchi T. A single 2 g oral dose of extended-release azithromycin for treatment of gonococcal urethritis. *J Antimicrob Chemother.* 2014;69:3116-3118. IF 5.439
 - 34) Mizutani K, Terazawa R, Kameyama K, Kato T, Horie K, Tsuchiya T, Seike K, Ehara H, Fujita Y, Kawakami K, Ito M, Deguchi T. Isolation of prostate cancer-related exosomes. *Anticancer Res.* 2014;34:3419-3423. IF 1.872
 - 35) Nakane K, Yasuda M, Deguchi T, Takahashi S, Tanaka K, Hayami H, Hamasuna R, Yamamoto S, Arakawa S, Matsumoto T. Nationwide survey of urogenital tuberculosis in Japan. *Int J Urol.* 2014;21:1171-1177. IF 1.798
 - 36) Yasuda M, Nakane K, Yamada Y, Matsumoto M, Sho T, Matsumoto M, Kobayashi K, Shigemura K, Nakano Y, Tanaka K, Hamasuna R, Ishihara S, Arakawa S, Yamamoto S, Matsubara A, Fujisawa M, Deguchi T, Matsumoto T. Clinical effectiveness and safety of tazobactam/piperacillin 4.5 g for the prevention of febrile infectious complication after prostate biopsy. *J Infect Chemother.* 2014;20:631-634. IF 1.384
 - 37) Ito S, Horie K, Seike K, Yasuda M, Tsuchiya T, Yokoi S, Nakano M, Deguchi T. Usefulness of quantifying leukocytes in first-voided urine to predict positivity for *Chlamydia trachomatis* in asymptomatic men at high risk for chlamydial infection. *J Infect Chemother.* 2014;20:748-751. IF 1.384
 - 38) Ohzeki T, Fukasawa S, Komaru A, Namekawa T, Sato Y, Takagi K, Kobayashi M, Uemura H, Ichikawa T, Ueda T. Efficacy of traditional and alternative sunitinib treatment schedules in Japanese patients with metastatic renal cell carcinoma. *Int J Urol.* 2014;21:1065-1068. IF 1.798

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：出口 隆，研究分担者：安田 満，中根慶太；科学研究費補助金基盤研究(C)：淋菌におけるアジスロマイシン耐性化の経時的変化および耐性化機序の解析；平成 22-24 年度；4,060 千円(1,040：1,820：1,200 千円)
- 2) 研究代表者：出口 隆，研究分担者：安田 満；科学研究費補助金基盤研究(C)：男子尿道炎における病原体抗菌薬耐性サーベイランスの構築；平成 25-27 年度；5,070 千円(1,950：1,560：1,560 千円)
- 3) 研究代表者：加藤 卓；科学研究費補助金若手研究(B)：膀胱癌における塩酸ゲムシタビン耐性に関与する miR の同定と作用機構の解明；平成 25-26 年度；4,030 千円(2,470：1,560 千円)
- 4) 研究代表者：安田 満，研究分担者：出口 隆；科学研究費補助金基盤研究(C)：淋菌咽頭感染の効果的な治療法；平成 26-28 年度；5,070 千円(1,430：1,430：2,210 千円)
- 5) 研究代表者：水谷晃輔；科学研究費補助金若手研究(B)：前立腺癌由来エクソソームの解析；平成 26-27 年度；3,900 千円(1,950：1,950 千円)
- 6) 出口 隆，北市清幸，伊藤 晋，安田 満；平成 26 年度臨床研究推進支援経費(岐阜大学医学系研究科長・医学部長，岐阜薬科大学長，岐阜大学医学部附属病院長)：男子淋菌性尿道炎に対する azithromycin SR の細菌学的効効を予測する pharmacokinetics-pharmacodynamics (PK-PD)パラメーターの検討；50 万円

2) 受託研究

- 1) 出口 隆：スーテントカプセル 12.5 mg 特定使用成績調査-腎細胞癌に対する調査；平成 20-25 年度；378,000 円：ファイザー(株)
- 2) 出口 隆：スーテントカプセル 12.5mg 特定使用成績調査-腎細胞癌に対する調査(追加分)；平成 20-25 年度；630,000 円：ファイザー(株)
- 3) 出口 隆：RAD001(継続投与試験)第 3 相臨床試験；平成 20-24 年度；1,950,930 円：ノバルティスファーマ(株)
- 4) 出口 隆：RAD001(継続投与試験)第 3 相臨床試験(変更契約)；平成 20-24 年度；535,500 円：ノバルティスファーマ(株)
- 5) 出口 隆：RAD001(継続投与試験)第 3 相臨床試験(変更契約)；平成 20-24 年度；995,400 円：ノバルティスファーマ(株)
- 6) 出口 隆：ゾシン静注用 2.25, 4.5 使用成績調査；平成 22-24 年度；105,000 円：大正富山(株)
- 7) 出口 隆：アフィニトール錠 5mg 特定使用成績調査；平成 22-25 年度；472,500 円：ノバルティスファーマ(株)
- 8) 出口 隆：アフィニトール錠 5mg 特定使用成績調査(追加分)；平成 23-25 年度；472,500 円：ノバルティスファーマ(株)
- 9) 出口 隆：アフィニトール錠 5mg 特定使用成績調査(追加分)；平成 23-25 年度；1,050 円：ノバルティスファーマ(株)
- 10) 出口 隆：トリーセル点滴静注用 25 mg 特定使用成績調査；平成 22-24 年度；283,500 円：ファイザー(株)
- 11) 出口 隆：トリーセル点滴静注用 25mg 特定使用成績調査(追加分)；平成 23-26 年度；126,000 円：ファイザー(株)
- 12) 出口 隆：フリバス錠 特定使用成績調査；平成 22-24 年度；126,000 円：旭化成(株)
- 13) 出口 隆：グラセプターカプセル 有害事象詳細調査；平成 24-25 年度；21,000 円：アステラス製薬株式会社
- 14) 出口 隆：グラセプターカプセル 腎移植に対する特定使用成績調査；平成 21-26 年度；157,500 円：アステラス製薬株式会社
- 15) 出口 隆：アクトス 有害事象詳細報告；平成 24-25 年度；21,000 円：武田薬品工業株式会社
- 16) 出口 隆：バップフォー特定使用成績調査；平成 24-25 年度；315,000 円：大鵬薬品工業株式会社
- 17) 出口 隆：テラビシン注射用 有害事象詳細調査；平成 24-25 年度；21,000 円：Meiji Seika ファルマ株式会社
- 18) 出口 隆：DR-3355 注射剤 比較試験(第Ⅲ相)；平成 24-26 年度；1,197,000 円：第一三共株式会社
- 19) 出口 隆：ベタニス錠使用成績調査；平成 24-26 年度；105,000 円：アステラス製薬株式会社

- 20) 出口 隆：ベタニス錠使用成績調査プロトコル；平成 24-26 年度；105,000 円；アステラス製薬株式会社
- 21) 出口 隆：JIJ-212082 第 II 相試験；平成 24-27 年度；430,500 円；ヤンセンファーマ株式会社
- 22) 出口 隆：JIJ-212082 第 3 相臨床試験；平成 24-30 年度；52,500 円；ヤンセンファーマ株式会社
- 23) 出口 隆：ランマーク皮下注 120mg 特定使用成績調査；平成 24-28 年度；472,500 円；第一三共株式会社
- 24) 出口 隆：ベタニス錠特定使用成績調査プロトコル No.B；平成 24-26 年度；105,000 円；アステラス製薬株式会社
- 25) 出口 隆：JIJ-212082 第 3 相臨床試験；平成 24-30 年度；1,281,000 円；ヤンセンファーマ株式会社
- 26) 出口 隆：ゴナックス皮下注用 80mg；平成 25-28 年度；94,500 円；アステラス製薬株式会社
- 27) 出口 隆：タコシール組織接着用シート；平成 25-26 年度；105,000 円；CSL ベーリング
- 28) 出口 隆：リプレガル特定使用成績調査；平成 25-27 年度；63,000 円；大日本住友製薬
- 29) 出口 隆：グラセプターカプセル 特定使用成績調査；平成 25-28 年度；252,000 円；アステラス製薬株式会社
- 30) 出口 隆：グラセプターカプセル 特定使用成績調査；平成 25-28 年度；157,500 円；アステラス製薬株式会社
- 31) 出口 隆：「ジオン注」副作用・感染症調査；平成 26-27 年度；43,200 円；田辺三菱製薬株式会社
- 32) 出口 隆：JNJ-56021927 第 1 相臨床試験；平成 26-32 年度；1,002,240 円；ヤンセンファーマ株式会社
- 33) 出口 隆：サイモグロブリン点滴静注用 25mg の安全性及び有効性の検討(腎移植後の急性拒絶反応の治療)(前例調査)(特定使用成績調査)；平成 26-29 年度；97,200 円；サノフィ株式会社
- 34) 出口 隆：グラセプターカプセル 特定使用成績調査；平成 25-28 年度；324,000 円；アステラス製薬株式会社

3) 共同研究

- 1) 出口 隆：全自動尿中有形成分分析装置 UF-1000i とアルカリ界面活性剤溶液を用いた、臨床細菌尿検体におけるグラム陽性・陰性菌の簡易鑑別法に関する研究開発；平成 23-25 年度；273,000 円；シスメックス株式会社
- 2) 出口 隆：マイクロチップ PCR-電気泳動技術を用いた性感染症起炎菌の迅速検査時システムの研究；平成 26-27 年度；500,000 円；和光純薬工業株式会社

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

出口 隆：

- 1) 日本泌尿器科学会評議員(～現在)
- 2) 日本泌尿器科学会広報委員会委員(～現在)
- 3) 日本化学療法学会西日本支部幹事(～現在)
- 4) 日本化学療法学会評議員(～現在)
- 5) 日本性感染症学会常任理事(～現在)
- 6) 日本感染症学会評議員(～現在)
- 7) 日本泌尿器内視鏡学会評議員(～現在)
- 8) 尿路感染症研究会幹事(～現在)
- 9) 日本泌尿器科学会東海地方会会長(～現在)
- 10) 泌尿器科分子・細胞研究会世話人(～現在)
- 11) 東海ストーマリハビリテーション研究会世話人(～現在)
- 12) J-POPS 運営委員(～現在)
- 13) 日本ミニマム創泌尿器内視鏡外科学会評議員(～現在)
- 14) 日本泌尿器科学会専門医制度審議会委員(平成 26 年 4 月～現在)

仲野正博：

- 1) 日本泌尿器内視鏡学会評議員(～現在)
- 2) 日本泌尿器科学会東海地方会運営委員(～現在)
- 3) 前立腺密封小線源永久挿入治療研究会プログラム委員(平成 26 年～現在)

伊藤慎一：

- 1) 日本移植学会評議員(～現在)
- 2) 腎移植血管外科研究会世話人(～現在)
- 3) 日本臓器移植ネットワーク中日本支部運営委員(～現在)
- 4) 日本臨床腎移植学会評議員(～現在)

横井繁明：

- 1) 日本泌尿器内視鏡学会評議員(～現在)
- 2) 泌尿器腹腔鏡技術認定医審査委員(～現在)

安田 満：

- 1) 日本化学療法学会評議員(～現在)
- 2) 日本化学療法学会幹事(平成 26 年 6 月～現在)
- 3) 日本感染症学会評議員(平成 26 年 10 月～現在)
- 4) 日本性感染症学会評議員(～現在)
- 5) 日本化学療法学会抗菌薬臨床評価ガイドライン改訂委員会委員(～現在)
- 6) 三学会合同抗菌薬感受性サーベイランス実務委員会調整委員(～現在)
- 7) JAID/JSC 感染症治療ガイド・ガイドライン作成委員会性感染症委員(～現在)
- 8) 日本泌尿器内視鏡学会尿路ステント部会委員(～現在)
- 9) 日本化学療法学会泌尿器感染症臨床評価法の改訂委員会委員(～現在)
- 10) 日本化学療法学会尿路性器感染症に関する臨床試験実施のためのガイドライン改訂委員会委員(～現在)

水谷晃輔：

- 1) 泌尿器分子・細胞研究会評議員(平成 26 年 4 月～現在)

2) 学会開催

出口 隆：

- 1) 日本性感染症学会第 25 回学術大会(平成 24 年 12 月, 岐阜)
- 2) 第 3 回東海 STI 研究会(平成 24 年 12 月, 岐阜)
- 3) 第 262 回日本泌尿器科学会東海地方会(平成 25 年 12 月, 名古屋)

3) 学術雑誌

出口 隆：

- 1) J Infect Chemother ; Editorial Board(～現在)
- 2) Int J Urol ; Editorial Board(～現在)
- 3) 泌尿器科紀要 ; 編集委員(～現在)
- 4) 日本性感染症学会 ; 編集委員長(平成 25 年 12 月～)

安田 満：

- 1) 日本性感染症学会 ; 編集委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

出口 隆：

- 1) 第 100 回日本泌尿器科学会総会(平成 24 年 4 月, 横浜, シンポジウム 3-3 「泌尿器科感染症について再考する」座長)
- 2) 第 60 回日本化学療法学会学術総会(平成 24 年 4 月, 長崎, Meet the Expert 2 「男子尿道炎」演者)
- 3) 第 62 回日本泌尿器科学会中部総会(平成 24 年 11 月, 富山, ランチョンセミナー6 「前立腺肥大症の

薬物療法 - α ブロッカーから新しい治療薬の可能性まで-」座長)

- 4) 日本性感染症学会第 25 回学術大会(平成 24 年 12 月, 岐阜, 特別講演 2「エイズ発生动向とエイズ施策について」座長)
- 5) 第 3 回東海 STI 研究会(平成 24 年 12 月, 岐阜, 特別講演「淋菌感染症の話題」座長)
- 6) The 14th Biennial Meeting of the Asia-Pacific Society for Sexual Medicine (平成 25 年 6 月, 金沢, ランチョンセミナー3「Management of prostatitis」座長)
- 7) 第 27 回日本泌尿器内視鏡学会総会(平成 25 年 11 月, 名古屋, イブニングセミナー5「内視鏡手術、処置、検査における周術期感染予防 経尿道的操作時の感染予防」演者)
- 8) 日本性感染症学会第 26 回学術大会(平成 25 年 11 月, 岐阜, 教育セミナー1「性器マイコプラズマのすべて 性器マイコプラズマの性感染症における役割」演者)
- 9) 第 63 回日本泌尿器科学会総会(平成 25 年 11 月, 名古屋, サテライトシンポジウム 3「尿路感染症 update : 最新のトピックスとエビデンス」座長)
- 10) 第 102 回日本泌尿器科学会総会(平成 26 年 4 月, 神戸, ランチョンセミナー8 座長)
- 11) 第 62 回日本化学療法学会西日本支部総会, 第 57 回日本感染症学会中日本地方会学術集会, 第 84 回日本感染症学会西日本地方会学術集会(平成 26 年 10 月, 岡山, 教育講演 8「緑膿菌感染症: 臨床・研究における新展開」座長)
- 12) 第 64 回日本泌尿器科学会中部総会(平成 26 年 10 月, 浜松, 卒後教育プログラム 抗菌薬使用の基礎「抗菌薬の基礎知識」講師)
- 13) 第 64 回日本泌尿器科学会中部総会(平成 26 年 10 月, 浜松, シンポジウム 3「下部尿路疾患に対する健康食品について」座長)
- 14) 第 156 回日本泌尿器科学会広島地方会(平成 26 年 11 月, 広島, 特別講演「尿路・性器感染症の治療に役立つ抗菌薬の基礎知識」講師)
- 15) 日本性感染症学会第 27 回学術大会(平成 26 年 12 月, 神戸, イブニングセミナー1 STI 検査の最前線「性器マイコプラズマの検出」演者)

仲野正博 :

- 1) 第 24 回多地点合同メディカルカンファレンス(平成 24 年 9 月, 岐阜, 「陰茎癌診療を考える-現状と課題-」ガイドライン, 抗がん剤治療, 最近の話題について 座長・演者)
- 2) 第 10 回前立腺密封小線源永久挿入療法研究会(平成 26 年 1 月, 東京, シンポジウム I 密封小線源値治療の直腸障害克服への取り組み, 「追加発言: I-125 密封小線源療法後の痔核硬化療法に対する注意喚起」演者)
- 3) 第 16 回ヨウ素 125 シード線源挿入による前立腺密封小線源療法技術講習会(平成 26 年 6 月, 東京, 看護部門, 司会)

横井繁明 :

- 1) 第 100 回日本泌尿器科学会総会(平成 24 年 4 月, 横浜, 教育セミナー「日本における進行性腎細胞がん治療の現状 当院での工夫 -2 症例の経過を通じて-」演者)

安田 満 :

- 1) 第 100 回日本泌尿器科学会総会(平成 24 年 4 月, 横浜, シンポジウム 3-3「泌尿器科感染症について再考する 抗菌薬側の要因から再考する -操薬-」演者)
- 2) 第 60 回日本化学療法学会総会(平成 24 年 4 月, 長崎, シンポジウム 10「高齢者、寝たきり老人の尿路感染症に対する管理と抗菌薬治療 -泌尿器科の立場から-」演者)
- 3) 第 24 回日本臨床微生物学会総会(平成 25 年 1 月, 横浜, 委員会報告「第 1 回 三学会合同抗菌薬感受性サーベイランス(2009 年度)報告 -急性単純性膀胱炎、尿道炎-」演者)
- 4) 第 3 回日本性感染症学会関西支部総会(平成 25 年 3 月, 神戸, 特別講演「泌尿器科領域からみた性感染症の現状と問題点」演者)
- 5) 第 101 回日本泌尿器科学会総会(平成 25 年 4 月, 札幌, シンポジウム 4「新しい治療戦略シリーズ 性感染症 淋菌感染症 -現状と治療戦略-」演者)
- 6) 第 61 回日本化学療法学会総会・第 87 回日本感染症学会学術講演会(平成 25 年 6 月, 横浜, シンポジウム 20「尿路感染症・性感染症への適切なアプローチを学ぶ 4. 尿道炎」演者)
- 7) 第 31 回日本クラミジア研究会学術集会(平成 25 年 9 月, 横浜, イブニングセミナー「今、ホットな性感染症 *Chlamydia trachomatis*・*Mycoplasma genitalium* 感染症」演者)

- 8) 第 61 回日本化学療法学会西日本支部総会(平成 25 年 11 月, 大阪, シンポジウム 5「臨床から提起する感染症の基礎研究 尿路性器感染症からの要望」演者)
- 9) 第 63 回日本泌尿器科学会中部総会(平成 25 年 11 月, 名古屋, サテライトシンポジウム 3「尿路性器感染症 update:最新のトピックスとエビデンス わが国における尿路性器結核の現状」演者)
- 10) 日本性感染症学会第 26 回学術大会(平成 25 年 11 月, 岐阜, 教育講演「尿道炎 -現状と今後の課題-」演者)
- 11) 日本性感染症学会第 26 回学術大会(平成 25 年 11 月, 岐阜, 教育セミナー3「新たな STI 関連微生物および性教育の啓発を考える 中・高校生への性教育の啓発」演者)
- 12) 第 29 回日本環境感染学会総会・学術大会(平成 26 年 2 月, 東京, シンポジウム 30 尿路感染症「尿管ステント交換時の感染予防対策」演者)
- 13) 平成 26 年度日臨技中部圏支部医学検査学会(第 53 回)(平成 26 年 9 月, 富山, 講演「尿路性器感染症に関する臨床試験実施のためのガイドライン」講師)
- 14) 第 62 回日本化学療法学会西日本支部総会, 第 57 回日本感染症学会中日本地方会学術集会, 第 84 回日本感染症学会西日本地方会学術集会(平成 26 年 10 月, 岡山, シンポジウム 14 女性性器細菌感染症に関する最近のトピックス「女性性器における *Mycoplasma genitalium* 感染症」演者)
- 15) 第 62 回日本化学療法学会西日本支部総会, 第 57 回日本感染症学会中日本地方会学術集会, 第 84 回日本感染症学会西日本地方会学術集会(平成 26 年 10 月, 岡山, Meet the Expert -専門医を目指して-「泌尿器感染症」演者)
- 16) 第 62 回日本化学療法学会西日本支部総会, 第 57 回日本感染症学会中日本地方会学術集会, 第 84 回日本感染症学会西日本地方会学術集会(平成 26 年 10 月, 岡山, シンポジウム「男性性器感染症に対する治療を考える」司会)
- 17) 第 5 回東海 STI 研究会(平成 26 年 10 月, 名古屋, 教育講演 1「岐阜県性感染症教育研究会の活動」講師)
- 18) 第 64 回日本泌尿器科学会中部総会(平成 26 年 10 月, 浜松, 卒後教育プログラム 抗菌薬使用の基礎「尿路・性器感染症の治療時および周術期感染予防時における抗菌薬の適正使用の基本」講師)
- 19) 日本性感染症学会第 27 回学術大会(平成 26 年 12 月, 神戸, シンポジウム 4 性感染症治療の標準化「淋菌感染症治療の標準化に向けて」演者)
- 20) 平成 26 年度院内感染対策講習会(平成 26 年 12 月, 神戸, 「医療機関における感染制御の基本」講師)

土屋朋大:

- 1) 第 29 回腎移植・血管外科研究会(平成 25 年 6 月, 青森, シンポジウム 1「地方で腎移植を実践する-スタッフ不足を補うヒント-」演者)
- 2) 第 47 回日本臨床腎移植学会(平成 26 年 3 月, 奈良, シンポジウム 2「高齢化社会における地域連携を活用した腎移植患者の支援 腎移植後外来フォローアップにおける地域連携の必要性と注意点」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 安田 満: 日本化学療法学会学術奨励賞(平成 24 年度)

9. 社会活動

出口 隆:

- 1) 岐阜県身体障害者医学的判定嘱託医師(~現在)
- 2) 岐阜県感染症予防対策エイズ対策部会委員(~現在)
- 3) 岐阜県ジン・アイバンク協会副理事長(~現在)
- 4) 性の健康医学財団理事(~現在)

10. 報告書

- 1) 安田 満, 三嶋廣繁, 出口 隆: 岐阜県における数的な実態把握のための解析 調査対象医療機関の検討: 厚生労働科学研究費補助金 新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業 性感染症に関する予防、治療の体系化に関する研究 (H21-新興・一般-001)平成 23 年度総括研究報告書(小野寺班): 139-144(平成 24 年 5 月)
- 2) 安田 満, 三嶋廣繁, 出口 隆: 岐阜県における数的な実態把握のための解析: 厚生労働科学研究費補助金 新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業 性感染症に関する予防、治療の体系

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

尿路性器感染症の分野では、先進的な研究成果をあげることができており評価を受けている。また東京都健康長寿医療センター研究所老化機構研究チームとの共同研究により、前立腺癌の関する基礎的研究で成果を得ることができた。しかしながら、他の研究課題においては着実に研究が進行しているものの、顕著な成果としてはあらわれておらずより一層の努力を要する。

現状の問題点及びその対応策

最大の問題点は関連施設も含めた人員不足である。さらに、臨床活動のウェイトが増したことに伴って、益々研究に割ける員数と時間に影響が出ている。また、研究費の面でも、外部資金の獲得が厳しくなっている。即効性のある対応策はなく、また、当分野だけの問題ではないと考えている。当分野としては、以前にも増して本学医学部生及び他大学の学生に積極的にアピールし、留学生や学外企業からの社会人大学院生の積極的な受入を行なう。研究面の発展のために、学内の他分野、さらに他大学および他の研究施設との共同研究を積極的に展開する。また、研究成果を積極的に発表して外部資金の獲得に一層の努力を行う。

今後の展望

1) 前立腺癌の薬剤耐性機構の分子生物学的研究

タキサン系抗癌剤耐性に関する遺伝子の検索をさらに推し進める。

2) 去勢抵抗性前立腺癌の新規薬剤の効果の指標となる新規マーカーの探索研究

アピラテロン、エンザルタミドなど去勢抵抗性前立腺癌の新たな薬剤が臨床で使用可能となり、東京都健康長寿医療センター研究所老化機構研究チームとの共同研究により、新規薬剤の効果を予測する新規マーカーの検索を目指す。

3) 尿路感染症の基礎的・臨床的研究

現在の研究を進め、また、遺伝子解析による薬剤感受性判定法の開発を目指す。これらの基礎的研究成果と PK-PD 理論に基づいた適正な抗菌化学療法確立を目指す。

4) 男子尿道炎の基礎的・臨床的研究

岐阜薬科大学 薬物動態学研究室との共同研究を行い、PK-PD 理論に基づいた尿道炎に対する適正な抗菌化学療法確立を目指す。

5) 腎移植における臨床的研究

岐阜薬科大学 薬物動態学研究室および本学附属病院薬剤部との共同研究により、免疫抑制剤の適正使用の確立を目指し、その成果として移植腎の長期機能維持を目指す。

6) 鏡視下手術手技の開発研究

新たな技術および器具、器材の開発により、鏡視下手術の適応の拡大を目指す。

(9) 麻酔・疼痛制御学分野

1. 研究の概要

麻酔・疼痛制御学分野の主な研究課題は、周術期管理の問題点解明・安全性確立と術後痛を含む難治性疼痛治療の開発とを主眼に置いた研究である。脳脊髄の微小循環から周術期の脳脊髄保護に関する知見の収集（中枢神経系モニタリングを含む）や、酸化ストレスによる血管内皮障害に伴う病態・防御機構の解明、麻酔関連領域におけるシグナル伝達機能とその制御、難治性疼痛の対策を究明する研究を行っており、以下のようにまとめることができる。

- 1) 脳・脊髄循環に対する麻酔及びその関連薬に関する研究
- 2) 麻酔関連領域における（中枢神経系等）におけるシグナル伝達機能を含む研究
- 3) 酸化ストレス障害等による血管内皮障害および血管保護に関する研究
- 4) 遷延性術後痛を含む難治性疼痛制御に関する研究
- 5) 血小板凝集機能と周術期管理に関する研究

過去 10 年間にわたり科学研究費の配分を受け、頭蓋内及び脊髄腔内有窓法を用いて脳および脊髄の微小循環に対する麻酔薬・麻酔関連薬や生理学的刺激に対する反応の作用機序に関する活発な研究を行い、最近では脳脊髄保護の基礎的研究まで仕事の幅を広げてきた。臨床医から見た臨床現場での疑問・問題点をより詳細に解明すべく血管保護・神経保護等のシグナル分子機構への作用も検討し臨床応用の可能性を示した。また、周術期管理における血小板凝集亢進と抑制に関する問題点とメカニズムを解析している。さらに、近年注目されている遷延性術後痛に関する予防・治療法に関する研究を進めている。

2. 名簿

教授：	飯田宏樹	Hiroki Iida
准教授：	竹中元康	Motoyasu Takenaka
講師：	田辺久美子	Kumiko Tanabe
講師：	長瀬 清	Kiyoshi Nagase
講師：	杉山陽子	Yoko Sugiyama
講師：	熊澤昌彦	Masahiko Kumazawa
助教：	福岡尚和	Naokazu Fukuoka
助教：	山口 忍	Shinobu Yamaguchi
助教：	吉村文貴	Noritaka Yoshimura
医員：	鬼頭和裕	Kazuhiro Kito
医員：	南 公人	Kimito Minami
医員：	中西真有美	Mayumi Nakanishi
医員：	玉木久美子	Kumiko Tamaki
医員：	鬼頭祐子	Yuuko Kito
医員：	大沼隆史	Takashi Oonuma
医員：	阪田耕治	Kouzi Sakata
医員：	木村 緑	Midori Kimura
医員：	館 順子	Junko Tachi
医員：	林 慶州	Keishu Hayashi
医員：	上田恭平	Kyohei Ueda
医員：	松原千里	Chisato Matsubara
医員：	田中亜里沙	Arisa Tanaka
医員：	西村温子	Atsuko Nishimura
医員：	岩田ちひろ	Chihiro Iwata

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 飯田宏樹. ペインクリニックではどのように注射をしているのですか? : 宗圓 聰, 紺野慎一編. 運動器の痛みをとる. やわらげる, 東京: メジカルビュー社; 2012年: 174-177.
- 2) 福岡尚和, 飯田宏樹. 間質性肺炎: 澄川耕二編. 麻酔前の評価・準備と予後予測, 東京: 克誠堂出版; 2012年: 23-27.
- 3) 飯田宏樹, 加藤真有美. 禁煙: 澄川耕二編. 麻酔前の評価・準備と予後予測, 東京: 克誠堂出版; 2012年: 46-52.

- 4) 飯田宏樹. 鎮痛補助薬 2)SNRI : 山本達郎編. 痛みの薬物治療, 東京: 文光堂; 2013年: 211-215.
- 5) 山口 忍, 飯田宏樹. 鎮痛補助薬 3)SSRI・NaSSA : 山本達郎編. 痛みの薬物治療, 東京: 文光堂; 2013年: 216-219.
- 6) 飯田宏樹, 松本茂美. 総論: 飯田宏樹, 内野博之, 田上 正, 安部洋一郎, 福井弥己郎(聖), 樋口比登実, 岡本健一郎, 井関雅子, 福崎 誠, 平川奈緒美, 豊川秀樹, 伊達 久, 今村佳樹, 西山隆久, 福井秀公編. ペインクリニック診断・治療ガイドー痛みからの解放とその応用ー第5版, 東京: 日本医事新報社; 2013年: 290-299.
- 7) 山口 忍, 豊川秀樹. 頸椎症性神経根症: 飯田宏樹, 内野博之, 田上 正, 安部洋一郎, 福井弥己郎(聖), 樋口比登実, 岡本健一郎, 井関雅子, 福崎誠, 平川奈緒美, 豊川秀樹, 伊達久, 今村佳樹, 西山隆久, 福井秀公編. ペインクリニック診断・治療ガイドー痛みからの解放とその応用ー第5版, 東京: 日本医事新報社; 2013年: 300-305.
- 8) 竹中元康. 頸椎症(頸部脊椎症): 飯田宏樹, 内野博之, 田上 正, 安部洋一郎, 福井弥己郎(聖), 樋口比登実, 岡本健一郎, 井関雅子, 福崎 誠, 平川奈緒美, 豊川秀樹, 伊達 久, 今村佳樹, 西山隆久, 福井秀公編. ペインクリニック診断・治療ガイドー痛みからの解放とその応用ー第5版, 東京: 日本医事新報社; 2013年: 326-330.
- 9) 山口 忍, 篠崎未緒. 助間神経痛: 飯田宏樹, 内野博之, 田上 正, 安部洋一郎, 福井弥己郎(聖), 樋口比登実, 岡本健一郎, 井関雅子, 福崎 誠, 平川奈緒美, 豊川秀樹, 伊達 久, 今村佳樹, 西山隆久, 福井秀公編. ペインクリニック診断・治療ガイドー痛みからの解放とその応用ー第5版, 東京: 日本医事新報社; 2013年: 388-390.
- 10) 杉山陽子, 飯田宏樹. 脊髄くも膜下硬膜外併用麻酔と脊髄くも膜下鎮痛単独: 川真田樹人編. 麻酔科医のための周術期疼痛管理, 東京: 中山書店; 2014年: 225-233.
- 11) 飯田宏樹. 痛みの基礎: 土肥修司, 澄川耕二編. TEXT 麻酔・蘇生学, 東京: 南山堂; 2014年: 469-488.
- 12) 飯田宏樹. ペインクリニックの対象疾患: 土肥修司, 澄川耕二編. TEXT 麻酔・蘇生学, 東京: 南山堂; 2014年: 489-499.
- 13) 南 公人. 局所麻酔のかけ方: 飯原弘二編. 脳神経外科の基本手技, 東京: 文光堂; 2014年: 18-20.
- 14) 田辺久美子, 飯田宏樹. 局所麻酔薬へのアドレナリン添加の意義: 花岡一雄編. 小外科手術のための局所麻酔, 東京: 克誠堂出版; 2014年: 161-170.
- 15) 南 公人, 吉谷健司, 大西佳彦. AVMもやもや秒患者の麻酔管理(成人): 内野博之編. 神経麻酔 Q&A, 東京: 総合医学社; 2014年: 151-155.
- 16) 飯田宏樹. 下垂体腫瘍摘出術: 内野博之編. 神経麻酔 Q&A, 東京: 総合医学社; 2014年: 208-213.
- 17) 飯田宏樹, 山口 忍. SSRI: 川真田樹人編. 5.痛み診断キーポイント, 東京: 文光堂; 2014年: 183-184.
- 18) 飯田宏樹. SNRI: 川真田樹人編. 5.痛み診断キーポイント, 東京: 文光堂; 2014年: 185.
- 19) 山口 忍, 飯田宏樹. 痛みの評価: 稲田英一, 上村裕一, 土田英昭, 村川雅洋編. 麻酔科研修ノート改訂第2版, 東京: 診断と治療社; 2014年: 469-470.
- 20) 堤 久美子, 飯田宏樹. Wake-up test: 川口昌彦, 中瀬裕之編. 術中神経モニタリングバイブルー術後神経合併症予防のための実践的手法とその解釈ー, 東京: 羊土社; 2014年: 232-235.
- 21) 飯田宏樹. 麻酔科学から見た疼痛へのアプローチー現状のオーバービューー: 小山 司, 樋口輝彦編. デュロキセチンのすべて, 東京: 先端医学社; 2014年: 232-238.
- 22) 山口 忍, 飯田宏樹. 薬物療法: 梅澤俊彦編. あなたも名医! 患者さんを苦しめる慢性痛にアタック!, 東京: 日本医事新報社; 2014年: 152-163.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 松本茂美, 飯田宏樹. 慢性痛に対するオピオイドーオピオイド治療の適応と患者選択ー, Anet 2012年; 1巻: 3-6.
- 2) 飯田宏樹. 慢性痛の包括的アプローチー慢性痛に対する最近の集学的治療ー, ペインクリニック 2012年; 33巻: 1653-1663.
- 3) 佐藤菊枝, 長瀬 清, 紀ノ定保臣. 診療情報という資産を生かす医療機関のためのデータ戦略ー経営改善, 医療の質, 患者サービスに真に役立つデータマネジメンターデータを資産に変えるノウハウー診療と経営に生かすデータマネジメント手法(解説/特集)ー, INNERVISION 2012年; 27巻: 46-50.
- 4) 田辺久美子, 飯田宏樹. グリア細胞と中枢神経保護機構, Anesthesia 21 Century 2013年; 15巻: 3-46.
- 5) 飯田宏樹. 脳血管と酸化ストレスー高圧酸素療法下での脳循環を含めてー, 九州高気圧環境医学会誌 2013年; 3巻: 1-8.
- 6) 飯田宏樹, 松本茂美. デュロキセチンの臨床, 日臨麻会誌 2013年; 33巻: 33-40.
- 7) 飯田宏樹. 周術期禁煙と麻酔, 日臨麻会誌 2013年; 33巻: 709-718.
- 8) 竹中元康. 脊髄循環および脊髄に関する研究の最新知見, Anesthesia 21 Century 2013年; 15巻: 38-43.

総説 (欧文)

- 1) Iida H, Iida M, Takenaka M. Anesthesia and cerebrospinal microcirculation: assessment using cranial- and spinal-window techniques. J Anesth. 2012;26:143-146.

- 2) Iida M, Iida H, Takenaka M, Tanabe K, Iwata K. Preventive effect of varenicline on impairment of endothelial function in cerebral vessels induced by acute smoking in rats. *J Anesth.* 2012;26:928-931.

原著 (和文)

- 1) 長瀬 清, 飯田宏樹. 術中に用いるオピオイドの種類によるベクロニウム使用量の比較, 麻酔 2012 年; 61 巻: 291-298.
- 2) 山田忠則, 鬼頭和裕, 太田宗一郎, 大島博人, 飯田宏樹. プロタミン投与後にアナフィラキシー様ショックを起こした症例, 臨床麻酔 2012 年; 36 巻: 537-538.
- 3) 上松友希, 中村好美, 天野雄平, 田辺久美子, 飯田宏樹. うつ病患者に対する修正型電気摩擦療法による脳血流の変化, 麻酔 2012 年; 61 巻: 126-129.
- 4) 永坂由紀子, 若松正樹, 開田剛史, 町野麻美, 白崎礼美, 平野洋子. 帝王切開症例の脊髄も膜下麻酔における体水分組成の検討, 麻酔 2012 年; 61 巻: 368-372.
- 5) 大島博人. 手術室効率的運用の施行が緊急手術の受け入れ状況に与えた効果の検討, 日本手術医学会誌 2012 年; 33 巻: 63-66.
- 6) 山口 忍, 宮本真紀, 吉村文貴, 松本茂美, 竹中元康, 飯田宏樹. 疼痛疾患におけるガバペンチンの有効性とその長期効果, 日臨麻会誌 2012 年; 32 巻: 366-370.
- 7) 長瀬 清, 村瀬妙子, 後藤紀久. 院内患者の緊急手術申し込みルール導入とその成果, 日本手術医学会誌 2012 年; 33 巻: 401-403.
- 8) 中村好美, 増江達彦, 榊原いづみ, 飯田宏樹. 大動脈弁狭窄症を合併した敗血症性ショックに対する回復術管理の一例, *Cardiovascular Anesthesia* 2012 年; 16 巻: 71-75.
- 9) 上松友希, 村田哲哉, 垂石智重子, 酢谷朋子, 高田基志, 鈴木 照. 肺動脈カテーテルによる肺動脈損傷が疑われた僧帽弁置換術の 1 症例, 麻酔 2013 年; 62 巻: 200-203.
- 10) 岩田賢治, 竹中元康, 飯田宏樹. 喫煙による酸化ストレスに対するニコランジルの脳血管内皮保護効果—ラット Chosed Cranial Window 法を用いた検討—, *Therapeutic Research* 2013 年; 34 巻: 308-309.
- 11) 大島博人, 飯田祐子, 鬼頭和裕, 河村三千香, 山下実華, 太田宗一郎, 上田宣夫, 飯田宏樹. 不適切なエアウェイコープ操作が気管チューブの口腔咽頭内における屈曲形成の要因となったと考えられた 1 症例, 麻酔 2013 年; 62 巻: 674-677.
- 12) 飯田祐子, 大島博人, 鬼頭和裕, 河村三千香, 山下実華, 太田宗一郎, 飯田宏樹. 薬物溶出性ステント留置後 5 年以上経過した患者の食道がん切除術直後に超遅発生ステント血栓症を生じた 1 症例, 麻酔 2013 年; 62 巻: 724-727.
- 13) 大島博人, 飯田祐子, 鬼頭和裕, 河村三千香, 山下実華, 太田宗一郎, 上田宣夫, 飯田宏樹. 手関節固定用ホルダーの使用が原因で術後正中神経麻痺を発症したと考えられた 1 症例, 麻酔 2013 年; 62 巻: 733-736.
- 14) 松本茂美, 山口 忍, 吉村文貴, 竹中元康, 飯田宏樹. 慢性痛患者におけるデュロキセチンの有効性と副作用の出現について, *ペインクリニック* 2013 年; 34 巻: 1160-1162.
- 15) 加藤真有美, 飯田宏樹, 堤久美子, 上松友希, 宮本真紀, 岩田賢治, 飯田祐子, 飯田真美. 岐阜大学附属病院における予定手術患者の術前喫煙状況に関する調査から見た課題, 麻酔 2013 年; 62 巻: 1013-1016.
- 16) 上松友希, 山田忠則, 粕谷由子. 腰椎後方固定術後に上肢のしびれを発症し, *Os Odontoideum* と診断された 1 例, 臨床麻酔 2013 年; 37 巻: 175-177.
- 17) 竹中元康. 脊椎手術後症候群に対するインターベンション治療(熱凝固術)について, 慢性疼痛 2013 年; 32 巻: 65-68.

原著 (欧文)

- 1) Minami K, Iida M, Iida H. Case report: central venous catheterization via internal jugular vein with associated formation of perioperative venous thrombosis during surgery in the prone position. *J Anesth.* 2012;26:464-466. IF 1.117
- 2) Tanabe K, Matsushima-Nishiwaki R, Iida M, Kozawa O, Iida H. Involvement of phosphatidylinositol 3-kinase/Akt on basic fibroblast growth factor-induced glial cell line-derived neurotrophic factor release from rat glioma cells. *Brain Res.* 2012;1463:21-29. IF 2.828
- 3) Chen K, Tanabe K, Yanagidate F, Kawasaki Y, Zhang L, Dohi S, Iida H. Intrathecal endothelin-1 has antinociceptive effects in rat model of postoperative pain. *Eur J Pharmacol.* 2012;697:40-46. IF 2.684
- 4) Iwata K, Tanabe K, Sugiyama Y, Tanaka M, Takenaka M, Iida H. Anesthetic management for a patient with very-long-chain acyl-coenzyme A dehydrogenase deficiency. *J Anesth.* 2012;26:957-958. IF 1.117
- 5) Doi T, Tokuda H, Matsushima-Nishiwaki R, Cuong NT, Kageyama Y, Iida Y, Kondo A, Akamatsu S, Otsuka T, Iida H, Kozawa O, Ogura S. Effect of antithrombin III on glycoprotein Ib/IX/V activation in human platelets: suppression of thromboxane A2 generation. *Prostag Leukotr Ess.* 2012;87:57-62. IF 1.984
- 6) Iida M, Tanabe K, Matsushima-Nishiwaki R, Kozawa O, Iida H. Adenosine monophosphate-activated protein kinase regulates platelet-derived growth factor-BB-induced vascular smooth muscle cell migration. *Arch Biochem Biophys.* 2013;530:83-92. IF 3.043
- 7) Akamatsu S, Kojima A, Tanaka A, Hayashi K, Hashimoto T. Symmetric Peripheral Gangrene. *Anesthesiology.* 2013;118:1455. IF 6.168
- 8) Yasuda E, Fushimi K, Suzuki Y, Shimizu K, Takami T, Zustin J, Patel P, Ruhnku K, Shimada T, Boyce

- B, Kokas T, Barone C, Theroux M, Mackenzie W, Nagel B, Ryerse J S, Orii K E, Iida J, Orii T, Tomatu S. Pathogenesis of morquio a syndrome: An autopsied case reveals systemic storage disorder. *Mol Genet Metab.* 2013;109:301-311. IF 2.827
- 9) Takada M, Taruishi C, Sudani T, Suzuki A, Iida H. Intravenous flurbiprofen axetil can stabilize the hemodynamic instability due to mesenteric traction syndrome — Evaluation with continuous measurement of the systemic vascular resistance index using a FloTrac® sensor. *J Cardiothor Vasc An.* 2013;27:696-702. IF 1.482
- 10) Iwata K, Iida H, Iida M, Takenaka M, Tanabe K, Fukuoka N, Uchida M. Nicorandil protects pial arterioles from endothelial dysfunction induced by smoking in rats. *J Neurosurg Anesth.* 2013; 25:392-398. IF 2.347
- 11) Takenaka M, Iida H, Matsumoto S, Yamaguchi S, Yoshimura N, Miyamoto M. Successful Treatment by Adding Duloxetine to Pregabalin for Peripheral Neuropathy Induced by Paclitaxel. *Am J Hosp Palliat Me.* 2013;30:732-734. IF 1.347
- 12) Zhang L, Tanabe K, Yanagidate F, Kawasaki Y, Chen G, Dohi S, Iida H. Different effects of local anesthetics on extracellular signal-regulated kinase phosphorylation in rat dorsal horn neurons. *Eur J Pharmacol.* 2014;734:132-136. IF 2.684
- 13) Iida M, Tanabe K, Kozawa O, Iida H. Differential effects of intravenous anesthetics on PDGF-BB-Induced vascular smooth muscle cell migration. *Cell Physiol Biochem.* 2014;33:1827-1837. IF 3.550
- 14) Iwata C, Abe A, Nakamura N, Morita H. Hypergravity exposure for 14 days increases the effects of propofol in rats. *Anesth Analg.* 2014;118:125-131. IF 3.422
- 15) Tanabe K, Matsushima-Nishiwaki R, Kozawa O, Iida H. Dexmedetomidine suppresses interleukin-1 β -induced interleukin-6 synthesis in rat glial cells. *Int J Mol Med.* 2014;34:1023-1038. IF 1.880
- 16) Iida Y, Doi T, Matsushima-Nishiwaki R, Tokuda H, Ogura S, Kozawa O, Iida H. (-)-Epigallocatechin gallate selectively inhibits adenosine diphosphate-stimulated human platelet activation: suppression of heat shock protein 27 phosphorylation via p38 mitogen-activated protein kinase. *Mol Med Rep.* 2014;10:1383-1388. IF 1.484

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：内田昌良，研究分担者：飯田宏樹，飯田真美；科学研究費補助金基盤研究(C)：脳虚血再灌流時の吸入麻酔薬による脳保護作用とアンドロジェンの役割；平成 22-24 年度；3,100 千円(1,100：1,000：1,000 千円)
- 2) 研究代表者：杉山陽子；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：人工呼吸管理中の肺保護における GABA 受容体の役割；平成 23-25 年度；2,500 千円(1,000：800：700 千円)
- 3) 研究代表者：赤松 繁，研究分担者：小澤 修；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：過大侵襲に対する凝固線溶系におけるストレス応答の分子基盤の解析；平成 23-25 年度；3,900 千円(1,700：1,100：1,100 千円)
- 4) 研究代表者：田辺久美子，研究分担者：小澤 修；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：全身麻酔薬の中樞神経系に対する脳保護作用の分子機序の解析；平成 23-25 年度；4,100 千円(2,200：1,100：800 千円)
- 5) 研究代表者：熊澤昌彦，研究分担者：田辺久美子，飯田宏樹；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：血管平滑筋細胞における分化・増殖の分子基盤の解析；平成 23-25 年度；4,000 千円(1,500：1,400：1,100 千円)
- 6) 研究代表者：飯田宏樹，研究分担者：竹中元康，飯田真美；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：NO 吸入療法による周術期中枢神経保護法の確立に向けて；平成 24-26 年度；4,200 千円(1,500：1,300：1,400 千円)
- 7) 研究代表者：福岡尚和；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：アトロピンの脳血管内皮機能への作用；平成 25-26 年度；1,300 千円(600：700 千円)
- 8) 研究代表者：飯田美紀；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：全身麻酔薬が術後創傷治癒に与える影響—血管平滑筋細胞の遊走・増殖能から見た検討—；平成 26-27 年度；1,300 千円(600：700 千円)
- 9) 研究代表者：赤松 繁，研究分担者：小澤 修；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：敗血症の進展における凝固・線溶系と炎症反応のクロストークの分子基盤；平成 26-28 年度；3,700 千円(1,500：1,100：1,100 千円)
- 10) 研究代表者：杉山陽子，研究分担者：飯田宏樹，田辺久美子；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：気道炎症の収束機転における GABAB 受容体の役割；平成 26-28 年度；2,900 千円(1,100：1,000：800 千円)

- 11) 研究代表者：長瀬 清；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：周術期ビックデータを活用した体温管理の可視化と手術患者アウトカムの知識探索型分析；平成 26－28 年度；1,400 千円(600：500：300 千円)
- 12) 研究代表者：田辺久美子，研究分担者：小澤 修；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：血液一脳関門の機能維持からみた中枢神経保護の分子解析；平成 26－28 年度；3,800 千円(1,500：1,500：800 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

飯田宏樹：

- 1) 日本麻酔学会代議員(～現在)
- 2) 日本ペインクリニック学会評議員(～現在)
- 3) 日本ペインクリニック学会理事(～現在)
- 4) 日本臨床麻酔学会評議員(～現在)
- 5) 日本疼痛学会評議員(～現在)
- 6) 日本疼痛学会理事(～現在)
- 7) 日本神経麻酔集中治療研究会評議員(～現在)
- 8) 日本神経麻酔集中治療研究会理事(～現在)
- 9) 日本区域麻酔学会評議員(～現在)
- 10) 日本蘇生学会評議員(～現在)
- 11) 日本脳神経モニタリング学会理事(～現在)
- 12) 日本慢性疼痛学会評議員(～現在)

竹中元康：

- 1) 日本麻酔科学学会評議員(～現在)
- 2) 日本ペインクリニック学会評議員(～現在)

2) 学会開催

飯田宏樹：

- 1) 日本麻酔科学会東海・北陸第 11 回学術集会(平成 25 年 9 月，岐阜)

3) 学術雑誌

飯田宏樹：

- 1) 日本ペインクリニック学会誌編集委員(～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

飯田宏樹：

- 1) 第 15 回岐阜周術期循環管理研究会(平成 24 年 1 月，岐阜，特別講演「岡山大学病院の周術期管理の実際と展望」座長)
- 2) 岐阜麻酔学術講演会(平成 24 年 2 月，岐阜，特別講演「手術室の効率化と安産対策」座長)
- 3) 第 41 回日本慢性疼痛学会(平成 24 年 2 月，東京，ランチョンセミナー「運動器にかかわる慢性疼痛の疫学審査」座長)
- 4) 第 2 回岐阜県慢性疼痛講演会(平成 24 年 4 月，岐阜，特別講演「慢性疼痛の薬物療法～その現状と問題点について～」座長)

- 5) 日本ペインクリニック学会第 46 回大会(平成 24 年 7 月, 松江, 招待講演「慢性痛動物モデルにおける LPA を介する痛みのメカニズムと痛み治療のしくみ」座長)
- 6) 日本麻酔科学会東海・北陸支部第 10 回学術集会(平成 24 年 9 月, 名古屋, 共催セミナー「ぶれない麻酔薬デスフルラン」座長)
- 7) 第 42 回日本慢性疼痛学会(平成 25 年 2 月, 東京, シンポジウム「慢性痛に対するインターベンション療法」座長)
- 8) 第 21 回日本集中治療医学会東海北陸地方会(平成 25 年 6 月, 岐阜, ランチョンセミナー「ICU における PAD ガイドラインと The ABCDEs Bundle」座長)
- 9) 日本ペインクリニック学会第 47 回大会(平成 25 年 7 月, 大宮, 招聘講演「Pain clinic in Korea」座長)
- 10) 日本麻酔科学会東海・北陸支部第 11 回学術集会(平成 25 年 9 月, 岐阜, 特別講演「坐位手術の臨床的意義－麻酔科医との連携－」座長)
- 11) 日本臨床麻酔学会第 33 回大会(平成 25 年 11 月, 金沢, シンポジウム「周術期神経系モニタリング－コツとピットフォール－」座長)
- 12) 日本蘇生学会第 32 回大会(平成 25 年 11 月, 東京, シンポジウム「脳脊髄虚血・保護の新知見」座長)
- 13) 日本麻酔科学会第 61 回学術集会(平成 26 年 5 月, 横浜, 招請講演「抗凝固療法と区域麻酔」座長)
- 14) 日本麻酔科学会第 61 回学術集会(平成 26 年 5 月, 横浜, 招待講演「小児中枢神経疾患の脳波モニタリング」座長)
- 15) 第 36 回日本疼痛学会(平成 26 年 6 月, 大阪, イブニングセミナー「脳とこころはどのように痛みを捉えているか～神経疼痛学に向けて」座長)
- 16) 第 20 回日本脳神経モニタリング学会(平成 26 年 7 月, 東京, 特別講演「脊髄脊椎モニタリングの実際とその適正化に向けて」座長)
- 17) 日本ペインクリニック学会第 48 回大会(平成 26 年 7 月, 東京, ランチョンセミナー「オピオイドの特徴をいかしたがんの痛みからの解放」座長)

竹中元康：

- 1) 日本麻酔科学会第 60 回学術集会(平成 25 年 5 月, 札幌, 広報委員会企画：医学生・臨床研修医(初期)招待企画「COPD 患者の術前・術中麻酔管理」コメンテータ)

赤松 繁：

- 1) 日本麻酔科学会第 60 回学術集会(平成 25 年 5 月, 札幌, シンポジウム「左室拡張能障害と周術期管理」座長)
- 2) 第 22 回日本集中治療医学会東海北陸地方会総会・学術集会(平成 26 年 6 月, 名古屋, 教育講演「人工呼吸管理の基礎」座長)

福岡尚和：

- 1) 日本麻酔科学会第 61 回学術集会(平成 26 年 5 月, 横浜, 「術中脊髄機能モニタリング」コメンテータ)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

- 1) 内田昌良, 飯田宏樹, 飯田真美：脳虚血再灌流時の吸入麻酔薬による脳保護作用とアンドロジェンの役割：平成 22-24 年度科学研究補助金基盤研究(C)研究成果報告書(平成 25 年 3 月)
- 2) 赤松 繁, 飯田宏樹：過大侵襲に対する凝固綿溶系におけるストレス応答の分子基盤の解析：平成 23-25 年度科学研究補助金基盤研究(C)研究成果報告書(平成 26 年 3 月)
- 3) 田辺久美子, 小澤 修：全身麻酔薬の中枢神経系に対する脳保護作用の分子機序の解析：平成 23-25 年度科学研究補助金基盤研究(C)研究成果報告書(平成 26 年 3 月)

- 4) 熊澤昌彦, 田辺久美子, 飯田宏樹: 血管平滑筋細胞における分化・増殖の分子基盤の解析: 平成 23-25 年度科学研究補助金基盤研究(C)研究成果報告書(平成 26 年 3 月)
- 5) 杉山陽子: 人工呼吸管理中の肺保護における GABA 受容体の役割: 平成 23-25 年度科学研究補助金若手研究(B)研究成果報告書(平成 26 年 3 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

大学病院はもとより関連病院の麻酔科の業務の増加などによるマンパワー不足に伴い、基礎研究に避ける時間が減ったことが制限因子となっているが、できるだけ臨床面を科学的に捉える臨床研究をすすめることによって、アメリカ麻酔学会・ヨーロッパ麻酔学会・国際麻酔学会議等の外国および国際学会での発表、そして日本麻酔科学会・日本臨床麻酔学会・日本ペインクリニック学会への発表を通して、医局員のリサーチマインドの維持は出来ていると評価している。

現状の問題点及びその対応策

医学部および病院の全面移転から 10 年以上を経て診療体制並びに研究体制も整備されてきた。しかし、地方大学での麻酔科医のマンパワーの確保の困難さは当施設でも明らかである現状の中で附属病院の収入増加のためには手術数の増加が必要であり、また地域救急体制の中心として、またがん拠点病院としての機能から当病院で手術が必要となる患者数が増えることは必然であった。それを中央部門として支える麻酔科医としての臨床業務の負担が増加するために、研究業務に割ける人員・時間が限られていることが研究を遂行している上での最も重要な実質的な問題である。現在研究を希望して大学院に入学している医師にも学費を払いながら、臨床業務を義務化して遂行せざるを得ない。抜本的な改革は今後の問題として残されている。研究費は幸いにも科学研究費の配分を受け、研究室の整備も段階的に進めてきたので当面は円滑な研究活動が期待できる。

今後の展望

現在進めている研究を少ない研究人員・時間でどのように発展させていくかが今後も続く課題である。地域医療の中心である当病院の社会的使命として優れた臨床医を関連する地域医療機関に派遣するという仕事があるだけに、当面は著明なマンパワーの増加は期待できないので、現在も行っている他の基礎部門との共同研究によって、より効率的に研究を遂行することが必要であると考えている。現在、グリア細胞におけるシグナル伝達を中心に成果も上がっているため、この分野での活発な成果が期待される。また、脳脊髄血管の研究においても、血管の反応性の研究を超えて組織保護に繋がるシグナル伝達を含めたメカニズムに迫る分野へ発展させていく予定である。さらに、より一層基礎分野との研究協力を活性化することを考慮している。

研究室での研究遂行の遂行に十分な人員・時間が割けないところは周術期管理において日々の臨床活動の中で、臨床研究を進め、臨床の安全性の検討を図るべき研究プロジェクトを推進している。また、遷延性術後痛や疼痛外来での患者治療を行いながら、難治性疼痛の制御に関する方法の解明を通じて臨床研究を維持し、社会のニーズに応えると共にリサーチマインドの維持に努め、科学的な思考のできる臨床医を育てていくことを目標に掲げている。

(10) 口腔病態学分野

1. 研究の概要

臨床研究：最近の分子生物学の発展により、多くの疾患において分子生物学的機序が明らかとされて来ている。また、近年の再生医療研究の発展も著しく、口腔医療への応用も様々な面で進展して来ている。この現状を鑑み、当分野では、口腔病変（口腔がん、白板症、扁平苔癬、その他歯原性腫瘍など）の解析と、再生医療の臨床展開に軸足を置き以下の研究課題に取り組んでいる。

- 1) 口腔病変の分子疫学的解析
- 2) 口腔機能再建（移植・再生医療）
- 3) 口腔乾燥症の病態と治療
- 4) 口腔がんの集学的治療
- 5) ヒト歯胚・歯髄からの幹細胞採取と iPS 細胞化・バンク化事業

基礎研究：口腔がんの次世代治療法開発を目指し、発がん・悪性化進展プロセスにおける epigenetic 因子の関与とその制御の可能性および顎・口腔機能の改善・再生に対する細胞工学的検討を視野に以下の検討を行なっている。

- 1) がん悪性化進展機序における DNA メチル化異常の解析
- 2) 再生医療の新技术開発
- 3) 口腔がん化学予防法の開発
- 4) ヒト歯胚・歯髄からの幹細胞採取と iPS 細胞化・バンク化事業

2. 名簿

教授：	柴田敏之	Toshiyuki Shibata
講師：	牧田浩樹	Hiroki Makita
講師：	加藤恵三	Keizo Kato
講師：	畠山大二郎	Daijiro Hatakeyama
助教：	米本和弘	Kazuhiro Yonemoto
助教：	玉置也剛	Naritaka Tamaoki
助教：	飯田一規	Kazuki Iida
医員：	川口知子	Tomoko Kawaguchi
医員：	吉田浩明	Hiroaki Yoshida
医員：	井上敬介	Keisuke Inoue

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）
なし

総説（和文）
なし

総説（欧文）
なし

原著（和文）

- 1) 米本和弘, 牧田浩樹, 玉置也剛, 加藤恵三, 畠山大二郎, 柴田敏之. 咬筋内から顎下部に陥頓した血管奇形の1例, 日本口腔診断学会 2012年; 25巻: 22-24.
- 2) 安田 聡, 市原秀記, 近藤英仁, 武内勝章, 柴田敏之. マクロ CK 血症を伴った顎関節症の1例, 岐阜大学医学部紀要 2012年; 57巻: 1-4.
- 3) 中島教行, 飯田一規, 畠山大二郎, 加藤恵三, 牧田浩樹, 柴田敏之. 開口訓練中に仮性浅側頭動脈瘤を生じた顎骨骨折の1例, 日本口腔診断学会誌 2013年; 26巻: 323-326.

原著（欧文）

- 1) Hatakeyama D, Tamaoki N, Iida K, Yonemoto K, Kato K, Makita H, Toida M, Sibata T. Simple bone cyst of the mandibular condyle in a child: report of a case. J Oral Maxil Surg. 2012;70:2118-2123. IF 1.280
- 2) Kudo Y, Iizuka S, Yoshida M, Nguyen PT, Siriwardena SB, Tsunematsu T, Ohbayashi M, Ando T,

- Hatakeyama D, Shibata T, Koizumi K, Maeda M, Ishimaru N, Ogawa I, Takata T. Periostin directly and indirectly promotes tumor lymphangiogenesis of head and neck cancer. PLoS One. 2012;7:e44488. IF 3.534
- 3) Iida K, Takeda-Kawaguchi T, Hada M, Yuriguchi M, Aoki H, Tamaoki N, Hatakeyama D, Kunisada T, Shibata T, Tezuka K. Hypoxia-enhanced derivation of iPSCs from human dental pulp cells. J Dent Res. 2013;92:905-910. IF 4.144
- 4) Kato H, Kanematsu M, Kato Z, Teramoto T, Mizuta K, Aoki M, Makita H, Kato K. Necrotic cervical nodes: Usefulness of diffusion-weighted MR imaging in the differentiation of suppurative lymphadenitis from malignancy. Eur J Radiol. 2013;82:e28-35. IF 2.160
- 5) Kato H, Kanematsu M, Makita H, Kato K, Hatakeyama D, Shibata T, Mizuta K, Aoki M. CT and MR imaging findings of palatal tumors. Eur J Radiol. 2014;83:e137-146. IF 2.160
- 6) Yamashita T, Kato K, Long NK, Makita H, Yonemoto K, Iida K, Tamaoki N, Hatakeyama D, Shibata T. Effects of smoking and alcohol consumption on 5-fluorouracil-related metabolic enzymes in oral squamous cell carcinoma. Mol Clin Oncol. 2014;2:429-434.
- 7) Tamaoki N, Takahashi K, Aoki H, Iida K, Kawaguchi T, Hatakeyama D, Inden M, Chosa N, Ishisaki A, Kunisada T, Shibata T, Goshima N, Yamanaka S, Tezuka K. The homeobox gene DLX4 promotes generation of human induced pluripotent stem cells. Sci Rep. 2014;4:7283 IF 5.078
- 8) Takeda-Kawaguchi T, Sugiyama K, Chikusa S, Iida K, Aoki H, Tamaoki N, Hatakeyama D, Kunisada T, Shibata T, Fusaki N, Tezuka K. Derivation of iPSCs after culture of human dental pulp cells under defined conditions. PLoS One. 2014;9:e115392. IF 3.534

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：柴田敏之，研究分担者：牧田浩樹，加藤恵三，原 明，山下知己，宮崎康雄；科学研究費補助金基盤研究(B)海外学術調査：東南アジアの噛みタバコ習慣が口腔粘膜の遺伝子メチル化異常に及ぼす影響；平成 21-25 年度；15,730 千円(3,120：3,250：3,120：3,120：3,120 千円)
- 2) 研究代表者：川口知子，研究分担者：柴田敏之，牧田浩樹，畠山大二郎；科学研究費補助金基盤研究(C)：動物由来物質・因子を使わない安全なヒト歯髄由来幹細胞の樹立と iPS 細胞化の検討；平成 22-24 年度；4,160 千円(1,560：1,300：1,300 千円)
- 3) 研究代表者：米本和弘，研究分担者：柴田敏之，牧田浩樹，加藤恵三；科学研究費補助金基盤研究(C)：4NQO 誘発ラット舌癌モデルにおけるヒストン修飾の解析；平成 22-24 年度；3,900 千円(1,430：1,170：1,300 千円)
- 4) 研究代表者：加藤恵三，研究分担者：牧田浩樹，山下知己，柴田敏之，原 明；科学研究費補助金基盤研究(C)：4NQO 誘発ラット舌癌モデルによる早期メチル化異常と脱メチル化による影響の解析；平成 22-24 年度；4,160 千円(1,560：910：1,690 千円)
- 5) 研究代表者：柴田敏之，研究分担者：畠山大二郎，牧田浩樹，加藤恵三，長瀬朋子，川口知子；科学研究費補助金基盤研究(B)：ヒト歯髄由来組織幹細胞のステムネス性維持と iPS 細胞の良質化；平成 22-25 年度；18,850 千円(5,200：4,550：4,550：4,550 千円)
- 6) 研究代表者：畠山大二郎，研究分担者：川口知子，玉置也剛，飯田一規，柴田敏之；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：ヒト歯髄細胞の遺伝子発現プロファイルと iPS 細胞誘導効率の検証；平成 23-25 年度；4,940 千円(1,820：1,560：1,560 千円)
- 7) 研究代表者：飯田一規；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：高齢者のヒト歯髄細胞から iPS 細胞を効率よく樹立するための基礎的検討；平成 23-26 年度；4,030 千円(910：1,040：1,040：1,040 千円)
- 8) 研究代表者：玉置也剛；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：ヒト iPS 細胞の誘導効率を高める新規初期化因子の発見；平成 24-26 年度；3,770 千円(1,560：1,040：1,170 千円)
- 9) 研究代表者：鈴木邦明(北海道大学)，研究分担者：柴田敏之，飯田一規，玉置也剛；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：歯髄幹細胞および iPS 細胞の多分化能維持における ALP の機能解明とその応用；平成 24-25 年度；3,770 千円(2,080：1,690 千円)
- 10) 研究代表者：米本和弘，研究分担者：牧田浩樹，柴田敏之；科学研究費補助金基盤研究(C)：4NQO 誘発ラット舌癌モデルにおける micro RNA の解析；平成 25-27 年度；3,900 千円(1,300：1,430：1,170 千円)
- 11) 研究代表者：加藤恵三，研究分担者：原 明，田中卓二，玉置也剛，柴田敏之；科学研究費補助金基盤研究(C)：環境因子による口腔粘膜メチル化異常の経時的解析と脱メチル化による影響の解析；平成 25-27 年度；4,680 千円(650：2,340：1,690 千円)
- 12) 研究代表者：古川昭栄(岐阜薬科大学)，研究分担者：柴田敏之；科学研究費補助金挑戦的萌芽研究：脊髄損傷修復作用をもつヒト歯髄由来幹細胞の特性の解明とその医学的応用；平成 25-26 年度；

3,770 千円(1,950 : 1,820 千円)

- 13) 研究代表者：畠山大二郎，研究分担者：川口知子，玉置也剛，飯田一規，柴田敏之；科学研究費補助金基盤研究(C)：ヒト歯髄細胞における iPS 細胞誘導効率の促進因子の解析；平成 26-28 年度；4,680 千円(1,560 : 1,560 : 1,560 千円)
- 14) 研究代表者：柴田敏之，研究分担者：飯田一規，玉置也剛，川口知子，畠山大二郎，石崎 明；科学研究費補助金基盤研究(B)：ヒト歯髄幹細胞からの iPS 細胞誘導の効率化・良質化の検討；平成 26-30 年度；15,730 千円(3,510 : 3,250 : 2,990 : 2,990 : 2,990 千円)
- 15) 研究代表者：柴田敏之，研究分担者：牧田浩樹，加藤恵三，米本和弘，安彦善裕；科学研究費補助金基盤研究(B)海外学術調査：東南アジアの噛みタバコ習慣と口腔粘膜 DNA メチル化異常の擦過標本における検討；平成 26-30 年度；15,990 千円(3,510 : 3,120 : 3,120 : 3,120 千円)
- 16) 研究代表者：川口知子，研究分担者：柴田敏之，畠山大二郎，飯田一規，玉置也剛；科学研究費補助金基盤研究(C)：動物因子不含ヒト歯髄由来幹細胞を用いた脊髄損傷治療モデルの作成；平成 26-28 年度；4,680 千円(1,560 : 1,560 : 1,560 千円)
- 17) 研究代表者：柴田敏之，研究分担者：飯田一規，玉置也剛，川口知子；科学研究費補助金挑戦的萌芽研究：ヒト iPS 細胞からのがん幹細胞誘導の試み；平成 26-27 年度；3,380 千円(1,690 : 1,690 千円)
- 18) 研究代表者：福光秀文(岐阜薬科大学)，研究分担者：柴田敏之；平成 26 年度臨床研究推進支援経費：脊髄損傷修復作用をもつヒト歯髄由来幹細胞の特性の解明とその医学的応用；平成 25-26 年度；500 千円

2) 受託研究

- 1) 牧田浩樹，柴田敏之，加藤恵三，畠山大二郎，米本和弘，飯田一規，玉置也剛：アセトアミノフェン製剤特定使用成績調査；平成 24-25 年；90 千円：昭和薬品化工(株)

3) 共同研究

- 1) 柴田敏之，牧田浩樹：口腔扁平苔癬治療におけるセファランチン投与例に対する臨床効果および有害事象の多施設・後方視的共同研究；平成 26-27 年；300 千円：化研生薬(株)

5. 発明・特許出願状況

- 1) 手塚健一，柴田敏之，國貞隆弘，玉置也剛，武田知子，山中伸弥，高橋和利：効率的な人工多能性幹細胞の樹立方法(発明)；平成 26 年(特許第 5553178 号)
- 2) 手塚健一，柴田敏之，國貞隆弘，玉置也剛，武田知子，山中伸弥，高橋和利：効率的な人工多能性幹細胞の樹立方法；2014 年(韓国特許第 10-1372752 号)
- 3) 手塚健一，柴田敏之，國貞隆弘，玉置也剛，武田知子，山中伸弥，高橋和利：Efficient method for establishing induced pluripotent stem cells；2014 年(カナダ特許第 2,732,401 号)

6. 学会活動

1) 学会役員

柴田敏之：

- 1) 日本口腔外科学会評議員(～平成 24 年 9 月)
- 2) 日本口腔外科学会代議員(平成 24 年 10 月～現在)
- 3) 日本口腔外科学会中部支部総務理事(平成 24 年 10 月～現在)
- 4) 日本口腔科学会評議員(～現在)
- 5) 日本口腔腫瘍学会評議員(～現在)
- 6) 日本口腔顔面外傷学会理事(～現在)
- 7) 日本口腔外科学会雑誌編集査読委員会委員(～平成 24 年 8 月)
- 8) 日本口腔外科学会理事(～現在)
- 9) 日本口腔外科学会倫理委員会委員長(～現在)
- 10) 日本口腔外科学会医療安全委員会委員長(～現在)
- 11) 日本口腔外科学会専門医制度委員会委員(～現在)

牧田浩樹：

- 1) 日本口腔外科学会代議員(平成 24 年 10 月～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

柴田敏之：

- 1) 日本口腔外科学会雑誌編集査読委員会委員(～平成 24 年 8 月)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

柴田敏之：

- 1) 第 57 回(公社)日本口腔外科学会総会・学術大会(平成 24 年 10 月, 横浜, シンポジウム「歯・歯周組織・骨の再生医療」座長)
- 2) 第 22 回日本歯科医学会総会(平成 24 年 11 月, 大阪, シンポジウム「ヒト歯髄からの iPS 細胞の樹立と臨床応用」シンポジスト 1)
- 3) 第 58 回(公社)日本口腔外科学会総会・学術大会(平成 25 年 10 月, 福岡, シンポジウム「歯と口腔に対する新しい価値観の創造」座長)
- 4) 第 13 回日本再生医療学会総会(平成 26 年 3 月, 京都, シンポジウム「ヒト成人歯髄細胞の幹細胞性と iPS 細胞誘導」シンポジスト)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) Tamaoki N : International Association for Dental Research & American Association for Dental Research William J. Award(平成 24 年度)

9. 社会活動

柴田敏之：

- 1) 日本学術振興会特別研究員審査会専門委員(平成 24 年度～現在)
- 2) 岐阜県国保審査会審査委員(平成 24 年度～現在)
- 3) 岐阜県歯科技工士試験委員(平成 24 年度～現在)

牧田浩樹：

- 1) 岐阜県歯科技工士試験委員(平成 24 年度～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 牧田浩樹：「研究室から 大学はいま」抜いた歯で iPS 細胞作製：岐阜新聞(2013 年 6 月 11 日)
- 2) 柴田敏之：岐阜大学も iPS 備蓄 親知らずから作製 再生医療に活用：日本経済新聞(2014 年 7 月 22 日)

12. 自己評価

評価

口腔病態学分野としての総合的評価として、概ね目標を達成していると考えている。

現状の問題点及びその対応策

活動を推進するために最も必要である資金面は、継続して科学研究費の獲得目標を達成している。また、それに伴う研究成果も経時的に積み重ねられている。さらに、学内外の研究室との連携も重要と考え、研究分担についての協議を重ねている。これらの研究面においては、このままの努力を継続することにより成果が得られると考える。現在においては、人材の確保・育成が重要な課題であり、新しい人材にとって魅力的な施設であるための育成カリキュラムの構築とアピールが必要と考える。

今後の展望

現在、ヒト歯胚・歯髄からの組織幹細胞の集積・バンク化と iPS 細胞化を展開中であり、有望な結果を示しつつある。これを成長エンジンの柱の一つとして加え、脊髄損傷修復などの関連分野との発展を

模索している。さらに、我々の教室のもうひとつのテーマであるヒト口腔がんの **epigenetic factor** の解析は、iPS 細胞の細胞初期化と深く関わっており、両者は相乗効果をもたらすものと期待している。

〔神経統御学講座〕

(1) 高次神経形態学分野

1. 研究の概要

記憶・学習を始めとしたさまざまな脳機能のメカニズムの解明に取り組んでいる。また脳の老化や脳疾患の生じる機序の解明にも取り組んでいる。分子生物学的手法や細胞・組織学的手法、種々のイメージング技術などを用いて、脳内の微細な変化や機能的神経回路を可視化することで、これまで捉えることのできなかった現象を見出し、脳に関わるさまざまな現象のメカニズムに迫ろうとしている。

2. 名簿

教授： 山口 瞬 Shun Yamaguchi
准教授： 中村浩幸 Hiroyuki Nakamura
助教： 寺川洋平 Youhei Terakawa

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）
なし

総説（和文）
なし

総説（欧文）
なし

原著（和文）
なし

原著（欧文）

- 1) Rudinskiy N, Hawkes JM, Betensky RA, Eguchi M, Yamaguchi S, Spires-Jones TL, Hyman BT. Orchestrated experience-driven Arc responses are disrupted in a mouse model of Alzheimer's disease. *Nat Neurosci*. 2012;15:1422-1429. IF 14.976
- 2) Takao K, Kobayashi K, Hagihara H, Ohira K, Shoji H, Hattori S, Koshimizu H, Umemori J, Toyama K, Nakamura HK, Kuroiwa M, Maeda J, Atsuzawa K, Esaki K, Yamaguchi S, Furuya S, Takagi T, Walton NM, Hayashi N, Suzuki H, Higuchi M, Usuda N, Suhara T, Nishi A, Matsumoto M, Ishii S, Miyakawa T. Deficiency of Schnurri-2, an MHC enhancer binding protein, induces mild chronic inflammation in the brain and confers molecular, neuronal, and behavioral phenotypes related to schizophrenia. *Neuropsychopharmacol*. 2013;38:1409-1425. IF 7.833
- 3) Ohira K, Kobayashi K, Toyama K, Nakamura HK, Shoji H, Takao K, Takeuchi R, Yamaguchi S, Kataoka M, Otsuka S, Takahashi M, Miyakawa T. Synaptosomal-associated protein 25 mutation induces immaturity of the dentate granule cells of adult mice. *Mol Brain*. 2013;6:1-17. IF 4.345
- 4) Mizunuma M, Norimoto H, Tao K, Egawa T, Hanaoka K, Sakaguchi T, Hioki H, Kaneko T, Yamaguchi S, Nagano T, Matsuki N, Ikegaya Y. Unbalanced excitability underlies offline reactivation of behaviorally activated neurons. *Nat Neurosci*. 2014;17:503-505. IF 14.976
- 5) Susaki EA, Tainaka K, Perrin D, Kishino F, Tawara T, Watanabe TM, Yokoyama C, Onoe H, Eguchi M, Yamaguchi S, Abe T, Kiyonari H, Shimizu Y, Miyawaki A, Yokota H, Ueda HR. Whole-brain imaging with single-cell resolution using chemical cocktails and computational analysis. *Cell*. 2014;157:726-739. IF 33.116
- 6) Nonaka A, Toyoda T, Miura Y, Hitora-Imamura N, Naka M, Eguchi M, Yamaguchi S, Ikegaya Y, Matsuki N, Nomura H. Synaptic plasticity associated with a memory engram in the basolateral amygdala. *J Neurosci*. 2014;34:9305-9309. IF 6.747

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：中村浩幸；科学研究費補助金基盤研究(C)：ストレスに伴う脳活動は、噛み締めによって制御されるか？機能的MRIを用いた研究；平成22-24年度；4,420千円(2,080：910：1,430千

円)

- 2) 研究代表者：藤田雅文；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：授業の受け皿を育てる前頭前野活性化教材の開発；平成 24-26 年度；2,210 千円(1,430：390：390 千円)
- 3) 研究代表者：中村浩幸，共同利用実験者：飯高哲也(名古屋大学)，原田宗子(名古屋大学)；生体機能イメージング共同利用実験補助金(自然科学研究機構生理学研究所)：ヒトの表情による脳活動とその制御機序-Subliminal 画像を用いた研究；平成 24 年度；129 千円
- 4) 研究代表者：中村浩幸；生体機能イメージング共同利用実験補助金(自然科学研究機構生理学研究所)：噛み締め圧の強さと相関する脳活動の解明；平成 25 年度；118 千円
- 5) 研究代表者：寺川洋平；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：遺伝子工学技術を基盤とした記憶・学習を司る新規神経回路の同定；平成 25 年度；700 千円
- 6) 研究代表者：中村浩幸；共同利用・共同研究補助金(京都大学霊長類研究所)：1 次視覚野をバイパスする頭頂連合野への視覚入力の解明；平成 26 年度；99 千円
- 7) 研究代表者：寺川洋平；東海産業技術振興財団助成研究：遺伝子工学を基盤とした記憶・学習を司る神経回路の構造及び機能解析；平成 26 年度；600 千円
- 8) 研究代表者：寺川洋平；平成 26 年度大学活性化経費(研究：科研採択支援)：脳機能可視化動物を基盤とした in vivo での脆弱 X 症候群の責任遺伝子の機能解析；平成 26 年度；500 千円

2) 受託研究

- 1) 山口 瞬：脳内分子変化と電気生理学的・行動学的変化の統合解析；平成 21-26 年度；94,820 千円(9,520：26,300：17,000：11,620：16,380：14,000 千円)；科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業個人型研究(さきがけ)

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

山口 瞬：

- 1) 日本解剖学会代議員(~現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

- 1) 山口 瞬：脳内分子変化と電気生理学的・行動学的変化の統合解析；平成 23 年度科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業個人型研究(さきがけ) 下半期研究進捗報告書(平成 24 年 3 月)
- 2) 中村浩幸：ストレスに伴う脳活動は、噛み締めによって制御されるか？機能的 MRI を用いた研究；平成 23 年度科学研究費補助金基盤研究(C)実績報告書(平成 24 年 4 月)

- 3) 山口 瞬：脳内分子変化と電気生理学的・行動学的変化の統合解析：平成 24 年度科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業個人型研究(さきがけ) 上半期研究進捗報告書(平成 24 年 9 月)
- 4) 中村浩幸：ヒトの表情による脳活動とその制御機序-Subliminal 画像を用いた研究：自然科学研究機構生理学研究所年報第 33 巻：209(平成 24 年 12 月)
- 5) 山口 瞬：脳内分子変化と電気生理学的・行動学的変化の統合解析：平成 21-26 年度科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業個人型研究(さきがけ) 中間報告書(平成 25 年 2 月)
- 6) 山口 瞬：脳内分子変化と電気生理学的・行動学的変化の統合解析：平成 24 年度科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業個人型研究(さきがけ) 下半期研究進捗報告書(平成 25 年 3 月)
- 7) 中村浩幸：ストレスに伴う脳活動は、噛み締めによって制御されるか？機能的 MRI を用いた研究：平成 24 年度科学研究費補助金基盤研究(C)実績報告書(平成 25 年 4 月)
- 8) 山口 瞬：脳内分子変化と電気生理学的・行動学的変化の統合解析：平成 25 年度科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業個人型研究(さきがけ) 上半期研究進捗報告書(平成 25 年 9 月)
- 9) 中村浩幸：ヒトの表情による脳活動とその制御機序-Subliminal 画像を用いた研究：自然科学研究機構生理学研究所年報第 34 巻：251-252(平成 25 年 12 月)
- 10) 山口 瞬：脳内分子変化と電気生理学的・行動学的変化の統合解析：平成 25 年度科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業個人型研究(さきがけ) 下半期研究進捗報告書(平成 26 年 3 月)
- 11) 山口 瞬：脳内分子変化と電気生理学的・行動学的変化の統合解析：平成 26 年度科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業個人型研究(さきがけ) 上半期研究進捗報告書(平成 26 年 9 月)
- 12) 中村浩幸：噛み締め圧の強さと相関する脳活動の解明：自然科学研究機構生理学研究所年報第 35 号(平成 26 年 12 月)

11. 報道

- 1) 山口 瞬：「研究室から 大学はいま」脳の詳しい活動状況捉える：岐阜新聞(2012 年 5 月 1 日)
- 2) 山口 瞬：「マウス脳細胞 動き“見える化”」アルツハイマー解明に一步：中日新聞(2012 年 9 月 12 日)
- 3) 山口 瞬：『「アルツハイマー」脳神経細胞 異常な活動 視覚化：読売新聞(2012 年 9 月 26 日)
- 4) 山口 瞬：「アルツハイマー病の脳神経細胞異常活動を視覚化」：TBS テレビ みのもんたの朝ズバッ！(2012 年 9 月 28 日)

12. 自己評価

評価

われわれの作成した Arc-dVenus トランスジェニックマウスを用いて、国内外の多くの研究グループ(ハーバード大学、マサチューセッツ総合病院、藤田保健衛生大学、京都大学、東京大学、理化学研究所など)と共同研究を行い、その成果が多数の一流誌に掲載されたことは、岐阜大学の存在感を高める上で多少なりとも貢献できたと考えます。

また、われわれが責任著者となる論文も現在作成中であり、次年度以降の成果として期待できる。

現状の問題点及びその対応策

岐阜大学にとどまらず、多くの研究機関において、研究費の獲得が困難さを増している。しかし、科学上の重要な発見や発明は、必ずしも多額の研究費をもつ研究室で起こるわけではないことを肝に銘じ、予算が少ないなら少ないなりに、一層の知恵を出してレベルの高い研究を行っていきたいと思う。

また人材面において、医学部から基礎の大学院に進む学生が絶えている現状は、これ以上悪化のしようもないほどの厳しい状況である。眼をこらしてみても視界の先まで荒涼とした風景が続いている。しかし、多くではないが、選択テュートリアルでわれわれの研究室に配属され、その後志願して学生研究員となり、放課後楽しそうに実験している学生を見ると、何らかの花の芽が確かに存在していると感じる。大切に见守っていききたいと思う。

今後の展望

レベルの高い研究をするために全身全霊で取り組みたい。

(2) 生理学分野

1. 研究の概要

起立時の動脈血圧調節における前庭系の役割を調べる。

2. 名簿

教授： 森田啓之 Hironobu Morita
准教授： 安部 力 Chikara Abe
助教： 小畑孝二 Koji Obata

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 中島 昭, 勢井宏義, 森田啓之, 高橋優三, 松尾 理, 安部 力編著. 基礎統合実習一次世代の Physician Scientists が育つ場—, 愛知: 一粒書房; 2012 年.
- 2) 安部 力, 森田啓之, 浅川満彦 他. 寄生虫学研究: 材料と方法 2013 年版, 愛知: 三恵社; 2013 年.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 森田啓之, 安部 力. 宇宙から帰還後の起立性低血圧—前庭系の関与, 医学のあゆみ 2012 年; 243 巻: 425-431.
- 2) 森田啓之, 安部 力, 田中邦彦. 起立時の血圧調節における前庭—交感神経反射と圧受容器反射の役割, 自律神経 2012 年; 49 巻: 169-172.
- 3) 安部 力, 岩田ちひろ, 森田啓之. 前庭電気刺激による前庭入力遮断と前庭系の可塑的变化防止, 自律神経 2012 年; 49 巻: 173-176.
- 4) 森田啓之, 安部 力, 田中邦彦. 前庭—血圧反射, Clinical Neuroscience 2013 年; 08 月号: 927-929.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

なし

原著 (欧文)

- 1) Tanaka K, Abe C, Sakaida Y, Aoki M, Iwata C, Morita H. Subsensory galvanic vestibular stimulation augments arterial pressure control upon head-up tilt in human subjects. *Auton Neurosci-Basic*. 2012;166:66-71. IF 1.372
- 2) Zhang GX, Obata K, Takeshita D, Mitsuyama S, Nakashima T, Kikuta A, Hirabayashi M, Tomita K, Vetter R, Dillmann WH, Takaki M. Evaluation of left ventricular mechanical work and energetics of normal hearts in SERCA2a transgenic rats. *J Physiol Sci*. 2012;62:221-231. IF 1.248
- 3) Hattori H, Takeshita D, Takeuchi A, Kim B, Shibata M, Matsuoka S, Obata K, Mitsuyama S, Zhang GX, Takaki M. NHE-1 blockade reversed changes in calcium transient in myocardial slices from isoproterenol-induced hypertrophied rat left ventricle. *Biochem Bioph Res Co*. 2012;419:431-435. IF 2.281
- 4) Kawahara I, Kuniyasu H, Matsuyoshi H, Goto K, Obata K, Misawa H, Fujii H, Takaki M. Comparison of effects of a selective 5-HT reuptake inhibitor versus a 5-HT4 receptor agonist on in vivo neurogenesis at the rectal anastomosis in rats. *Am J Physiol-Gastr L*. 2012;302:G588-597. IF 3.737
- 5) Asada K, Obata K, Horiguchi K, Takaki M. Age-related changes in afferent responses in sensory neurons to mechanical stimulation of osteoblasts in coculture system. *Am J Physiol-Cell Ph*. 2012;302:C757-765. IF 3.674
- 6) Morita H, Abe C. Reply to Sauder and Ray. *J Appl Physiol*. 2012;112:1088. IF 3.434
- 7) Abe C, Tsuru Y, Iwata C, Ogihara R, Morita H. Intravenous infusion of hyperosmotic NaCl solution induces acute cor pulmonale in anesthetized rats. *J Physiol Sci*. 2013;63:55-62. IF 1.248
- 8) Abe C, Iwata C, Morita H. Water drinking-related muscle contraction induces the pressor response via mechanoreceptors in conscious rats. *J Appl Physiol*. 2013;114:28-36. IF 3.434
- 9) Cuong NT, Abe C, Binh NH, Hara A, Morita H, Ogura S. Sivelestat improves outcome of crush injury by inhibiting high-mobility group box 1 in rats. *Shock*. 2013;39:89-95. IF 2.732
- 10) Seo Y, Satoh K, Morita H, Takamata A, Watanabe K, Ogino T, Hasebe T, Murakami M. Mn-citrate and Mn-HIDA: intermediate-affinity chelates for manganese-enhanced MRI. *Contrast Media Mol I*. 2013;8:140-146. IF 3.333
- 11) Tanaka K, Nishimura N, Sato M, Kanikowska D, Shimizu Y, Inukai Y, Abe C, Iwata C, Morita H,

- Iwase S, Sugeno J. Arterial pressure oscillation and muscle sympathetic nerve activity after 20 days of head-down bed rest. *Auton Neurosci-Basic*. 2013;177:266-270. IF 1.372
- 12) Abe C, Ueta Y, Morita H. Exposure to hypergravity during the preweaning but not postweaning period reduces vestibular-related stress responses in rats. *J Appl Physiol*. 2013;115:1082-1087. IF 3.434
- 13) Abe C, Morita H. Drinking-induced bradyarrhythmias and cerebral injury in Dahl salt-sensitive rats with sinoaortic denervation. *J Appl Physiol*. 2013;115:1533-1539. IF 3.434
- 14) Mitsuyama S, Takeshita D, Obata K, Zhang GX, Takaki M. Left ventricular mechanical and energetic changes in long-term isoproterenol-induced hypertrophied hearts of SERCA2a transgenic rats. *J Mol Cell Cardiol*. 2013;59:95-106. IF 5.218
- 15) Goto K, Kato G, Kawahara I, Luo Y, Obata K, Misawa H, Ishikawa T, Kuniyasu H, Nabekura J, Takaki M. In vivo imaging of enteric neurogenesis in the deep tissue of mouse small intestine. *PLoS One*. 2013;8:e54814. IF 3.534
- 16) Takeshita D, Tanaka M, Mitsuyama S, Yoshikawa Y, Zhang GX, Obata K, Ito H, Taniguchi S, Takaki M. A new calpain inhibitor protects left ventricular dysfunction induced by mild ischemia-reperfusion in in situ rat hearts. *J Physiol Sci*. 2013;63:113-123. IF 1.248
- 17) Iwata C, Abe C, Nakamura M, Morita H. Hypergravity exposure for 14 days increases the effects of propofol in rats. *Anesth Analg*. 2014;118:125-131. IF 3.422
- 18) Iwata C, Morita H. Letter to the editor. *Anesth Analg*. 2014;199:1220-1221. IF 3.422
- 19) Aoki K, Obata K, Kurihara M, Kuniyasu H, Kirita T, Takaki M. Possible peripheral mechanism for taste disorder in rats administered S-1. *Int J Clin Oncol*. 2014;19:549-56. IF 2.170
- 20) Yamada A, Torimoto K, Obata K, Hirayama A, Fujimoto K, Takaki M. Persistent overexpression of SERCA2a affects bladder functions under physiological conditions, but not in bladder outlet obstruction-induced sub-acute pathological conditions. *J Physiol Sci*. 2014;64:21-30 IF 1.248

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：森田啓之；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：宇宙飛行に伴う前庭－血圧反射の可塑性とその対策；平成 24－26 年度；4,200 千円(1,400：1,600：1,200 千円)
- 2) 研究分担者：森田啓之；科学研究費補助金基盤研究(C)：深部静脈血栓症を予防するための CPM を駆使した椅子の開発；平成 24 年度；500 千円
- 3) 研究代表者：安部 力；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：起立性低血圧における前庭－動脈血圧反射の定量的評価と飲水による改善方法；平成 23－25 年度；3,400 千円(1,400：1,000：1,000 千円)
- 4) 研究代表者：安部 力；公益財団法人ソルト・サイエンス研究財団(一般公募研究助成)：高張 NaCl 溶液静脈内投与による一過性の動脈血圧低下のメカニズム解明；平成 24 年度；950 千円
- 5) 研究分担者：小畑孝二；科学研究費補助金基盤研究(C)：メカニカルストレスに対する成体応答時の交感神経系の役割；平成 24 年度；100 千円
- 6) 研究代表者：森田啓之；大学活性化経費(研究：教育)；平成 25 年度；500 千円
- 7) 研究代表者：小畑孝二；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：2 波長イメージングによる全心臓のカルシウム動態とエネルギー消費の同時計測法の開発；平成 25－27 年度；4,940 千円(2,990：1,040：910 千円)

2) 受託研究

- 1) 森田啓之：軌道上 CBEF 搭載ターンテーブルのマウス飼育利用に係る評価；平成 25 年度；950 千円：独立行政法人宇宙航空研究開発機構
- 2) 森田啓之：マウスを用いた宇宙環境応答網羅的評価；平成 25－26 年度；4,000 千円(3,000：1,000 千円)：国立大学法人筑波大学
- 3) 森田啓之：小半径遠心による平衡感覚影響評価；平成 26 年度；2,000 千円：独立行政法人宇宙航空研究開発機構
- 4) 小畑孝二：血液交叉灌流実験系を用いた SERCA 過剰発現による心臓のメカノエナジェティック解析と GCaMP によるカルシウムイメージング；平成 25 年度；1,000 千円：公立大学法人奈良県立医科大学(高木 都)
- 5) 小畑孝二：温度変化による心臓のメカノエナジェティック解析と GCaMP によるカルシウムイメージング；平成 26 年度；1,000 千円：公立大学法人 奈良県立医科大学(高木 都)

3) 共同研究

- 1) 森田啓之：自動車用シートの高時間着座における疲労の解明；平成 22-24 年度；11,000 千円；トヨタ自動車(株)

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

森田啓之：

- 1) 日本病態生理学会理事(～現在)
- 2) 日本生理学会評議員(～現在)
- 3) 日本航空宇宙環境医学会理事(～現在)

安部 力：

- 1) 日本病態生理学会評議員(～現在)
- 2) 日本生理学会評議員(～現在)
- 3) 日本航空宇宙環境医学会評議員(～現在)

小畑孝二：

- 1) 日本生理学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

森田啓之：

- 1) 第 89 回日本生理学会シンポジウム(平成 24 年 3 月, 松本, 「国際宇宙ステーション利用ライフサイエンス及び宇宙医学分野国際公募研究」座長およびシンポジスト)
- 2) 10th World Congress of the International Society for Adaptive Medicine(2012, 07, Bucharest, Symposium: Cardiovascular adaptation/deconditioning in gravitational change; Symposist)
- 3) 第 67 回日本体力医学会(平成 24 年 9 月, 岐阜, 特別講演「宇宙飛行後の起立耐性低下とその対策」演者)
- 4) 第 90 回日本生理学会ランチョンセミナー(平成 25 年 3 月, 東京, 「An Improved Approach to Left Ventricular (LV) Pressure Volume (PV) Measurements」座長)
- 5) 第 90 回日本生理学会シンポジウム(平成 25 年 3 月, 東京, 「宇宙生理学の現在と展望」座長およびシンポジスト)
- 6) 第 66 回日本自律神経学会 学会招待講演(平成 25 年 10 月, 名古屋, 「長期宇宙滞在に伴う循環調節の変化：前庭-血圧反射」学会招待講演演者)

安部 力：

- 1) The 35th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society (平成 24 年 7 月, 大阪, "Analysis of the Baroreflex: Central, Cardiovascular and Renal Mechanisms" 招待シンポジスト)
- 2) 第 66 回日本自律神経学会総会(平成 24 年 11 月, 名古屋, 「循環器系における自律神経の重要性」招待シンポジスト)

小畑孝二：

- 1) 第 60 回中部日本生理学会大会(平成 25 年 10 月, 岐阜, 「セッション 7 S7-1~4」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 安部 力：入澤宏・彩記念若手研究奨励賞日本生理学会奨励賞 [心臓・循環分野] (平成 24 年度)
- 2) 安部 力：第 59 回日本宇宙航空環境医学会大会アワード(平成 25 年度)
- 3) 小畑孝二：日本生理学会入澤宏・彩記念 JPS 心臓・循環論文賞(平成 25 年度)
- 4) 小畑孝二：日本生理学会佐川喜一賞(ポスター賞)(平成 25 年度)

9. 社会活動

森田啓之：

- 1) ソルトサイエンス研究財団研究運営審議会委員(～現在)
- 2) 日本学術振興科学研究費委員会専門委員(～現在)

安部 力：

- 1) 岐阜県医療通訳ボランティア派遣システム実証実験アドバイザー(平成 24 年度)
- 2) 岐阜県医療通訳ボランティア派遣システム実証実験アドバイザー(平成 25 年度)

小畑孝二：

- 1) 岐阜県医療通訳ボランティア派遣システム実証実験アドバイザー(平成 25, 26 年度)
- 2) 健康・省エネ シンポジウム in ぎふ ～岐阜におけるスマートウェルネス住宅を考える～ パネルディスカッション パネラー(平成 24 年度)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

生理学教室の目標である、①学会発表、②外部資金獲得、③論文発表を達成することができた。

現状の問題点及びその対応策

特に問題点は見当たらない。

今後の展望

①学会発表、②外部資金獲得、③論文発表の発展に努めることである。

(3) スポーツ医科学分野

1. 研究の概要

現在は競技スポーツへの医学的なサポートに関する研究より、一般スポーツへの普及、スポーツの大衆化といわれている分野での研究が中心である。それは運動による生活習慣病への予防や対策、また高齢者などの運動指導による転倒予防に関する事、障害者のスポーツまたは運動を活用したリハビリテーションに関する研究である。現在の研究テーマは3つの方向で行っている。

低酸素環境での運動や生活習慣病に関する研究

高齢者の転倒予防に関する研究である。

全身振動運動が障害者に与える効果などに取り組んでいる。

2. 名簿

教授： 松岡敏男 Toshio Matsuoka
准教授： 藪本 保 Tamotsu Yabumoto
助教： 辛 紹熙 Sohee Shin

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 渡邊恒夫, 青木隆明, 寺林伸夫, 林 典雄. 超音波検査基礎編—超音波検査入門, 東京: ジャパンライム株式会社; 2012年; DVD2枚.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 松岡敏男. アスレティックリハビリテーションについて, 理療 2012年; 41巻: 17-20.
- 2) 佐藤正夫, 竹村正男, 渡邊恒夫, 福岡大輔, 清水克時. 超音波三次元イメージングを用いた関節リウマチ手指関節内血流数量化の試み, 別冊整形外科 2012年; 62巻: 188-193.
- 3) 寺林伸夫, 福田 雅, 伊藤芳毅, 松本 和, 瀧上伊織, 渡邊恒夫, 関根綾子, 清水克時. 肩関節周囲血流と臨床症状との関連 - 超音波ドブラ法を用いた夜間痛のある腱板断裂の血流評価, 関節外科 2012年; 31巻: 734-740.
- 4) 佐藤正夫, 竹村正男, 渡邊恒夫, 福岡大輔. 超音波三次元イメージングによる手指関節内血流数量化, 日本臨床 2014年; 72巻: 258-261.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 小栗和雄, 館 俊樹, 松岡敏男. 運動習慣のない肥満男児における身体組成、骨格筋量、体脂肪分布及び血液性状, 発育発達研究 2012年; 46巻: 1-10.
- 2) 寺林伸夫, 伊藤芳毅, 松本 和, 瀧上伊織, 清水克時, 渡邊恒夫, 関根綾子. 夜間痛を伴う腱板断裂患者に対する超音波ドブラ血流評価, 肩関節 2012年; 36巻: 507-510.
- 3) 名和寛文, 渡邊恒夫, 福岡大輔, 寺林伸夫, 原 武史, 藤田広志. ロコモティブシンドロームの定量評価のための画像解析法の開発, 電子情報通信学会技術研究報告 2012年; 111巻: 311-314.
- 4) 佐藤正夫, 竹村正男, 渡邊恒夫, 福岡大輔, 関根綾子, 清島 満, 松岡敏男, 清水克時. 超音波 3D イメージングを用いた関節リウマチの手指関節炎評価, 日本整形外科超音波研究会会誌 2012年 23巻: 40-43.
- 5) 石巴特爾, 渡邊恒夫, 杉森弘幸, 松本玄智江, 長崎幸雄, 松岡敏男. 岐阜県内の高齢者における加齢に伴う体力変化, 教育医学 2012年; 57巻: 285-293.
- 6) 杉浦宏季, 出村慎一, 辛 紹熙, 橘 和代, 徐寧. 体格特性に基づく肥満児の判定指標の作成, 教育医学 2012年; 57巻: 303-310.
- 7) 渡邊恒夫, 竹村正男, 斎藤邦明, 服部高幸, 関根綾子, 山田鉄也, 加藤則廣, 富田栄一, 松岡敏男, 清島 満. 非アルコール性脂肪肝炎(non-alcoholic steatohepatitis, NASH)における血清 Cytokeratin-18(CK-18)測定の意味について, 臨床病理 2013年; 61巻: 19-24.
- 8) 名和寛文, 渡邊恒夫, 福岡大輔, 寺林伸夫, 原 武史, 藤田広志. ロコモティブシンドローム定量評価のための腓腹筋の3次元画像解析, 電子情報通信学会技術研究報告 2013年; 112巻: 69-72.
- 9) 辛 紹熙, 出村慎一, 金 明. 韓国人の男子高校生における運動習慣が体力、血清脂質および身体活動状況に及ぼす影響, 教育医学 2013年; 58巻: 358-364.
- 10) 寺林伸夫, 伊藤芳毅, 松本 和, 瀧上伊織, 大野貴敏, 渡邊恒夫. 体位変換・肩関節加温下での肩周囲血流変化: 健常肩での検討, 肩関節 2014年; 38巻: 407-410.

- 11) 廣瀬あゆみ, 渡邊恒夫, 鍋谷洋介, 野久 謙, 古田伸行, 川地慎一, 伊藤弘康, 松岡敏男, 清島 満. 臨床検査データからみた2型糖尿病患者における末梢神経障害の評価: アルブミン尿とABIの関連性, 臨床病理 2014年; 62巻: 538-545.
- 12) 鍋谷洋介, 渡邊恒夫, 寺林伸夫, 廣瀬あゆみ, 野久 謙, 篠田貢一, 古田伸行, 伊藤弘康, 松岡敏男, 清島 満. 超音波検査による肩腱板断裂診断能の検討-US所見とMRI所見との比較-, 臨床病理 2014年; 62巻: 31-37.
- 13) 渡邊恒夫, 寺林伸夫, 名和寛文, 福岡大輔, 辛 紹熙, 松岡敏男. ロコモティブシンドローム定量評価のための腓腹筋3次元超音波画像解析, 日本整形超音波学会誌 2014年; 25巻: 100-105.
- 14) 寺林伸夫, 渡邊恒夫, 伊藤芳毅, 松本 和, 滝上伊織, 清水克時, 秋山治彦. 変形性膝関節症における中膝動脈血流評価, 日本整形超音波学会誌 2014年; 25巻: 42-47.

原著 (欧文)

- 1) Yabumoto T, Baba R, Watanabe T, Sakakibara N, Ukai T, Fukutomi O, Matsuoka T. Oxygen uptake efficiency slope calculations based on heart rate reserve endpoints in young, intellectually disabled individuals. *J Phys Fitness Sports Med.* 2012;1:701-705.
- 2) Shin S, Demura S, Watanabe T, Kawabata H, Sugiura H, Matsuoka T. Relationship between the obstacle height cognition and step movement in the elderly. *J Physiol Anthropol.* 2012;16:31-27.
- 3) Watanabe T, Sugimori H, Yabumoto T, Takemura M, Seishima M, Matsuoka T. Neurophysiological evaluation of handball players—Relationship between reaction times, visual evoked potentials, and electromyography. *J Educ Health Sci.* 2012;57:243-251.
- 4) Watanabe T, Sakakibara N, Sugimori H, Yabumoto T, Takeyama T, Takemura M, Seishima M, Matsuoka T. Effect of long-term physical exercise of peripheral nerve—comparison of nerve conduction study and ultrasonography. *J Sport Med Phys Fit.* 2012;52:212-220. IF 0.757
- 5) Sekine A, Takahashi N, Watanabe T, Osawa Y, Ikeda T, Mori I, Kajita K, Morita H, Hirose F, Seishima M, Ishizuka T. Adult intussusception of the descending colon due to inflammatory myofibroblastic proliferation. *Clin J Gastroenterol.* 2012;5:74-78.
- 6) Watanabe T, Takemura M, Sato M, Sekine A, Fukuoka D, Seishima M, Shimizu K, Matsuoka T. Quantitative analysis of vascularization in the finger joints in patients with rheumatoid arthritis using three-dimensional volumetric ultrasonography with power Doppler. *Clin Rheumatol.* 2012;31:299-307. IF 1.774
- 7) Yamaji S, Demura S, Shin S, Aoki H, Yamamoto Y. Comparison of stepping parameters and center of foot pressure properties during different tempo stepping movements. *Health.* 2012;4:832-837.
- 8) Yamaji S, Demura S, Shin S, Uchiyama M. Reliability of a new rapid step test for older women and its relationship with fall risk and leg muscle function. *Health.* 2012;4A:703-711.
- 9) Demura S, Kasuga K, Sato S, Sato T, Shin S. Determination of persons at a high risk of falling in a population of healthy community-dwelling elderly Japanese. *Int J Gerontol.* 2012;7:13-16. IF 0.473
- 10) Kasuga K, Demura S, Aoki H, Shin S, Kawabata H. The Effects of Obstacles and Age on Walking Time Within a Course and on a Balance Beam in Preschool Boys. *Advances in Physical Education.* 2012;2:49-53.
- 11) Hashimoto K, Miyamoto K, Yanagawa T, Hattori R, Aoki T, Matsuoka T, Ohno T, Shimizu K. Lumbar corsets can decrease lumbar motion in golf swing. *J Sport Sci Med.* 2013;12:80-87. IF 0.898
- 12) Watanabe T, Terabayashi N, Shi B, Shin S, Kasuga K, Yabumoto T, Shimizu K, Matsuoka T. Effects of Cryotherapy on Joint Position Sense and Intraarticular Blood Flow Volume in Healthy Knee Joints. *J Phys Fitness Sports Med.* 2013;2:243-250.
- 13) Shin S, Demura S, Shi B, Watanabe T, Yabumoto T, Matsuoka T. Effects of hypoxic training on physiological exercise intensity and recognition of exercise intensity in young men. *Advances in Bioscience and Biotechnology.* 2013;4:368-373.
- 14) Shi B, Watanabe T, Shin S, Yabumoto T, Matsuoka T. Effect of normobaric hypoxia on cardiorespiratory and metabolic risk markers in healthy subjects. *Advances in Bioscience and Biotechnology.* 2013;4:340-345.
- 15) Demura S, Sato S, Shin S, Sugiura H, Uchiyama M. Fall risk types and the fall prevalence rates of Japanese community-dwelling elderly. *Gazzeta Medica Italiana.* 2013;172:587-594.
- 16) Demura S, Shin S, Takahashi K, Yamaji S. Relationships between gait properties on soft surface, physical function and fall risk for the elderly. *Advances in Aging Research.* 2013;2:57-64.
- 17) Kawabata H, Demura S, Kitabayashi T, Shin S, Sato S. Relationships of Various Coordination Tests. *Advances in Physical Education.* 2013;3:15-19.
- 18) Oguri K, Tachi T, Matsuoka T. Visceral fat accumulation and metabolic syndrome in children: the impact of Trp64Arg polymorphism of the beta-3-adrenergic receptor gene. *Acta Paediatr.* 2013;102:613-619. IF 1.842
- 19) Shin S, Demura S, Sugiura H, Uchida Y, Xu N. The effects of fall experience by tripping on the movement of stepping over an obstacle. *Advances in Aging Research.* 2013;2:81-85.
- 20) Terabayashi N, Watanabe T, Matsumoto K, Takigami I, Ito Y, Fukuta M, Akiyama H, Shimizu K. Increased Blood Flow in the Anterior Humeral Circumflex Artery Correlates with Night Pain in

- Patients with Rotator Cuff Tear. J Orthop Sci. 2014;19:744-749. IF 1.008
- 21) Watanabe T, Yabumoto T, Shin S, Shi B, Matsuoka T. Effect of short-term whole-body vibration training on metabolic risk factors, inflammatory markers, and arterial stiffness. Advances in Bioscience and Biotechnology. 2014;5:438-445.
- 22) Shi B, Watanabe T, Shin S, Yabumoto T, Takemura M, Matsuoka T. Effect of hypoxic training on inflammatory and metabolic risk factors: a crossover study in healthy subjects. Physiological reports. 2014;2:1-10.
- 23) Watanabe T, Takemura M, Sato M, Matsunami H, Seishima M, Shimizu K, Matsuoka T. Clinical Significance of Brachial Flow-mediated Dilation in Patients with Rheumatoid Arthritis. Int J Rheum Dis. 2014;17:26-33. Epub 2013 18 IF 1.771
- 24) Shin S, Demura S, Watanabe T, Shi B, Yabumoto T, Matsuoka T. Differences between Fallers by tripping and nonfallers in the OSFS test. Advances in Aging Research. 2014;3:124-129.
- 25) Sakakibara N, Shin S, Watanabe T, Matusoka T. Influence of lumbopelvic stability on deadlift performance in competitive powerlifters. SportLogia. 2014;10:89-95.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：辛 紹熙；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：転倒関連体力の評価及び転倒回避動作特性の検討による具体的な転倒予防策の提案；平成 24-25 年度；3,770 千円(2,860：910 千円)
- 2) 研究代表者：辛 紹熙；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：躓きやすい高齢者をスクリーニングする評価システムの開発及び転倒予防支援策の構築；平成 26-28 年度；3,510 千円(1,300：1,430：780 千円)
- 3) 研究代表者：辛 紹熙；(公財)田口福寿会国際学術交流助成：日韓高齢者における総合的な転倒リスク評価システムの開発；平成 26 年度；181 千円
- 4) 研究代表者：辛 紹熙；平成 26 年度臨床研究推進支援：低酸素環境下トレーニングが中高齢者の生活習慣病改善に及ぼす影響；平成 26 年度；500 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

松岡敏男：

- 1) 日本教育医学会理事(～現在)
- 2) 日本体力医学会評議員(～現在)
- 3) 日本体力医学会東海地方会理事(～現在)
- 4) 日本登山医学会評議員(～現在)

渡邊恒夫：

- 1) 東海エコーカンファレンス役員(～現在)
- 2) 日本超音波検査学会代議員(～現在)
- 3) 中部運動器超音波研究会世話人(～現在)

辛 紹熙：

- 1) 日本教育医学会評議員(～現在)

2) 学会開催

- 1) 第 67 回日本体力医学会大会(平成 24 年, 岐阜)
- 2) 第 62 回日本教育医学会大会(平成 26 年, 岐阜)

- 3) 第 62 回東海体育学会大会(平成 26 年, 岐阜)

3) 学術雑誌

- 1) 日本超音波検査学会誌 ; 査読委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

松岡敏男 :

- 1) 第 67 回日本体力医学会大会(平成 24 年 9 月, 岐阜, 座長)

渡邊恒夫 :

- 1) RA 関節エコーセミナー(平成 24 年 6 月, 岐阜, 講演「手指・手関節エコーの撮り方」演者)
- 2) Gifu Biologic Conference(平成 24 年 7 月, 岐阜, 講演「日本リウマチ学会関節エコー撮像ガイドラインにもとづくハンズオン」演者)
- 3) 関節エコー研修会(平成 25 年 3 月, 岐阜, 講演「関節エコーについて」演者)
- 4) 日本超音波医学会第 86 回学術集会(平成 25 年 5 月, 大阪, 講演「整形外科ハンズオンセミナー」演者)
- 5) US-Lead 整形外科エコー集中スクール(平成 25 年 7 月, 東京, 講演「整形外科エコー集中スクール」演者)
- 6) US-Lead 運動器と関節の超音波検査法セミナー(平成 25 年 7 月, 東京, 講演「整形外科ハンズオンセミナー」演者)
- 7) コニカミノルタ整形外科超音波セミナー(平成 25 年 10 月, 愛知, 講演「実地医家のための整形外科エコー診断入門」演者)
- 8) 日本超音波検査学会第 20 回中部学術集会(平成 25 年 11 月, 愛知, 講演「実践整形超音波～やってみよう! 運動器超音波検査～」演者)
- 9) 第 4 回関西肩コラボレーションミーティング(平成 26 年 9 月, 岐阜, 講演「US のセッティング」演者)

辛 紹熙 :

- 1) The 15th scientific meeting of Korea-Japan Health Education Symposium(平成 25 年 8 月, 済州都, 座長)
- 2) ネットワーク大学コンソーシアム岐阜における共同プログラム, なでしこ教養セミナー(平成 26 年 8 月, 岐阜, 講演「介護を必要としないための高齢者の健康づくり」演者)

藪本 保 :

- 1) パワープレートユーザーミーティング(平成 26 年 2 月, 東京, 講演「脳性麻痺児に対するリハビリテーションでのパワープレートの活用事例の紹介」演者)
- 2) 第 62 回日本教育医学会大会(平成 26 年 8 月, 岐阜, 招待シンポジスト「発達に支援を要する子どもの健康教育を考えるー運動発達障害のある子どもの体力ー」演者)
- 3) 日本体育協会傷害予防研修会(平成 26 年 12 月, 岐阜, 講演「投球障害はなぜ起こるのか?ー機能からみた肩・肘の障害予防ー」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 渡邊恒夫 : 若手研究奨励賞受賞(平成 24 年度)

9. 社会活動

松岡敏男 :

- 1) 岐阜県ラグビーフットボール協会理事長(平成 24 年度)
- 2) 岐阜県ラグビーフットボール協会副会長(平成 25 年度～現在)

藪本 保 :

- 1) スペシャルオリックス日本・岐阜評議員(平成 25 年度～現在)

10. 報告書

- 1) 辛 紹熙, 出村慎一, 金 明: 韓国人男性高齢者の体格及び体力における低下特性—年齢との相関を中心に—: 教育医学 60 卷: 148—150(平成 26 年)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

教育に関しては共通教育並びに医学部教育に貢献している。テュートリアルコースにも参加し、また基礎配属や生命科学実習などの一端を担っている。

研究に関しては論文はそれなりに成果を出していると思われるが、外部資金特に科学研究費に関してはこのところ獲得できておらず、さらなる努力が必要と思われる。

大学院生に教授の退官が控えており現在は募集しておらず、今いる院生はほとんど学位論文を提出し、修了する状況であり、今後新しい体制での院生が望まれる。

現状の問題点及びその対応策

若いスタッフがよく頑張り、教育並びに研究を行っているが大学院生の減少で取り組むべきテーマに限りがあり、爆発的に業績を上げるといったことには無理がある。今後教室内の組織の変化を考え、大学院生、学部研究員などのスタッフの増加を考えれば解決できるように思われる。

今後の展望

地域を取り組んだ研究などもう少し研究の視野を拡大した方向性も模索する必要があると思われる。どんどんフィールドワークを進めていくことが必要かと思う。また色々な分野と共同研究に関して積極的に取り組み、協力し合う体制が必要であると思われる。

学生研究員などの希望もあり、今後はスタッフの増加をして研究の幅を増やしていくことが望まれる。

(4) 神経内科・老年学分野

1. 研究の概要

- 1) 自己免疫介在性神経疾患の病態に関する研究：自己免疫介在性脳炎・脳症，多発性硬化症，視神経脊髄炎，自己免疫介在性ニューロパチー，傍腫瘍性神経症候群などの病態機序の解明と，バイオマーカーの確立を目的として，液性免疫の関与に着目し研究を行った。これらの患者および健常者の血液，髄液についてプロテオーム解析やプロテインアクティブアレイの手法を用い，新たな抗神経抗体および抗血管内皮抗体を検出し，そのいくつかの認識抗原蛋白を同定した。また，B細胞の生存・分化に関連するBAFF, APRILの病態における役割を検討した。プロテオーム解析は三重大学大学院地域イノベーション学研究所および三重大学生命科学研究支援センターと，プロテインアクティブアレイは産業技術総合研究所との共同研究で進めている。
- 2) 脳小血管病態に関連する自己免疫機序に関する研究：ものわすれ外来を受診した高齢者の頭部MRI画像より，脳小血管病変（大脳内微小出血や大脳白質病変）をもつ患者群を抽出した。これらの患者血清・髄液中から，抗神経抗体や抗血管内皮抗体の検出と，その認識抗原蛋白を同定し，脳小血管病変との関連性を検討した。また脳アミロイドアンギオパチーとの関連を注目し，ELISA法による血清・髄液中の抗A β 40抗体の測定システムを確立し，測定した血液・髄液中の抗体価と，炎症マーカーおよび脳小血管病変との関連性を検討した。抗A β 40抗体の測定システムの確立は，病態情報解析医学分野との共同研究で進めている。
- 3) 特発性基底核石灰化症（IBGC）に関する研究：希少難病として全国調査を行い200例以上の登録を得た。これらの中に*SLC20A2*遺伝子や*PDGFB*遺伝子の新規変異をもつ家族例を見いだした。前者の変異を導入したCHO細胞でリン酸トランスポーターの著明な機能低下が認められた。家族例の患者からiPS細胞を作成し特性を検討している。脳内石灰化の実態については岐阜・新潟大学病院での脳CT全例調査を行った。本症と鑑別すべき小阪・柴山病の実態調査，診断ガイドラインの確立に向けて疫学調査を進めている。本研究は厚生労働省科学研究費補助金による事業で，研究代表者である岐阜薬科大学の保住教授の指導の下で進めている。尚，本疾患はこれまでの研究成果に基づき厚労省の指定難病となった。
- 4) 高齢者の薬剤数適正化に関する研究：高齢者の多剤処方（polypharmacy）の是正，薬剤数の適正化に，電子カルテシステムが多職種共同を介してどのように貢献しているかについて，老年医学的な視点で附属病院薬剤部，医療情報部，看護部との共同研究で行っている。
- 5) 希少難治性疾患患者に関する医療の向上及び患者支援のあり方に関する研究：重症難病患者の災害時への準備，支援体制を推進するための調査を，難病患者自身，県市の保健所，県内の各自治体を対象に行った。
その結果を基に県の新規事業として，在宅人工呼吸器装着患者の災害時支援事業が開始され，積極的に参加している。難病患者のコミュニケーション支援の現状調査を行い，対策を検討している。当院が県の難病拠点病院であることもあり，難病専門員と共に，県内各圏域に出向いて当地の関係者と事例検討を行うと共に，難病対応に関する啓発活動を行っている。
- 6) プリオン病サーベイランスに関する研究：厚労省の調査研究班が全国的に展開している事業で，岐阜・愛知・三重の症例収集を行っている。岐阜県内の症例については現地で診察を行い，遺伝子や髄液の検査，死亡時の剖検を促している。愛知医大加齢研究所神経病理学との共同研究で，孤発型CJD典型例に加え，視床型CJD等の非典型例の病理学的検討が蓄積されてきた。また，治験の開始を視野に入れた，自然歴調査にも参加した。
- 7) スモンに関する調査研究：厚労省の調査研究班が全国的に展開している事業で，岐阜県内のスモン患者の追跡検診を毎年1回行っている。対象者の高齢化に伴い，保健所検診と移動困難な患者さんに対して訪問検診を継続している。調査研究時に，患者さんの同意のもとに採血検査と生体電気インピーダンス法を用いた骨格筋量の測定を行った。

2. 名簿

教授：	犬塚 貴	Takashi Inuzuka
准教授：	木村暁夫	Akio Kimura
講師：	林 祐一	Yuichi Hayashi
臨床講師：	香村彰宏	Akihiro Koumura
臨床講師：	原田斉子	Naoko Harada
臨床講師：	吉倉延亮	Nobuaki Yoshikura

医員： 竹腰 顕 Akira Takekoshi
医員： 安西将大 Masahiro Yasunishi

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 田中優司, 犬塚 貴. 側頭動脈炎: 小林祥泰, 水澤英洋編. 神経疾患最新の治療 2012-2014, 東京: 南江堂; 2012年: 197-199.
- 2) 林 祐一, 木村暁夫, 犬塚 貴. 傍腫瘍性神経筋疾患—辺縁系脳炎における新規自己抗体と病態の広がり—: Annual Review 2012 神経, 東京: 医学書院; 2012年: 261-266.
- 3) 林 祐一, 犬塚 貴. X線 CT, MRI: アクチュアル脳・神経疾患の臨床 認知症神経心理学的アプローチ, 東京: 中山書店; 2012年: 88-94.
- 4) 犬塚 貴. 悪性腫瘍の遠隔効果による神経障害: 今日の治療指針 2014年版, 東京: 医学書院; 2013年: 840-841.
- 5) 犬塚 貴. 神経系の疾患: 非感染性炎症性疾患: 内科学 第10版 (矢崎義雄編), 東京: 朝倉書店; 2013年: 2211-2214.
- 6) 林 祐一, 犬塚 貴. がんに関連する神経症状: 大生定義編. ジェネラル診療シリーズ すべての内科医が知っておきたい 神経疾患の診かた、考え方とその対応, 東京: 羊土社; 2013年: 311-316.
- 7) 林 祐一, 犬塚 貴. 傍腫瘍性神経症候群: 今日の治療と看護 改訂第3版, 東京: 南江堂; 2013年: 747-749.
- 8) 林 祐一, 犬塚 貴. 薬物療法とその副作用 非ステロイド系消炎鎮痛薬: 今日の神経疾患治療指針 第2版, 東京: 医学書院; 2013年: 180-182.
- 9) 林 祐一, 犬塚 貴. ウイルス性髄膜炎: 今日の神経疾患治療指針 第2版, 東京: 医学書院; 2013年: 386-388.
- 10) 林 祐一, 犬塚 貴. 傍腫瘍性神経症候群: 免疫性神経疾患ハンドブック, 東京: 南江堂; 2013年: 277-284.
- 11) 森田浩之, 林 祐一. 神経・筋・骨格疾患 遠隔診療の実際: 遠隔診療実践マニュアル, 東京: 篠原出版社; 2013年: 104-114.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 犬塚 貴. 認知症の理解と対応, 日内会誌 2012年; 101巻: 701-706.
- 2) 林 祐一, 犬塚 貴. 傍腫瘍性神経症候群, 神経治療 2012年; 29巻: 41-45.
- 3) 林 祐一, 犬塚 貴. 二次性小脳皮質萎縮症(薬剤性・内分泌性・傍腫瘍性), Clinical Neuroscience 2012年; 30巻: 1072-1074.
- 4) 林 祐一, 犬塚 貴. 他科が耳鼻咽喉科に求めるもの・提供できるもの—神経内科から耳鼻咽喉科に—, JOHNS 2012年; 28巻: 1595-1597.
- 5) 犬塚 貴. 高齢者の歩行障害と動作緩慢, 日老医誌 2013年; 50巻: 33-35.
- 6) 犬塚 貴. 非アルツハイマー型認知症の診断, 日老医誌 2013年; 50巻: 625-626.
- 7) 犬塚 貴. Rituximabの神経疾患への応用, 神経治療学 2013年; 30巻: 266-270.
- 8) 林 祐一, 犬塚 貴. 傍腫瘍神経症候群と自己抗体, Brain Nerve 2013年; 65巻: 385-393.
- 9) 犬塚 貴. 非アルツハイマー型認知症とは 認知症の分類、代表的な疾患について, 認知症の最新医療 2014年; 4巻: 144-148.
- 10) 林 祐一, 犬塚 貴. 傍腫瘍性辺縁系脳炎, 神経症候群 II 第2版 別冊日本臨牀新領域別症候群 2014年; 27巻: 742-746.
- 11) 林 祐一, 犬塚 貴. 帯状疱疹ウイルス感染症, 新しい診断と治療のABC 神経関連感染症 最新医学別冊 2014年; 482巻: 167-173.
- 12) 林 祐一, 犬塚 貴. 遠隔神経徴候からみた悪性腫瘍 自律神経症状, 成人病と生活習慣病 2014年; 44巻: 449-452.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 原田齊子, 富田 稔, 木村暁夫, 香村彰宏, 林 祐一, 保住 功, 兼村信宏, 森脇久隆, 祖父江 元, 犬塚 貴. 悪性リンパ腫の寛解導入後に neurolymphomatosis をきたした2例, 日内会誌 2012年; 101巻: 157-160.
- 2) 山田 恵, 田中優司, 木村暁夫, 香村彰宏, 林 祐一, 保住 功, 小池春樹, 祖父江 元, 犬塚 貴. 変形性脊椎症を有する高齢者に発症した nonsystemic vasculitic neuropathy の一例, 日老医誌 2013年; 50巻: 400-403.
- 3) 中村晃久, 林 祐一, 矢ヶ崎裕人, 竹中勝信, 堀部永俊, 犬塚 貴. Clinically mild

encephalitis/encephalopathy with a reversible splenic lesion (MERS)の1成人例, 日内会誌 2013年; 102巻:3323-3326.

- 4) 操 奈美, 奥村陽子, 松本茂美, 村上啓雄, 犬塚 貴, 清島 満. 初期臨床研修 2年次の地域医療研修に関するアンケート調査, 地域医学 2013年; 27巻: 890-895.
- 5) 谷脇考恭, 犬塚 貴, 吉井文均, 青木正志, 天野隆弘, 豊島 至, 福武敏夫, 橋本洋一郎, 吉良潤一. 神経内科教育の実態と課題 医学部, 臨床神経学 2014年; 54巻: 335-340.
- 6) 福武敏夫, 橋本洋一郎, 谷脇考恭, 豊島 至, 天野隆弘, 青木正志, 吉井文均, 犬塚 貴, 吉良潤一. 神経内科教育の実態と課題 研修病院, 臨床神経学 2014年; 54巻: 341-348.
- 7) 吉良潤一, 大八木保政, 谷脇考恭, 犬塚 貴, 吉井文均, 青木正志, 天野隆弘, 豊島 至, 福武敏夫, 橋本洋一郎. 神経内科教育の実態と課題: 大学院, 臨床神経学 2014年; 54巻: 349-358.

原著 (欧文)

- 1) Kimura A, Sakurai T, Yamada M, Koumura A, Hayashi Y, Tanaka Y, Hozumi I, Ohtaki H, Chousa M, Takemura M, Seishima M, Inuzuka T. Antibodies against the Tom40 subunit of the translocation of the outer mitochondrial membrane complex and cognitive impairment in Alzheimer disease. *J Alzheimers Dis.* 2012;29:373-377. IF 3.612
- 2) Kimura A, Sakurai T, Yamada M, Koumura A, Hayashi Y, Tanaka Y, Hozumi I, Takemura M, Seishima M, Inuzuka T. Elevated anti-heat shock protein 60 antibody titer is related to white matter hyperintensities. *J Stroke Cerebrovasc.* 2012;21:305-309. IF 1.993
- 3) Kimura A, Sakurai T, Yamada M, Koumura A, Hayashi Y, Tanaka Y, Hozumi I, Ohtaki H, Chousa M, Takemura M, Seishima M, Inuzuka T. Anti-endothelial cell antibodies in patients with cerebral small vessel disease. *Curr Neurovasc Res.* 2012;9:296-301. IF 2.735
- 4) Hayashi Y, Yoshikura N, Kimura A, Inuzuka T. Peduncular hallucination in brainstem encephalitis drawn by a patient. *Neurology.* 2012;79:1625. IF 8.303
- 5) Tanaka Y, Yoshikura N, Harada N, Yamada M, Koumura A, Sakurai T, Hayashi Y, Kimura A, Hozumi I, Inuzuka T. Late-onset patients with sporadic amyotrophic lateral sclerosis in Japan have a higher progression rate of ALSFRS-R at time of diagnosis. *Internal Med.* 2012;51:579-584. IF 0.967
- 6) Tanaka Y, Kato T, Nishida H, Yamada M, Koumura A, Sakurai T, Hayashi Y, Kimura A, Hozumi I, Araki H, Murase M, Nagaki M, Moriwaki H, Inuzuka T. Is there delayed gastric emptying in patients with multiple system atrophy? An analysis using the ¹³C-acetate breath test. *J Neurol.* 2012;259:1448-1462. IF 3.841
- 7) Tanaka H, Shimazawa M, Kimura M, Takata M, Tsuruma K, Yamada M, Takahashi H, Hozumi I, Niwa J, Iguchi Y, Nikawa T, Sobue G, Inuzuka T, Hara H. The potential of GPNMB as novel neuroprotective factor in amyotrophic lateral sclerosis. *Sci Rep.* 2012;2:573.
- 8) Yamaguchi Y, Hayashi A, Campagnoni CW, Kimura A, Inuzuka T, Baba H. L-MPZ, a novel isoform of myelin P0, is produced by stop codon readthrough. *J Biol Chem.* 2012;287:17765-17776. IF 4.600
- 9) Kimura A, Sakurai T, Yoshikura N, Hayashi Y, Takemura M, Takahashi H, Inuzuka T. Corticosteroid therapy in a patient with cerebral amyloid angiopathy-related inflammation. *J Neuroinflamm.* 2013;10:39. IF 4.902
- 10) Hayashi Y, Suwa T, Inuzuka T. Intracranial calcification in a patient with HDR syndrome and a GATA3 mutation. *Internal Med.* 2013;52:161-162. IF 0.967
- 11) Yamada M, Asano T, Okamoto K, Hayashi Y, Kanematsu M, Hoshi H, Akaiwa Y, Shimohata T, Nishizawa M, Inuzuka T, Hozumi I. High frequency of calcification in basal ganglia on brain CT images in Japanese elderly people. *Geriatr Gerontol Int.* 2013;13:706-710. IF 1.575
- 12) Tanaka Y, Kato T, Nishida H, Yamada M, Koumura A, Sakurai T, Hayashi Y, Kimura A, Hozumi I, Araki H, Murase M, Nagaki M, Moriwaki H, Inuzuka T. Is there a difference in gastric emptying between myotonic dystrophy type 1 patients with and without gastrointestinal symptoms? *J Neurol.* 2013;260:1611-1616. IF 3.841
- 13) Tanaka Y, Yamada M, Koumura A, Sakurai T, Hayashi Y, Kimura A, Hozumi I, Inuzuka T. Cardiac sympathetic function in the patients with amyotrophic lateral sclerosis: analysis using cardiac [¹²³I] MIBG scintigraphy. *J Neurol.* 2013;260:2380-2386. IF 3.841
- 14) Takagi M, Ozawa K, Yasuda H, Douke M, Hashimoto K, Hayashi Y, Inuzuka T, Hozumi I. Decreased bioelements content in the hair of patients with Fahr's disease (idiopathic bilateral calcification in the brain). *Biol Trace Elem Res.* 2013;151:9-13. IF 1.608
- 15) Tanaka H, Shimazawa M, Takata M, Kaneko H, Tsuruma K, Ikeda T, Warita H, Aoki M, Yamada M, Takahashi H, Hozumi I, Minatsu H, Inuzuka T, Hara H. ITIH4 and Gpx3 are potential biomarkers for amyotrophic lateral sclerosis. *J Neurol.* 2013;260:1782-1797. IF 3.841
- 16) Yoshida T, Mizuta I, Saito K, Ohara R, Kurisaki H, Ohonari K, Riku Y, Hayashi Y, Suzuki K, Shii H, Fujiwara Y, Yonezu T, Nagaishi A, Nakagawa M. Effects of a polymorphism in the GFAP promoter on age of onset and ambulatory disability in late-onset Alexander disease. *J Hum Genet.* 2013;58:635-638. IF 2.526
- 17) Yamada M, Tanaka M, Takagi M, Kobayashi S, Taguchi Y, Takashima S, Tanaka K, Touge T, Hatsuta H, Murayama S, Hayashi Y, Kaneko M, Ishiura H, Mitsui J, Atsuta N, Soube G, Shimozawa N,

- Inuzuka T, Tsuji S, Hozumi I. Evaluation of SLC20A2 mutations that cause idiopathic basal ganglia calcification in Japan. *Neurology*. 2014;82:705-712. IF 8.303
- 18) Konno T, Tada M, Koyama A, Nozaki H, Harigaya Y, Nishimiya J, Matsunaga A, Yoshikura N, Ishihara K, Arakawa M, Isami A, Okazaki K, Yokoo H, Itoh K, Yoneda M, Kawamura M, Inuzuka T, Takahashi H, Nishizawa M, Onodera O, Kakita A, Ikeuchi T. Haploinsufficiency of CSF-1R and clinicopathologic characterization in patients with HDLS. *Neurology*. 2014;82:139-148. IF 8.303

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：犬塚 貴；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：プロテオミクスとプロテインアレイを用いたアルツハイマー病に関わる自己抗体の検索；平成 24-26 年度；4,100 千円(1,700：1,700：700 千円)
- 2) 研究代表者：木村暁夫；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：自己免疫介在性脳炎に関する新規抗神経抗体・抗血管内皮抗体の同定と診断・治療への応用；平成 23-25 年度；4,000 千円(1,400：1,300：1,300 千円)
- 3) 研究代表者：林 祐一；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：運動により変化するガングリオシド変換酵素種の同定とアルツハイマー病への応用；平成 23-25 年度；2,900 千円(1,000：900：1,000 千円)
- 4) 研究分担者：犬塚 貴；厚生労働省科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業：フェール病(特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症)の分子病態の解明(研究代表者：保住 功(岐阜薬科大学))；平成 22-24 年度；3,000 千円(1,000：1,000：1,000 千円)
- 5) 研究分担者：犬塚 貴；厚生労働省科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業：重希少難治性疾患患者に関する医療の向上及び患者支援のあり方に関する研究班(研究代表者：西澤正豊(新潟大学))；平成 24-25 年度；1,200 千円(600：600 千円)
- 6) 研究分担者：犬塚 貴；厚生労働省科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業：スモンに関する調査研究班(研究代表者：小長谷正明(国立病院機構鈴鹿病院))；平成 24-26 年度；2,100 千円(700：700：700 千円)
- 7) 研究分担者：犬塚 貴；厚生労働省科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業：プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究班(研究代表者：水澤英洋(東京医科歯科大学))；平成 24-26 年度；3,000 千円(1,000：1,000：1,000 千円)
- 8) 研究代表者：山田 恵；臨床研究推進支援経費：筋萎縮性側索硬化症(ALS)の iPS 細胞から分化させた運動ニューロンを活用した治療スクリーニング、新薬開発の研究；平成 24 年度；1,000 千円
- 9) 研究代表者：香村彰宏；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：自己抗体が関与する純粋小脳型小脳失調症に関する研究；平成 25-27 年度；3,900 千円(1,300：1,430：1,170 千円)
- 10) 研究代表者：山田 恵；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：iPS 細胞を用いた筋萎縮性側索硬化症治療薬のスクリーニング法の開発；平成 25-26 年度；2,080 千円(1,300：780 千円)
- 11) 研究代表者：林 祐一；医学系研究科長裁量経費：PiB-PET、FDG-PET、CO2-PET 3 核種による脳アミロイドアンギオパチーとアルツハイマー型認知症におけるイメージングパターンの相違に関する研究；平成 25 年度；890 千円
- 12) 研究代表者：山田 恵；臨床研究推進支援経費：歯髄細胞を活用した筋萎縮性側索硬化症(ALS)の再生医療ー犬 ALS からヒト ALS へー；平成 25 年度；1,000 千円
- 13) 研究代表者：木村暁夫；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：脳血管病に関わる抗血管内皮抗体の同定と機能解析：病態解明とバイオマーカーの開発；平成 26-28 年度；3,700 千円(1,100：1,200：1,400 千円)
- 14) 研究代表者：林 祐一；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：次世代型電子カルテシステムによる高齢者多剤処方の是正効果に関する研究；平成 26-28 年度；2,300 千円(1,100：600：600 千円)
- 15) 研究代表者：吉倉延亮；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：脳アミロイドアンギオパチー関連炎症の病態機序の解明とバイオマーカーの確立；平成 26-28 年度；2,900 千円(1,000：1,000：900 千円)
- 16) 研究代表者：木村暁夫；武田科学振興財団医学系研究奨励：ヒト iPS 細胞由来神経細胞を用いた傍腫瘍性神経症候群の新規診断マーカーの開発；平成 26-28 年度；2,000 千円
- 17) 研究分担者：犬塚 貴；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：神経変性疾患患者の歯髄由来 iPS 細胞とメタロチオネインを活用した薬物治療薬開発研究(代表者：保住 功(岐阜薬科大学))；平成 24-26 年度；300 千円(100：100：100 千円)

- 18) 研究分担者：犬塚 貴；厚生労働省科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業：特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症(フェール病を含む)の iPS 細胞を活用した診断と治療法の確立(研究代表者：保住 功(岐阜薬科大学))；平成 25 年度；100 千円
- 19) 研究分担者：犬塚 貴；厚生労働省科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業：特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症の遺伝子診断に基づいた分類と診療ガイドラインの確立に関する研究(研究代表者：保住 功(岐阜薬科大学))；平成 26 年度；100 千円

2) 受託研究

- 1) ギャバロン髄注及びシンクロメッドポンプシステム使用成績調査；平成 22-26 年度；84 千円；第一三共株式会社
- 2) 献血ヴェノグロブリン IH 特定使用成績調査；平成 22-26 年度；31.5 千円；株式会社ベネシス
- 3) KPS-0373 後期第 2 相臨床試験；平成 23-24 年度；1738.8 千円；キッセイ薬品工業株式会社
- 4) イムセラカプセル 0.5mg 使用成績調査(全例)；平成 24-27 年度；315 千円；田辺三菱製薬株式会社
- 5) ヴェノグロブリン IH 特定使用成績調査；平成 24-29 年度；31.5 千円；株式会社ベネシス
- 6) ギャバロン髄注及びシンクロメッドポンプシステム使用成績調査；平成 23-26 年度；210 千円；第一三共株式会社
- 7) ヴェノグロブリン IH 特定使用成績調査(変更)；平成 24-26 年度；31.5 千円；株式会社ベネシス
- 8) ノーモサング点滴静注 250mg 使用成績調査(全例調査)；平成 25-28 年度；21 千円；株式会社オーファンパシフィック
- 9) KPS-0373 の脊髄小脳変性症患者を対象とした第Ⅲ相検証試験；平成 25-28 年度；311 千円；キッセイ薬品工業
- 10) KPS-0373 の脊髄小脳変性症患者を対象とした長期継続投与試験；平成 25-28 年度；213 千円；キッセイ薬品工業
- 11) グロウジェクトの副作用報告；平成 26-27 年度；21 千円；JCR ファーマ株式会社
- 12) ビンダゲルカプセル特定使用成績調査 長期使用に関する調査；平成 26-27 年度；32 千円；ファイザー株式会社
- 13) 乾燥弱毒性おたくふかぜワクチン有害事象詳細調査；平成 26-27 年度；21 千円；武田薬品工業
- 14) エスクレ坐剤「500」副作用・感染症詳細調査；平成 26-27 年度；21 千円；久光製薬

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

犬塚 貴：

- 1) 日本神経学会代議員(～現在)
- 2) 日本神経学会専門教育小委員(平成 24 年 4 月～現在)
- 3) 日本内科学会評議員(～現在)
- 4) 日本内科学会認定医制度審議会委員(平成 24 年 4 月～現在)
- 5) 日本老年医学会理事(平成 25 年 6 月～現在)
- 6) 日本老年医学会監事(～平成 25 年 5 月)
- 7) 日本老年医学会教育委員(～現在)
- 8) 日本神経治療学会評議員(～現在)
- 9) 日本神経免疫学会理事(～現在)
- 10) 日本神経感染症学会評議員(～現在)
- 11) 日本難病医療ネットワーク研究会世話人(～平成 25 年 10 月)
- 12) 日本難病医療ネットワーク学会理事(平成 25 年 11 月～現在)
- 13) 日本難病医療ネットワーク学会評議員(平成 25 年 11 月～現在)

木村暁夫：

- 1) 日本内科学会東海地方会評議員(平成 26 年 4 月～現在)

林 祐一：

- 1) 日本内科学会東海地方会評議員(平成 26 年 4 月～現在)

2) 学会開催

犬塚 貴：

- 1) 平成 23 年度日本神経学会東海北陸地区生涯教育講演会(平成 24 年 3 月, 名古屋)
- 2) 平成 24 年度日本神経学会東海北陸地区生涯教育講演会(平成 25 年 3 月, 名古屋)
- 3) 平成 25 年度日本神経学会東海北陸地区生涯教育講演会(平成 26 年 3 月, 名古屋)

3) 学術雑誌

犬塚 貴：

- 1) Geriatrics Gerontology International ; Associate Editor(～現在)
- 2) 日本神経免疫学会誌；編集委員(～平成 25 年)
- 3) 医学のあゆみ；編集協力者(～現在)
- 4) Geriatric Medicine(老年医学)；編集アドバイザー(平成 25 年～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

犬塚 貴：

- 1) 第 53 回日本神経学会学術大会(平成 24 年 5 月, 東京, シンポジウム「脱髄性疾患の病態に基づいた新規治療戦略」座長)
- 2) 第 54 回日本老年医学会学術集会(平成 24 年 6 月, 東京, シンポジウム「高齢者の災害医療」座長)
- 3) 第 54 回日本老年医学会学術集会(平成 24 年 6 月, 東京, Meet the Expert 「歩行障害と動作緩慢」演者)
- 4) 第 24 回日本神経免疫学会学術集会(平成 24 年 9 月, 軽井沢, ワークショップ「NMO/筋炎」座長)
- 5) 第 30 回日本神経治療学会総会(平成 24 年 11 月, 北九州, ホットトピックス「リツキサンの神経疾患への応用」演者)
- 6) 第 54 回日本神経学会学術大会(平成 25 年 6 月, 東京, 生涯教育セミナー「認知症の周辺症状(BPSD)への対応」座長)
- 7) 第 55 回日本老年医学会学術集会(平成 25 年 6 月, 大阪, 教育講演「非アルツハイマー型認知症の診断」演者)
- 8) 第 55 回日本老年医学会学術集会(平成 25 年 6 月, 大阪, ランチョンセミナー「高齢者認知症に対する老年医学的対応と治療」座長)
- 9) 第 35 回日本アルコール関連問題学会(平成 25 年 7 月, 岐阜, ランチョンセミナー「認知症診療における神経学的診察」演者)
- 10) 第 55 回日本神経学会学術大会(平成 26 年 5 月, 福岡, 教育講演「神経疾患と抑うつ状態」座長)
- 11) 第 55 回日本神経学会学術大会(平成 26 年 5 月, 福岡, シンポジウム「「神経内科教育：学部教育から始まる」・テュートリアル教育の長所・短所と未来」シンポジスト)
- 12) 第 56 回日本老年医学会学術集会(平成 26 年 6 月, 福岡, 教育講演「認知症診療の現況と将来展望」座長)
- 13) 第 56 回日本老年医学会学術集会(平成 26 年 6 月, 福岡, ランチョンセミナー「高齢者における慢性疼痛管理のピットフォール -GFR に応じた実践的な治療-」座長)
- 14) 第 26 回日本神経免疫学会学術集会(平成 26 年 9 月, 金沢, シンポジウム「Autoimmune channelopathies -update-」座長)
- 15) 第 15 回日本早期認知症学会学術大会(平成 26 年 9 月, 佐倉, シンポジウム「認知症治療戦略：分子病態とネットワーク - 神経難病に見る分子ネットワークと治療へのヒント」演者)
- 16) 第 15 回日本早期認知症学会学術大会(平成 26 年 9 月, 佐倉, 教育講演「多系統萎縮症」座長)
- 17) 第 48 回日本てんかん学会総会(平成 26 年 10 月, 東京, シンポジウム「免疫介在性亜急性辺縁系脳炎の臨床的特徴」演者)
- 18) 第 2 回日本難病ネットワーク学会学術集会(平成 26 年 11 月, 鹿児島, 教育講演「急速に進歩する難治性神経疾患の遺伝子診断・研究」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 田中優司：第 24 回岐阜医学奨励賞(平成 24 年度)
- 2) 原田斉子：第 216 回日本内科学会東海地方会若手優秀演題賞(神経分野)(平成 24 年度)
- 3) 原田斉子：第 218 回日本内科学会東海地方会若手優秀演題賞(神経分野)(平成 24 年度)
- 4) 瀬川 一：第 220 回日本内科学会東海地方会若手優秀演題賞(神経分野)(平成 25 年度)
- 5) 竹腰 顕：第 222 回日本内科学会東海地方会若手優秀演題賞(神経分野)(平成 25 年度)
- 6) 安西将大：第 223 回日本内科学会東海地方会若手優秀演題賞(神経分野)(平成 26 年度)
- 7) 竹腰 顕：第 225 回日本内科学会東海地方会若手優秀演題賞(神経分野)(平成 26 年度)

9. 社会活動

犬塚 貴：

- 1) 中部療護センター入院審査委員(～現在)
- 2) 岐阜県難病医療連絡協議会副会長(～現在)
- 3) 岐阜県医師会介護福祉委員(～現在)
- 4) 岐阜県医師会代議員(～現在)
- 5) 岐阜県認知症地域支援体制構築等推進委員会委員(～現在)
- 6) 日本 ALS 協会岐阜県支部特別顧問(～現在)
- 7) クロイツフェルトヤコブ病サーベイランス委員(全国)(～現在)
- 8) クロイツフェルトヤコブ病サーベイランス委員(岐阜県担当)(～現在)
- 9) 岐阜県難病団体就労連絡協議会委員(～現在)
- 10) 岐阜県社会福祉審議会委員(～現在)
- 11) 岐阜市社会福祉審議会委員(～現在)
- 12) 岐阜市市民福祉創造会議委員(平成 26 年 4 月～現在)

木村暁夫：

- 1) 岐阜県国民健康保険団体連合会介護給付費審査委員(平成 26 年 4 月～現在)

林 祐一：

- 1) 岐阜市社会福祉審議会委員(平成 24 年 4 月～現在)

10. 報告書

- 1) 木村暁夫：プロテオーム解析を用いた高齢認知症患者における大脳白質病変と抗血管内皮細胞抗体の関連性に関する研究：厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業 平成 21-23 年度総合研究報告書：1-159(平成 24 年 3 月)
- 2) 犬塚 貴，田中優司，林 祐一，木村暁夫，堀田みゆき：岐阜県内の各医療圏における難病医療の現状と課題：厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業 希少性難治性疾患患者に関する医療の向上及び患者支援のあり方に関する研究 平成 23 年度総括・分担研究報告書(西澤班)：20-22(平成 24 年 3 月)
- 3) 水澤英洋，山田正仁，齋藤延人，佐藤克也，村山繁雄，中村好一，黒岩義之，北本哲之，金谷泰弘，原田雅史，太組一朗，森若文雄，青木正志，西澤正豊，犬塚 貴，武田雅俊，阿部康二，村井弘之，田村智英子，古賀雄一，三條伸夫：プリオン病のサーベイランス及び感染予防に関する調査研究：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究 平成 23 年度総括・分担研究報告書(水澤班)：1-9(平成 24 年 3 月)
- 4) 三條伸夫，日熊麻耶，水澤英洋，佐藤克也，山田正仁，村山繁雄，森若文雄，青木正志，西澤正豊，黒岩義之，犬塚 貴，武田雅俊，阿部康二，村井弘之，北本哲之，中村好一，原田雅史：我が国の遺伝性プリオン病における髄液中バイオマーカー所見と発症年齢・予後・進行速度の関連性について：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究 平成 23 年度総括・分担研究報告書(水澤班)：28-30(平成 24 年 3 月)
- 5) 犬塚 貴，林 祐一，吉倉延亮，原田斉子，香村彰宏，木村暁夫，吉田眞理：画像所見，髄液所見から臨床的に CJD が疑われた一例：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究 平成 23 年度総括・分担研究報告書：66-69(平成 24 年 3 月)
- 6) 水澤英洋，中村好一，山田正仁，齋藤延人，村山繁雄，高尾昌樹，森若文雄，青木正志，西澤正豊，

- 黒岩義之，犬塚 貴，武田雅俊，阿部康二，村井弘之，北本哲之，佐藤克也，原田雅史，太組一朗，金谷泰弘，三條伸夫：1999-2011年のクロイツフェルト・ヤコブ病サーベイランスの結果：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 プリオン病および遅発性ウイルス感染症に関する調査研究 平成23年度総括・分担研究報告書(水澤班)：17-27(平成24年3月)
- 7) 小池春樹，祖父江 元，川頭祐一，池田修一，嶋田 豊，菊池修一，米田 誠，犬塚 貴，溝口功一，橋本修二，鷺見幸彦，寶珠山 稔，吉田 宏，秋田祐枝，田中千枝子，齋藤由扶子，舟橋龍秀，服部直樹，小長谷正明，久留 聡：平成23年度中部地区スモン患者の実態：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 スモンに関する調査研究 平成23年度総括・分担研究報告書(小長谷班)：41-44(平成24年3月)
- 8) 下澤伸行，林 祐一，山田 恵，高木麻里，保住 功：特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症の遺伝子変異の同定：厚生労働科学研究費難治性疾患克服研究事業 フェール病(特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症)の診断方法の確立と治療法の開発 平成23年度総括・分担研究報告書(保住班)：7-8(平成24年5月)
- 9) 犬塚 貴，橋本和宜，木村暁夫，保住 功：特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症患者の髄液を用いた二次元電気泳動法による疾患特異的マーカーの検出：厚生労働科学研究費難治性疾患克服研究事業 フェール病(特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症)の診断方法の確立と治療法の開発 平成23年度総括・分担研究報告書：13-15(平成24年5月)
- 10) 林 祐一，保住 功，犬塚 貴：運動療法によるβアミロイド凝集抑制効果の分子メカニズムの解明と認知症予防法への応用：三井住友海上福祉財団 2010年度研究助成研究結果報告書：127-129(平成24年7月)
- 11) 犬塚 貴，田中優司，山田 恵，林 祐一，木村暁夫，堀田みゆき：岐阜県の重症難病患者における災害時への備えに関する実態：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 希少性難治性疾患患者に関する医療の向上及び患者支援のあり方に関する研究 平成24年度総括・分担研究報告書：49-51(平成25年3月)
- 12) 祖父江 元，小池春樹，川頭祐一，池田修一，嶋田 豊，菊池修一，米田 誠，犬塚 貴，溝口功一，橋本修二，鷺見幸彦，寶珠山 稔，吉田 宏，秋田祐枝，田中千枝子，齋藤雅茂，齋藤由扶子，舟橋龍秀，服部直樹，小長谷正明，久留 聡：平成24年度中部地区スモン患者の実態：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 スモンに関する調査研究 平成24年度総括・分担研究報告書：45-48(平成25年3月)
- 13) 水澤英洋，山田正仁，齋藤延人，北本哲之，中村好一，金谷泰弘，村山繁雄，佐藤克也，原田雅史，太組一朗，森若文雄，青木正志，西澤正豊，黒岩義之，犬塚 貴，武田雅俊，阿部康二，村井弘之，田村智英子，古賀雄一，三條伸夫：プリオン病のサーベイランス及び感染予防に関する調査研究：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究 平成24年度総括・分担研究報告書：1-11(平成25年3月)
- 14) 水澤英洋，中村好一，山田正仁，齋藤延人，北本哲之，金谷泰弘，村山繁雄，佐藤克也，原田雅史，太組一朗，森若文雄，青木正志，西澤正豊，黒岩義之，犬塚 貴，武田雅俊，阿部康二，村井弘之，田村智英子，古賀雄一，三條伸夫：1999-2012年のクロイツフェルト・ヤコブ病サーベイランスの結果：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究 平成24年度総括・分担研究報告書：13-22(平成25年3月)
- 15) 三條伸夫，日熊麻耶，日詰正樹，水澤英洋，佐藤克也，山田正仁，村山繁雄，森若文雄，青木正志，西澤正豊，黒岩義之，犬塚 貴，武田雅俊，阿部康二，村井弘之，北本哲之，中村好一，原田雅史，金谷泰弘：我が国の遺伝性CJD(V180I)における髄液中のバイオマーカー所見と発症年齢と罹病期間の関連性について：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究 平成24年度総括・分担研究報告書：41-44(平成25年3月)
- 16) 犬塚 貴，林 祐一，岩崎 靖，吉倉延亮，波田野 琢，辰己親水，北本哲之，木村暁夫，吉田眞理：MM2-視床型クロイツフェルト・ヤコブ病の1剖検例：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究 平成24年度総括・分担研究報告書：69-70(平成25年3月)
- 17) 犬塚 貴：岐阜・愛知・三重県におけるサーベイランスの状況：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究 平成22-24年度総合研究報告書：52-53(平成25年3月)
- 18) 水澤英洋，山田正仁，齋藤延人，北本哲之，中村好一，金谷泰弘，村山繁雄，佐藤克也，原田雅史，太組一朗，森若文雄，青木正志，西澤正豊，黒岩義之，犬塚 貴，武田雅俊，阿部康二，村井弘之，

- 田村智英子, 古賀雄一, 三條伸夫: 1999-2012 年のクロイツフェルト・ヤコブ病サーベイランスの結果: 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 プリオン病及び遅発性ウイルス感染症に関する調査研究 平成 24 年度総括・分担研究報告書: 19-25(平成 25 年 3 月)
- 19) 保住 功, 犬塚 貴, 辻 省次: ファール病(特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症)の分子病態の解明、ならびに診断法の確立と治療法の開発に関する研究: 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 ファール病(特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症)の分子病態の解明、ならびに診断法の確立と治療法の開発に関する研究 平成 24 年度総括・分担研究報告書: 1-4(平成 25 年 3 月)
- 20) 犬塚 貴, 山田 恵, 林 祐一, 小林清樹, 田口芳治, 峠 哲男, 高木麻里, 金子雅幸, 保住 功: 日本の症例における SLC20A2 の検索: 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 ファール病(特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症)の分子病態の解明、ならびに診断法の確立と治療法の開発に関する研究 平成 24 年度総括・分担研究報告書: 5-6(平成 25 年 3 月)
- 21) 祖父江元, 小池春樹, 川頭祐一, 池田修一, 嶋田 豊, 菊池修一, 濱野忠則, 犬塚 貴, 溝口功一, 橋本修二, 鷺見幸彦, 寶珠山稔, 近藤良伸, 平田宏之, 田中千枝子, 齋藤由扶子, 舟橋龍秀, 服部直樹, 小長谷正明, 久留 聡: 平成 25 年度中部地区スモン患者の実態: 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 スモンに関する調査研究 平成 25 年度総括・分担研究報告書: 56-59(平成 26 年 3 月)
- 22) 水澤英洋, 山田正仁, 齋藤延人, 北本哲之, 中村好一, 金谷泰弘, 村山繁雄, 佐藤克也, 原田雅史, 太組一朗, 森若文雄, 青木正志, 西澤正豊, 田中章景, 犬塚 貴, 武田雅俊, 阿部康二, 村井弘之, 田村智英子, 古賀雄一, 三條伸夫: 1999-2013 年のクロイツフェルト・ヤコブ病サーベイランスの結果: 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 プリオン病及び遅発性ウイルス感染症に関する調査研究 平成 25 年度総括・分担研究報告書: 17-23(平成 26 年 3 月)
- 23) 水澤英洋, 山田正仁, 齋藤延人, 北本哲之, 中村好一, 金谷泰弘, 村山繁雄, 佐藤克也, 原田雅史, 太組一朗, 森若文雄, 青木正志, 西澤正豊, 田中章景, 犬塚 貴, 武田雅俊, 阿部康二, 村井弘之, 田村智英子, 古賀雄一, 三條伸夫: プリオン病のサーベイランス及び感染予防に関する調査研究: 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究 平成 25 年度総括・分担研究報告書: 1-13(平成 26 年 3 月)
- 24) 水澤英洋, 中村好一, 山田正仁, 齋藤延人, 北本哲之, 金谷泰弘, 村山繁雄, 佐藤克也, 原田雅史, 太組一朗, 森若文雄, 青木正志, 西澤正豊, 田中章景, 犬塚 貴, 武田雅俊, 阿部康二, 村井弘之, 田村智英子, 古賀雄一, 三條伸夫: サーベイランスに基づくわが国のプリオン病の疫学像(1999-2013 年データ): 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究 平成 25 年度総括・分担研究報告書: 15-27(平成 26 年 3 月)
- 25) 犬塚 貴, 林 祐一, 山田 恵, 香村彰宏, 木村暁夫: 抗 NAE 抗体陽性を認め橋本脳症との鑑別が問題となった緩徐進行型 CJD (probable) の 1 例: 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究 平成 25 年度総括・分担研究報告書: 60-62(平成 26 年 3 月)
- 26) 保住 功, 犬塚 貴, 辻 省次: 特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症(ファール病を含む)の iPS 細胞を活用した診断と治療法の確立に関する研究: 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症(ファール病を含む)の iPS 細胞を活用した診断と治療法の確立に関する研究 平成 25 年度総括・分担研究報告書: 1-7(平成 26 年 3 月)
- 27) 犬塚 貴, 山田 恵, 林 祐一, 小林清樹, 田口芳治, 高嶋修太郎, 田中耕太郎, 峠 哲男, 高木麻里, 金子雅幸, 保住 功: SLC20A2 遺伝子変異の検索: 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症(ファール病を含む)の iPS 細胞を活用した診断と治療法の確立に関する研究 平成 25 年度総括・分担研究報告書: 8-9(平成 26 年 3 月)

11. 報道

- 1) 犬塚 貴: ブロック会議報告(中部ブロック): 日臨内ニュース(2012 年 2 月 25 日)
- 2) 木村暁夫: 研究室から大学はいま 免疫学から認知症治療模索: 岐阜新聞(2013 年 9 月 24 日)

12. 自己評価

評価

自己免疫性神経疾患の病態機序の解明と診断・治療法の開発に関する研究費の獲得は、それなりに達成されている。まだ一般的に実用化できるバイオマーカーは実現されていないが、論文業績は一步ずつ

出ている。免疫沈降法や質量分析法を含むプロテオーム解析法も本研究に於いて確立した。神経組織と共に血管内皮もターゲットとしていることが重要であり、今後の展開が充分期待できる。これらの概念や手段の、認知症研究への適用はユニークである。これもまだ臨床応用には至らないが、論文業績も出てきている。

特発性基底核石灰化症 (IBGC) に関する研究は、疫学、分子生物学、分子遺伝学、病理学、iPS 細胞研究、質的研究と学際的な広がりを見せている。目標とした分子レベルでの疾患分類に向けて進んでいると言える。本疾患はこれまでの研究成果に基づき厚労省の指定難病となった。

高齢者の薬剤数適正化に関して、電子カルテシステムが多職種共同を介してどのように貢献しているかについて、老年医学的な視点から検討しておりユニークな取り組みと言える。

重症難病患者の地域医療体制の構築に関する研究、スモンに関する調査研究、プリオン病サーベイランスに関する研究は、いずれも厚労科研による全国的な展開事業であるが、当地域での役割を充分果たし、更に一部は全国的なモデルとしても役割を担ってきた。プリオン病の自然歴調査への参加を開始したが、これは近い将来の治験に向けた積極的な取り組みと言える。

現状の問題点及びその対応策

現在、教室の所属医師数が少なく、学外・学内で増大する診療需要にも充分応えきれていない状況で、研究においてもマンパワーの確保が最も大きな問題である。適用可能な範囲でマニュアル化を進め、会議・行事を見直し、各自のタイムマネジメント範囲を広げて研究時間を捻出する。臨床実習等での学生との緊密な接触を図ること、わかりやすい研修を提供すること、初期研修医に対して神経疾患対応スキルアップや各種研究会等の参加を促し、コミュニケーションを充実させ、勧誘を強化していく。

今後の展望

教室所属医師数は少なく研究のスピードは遅いが、学内外との共同研究が広く展開されており、今後の研究成果が期待できる。また難病や超高齢社会と密接に関わる問題については、これまで同様、多職種や行政とも協力しながら展開させていく必要がある。

(5) 精神病理学分野

1. 研究の概要

当分野における研究は、これまで二十数年間にわたり、一貫して臨床を重視し、そこに基盤を置いた研究を目指してきた。今後も当分野の伝統を生かしつつ、最新のニューロサイエンスの様々な手法を取り入れて、新たな研究を行ってゆく予定である。

臓器移植等に代表される高度先進医療が可能となった一方、価値観や生命倫理の多様化を背景としてより開かれた医療が求められている。また、高度情報化による過ストレス社会の出現、少子高齢化や過疎化、環境問題等といった諸問題に対し、医療は今まで以上に適切かつ十分な対応をすべきである。大学に籍を置く医療人の職務は、先端的生命科学に関する教育・研究に重きを置きつつも、臨床に直結した疾病の診断・治療に役立つ探索型研究を推進し、地域社会と世界の医療に貢献することである。一方、臨床講座での研究は、世界に通用する研究者を作ることだけが目的ではなく、そうした研究を通して臨床能力を研ぎ、結果的に患者様のためになるものでなければならない。従って、「まず初めに、臨床ありき」という、臨床重視の姿勢は最も重要である。当分野では、日常臨床の中に研究の閃きを感じ取れる医療人を輩出することを目標として、以下の研究を行っていく。

- 1) 精神疾患の Neuroimaging 研究 (PET, f-MRI, MRS, NIRS 等)
- 2) 精神疾患の自律神経研究 (Baroreflex, Papillary light reflex 等)
- 3) 精神科診断学に関する研究 (DSM-IV, ICD-10 等)
- 4) 精神疾患と生活習慣病に関する研究 (DM や虚血性心疾患 等)
- 5) 発達障害の疫学及び Neuroimaging 研究 (自閉性障害, Asperger 障害, ADHD 等)
- 6) 災害精神医学に関する研究

2. 名簿

教授：	塩入俊樹	Toshiki Shioiri
准教授：	高岡 健	Ken Takaoka
准教授：	植木啓文	Hirofumi Ueki
臨床講師：	深尾 琢	Taku Fukao
臨床講師：	瀨瀬慎也	Shinya Kouketsu
臨床講師：	市川直樹	Naoki Ichikawa
臨床講師：	高橋宗秀	Munehide Takahashi
医員：	徳丸淑江	Yoshie Tokumalu
医員：	杉山俊介	Syunsuke Sugiyama
医員：	杉山かんな	Kanna Sugiyama
医員：	市川千智	Chisato Ichikawa
医員：	岡 琢哉	Takuya Oka
医員：	熊澤雄一	Yuichi Kumazawa
医員：	蔵満彩結実	Ayumi Kuramitsu
大学院生：	中島美千世	Michiyo Nakashima

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 塩入俊樹. 17 精神科面接, 診断と各種検査—疾患診断—: 樋口輝彦, 市川宏伸, 神庭重信, 朝田 隆, 中込和幸編集. 今日の精神疾患治療指針, 東京: 医学書院; 2012 年: 679-683.
- 2) 石川憲彦, 高岡 健. 発達障害という希望—診断名にとらわれない新しい生き方—, 東京: 雲母書房; 2012 年.
- 3) 中島 直, 高岡 健編著. 死刑と精神医療, 東京: 批評社; 2012 年.
- 4) 高岡 健. 少年事件における情状: 山崎晃資, 牛島定信, 栗田 広, 青木省三編著. 現代 児童青年精神医学改訂第 2 版, 大阪: 永井書店; 2012 年: 225-230.
- 5) 高岡 健, 丹羽伸也. 選択性緘黙: 山崎晃資, 牛島定信, 栗田 広, 青木省三編著. 現代 児童青年精神医学改訂第 2 版, 大阪: 永井書店; 2012 年: 278-281.
- 6) 塩入俊樹. 不安障害の歴史: 塩入俊樹, 松永寿人編集. 不安障害診療のすべて, 東京: 医学書院; 2013 年: 2-19.
- 7) 塩入俊樹. パニック障害と全般性不安障害: 山口 徹, 北原光夫, 福井次矢総編集. 今日の治療指針 2013 年版—私はこう治療している—, 東京: 医学書院; 2013 年: 883-884.
- 8) 塩入俊樹. F45 身体表現性障害: 中根允文, 山内俊雄監修. ICD-10 精神科診断ガイドブック, 東京: 中山書

- 店；2013年：370-391.
- 9) 塩入俊樹, 植木啓文. F43 重度ストレス反応[重度ストレスへの反応]および適応障害：中根允文, 山内俊雄監修. ICD-10 精神科診断ガイドブック, 東京：中山書店；2013年：325-345.
 - 10) 塩入俊樹, 深尾 琢. F44 解離性(転換性)障害：中根允文, 山内俊雄監修. ICD-10 精神科診断ガイドブック, 東京：中山書店；2013年：345-369.
 - 11) 塩入俊樹, 深尾 琢. F48 他の神経症性障害：中根允文, 山内俊雄監修. ICD-10 精神科診断ガイドブック, 東京：中山書店；2013年：391-399.
 - 12) 塩入俊樹, 市川直樹. 腹部不快症状を示すさまざまな精神疾患とその鑑別：貝谷久宣監修, 野呂浩史編. 嘔吐恐怖症—基礎から臨床まで—, 東京：金剛出版；2013年：84-116.
 - 13) 天野雄平, 塩入俊樹. F40 恐怖症性不安障害：中根允文, 山内俊雄監修. ICD-10 精神科診断ガイドブック, 東京：中山書店；2013年：284-324.
 - 14) 高岡 健. 続・やさしい発達障害論, 東京：批評社；2013年.
 - 15) 高岡 健. 拘禁反応：藤永 保監修. 最新 心理学事典, 東京：平凡社；2013年：175-176.
 - 16) 高岡 健. 司法精神医学：藤永 保監修. 最新 心理学事典, 東京：平凡社；2013年：305-306.
 - 17) 塩入俊樹. 社交不安障害(Social Anxiety Disorder:SAD)：泉 孝英編集主幹. 今日の診察のためにガイドライン 外来診療, 東京：日経メディカル；2014年：416-422.
 - 18) 市川直樹, 天野雄平, 塩入俊樹. 無顆粒球症症例について：藤井康男編集. 「クロザピン 100 の Q&A」, 東京：星和書店；2014年：212-214.
 - 19) 塩入俊樹. 疾患別の早期段階における徴候・治療・対応：第 3 章 不安障害の早期徴候と治療・対応：水野雅文編集. 重症化させないための早期精神疾患の診方と対応, 東京：医学書院；2014年：146-160.
 - 20) 塩入俊樹, 桑原秀樹. 痛みと情動, ストレスと痛み, 天候と痛み：日本医師会雑誌 143 巻 特別号(1) 生涯教育シリーズ 86 痛みのマネジメント update 基礎知識から緩和ケアまで, 東京：メジカルビュー社；2014年：60-62.
 - 21) 塩入俊樹. 社交不安障害の適切な診断と治療：大原薬品パンフレット；2014年：1-7.
 - 22) 高岡 健. 児童精神科医からみた裁判員裁判の課題：武内謙治編著. 少年事件の裁判員裁判, 東京：現代人文社；2014年.
 - 23) 高岡 健. 小さなひきこもり大きなひきこもり—<オブローモフ主義>再考：日本子どもソーシャルワーク協会編. 「ひきこもり」という希望, 東京：NPO 法人日本子どもソーシャルワーク協会；2014年.
 - 24) 高岡 健. 精神現象を読み解くための 10 章, 東京：批評社；2014年.
 - 25) 高岡 健. 子どものうつ/思春期/自閉症スペクトラム/障害と養育/摂食障害/リストカット：芹沢俊介ほか編. 養育辞典, 東京：明石書店；2014年.
 - 26) 小道モコ, 高岡 健. 自閉症スペクトラム “ありのまま” の生活, 東京：明石書店；2014年.
 - 27) 高岡 健. 岡江 晃の遺した『宅間守精神鑑定書』/「人格障害」問題と新しい責任能力論, 佐藤幹夫編. 飢餓陣営せれくしょん 2 『宅間守精神鑑定書』を読む, 東京：言視社；2014年.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

なし

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 上島国利, 塩入俊樹, 今枝孝行, 栗林和彦, 丸山奈美, 阿部 学, 吉川麗子, 寺山秀之, 新野伊知郎. パニック障害患者における sertraline と paroxetine の有効性の比較, 臨床精神薬理 2012 年；15 巻：775-784.
- 2) 塩入俊樹. うつ病・不安障害治療における新規抗うつ薬の位置づけ—うつ病と不安障害—：その臨床的重要性について, 臨床精神薬理 2012 年；15 巻：1071-1076.
- 3) 塩入俊樹. ストレスによる不安のメカニズム, 女性心身医学 2012 年；16 巻：236-241.
- 4) 塩入俊樹. 岐阜県精神保健福祉協会創立 50 周年に寄せて, ぎふ精神保健福祉 2012 年；48 巻：9-10.
- 5) 塩入俊樹他. 画像研究による形態変化や機能異常の解明進む, Medical Tribune 2012 年；45 巻：10.
- 6) 塩入俊樹, 桑原秀樹. 「操作的診断」における「誤診」, ころの科学 2012 年；164 巻：31-38.
- 7) 松永寿人, 塩入俊樹, 鈴木雄太郎. 診断基準改訂の方向性(DSM-IV から DSM-5 へ)うつ病・パニック障害を再考する 不安障害治療の最適化, 臨床精神薬理 2012 年；15 巻：1589-1602.
- 8) 塩入俊樹. 気分障害と不安障害の併存：パニック障害の併存, 第 9 回 日本うつ病学会総会シンポジウム MW Conference Watch 2012 年：3.
- 9) 塩入俊樹. 不安障害の現在とこれから—DSM-5 に向けての展望と課題—：パニック障害, 精神神経学雑誌 2012 年；114 巻：1037-1048.
- 10) 塩入俊樹. ストレスと不眠：精神的なストレスと不眠, 不眠研究 2012 2012 年：137-145.
- 11) 塩入俊樹. 気分障害の治療ガイドライン新訂版：治療の基本—操作的診断に基づく治療アルゴリズムの使い方と注意点—, 精神科治療学 2012 年；27 巻：115-124.
- 12) 塩入俊樹, 鎌倉理人. 不安障害を見直す—慢性化・難治化と転帰—：パニック障害, 精神科 2012 年；21

巻：528-537.

- 13) 高岡 健, 本城秀次, 松田文雄ほか. 裁判員裁判における精神鑑定書の作成について：とくに少年事件の場合, 児精医誌 2012年; 53巻: 356-365.
- 14) 高岡 健. 文化的多様性からみた自閉症スペクトラム, 学校健康相談研究 2012年; 9巻: 12-19.
- 15) 市川直樹, 塩入俊樹. 不安障害における増強療法, 臨床精神薬理 2012年; 16巻: 69-78.
- 16) 塩入俊樹, 杉山俊介. 各立場からみた鎮痛薬の適正使用と使い方—各薬剤の選択基準とは? (適正使用の観点からみた NSAIDs の現状と新規鎮痛薬の位置づけ, 新規鎮痛薬導入のタイミング, 使い方など) 5)精神科医の立場から—, PROGRESS IN MEDICINE 2013年; 33巻: 41-44.
- 17) 塩入俊樹, 市川直樹. パニック障害の早期診断, 早期治療の意義, 精神科治療学 2013年; 28巻: 1443-1446.
- 18) 市川直樹, 塩入俊樹. 不安障害における増強療法, 臨床精神薬理 2013年; 16巻: 69-78.
- 19) 市川直樹, 塩入俊樹. 不安障害とうつ病—病態に応じた薬剤の選択—, Depression Strategy 2013年; 3巻: 4-8.
- 20) 城月健太郎, 高井昭裕, 足立總一郎, 塩入俊樹, 野村 忍. 集団認知行動療法への参加をもとに復職支援を進めた社交不安障害患者の一事例, 認知療法研究 2013年; 6巻: 55-67.
- 21) 高岡 健, 高田知二, 関 正樹. 精神遅滞・自閉症スペクトラム障害と非定型精神病, 児童青年精神医学とその近接領域 2013年; 54巻: 81-83.
- 22) 高岡 健. 自閉症スペクトラム障害とパーソナリティ障害, 児童青年精神医学とその近接領域 2013年; 54巻: 463-467.
- 23) 高岡 健. 裁かれる自閉症スペクトラム障害の人々, 精神療法 2013年; 39巻: 326-330.
- 24) 高岡 健. 発達障害の「増加」をどう考えるか—医療現場から—, 季刊 福祉労働 2013年; 140号: 13-22.
- 25) 高岡 健. 宅間 守は MCDD か? 精神医学 2013年; 55巻: 1018-1019.
- 26) 関 正樹, 高岡 健. オンラインゲームへの傾倒と精神療法, 精神科 2013年; 22巻: 316-321.
- 27) 塩入俊樹. 若者のうつ病を考える：うつ病と新型うつ病, CAMPUS HEALTH 第51回全国大学保健管理研究集会報告書 2014年: 151-154.
- 28) 塩入俊樹. ストレス測定技術の検証に関する調査開発：精神神経科領域からみるストレス計測技術の社会的意義と有用性, 一般財団法人機械システム振興協会研究委託費による平成25年度報告書 2014年: 67-75.
- 29) 桑原秀樹, 塩入俊樹. シンプル処方極意：パニック障害, 臨床精神医学 2014年; 43巻: 53-62.
- 30) 塩入俊樹. うつ病と不安障害とのコモビディティ, DEPRESSION コンパクトガイド 2014年: 1-4.
- 31) 塩入俊樹, 渡邊 斉. DSM-5 において新しく提示された疾患概念や評価法をどう理解するか：5Anxious distress specifier, 精神科 2014年; 24巻: 19-27.
- 32) 塩入俊樹. 不安うつ病をどう治すか, Depression Strategy 2014年; 4巻: 9-12.
- 33) 桑原秀樹, 塩入俊樹. パニック障害に対する薬物療法終了の基準とその方法, 臨床精神薬理 2014年; 17巻: 489-498.
- 34) 塩入俊樹. パニック障害の生物学的病態—Stress-induced fear-circuitry disorders を中心に—, CNS フロントティア 2014年; 1巻: 7-8.
- 35) 塩入俊樹, 桑原秀樹. うつ病の急性期に併存する不安障害の薬物療法, 臨床精神薬理 2014年; 17巻: 1085-1095.
- 36) 塩入俊樹. 今日の臨床サポート：パニック障害, エルゼビア・ジャパン 2014年.
- 37) 塩入俊樹. アルコールと不安障害について, 日本アルコール関連問題学会雑誌 2014年; 16巻: 5-9.
- 38) 植木啓文. 産業保健領域のメンタルヘルス—アルコール問題を中心に—, 日本アルコール関連問題学会雑誌 2014年; 16巻: 150-153.
- 39) 井奈波良一, 黒川淳一, 植木啓文. うつ病労働者が期待する労働者のメンタルヘルス問題への事業場, 産業医, 医療機関による早期支援に関する調査, 日本職業・災害医学会誌 2014年; 62巻: 1-7.

原著 (欧文)

- 1) Takaoka K, Hazama K. Psychiatric/Psychological Evaluation of Juvenile Delinquents in Japan:A Personal View.International Medical Journal.2013;20:183-185.

IF 0.109

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：植木啓文；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：禁煙をめざした経耳介迷走神経電気刺激治療の確立；平成25-27年度；2,500千円(900：700：900千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

塩入俊樹：

- 1) 日本生物学的精神医学会評議員(～現在)
- 2) 日本精神科診断学会評議員(～現在)
- 3) 日本統合失調症学会評議員(～現在)
- 4) 日本不安障害学会評議員(～現在)
- 5) 日本うつ病学会評議員(～現在)
- 6) 日本運動器疼痛学会評議員(～現在)

高岡 健：

- 1) 日本精神神経学会評議員(～平成 23 年度)
- 2) 日本精神神経学会法倫理関連委員会委員(～平成 23 年度)
- 3) 日本児童青年精神医学会評議員・理事(～平成 25 年度)
- 4) 日本児童青年精神医学会代議員・理事(～現在)
- 5) 日本児童青年精神医学会子どもの人権と法に関する委員会担当理事(～平成 25 年度)
- 6) 日本児童青年精神医学会子どもの人権と法に関する委員会委員長(～現在)
- 7) 日本児童青年精神医学会顕彰委員会担当理事(～現在)
- 8) 日本児童青年精神医学会法人化・専門医制度に関する委員会担当理事(～現在)
- 9) 日本総合病院精神医学会評議員(～現在)
- 10) 日本総合病院精神医学会医療問題委員会委員(～平成 23 年度)
- 11) 日本精神病理学会評議員(～現在)

植木啓文：

- 1) 日本総合病院精神医学会評議員(～現在)
- 2) 日本精神科診断学会評議員(～現在)
- 3) 心理教育・家族教室ネットワーク運営委員(～現在)

深尾 琢：

- 1) 東海精神神経学会運営委員(～現在)

2) 学会開催

植木啓文：

- 1) 第 171 回東海精神神経学会(平成 25 年 2 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

塩入俊樹：

- 1) 精神科診断学；編集委員長(～現在)
- 2) 最新精神医学；編集同人(～現在)
- 3) 分子精神医学；編集同人(～現在)
- 4) Editorial Board of The Scientific World JOURNAL(～現在)

高岡 健：

- 1) 精神医療；編集委員(～現在)

植木啓文：

- 1) 精神療法；編集同人(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

塩入俊樹：

- 1) 岐阜県精神保健福祉協会副会長(～現在)
- 2) 岐阜県認知症政策推進委員会委員(～現在)
- 3) 岐阜県自殺予防推進委員会委員(～現在)
- 4) 岐阜県依存症対策推進協議会会長(平成 26 年 12 月～現在)

高岡 健：

- 1) 岐阜県精神医療審査会委員(～現在)
- 2) 岐阜県麻薬中毒審査会委員(～平成 25 年度)
- 3) 岐阜県発達障がい者等支援体制整備推進委員(～平成 25 年度)
- 4) 愛知県立刈谷工業高校生自殺事案に関する第三者調査委員会委員(～平成 25 年度)
- 5) 岐阜県後期高齢者医療障害認定審査医(～現在)
- 6) 岐阜県国民年金障害認定審査医(～現在)
- 7) 厚生労働省職員メンタルヘルス相談医(～現在)
- 8) 岐阜県障害者職業センター医療情報助言者(～現在)
- 9) 岐阜県知的障害者育成室医学的専門相談員(～現在)
- 10) 岐阜県希望が丘学園嘱託医(～現在)
- 11) 佐世保市内女子高校生逮捕事案に係る調査委員会委員(～現在)

植木啓文：

- 1) 岐阜県生活保護法医療扶助審議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県精神医療審査会委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 塩入俊樹：ストレス測定技術の応用展開と実現への方策策定に関する調査開発：平成 23 年度財団法人 機械システム振興協会研究委託費報告書：60-62(平成 24 年)
- 2) 塩入俊樹：ストレス測定技術の応用展開と実現への方策策定に関する調査開発：平成 24 年度財団法人 機械システム振興協会研究委託費報告書：85-93(平成 25 年)

11. 報道

- 1) 塩入俊樹：教えてホームドクター-続うつ病講座-うつ病の薬物療法-：岐阜新聞(2012 年 1 月 30 日)
- 2) 塩入俊樹：診療科を超え「痛み」の根源を探る-疼痛性障害の概念と治療-：岐阜県保険医新聞(2012 年 2 月 10 日)
- 3) 塩入俊樹：教えてホームドクター-続うつ病講座-うつ病の原因-：岐阜新聞(2012 年 4 月 2 日)
- 4) 塩入俊樹：教えてホームドクター-パニック障害：岐阜新聞(2012 年 6 月 18 日)
- 5) 高岡 健：耳を疑う判決(コメント)：毎日新聞(2012 年 7 月 31 日)
- 6) 高岡 健：隔離社会こそ問題(コメント)：東京新聞(2012 年 8 月 5 日)
- 7) 塩入俊樹：教えてホームドクター-パニック障害の典型例：岐阜新聞(2012 年 8 月 20 日)
- 8) 高岡 健：子どもの不登校・自殺増える 2 学期(コメント)：東京新聞(2012 年 9 月 4 日)
- 9) 塩入俊樹：教えてホームドクター-パニック障害の治療：岐阜新聞(2012 年 10 月 29 日)
- 10) 塩入俊樹：教えてホームドクター-社交不安障害とは：岐阜新聞(2013 年 1 月 7 日)
- 11) 塩入俊樹：教えてホームドクター-社交不安障害の症状：岐阜新聞(2013 年 3 月 4 日)
- 12) 高岡 健：命懸けて通学しなくていい：毎日新聞(東海版)(2013 年 4 月 21 日)
- 13) 塩入俊樹：教えてホームドクター-社交不安障害の治療：岐阜新聞(2013 年 5 月 6 日)
- 14) 塩入俊樹：教えてホームドクター-心の病気と診療科名：岐阜新聞(2013 年 7 月 8 日)
- 15) 塩入俊樹：新型うつ病を考える-似て非なるもの-：岐阜県保険医新聞(2013 年 8 月 10 日)
- 16) 塩入俊樹：教えてホームドクター-どうなったら心の病気：岐阜新聞(2013 年 9 月 16 日)
- 17) 塩入俊樹：教えてホームドクター-精神安定薬って何？：岐阜新聞(2013 年 11 月 18 日)

- 18) 塩入俊樹：教えてホームドクター:睡眠はなぜ必要か：岐阜新聞(2014年1月20日)
- 19) 塩入俊樹：教えてホームドクター:睡眠には5段階：岐阜新聞(2014年3月17日)
- 20) 塩入俊樹：教えてホームドクター:睡眠のメカニズム：岐阜新聞(2014年5月19日)
- 21) 高岡 健：少年犯罪に司法福祉の視点を：中日新聞(2014年5月23日)
- 22) 塩入俊樹：教えてホームドクター:不眠症って何？：岐阜新聞(2014年7月28日)
- 23) 高岡 健：言葉で本質見誤るな(視点)：毎日新聞(西部版)(2014年9月10日)
- 24) 塩入俊樹：教えてホームドクター:不眠の種類さまざま：岐阜新聞(2014年9月29日)
- 25) 高岡 健：少年事件を考える(耕論)「一人でも大丈夫」と示そう：朝日新聞(2014年10月3日)

12. 自己評価

評価

上記のように、様々な研究成果が上がってきている。それらは、日常臨床に直結するものであり、地域での精神医療の展開においても大きな刺激となっている。また、上記の報告の他に、積極的に司法精神鑑定を行っており、そういった点でも社会的貢献を果たしている。

現状の問題点及びその対応策

大学も人員不足のため、各スタッフが臨床、教育、研究と走り回っている。若い世代の研究者、教育者の育成が当教室の急務となっている。

今後の展望

現在の医師臨床研修制度では、精神科研修は選択必修となっている。そこで望まれているのは、プライマリ・ケアを重視した通常精神医療であり、この領域に焦点を据え研究を進めている大学は残念ながら少ない。それゆえ、当分野の存在意義は、国民のニーズといった点からも、今後ますます高まっていくものと期待できる。

(6) 脳神経外科学分野

1. 研究の概要

マウス脳出血モデルを用いてワルファリン及びリバーロキサバンが脳出血に与える影響を検討した。ワルファリン内服群と比較し、リバーロキサバン内服群は出血量が有意に少ないことが明らかとなった。(岐阜薬科大学薬効解析学講座との共同研究)

血小板活性化の研究として、頸動脈ステント留置術周術期における血小板凝集能の変化を測定した。約半数の患者に血小板の活性化が確認され、糖尿病および脆弱な動脈硬化巣が独立した危険因子であることを明らかとした。(薬理病態学講座との共同研究)

ヒトグリオーマにおける臨床研究として4D dynamic MET(methionine)-PET画像と病理組織との関連を後方視的に検討した。経時的に変化するMETのSUV T/N比から、グリオーマの鑑別を行うことができる可能性が示唆された。(中部療護センターにおける研究)

2. 名簿

教授：	岩間 亨	Toru Iwama
准教授：	矢野大仁	Hirohito Yano
准教授：	大江直行	Naoyuki Ohe
講師：	中山則之	Noriyuki Nakayama
助教：	榎本由貴子	Yukiko Enomoto
助教：	高木俊範	Toshinori Takagi
医員：	山内圭太	Keita Yamauchi
医員：	辻本真範	Masanori Tsujimoto
医員：	澤田重信	Shigenobu Sawada
医員：	川崎智弘	Tomohiro Kawasaki
医員：	村井博文	Hirofumi Murai
医員：	堀 貴光	Takamitsu Hori

3. 研究成果の発表

著書(和文)

- 1) 榎本由貴子. 抗血小板療法マスター講座: 坂井信幸, 瓢子敏夫, 松丸祐司, 宮地 茂, 吉村紳一編. 脳血管内治療の進歩 2013, 東京: メディカ出版; 2012年: 136-142.
- 2) 江頭裕介, 吉村紳一. 脂肪組織由来幹細胞の脳保護効果: 小川 彰企画編集. 脳神経外科救急領域における集中治療 レジデント 5, 東京: 医学出版; 2012年: 43-52.
- 3) 江頭裕介, 吉村紳一. 血管内治療とその治療可能時間: 脳と循環 17, 大阪: メディカルレビュー社; 2012年: 45-48.
- 4) 江頭裕介, 吉村紳一, 榎本由貴子, 岩間 亨. STA-MCA バイパス術後の過灌流症候群における画像上の特徴: The 30th Meeting of The Mt. Fuji Workshop on CVD 講演集 30, 東京: 株式会社にゅーろん社; 2012年: 56-59.
- 5) 榎本由貴子. 抗血栓療法の薬理と実際: 日本脳神経血管内治療学会総会生涯教育プログラム(CEP)テキスト, 東京: 第29回日本脳神経血管内治療学会学術総会; 2013年: 49-55.
- 6) 吉村紳一, 榎本由貴子, 岩間 亨. 妊娠中に発症した硬膜脳動静脈瘻および脳静脈洞血栓症-自験例と文献的考察-: The Mt. Fuji Workshop on CVD 講演集 31, 東京: 株式会社にゅーろん社; 2013年: 43-47.
- 7) 岩間 亨. 先天奇形: 児玉南海雄, 佐々木富男編. 標準脳神経外科学 第13版, 東京: 医学書院; 2014年: 299-322.
- 8) 岩間 亨, 榎本由貴子, 石澤錠二. 脳出血各論 特殊な脳出血 脳動静脈奇形による脳出血の診断と治療: 最新臨床脳卒中(下)-最新の診断と治療-(日本臨牀 72巻 増刊号 7), 東京: 日本臨牀; 2014年: 403-407.
- 9) 大江直行, 高見 剛, 岩間 亨. ユーイング肉腫/末梢性原始神経外胚葉性腫瘍: 別冊日本臨牀 神経症候群(第2版)III, 東京: 日本臨牀; 2014年: 299-302.
- 10) 石澤錠二, 岩間 亨. 血管内治療を中心に MMA(middle meningeal artery): 波出石弘, 石川達哉, 田中美千裕編. 脳動脈コンプリート, 東京: 中外医学社; 2014年: 164-168.
- 11) 高木俊範, 吉村紳一. 急性期脳梗塞に対する新しい再灌流療法: 堀 正二, 永井良三編. 循環器疾患 最新の治療 2014-2015, 東京: 南江堂; 2014年: 29-33.
- 12) 辻本真範, 吉村紳一. 脳血管障害 血管内治療: 松谷雅生, 田村 晃, 藤巻高光, 森田明夫編. 脳神経外科 周術期管理のすべて, 東京: メジカルビュー社; 2014年: 143-152.

著書(欧文)

- 1) Yoshimura S, Kawasaki M, Yamada K, Hattori A, Nishigaki K, Minatoguchi S, Iwama T. Optical coherence tomography (OCT): a new imaging tool during carotid artery stenting. In: Kawasaki M, ed.

Optical coherence tomography, Rijeka: INTECH; 2013:118-126.

- 2) Yano H, Iwama T. Papillary tumor of the pineal region. In: Hayat MA, ed. Tumors of the Central Nervous System, 10th ed. Dordrecht: Springer Science+Business Media; 2013:23-29.

総説 (和文)

- 1) 岩間 亨, 吉村紳一, 榎本由貴子, 江頭裕介, 矢野大仁, 大江直行. 内頸動脈前壁動脈瘤に対する治療-Clipping on wrapping と high-flow bypass における治療戦略, 脳神経外科ビデオジャーナル 2012年; 18巻.
- 2) 吉村紳一, 岩間 亨. もやもや病に対する脳血管再建術-特に STA-MCA, STA-ACA 吻合術+EDMS について, 脳神経外科速報 2012年; 4巻: 386-392.
- 3) 吉村紳一. Penumbra Pivotal Stroke Trial において術前 CT 所見と再開通までの時間が転帰に与えた影響, 分子脳血管病 2012年; 11巻: 83-85.
- 4) 吉村紳一. 症例 頸動脈ステント留置術の前に血栓を摘出した 83 歳男性, 日経メディカル 2012年; 3巻: 27.
- 5) 吉村紳一. 脳を救え: 新たな救急診療体制の構築, 循環器内科 2012年; 72巻: 261-265.
- 6) 石黒光紀. ドレナージ術, ブレインナーシング 2012年; 28巻: 55-59.
- 7) 榎本由貴子, 吉村紳一. 頸動脈ステント留置患者の抗血小板療法, Circulation 2012年; 12巻: 44-51.
- 8) 江頭裕介, 吉村紳一. ACVS の血管内治療, 血栓と循環 2012年; 20巻: 134-138.
- 9) 山田清文, 吉村紳一. 血管内治療(CAS), 救急医学 2012年; 8巻: 940-943.
- 10) 矢野大仁, 中山則之, 大江直行, 三輪和弘, 篠田 淳, 吉村紳一, 岩間 亨. 脳腫瘍関連てんかんに関するレビュー-レベチラセタムの有用性について-, てんかん研究 2013年; 31巻: 2-7.
- 11) 榎本由貴子, 吉村紳一. 急性期再開通療法, Neurol Surg 2013年; 41巻: 541-551.
- 12) 榎本由貴子, 中山則之, 石澤錠二, 大江直行, 矢野大仁, 岩間 亨. 当院におけるくも膜下出血治療の変遷, 脳血管攣縮 2013年; 29巻: 19-22.
- 13) 高木俊範, 吉村紳一. CEA, CAS と過灌注症候群(Hyperperfusion syndrome), 分子脳血管病 2013年; 12巻: 67-71.
- 14) 村井博文, 吉村紳一, 竹中勝信. 急性期脳梗塞患者における Solitaire flow restoration デバイス対 Merci リトリバーの前向き無作為化試験(SWIFT), 脳と循環 2013年; 18巻: 251-256.
- 15) 高木俊範, 吉村紳一. rt-PA 治療後の血管内治療-RCT の結果から-, 分子脳血管病 2014年; 13巻: 47-52.

総説 (欧文)

- 1) Ikegame Y, Yamashita K, Nakashima S, Nomura Y, Yonezawa S, Asano Y, Shinoda J, Hara H, Iwama T. Fate of graft cells: what should be clarified for development of mesenchymal stem cell therapy for ischemic stroke?. Front Cell Neurosci. 2014;8:322.

原著 (和文)

- 1) 吉村紳一, 榎本由貴子, 江頭裕介, 石黒光紀, 岩間 亨. 頭蓋内脳主幹動脈狭窄症に対する血管内治療, 脳外誌 2012年; 21巻: 405-410.
- 2) 吉村紳一, 榎本由貴子, 江頭裕介, 岩間 亨. 血管内治療の適応診断における画像診断について, 脳卒中 2012年; 34巻: 107-109.
- 3) 三輪和弘, 篠田 淳, 米澤慎悟, 秋 達樹, 浅野好孝, 横山和俊, 伊藤 毅, 大江直之, 矢野大仁, 岩間 亨. 脳放射線壊死に対するペバシズマブの使用経験, CI 研究 2012; 34巻: 31-38.
- 4) 山田法顕, 山田実貴人, 豊田 泉, 玉田佳樹, 加藤雅康, 山川弘保, 熊谷守雄, 吉村紳一, 岩間 亨, 小倉真治. 岐阜県における脳卒中初期診療標準化-教育から検証段階へ, 日本臨床救急医学会雑誌 2012年; 15巻: 310.
- 5) 今尾幸則, 岡田 誠, 山田 潤, 吉村紳一. 就労年齢の破裂前交通動脈瘤症例に対するコイル塞栓術の有用性, 羽島市民病院紀要 2013年; 17・18巻: 13-19.
- 6) 吉村紳一, 榎本由貴子, 江頭裕介, 渡會祐隆, 岩間 亨. 急性期脳梗塞に対する血栓回収療法と外科治療, 脳外誌 2013年; 22巻: 688-694.
- 7) 澤田元史, 田邊 淳, 八十川雄図, 岩間 亨. EPA/ロスバスタチン併用による頸動脈不安定プラークの安定化, 脳卒中の外科 2013年; 41巻: 39-45.
- 8) 山田法顕, 豊田 泉, 山田実貴人, 玉田佳樹, 山川弘保, 加藤雅康, 熊谷守雄, 吉村紳一, 岩間 亨, 小倉真治. 岐阜県における脳卒中初期診療標準化の取り組み, 日本臨床救急医学会雑誌 2013年; 16巻: 643-648.
- 9) 榎本由貴子, 吉村紳一, 高木俊範, 辻本真範, 石澤錠二, 岩間 亨. 緊急脳血管内治療時における抗血小板薬 loading dose 投与後の薬効解析, JNET 2014年; 8巻: 251-258.

原著 (欧文)

- 1) Takenaka K, Hayashi K, Kato M, Iwama T, Banno S, Kobayashi H, Hitomi T, Harada, K, Koizumi A. Collaboration for stroke care (medical treatment/nursing service/welfare) in the remote place, such as Hida area, in northern parts of gifu. Cerebrovasc Dis. 2012;34(supple 1):141.
- 2) Yoshimura S, Kawasaki M, Yamada K, Enomoto Y, Egashira Y, Hattori A, Nishigaki K, Minatoguchi S,

IF 3.698

- Iwama T. Visualization of internal carotid artery atherosclerotic plaques in symptomatic and asymptomatic patients: a comparison of optical coherence tomography and intravascular ultrasound. *AJNR Am J Neuroradiol.* 2012;33:308-313. IF 3.675
- 3) Miwa K, Matsuo M, Shinoda J, Aki T, Yonezawa S, Ito T, Asano Y, Yamada M, Yokoyama K, Yamada J, Yano H, Iwama T. Clinical value of [(11)C]methionine PET for stereotactic radiation therapy with intensity modulated radiation therapy to metastatic brain tumors. *Int J Radiat Oncol Biol Phys.* 2012;84:1139-1144. IF 4.176
 - 4) Ishiguro M, Kawasaki K, Suzuki Y, Ishizuka F, Mishiro K, Egashira Y, Ikegaki I, Tsuruma K, Shimazawa M, Yoshimura S, Iwama T, Hara H. A Rho kinase (ROCK) inhibitor, fasudil, prevents matrix metalloproteinase-9-related hemorrhagic transformation in mice treated with tissue plasminogen activator. *Neuroscience.* 2012;220:302-312. IF 3.327
 - 5) Aki T, Nakayama N, Yonezawa S, Takenaka S, Miwa K, Asano Y, Shinoda J, Yano H, Iwama T. Evaluation of brain tumors using dynamic (11)C-methionine-PET. *J Neurooncol.* 2012;109:115-122. IF 2.787
 - 6) Egashira Y, Yoshimura S, Funatsu N, Tanaka Y, Yamada K, Enomoto Y, Iwama T. Continuous growth of remote intracerebral haematoma following angiographically successful endovascular embolization of ruptured cerebral aneurysms. *J Clin Neurosci.* 2012;19:170-173. IF 1.318
 - 7) Egashira Y, Yoshimura S, Yamada K, Enomoto Y, Asano T, Iwama T. Stepwise revascularization by carotid endarterectomy after balloon angioplasty for symptomatic severe carotid artery stenosis. *Ann Vasc Surg.* 2012;26:731.e9-731 e13. IF 1.029
 - 8) Egashira Y, Sugitani S, Suzuki Y, Mishiro K, Tsuruma K, Shimazawa M, Yoshimura S, Iwama T, Hara H. The conditioned medium of murine and human adipose-derived stem cells exerts neuroprotective effects against experimental stroke model. *Brain Res.* 2012;1461:87-95. IF 2.828
 - 9) Tanaka Y, Fukumitsu H, Soumiya H, Yoshimura S, Iwama T, Furukawa S. 2-Decenoic acid ethyl ester, a compound that elicits neurotrophin-like intracellular signals, facilitating functional recovery from cerebral infarction in mice. *Int J Mol Sci.* 2012;13:4968-4981. IF 2.339
 - 10) Yamada K, Yoshimura S, Kawasaki M, Iwama T. Preoperative magnetic resonance plaque imaging and carotid artery stenting: a review. *Intervent Neurol.* 2012;1:31-38.
 - 11) Uchiyama Y, Asano T, Kato H, Hara T, Kanematsu M, Hoshi H, Iwama T, Fujita H. Computer-aided diagnosis for detection of lacunar infarcts on MR images: ROC analysis of radiologists' performance. *J Digit Imaging.* 2012;25:497-503. IF 1.200
 - 12) Ohtakara K, Hayashi S, Nakayama N, Ohe N, Yano H, Iwama T, Hoshi H. Significance of target location relative to the depth from the brain surface and high-dose irradiated volume in the development of brain radionecrosis after micromultileaf collimator-based stereotactic radiosurgery for brain metastases. *J Neurooncol.* 2012;108:201-209. IF 2.787
 - 13) Matsuo M, Miwa K, Tanaka O, Shinoda J, Nishibori H, Tsuge Y, Yano H, Iwama T, Hayashi S, Hoshi H, Yamada J, Kanematsu M, Aoyama H. Impact of [(11)C]methionine positron emission tomography for target definition of glioblastoma multiforme in radiation therapy planning. *Int J Radiat Oncol.* 2012;82:83-89. IF 4.176
 - 14) UCAS Japan Investigators, Morita A, Kirino T, Hashi K, Aoki N, Fukuhara S, Hashimoto N, Nakayama T, Sakai M, Teramoto A, Tominari S, Yoshimoto T. The natural course of unruptured cerebral aneurysms in a Japanese cohort. *New Engl J Med.* 2012;366:2474-2482. IF 54.420
 - 15) Suzuki Y, Hattori K, Hamanaka J, Murase T, Egashira Y, Mishiro K, Ishiguro M, Tsuruma K, Hirose Y, Tanaka H, Yoshimura S, Shimazawa M, Inagaki N, Nagasawa H, Iwama T, Hara H. Pharmacological inhibition of TLR4-NOX4 signal protects against neuronal death in transient focal ischemia. *Sci Rep.* 2012;2:896. IF 5.078
 - 16) Mishiro K, Ishiguro M, Suzuki Y, Tsuruma K, Shimazawa M, Hara H. A broad-spectrum matrix metalloproteinase inhibitor prevents hemorrhagic complications induced by tissue plasminogen activator in mice. *Neuroscience.* 2012;205:39-48. IF 3.327
 - 17) Enomoto Y, Yoshimura S. Antiplatelet therapy for carotid artery stenting. *Intervent Neurol.* 2012;1:151-163.
 - 18) Shinoda J, Yokoyama K, Miwa K, Ito T, Asano Y, Yonezawa S, Yano H. Epilepsy surgery of dysembryoplastic neuroepithelial tumors using advanced multitechnologies with combined neuroimaging and electrophysiological examinations. *Epi Behav Case Rep.* 2013;1:97-105.
 - 19) Yoshimura S, Yamada K, Kawasaki M, Asano T, Kanematsu M, Miyai M, Enomoto Y, Egashira Y, Iwama T. Selection of carotid artery stenting or endarterectomy based on magnetic resonance plaque imaging reduced periprocedural adverse events. *J Stroke Cerebrovasc Dis.* 2013;22:1082-1087. IF 1.993
 - 20) Yano H, Saigoh C, Nakayama N, Hirose Y, Abe M, Ohe N, Ozeki M, Shinoda J, Iwama T. Mixed neuronal-glia tumor in the temporal lobe of an infant: a case report. *Diagn Pathol.* 2013;8:164. IF 2.411
 - 21) Yano H, Nakayama N, Ohe N, Takagi T, Shinoda J, Iwama T. Surgical strategy in case with co-existence of malignant oligodendroglioma and arteriovenous malformation: A case report. *Case Rep in Clin Med.* 2013;2:473-478.
 - 22) Enomoto Y, Yoshimura S, Yamada K, Kawasaki M, Nishigaki K, Minatoguchi S, Iwama T. Silent coronary artery disease in Japanese patients undergoing carotid artery stenting. *J Stroke Cerebrovasc*

- Dis. 2013;22:1163-1168. IF 1.993
- 23) Egashira Y, Yoshimura S, Enomoto Y, Ishiguro M, Asano T, Iwama T. Ultra-early endovascular embolization of ruptured cerebral aneurysm and the increased risk of hematoma growth unrelated to aneurysmal rebleeding. *J Neurosurg.* 2013;118:1003-1008. IF 3.227
 - 24) Egashira Y, Yoshimura S, Kuwayama N; Recovery by endovascular salvage for cerebral ultra-acute embolism(RESCUE)-Japan Retrospective Survey Group. Efficacy of endovascular revascularization in elderly patients with acute large vessel occlusion: analysis from the RESCUE-Japan retrospective nationwide survey. *J Stroke Cerebrovasc Dis.* 2013;22:627-632. IF 1.993
 - 25) Egashira Y, Suzuki Y, Azuma Y, Takagi T, Mishiro K, Sugitani S, Tsuruma K, Shimazawa M, Yoshimura S, Kashimata M, Iwama T, Hara H. The growth factor progranulin attenuates neuronal injury induced by cerebral ischemia-reperfusion through the suppression of neutrophil recruitment. *J Neuroinflamm.* 2013;10:105. IF 4.902
 - 26) Egashira Y, Yoshimura S, Enomoto Y, Ishiguro M, Yamada K, Tanaka Y, Iwama T. Efficacy and limitations of multimodal endovascular revascularization other than clot retrieval for acute stroke caused by large-vessel occlusion. *J Stroke Cerebrovasc Dis.* 2013;22:851-856. IF 1.993
 - 27) Sugitani S, Tsuruma K, Ohno Y, Kuse Y, Yamauchi M, Egashira Y, Yoshimura S, Shimazawa M, Iwama T, Hara H. The potential neuroprotective effect of human adipose stem cells conditioned medium against light-induced retinal damage. *Exp Eye Res.* 2013;116:254-264. IF 3.017
 - 28) Ishizuka F, Shimazawa M, Egashira Y, Ogishima H, Nakamura S, Tsuruma K, Hara H. Cilostazol prevents retinal ischemic damage partly via inhibition of tumor necrosis factor- α -induced nuclear factor- κ B/activator protein-1 signaling pathway. *Pharma Res Per.* 2013;1:e00006
 - 29) Kitashoji A, Egashira Y, Mishiro K, Suzuki Y, Ito H, Tsuruma K, Shimazawa M, Hara H. Cilostazol ameliorates warfarin-induced hemorrhagic transformation after cerebral ischemia in mice. *Stroke.* 2013;44:2862-2868. IF 6.018
 - 30) Nishikawa Y, Satow T, Takagi T, Murao K, Miyamoto S, Iihara K. Efficacy and safety of single versus dual antiplatelet therapy for coiling of unruptured aneurysms. *J Stroke Cerebrovasc Dis.* 2013;22:650-655. IF 1.993
 - 31) Suzuki Y, Nakano Y, Mishiro K, Takagi T, Tsuruma K, Nakamura M, Yoshimura S, Shimazawa M, Hara H. Involvement of mincle and syk in the changes to innate immunity after ischemic stroke. *Sci Rep.* 2013;3:3177. IF 5.078
 - 32) Tsuruma K, Yamauchi M, Sugitani S, Otsuka T, Ohno Y, Nagahara Y, Ikegame Y, Shimazawa M, Yoshimura S, Iwama T, Hara H. Progranulin, a major secreted protein of mouse adipose-derived stem cells, inhibits light-induced retinal degeneration. *Stem Cells Transl Med.* 2013;3:42-53. IF 3.596
 - 33) Yano H, Nakayama N, Morimitsu K, Futamura M, Ohe N, Miwa K, Shinoda J, Iwama T. Changes in protein level in the cerebrospinal fluid of a patient with cerebral radiation necrosis treated with bevacizumab. *Clin Med Insights Oncol.* 2014;8:153-157.
 - 34) Miwa K, Matsuo M, Ogawa S, Shinoda J, Asano Y, Ito T, Yokoyama K, Yamada J, Yano H, Iwama T. Hypo-fractionated high-dose irradiation with positron emission tomography data for the treatment of glioblastoma multiforme. *Biomed Res Int.* 2014;2014:407026.
 - 35) Miwa K, Matsuo M, Ogawa S, Shinoda J, Yokoyama K, Yamada J, Yano H, Iwama T. Re-irradiation of recurrent glioblastoma multiforme using ^{11}C -methionine PET/CT/MRI image fusion for hypofractionated stereotactic radiotherapy by intensity modulated radiation therapy. *Radiat Oncol.* 2014;9:181. IF 2.360
 - 36) Soeda A, Ohe N, Lee D, Iwama T, Park DM. Surface protein dynamics in glioma stem cells. *Austin J Neurosurg.* 2014;1:7.
 - 37) Enomoto Y, Yoshimura S, Sakai N, Egashira Y. Current perioperative management of anticoagulant and antiplatelet use in neuroendovascular therapy: analysis of JR-NET1 and 2. *Neurol Med Chir (Tokyo).* 2014;54:9-16. IF 0.649
 - 38) Enomoto Y, Yoshimura S, Egashira Y, Takagi T, Tsujimoto M, Iwama T. Long-term magnetic resonance angiography follow-up for recanalized vessels after mechanical thrombectomy. *J Stroke Cerebrovasc Dis.* 2014;23:2834-2839. IF 1.993
 - 39) Takenaka S, Asano Y, Shinoda J, Nomura Y, Yonezawa S, Miwa K, Yano H, Iwama T. Comparison of ^{11}C -methionine, ^{11}C -choline, and ^{18}F -fluorodeoxyglucose-PET for distinguishing glioma recurrence from radiation necrosis. *Neurol Med Chir (Tokyo).* 2014;54:280-289. IF 0.649
 - 40) Egashira Y, Yoshimura S, Enomoto Y, Sakai N. Real-world experience of carotid artery stenting in Japan: Analysis of 7,134 cases from JR-NET 1 & 2 nationwide retrospective multi-center registry. *Neurol Med Chir (Tokyo).* 2014;54:32-39. IF 0.649
 - 41) Takagi T, Kitashoji A, Iwawaki T, Tsuruma K, Shimazawa M, Yoshimura S, Iwama T, Hara H. Temporal activation of Nrf2 in the penumbra and Nrf2 activator-mediated neuroprotection in ischemia-reperfusion injury. *Free Radic Biol Med.* 2014;72:124-133. IF 5.710
 - 42) Takagi T, Mishiro K, Shimazawa M, Yoshimura S, Iwama T, Hara H. The phosphodiesterase inhibitor cilostazol ameliorates ethanol-induced endothelial dysfunction. *Curr Neurovasc Res.* 2014;11:302-311. IF 2.735
 - 43) Yonezawa S, Miwa K, Shinoda J, Nomura Y, Asano Y, Nakayama N, Ohe N, Yano H, Iwama T.

- Bevacizumab treatment leads to observable morphological and metabolic changes in brain radiation necrosis. *J Neuro-oncol.* 2014;119:101-109. IF 2.787
- 44) Sakai N, Yoshimura S, Taki W, Hyodo A, Miyachi S, Nagai Y, Sakai C, Satow T, Terada T, Ezura M, Hyogo T, Matsubara S, Hayashi K, Fujinaka T, Ito Y, Kobayashi S, Komiyama M, Kuwayama N, Matsumaru Y, Matsumoto Y, Murayama Y, Nakahara I, Nemoto S, Satoh K, Sugiu K, Ishii A, Imamura H; Japanese Registry of Neuroendovascular Therapy Investigators. Recent trends in neuroendovascular therapy in Japan: analysis of a nationwide survey-Japanese Registry of Neuroendovascular Therapy (JR-NET) 1 and 2. *Neurol Med Chir (Tokyo).* 2014;54:1-8. IF 0.649
- 45) Miyamoto S, Yoshimoto T, Hashimoto N, Okada Y, Tsujii I, Tominaga T, Nakagawara J, Takahashi JC, JAM Trial Investigators. Effects of extracranial-intracranial bypass for patients with hemorrhagic moyamoya disease: results of the Japan adult moyamoya trial. *Stroke.* 2014;45:1415-1421. IF 6.018
- 46) Ohtakara K, Ohe N, Iwama T, Hoshi H. Early manifestation of communicating hydrocephalus after fractionated stereotactic radiotherapy for aggressive giant atypical prolactinoma. *Anticancer Res.* 2014;34:2509-2516. IF 1.872
- 47) Nakano Y, Suzuki Y, Takagi T, Kitashoji A, Ono Y, Tsuruma K, Yoshimura S, Shimazawa M, Iwama T, Hara H. Glycoprotein nonmetastatic melanoma protein B (GPNMB) as a novel neuroprotective factor in cerebral ischemia-reperfusion injury. *Neuroscience.* 2014;277:123-131. IF 3.327
- 48) Mishiro K, Imai T, Sugitani S, Kitashoji A, Suzuki Y, Takagi T, Chen H, Oumi Y, Tsuruma K, Shimazawa M, Hara H. Diabetes mellitus aggravates hemorrhagic transformation after ischemic stroke via mitochondrial defects leading to endothelial apoptosis. *PLoS One.* 2014;9:e103818. IF 3.534
- 49) Tsuruma K, Yamauchi M, Sugitani S, Otsuka T, Ohno Y, Nagahara Y, Ikegame Y, Shimazawa M, Yoshimura S, Iwama T, Hara H. Progranulin, a major secreted protein of mouse adipose-derived stem cells, inhibits light-induced retinal degeneration. *Stem Cells Transl Med.* 2014;3:42-53. IF 3.596

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：吉村紳一，研究分担者：岩間 亨，矢野大仁，榎本由貴子，山田清文，大江直行；科学研究費補助金基盤研究(B)：脳虚血への自家移植を目指したヒト脂肪組織由来幹細胞の分離培養法の確立；平成 22-24 年度；14,430 千円(4,550：4,680：5,200 千円)
- 2) 研究代表者：吉村紳一；平成 22 年度病院長裁量経費：Optical Coherence Tomography(OCT：光学渉断層撮影)を用いた頸動脈プラーク診断；平成 22-24 年度；10,000 千円
- 3) 研究代表者：榎本由貴子；科学研究費補助金若手研究(B)：血小板凝集能・血小板活性化マーカーを用いた抗体血小板療法モニタリング；平成 23-24 年度；5,980 千円(4,030：1,950 千円)
- 4) 研究代表者：江頭裕介；平成 24 年度臨床研究推進支援経費：脂肪組織由来幹細胞およびその分泌因子を用いた脳虚血および網膜変性疾患に対する治療法の開発；平成 24 年度；1,000 千円
- 5) 研究代表者：江頭裕介；地域・へき地医療支援人材の確保事業；平成 24 年度；1,900 千円
- 6) 研究代表者：岩間 亨，研究分担者：矢野大仁，中山則之，大江直行，榎本由貴子，吉村紳一；科学研究費補助金挑戦的萌芽研究：主幹動脈狭窄症における炎症性サイトカインの動脈硬化進展作用の解析；平成 24-25 年度；3,640 千円(1,820：1,820 千円)
- 7) 研究代表者：副田明男，研究分担者：矢野大仁，大江直行，田中嘉隆；科学研究費補助金挑戦的萌芽研究：脳腫瘍の階層・多様性の解明；平成 24-25 年度；3,640 千円(2,470：1,170 千円)
- 8) 研究代表者：江頭裕介；科学研究費補助金若手研究(B)：急性期脳梗塞に体する新規抗炎症療法の研究と開発；平成 24-25 年度；1,820 千円(1,170：650 千円)
- 9) 研究代表者：岩間 亨；平成 25 年度病院長裁量経費：Optical Coherence Tomography(OCT：光干渉断層撮影)を用いた頸動脈プラーク診断；平成 25 年度；7,300 千円
- 10) 研究代表者：副田明男；平成 25 年度研究科長・医学部長裁量経費による論文賞に係る研究費最高 CI 論文賞：Soeda A, Inagaki A, Oka N, Ikegame Y, Aoki H, Yoshimura S, Nakashima S, Kunisada T, Iwama T: Epidermal growth factor plays a crucial role in mitogenic regulation of human brain tumor stem cells. *J Biol Chem.* 283:10958-10966, 2008；平成 25 年度；100 千円
- 11) 研究代表者：江頭裕介；第 26 回日本心臓財団・バイエル薬品海外留学助成金：出血性脳卒中に対する発症早期の脳損傷メカニズムの解明と新規治療ターゲットの検索；平成 25 年度；3,000 千円
- 12) 研究代表者：高木俊範；平成 25 年度臨床研究推進支援経費：出血性脳卒中の病態解明と治療薬の探索研究；平成 25 年度；500 千円
- 13) 研究代表者：榎本由貴子；科学研究費補助金若手研究(B)：血小板機能検査におけるクロピドグレル不応症の臨床的意義とその対処法；平成 25-26 年度；4,030 千円(1,950：2,080 千円)
- 14) 研究代表者：高木俊範；科学研究費補助金若手研究(B)：t-PA 静注療法の未来への要求；平成 25-

26年度；4,160千円(1,950：2,210千円)

- 15) 研究代表者：高木俊範；平成26年度臨床研究推進支援経費：出血性脳卒中の病態解明と治療薬の探索研究；平成26年度；500千円
- 16) 研究代表者：辻本真範；平成26年度臨床研究推進支援経費：頸動脈狭窄症に及ぼす血小板由来生理活性物質の影響に関する解析；平成26年度；500千円
- 17) 研究代表者：大江直行，研究分担者：矢野大仁，副田明男，高木俊範，澤田重信；科学研究費補助金挑戦的萌芽研究：脳腫瘍幹細胞の表面マーカーの長期追跡と安定性を保持する機構の解明；平成26-28年度；3,380千円(1,040：1,040：1,300千円)
- 18) 研究代表者：副田明男，研究分担者：岩間 亨，高木俊範，辻本真範，山内圭太；科学研究費補助金挑戦的萌芽研究：悪性脳腫瘍におけるIDHI変異とIGFBP7，COLAIの役割；平成26-28年度；3,380千円(1,040千円：1,040千円：1,300千円)

2) 受託研究

- 1) 岩間 亨：テモダールカプセル全例調査特定使用成績調査；平成18-27年；2,236,032円(1,417,500：540,540：277,992円)；シェリング・プラウ(株)
- 2) 岩間 亨：ガバペン錠使用成績調査；平成20-26年；600,600円(300,300：300,300円)；ファイザー(株)
- 3) 大江直行：ギャバロン髄注シンクロメッドポンプシステム使用成績調査；平成21-25年；240,240円(120,120：120,120円)；第一三共(株)
- 4) 岩間 亨，矢野大仁，大江直行，中山則之，榎本由貴子，江頭裕介，田中嘉隆，池亀由香，船津奈保子：ラジカット特定使用成績調査(発症後4.5時間以内の脳梗塞急性期に対する調査)；平成22-26年；900,900円(600,600：300,300円)；田辺三菱製薬(株)
- 5) 吉村紳一，榎本由貴子，江頭裕介，山田清文：脳AVMにおけるONYX液体塞栓システムの製造販売後使用成績調査；平成22-25年；240,240円(150,150：90,090円)；イーヴィースリー(株)
- 6) 吉村紳一，榎本由貴子，江頭裕介，山田清文：Merciリトリーバーの使用成績調査；平成22-25年；900,900円(300,300：300,300：300,300円)；センチュリーメディカル(株)
- 7) 吉村紳一，榎本由貴子：コッドマン エンタープライズVRD使用成績調査；平成22-27年；1,201,200円(360,360：840,840円)；ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
- 8) 大江直行：ギャバロン髄注シンクロメッドポンプシステム特定使用成績調査；平成22-25年；135,135円(45,045：45,045：45,045円)；第一三共(株)
- 9) 岩間 亨：エリル点滴静注液30mg副作用・感染症詳細調査；平成23-25年；120,120円；旭化成ファーマ(株)
- 10) 榎本由貴子：Penumbraシステム使用成績調査；平成23-26年；540,540円(240,240：300,300円)；(株)メディコスヒラタ
- 11) 榎本由貴子：頸動脈ステント留置術後の再狭窄に対するシロスタゾールの効果に関する多施設共同無作為化比較試験(CAS-CARE)；平成23-26年；84千円(初期費用)，80千円/症例；公益財団法人先端医療振興財団
- 12) 岩間 亨：急性期脳出血への降圧を検討する第Ⅲ相国際多施設共同無作為化臨床試験(ATACH-II)；平成24-28年；909,822円(立ち上げ金)，4,410米ドル/症例；ミネソタ大学・公益財団法人循環器病研究振興財団
- 13) 榎本由貴子：MOMAウルトラ使用成績調査(全例調査)；平成24-27年；603,688円(600,600：3,088円)；日本メドトロニック(株)
- 14) 矢野大仁：テモダール点滴静注用全例調査(特定使用成績調査)－悪性神経膠腫に対する点滴静注用の安全性の検討－；平成24-27年；45,045円；MSD(株)
- 15) 岩間 亨：アバスチン点滴静注用100mg/4ml，アバスチン点滴静注用400mg/16ml使用成績調査(悪性神経膠腫)；平成25-28年；90,090円；中外製薬(株)
- 16) 吉村紳一，榎本由貴子：急性期脳梗塞に対する血栓除去用カテーテル(Rev-01)の有効性及び安全性に関する多施設共同オープン試験；平成25-26年；791,849円(450,450：341,399円)；ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
- 17) 矢野大仁：ギリアデル脳内留置用剤7.7mg使用成績調査(全例調査)；平成25-28年；0円；エーザイ(株)
- 18) 矢野大仁：アラベル内用剤1.5g使用成績調査(全例調査)；平成25-28年；150,150円；ノーベルファーマ(株)

- 19) 榎本由貴子：ニューロフォームステント使用成績調査(全例調査)；平成 25-29 年；840,840 円：日本ストライカー(株)
- 20) 榎本由貴子：脳動脈瘤塞栓術における HydroSoft coil の塞栓効果に関する多施設前向き登録研究 (JHSR)；平成 25-27 年；21 千円/症例：公益財団法人先端医療振興財団
- 21) 榎本由貴子：脳神経外科領域における新規血管造影画像アプリケーション；平成 25-27 年；58,462 円/報告書, 58,462 円/アブストラクト, 116,924 円/論文：シーメンス・ジャパン(株)
- 22) 兼村信宏, 北川順一, 輸血部, 第一外科, 第二外科, 整形外科, 脳神経外科：クリオシールシステム使用成績調査；平成 26-28 年；216,000 円：旭化成メディカル(株)
- 23) 榎本由貴子：主幹動脈病変を有する急性期虚血性脳血管障害における抗血小板反応性モニタリングの臨床的意義に関する研究 Platelet Reactivity Monitoring in Acute Ischemic Stroke(PRAISE)；平成 26-27 年；10 千円/症例：独立行政法人国立循環器病研究センター
- 24) 榎本由貴子：ステント支援脳動脈瘤塞栓術の効果と安全性に関する多施設共同前向き観察研究(研究略称：ESSENCE)；平成 26-29 年；20 千円/症例：公益財団法人先端医療振興財団
- 26) 榎本由貴子：ステント支援脳動脈瘤塞栓術の効果と安全性に関する多施設共同前向き観察研究- 抗血小板薬の効果と画像所見(研究略称：ESSENCE-API)；平成 26-29 年；40 千円/症例：公益財団法人先端医療振興財団
- 27) 榎本由貴子：脳動脈瘤塞栓術における Hydrogel coil の塞栓効果に関する多施設共同無作為化比較試験(HYBRID study)；平成 25-28 年；50 千円/症例：公益財団法人先端医療振興財団
- 28) 岩間 亨：脳梗塞再発高リスク患者を対象とした抗血小板薬併用療法の有効性及び安全性の検討 CSPS.com；平成 26-29 年；20 千円/症例：(公財)循環器病研究振興財団
- 29) 榎本由貴子：超急性期脳梗塞に対する血管内治療の有効性確認のための無作為比較研究 (RESCUE-Japan RCT)；平成 26-29 年；20 千円/症例：兵庫医科大学

3) 共同研究

- 1) 榎本由貴子：In vitro experiments to examine the effect of Rivaroxaban on generation of inflammatory cytokines from activated platelets；平成 26-29 年；3,240,000 円：パイエル薬品(株)

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

岩間 亨：

- 1) 一般社団法人日本脳神経外科学会代議員(~現在)
- 2) 一般社団法人日本脳神経外科学会中部支部理事(~現在)
- 3) 一般社団法人日本脳卒中学会評議員(~現在)
- 4) 日本脳腫瘍の外科学会評議員(~現在)
- 5) 日本小児神経外科学会理事(~現在)
- 6) 日本脳ドック学会評議員(~現在)
- 7) 脳神経外科手術と機器学会運営委員(~現在)
- 8) 一般社団法人日本脳卒中の外科学会代議員(~現在)
- 9) 一般社団法人日本脳卒中の外科学会理事(~現在)

吉村紳一：

- 1) 特定非営利活動法人日本脳神経血管内治療学会運営委員及び教育委員長(~現在)
- 2) 日本脳神経外科コンgres運営委員(~現在)
- 3) Mt Fuji Workshop on CVD 運営委員(~現在)
- 4) 一般社団法人日本脳神経外科学会国際小委員会委員(~現在)
- 5) 一般社団法人日本脳卒中の外科学会代議員(~現在)

矢野大仁：

- 1) 日本脳腫瘍病理学会評議員(~現在)

2) 学会開催

岩間 亨：

- 1) 第 82 回日本脳神経外科学会中部支部会学術集会(平成 24 年 4 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

岩間 亨：

- 1) 脳神経外科；編集同人(～現在)
- 2) Neurologia medico-chirurgica；Editorial Board(～現在)
- 3) 脳と循環；編集アドバイザー(～現在)

吉村紳一：

- 1) Neurotrauma Research；Editorial Board(～現在)
- 2) Journal of Neuroendovascular Therapy；副編集委員長(～現在)
- 3) ブレインナーシング；編集同人(～現在)

副田明男：

- 1) Journal of Neurosurgery；Editorial Board(～現在)

榎本由貴子：

- 1) Journal of Neuroendovascular Therapy；Editorial Board(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

岩間 亨：

- 1) 第 82 回日本脳神経外科学会中部支部会学術集会(平成 24 年 4 月, 岐阜, 特別講演「脳神経外科生活 40 年振り返って」座長)
- 2) STROKE 2012(平成 24 年 4 月, 福岡, 特別企画「本邦と欧米でのガイドラインの違い」座長)
- 3) 第 32 回日本脳神経外科コンgres総会(平成 24 年 5 月, 横浜, プレナリーセッション「虚血性疾患の課題と展望」座長)
- 4) 第 40 回日本小児神経外科学会(平成 24 年 6 月, 岡山, シンポジウム「もやもや病」座長)
- 5) 第 71 回日本脳神経外科学会学術総会(平成 24 年 10 月, 大阪, ビデオシンポジウム「聴神経腫瘍に対する座位手術」演者)
- 6) 第 71 回日本脳神経外科学会学術総会(平成 24 年 10 月, 大阪, ビデオシンポジウム「聴神経腫瘍の手術 2」座長)
- 7) 第 42 回日本脳卒中の外科学会(平成 25 年 3 月, 東京, ビデオシンポジウム「頭蓋外内バイパス術：応用と限界」座長)
- 8) 日本麻酔科学会東海・北陸支部第 11 回学術集会(平成 25 年 9 月, 岐阜, 特別講演「座位手術の臨床的意義 - 麻酔科医との連携-」演者)
- 9) 第 43 回日本脳卒中の外科学会学術集会(平成 26 年 3 月, 大阪, ビデオシンポジウム「バイパス術のすべて」座長)
- 10) 第 23 回脳神経外科手術と機器学会(平成 26 年 4 月, 福岡, シンポジウム「血管外科手術における基本手技」座長)
- 11) 第 19 回日本脳腫瘍の外科学会(平成 26 年 9 月, 東京 メイントピック「症例から学ぶ」座長)
- 12) 第 73 回日本脳神経外科学会学術総会(平成 26 年 10 月, 東京 シンポジウム「脳動静脈奇形の治療戦略と成績」座長)

吉村紳一：

- 1) 第 32 回日本脳神経外科コンgres総会(平成 24 年 5 月, 横浜, プレナリーセッション「急性期外科治療と血栓回収機器」演者)
- 2) 第 34 回日本血栓止血学会学術集会(平成 24 年 6 月, 東京, 会長要望シンポジウム「Penumbra System の実際と現状」演者)
- 3) 10th Meeting of Asian-Australasian Federation of Interventional and Therapeutic Neuroradiology(2012.06, Nagoya, Symposium: Carotid Artery Stenting; Symposist)

- 4) 第 11 回日本頸部脳血管治療学会(平成 24 年 6 月, 名古屋, シンポジウム「急性期頸動脈病変の治療」座長)
- 5) 10th Meeting of Asian-Australasian Federation of Interventional and Therapeutic Neuroradiology(2012.06, Nagoya, Symposium: Carotid stenting; Moderator)
- 6) 第 71 回日本脳神経外科学会学術総会(平成 24 年 10 月, 大阪, シンポジウム「急性期脳梗塞の新たな治療戦略(tPA 非適応例や不成功例への対策)」演者)
- 7) 第 71 回日本脳神経外科学会学術総会(平成 24 年 10 月, 大阪, シンポジウム「血栓回収デバイスは急性期脳梗塞治療を変えたか?」演者)
- 8) 第 28 回日本脳神経血管内治療学会学術総会(平成 24 年 10 月, 仙台, シンポジウム「虚血性脳血管障害 1: 超急性期の治療」座長)
- 9) 第 42 回日本脳卒中の外科学会(平成 25 年 3 月, 東京, ビデオシンポジウム「脳血管内治療における穿痛枝温存の工夫と問題点」演者)
- 10) 第 33 回日本脳神経外科コンgres総会(平成 25 年 5 月, 大阪, プレナリーセッション「急性期血行再建と t-PA 静注療法」演者)

矢野大仁 :

- 1) 第 85 回日本脳神経外科学会中部支部学術集会(平成 25 年 9 月, 長久手, ランチョンセミナー「悪性グリオーマに対する化学療法の適正使用とガイドライン」座長)

榎本由貴子 :

- 1) 第 29 回スパズム・シンポジウム(平成 25 年 3 月, 東京, シンポジウム「当院におけるくも膜下出血治療の変遷」演者)
- 2) 第 29 回日本脳神経血管内治療学会学術総会(平成 25 年 11 月, 新潟, プレナリーシンポジウム「急性再開通療法における出血性合併症の検討-RESCUE-Japan Registry-」演者)
- 3) 第 30 回日本脳神経血管内治療学会学術総会(平成 26 年 12 月, 横浜, プレナリーシンポジウム「女性医師としての血管内専門医(指導医)までのキャリアパスとその諸問題」演者)
- 4) 第 30 回日本脳神経血管内治療学会学術総会(平成 26 年 12 月, 横浜, プレナリーシンポジウム「ステント支援コイル塞栓術における至適抗血栓療法は何か?・テイラーメイド抗血小板療法の有効性」演者)

江頭裕介 :

- 1) 第 39 回日本脳卒中学会総会(平成 26 年 3 月, 大阪, シンポジウム「本邦における頸動脈ステント留置術(CAS)-JR-NET 1&2 からの解析」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 江頭裕介 : AAFITN 2012 Best Poster Award: Certificate Bronze prize(平成 24 年)
- 2) 副田明男 : 平成 25 年度研究科長・医学部長裁量経費による最高論文賞 : 最高 CI 論文賞(平成 25 年)
- 3) 江頭裕介 : 日本脳神経血管内治療学会平成 25 年度優秀論文賞 : 銀賞(平成 25 年)
- 4) 榎本由貴子 : AAFITN 2014 Poster Award: Third Prize(平成 26 年)
- 5) 榎本由貴子 : 平成 25 年度岐阜大学優秀指導医賞(平成 26 年)

9. 社会活動

岩間 亨 :

- 1) 岐阜県がん診療連携拠点病院協議会会長(～平成 26 年 3 月)
- 2) 岐阜大学医師会会長(～平成 26 年 3 月)
- 3) 岐阜県難病医療連絡協議会会長(～平成 26 年 3 月)
- 4) 岐阜市救急医療体制協議会委員(～平成 26 年 3 月)
- 5) 岐阜県医療審議会委員(～平成 26 年 3 月)
- 6) 岐阜県社会保険診療報酬請求書審査委員会学識経験者審査委員選考協議会委員(～平成 26 年 3 月)
- 7) 岐阜県肝疾患診療連携拠点病院等連絡協議会会長(～平成 26 年 3 月)
- 8) 岐阜県エイズ治療連絡協議会会長(～平成 26 年 3 月)
- 9) 全国医学部長病院長会議理事(～平成 26 年 3 月)
- 10) 岐阜労働局地方労災医員(～現在)

- 11) 岐阜県医師会外科医部会顧問(～現在)
- 12) 岐阜県医師会労災指定医部会顧問(～現在)
- 13) 岐阜県成人病検診管理指導協議会循環器疾患等委員会委員(～現在)
- 14) 岐阜地方裁判所所属専門委員(～現在)
- 15) 中部療護センター入院審査委員会委員長(～現在)
- 16) 社団法人日本脳卒中協会岐阜県支部支部長(～現在)
- 17) 岐阜県立病院医療事故審査委員会委員(～現在)
- 18) 厚生労働省「脳死下での臓器提供事例に係る検証会議」医学的検証作業グループ(～現在)

吉村紳一：

- 1) 社団法人日本脳卒中協会岐阜県支部副支部長(～現在)
- 2) 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(～現在)
- 3) 独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 吉村紳一：脳虚血への自家移植を目指したヒト脂肪組織由来幹細胞の分離培養法の確立：科学研究費補助金基盤研究(B) 研究成果報告書(平成 25 年 5 月)
- 2) 榎本由貴子：血小板凝集能・血小板活性化マーカーを用いた抗血小板療法：科学研究費補助金若手研究(B) 研究成果報告書(平成 25 年 4 月)
- 3) 岩間 亨：主幹動脈狭窄症における炎症性サイトカインの動脈硬化進展作用の解析：科学研究費補助金挑戦的萌芽研究研究成果報告書(平成 26 年 6 月)
- 4) 副田明男：脳腫瘍の階層・多様性の解明：科学研究費補助金挑戦的萌芽研究研究成果報告書(平成 26 年 6 月)

11. 報道

- 1) 岩間 亨：附属病院の現状報告：岐阜大学医学部記念会館だより第 97 号(2012 年 1 月 1 日発行)
- 2) 吉村紳一：教えてホームドクター 頸動脈狭窄症：岐阜新聞(2012 年 2 月 20 日)
- 3) 矢野大仁：病院の実力～岐阜編 51 脳腫瘍：読売新聞(2012 年 4 月 1 日)
- 4) 吉村紳一：教えてホームドクター 頸動脈狭窄症の外科的手術：岐阜新聞(2012 年 4 月 23 日)
- 5) 吉村紳一：こころとからだといのちの医学 女性に多い病気 名医のいる病院 くも膜下出血・未破裂脳動脈瘤：家庭画報 P363-367(2012 年 4 月号)
- 6) 吉村紳一：どの患者にも病状や治療リスクを正確に理解するまで説明を徹底：DOCTOR'S CAREER Monthly 32:19, 2012(2012 年 4 月)
- 7) 矢野大仁：「スーパーニュース」：東海 TV(2012 年 5 月 13 日)
- 8) 岩間 亨：「NEWS 5 PULS」：ぎふちゃん(2012 年 5 月 24 日)
- 9) 吉村紳一：急性期脳梗塞における血管内治療の新展開：Medical Tribune circulation today 5: 78, 2012(2012 年 5 月)
- 10) 吉村紳一：脳梗塞は予防できる：いきいき 6 P73-80(2012 年 6 月)
- 11) 吉村紳一：教えてホームドクター 頸動脈狭窄症の切らない手術：岐阜新聞(2012 年 7 月 2 日)
- 12) 吉村紳一：HOSPITAL REPORT：医進 TUTORIAL 1(2012 年 7 月 7 日)
- 13) 岩間 亨：女性脳神経外科医 雑感：日本脳神経外科女医会会報 45：3, 2012(2012 年 8 月)
- 14) 吉村紳一：RESCUE Japan, RESCUE the World 世界に先駆け日本が示した血管内治療の有用性. MT Ahead 45: 3, 2012(2012 年 8 月)
- 15) 岩間 亨：附属病院の現状と将来について：岐阜大学医学部記念会館だより第 99 号(2012 年 9 月 1 日発行)
- 16) 吉村紳一：脳梗塞 広がる治療：朝日新聞(2012 年 11 月 27 日)
- 17) 吉村紳一(文 野村和博)：新型デバイスが百科繚乱：日経メディカル 臨時増刊号 P47-51(2012 年 11 月)
- 18) 吉村紳一：「あさいち」NHK(2012 年 12 月 4 日)
- 19) 岩間 亨：岐阜大学と京都大学脳神経外科：京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座脳神経外科学年報 2012 年 p269-271(2012 年)
- 20) 副田明男：米がん学会で講演へ：岐阜新聞(2013 年 2 月 21 日)
- 21) 吉村紳一：UP!：名古屋テレビ(2013 年 3 月 15 日)

- 22) 吉村紳一：脳梗塞 脳血管内治療に新風：中國新聞(2013年3月28日)
- 23) 吉村紳一：医療新世紀 重症脳梗塞を血管内で治療：四國新聞(2013年3月29日)
- 24) 吉村紳一：重症脳梗塞 血管内で治療：山梨日日新聞(2013年4月1日)
- 25) 吉村紳一：脳梗塞 広がる血管内治療：京都新聞(2013年4月2日)
- 26) 岐阜大学脳神経外科(がん細胞写真提供)：がん細胞の女王蜂 がん幹細胞を死滅させる「下痢止め薬」：週刊新潮(2013年4月4日号)
- 27) 吉村紳一：脳梗塞回復 可能性広がる：宮崎日日新聞(2013年4月5日)
- 28) 吉村紳一：医療新世紀 脳梗塞 血管内で治療：福井新聞(2013年4月9日)
- 29) 吉村紳一：医療新世紀 脳梗塞, 変わる治療：北國新聞(2013年4月10日)
- 30) 吉村紳一：脳梗塞に血栓回収治療：高知新聞(2013年4月12日)
- 31) 吉村紳一：急速に進歩する血管内治療：山陽新聞(2013年4月14日)
- 32) 吉村紳一：真相報道バンキシャ！：日本テレビ(2013年6月16日)
- 33) 岩間 亨：北診療棟解説にあたって：鶴舟 20号 P1(2013年)
- 34) 吉村紳一：ISC 2013 のトピックスから～日本人対象エビデンス～ RESCUE-Japan Registry：ミクス 3号 P 10-11(2013年)
- 35) 吉村紳一：MR RESCUE, IMS-III, SYNTHESIS Expansion の結果を読む：ミクス 3号 P 12-14 (2013年)
- 36) 桑山直也, 吉村紳一(聞き手)：私の手術論 脳血管内治療専門医を目指す君へ-ハンズオン, dual AVF：脳神経外科速報 23号 P 120-131(2013年)
- 37) 北園孝成, 西崎光弘, 高橋尚彦, 吉村紳一(座談会)：心原性脳塞栓症発症抑制のための新しいストラテジー：日経メディカル 2号 P 62-65(2013年)
- 38) 矢野大仁：当科レベチラセタム投与例の効果と問題点：第47回日本てんかん学会記録集 P18(2013年)
- 39) 脳神経外科：「脳卒中センター」発足 岐阜大病院, チームで医療：岐阜新聞(2014年8月7日)
- 40) 岩間 亨：脳卒中センター早期対応へ新設：朝日新聞(2014年9月7日)
- 41) 矢野大仁：左前頭葉腫瘍の初発時, 再発時にてんかん発作を呈した30代・男性～脳腫瘍関連てんかん：Brain Tumor-Related Epilepsy(BTRE)の診療ポイント～：Epilepsy my opinion 1-4 (2014年)
- 42) 榎本由貴子：UP!：名古屋テレビ(2014年12月2日)

12. 自己評価

評価

急性期脳虚血に対する各種薬剤ならびに脂肪組織由来幹細胞投与における脳保護効果に関して新たな知見が得られ、今後さらなる発展と臨床への応用が期待される。血小板放出因子と動脈硬化との関連、ならびに各種抗血小板剤の影響に関する研究においても臨床応用に直結する成果が得られている。

悪性脳腫瘍の再発と放射線壊死の鑑別に関する臨床研究において新たな診断法が開発されつつある。

現状の問題点及びその対応策

それぞれのテーマにおいて更なる研究の展開が期待される中で、現在の最大の問題点は研究人員の不足と研究体制の確立にある。

研究人員の増加を短期間に達成する事は困難であるため、長期的展望に立って研究者を育成していく必要がある。また、現在それぞれ異なった基礎講座との共同研究が主体となっているが、トランスレーショナルリサーチをさらに進めるためにも、脳神経外科に所属する臨床医、基礎研究者が常に顔を合わせて研究に関する討論が自然に生まれることが大切で、研究拠点を脳神経外科内に設立すべく整備を進めている。

今後の展望

現在なお治療成績が不良である悪性脳腫瘍と、ますますの増加が予想される脳虚血に対する新たな治療法の開発は、脳神経外科学領域において今後も重要な課題である。

悪性脳腫瘍の臨床的治療成績は統合的画像診断の応用で少しずつ進歩しているが、更なる治療効果を得るためには免疫療法、脳瘍幹細胞の分離を基にしたテララーメード治療などが必要であり、基礎研究とともに臨床応用を目指したトランスレーショナルリサーチをさらに進める必要がある。

脳虚血の治療に関しては、これまでの虚血に対する脳保護という受動的観点から、障害された機能を取り戻すという再生医療の導入、さらには、脳虚血の原因である脳動脈硬化を積極的に抑制するという

戦略のシフトが予想される。脳虚血保護に関するこれまでの研究成果の臨床応用を進めると同時に、神経再生、脳動脈硬制御を目指した基礎的、臨床的研究に取り組んでいきたい。

(7) 耳鼻咽喉科学分野

1. 研究の概要

1) めまい・平衡障害に関するもの

めまい・平衡障害患者に各種平衡機能検査を行い、疾患の素因や病像、めまい平衡障害の臨床的病態をとらえ、その成果を治療にフィードバックしている。

静的平衡機能検査の一つである重心動揺検査では平衡障害の病巣診断精度向上のため、動揺の各種時系列解析に力を入れている。

立位時の身体動揺を測定し、バイオメカニカルモデルを構築し、身体動揺の神経制御機構を PID (proportional integral derivative)制御方式を採用して検証している。身体動揺の周波数時系列解析から疾患特異性周波数の抽出を行い臨床検査としての有用性を検証している。

メニエール病の病態である内リンパ水腫に関連性がある水代謝系ホルモンのバズプレッシンについて研究している。発症因子としての役割や、メニエール病の発症因子ならびに予後因子としての役割について、臨床および基礎研究を行っている。バズプレッシンをパラメーターとして、内耳圧制御を目的とした鼓膜チューブ留置術および中耳加圧治療を行い、良好な結果を得ている。

起立性循環調節には圧受容器反射によるネガティブフィードバック機構が重要であるが、前庭器によるフィードフォワード系制御である前庭交感神経反射が関与していることを報告した。また、めまい症例がしばしば訴える起立性調節障害における前庭交感神経反射の関与を検証するとともに、前庭電気刺激によるめまい治療の臨床応用を検討している。

2) 頭頸部腫瘍に関するもの

頭頸部癌の治療において機能温存に重点を置き化学放射線療法、分子標的治療などの臨床検討を行っている。また、頭頸部癌手術術後の患者の QOL 低下の防止に関して、再建術式の臨床的検討を行っている。

頭頸部癌を腫瘍免疫の観点から研究している。大阪府立成人病センター研究所分子遺伝学部門の協力を得て進めている。臨床へのフィードバックを計画している。

3) 内耳再生に関するもの

内耳性難聴は治療に抵抗する非可逆的なものが多い。組織・器官形成分野の協力を得て内耳再生の研究を進めている。

2. 名簿

教授：	伊藤八次	Yatsuji Ito
准教授：	水田啓介	Keisuke Mizuta
准教授：	青木光広	Mitsuhiro Aoki
准教授：	加藤久和	Hisakazu Kato
講師：	久世文也	Bunya Kuze
臨床講師：	林 寿光	Hisamitsu Hayashi
臨床講師：	西堀丈純	Takezumi Nishihori
臨床講師：	棚橋重聡	Shigeaki Tanahashi
臨床講師：	大橋敏充	Toshimitsu Ohashi
臨床講師：	神山圭史	Keishi Kohyama
医員：	若岡敬紀	Takanori Wakaoka
医員：	村上一晃	Kazuaki Murakami
医員：	森 健一	Kenichi Mori
医員：	朝日勇貴	Yuki Asahi
医員：	川口友里加	Yurika Kawaguchi

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 水田啓介. めまいの運動療法, リハビリテーションはどのように行うか: めまいを見分ける・治療する ENT 臨床フロンティア, 東京: 中山書店; 2012年: 289-293.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 伊藤八次. めまいの生理検査 重心動揺検査, 臨床検査 2012年; 56巻: 637-643.
- 2) 水田啓介. アレルギー性鼻炎の実態と治療戦略, メディカルレビュー 2012年.
- 3) 水田啓介. 2012年のスギ・ヒノキ花粉飛散予測と花粉症トピックス, 内科会だより 2012年; 1月号: 1-2.
- 4) 青木光広. 酵素分解蜂の子による耳鳴りによるストレス、聴力レベルの改善効果, 健やか 2012年; 7月号.
- 5) 青木光広. めまいの診療 ~めまいをいかに治すか~, 耳報 2012年; 387号: 15.
- 6) 青木光広. 内科医に必要なめまいの診断と治療 ~わかりやすく解説します~, 岐阜市医師会だより 2012年; 44巻: 10-11.
- 7) 久世文也, 伊藤八次. 診療所で行うめまいの検査 注視眼振検査、異常眼球運動検査(解説/特集), ENTONI 2012年; 141号: 9-13.
- 8) 伊藤八次. 体動によるめまいはなぜ起こるのか?, JOHNS 2013年; 29巻: 1899-1901.
- 9) 水田啓介. 超音波手術骨メス, JOHNS 2013年; 29巻: 1807-1809.
- 10) 青木光広. 難聴・耳鳴り・前立腺肥大症に知っているようで知らない「蜂の子」「花粉荷」の素晴らしい力, 健やかに 2013年; 15巻: 5-13.
- 11) 青木光広. 加齢とともに増える難聴や耳鳴り 耳の健康を守るための対策はコレ, 健やかに 2013年; 15巻: 14-17.
- 12) 加藤博基, 兼松雅之, 水田啓介, 青木光広, 久世文也, 西堀丈純, 林 寿光, 星 博昭. 耳下腺疾患の CT, MRI, 画像診断 2013年; 33巻: 314-327.
- 13) 加藤博基, 兼松雅之, 水田啓介, 青木光広, 久世文也, 西堀丈純, 林 寿光, 星 博昭. 頭蓋底画像解剖 overview, 画像診断 2013; 33巻: 1369-1382.
- 14) 井上徳光, 大橋敏充, 赤澤 隆. 乳酸による IL-23/IL-17 産生誘導と免疫制御, 臨床免疫・アレルギー科 2013年; 60巻: 581-588.
- 15) 青木光広. メニエール病発作, Medical Practice 2014年; 31巻: 202-204.
- 16) 青木光広. 前庭障害が起立性循環系自律神経機能に与える影響, 日本自律神経学会誌 2014年; 54巻: 246-248.
- 17) 青木光広. 蜂の子の実力を紹介!, 健やかに 2014年; 7月号: 5-15.
- 18) 鈴木幸一, 青木光広. 昆虫を資源とした生物学に基づくセラピーならびに創薬(その4) ミツバチ産品による生物医薬品の可能, PHARM TECH JAPAN 2014年; 30巻: 75-79.
- 19) 鈴木 衛, 池園哲郎, 伊藤壽一, 柿木章伸, 北原 紘, 肥塚 泉, 將積日出夫, 高橋克昌, 工田昌也, 武田憲昭, 土井勝美, 山下裕司, 青木光広, 宇佐美真一, 高橋正紘, 長沼英明, 渡辺行雄. 厚生労働省難治性疾患等克服研究事業前庭機能異常に関する調査研究班(2011-2013年度) メニエール病難治例の診療指針, Equilibrium Research 2014年; 73巻: 80-89.

総説 (欧文)

- 1) Aoki M, Hayashi H, Takagi C, Tanahashi S, Kuze B, Mizuta K, Ito Y. Management of chronic dizziness. J Symptoms Signs. 2013;2:94-102.

原著 (和文)

- 1) 水田啓介, 久世文也, 山田南星, 林 寿光, 青木光広, 伊藤八次. 頭頸部癌の静脈角・鎖骨下静脈浸潤例に対する手術, 日本耳鼻咽喉科学会会報 2012年; 115巻: 910-916.
- 2) 水田啓介, 藤垣 熙, 大井益一, 服部彩樹, 棚橋聰子, 安藤健一, 田中雄一, 横田 明, 柴田康成, 加藤雅也, 新井信一郎, 渡辺忠彦, 伊藤八次, 横山壽一, 竹内秀行, 山崎 太, 田中孝治, 小木曾正輝, 高橋広志, 北村泰宏. 岐阜県における2011年のスギ・ヒノキ科花粉飛散状況と2012年のスギ・ヒノキ科花粉飛散予測, 東海花粉症 2012年; 23巻: 7-11.
- 3) 青木光広, 坂井田譲, 田中邦彦. 自律神経系とめまい: 前庭血管系反射と起立性循環調節, Equilibrium Research 2012年; 71巻: 186-193.
- 4) 上田奈津子, 水田啓介, 加藤久和, 青木光広, 伊藤八次. 甲状腺癌胸骨転移に対して胸骨切除を行った1例, 耳鼻臨床 2012年; 105巻: 363-367.
- 5) 滝脇正人, 加藤久和, 柳田正巳, 柳田三洋子, 菱田圭祐, 伊藤八次. 手術用顕微鏡の光源によって耳介熱傷をきたした2例, 耳鼻臨床 2012年; 105巻: 527-531.
- 6) 山田法顕, 熊田恵介, 中野通代, 白井邦博, 吉田省造, 水田啓介, 豊田 泉, 小倉真治. 急性期からの高気圧酸素治療の併用が効果的であった深頸部膿瘍の一例, 日集中医誌 2012年; 19巻: 65-70.
- 7) 加藤博基, 兼松雅之, 加藤久和, 加藤恵三, 柴田敏之, 青木光広, 水田啓介, 星 博昭. 頭頸部外傷の画像診断とIVR, 臨床画像 2012年; 28巻: 38-57.
- 8) 加藤博基, 星 博昭, 兼松雅之, 出原啓一, 久世文也, 青木光広, 水田啓介, 大野貴敏. 頭頸部領域のデスマイド腫瘍(デスマイド型線維腫症)の3例, 臨床放射線 2012年; 57巻: 436-441.
- 9) 水田啓介, 内藤裕介, 出原啓一, 西堀丈純, 久世文也, 青木光広, 伊藤八次. 気管切開後に生じた気管狭窄に伴う気管食道瘻の1例, 日気食会報 2013年; 64巻: 219-223.
- 10) 水田啓介, 藤垣 熙, 大井益一, 服部彩樹, 棚橋聰子, 安藤健一, 横田 明, 柴田康成, 加藤雅也, 新井信一郎, 渡辺忠彦, 伊藤八次, 横山壽一, 竹内秀行, 山崎 太, 田中孝治, 小木曾正輝, 高橋広志, 北村泰宏, 小林英臣. 岐阜県における2012年のスギ・ヒノキ科花粉飛散状況と2013年のスギ・ヒノキ科花粉飛散予測,

- 東海花粉症 2013年;24巻:29-33.
- 11) 水田啓介, 青木光広, 出原啓一. 前庭神経炎. シリーズ教育講座 難治性めまいへのアプローチ, *Equilibrium Res* 2013年;72巻:135-255.
 - 12) 水田啓介, 林 寿光, 西堀丈純, 久世文也, 青木光広, 伊藤八次, 小塩勝博. 変動性難聴をきたし内リンパ水腫が推定された高位頸静脈球小児例, *Otol Jpn* 2013年;23巻:873-877.
 - 13) 青木光広, 棚橋重聡, 水田啓介. 側頭骨脱灰所見を呈する疾患, *耳鼻臨床* 2013年;106巻:200-201.
 - 14) 時田 喬, 宮田英雄, 青木光広. 重心動揺の周波数解析-ピーク面積-周波数スペクトル検査の提唱-, *Equilibrium Res* 2013年;72巻:238-246.
 - 15) 柴田博史, 林 寿光, 久世文也, 青木光広, 水田啓介, 伊藤八次. 小児扁桃周囲膿瘍 4 例の検討, *耳鼻臨床* 2013年;106巻:615-619.
 - 16) 高橋洋城, 大西将美, 棚橋重聡, 坂井田謙, 森 健一, 水田啓介. B型肝炎再活性化をきたした上顎洞癌の1例, *頭頸部外科* 2013年;23巻:135-140.
 - 17) 平松 隆, 水田啓介. 顎関節症を伴う特発性外耳道骨欠損症の1例, *Otol Jpn* 2013年;23巻:216-220.
 - 18) 加藤博基, 兼松雅之, 水田啓介, 青木光広, van der Hoeve 症候群の2例における側頭骨CT所見, *臨床放射線* 2013年;58巻:737-741.
 - 19) 水田啓介, 藤垣 熙, 大井益一, 服部彩樹, 棚橋聰子, 安藤健一, 横田 明, 柴田康成, 加藤雅也, 新井信一郎, 伊藤八次, 横山壽一, 竹内秀行, 山崎 太, 田中孝治, 小木曾正輝, 高橋広志, 北村泰宏, 小林英臣, 青木香織. 岐阜県における2013年のスギ・ヒノキ花粉飛散状況と2014年のスギ・ヒノキ花粉飛散予測, *東海花粉症* 2014年;25巻:15-20.
 - 20) 水田啓介, 山田南星, 久世文也, 加藤久和, 青木光広, 伊藤八次. 頸部転移性リンパ節の頸動脈浸潤例に対する術前画像評価の検討, *頭頸部癌* 2014年;40巻:459-463.
 - 21) 國枝千嘉子, 水田啓介. 感冒症状後に発生した声帯幕腰部癒着症例, *羽島市民病院紀要* 2014年;19巻:7-10.
 - 22) 時田 喬, 宮田英雄, 青木光広. 高齢者の重心動揺 ピーク面積-周波数スペクトルによる検討, *Equilibrium Research* 2014年;73巻:127-138.
 - 23) 上田奈津子, 久世文也, 水田啓介, 西堀丈純, 青木光広, 伊藤八次. ソマトスタチンアナログが奏功した術後性頸部乳び漏例, *耳鼻臨床* 2014年;107巻:553-556.
 - 24) 柴田博史, 久世文也, 林 寿光, 西堀丈純, 青木光広, 水田啓介, 加藤史門, 安藤健一, 伊藤八次. 副甲状腺嚢胞から発生した特発性頸部出血の1症例, *日耳鼻会報* 2014年;117巻:1194-1199.

原著 (欧文)

- 1) Kato H, Mizuta K, Yamada N, Ueda N, Ito Y. A new route for passing a free flap vascular pedicle using contralateral facial vessels as recipient vessels in skull base reconstruction. *Plast Reconstr Surg.* 2012;130:212e-214e. IF 3.328
- 2) Aoki M, Wakaoka T, Hayashi H, Kuze B, Mizuta K, Ito Y. Effect of lyophilized powder made from enzymolyzed honeybee larvae on tinnitus-related symptoms, hearing levels and hypothalamus-pituitary-adrenal axis-related hormones. *Ear Hearing.* 2012;33:430-436. IF 2.833
- 3) Aoki M, Sakaida Y, Tanaka K, Mizuta K, Ito Y. Evidence for vestibular dysfunction in orthostatic hypotension. *Exp Brain Res.* 2012;217:251-259. IF 2.168
- 4) Nishihori T, Aoki M, Jiang Y, Nagasaki S, Furuta Y, Ito Y. Effects of aging on lateral stability in quiet stance. *Aging Clin Exp Res.* 2012;24:162-170. IF 1.138
- 5) Kato H, Kanematsu M, Goto H, Mizuta K, Aoki M, Kuze B, Hirose Y. Mucosa-associated lymphoid tissue lymphoma of the salivary glands: MR imaging findings including diffusion-weighted imaging. *Eur J Radiol.* 2012;81:e612-617. IF 2.160
- 6) Kato H, Kanematsu M, Mizuta K, Aoki M, Hirose Y. Spontaneous infarction of warthin's tumor: imaging findings simulating malignancy. *JPN J Radiol.* 2012;30:354-357. IF 0.742
- 7) Ohtakara K, Hayashi S, Mizuta K, Aoki M, Ando K, Okada S, Ito Y, Hoshi H. Clinical outcomes of single or oligo-fractionated stereotactic radiotherapy for head and neck tumors using micromultileaf collimator-based dynamic conformal arcs. *J Cancer Res Clin.* 2012;138:1511-1522. IF 3.009
- 8) Funato M, Fukao T, Sasai H, Hori T, Terazawa D, Kanda K, Ozeki M, Mizuta K, Hirose Y, Kaneko H, Kondo N. Paclitaxel-based chemotherapy for aggressive kaposiform hemangioendothelioma of the temporomastoid region: Case report and review of the literature. *Head Neck-J Sci Spec.* 2012;21:1-4. IF 3.006
- 9) Tanaka K, Abe C, Sakaida Y, Aoki M, Iwata C, Morita H. Subsensory galvanic vestibular stimulation augments arterial pressure control upon head-up tilt in human subjects. *Auton Neurosci-Basic.* 2012;166:66-71. IF 1.372
- 10) Aoki M, Nishihori T, Jiang Y, Nagasaki S, Wakaoka T, Ito Y. Damping control of balance in the medial/lateral direction and the risk of falling in the elderly. *Geriatr Gerontol Int.* 2013;13:182-189. IF 1.575
- 11) Aoki M, Tanaka K, Wakaoka T, Kuze B, Hayashi H, Mizuta K, Ito Y. The association between impaired perception of verticality and cerebral white matter lesions in the elderly patients with orthostatic hypotension. *J Vestibul Res-Equil.* 2013;23:85-93. IF 1.456
- 12) Izuhara K, Wada K, Nakamura K, Tamai Y, Tsuji M, Ito Y, Nagata C. Association between tinnitus and sleep disorders in the general Japanese population. *Ann Oto Rhinol Laryn.* 2013;122:701-706. IF 1.054
- 13) Ohashi T, Akazawa T, Aoki M, Kuze B, Mizuta K, Ito Y, Inoue N. Dichloroacetate improves immune

- dysfunction caused by tumor-secreted lactic acid and increases anti-tumor immunoreactivity. *Int J Cancer*. 2013;133:1107-1118. IF 5.007
- 14) Wakaoka T, Motohashi T, Hayashi H, Kuze B, Aoki M, Mizuta K, Kunisada T, Ito Y. Tracing Sox10-expressing cells elucidates the dynamic development of the mouse inner ear. *Hearing Res*. 2013;302:17-25. IF 2.848
- 15) Kohyama K, Sugiura H, Yamada K, Hyodo I, Kato H, Kamei Y. Posterior interosseous nerve palsy secondary to pigmented villonodular synovitis of the elbow: case report and review of literature. *Orthop Traumatol-Sur*. 2013;99:247-251. IF 1.168
- 16) Kato H, Kanematsu M, Kawaguchi S, Watanabe H, Mizuta K, Aoki M. Evaluation of imaging findings differentiating extranodal non-Hodgkin's lymphoma from squamous cell carcinoma in naso- and oropharynx. *Clin Imag*. 2013;37:657-663. IF 0.596
- 17) Kato H, Kanematsu M, Kato Z, Teramoto T, Mizuta K, Aoki M, Makita H, Kato K. Necrotic cervical nodes: Usefulness of diffusion-weighted MR imaging in the differentiation of suppurative lymphadenitis from malignancy. *Eur J Radiol*. 2013;82:e28-e35. IF 2.160
- 18) Kato H, Kanematsu M, Mizuta K, Aoki M. Imaging findings of parapharyngeal space pleomorphic adenoma in comparison with parotid gland pleomorphic adenoma. *Jpn J Radiol*. 2013;31:724-730. IF 0.742
- 19) Kato H, Kanematsu M, Sakurai K, Mizuta K, Aoki M, Hirose Y, Kawaguchi S, Fujita A, Ikeda K, Kanda T. Adenoid cystic carcinoma of the maxillary sinus: CT and MR imaging findings. *Jpn J Radiol*. 2013;31:744-749. IF 0.742
- 20) Aoki M, Tokita T, Kuze B, Mizuta K, Ito Y. A characteristic pattern in the postural sway of unilateral vestibular impaired patients. *Gait Posture*. 2014;40:435-440. IF 2.299
- 21) Aoki M, Nishihori T, Obara N, Kato H, Mizuta K. Pediatric Warthin tumor of parotid gland. *Int J Clin Pediat*. 2014;3:55-58.
- 22) Kato H, Kanematsu M, Makita H, Kato K, Hatakeyama D, Shibata T, Mizuta K, Aoki M. CT and MR imaging findings of palatal tumors. *Eur J Radiol*. 2014;83:e137-e146. IF 2.160
- 23) Kato H, Kanematsu M, Watanabe H, Mizuta K, Aoki M. Metastatic retropharyngeal lymph nodes: Comparison of CT and MR imaging for diagnostic accuracy. *Eur J Radiol*. 2014;83:1157-1162. IF 2.160
- 24) Kato H, Kanematsu M, Watanabe H, Mizuta K, Aoki M. Salivary gland tumors of the parotid gland: CT and MR imaging findings with emphasis on intratumoral cystic components. *Neuroradiology*. 2014;56:789-795. IF 2.374
- 25) Suzuki A, Kobayashi R, Okayasu S, Kuze B, Aoki M, Mizuta K, Itoh Y. Pharmacotherapy for adverse events reduces the length of hospital stay in patients admitted to otolaryngology ward: a single arm intervention study. *PLoS One*. 2014;9:e115879. IF 3.534
- 26) Akazawa T, Ohashi T, Nakajima H, Nishizawa Y, Kodama K, Sugiura K, Inaba T, Inoue N. Development of a dendritic cell-targeting lipopeptide as an immunoadjuvant that inhibits tumor growth without inducing local inflammation. *Int J Cancer*. 2014;135:2847-2856. IF 5.007

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：大橋敏充；科学研究費補助金研究活動スタート支援：頭頸部癌における乳酸代謝機構が免疫変調状態に及ぼす影響の解明；平成 25-26 年度；2,730 千円(1,430：1,300 千円)

2) 受託研究

- 1) 水田啓介：頭頸部扁平上皮癌根治治療後の TS-1 補助化学療法 of 検討；平成 18-24 年度；1,365 千円；財団法人先端医療振興財団

3) 共同研究

- 1) 青木光広：難治性メニエール病治療における鼓膜按摩器 I 型(FME-01)の臨床評価試験；平成 25-26 年；3,000 千円；第一医科株式会社

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

伊藤八次：

- 1) 日本耳鼻咽喉科学会代議員(平成 24 年度～現在)
2) 日本耳鼻咽喉科学会岐阜県地方部会長(～現在)

- 3) 日本めまい平衡医学会理事(～現在)
- 4) 日本めまい平衡医学会渉外・広報担当理事(平成 25 年 11 月～現在)
- 5) 日本めまい平衡医学会代議員(平成 25 年 9 月～現在)
- 6) 日本気管食道科学会評議員(～現在)
- 7) 耳鼻咽喉科臨床学会運営委員(～現在)
- 8) 日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会評議員(～現在)
- 9) 日本口腔・咽頭科学会評議員(～現在)
- 10) 日本喉頭科学会評議員(～現在)
- 11) 日本嚥下医学会評議員(～現在)

水田啓介：

- 1) 日本耳鼻咽喉科学会代議員(平成 24 年度～現在)
- 2) 日本めまい平衡医学会代議員(平成 25 年 9 月～現在)
- 3) 日本気管食道科学会評議員(～現在)
- 4) 日本めまい平衡医学会専門会員審査委員会委員(～現在)
- 5) 日本めまい平衡医学会専門会員審査委員会委員長(平成 24 年度～現在)

青木光広：

- 1) 日本めまい平衡医学会代議員(平成 25 年 9 月～現在)
- 2) 日本めまい平衡医学会セミナー委員会委員(～平成 25 年 3 月)
- 3) 日本めまい平衡医学会めまい相談医制度運営委員会委員(～現在)

2) 学会開催

伊藤八次：

- 1) 第 37 回日本耳鼻咽喉科学会岐阜県地方部会総会ならびに学術講演会(平成 24 年 5 月, 岐阜)
- 2) 第 150 回日本耳鼻咽喉科学会東海地方部会連合講演会(平成 24 年 9 月, 岐阜)
- 3) 第 38 回日本耳鼻咽喉科学会岐阜県地方部会総会ならびに学術講演会(平成 25 年 4 月, 岐阜)
- 4) 日本耳鼻咽喉科学会地方部会社療部保険医療委員会第 50 回中部ブロック会議(平成 25 年 6 月, 岐阜)
- 5) 第 39 回日本耳鼻咽喉科学会岐阜県地方部会総会ならびに学術講演会(平成 26 年 5 月, 岐阜)
- 6) 第 157 回日本耳鼻咽喉科学会東海地方部会連合講演会(平成 26 年 6 月, 岐阜)

加藤久和：

- 1) 第 48 回中部形成外科学会学術集会(平成 25 年 7 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

伊藤八次：

- 1) Equilibrium Research ; 編集担当理事(～平成 25 年度)

青木光広：

- 1) 耳鼻咽喉科臨床 ; 編集委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

伊藤八次：

- 1) 第 37 回日本耳鼻咽喉科学会岐阜県地方部会総会ならびに学術講演会(平成 24 年 5 月, 岐阜, 特別講演「あぶみ骨手術とその周辺」座長)
- 2) 第 38 回日本耳鼻咽喉科学会岐阜県地方部会総会ならびに学術講演会(平成 25 年 4 月, 岐阜, 特別講演「嗅覚障害の診断と治療－最近の話題－」座長)
- 3) めまい平衡医学会医師講習会(平成 25 年 7 月, 大阪, 「めまいのリハビリテーション」演者)
- 4) 第 39 回日本耳鼻咽喉科学会岐阜県地方部会総会ならびに学術講演会(平成 26 年 5 月, 岐阜, 特別講演「難治性メニエール病への対応－最近の動向－」座長)

水田啓介：

- 1) 岐阜県耳鼻咽喉科医会学術講演会(平成 24 年 1 月, 岐阜, 「岐阜県における 2012 年度スギ花粉飛散

予測について」演者)

- 2) 第 20 回東海耳鼻咽喉科生体防御研究会(平成 25 年 1 月, 名古屋, 「頭頸部癌の大血管浸潤例に対する対応」演者)

青木光広 :

- 1) 1st Joint World Congress of International Symposium for Postural and Gait Research and Gait & Mental Function(2012.06, Trondheim, Norway, Symposium of Vestibular Disorder: Evidence for vestibular dysfunction in orthostatic hypotension; シンポジスト)
- 2) 山田養蜂場教育セミナー(平成 25 年 5 月, 岡山, 「蜂の子の難聴の改善・耳鳴への効果」演者)
- 3) 第 66 回日本自律神経学会(平成 25 年 10 月, 名古屋, シンポジウム「めまいと自律神経」シンポジスト)
- 4) 15th Korean-Japan Joint Meeting(2014.04, Seoul, Korea, Symposium: Controversy in Management of Intractable Meniere's Disease. Topics: Treatment; シンポジスト)
- 5) 第 14 回日本抗加齢医学会ランチョンセミナー(平成 26 年 6 月, 大阪, 「ミツバチ産品素材のアンチエイジングにおける有用性～酵素分解蜂の子の耳鳴を伴う難聴患者ならびに耳鳴自覚者に対する効果～」演者)
- 6) 2014 International Symposium for Gait and Posture research world congress(2014.06, Vancouver, Canada, Pre-congress symposium. The present status of clinical application of stabilometry and its parameters in Japan; シンポジスト)

久世文也 :

- 1) 東海頭頸部癌分子標的薬セミナー(平成 25 年 10 月, 名古屋, 「当科におけるセツキシマブ使用経験」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 大橋敏充 : 成人病医学研究顕彰【B】(平成 26 年度)

9. 社会活動

伊藤八次 :

- 1) 岐阜県社会福祉審議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県新生児聴覚検査事業検討委員会委員長(～現在)
- 3) 岐阜市社会福祉審議会委員(～現在)

水田啓介 :

- 1) 岐阜県国民健康保険診療報酬審査委員会委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 青木光広, 坂井田譲, 田中邦彦 : 前庭障害と起立性低血圧の関連性 : 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 前庭機能異常に関する調査研究 平成 23 年度総括・分担研究報告書(代表研究者 鈴木 衛) : 173-177(平成 24 年 3 月)
- 2) 青木光広, 水田啓介, 伊藤八次 : メニエール病難治例に対するパイリング治療の有効性 : 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 前庭機能異常に関する調査研究 平成 24 年度総括・分担研究報告書(代表研究者 鈴木 衛) : 155-157(平成 25 年 3 月)
- 3) 青木光広, 久世文也, 林 寿光, 水田啓介, 伊藤八次 : めまいが遷延する高齢者前庭障害症例における重心動揺のフラクタル時系列解析 : 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 前庭機能異常に関する調査研究 平成 25 年度報告書(代表研究者 鈴木 衛) : 196-198(平成 26 年 3 月)
- 4) 青木光広, 久世文也, 林 寿光, 水田啓介, 伊藤八次 : 保存的治療に抵抗する難治性上半規管裂隙症候群に対する Capping 法 : 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 前庭機能異常に関する調査研究 平成 25 年度報告書(代表研究者 鈴木 衛) : 240-242(平成 26 年 3 月)

11. 報道

- 1) 青木光広 : 蜂の子の聴力改善と耳鳴の効果 : 日本食糧新聞(2012 年 1 月 20 日)
- 2) 青木光広 : 蜂の子ならびにストレスホルモン関連記事 : 徳島新聞(2012 年 2 月 19 日), デーリー東北

- (2012年2月20日), 福島民報(2012年2月20日), 他 29紙
- 3) 伊藤八次:「耳の日」関連記事:岐阜新聞(2012年3月3日)
 - 4) 青木光広:耳鳴り関連記事 メディカル情報:岐阜新聞(2012年3月5日)
 - 5) 青木光広:「加齢性難聴、耳鳴の悪化抑制」研究室から 大学はいま:岐阜新聞(2012年6月26日)
 - 6) 青木光広:名医にQ 知って安心!めまい対処法:NHK Eテレ(2012年8月4日)
 - 7) 伊藤八次:「鼻の日」関連記事:中日新聞(2012年8月7日)
 - 8) 青木光広:名医にQ めまい対処法「あなたの疑問に答えます!」:NHK Eテレ(2012年8月11日)
 - 9) 伊藤八次:「耳の日」関連記事:岐阜新聞(2013年3月3日)
 - 10) 伊藤八次:「鼻の日」関連記事:中日新聞(2013年8月7日)
 - 11) 加藤久和:ぎふ 乳房再建を考える:岐阜新聞(2013年)
 - 12) 水田啓介:病院の実力「頭頸部がん」:読売新聞(2014年2月2日)
 - 13) 青木光広:佐村河内氏 なぜTVはだまされた:朝日新聞(2014年2月7日)
 - 14) 伊藤八次:「耳の日」関連記事:中日新聞(2014年3月1日)
 - 15) 伊藤八次:「鼻の日」関連記事:中日新聞(2014年8月7日)
 - 16) 青木光広:携帯機器で鼓膜加圧:耳鳴り, めまい起こる「メニエール病」症状抑制に効果:岐阜新聞(2014年9月26日)
 - 17) 青木光広:中耳加圧でメニエール病軽減 治療法確立に熱:中日新聞(2014年10月8日)

12. 自己評価

評価

- ・ 国外留学 (スウェーデン, ウプサラ大学) 助教1名, 国内留学 (京都大学 iPS 細胞研究所) 大学院生1名及び学内共同研究 (組織・器官形成分野) 大学院生1名を派遣している。さらに, 2015年5月から米国ピッツバーグ大学に1名留学予定である。以上, 積極的に国内外の基礎研究分野と交流し研究レベルの向上に努めている。
- ・ 当教室が研究の軸としてきた「めまい平衡障害」の研究・学会活動が認められ, 2015年11月に第74回めまい平衡医学会を岐阜市長良川国際会議場と都ホテルで主催予定である。
- ・ 全国レベルの耳鼻咽喉科関連学会で積極的に参加発表したが, 欧文原著は十分とは言えない。

現状の問題点及びその対応策

- ・ ローテート研修制度導入後の人員不足が解消できていない。研究は臨床と平行に行っており, 癌患者などの重症な疾患の多い病棟の治療を進めながらの研究には時間的制約が多い。大学院生も社会人大大学院生として臨床を維持しているため, 基礎研究に必要な纏まった時間を確保できない現状である。
- ・ 対応策として, 基礎講座や他の研究機関との交流を密にして, 人的物的資源の補完を図っている。今後は学会・論文発表実績を増加させたい。

今後の展望

- ・ 岐阜大学耳鼻咽喉科に蓄積されためまい平衡障害の研究成果を基礎に, めまい・平衡障害を中心とする研究を押し進める。メニエール病に代表される難治性めまい治療にフィードバックできる成果を挙げ, めまい平衡障害患者や高齢者の身体平衡機能改善に寄与する効果的平衡訓練方法開発を目標とする。また, 頭頸部がんの治療戦略における機能温存を重点化し, 関連する臨床研究を進める。

(8) 眼科学分野

1. 研究の概要

当教室は、緑内障をメインテーマとして据え、基礎および臨床研究を行っている。緑内障領域においては、その研究は多岐にわたっており、眼圧・視野・画像解析・薬物療法・手術療法・神経保護・網膜再生・遺伝子解析などに及ぶ。

1. VERIS を用いた多局所網膜電図, 多局所視覚誘発電位による緑内障早期発見ならびに重症度判定。
2. ICare rebound tonometer, Dynamic contour tonometer (DCT) など新しい眼圧計の評価。
3. 光干渉断層計 (OCT) を用いた, 緑内障における視神経ならびに網膜構造変化の解析。
4. 眼圧体位変動評価。
5. 様々な眼圧下降薬の臨床評価。
6. レーザーならびに手術療法の長期効果判定。
7. 緑内障遺伝子の同定。
8. ロービジョンケア。
9. 神経保護薬と目される薬物の評価 など

その他, 網膜硝子体疾患, 角膜疾患, 感染症, ぶどう膜炎など幅広い眼疾患において, 特殊と思われる症例では着実に学会発表ならびに論文報告を行っている。

2. 名簿

教授 :	山本哲也	Tetsuya Yamamoto
准教授 :	川瀬和秀	Kazuhide Kawase
准教授 :	望月清文	Kiyofumi Mochizuki
講師 :	澤田 明	Akira Sawada
助教 :	末森晋典	Shinsuke Suemori
助教 :	石澤聡子	Satoko Kokuzawa
助教 :	宇土一成	Kazunari Udo
医員 :	白木育美	Ikumi Shiraki
医員 :	高橋伸通	Nobumichi Takahashi
医員 :	大家進也	Shinya Oie
医員 :	村田一弘	Kazuhiro Murata
医員 :	西田 崇	Takashi Nishida
医員 :	高木大介	Daisuke Takagi
医員 :	田中大貴	Hiroki Tanaka
医員 :	真鍋佑介	Yusuke Manabe
医員 :	山田 渉	Wataru Yamada
医員 :	矢ヶ崎礼香	Ayaka Yagasaki

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 山本哲也. 緑内障の手術適応 2 原発開放隅角緑内障(広義): 眼手術学 6 緑内障, 東京: 文光堂; 2012 年: 27-30.
- 2) 山本哲也. 線維柱帯切除術(トラベクレクトミー) 2 基本術式 2 輪部基底結膜切開によるトラベクレクトミー: 眼手術学 6 緑内障, 東京: 文光堂; 2012 年: 78-84.
- 3) 山本哲也. 第 10 章 緑内障: 現代の眼科学 改訂第 11 版, 東京: 金原出版; 2012 年: 224-239.
- 4) 山本哲也. 薬物治療ガイドライン/眼圧下降: 専門医のための眼科診療クオリファイ 11 緑内障薬物治療ガイド, 東京: 中山書店; 2012 年: 7-11.
- 5) 山本哲也. II. 眼科疾患: 診療ガイドライン UP-TO-DATE 2012-2013, 大阪: メディカルレビュー社; 2012 年: 83-120.
- 6) 山本哲也, 江口秀一郎, ビッセン宮島弘子, 門之園一明. 新 ES Now 12 眼科手術のトラブルシューティング, 東京: メジカルビュー社; 2012 年.
- 7) 川瀬和秀. 線維柱帯切開術 隅角切開術: 眼手術学 6 緑内障, 東京: 文光堂; 2012 年: 295-297.
- 8) 川瀬和秀. 全薬剤の作用と副作用 防腐剤とその功罪: 専門医のための眼科診療クオリファイ 11 緑内障薬物治療ガイド, 東京: 中山書店; 2012 年: 117-120.
- 9) 山本哲也, 谷原秀信編集. All About 開放隅角緑内障, 東京: 医学書院; 2013 年.
- 10) 川瀬和秀. II 緑内障眼の視機能障害とそのケア: All About 開放隅角緑内障, 東京: 医学書院; 2013 年: 370-376.

- 11) 石田恭子. エクスプレスマニシヤントの特徴と手術手技：緑内障チューブシヤント手術のすべて，東京：MEDICAL VIEW；2013年：88-103.
- 12) 石田恭子. チューブシヤント手術：All About 開放隅角緑内障，東京：医学書院；2013年：325-336.
- 13) 山本哲也. 第18章 視野：標準眼科学 第12版，東京：医学書院；2013年：286-294.
- 14) 山本哲也. 緑内障配合点眼薬の特徴と使い方：眼科疾患最新の治療 2013-2015，東京：南江堂；2013年：21-24.
- 15) 山本哲也. 眼科用剤：今日の治療薬 2014，東京：南江堂；2014年：1002-1006.
- 16) 山本哲也. 眼科・緑内障治療薬：Pocket Drugs 2014，東京：医学書院；2014年：963-965.
- 17) 山本哲也. 診療ガイドライン UP-TO-DATE 2014-2015，大阪：メディカルレビュー社；2014年：684-726.
- 18) 望月清文. 深在性真菌症のガイドライン作成委員会. 深在性真菌症の診断・治療ガイドライン 2014，東京：協和企画；2014年
- 19) 望月清文. 真菌性角膜炎. 4) 炎症性実質混濁各論：井上幸次編. 角膜混濁のすべて 専門医のための眼科診療クオオリファイ 25，東京：中山書店；2014年：165-169.
- 20) 望月清文. 2. カンジダ属が引き起こす病態. 3) カンジダ性眼病変. b. 眼内炎に対する眼科的アプローチ～硝子体内注射および外科的治療～：竹末芳生，三鴨廣繁編. 侵襲性カンジダ症，医薬ジャーナル；2014年：66-70.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 山本哲也. 日本緑内障学会緑内障診療ガイドライン作成委員会(執筆者：山本哲也，他)：緑内障診療ガイドライン第3版，日眼会誌 2012年；116巻：3-46.
- 2) 山本哲也. 緑内障薬物の選び方、組み合わせ方の基本，あたらしい眼科 2012年；29巻：437-442.
- 3) 山本哲也. 緑内障の病態と疫学 (1)多発見スタディ，長寿科学振興財団業績集「高齢者の視覚障害とそのケア」 2012年：91-97.
- 4) 山本哲也. 緑内障の分類と疫学，日本医師会雑誌 2012年；141巻：789-792.
- 5) 山本哲也. 緑内障手術後の眼内炎，日本の眼科 2012年；83巻：863-864.
- 6) 山本哲也. 緑内障スクリーニングの有用性と課題，Frontiers in Glaucoma 2012年；44巻：42-45.
- 7) 山本哲也. 日本緑内障学会による濾過胞感染全国登録事業，眼科手術 2012年；25巻：537-540.
- 8) 山本哲也，木内良明. 序説：小児と高齢者の緑内障：ここがポイント，あたらしい眼科 2012年；29巻：1-2.
- 9) 山本哲也，岩瀬愛子. 序説：わかりやすい緑内障薬物のお話，あたらしい眼科 2012年；29巻：435-436.
- 10) 山本哲也. 第65回日本臨床眼科学会印象記、一般講演「緑内障病態」，眼科 2012年；54巻：511-512.
- 11) 山本哲也，阿部春樹，桑山泰明. 緑内障診療ガイドライン第3版を語る(座談会)，あたらしい眼科 2012年；29巻：593-595.
- 12) 山本哲也，栗本康夫. 序説：眼圧上昇はなぜ起こる？，あたらしい眼科 2012年；29巻：581-582.
- 13) 山本哲也. 崔杼、その君を弑す，日眼会誌 2012年；116巻：775-776.
- 14) 山本哲也，阿部春樹，鈴木康之. 緑内障診療ガイドライン改訂(座談会)，あたらしい眼科 2012年；29巻：1029-1033.
- 15) 山本哲也. ARO2012で考えたこと，日眼会誌 2012年；116巻：841-842.
- 16) 石田恭子，山本哲也. 序説：今が旬、緑内障手術，あたらしい眼科 2012年；9巻：1451.
- 17) 川瀬和秀. 【わかりやすい緑内障薬物のお話】交感神経α1遮断薬、交感神経刺激薬、副交感神経作動薬，あたらしい眼科 2012年；29巻：487-491.
- 18) 杉山和久，川瀬和秀外. 緑内障研究の進歩 原発開放隅角緑内障(広義)への挑戦 臨床的諸問題とその科学的解決，日本眼科学会雑誌 2012年；116巻：233-268.
- 19) 大家進也，小森伸也，高橋伸通，堅田利彦，望月清文，堀 暢英，石橋康久，大楠清文，呉 志良，高橋優三，末松寛之，浅野裕子. 岐阜大学およびその関連病院におけるアcantアメーバ角膜炎の12症例，あたらしい眼科 2012年；29巻：117-122.
- 20) 末森晋典，澤田 明，小森伸也，宇土一成，白木育美，白木玲子，望月清文. Stickler 症候群の姉妹例，臨眼 2012年；66巻：509-513.
- 21) 川上秀昭，犬塚裕子，望月清文，福野賢二，武藤敏弘. 急性白血病患者に発症した *Trichosporonasahii* による内因性真菌性眼内炎，眼科 2012年；54巻：435-440.
- 22) 諸戸尚也，小森伸也，小國 務，白木育美，末森晋典，望月清文，天野雄平，大楠清文. クリのイガ刺入後に生じた *Malassezia* 眼感染症の1例，臨眼 2012年；66巻：623-627.
- 23) 川上秀昭，犬塚裕子，望月清文，高橋伸通，武藤敏弘，大楠清文，矢口貴志，西村和子. *Paecilomyces* 属による眼感染症における診断，治療および予後についての検討，日眼会誌 2012年；116巻：613-622.
- 24) 堅田利彦，近藤雄司，村瀬寛紀，熊田充起，望月清文，大楠清文. 水痘に合併した網膜血管炎の1例，臨眼 2012年；66巻：1245-1251.
- 25) 川上秀昭，中根祐子，白木育美，望月清文. ベバシズマブ硝子体内注射が奏効した内因性真菌性眼内炎後の脈絡膜新生血管，眼科 2012年；54巻：1677-1682.
- 26) 黒岩真友子，小森伸也，石澤聡子，望月清文. リネゾリド投与中にみられた視神経症の1例，眼科 2012

- 年；54巻：1799-1806.
- 27) 高橋伸通, 小國 務, 堀 暢英, 望月清文. パクリタキセル投与中に黄斑部嚢胞様変化をきたした一例, 眼科 2012年；54巻：1819-1824.
 - 28) 近藤雄司, 堅田利彦, 望月清文. 鼻性視神経症との鑑別に苦慮したリネゾリドによる視神経症の1例, 臨床眼科 2012年；66巻：1765-1770.
 - 29) 澤田 明. 小児と高齢者の緑内障: ここがポイント小児の緑内障検査, あたらしい眼科 2012年；1巻：3-6.
 - 30) 澤田 明. 眼科医局での男女共同参画の取り組みについて, 日本の眼科 2012年；8巻：1067.
 - 31) 山本哲也. 眼疾患スクリーニング検査の現状-多治見からの考察-, あたらしい眼科 2013年；30巻：999-1001.
 - 32) 望月清文. 侵襲性カンジダ症の診断・治療ガイドライン作成委員会. 侵襲性カンジダ症の診断・治療ガイドライン Executive summary 集, Medical Mycology Journal 2013年；54巻：147-251.
 - 33) 川瀬和秀. Ex-PRESSの術後管理のコツ 緑内障チューブシャント手術, 眼科グラフィック 2013年；2巻：662-667.
 - 34) 川瀬和秀. 緑内障点眼薬の毒性 緑内障に関する最近のトピックス, 眼薬理 2013年；7巻：56-60.
 - 35) 川瀬和秀. 緑内障とロービジョンケア これからのロービジョンケア, 眼科グラフィック 2013年；2巻：44-47.
 - 36) 山本哲也. 眼の充血, 診断と治療 2013年；101巻：271-275.
 - 37) 山本哲也. 高齢者に多い眼疾患の最新の管理: 白内障, 緑内障, 眼底疾患, 岐阜県医師会医学雑誌 2013年；26巻：7-11.
 - 38) 山本哲也. 新しい緑内障手術-チューブシャント手術-, 日本の眼科 2013年；84巻：896-897.
 - 39) 山本哲也. 緑内障チューブシャント手術, 眼科 2013年；55巻：1151-1156.
 - 40) 山本哲也. 濾過胞感染, 眼科 2013年；55巻(臨増)：1346-1349.
 - 41) 石田恭子. 緑内障セミナー EX-PRESS 緑内障フィルトレーションデバイス, あたらしい眼科 2013年；30巻：221-222.
 - 42) 石田恭子. 緑内障セミナー パルベルト緑内障インプラント手術, あたらしい眼科 2013年；30巻：355-356.
 - 43) 石田恭子. 私の緑内障役薬チョイス 6.キサラタン, あたらしい眼科 2013年；30巻：1569-1570.
 - 44) 澤田 明. 眼科医のための先端医療 眼圧値の評価は現行で十分なのか?, あたらしい眼科 2013年；30巻：67-71.
 - 45) 澤田 明. 特集 緑内障性視神経症の鑑別診断 先天性視神経疾患と緑内障, あたらしい眼科 2013年；30巻：1517-1523.
 - 46) 山本哲也. 患者(ひと)はなぜ緑内障で失明するのか? 失明回避に TSUNAGU ために, 臨床眼科 2014年；68巻：277-285.
 - 47) 山本哲也. 濾過胞感染への対応 日本緑内障学会「濾過胞感染多施設共同研究」の成果を受けて, 臨床眼科 2014年；68巻：611-615.
 - 48) 山本哲也. 緑内障 検査が大切, きょうの健康 2014年；11月号：44-48.
 - 49) 山本哲也. 緑内障手術のトピックス, 日本の眼科 2014年；85巻：1563-1564.
 - 50) 山本哲也, 石田恭子. 進行を決定する因子, 眼科 2014年；56巻：1509-1514.
 - 51) 川瀬和秀. 他業種との連携(スマートサイト), OCULISTA【これから始めるロービジョン外来ポイントアドバイス】 2014年；15巻：62-68.
 - 52) 川瀬和秀. 視野計の仕組みと基本的な使い方 Humphrey 視野計 視野検査の最前線, あたらしい眼科 2014年；31巻：929-936.
 - 53) 澤田 明. 高齢者の緑内障診療のポイント 3. 高齢者の隅角検査/細隙灯顕微鏡検査, OCULISTA 2014年；17巻：19-26.
 - 54) 澤田 明. 特集 濾過手術後眼を科学する濾過手術による眼圧下降の特徴-薬物療法との違い(体位変動に着目して)-, 眼科手術 2014年；27巻：485-490.
 - 55) 澤田 明. 眼科診療のエッセンス Q & A II 緑内障と白内障【緑内障編】 Q2 日常診療ではどの眼圧計を用いたらよいでしょうか, あたらしい眼科 2014年；31巻：48-49.

総説 (欧文)

- 1) Yamamoto T. Bleb-related infection: Clinical features and management. Taiwan J Ophthalmol. 2012;2:2-5.

原著 (和文)

- 1) 西田朋美, 鶴岡三恵子, 川瀬和秀, 仲泊 聡, 安藤伸朗. 網膜色素変性症の白内障手術に対する眼科医の意識, 臨床眼科 2012年；66巻：503-508.
- 2) 丹羽義明, 犬塚裕子, 望月清文, 川上秀昭, 近藤雄司, 松波智恵子, 櫻井岳郎. 抗アクアポリン4抗体陽性視神経炎の7例, 眼科 2013年；55巻：71-76.
- 3) 熊田雅子, 熊田充起, 堅田利彦, 近藤雄司, 森 良雄, 勝村直樹, 望月清文, 鶴見 寿, 高見 剛. 結膜病変より濾胞性リンパ腫の診断に至った1例, 眼科 2013年；55巻：837-842.
- 4) 新美佑介, 黒岩真友子, 大家進也, 白木玲子, 望月清文, 大楠清文. 高校入試直前に発症したネコひっかき病の1例, 臨床眼科 2013年；67巻：1289-1294.

- 5) 大家進也, 白木育美, 野村康範, 濱崎利恵, 山本欽一, 末森晋典, 望月清文. 固視眼および斜視の表現型が鏡像を呈した一卵性双生児, 眼科臨床紀要 2013年;6巻:906-909.
- 6) 鶴岡三恵子, 安藤伸朗, 永井春彦, 川瀬和秀, 西田朋美, 仲泊 聡. 全国の眼科教授におけるロービジョンに対する意識の変遷(2011年), 臨床眼科 2013年;67巻:463-467.
- 7) 浅野紀美江, 岡部いづみ, 川瀬和秀. 先天性 Double depressor palsy の 1 症例, 日本視能訓練士協会誌 2013年;41巻:284.
- 8) 村松千左子, 水上篤貴, 畑中裕司, 澤田 明, 原 武史, 山本哲也, 藤田広志. 血管モデルテンプレートマッチングによる眼底画像上の主幹動静脈認識精度の改善, 医用画像情報学会雑誌 2013年;30巻:63-69.
- 9) 堅田利彦, 近藤雄司, 森 良雄, 勝村直樹, 望月清文, 高見 剛. 両下眼瞼結膜に発症したマントル細胞リンパ腫の 1 例, 眼科 2014年;56巻:755-759.
- 10) 諸戸尚也, 望月清文, 宮崎 崇, 大楠清文, 砂田淳子, 浅利誠志, 榎村浩一. 白内障手術創に生じた *Alternaria alternata* による角膜真菌症の 1 例, 眼科 2014年;56巻:761-766.
- 11) 川上秀昭, 青山 陽, 大家進也, 望月清文. 上強膜炎を合併した酒皸性眼症の 2 例, 眼科 2014年;56巻:905-910.
- 12) 西田朋美, 鶴岡三恵子, 川瀬和秀, 仲泊 聡, 永井春彦, 安藤伸朗. ロービジョン検査判断料に対する眼科医の意識調査, 臨床眼科 2014年;68巻:321-327.
- 13) 川瀬和秀, 佐久間仁, 棚橋公郎, 浅野紀美江, 池谷尚剛. 「岐阜ロービジョンケアネットワーク」の準備, 眼科臨床紀要 2014年;7巻:434-437.

原著 (欧文)

- 1) Sawada A, Yamamoto T, Takatsuka N. Randomized crossover study of latanoprost and travoprost in eyes with open-angle glaucoma. *Graef Arch Clin Exp.* 2012;250:123-129. IF 2.333
- 2) Sawada A, Yamamoto T. Correlation between extent of preexisting organic angle closure and long-term outcome after laser peripheral iridotomy in eyes with primary angle closure. *J Glaucoma.* 2012;21:174-179. IF 2.427
- 3) Sawada A, Yamada H, Yamamoto T. Two Japanese cases of pigmentary glaucoma followed for 15 and 16 years after laser peripheral iridotomy. *Jpn J Ophthalmol.* 2012;56:134-137. IF 1.795
- 4) Sawaguchi S, Sakai H, Iwase A, Yamamoto T, Abe H, Tomita G, Tomidokoro A, Araie M. Prevalence of primary angle closure and primary angle-closure glaucoma in a southwestern rural population of Japan. The Kumejima Study. *Ophthalmology.* 2012;119:1134-1142. IF 6.170
- 5) Sawada A, Yamamoto T. Effects of trabeculectomy on posture-induced intraocular pressure changes over time. *Graef Arch Clin Exp.* 2012;250:1361-1366. IF 2.333
- 6) Sawada A, Yamamoto T. Posture-induced intraocular pressure changes in eyes with open-angle glaucoma, primary angle closure with or without glaucoma medications and control eyes. *Invest Ophthalm Vis Sci.* 2012;53:7631-7635. IF 3.661
- 7) Kawase K, Allingham RR, Meguro A, Mizuki N, Roos B, Solivan-Timpe FM, Robin AL, Ritch R, Fingert JH. Confirmation of TBK1 duplication in normal tension glaucoma. *Exp Eye Res.* 2012;96:178-180. IF 3.017
- 8) Mochizuki K, Murase H, Yasuda Y, Suematsu H, Yamagishi Y, Mikamo H. Discrepancy of in-vitro data and clinical efficacy of micafungin against *Candida tropicalis* endophthalmitis. *J Infect Chemother.* 2012;18:786-789. IF 1.384
- 9) Mochizuki K, Shiraki I, Murase H, Ohkusu K, Nishimura K. Identification and sensitivity of two rare fungal species isolated from two patients with *Fusarium* keratomycosis. *J Infect Chemother.* 2012;18:939-944. IF 1.384
- 10) Ishijima K, Namba K, Ohno S, Mochizuki K, Ishida S. Intravitreal Injection of Bevacizumab in a Case of Occlusive Retinal Vasculitis Accompanied by Syphilitic Intraocular Inflammation. *Case Rep Ophthalmol.* 2012;3:434-437.
- 11) Yamamoto T, Kuwayama Y, Kano K, Sawada A, Shoji N, The Study Group for the Japan Glaucoma Society Survey of Bleb-related Infection. Clinical features of bleb-related infection: A 5-year survey in Japan. *Acta Ophthalmol.* 2013;91:619-624. IF 2.512
- 12) Yamamoto T, Kuwayama Y, Nomura E, Tanihara H, Mori K; The Study Group for the Japan Glaucoma Society Survey of Bleb-related Infection. Changes in visual acuity and intraocular pressure following bleb-related infection: the Japan Glaucoma Society Survey of Bleb-related Infection Report 2. *Acta Ophthalmol.* 2013;91:e420-e426. IF 2.512
- 13) Inuzuka H, Kawase K, Sawada A, Aoyama Y, Yamamoto T. Macular retinal thickness in glaucoma with superior or inferior visual hemifield defects. *J Glaucoma.* 2013;22:60-64. IF 2.427
- 14) Tanihara H, Inoue T, Yamamoto T, Kuwayama Y, Abe H, Araie M; K-115 Clinical Study Group. Phase 2 randomized clinical study of a Rho kinase inhibitor, K-115, in primary open-angle glaucoma and ocular hypertension. *Am J Ophthalmol.* 2013;156:731-736. IF 4.021
- 15) Minegishi Y, Iejima D, Kobayashi H, Chi ZL, Kawase K, Yamamoto T, Seki T, Yuasa S, Fukuda K, Iwata T. Enhanced Optineurin E50 K-TBK1 interaction evokes protein insolubility and initiates familial primary open-angle glaucoma. *Hum Mol Genet.* 2013;22:3559-3567. IF 6.677

- 16) Kato T, Meguro A, Nomura E, Uemoto R, Nomura N, Ota M, Kashiwagi K, Mabuchi F, Iijima H, Kawase K, Yamamoto T, Nakamura M, Negi A, Sagara T, Nishida T, Inatani M, Tanihara H, Aihara M, Araie M, Fukuchi T, Abe H, Higashide T, Sugiyama K, Kanamoto T, Kiuchi Y, Iwase A, Chin S, Ohno S, Inoko H, Mizuki N. Association study of genetic variants on chromosome 7q31 with susceptibility to normal tension glaucoma in a Japanese population. *Eye (Lond)*. 2013;27:979-983. IF 1.897
- 17) Tanihara H, Inoue T, Yamamoto T, Kuwayama Y, Abe H, Araie M; K-115 Clinical Study Group. Phase 1 clinical trials of a selective Rho kinase inhibitor, K-115. *JAMA Ophthalmol*. 2013;131:1288-1295.
- 18) Mochizuki K, Niwa Y, Ishida K, Kawakami H. Intraocular penetration of itraconazole in patient with fungal endophthalmitis. *Int Ophthalmol*. 2013;33:579-581.
- 19) Mochizuki K, Sawada A, Suemori S, Kawakami H, Niwa Y, Kondo Y, Ohkusu K, Yamada N, Ogura S, Yaguchi T, Nishimura K, Kishino S. Intraocular Penetration of Intravenous Micafungin in Inflamed Human Eyes. *Antimicrob Agents Ch*. 2013;57:4027-4030. IF 4.451
- 20) Sawada A, Komori S, Udo K, Suemori S, Mochizuki K, Yasuda M, Ohkusu K. Case of endogenous endophthalmitis caused by *Klebsiella pneumoniae* with *magA* and *rmpA* genes in an immunocompetent patient. *J Infect Chemother*. 2013;19:326-329. IF 1.384
- 21) Sawada A, Oie S, Mochizuki K, Yamamoto T. Anterior ischemic optic neuropathy in patient with hereditary spherocytosis and coexisting angioid streaks. *Eur J Ophthalmol*. 2013;23:132-134. IF 1.058
- 22) Yamada H, Takahashi N, Hori N, Asano Y, Mochizuki K, Ohkusu K, Nishimura K. Rare case of fungal keratitis caused by *Corynespora cassiicola*. *J Infect Chemother*. 2013;19:1167-1169 IF 1.384
- 23) Nishida T, Sawada A, Mochizuki K, Niwa Y, Hayakawa K. Case of acquired night blindness in a hemodialysis patient. *Can J Ophthalmol*. 2013;48:148-151. IF 1.299
- 24) Ishida K. Update on results and complications of cyclophotocoagulation. *Curr Opin Ophthalmol*. 2013;24:102-110. IF 2.638
- 25) Sawada A, Yamamoto T. Comparison of posture-induced intraocular pressure changes in medically-treated and surgically-treated eyes with open angle glaucoma. *Invest Ophth Vis Sci*. 2014;55:446-450. IF 3.661
- 26) Inuzuka H, Kawase K, Yamada H, Ohie S, Kokuzawa S, Yamamoto T. Macular ganglion cell complex thickness in glaucoma with superior or inferior visual hemifield defects. *J Glaucoma*. 2014;23:145-149. IF 2.427
- 27) Yamamoto T, Sawada A, Mayama C, Araie M, Ohkubo S, Sugiyama K, Kuwayama Y; The Collaborative Bleb-related Infection Incidence and Treatment Study Group. The 5-year incidence of bleb-related infection and its risk factors following filtering surgeries with adjunctive mitomycin C: Collaborative Bleb-related Infection Incidence and Treatment Study 2. *Ophthalmology*. 2014;121:1001-1006. IF 6.170
- 28) Ritch R, Darbro B, Menon G, Khanna CL, Solivan-Timpe F, Roos BR, Sarfarzi M, Kawase K, Yamamoto T, Robin AL, Lotery AJ, Fingert JH. *TBK1* gene duplication and normal-tension glaucoma. *JAMA Ophthalmol*. 2014;132:544-548.
- 29) Lin W, Lu Y, Xu Y, He W, Kawase K, Yamamoto T, Shimazawa M, Hara H. Effect of anti-glaucoma ophthalmic solutions on cultured human conjunctival cells. *Chin J Pract Ophthalmol*. 2014;32:512-516.
- 30) Muramatsu C, Hatanaka Y, Ishida K, Sawada A, Yamamoto T, Fujita H. Preliminary study on differentiation between glaucomatous and non-glaucomatous eyes on stereo fundus images using cup gradient models. *Proceedings of SPIE*. 2014;9035:903533-1-903533-6.
- 31) Yamamoto S, Sawaguchi S, Iwase A, Yamamoto T, Abe H, Tomita G, Tomidokoro A, Araie M. Primary open-angle glaucoma in a population associated with high prevalence of primary angle-closure glaucoma. The Kumejima Study. *Ophthalmology*. 2014;121:1558-1565. IF 6.170
- 32) Sawada A, Yamamoto T. Switching efficacy on intraocular pressure from latanoprost to bimatoprost in eyes with open angle glaucoma: implication to the changes of central corneal thickness. *Jpn J Ophthalmol*. 2014;58:423-428. IF 1.795
- 33) Sawada A, Yamada H, Yamamoto Y, Yamamoto T. Intraocular pressure alteration after visual field testing. *Jpn J Ophthalmol*. 2014;58:429-434. IF 1.795
- 34) Yamada H, Sawada A, Kuwayama Y, Yamamoto T. Blindness following bleb-related infection in open angle glaucoma. *Jpn J Ophthalmol*. 2014;58:490-495. IF 1.795
- 35) Komori S, Ishida K, Yamamoto T. Results of long-term monitoring of normal-tension glaucoma patients receiving medical therapy: results of an 18-year mean follow-up. *Graef Arch Clin Exp*. 2014;252:1963-1970. IF 2.333
- 36) Suemori S, Sawada A, Shiraki I, Mochizuki K. Stickler syndrome type 1 accompanied by membranous vitreous anomaly in two Japanese sisters. *Semin Ophthalmol*. 2014;29:45-47. IF 1.196
- 37) Mataka M, Murata H, Sawada A, Yamamoto T, Shigeeda T, Araie M. Visual field progressive rate in normal tension glaucoma before and after trabeculectomy: A subfield-based analysis. *The Asia-Pacific Journal of Ophthalmology*. 2014;3:263-266.
- 38) Oie S, Sawada A, Mochizuki K, Tsuji K, Hirose Y, Yoshikawa H, Saigo C. Case of recurrence of spiradenoma in palpebral conjunctiva. *BMC Ophthalmol*. 2014;14:85. IF 1.075
- 39) Kawakami H, Inuzuka H, Mochizuki K, Muto T, Ohkusu K, Yaguchi T, Yamagishi Y, Mikamo H. Case of keratitis caused by *Streptomyces thermocarboxydus*. *J Infect Chemother*. 2014;20:57-60. IF 1.384

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：山本哲也，研究分担者：川瀬和秀，澤田 明，望月清文；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：緑内障の治療予後改善による失明の予防；平成 23-25 年度；4,000 千円(1,800：1,300：900 千円)
- 2) 研究代表者：山本哲也，研究分担者：川瀬和秀，澤田 明，望月清文，石田恭子，石澤聡子；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：緑内障による失明の予防に関する包括的研究；平成 25-27 年度；3,800 千円(1,300：1,600：900 千円)

2) 受託研究

- 1) 石田恭子：バルベルト緑内障インプラント使用成績調査；平成 24-28 年度；525 千円(147：378 千円)；エイエムオー・ジャパン
- 2) 石田恭子：エクスプレス緑内障フィルトレーションデバイス使用成績調査；平成 24-29 年度；6,720 千円(1,680：5,040 千円)；日本アルコン(株)

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

山本哲也：

- 1) 日本眼科学会理事(～現在)
- 2) 日本眼科学会戦略企画会議第四委員会委員長(～現在)
- 3) 日本眼科学会専門医制度生涯教育委員会専門委員(～現在)
- 4) 日本緑内障学会理事長(平成 26 年～現在)
- 5) 日本緑内障学会理事(～現在)
- 6) 日本緑内障学会評議員(～現在)
- 7) 日本緑内障学会データ解析委員会委員(～現在)
- 8) 日本緑内障学会将来計画検討委員会委員(～現在)
- 9) 日本眼薬理学会評議員(～現在)
- 10) World Glaucoma Association, Cochairman of the WGA Committee on Global Research and Screening(～現在)
- 11) World Glaucoma Association, Member of the WGA Code of Practice Committee(～現在)
- 12) Asian Angle-closure Glaucoma Club, President(～平成 24 年)
- 13) South Asia Glaucoma Interested Group, board member(～平成 25 年)

川瀬和秀：

- 1) 日本緑内障学会評議員(～現在)
- 2) 日本ロービジョン学会評議員(～現在)
- 3) 日本眼薬理学会評議員(～現在)
- 4) 日本 IHE 協会眼科委員(～現在)

石田恭子：

- 1) 日本緑内障学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

山本哲也：

- 1) Japanese Journal of Ophthalmology ; Executive Editor(～現在)
- 2) Asian Journal of Ophthalmology ; Editor(～現在)
- 3) 日本眼科学会雑誌；編集委員(～平成 25 年)
- 4) あたらしい眼科；編集委員(～現在)
- 5) 岐阜県医師会医学雑誌；編集委員(～現在)
- 6) Korean Journal of Ophthalmology ; Advisory Editorial Board Member(～現在)
- 7) Taiwan Journal of Ophthalmology ; International Editorial Board Member(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

山本哲也：

- 1) 第 1 回 New Year Ophthalmic Seminar 2012 in 東海(平成 24 年 1 月, 名古屋, 招待講演「緑内障ガイドライン第 3 版改訂について」演者)
- 2) 第 33 回岐阜県医師会メディカルセミナー「高齢化社会に対応できる医療」(平成 24 年 1 月, 岐阜, 招待講演「高齢者に多い眼疾患の最新の管理 白内障、緑内障、眼底疾患」演者)
- 3) WOC2012(2012.02, Abu Dhabi UAE, Complications: GDDs versus trabeculectomy. SEAGIG symposium “Glaucoma Drainage Devices”; Invited speaker)
- 4) WOC2012(2012.02, Abu Dhabi UAE, Clinical significance of bleb-related infection. Symposium “Wound Management and Bleb Problems”; Invited speaker)
- 5) 第 8 回京大眼科 Focus on Glaucoma(平成 24 年 2 月, 京都, 招待講演「正常眼圧緑内障とは何か?」演者)
- 6) 第 16 回千葉緑内障研究会(平成 24 年 3 月, 千葉, 招待講演「緑内障診療ガイドライン再改訂 緑内障診療のあり方をどう変えるのがよいか?」演者)
- 7) 第 5 回 緑内障ワークショップ in 中部(平成 24 年 3 月, 名古屋, 招待講演「新しい緑内障手術」演者)
- 8) 多治見市「眼の健康講座」(平成 24 年 3 月, 多治見, 招待講演「成人に多い目の病気」演者)
- 9) 眼科診療アップデートセミナー2012 in 京都(平成 24 年 3 月, 京都, 依頼講演「緑内障ガイドライン(視野を含む)」演者)
- 10) Pfizer Glaucoma Caravan in 札幌(平成 24 年 3 月, 札幌, 特別講演「ここが変わった! 緑内障診療ガイドライン」演者)
- 11) Pfizer Glaucoma Symposium in 九州(平成 24 年 3 月, 福岡, 特別講演「診断および手術 新ガイドラインより」演者)
- 12) APAO/SOE 2012 (2012.04, Busan Korea, Glaucoma screening and prevention in Asia-Pacific region: cost-effective? possible? symposium “Ocular disorders in the elderly – epidemiology, implications and management”; Invited speaker)
- 13) APAO/SOE 2012 (2012.04, Busan Korea, Long-term outcome of pediatric glaucoma. symposium “Pediatric glaucoma”; Invited speaker)
- 14) 第 116 回日本眼科学会総会イブニングセミナー4 (平成 24 年 4 月, 東京, 依頼講演「正常眼圧緑内障の眼圧下降治療を正当化するエビデンス」演者)
- 15) 第 1 回日本視野学会(平成 24 年 5 月, 多治見, シンポジウム・スクリーニング「眼疾患スクリーニング検査の現状—多治見からの考察」シンポジスト)
- 16) 第 9 回宮城県セミナー(平成 24 年 5 月, 仙台, 招待講演「これからの緑内障診療 新規手術器具使用開始と緑内障ガイドライン再改訂を経て」演者)
- 17) 平成 24 年度九州ブロック眼科講習会「眼科薬物治療の進歩」(平成 24 年 5 月, 福岡, 招待講演「緑内障薬物治療の進歩と将来」演者)
- 18) 東海地区ファイザーテレフォンカンファレンス(平成 24 年 6 月, 岐阜, 依頼講演「緑内障診療ガイドラインに基づいた緑内障の管理」演者)
- 19) 第 119 回山口県眼科医会春季集談会(平成 24 年 6 月, 山口, 特別講演「最近の緑内障手術の考え方」演者)
- 20) 第 27 回日本白内障屈折矯正手術学会総会(平成 24 年 6 月, 東京, イブニングセミナー1「行列のできる白内障手術相談所 2012」コメンテーター)
- 21) 第 136 回岐阜大学眼科学教室症例検討会(平成 24 年 6 月, 岐阜, 教育講演「隅角鏡による隅角検査

- のコツ」演者)
- 22) 目の健康講座 2012 in みえ(平成 24 年 6 月, 津, 招待講演「緑内障は怖くない」演者)
 - 23) 第 12 回神奈川眼科セミナー(平成 24 年 6 月, 横浜, 特別講演「診療ガイドライン改訂を受けてどうすべきか」演者)
 - 24) Aiphagan 新発売記念講演会 in 東京(平成 24 年 8 月, 東京, 招待講演「緑内障薬物治療の現在・過去・将来」演者)
 - 25) Pfizer Glaucoma Caravan in 東海(平成 24 年 8 月, 名古屋, 教育講演「チューブシャント手術の位置付け」演者)
 - 26) GRS2012(2012.09, Wurzburg, Germany, Surgical considerations in the myopic or NTG eye ; Invited speaker)
 - 27) 第 23 回日本緑内障学会(平成 24 年 9 月, 金沢, データ解析委員会特別セッション「日本緑内障学会濾過胞感染多施設共同研究 2 研究の現状」演者)
 - 28) 第 23 回日本緑内障学会(平成 24 年 9 月, 金沢, 「ビマトプロスト点眼液使用成績調査の中間報告」演者)
 - 29) The 9th Japan-Taiwan Ophthalmology Joint Meeting(2012.10, Kyoto Japan, The current understanding of glaucoma filtering surgery ; 特別講演演者)
 - 30) 第 66 回日本臨床眼科学会(平成 24 年 10 月, 京都, インストラクションコース 25「隅角鏡検査のコツ. 原発閉塞隅角緑内障診療入門 ~閉塞隅角、ちゃんと診断できますか?」インストラクター)
 - 31) 第 66 回日本臨床眼科学会(平成 24 年 10 月, 京都, シンポジウム 9「日本緑内障学会による濾過胞感染多施設共同研究我が国の眼感染症の現状: 多施設共同研究の Evidence」シンポジスト)
 - 32) 第 3 回福島臨床眼科講演会(平成 24 年 10 月, 郡山, 特別講演「緑内障手術の最新の考え方」演者)
 - 33) 第 66 回日本臨床眼科学会 (平成 24 年 10 月, 京都, ランチョンセミナー28「近視と緑内障: 診断、管理、手術」セミナー講師)
 - 34) 第 66 回日本臨床眼科学会(平成 24 年 10 月, 京都, 依頼講演・市民公開講座「緑内障と上手に付き合うには」演者)
 - 35) AAO2012(2012.11, Chicago USA, Prognosis of PAC/PACG. Instruction Course 417 ; Course instructor)
 - 36) APGC2012(2012.12, Bali Indonesia, Prognosis of PACG after laser iridotomy and trabeculotomy. ACG symposium ; Symposist)
 - 37) The 8th International Symposium of Ophthalmology - Hong Kong(2012.12, Hong Kong, Clinical significance of disc hemorrhage in OAG. Symposium “Glaucoma – What we know & do not know in 2012” ; Symposist)
 - 38) APAO2013(2013.01, Hyderabad, India, APGS symposium: Prognosis of PAC/PACG; symposist)
 - 39) 第 36 回日本眼科手術学会(平成 25 年 1 月, 福岡, イブニングセミナー「アルコンエクस्प्रेस使用のコツと臨床的役割」演者)
 - 40) 第 117 回日本眼科学会総会(平成 25 年 4 月, 東京, 教育セミナー 総括緑内障の基本「緑内障の歴史－手術を核として－」演者)
 - 41) The 5th World Glaucoma Congress(2013.07, Vancouver, Canada, Course: Advances in understanding and management of angle closure: Long-term prognosis and complications of laser iridotomy; Invited speaker)
 - 42) AACGC2013(2013.07, Singapore, ACG symposium: Genetics of ACG; panelist)
 - 43) The 5th World Glaucoma Congress(2013.07, Vancouver, Canada, Glaucoma Grand Rounds; Panelist)
 - 44) 第 24 回日本緑内障学会(平成 25 年 9 月, 東京, 特別セッション「日本緑内障学会濾過胞感染研究班: 濾過胞感染多施設共同研究 感染以外の成績と現状報告」演者)
 - 45) 第 24 回日本緑内障学会(平成 25 年 9 月, 東京, シンポジウム「後期緑内障の管理」シンポジスト)
 - 46) 第 67 回日本臨床眼科学会(平成 25 年 10 月, 横浜, 特別講演「患者(ひと)はなぜ緑内障で失明するのか? 失明回避に TSUNAGU ために。」演者)
 - 47) 第 67 回日本臨床眼科学会(平成 25 年 10 月, 横浜, イブニングセミナー「EX-PRESS 私の使用経験レビュー Alcon EX-PRESS で良い結果を得るために」演者)
 - 48) AAO2013(2013.11, New Orleans, USA, Instruction Course: Prognosis of PAC/PACG; speaker)
 - 49) The 10th Japan-Taiwan Joint Meeting of Ophthalmology.(2013.12, Taipei, Taiwan: Conversion of preperimetric glaucoma to perimetric one in three years; Invited speaker)

- 50) ファイザーWeb シンポジウム(平成 26 年 1 月, 岐阜市から全国と交信, 招待講演「緑内障で治療を強化すべき時。」 演者)
- 51) 第 1 回雪明・新潟眼科フォーラム(平成 26 年 2 月, 新潟, 依頼講演「緑内障で手術を極める」 演者)
- 52) The 7th International Congress on Glaucoma Surgery(2014.02, Singapore, Current status and the future of laser therapy in glaucoma; invited speaker)
- 53) 新・眼科診療アップデートセミナー 2014 in Kyoto(平成 26 年 3 月, 京都, 依頼講演「原発緑内障：進行決定因子」 演者)
- 54) 名古屋大学大学院医学系研究科市民公開講座(平成 26 年 3 月, 名古屋, 依頼公演「緑内障との正しい付き合い方」 演者)
- 55) WOC2014Tokyo(2014.4, Tokyo, K-115 Clinical Study Group. Phase 3 randomized clinical study of a Rho kinase inhibitor, K-115, in primary open angle glaucoma and ocular hypertension; speaker)
- 56) WOC2014Tokyo(2014.4, Tokyo, Symposium “World Glaucoma Week - A global attempt to improve glaucoma awareness” The Japanese Experience; invited speaker)
- 57) WOC2014Tokyo(2014.04, Tokyo, Glaucoma symposium “Glaucoma Surgery: Where Do We Stand?” Trabeculectomy updates - Can we save the glaucoma eye?; invited speaker)
- 58) WOC2014Tokyo(2014.04, Tokyo, Glaucoma symposium “Asia-Pacific Glaucoma Society - Glaucoma Drainage Surgery” Other complications, their prevention and management; invited speaker)
- 59) 第 118 回日本眼科学会総会(平成 26 年 4 月, 東京, ランチセミナー47「有用な視野を保つための緑内障の生涯管理」 演者)
- 60) 緑内障完全制覇(平成 26 年 6 月, 岡山, 特別講演「緑内障の疫学・進行因子・経過について知ろう！」 演者)
- 61) 11th EGS Congress, Course “Recent advances in normal tension glaucoma – Part II”.(2014.06, Nice, France, Surgical treatment of normal tension glaucoma.; invited speaker)
- 62) Allergan Asia-Pacific Glaucoma Summit Meeting.(2014.06, Beijing, China, Epidemiology and diagnosis of normal tension glaucoma.; invited speaker)
- 63) Allergan Asia-Pacific Glaucoma Summit Meeting.(2014.06, Beijing, China, Diagnosis of primary angle closure disease.; invited speaker)
- 64) International Holistic Integrated Glaucoma Conference.(2014.06, Beijing, China, Relationship between glaucoma and collagen diseases.; invited speaker)
- 65) 第 3 回紀南講演会(平成 26 年 8 月, 尾鷲, 特別講演「最新の緑内障診断と治療」 演者)
- 66) 第 35 回東海緑内障の会(平成 26 年 8 月, 名古屋, 教育講演「緑内障眼の高度視機能障害とその対策」 演者)
- 67) Senju Glaucoma Forum in Osaka(平成 26 年 8 月, 大阪, 特別講演「緑内障の治療を楽しく行うために」 演者)
- 68) 第 3 回千駄木オフサルミックセミナー(平成 26 年 9 月, 東京, 特別講演「緑内障診療 病診連携の考え方」 演者)
- 69) The 2nd APGC, Glaucoma symposium “NTG update”(2014.09, Hong Kong, Surgical outcome of normal tension glaucoma; invited speaker)
- 70) The 2nd APGC, Lunch Time symposium “Glaucoma management from medical and surgical perspective”(2014.09, Hong Kong, Panel discussion of case studies: -When do we decide to conduct surgery?;- invited speaker)
- 71) 第 8 回北陸オフサルミックフォーラム(平成 26 年 10 月, 金沢, 招待講演「開放隅角緑内障の治療選択：私論」 演者)
- 72) 第 5 回北海道眼科臨床セミナー(平成 26 年 10 月, 札幌, 招待講演「私流、開放隅角緑内障の治し方」 演者)
- 73) 日本医師会市民公開フォーラム(平成 26 年 10 月, 東京, 「気づきにくい目の病気～緑内障・白内障・加齢黄斑変性～」パネリスト)
- 74) AAO2014.(2014.10, Chicago, USA, Instruction Course 184: Prognosis of PAC/PACG: Outcome of laser iridotomy; senior instructor)
- 75) 第 1 回和歌山眼科アカデミー(平成 26 年 10 月, 和歌山, 特別講演「緑内障管理のコツ」 演者)
- 76) ビジョンケアセミナー2014(平成 26 年 10 月, 東京, 招待講演「緑内障の 10 年の軌跡と未来」 演者)

- 77) 第 68 回日本臨床眼科学会(平成 26 年 11 月, 神戸, インストラクションコース 53 原発閉塞隅角緑内障の治療戦略 - 中級編 - 「PAC/PACG の疫学」インストラクター)
- 78) 第 2 回屋久島地域医療連携研究会(平成 26 年 11 月, 鹿児島, 招待講演「見逃すと怖い眼疾患あれこれ」演者)
- 79) 緑内障 Web カンファレンス(平成 26 年 12 月, 大阪市から全国と交信, 依頼公演「緑内障薬物治療を語る」演者)

川瀬和秀 :

- 1) 第 35 回日本眼科手術学会(平成 24 年 1 月, 名古屋, 教育セミナー・眼科術者にとって必要なロービジョンケアの知識「最近のデジタルロービジョンケア」・オーガナイザー+シンポジスト)
- 2) WOC2012(2012.02, Abu Dhabi UAE, The protective effect of ginkgo bilobaextract on cultured retinal ganglion cells ; Poster presentation.)
- 3) 第 424 回東海眼科学会(平成 24 年 2 月, 名古屋, 座長)
- 4) 第 17 回岐阜手術の会(平成 24 年 2 月, 岐阜, 座長)
- 5) 第 116 回日本眼科学会総会(平成 24 年 4 月, 東京, 教育セミナー・前眼部画像解析時代の隅角検査の意義「隅角検査のポイント」演者)
- 6) AACGC(2012.08, Ulaanbaatar Mongol, 招待講演「Phaco-Trabeculotomy for PACG」演者)
- 7) 第 32 回日本眼薬理学会(平成 24 年 9 月, 大津, 座長)
- 8) 第 32 回日本眼薬理学会(平成 24 年 9 月, 大津, シンポジウム・緑内障に関する最近のトピックス「緑内障点眼薬の毒性」シンポジスト)
- 9) 第 23 回日本緑内障学会(平成 24 年 9 月, 金沢, ナーシングプログラム「緑内障の基本、介助、手術／処置 緑内障患者さんとの接し方」オーガナイザー)
- 10) Taiwan Academy of Ophthalmology(2012.10, 台湾 高雄, 招待講演「Glaucoma Medication for early glaucoma」演者)
- 11) 台湾大学セミナー(2012.10, 台湾 台北, レクチャー「Glaucoma Medication for early glaucoma」演者)
- 12) 第 36 回日本眼科手術学会総会(平成 25 年 1 月, 福岡, 教育セミナー「眼科術者にとって必要なロービジョンケアの知識 - サージャンとロービジョン検査判断料 - 」オーガナイザー)
- 13) 第 36 回日本眼科手術学会総会(平成 25 年 1 月, 福岡, 教育セミナー「視覚障害者用補装具適合判定医師研修会」シンポジスト)
- 14) 第 24 回日本緑内障学会(平成 25 年 9 月, 東京, コメディカルプログラム「視野の基礎、取り方の実際」オーガナイザー)
- 15) 第 37 回日本眼科手術学会総会(平成 26 年 1 月, 京都, 学術展示 緑内障①「濾過手術」座長)
- 16) 第 427 回東海眼科学会(平成 26 年 2 月, 名古屋, 座長)
- 17) 第 19 回岐阜眼科手術の会(平成 26 年 2 月, 岐阜, 座長)
- 18) 岐阜県眼科医会講習会(平成 26 年 2 月, 岐阜, 座長)
- 19) 大連医科大学講演会(平成 26 年 4 月, 大連, 招待講演「The effect of human cultured conjunctiva cells by anti glaucoma eye drops」演者)
- 20) 岐阜県眼鏡協会講演会(平成 26 年 5 月, 岐阜, 招待講演「岐阜うかいネットと眼鏡士」演者)
- 21) 第 428 回東海眼科学会(平成 26 年 6 月, 岐阜, 座長)
- 22) 第 34 回日本眼薬理学会(平成 26 年 9 月, 岐阜, シンポジウム I, 座長)
- 23) 13th Congress of the international society of ocular toxicology(2014.09, KANAZAWA, 招待講演「The effect of human cultured conjunctiva cells by anti-glaucoma eye drops.」演者)
- 24) 13th Congress of the international society of ocular toxicology(2014.09, KANAZAWA, シンポジウム「preservative related studies」座長)
- 25) 第 25 回日本緑内障学会(平成 26 年 10 月, 大阪, 一般講演「薬物」座長)

澤田 明 :

- 1) 第 3 回北勢眼科セミナー(平成 24 年 3 月, 四日市, 招待講演「緑内障関連最新のトピックス～薬物療法を中心に～」演者)
- 2) 第 116 回日本眼科学会(平成 24 年 4 月, 東京, 招待講演「サブスペシャリティサンデー6 緑内障薬物治療のアップデート 3. 具体的戦略 1: 発見早期の薬物選択法」シンポジスト)
- 3) The 9th Meeting of Asian Angle-Closure Glaucoma Club (平成 24 年 8 月, Ulaanbaatar, Mongolia,

招待講演「Long-term therapeutic outcome after laser peripheral iridotomy in eyes with chronic primary angle closure」シンポジスト)

- 4) 岐阜県眼科医会総会(平成 25 年 2 月, 岐阜, 特別講演「眼圧体位変動」演者)
- 5) The 24th Seoul Ophthalmology Symposium(2013.03, Seoul, Posture-induced intraocular pressure changes; Invited speaker)
- 6) Glaucoma Seminar 2013 in Seattle(2013.05, Seattle, USA, 招待講演「『緑内障 ～眼圧下降治療のエビデンスと神経保護治療の可能性～』ビマトプロストの眼圧下降効果～臨床面からの評価」演者)
- 7) 第 12 回尾張病診連携(平成 25 年 6 月, 小牧, 招待講演「PG 関連薬の使い分け」演者)
- 8) 第 24 回日本緑内障学会(平成 25 年 9 月, 東京, シンポジウム「鑑別: NTG と視神経疾患 先天性視神経疾患と正常眼圧緑内障」シンポジスト)
- 9) 第 25 回日本緑内障学会(平成 26 年 9 月, 大阪, イブニングセミナー5「最新の緑内障診療の動向を知ろう」演者)
- 10) The 2nd asia-pacific glaucoma congress. (2014.09, Hong Kong, China, 招待講演「Newer options and challenges in IOP measurement and teleophthalmology」シンポジスト)
- 11) 第 68 回日本臨床眼科学会(平成 26 年 11 月, 神戸, シンポジウム「濾過手術による生体反応」シンポジスト)

石田恭子:

- 1) 第 35 回日本眼科手術学会(平成 24 年 1 月, 名古屋, 教育セミナー・緑内障に対するレーザー治療「代表的な術式の適応と基本手技」シンポジスト)
- 2) 第 35 回日本眼科手術学会(平成 24 年 1 月, 名古屋, シンポジウム ミニシャント(EX-PRESS)の位置づけ「注目を浴びるチューブシャント手術」シンポジスト)
- 3) 札幌眼科集団会(平成 24 年 3 月, 札幌, 招待講演「正常眼圧緑内障 update」演者)
- 4) 第 4 回スリーリバーズ眼科フォーラム(平成 24 年 3 月, 岐阜, 招待講演「緑内障の新しい術式～チューブシャント手術～」演者)
- 5) 第 116 回日本眼科学会総会(平成 24 年 4 月, 東京, イブニングセミナー「濾過手術における新しい緑内障フィルトレーションデバイスの臨床的意義」演者)
- 6) 静岡県緑内障診断治療の会(平成 24 年 4 月, 静岡, 招待講演「緑内障診療における OCT の活用と薬物治療」演者)
- 7) 第 5 回 Friday Night Seminar(平成 24 年 5 月, 三重, 招待講演「緑内障の新しい術式」演者)
- 8) 第 10 回長野県眼科学術講演会(平成 24 年 5 月, 軽井沢, 招待講演「新しい緑内障手術～インプラント手術 EX-PRESS～」演者)
- 9) 第 425 回東海眼科学会(平成 24 年 6 月, 浜松, 指名講演「緑内障手術 topics-インプラント手術」演者)
- 10) 第 7 回京滋緑内障診療フォーラム(平成 24 年 6 月, 京都, 招待講演「OCT による緑内障診断と治療」演者)
- 11) 第 2 回 GSC 青森(平成 24 年 7 月, 青森, 招待講演「新しい緑内障手術ーチューブシャント手術」演者)
- 12) 宝塚市眼科医勉強会(平成 24 年 7 月, 宝塚, 招待講演「緑内障診断ガイドラインー薬物治療」演者)
- 13) 第 19 回三河眼科研究会(平成 24 年 8 月, 愛知, 招待講演「緑内障における OCT 活用法と緑内障治療」演者)
- 14) 第 23 回日本緑内障学会(平成 24 年 9 月, 金沢, イブニングセミナー「緑内障イメージング 緑内障以外の視神経疾患」演者)
- 15) 第 23 回日本緑内障学会(平成 24 年 9 月, 金沢, ランチョンセミナー「実践! ALCON EX-PRESS Glaucoma Filtration Device 併用濾過手術」演者)
- 16) 第 6 回 Nagoya Eye Surgery Seminar (平成 24 年 10 月, 愛知, 招待講演「新しい緑内障手術術式ーチューブシャント手術の実際ー」演者)
- 17) 第 3 回静岡県オフサルミックセミナー(平成 24 年 10 月, 静岡, セミナー「緑内障インプラント手術とその位置付け」演者)
- 18) 第 66 回日本臨床眼科学会(平成 24 年 10 月, 京都, ランチョンセミナー「あなたならどうする? 緑内障治療編」演者)
- 19) 第 36 回日本眼科手術学会総会(平成 25 年 1 月, 福岡, ランチョンセミナー「緑内障ガイドラインを復習しませんか? ガイドラインを踏まえた薬物治療」演者)

- 20) 第 36 回日本眼科手術学会総会(平成 25 年 1 月, 福岡, モーニングセミナー「緑内障治療の新しいものどう使う?いつ使う? インプラント手術どう使う?いつ使う?」 演者)
- 21) 第 24 回日本緑内障学会(平成 25 年 9 月, 東京, イブニングセミナー「徹底生討論 緑内障治療の功罪 緑内障手術の功罪トラベクトミー」 演者)
- 22) 第 29 回日本視機能看護学会(平成 25 年 9 月, 富山, ランチョンセミナー「緑内障濾過手術とアルコネクस्पレス使用のポイント」 演者)
- 23) 第 7 回北陸オフサルミックフォーラム(平成 25 年 9 月, 金沢, 講演会「緑内障ガイドラインを踏まえた薬物療法」 演者)
- 24) 第 67 回日本臨床眼科学会(平成 25 年 11 月, 横浜, インストラクションコース「緑内障チューブシヤント手術の適応 血管新生緑内障 tube or not tube」 演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

山本哲也:

- 1) 日本失明予防協会研究助成選考委員会委員(～現在)
- 2) 岐阜県社会福祉審議会委員(～現在)
- 3) 岐阜市社会福祉審議会委員(～現在)
- 4) 国民年金障害審査委員(～現在)
- 5) 岐阜県ジンアイバンク協会副理事長(～現在), 理事(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

ここ数年間はほぼ毎年複数名の新入局者を迎え入れることができている。しかしながら、眼科学の進歩に伴う臨床業務量の増加に対して現在の医局員数は少ないと言わざるを得ない。その中で、臨床的活動、学会活動、論文作成など努力を十分に重ね一定の成果をあげていると自己評価する。

現状の問題点及びその対応策

臨床業務時間の相対的増加により、医学研究に充てる時間が減少した。このため、臨床業務に制限を設け、相対的に研究時間の増加について模索している。また、岐阜大学のほかの基礎講座や他研究機関と共同研究の促進などを行っている。

今後の展望

よりよい研究成果を求める上で、医師ひとりひとりの臨床業務にゆとりを持たせることは絶対的に必要である。したがって今後とも医局員の人数を確保することがそれを達成する上で必要不可欠であると考える。

(9) 脳病態解析学（連携大学院）分野

1. 研究の概要

交通事故による脳損傷に起因する遷延性意識障害をはじめとする各種脳疾患の病態解析，診断，治療を目的とした研究領域において，国立大学法人岐阜大学，独立行政法人自動車事故対策機構，社会医療法人厚生会木沢記念病院はそれぞれが有する人材，機器，手法を有機的に融合させ国際的に先導できる学術的分野の開発を目指し，本連携大学院が中部療護センターに設置されました。医師を含めた医療関係者を対象に大学院生として医学博士取得を目的とした教育と研究（博士課程）を行ないます。PET（FDG, methionine, choline, DOPA, H₂O, CO₂, PIB等のトレーサーを使用），3T MRI（通常画像，MRS, fMRI, tensor image, ADC等），SPECTを用いた画像の解析を主軸に，頭部外傷後遷延性意識障害および高次脳機能障害患者の脳の形態と脳代謝機能の評価，頭部外傷後遷延性意識障害および高次脳機能障害患者の治療（リハビリテーション，薬物，外科的介入）効果の評価，脳腫瘍の画像診断，脳腫瘍の治療効果の評価，放射線壊死の診断と評価に関する研究を行います。

2. 名簿

教授：	篠田 淳	Jun Shinoda
准教授：	浅野好孝	Yoshitaka Asano
医師：	三輪和弘	Kazuhiro Miwa
医師：	池亀由香	Yuka Ikegame

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 三輪和弘，篠田 淳，小川心一，松尾政之．総論第5章 放射線外科線量計画と治療の実際「D.トモセラピー」：井上 洋編．Textbook of Radiosurgery -放射線外科治療の進歩-，大阪：メディカ出版；2012年：76-80.
- 2) 篠田 淳，三輪和弘，浅野好孝，松尾政之．各論第2章 脳腫瘍「9. 膠芽腫」：井上 洋編．Textbook of Radiosurgery -放射線外科治療の進歩-，大阪：メディカ出版；2012年：152-157.
- 3) 奥村 歩，松本 淳，篠田 淳．遷延性意識障害に対する治療 -鍼治療-：千葉 茂編．脳と心のプライマリケア 第5巻．意識と睡眠，東京：シナジー社；2012年：191-192.
- 4) 奥村由香，浅野好孝，篠田 淳．第13章 外傷性脳損傷：呉 東進編．医学的音楽療法，京都：北大路書房；2014年：103-111.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 秋 達樹．シャント術．特集「ここが決め手！ 超急性期の観察ポイント」，ブレインナーシング 2012年；28巻：60-62.
- 2) 矢野大仁，中山則之，大江直行，三輪和弘，篠田 淳，岩間 亨．脳腫瘍関連てんかんに関するレビュー -レベチラセタムの有用性について-，てんかん研究 2013年；31巻：2-7.
- 3) 篠田 淳，浅野好孝．高次脳機能障害を引き起こす外傷性脳損傷の画像評価 -特にびまん性脳損傷慢性期の画像について-，脳神経外科ジャーナル 2013年；22巻：842-848.
- 4) 篠田 淳，浅野好孝．頭部外傷後高次脳機能障害の画像診断と軽度外傷性脳損傷，賠償科学 2014年；40巻：7-15.
- 5) 篠田 淳，浅野好孝．植物状態(遷延性意識障害)，Clinical Neuroscience 2014年；32巻：926-931.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 三輪和弘，篠田 淳，米澤慎悟，秋 達樹，浅野好孝，横山和弘，伊藤 毅，大江直行，矢野大仁，岩間 亨．脳放射線壊死に対するベマシズマブの使用経験，CI研究 2012年；34巻：31-38
- 2) 松久 卓，新川修司，三輪和弘，篠田 淳，松尾政之．転移性脳腫瘍に対するTomotherapyを用いたIMRTの有効性について -14例の検討-，岐阜県医師会医学雑誌 2013年；26巻：65-68.

原著（欧文）

- 1) Matsuo M, Miwa K, Tanaka O, Shinoda J, Nishibori H, Tsuge Y, Yano H, Iwama T, Hayashi S, Hoshi H, Yamada J, Kanematsu M, Aoyama H. Impact of [11C] methionine positron emission tomography for target definition of glioblastoma multiforme in radiation therapy planning. Int J Radiat Oncol.

- 2012;82:83-89. IF 4.176
- 2) Miwa K, Matsuo M, Shinoda J, Aki T, Yonezawa S, Ito T, Asano Y, Yamada M, Yokoyama K, Yamada J, Yano H, Iwama T. Clinical value of [(11)C] methionine PET for stereotactic radiation therapy with intensity modulated radiation therapy to metastatic brain tumors. *Int J Radiat Oncol.* 2012;84:1139-1144. IF 4.176
 - 3) Aki T, Nakayama N, Yonezawa S, Takenaka S, Miwa K, Asano Y, Shinoda J, Yano H, Iwama T. Evaluation of brain tumors using dynamic (11)C-methionine-PET. *J Neuro-oncol.* 2012;109:115-122. IF 2.787
 - 4) Wada T, Asano Y, Shinoda J. Decreased fractional anisotropy evaluated using tract-based spatial statistics and correlated with cognitive dysfunction in patients with mild traumatic brain injury in the chronic stage. *AJNR Am J Neuroradiol.* 2012;33:2117-2122. IF 3.675
 - 5) Osumi T, Nakao T, Kasuya Y, Shinoda J, Yamada J, Ohira H. Amygdala dysfunction attenuates frustration-induced aggression in psychopathic individuals in a non-criminal population. *J Affect Disord.* 2012;142:331-338. IF 3.705
 - 6) Murakami H, Nakao T, Matsunaga M, Kasuya Y, Shinoda J, Yamada J, Ohira H. The structure of mindful brain. *PLoS One.* 2012;7:e46377. IF 3.534
 - 7) Koyama S, Tanabe S, Takeda K, Warashina H, Sakurai H, Kanada Y, Okumura R, Shinoda J, Nagata J, Kanno T. The effects of high-frequency transcranial magnetic stimulation combined with transcutaneous electrical stimulation in a severe stroke patient. *Clinics and Practice.* 2012;2:e89.
 - 8) Asano Y, Shinoda J, Okumura A, Aki T, Takenaka S, Miwa K, Yamada M, Ito T, Yokoyama K. Utility of fractional anisotropy imaging analyzed by statistical parametric mapping for detecting minute brain lesions in chronic-stage patients who had mild or moderate traumatic brain injury. *Neurol Med-Chir (Tokyo).* 2012;52:31-40. IF 0.649
 - 9) Saito T, Maruyama T, Muragaki Y, Tanaka M, Nitta M, Shinoda J, Aki T, Iseki H, Kurisu K, Okada Y. 11C-methionine uptake correlates with combined 1p and 19q loss of heterozygosity in oligodendroglial tumors. *AJNR Am J Neuroradiol.* 2013;34:85-91. IF 3.675
 - 10) Ohira H, Matsunaga M, Murakami H, Osumi T, Fukuyama S, Shinoda J, Yamada J. Neural mechanisms mediating association of sympathetic activity and exploration in decision-making. *Neuroscience.* 2013;29:362-374. IF 3.327
 - 11) Ohira H, Matsunaga M, Osumi T, Fukuyama S, Shinoda J, Yamada J, Gidron Y. Vagal nerve activity as a moderator of brain-immune relationships. *J Neuroimmunol.* 2013;260:28-36. IF 2.786
 - 12) Shinoda J, Yokoyama K, Miwa K, Ito T, Asano Y, Yonezawa S, Yano H. Epilepsy surgery of dysembryoplastic neuroepithelial tumors using advanced multitechnologies with combined neuroimaging and electrophysiological examinations. *Epi Behav Case Rep.* 2013;1:97-105.
 - 13) Matsunaga M, Bai Y, Yamakawa K, Toyama A, Kashiwagi M, Fukuda K, Oshida A, Sanada K, Fukuyama S, Shinoda J, Yamada J, Sadato N, Ohira H. Brain-immune interaction accompanying odor-evoked autobiographic memory. *PLoS One.* 2013;8:e72523. IF 3.534
 - 14) Yano H, Saigoh C, Nakayama N, Hirose Y, Abe M, Ohe N, Ozeki M, Shinoda J, Iwama T. Mixed neuronal-glia tumor in the temporal lobe of an infant: a case report. *Diagn Pathol.* 2013;8:164. IF 2.411
 - 15) Yano H, Nakayama N, Ohe N, Takagi T, Shinoda J, Iwama T. Surgical strategy in case with co-existence of malignant oligodendroglioma and arteriovenous malformation: A case report. *Case Rep in Clin Med.* 2013;2:473-478.
 - 16) Takenaka S, Asano Y, Shinoda J, Nomura Y, Yonezawa S, Miwa K, Yano H, Iwama T. Comparison of ¹¹C-methionine, ¹¹C-choline, and ¹⁸F-fluorodeoxyglucose-PET for distinguishing glioma recurrence from radiation necrosis. *Neurol Med Chir (Tokyo).* 2014;54:280-289. IF 0.649
 - 17) Okumura Y, Asano Y, Takenaka S, Fukuyama S, Yonezawa S, Kasuya Y, Shinoda J. Brain activation by music in patients in a vegetative or minimally conscious state following diffuse brain injury. *Brain Inj.* 2014;28:944-950. IF 1.861
 - 18) Matsunaga M, Isowa T, Yamakawa K, Fukuyama S, Shinoda J, Yamada J, Ohira H. Genetic variations in the human cannabinoid receptor gene are associated with happiness. *PLoS One.* 2014;9:e93771. IF 3.534
 - 19) Yonezawa S, Miwa K, Shinoda J, Nomura Y, Asano Y, Nakayama N, Ohe N, Yano H, Iwama T. Bevacizumab treatment leads to observable morphological and metabolic changes in brain radiation necrosis. *J Neurooncol.* 2014;119:101-109. IF 2.787
 - 20) Miwa K, Matsuo M, Ogawa S, Shinoda J, Asano Y, Ito T, Yokoyama K, Yamada J, Yano H, Iwama T. Hypo-fractionated high-dose irradiation with positron emission tomography data for the treatment of glioblastoma multiforme. *Biomed Res Int.* 2014;2014:407026. doi: 10.1155/2014/407026. Epub 2014 May 22
 - 21) Miwa K, Matsuo M, Ogawa S, Shinoda J, Yokoyama K, Yamada J, Yano H, Iwama T. Re-irradiation of recurrent glioblastoma multiforme using 11C-methionine PET/CT/MRI image fusion for hypofractionated stereotactic radiotherapy by intensity modulated radiation therapy. *Radiat Oncol.* 2014;9:181. doi: 10.1186/1748-717X-9-181 IF 2.360
 - 22) Ikegame Y, Yamashita K, Nakashima S, Nomura Y, Yonezawa S, Asano Y, Shinoda J, Hara H, Iwama T. Fate of graft cells: what should be clarified for development of mesenchymal stem cell therapy for ischemic stroke? *Front Cell Neurosci.* 2014;8:322. doi: 10.3389/fncel.2014.00322. eCollection 2014.

- Review IF 4.175
- 23) Ohira H, Ichikawa N, Kimura K, Fukuyama S, Shinoda J, Yamada J. Neural and sympathetic activity associated with exploration in decision-making: further evidence for involvement of insula. *Front Behav Neurosci.* 2014;8:381. eCollection 2014 IF 4.160
- 24) Yano H, Nakayama N, Morimitsu K, Futamura M, Ohe N, Miwa K, Shinoda J, Iwama T. Changes in Protein Level in the Cerebrospinal Fluid of a Patient with Cerebral Radiation Necrosis Treated with Bevacizumab. *Clin Med Insights: Oncology.* 2014;8:153-157.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：浅野好孝，研究分担者：竹中俊介，秋 達樹；JA 共済交通事故医療研究助成金：交通事故による慢性期の軽度外傷性脳損傷（mild traumatic brain injury）患者の脳損傷部位の描出；平成 24 年度；1,000 千円
- 2) 研究代表者：奥村由香，研究分担者：浅野好孝，竹中俊介，秋 達樹；JA 共済交通事故医療研究助成金：音楽は深く傷ついた脳に届くのか－健常者と遷延性意識障害患者の音と音楽刺激に対する反応の fMRI を用いた比較検討－；平成 24 年度；1,000 千円
- 3) 研究代表者：松本 淳，研究分担者：浅野好孝，秋 達樹，米澤慎悟，福山誠介；JA 共済交通事故医療研究助成金：重症頭部外傷後遷延性意識障害患者の筋緊張亢進に対する科学的根拠に基づく鍼治療法の開発－脳血流 SPECT および電気生理学的指標を用いて－；平成 24-25 年度；1,000 千円
- 4) 研究代表者：宮武伸一，研究分担者：三輪和弘，篠田 淳；厚生労働科学研究費補助金・医療技術実用化総合研究事業：症候性脳放射線壊死に対する核医学的診断とベバシズマブの静脈内投与による治療；平成 24-26 年度；45,000 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

- 1) 篠田 淳：遷延性意識障害患者の口腔内状況の調査；平成 24 年度；獲得金なし；朝日大学歯学部口腔病態医療学講座障害者歯科学分野
- 2) 篠田 淳，浅野好孝：脳の障害解析手法；平成 24-26 年度；100 千円；(株)豊田中央研究所車両安全研究室，名古屋大学大学院工学研究科
- 3) 篠田 淳：MRI を用いた性同一性障害の脳形態学的研究；平成 25-26 年度；獲得金なし；岐阜大学大学院医学系研究科精神神経学分野
- 4) 篠田 淳：日本語版 QOLIBRI (Quality of Life after Brain Injury) 質問紙の作成及び信頼性と妥当性の検証；平成 26 年度；獲得金なし；藤田保健衛生大学医療科学部リハビリテーション学科，同大学医学部リハビリテーション医学 I 講座

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

篠田 淳：

- 1) 日本脳神経外科学会評議員(～現在)，同代議員(～現在)
- 2) 日本脳神経外科光線力学研究会幹事(～現在)
- 3) 日本意識障害学会理事(～現在)
- 4) 日本放射線外科学会世話人(～現在)
- 5) 日本ニューロリハビリテーション学会理事(～現在)
- 6) 日本音楽医療研究会役員(～現在)
- 7) 日本意識障害学会慢性期意識障害スコアリング委員会委員(平成 24 年 8 月～現在)
- 8) Member of the International Planning Committee of the International Brain Injury Association (平成 24 年 9 月～現在)

浅野好孝：

- 1) 日本脳神経外科学会評議員(～現在)
- 2) 日本意識障害学会世話人(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

篠田 淳：

- 1) 「International Journal of Speech & Language Pathology and Audiology」(Synergy)
<http://www.synergypublishers.com/international-journal-of-speech-language-pathology-and-audiology/> ; Editor-in-Chief(平成 25 年 12 月～現在)
- 2) 「Austin Journal of Pathology & Laboratory Medicine」(Austin)
<http://austinpublishinggroup.com/pathology/> ; Member of Editorial Board(平成 26 年 7 月～現在)
- 3) 「International Journal of Clinical Laboratory Sciences」(Graphy Publications)
http://graphyonline.com/journal/journal_home.php?journalid=IJCLS ; Member of Editorial Board
(平成 26 年 7 月～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

篠田 淳：

- 1) 平成 24 年度交通事故被害者家族ネットワーク無料法律相談特別講演会(平成 24 年 4 月, 美濃加茂, 特別講演「脳のどこが損傷されると遷延性意識障害・高次脳機能障害になるのでしょうか?」演者)
- 2) 平成 24 年度第 1 回岐阜県高次脳機能障がい協力医療機関等ネットワーク会議(平成 24 年 4 月, 岐阜, 教育講演「高次脳機能障害の診断方法について」演者)
- 3) 第 11 回日本リハビリテーション心理職会研修会(平成 24 年 6 月, 横浜, 教育講演「軽度外傷性脳損傷の画像診断」演者)
- 4) 第 48 回日本交通科学協議会学術講演会(平成 24 年 6 月, つくば, 指定講演「交通外傷によるびまん性軸索損傷評価のための最新画像」演者)
- 5) 第 3 回看護学生のためのやさしい脳神経看護講座(平成 24 年 6 月, 美濃加茂, 教育講演「意識と意識障害の基礎知識」演者)
- 6) 第 21 回日本意識障害学会(平成 24 年 7 月, 富士吉田, 教育講演「高次脳機能障害の画像診断」演者)
- 7) 第 2 回交通事故後遺症認定実務者講座弁護士講習会(平成 24 年 10 月, 東京, 教育講演「頭部外傷後高次脳機能障害」演者)
- 8) 日本賠償科学会第 61 回研究会(平成 24 年 12 月, 東京, 指定講演「高次脳機能障害の画像診断と MTBI」演者)
- 9) 平成 24 年度岐阜県脳障害リハビリテーション研究会第 12 回研修会(平成 24 年 12 月, 美濃加茂, 教育講演「高次脳機能障害の診断」演者)
- 10) 平成 24 年度岐阜県医師会自賠責研修会(平成 25 年 2 月, 岐阜, 教育講演「遷延性意識障害 ー脳損傷患者に対する中部療護センターの取り組みー」演者)
- 11) 第 36 回日本脳神経外傷学会(平成 25 年 3 月, 名古屋, 教育講演「高次脳機能障害 ー特に外傷性脳損傷による高次脳機能障害についてー」演者)
- 12) 平成 24 年度岩手県高次脳機能障がい者支援普及事業「高次脳機能障がい者支援研修会」(平成 25 年 3 月, 盛岡, 「頭部外傷後高次脳機能障害の画像診断と軽度外傷性脳損傷」演者)
- 13) 第 33 回日本脳神経外科コンgres総会(平成 25 年 5 月, 大阪, 指定講演・プレナリーセッション「高次脳機能障害を引き起こす外傷性脳損傷の画像評価」演者)
- 14) 平成 25 年交通事故被害者家族ネットワーク千葉県支援集会(平成 25 年 5 月, 千葉, 特別講演「外傷性脳損傷慢性期の障害 ー遷延性意識障害と高次脳機能障害ー」演者)
- 15) 平成 25 年度第 1 回岐阜県高次脳機能障がい協力医療機関等ネットワーク会議(平成 25 年 6 月, 美濃加茂, 指定講演「軽度外傷性脳損傷と高次脳機能障害の関わりについて」演者)
- 16) 第 4 回看護学生のためのやさしい脳神経看護講座(平成 25 年 6 月, 美濃加茂, 教育講演「意識と意識障害の基礎知識」演者)
- 17) 第 22 回日本意識障害学会(平成 25 年 7 月, 秋田, 指定講演・シンポジウム「慢性期軽度意識障害評価スケール開発へのアプローチ ー病態生理学からのアプローチー」演者)

- 18) 第36回静岡リハビリテーション医学会(日本リハビリテーション医学会中部・東海地方会専門医・認定医臨床生涯教育研修会)(平成25年9月, 静岡, 教育講演「リハに役立つ画像診断法ー高次脳機能障害に関係する頭部外傷の慢性期の画像診断ー」 演者)
- 19) 飛騨保健所生活習慣病医療連携推進事業. 第5回地域脳卒中連携研修会(平成25年9月, 高山, 特別講演「高次脳機能障害の診療と岐阜県の状況について」 演者)
- 20) 脳外傷友の会みずほ・高次脳機能障害者家族を支援する会「サークル虹」平成25年度高次脳機能障害支援研修会(平成26年2月, 刈谷, 教育講演「交通事故による高次脳機能障害」 演者)
- 21) 第5回看護学生のためのやさしい脳神経看護講座(平成26年6月, 美濃加茂, 教育講演「意識と意識障害の基礎知識」 演者)
- 22) 平成26年度高次脳機能障害及びその関連障害に対する支援普及事業. 第1回高次脳機能障害支援普及全国連絡協議会及び厚生労働科研費「高次脳機能障害者の社会参加支援の推進に関する研究」第1回全体会議(平成26年6月, 所沢, 指定発言「東海ブロックの平成25年度事業報告と平成26年度事業予定」 演者)
- 23) 第23回日本意識障害学会(平成26年8月, 札幌, シンポジウム「遷延性意識障害患者の脳画像評価」 演者)
- 24) 第23回日本意識障害学会(平成26年8月, 札幌, シンポジウム「遷延性意識障害者家族の精神的負担を軽減するために有効な相談支援のあり方の検討」 共同演者)
- 24) 第23回日本意識障害学会記念市民公開講座(平成26年8月, 札幌, 指定講演「皆様ご存知ですか?ー最新画像で脳はどこまでわかるか?ー」 演者)
- 25) 平成26年度岐阜県高次脳機能障がい協力医療機関等ネットワーク会議(中濃・東濃地区)(平成26年10月, 美濃加茂, 指定発言「ケースシミュレーション. 高次脳機能障害者の受け入れ、どうしていますか?」 共同演者)
- 26) 平成26年度岐阜県高次脳機能障がい協力医療機関等ネットワーク会議(西濃地区)(平成26年10月, 大垣, 指定発言「ケースシミュレーション. 高次脳機能障害者の受け入れ、どうしていますか?」 共同演者)
- 27) 平成26年交通事故被害者家族ネットワーク被害者家族交流会(平成26年11月, 美濃加茂, 特別講演「外傷性脳損傷後の遷延性意識障害の画像評価」 演者)
- 28) The 8th Symposium of CHA Neurological Center(平成26年12月, Bundang, 特別講演「Neuroimaging in patients with chronic disorders of consciousness」 演者)

浅野好孝：

- 1) 第3回看護学生のためのやさしい脳神経看護講座(平成24年6月, 美濃加茂, 教育講演「脳神経領域の画像診断ーやさしい脳の解剖. これだけ覚えればエキスパート?ー」 演者)
- 2) 第4回看護学生のためのやさしい脳神経看護講座(平成25年6月, 美濃加茂, 教育講演「脳神経領域の画像診断ーやさしい脳の解剖. これだけ覚えればエキスパート?ー」 演者)
- 3) 第16回 Gifu Nuclear Technology Club.(平成25年9月, 岐阜, 特別講演「高次脳機能障害と神経画像」 演者)
- 4) 平成25年度岐阜県脳障害リハビリテーション研究会第1回研修会(平成25年11月, 美濃加茂, 教育講演「脳卒中の病態と画像診断」 演者)
- 5) 平成25年度第2回岐阜県高次脳機能障がい協力医療機関等ネットワーク会議(平成26年2月, 美濃加茂, 教育講演「むち打ち損傷と高次脳機能障害」 演者)
- 6) 第5回看護学生のためのやさしい脳神経看護講座(平成26年6月, 美濃加茂, 教育講演「脳神経領域の画像診断ーやさしい脳の解剖. これだけ覚えればエキスパート?ー」 演者)

三輪和弘：

- 1) 第22回日本定位放射線治療学会(平成25年5月, 三重長島, 指定講演・ランチョンセミナー「TomotherapyとメチオニンPETの臨床」 演者)
- 2) 第73回日本脳神経外科学会総会(平成26年10月, 東京, シンポジウム「Glioblastoma multiformeに対する低分割大量放射線療法の治療成績」 演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 篠田 淳：The First Place E-poster Winner in the Category of Neurotrauma and Critical Care
「Differences in brain metabolism impairments between chronic mild/moderate TBI patients

with and without visible brain lesions on MRI」

The 81st Annual Meeting of the American Association of Neurological Surgeons (AANS), New Orleans, 2013

- 2) 三輪和弘：The First Place E-poster Winner in the Category of Tumor
「Re-irradiation of recurrent glioblastoma multiforme using Methionine PET/CT/MRI image fusion for hypofractionated stereotactic radiotherapy」
The 81st Annual Meeting of the American Association of Neurological Surgeons (AANS), New Orleans, 2013

9. 社会活動

篠田 淳：

- 1) 岐阜県高次脳機能障害支援対策推進委員会委員長(～現在)
- 2) 岐阜県医師育成・確保コンソーシアムの企画調整委員会委員(～現在)
- 3) 名古屋市立東部医療センター医療事故調査委員会第三者調査委員(平成 26 年)

10. 報告書

- 1) 松本 淳, 浅野好孝, 秋 達樹, 米澤慎悟, 福山誠介, 篠田 淳：重症頭部外傷後遷延性意識障害患者の筋緊張亢進に対する科学的根拠に基づく鍼治療法の開発－脳血流 SPECT および電気生理学的指標を用いて－：平成 24 年度 JA 共済交通事故医療研究助成. 研究報告書(平成 25 年)

11. 報道

- 1) 篠田 淳他：医療特集「治る！最前線－脳腫瘍の最新治療と画像診断－」テレビ東京－ワールドビジネスサテライト(2012 年 7 月 27 日)
- 2) 篠田 淳他：高次脳機能障害、理解を－医療関係者ら、岐阜市でフォーラム－：岐阜新聞朝刊(2013 年 1 月 27 日)
- 3) 篠田 淳他：ザ・ドキュメント「スタートラインに立てなくて－黙殺される交通事故の被害者たち」：関西テレビ(2013 年 3 月 24 日)
- 4) 篠田 淳：病院の実力－岐阜編 70－ てんかん：読売新聞朝刊(2013 年 11 月 3 日)
- 5) 篠田 淳他：各務原市で高次脳機能障害の理解深める講習会：岐阜新聞朝刊(2014 年 2 月 1 日)
- 6) 篠田 淳：危険を予測・回避するポイント. 命はひとつ－交通事故防止の決め手はこれだ－：DVD, 企画, 制作：斉藤プロダクション(2014 年 10 月)

12. 自己評価

評価

研究成果, 学会活動, 学術講演活動については数値的に平成 21-23 年度の成果を上回り, 目標を達成した。

現状の問題点及びその対応策

大学院生の学術活動に十分な支援ができなかった。彼らへの綿密な研究指導と彼らの学術活動の成果を公表する機会を増やすこと(学会発表, 論文作成)を今後の目標とする。

今後の展望

来年度に導入される脳磁図を用いた脳の機能解析結果をこれまで行ってきた MRI, PET, SPECT による脳の形態学および代謝機能学的評価に加えることにより, 意識障害患者, 高次脳機能障害患者, てんかん患者, 脳腫瘍患者において, 更なる精密な脳機能の解析を行うことを企画している。

〔腫瘍制御学講座〕

(1) 腫瘍病理学分野

1. 研究の概要

病理学における研究は、遺伝子レベルの基礎的なものから人体摘出検体を材料とする臨床病理的なものまでの広範な領域を占めている。教室の伝統的な主要テーマである、腫瘍の発生から予防までの病理学的研究を継続して研究するとともに、再生医療、幹細胞医学にも関連した新規病理学分野の研究を行っている。

(1) 遺伝子改変マウス作製技術を用いた大腸発がんの分子機構解明

ES 細胞での相同組み換え技術を利用した、コンディショナルノックアウトマウス、BAC(人工染色体)を用いたトランスジェニックマウス、遺伝子発現誘導マウスを作製した上で、腫瘍発生のメカニズム解明を目指している。さらに最近では、ゲノム編集の研究手法を取り入れている。

(2) がん細胞リプログラミングによるがんエピジェネティック異常の意義解明

がん細胞での DNA メチル化などのエピジェネティック状態を変化させ、がん細胞特異的な変化を同定することで、がん細胞でのエピジェネティック異常の意義を明らかにしようとしている。

(3) DNA メチル化機構と腫瘍発生の解明

遺伝子発現調節の要、エピジェネティクス制御機構の1つである DNA メチル化機構と腫瘍発生を二つの視点[1]Site specific DNA hypermethylation [2]Global DNA hypomethylation に注目して研究している。特に[2]については、DNA 低メチル化マウス(維持メチル基転移酵素である Dnmt1 の低発現マウス)を用いて、各種腫瘍発生における DNA メチル化の意義解明に取り組んでいる。

(4) 再生医療、幹細胞医学に関連する腫瘍発生の解明とその予防

再生医学の臨床応用が進んでいない理由の一つに、*in vitro*での知見が必ずしも *in vivo*では実現できていないこと、そして、胚性幹細胞(ES 細胞)を組織再生に利用した場合、しばしば奇形腫として正常組織まで破壊する腫瘍性増殖をきたすことがあげられる。当教室では腫瘍病理の知識をもとに再生医学の臨床応用の際に問題となる腫瘍発生を、がん幹細胞(cancer stem cell)と関連させて研究している。

(5) 神経再生研究のための神経障害動物モデルの開発

神経軸索内を断片化 DNA がダイナミックにシナプス部まで移動することを神経のアポトーシスに特異的現象として報告し、一過性脳虚血に伴う海馬 CA1 領域の遅発性細胞死がアポトーシスであることを証明した。神経疾患モデルとしての扱いやすさから、マウス網膜に注目している。神経細胞死とアポトーシスの関係を明らかにする一方、視細胞に対し選択的に傷害を与える新たなモデルを確立し、神経再生医学への応用とした。

(6) 膵星細胞を標的とした診断開発と治療への応用

膵癌や膵線維化に重要な役割を果たすとされている膵星細胞を標的とするため、放射線科及び腫瘍外科とともに、放射線診断と病理組織の比較を行い、膵星細胞の分離をおこなって治療へのメカニズム解明を行っている。

2. 名簿

教授： 原 明 Akira Hara
准教授： 富田弘之 Hiroyuki Tomita
助教： 波多野裕一郎 Yuichiro Hatano

3. 研究成果の発表

著書(和文)

- 1) 原 明. 遺伝性疾患および小児の疾患: Vinay Kumar, Abul K. Abbas, Jon C. Aster 著, 豊国伸哉, 高橋雅英監訳. ロビンス基礎病理学 原書9版, 東京:丸善出版;2014年:257-321.

著書(欧文)

- 1) Hara A, Aoki H, Takamatsu M, Hatano Y, Tomita H, Kuno T, Niwa M, Kunisada T. Human embryonic stem cells transplanted into mouse retina induces neural differentiation. In: Stem Cells and Cancer Stem Cells, Volume 2, ed by Hayat MA, Springer;2012:291-298.
- 2) Niwa M, Nakashima M, Satoh K, Takamatsu M, Kobayashi K, Hatano Y, Hara A. Hypothermia and hyperthermia affect neuronal degeneration, delayed neuronal death and microglial activation following transient forebrain ischemia. In: Hypothermia: Prevention, Recognition and Treatment. Chapter VII, ed by Delgado JIV and Garza VGF. Nova Science Publish;2012:15-24.

総説 (和文)

- 1) 橋本恭一, 波多野裕一郎, 原 明, 坂井義治, 山田泰広. 消化器発癌モデルマウスを用いた癌エピジェネティクス研究, 分子消化器病 2012年; 9巻: 62-66.

総説 (欧文)

- 1) Kuno T, Tsukamoto T, Hara A, Tanaka T. Cancer chemoprevention through the induction of apoptosis by natural compounds. *J Biophys Chem.* 2012;3:156-173.

原著 (和文)

なし

原著 (欧文)

- 1) Kameda T, Dobashi H, Yoneda K, Susaki K, Kuno T, Muraio K, Ishida T. A case of Degos disease successfully treated with corticosteroid combined with cyclophosphamide. *Rheumatol Int.* 2012;32:2169-2173. IF 1.627
- 2) Matsuhashi A, Ohno T, Kimura M, Hara A, Saio M, Nagano A, Kawai G, Saitou M, Takigami I, Yamada K, Okano Y, Shimizu K. Growth Suppression and Mitotic Defect Induced by JNJ-7706621, an Inhibitor of Cyclin-Dependent Kinases and Aurora Kinases. *Curr Cancer Drug Tar.* 2012;12:625-639. IF 3.582
- 3) Hata K, Kubota M, Shimizu M, Moriwaki H, Kuno T, Tanaka T, Hara A, Hirose Y. Monosodium glutamate-induced diabetic mice are susceptible to azoxymethane-induced colon tumorigenesis. *Carcinogenesis.* 2012;33:702-707. IF 5.266
- 4) Aoki H, Hara A, Era T, Kunisada T, Yamada Y. Genetic ablation of Rest leads to in vitro-specific derepression of neuronal genes during neurogenesis. *Development.* 2012;139:667-677. IF 6.273
- 5) Takamatsu M, Aoki H, Hirose Y, Kobayashi K, Tomita H, Kuno T, Koumura H, Hara A. Teratoma showing the features of retinal structure: A case of sacrococcygeal teratoma. *Oncol Lett.* 2012;3:1023-1026. IF 0.987
- 6) Hoshi M, Matsumoto K, Ito H, Ohtaki H, Arioka Y, Osawa Y, Yamamoto Y, Matsunami H, Hara A, Seishima M, Saito K. L-Tryptophan-kynurenine pathway metabolites regulate type I IFNs of acute viral myocarditis in mice. *J Immunol.* 2012;188:3980-3987. IF 5.362
- 7) Goda W, Satoh K, Nakashima M, Hara A, Niwa M. PBN fails to suppress in delayed neuronal death of hippocampal CA1 injury following transient forebrain ischemia in gerbils. *Neurosci Lett.* 2012;517:47-51. IF 2.055
- 8) Murakami Y, Hoshi M, Hara A, Takemura M, Arioka Y, Yamamoto Y, Matsunami H, Funato T, Seishima M, Saito K. Inhibition of increased Indoleamine 2,3-Dioxygenase activity attenuates *Toxoplasma gondii* replication in the lung during acute infection. *Cytokine.* 2012;59:245-251. IF 2.874
- 9) Ohtaki H, Ito H, Hoshi M, Osawa Y, Takamatsu M, Hara A, Ishikawa T, Moriwaki H, Saito K, Seishima M. High susceptibility to lipopolysaccharide-induced lethal shock in encephalomyocarditis virus-infected mice. *Sci Rep.* 2012;2:367. IF 5.076
- 10) Arioka Y, Yamamoto Y, Hoshi M, Matsumoto K, Takamatsu M, Hara A, Seishima M, Saito K. Pre-administration of L-tryptophan improved ADR-induced early renal failure in mice. *Life Sci.* 2012;91:100-106. IF 2.296
- 11) Hatano Y, Otsuka S, Chousa M, Saito S, Nollet KE, Ohto H, Shimabukuro K, Takemura H, Hara A. Fatal delayed hemolytic transfusion reaction associated with anti-Di(b) and anti-E. *Transfus Apher Sci.* 2012;47:263-268. IF 1.072
- 12) Hioki A, Miyamoto K, Kato H, Hatano Y, Asano N, Hirose Y, Fushimi K, Shimizu K. Sudden onset of paraplegia caused by subarachnoid hemorrhage associated with meningeal melanocytoma of the conus medullaris: a case report of intraoperative identification of these two pathological conditions. *Eur J Orthop Surg Traumatol.* 2012;22:593-596. IF 0.181
- 13) Binh NH, Satoh K, Kobayashi K, Takamatsu M, Hatano Y, Hirata A, Tomita H, Kuno T, Hara A. Galectin-3 in preneoplastic lesions of glioma. *J Neurooncol.* 2012;111:123-132. IF 2.787
- 14) Yamada K, Ohno T, Aoki H, Semi K, Watanabe A, Moritake H, Shiozawa S, Kunisada T, Kobayashi Y, Toguchida J, Shimizu K, Hara A, Yamada Y. EWS/ATF1 expression induces sarcomas from neural crest-derived cells in mice. *J Clin Invest.* 2013;123:600-610. IF 13.765
- 15) Kuno T, Hatano Y, Tomita H, Hara A, Hirose Y, Hirata A, Mori H, Terasaki M, Masuda S, Tanaka T. Organomagnesium suppresses inflammation-associated colon carcinogenesis in male Crj: CD-1 mice. *Carcinogenesis.* 2013;34:361-369. IF 5.266
- 16) Cuong NT, Abe C, Binh NH, Hara A, Morita H, Ogura S. Sivelestat improves outcome of crush injury by inhibiting high-mobility group box 1 in rats. *Shock.* 2013;39:89-95. IF 2.732
- 17) Hirata A, Utikal J, Yamashita S, Aoki H, Watanabe A, Yamamoto T, Okano H, Bardeesy N, Kunisada T, Ushijima T, Hara A, Jaenisch R, Hochedlinger K, Yamada Y. Dose-dependent roles for canonical Wnt signaling in de novo crypt formation and cell cycle properties of the colonic epithelium. *Development.* 2013;140:66-75. IF 6.273
- 18) Kawai G, Ohno T, Kawaguchi T, Nagano A, Saito M, Takigami I, Matsuhashi A, Yamada K, Hosono K,

- Tezuka K, Kunisada T, Hara A, Shimizu K. Human Dental Pulp Facilitates Bone Regeneration in a Rat Bone Defect Model. *Bone and Tissue Regeneration Insights*. 2013;4:1-10.
- 19) Aoki H, Hara A, Motohashi T, Kunisada T. Keratinocyte stem cells but not melanocyte stem cells are the primary target for radiation-induced hair graying. *J Invest Dermatol*. 2013;133:2143-2151. IF 6.372
- 20) Takamatsu M, Hirata A, Ohtaki H, Hoshi M, Hatano Y, Tomita H, Kuno T, Saito K, Hara A. Indoleamine 2,3-dioxygenase 1 plays an immunosuppressive role in 2,4,6-trinitrobenzene sulfate-induced colitis in mice. *J Immunol*. 2013;191:3057-3064. IF 5.362
- 21) Komori S, Osada S, Tomita H, Nishio K, Kumazawa I, Tachibana S, Tsuchiya J, Yoshida K. Predictive value of orotate phosphoribosyltransferase in colorectal cancer patients receiving 5-FU-based chemotherapy. *Mol Clin Oncol*. 2013;1:453-460.
- 22) Kato H, Kanematsu M, Ono H, Yano R, Furui T, Morishige K, Hatano Y. Ovarian fibromas: MR imaging findings with emphasis on intratumoral cyst formation. *Eur J Radiol*. 2013;82:e417-421. IF 2.160
- 23) Watanabe H, Kanematsu M, Tanaka K, Osada S, Tomita H, Hara A, Goshima S, Kondo H, Kawada H, Noda Y, Tanahashi Y, Kawai N, Yoshida K, Moriyama N. Fibrosis and Postoperative Fistula of the Pancreas: Correlation with MR Imaging Findings-Preliminary Results. *Radiology*. 2014;270:791-799. IF 6.214
- 24) Taguchi A, Niwa M, Hoshi M, Saito K, Masutani T, Hisamatsu K, Kobayashi K, Hatano Y, Tomita H, Hara A. Indoleamine 2,3-dioxygenase 1 is upregulated in activated microglia in mice cerebellum during acute viral encephalitis. *Neurosci Lett*. 2014;564:120-125. IF 2.055
- 25) Binh NH, Aoki H, Takamatsu M, Hatano Y, Hirata A, Tomita H, Hara A. Time-sensitive effects of hypoxia on differentiation of neural stem cells derived from mouse embryonic stem cells in vitro. *Neurol Res*. 2014;36:804-813. IF 1.449
- 26) Kuno T, Hata K, Takamatsu M, Hara A, Hirose Y, Takahashi S, Imaida K, Tanaka T. The peroxisome proliferator-activated receptor (PPAR) α agonist fenofibrate suppresses chemically induced lung alveolar proliferative lesions in male obese hyperlipidemic mice. *Int J Mol Sci*. 2014;15:9160-9172. IF 2.339
- 27) Ohtaki H, Ito H, Ando K, Ishikawa T, Hoshi M, Ando T, Takamatsu M, Hara A, Moriwaki H, Saito K, Seishima M. Kynurenine production mediated by indoleamine 2,3-dioxygenase aggravates liver injury in HBV-specific CTL-induced fulminant hepatitis. *BBA-Mol Basis Dis*. 2014;1842:1464-1471. IF 5.089
- 28) Aoki H, Hara A, Oomori Y, Shimizu Y, Yamada Y, Kunisada T. Neonatal lethality of neural crest cell-specific Rest knockout mice is associated with gastrointestinal distension caused by aberrations of myenteric plexus. *Genes Cells*. 2014;19:723-742. IF 2.855
- 29) Hoshi M, Osawa Y, Ito H, Ohtaki H, Ando T, Takamatsu M, Hara A, Saito K, Seishima M. Blockade of Indoleamine 2,3-dioxygenase reduces mortality from peritonitis and sepsis in mice by regulating functions of CD11b⁺ peritoneal cells. *Infect Immun*. 2014;82:4487-4495. IF 4.156
- 30) Zhao CM, Hayakawa Y, Kodama Y, Muthupalani S, Westphalen CB, Andersen GT, Flatberg A, Johannessen H, Friedman RA, Renz BW, Sandvik AK, Beisvag V, Tomita H, Hara A, Quante M, Li Z, Gershon MD, Kaneko K, Fox JG, Wang TC, Chen D. Denervation Suppresses Gastric Tumorigenesis. *Sci Transl Med*. 2014;6:250ra115. IF 14.414
- 31) Kobayashi S, Hara A, Isagawa T, Manabe I, Takeda K, Maruyama T. The nuclear I κ B family protein I κ BNS influences the susceptibility to experimental autoimmune encephalomyelitis in a murine model. *PLoS One*. 2014;9:e110838. IF 3.534
- 32) Ono H, Kanematsu M, Kato H, Toyoki H, Hayasaki Y, Furui T, Morishige K, Hatano Y. MR imaging findings of uterine pyomyoma: radiologic-pathologic correlation. *Abdom Imaging*. 2014;39:797-801. IF 1.730

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：吉見直己，研究分担者：久野壽也；厚生労働科学研究費補助金(化学物質リスク研究事業) 課題番号 H23-化学-指定-007：化学物質の安産性と発がん性リスク評価のための短・中期バイオアッセイ系の開発；平成 23-25 年度；6,800 千円(2,800：2,000：2,000 千円)
- 2) 研究代表者：久野壽也；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：PPAR α アゴニストによる肺腫瘍抑制メカニズムの検索 PPAR α アゴニストによる肺腫瘍抑制メカニズムの検索；平成 24-26 年度；2,800 千円(1,000：1,000：800 千円)
- 3) 研究代表者：富田弘之；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：器官形成因子制御機構を背景とした幹細胞ニッチ異常による胃発癌浸潤メカニズムの解明；平成 24-26 年度；4,200 千円(1,600：1,400：1,200 千円)
- 4) 研究代表者：永田浩一，研究分担者：原 明；学術研究助成基金助成金基盤研究(B)：大脳皮質発達障害を基盤とする知的障害・自閉症障害の病態メカニズムの解明；平成 25-26 年度；1,050 千円(500：550 千円)
- 5) 研究代表者：富田弘之；膝臓病研究奨励賞助成金(財団法人 膝臓病研究財団)：膝疾患における活性化膝星細胞のエピジェネティック修飾機構の関与の解明と治療への応用；平成 25 年度；1,000 千円

- 6) 研究代表者：富田弘之；岐阜大学大学活性化経費(研究：研究グループ形成支援)：膵線維化及び膵星細胞を標的とした膵癌・慢性膵炎の新たな診断治療法の開発と臨床応用；平成 25 年度：4,000 千円
- 7) 研究代表者：原 明；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：正常及び癌組織幹細胞分化制御機構におけるクロマチン構造調節因子 DEK の役割の解明；平成 26-28 年度；3,900 千円(1,500：1,300：1,100 千円)

2) 受託研究

- 1) 原 明：病理診断のコンサルタント；平成 24 年度；3,412 千円：(株)保健科学研究所
- 2) 原 明：病理診断のコンサルタント；平成 24 年度；600 千円：(株)東海細胞研究所
- 3) 原 明：病理診断のセカンドオピニオン；平成 24 年度；2,895 千円：各医療機関
- 4) 久野壽也：FBRA による BOP 誘発ハムスター膵腫瘍の抑制効果；平成 25 年度；3,488 千円：玄米酵素(株)
- 5) 原 明：病理診断のコンサルタント；平成 25 年度；3,789 千円：(株)保健科学研究所
- 6) 原 明：病理診断のコンサルタント；平成 25 年度；636 千円：(株)東海細胞研究所
- 7) 原 明：病理診断のセカンドオピニオン；平成 25 年度；2,995 千円：各医療機関
- 8) 原 明：病院診断のコンサルタント；平成 26 年；3,820 千円：(株)保健科学研究所
- 9) 原 明：病院診断のコンサルタント；平成 26 年；633 千円：(株)東海細胞研究所
- 10) 原 明：病院診断のセカンドオピニオン；平成 26 年度；3,060 千円：各医療機関

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

原 明：

- 1) 日本病理学会評議員(～現在)
- 2) 日本癌学会評議員(平成 24 年 1 月～現在)
- 3) 日本脳神経外科学会評議員(～平成 26 年 12 月)
- 4) 日本再生医療学会評議員(～現在)

久野壽也：

- 1) 日本病理学会評議員(～平成 25 年 9 月)
- 2) 日本毒性病理学会評議員(～平成 25 年 9 月)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

原 明：

- 1) Journal of Oncology ; Editorial Board (～現在)
- 2) ISRN Pathology ; Editorial Board (平成 24 年 1 月～現在)
- 3) International Journal of Neurology Research ; Editorial Board(平成 26 年 9 月～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

原 明：

- 1) The 71st Annual Meeting of the Japanese Cancer Association (2012.09, English Oral Session: In vivo development analysis of tumor; Chairperson)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 富田弘之：日本病理学会学術奨励賞(平成 24 年度)

9. 社会活動

原 明：

- 1) 岐阜県成人病診断管理指導協議会がん登録評価部会委員(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 富田弘之, 原 明 : Severing Nerves May Shrink Stomach Cancers : コロンビア大学医療センタープレス(2014年8月19日)

12. 自己評価

評価

医学研究の国際水準を維持しうるレベルの国際雑誌への研究発表は目標をほぼ達成できていると思われる。各分野の研究者と協力して研究を進めるとともに、病理学専攻の大学院生を中心とした若手研究者・若手病理医の育成を継続して行なっている。

現状の問題点及びその対応策

平成 20 年 4 月 1 日より「医療法施行令の一部を改正する政令」および厚生労働省令により、病理診断科が医業に関して広告できる診療標榜科名となった。その後、病理診断業務の医療、社会に果たす責任がこれまで以上に増しており地域中核病院からの病理専門医、細胞診専門医の派遣要請も多い。病理専門医、細胞診専門医派遣による地域医療への貢献ができるよう地域中核医療機関と連携しながら若手病理医の育成を図っている。したがって国際レベルの病理研究と病理診断能力向上との両立を図るバランス感覚が重要となる。

今後の展望

教室の伝統的なテーマである、腫瘍の発生から予防までの病理学的研究体制を維持するとともに、再生医療、幹細胞医学、さらにはゲノム編集にも関連した新規病理学分野を開拓する。単独分野での独立した研究体制には限界があるため、大学内での複数分野との協力体制をこれまで以上に積極的に図る。また、病理学の基礎として人体病理（診断病理）を重視し、病院病理部と連携した上で地域医療に貢献するとともに、臨床研究をも視野に入れた幅広い病理研究を展開する。

(2) 形態機能病理学分野

1. 研究の概要

クロマチン再構成遺伝子複合体と関連づけた腫瘍における分子群解析

2. 名簿

教授： 竹内 保 Tamotsu Takeuchi
講師： 鬼頭勇輔 Yusuke Kito
助教： 齊郷智恵美 Chiemi Saigo

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 園部 宏, 鬼頭勇輔, 竹内 保. 滑膜肉腫：癌診療指針のための病理診断プラクティス 骨・軟部腫瘍, 東京：中山書店；2013年：307-315.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

なし

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

なし

原著 (欧文)

- 1) Yasukawa T, Bhatt S, Takeuchi T, Kawauchi J, Takahashi H, Tsutsui A, Muraoka T, Inoue M, Tsuda M, Kitajima S, Conaway RC, Conaway JW, Trainor PA, Aso T. Transcriptional elongation factor elongin A regulates retinoic acid-induced gene expression during neuronal differentiation. *Cell Rep.* 2012;2:1129-1136. IF 7.207
- 2) Goto N, Tsurumi H, Takemura M, Kanemura N, Kasahara S, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Yamada T, Sawada M, Takahashi T, Yamada T, Seishima M, Moriwaki H, Takami T. Serum soluble CD27 level is associated with outcome in patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with rituximab, cyclophosphamide, doxorubicin, vincristine and prednisolone. *Leuk Lymphoma.* 2012;53:1494-1500. IF 2.605
- 3) Goto N, Tsurumi H, Goto H, Shimomura YI, Kasahara S, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Murakami N, Yoshikawa T, Fukuno K, Takahashi T, Kito Y, Takami T, Moriwaki H. Serum soluble interleukin-2 receptor (sIL-2R) level is associated with the outcome of patients with diffuse large B cell lymphoma treated with R-CHOP regimens. *Ann Hematol.* 2012;91:705-714. IF 2.396
- 4) Ninomiya S, Hara T, Tsurumi H, Goto N, Saito K, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Indoleamine 2,3-dioxygenase expression and serum kynurenine concentrations in patients with diffuse large B-cell lymphoma. *Leuk Lymphoma.* 2012;53:1143-1145. IF 2.605
- 5) Yasuda I, Goto N, Tsurumi H, Nakashima M, Doi S, Iwashita T, Kanemura N, Kasahara S, Adachi S, Hara T, Shimizu M, Takami T, Moriwaki H. Endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration biopsy for diagnosis of lymphoproliferative disorders: Feasibility of Immunohistological, flow cytometric, and cytogenetic assessments. *Am J Gastroenterol.* 2012;107:397-404. IF 9.213
- 6) Kapoor S, Takeuchi T, Goto N, Kito Y, Furihata M. Role of altered expression of Nedd4L in the pathogenesis of systemic malignancies. *Int J Exp Pathol.* 2012;93:463;author reply 463-464. IF 2.050
- 7) Yamada R, Maeda N, Oguri H, Adachi Y, Takeuchi T, Furihata M, Fukaya T. Is it possible to diagnose malignancy from fluid in cystic ovarian tumors? *Eur J Obstet Gynecol Reprod Biol.* 2013;171:96-100. doi: 10.1016/j.ejogrb.2013.08.003. Epub 2013 Aug 9. IF 1.627
- 8) Kito Y, Saigo C, Atsushi K, Mutsuo F, Tamotsu T. Transgenic mouse model of cutaneous adnexal tumors. *Dis Model Mech.* 2014;7:1379-1383. IF 5.537
- 9) Kito Y, Fujii T, Nishiyama T, Saigo C, Okumoto T, Yokoyama N, Takeuchi T. Peduncular liposarcoma of the colon: a case report and literature review. *J Gastrointest Cancer.* 2014;45 Suppl 1:248-251.
- 10) Kito Y, Bai J, Goto N, Okubo H, Adachi Y, Nagayama T, Takeuchi T. Pathobiological properties of the ubiquitin ligase Nedd4L in melanoma. *Int J Exp Pathol.* 2014;95:24-28. IF 2.052
- 11) Bai J, Kito Y, Okubo H, Nagayama T, Takeuchi T. Expression of ZNF396 in basal cell carcinoma. *Arch Dermatol Res.* 2014;306:399-404. IF 2.270
- 12) Yamada T, Goto N, Tsurumi H, Takata K, Sato Y, Yoshino T, Moriwaki H, Kito Y, Takeuchi T, Iwata H.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者名：竹内 保；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：クロマチン再構成因子 ARID1A 変異が、もたらす腫瘍発生の検討；平成 24-26 年度；5,330 千円(1,950：1,560：1,820 千円)
- 2) 研究代表者名：後藤尚絵；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：濾胞性リンパ腫におけるクロマチン再構成異常の研究；平成 25-26 年度；2,080 千円(910：1,170 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

竹内 保：

- 1) 日本病理学会評議員(~現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

今後とも十分な努力が必要な状態である。

現状の問題点及びその対応策

研究遂行のために人材育成が望まれる

今後の展望

平成 27 年度より 2 名の博士課程大学院生の参画を予定している。

(3) 腫瘍外科学分野

1. 研究の概要

岐阜大学腫瘍外科学分野は、食道・胃・十二指腸・小腸・大腸・肝臓・膵臓の消化器癌と乳癌の外科手術療法や化学療法を含めた集学的治療を行うがん治療の臨床と研究を行う分野である。

臨床では、腹腔鏡を用いた低侵襲性手術の普及と教育を行い、関連病院と連携しより低侵襲なロボット手術を行っている。一方、近年の抗癌剤の進歩に伴いあらゆる癌腫において生存期間の延長がめざましいが、根治を目指すには手術介入が不可欠であり、予後不良である切除不能進行癌に対して抗癌剤治療の後に奏効を示した症例に対して根治切除術目指した **Adjuvant Surgery** を積極的に行っている。また、医師、薬剤師、看護師の緊密な連携でチーム医療を取り入れ、外来化学療法の充実をはかり、数多くの全国規模の臨床試験を行うと同時に、近隣病院と連携した当科主導の臨床試験を行う事で新たな治療の開発を行っている。

研究では、消化器癌や乳癌の発生に関わる遺伝子や癌抑制遺伝子の変異や転移機構の解析、標的治療となる遺伝子変異の解析や薬剤耐性のメカニズムの解析など基礎研究も積極的に行っている。

2. 名簿

教授：	吉田和弘	Kazuhiro Yoshida
准教授：	山口和也	Kazuya Yamaguchi
講師：	高橋孝夫	Takao Takahashi
助教：	奥村直樹	Naoki Okumura
助教：	田中善宏	Yoshihiro Tanaka
助教：	佐々木義之	Yoshiyuki Sasaki
助教：	森川あけみ	Akemi Morikawa
助教：	棚橋利行	Toshiyuki Tanahashi
助教：	森龍太郎	Ryutaro Mori
助教：	山田敦子	Atsuko Yamada
助教：	兼松昌子	Masako Kanematsu
助教：	福田賢也	Kenya Fukuta
医員：	田中秀治	Hideharu Tanaka
医員：	深田真宏	Masahiro Fukada

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 吉田和弘. 日本がん治療認定医機構教育委員会 がん治療認定医教育セミナーテキスト 第6版, 東京: 日本がん治療認定医機構教育委員会; 2012年: 114-121.
- 2) 吉田和弘, 山口和也. 疾患と治療薬「胃癌」: 病気と薬パーフェクトブック, 薬局3月増刊号, 2012年: 1353-1363.
- 3) 高橋孝夫, 吉田和弘. 5. 大腸癌の検査: 杉原健一編. インフォームドコンセントのための図説シリーズ 大腸癌 改訂4版, 大阪: 医療ジャーナル社; 2012年: 34-41.
- 4) 高橋孝夫, 吉田和弘, 飯原大稔, 高橋 繭. 大腸がんのレジメン FOLFIRI±BV および FOLFOX±BV: 消化器外科 Nursing 第17巻 9号, 大阪: メディカ出版; 2012年: 46-57.
- 5) 高橋孝夫. 研修医からの質問 Q&A: 坂田 優編. 臨床腫瘍プラクティス, 東京: ヴァンメディカル社; 2012年: 304.
- 6) 高橋孝夫. 進行・再発大腸癌に対し1次治療として mFOLFOX6+抗 EGFR 抗体薬の使用経験: 第50回日本癌治療学会学術集会記録集, Merck Serono; 2012年.
- 7) 高橋孝夫. UFT/LV 療法の実際: ASCO 2012 大腸癌術後補助化学療法座談会: 大鵬薬品工業 改訂第7版, 2012年.
- 8) 田中善宏, 吉田和弘. 食道・胃術後紹介: 消化器外科学レビュー2012-最新主要文献と解説-, 東京: 総合医学社; 2012年: 25-30.
- 9) 田中善宏. 3rd International conference on Cancer Nutrition Therapy に参加して: JSCAN News, がん免疫栄養療法研究会事務局 No.3; 2012年.
- 10) 山口和也, 吉田和弘. 9. 胃癌 c. 切除不能胃癌の治療: 消化器疾患 最新の治療 2013-2014, 東京: 南江堂; 2013年: 167-170.
- 11) 奥村直樹, 吉田和弘. 3. 胃癌: 消化器外科学レビュー 2013-14, 東京: 総合医学社; 2013年: 14-19.
- 12) 山口和也, 吉田和弘, 田中善宏. タキサン: オンコロジークリニカルガイド 消化器癌化学療法 改訂4版, 東京: 南山堂; 2014年: 34-39.
- 13) 高橋孝夫, 吉田和弘. 3. Stage IV 大腸癌の治療方針 6) 原発巣および遠隔転移巣切除後の補助療法: 大腸癌

患 NOW 2014, 東京: 株式会社日本メディカルセンター; 2014 年: 76-83.

- 14) 高橋孝夫, 吉田和弘. 3) 一時治療として FOLFOX+Cmab/Pmab 療法を行う症例とは? 二次治療をどうする?: ガイドラインに沿った大腸がん化学療法の要点と盲点, 東京: 文光堂; 2014 年: 156-164.
- 15) 高橋孝夫, 吉田和弘. 5. 大腸がん化学療法に関する Q&A: オンコロジストはこう治療している 大腸癌診療と化学療法, 東京: ヴァンメディカル社; 2014 年: 225, 226, 237, 250-251.
- 16) 奥村直樹, 山口和也, 吉田和弘. HER2 陽性胃がんの診断と治療: Annual Review 消化器 2014, 中外医学社; 2014 年: 292-296.
- 17) 佐々木義之, 長田真二, 松井 聡, 今井 寿, 吉田和弘. 膵癌治療 up-to-date 2015: Stage Iva 膵癌の治療安全性と予後向上を目指した術前化学放射線療法, 東京: 医学図書出版; 2014 年: 267-273.
- 18) 松橋延壽. Interview 抗 EGFR 抗体による皮膚障害とその対策 ゴ瘡様皮疹などの症状改善を目指す - 栄養補助食品『アバンド』による栄養療法 -: CLINIC magazine, ドラッグマガジン; 2014 年: 16-18.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

なし

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 吉田和弘, 山口和也, 奥村直樹, 田中善宏, 高橋孝夫, 長田真二, 二村 学. StageIV胃癌治療の新戦略、外科的治療介入の意義, 消化器外科 2012 年; 35 巻: 215-225.
- 2) 山口和也, 吉田和弘, 長田真二, 高橋孝夫. 高齢者進行胃癌の治療(80 歳以上を想定して), 日本外科学会雑誌 2012 年; 113 巻: 26-30.
- 3) 山口和也, 吉田和弘, 長田真二, 高橋孝夫, 奥村直樹, 田中善宏. 胃癌根治術における肝十二指腸間膜周囲リンパ節郭清, 手術 2012 年; 66 巻: 703-708.
- 4) 山口和也, 吉田和弘, 長田真二, 高橋孝夫, 奥村直樹, 田中善宏. 噴門側胃切除後の再建法と QOL, 消化器外科 2012 年; 35 巻: 1893-1900.
- 5) 高橋孝夫, 吉田和弘. 大腸癌術後サーベイランス, カレントセラピー 2012 年; 30 巻: 49-56.
- 6) 奥村直樹, Woo Jin Hyung, 山口和也, 吉田和弘. 胃癌における低侵襲手術, 臨床外科 2012 年; 67 巻: 628-632.
- 7) 奥村直樹, 吉田和弘, 山口和也, 高橋孝夫, 長田真二. 腹腔鏡補助下幽門側胃切除術における再建方法, 臨床外科 2012 年; 67 巻: 1406-1410.
- 8) 奥村直樹, 吉田和弘, 山口和也, 高橋孝夫, 長田真二. 特集: 手術前に必読 局所解剖 II. 胃・十二指腸・小腸の手術 1. 胃癌の手術 b) 胃全摘に必要な局所解剖, 外科 2012 年; 74 巻: 1287-1292.
- 9) 田中善宏, 吉田和弘, 川口順敬, 二村 学, 長田真二, 山口和也, 高橋孝夫, 野中健一, 名和正人, 今井 寿, 斎藤史朗, 佐々木義之, 森光華澄, 太和田昌宏, 櫻谷卓司, 徳丸剛久, 浅井竜一. 当教室における食道癌治療ストラテジー—より安全に、より高い根治性を求めて—, 岐阜県医師会医学雑誌 2012 年; 25 巻: 115-120.
- 10) 田中善宏, 吉田和弘, 館 正仁, 棚橋利行, 長瀬通隆, 高橋孝夫, 山口和也, 長田真二, 二村 学. 特集「がん治療患者に対する栄養療法—治療完遂をめざした新しい栄養支持療法」食道癌化学療法における口腔粘膜炎の予防, 外科と代謝・栄養 2012 年; 46 巻: 179-186.
- 11) 佐々木義之, 長田真二, 櫻谷卓司, 今井 寿, 川田紘史, 五島 聡, 近藤浩史, 徳山泰治, 奥野 充, 兼松雅之, 吉田和弘. 経カテーテル的動脈塞栓術にて治療しえた下腔十二指腸動脈を責任血管とする hemosuccus pancreaticus の 1 例, 膵臓 2012 年; 27 巻: 710-715.
- 12) 橋田瑠美子, 石川りえ, 宮部美香子, 木下幸子, 高橋孝夫, 吉田和弘. 身体的、社会的背景によりストーマ装具選択とセルフケア指導に難渋した一症例, 東海ストーマ会誌 2013 年; 33 巻: 5-11.
- 13) 吉見千明, 山田摩耶, 藤井宏典, 西垣美奈子, 飯原大稔, 北市清幸, 高橋 繭, 倉橋小代子, 高橋孝夫, 吉田和弘, 伊藤善規. 外来がん化学療法室でのチーム医療における薬剤師の役割: 診察前患者面談の有用性評価, 癌と化学療法 2013 年; 40 巻: 349-354.
- 14) 山口和也, 吉田和弘, 奥村直樹. 早期癌に対する腹腔鏡下幽門側胃切除術, 消化器外科 2013 年; 36 巻: 581-590.
- 15) 高橋孝夫, 吉田和弘, 飯原大稔, 伊藤善規. 外来抗癌薬治療の実際 大腸癌に対するチーム医療で行う外来化学療法—術後補助化学療法を中心に—, 外来癌化学療法 2013 年; 4 巻: 31-37.
- 16) 野中健一, 浅井竜一, 安福 至, 富田弘之, 松橋延壽, 廣瀬善信, 高橋孝夫, 山口和也, 長田真二, 吉田和弘. 広範な漿膜下リンパ管侵襲を呈し追加切除を要した小型 O-IIc 型上行結腸癌の 1 例, 日本消化器外科学会雑誌 2013 年; 46 巻: 777-783.
- 17) 奥村直樹, 吉田和弘. 胃, 消化器外科 Nursing 2013 年; 18 巻: 27-35.
- 18) 松橋延壽, 高橋孝夫, 奥村直樹, 山口和也, 吉田和弘. 特集: 外科医が知っておくべき癌治療の薬物療法 II 抗癌薬各論 6 Gastrointestinal stromal tumor の薬物療法, 外科 2013 年; 75 巻: 1356-1361.
- 19) 松橋延壽, 國枝克行, 前田健一, 田中千弘, 長尾成敏, 河合雅彦. 当院における腹腔鏡下胆嚢摘出術施行後

- に診断された胆嚢癌の検討, 日本内視鏡外科学会雑誌 2013年; 18巻: 199-204.
- 20) 松橋延壽, 岩田至紀, 館 正仁, 前田健一, 田中千弘, 長尾成敏, 河合雅彦, 國枝克行. 腹腔鏡下に切除した胃癌に併発した後腹膜神経鞘腫の1例, 日本外科系連合学会誌 2013年; 38巻: 382-386.
 - 21) 佐々木義之, 長田真二, 今井 寿, 田中善宏, 野中健一, 高橋孝夫, 山口和也, 吉田和弘. 大腸癌肝転移の至適手術時期 化学療法による腫瘍縮小速度からの評価, 日本外科系連合学会誌 2013年; 38巻: 746-752.
 - 22) 森光華澄, 二村 学, 名和正人, 宮崎 崇, 吉田和弘. *Corynebacterium kroppenstedtii* 感染が確認された慢性肉芽腫性乳腺炎の1例, 日本臨床外科学会雑誌 2013年; 74巻: 2679-2683.
 - 23) 加藤順子, 長田真二, 棚橋利行, 今井 寿, 佐々木義之, 吉田和弘. 肝内胆管拡張が先行した大腸癌肝転移の1例, 臨床外科学会 2013年; 74巻: 163-167.
 - 24) 山田敦子, 長田真二, 今井 寿, 佐々木義之, 高橋孝夫, 山口和也, 吉田和弘. 中咽頭癌肝手の1切除例, 日本外科系連合学会誌 2013年; 38巻: 356-360.
 - 25) 福田賢也, 長田真二, 今井 寿, 佐々木義之, 田中善宏, 松橋延壽, 奥村直樹, 野中健一, 吉田和弘. 膵管内進展をきたしたTS1膵癌の1例, 日本外科系連合学会誌 2013年; 38巻: 887-890.
 - 26) 徳山泰治, 長田真二, 佐々木義之, 今井 寿, 吉田和弘. TS1膵癌切除症例の検討, 臨床外科 2013年; 68巻: 210-214.
 - 27) 山口和也, 吉田和弘, 奥村直樹, 田中善宏, 棚橋利行, 高橋孝夫, 長田真二, 二村 学. 胃, 臨床外科 2014年; 69巻: 432-440.
 - 28) 山口和也, 吉田和弘. 手術記録の書き方 II 胃・十二指腸の手術 3 食道・胃接合部の手術, 消化器外科 2014年; 37巻: 601-606.
 - 29) 高橋孝夫, 吉田和弘. 下部直腸癌における側方リンパ節郭清 「化学放射線療法」の立場から, 臨床外科 2014年; 69巻: 164-169.
 - 30) 高橋孝夫, 松橋延壽, 吉田和弘, 飯原大稔, 藤井宏典, 伊藤善規, 高橋 蘭, 安藤真由美. 外来化学療法におけるチーム医療-大腸癌治療を中心に-, 消化器外科 2014年; 37巻: 305-313.
 - 31) 奥村直樹, 山口和也, 吉田和弘. 胃の術前術後ケア, 消化器外科 NURSING 2014年; 19巻: 337-345.
 - 32) 奥村直樹, 棚橋利行, 山口和也, 吉田和弘. 胃癌 - 高齢者の胃癌治療 -, 消化器外科 2014年; 37巻: 1409-1415.
 - 33) 松橋延壽, 高橋孝夫, 吉田和弘. 抗 EGFR 抗体薬による皮膚障害と対策 - 栄養補助食品を用いた新しい試み -, 臨床腫瘍ブракティス 2014年; 10巻: 386-392.
 - 34) 田中善宏, 加藤順子, 奥村直樹, 野中健一, 高橋孝夫, 山口和也, 長田真二, 吉田和弘. 胃癌、大腸癌開腹手術後の静脈血栓塞栓症予防におけるエノキサパリンの有効性・安全性および静脈血栓塞栓症発症予測因子の検討, 日本外科系連合学会誌 2014年; 39巻: 1-8.
 - 35) 田中善宏, 吉田和弘. 1. 消化器系 縫合不全(上部消化管), 臨床外科 2014年; 69巻: 212-215.
 - 36) 棚橋利行, 奥村直樹, 山口和也, 吉田和弘. 3. 胃に特有の術前術後ケア, 消化器外科 NURSING 2014年; 19巻: 1081-1085.

原著 (欧文)

- 1) Iihara H, Ishihara M, Matsuura K, Kurahashi S, Takahashi T, Kawaguchi Y, Yoshida K, Itoh Y. Pharmacists contribute to the improved efficiency of medical practices in the outpatient cancer chemotherapy clinic. *J Evaluation in Clinical Practice*. 2012;18:753-760. IF 1.508
- 2) Nishigaki M, Kawahara K, Nawa M, Futamura M, Nishimura M, Matsuura K, Kitaichi K, Kawaguchi Y, Tsukioka T, Yoshida K, Itoh Y. Development of fast dissolving oral film containing dexamethasone as an antiemetic medication: Clinical usefulness. *Int J Pharm*. 2012;424:12-17. IF 3.785
- 3) Tsuburaya A, Morita S, Koderia Y, Kobayashi M, Shitara K, Yamaguchi K, Yoshikawa T, Yoshida K, Yoshino S, Sakamoto J. A randomized phase II trial to elucidate the efficacy of capecitabine plus cisplatin (XP) and S-1 plus cisplatin (SP) as a first line treatment for advanced gastric cancer: XP ascertainment vs. SP randomized PII trial (XParTSII). *BMC Cancer*. 2012;12:307. IF 3.319
- 4) Tawada M, Hayashi S, Osada S, Nakashima S, Yoshida K. Human gastric cancer organizes neighbouring lymphatic vessels via recruitment of bone marrow-derived lymphatic endothelial progenitor cells. *J Gastroenterol*. 2012;47:1057-1060. IF 4.020
- 5) Osada S, Imai H, Sasaki Y, Tanaka Y, Nonaka K, Yoshida K. Reconstruction method after pancreaticoduodenectomy. Idea to prevent serious complications. *J Pancreas*. 2012;13:1-6.
- 6) Osada S, Imai H, Sasaki Y, Tanaka Y, Tokuyama Y, Okumura N, Nonaka K, Takahashi T, Yamaguchi K, Yoshida K. Strategy for synchronous and multiple liver metastasis. *Hepatogastroenterol*. 2012; 59:198-203. IF 0.907
- 7) Osada S, Imai H, Sasaki Y, Yoshida K. Strategies for Synchronous and Multiple Metastatic Liver Tumors Designed from Epithelial-Mesenchymal Transition Concept. *Cancer Ther*. 2012;3:201-206.
- 8) Osada S, Imai H, Sasaki Y, Tanaka Y, Matsuhashi N, Okumura N, Nagase M, Nonaka K, Yoshida K. Therapeutic strategies for synchronous and multiple metastases from colorectal cancer. *Oncology Rev*. 2012;6:75-79.
- 9) Nawa M, Osada S, Morimitsu K, Nonaka K, Futamura M, Kawaguchi Y, Yoshida K. Growth effect of neutrophil elastase on breast cancer: favorable action of sivelestat and application to anti-HER2 therapy. *Anticancer Res*. 2012;32:13-19. IF 1.872

- 10) Tanahashi T, Osada S, Yamada A, Kato J, Yawata K, Mori R, Imai H, Sasaki Y, Saito S, Tanaka Y, Nonaka K, Yoshida K. Extracellular signal-regulated kinase and Akt activation play a critical role in the process of hepatocyte growth factor-induced epithelial-mesenchymal transition. *Int J Oncol.* 2012;42:556-564. IF 2.773
- 11) Matsuhashi N, Nagao N, Iwata Y, Lee S, Tokuhara T, Tanaka C, Kawai M, Kunieda K, Yoshida K. V-shaped lymph node dissection in laparoscopic distal gastrectomy: new technique of intra-abdominal dissection and surgical outcomes. *World Journal of Surgical Oncology.* 2012;10:205. IF 1.200
- 12) Fujii H, Iihara H, Ishihara M, Takahashi T, Yoshida K, Itoh Y. Improvement of Adherence to Guidelines for Antiemetic Medication Enhances Emetic Control in Patients with Colorectal Cancer Receiving Chemotherapy of Moderate Emetic Risk. *Anticancer Res.* 2013;33:5549-5556. IF 1.872
- 13) Takahashi T, Shibata Y, Tojima Y, Tsuboi K, Sakamoto E, Kunieda K, Matsuoka H, Suzumura K, Sato M, Naganuma T, Sakamoto J, Morita S, Kondo K. Multicenter phase II study of modified FOLFOX6 as neoadjuvant chemotherapy for patients with unresectable liver-only metastases from colorectal cancer in Japan: ROOF study. *Int J Oncol.* 2013;18:335-342. IF 2.773
- 14) Matsuhashi N, Osada S, Yamaguchi K, Saito S, Okumura N, Tanaka Y, Nonaka K, Takahashi T, Yoshida K. Oncologic outcomes of laparoscopic gastrectomy: a single-center safety and feasibility study. *Surgical Endoscopy.* 2013;27:1973-1979. IF 3.313
- 15) Matsuhashi N, Takahashi T, Nonaka K, Tanahashi T, Imai H, Sasaki Y, Tanaka Y, Okumura N, Yamaguchi K, Osada S, Yoshida K. Laparoscopic technique and safety experience with barbed suture closure for pelvic cavity after abdominoperineal resection. *World Journal of Surgical Oncology.* 2013;11:115. IF 1.200
- 16) Matsuhashi N, Maeda K, Kunieda K, Kaiho T, Funahashi K, Sasaki K, Yoshida K, Kon M, Kitagawa Y, Kono T, Hasegawa H, Sakamoto I, Furukawa I, Imazu Y, Morita S, Watanabe M, Saji S, Kanematsu T, Kitajima M. Clinical efficacy of daikenchuto for colon cancer patients having colectomy: 1-year follow-up of a randomized, double-blind, multicenter, placebo-controlled trial (JFMC39-0902). *Colorectal Disease.* 2013;15:90. IF 2.017
- 17) Matsuhashi N, Osada S, Yamaguchi K, Okumura N, Tanaka Y, Imai H, Sasaki Y, Nonaka RN, Takahashi T, Futamura M, Yoshida K. Long-term Outcomes of Treatment of Gastric Gastrointestinal Stromal Tumor by Laparoscopic Surgery: Review of the Literature and Our Experience. *Hepatogastroenterology.* 2013;60:2011-2013. IF 0.907
- 18) Sasaki Y, Osada S, Mori R, Imai H, Tanaka Y, Matsuhashi N, Okumura N, Nonaka K, Takahashi T, Yoshida K. Determining Timing of Hepatectomy for Colorectal Cancer with Distant Metastasis According to Imaging-Based Tumor Shrinkage Ratio. *Int J Med Sci.* 2013;10:1231-1241. IF 1.552
- 19) Mori R, Yoshida K, Tanahashi T, Yawata K, Kato J, Okumura N, Tsutani Y, Okuda M, Oue N, Yasui W. Decreased FANCF caused by 5FU contributes to the increased sensitivity to oxaliplatin in gastric cancer cells. *Gastric Cancer.* 2013;16:345-354. IF 4.828
- 20) Futamura M, Morimitsu K, Nawa M, Kanematsu M, Gotoh N, Yoshida K. Novel navigation surgery using image fusion of PET/CT and sonography for axillary neoplasm: First experience. *International Journal of Surgery Case Reports.* 2013;4:719-722.
- 21) Koizumi W, Kim YH, Fujii M, Kim HK, Imamura H, Lee KH, Hara T, Chung HC, Satoh T, Cho JY, Hosaka H, Tsuji A, Takagane A, Inokuchi M, Tanabe K, Okuno T, Ogura M, Yoshida K, Takeuchi M, Nakajima T, The JACCRO and KCSG Study Group. Addition of docetaxel to S-1 without platinum prolongs survival of patients with advanced gastric cancer: a randomized study (START). *J Cancer Res Clin.* 2014;140:319-328. IF 3.009
- 22) Oki E, Emi Y, Kusumoto T, Sakaguchi Y, Yamamoto M, Sadanaga N, Shimokawa M, Yamanaka T, Saeki H, Morita M, Takahashi I, Kakeji Y, Yamaguchi K, Yoshida K, Baba H, Maehara Y. Phase II Study of Docetaxel and S-1 (DS) as Neoadjuvant Chemotherapy for Clinical Stage III Resectable Gastric Cancer. *Ann Surg Oncol.* 2014;21:2340-2346. IF 3.943
- 23) Tsuburaya A, Yoshida K, Kobayashi M, Yoshino S, Takahashi M, Takiguchi N, Tanabe K, Takahashi N, Imamura H, Tatsumoto N, Hara H, Nishikawa K, Fukushima R, Nozaki I, Kojima H, Miyashita Y, Oba K, Buyse M, Morita M, Sakamoto J. Sequential paclitaxel followed by tegafur and uracil (UFT) or S-1 versus UFT or S-1 monotherapy as adjuvant chemotherapy for T4a/b gastric cancer (SAMIT): a phase 3 factorial randomised controlled trial. *Lancet Oncol.* 2014;15:886-893. IF 24.725
- 24) Tawada M, Hayashi S, Ikegame Y, Nakashima S, Yoshida K. Possible involvement of tumor-producing VEGF-A in the recruitment of lymphatic endothelial progenitor cells from bone marrow. *Oncol Rep.* 2014;32:2359-2364. IF 2.191
- 25) Osada S, Imai H, Sasaki Y, Tanaka Y, Okumura N, Nonaka K, Takahashi T, Yamaguchi K, Yoshida K. Surgical Indications for Multiple and Synchronous Liver Metastases from Colorectal Cancer. *Hepato-Gastroenterol.* 2014;61:722-726. IF 0.907
- 26) Matsuhashi N, Takahashi T, Nonaka K, Ichikawa K, Yawata K, Tanahashi T, Imai H, Sasaki Y, Tanaka Y, Okumura N, Yamaguchi K, Osada S, Yoshida K. A case report on efficacy of Abound™ for anti-EGFR antibody-associated skin disorder in metastatic colon cancer. *World J Surg Oncol.* 2014;12:35. IF 1.200

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：吉田和弘；厚生労働科学研究費補助金：治癒切除後の再発リスクが高い進行胃癌(スキルス胃癌など)に対する標準的治療の確立に関する研究；平成 24 年度；500 千円
- 2) 研究代表者：吉田和弘；厚生労働科学研究費補助金：国内外科手術成績を基礎とした経口抗がん剤による治癒切除大腸癌術後補助療法の確立；平成 24 年度；500 千円
- 3) 研究代表者：長田真二；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：凍結治療における抗腫瘍免疫賦活；平成 23-25 年度；3,900 千円(1,100：1,200：1,600 千円)
- 4) 研究代表者：吉田和弘；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：胃癌術後補助化学療法臨床試験における個別化学療法を目指したバイオマーカーの策定；平成 26-28 年度；3,700 千円(1,200：1,300：1,200 千円)
- 5) 研究代表者：奥村直樹；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：大腸癌肝転移のメカニズムと抗癌剤耐性について；平成 25-27 年度；2,900 千円(1,000：800：1,100 千円)
- 6) 研究代表者：土岐祐一郎(大阪大学医学系外科学講座消化器外科学)，研究分担者：吉田和弘；切除可能進行胃癌に対する網膜切除の意義に関する研究；平成 26 年度；1,100 千円
- 7) 研究代表者：長嶋文夫(杏林大学)，研究分担者：吉田和弘；高齢がんを対象とした臨床研究の標準化とその普及に関する研究；平成 26 年度；1,100 千円
- 8) 研究代表者：志田 大(国立がん研究センター中央病院)，研究分担者：吉田和弘；直腸癌側方骨盤リンパ節転移の術前診断の妥当性に関する観察研究；平成 26 年度；300 千円

2) 受託研究

- 1) 吉田和弘：StageⅢ結腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法として UFT/Leucovorin 療法と TS-1 療法の第Ⅲ相比較臨床試験および遺伝子発現に基づく効果予測因子の探索的研究；平成 20-24 年度；1,102 千円：(財)先端医療振興財団
- 2) 吉田和弘：初回 TS-1 療法に治療抵抗性を示した進行・再発胃癌に対する二次化学療法-CPT-11 単独療法 vs TS-1+CPT-11 併用化学療法の無作為化比較第Ⅱ/Ⅲ相臨床試験-；平成 20-25 年度；1,160 千円：NPO 法人日本がん臨床試験推進機構
- 3) 吉田和弘：StageⅢ結腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法として UFT/Leucovorin 療法と TS-1 療法の第Ⅲ相比較臨床試験および遺伝子発現に基づく効果予測因子の探索的研究；平成 20-24 年度；686 千円：(財)先端医療振興財団(追加分)
- 4) 吉田和弘：初回 TS-1 療法に治療抵抗性を示した進行・再発胃癌に対する二次化学療法-CPT-11 単独療法 vs TS-1+CPT-11 併用化学療法の無作為化比較第Ⅱ/Ⅲ相臨床試験-；平成 20-25 年度；892 千円：NPO 法人日本がん臨床試験推進機構
- 5) 吉田和弘：R05304020 の HER2 陽性の局所進行・再発又は転移性乳癌患者を対象とした第Ⅱ相臨床試験；平成 22-24 年度；3,884 千円：(財)先端医療振興財団
- 6) 吉田和弘：切除不能又は転移性の消化管間質腫瘍(GIST)を有する成人患者を対象にニロチニブとイマチニブの有効性及び安全性を比較するランダム化，非盲検，多施設共同，第Ⅲ相臨床試験；平成 22-25 年度；2,580 千円
- 7) 吉田和弘：ツムラ大建中湯エキス顆粒(医療用)使用成績調査；平成 22-25 年度；600 千円：(株)ツムラ
- 8) 吉田和弘：ベクティビックス特定使用成績調査-KRAS 遺伝子野生型の切除不能な進行・再発の結腸癌に関する調査-；平成 22-24 年度；450 千円：武田薬品工業(株)
- 9) 吉田和弘：エルプラット注射用 50 mg，同 100 mg・エルプラット点滴静注液 50 mg，同 100 mg 特定使用成績調査(結腸癌における術後補助化学療法)；平成 22-26 年度；450 千円：(株)ヤクルト
- 10) 吉田和弘：StageⅢb 大腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法としての UFT/Leucovorin 療法と TS-1/Oxaliplatin 療法のランダム化比較第Ⅲ相試験；平成 22-26 年度；2,520 千円(1,575：945 千円)：大鵬薬品工業(株)
- 11) 吉田和弘：化学療法未治療の進行・再発胃癌に対する S-1/CDDP 療法と S-1/L-OHP 療法の無作為化比較第Ⅲ相臨床試験；平成 22-25 年度；9,029 千円：(株)ヤクルト
- 12) 吉田和弘：StageⅡ/ StageⅢ結腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法としての mFOLFOX6 療法の認容性に関する検討；平成 23-28 年度；987 千円(231：756 千円)：財団法人がん就学的治療研究財団
- 13) 吉田和弘：切除不能進行・再発大腸癌に対する一次治療としての FOLFOX または

- FOLFIRI+panitumumab 併用療法の有効性・安全性に関する検討-第Ⅱ相試験-」；平成 23-26 年度；714 千円：財団法人先端医療振興財団
- 14) 吉田和弘：HER2 陽性・測定可能病変を有する進行再発胃癌に対する TS-1+CDDP+Trastuzumab(SPT) 3 週間サイクル併用療法第Ⅱ相試験；平成 23-27 年度；210 千円：特定非営利活動法人臨床試験推進機構
 - 15) 吉田和弘：治癒切除結腸癌(StageⅢ)を対象としたフッ化ピリミジン系薬剤を用いた術後補助化学療法の個別化治療に関するコホート研究；平成 22-25 年度；399 千円：(財)先端医療振興財団
 - 16) 高橋孝夫：術後補助化学療法におけるフッ化ピリミジン系薬剤の有用性に関する比較臨床試験；平成 18-27 年度；272.5 千円(136：136.5 千円)：(財)がん集学的治療研究財団
 - 17) 吉田和弘：HER2 陰性の手術不能又は再発乳癌患者を対象としたペバシズとペパクリタキセルの併用療法の有効性を検討する観察研究(JBCRG-05)；平成 25-29 年；50 千円：(一社)JBCRG
 - 18) 吉田和弘：大腸癌肝転移巣における抗癌剤効果規定因子に関する研究；平成 24-27 年；300 千円：(大)熊本大学
 - 19) 吉田和弘：エストロゲン受容体陽性 HER2 陰性乳癌に対する S-1 術後療法ランダム化比較第Ⅲ相試験(研究略称：POTENT)；平成 24-33 年；900 千円：(公財)パブリックヘルスリサーチセンター
 - 20) 吉田和弘：HER2 陽性・65 歳以上の進行再発胃癌に対するティーエスワン+トラスツズマブ併用療法の第Ⅱ相試験(JACCRO GC-06)；平成 24-28 年；210 千円：(特非)日本がん臨床試験推進機構
 - 21) 吉田和弘：KRAS 野生型切除可能大腸癌肝転移に対する術後補助化学療法 mFOLFOX6 と周術期化学療法 mFOLFOX6+セツキシマブの第Ⅲ相ランダム化比較試験(EXPERT)；平成 24-29 年；105 千円：(公財)先端医療振興財団
 - 22) 吉田和弘：トラスツズマブおよびタキサン系抗癌剤治療歴のある HER2 陽性の転移性または切除不能局所進行乳癌において、トラスツズマブ+カペシタビン併用療法(HX 療法)と、ラパチニブ+カペシタビン併用療法(LX 療法)とを比較するランダム化第Ⅱ相試験(WJOG6110B)；平成 24-28 年度；161,540 円：特定非営利活動法人 西日本がん研究機構
 - 23) 吉田和弘：StageⅢ結腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法としての mFOLFOX6 療法または XELOX 療法における 5-FU 系抗がん剤およびオキサリプラチンの至適投与期間に関するランダム化第Ⅲ相比較臨床試験 ACHIEVE Trial(JFMC47-1202-C3)；平成 24-33 年度；2,157,692 円：(財)がん集学的治療研究財団
 - 24) 吉田和弘：「KRAS 野生型の大腸癌肝限局転移に対する mFOLFOX+ペバシズマブ療法と mFOLFOX+セツキシマブ療法のランダム化第Ⅱ相臨床試験」および「KRAS 野生型の大腸癌肝限局転移に対する mFOLFOX+ペバシズマブ療法と mFOLFOX+セツキシマブ療法のランダム化比較第Ⅱ相試験における治療感受性予測の探索的研究」；平成 25-29 年度；92,308 円：イーピーエス㈱
 - 25) 吉田和弘：StageⅢ治癒切除胃癌症例における TS-1 術後補助化学療法の予後予測因子および副作用発現の危険因子についての探索的研究(JACCRO GC-07AR)；平成 25-33 年度；138,462 円：特定非営利活動法人 日本がん臨床試験推進機構
 - 26) 吉田和弘：ハイリスク消化管間質腫瘍(GIST)に対する完全切除後の治療に関する研究(略称：STAR ReGISTry)；平成 25-29 年度；48,463 円：公益財団法人先端医療振興財団
 - 27) 吉田和弘：根治切除不能大腸癌に対するセツキシマブを含む一次治療における有害事象と QOL の関連の検討；平成 25-28 年度；153,850 円：特定非営利活動法人疫学臨床試験研究支援機構
 - 28) 吉田和弘：切除不能な進行・再発大腸癌に対する 2 次治療としての XELIRI with/without Bevacizumab 療法と FOLFIRI with/without Bevacizumab 療法の国際共同第Ⅲ相ランダム化比較試験；平成 26-29 年度；76,923 円：特定非営利活動法人疫学臨床試験研究支援機構
- 3) 共同研究
- 1) 吉田和弘：がん薬物療法の個別適正化プログラム・遺伝子型検査を用いた薬物療法の個別適正化；平成 24-25 年度；200 千円：(独)理化学研究所
 - 2) 吉田和弘：遺伝子型検査を用いた薬物療法の個別適正化；平成 25-26 年度；400 千円：(独)理化学研究所
 - 3) 吉田和弘：「Docetaxel+CDDP+5-FU(DCF)化学療法を受ける食道癌患者に対する成分栄養剤エレンタール OR の有用性検討試験～feasibility study～(略称:EPOC study)」及び「食道癌化学療法における口腔粘膜炎症症割合の調査」；平成 26-27 年度；900 千円：味の素製薬㈱
 - 4) 吉田和弘：胃癌 5-FU 耐性株を用いた耐性機序および新規治療法の基礎的検討；平成 26-28 年度；8,000 千円：大鵬薬品工業㈱

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

吉田和弘：

- 1) 日本外科学会代議員(平成 26 年 2 月～現在)
- 2) 日本外科学会臨床研究推進委員(～現在)
- 3) 日本外科学会利益相反委員(～現在)
- 4) 日本外科学会学術委員(平成 24 年 5 月～現在)
- 5) 日本外科学会国際委員会委員(平成 25 年 5 月～現在)
- 6) 日本外科学会初期臨床研修制度検討ワーキンググループ委員(平成 25 年 5 月～現在)
- 7) 日本外科学会・医療安全管理委員 地域医療安全管理委員(～現在)
- 8) 日本外科学会専門医認定委員会試験委員(～現在)
- 9) 日本外科学会指定施設指定・指導医選定委員(平成 26 年 5 月～現在)
- 10) 日本癌学会評議員(～現在)
- 11) 日本胃癌学会代議員(平成 25 年 12 月～現在)
- 12) 日本胃癌学会財務委員(平成 24 年 4 月～現在)
- 13) 日本胃癌学会プログラム委員(平成 24 年 4 月～現在)
- 14) 日本胃癌学会研究推進委員(平成 26 年 4 月～現在)
- 15) 日本胃癌学会総務委員長(平成 26 年 4 月～現在)
- 16) 日本胃癌学会将来構想委員会(平成 26 年 4 月～現在)
- 17) 日本癌治療学会代議員(平成 25 年 8 月～現在)
- 18) 日本癌治療学会理事(平成 25 年 10 月～現在)
- 19) 日本癌治療学会本部幹事(～現在)
- 20) 日本癌治療学会教育委員(平成 24 年 1 月～現在)
- 21) 日本癌治療学会がん診療連携委員会 PAL プログラムワーキンググループ委員(平成 24 年 4 月～現在)
- 22) 日本癌治療学会臨床試験委員会委員長(平成 25 年 11 月～現在)
- 23) 日本癌治療学会国際委員会委員(平成 25 年 12 月～現在)
- 24) 日本外科系連合学会評議員(～現在)
- 25) 日本消化管学会代議員(平成 26 年度代議員会修了後～現在)
- 26) 日本消化器癌発生学会評議員(～現在)
- 27) 日本消化器癌発生学会理事(～現在)
- 28) 日本消化器癌発生学会倫理問題検討委員(～現在)
- 29) 日本消化器外科学会評議委員(～現在)
- 30) 日本消化器外科学会評議員選出委員会委員(平成 24 年 9 月～現在)
- 31) 日本消化器外科学会教育委員会委員(平成 24 年 9 月～現在)
- 32) 日本消化器外科学会専門医制度委員会委員(平成 26 年 9 月～現在)
- 33) 日本消化器外科学会将来構想委員会委員(平成 26 年 9 月～現在)
- 34) 日本消化器外科学会倫理委員会委員長(平成 26 年 9 月～現在)
- 35) 日本消化器外科学会データベース委員会委員(平成 26 年 9 月～現在)
- 36) 日本消化器外科学会 National Clinical Database 倫理委員(平成 26 年 9 月～現在)
- 37) 日本消化器病学会評議員(平成 25 年 1 月～現在)
- 38) 日本食道学会評議員(～現在)
- 39) 日本内視鏡外科学会評議員(～現在)
- 40) 日本内視鏡外科学会技術審査委員会委員(平成 25 年 10 月～現在)
- 41) 日本バイオセラピー学会評議員(～現在)
- 42) 日本バイオセラピー学会定款検討委員会委員(平成 24 年 1 月～現在)
- 43) 日本肥満症治療学会理事(～現在)
- 44) 日本臨床外科学会評議員(～現在)
- 45) 日本臨床外科学会学術委員会委員(～現在)
- 46) 日本消化器病学会東海支部幹事(～現在)
- 47) 東海外科学会評議員(～現在)

長田真二：

- 1) 日本外科学会代議員(～現在)
- 2) 日本消化器外科学会評議員(～現在)
- 3) 日本肝胆膵外科学会評議員(～現在)
- 4) 日本臨床外科学会評議員(～現在)
- 5) 日本外科系連合学会評議員(～現在)
- 6) 日本消化器癌発生学会評議員(～現在)
- 7) 東海外科学会評議員(～現在)

山口和也：

- 1) 日本胃癌学会評議員(～現在)
- 2) 日本内視鏡外科学会評議員(～現在)

高橋孝夫：

- 1) 日本臨床外科学会評議員(～現在)
- 2) 日本外科系連合学会評議員(～現在)
- 3) 日本消化器癌発生学会評議員(～現在)
- 4) 東海外科学会評議員(～現在)

2) 学会開催

吉田和弘：

- 1) 第6回日本癌治療学会アップデート教育コース(平成25年6月, 名古屋)

長田真二：

- 1) 第8回岐阜手術手技研究会(平成24年7月, 岐阜)

3) 学術雑誌

吉田和弘：

- 1) 胃がん perspective ; 主幹(～現在)
- 2) 日本外科学会英文誌 ; 編集委員(～現在)
- 3) 日本外科系連合学会 ; 編集委員会委員(～現在)
- 4) 日本消化器外科学会会誌 ; 編集委員会委員(～現在)
- 5) 日本胃癌学会会誌 ; 編集委員(平成26年4月～現在)
- 6) Gastric Cancer ; Editorial Board Member(～現在)
- 7) Surgery Today ; Editorial Board Member(～現在)
- 8) International Journal of Clinical Oncology ; Editorial Board Member(～現在)
- 9) International of Surgical Oncology ; Editorial Board Member(～現在)
- 10) World Journal of Clinical Oncology ; Editorial Board Member(～現在)

長田真二：

- 1) Anti-Cancer Agents in Medicinal Chemistry ; Editorial Board Member(～現在)
- 2) Journal of Clinical Oncology and Research ; Editorial Member(～現在)
- 3) Case Reports in Anesthesiology ; Editorial Member(～現在)
- 4) Austin Journal of Cancer & Clinical Research ; Editorial Member(～現在)
- 5) Journal of Hepatitis Research ; Editorial Member(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

吉田和弘：

- 1) 第84回日本胃癌学会総会(平成24年2月, 大阪, シンポジウム「胃癌化学療法の個別化に向けた biomarker 開発の進歩」座長)
- 2) 第45回制癌剤適応研究会(平成24年3月, 東京, 主題シンポジウム「治療標的-基礎探索研究」座長)
- 3) 第112回日本外科学会定期学術集会(平成24年4月, 千葉, パネルディスカッション「癌分子標的治療 up to date」座長)

- 4) 第 112 回日本外科学会定期学術集会(平成 24 年 4 月, 千葉, 臨床研究セミナー「外科臨床研究の実践」座長)
- 5) 10th International Conference of The Asian Clinical Oncology Society (ACOS)(2012.06, Seoul, Symposium: Multimodal Approaches for Gastric Cancer Treatment; Chair)
- 6) 10th International Conference of The Asian Clinical Oncology Society (ACOS) (2012.06, Seoul, Symposium: Surgical Treatment of Gastric Cancer in Eastern Country; Symposist)
- 7) 第 17 回日本緩和医療学会学術大会(平成 24 年 6 月, 神戸, パネルディスカッション「がんと診断された時からの緩和ケアの実践のためにー消化器外科医の立場からー」パネリスト)
- 8) 第 37 回日本外科系連合学会学術集会(平成 24 年 6 月, 福岡, スポンサーードシンポジウム「大腸癌術後補助化学療法のスランダーは何か」座長)
- 9) 第 37 回日本外科系連合学会学術集会(平成 24 年 6 月, 福岡, スポンサーードシンポジウム「切除不能な大腸癌肝転移症例における Adjuvant Surgery の意義」シンポジスト)
- 10) 第 67 回日本消化器外科学会総会(平成 24 年 7 月, 富山, ランチョンセミナー「食道癌治療成績向上へのコツとピットホール」演者)
- 11) 第 67 回日本消化器外科学会総会(平成 24 年 7 月, 富山, シンポジウム「進行再発胃癌に対する治療戦略」座長)
- 12) European Society for Medical Oncology 2012(2012.09, Vienne, Late-Breaking Abstracts: S-1 plus Docetaxel versus S-1 for Advanced Gastric Cancer (START Trial) Update 2012 (JACCRO and KCSG study Group); Speaker)
- 13) 第 50 回日本癌治療学会学術集会(平成 24 年 10 月, 横浜, 特別企画「チームがん医療ー支持療法における CDTMー」座長)
- 14) 第 50 回日本癌治療学会学術集会(平成 24 年 10 月, 横浜, PAL Meet the Professor2「胃がん」演者)
- 15) 第 50 回日本癌治療学会学術集会(平成 24 年 10 月, 横浜, 特別企画「Surgical treatment of gastric cancer in Japan」演者)
- 16) 第 50 回日本癌治療学会学術集会(平成 24 年 10 月, 横浜, シンポジウム「進行・再発胃癌における HER2 検査の実態」シンポジスト)
- 17) 第 23 回日本消化器癌発生学会総会(平成 24 年 11 月, 徳島, ワークショップ「消化器癌の治療効果予測・予後予測のためのバイオマーカー(大腸)」座長)
- 18) 第 74 回日本臨床外科学会総会(平成 24 年 11 月, 東京, ビデオシンポジウム「腹腔鏡下胃全摘術・噴門切除術とその再建術式」座長)
- 19) 第 5 回日本ロボット外科学会学術集会(平成 25 年 1 月, 名古屋, 「特別講演 1」座長)
- 20) 第 9 回日本消化管学会総会学術集会(平成 25 年 1 月, 東京, ワークショップ 12「切除不能進行消化管悪性腫瘍に対する化学療法著効例ー手術を加えるべきなのかー」座長)
- 21) 第 85 回日本胃癌学会総会(平成 25 年 2 月, 大阪, ワークショップ 6「切除不能進行胃癌におけるステント治療の役割ーステント or バイパサー」座長)
- 22) 第 85 回日本胃癌学会総会(平成 25 年 2 月, 大阪, ランチョンセミナー11「JACCRO 新規胃癌術後補助化学療法(START-2)」演者)
- 23) 第 85 回日本胃癌学会総会(平成 25 年 2 月, 大阪, 特別シンポジウム「日本における HER2 検査の実態: HER2 陽性胃癌疫学調査」シンポジスト)
- 24) 第 46 回制癌剤適応研究会(平成 25 年 3 月, 軽井沢, シンポジウム 3「分子標的治療時代の進行再発大腸癌」座長)
- 25) 第 113 回日本外科学会定期学術集会(平成 25 年 4 月, 福岡, Chugai Gastric Cancer Symposium「～胃癌の最新治療の総てが分かる～」座長)
- 26) 第 113 回日本外科学会定期学術集会(平成 25 年 4 月, 福岡, ビデオシンポジウム 7「腹腔鏡下幽門側胃切除術における工夫ーリンパ節郭清と再建ー」座長)
- 27) 第 113 回日本外科学会定期学術集会(平成 25 年 4 月, 福岡, ランチョンセミナー30「セツキシマブ併用療法ー真の力を考える～」座長)
- 28) 第 113 回日本外科学会定期学術集会(平成 25 年 4 月, 福岡, 特別企画「がん医療における外科治療の役割」演者)
- 29) 第 38 回日本外科系連合学会学術集会(平成 25 年 6 月, 東京, ランチョンセミナー6「大腸外科医が考える大腸癌化学療法」座長)
- 30) 日本消化器病学会東海支部第 118 回例会・第 29 回教育講演会(平成 25 年 6 月, 浜松, 教育講演 4「GIST 診療における最近の話題」座長)

- 31) 第6回日本癌治療学会アップデート教育コース(平成25年6月, 名古屋, 「胃がんの標準治療」座長)
- 32) ASCO 2013 Annual Meeting(2013.06, Chicago, Late-Breaking Abstract: SAMIT:A phase III randomized clinical trial of adjuvant paclitaxel followed by oral fluorinated pyrimidines for locally advanced gastric cancer; Speaker)
- 33) IGCC 2013 10th International Gastric Cancer Congress(2013.06, Verona, Poster 38: Lymphadenectomy; Chair)
- 34) IGCC 2013 10th International Gastric Cancer Congress(2013.06, Video 3: Reconstruction-OPEN; Speaker)
- 35) IGCC 2013 10th International Gastric Cancer Congress(2013.06, Workshop 3-2: S-1(Teysuno)-Based chemotherapy in Japan; Speaker)
- 36) 第68回日本消化器外科学会総会(平成25年7月, 宮崎, 企画関連口演49「高齢者癌5 上部消化管」座長)
- 37) 第45回胃病態機能研究会(平成25年8月, 名古屋, 特別発言「胃腫瘍性疾患治療の現状と将来展望」特別発言)
- 38) 1st International conference of FACO, 16th Annual Meeting of CSCO(2013.09, Xiamen, Keynote Speech: Update on treatment strategy and future perspective for advanced gastric cancer; Speaker)
- 39) 第51回日本癌治療学会学術集会(平成25年10月, 京都, 臓器別シンポジウム14「がん診療におけるCDTMを考える—医師・薬剤師協働薬物治療管理—」座長)
- 40) 第51回日本癌治療学会学術集会(平成25年10月, 京都, 学術セミナー41「大腸癌治療における新たなアプローチ」座長)
- 41) 第75回日本臨床外科学会総会(平成25年11月, 名古屋, ランチョンセミナー25「大腸癌一次化学療法における抗EGFR抗体薬のアドバンテージ」座長)
- 42) 第75回日本臨床外科学会総会(平成25年11月, 名古屋, 総会特別企画4「胃癌の化学療法」座長)
- 43) 第75回日本臨床外科学会総会(平成25年11月, 名古屋, 学会特別企画2「外科医の偏在は是正できるか」座長)
- 44) 第26回日本内視鏡外科学会総会(平成25年11月, 福岡, シンポジウム1「腹腔鏡補助下胃切除術の標準化はここまで来た」座長)
- 45) 第3回胃癌インタラクティブTVセミナー(平成25年12月, 東京, 「HER2陽性胃癌に対する治療戦略～日本からのデータをどう考えるか～」座長)
- 46) 日本消化器病学会東海支部第119回例会(平成25年12月, 名古屋, 教育講演会講演2「上部消化管疾患—今年のトピックス」座長)
- 47) 第50回日本腹部救急医学会総会(平成26年3月, 東京, 学術共催セミナー3「大腸癌化学療法におけるS-1の位置付けと実践活用」司会)
- 48) 第47回制癌剤適応研究会(平成26年3月, 名古屋, モーニングセミナー「消化器癌における化学療法の進歩とそのゆくえ」発表)
- 49) 第86回日本胃癌学会総会(平成26年3月, 横浜, スポンサーシンポジウム「HER2陽性胃がんの治療実態～HER2検査とトラスツズマブ治療の最適化」司会)
- 50) 第86回日本胃癌学会総会(平成26年3月, 横浜, パネルディスカッション1「切除不能進行胃癌に対するconversion surgery」司会)
- 51) 第86回日本胃癌学会総会(平成26年3月, 横浜, 基調講演「切除不能胃がんに対するconversion therapyの意義」演者)
- 52) 第86回日本胃癌学会総会(平成26年3月, 横浜, イブニングセミナー「胃癌に対する化学療法のbreakthroughとは?～現状のCLINICAL QUESTIONを考える～」演者)
- 53) 第86回日本胃癌学会総会(平成26年3月, 横浜, パネルディスカッション「切除可能胃癌に対するPaclitaxel/フッ化ピリミジン逐次併用による術後補助化学療法: SAMIT試験結果概要」発表)
- 54) 第86回日本胃癌学会総会(平成26年3月, 横浜, パネルディスカッション「術後補助化療の臨床試験JACCRO GC07の現況。」発表)
- 55) 第114回日本外科学会定期学術集会(平成26年4月, 京都, International Session 10「Upper gastrointestinal tract surgery」司会)
- 56) 第114回日本外科学会定期学術集会(平成26年4月, 京都, ランチョンセミナー「食道胃境界領域癌の治療とピットフォール」演者)
- 57) 第114回日本外科学会定期学術集会(平成26年4月, 京都, シンポジウム「Stage IV胃癌に対する

conversion therapy の意義」シンポジスト)

- 58) The 11th International Conference of the ACOS(2014.05, Taipei, Taiwan, Minimal Invasive Surgery for GI Cancer Workshop: Standard procedures for complete laparoscopic distal gastrectomy with D2 lymphadenectomy; Speaker)
- 59) 第 26 回日本肝胆膵外科学会学術集会(平成 26 年 6 月, 和歌山, 進行大腸癌において術前血清 CEA 値は肝転移発言を予測し得るか?) 発表)
- 60) 第 69 回日本消化器外科学会総会(平成 26 年 7 月, 福島, 教育ビデオ 2「胃癌におけるリンパ節郭清のポイントと術中トラブル対処法」司会)
- 61) 第 69 回日本消化器外科学会総会(平成 26 年 7 月, 福島, ランチョンセミナー14「GIST 治療の落とし穴～外科医と内科医からメッセージ～」司会)
- 62) 第 52 回日本癌治療学会学術集会(平成 26 年 8 月, 横浜, 教育セッション 01「胃癌」演者)
- 63) 第 52 回日本癌治療学会学術集会(平成 26 年 8 月, 横浜, Meet in PAL4「胃がん」演者)
- 64) 第 52 回日本癌治療学会学術集会(平成 26 年 8 月, 横浜, FACO Symposium「Significance of conducting gastric cancer clinical study and possible international clinical trials of FACO as the first challenge.」演者)
- 65) 第 52 回日本癌治療学会学術集会(平成 26 年 8 月, 横浜, シンポジウム 13「日本における臨床研究の現状と信頼回復の取組～臨床研究に関する倫理指針の見直しなどの動き～」司会)
- 66) 第 27 回日本内視鏡外科学会総会(平成 26 年 10 月, 盛岡, ワークショップ 26「高齢者に対する腹腔鏡下胃切除術の意義」司会)
- 67) The Scientific Meeting of the Japan-Hungary-Poland Surgical society(平成 26 年 10 月, Tokyo, Japan, Oral Session 7: Novel Surgical Technique; 司会)
- 68) 第 76 回日本臨床外科学会総会(平成 26 年 11 月, 郡山, パネルディスカッション 01「Stage IV 胃癌に対する外科治療」司会)
- 69) 日本消化器病学会東海支部第 121 回例会(平成 26 年 12 月, 名古屋, ランチョンセミナー1 司会)

長田真二:

- 1) 第 112 回日本外科学会定期学術集会(平成 24 年 4 月, 千葉, サージカルフォーラム「基礎-3(免疫治療)」座長)
- 2) 第 24 回日本肝胆膵外科学会・学術集会(平成 24 年 5 月, 大阪, ミニシンポジウム 1「borderline resectable 膵癌への治療戦略」シンポジスト)
- 3) 第 23 回日本消化器癌発生学会総会(平成 24 年 11 月, 徳島, ワークショップ「大腸癌肝転移に対する外科切除の適応基準」演者)
- 4) 第 25 回日本バイオセラピー学会学術集会総会(平成 24 年 12 月, 倉敷, 要望演題「外科的切除不能肝腫瘍に対する新たな治療戦略」演者)
- 5) 第 113 回日本外科学会定期学術集会(平成 25 年 4 月, 福岡, ビデオフォーラム 97「肝 手術手技+3」座長)
- 6) 第 25 回日本肝胆膵外科学会・学術集会(平成 25 年 6 月, 栃木, ミニシンポジウム 1「多発性肝転移に対する治療戦略」シンポジスト)
- 7) 第 25 回日本肝胆膵外科学会・学術集会(平成 25 年 6 月, 栃木, 要望ビデオセッション 21「腹腔鏡下膵切除」座長)
- 8) 第 68 回日本消化器外科学会総会(平成 25 年 7 月, 宮崎, ミニオーラル 175「消化器全般 予後」座長)
- 9) 第 75 回日本臨床外科学会総会(平成 25 年 11 月, 名古屋, パネルディスカッション 23「病診連携の現状と今後の課題一院内がんセンターボード(CB)会議の発展一」パネリスト)

山口和也:

- 1) 第 84 回日本胃癌学会総会(平成 24 年 2 月, 大阪, パネルディスカッション「StageIV胃癌に対する化学療法後の胃切除」パネリスト)
- 2) 第 37 回日本外科系連合学会学術集会(平成 24 年 6 月, 福岡, ビデオシンポジウム「腹腔鏡下噴門側胃切除術のリンパ節郭清と食道残胃吻合の工夫」シンポジスト)
- 3) (JDDW)第 10 回日本消化器外科学会大会(平成 24 年 10 月, 神戸, ワークショップ「予後からみた StageIV 胃癌に対する外科的切除の適応」演者)
- 4) 第 85 回日本胃癌学会総会(平成 25 年 2 月, 大阪, シンポジウム 3「StageIV 胃癌に対する外科的治

療への条件」シンポジスト)

- 5) 第 113 回日本外科学会定期学術集会(平成 25 年 4 月, 福岡, ビデオシンポジウム 7「完全鏡視下幽門側胃切除術のリンパ節郭清と再建の定型化」シンポジスト)
- 6) 第 38 回日本外科系連合学会学術集会(平成 25 年 6 月, 東京, ビデオシンポジウム 4「リニアステイプラーのみ使用した完全鏡視下胃切除術の再建法」シンポジスト)
- 7) 第 68 回日本消化器外科学会総会(平成 25 年 7 月, 宮崎, 要望ビデオ 6「腹腔鏡下胃切除術におけるリンパ節郭清の定型化とその意義」演者)
- 8) 第 86 回日本胃癌学会総会(平成 26 年 3 月, 横浜, スポンサーシンポジウム「HER2 陽性胃癌の治療実態～HER2 検査とトラスツズマブ治療の最適化」シンポジスト)
- 9) (JDDW)第 12 回消化器外科学会大会(平成 26 年 10 月, 神戸, ワークショップ 11「症例検討: 食道、胃」アンサーパッド)
- 10) 第 27 回日本内視鏡外科学会総会(平成 26 年 10 月, 盛岡, パネルディスカッション 10「腹腔鏡下幽門側胃切除術における術野展開の定型化」演者)
- 11) 日本消化器病学会東海支部第 121 回例会(平成 26 年 12 月, 名古屋, シンポジウム 1「上部消化管の新しい低侵襲治療の展開」司会)

高橋孝夫:

- 1) 第 8 回消化管学会総会学術集会(平成 24 年 2 月, 仙台, ワークショップ「切除不能・進行再発大腸癌に対し Adjuvant Surgery に持ち込むためには、どの治療方法が最適か?」演者)
- 2) 第 37 回日本外科系連合学会学術集会(平成 24 年 6 月, 福岡, パネルディスカッション「切除不能進行再発大腸癌に対する分子標的薬—Adjuvant Surgery に有用な薬剤は?—」パネリスト)
- 3) 第 67 回日本消化器外科学会総会(平成 24 年 7 月, 富山, パネルディスカッション「切除不能 StageIV 大腸癌の細分類: 新規抗癌剤導入後での検討」パネリスト)
- 4) 第 9 回日本消化管学会総会学術集会(平成 25 年 1 月, 東京, ワークショップ 12「切除不能・進行再発大腸癌に対する Adjuvant Surgery は本当に有効か?」演者)
- 5) 第 113 回日本外科学会定期学術集会(平成 25 年 4 月, 福岡, ディベート 3「進行下部直腸癌における側方リンパ節郭清の意義<リンパ節郭清 vs.化学放射線療法>」ディベーター)
- 6) 第 38 回日本外科系連合学会学術集会(平成 25 年 6 月, 東京, ワークショップ 6「大腸癌に対するチーム医療で行う外来化学療法」演者)
- 7) ASCO 2013 Annual Meeting(2013.06, Discussion of first-line treatment of Metastatic Colorectal Cancer; Discussant)
- 8) 第 11 回日本臨床腫瘍学会学術集会(平成 25 年 8 月, 仙台, International Session3「A phase III trial of SOX+Bev versus mFOLFOX6+Bev in patients with metastatic colorectal cancer: the SOFT study」演者)
- 9) 第 51 回日本癌治療学会学術集会(平成 25 年 10 月, 京都, イブニングセミナー06・ディスカッション「大腸がん化学療法の過去から未来—わが国から世界に向けたメッセージ—」ディスカッサント)
- 10) 第 51 回日本癌治療学会学術集会(平成 25 年 10 月, 京都, 臓器別シンポジウム 14「医師からの要望と期待—CDTM に繋がる当院での試み—」シンポジスト)
- 11) 第 51 回日本癌治療学会学術集会(平成 25 年 10 月, 京都, スポンサーシンポジウム 07「Treating mCRC patients with biologic agents and future for personalized treatments」シンポジスト)
- 12) 第 75 回日本臨床外科学会総会(平成 25 年 11 月, 名古屋, パネルディスカッション 07「進行再発大腸癌に対する Adjuvant surgery 施行後の長期予後」パネリスト)
- 13) 第 114 回日本外科学会定期学術集会(平成 26 年 4 月, 京都, ランチョンセミナー32「大腸癌術後補助化学療法の適切な選択と副作用対策」演者)

奥村直樹:

- 1) 第 67 回日本消化器外科学会総会(平成 24 年 7 月, 富山, 要望ビデオセッション「鏡視下噴門側胃切除術におけるリンパ節郭清の工夫」演者)
- 2) 第 286 回東海外科学会(平成 25 年 10 月, 岐阜, 若手奨励賞「消化器 1」座長)

田中善宏:

- 1) 第 67 回日本消化器外科学会総会(平成 24 年 7 月, 富山, 冠セッション「積極的栄養管理は食道癌化学療法になにをもたらすか」演者)

- 2) 第 75 回日本臨床外科学会総会(平成 25 年 11 月, 名古屋, ワークショップ 09 「静脈血栓塞栓症予防におけるエノキサパリンの有効性と発症予測因子の検討」 演者)
- 3) 第 69 回日本消化器外科学会総会(平成 26 年 7 月, 福島, シンポジウム 8 「食道癌と栄養」 シンポジスト)

佐々木義之 :

- 1) 第 74 回日本臨床外科学会総会(平成 24 年 11 月, 東京, シンポジウム 「腫瘍縮小速度からみた、術前化学療法としての FOLFOX+セツキシマブの有用性」 シンポジスト)
- 2) 第 113 回日本外科学会定期学術集会(平成 25 年 4 月, 福岡, シンポジウム 11 「大腸癌肝転移に対する化学療法施行時の腫瘍縮小方向についての検討」 シンポジスト)
- 3) 第 75 回日本臨床外科学会総会(平成 25 年 11 月, 名古屋, ワークショップ 03 「膵頭十二指腸切除術後 grade B/C 膵ろうの危険因子について」 演者)

棚橋利行 :

- 1) 第 75 回日本臨床外科学会総会(平成 25 年 11 月, 名古屋, シンポジウム 2 「80 歳以上の胃癌患者における手術・化学療法の検討」 シンポジスト)
- 2) 第 27 回日本内視鏡外科学会総会(平成 26 年 10 月, 盛岡, ワークショップ 26 「80 歳以上高齢者早期胃癌患者に対する腹腔鏡下胃切除術の短期成績」 演者)

森龍太郎 :

- 1) 第 22 回岐阜乳腺疾患カンファレンス(平成 26 年 10 月, 岐阜, パネルディスカッション 「実際の症例から学ぶ〜妊孕性を考慮した乳癌治療」 演者)

八幡和憲 :

- 1) 第 45 回制癌剤適応研究会(平成 24 年 3 月, 東京, ワークショップ 「胃癌細胞株に対する Vandetanib と 5-FU 併用による抗腫瘍効果の検討」 演者)

加藤順子 :

- 1) 第 45 回制癌剤適応研究会(平成 24 年 3 月, 東京, ワークショップ 「大腸癌細胞株 Kras 変異型での Ras をターゲットにした分子標的治療」 演者)

山田敦子 :

- 1) 第 112 回日本外科学会定期学術集会(平成 24 年 4 月, 千葉, サージカルフォーラム 「Vitamin K3 による新たなる分子標的治療」 演者)
- 2) 第 35 回日本癌局所療法研究会(平成 25 年 5 月, 神戸, 奨励賞 「肝腫瘍に対する凍結治療の有用性」 演者)
- 3) 第 25 回日本肝胆膵外科学会・学術集会(平成 25 年 6 月, 栃木, ミニシンポジウム 18 「進行肝腫瘍に対する抗腫瘍免疫賦活による治療戦略」 シンポジスト)
- 4) 第 26 回日本バイオセラピー学会学術集会総会(平成 25 年 12 月, 岩手, ワークショップ 1 「進行肝腫瘍に対する凍結治療の検討」 演者)

兼松昌子 :

- 1) 第 25 回日本バイオセラピー学会学術集会総会(平成 24 年 12 月, 倉敷, ワークショップ 「好中球エラストラーゼ阻害薬 "sivelestat" の癌抗体療法への応用」 演者)
- 2) 第 24 回日本消化器癌発生学会総会(平成 25 年 9 月, 石川, ワークショップ 1 「膵胆管合流異常に発生した胆嚢癌症例の検討」 演者)

福田賢也 :

- 1) 第 26 回日本バイオセラピー学会学術集会総会(平成 25 年 12 月, 岩手, ワークショップ 3 「EMT 発現機構への HGF の関与について」 演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 舘 正仁 : 日本消化器病学会東海支部第 117 回若手奨励賞(平成 24 年度)

- 2) 加納寛悠：日本消化器病学会東海支部研修医・専修医奨励賞(平成 24 年度)
- 3) 山田敦子：第 35 回日本癌局所療法研究会奨励賞(平成 25 年)
- 4) 久野真史：第 287 回東海外科学会若手奨励(平成 26 年)

9. 社会活動

吉田和弘：

- 1) 岐阜県医師会外科医部会顧問(～現在)
- 2) 疾病・障害認定審査会(厚生労働省健康局)委員(平成 25 年 2 月～現在)
- 3) 特定非営利活動法人日本がん臨床試験推進機構理事(平成 25 年 7 月～現在)
- 4) 特定非営利活動法人日本がん臨床試験推進機構臨床試験委員会委員(企画グループ 大腸癌プロトコール作成グループ)(平成 25 年 7 月～現在)
- 5) 日本学術会議日本学術会議連携会員(基礎医学委員会・臨床医学委員会合同 腫瘍分科会)(平成 26 年 3 月～現在)
- 6) 日本消化器病学会日本消化器病学会専門医制度審議会東海地区委員(平成 24 年度～現在)
- 7) 日本がん治療認定医機構暫定教育医(～現在)
- 8) 岐阜県がん対策推進協議会(平成 24 年 8 月～現在)
- 9) 公益財団法人がん集学的治療研究財団学術・企画委員会委員(平成 25 年 4 月～現在)
- 10) 岐阜県医師会代議員選挙長(～現在)
- 11) 岐阜県医師会岐阜大学医師会選挙区の選挙長(平成 25 年 12 月～現在)
- 12) 岐阜県総合医療センター腹腔鏡手術システム検討委員(平成 24 年 3 月～現在)
- 13) 国立がん研究センターがん対策情報センター医科歯科連携推進専門家パネル委員(平成 24 年 11 月～平成 25 年 3 月)
- 14) 岐阜県生活習慣病検診管理指導協議会胃がん部会委員(～平成 25 年 3 月)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 吉田和弘：中国の新聞(2012 年 5 月)
- 2) 高橋孝夫：医療の扉 外来化学療法におけるチーム医療岐阜大学付属病院：BS 日テレ(2012 年 4 月 22 日)
- 3) 吉田和弘：「医人伝」：中日新聞(2013 年 11 月 3 日)
- 4) 吉田和弘：病院の実力～岐阜編 74 食道癌：読売新聞(2014 年 3 月 2 日)
- 5) 高橋孝夫：病院の実力～岐阜編 83 大腸がん：読売新聞(2014 年 12 月 7 日)

12. 自己評価

評価

臨床、研究、教育において充実した実績を残していると評価できる。当科の症例数は増加傾向であり、早期癌における腹腔鏡手術の症例数の増加と手術時間の短縮、良好な手術成績を実現している。切除不能進行癌に対して、化学療法により奏効した症例に対して根治を目指した *adjuvant surgery* はオピニオンリーダーとして内外の医療の進歩に貢献している。さらに当講座では、「乳腺・分子腫瘍学」、「がん先端医療開発学講座」、「肝胆膵・がん集学的治療学講座」の 3 講座を設置し、各分野の専門性を特化した講座で臨床、研究、教育を行っている。

現状の問題点及びその対応策

臨床、教育、研究を推進してきたが、人材確保は極めて困難な状況である。医師不足と外科志望者の減少により症例の増加に手術や外来における臨床業務に多忙を極めており、人材確保と研究分野の充実が今後の課題である。

今後の展望

- ① 医療を通して社会貢献する事を目標に当科のかかげる臨床・研究・教育に関する目標に向かい一層努力邁進する事が重要である。
- ② 標準治療の確立のための臨床研究を当科から全国に発信する。

- ③ 外科治療に関してさらに多くの技術認定医，高度技能専門医，がん薬物療法専門医などの排出を目指す。
- ④ これらの教育に関して大学院生，学部生を含めた研究を展開する。

(4) 消化器病態学分野

1. 研究の概要

消化器，特に肝および大腸発癌機序の解明とその制御，慢性肝不全の病態と治療，消化器疾患の病態栄養と介入，消化管疾患に対する内視鏡治療の開発が主要テーマである。

1. 発癌の機序とその制御については，とくに核内受容体を分子標的とした研究を進めている。肝癌における核内受容体 RXR に関する基礎研究はほぼ終了し，大腸癌，膵癌など他の癌種へ演繹を開始した。肝癌に対して RXR リガンドを用いた発癌制御（予防）の大規模臨床試験第Ⅱ相に成功し，2015年3月現在，第Ⅲ相を展開中である。
2. 肥満・メタボリック症候群と肝および大腸発癌に関する基礎研究をすすめ，これら消化器発癌機序において key となる肥満関連分子異常を明らかにしてきた。現在，「メタボ肝癌」，「メタボ大腸癌」の抑制にむけた臨床研究を準備中である。
3. 慢性肝不全では宿主の栄養状態が，肝不全の病態進展・発癌に深く関与することを臨床的に証明した。本研究結果は，日米欧のガイドラインに採用されたため，現在その普及に努めている。また本邦における肝硬変患者の栄養状態が，肥満・栄養過剰にシフトしていることを明らかにした。これらの成果をふまえ，今後は運動処方への展開も含めた新たな栄養療法を確立すべく研究を展開中である。
4. 消化管疾患の内視鏡治療（上下部消化管，胆膵領域）は，最新のデバイスを用いた診療を実践し，多数の治療内視鏡症例を蓄積することで，その安全性と有用性に関する臨床研究論文に繋げている。

2. 名簿

准教授：	鶴見 寿	Hisashi Tsurumi
准教授：	荒木寛司	Hiroshi Araki (光学医療診療部)
講師：	清水雅仁	Masahito Shimizu
臨床講師：	原 武志	Takeshi Hara (臨床腫瘍学)
臨床講師：	白木 亮	Makoto Shiraki
臨床講師：	高井光治	Koji Takai (生体支援センター)
臨床講師：	末次 淳	Atsushi Suetugu (肝疾患診療支援センター)
講師：	兼村信宏	Nobuhiro Kanemura (輸血部)
助教：	井深貴士	Takashi Ibuka (地域腫瘍学)
臨床講師：	岩下拓司	Takuji Iwashita
臨床講師：	今井健二	Kenji Imai
臨床講師：	北川順一	Junichi Kitagawa (輸血部)
臨床講師：	境 浩康	Hiroyasu Sakai (生体支援センター)
助教：	久保田全哉	Masaya Kubota (地域腫瘍学)
医員：	河内隆宏	Takahiro Kouchi
医員：	上村真也	Shinya Uemura
医員：	中村 博	Hiroshi Nakamura
医員：	中村信彦	Nobuhiko Nakamura
医員：	小原功輝	Kouki Obara
医員：	丸田明範	Akinori Maruta
医員：	吉田健作	Kensaku Yoshida
医員：	高木結衣	Yui Takagi
医員：	山口公大	Kimihiro Yamaguchi

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 森脇久隆. 肝硬変治療における栄養療法と分岐鎖アミノ酸製剤の意義：市田隆文，平野克治監. 肝がん・肝硬変に対する栄養療法の新時代，東京：アークメディア；2012年：5-9.
- 2) 森脇久隆. 30.肝硬変，肝癌：馬場忠雄編. 新臨床栄養学，東京：医学書院；2012年：582-588.
- 3) 森脇久隆. 病態下の栄養指標の変化：鈴木 博，中村丁治編. 管理栄養士講座 臨床栄養学，東京：建帛社；2012年：124-139.
- 4) 鶴見 寿. 感染症 HIV 感染症：岡庭 豊編. Year note TOPICS 2012-2013，東京：メディックメディア；2012年：227-230.
- 5) 荒木寛司，森脇久隆. EVL+APC 地固め法：小原勝敏，鈴木博昭監. 村島直哉，國分茂博，近森文夫編.

- 食道・胃静脈瘤改訂第3版, 東京: 日本メディカルセンター; 2012年: 221-225.
- 6) 安田一朗. ② EPBD(内視鏡的乳頭バルーン拡張術)第3章 ERCP 関連手技 4 ERCP 関連手技に必要な処置具と手技の実際(胆道編): 糸井隆夫編. 胆膵内視鏡の診断・治療の基本手技(改訂第2版), 東京: 羊土社; 2012年: 185-188.
 - 7) 安田一朗. 第2章 Interventional EUSの極意 6 EUS-CGN&CPN: 小池和彦監. 伊佐山浩通編. 胆膵内視鏡治療-手技の極意とトラブルシューティング, 東京: 羊土社; 2012年: 152-158.
 - 8) 安田一朗. 第3章トラブルシューティング EST 後出血に対する Covered metallic stenting: 小池和彦監. 伊佐山浩通編. 胆膵内視鏡治療-手技の極意とトラブルシューティング, 東京: 羊土社; 2012年: 192.
 - 9) 向井 強, 安田一朗. 第4章トラブルシューティング 2 肝門部用メタリックステント: 小池和彦監. 伊佐山浩通編. 胆膵内視鏡治療-手技の極意とトラブルシューティング, 東京: 羊土社; 2012年: 245-250.
 - 10) 清水雅仁, 白木 亮, 森脇久隆. 肥満, インスリン抵抗性を有する肝発癌モデルにおける分岐鎖アミノ酸の発癌抑制効果: 市田隆文, 平野克治監. 肝がん・肝硬変に対する栄養療法の新時代, 東京: アークメディア; 2012年: 47-51.
 - 11) 白木 亮, 森脇久隆. 2.アンモニア代謝: 肝硬変の栄養治療とチーム治療 ~実践編~, 東京: メディカルレビュー社; 2012年: 84-91.
 - 12) 白木 亮. 大森正英編. 管理栄養士・栄養士必携 健康・栄養学用語辞典, 岐阜: 中央法規出版株式会社; 2012年.
 - 13) 白木 亮, 森脇久隆. 肝性脳症の診断基準と病型分類: 改訂第2版 臨床に役立つ消化器疾患の診断基準・病型分類・重症度の使い方, 東京: 日本メディカルセンター; 2012年: 209-214.
 - 14) 森脇久隆. 肝性脳症: 永井良三編. 今日の治療と看護, 東京: 南江堂; 2013年: 131-133.
 - 15) 森脇久隆. 分岐鎖アミノ酸療法: 日本肝臓学会編. 肝臓専門医テキスト, 東京: 南江堂; 2013年: 373-375.
 - 16) 森脇久隆. たんぱく・アミノ酸異常: 北村 聖編. 臨床病態学, 東京: スーベルヒロカワ; 2013年: 386-389.
 - 17) 森脇久隆. 肝不全・肝性脳症: 矢崎義雄編. 内科学第10版, 東京: 朝倉書店; 2013年: 1094-1096.
 - 18) 森脇久隆. 肝性脳症 消化器疾患: 菅野健太郎編. 最新の医療 2013-2014, 東京: 南江堂; 2013年: 336-339.
 - 19) 森脇久隆, 清水雅仁. ビタミンA(レチノイド・カロテノイド分画を含む): 和田 攻, 大久保昭行, 矢崎義雄, 大内尉義編. 臨床検査ガイド 2013~2014, 東京: 文光堂; 2013年: 283-286.
 - 20) 森脇久隆. LC 治療, HCC スクリーニング: 日本肝臓学会編. 慢性肝炎・肝硬変の診療ガイド 2013, 東京: 文光堂; 2013年: 57-65.
 - 21) 森脇久隆. その他の疾患⑥がん: 日本病態栄養学会編. 病態栄養ガイドブック, 大阪: メディカルレビュー社; 2013年: 287-289.
 - 22) 森脇久隆. 4.肝疾患予防: 浅香正博, 菅野健太郎, 千葉 勉編. 消化器病-基礎と臨床, 東京: 西村書店; 2013年: 1351-1353.
 - 23) 安田一朗, 中島賢憲. III. 胆膵-膵臓-感染性膵壊死に対する内視鏡的ネクロセクトミー: 林 紀夫, 日比紀文, 上西紀夫, 下瀬川徹編. Annual Review 消化器 2013, 東京: 中外医学社; 2013年: 211-215.
 - 24) 安田一朗. V. 助手(医師・内視鏡技師・看護師)のポイント Q28. 万全の ERCP 手技のために行うべきことは?: 糸井隆夫編. 【消化器内視鏡レクチャー】Vol.1, No. 3「とことん知りたい ERCP の手技のコツ」, 東京: 総合医学社; 2013年: 557-560.
 - 25) 清水雅仁, 森脇久隆. 大腸腺腫予防の基礎と臨床研究: 衛藤英男, 富田 勲, 榎村純一, 伊勢村護, 原 征彦, 横越英彦, 山本(前田)万里編. 新版 茶の機能, 東京: 農山漁村文化協会; 2013年: 53-58.
 - 26) 白木 亮, 森脇久隆. 3.肝疾患(肝硬変)患者の栄養管理 治療が劇的にうまくいく!: 大村健二, 葛谷雅文編. 高齢者の栄養 はじめの一步, 東京: 羊土社; 2013年: 59-65.
 - 27) 白木 亮, 寺倉陽一, 森脇久隆. アミノ酸とその分画: Medical Practice 編集委員会編. 臨床検査ガイド 2013~2014, 東京: 文光堂; 2013年: 214-217.
 - 28) 白木 亮, 森脇久隆. 運動エネルギー源としての BCAA と肝疾患における役割: 森脇久隆監. 肝疾患運動療法ハンドブック, 東京: メディカルレビュー社; 2013年: 83-98.
 - 29) 白木 亮, 森脇久隆. III治療編 3.栄養療法: HEPATOLOGY PRACTICE VOL.2 NASH・アルコール性肝障害の診療を極める 基本から最前線まで, 東京: 文光堂; 2013年: 177-180.
 - 30) 土井晋平, 安田一朗. 8章 消化器疾患各論 5.胆道疾患 3.急性胆嚢炎: 浅香正博, 菅野健太郎, 千葉 勉編. カラー版 消化器病学 基礎と臨床, 東京: 西村書店; 2013年: 1388-1390.
 - 31) 土井晋平, 安田一朗. II. 治療 6.胆膵内視鏡治療・腹腔神経叢ブロック: 小原勝敏監. 入澤篤志編. 消化器内視鏡プロフェッショナルの技-上級者へのステップアップのために-, 東京: 日本メディカルセンター; 2013年: 287-290.
 - 32) 兼村信宏, 鶴見 寿, 森脇久隆. 血小板輸血不応症: 日本臨床 血液症候群(第2版)(II), 大阪: 日本臨床社; 2013年: 393-395.
 - 33) 清水雅仁, 森脇久隆. I 基本編~肝癌を診る前の基礎知識~発癌抑制: 金子周一, 竹原徹郎, 持田 智編. HEPATOLOGY PRACTICE 肝癌の診療を極める, 東京: 文光堂; 2014年: 27-31.
 - 34) 高井光治, 今井健二, 華井竜徳, 宮崎恒起, 出田貴康, 清水雅仁, 森脇久隆. Sorafenib 投与下での併用治療は進行肝細胞癌の予後を延長するか: 高山利編. Sorafenib Practice Book vol.2, 東京: アークメディア; 2014年: 82-89.
 - 35) 高井光治, 今井健二, 華井竜徳, 宮崎恒起, 出田貴康, 清水雅仁, 森脇久隆. Sorafenib 投与下での併用

治療は進行肝細胞癌の予後を延長するか：The Liver Cancer Journal 2014.6Vol.6 No2：第9回日本肝がん分子標的治療研究会 優秀演題論文集，東京：メディカルレビュー社；2014年：51(119).

- 36) 白木 亮，華井竜徳，森脇久隆. 肥満 C 型慢性肝疾患患者における運動療法の検討：森脇久隆監. 川口 巧，清水雅仁編. 慢性肝不全 病像と治療の現状，東京：中外医学社；2014年：154-157.
- 37) 白木 亮，森脇久隆. 経腸栄養 A. 経腸栄養に必要な消化管の運動、消化・吸収の知識：一般社団法人 日本病態栄養学会編. 認定 NST ガイドブック 2014，東京：メディカルレビュー社；2014年：47-51.
- 38) 白木 亮，華井竜徳，森脇久隆. 10. 肝硬変：大村健二編. 栄養管理をマスターする 代謝の理解はなぜ大事？IV 様々な疾患、病態、時期の栄養管理を身につけよう，東京：文光堂；2014年：298-305.
- 39) 白木 亮. 蛋白・エネルギー低栄養 protein-energy malnutrition(PEM)：森脇久隆監. 川口 巧，清水雅仁編. 慢性肝不全 病像と治療の現状，東京：中外医学社；2014年：1-4.
- 40) 末次 淳，森脇久隆. 血液浄化療法：一般財団法人 日本消化器病学会監. 消化器病診療(第2版)編集委員会編. 消化器病診療第2版，東京：医学書院；2014年：363-365.
- 41) 白上洋平，清水雅仁. 哺乳類ラママイシン標的たんぱく質経路：森脇久隆，中村丁次，福島亮治，佐々木雅也，深柄和彦編. 栄養一評価と治療，大阪：メディカルレビュー社；2014年：230-233.
- 42) 華井竜徳，白木 亮，清水雅仁，森脇久隆. 肥満・サルコペニア(運動療法を含めて)：森脇久隆監. 川口 巧，清水雅仁編. 慢性肝不全 病像と治療の現状，東京：中外医学社；2014年：35-41.
- 43) 中村信彦，鶴見 寿. 濾胞性リンパ腫における血清可溶性 IL-2 受容体の予後因子としての意義：血液内科，東京：化学評論社；2014年：79-84.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 森脇久隆. 慢性肝疾患の病態栄養とその管理—医師の立場から，成人病と生活習慣病 2012年；42巻：213-216.
- 2) 森脇久隆，白木 亮，華井竜徳. 栄養療法のあり方，medicina 2012年；49巻：1178-1181.
- 3) 森脇久隆. autophagy hMF fibrogenesis, Rev Gastro CGH 2012年；7巻：43-46.
- 4) 安田一朗，土井晋平，森脇久隆. 「必携 内視鏡リファレンスブック 2012」EUS ガイド下腹腔神経叢・神経節ブロック，消化器内視鏡 2012年；24巻：682-686.
- 5) 安田一朗. 「日本胆道学会認定指導医養成講座」総胆管結石治療における EST と EPBD，胆道 2012年；26巻：162-168.
- 6) 安田一朗. 特集「内視鏡 もう一工夫」各論【EUS】EUS で胆管が描出できなかつたら，消化器内視鏡 2012年；24巻：1545-1547.
- 7) 向井 強，安田一朗，中島賢憲，土井晋平，岩下拓司，富田栄一，森脇久隆. 特集 II 「非切除胆道癌の治療」9. 非切除胆道癌に対する胆道ステントの選択方針，消化器内科 2012年；55巻：382-391.
- 8) 向井 強，安田一朗，中島賢憲，土井晋平，岩下拓司，富田栄一，森脇久隆. 特集：胆道ステントの新しい潮流—開発コンセプトとステント選択を学ぶ—：悪性中下部胆管閉塞に対する大口径(12mm)の Covered Metallic Stent：Niti—STM SUPREMO—12 の初期成績，胆と膵 2012年；33巻：795-802.
- 9) 清水雅仁，白木 亮，森脇久隆. 「BCAA による予後改善と肝発癌予防」，医学のあゆみ 2012年；240巻：782-786.
- 10) 岩下拓司，安田一朗，土井晋平，森脇久隆，Lee John G., Chang Kenneth J. 悪性胆管閉塞に対する胆管ドレナージ ランデブー法(解説/特集)，消化器内視鏡 2012年；24巻：303-307.
- 11) 岩下拓司，安田一朗，上村真也，山内貴裕，土井晋平，中島賢憲，向井 強，富田栄一，森脇久隆. 特集：胆道ステントの新しい潮流—開発コンセプトとステント選択を学ぶ—：良性胆管狭窄に対する covered self-expandable metallic stent の有用性，胆と膵 2012年；33巻：827-831.
- 12) 森脇久隆. BCAA, アミノ酸研究 2012年；6巻：25-28.
- 13) 村松博士，川口 巧，鈴木孝知，佐田通夫，森脇久隆. 肝疾患患者の検査前補食に関するアンケート調査結果，静脈経腸栄養 2012年；27巻：1369-1375.
- 14) 森脇久隆. レチノイド，ビタミン(学会賞) 2012年；86巻：665-670.
- 15) 安田一朗，中島賢憲，向井 強，岩下拓司，土井晋平，山内貴裕，上村真也，森脇久隆，糸井隆夫. 特集：胆膵内視鏡のビデオライブデモ 2012 マスターによるテクニックの解説とビデオライブデモ 感染性膵壊死に対する内視鏡的ネクロセクター(DVD 付き)，胆と膵 2012年；33巻臨時増刊特大号：1081-1084.
- 16) 安田一朗，糸井隆夫，伊佐山浩通，伊藤 啓，瀧沼朗生. 特集：胆膵内視鏡のビデオライブデモ 2012 座談会「進化する胆膵内視鏡をいかに学び、そして伝承していくか」，胆と膵 2012年；33巻臨時増刊特大号：1119-1131.
- 17) 安田一朗. 内視鏡的乳頭バルーン拡張術の治療成績と長期予後，胆道 2012年；26巻：691-698.
- 18) 向井 強，安田一朗，中島賢憲，土井晋平，岩下拓司，富田栄一，森脇久隆. 特集【胆膵ステントの新しい潮流—開発コンセプトとステント選択を学ぶ—】 悪性中下部胆管閉塞に対する大口径(12mm)の covered metallic stent:Niti-S SUPREMO-12 の初期成績，胆と膵 2012年；33巻：795-802.
- 19) 白木 亮，華井竜徳，森脇久隆. 間接熱量計を用いた肝硬変患者の栄養管理，静脈経腸栄養 2012年；27巻：37-41.
- 20) 岩下拓司，安田一朗，上村真也，山内貴裕，土井晋平，中島賢憲，向井 強，富田栄一，森脇久隆. 特集【胆

- 膵ステントの新しい潮流・開発コンセプトとステント選択を学ぶ】 良性胆管狭窄に対する covered self-expandable metallic stent の有用性, 胆と膵 2012 年; 33 巻: 827-831.
- 21) 土井晋平, 安田一朗, 山内貴裕, 河口順二, 上村真也, 戸田勝久, 森脇久隆. 経口胆道鏡下レーザー碎石術が有用であった総胆管結石嵌頓の 2 例, 胆道 2012 年; 26 巻: 720-726.
 - 22) 沖田 極, 山下智省, 市川辰樹, 川口 巧, 白木 亮. 高アンモニア血症・肝性脳症の治療 up-date, Progress in Medicine 2012 年; 32 巻: 2124-2129.
 - 23) 糸井隆夫, 祖父尼淳, 糸川文英, 栗原俊夫, 土屋貴愛, 石井健太郎, 辻修二郎, 池内信人, 殿塚亮祐, 本定三季, 安田一朗, 森安史典. 特集【急性膵炎の診断と治療:最新の動向】 感染性膵壊死(WOPN を含む)に対する治療 内視鏡的アプローチ, 消化器外科 2012 年; 35 巻: 1783-1793.
 - 24) 森脇久隆. 非代償性肝硬変に対する抗ウイルス薬の効果と門脈圧亢進症, 日本門脈圧亢進症学会雑誌 2013 年; 19 巻: 51.
 - 25) 森脇久隆. ヒト/マウス組織の活性化星細胞は脂肪滴のオートファジーによって遊離される脂肪酸をエネルギー源として用い線維形成を促進する, Rev Gastro CGH 2013 年; 7 巻: 42-46.
 - 26) 森脇久隆. 肝硬変, 細胞 2013 年; 45 巻: 232-235.
 - 27) 森脇久隆. 非アルコール性脂肪性肝疾患と肝細胞癌リスクの関連—システマティック・レビューに基づいて, Rev Gastro CGH 2013 年; 8 巻: 31-37.
 - 28) 森脇久隆. 巻頭言, Nutr Support J 2013 年; 4 巻(特別号).
 - 29) 荒木寛司, 森脇久隆. 【あなたも名医!患者さんのむくみ、ちゃんと診ていますか? 背景疾患をしっかりと見抜こう】 むくみ+下痢(蛋白漏出性胃腸症)(解説/特集), jmed mook 2013 年; 27 号: 69-74.
 - 30) 安田一朗, 岩下拓司, 土井晋平, 上村真也, 馬淵正敏, 森脇久隆. 特集: 消化器疾患における超音波内視鏡検査—現況と将来展望— EUS ガイド下治療の現況と将来展望 EUS ガイド下腹腔神経叢・神経節ブロック, 最新医学 2013 年; 68 巻: 1751-1755.
 - 31) 安田一朗, 糸井隆夫, 中島賢憲, 向井 強, 岩下拓司, 土井晋平, 上村真也, 馬淵正敏, 森脇久隆. 特集: 知っていますか? 急性膵炎はこう治す! 感染性膵壊死に対する内視鏡的ネクロセクトミー, 胆と膵 2013 年; 34 巻: 1079-1083.
 - 32) 向井 強, 安田一朗, 中島賢憲, 土井晋平, 岩下拓司, 富田栄一, 森脇久隆. 特集【胆膵内視鏡新潮流】膵腫瘍に対する内視鏡的抗腫瘍療法・緩和治療切除不能膵癌に対する胆道ドレナージの現況, 肝胆膵 2013 年; 66 巻: 39-45.
 - 33) 向井 強, 安田一朗, 中島賢憲, 土井晋平, 岩下拓司, 富田栄一, 森脇久隆. 特集/ドレナージ大全 I. 胆道ドレナージ術: 悪性肝門部胆道閉塞非切除例に対する内視鏡的ドレナージ, 胆と膵 2013 年; 34 巻: 851-862.
 - 34) 向井 強, 安田一朗, 中島賢憲, 土井晋平, 岩下拓司, 富田栄一, 森脇久隆. 特集【非切除胆道癌の治療】非切除胆道癌に対する胆道ステントの選択方法, 消化器内科 2013 年; 55 巻: 382-391.
 - 35) 岩田圭介, 安田一朗, 塩屋正道, 向井 強, 中島賢憲, 土井晋平, 岩下拓司, 富田栄一, 森脇久隆. 超音波内視鏡下腹腔神経叢ブロックの除痛効果に影響を及ぼす因子の検討, Gastroenterol Endosc 2013 年; 55 巻: 1868-1875.
 - 36) 白木 亮, 森脇久隆. トランスフェリン 検査値を読む, 臨床雑誌 内科 6 増大号 2013 年; 111 巻: 1207.
 - 37) 白木 亮, 森脇久隆. レチノール結合蛋白 検査値を読む, 臨床雑誌 内科 6 増大号 2013 年; 111 巻: 1281-1282.
 - 38) 白木 亮, 森脇久隆. トランスサイレチン(プレアルブミン) 検査値を読む, 臨床雑誌 内科 6 増大号 2013 年; 111 巻: 1283.
 - 39) 白木 亮. 研究とはなんだろう?—公的研究の役割とその進め方② チームで行う研究-各分野からのアプローチ 「内科」からのアプローチ, 臨床栄養 2013 年; 123 巻: 646-648.
 - 40) 岩下拓司, 安田一朗, 土井晋平, 森脇久隆, Lee John G, Chang Kenneth J. 【胆膵疾患に対する Interventional EUS の新展開】胆管挿管困難例に対する EUS ガイド下ランデブー法(解説/特集), 日本消化器病学会雑誌 2013 年; 110 巻: 585-591.
 - 41) 岩下拓司, 安田一朗, 土井晋平, 森脇久隆. 特集【消化器領域における診断内視鏡-モダリティの進歩とその活用法】内視鏡機器の進歩と活用法 超音波内視鏡(解説/特集), 内科 2013 年; 111 巻: 491-494.
 - 42) 岩下拓司, 安田一朗, 土井晋平, 上村真也, 馬淵正敏, 森脇久隆. 特集【胆膵内視鏡新潮流】胆道疾患に対する新しい内視鏡手技 胆道狭窄に対する新診断モダリティ: Spy Glass と Confocal laser-induced endomicroscopy(解説/特集), 肝胆膵 2013 年; 66 巻: 135-139.
 - 43) 土井晋平, 安田一朗, 森脇久隆. 特集: 胆管・膵管拡張をみたら内視鏡的治療手技内視鏡的乳頭バルーン拡張術の実際, 消化器内視鏡 2013 年; 25 巻: 324-327.
 - 44) 上村真也, 岩下拓司, 安田一朗, 奥野 充, 馬淵正敏, 土井晋平, 森脇久隆. 悪性胆道閉塞に対して EUS ガイド下順行性胆管ステント留置術を行った 1 症例, 肝胆膵治研誌 2013 年; 11 巻: 70-75.
 - 45) 篠浦 丞, 岩下拓司, 中井陽介, Chang Kenneth J. 【胆膵内視鏡新潮流】膵腫瘍の超音波内視鏡診断 膵嚢胞性腫瘍に対する interventional EUS(解説/特集), 肝・胆・膵 2013 年; 66 巻: 33-38.
 - 46) 白木 亮, 森脇久隆. 特集 ウイルス性肝炎の最近の話題—B 型・C 型肝炎を中心にウイルス性慢性肝炎・肝硬変に対する栄養療法・運動療法, 成人病と生活習慣病 2013 年; 43 巻: 1407-1411.
 - 47) 清水雅仁, 森脇久隆. 非環式レチノイドによる肝発がん化学予防, ビタミン 2013 年; 87 巻: 90-94.
 - 48) 清水雅仁. チームで行う研究—各分野からのアプローチ—「基礎」からのアプローチ, 臨床栄養 2013 年; 123 巻: 642-645.

- 49) 森脇久隆. 慢性肝不全の治療を巡る最近の話題 栄養サポートを中心に, 栄養・評価と治療 2014年;31巻:156.
- 50) 鶴見 寿. 移植非適応骨髄腫の治療(教育講演), 臨床血液 2014年;55巻:319-327.
- 51) 島崎 信, 華井竜徳, 森脇久隆. 当院における半固形化栄養短時間注入法の現状と問題 ベグロックの導入による業務改善の期待, 静脈経腸栄養 2014年;29巻:356.
- 52) 荒木寛司. 下部消化管疾患の内視鏡診断と内科的治療, 岐阜県医師会医学雑誌 2014年;27巻:21-25.
- 53) 荒木寛司. 特集 II 門脈圧亢進症の治療法の選択とその成績 EVL を中心とした食道静脈瘤および噴門部胃静脈瘤治療の長期成績, 消化器内科 2014年;59巻:155-163.
- 54) 安田一朗, 岩下拓司, 土井晋平, 上村真也, 馬淵正敏, 奥野 充, 森脇久隆. 見直される膵癌診療の新展開 治療における新展開 緩和医療 切除不能膵癌に対する EUS ガイド下腹腔神経叢・神経節ブロックによるペインコントロール, 臨床外科 2014年;69巻:74-77.
- 55) 向井 強, 安田一朗, 中島賢憲, 土井晋平, 岩下拓司. 消化器疾患に対する内視鏡的アプローチの最新情報 内視鏡的胆道ステント留置術の最新情報, 映像情報 Medical 2014年;46巻:798-807.
- 56) 向井 強, 安田一朗, 中島賢憲, 土井晋平, 岩下拓司. 手技の解説 悪性肝門部胆管閉塞に対する内視鏡的ステント留置術, Gastroenterological Endoscopy 2014年;56巻:71-78.
- 57) 大澤陽介, 森脇久隆. 肝線維化における腫瘍壊死因子(TNF- α)の役割, 肝臓 2014年;54巻 Suppl.3:A749.
- 58) 清水雅仁, 森脇久隆. 非環式レチノイドによる肝細胞癌の抑制:臨床的検討, 医学のあゆみ 2014年;249巻:1159-1163.
- 59) 清水雅仁, 白木 亮, 森脇久隆. 基礎から臨床応用へのトランスレーショナルリサーチ—分岐鎖アミノ酸製剤を用いた肥満・過栄養に関連した肝発癌の抑制, 臨床栄養 2014年;125巻:148-154.
- 60) 白木 亮, 森脇久隆. 肝硬変—診断と治療の進歩 6.肝硬変治療の進歩 (3)蛋白質・エネルギー低栄養と late evening snack の効果, 臨床消化器内科 2014年;29巻:441-446.
- 61) 末次 淳, 森脇久隆. 劇症肝炎における TNF- α を介した NF- κ B 活性調節の細胞死および細胞生存シグナルへの影響, 肝胆膵 2014年;68巻:513-518.
- 62) 岩下拓司, 上村真也, 奥野 充, 土井晋平, 小澤範高, 馬淵正敏, 安田一朗. 消化器疾患に対する内視鏡的アプローチの最新情報 EUS&EUS-FNA の最新情報 画像診断と FNA のテクニック, 映像情報 Medical 2014年;46巻:829-832.
- 63) 岩下拓司, 安田一朗, 土井晋平, 上村真也, 馬淵正敏, 森脇久隆. 悪性胆道狭窄に対する診断・治療の進歩 超音波内視鏡下胆管ドレナージ, 臨床消化器内科 2014年;29巻:1241-1246.
- 64) 岩下拓司, 安田一朗, 土井晋平, 上村真也, 馬淵正敏, 森脇久隆. 乳頭を攻略する・カニューレシヨンの基本と挿入困難例への対処 EUS ガイド下ランデブー法による胆管カニューレシヨンの基本と挿入困難例への対処 EUS ガイド下ランデブー法による胆管カニューレシヨンの基本と挿入困難例への対処, 消化器内視鏡 2014年;26巻:238-240.
- 65) 岩下拓司, 安田一朗, 土井晋平, 上村真也, 馬淵正敏, 森脇久隆. 消化管術後例における胆膵治療内視鏡上部消化管術後例における超音波内視鏡ガイド下アプローチによる胆道内視鏡治療, 胆と膵 2014年;35巻:193-197.
- 66) 土井晋平, 安田一朗, 岩下拓司, 上村真也, 馬淵正敏, 中島賢憲, 向井 強, 富田栄一, 岩田圭介, 安藤暢洋, 山内貴裕, 森脇久隆. 膵炎に対する低侵襲的治療の進歩 慢性膵炎の EUS 下腹腔神経叢ブロック, 胆と膵 2014年;35巻:463-467.
- 67) 土井晋平, 安田一朗, 向井 強, 岩下拓司, 上村真也, 馬淵正敏, 小澤範高, 中島賢憲, 富田栄一, 岩田圭介, 安藤暢洋, 山内貴裕, 森脇久隆. 内視鏡的胆管結石治療の新展開—基本手技から最新情報まで— 短期・長期成績からみた内視鏡的乳頭括約筋切開術(EST)と内視鏡的乳頭バルーン拡張術(EPBD)の比較, 胆と膵 2014年;35巻:517-520.
- 68) 土井晋平, 安田一朗, 馬淵正敏, 小澤範高, 松本光太郎, 山田はな恵, 網島弘道, 梶山祐介, 菊池健太郎, 岩下拓司, 岩田圭介, 向井 強. ここまで進歩した胆・膵 EUS をどう使いこなすか膵癌の EUS 下神経ブロック オビオイドとの使い分けは?, 胆と膵 2014年;35巻:767-771.

総説 (欧文)

- 1) Yasuda I, Mukai T, Doi S, Tomita E, Moriwaki H. Temporary placement of covered self-expandable metallic stents in the management of benign biliary strictures. Dig Endosc. 2012;24(Suppl 1):28-33.
- 2) Yasuda I. Histological sampling using the Expect 19ga Flex Needle. Access (Boston Scientific Publication). 2012;Issue 1:6.
- 3) Oketani M, Ido A, Nakayama N, Takikawa Y, Naiki T, Yamagishi Y, Ichida T, Mochida S, Onishi S, Tsubouchi H. Intractable Hepato-Biliary Diseases Study Group of Japan: Etiology and prognosis of fulminant hepatitis and late-onset hepatic failure in Japan: Summary of the annual nationwide survey between 2004 and 2009. Hepatol Res. 2013;43:97-105.
- 4) Tanaka T, Shimizu M, Kochi T, Moriwaki H. Chemical-induced carcinogenesis. J Exp Clin Med. 2013;5:203-209.
- 5) Doi S, Yasuda I. Reply to Dr. Sahai. Endoscopy. 2013;45:854.
- 6) Shimizu M, Shirakami Y, Hanai T, Imai K, Suetsugu A, Takai K, Shiraki M, Moriwaki H. Pharmaceutical and nutraceutical approaches for preventing liver carcinogenesis: Chemoprevention of hepatocellular carcinoma using acyclic retinoid and branched-chain amino acids. Mol Nutr Food Res. 2014;58:124-135.
- 7) Iwashita T, Doi S, Yasuda I. Endoscopic ultrasound-guided biliary drainage: a review. Clin J

Gastroenterol. 2014;7:94-102.

- 8) Shirakami Y, Shimizu M, Kubota M, Araki H, Tanaka T, Moriwaki H, Seishima M. Chemoprevention of colorectal cancer by targeting obesity-related metabolic abnormalities. *World J Gastroenterol.* 2014;20:8939-8946.
- 9) Sakai H, Shimizu M, Moriwaki H. A role for acyclic retinoid in the chemoprevention of hepatocellular carcinoma: Therapeutic strategy targeting phosphorylated retinoid X receptor- α . *Diseases.* 2014;2:226-242.
- 10) Watanabe N, Shimizu M, Kochi T, Shirakami Y, Tanaka T. Esophageal carcinogenesis. *OJPathology.* 2014;4:151-170.

原著 (和文)

- 1) 清水雅仁, 森脇久隆. 非環式レチノイドによる肥満関連肝腫瘍形成の抑制, *ビタミン* 2012年; 86巻: 309-312.
- 2) 白木 亮, 寺倉陽一, 西村佳代子, 村上啓雄, 森脇久隆. 肝硬変患者の就寝前軽食導入の指標についての検討, *栄養-評価と治療* 2012年; 29巻: 37-40.
- 3) 大野智彦, 白上洋平, 清水雅仁, 久保田全哉, 境 浩康, 安田陽一, 河内隆宏, 鶴見 寿, 森脇久隆. 非環式レチノイドと FXR リガンド GW4064 併用による肝がん細胞の増殖抑制, *Vitamins (Japan)* 2012年; 86巻; 539-541.
- 4) 富松英人, 後藤雪乃, 青松昭徳, 野田佳史, 大野裕美, 川田紘資, 櫻井幸太, 五島 聡, 近藤浩史, 荒木寛司, 兼松雅之. CT colonography(大腸 CT)の現状, *臨床放射線* 2012年; 57巻: 1026-1036.
- 5) 大島靖広, 馬淵正敏, 小原功輝, 岩砂淳平, 安藤暢洋, 岩田圭介, 芋瀬基明, 清水省吾, 安田一朗, 松橋延壽, 前田健一, 河合雅彦, 岩田 仁, 國枝克行, 杉原潤一. 胆道出血を伴う胆嚢小細胞癌の1症例 肝胆膵治研誌 2012年; 10巻: 67-72.
- 6) 安藤暢洋, 加藤潤一, 馬淵正敏, 小原功輝, 岩砂淳平, 大島靖広, 岩田圭介, 芋瀬基明, 大西隆哉, 清水省吾, 杉原潤一, 岩田 仁, 安田一朗, 森脇久隆. 膵漿液性嚢胞腺腫に膵腺扁平上皮癌を合併した1例, *日消誌* 2012年; 109巻: 442-450.
- 7) Harada N, Tomita M, Kimura A, Koumura A, Hayashi Y, Hozumi I, Kanemura N, Moriwaki H, Sobue G, Inuzuka T. Case report: Two cases of neurolymphomatosis as a manifestation of relapsed non-Hodgkin lymphoma. *Nihon Naika Gakkai Zasshi.* 2012;101:157-160.
- 8) 馬淵量子, 後藤尚絵, 柴田悠平, 中村信彦, 兼村信宏, 高井光治, 清水雅仁, 原 武志, 安田一朗, 荒木寛司, 鶴見 寿, 森脇久隆. R-CHOP 療法で治療された濾胞性リンパ腫における治療前血清可溶性インターロイキン2受容体の予後因子としての意義, *岐阜県内科医会雑誌* 2012年; 26巻: 33-38.
- 9) 白木 亮, 華井竜徳, 森脇久隆. 肝硬変患者の栄養状態の評価についての検討, *栄養-評価と治療* 2013年; 30巻: 20-22.
- 10) 小野木章人, 荒木寛司, 井深貴士, 岩下拓司, 末次 淳, 白木 亮, 高井光治, 清水雅仁, 内木隆文, 原武志, 安田一朗, 鶴見 寿, 森脇久隆. 当科における難治性潰瘍性大腸炎に対する Tacrolimus 投与の治療成績と粘膜治癒の検討, *岐阜県内科医会雑誌* 2013年; 27巻: 59-63.
- 11) 鈴木孝知, 玉野正也, 高後 裕, 上野義之, 羽生大記, 片山和宏, 西口修平, 坂井田功, 遠藤龍人, 森脇久隆, 久保木真, 加藤章信, 鈴木一幸. 肝硬変患者の栄養摂取状況についての全国調査, *日本病態栄養学会誌* 2013年; 17巻: Suppl.115.
- 12) 鈴木孝知, 玉野正也, 森脇久隆, 加藤章信, 鈴木一幸. 肝硬変患者における栄養摂取状況の現状, *New Diet Therapy* 2013年; 29巻: 175.
- 13) 奥野 充, 向井 強, 安田一朗, 中島賢憲, 鈴木祐介, 小木曾富生, 川出尚史, 杉山昭彦, 加藤則廣, 富田栄一. 迷入した膵管ステント回収にガイドワイヤー式片開き生検鉗子が有用であった2例, *日本消化器内視鏡学会雑誌* 2013年; 55巻: 3782-3787.
- 14) 白木 亮, 華井竜徳, 森脇久隆. 肝硬変患者の合併症の疫学, *消化器内科* 2014年; 59巻: 242-247.
- 15) 華井竜徳, 白木 亮, 西村佳代子, 森脇久隆. 性差による肝硬変患者の栄養評価について, *栄養評価と治療* 2014年; 31巻: 46-49.
- 16) 片山和宏, 森脇久隆, 鈴木一幸. 肝障害における金属元素の役割 肝硬変診療における亜鉛代謝の意義に関する検討, *肝臓* 2014年; 55巻 Suppl.1: A137.
- 17) 馬淵正敏, 安田一朗, 土井晋平, 小澤範高, 上村真也, 岩下拓司, 森脇久隆. 腎移植後ミコフェノール酸モフェチル投与中アデノウイルス感染を伴って発症した急性膵炎の1例, *膵臓* 2014年; 29巻: 828-832.

原著 (欧文)

- 1) Tsurumi H, Hara T, Goto N, Kitagawa JI, Kanemura N, Yoshikawa T, Kasahara S, Goto H, Fukuno K, Yamada T, Sawada M, Shimizu M, Takahashi T, Takami T, Moriwaki H. A phase II study of rituximab combined with THP-COP regimen as a first-line therapy for patients with indolent B-cell lymphoma. *Leukemia Lymphoma.* 2012;53:247-253. IF 2.605
- 2) Araki H, Kato T, Onogi F, Ibuka T, Sugiyama A, Nakanishi T, Sugiyama T, Tomita E, Moriwaki H. Combination of proton pump inhibitor and rebamipide, a free radical scavenger, promotes artificial ulcer healing after endoscopic submucosal dissection with dissection size > 40mm. *J Clin Biochem Nutr.* 2012;51:185-188. IF 2.294
- 3) Yasuda I, Goto N, Tsurumi H, Nakashima M, Doi S, Iwashita T, Kanemura N, Kasahara S, Adachi S,

- Hara T, Shimizu M, Takami T, Moriwaki H. Endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration biopsy for diagnosis of lymphoproliferative disorders: Feasibility of immunohistological, flow cytometric, and cytogenetic assessments. *Am J Gastroenterol.* 2012;107:397-404. IF 9.213
- 4) Naiki T, Nakayama N, Mochida S, Oketani M, Takikawa Y, Suzuki K, Tada SI, Ichida T, Moriwaki H, Tsubouchi H: the Intractable Hepato-Biliary Disease Study Group supported by the Ministry of Health, Labor and Welfare of Japan. Novel scoring system as a useful model to predict the outcome of patients with acute liver failure: Application to indication criteria for liver transplantation. *Hepatol Res.* 2012;42:68-75. IF 2.218
- 5) Tanaka Y, Kato T, Nishida H, Yamada M, Koumura A, Sakurai T, Hayashi Y, Kimura A, Hozumi I, Araki H, Murase M, Nagaki M, Moriwaki H, Inuzuka T. Is there delayed gastric emptying in patients with multiple system atrophy? An analysis using the ¹³C-acetate breath test. *J Neurol.* 2012;259:1448-1452. IF 3.841
- 6) Shimizu M, Shirakami Y, Sakai H, Iwasa J, Shiraki M, Takai K, Naiki T, Moriwaki H. Combination of acyclic retinoid with branched-chain amino acids inhibits xenograft growth of human hepatoma cells in nude mice. *Hepatol Res.* 2012;42:1241-1247. IF 2.218
- 7) Terakura D, Shimizu M, Iwasa J, Baba A, Kochi T, Ohno T, Kubota M, Shirakami Y, Shiraki M, Takai K, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Preventive effects of branched-chain amino acid supplementation on the spontaneous development of hepatic preneoplastic lesions in C57BL/KsJ-db/db obese mice. *Carcinogenesis.* 2012;33:2499-2506. IF 5.266
- 8) Shimizu M, Imai K, Takai K, Moriwaki H. Role of acyclic retinoid in the chemoprevention of hepatocellular carcinoma: Basic aspects, clinical applications, and future prospects. *Curr Cancer Drug Targets.* 2012;12:1119-1128. IF 3.582
- 9) Shimizu M, Shirakami Y, Imai K, Takai K, Moriwaki H. Acyclic retinoid in chemoprevention of hepatocellular carcinoma: targeting phosphorylated retinoid X receptor- α for prevention of liver carcinogenesis. *J Carcinog.* 2012;11:11. IF 2.339
- 10) Shimizu M, Kubota M, Tanaka T, Moriwaki H. Nutraceutical approach for preventing obesity-related colorectal and liver carcinogenesis. *Int J Mol Sci.* 2012;13:579-595. IF 2.339
- 11) Kasahara S, Tsurumi H, Shibata Y, Matsumoto T, Nakamura N, Nakamura H, Kanemura N, Goto N, Hara T, Moriwaki H. Cerebriform variant type of T cell prolymphocytic leukemia with complex karyotype including an additional segment at 1p36.1. *Int J Hematol.* 2012;96:674-678. IF 1.679
- 12) Suetsugu A, Hassanein MK, Reynoso J, Osawa Y, Nagaki M, Moriwaki H, Saji S, Bouvet M, Hoffman RM. The cyan fluorescent protein nude mouse as a host for multicolor-coded imaging models of primary and metastatic tumor microenvironments. *Anticancer Res.* 2012;32:31-38. IF 1.872
- 13) Suetsugu A, Katz M, Fleming J, Truty M, Thomas R, Saji S, Moriwaki H, Bouvet M, Hoffman RM. Imageable Metastasis Occuring in Transgenic GFP Mice Orthotopically Implanted with Human-Patient Primary Pancreatic Cancer Specimens. *Anticancer Res.* 2012;4:1175-1180. IF 1.872
- 14) Suetsugu A, Katz M, Fleming J, Truty M, Thomas R, Moriwaki H, Bouvet M, Saji S, Hoffman RM. Multi-color pallet of fluorescent proteins for imaging the tumor microenvironment of orthotopic tumorgraft mouse models of clinical pancreatic cancer specimens. *J Cell Biochem.* 2012;7:2290-2295. IF 3.368
- 15) Suetsugu A, Katz M, Fleming J, Truty M, Thomas R, Saji S, Moriwaki H, Bouvet M, Hoffman RM. Non-invasive Fluorescent-protein Imaging of Orthotopic Pancreatic-cancer-patient Tumorgraft Progression in Nude Mice. *Anticancer Res.* 2012;8:3063-3067. IF 1.872
- 16) Goto N, Tsurumi H, Goto H, Shimomura YI, Kasahara S, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Murakami N, Yoshikawa T, Fukuno K, Takahashi T, Kito Y, Takami T, Moriwaki H. Serum soluble interleukin-2 receptor (sIL-2R) level is associated with the outcome of patients with diffuse large B cell lymphoma treated with R-CHOP regimens. *Ann Hematol.* 2012;91:705-714. IF 2.396
- 17) Goto N, Tsurumi H, Takemura M, Kanemura N, Kasahara S, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Yamada T, Sawada M, Takahashi T, Yamada T, Seishima M, Moriwaki H, Takami T. Serum soluble CD27 level is associated with outcome in diffuse large B-cell lymphoma patients treated with R-CHOP. *Leuk Lymphoma.* 2012;53:1494-1500. IF 2.605
- 18) Iwashita T, Yasuda I, Uemura S, Moriwaki H. Infected mediastinal cyst following endoscopic ultrasonography-guided fine-needle aspiration with rupture into the esophagus. *Dig Endosc.* 2012;24:386. IF 1.989
- 19) Iwashita T, Yasuda I, Doi S, Ando N, Nakashima M, Adachi S, Hirose Y, Mukai T, Iwata K, Tomita E, Itoi T, Moriwaki H. Use of samples from endoscopic ultrasound-guided 19-gauge fine-needle aspiration in diagnosis of autoimmune pancreatitis. *Clin Gastroenterol Hepatol.* 2012;10:316-322. IF 6.534
- 20) Ogawa K, Hara T, Shimizu M, Ninomiya S, Nagano J, Sakai H, Hoshi M, Ito H, Tsurumi H, Saito K, Seishima M, Tanaka T, Moriwaki H. Suppression of azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in rats by 1-methyltryptophan, an inhibitor of indoleamine 2,3-dioxygenase. *Cancer Sci.* 2012;103:951-958. IF 3.534
- 21) Ogawa K, Hara T, Shimizu M, Nagano J, Ohno T, Hoshi M, Ito H, Tsurumi H, Saito K, Seishima M, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin gallate inhibits the expression of indoleamine 2,3-dioxygenase in human colorectal cancer cells. *Oncol Lett.* 2012;4:546-550. IF 0.987

- 22) Kawaguchi J, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Yoshioka T, Itani M, Kozawa O, Moriwaki H. UVC irradiation suppresses platelet-derived growth factor-BB-induced migration in human pancreatic cancer cells. *Oncol Rep.* 2012;27:935-939. IF 2.191
- 23) Kawaguchi J, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Nakashima M, Ohno T, Shimizu M, Yoshioka T, Itani M, Kozawa O, Moriwaki H. Cisplatin and ultra-violet-C synergistically down-regulate receptor tyrosine kinases in human colorectal cancer cells. *Mol Cancer.* 2012;11:45. IF 5.397
- 24) Kubota M, Shimizu M, Sakai H, Yasuda Y, Terakura D, Baba A, Ohno T, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Preventive effects of curcumin on the development of azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in male C57BL/KsJ-db/db obese mice. *Nutr Cancer.* 2012;64:72-79. IF 2.470
- 25) Ohno T, Shirakami Y, Shimizu M, Kubota M, Sakai H, Yasuda Y, Kochi T, Tsurumi H, Moriwaki H. Synergistic growth inhibition of human hepatocellular carcinoma cells by acyclic retinoid and GW4064, a farnesoid X receptor ligand. *Cancer Lett.* 2012;323:215-222. IF 5.016
- 26) Ninomiya S, Hara T, Tsurumi H, Goto N, Saito K, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Indoleamine 2,3-dioxygenase expression and serum kynurenine concentrations in patients with diffuse large B-cell lymphoma. *Leukemia Lymphoma.* 2012;53:1143-1145. IF 2.605
- 27) Tanaka T, Shimizu M, Moriwaki H. Cancer chemoprevention by carotenoids. *Molecules.* 2012;17:3202-3242. IF 2.095
- 28) Hata K, Kubota M, Shimizu M, Moriwaki H, Kuno T, Tanaka T, Hara A, Hirose Y. Monosodium glutamate-induced diabetic mice are susceptible to azoxymethane-induced colon tumorigenesis. *Carcinogenesis.* 2012;33:702-707. IF 5.266
- 29) Fujiki H, Imai K, Nakachi K, Shimizu M, Moriwaki H, Suganuma M. Challenging the effectiveness of green tea in primary and tertiary cancer prevention. *J Cancer Res Clin Oncol.* 2012;138:1259-1270. IF 3.009
- 30) Suzuki K, Endo R, Kohgo Y, Ohtake T, Ueno Y, Kato A, Suzuki K, Shiraki R, Moriwaki H, Habu D, Saito M, Nishiguchi S, Katayama K, Sakaida I; for the Japanese Nutritional Study Group for Liver Cirrhosis 2008. Guidelines on nutritional management in Japanese patients with liver cirrhosis from the perspective of preventing hepatocellular carcinoma. *Hepatol Res.* 2012;42:621-626. IF 2.218
- 31) Kaneko S, Furuse J, Kudo M, Ikeda K, Honda M, Nakamoto Y, Onchi M, Shiota G, Yokosuka O, Sakaida I, Takehara T, Ueno Y, Hiroishi K, Nishiguchi S, Moriwaki H, Yamamoto K, Sata M, Obi S, Miyayama S, Imai Y. Guideline on the use of new anticancer drugs for the treatment of Hepatocellular Carcinoma 2010 update. *Hepatol Res.* 2012;42:523-542. IF 2.218
- 32) Ohtaki H, Ito H, Hoshi M, Osawa Y, Takamatsu M, Hara A, Ishikawa T, Moriwaki H, Saito K, Seishima M. High susceptibility to lipopolysaccharide-induced lethal shock in encephalomyocarditis virus-infected mice. *Sci Rep.* 2012;2:367.
- 33) Tomita A, Shirasugi Y, Ito T, Tsurumi H, Naoe T. Extravascular hemolytic attack after eculizumab therapy for paroxysmal nocturnal hemoglobinuria. *Ann Hematol.* 2012;91:1139-1141. IF 2.396
- 34) Nishiwaki S, Araki H, Hayashi M, Takada J, Iwashita M, Tagami A, Hatakeyama H, Hayashi T, Maeda T, Saito K. Inhibitory effects of carbon dioxide insufflation on pneumoperitoneum and bowel distension after percutaneous endoscopic gastrostomy. *World J Gastroenterol.* 2012;18:3565-3570. IF 2.433
- 35) Kawakami H, Maguchi H, Mukai T, Hayashi T, Sasaki T, Isayama H, Nakai Y, Yasuda I, Irisawa A, Niido T, Okabe Y, Ryozaawa S, Itoi T, Hanada K, Kikuyama M, Arisaka Y, Kikuchi S; Japan Bile Duct Cannulation Study Group. A multicenter, prospective, randomized study of selective bile duct cannulation performed by multiple endoscopists: the BIDMEN study. *Gastrointest Endosc.* 2012;75:362-372. IF 4.900
- 36) Isayama H, Mukai T, Ito T, Maetani I, Nakai Y, Kawakami H, Yasuda I, Maguchi H, Ryozaawa S, Hanada K, Hasebe O, Ito K, Kawamoto H, Mochizuki H, Igarashi Y, Irisawa A, Sasaki T, Togawa O, Hara T, Kamada H, Toda N, Kogure H. Comparison of partially covered nitinol stents with partially covered stainless stents as a historical control in a multicenter study of distal malignant biliary obstruction: the WATCH study. *Gastrointest Endosc.* 2012;76:84-92. IF 4.900
- 37) Yoshikawa T, Hara T, Araki H, Tsurumi H, Oyama M, Moriwaki H. First report of drug-induced esophagitis by deferasirox. *Int J Hematol.* 2012;95:689-691. IF 1.679
- 38) Yasuda I. Endoscopic necrosectomy for infected pancreatic necrosis. *Gastrointest Interv.* 2012;1:36-39.
- 39) Kawaguchi J, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Nakashima M, Ohno T, Shimizu M, Yoshioka T, Itani M, Kozawa O, Moriwaki H. Cisplatin and ultra-violet-C synergistically down-regulate receptor tyrosine kinases in human colorectal cancer cells. *Mol Cancer.* 2012;11:45. IF 5.397
- 40) Shirakami Y, Shimizu M, Moriwaki H. Cancer chemoprevention with green tea catechins: from bench to bed. *Curr Drug Targets.* 2012;13:1842-1857. IF 3.597
- 41) Yasuda I, Mukai T, Moriwaki H. Unilateral versus bilateral endoscopic biliary stenting for malignant hilar biliary strictures. *Dig Endosc.* 2013;25 Suppl 2:81-85. IF 1.989
- 42) Yasuda I. Endoscopic biliary stenting and pancreatitis. *Clin J Gastroenterol.* 2013;6:193-197.
- 43) Yasuda I, Itoi T. Recent advances in endoscopic management of difficult bile duct stones. *Dig Endosc.* 2013;25:376-385. IF 1.989
- 44) Yasuda I, Nakashima M, Iwai T, Isayama H, Itoi T, Hisai H, Inoue H, Kato H, Kanno A, Kubota K, Irisawa A, Igarashi H, Okabe Y, Kitano M, Kawakami H, Hayashi T, Mukai T, Sata N, Kida M,

- Shimosegawa T. Japanese multicenter experience of endoscopic necrosectomy for infected walled-off pancreatic necrosis: The JENIPaN study. *Endoscopy*. 2013;45:627-634. IF 5.196
- 45) Tanaka Y, Kato T, Nishida H, Yamada M, Koumura A, Sakurai T, Hayashi Y, Kimura A, Hozumi I, Araki H, Murase M, Nagaki M, Moriwaki H, Inuzuka T. Is there a difference in gastric emptying between myotonic dystrophy type 1 patients with and without gastrointestinal symptoms? *Journal of Neurology*. 2013;260:1611-1616. IF 3.841
- 46) Fukuno K, Tsurumi H, Yamada T, Iida T, Takahashi T, Moriwaki H. Radioimmunotherapy with (90)Y-ibritumomab tiuxetan for a hemodialysis patient with relapsed follicular lymphoma. *Leuk Lymphoma*. 2013;54:2731-2733. IF 2.605
- 47) Mukai T, Yasuda I, Nakashima M, Doi S, Iwashita T, Iwata K, Kato T, Tomita E, Moriwaki H. Metallic stents are more efficacious than plastic stents in unresectable malignant hilar biliary strictures: a randomized controlled trial. *J Hepatobiliary Pancreat Sci*. 2013;20:214-222. IF 2.313
- 48) Shimizu M, Tanaka T, Moriwaki H. Obesity and hepatocellular carcinoma: targeting obesity-related inflammation for chemoprevention of liver carcinogenesis. *Semin Immunopathol*. 2013;35:191-202. IF 6.482
- 49) Osawa Y, Suetsugu A, Matsushima-Nishiwaki R, Yasuda I, Saibara T, Moriwaki H, Seishima M, Kozawa O. Liver acid sphingomyelinase inhibits growth of metastatic colon cancer. *J Clin Invest*. 2013;123:834-843. IF 13.765
- 50) Osawa Y, Hoshi M, Yasuda I, Saibara T, Moriwaki H, Kozawa O. Tumor necrosis factor- α promotes cholestasis-induced liver fibrosis in the mouse through tissue inhibitor of metalloproteinase-1 production in hepatic stellate cells. *PLoS One*. 2013;8:e65251. IF 3.534
- 51) Shiraki M, Nishiguchi Y, Saito M, Fukuzawa Y, Mizuta T, Kaibori M, Hanai T, Nishimura K, Shimizu M, Tsurumi H, Moriwaki H. Nutritional status and quality of life in current patients with liver cirrhosis as assessed in 2007-2011. *Hepatol Res*. 2013;43:106-112. IF 2.218
- 52) Suetsugu A, Honma K, Saji S, Moriwaki H, Ochiya T, Hoffman RM. Imaging exosome transfer from breast cancer cells to stroma at metastatic sites in orthotopic nude mouse models. *Adv Drug Deliv Rev*. 2013;65:383-390. IF 12.707
- 53) Suetsugu A, Jiang P, Moriwaki H, Saji S, Bouvet M, Hoffman RM. Imaging nuclear - cytoplasm dynamics of cancer cells in the intravascular niche of live mice. *Anticancer Res*. 2013;33:4229-4236. IF 1.872
- 54) Iwashita T, Yasuda I, Doi S, Yamauchi T, Uemura S, Okuno M, Moriwaki H. Endoscopic ultrasound-guided antegrade papillary balloon dilation for treating a common bile duct stone. *Dig Endosc*. 2013;25:89-90. IF 1.989
- 55) Iwashita T, Yasuda I, Doi S, Uemura S, Mabuchi M, Okuno M, Mukai T, Itoi T, Moriwaki H. Endoscopic ultrasound-guided antegrade treatments for biliary disorders in patients with surgically altered anatomy. *Dig Dis Sci*. 2013;58:2417-2422. IF 2.55
- 56) Iwashita T, Nakai Y, Samaraseena JB, Park Do H, Zhang Z, Gu M, Lee JG, Chang KJ. High single-pass diagnostic yield of a new 25-gauge core biopsy needle for EUS-guided FNA biopsy in solid pancreatic lesions. *Gastrointest Endosc*. 2013;77:909-915. IF 4.900
- 57) Ibuka T, Araki H, Sugiyama T, Nakanishi T, Onogi F, Shimizu M, Hara H, Takami T, Tsurumi H, Moriwaki H. Diagnosis of the jejunoileal lymphoma by double-balloon endoscopy(DBE). *World J Gastrointest Endosc*. 2013;5:111-116. IF 4.900
- 58) Ibuka T, Tsurumi H, Araki H, Hara T, Onogi F, Goto N, Kojima Y, Kanemura N, Shiraki M, Kasahara S, Shimizu M, Ogawa K, Ninomiya S, Nakanishi T, Kato T, Takami T, Moriwaki H. Clinical significance of jejunoileal involvement of non-Hodgkin's lymphoma detected by double-balloon enteroscopy. *Int J Hematol*. 2013;97:369-381. IF 1.679
- 59) Doi S, Yasuda I, Kawakami H, Hayashi T, Hisai H, Irisawa A, Mukai T, Katanuma A, Kubota K, Ohnishi T, Ryozaawa S, Hara K, Itoi T, Hanada K, Yamao K. Endoscopic ultrasound-guided celiac ganglia neurolysis vs. celiac plexus neurolysis: a randomized multicenter trial. *Endoscopy*. 2013;45:362-369. IF 5.196
- 60) Doi S, Yasuda I, Mukai T, Iwashita T, Uemura S, Yamauchi T, Nakashima M, Adachi S, Shimizu M, Tomita E, Itoi T, Moriwaki H. Comparison of long-term outcomes after endoscopic sphincterotomy versus endoscopic papillary balloon dilation: A propensity score-based cohort analysis. *J Gastroenterol*. 2013;48:1090-1096. IF 4.020
- 61) Suzuki Y, Imai K, Takai K, Hanai T, Hayashi H, Naiki T, Nishigaki Y, Tomita E, Shimizu M, Moriwaki H. Hepatocellular carcinoma patients with increased oxidative stress levels are prone to recurrence after curative treatment: a prospective case series study using the d-ROM test. *J Cancer Res Clin Oncol*. 2013;139:845-852. IF 3.009
- 62) Kochi T, Shimizu M, Ohno T, Baba A, Sumi T, Kubota M, Shirakami Y, Tsurumi T, Tanaka T, Moriwaki H. Enhanced development of azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in hypertensive rats. *Int J Mol Sci*. 2013;14:14700-14711. IF 2.339
- 63) Nagano J, Shimizu M, Hara T, Shirakami Y, Kochi T, Nakamura N, Ohtaki H, Ito H, Tanaka T, Tsurumi H, Saito K, Seishima M, Moriwaki H. Effects of indoleamine 2,3-dioxygenase deficiency on high-fat diet-induced hepatic inflammation. *PLoS One*. 2013;8:e73404. IF 3.534
- 64) Uemura S, Yasuda I, Kato T, Doi S, Kawaguchi J, Yamauchi T, Kaneko Y, Ohnishi R, Suzuki T, Yasuda

- S, Sano K, Moriwaki H. Preoperative routine evaluation of bilateral adrenal glands by EUS/EUS-FNA in patients with potentially resectable lung cancer. *Endoscopy*. 2013;45:195-201. IF 5.196
- 65) Nakamura N, Goto N, Tsurumi H, Takemura M, Kanemura N, Kasahara S, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Sawada M, Yamada T, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Serum level of soluble tumor necrosis factor receptor 2 is associated with the outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with the R-CHOP regimen. *Eur J Haematol*. 2013;91:322-331. IF 2.414
- 66) Baba A, Shimizu M, Ohno T, Shirakami Y, Kubota M, Kochi T, Terakura D, Tsurumi H, Moriwaki H. Synergistic growth inhibition by acyclic retinoid and phosphatidylinositol 3-kinase inhibitor in human hepatoma cells. *BMC Cancer*. 2013;13:465. IF 3.319
- 67) Okuno M, Iwashita T, Yasuda I, Mabuchi M, Uemura S, Nakashima M, Doi S, Adachi S, Mukai T, Moriwaki H. Percutaneous transgallbladder rendezvous for enteroscopic management of choledocholithiasis in patients with surgically altered anatomy. *Scand J Gastroenterol*. 2013;48:974-978. IF 2.329
- 68) Takaguchi K, Moriwaki H, Doyama H, Iida M, Yagura M, Shimada N, Kang M, Yamada H, Kumada H. Effects of branched-chain amino acid granules on serum albumin level and prognosis are dependent on treatment adherence in patients with liver cirrhosis. *Hepatol Res*. 2013;43:459-466. IF 2.218
- 69) Kato A, Tanaka H, Kawaguchi T, Kanazawa H, Iwasa M, Sakaida I, Moriwaki H, Murawaki Y, Suzuki K, Okita K. Nutritional management contributes to improvement in minimal hepatic encephalopathy and quality of life in patients with liver cirrhosis: A preliminary, prospective, open-label study. *Hepatol Res*. 2013;43:452-458. IF 2.218
- 70) Izumi N, Asahina Y, Kurosaki M, Yamada G, Kawai T, Kajiwaru E, Okamura Y, Takeuchi T, Yokosuka O, Kariyama K, Toyoda J, Inao M, Tanaka E, Moriwaki H, Adachi H, Katsushima S, Kudo M, Takaguchi K, Hiasa Y, Chayama K, Yatsushashi H, Oketani M, Kumada H. Inhibition of hepatocellular carcinoma by PegIFN α -2a in patients with chronic hepatitis C: a nationwide multicenter cooperative study. *J Gastroenterol*. 2013;48:382-390. IF 4.020
- 71) Kongkam P, Devereaux BM, Ponnudurai R, Ratanachu-ek T, Sahai AV, Gotoda T, Udomsawaengsup S, Dam JV, Pausawadi N, Limsrichemrern S, Seo DW, Ryozaawa S, Hirooka Y, Sirivatanauksorn Y, Sun S, Punamiya S, Itoi T, Ovarlanporn B, Yasuda I, Ang TL, Wang HP, Ho KY, Yim HB, Yasuda K, Khor CJ. Endoscopic Ultrasound Forum Summary from the Asian Pacific Digestive Week 2012. *Endoscopic Ultrasound*. 2013;2:43-60.
- 72) Kawasoe M, Yamamoto Y, Okawa K, Funato T, Takeda M, Hara T, Tsurumi H, Moriwaki H, Arioka Y, Takemura M, Matsunami H, Markey SP, Saito K. Acquired resistance of leukemic cells to AraC is associated with the upregulation of aldehyde dehydrogenase 1 family member A2. *Exp Hematol*. 2013;41:597-603. IF 2.806
- 73) Saigo C, Hirose Y, Asano N, Takamatsu M, Fukushima N, Yasuda I, Goshima S, Ozeki M, Osada S. Two rare cases of a solid pseudopapillary neoplasm of the pancreas. *Oncol Lett*. 2013;6:871-874. IF 0.987
- 74) Itoi T, Kasuya K, Sofuni A, Itokawa F, Kurihara T, Yasuda I, Nakai Y, Isayama H, Moriyasu F. Endoscopic ultrasonography-guided pancreatic duct access: Techniques and literature review of pancreatography, transmural drainage and rendezvous techniques. *Dig Endosc*. 2013;25:241-252. IF 1.989
- 75) Itoi T, Nageshwar Reddy D, Yasuda I. New fully-covered self-expandable metal stent for EUS-guided intervention in infectious walled-off pancreatic necrosis (with video). *J Hepatobiliary Pancreat Sci*. 2013;20:403-406. IF 2.313
- 76) Itoi T, Kamisawa T, Igarashi Y, Kawakami H, Yasuda I, Itokawa F, Kishimoto Y, Kuwatani M, Doi S, Hara S, Moriyasu F, Baron TH. The role of peroral video cholangioscopy in patients with IgG4-related sclerosing cholangitis. *J Gastroenterol*. 2013;48:504-514. IF 4.020
- 77) Sasaki T, Isayama H, Nakai Y, Ito Y, Yasuda I, Toda N, Kogure H, Hanada K, Maguchi H, Sasahira N, Kamada H, Mukai T, Okabe Y, Hasebe O, Maetani I, Koike K. A randomized phase II study of gemcitabine and S-1 combination therapy versus gemcitabine monotherapy for advanced biliary tract cancer. *Cancer Chemoth Pharm*. 2013;71:973-979. IF 2.571
- 78) Momiyama M, Suetsugu A, Kimura H, Kishimoto H, Aki R, Yamada A, Sakurada H, Chishima T, Bouvet M, Endo I, Hoffman RM. Imaging the efficacy of UVC irradiation on superficial brain tumors and metastasis in live mice at the subcellular level. *J Cell Biochem*. 2013;114:428-434. IF 3.368
- 79) Momiyama M, Suetsugu A, Chishima T, Bouvet M, Endo I, Hoffman RM. Subcellular real-time imaging of the efficacy of temozolomide on cancer cells in the brain of live mice. *Anticancer Res*. 2013;33:103-106. IF 1.872
- 80) Momiyama M, Hiroshima Y, Suetsugu A, Tome Y, Mii S, Yano S, Bouvet M, Chishima T, Endo I, Hoffman RM. Enhanced resection of orthotopic red-fluorescent-protein-expressing human glioma by fluorescence-guided surgery in nude mice. *Anticancer Res*. 2013;33:107-111. IF 1.872
- 81) Momiyama M, Suetsugu A, Kimura H, Chishima T, Bouvet M, Endo I, Hoffman RM. Dynamic subcellular imaging of cancer cell mitosis in the brain of live mice. *Anticancer Res*. 2013;33:1367-1371. IF 1.872
- 82) Ke CC, Liu RS, Suetsugu A, Kimura H, Ho JH, Lee OK, Hoffman RM. In vivo fluorescence imaging reveals the promotion of mammary tumorigenesis by mesenchymal stromal cells. *PLoS One*. 2013;25:8:e69658. IF 3.534

- 83) Hiroshima Y, Zhao M, Zhang Y, Maawy A, Hassanein MK, Uehara F, Miwa S, Yano S, Momiyama M, Suetsugu A, Chishima T, Tanaka K, Bouvet M, Endo I, Hoffman RM. Comparison of efficacy of *Salmonella typhimurium* A1-R and chemotherapy on stem-like and non-stem human pancreatic cancer cells. *Cell Cycle*. 2013;12:2774-2780. IF 5.006
- 84) He G, Dhar D, Nakagawa H, Font-Burgada J, Ogata H, Jiang Y, Shalapour S, Seki E, Yost SE, Jepsen K, Frazer KA, Harismendy O, Hatziaepostolou M, Iliopoulos D, Suetsugu A, Hoffman RM, Tateishi R, Koike K, Karin M. Identification of liver cancer progenitors whose malignant progression depends on autocrine IL-6 signaling. *Cell*. 2013;155:384-396. IF 33.116
- 85) Nagano J, Shimizu M, Hara T, Shirakami Y, Kochi T, Nakamura N, Ohtaki H, Ito H, Tanaka T, Tsurumi H, Saito K, Seishima M, Moriwaki H. Effects of indoleamine 2,3-dioxygenase deficiency on high-fat diet-induced hepatic inflammation. *PLoS One*. 2013;8:e73404. IF 3.534
- 86) Sumi T, Shirakami Y, Shimizu M, Kochi T, Ohno T, Kubota M, Shiraki M, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin-3-gallate suppresses hepatic preneoplastic lesions developed in a novel rat model of non-alcoholic steatohepatitis. *SpringerPlus*. 2013;2:690.
- 87) Qin XY, Wei F, Tanokura M, Ishibashi N, Shimizu M, Moriwaki H, Kojima S. The effect of acyclic retinoid on the metabolomic profiles of hepatocytes and hepatocellular carcinoma cells. *PLoS One*. 2013;8:e82860. IF 3.534
- 88) Kishimoto H, Momiyama M, Aki R, Kimura H, Suetsugu A, Bouvet M, Fujiwara T, Hoffman RM. Development of a clinically-precise mouse model of rectal cancer. *PLoS One*. 2013;8:e79453. IF 3.534
- 89) Tanoue K, Miller Jenkins LM, Durell SR, Debnath S, Sakai H, Tagad HD, Ishida K, Appella E, Mazur SJ. Binding of a third metal ion by the human phosphatases PP2C α and Wip1 is required for phosphatase activity. *Biochemistry*. 2013;52:5830-5843.
- 90) Kochi T, Shimizu M, Terakura D, Baba A, Ohno T, Kubota M, Shirakami Y, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Non-alcoholic steatohepatitis and preneoplastic lesions develop in the liver of obese and hypertensive rats: Suppressing effects of EGCG on the development of liver lesions. *Cancer Lett*. 2014;342:60-69. IF 5.016
- 91) Yamada T, Goto N, Tsurumi H, Takata K, Sato Y, Yoshino T, Moriwaki H, Kito Y, Takeuchi T, Iwata H. Mantle cell lymphoma with a unique pattern of CD5 expression: a case report with review of the literatures. *Med Mol Morphol*. 2014;47:169-175. IF 1.070
- 92) Ito H, Ando T, Ando K, Ishikawa T, Saito K, Moriwaki H, Seishima M. Induction of hepatitis B virus surface antigen-specific cytotoxic T lymphocytes can be up-regulated by the inhibition of indoleamine 2, 3-dioxygenase activity. *Immunology*. 2014;142:614-623. IF 3.735
- 93) Shimizu M, Kochi T, Shirakami Y, Genovese S, Epifano F, Fiorito S, Mori T, Tanaka T, Moriwaki H. A newly synthesized compound, 4'-geranyloxyferulic acid-N(omega)-nitro-L-arginine methyl ester suppresses inflammation-associated colorectal carcinogenesis in male mice. *Int J Cancer*. 2014;135:774-784. IF 5.007
- 94) Goto N, Tsurumi H, Takemura M, Matsumoto T, Shibata Y, Mabuchi R, Nakamura N, Nakamura H, Yamada T, Seishima M, Takami T, Takeuchi T, Moriwaki H. Serum soluble tumor necrosis factor receptor 1 level is associated with the outcome of diffuse large b-cell lymphoma patients treated with the CHOP or R-CHOP regimen. *J Clin Exp Hematop*. 2014;54:117-127.
- 95) Iwashita T, Yasuda I, Mukai T, Doi S, Uemura S, Mabuchi M, Shimizu M. Successful management of biliary stones in the hepatic duct after a whipple procedure by using an EUS-guided antegrade approach and temporary metal stent placement. *Gastrointest Endosc*. 2014;80:337. IF 4.900
- 96) Imai K, Takai K, Hanai T, Shiraki M, Suzuki Y, Hayashi H, Naiki T, Nishigaki Y, Tomita E, Shimizu M, Moriwaki H. Impact of serum chemerin levels on liver functional reserves and platelet counts in patients with hepatocellular carcinoma. *Int J Mol Sci*. 2014;15:11294-11306. IF 2.339
- 97) Sakai H, Fujigaki H, Mazur SJ, Appella E. Wild-type p53-induced phosphatase 1 (Wip1) forestalls cellular premature senescence at physiological oxygen levels by regulating DNA damage response signaling during DNA replication. *Cell Cycle*. 2014;6:1-15. IF 5.006
- 98) Kubota M, Shimizu M, Baba A, Ohno T, Kochi T, Shirakami Y, Moriwaki H. Combination of Bevacizumab and Acyclic Retinoid Inhibits the Growth of Hepatocellular Carcinoma Xenografts. *J Nutr Sci Vitaminol*. 2014;60:357-362. IF 0.868
- 99) Kochi T, Shimizu M, Ohno T, Baba A, Sumi T, Kubota M, Shirakami Y, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Preventive effects of captopril, an angiotensin-converting enzyme inhibitor, on the development of azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in diabetic and hypertensive rats. *Oncol Lett*. 2014;8:223-229. IF 0.987
- 100) Kochi T, Shimizu M, Totsuka Y, Shirakami Y, Nakanishi T, Watanabe T, Tanaka T, Nakagama H, Wakabayashi K, Moriwaki H. A novel aromatic mutagen, 5-amino-6-hydroxy-8H-benzo [6,7] azepino [5,4,3-de] quinolin-7-one (ABAQ), induces colonic preneoplastic lesions in mice. *Toxicology Rep*. 2014;1:69-73.
- 101) Ohnishi K, Semi K, Yamamoto T, Shimizu M, Tanaka A, Mitsunaga K, Okita K, Osafune K, Arioka Y, Maeda T, Soejima H, Moriwaki H, Yamanaka S, Woltjen K, Yamada Y. Premature termination of reprogramming in vivo leads to cancer development through altered epigenetic regulation. *Cell*.

- 2014;156:663-677. IF 33.116
- 102) Hanai T, Shiraki M, Nishimura K, Imai K, Suetsugu A, Takai K, Shimizu M, Naiki T, Moriwaki H. Free fatty acid as a marker of energy malnutrition in liver cirrhosis. *Hepatol Res.* 2014;44:218-228. IF 2.218
- 103) Mabuchi M, Iwashita T, Yasuda I, Okuno M, Uemura S, Nakashima M, Doi S, Adachi S, Shimizu M, Mukai T, Tomita E, Moriwaki H. Endoscopic papillary large balloon dilation as a salvage procedure for basket impaction during retrieval of common bile duct stones. *Digest Dis Sci.* 2014;59:220-223. IF 2.550
- 104) Nakamura N, Kanemura N, Shibata Y, Matsumoto T, Mabuchi R, Nakamura H, Kitagawa J, Goto N, Hara T, Tsurumi H, Moriwaki H. Lenalidomide-induced cytokine release syndrome in a patient with multiple myeloma. *Leuk Lymphoma.* 2014;55:1691-1693. IF 2.605
- 105) Tanaka T, Shimizu M, Kochi T, Shirakami Y, Mori T, Watanabe N, Naiki T, Moriwaki H, Yoshimi K, Serikawa T, Kuramoto T. Apc-mutant Kyoto Apc Delta (KAD) rats are susceptible to 4-NQO-induced tongue carcinogenesis. *Cancers.* 2014;6:1522-1539.
- 106) Ohtaki H, Ito H, Ando K, Ishikawa T, Hoshi M, Ando T, Takamatsu M, Hara A, Moriwaki H, Saito K, Seishima M. Kynurenine production mediated by indoleamine 2,3-dioxygenase aggravates liver injury in HBV-specific CTL-induced fulminant hepatitis. *BBA-Mol Basis Dis.* 2014;1842:1464-1471. IF 5.089
- 107) Katayama K, Saito M, Kawaguchi T, Endo R, Sawara K, Nishiguchi S, Kato A, Kohgo H, Suzuki K, Sakaida I, Ueno Y, Habu D, Ito T, Moriwaki H, Suzuki K. Effect of zinc on liver cirrhosis with hyperammonemia: a preliminary randomized, placebo-controlled double-blind trial. *Nutrition.* 2014;30:1409-1414. IF 3.046
- 108) Kawaguchi T, Shiraishi K, Ito T, Suzuki K, Koreeda C, Ohtake T, Iwasa M, Tokumoto Y, Endo R, Kawamura NH, Shiraki M, Habu D, Tsuruta S, Miwa Y, Kawaguchi A, Kakuma T, Sakai H, Kawada N, Hanai T, Takahashi S, Kato A, Onji M, Takei Y, Kohgo Y, Seki T, Tamano M, Katayama K, Mine T, Sata M, Moriwaki H, Suzuki K. Branched-chain amino acids prevent hepatocarcinogenesis and prolong survival of patients with cirrhosis. *Clin Gastroenterol H.* 2014;12:1012-1018. IF 6.534
- 109) Takata K, Tanino M, Ennishi D, Tari A, Sato Y, Okada H, Maeda Y, Goto N, Araki H, Harada M, Ando M, Iwamuro M, Tanimoto M, Yamamoto K, Gascoyne RD, Yoshino T. Duodenal follicular lymphoma: comprehensive gene expression analysis with insights into pathogenesis. *Cancer Sci.* 2014;105:608-615. IF 3.534
- 110) Yasuda I, Iwashita T, Doi S. Tips for endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration of various pancreatic lesions. *J Hepato-Bil-Pan Sci.* 2014;21:E29-33. IF 2.313
- 111) Nakai Y, Isayama H, Shinoura S, Iwashita T, Samarasekera JB, Chang KJ, Koike K. Confocal laser endomicroscopy in gastrointestinal and pancreatobiliary diseases. *Digest Endosc.* 2014;26 Suppl1:86-94. IF 1.989
- 112) Yano S, Zhang Y, Miwa S, Tome Y, Hiroshima Y, Uehara F, Yamamoto M, Suetsugu A, Kishimoto H, Tazawa H, Zhao M, Bouvet M, Fujiwara T, Hoffman RM. Spatial-temporal FUCCI imaging of each cell in a tumor demonstrates locational dependence of cell cycle dynamics and chemoresponsiveness. *Cell Cycle.* 2014;13:2110-2119. IF 5.006
- 113) Hiroshima Y, Zhao M, Maawy A, Zhang Y, Katz MH, Fleming JB, Uehara F, Miwa S, Yano S, Momiya M, Suetsugu A, Chishima T, Tanaka K, Bouvet M, Endo I, Hoffman RM. Efficacy of Salmonella typhimurium A1-R versus chemotherapy on a pancreatic cancer patient-derived orthotopic xenograft (PDOX). *J Cell Biochem.* 2014;115:1254-1261. IF 3.368
- 114) Nishimura J, Yamamoto M, Hayashi S, Ohyashiki K, Ando K, Brodsky AL, Noji H, Kitamura K, Eto T, Takahashi T, Masuko M, Matsumoto T, Wano Y, Shichishima T, Shibayama H, Hase M, Li L, Johnson K, Lazarowski A, Tamburini P, Inazawa J, Kinoshita T, Kanakura Y. Genetic variants in C5 and poor response to eculizumab. *New Engl J Med.* 2014;370:632-639. IF 54.420
- 115) Ohno T, Nishigaki Y, Yamada T, Wakahara Y, Sakai H, Yoshimura K, Shimizu M, Usui T, Saito M, Yasuda I, Tsurumi H, Tomita E, Moriwaki H. Effect of pioglitazone on non-alcoholic steatohepatitis in a patient with anorexia nervosa. *Exp Ther Med.* 2014;7:811-815. IF 0.941

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：中村祐輔，研究分担者：森脇久隆；科学研究費補助金新学術領域研究：がん研究分野の特性等を踏まえた支援活動；平成 22-25 年度；56,900 千円(16,400：15,000：15,000：10,500 千円)
- 2) 研究代表者：白鳥義宗，研究分担者：森脇久隆；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：次世代型電子カルテシステムを用いた医療の質改善のためのプロセス解析手法の開発；平成 23-25 年度；3,900 千円(1,700：1,200：1,000 千円)
- 3) 研究代表者：安田一朗，研究分担者：小澤 修，足立政治；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：膵がんに対する Gemcitabine の作用発現における HSP27 の役割；平成 23-25 年度；3,900 千円(1,500：1,400：1,000 千円)

- 4) 研究代表者：足立政治, 研究分担者：安田一朗; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：紫外線による大腸がん制御に関する研究; 平成 24-26 年度; 4,100 千円(1,600 : 1,400 : 1,100 千円)
- 5) 研究代表者：大澤陽介; 学術研究助成基金助成金若手研究(B)：トリプトファンによる肝脂肪化・脂肪肝炎発症のメカニズムに関する研究; 平成 23-24 年度; 3,958 千円(2,008 : 1,950 千円)
- 6) 研究代表者：末次 淳; 科学研究費補助金研究活動スタート支援：肝癌幹細胞における miRNA の解析：発癌予防と抑制そして転移制圧に向けて; 平成 24-25 年度; 2,700 千円(1,600 : 1,100 千円)
- 7) 研究代表者：森脇久隆, 研究分担者：清水雅仁, 高井光治; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：レチノイド核内受容体 RXR α 遺伝子改変マウスを用いた肝発癌機序の解析; 平成 25 年度; 1,200 千円
- 8) 研究代表者：清水雅仁, 研究分担者：森脇久隆, 白木 亮; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：肥満・糖尿病・NASH 関連肝発癌抑制に繋がる新規標的分子の解明; 平成 25-27 年度; 3,900 千円(1,200 : 1,200 : 1,500 千円)
- 9) 研究代表者：久保田全哉; 学術研究助成基金助成金若手研究(B)：APC 遺伝子ヘテロ変異を有する肥満・糖尿病マウスを用いた大腸発癌機序の解明; 平成 25-27 年度; 3,000 千円(900 : 900 : 1,200 千円)
- 10) 研究代表者：今井浩三, 研究分担者：清水雅仁; 科学研究費補助金新学術領域研究：がん研究分野の特性等を踏まえた支援活動; 平成 26 年度; 8,400 千円
- 11) 研究代表者：末次 淳; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：肝癌前駆・幹細胞と肝微小環境構成細胞の解明・肝癌撲滅を目指して; 平成 26-28 年度; 3,300 千円(1,100 : 1,100 : 1,100 千円)
- 12) 研究代表者：白上洋平; 学術研究助成基金助成金若手研究(B)：非アルコール性脂肪肝疾患と肝レチノイドシグナルの関連性の解明; 平成 26-27 年度; 2,300 千円(1,000 : 1,300 千円)
- 13) 研究代表者：白鳥義宗, 研究分担者：清水雅仁; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：医療の質改善を目指した電子データを利用した標準的プロセス解析手法の開発; 平成 26-28 年度; 300 千円(100 : 100 : 100 千円)
- 14) 研究代表者：森脇久隆; 厚生労働科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業)：ウイルス性肝疾患患者の食事・運動療法とアウトカム評価に関する研究; 平成 23-25 年度; 109,395 千円(37,050 : 33,345 : 39,000 千円)
- 15) 研究分担者：清水雅仁; 厚生労働科学研究費補助金(第 3 次がん総合戦略研究事業)：がん化学予防の研究開発とその臨床応用に関する研究; 平成 22-25 年度; 9,000 千円(2,500 : 2,500 : 2,000 : 2,000 千円)
- 16) 研究代表者：熊田博光, 研究分担者：森脇久隆; 厚生労働科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業)：ウイルス性肝炎における最新の治療法の標準化を目指す研究; 平成 22-24 年度; 7,000 千円(2,500 : 2,500 : 2,000 千円)
- 17) 研究代表者：坪内博仁, 研究分担者：森脇久隆; 厚生労働科学研究費補助金(難治性疾患克服研究事業)：難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究; 平成 21-25 年度; 2,000 千円(500 : 400 : 400 : 400 : 300 千円)
- 18) 研究分担者：清水雅仁; 厚生労働科学研究費補助金(感染症対策総合研究事業)：次世代生命基盤技術を用いた B 型肝炎制圧のための創薬研究; 平成 24-26 年度; 5,000 千円(3,000 : 1,000 : 1,000 千円)
- 19) 研究代表者：滝川 一, 研究分担者：森脇久隆; 厚生労働科学研究費補助金(難治性疾患克服研究事業)：難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究; 平成 26 年度; 300 千円
- 20) 研究代表者：清水雅仁; 研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：肥満・生活習慣病の側面からのアプローチによる肝および大腸発癌予防-高血圧が消化器発癌に及ぼす影響に関する検討-; 平成 24 年度; 500 千円
- 21) 研究代表者：清水雅仁; 大学活性化経費(研究：科研採択支援)：肥満・糖尿病・非アルコール性肝炎に関連した肝発癌の抑制と早期診断に関する研究; 平成 25 年度; 2,000 千円
- 22) 研究代表者：末次 淳; 研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：癌微小環境における癌細胞と腫瘍関連細胞間での血管内皮細胞増殖因子の役割; 平成 24 年度; 770 千円
- 23) 研究代表者：清水雅仁; 大学活性化経費(研究：若手研究支援)：肥満・糖尿病・NASH 関連肝発癌抑制に繋がる新規標的分子の解明-肥満関連分子異常を標的とした肝発癌の化学予防と早期診断に関する研究-; 平成 25 年度; 2,000 千円
- 24) 研究代表者：清水雅仁; 研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：肥満・糖尿病・NASH 関連肝発癌抑制に繋がる新規標的分子の解明; 平成 25 年度; 500 千円
- 25) 研究代表者：清水雅仁; 公益財団法人武田科学振興財団「医学系研究奨励(生活習慣病)」：核内受容

体 RXR α 遺伝子改変マウスを用いた肝発癌機序の解明；平成 25-27 年度；2,000 千円

- 26) 研究代表者：鶴見 寿；大学活性化経費(研究：科研採択支援)：急性骨髄性白血病におけるインドールアミン酸素添加酵素(IDO)の役割；平成 26 年度；680 千円
- 27) 研究代表者：原 武志；大学活性化経費(研究：科研採択支援)：レスベラトロールによる悪性リンパ腫再発予防効果の検討；平成 26 年度；560 千円

2) 受託研究

- 1) 森脇久隆：核レチノイド受容体蛋白を分子標的としたがん化学予防に関する研究；平成 18-25 年度；1,150 千円(150：150：150：150：150：150：150：100 千円)：脂溶性ビタミン
- 2) 森脇久隆, 小嶋聡一：肝疾患の分子病態解明に基づく新規治療・予防法の確立；平成 22-26 年度；550 千円(110：110：110：110：110 千円)(内, 10 千円間接経費)：理化学研究所

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

- 1) 安田一朗(共願人：オリンパスメディカルシステムズ株式会社)：内視鏡用処置具(特許)；平成 25 年(特願 2013-501462)

6. 学会活動

1) 学会役員

森脇久隆：

- 1) 日本内科学会評議員(～現在)
- 2) 日本消化器病学会執行評議員(～現在)
- 3) 日本肝臓学会評議員(～現在)
- 4) 日本ビタミン学会理事(～現在)
- 5) 日本臨床代謝学会評議員(～現在)
- 6) 日本癌学会評議員(～現在)
- 7) 日本栄養食糧学会評議員(～現在)
- 8) 日本静脈経腸栄養学会監事(～現在)
- 9) 日本臨床腫瘍学会評議員(～現在)

鶴見 寿：

- 1) 日本臨床血液学会評議員(～現在)
- 2) 日本血液学会代議員(～現在)
- 3) 日本輸血学会東海支部評議員(～現在)
- 4) 日本臨床腫瘍学会評議員(～現在)
- 5) 日本内科学会支部評議員(～現在)
- 6) 日本骨髄腫学会評議員(平成 24 年～現在)

荒木寛司：

- 1) 日本消化器病学会評議員(～現在)
- 2) 日本内科学会支部評議員(～現在)
- 3) 日本消化器内視鏡学会学術評議員(～現在)
- 4) 日本門脈圧亢進症学会評議員(～現在)

安田一朗：

- 1) 日本消化器内視鏡学会学術評議員(～現在)
- 2) 日本消化器病学会評議員(～現在)
- 3) 日本胆道学会評議員(～現在)
- 4) 日本内科学会支部評議員(～現在)

清水雅仁：

- 1) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本消化器病学会学会評議員(～現在)
- 3) 日本肝臓学会評議員(～現在)
- 4) 日本癌学会評議員(～現在)

白木 亮：

- 1) 日本消化器病学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本静脈経腸栄養学会代議員(～現在)
- 3) 日本肝臓学会西部会評議員(～現在)
- 4) 日本病態栄養学会評議員(～現在)

原 武志：

- 1) 日本血液学会評議員(～現在)

岩下拓司：

- 1) 日本消化器内視鏡学会支部評議員(～現在)

2) 学会開催

森脇久隆：

- 1) 日本ビタミン学会(平成 24 年 6 月, 岐阜)
- 2) 第 40 回日本肝臓学会西部会(平成 25 年 12 月, 岐阜)
- 3) 平成 25 年度日本肝臓学会教育講演会(後期)(平成 25 年 12 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

森脇久隆：

- 1) 日本内科学会誌(英文)；査読委員(～現在)
- 2) 日本消化器病学会誌(英文)；編集委員(～現在)
- 3) 日本静脈経腸栄養学会誌；編集委員(～現在)
- 4) J Cancer Res Clin Oncol；Editorial Board(～現在)

鶴見 寿：

- 1) Trends in Hematological Malignancies；編集アドバイザー(～現在)
- 2) International Journal of Hematology；査読委員(～現在)
- 3) Journal of Tumor；編集委員(～現在)

安田一朗：

- 1) 肝胆膵治療研究会誌；編集委員(～現在)
- 2) Digestive Endoscopy；Associate Editor(～現在)
- 3) Clinical Journal of Gastroenterology；Associate Editor(～現在)
- 4) Endoscopic Ultrasound；Associate Editor(～現在)
- 5) 日本消化器内視鏡学会誌；査読委員(～現在)
- 6) 日本胆道学会誌；査読委員(～現在)

白木 亮：

- 1) 日本静脈経腸栄養学会誌；編集委員(～現在)

末次 淳：

- 1) World J Hepatology；Editorial Board(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

森脇久隆：

- 1) 第 15 回日本病態栄養学会年次集会(平成 24 年 1 月, ランチョンセミナー2-4 司会)

- 2) 栄養アセスメント研究会(平成 24 年 5 月, ランチョンセミナー 司会)
- 3) 第 48 回日本肝臓学会総会(平成 24 年 6 月, ワークショップ 司会)
- 4) 第 48 回日本肝臓学会総会(平成 24 年 6 月, モーニングセミナー6 司会)
- 5) DDW Japan2012(平成 24 年 10 月, 招待講演(消化器) 司会)
- 6) 第 23 回日本レチノイド研究会学術集会(平成 24 年 10 月, 特別講演 4「Chemoprevention of second primary liver cancer by acyclic retinoid」 演者)
- 7) 第 23 回日本レチノイド研究会学術集会(平成 24 年 10 月, 特別講演 5 座長)
- 8) 第 39 回日本肝臓学会東部会(平成 24 年 12 月, ランチョンセミナー6 座長)
- 9) 第 28 回日本静脈経腸栄養学会(平成 25 年 2 月, パネルディスカッション 4 司会)
- 10) 第 99 回日本消化器病学会総会(平成 25 年 3 月, パネルディスカッション 9 司会)
- 11) 第 49 回日本肝臓学会(平成 25 年 6 月, ランチョンセミナー 司会)
- 12) 第 36 回日本栄養アセスメント研究会(平成 25 年 6 月, ランチョンセミナー 司会)
- 13) 第 29 回日本静脈経腸栄養学会(平成 26 年 2 月, ランチョンセミナー17 司会)
- 14) 第 37 回日本栄養アセスメント研究会(平成 26 年 5 月, ランチョンセミナー「慢性肝不全の治療を巡る最近の話題-栄養サポートを中心に-」 演者)
- 15) 第 50 回日本肝臓学会総会(平成 26 年 5 月, 特別企画 1「肝臓研究 50 年の変遷 (4)肝硬変・肝不全のこれまでと今後の展望 これまでの肝臓学会の歩み」 演者)
- 16) JDDW2014(第 18 回日本肝臓学会大会)(平成 26 年 10 月, パネルディスカッション 11 司会)

鶴見 寿 :

- 1) 第 27 回日本エイズ学会学術集会・総会共催セミナー(平成 25 年 11 月, 「HIV 診療チームは地域のダイヤモンド!? ~皆で HIV 診療にきらめきを!~」 演者)
- 2) 第 76 回日本血液学会学術総会(平成 26 年 11 月, 教育講演「移植非適応骨髄腫の治療」 演者)

荒木寛司 :

- 1) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, シンポジウム 7「地域医療における内視鏡の役割」2 次医療圏における胃 ESD 普及の現況と安全な胃 ESD 導入の工夫(岐阜県内消化器内視鏡施行 371 施設へのアンケート調査と地域の施設と連携した安全な ESD の導入) 演者)
- 2) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, パネルディスカッション 4「食道・胃静脈瘤-集学的治療の現況と新たな展開」APC 地固め併用 EVL と B-RTO を主体とした食道胃静脈瘤に対する治療戦略 演者)
- 3) 第 19 回日本門脈圧亢進症学会総会(平成 24 年 9 月, パネルディスカッション 1「EVL・EISL 2012 私の手技」科における EVL の治療成績 演者)
- 4) 第 55 回日本消化器内視鏡学会東海支部例会(平成 24 年 12 月, シンポジウム 1「ESD の手技と工夫」先進医療で施行した大腸 ESD と粘膜下層の線維化の検討) 演者)
- 5) 第 55 回日本消化器内視鏡学会東海支部例会(平成 24 年 12 月, シンポジウム 1 座長)
- 6) 第 20 回日本門脈圧亢進症学会総会(平成 25 年 9 月, 要望演題①セッションテーマ「難治性静脈瘤・PHG」EVL から考える難治性食道胃噴門部静脈瘤 演者)
- 7) JDDW2013(第 86 回日本消化器内視鏡学会総会)(平成 25 年 10 月, ワークショップ 15「門脈圧亢進症 -治療法の選択とその治療成績-」EVL を中心とした食道静脈瘤および噴門部胃静脈瘤治療の長期成績 演者)
- 8) 第 100 回日本消化器病学会総会(平成 26 年 4 月, パネルディスカッション 9「食道胃静脈瘤治療の最前線」血行動態に基づいた EVL での食道・胃噴門部静脈瘤治療の長期成績 演者)
- 9) 第 21 回日本門脈圧亢進症学会総会(平成 26 年 9 月, ビデオワークショップ 1「内視鏡治療の工夫」噴門部胃静脈瘤合併食道静脈瘤に対する EVL の実際 演者)

安田一朗 :

- 1) 第 22 回日本消化器内視鏡学会東海セミナー(平成 24 年 1 月, 講演「膵疾患の診断と治療」 演者)
- 2) 第 22 回日本消化器内視鏡学会東海セミナー(平成 24 年 1 月, Invited lecture(招待講演)Revival of EPBD: Current role for CBD stones 「Long-term outcomes after EST vs. conventional EPBD for bile duct stones」 演者)
- 3) APASL 2012 (Asian Pacific Association for the Study of the Liver)(平成 24 年 2 月, EB2「Endoscopic management of hepato-biliary obstruction」 Invited Speaker(招待講演)「Endoscopic

- drainage of Klatskin tumor」 演者)
- 4) BONASTENT SUMMIT 2012(平成 24 年 3 月, Keynote lecture(基調講演)「Metal stenting for hilar malignant biliary stricture: resectable & unresectable」 演者)
 - 5) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, International Symposium I「EUS-FNA: Current status and new developments」 Combined approach of transesophageal and transbronchial EUS for mediastinal nodal staging of lung cancer. 演者)
 - 6) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, 特別企画 IV「海外内視鏡留学者からの若手医師へのメッセージ」 海外留学のスズメ: UKE での経験から 演者)
 - 7) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, バーチャルライブ IV「EUS-FNA 関連手技」 EUS 下腹腔神経叢ブロック・神経節ブロック(EUS-CPN/-CGN) 演者)
 - 8) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, VTR シンポジウム 1「内視鏡治療に伴う偶発症の対処法-胆膵病変-」 司会)
 - 9) International Digestive Endoscopy Network 2012 (IDEN 2012)(平成 24 年 6 月, 講演「膵疾患の診断と治療」 演者)
 - 10) International Digestive Endoscopy Network 2012 (IDEN 2012)(平成 24 年 6 月, Invited lecture(招待講演)Evaluation and tissue acquisition for indeterminate biliary lesion 「Cholangiopancreatography with targeted biopsy」 演者)
 - 11) 5th National ERCP Symposium & 4th Eastern Biliary-Pancreatic Endoscopy Forum(平成 24 年 8 月, Invited lecture(招待講演)「Endoscopic treatment of common bile duct stones. – Should we cut, dilate, or dilate much larger the papilla?」 演者)
 - 12) SGI2012 (The 6th Meeting of the Society of Gastrointestinal Intervention)(平成 24 年 10 月, Session XI “Bilio-pancreatic Drainage in Difficult Situations” Invited Lecture(招待講演)「EUS-guided bilio-pancreatic drainage: when and how?」 演者)
 - 13) DDW2012(第 84 回日本消化器内視鏡学会総会)(平成 24 年 10 月, サテライトシンポジウム「目指せ!! 胆膵マイスター」 講演「FNA マイスター」 演者)
 - 14) Tokyo Conference of Asian Pancreato-biliary Interventional Endoscopist 2012 (T-CAP 2012)(平成 24 年 11 月, Session 5「Management of Benign Biliary Stricture」 Moderator 座長)
 - 15) 第 85 回日本消化器内視鏡学会総会 The 4th ESGE-JGES Joint Symposium (平成 25 年 5 月, International Symposium 1「Endoscopic therapy of pancreatic and biliary diseases」 演者)
 - 16) 第 85 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 25 年 5 月, サテライトセミナー「胆膵内視鏡プロフェッショナルサミット-難治性膵・胆管狭窄はこう攻めろ!-」 司会)
 - 17) 第 44 回日本膵臓学会大会(平成 25 年 7 月, 特別企画 2「急性膵炎・慢性膵炎に対する内視鏡・腹腔鏡治療の最前線」 Walled-off pancreatic necrosis に対する内視鏡的ネクロセクトミー 演者)

清水雅仁:

- 1) 第 98 回日本消化器病学会総会(平成 24 年 4 月, ミニシンポジウム 2「Nutraceutical をめぐって」 緑茶カテキンを用いた大腸癌予防-基礎研究から臨床的予備試験まで- 演者)
- 2) 第 48 回日本肝臓学会総会(平成 24 年 6 月, ワークショップ 10「肝細胞癌の発症と再発予防を目指した慢性肝炎の治療」 栄養的および薬剤投与と介入による肥満関連肝発癌予防の可能性-BCAA と非環式レチノイドを用いて- 演者)
- 3) 日本ビタミン学会第 64 回大会(平成 24 年 6 月, シンポジウム「ビタミン誘導体の臨床応用」 非環式レチノイドによる肝発癌化学予防-リン酸化 RXRa を標的分子とした肝発癌化学予防- 演者)
- 4) 第 71 回日本癌学会学術総会(平成 24 年 9 月, Symposia「Diabetes and Cancer」 Targeting obesity- and diabetes-related metabolic abnormalities for chemoprevention of hepatocellular carcinoma. 演者)
- 5) 第 99 回日本消化器病学会総会(平成 25 年 3 月, シンポジウム 3「NAFLD/NASH の病態解明と治療への展開」 肝および内臓脂肪の炎症制御を介した分岐鎖アミノ酸による NAFLD 関連肝腫瘍形成の抑制 演者)
- 6) 第 20 回日本がん予防学会(平成 25 年 3 月, ワークショップ「炎症および傷害物質に関連した発がん予防」 肝および内臓脂肪の炎症制御を介した分岐鎖アミノ酸による肥満・糖尿病関連肝腫瘍形成の抑制 演者)
- 7) 日本レチノイド研究会第 24 回学術集会(平成 25 年 8 月, シンポジウム「レチノイド研究温故知新-レチノイドの新たな作用点を求めて-」 非環式レチノイドによる肝発癌化学予防 -

Chemoprevention of hepatocellular carcinoma by acyclic retinoid- 演者)

- 8) JDDW2013(第 17 回日本肝臓学会大会)(平成 25 年 10 月, パネルディスカッション 1「C 型肝炎を背景とした肝細胞癌—予防から再発治療まで—」非環式レチノイドと分岐鎖アミノ酸を用いた肝発癌抑制-肥満関連肝発癌抑制と両剤の併用投与による相乗的肝発癌細胞増殖抑制- 演者)
- 9) JDDW2014(第 18 回日本肝臓学会大会)(平成 26 年 10 月, ワークショップ 8「生活習慣と肝病態の変遷: 明日の肝臓病学に向けて」生活習慣病治療薬を用いた肥満・糖尿病関連肝発癌の抑制 演者)

大澤陽介:

- 1) Asian Pacific Association for the Study of the Liver (APASL)(平成 24 年 2 月, Symposium“Liver Fibrosis, Mechanism and Non-invasive Diagnosis”「Kupffer cells and fibrosis in cholestatic liver injury in mice.」演者)
- 2) 第 48 回日本肝臓学会総会(平成 24 年 6 月, ワークショップ 8「NASH/NAFLD から進展する肝硬変・肝臓の現状と対応」非アルコール性脂肪化におけるトリプトファンの影響 演者)
- 3) JDDW2012(第 16 回日本肝臓学会大会)(平成 24 年 10 月, ワークショップ 6「病態栄養からみた肝・胆・膵疾患—治療への応用—」非アルコール性脂肪化におけるトリプトファンの影響 演者)
- 4) 第 49 回日本肝臓学会総会(平成 25 年 6 月, ワークショップ「胆汁酸研究の最近の進歩」胆汁酸による肝細胞障害および肝線維化における TNF- α の役割 演者)
- 5) JDDW2013(第 55 回日本消化器病学会大会)(平成 25 年 10 月, パネルディスカッション 3「機能性食品や補助食品の消化器疾患における役割」アミノ酸の肝脂肪化に対する影響 演者)

白木 亮:

- 1) 第 27 回日本静脈経腸栄養学会(平成 24 年 2 月, ワークショップ 4「アウトカム予測因子としての栄養アセスメント」消化器疾患患者の主観的包括的評価(SGA)と在院日数 演者)
- 2) 第 48 回日本肝臓学会総会(平成 24 年 6 月, ワークショップ 司会)
- 3) 第 20 回日本消化器関連学会週間 JDDW 2011(平成 24 年 10 月, ランチョンセミナー「肝硬変における栄養療法の重要性」アミノレバン EN[®]による肝硬変患者の自覚症状・QOL の改善効果 演者)
- 4) 第 28 回日本静脈経腸栄養学会(平成 25 年 2 月, パネルディスカッション 4「肝硬変の栄養管理 Up-to-Date」肥満合併肝硬変患者の検討 演者)
- 5) 第 99 回日本消化器病学会総会(平成 25 年 3 月, パネルディスカッション 9「非代償性肝硬変の合併症と予後」肝硬変患者の合併症の疫学 演者)
- 6) 第 100 回日本消化器病学会総会(平成 26 年 4 月, Research Forum3「肝炎の病態と内科治療」肝硬変患者でのカルニチンの動態と肝性脳症への効果について 演者)
- 7) 第 114 回日本外科学会定期学術集会(平成 26 年 4 月, ランチョンセミナー18「肝硬変における栄養療法の意義」演者)
- 8) 第 37 回日本栄養アセスメント研究会(平成 26 年 5 月, シンポジウム「肝疾患の栄養アセスメントの現状と問題点」C 型慢性肝疾患患者における肥満の検討 演者)
- 9) JDDW 2014(第 18 回日本肝臓学会大会)(平成 26 年 10 月, パネルディスカッション 11「肝硬変合併症の新しい治療戦略」肝硬変患者でのカルニチンの動態と肝性脳症への効果について 演者)
- 10) JDDW 2014(第 18 回日本肝臓学会大会)(平成 26 年 10 月, ランチョンセミナー47「肝硬変における栄養療法の意義」演者)

内木隆文:

- 1) 第 48 回日本肝臓学会総会(平成 24 年 6 月, ワークショップ 1「脳死肝移植の現状と我が国における今後の肝移植の展開」新劇症肝炎肝移植ガイドラインの最近の検証ならびに治療効果判定への応用 演者)
- 2) 第 38 回日本急性肝不全研究会(平成 24 年 6 月, シンポジウム「臓器移植法案改正後、急性肝不全に対する肝移植適応はどう変わったか?」新劇症肝炎肝移植ガイドラインの治療効果判定への応用 演者)
- 3) JDDW2012(平成 24 年 10 月, ワークショップ 4「臓器移植法改正後の脳死肝移植を如何に推進すべきか—新たな問題点とその解決新劇症肝炎肝移植ガイドラインの治療効果判定への応用」演者)

向井 強:

- 1) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, VTR シンポジウム 1「内視鏡治療に伴う偶発症

- の対処法—胆膵病変—」 Covered Metallic Stent の治療成績と有効な reintervention 演者)
- 2) JDDW2012(第 54 回日本消化器病学会大会・第 84 回日本消化器内視鏡学会総会合同)(平成 24 年 10 月, シンポジウム 17「Role of oncologists and endoscopists in the management of biliary tract and pancreatic diseases」 Chemotherapy and endoscopic management for patients with unresectable advanced pancreatic cancer. 演者)

岩田圭介 :

- 1) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, シンポジウム 4「EUS ガイド下治療の適応と限界」 Peripancreatic fluid collection に対する EUS 下ドレナージの適応と限界 演者)
- 2) JDDW2012(第 54 回日本消化器病学会大会・第 84 回日本消化器内視鏡学会総会合同)(平成 24 年 10 月, シンポジウム 16「胆膵疾患に対する therapeutic EUS の現状」 Peripancreatic fluid collection に対する EUS ガイド下治療の現状 演者)
- 3) 第 85 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 25 年 5 月, VTR シンポジウム 2「Interventional EUS の進歩」 膵癌性疼痛に対する EUS 下腹腔神経叢/神経節ブロックに関する検討 演者)

末次 淳 :

- 1) 第 99 回日本消化器病学会総会(平成 25 年 3 月, シンポジウム 14「消化器領域における幹細胞研究の進歩」 肝組織幹細胞および肝癌幹細胞における表面マーカー CD133 の意義 演者)

岩下拓司 :

- 1) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, パネルディスカッション 5「慢性膵炎の内視鏡診断と治療」 自己免疫性膵炎診断における EUS-FNA の有用性と限界 演者)
- 2) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, 「International oral session」 High single-pass diagnostic yield of a novel 25-gauge biopsy needle for EUS-FNA in pancreatic solid lesion 演者)
- 3) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, シンポジウム「EUS ガイド下治療の適応と限界」 胆管挿管困難例における EUS 下ランデブー法の検討 演者)
- 4) JDDW2012(第 54 回日本消化器病学会大会・第 84 回日本消化器内視鏡学会総会合同)(平成 24 年 10 月, サテライトシンポジウム「EUS-FNA を基本から学ぶ」 リンパ節に対する EUS-FNA 演者)
- 5) 第 99 回日本消化器病学会総会(平成 25 年 3 月, ワークショップ 12「胆膵疾患に対する interventional EUS の現状」 上部消化管再建術後症例に対する超音波内視鏡下順行性アプローチによる胆道疾患治療 演者)
- 6) 第 85 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 25 年 5 月, サテライトセミナー「～難治性膵・胆管狭窄はこう攻めろ!～」 EUS でこう攻めろ! Rendezvous/Antegrade によるアプローチ 演者)
- 7) 第 85 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 25 年 5 月, ブースレクチャー-EUS 下処置における SonoTip 19gauge 針の有用性 演者)
- 8) JDDW2013(第 55 回日本消化器病学会大会・第 86 回日本消化器内視鏡学会総会合同)(平成 25 年 10 月, International Session 3「IgG4-related disease and endoscopy」 EUS-FNA using a standard 19-gauge needle for the diagnosis of autoimmune pancreatitis. 演者)
- 9) JDDW2013(第 86 回日本消化器内視鏡学会総会)(平成 25 年 10 月, ワークショップ 23「胆膵内視鏡のトラブルシューティング」 ERCP 困難な術後変更解剖症例の胆道病変に対する EUS 下順行性治療 演者)
- 10) 第 100 回日本消化器病学会総会(平成 26 年 4 月, シンポジウム 9「膵胆道疾患における interventional EUS の有用性と問題点」 術後変更解剖例の胆道病変に対する EUS 下順行性治療 演者)
- 11) JDDW2014(第 56 回日本消化器病学会大会)(平成 26 年 10 月, International symposium 6「EUS-guided therapy Current status and future direction」 Endoscopic ultrasound-guided rendezvous for difficult biliary cannulation: a multicenter prospective pilot study. 演者)

井深貴士 :

- 1) 第 55 回日本消化器内視鏡学会東海支部例会(平成 25 年 12 月, International Session 3「IgG4-related disease and endoscopy」 EUS-FNA using a standard 19-gauge needle for the diagnosis of autoimmune pancreatitis. 演者)
- 2) 第 87 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 26 年 5 月, ワークショップ 9「消化管濾胞性リンパ腫の診断と治療」 当科における消化管濾胞性リンパ腫に関する検討(治療と予後を中心に) 演者)

- 3) 第 21 回日本門脈圧亢進症学会総会(平成 26 年 9 月, ワークショップ 2「カプセル内視鏡」肝硬変患者に対するカプセル内視鏡による Portal hypertensive enteropathy(PHE)の検討 演者)
- 4) JDDW2014(第 56 回日本消化器病学会大会)(平成 26 年 10 月, ワークショップ 23「小腸疾患診療における内視鏡ーカプセル内視鏡, バルーン内視鏡の役割と位置づけ」ダブルバルーン小腸内視鏡(DBE)・カプセル内視鏡(CE)・FDG-PET を用いた悪性リンパ腫空腸回腸病変評価のストラテジー 演者)

白上洋平:

- 1) 第 20 回日本がん予防学会(平成 25 年 7 月, ワークショップ「炎症および傷害物質に関連した発がん」と予防」非アルコール性脂肪肝炎関連肝発癌新規モデルとペントキシフィリンによる発癌抑制効果 演者)
- 2) JDDW 2013(第 17 回日本肝臓学会大会)(平成 25 年 10 月, I シンポジウム 11「NASH 肝臓の発がんメカニズム解明と治療への応用」新規 NASH/NAFLD 関連肝発癌モデルとペントキシフィリンによる発癌抑制効果 演者)

小野木章人:

- 1) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, プレナリーセッション「当科における難治性潰瘍性大腸炎に対する Tacrolimus 投与の治療成績と内視鏡所見(特に粘膜治癒)の検討」演者)

土井晋平:

- 1) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, プレナリーセッション 9「膵臓・胆道」癌性疼痛に対する超音波内視鏡ガイド下腹腔神経叢ブロックと直接腹腔神経節ブロックの除痛効果比較に関する多施設共同第 2 相試験 演者)
- 2) 第 48 回日本胆道学会学術集会(平成 24 年 9 月, ビデオワークショップ「胆道疾患内視鏡治療困難例に対する手技の工夫」SpyGlass を用いた YAG レーザーによる胆道結石破砕術 演者)
- 3) JDDW2012(第 54 回日本消化器病学会大会・第 84 回日本消化器内視鏡学会総会合同)(平成 24 年 10 月, ワークショップ 15「総胆管結石症に対する治療法の選択と長期予後」Propensity score matching を用いた EST/EPBD の長期予後の比較検討 演者)
- 4) JDDW2012(第 54 回日本消化器病学会大会・第 10 回日本消化器外科学会大会合同)(平成 24 年 10 月, ワークショップ 16「消化器癌に対する緩和医療」超音波内視鏡ガイド下腹腔神経叢ブロックの長期成績 演者)
- 5) 第 99 回日本消化器病学会総会(平成 25 年 3 月, シンポジウム 9「非切除胆膵癌に対する内視鏡的 intervention の進歩」超音波内視鏡ガイド下腹腔神経叢ブロックの Long-term response に関する検討 演者)
- 6) 第 85 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 25 年 5 月, パネルディスカッション 2「慢性膵炎に対する内視鏡治療の現状」慢性膵炎に対する内視鏡治療の短期・長期成績 演者)
- 7) 第 49 回日本胆道学会学術集会(平成 25 年 9 月, ビデオワークショップ「胆道内視鏡診断のコツとピットフォール」胆道病変の良悪性鑑別における経口胆道鏡検査の有用性 演者)
- 8) JDDW2013(第 55 回日本消化器病学会大会・第 86 回日本消化器内視鏡学会総会合同)(平成 25 年 10 月, International Session 8「Recent advances in Interventional EUS」Endoscopic ultrasound-guided direct celiac ganglia versus celiac plexus neurolysis: A randomized multicenter trial. 演者)

中島賢憲:

- 1) JDDW2013(第 55 回日本消化器病学会大会・第 86 回日本消化器内視鏡学会総会・第 11 回日本消化器外科学会大会合同)(平成 25 年 10 月, ワークショップ 14「胆道癌の胆管ドレナージの標準化ー手術症例と非手術症例」非切除胆道癌による肝門部狭窄に対する胆道ステントの種類・留置形態の検討 演者)

河内隆宏:

- 1) JDDW2012(第 54 回日本消化器病学会大会)(平成 24 年 10 月, シンポジウム 8「NASH からの発癌: 基礎と臨床」肥満・高血圧発症ラットを用いた新規 NASH 肝発癌モデルの作製ー緑茶カテキン EGCG は NASH・高血圧に関連した肝腫瘍形成を抑制するー 演者)

上村真也：

- 1) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, VTR シンポジウム 1「内視鏡治療に伴う偶発症の対処法ー胆膵病変ー」総胆管結石切石時のバスケット陥頓に対するトラブルシューティング 演者)

大野智彦：

- 1) JDDW2012(第 54 回日本消化器病学会大会)(平成 24 年 10 月, ワークショップ 8「消化器疾患と胆汁酸」非環式レチノイドと GW4064(FXR ligand)併用による肝癌抑制効果 演者)

馬淵正敏：

- 1) 第 55 回日本消化器内視鏡学会東海支部例会(平成 24 年 12 月, シンポジウム 2「胆膵疾患関連手技の Up to Date」バスケット嵌頓に対する EPLBD 演者)

奥野 充：

- 1) JDDW2013(第 55 回日本消化器病学会大会・第 86 回日本消化器内視鏡学会総会・第 17 回日本肝臓学会大会合同)(平成 25 年 10 月, シンポジウム 4「IgG4 関連膵胆道疾患の診断と治療」自己免疫性膵炎診断における EUS-FNA の有用性 演者)
- 2) 第 100 回日本消化器病学会総会(平成 26 年 4 月, パネルディスカッション 10「AIP-概念、診断、治療の Update-」自己免疫性膵炎診断における EUS-FNA の有用性 演者)

丸田明範：

- 1) JDDW2013(第 86 回日本消化器内視鏡学会総会・第 55 回日本消化器病学会大会合同)(平成 25 年 10 月, シンポジウム 16「Endoscopic oncology」EUS-FNA によるリンパ腫の診断 演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 森脇久隆：日本ビタミン学会賞(平成 24 年度)

9. 社会活動

森脇久隆：

- 1) 岐阜県身体障害者福祉協議会委員(～平成 26 年 3 月)
- 2) 岐阜県難病医療連絡協議会座長(～平成 26 年 3 月)
- 3) 岐阜県エイズ対策推進協議会座長(～平成 26 年 3 月)
- 4) 岐阜県医療審議会委員(～平成 26 年 3 月)
- 5) 岐阜県人権懇話会委員(～平成 26 年 3 月)
- 6) 岐阜県教育委員会第 3 部会長(～平成 26 年 3 月)
- 7) 岐阜県肝疾患診療連携拠点病院協議会委員(～平成 26 年 3 月)

鶴見 寿：

- 1) 岐阜県がん対策推進協議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県エイズ対策推進協議会委員(～現在)
- 3) 岐阜県国民健康保険診療報酬審査委員会委員(～現在)
- 4) 岐阜県身体障害者福祉協議会委員(～現在)
- 5) 岐阜県社会保険審議会委員(～現在)

荒木寛司：

- 1) 岐阜県社会健康保険診療報酬審査委員会委員(～現在)
- 2) 岐阜県生活習慣病検診等管理指導審議会大腸がん部会(～現在)

清水雅仁：

- 1) 岐阜県肝炎治療認定協議会(予防接種)(～現在)

白木 亮：

- 1) 岐阜市社会福祉審議会(～現在)

末次 淳：

- 1) 岐阜県感染症予防対策協議会(～現在)

10. 報告書

- 1) 森脇久隆：食事・運動療法のアウトカム評価：厚生労働科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業)「ウイルス性肝疾患患者の食事・運動療法とアウトカム評価に関する研究班」平成 23 年度研究報告書：5-9(平成 24 年)
- 2) 清水雅仁：栄養障害の機序解析(アミノ酸)―分岐鎖アミノ酸を用いた肥満関連肝発癌予防―：厚生労働科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業)「ウイルス性肝疾患患者の食事・運動療法とアウトカム評価に関する研究班」平成 23 年度研究報告書：45-47(平成 24 年)
- 3) 白木 亮：肝疾患患者の日常運動量について：厚生労働科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業)「ウイルス性肝疾患患者の食事・運動療法とアウトカム評価に関する研究班」平成 23 年度研究報告書：48-51(平成 24 年)
- 4) 森脇久隆：食事・運動療法のアウトカム評価：厚生労働科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業)「ウイルス性肝疾患患者の食事・運動療法とアウトカム評価に関する研究班」平成 25 年度総括・分担研究報告書：1-5(平成 25 年)
- 5) 森脇久隆：〈共同研究報告〉慢性肝疾患患者の日常運動について：厚生労働科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業)「ウイルス性肝疾患患者の食事・運動療法とアウトカム評価に関する研究班」平成 25 年度総括・分担研究報告書：7-10(平成 25 年)
- 6) 清水雅仁：栄養障害の機序解析―非アルコール性肝炎と肝発癌の抑制―：厚生労働科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業)「ウイルス性肝疾患患者の食事・運動療法とアウトカム評価に関する研究班」平成 25 年度総括・分担研究報告書：42-45(平成 25 年)
- 7) 白木 亮：サルコペニアを合併した肝硬変患者に対する BCAA の効果に関する研究：厚生労働科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業)「ウイルス性肝疾患患者の食事・運動療法とアウトカム評価に関する研究班」平成 25 年度総括・分担研究報告書：46-48(平成 25 年)
- 8) 森脇久隆：食事・運動療法のアウトカム評価：厚生労働科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業)「ウイルス性肝疾患患者の食事・運動療法とアウトカム評価に関する研究班」平成 23～25 年度総合研究報告書：1-9(平成 25 年)
- 9) 末次 淳，中村信彦，柴田悠平，松本拓郎，鶴見 寿，森脇久隆：リツキシマブ投与による B 型肝炎ウイルス再活性化の実情：厚生労働科学研究費補助金(難治性疾患克服研究事業)平成 25 年度分担研究報告書・分科会総括研究報告書：160-162(平成 25 年)

11. 報道

- 1) 安田一朗：特色ある診療内容：診療科・部門紹介―第 1 内科(消化器内科)―：鶴舟(2012 年 1 月 1 日号 2 頁)
- 2) 森脇久隆：Chronic liver disease：Medical Tribune(Feb 2012 p25)
- 3) 森脇久隆：肝がん：ヘルシスト 212 号(2012；36：24-25)
- 4) 荒木寛司，森脇久隆：寛解期潰瘍性大腸炎に合併したカンピロバクテラ腸炎：CLINIC magazine(2012 年 5 月号 (NO. 515) 37 ページ，68-69)
- 5) 鶴見 寿：HIV 検査 伸び悩み 県内の新規感染者 過去最多：朝日新聞(2012 年 6 月 5 日 13 版 p.25)
- 6) 森脇久隆：肝炎デー：岐阜新聞(2012 年 7 月 22 日)
- 7) 森脇久隆：肝炎デー：岐阜新聞(2012 年 7 月 29 日 22 面)
- 8) 森脇久隆：ネキシウム：メディカルトリビューン 座談会
- 9) 鶴見 寿：出生後の感染と推定された HIV 母子感染例：病原微生物検出情報月報(Vol.33, No3, 70-71, 2012)
- 10) 海堀昌樹，森脇久隆：障害肝合併肝細胞癌患者の肝切除周術期の包括的リハビリテーションでインスリン抵抗性が改善する可能性【臨床腫瘍学会 2012】：日経メディカルオンライン <http://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/all/gakkai/sp/jsmo2012/201208/526185.html>
- 11) 清水雅仁：GTE：Frankfurter Allgemeine(2012 年 12 月 16 日)
- 12) 森脇久隆：岐阜新聞大賞：岐阜新聞(2013 年 1 月 6 日(1 面)，2-1, 2-10)
- 13) 荒木寛司：酸関連疾患の課題とネキシウムの役割：Medical Tribune 特別企画(2013 年 1 月 17 日)
- 14) 森脇久隆：岐阜新聞大賞：岐阜テレビ 放映(2/1)(2/9)

- 15) 森脇久隆：肝炎ウイルス検査：中日新聞(2013年3月25日(22面))
- 16) 森脇久隆, 西口修平, 海道利実, 調 憲, 水田敏彦:座談会 肝硬変とサルコペニア up-date:Progress in Medicine 2013;33:1966-1971.
- 17) 森脇久隆：LCガイドライン：八女筑後医報(2013年5月号(No.356)4-8頁)
- 18) 荒木寛司, 森脇久隆：文献紹介「胃 MALT リンパ腫に対するヘリコバクター・ピロリ除菌療法後10年間の経過観察での遺残病変と二次癌の発生」：胃がん perspective(2013.6・Vol.6-No.2 114-116)
- 19) 森脇久隆：肝癌診療：内科会だより(2013年7月11日号1-2頁)
- 20) 森脇久隆, 末次 淳, 中村弘子：肝炎について考える-今こそ肝炎ウイルス検査を-：岐阜新聞(2013年7月21日(23面))
- 21) 森脇久隆：肝炎患者の運動と栄養：かんゆう(広島肝友会)(2013年8月15日号(No.946)5-8頁)
- 22) 安田/森脇久隆：パープルリボン：中日新聞(2013年8月19日(15面))
- 23) 安田一朗, 土井晋平：専門医に聞くすい臓がん治療の今：岐阜新聞(2013年8月23日(23面))
- 24) 末次 淳：Researchers Identify Liver Cancer Progenitor Cells Before Tumors Become Visible：UCSD San Diego News Center
- 25) 鶴見 寿：エイズ治療を語る：中日新聞(2013年10月21日17頁)
- 26) 鶴見 寿：特発性血小板減少性紫斑病、再生不良性貧血など血液の病気：平成26年度難病なんでも医療相談テレフォン・メールサービス(2014年7月8日)
- 27) 富田栄一, 杉原潤一, 末次 淳, 中村弘子：特集 肝炎について考える 肝炎は薬に治せる時代に：岐阜新聞(2014年7月28日)
- 28) 末次 淳, 清水雅仁, 小倉真治：肝がん治療の実力医療機関：近くで探すがん治療病院 週刊朝日(臨時増刊)(2014年)
- 29) 末次 淳：C型肝炎の新しい治療法：KNG 410号(4)岐阜県肝炎の会 特集(2014年)
- 30) 中村 博：ゲムシタピンを含む治療は再発または難治性悪性リンパ腫に対するサルベージ療法として高い効果と安全性【JSH2014】：日経メディカル 癌 Experts 学会スペシャル：第76回日本血液学会学術集会(2014年11月3日)

12. 自己評価

評価

研究実績は外部資金獲得、論文刊行を含め順調に伸びている。これらを踏まえ、平成25年度日本肝臓学会西部会を成功裡に開催した。RXRリガンドを用いた肝発癌抑制の大規模臨床試験の展開や、慢性肝不全の栄養療法ガイドラインへの貢献等、基礎と臨床研究を繋ぐトランスレーショナルリサーチが実践できている。

現状の問題点及びその対応策

臨床の旺盛な需要に積極的に対応しているため、研究人員の相対的な不足が続いている。特に関連病院の臨床需要にこたえることを優先しているため、研究人員・大学院生の早急な増員は難しいのが現状である。地域医療の充実のためにも、優秀な人材の確保・育成が急務の課題である。

今後の展望

内視鏡診療に基づく早期診断法や治療法の開発のみならず、発癌抑制法(薬)の開発・臨床応用は、消化器癌に対する包括的な治療戦略において、今後ますます重要な役割を果たすものと考えられる。消化器癌、特に肝および大腸発癌高危険群のスクリーニングに有用な biomarker を明らかにすることで、積極的介入を必要とする患者を同定し、RXRリガンドや種々の天然化合物を用いた発癌抑制を実践することを目標にして、今後も一連の研究を推進していく。「Pharmaceutical」および「Nutraceutical」なアプローチによる消化器癌化学発癌予防(cancer chemoprevention)を実践し、さらには新規肝および大腸発癌抑制薬(法)を開発することで、少しでも癌罹患患者を減らしていく。

(5) 血液病態学分野

1. 研究の概要

悪性リンパ腫の予後因子解析と病態に応じた治療戦略の確立, 高齢者白血病の治療ならびに白血病の分化誘導療法, 骨髄異形成症候群, 造血幹細胞移植などが主要テーマである。

1. 悪性リンパ腫の治療戦略, 特にびまん性大細胞 B 細胞性リンパ腫の層別化治療を目標に, 臨床的または病理学的に予後因子解析を行っている。特に予後因子解析は, 各種 TNF superfamily に属する血清サイトカインやキヌレニンおよび組織中の Indoleamine 2,3-dioxygenase (IDO) 発現, 腫瘍内微小環境における FOXP3 陽性抑制性 T 細胞の発現などを検索することにより予後不良群の適格な抽出し, この群に対しては, 積極的に造血幹細胞移植術を取り入れるなどの層別化治療を行っている。また B 細胞リンパ腫のみならず T 細胞リンパ腫においても, 各種治療を臨床試験として行っている。
2. 白血病の中でも急性前骨髄球性白血病に対する分化誘導療法としてのレチノイド療法の機序と耐性発現の解明を行い, 耐性克服法を開発する研究を進めている。最近では, 各種合成レチノイドのみならず, ビタミン K2 などにも注目している。高齢者白血病では, 若年者とは異なる方法を用いて QOL を考慮した治療戦略を考案しているが, その基礎的メカニズムを含めて臨床研究を遂行している。
3. 骨髄異形成症候群の IDO 発現などを中心に免疫疫学的病態を解明し, 各種免疫抑制剤や IDO 阻害剤による治療法の開発を行っている。
4. 近年注目されているサルコペニアが造血器腫瘍にいかに関与するかを検討している。

2. 名簿

准教授: 鶴見 寿 Hisashi Tsurumi(血液病態学・臨床腫瘍学・エイズ対策推進センター)

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 鶴見 寿. 感染症 HIV 感染症: 岡庭 豊編. Year note TOPICS 2012-2013, 東京: メディックメディア; 2012 年: 227-230.
- 2) 兼村信宏, 鶴見 寿, 森脇久隆. 「血小板輸血不応症」日本臨床 血液症候群(第 2 版)(II), 大阪: 日本臨床社; 2013 年: 393-395.
- 3) 中村信彦, 鶴見 寿. 濾胞性リンパ腫における血清可溶性 IL-2 受容体の予後因子としての意義: 血液内科, 東京: 化学評論社; 2014 年: 79-84.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 鶴見 寿. 移植非適応骨髄腫の治療(教育講演), 臨床血液 2014 年; 55 巻: 319-327.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 大野智彦, 白上洋平, 清水雅仁, 久保田全哉, 境 浩康, 安田陽一, 河内隆宏, 鶴見 寿, 森脇久隆. 非環式レチノイドと FXR リガンド GW4064 併用による肝がん細胞の増殖抑制, Vitamins (Japan) 2012 年; 86 巻: 539-541.
- 2) 馬淵量子, 後藤尚絵, 柴田悠平, 中村信彦, 兼村信宏, 高井光治, 清水雅仁, 原 武志, 安田一朗, 荒木寛司, 鶴見 寿, 森脇久隆. R-CHOP 療法で治療された濾胞性リンパ腫における治療前血清可溶性インターロイキン 2 受容体の予後因子としての意義, 岐阜県内科医会雑誌 2012 年; 26 巻: 33-38.

原著 (欧文)

- 1) Tsurumi H, Hara T, Goto N, Kitagawa JI, Kanemura N, Yoshikawa T, Kasahara S, Goto H, Fukuno K, Yamada T, Sawada M, Shimizu M, Takahashi T, Takami T, Moriwaki H. A phase II study of rituximab combined with THP-COP regimen as a first-line therapy for patients with indolent B-cell lymphoma. Leukemia Lymphoma. 2012;53:247-253. IF 2.605
- 2) Kasahara S, Tsurumi H, Shibata Y, Matsumoto T, Nakamura N, Nakamura H, Kanemura N, Goto N, Hara T, Moriwaki H. Cerebriform variant type of T cell prolymphocytic leukemia with complex karyotype including an additional segment at 1p36.1. Int J Hematol. 2012;96:674-678. IF 1.679
- 3) Goto N, Tsurumi H, Goto H, Shimomura YI, Kasahara S, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Murakami N, Yoshikawa T, Fukuno K, Takahashi T, Kito Y, Takami T, Moriwaki H. Serum soluble interleukin-2

- receptor (sIL-2R) level is associated with the outcome of patients with diffuse large B cell lymphoma treated with R-CHOP regimens. *Ann Hematol.* 2012;91:705-714. IF 2.396
- 4) Goto N, Tsurumi H, Takemura M, Kanemura N, Kasahara S, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Yamada T, Sawada M, Takahashi T, Yamada T, Seishima M, Moriwaki H, Takami T. Serum soluble CD27 level is associated with outcome in diffuse large B-cell lymphoma patients treated with R-CHOP. *Leuk Lymphoma.* 2012;53:1494-1500. IF 2.605
- 5) Ogawa K, Hara T, Shimizu M, Ninomiya S, Nagano J, Sakai H, Hoshi M, Ito H, Tsurumi H, Saito K, Seishima M, Tanaka T, Moriwaki H. Suppression of azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in rats by 1-methyltryptophan, an inhibitor of indoleamine 2,3-dioxygenase. *Cancer Sci.* 2012;103:951-958. IF 3.534
- 6) Ogawa K, Hara T, Shimizu M, Nagano J, Ohno T, Hoshi M, Ito H, Tsurumi H, Saito K, Seishima M, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin gallate inhibits the expression of indoleamine 2,3-dioxygenase in human colorectal cancer cells. *Oncol Lett.* 2012;4:546-550. IF 0.987
- 7) Ninomiya S, Hara T, Tsurumi H, Goto N, Saito K, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Indoleamine 2,3-dioxygenase expression and serum kynurenine concentrations in patients with diffuse large B-cell lymphoma. *Leukemia Lymphoma.* 2012;53:1143-1145. IF 2.605
- 8) Tomita A, Shirasugi Y, Ito T, Tsurumi H, Naoe T. Extravascular hemolytic attack after eculizumab therapy for paroxysmal nocturnal hemoglobinuria. *Annals of Hematology.* 2012;91:1139-1141. IF 2.396
- 9) Yoshikawa T, Hara T, Araki H, Tsurumi H, Oyama M, Moriwaki H. First report of drug-induced esophagitis by deferasirox. *Int J Hematol.* 2012;95:689-691. IF 1.679
- 10) Fukuno K, Tsurumi H, Yamada T, Iida T, Takahashi T, Moriwaki H. Radioimmunotherapy with (90)Y-ibritumomab tiuxetan for a hemodialysis patient with relapsed follicular lymphoma. *Leuk Lymphoma.* 2013;54:2731-2733. IF 2.605
- 11) Ibuka T, Araki H, Sugiyama T, Nakanishi T, Onogi F, Shimizu M, Hara H, Takami T, Tsurumi H, Moriwaki H. Diagnosis of the jejunoileal lymphoma by double-balloon endoscopy(DBE). *World J Gastrointest Endosc.* 2013;5:111-116. IF 4.900
- 12) Ibuka T, Tsurumi H, Araki H, Hara T, Onogi F, Goto N, Kojima Y, Kanemura N, Shiraki M, Kasahara S, Shimizu M, Ogawa K, Ninomiya S, Nakanishi T, Kato T, Takami T, Moriwaki H. Clinical significance of jejunoileal involvement of non-Hodgkin's lymphoma detected by double-balloon enteroscopy. *Int J Hematol.* 2013;97:369-381. IF 1.679
- 13) Nakamura N, Goto N, Tsurumi H, Takemura M, Kanemura N, Kasahara S, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Sawada M, Yamada T, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Serum level of soluble tumor necrosis factor receptor 2 is associated with the outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with the R-CHOP regimen. *Eur J Haematol.* 2013;91:322-331. IF 2.414
- 14) Kawasoe M, Yamamoto Y, Okawa K, Funato T, Takeda M, Hara T, Tsurumi H, Moriwaki H, Arioka Y, Takemura M, Matsunami H, Markey SP, Saito K. Acquired resistance of leukemic cells to AraC is associated with the upregulation of aldehyde dehydrogenase 1 family member A2. *Exp Hematol.* 2013;41:597-603. IF 2.806
- 15) Yamada T, Goto N, Tsurumi H, Takata K, Sato Y, Yoshino T, Moriwaki H, Kito Y, Takeuchi T, Iwata H. Mantle cell lymphoma with a unique pattern of CD5 expression: a case report with review of the literatures. *Med Mol Morphol.* 2014;47:169-175. IF 1.070
- 16) Goto N, Tsurumi H, Takemura M, Matsumoto T, Shibata Y, Mabuchi R, Nakamura N, Nakamura H, Yamada T, Seishima M, Takami T, Takeuchi T, Moriwaki H. Serum soluble tumor necrosis factor receptor 1 level is associated with the outcome of diffuse large b-cell lymphoma patients treated with the CHOP or R-CHOP regimen. *J Clin Exp Hematop.* 2014;54:117-127.
- 17) Nakamura N, Kanemura N, Shibata Y, Matsumoto T, Mabuchi R, Nakamura H, Kitagawa J, Goto N, Hara T, Tsurumi H, Moriwaki H. Lenalidomide-induced cytokine release syndrome in a patient with multiple myeloma. *Leukemia Lymphoma.* 2014;55:1691-1693. IF 2.605
- 18) Takata K, Tanino M, Ennishi D, Tari A, Sato Y, Okada H, Maeda Y, Goto N, Araki H, Harada M, Ando M, Iwamuro M, Tanimoto M, Yamamoto K, Gascoyne RD, Yoshino T. Duodenal follicular lymphoma: comprehensive gene expression analysis with insights into pathogenesis. *Cancer Sci.* 2014;105:608-615. IF 3.534

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：鶴見 寿；大学活性化経費(研究：科研採択支援)：急性骨髄性白血病におけるインドールアミン酸素添加酵素(IDO)の役割；平成 26 年度；680 千円
- 2) 研究代表者：原 武志；大学活性化経費(研究：科研採択支援)：レスベラトロールによる悪性リンパ腫再発予防効果の検討；平成 26 年度；560 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

鶴見 寿：

- 1) 日本臨床血液学会評議員(～現在)
- 2) 日本血液学会評議員(～現在)
- 3) 日本輸血学会東海支部評議員(～現在)
- 4) 日本臨床腫瘍学会評議員(～現在)
- 5) 日本内科学会支部評議員(～現在)
- 6) 日本骨髓腫学会評議員(平成 24 年～現在)

原 武志：

- 1) 日本血液学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

鶴見 寿：

- 1) Trends in Hematological Malignancies；編集アドバイザー(～現在)
- 2) International Journal of Hematology；査読委員(～現在)
- 3) Journal of Tumor；編集委員(～現在)

7. 学会招待講演、招待シンポジスト、座長

- 1) 第 27 回日本エイズ学会学術集会・総会共催セミナー(平成 25 年 11 月、「HIV 診療チームは地域のダイヤモンド！？ ～皆で HIV 診療にきらめきを！～」演者)
- 2) 第 76 回日本血液学会学術総会(平成 26 年 11 月、教育講演「移植非適応骨髓腫の治療」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

森脇久隆：

- 1) 岐阜県身体障害者福祉協議会委員(～平成 26 年 3 月)
- 2) 岐阜県難病医療連絡協議会座長(～平成 26 年 3 月)
- 3) 岐阜県エイズ対策推進協議会座長(～平成 26 年 3 月)
- 4) 岐阜県医療審議会委員(～平成 26 年 3 月)
- 5) 岐阜県人権懇話会委員(～平成 26 年 3 月)
- 6) 岐阜県教育委員会第 3 部会長(～平成 26 年 3 月)
- 7) 岐阜県肝疾患診療連携拠点病院協議会委員(～平成 26 年 3 月)

鶴見 寿：

- 1) 岐阜県がん対策推進協議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県エイズ対策推進協議会委員(～現在)
- 3) 岐阜県国民健康保険診療報酬審査委員会委員(～現在)

- 4) 岐阜県身体障害者福祉協議会委員(～現在)
- 5) 岐阜県社会保険審議会委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 若林チヒロ, 鶴見 寿: HIV 陽性者の生活と社会参加に関する研究: 厚生労働科学研究費補助金(エイズ対策研究事業)「地域において HIV 陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究」平成 25 年度研究報告書(平成 25 年)

11. 報道

- 1) 鶴見 寿: HIV 検査 伸び悩み 県内の新規感染者 過去最多: 朝日新聞(2012 年 6 月 5 日 13 版 p.25)
- 2) 鶴見 寿: 出生後の感染と推定された HIV 母子感染例: 病原微生物検出情報月報(Vol.33, No3, 70-71, 2012)
- 3) 鶴見 寿: エイズ治療を語る: 中日新聞(2013 年 10 月 21 日 17 頁)
- 4) 鶴見 寿: 特発性血小板減少性紫斑病、再生不良性貧血など血液の病気: 平成 26 年度難病なんでも医療相談テレフォン・メールサービス(2014 年 7 月 8 日)

12. 自己評価

評価

1. 研究の概要: 血液病態学 1-3 のいずれも、ほぼ順調に進行している。とくに下記の点を高く評価する。
 - (1) 悪性リンパ腫の予後因子解析として、新しいいくつかの予後因子を抽出できた。いずれも簡便な検査であり、再現性が高く、臨床的有用性が極めて高いと思われる。特に IDO に注目した予後因子解析は、治療ターゲットにもなる可能性があり、今後の検討が来たいされる。
 - (2) 悪性リンパ腫に対する日本発の THP-COP 療法, R-THP-COP 療法に関する成績を国際的に公表した。
 - (3) 高齢者急性骨髄性白血病や通常の標準的強力化学療法の遂行が困難な症例を対象に、新規治療レジメンを立案、報告した。特に G-CSF を併用するというユニークなデザインも含まれる。これらは、全身状態不良の患者においても安全かつ有効な治療と言える。
3. 研究成果の発表: 上記(2), (3)の貢献が大きい。その他おおむね順調と評価する。
4. 研究費獲得状況: 今後、より一層の取得に向けて努力する。
5. 発明・特許出願状況: 上記治療法の開発という点で、fair と評価する。
- 6, 7. 学会活動: おおむね順調と評価する。
11. 報道: おおむね順調に情報を公表できていると評価する。

現状の問題点及びその対応策

臨床の旺盛な需要に対応すべく、人員を振り向けざるを得ない状況にある。研究スタッフとくに大学院生の充実を図る必要がある。また、血液悪性腫瘍を含む Clinical Oncology は、特に充実したエビデンスが望まれる分野であり、新規治療などは単施設では限界があり、治療の開発を目的とした臨床試験の立案には、他施設との協力を密にした多施設共同試験が必要である。

今後の展望

1. 血液病態学: 治療抵抗性白血病および悪性リンパ腫の機序解明と、新しい治療法開発の展開を期している。また、レベルの高い臨床試験を立案し、多施設共同試験として積極的に進める。
3. 研究成果の発表: IF5 ならびに 10 以上を目安とし、それぞれを上回る業績の増加を目指す。
4. 研究費獲得状況: 十分な研究費獲得に向けて努力する。
5. 発明・特許出願状況: 次の展望は視野に入っていない。
- 6, 7. 学会活動: 各種国際学会、特に米国血液会議での継続的採択を目指す。

(6) 産科婦人科学分野

1. 研究の概要

癌治療における妊孕性温存が当面のテーマである。癌治療においては生命予後の改善が第一であり、従来はそのために安易に妊孕性が犠牲になってきた。しかし、近年では治療の根治性だけでなく、如何にADLを低下させないかが重要とされるようになってきている。さらに婦人科においてはもう一つ、生殖可能年齢の症例に対しては如何に妊孕性を温存し、将来の挙児希望を叶えられるかが問題となってきた。手術手技の改善と薬物による改善の可能性を追求している。

2. 名簿

教授：	森重健一郎	Ken-ichirou Morishige
准教授：	古井辰郎	Tatsuro Furui
講師：	豊木 廣	Hiroshi Toyoki
助教：	早崎 容	You Hayasaki
助教：	矢野竜一朗	Ryuichirou Yano
助教：	川島英理子	Eriko Kawashima
助教：	牧野 弘	Hiroshi Makino
医員：	杉山三知代	Michiyo Sugiyama
医員：	操 暁子	Asako Misao
医員：	水野智子	Tomoko Mizuno
医員：	鈴木真理子	Mariko Suzuki
医員：	寺澤恵子	Keiko Terazawa
医員：	志賀友美	Tomomi Shiga
医員：	竹中基記	Motoki Takenaka
医員：	森 美奈子	Minako Mori
医員：	菊野享子	Kyoko Kikuno
医員：	宮居奈央	Nao Miyai
医員：	小池大我	Taiga Koike
医員：	高橋麗奈	Reina Takahashi

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 古井辰郎, 矢野竜一朗, 竹中基記, 森重健一郎. I.今日の不妊傾向 不妊症と感染症：鈴木秋悦編. 新版 今日の不妊診療, 東京：医歯薬出版；2013年：24-28.
- 2) 古井辰郎, 山本晃央, 寺澤恵子, 森重健一郎. 02 卵巣組織凍結の歴史：鈴木 直編. 卵巣組織凍結・移植 新しい妊孕性温存療法の実践, 東京：医歯薬出版；2013年：6-11.
- 3) 古井辰郎. CQ3 乳癌患者の生殖医療を行う施設としてどのような施設が勧められるか?：「乳癌患者における妊孕性保持支援のための治療選択および患者支援プログラム・関係ガイドラインの開発」班, 日本がん・生殖医療研究会編. 乳がん患者の妊娠出産と生殖医療に関する診療の手引き, 東京：金原出版；2014年：17-19.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 今井篤志, 鈴木紀子. 17. アンドロゲン不応症候群, 内科 2012年；109巻：1300-1302.
- 2) 古井辰郎. 若年女性がん患者の妊孕性, 東海産科婦人科学会雑誌 2012年；49巻：1-9.
- 3) 森重健一郎. 骨粗鬆症の予防と治療～整形外科を専門としない医師の立場から～, 岐阜県医師会医学雑誌 2013年；26巻：23-27.
- 4) 古井辰郎, 竹中基記, 寺澤恵子, 山本晃央, 牧野 弘, 森重健一郎. POI とがん化学療法, 臨床婦人科産科 2014年；68巻：876-883.
- 5) 古井辰郎, 牧野 弘, 竹中基記, 寺澤恵子, 森重健一郎. 3. 地域におけるがん・生殖医療ネットワーク, 産科と婦人科 2014年；10巻：1183-1188.

総説（欧文）

なし

原著 (和文)

- 1) 市橋享子, 矢野竜一朗, 水野智子, 早崎 容, 古井辰郎, 森重健一郎. 傍大動脈リンパ節転移を認めた STUMP(Smooth Muscle Tumor of Uncertain Malignant Potential)の一例, 東海産科婦人科雑誌 2012 年; 48 卷: 173-178.
- 2) 大塚祐基, 伊藤直樹, 早崎 容, 豊木 廣, 古井辰郎, 丹羽憲司, 森重健一郎. 黄体ホルモン療法により生児を得た若年子宮体癌(類内膜癌 G3)の一例, 東海産科婦人科雑誌 2012 年; 48 卷: 179-183.
- 3) 矢野竜一朗, 平工由香, 山本和重, 森重健一郎. 卵巣成熟奇形腫に対する腹腔鏡での摘出手技の検討—合併症のリスク軽減のため—, 日本産科婦人科内視鏡学会雑誌 2012 年; 27 卷: 478-484.
- 4) 丹羽憲司, 森重健一郎, 玉舎輝彦. 卵巣がん治療における“十全大補湯”の長期予後に対する影響, 漢方研究のあゆみ 2012 年; 29 卷: 28-30.
- 5) 足立泰美, 潘 俊毅, 森重健一郎, 磯 博康, 西條辰義. 産婦人科集約化に伴う妊婦の施設選択行動の分析—地理的空間的要因・施設要因・社会的経済的要因の影響—, 医療経済研究 2012 年; 24 卷: 5-18.
- 6) 福井 温, 松岡哲也, 荻田和秀, 光田信明, 長松正章, 森重健一郎, 木村 正. 市立病院産婦人科統合運用による広域母子医療センター化に伴う地域の産婦人科救急搬送の変化, 日本周産期・新生児医学会雑誌 2012 年; 48 卷: 922-927.
- 7) 大野裕美, 加藤博基, 内山麻里子, 兼松雅之, 森美奈子, 早崎 容, 古井辰郎, 森重健一郎, 廣瀬善信. 内頸部型粘液性境界悪性腫瘍, 画像診断 2013 年; 33 卷: 140-141.
- 8) 内山麻里子, 加藤博基, 大野裕美, 兼松雅之, 操 暁子, 丹羽憲司, 古井辰郎, 森重健一郎, 廣瀬善信. 卵巣境界悪性明細胞嚢胞腺線維腫, 画像診断 2013 年; 33 卷: 262-263.
- 9) 宮居奈央, 寺澤恵子, 豊木 廣, 大塚祐基, 竹中基記, 矢野竜一朗, 森重健一郎. 当院における胎盤遺残取扱プロトコールの検討, 東海産科婦人科学会誌 2013 年; 50 卷: 91-94.

原著 (欧文)

- 1) Kato H, Kanematsu M, Furui T, Morishige KI, Hirose Y. Ovarian mucinous cystadenoma coexisting with benign Brenner tumor: MR imaging findings. *Abdom Imaging*. 2013;38:412-416. IF 1.730
- 2) Kato H, Kanematsu M, Ono H, Yano R, Furui T, Morishige KI, Hatano Y. Ovarian fibromas: MR imaging findings with emphasis on intratumoral cyst formation. *Eur J Radiol*. 2013;82:e417-e421. IF 1.730
- 3) Adachi Y, Iso H, Shen J, Ban K, Fukui O, Hashimoto H, Nakashima T, Morishige K, Saijo T. An Impact of the Specialization in gynecology and obstetrics departments on pregnant women's choice for maternity institutions. *Health Econ Rev*. 2013;3:31.
- 4) Kato H, Kanematsu M, Uchiyama M, Yano R, Furui T, Morishige KI. Diffusion-weighted Imaging of Ovarian Torsion: Usefulness of Apparent Diffusion Coefficient (ADC) Values for the Detection of Hemorrhagic Infarction. *Magn Reson Med Sci*. 2014;13:39-44. IF 1.038
- 5) Ono H, Kanematsu M, Kato H, Toyoki H, Hayasaki Y, Furui T, Morishige K, Hatano Y. MR imaging findings of uterine pyomyoma: radiologic-pathologic correlation. *Abdom Imaging*. 2014;39:797-801. IF 1.730

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 永澤秀子(岐阜薬科大学薬学部), 研究分担者: 奥田健介, 平山 祐, 森重健一郎; 文科省科学研究補助金基盤研究(B): がん微小環境のメタボリックストレス応答を標的とする難治性がん治療のための創薬研究; 平成 24-26 年度; 14,500 千円(7,600 : 3,500 : 3,400 千円)
- 2) 研究代表者: 永澤秀子(岐阜薬科大学薬学部), 研究分担者: 森重健一郎; 平成 24 年度臨床研究推進支援経費: 難治性卵巣癌治療を目指すがん微小環境モジュレーターの開発に関する研究; 平成 24 年度; 500 千円
- 3) 研究代表者: 鈴木紀子, 研究分担者: 森重健一郎, 永澤秀子, 水野智子; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C): 卵巣癌における血管新生阻害薬抵抗性を克服するための治療法開発・HIF 阻害剤の導入; 平成 25-27 年度; 3,900 千円(2,100 : 800 : 1,000 千円)
- 4) 研究代表者: 川島英理子; 平成 25 年度日本女性医学学会 JMWH Bayer Grant : 若年婦人科癌生存患者における内臓脂肪蓄積と動脈硬化性疾患危険因子の検討; 平成 25 年度; 1,000 千円
- 5) 研究代表者: 森重健一郎; 平成 25 年度臨床研究推進支援経費: 卵巣癌における癌幹細胞微小環境の解析と新規分子標的薬の研究開発; 平成 25 年度; 500 千円
- 6) 研究代表者: 森重健一郎, 研究分担者: 古井辰郎, 川島英理子, 鈴木紀子, 水野智子, 牧野 弘; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C): 卵巣明細胞癌における癌幹細胞の同定とその治療抵抗性メカニズムの解明; 平成 26-28 年度; 4,940 千円(2,600 : 1,040 : 1,300 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

森重健一郎：

- 1) 日本産科婦人科学会代議員(～現在)
- 2) 日本内分泌学会代議員(～現在)
- 3) 日本婦人科腫瘍学会理事(平成 24 年 5 月～現在)
- 4) 日本婦人科腫瘍学会評議員(～平成 24 年 4 月)
- 5) 東海産科婦人科学会理事(～現在)
- 6) 日本女性医学学会評議員(～平成 25 年 10 月)
- 7) 日本女性医学学会理事(平成 25 年 10 月～現在)
- 8) 日本母性衛生学会代議員(平成 25 年 6 月～現在)
- 9) 婦人科悪性腫瘍研究機構(JGOG)理事(平成 26 年 12 月～現在)

古井辰郎：

- 1) 日本生殖医学会幹事(～現在)
- 2) 日本生殖医学会代議員(～現在)
- 3) 日本生殖内分泌学会評議員(～現在)
- 4) 日本婦人科乳癌学会評議員(～現在)
- 5) 日本産婦人科乳腺医学会評議員(～現在)
- 6) 日本 IVF 学会評議員(平成 26 年 12 月～現在)
- 7) IFFS International Meeting 2015 組織委員(平成 24 年 10 月～現在)
- 8) 東海産科婦人科学会幹事(平成 24 年 4 月～現在)
- 9) NPO 法人日本がん生殖医療研究会理事(平成 24 年 4 月～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

森重健一郎：

- 1) 第 40 回北陸産科婦人科学会(平成 24 年 6 月, 金沢, アフタヌーンセミナー「再発卵巣癌治療の将来展望」演者)
- 2) 第 27 回日本女性医学学会学術集会(平成 24 年 10 月, 山形, ランチョンセミナー1「HRT 普及に向けたベストプラクティスを考える」座長)
- 3) 第 29 回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会(平成 25 年 11 月, 岐阜, イブニングセミナー「重症糖尿病に対する新規治療法の研究」座長)
- 4) 日本性感染症学会第 26 回学術大会(平成 25 年 11 月, 岐阜, 教育セミナー4「もっと知りたい HPV」座長)
- 5) 日本性感染症学会第 26 回学術大会(平成 25 年 11 月, 岐阜, 教育講演 6「ヒトパピローマウイルス (HPV)感染症を見直すー基礎から臨床までー」座長)

古井辰郎：

- 1) 日本性感染症学会第 26 回学術大会(平成 25 年 11 月, 岐阜, 招請講演 3「ヘルペスウイルス感染症」座長)
- 2) 第 11 回日本乳癌学会中部地方会(平成 26 年 9 月, 岐阜, シンポジウム 2 薬物療法を支えるための工

夫「化学療法の性腺毒性による妊孕能低下と低エストロゲン症状」シンポジスト)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

森重健一郎：

- 1) 岐阜県周産期医療協議会委員副委員長(～現在)
- 2) 岐阜県不妊治療者支援委員会委員長(～現在)
- 3) 岐阜県医師会母体保護法指定医審査委員会委員(～現在)
- 4) 岐阜県周産期医療協議会ワーキング会議委員(平成 25 年度～現在)

古井辰郎：

- 1) 岐阜県特定不妊治療助成事業施設審査担当委員(～現在)
- 2) 岐阜県不妊治療者支援委員会委員(～現在)
- 3) 日本専門医制評価・認定機構研修施設訪問調査サーベイヤ(～現在)
- 4) 岐阜県周産期医療協議会ワーキング会議委員(平成 25 年度～現在)
- 5) 岐阜県医師会母体保護法指定医審査委員会委員(平成 24 年 6 月～現在)
- 6) 岐阜スポーツ科学トレーニングセンター相談員(～現在)

豊木 廣：

- 1) 岐阜県医師会 STD(性感染症)実態調査委員会委員(～平成 26 年 12 月)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 伊藤直樹：「研究室から 大学はいま」腹腔鏡で子宮体がんを治療：岐阜新聞(2012 年 5 月 2 日)
- 2) 森重健一郎：病院の実力～岐阜編 56(子宮・卵巣がん)：読売新聞(2012 年 9 月 2 日)
- 3) 森重健一郎：治療前に精子・卵子を凍結保存 がん患者子づくり支援 全国初設立へ 岐阜大病院 拠点にネット：中日新聞(2013 年 2 月 6 日)
- 4) 森重健一郎：出産を望むがん患者支援 精子・卵子を凍結保存：中國新聞(2013 年 2 月 15 日)
- 5) 森重健一郎：がん患者の妊娠・出産支援 専門医らネットワーク：読売新聞(2013 年 2 月 17 日)
- 6) 森重健一郎：がん患者出産支援へスクラム：日本経済新聞(2013 年 3 月 1 日)
- 7) 古井辰郎：「研究室から 大学はいま」がん治療と生殖医療が協力：岐阜新聞(2014 年 7 月 29 日)

12. 自己評価

評価

基礎研究では、大学院生も年々確保されつつあり、僅かではあるが成果も認められはじめています。業績では「数」より「質」を目指している。マンパワー不足の現状では「可」であろうと評価している。

現状の問題点及びその対応策

教室のマンパワーの不足が最大の問題点である。現状では、ほとんどの人手が臨床に忙殺され、研究室での作業が困難である。人員確保に尽力し、また現有勢力で能率的な研究時間の確保が出来るよう今まで以上に努力したい。

今後の展望

臨床科における研究は、臨床の場に還元することが前提である。そのためには、臨床家としての知識・技量に加えて、一定のレベルの基礎的な知識・手法が必要である。しかも、より高いレベルの基盤は、応用の範囲をより一層広げることが出来る。従って、大学院教育では、国際的な競争力のある研究者の養成を目指したい。

研究経験は問題解決型思考の滋養となり、ひいては高度専門職業人としての優れた臨床医を養成することに繋がる。生命現象の根元に迫る基礎的・独創的な研究を目指したい。得られた成果や培われた

思考過程・知識・手法は、医系大学の使命である難治性疾患の病因解明や新しい診断・治療方法の開発に直結し、臨床の現場への還元が期待できる。

試験管的な基礎研究の臨床応用のみならず、集積した症例の再考や他分野との共同研究にも積極的に参加したい。研究は未知へのチャレンジであるため、基礎研究・臨床研究を通じて従来の手技・手法を再考でき、より安全で確実な診断・治療を常に追求するシステム作りをしたい。

(7) 放射線医学分野

1. 研究の概要

- 1) 画像診断関連：CT, MRI, 核医学を用いた研究や, IVR (インターベンショナルラジオロジー) による治療を研究課題としている。腹部臓器領域では, 肝がん, 膵がんの早期診断, 悪性腫瘍の術前診断に関する研究, ならびに緊急塞栓術, 術前塞栓術などの IVR で業績をあげてきた。MDCT を駆使した仮想内視鏡 (Virtual endoscopy, CT colonography) による関する研究は 1000 例を超える症例を行い成果を挙げている。また, 中枢神経領域の核医学による脳血流 SPECT の定量化の比較検討や頭頸部領域における MRI 拡散強調画像に関する研究にも取り組んできた。平成 25 年に設置された乳腺トモシンセシスは新しい断層装置であり, 従来のマンモグラフィに加え, 乳房の画像診断に利用している。
- 2) 放射線治療関連：高精度放射線治療装置ノバリス Tx の導入以来, 脳・頭頸部・体幹部の定位照射と前立腺を中心とし IMRT での照射が可能となり, 高精度照射件数も急増してきた。臨床研究とし脳, 頭頸部腫瘍の定位照射での線量分布改善を目指す照射方法の確立, 肺癌を中心とした体幹部定位照射の最適な線量分割法や有害事象軽減を目指す照射法の確立, 前立腺に対する IMRT での照射における CT-MRI 画像融合を用いた (イメージガイド放射線治療: IGRT) 最適な照射部位の設定などにつき研究, 発表を行ってきた。
- 3) 他分野, 他大学との共同研究：コンピュータによる画像診断支援システムであるコンピュータ診断支援システム (CAD) は, 再生分子統御学講座, 知能情報イメージ分野の専門分野であり, 各種臓器の機能診断, 悪性腫瘍の診断, 臨床応用に共同研究を行い, 高度な成果を挙げた。他大学との共同研究では, 平成 25 年から岐阜薬科大学薬効分析学研究室と岐阜大学医学系研究科眼科学分野, 放射線医学分野の 3 者の共同研究で, 緑内障における視神経および脳 MRI の研究をスタートし症例を積み重ねている。

2. 名簿

教授：	星 博昭	Hiroaki Hoshi
准教授：	兼松雅之	Masayuki Kanematsu
准教授：	梶浦雄一	Yuichi Kajiura
准教授：	林 真也	Shinya Hayashi
講師	近藤浩史	Hiroshi Kondo
講師：	浅野隆彦	Takahiko Asano
臨床講師：	大宝和博	Kazuhiro Ohtakara
臨床講師：	富松英人	Hideto Tomimastu
臨床講師：	加藤博基	Hiroki Kato
臨床講師：	五島 聡	Satoshi Goshima
臨床講師：	田中秀和	Hidekazu Tanaka
医員：	浅野信子	Nobuko Asano
医員：	岡田すなほ	Sunaho Nkada
医員：	渡邊春夫	Haruo Watanabe
医員：	水野 希	Nozomi Mizuno
医員：	吉田麻里子	Mariko Yoshida
医員：	大野裕美	Hiromi Ono
医員：	野田佳史	Yoshifumi Noda
医員：	鉄田大輔	Daisuke Tetuta
医員：	棚橋祐吉	Yuukichi Tanahashi
医員：	河合信行	Nobuyuki Kawai
医員：	後藤雪乃	Yukino Goto
医員：	山口尊弘	Takahiro Yamaguti
医員：	川口真矢	Masaya Kawaguti
医員：	安藤知宏	Tomohiro Ando
医員：	吉安祐樹	Yuki Yoshiyasu
医員：	加藤亜希子	Akiko Kato

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 加藤博基, 兼松雅之. これだけはおさえておきたい頭頸部の正常解剖, 鼻・副鼻腔, 咽頭・喉頭・口腔: 高橋雅士監修, 前田正幸編. 新 頭部画像診断の勘どころ, メジカルビュー社; 2014年: 332-336, 352-371.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 富松英人, 近藤浩史, 青松昭徳, 野田佳史, 川田紘資, 櫻井幸太, 五島 聡, 兼松雅之. 消化管閉塞-4. 大腸閉塞-, 画像診断 2012年; 32巻: 1429-1439.
- 2) Peter S. Liu, Hero K. Hussain, 兼松雅之. びまん性および限局性肝疾患イメージングの最前線, 臨床画像 2012年; 28巻: 1400-1413.
- 3) 五島 聡, 近藤浩史, 川田紘資, 野田佳史, 兼松雅之. MRIを用いたさまざまなびまん性肝疾患診断アプローチ, 臨床画像 2012年; 282巻: 1460-1468.
- 4) 加藤博基, 兼松雅之, 加藤久和, 加藤恵三, 柴田敏之, 青木光広, 水田啓介, 星 博昭. 頭頸部外傷の画像診断とIVR-眼窩(眼球, 水晶体), 鼻副鼻腔外傷を中心に-, 臨床画像 2012年; 28巻: 38-57.
- 5) 川田紘資, 近藤浩史, 兼松雅之. 術者がほしい TACE 術前後の画像診断, 画像診断 2012年; 32巻: 890-901.
- 6) 兼松雅之. 腹部 CT, MRI の近未来予測, 映像情報メディカル 2012年; 564-565.
- 7) 五島 聡, 近藤浩史, 川田紘資, 野田佳史, 兼松雅之, 西堀弘記, 宮澤大介. 320列CT(Area Detector CT)の有用性と位置づけ-ボリュームスキャンがもたらすメリット, INNERVISION 2012年; 27巻: 6-9.
- 8) 渡邊春夫, 五島 聡, 梶田公博, 加藤大輝, 小田真一, 川田紘資, 野田佳史, 近藤浩史, 兼松雅之. 拡散強調画像(DWI), IVIM の有用性と位置づけ-肝腫瘍診療における臨床応用を中心に, INNERVISION 2012年; 27巻: 30-33.
- 9) 櫻井幸太, 近藤浩史, 五島 聡, 兼松雅之. 脂肪を画像診断にどう役立てるか? 肝・胆・膵・消化管, 臨床画像 2012年; 28巻: 566-575.
- 10) 兼松雅之. マルチモダリティによる Abdominal Imaging-腹部画像診断の動向と臨床現場の現状・展望, INNERVISION 2012年; 27巻: 3-5.
- 11) 加藤博基, 兼松雅之, 水田啓介, 青木光広, 久世文也, 西堀丈純, 林 寿光, 星 博昭. 耳下腺疾患の CT, MRI, 画像診断 2013年; 33巻: 314-327.
- 12) 加藤博基, 兼松雅之, 水田啓介, 青木光広, 久世文也, 西堀丈純, 林 寿光, 星 博昭. 頭蓋底画像解剖 overview, 画像診断 2013年; 33巻: 1369-1382.
- 13) 櫻井幸太, 五島 聡, 近藤浩史, 兼松雅之. 目で見える肝癌 若年女性の非硬変肝に発生した巨大肝細胞癌および多発早期濃染結節の1例, The Liver Cancer Journal 2013年; 5巻: 76-82.
- 14) 櫻井幸太, 近藤浩史, 五島 聡, 兼松雅之. [ケースレビュー:画像診断必修知識習得のための指導医と研修医の問答集] 肝臓ケース, 臨床画像 2013年; 29巻: 116-125.
- 15) 富松英人, 後藤雪乃, 鉄田大輔, 青松昭徳, 野田佳史, 川田紘資, 櫻井幸太, 五島 聡, 近藤浩史, 兼松雅之. [消化管の画像診断:X線診断から CT colonography まで] CT-colonography(大腸 CT) 消化管 X線診断をつなぐ, 臨床画像 2013年; 29巻: 180-193.
- 16) 五島 聡, 川田紘資, 野田佳史, 渡邊春夫, 近藤浩史, 兼松雅之. [おさえておきたい胆・膵・脾の画像診断 2013] 膵炎症性病変の画像診断 急性膵炎を中心に, 自己免疫性膵炎まで, 臨床画像 2013年; 29巻: 472-479.
- 17) 五島 聡, 川田紘資, 野田佳史, 渡邊春夫, 近藤浩史, 兼松雅之. [拡散 MRI-基本から最近の進歩まで-] 肝胆膵の拡散 MRI, 画像診断 2013年; 33巻: 751-762.
- 18) 五島 聡, 川田紘資, 野田佳史, 渡邊春夫, 近藤浩史, 兼松雅之. [Gd-EOB-DTPA 造影 MRI をさらに深く知る] Gd-EOB-DTPA 造影 MRI による肝線維化の評価, 日独医報 2013年; 58巻: 179-185.
- 19) 金子 揚, 西堀弘記, 川田紘資, 五島 聡, 近藤浩史, 兼松雅之. [おさえておきたい胆・膵・脾の画像診断 2013] 胆・膵・脾の PET/CT 診断, 臨床画像 2013年; 29巻: 496-508.
- 20) 近藤浩史, 五島 聡, 兼松雅之. [腹部画像診断の今〜エキスパートによるポイント解説] 腹部ダイナミック CT における至適造影剤投与方法, 映像情報 Medical 2013年; 45巻: 38-42.
- 21) 近藤浩史, 五島 聡, 兼松雅之. 肝転移の画像診断 多血性肝転移, 臨床放射線 2013年; 58巻: 273-286.
- 22) 近藤浩史, 五島 聡, 兼松雅之. [Multislice CT 2013 BOOK] 臨床 肝細胞ガンの CT 低電圧撮影を中心に, 映像情報 Medical 2013年; 45巻: 79-83.
- 23) 近藤浩史, 兼松雅之, 五島 聡, 棚橋裕吉, 河合信行, 野田佳史, 櫻井幸太, 白井邦博, 小倉真治. 【救急疾患に対するIVR】 外傷に対するIVR, IVR: Interventional Radiology 2014年; 29巻: 43-52.
- 24) 近藤浩史, 兼松雅之, 五島 聡, 棚橋裕吉, 河合信行, 野田佳史, 櫻井幸太, 白井邦博, 小倉真治. 外傷IVRの基本と応用 骨盤骨折, IVR: Interventional Radiology 2014年; 29巻: 195-202.
- 25) 五島 聡, 兼松雅之. 急性膵炎の画像診断, 臨床放射線 2014年; 59巻: 1703-1712.
- 26) 五島 聡, 兼松雅之. 私の造影剤の使い方 EOB・プリモビスト造影 MRI における肝動脈優位相撮像, 臨床画像 2014年; 30巻: 566-570.

- 27) 三好利治, 富松英人, 五島 聡, 近藤浩史, 岡田仁志, 兼松雅之. 【これが私の CTC 流儀】 岐阜大学医学部附属病院における CT コロノグラフィ(大腸 CT), Rad Fan 2014 年; 12 巻: 69-71.
- 28) 大野裕美, 近藤浩史, 櫻井幸太, 五島 聡, 兼松雅之. 【シェーマで納得!基礎から学べる CT/MRI 腹部画像診断に役立つサイン】 胆・膵, 臨床画像 2014 年; 30 巻: 840-847.
- 29) 富松英人, 五島 聡, 近藤浩史, 兼松雅之. 【CT colonography の現状と将来】 CT colonography の原理と臨床応用, 臨床消化器内科 2014 年; 29 巻: 1309-1316.
- 30) 野田佳史, 近藤浩史, 五島 聡, 渡邊春夫, 川田紘資, 河合信行, 棚橋裕吉, 兼松雅之. 【肝造影検査 Update 2014】 肝造影ダイナミック CT における造影理論, 画像診断 2014 年; 34 巻: 672-677.
- 31) 加藤博基, 兼松雅之. 頭頸部領域における拡散強調像の有用性, 画像診断 2014 年; 34 巻: 526-538.
- 32) 加藤博基, 兼松雅之. マルチモダリティによる Head & Neck Imaging 2014 【臨床編】 最新技術が臨床にもたらす変革とベネフィット I. MRI のストラテジー&アウトカム 14. 耳下腺腫瘍-MRI 診断の有用性と限界, インナービジョン 2014 年; 29 巻: 46-48.

総説 (欧文)

- 1) Kanematsu M, Goshima S, Watanabe H, Kondo H, Kawada H, Noda Y, Aomatsu A, Moriyama N. Detection and characterization of focal hepatic lesions with diffusion-weighted MR imaging: a pictorial review. *Abdom Imaging*. 2013;38:297-308.

IF 1.730

原著 (和文)

- 1) 加藤博基, 星 博昭, 兼松雅之, 出原啓一, 久世文也, 青木光広, 水田啓介, 大野貴敏. 頭頸部領域のデスメイド腫瘍(デスメイド型線維腫症)の 3 例, 臨床放射線 2012 年; 57 巻: 436-441.
- 2) 横山龍二郎, 梶田公博, 五島 聡, 星 博昭. Multi-Stack および Single-Stack における頭頸部 MRA の撮像条件の検討, 医用画像情報学会雑誌 2012 年; 29 巻: 97-100.
- 3) 浅野隆彦, 兼松雅之, 星 博昭. 岐阜大学医学部附属病院の核医学診療について, 映像情報メディカル 2012 年; 44 巻: 1097-1102.
- 4) 山口昌太郎, 周 向栄, 徐 睿, 原 武史, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 木戸尚治, 藤田広志. MDL 法を用いた三次元体幹部体幹部臓器の統計形状モデルの構築と性能評価, 電子情報通信学会技術報告 2012 年; 111 巻: MI2011-94, 93-96.
- 5) 澤田純菜, 林 達郎, 周 向栄, 陳 華岳, 原 武史, 江 慧研, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志. 体幹部 X 線 CT 画像における複数臓器に対する確率アトラスの構築と性能評価, 電子情報通信学会技術報告 2012 年; 111 巻: MI2011-129, 287-291.
- 6) 渡邊篤人, 周 向栄, 陳 華岳, 原 武史, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志. 非造影 CT 画像からの類似検索による臓器自動抽出法の検討, 電子情報通信学会技術報告 2012 年; 111 巻: MI2011-150, 407-410.
- 7) 大宝和博, 林 真也, 岡田仁志, 中山則之, 大江直行, 矢野大仁, 岩間 亨, 星 博昭. Novalis Tx を用いたフレームレスでの画像誘導定位的放射線治療初期経験例における専用 vs 簡易マスクでの固定精度の臨床評価, 定位的放射線治療 2012 年; 16 巻: 97-105.
- 8) 加藤博基, 兼松雅之, 水田啓介, 青木光広. van der Hoeve 症候群の 2 例における側頭骨 CT 所見, 臨床放射線 2013 年; 58 巻: 737-741.
- 9) 大野裕美, 加藤博基, 内山麻里子, 兼松雅之, 森美奈子, 早崎 容, 古井辰郎, 森重健一郎, 廣瀬善信. 内頸部型粘液性境界悪性腫瘍, 画像診断 2013 年; 33 巻: 140-141.
- 10) 内山麻里子, 加藤博基, 大野裕美, 兼松雅之, 操 暁子, 丹羽憲司, 古井辰郎, 森重健一郎, 廣瀬善信. 卵巣境界悪性明細胞嚢胞腺線維腫, 画像診断 2013 年; 33 巻: 262-263.
- 11) 川田紘資, 加藤博基, 櫻井幸太, 兼松雅之, 寺林伸夫, 永野昭仁, 大島康司, 大野貴敏, 廣瀬善信. 胞巣状軟部肉腫, 画像診断 2013 年; 33 巻: 404-405.
- 12) 櫻井幸太, 加藤博基, 川田紘資, 兼松雅之, 永野昭仁, 大島康司, 大野貴敏, 廣瀬善信. 隆起性皮膚線維肉腫, 画像診断 2013 年; 33 巻: 542-543.
- 13) 大野裕美, 加藤博基, 兼松雅之. Challenge QUIZ 貴方も名医 組織球形壊死性リンパ節炎(菊池病), CLINIC magazine 2013 年; 530 巻: 36, 68-69.
- 14) 山口昌太郎, 周 向栄, 陳 華岳, 原 武史, 姜 慧研, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志. CT 画像における体幹部の解剖学的構造のデータベース構築法に関する考察, 電子情報通信学会技術報告 2013 年; 112 巻: MI2012-78, 83-88.
- 15) 神谷直希, 村松千左子, 周 向栄, 陳 華岳, 原 武史, 星 博昭, 藤田広志. 皮下脂肪領域の除去による CT 画像の仮想展開と腹直筋領域の自動認識, 電子情報通信学会技術報告 2013 年; 112 巻: MI2012-99, 197-200.
- 16) 林 真也, 田中秀和, 大宝和博, 星 博昭. 肺腫瘍に対する定位照射後の放射線肺臓炎 - 照射後の画像変化と有害事象の検討 -, 臨床放射線 2013 年; 58 巻: 215-221.
- 17) 大宝和博, 中山則之, 大江直行, 矢野大仁, 岩間 亨, 星 博昭. 転移性脳腫瘍に対する定位手術的照射後の放射線壊死発生における脳表からの深度に基づく病変局在と高線量照射体積の意義, 定位的放射線治療 2013 年; 17 巻: 83-91.
- 18) 渡邊篤人, 周 向栄, 陳 華岳, 原 武史, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志. 症例の類似性を考慮した複数臓器確率的アトラス構築と評価, 電子情報通信学会技術報告 2013 年; 113 巻: MI2013-35, 77-81.

- 19) 寺村易予, 加藤博基, 櫻井幸太, 兼松雅之, 大野貴敏, 西本 裕, 大島康司, 永野昭仁, 小林一博, 廣瀬善信. 血管平滑筋腫の5例—MRI所見とアザン染色を含めた病理所見の対比—, 臨床放射線 2014年; 59巻: 449-453.

原著 (欧文)

- 1) Ohtakara K, Hayashi S, Hoshi H. Characterisation of dose distribution in linear accelerator-based intracranial stereotactic radiosurgery with the dynamic conformal arc technique: Consideration of the optimal method for dose prescription and evaluation. *Brit J Radiol.* 2012;85:69-76. IF 1.533
- 2) Ohtakara K, Hayashi S, Nakayama N, Ohe N, Yano H, Iwama T, Hoshi H. Significance of target location relative to the depth from the brain surface and high-dose irradiated volume in the development of brain radionecrosis after micromultileaf collimator-based stereotactic radiosurgery for brain metastases. *J Neuro-oncol.* 2012;108:201-209. IF 2.787
- 3) Matsuo M, Miwa K, Tanaka O, Shinoda J, Nishibori H, Tsuge Y, Yano H, Iwama T, Hayashi S, Hoshi H, Yamada J, Kanematsu M, Aoyama H. Impact of [11C]Methionine Positron Emission Tomography for Target Definition of Glioblastoma Multiforme in Radiation Therapy Planning. *Int J Radiat Oncol Biol Phys.* 2012;82:83-89. IF 4.176
- 4) Kanematsu M, Goshima S, Watanabe H, Kondo H, Kawada H, Noda Y, Moriyama N. Diffusion/Perfusion MR Imaging of the Liver: Practice, Challenges, and Future. *Magn Reson Med Sci.* 2012;11:151-161. IF 1.038
- 5) Watanabe H, Kanematsu M, Kato H, Kojima T, Miyoshi T, Goshima S, Kondo H, Kawada H, Noda Y, Moriyama N. Enhancement of anatomical structures and detection of metastatic cervical lymph nodes: comparison of two different contrast material doses. *Jpn J Radiol.* 2012;30:846-851. IF 0.742
- 6) Watanabe H, Kanematsu M, Goshima S, Kondo H, Kajita K, Kawada H, Noda Y, Moriyama N. Detection of focal hepatic lesions with 3-T MRI: comparison of two-dimensional and three-dimensional T2-weighted sequences. *Jpn J Radiol.* 2012;30:721-728. IF 0.742
- 7) Goshima S, Kanematsu M, Watanabe H, Kondo H, Kawada H, Moriyama N, Bae KT. Gd-EOB-DTPA-enhanced MR imaging: Prediction of hepatic fibrosis stages using liver contrast enhancement index and liver-to-spleen volumetric ratio. *J Magn Reson Imaging.* 2012;36:1148-1153. IF 2.788
- 8) Watanabe H, Kanematsu M, Goshima S, Yoshida M, Kawada H, Kondo H, Moriyama N. Is gadoxetate disodium-enhanced MRI useful for detecting local recurrence of hepatocellular carcinoma after radiofrequency ablation therapy? *AJR Am J Roentgenol.* 2012;198:589-595. IF 2.744
- 9) Kato H, Kanematsu M, Mizuta K, Aoki M, Hirose Y. Spontaneous infarction of a Warthin's tumor: imaging findings simulating malignancy. *Jpn J Radiol.* 2012;30:354-357. IF 0.742
- 10) Kato H, Kanematsu M, Goto H, Mizuta K, Aoki M, Kuze B, Hirose Y. Mucosa-associated lymphoid tissue lymphoma of the salivary glands: MR imaging findings including diffusion-weighted imaging. *Eur J Radiol.* 2012;81:e612-e617. IF 2.160
- 11) Kato H, Kanematsu M, Kato Z, Teramoto T, Kondo N, Hoshi H. CT findings of Kawasaki disease with cervical lymphadenopathy. *J Comput Assist Tomogr.* 2012;36:138-142. IF 1.602
- 12) Hioki A, Miyamoto K, Kato H, Hatano Y, Asano N, Hirose Y, Fushimi K, Shimizu K. Sudden onset of paraplegia caused by subarachnoid hemorrhage associated with meningeal melanocytoma of the conus medullaris: a case report of intraoperative identification of these two pathological conditions. *Eur J Orthop Surg Traumatol.* 2012;22:593-596. IF 0.181
- 13) Uchiyama Y, Asano T, Kato H, Hara T, Kanematsu M, Hoshi H, Iwama T, Fujita H. Computer-Aided Diagnosis for Detection of Lacunar Infarcts on MR Images: ROC Analysis of Radiologists' Performance. *Journal of Digital Imaging.* 2012;25:497-503. IF 1.200
- 14) Zhou X, Wang S, Chen H, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Automatic localization of solid organs on 3D CT images by a collaborative majority voting decision based on ensemble learning. *Computerized Medical Imaging and Graphics.* 2012;36:304-313. IF 1.496
- 15) Kamiya N, Zou X, Chen H, Muramatsu C, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Automated segmentation of psoas major muscle in X-ray CT images by use of a shape model: Preliminary study. *Radiological Physics and Technology.* 2012;5:5-14.
- 16) Fujita H, Hara T, Zhou X, Hayashi T, Kamiya N, Chen H, Hoshi H. A01-3 Model construction for computational anatomy: Progress overview FY2011. *Proc. of the Third International Symposium on the Project "Computational Anatomy".* 2012;24-32.
- 17) Ohtakara K, Hayashi S, Mizuta K, Aoki M, Ando K, Okada S, Ito Y, Hoshi H. Clinical outcomes of single or oligo-fractionated stereotactic radiotherapy for head and neck tumors using micromultileaf collimator-based dynamic conformal arcs. *J Cancer Res Clin Oncol.* 2012;138:1511-1522. IF 3.009
- 18) Ohtakara K, Hayashi S, Tanaka H, Hoshi H, Kitahara M, Matsuyama K, Okada H. Clinical comparison of positional accuracy and stability between dedicated versus conventional masks for immobilization in cranial stereotactic radiotherapy using 6-degree-of-freedom image guidance system-integrated platform. *Radiother Oncol.* 2012;102:198-205. IF 4.857
- 19) Ohtakara K, Hayashi S, Tanaka H, Hoshi H. Consideration of optimal isodose surface (IDS) selection for target coverage in micro-multileaf collimator-based stereotactic radiotherapy for large cystic brain

- metastases: Comparison of 90, 80, and 70% isodose surface-based planning. *Br J Radiol.* 2012;85:e640-646. IF 1.533
- 20) Ohtakara K, Hayashi S, Hoshi H. The relation between various conformity indices and the influence of the target coverage difference in prescription isodose surface on these values in intracranial stereotactic radiosurgery. *Br J Radiol.* 2012;85:e223-e228. IF 1.533
- 21) Tanaka H, Hayashi S, Ohtakara K, Hoshi H. Palliative radiotherapy for patients with tracheobronchial and esophageal stenosis due to intrathoracic malignant tumors. *Asia Pac J Clin Oncol.* 2012;8:e82-e86. IF 1.058
- 22) Kato H, Kanematsu M, Kato Z, Teramoto T, Mizuta K, Aoki M, Makita H, Kato K. Necrotic cervical nodes: Usefulness of diffusion-weighted MR imaging in the differentiation of suppurative lymphadenitis from malignancy. *Eur J Radiol.* 2013;82:e28-e35. IF 2.160
- 23) Kato H, Kanematsu M, Furui T, Morishige KI, Hirose Y. Ovarian mucinous cystadenoma coexisting with benign Brenner tumor: MR imaging findings. *Abdom Imaging.* 2013;38:412-416. IF 1.730
- 24) Kato H, Kanematsu M, Ohno T, Nishimoto Y, Oshima K, Hirose Y, Nishibori H. Is "black geode" sign a characteristic MRI finding for extracranial schwannomas? *J Magn Reson Imaging.* 2013;37:830-835. IF 2.788
- 25) Kanematsu M, Goshima S, Kondo H, Watanabe H. Reply: how far do we need to elaborate the quality of diffusion-weighted MR images of the liver? *Abdom Imaging.* 2013;38:1183. IF 1.730
- 26) Kato H, Kanematsu M, Kawaguchi S, Watanabe H, Mizuta K, Aoki M. Evaluation of imaging findings differentiating extranodal non-Hodgkin's lymphoma from squamous cell carcinoma in naso- and oropharynx. *Clin Imaging.* 2013;37:657-663. IF 0.596
- 27) Kato H, Kanematsu M, Ohno H, Yano R, Furui T, Morishige KI, Hatano Y. Ovarian fibromas: MR imaging findings with emphasis on intratumoral cyst formation. *Eur J Radiol.* 2013;82:e417-e421. IF 2.160
- 28) Kato H, Kanematsu M, Mizuta K, Aoki M. Imaging findings of parapharyngeal space pleomorphic adenoma in comparison with parotid gland pleomorphic adenoma. *Jpn J Radiol.* 2013;31:724-730. IF 0.742
- 29) Kato H, Kanematsu M, Sakurai K, Mizuta K, Aoki M, Hirose Y, Kawaguchi S, Fujita A, Ikeda K, Kanda T. Adenoid cystic carcinoma of the maxillary sinus: CT and MR imaging findings. *Jpn J Radiol.* 2013;31:744-749. IF 0.742
- 30) Aoki M, Hayashi H, Takagi C, Tanahashi S, Kuze B, Mizuta K, Ito Y, Kato H. Management of chronic dizziness. *Journal of Symptoms and Signs.* 2013;2:94-102.
- 31) Fujita H, Hara T, Zhou X, Muramatsu C, Kamiya N, Zhang M, Fukuoka D, Hatanaka Y, Matsubara T, Teramoto A, Uchiyama Y, Chen H, Hoshi H. A01-3 Model Construction for Computational Anatomy: Progress Overview FY2012, Proc. of the Fourth International Symposium on the Project "Computational Anatomy". 2013;22-42.
- 32) Tanaka H, Hayashi S, Ohtakara K, Hoshi H. Hepatic dysfunction after radiotherapy for primary gastric lymphoma. *J Radiat Res.* 2013;54:92-97. IF 1.691
- 33) Yamada M, Asano T, Okamoto K, Hayashi Y, Kanematsu M, Hoshi H, Akaiwa Y, Shimohata T, Nishizawa M, Inuzuka T, Hozumi I. High frequency of calcification in basal ganglia on brain computed tomography images in Japanese older adults. *Geriatr Gerontol Int.* 2013;13:706-710. IF 1.575
- 34) Watanabe H, Kanematsu M, Goshima S, Kondo H, Kawada H, Noda Y, Moriyama N. Adrenal-to-liver SUV ratio is the best parameter for differentiation of adrenal metastases from adenomas using 18F-FDG PET/CT. *Ann Nucl Med.* 2013;27:648-653. IF 1.507
- 35) Kondo H, Kanematsu M, Goshima S, Watanabe H, Kawada H, Moriyama N, Bae KT. Body size indices to determine iodine mass with contrast-enhanced multi-detector computed tomography of the upper abdomen: does body surface area outperform total body weight or lean body weight? *Eur Radiol.* 2013;23:1855-1861. IF 4.338
- 36) Goshima S, Kanematsu M, Nishibori H, Miyazawa D, Kondo H, Moriyama N, Bae KT. Image quality and radiation exposure in CT of the pancreas: 320-MDCT with and without adaptive iterative dose reduction versus 64-MDCT. *Clin Radiol.* 2013;68:e593-600. IF 1.663
- 37) Goshima S, Kanematsu M, Kondo H, Watanabe H, Kawada H, Moriyama N, Bae KT. Evaluation of optimal scan delay for gadoxetate disodium-enhanced hepatic arterial phase MRI using MR fluoroscopic triggering and slow injection technique. *AJR Am J Roentgenol.* 2013;201:578-582. IF 2.744
- 38) Goshima S, Kanematsu M, Kondo H, Kawada H, Kojima T, Sakurai K, Watanabe H, Shimabukuro K, Matsuno Y, Ishida N, Takemura H, Bae KT. Preoperative planning for endovascular aortic repair of abdominal aortic aneurysms: feasibility of nonenhanced MR angiography versus contrast-enhanced CT angiography. *Radiology.* 2013;267:948-955. IF 6.214
- 39) Goshima S, Kanematsu M, Nishibori H, et al. Image quality and radiation exposure in CT of the pancreas: 320-MDCT with and without adaptive iterative dose reduction versus 64-MDCT. *Clinical radiology.* 2013;68:e593-600. IF 1.663
- 40) Goshima S, Kanematsu M, Noda Y, et al. Determination of optimal intravenous contrast agent iodine dose for the detection of liver metastasis at 80-kVp CT. *Eur radiol.* 2014;24:1853-1859. IF 4.338
- 41) Kanematsu M, Goshima S, Kawai N, et al. Low-Iodine-Load and Low-Tube-Voltage CT Angiographic Imaging of the Kidney by Using Bolus Tracking with Saline Flushing. *Radiology.* 2014;141457. IF 6.214
- 42) Kanematsu M, Goshima S, Miyoshi T, et al. Whole-body CT angiography with low tube voltage and

- low-concentration contrast material to reduce radiation dose and iodine load. Am J Roentgenol. 2014;202:W106-116. IF 2.744
- 43) Noda Y, Kanematsu M, Goshima S, et al. Peritoneal chronic inflammatory mass formation due to gallstones lost during laparoscopic cholecystectomy. Clin Imag. 2014;38:758-761. IF 0.596
- 44) Noda Y, Kanematsu M, Goshima S, et al. Reduction of iodine load in CT imaging of pancreas acquired with low tube voltage and an adaptive statistical iterative reconstruction technique. J Comput Assist Tomo. 2014;38:714-720. IF 1.602
- 45) Watanabe H, Kanematsu M, Goshima S, et al. Characterizing focal hepatic lesions by free-breathing intravoxel incoherent motion MRI at 3.0 T. Acta Radiol (Stockholm, Sweden : 1987). 2014;55:1166-1173. IF 1.350
- 46) Watanabe H, Kanematsu M, Kondo H, et al. Whole-body CT screening: scan delay and contrast injection duration for optimal enhancement of abdominal organs and deep vessels. Clin Imag. 2014;38:129-135. IF 0.596
- 47) Watanabe H, Kanematsu M, Tanaka K, et al. Fibrosis and postoperative fistula of the pancreas: correlation with MR imaging findings--preliminary results. Radiology. 2014;270:791-799. IF 6.214
- 48) Makino H, Kato H, Furui T, Morishige K, Kanematsu M. Predictive value of diffusion-weighted MR imaging during chemoradiotherapy for uterine cervical cancer. J Obstet Gynaecol Res. 2014;40:1098-1104. IF 0.931
- 49) Ono H, Kanematsu M, Kato H, Toyoki H, Hayasaki Y, Furui T, Morishige KI, Hatano Y. MR imaging findings of uterine pyomyoma: radiologic-pathologic correlation. Abdom Imaging. 2014;39:797-801. IF 1.730
- 50) Kato H, Kanematsu M, Makita H, Kato K, Hatakeyama D, Shibata T, Mizuta K, Aoki M. CT and MR imaging findings of palatal tumors. Eur J Radiol. 2014;83:e137-e146. IF 2.160
- 51) Kato H, Kanematsu M, Uchiyama M, Yano R, Furui T, Morishige KI. Diffusion-weighted imaging of ovarian torsion: usefulness of apparent diffusion coefficient (ADC) values for the detection of hemorrhagic infarction. Magn Reson Med Sci. 2014;13:39-44. IF 1.038
- 52) Kato H, Kanematsu M, Watanabe H, Mizuta K, Aoki M. Metastatic retropharyngeal lymph nodes: Comparison of CT and MR imaging for diagnostic accuracy. Eur J Radiol. 2014;83:1157-1162. IF 2.160
- 53) Kato H, Kanematsu M, Watanabe H, Mizuta K, Aoki M. Salivary gland tumors of the parotid gland: CT and MR imaging findings with emphasis on intratumoral cystic components. Neuroradiology. 2014;56:789-795. IF 2.374

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 兼松雅之, 研究分担者: 近藤浩史, 五島 聡, 渡邊春夫; 科学研究費補助金基盤研究(C): 多列検出器時代の低被ばく高画質インテリジェント造影 CT システムの開発; 平成 22-24 年度; 3,250 千円(1,950 : 650 : 650 千円)
- 2) 研究代表者: 渡邊春夫; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C): IVIM-MR 画像を用いた腹部臓器の機能診断および腫瘍の質的診断; 平成 23-25 年; 3,380 千円(1,820 : 910 : 650 千円)
- 3) 研究代表者: 五島 聡, 研究分担者: 兼松雅之, 近藤浩史, 渡邊春夫, 川田紘資; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C): 肝表面性状解析による肝線維化コンピュータ自動支援診断アルゴリズムの構築; 平成 24-26 年度; 3,510 千円(1,820 : 1,040 : 650 千円)
- 4) 研究代表者: 大宝和博; 平成 24 年度岐阜大学医学部研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分): 非侵襲的フレイムレス頭部定位放射線治療の適応拡大のための新規治療法の開発; 平成 24 年度; 550 千円
- 5) 研究代表者: 加藤博基; 学術研究助成基金助成金若手研究(B): 3 テスラ MRI を用いた子宮筋腫の術前シミュレーションモデルの作成; 平成 25-26 年度; 1,170 千円(780 : 390 千円)
- 6) 研究代表者: 大宝和博; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C): 脳血管病変に対する非侵襲的フレイムレス高精度定位放射線治療法の開発; 平成 25-27 年度; 4,160 千円(2,210 : 910 : 1,040 千円)
- 7) 研究代表者: 川田紘資; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C): 非造影 MRI を用いた腹部大動脈瘤破裂予測システムの開発; 平成 25-27 年度; 2,730 千円(1,300 : 650 : 780 千円)
- 8) 研究代表者: 近藤浩史; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C): 癒着胎盤帝王切開術の出血量低減を目的としたダブルバルーンカテーテルシステムの開発; 平成 25-27 年度; 3,250 千円(910 : 1,690 : 650 千円)
- 9) 研究代表者: 野田佳史; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C): Diffusion kurtosis imaging を用いた 2 型糖尿病発症予測; 平成 26-28 年度; 3,250 千円(1,690 : 910 : 650 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

- 1) 兼松雅之：イオバロン注を使用した腹部 CT 及び冠動脈 CT 検査における投与コード量と造影効果に関する観察研究；平成 24 年度；866 千円；バイエル薬品株式会社
- 2) 兼松雅之：日常診療科でのガドキセト酸ナトリウム肝造影 MRI～肝細胞造影相における肝エンハンスメントと肝機能に関わる臨床検査項目との相関性ならびに肝細胞造影相撮像タイムポイントに関する検討～；平成 24 年度；693 千円；バイエル薬品株式会社

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

星 博昭：

- 1) 日本医学放射線学会代議員(～現在)
- 2) 日本医学放射線学会中部地方会世話人(～現在)
- 3) 日本医学放射線学会電子情報委員会委員(～現在)
- 4) 日本核医学会評議員(～現在)
- 5) 日本核医学会中部地方会世話人(～現在)
- 6) 日本心臓核医学会評議員(～現在)
- 7) 日本画像医学会評議員(～現在)
- 8) 北関東医学会評議員(～現在)
- 9) 断層映像研究会世話人(～現在)
- 10) 中部マルチスライス CT シンポジウム世話人(～現在)

兼松雅之：

- 1) 日本インターベンショナルラジオロジー学会代議委員(～現在)
- 2) 日本磁気共鳴学会代議委員(～現在)
- 3) 日本核医学会評議委員(～現在)
- 4) 日本磁気共鳴学会教育委員(～現在)
- 5) 日本インターベンショナルラジオロジー放射線防護委員(～現在)
- 6) 日本医学放射線学会代議員(～現在)
- 7) 日本医学放射線学会造影剤安全委員(～現在)
- 8) 腹部放射線研究会世話人(～現在)
- 9) 独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(～現在)
- 10) 日本肝動脈塞栓療法研究会世話人(～現在)
- 11) 日本医学放射線学会画像診断ガイドライン作成委員(～現在)

林 真也：

- 1) 日本放射線腫瘍学会評議員(～現在)
- 2) 日本放射線腫瘍学会教育委員(～現在)
- 3) 日本高精度放射線外部照射研究会世話人(～現在)
- 4) 日本医学放射線学会中部地方会世話人(～現在)
- 5) 東海放射線腫瘍研究会世話人(～現在)
- 6) 東海放射線治療研究会世話人(～現在)
- 7) 日本医学放射線学会代議員(～現在)
- 8) 日本放射線腫瘍学会代議員(～現在)

近藤浩史：

- 1) 日本インターベンショナルラジオロジー学会代議員(～現在)
- 2) 日本インターベンショナルラジオロジー学会防護委員(～現在)
- 3) 中部地区バスキュラーアクセス研究会世話人(～現在)
- 4) 日本医学放射線学会画像診断ガイドライン作成委員(～現在)

大宝和博：

- 1) 日本脳神経外科学会評議員(～現在)

五島 聡：

- 1) 日本医学放射線学会画像診断ガイドライン作成委員(～現在)

加藤博基：

- 1) 頭頸部放射線研究会幹事(～現在)

2) 学会開催

星 博昭：

- 1) 日本核医学会第 75 回中部地方会(平成 24 年 6 月, 岐阜)
- 2) 日本医学放射線学会第 152 回中部地方会(平成 24 年 7 月, 岐阜)
- 3) 第 50 回腫瘍・免疫核医学研究会(平成 25 年 4 月, 東京)

兼松雅之：

- 1) 日本 IVR 学会第 33 回中部地方会(平成 24 年 6 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

星 博昭：

- 1) 断層映像研究会雑誌；編集委員(～現在)
- 2) 医用画像情報学会雑誌；編集 Advisory board(～現在)
- 3) Acta Oto-Laryngologica；登録査読委員(～現在)
- 4) 日本核医学会雑誌；登録査読委員(～現在)

兼松雅之：

- 1) 臨床画像；編集協力委員(～現在)
- 2) 消化器画像；編集委員(～現在)
- 3) 腹部放射線研究会；編集委員(～現在)
- 4) 日本医学放射線学会誌(～現在)
- 5) Japanese Journal of Radiology；Assistant Editor(～現在)
- 6) Radiology；査読員(～現在)
- 7) 日本医学放射線学会雑誌 Japanese Journal of Radiology；編集委員(～現在)

五島 聡：

- 1) American College of Radiology LI-RADS Phase3；作成委員(～現在)

大宝和博：

- 1) Radiotherapy and Oncology；査読員(平成 25 年)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

星 博昭：

- 1) 第 53 回日本核医学会学術総会(平成 25 年 11 月, 福岡, 核医学教育講演 10「PET/SPECT の神経伝達機能測定の実況」座長)

兼松雅之：

- 1) 第 71 回日本医学放射線学会総会(平成 24 年 4 月, 横浜, 特別講演「腹部造影 CT—最適検査の標準化に向けての今度の視点—」演者)
- 2) 第 48 回日本内臓学会総会(平成 24 年 6 月, 金沢, 特別講演「EOB・プリモビスト造影剤 MRI—肝腫瘍診断の実際と線維化診断への応用—」演者)
- 3) 第 32 回日本画像医学(平成 25 年 2 月, 東京, シンポジウム講演「MRI による肝線維症診断：これまでとこれから」演者)
- 4) 第 72 回日本医学放射線学会総会(平成 25 年 4 月, 横浜, 特別講演「腹部造影 CT の新展開・アンジオ

CTは低電圧造影剤で決まり」演者)

加藤博基：

- 1) AIMS Neuro Imaging 2013 (Advanced Imaging Multimodality Symposium)(平成 25 年 7 月, 東京, 教育講演「CT and MR imaging of cervical lymphadenopathy」演者)
- 2) 第 49 回日本医学放射線学会秋季臨床大会 第 26 回頭頸部放射線研究会(平成 25 年 10 月, 愛知, 教育講演「頭頸部の骨成分・孔 眼窩・鼻副鼻腔」演者)
- 3) 第 2 回日立 MRI セミナー(平成 26 年 2 月, 愛知, 特別講演「頭頸部 MRI の基礎と応用」演者)
- 4) 第 7 回頭頸部画像診断懇話会(平成 26 年 2 月, 東京, 講演「頭頸部領域の拡散強調像」演者)
- 5) 第 50 回日本医学放射線学会秋季臨床大会(平成 26 年 9 月, 兵庫, 教育講演「頭頸部悪性腫瘍における TNM 分類のための画像診断 鼻腔・副鼻腔」演者)
- 6) 第 27 回頭頸部放射線研究会(平成 26 年 9 月, 兵庫, 教育講演 1「真珠腫を知る」座長)

大宝和博：

- 1) 第 52 回岐阜県放射線治療技術研究会(平成 24 年 6 月, 岐阜, 教育講演「前立腺癌に対する放射線治療：X 線外部照射と小線源治療の適応について」演者)
- 2) 第 4 回日本放射線外科学会(平成 25 年 1 月, 名古屋, 教育セミナーI 技術部門「放射線外科治療計画の線量・質的評価における留意点」演者)

五島 聡：

- 1) 第 32 回日本画像医学会(平成 25 年 2 月, 東京, シンポジウム講演「肝細胞癌と鑑別を要する疾患」演者)
- 2) Radiologic Prediction of Hepatic Fibrosis, 第 72 回日本医学放射線学会総会(平成 25 年 4 月, 横浜, シンポジウム講演「Liver Imaging: Current Status and Future Directions」演者)

近藤浩史：

- 1) 第 19 回日本血管内治療学会総会(平成 25 年 7 月, 青森, シンポジウム講演「内臓動脈瘤」Segmental Arterial Mediolysis (SAM)に合併した内臓動脈瘤の診断と治療」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 近藤浩史: 第 48 回日本腹部救急医学会総会イメージインタープリテーションセッション最優秀賞(平成 24 年度)
- 2) 大宝和博: 第 26 回日本高精度放射線外部照射研究会優秀ポスター展示賞(平成 25 年度)
- 3) 大宝和博: 第 49 回日本医学放射線学会秋季臨床大会教育展示優秀賞(平成 25 年度)
- 4) 周向栄, 山口昌太郎, 周欣欣, 陳華岳, 原 武史, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志: SPIE Medical Imaging Poster Award(平成 25 年度) SPIE (Society of Photo-Optical Instrumentation Engineers: 写真・光学計測技術者協会) Poster Award(優秀ポスター賞)

9. 社会活動

林 真也：

- 1) 岐阜県原子力防災専門委員(平成 24 年～現在)
- 2) 粒子線がん治療医療連携専門委員(平成 24 年～平成 26 年)
- 3) 日本放射線腫瘍学会教育委員(～現在)

大宝和博：

- 1) 大学・職種横断的最先端放射線治療コース e-learning, インテンシブコース(平成 25 年 8 月, 神奈川「頭部定位放射線照射計画の線量・質的評価における留意点」, 講義用ビデオ収録)

10. 報告書

- 1) 大宝和博, 中山則之, 大江直行, 矢野大仁, 北原将司, 松山勝哉, 奥田清仁, 岡田富貴夫, 岡田仁志: 頭蓋内血管奇形に対する Novalis Tx を用いたフレームレスラジオサージェリーの経験: 3D 回転血管造影画像の統合による標的決定: BrainLAB User Report (平成 25 年) (RT-CR015-Rev.01)
- 2) 大宝和博, 北原将司, 松山勝哉, 岡田仁志, 中山則之, 大江直行, 矢野大仁: 転移性脳腫瘍に対する

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

画像診断の研究は、画像診断・機器の至適撮影技術、画像解析すべて網羅される。画像診断用の新しいソフトや CAD (コンピュータ支援診断) について研究成果を挙げてきた。緑内障の視神経 MRI は新しい研究で、岐阜薬科大学、眼科学分野との共同研究を始め、一定の成果を挙げてきた。

放射線治療関連では、3 次元照射の体幹部腫瘍への応用 (特に IMRT の基礎的検討)、定位手術的放射線治療の脳腫瘍への応用、有痛性骨転移に対する至適照射法の検討を行ってきた。小線源治療については東海地区で初めて前立腺がん臨床応用されたものであり、引き続き良好な成果を挙げてきた。この至適線量を得るため新しい CT、MRI のソフトの開発も行ってきた。

現状の問題点及びその対応策

現在の研究は臨床研究が主なものであり、各分野、他施設との共同研究を今まで以上に充実させる必要がある。また、画像情報量の膨大化に伴いその後の画像処理、臨床業務に多くの負担がかかっていることに加え、慢性的なマンパワー不足が続いているため、将来に向けて臨床、教育、研究が十分行える人的充実が必要である。

今後の展望

2016 年に電子カルテの機器更新が予定されている。それに伴い放射線部画像情報ネットワークが更新される予定である。画像解析は今後より便利となり、画像解析が容易となるであろう。2013 年に乳腺トモシンセシスが導入され、新しく乳癌診断の症例を増やしていく。仮想内視鏡による消化管診断はより精度の高い画像診断として高まることが期待される。今後 MRI3 台、320 列 CT 等の画像診断装置の更新を進め最新の画像診断による研究も盛んとなるであろう。

放射線治療関連では、肺癌における定位照射での至的な線量分割法の確立をさらに目指す。また強度変調放射線治療 (IMRT) において前立腺がん有用な方法であり、I-125 シードを用いた小線源治療においてもさらに症例を重ね、適応拡大による高リスク群に対する臨床応用を行っていく。2012 年に遠隔高線量小線源照射装置 (RALS) が機器更新されたので、子宮頸がんを中心とした放射線治療、MRI、CT を用いた画像融合技術での照射法 (イメージガイド小線源治療 : IGBT) についても推進していく。

(8) 疫学・予防医学分野

1. 研究の概要

疫学を方法論として用いたがんその他の生活習慣病のリスク要因を明らかにする研究をおこなっている。疫学は病態解明より関連性を評価する学問であり、対象も人間集団で、ライフスタイル・行動に重点をおいている。

1) がんの疫学研究

がんの疫学研究の中心は、平成4年に開始した高山市住民約3万人を対象としたコホート研究（高山スタディ）である。ベースライン時に食生活を中心とした健康と生活習慣に関する調査をおこなっており、その後のがん発生にどのような生活環境要因が関連するかを評価する。現在、各種がんの罹患情報入手が終了し、解析および学術雑誌発表を行っている。また、国内における他のがんコホートとの共同研究によりプール解析をおこなっており、日本人におけるエビデンスの構築に貢献している。

乳がんに関しては、リスク要因候補として食習慣、大豆摂取やイソフラボン代謝物、夜間照明、メラトニン、アミノ酸プロファイル、ビタミンDに着目し、これらの因子と乳がんのリスクマーカーであるエストロゲン値との関連性について、成人女性を対象にケース・コントロール研究や横断研究のデザインで評価してきた。最近では、乳がんリスクは幼少期において規定されるという仮説から、対象を幼児や学童に広げ、尿中エストロゲン、メラトニンに關与する生活環境要因を同定しようとしている。また、乳腺組織密度と乳がんについてIARCおよびハワイ癌センターと共同研究を行っている。

2) 生活習慣病等の疫学研究

がん以外に、心血管障害、脳卒中、糖尿病、高脂血症、高血圧症などの生活習慣病や白内障、耳鳴、花粉症、皮膚老化など生活習慣が關与すると考えられる疾患についても高山スタディによる前向き研究や一般健康成人を対象とした横断研究で、リスク要因の同定と予防のあり方について研究をおこなっている。また、喘息、鼻炎、食物アレルギーについて幼児を対象に各種栄養素摂取量や生活環境因子の關与について横断研究、妊娠中からの追跡研究のデザインで研究を行っている。また、腸内細菌叢の健康への關与について、小中学生を対象に研究を開始している。別途、小学生を対象にコホート研究を開始しており、10年ほどの追跡を要するが、食事、生活習慣と肥満、血中脂質、血糖値との関連を調査することで、成人期への肥満や生活習慣病の予防につなげようとしている。

3) 栄養疫学研究

食品、栄養素、特にイソフラボン摂取を中心にホルモンに關連する疾患や症状について関連性を研究してきた。海苔などの海藻摂取や食事から摂取されるメラトニン、アクリルアミドについて着目し、その健康影響を評価する研究を行っている。

2. 名簿

教授：	永田知里	Chisato Nagata
准教授：	和田恵子	Keiko Wada
助教：	田村高志	Takashi Tamura

3. 研究成果の発表

著書（和文）

なし

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 永田知里. 食生活とがん。エビデンスに基づいたがん予防, アンチ・エイジング医学 2013年; 9巻: 857-861.
- 2) 永田知里. 糖尿病でみられるがんの疫学—糖尿病によるリスクを含めて— 乳がん. 糖尿病とがん, Progress in Medicine 2014年; 11巻: 81-85.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

なし

原著 (欧文)

- 1) Tsuji M, Nakamura K, Tamai Y, Wada K, Sahashi Y, Watanabe K, Ohtsuchi S, Ando K, Nagata C. Relationship of intake of plant-based foods with 6-n-propylthiouracil sensitivity and food neophobia in Japanese preschool children. *Eur J Clin Nutr.* 2012;66:47-52. IF 2.950
- 2) Masue T, Wada K, Hayashi M, Takeda N, Yasuda K, Deguchi T, Nagata C. Associations of urinary 6-sulfatoxymelatonin with biomarkers related to cardiovascular disease in Japanese women. *Metabolism.* 2012;61:70-75. IF 3.611
- 3) Nagata C, Wada K, Nakamura K, Tamai Y, Tsuji M, Shimizu H. Associations of physical activity and diet with the onset of menopause in Japanese women. *Menopause.* 2012;19:75-81. IF 2.807
- 4) Wada K, Nagata C, Nakamura K, Iwasa S, Shiraki M, Shimizu H. Light exposure at night, sleep duration and sex hormone levels in pregnant Japanese women. *Endocr J.* 2012;59:393-398. IF 2.019
- 5) Wada K, Nakamura K, Tamai Y, Tsuji M, Masue T, Ando K, Nagata C. Associations of birth weight and physical activity with sex steroids in preschool Japanese children. *Cancer Causes Control.* 2012;23:231-238. IF 2.961
- 6) Wada K, Nakamura K, Tamai Y, Tsuji M, Watanabe K, Ando K, Nagata C. Seaweed intake and urinary sex hormone levels in preschool Japanese children. *Cancer Causes Control.* 2012;23:239-244. IF 2.961
- 7) Sasazuki S, Tamakoshi A, Matsuo K, Ito H, Wakai K, Nagata C, Mizoue T, Tanaka K, Tsuji I, Inoue M, Tsugane S; Research Group for the Development and Evaluation of Cancer Prevention Strategies in Japan. Green tea consumption and gastric cancer risk: an evaluation based on a systematic review of epidemiologic evidence among the Japanese population. *Jpn J Clin Oncol.* 2012;42:335-346. IF 1.747
- 8) Hamaguchi M, Takeda N, Kojima T, Ohbora A, Kato T, Sarui H, Fukui M, Nagata C, Takeda J. Identification of individuals with non-alcoholic fatty liver disease by the diagnostic criteria for the metabolic syndrome. *World J Gastroenterol.* 2012;18:1508-1516. IF 2.433
- 9) Tsuji M, Tamai Y, Wada K, Nakamura K, Hayashi M, Takeda N, Yasuda K, Nagata C. Associations of intakes of fat, dietary fiber, soy isoflavones, and alcohol with levels of sex hormones and prolactin in premenopausal Japanese women. *Cancer Causes Control.* 2012;23:683-689. IF 2.961
- 10) Conroy SM, Koga K, Woolcott CG, Dahl T, Byrne C, Nagata C, Ursin G, Yaffe MJ, Vachon CM, Maskarinec G. Higher alcohol intake may modify the association between mammographic density and breast cancer: an analysis of three case-control studies. *Cancer Epidemiol.* 2012;36:458-460. IF 2.558
- 11) Nagata C, Nakamura K, Wada K, Oba S, Tsuji M, Tamai Y, Kawachi T. Total fat intake is associated with decreased mortality in Japanese men but not in women. *J Nutr.* 2012;142:1713-1719. IF 4.227
- 12) Nakamura K, Wada K, Sahashi Y, Tamai Y, Tsuji M, Watanabe K, Ohtsuchi S, Ando K, Nagata C. Associations of intake of antioxidant vitamins and fatty acids with asthma in pre-school children. *Public Health Nutr.* 2013;16:2040-2045. IF 2.483
- 13) Wada K, Nakamura K, Tamai Y, Tsuji M, Watanabe K, Ando K, Nagata C. Associations of endogenous melatonin and sleep-related factors with behavioral problems in preschool Japanese children. *Ann Epidemiol.* 2013;23:469-474. IF 2.145
- 14) Wada K, Nakamura K, Tamai Y, Tsuji M, Kawachi T, Hori A, Takeyama N, Tanabashi S, Matsushita S, Tokimitsu N, Nagata C. Soy isoflavone intake and breast cancer risk in Japan: From the Takayama study. *Int J Cancer.* 2013;133:952-960. IF 5.007
- 15) Wada K, Nakamura K, Tamai Y, Tsuji M, Masue T, Watanabe K, Ando K, Nagata C. Associations of urinary 6-sulfatoxymelatonin with demographics, body mass, sex steroids, and lifestyle factors in preschool Japanese children. *Ann Epidemiol.* 2013;23:60-65. IF 2.145
- 16) Pham NM, Mizoue T, Tanaka K, Tsuji I, Tamakoshi A, Matsuo K, Wakai K, Nagata C, Inoue M, Tsugane S, Sasazuki S; Research Group for the Development and Evaluation of Cancer Prevention Strategies in Japan. Fish consumption and colorectal cancer risk: an evaluation based on a systematic review of epidemiologic evidence among the Japanese population. *Jpn J Clin Oncol.* 2013;43:935-941 IF 1.747
- 17) Nagata C, Nagao Y, Nakamura K, Wada K, Tamai Y, Tsuji M, Yamamoto S, Kashiki Y. Cadmium exposure and the risk of breast cancer in Japanese women. *Breast Cancer Res Treat.* 2013;138:235-239.
- 18) Nagata C, Nakamura K, Wada K, Tsuji M, Tamai Y, Kawachi T. Branched-chain amino acid intake and the risk of diabetes in a Japanese community: the Takayama study. *Am J Epidemiol.* 2013;178:1226-1232. IF 4.975
- 19) Wang C, Yatsuya H, Tamakoshi K, Uemura M, Li Y, Wada K, Yamashita K, Kawaguchi L, Toyoshima H, Aoyama A. Positive association between high sensitivity C-reactive protein and incidence of type-2 diabetes mellitus in Japanese workers: 6-year follow-up. *Diabetes Metab Res Rev.* 2013;29:398-405.
- 20) Nakamura K, Wada K, Tamai Y, Tsuji M, Kawachi T, Hori A, Takeyama N, Tanabashi S, Matsushita S, Tokimitsu N, Nagata C. Diabetes mellitus and risk of cancer in Takayama: a population-based prospective cohort study in Japan. *Cancer Sci.* 2013;104:1362-1367. IF 3.534
- 21) Sasazuki S, Charvat H, Hara A, Wakai K, Nagata C, Nakamura K, Tsuji I, Sugawara Y, Tamakoshi A, Matsuo K, Oze I, Mizoue T, Tanaka K, Inoue M, Tsugane S; Research Group for the Development and Evaluation of Cancer Prevention Strategies in Japan. Diabetes mellitus and cancer risk: pooled analysis of eight cohort studies in Japan. *Cancer Sci.* 2013;104:1499-1507. IF 3.534

- 22) Izuhara K, Wada K, Nakamura K, Tamai Y, Tsuji M, Ito Y, Nagata C. Association between tinnitus and sleep disorders in the general Japanese population. *Ann Otol Rhinol Laryngol.* 2013;122:701-706. IF 1.054
- 23) Fujii T, Takatsuka N, Nagata C, Matsumoto K, Oki A, Furuta R, Maeda H, Yasugi T, Kawana K, Mitsuhashi A, Hirai Y, Iwasaka T, Yaegashi N, Watanabe Y, Nagai Y, Kitagawa T, Yoshikawa H. Association between carotenoids and outcome of cervical intraepithelial neoplasia: a prospective cohort study. *Int J Clin Oncol.* 2013;18:1091-1101. IF 2.170
- 24) Woolcott CG, Conroy SM, Nagata C, Ursin G, Vachon CM, Yaffe MJ, Pagano IS, Byrne C, Maskarinec G. Methods for assessing and representing mammographic density: an analysis of 4 case-control studies. *Am J Epidemiol.* 2014;179:236-244. IF 4.975
- 25) Nagata C, Wada K, Tsuji M, Hayashi M, Takeda N, Yasuda K. Plasma amino acid profiles are associated with biomarkers of breast cancer risk in premenopausal Japanese women. *Cancer Cause Control.* 2014;25:143-149. IF 2.961
- 26) Nagata C, Mizoue T, Tanaka K, Tsuji I, Tamakoshi A, Matsuo K, Wakai K, Inoue M, Tsugane S, Sasazuki S; Research Group for the Development and Evaluation of Cancer Prevention Strategies in Japan. Soy intake and breast cancer risk: an evaluation based on a systematic review of epidemiologic evidence among the Japanese population. *Jpn J Clin Oncol.* 2014;44:282-295. IF 1.747
- 27) Wada K, Nagata C, Tamakoshi A, Matsuo K, Oze I, Wakai K, Tsuji I, Sugawara Y, Mizoue T, Tanaka K, Iwasaki M, Inoue M, Tsugane S, Sasazuki S; Research Group for the Development and Evaluation of Cancer Prevention Strategies in Japan. Body mass index and breast cancer risk in Japan: a pooled analysis of eight population-based cohort studies. *Ann Oncol.* 2014;25:519-524. IF 6.578
- 28) Nagata C, Wada K, Tsuji M, Kawachi T, Nakamura K. Dietary glycaemic index and glycaemic load in relation to all-cause and cause-specific mortality in a Japanese community: the Takayama study. *Brit J Nutr.* 2014;112:2010-2017. IF 3.342
- 29) Tanaka K, Tsuji I, Tamakoshi A, Matsuo K, Wakai K, Nagata C, Mizoue T, Inoue M, Tsugane S, Sasazuki S; Research Group for the Development and Evaluation of Cancer Prevention Strategies in Japan. Diabetes mellitus and liver cancer risk: an evaluation based on a systematic review of epidemiologic evidence among the Japanese population. *Jpn J Clin Oncol.* 2014;44:986-999. IF 1.747
- 30) Pham NM, Mizoue T, Tanaka K, Tsuji I, Tamakoshi A, Matsuo K, Wakai K, Nagata C, Inoue M, Tsugane S, Sasazuki S; Research Group for the Development and Evaluation of Cancer Prevention Strategies in Japan. Meat consumption and colorectal cancer risk: an evaluation based on a systematic review of epidemiologic evidence among the Japanese population. *Jpn J Clin Oncol.* 2014;44:641-645. IF 1.747
- 31) Shimazu T, Wakai K, Tamakoshi A, Tsuji I, Tanaka K, Matsuo K, Nagata C, Mizoue T, Inoue M, Tsugane S, Sasazuki S; Research Group for the Development and Evaluation of Cancer Prevention Strategies in Japan. Association of vegetable and fruit intake with gastric cancer risk among Japanese: a pooled analysis of four cohort studies. *Ann Oncol.* 2014;25:1228-1233. IF 6.578
- 32) Tamai Y, Tsuji M, Wada K, Nakamura K, Hayashi M, Takeda N, Yasuda K, Nagata C. Association of cigarette smoking with skin colour in Japanese women. *Tob Control.* 2014;23:253-256. IF 5.150
- 33) Tamura T, Katsuda N, Hamajima N. A PCR method for VKORC1 G-1639A and CYP2C9 A1075C genotyping useful to warfarin therapy among Japanese. *SpringerPlus.* 2014;3:499.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：永田知里，研究分担者：服部淳彦；科学研究費補助金基盤研究(B)：食事由来のメラトニン：摂取量推定と閉経およびがん・循環器疾患との関連；平成 22－24 年度；14,700 千円(5,100：4,900：4,700 千円)
- 2) 研究代表者：今井浩三，研究分担者：永田知里他；科学研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)：がん研究分野の特性等を踏まえた支援活動；平成 24－26 年度；11,200 千円(4,000：3,600：3,600 千円)
- 3) 研究代表者：笹月 静，研究分担者：永田知里他；がん研究開発費：科学的根拠に基づく発がん性・がん予防効果の評価とがん予防ガイドライン提言に関する研究分担研究班；平成 24－26 年度；3,600 千円(1,200：1,200：1,200 千円)
- 4) 研究代表者：和田恵子；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：小児期のサーカディアンリズム・メラトニンと成長や肥満に関する研究；平成 23－24 年度；4,290 千円(2,210：2,080 千円)
- 5) 研究代表者：和田恵子；内藤記念科学振興財団・内藤記念女性研究者研究助成金：小児における大豆イソフラボンの代謝と生活習慣病に関する研究；平成 24－26 年度；6,000 千円
- 6) 研究代表者：和田恵子；科学研究費補助金若手研究(若手研究(B))：小児期の家庭内受動喫煙と肥満、酸化ストレスに関する研究；平成 25－26 年度；4,160 千円(2,080：2,080 千円)
- 7) 研究代表者：永田知里，研究分担者：近藤高明；科学研究費補助金基盤研究(B)：学童における食習

慣と肥満および生活習慣病リスクマーカーに関するコホート研究；平成 25-26 年度；9,100 千円
(4,700 : 4,400 千円)

- 8) 研究代表者：井上真奈美，研究分担者：永田知里他；がん研究開発費：わが国において優先すべき予防介入試験のあり方やその実現に必要な体制整備に関する研究；平成 25-26 年度；2,400 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

永田知里：

- 1) 東海公衆衛生学会理事(～現在)
- 2) 日本公衆衛生学会評議員(～現在)
- 3) 日本疫学会評議員(～現在)
- 4) 日本疫学会理事(～平成 24 年)

2) 学会開催

永田知里：

- 1) 36 回がん疫学・分子疫学研究会総会(平成 25 年 6 月，岐阜)

3) 学術雑誌

永田知里：

- 1) Epidemiology Research International；編集委員(～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

永田知里：

- 1) Soya beans -the 21st century's "golden" food. Vinasoy and VSAC Workshop. Soy nutrition and breast cancer prevention- Japan case study (2014.04, Ho Chi Minh City, Vietnam)
- 2) 第 117 回日本眼科学会総会(平成 25 年 4 月，東京，教育セミナー「医学研究における統計の適用」演者)
- 3) 第 145 回日本医学会シンポジウム(平成 25 年 12 月，東京，シンポジウム「乳がんの疫学」演者)
- 4) がん予防学術大会 2014 東京(平成 26 年 6 月，東京，シンポジウム「ヒトパピローマウイルス感染による子宮頸がんの予防介入試験」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

永田知里：

- 1) 内閣府食品安全委員会専門員(～現在)
- 2) 岐阜県がん対策推進協議会委員(～現在)
- 3) 岐阜県環境影響評価審査会委員(～平成 25 年)
- 4) 岐阜県環境審議会委員(～平成 25 年)
- 5) 岐阜県公害審議会委員(～平成 25 年)
- 6) 岐阜市都市経営戦略会議委員(～平成 25 年)

和田恵子：

1) 岐阜市保健医療審議会委員(平成 25 年 10 月～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

1) 和田恵子：「研究室から 大学はいま」病気発症防ぐ健康習慣調査：岐阜新聞(2014 年 12 月 9 日)

12. 自己評価

評価

論文数が少なく、研究費も獲得を目指す必要がある。

現状の問題点及びその対応策

データは蓄積されており、迅速で効率的な論文化を進める必要がある。そのためには大学院生など人材の確保が重要となる。他分野との連携を念頭に、研究費獲得を目指す。

今後の展望

現在進行中のコホート研究、横断調査の遂行に努める。疫学以外の分野でもコホート研究の必要性が認識されてきたが、実際には横断研究に過ぎない研究もみられ、コホート研究の方法論や実際が理解されていないものと考えられる。当分野は疫学の方法論に精通し、また実際に研究を遂行、指導できる専門家育成に努める。また、複数の大学や研究所の共同による大規模コホート研究も幾つか開始されるようになったが、一方で各大学は小規模であるが仮説性の高い研究や方法論に関わる研究など、独自色ある成果が要求されると考えられる。今後、ますますオリジナリティの高い研究を目指す。

(9) 臨床腫瘍学分野

1. 研究の概要

2008年11月に立ち上げた新しい分野であり、最近特に重要性を増している臨床腫瘍学 Clinical Oncology を取り扱う。

- 1) 固形腫瘍について手術、内視鏡治療、化学療法、放射線治療など、集学的治療の構築と成績の分析を行なう。
- 2) 血液腫瘍について新しいレジメの開発と予後因子に基づいた層別化を行なう。
- 3) 1, 2 を達成する上で必要な臨床試験デザインの研究を行なう。

上記の研究を進めつつ、実際のがん化学療法の理論と実践を習得し、日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医を取得する。

2. 名簿

教授(併任)： 伊藤善規 Yoshiki Ito
准教授(併任)： 鶴見 寿 Hisashi Tsurumi(血液病態学・臨床腫瘍学・エイズ対策推進センター)
講師： 原 武志 Takeshi Hara

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 森脇久隆. 30.肝硬変, 肝癌:馬場忠雄編. 新臨床栄養学, 東京:医学書院;2012年:582-588.
- 2) 鶴見 寿. 感染症 HIV感染症:岡庭 豊編. Year note TOPICS 2012-2013, 東京:メディックメディア;2012年:227-230.
- 3) 白木 亮, 森脇久隆. III治療編 3.栄養療法:HEPATOLOGY PRACTICE VOL.2 NASH・アルコール性肝障害の診療を極める 基本から最前線まで, 東京:文光堂;2013年:177-180.
- 4) 清水雅仁, 森脇久隆. 大腸腺腫予防の基礎と臨床研究:衛藤英男, 富田 勲, 榛村純一, 伊勢村護, 原 征彦, 横越英彦, 山本(前田)万里編. 新版 茶の機能, 東京:農山漁村文化協会;2013年:53-58.
- 5) 清水雅仁, 森脇久隆. I 基本編~肝癌を診る前の基礎知識~発癌抑制:金子周一, 竹原徹郎, 持田 智編. HEPATOLOGY PRACTICE 肝癌の診療を極める, 東京:文光堂;2014年:27-31.
- 6) 高井光治, 今井健二, 華井竜徳, 宮崎恒起, 出田貴康, 清水雅仁, 森脇久隆. Sorafenib 投与下での併用治療は進行肝細胞癌の予後を延長するか:The Liver Cancer Journal 2014.6 Vol.6 No2:第9回日本肝がん分子標的治療研究会 優秀演題論文集, 東京:メディカルレビュー社;2014年:51(119).
- 7) 中村信彦, 鶴見 寿. 濾胞性リンパ腫における血清可溶性IL-2受容体の予後因子としての意義:血液内科, 東京:化学評論社;2014年:79-84.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 岩下拓司, 安田一朗, 土井晋平, 森脇久隆, LeeJohn G., ChangKenneth J. 悪性胆管閉塞に対する胆管ドレナージ ランデブー法(解説/特集), 消化器内視鏡 2012年;24巻:303-307.
- 2) 鶴見 寿. 移植非適応骨髄腫の治療(教育講演), 臨床血液 2014年;55巻:319-327.
- 3) 安田一朗, 岩下拓司, 土井晋平, 上村真也, 馬淵正敏, 奥野 充, 森脇久隆. 見直される膵癌診療の新展開 治療における新展開 緩和医療 切除不能膵癌に対する EUS ガイド下腹腔神経叢・神経節ブロックによるペインコントロール, 臨床外科 2014年;69巻:74-77.
- 4) 土井晋平, 安田一朗, 馬淵正敏, 小澤範高, 松本光太郎, 山田はな恵, 綱島弘道, 梶山祐介, 菊池健太郎, 岩下拓司, 岩田圭介, 向井 強. ここまで進歩した胆・膵 EUS をどう使いこなすか膵癌の EUS 下神経ブロック オピオイドとの使い分けは?, 胆と膵 2014年;35巻:767-771.

総説 (欧文)

- 1) Shimizu M, Shirakami Y, Hanai T, Imai K, Suetsugu A, Takai K, Shiraki M, Moriwaki H. Pharmaceutical and nutritional approaches for preventing liver carcinogenesis: Chemoprevention of hepatocellular carcinoma using acyclic retinoid and branched-chain amino acids. Mol Nutr Food Res. 2014;58:124-135.
- 2) Shirakami Y, Shimizu M, Kubota M, Araki H, Tanaka T, Moriwaki H, Seishima M. Chemoprevention of colorectal cancer by targeting obesity-related metabolic abnormalities. World J Gastroenterol. 2014;20:8939-8946.

原著 (和文)

- 1) 馬淵量子, 後藤尚絵, 柴田悠平, 中村信彦, 兼村信宏, 高井光治, 清水雅仁, 原 武志, 安田一朗, 荒木寛司,

鶴見 寿, 森脇久隆. R-CHOP 療法で治療された濾胞性リンパ腫における治療前 血清可溶性インターロイキン2 受容体の予後因子としての意義, 岐阜県内科医会雑誌 2012年; 26巻: 33-38.

原著 (欧文)

- 1) Tsurumi H, Hara T, Goto N, Kitagawa JI, Kanemura N, Yoshikawa T, Kasahara S, Goto H, Fukuno K, Yamada T, Sawada M, Shimizu M, Takahashi T, Takami T, Moriwaki H. A phase II study of rituximab combined with THP-COP regimen as a first-line therapy for patients with indolent B-cell lymphoma. *Leukemia Lymphoma*. 2012;53:247-253. IF 2.605
- 2) Terakura D, Shimizu M, Iwasa J, Baba A, Kochi T, Ohno T, Kubota M, Shirakami Y, Shiraki M, Takai K, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Preventive effects of branched-chain amino acid supplementation on the spontaneous development of hepatic preneoplastic lesions in C57BL/KsJ-*db/db* obese mice. *Carcinogenesis*. 2012;33:2499-2506. IF 5.266
- 3) Shimizu M, Imai K, Takai K, Moriwaki H. Role of acyclic retinoid in the chemoprevention of hepatocellular carcinoma: Basic aspects, clinical applications, and future prospects. *Curr Cancer Drug Targets*. 2012;12:1119-1128. IF 3.582
- 4) Shimizu M, Shirakami Y, Imai K, Takai K, Moriwaki H. Acyclic retinoid in chemoprevention of hepatocellular carcinoma: targeting phosphorylated retinoid X receptor- α for prevention of liver carcinogenesis. *J Carcinog*. 2012;11:11.
- 5) Goto N, Tsurumi H, Goto H, Shimomura YI, Kasahara S, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Murakami N, Yoshikawa T, Fukuno K, Takahashi T, Kito Y, Takami T, Moriwaki H. Serum soluble interleukin-2 receptor (sIL-2R) level is associated with the outcome of patients with diffuse large B cell lymphoma treated with R-CHOP regimens. *Ann Hematol*. 2012;91:705-714. IF 2.396
- 6) Goto N, Tsurumi H, Takemura M, Kanemura N, Kasahara S, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Yamada T, Sawada M, Takahashi T, Yamada T, Seishima M, Moriwaki H, Takami T. Serum soluble CD27 level is associated with outcome in diffuse large B-cell lymphoma patients treated with R-CHOP. *Leuk Lymphoma*. 2012;53:1494-1500. IF 2.605
- 7) Ogawa K, Hara T, Shimizu M, Ninomiya S, Nagano J, Sakai H, Hoshi M, Ito H, Tsurumi H, Saito K, Seishima M, Tanaka T, Moriwaki H. Suppression of azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in rats by 1-methyltryptophan, an inhibitor of indoleamine 2,3-dioxygenase. *Cancer Sci*. 2012;103:951-958. IF 3.534
- 8) Ogawa K, Hara T, Shimizu M, Nagano J, Ohno T, Hoshi M, Ito H, Tsurumi H, Saito K, Seishima M, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin gallate inhibits the expression of indoleamine 2,3-dioxygenase in human colorectal cancer cells. *Oncol Lett*. 2012;4:546-550. IF 0.987
- 9) Kubota M, Shimizu M, Sakai H, Yasuda Y, Terakura D, Baba A, Ohno T, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Preventive effects of curcumin on the development of azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in male C57BL/KsJ-*db/db* obese mice. *Nutr Cancer*. 2012;64:72-79. IF 2.470
- 10) Ohno T, Shirakami Y, Shimizu M, Kubota M, Sakai H, Yasuda Y, Kochi T, Tsurumi H, Moriwaki H. Synergistic growth inhibition of human hepatocellular carcinoma cells by acyclic retinoid and GW4064, a farnesoid X receptor ligand. *Cancer Lett*. 2012;323:215-222. IF 5.016
- 11) Ninomiya S, Hara T, Tsurumi H, Goto N, Saito K, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Indoleamine 2,3-dioxygenase expression and serum kynurenine concentrations in patients with diffuse large B-cell lymphoma. *Leukemia Lymphoma*. 2012;53:1143-1145. IF 2.605
- 12) Tanaka T, Shimizu M, Moriwaki H. Cancer chemoprevention by carotenoids. *Molecules*. 2012;17:3202-3242. IF 2.095
- 13) Fujiki H, Imai K, Nakachi K, Shimizu M, Moriwaki H, Suganuma M. Challenging the effectiveness of green tea in primary and tertiary cancer prevention. *J Cancer Res Clin Oncol*. 2012;138:1259-1270. IF 3.009
- 14) Tomita A, Shirasugi Y, Ito T, Tsurumi H, Naoe T. Extravascular hemolytic attack after eculizumab therapy for paroxysmal nocturnal hemoglobinuria. *Annals of Hematology*. 2012;91:1139-1141. IF 2.396
- 15) Shirakami Y, Shimizu M, Moriwaki H. Cancer chemoprevention with green tea catechins: from bench to bed. *Curr Drug Targets*. 2012;13:1842-1857. IF 3.597
- 16) Shimizu M, Tanaka T, Moriwaki H. Obesity and hepatocellular carcinoma: targeting obesity-related inflammation for chemoprevention of liver carcinogenesis. *Semin Immunopathol*. 2013;35:191-202 IF 6.482
- 17) Iwashita T, Nakai Y, Samarasekera JB, Park Do H, Zhang Z, Gu M, Lee JG, Chang KJ. High single-pass diagnostic yield of a new 25-gauge core biopsy needle for EUS-guided FNA biopsy in solid pancreatic lesions. *Gastrointest Endosc*. 2013;77:909-915. IF 4.900
- 18) Nagano J, Shimizu M, Hara T, Shirakami Y, Kochi T, Nakamura N, Ohtaki H, Ito H, Tanaka T, Tsurumi H, Saito K, Seishima M, Moriwaki H. Effects of indoleamine 2,3-dioxygenase deficiency on high-fat diet-induced hepatic inflammation. *PLoS One*. 2013;8:e73404. IF 3.534
- 19) Nakamura N, Goto N, Tsurumi H, Takemura M, Kanemura N, Kasahara S, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Sawada M, Yamada T, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Serum level of soluble tumor necrosis factor receptor 2 is associated with the outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with the R-CHOP regimen. *Eur J Haematol*. 2013;91:322-331. IF 2.414
- 20) Baba A, Shimizu M, Ohno T, Shirakami Y, Kubota M, Kochi T, Terakura D, Tsurumi H, Moriwaki H.

- Synergistic growth inhibition by acyclic retinoid and phosphatidylinositol 3-kinase inhibitor in human hepatoma cells. *BMC Cancer*. 2013;13:465. IF 3.319
- 21) Izumi N, Asahina Y, Kurosaki M, Yamada G, Kawai T, Kajiura E, Okamura Y, Takeuchi T, Yokosuka O, Kariyama K, Toyoda J, Inao M, Tanaka E, Moriwaki H, Adachi H, Katsushima S, Kudo M, Takaguchi K, Hiasa Y, Chayama K, Yatsushashi H, Oketani M, Kumada H. Inhibition of hepatocellular carcinoma by PegIFN α -2a in patients with chronic hepatitis C: a nationwide multicenter cooperative study. *J Gastroenterol*. 2013;48:382-390. IF 4.020
- 22) Nagano J, Shimizu M, Hara T, Shirakami Y, Kochi T, Nakamura N, Ohtaki H, Ito H, Tanaka T, Tsurumi H, Saito K, Seishima M, Moriwaki H. Effects of indoleamine 2,3-dioxygenase deficiency on high-fat diet-induced hepatic inflammation. *PLoS One*. 2013;8:e73404. IF 3.534
- 23) Sumi T, Shirakami Y, Shimizu M, Kochi T, Ohno T, Kubota M, Shiraki M, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin-3-gallate suppresses hepatic preneoplastic lesions developed in a novel rat model of non-alcoholic steatohepatitis. *SpringerPlus*. 2013;2:690. IF 3.534
- 24) Yamada T, Goto N, Tsurumi H, Takata K, Sato Y, Yoshino T, Moriwaki H, Kito Y, Takeuchi T, Iwata H. Mantle cell lymphoma with a unique pattern of CD5 expression: a case report with review of the literatures. *Med Mol Morphol*. 2014;47:169-175. IF 1.070
- 25) Goto N, Tsurumi H, Takemura M, Matsumoto T, Shibata Y, Mabuchi R, Nakamura N, Nakamura H, Yamada T, Seishima M, Takami T, Takeuchi T, Moriwaki H. Serum soluble tumor necrosis factor receptor 1 level is associated with the outcome of diffuse large b-cell lymphoma patients treated with the CHOP or R-CHOP regimen. *J Clin Exp Hematop*. 2014;54:117-127.
- 26) Kubota M, Shimizu M, Baba A, Ohno T, Kochi T, Shirakami Y, Moriwaki H. Combination of Bevacizumab and Acyclic Retinoid Inhibits the Growth of Hepatocellular Carcinoma Xenografts. *J Nutr Sci Vitaminol*. 2014;60:357-362. IF 0.868

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：森脇久隆，研究分担者：清水雅仁，高井光治；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：レチノイド核内受容体 RXR α 遺伝子改変マウスを用いた肝発癌機序の解析；平成 25 年度；1,200 千円
- 2) 研究代表者：清水雅仁，研究分担者：森脇久隆，白木 亮；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：肥満・糖尿病・NASH 関連肝発癌抑制に繋がる新規標的分子の解明；平成 25-27 年度；3,900 千円 (1,200 : 1,200 : 1,500 千円)
- 3) 研究代表者：鶴見 寿；大学活性化経費(研究：科研採択支援)：急性骨髄性白血病におけるインドールアミン酸素添加酵素(IDO)の役割；平成 26 年度；680 千円
- 4) 研究代表者：原 武志；大学活性化経費(研究：科研採択支援)：レスベラトロールによる悪性リンパ腫再発予防効果の検討；平成 26 年度；560 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

森脇久隆：

- 1) 日本内科学会評議員(～現在)
- 2) 日本消化器病学会執行評議員(～現在)
- 3) 日本肝臓学会評議員(～現在)
- 4) 日本ビタミン学会理事(～現在)
- 5) 日本臨床代謝学会評議員(～現在)
- 6) 日本癌学会評議員(～現在)
- 7) 日本栄養食糧学会評議員(～現在)

- 8) 日本静脈経腸栄養学会監事(～現在)
- 9) 日本臨床腫瘍学会評議員(～現在)

鶴見 寿 :

- 1) 日本臨床血液学会評議員(～現在)
- 2) 日本血液学会評議員(～現在)
- 3) 日本輸血学会東海支部評議員(～現在)
- 4) 日本臨床腫瘍学会評議員(～現在)
- 5) 日本内科学会支部評議員(～現在)
- 6) 日本骨髓腫学会評議員(平成 24 年～現在)

原 武志 :

- 1) 日本血液学会評議員(～現在)

2) 学会開催

森脇久隆 :

- 1) 日本ビタミン学会(平成 24 年 6 月, 岐阜)
- 2) 第 40 回日本肝臓学会西部会(平成 25 年 12 月, 岐阜)
- 3) 平成 25 年度日本肝臓学会教育講演会(後期)(平成 25 年 12 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

森脇久隆 :

- 1) 日本内科学会誌(英文) ; 査読委員(～現在)
- 2) 日本消化器病学会誌(英文) ; 編集委員(～現在)
- 3) 日本静脈経腸栄養学会誌 ; 編集委員(～現在)
- 4) J Cancer Res Clin Oncol ; Editorial Board(～現在)

鶴見 寿 :

- 1) Trends in Hematological Malignancies ; 編集アドバイザー(～現在)
- 2) International Journal of Hematology ; 査読委員(～現在)
- 3) Journal of Tumor ; 編集委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

森脇久隆 :

- 1) 第 15 回日本病態栄養学会年次集会(平成 24 年 1 月, ランチョンセミナー2-4 司会)
- 2) 栄養アセスメント研究会(平成 24 年 5 月, ランチョンセミナー 司会)
- 3) 第 48 回日本肝臓学会総会(平成 24 年 6 月, ワークショップ 司会)
- 4) 第 48 回日本肝臓学会総会(平成 24 年 6 月, モーニングセミナー6 司会)
- 5) DDW Japan2012(平成 24 年 10 月, 招待講演(消化器) 司会)
- 6) 第 23 回日本レチノイド研究会学術集会(平成 24 年 10 月, 特別講演 4「Chemoprevention of second primary liver cancer by acyclic retinoid」 演者)
- 7) 第 23 回日本レチノイド研究会学術集会(平成 24 年 10 月, 特別講演 5 座長)
- 8) 第 39 回日本肝臓学会東部会(平成 24 年 12 月, ランチョンセミナー6 座長)
- 9) 第 28 回日本静脈経腸栄養学会(平成 25 年 2 月, パネルディスカッション 4 司会)
- 10) 第 99 回日本消化器病学会総会(平成 25 年 3 月, パネルディスカッション 9 司会)
- 11) 第 49 回日本肝臓学会(平成 25 年 6 月, ランチョンセミナー 司会)
- 12) 第 36 回日本栄養アセスメント研究会(平成 25 年 6 月, ランチョンセミナー 司会)
- 13) 第 29 回日本静脈経腸栄養学会(平成 26 年 2 月, ランチョンセミナー17 司会)
- 14) 第 37 回日本栄養アセスメント研究会(平成 26 年 5 月, ランチョンセミナー「慢性肝不全の治療を巡る最近の話題-栄養サポートを中心に-」 演者)
- 15) 第 50 回日本肝臓学会総会(平成 26 年 5 月, 特別企画 1「肝臓研究 50 年の変遷 (4)肝硬変・肝不全のこれまでと今後の展望 これまでの肝臓学会の歩み」 演者)
- 16) JDDW2014(第 18 回日本肝臓学会大会)(平成 26 年 10 月, パネルディスカッション 11 司会)

鶴見 寿：

- 1) 第 27 回日本エイズ学会学術集会・総会共催セミナー(平成 25 年 11 月, 「HIV 診療チームは地域のダイヤモンド!? ～皆で HIV 診療にきらめきを!～」 演者)
- 2) 第 76 回日本血液学会学術総会(平成 26 年 11 月, 教育講演「移植非適応骨髄腫の治療」 演者)

大野智彦：

- 1) JDDW2012(第 54 回日本消化器病学会大会)(平成 24 年 10 月, ワークショップ 8「消化器疾患と胆汁酸」非環式レチノイドと GW4064(FXR ligand)併用による肝癌抑制効果 演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

森脇久隆：

- 1) 岐阜県身体障害者福祉協議会委員(～平成 26 年 3 月)
- 2) 岐阜県難病医療連絡協議会座長(～平成 26 年 3 月)
- 3) 岐阜県エイズ対策推進協議会座長(～平成 26 年 3 月)
- 4) 岐阜県医療審議会委員(～平成 26 年 3 月)
- 5) 岐阜県人権懇話会委員(～平成 26 年 3 月)
- 6) 岐阜県教育委員会第 3 部会長(～平成 26 年 3 月)
- 7) 岐阜県肝疾患診療連携拠点病院協議会委員(～平成 26 年 3 月)

鶴見 寿：

- 1) 岐阜県がん対策推進協議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県エイズ対策推進協議会会長(～現在)
- 3) 岐阜県国民健康保険診療報酬審査委員会委員(～現在), 同 DPC 特別審査部会委員(～現在)
- 4) 岐阜県身体障害者福祉協議会委員(～現在)
- 5) 岐阜県社会保険審議会委員(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 森脇久隆：肝がん：ヘルシスト 212 号(2012 ; 36 : 24-25)
- 2) 森脇久隆：Chronic liver disease : Medical Tribune(Feb 2012 p25)
- 3) 森脇久隆：岐阜新聞大賞：岐阜新聞(2013 年 1 月 6 日(1 面), 2-1, 2-10)
- 4) 荒木寛司, 森脇久隆：文献紹介「胃 MALT リンパ腫に対するヘリコバクター・ピロリ除菌療法後 10 年間の経過観察での遺残病変と二次癌の発生」：胃がん perspective(2013.6・Vol.6-No.2 114-116)
- 5) 森脇久隆：肝癌診療：内科会だより(2013 年 7 月 11 日号 1-2 頁)
- 6) 安田一朗, 森脇久隆：パープルリボン：中日新聞(2013 年 8 月 19 日(15 面))

12. 自己評価

評価

立ち上げからちょうど 7 年を経過したが、従来の関連分野から実績を引き継ぐ形で、既に業績を挙げ始めており、良好との評価に値する。特に本講座を通して日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医を 8 名合格させたことは特筆できる。

現状の問題点及びその対応策

臨床腫瘍学という臓器横断的なテーマであり、人的に関連分野からのサポートが必須である。本講座独自の大学院生確保が緊急の課題である。

今後の展望

2014 年度新規大学院入学生を 1 名確保し、研究を推進する。

〔医療管理学講座〕

(1) 医療情報学分野

1. 研究の概要

医療および生命科学領域のビッグデータを対象に、データマイニング手法等を駆使し、新たな知見を発見する研究を進めている。具体的な研究テーマは以下である。

- ・ 大規模医薬品有害事象データベースの構築と有害事象分析の研究
- ・ 医療・診療データを活用した効果的なマネジメントの実践と医療の質向上
- ・ その他

2. 名簿

教授： 紀ノ定保臣 Yasutomi Kinoshada

准教授： 一宮尚志 Takashi Ichinomiya

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 紀ノ定保臣. 創薬におけるデータマイニング技術の活用事例：国際医療福祉総合研究所 HealthCare Innovation21 研究会編. 医療におけるデータマイニング講座, 東京：株式会社日本医学出版；2012 年；57-65.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 紀ノ定保臣. 新世代に突入！ 医療情報システムにおける次の一手, 映像情報メディカル 2012 年；第 44 巻：162-166.
- 2) 紀ノ定保臣, 森口修逸. 医療情報の完全デジタル化で「ISMS の実践」が必須化！, Phase3 2012 年；第 331 号：72-73.
- 3) 紀ノ定保臣, 森口修逸. 保健・医療の充実に向けた個人情報の有効活用への動き, Phase3 2012 年；第 332 号：74-75.
- 4) 紀ノ定保臣. 地域医療情報研究開発機構(CHIRD)の活動, JAPIC NEWS 2012 年；No.337：10-11.
- 5) 佐藤菊枝, 長瀬清, 紀ノ定保臣. 診療と経営に生かすデータマネジメント手法, IT VISION 2012 年；No.26：46-50.
- 6) 荒井 迅, 一宮尚志, 浦本武雄, 小嶋 泉, 勝股審也, 西郷甲矢人, 鈴木咲衣, 蓮尾一郎, 長谷川真人, 春名太一. 圏論の歩き方(第 8 回)歩き方の使い方, 数学セミナー 2012 年；51 巻 3 号：85-91.
- 7) 荒井 迅, 池上英子, 一宮尚志, 浦本武雄, 小嶋 泉, 勝股審也, 西郷甲矢人, 鈴木咲衣, 土岡俊介, 蓮尾一郎, Piet Hut, 春名太一, 星野直彦. 圏論の歩き方(第 16 回)「数学本流」にはなりたくない, 数学セミナー 2012 年；51 巻 11 号：79-85.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 梅津亮冴, 西端友里, 阿部純子, 鈴木悠起也, 原 英彰, 永澤秀子, 紀ノ定保臣, 中村光浩. 日本国内の有害事象自発報告データベース(JADER)を用いたデータマイニングによる経口血糖降下薬と低血糖症との関連性の評価, 薬学雑誌 2014 年；134 巻：299-304.

原著 (欧文)

- 1) Yamamoto K, Tamura S, Hayamizu S, Kinoshada Y. Visual Analysis of Health Checkup Data Using Multidimensional Scaling. J Ad Comput Intel Intel Informatics. 2012;16:26-31.
- 2) Shimizu H, Matsushima S, Kinoshada Y, Miyamura H, Tomita N, Kubota T, Osaki H, Nakayama M, Yoshimoto M, Kodaira T. Evaluation of parotid gland function using equivalent cross-relaxation rate imaging applied magnetization transfer effect. J Radiat Res. 2012;53:138-144. IF 1.691
- 3) Ichinomiya T. Bouchaud-Mezard model on a random network. Phys Rev E. 2012;86:036111. IF 2.326
- 4) Ichinomiya T. Wealth distribution on complex networks. Phys Rev E. 2012;86:066115. IF 2.326
- 5) Ichinomiya T. Temporal coarse-graining method to simulate the movement of atoms. J Comput Phys. 2013;251:319-326. IF 2.485
- 6) Ichinomiya T. Power-law exponent of the Bouchaud-Mézard model on regular random networks. Phys Rev E. 2013;88:012819. IF 2.326

- 7) Kawamoto R, Nazir A, Kameyama A, Ichinomiya T, Yamamoto K, Tamura S, Yamamoto M, Hayamizu S, Kinosada Y. Hidden Markov model for analyzing time-series health checkup data. Stud Health Technol Inform. 2013;192:491-495. IF 2.326
- 8) Nazir A, Ichinomiya T, Miyamura N, Sekiya Y, Kinosada Y. Identification of Suicide-Related Events Through Network Analysis of Adverse Event Reports. Drug Safety. 2014;37:609-616 IF 2.620
- 9) Yanagita T, Ichinomiya T. Thermodynamic characterization of synchronization-optimized oscillator networks. Phys Rev E. 2014;90:062914. IF 2.326
- 10) Umetsu R, Nishibata Y, Abe J, Suzuki Y, Hara H, Nagasawa H, Kinosada Y, Nakamura M. Evaluation of the association between the use of oral anti-hyperglycemic agents and hypoglycemia in Japan by data mining of the Japanese Adverse Drug Event Report (JADER) database. Yakugaku Zasshi. 2014;2:299-304. IF 0.310
- 11) Matsushima S, Sato Y, Yamamura H, Kato M, Kinosada Y, Era S, Takahashi K, Inaba Y. Visualization of liver uptake function using the uptake contrast-enhanced ratio in hepatobiliary phase imaging. Magn Reson Imaging. 2014;32:654-659. IF 2.022

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：梶井英治(自治医科大学), 研究分担者：中村好一, 石川鎮清, 岡山雅信, 藍原雅一, 紀ノ定保臣, 関 庸一, 本多正幸, 小荒井衛, 古城隆雄; 科学研究費補助金基盤研究(A): 地域医療データベースの活用による地域医療需要と医療資源から見た地域医療の効率化; 平成 23-26 年度; 37,800 千円(21,600 : 4,800 : 7,000 : 4,400 千円)
- 2) 研究代表者：紀ノ定保臣, 研究分担者：中村光浩, 伊藤善規; 科学研究費補助金基盤研究(B): 医薬品適正使用支援システムの開発と高度医療専門職人材育成への応用; 平成 24-26 年度; 11,500 千円(4,600 : 3,100 : 3,800 千円)
- 3) 研究代表者：一宮尚志; 科学技術振興機構『さきがけ』数学と諸分野の協働によるブレークスルーの探索: 数学を応用した新しい動力学シミュレーション法の開発; 平成 21-24 年度; 9,800 千円(3,200 : 2,650 : 1,750 : 2,200 千円)
- 4) 研究代表者：西浦廉政(東北大学 AIMR), 研究分担者：高石武史, 平岡裕章, 一宮尚志; 戦略的イノベーション創造プログラム「革新的構造材料」: マテリアルズインテグレーションへの数学的アプローチ技術開発; 平成 26-30 年度; 4,370 千円(1,150 : 805 : 805 : 805 : 805 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

紀ノ定保臣:

- 1) 日本磁気共鳴医学会監事(~現在)
- 2) 日本生体医工学会代議員(~現在)
- 3) 日本医療情報学会評議員(~現在)
- 4) 日本医学放射線学会電子情報委員会委員(~現在)

2) 学会開催

紀ノ定保臣:

- 1) 患者の視点に立った医療データ分析に関する研究第 2 回シンポジウム(平成 24 年 7 月, 東京)
- 2) 第 41 回日本 M テクノロジー学会大会(平成 26 年 8 月, 三重)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

紀ノ定保臣:

- 1) 平成 23 年度大学病院情報マネジメント部門連絡会議(平成 24 年 1 月, 松山, 「クラウドで何が変わるか? -医療情報システムのクラウド化の経験から-」座長)
- 2) 平成 23 年度岐阜県医師会総合医療情報ネットワーク・岐阜地区総合医療情報ネットワーク合同総会(平成 24 年 3 月, 岐阜, 「個人情報が入った大規模診療データ等の取扱いについて」演者)
- 3) Forum on Digital Hospital Development and Management(2012.06, Shanghai, Current Situation of Hospital Information Systems and Future in Japan; Speaker)
- 4) 第 15 回日本医薬品情報学会総会・学術大会(平成 24 年 7 月, 大阪, 教育講演「データマイニングの考え方とその実践」演者)
- 5) CARS2012(2012.07, PISA, Italy, On integrated platform for health care data bank to visualize and increase efficiency of the clinical service; Speaker)
- 6) 次世代医療技術・機器研究会(平成 24 年 10 月, 愛知, 講演「個人毎の体質に応じた個別化医療支援システムの開発」演者)
- 7) 科学技術と経済の会(平成 26 年 3 月, 東京, 講演「医療マネジメントとビッグデータ」演者)
- 8) Oracle Industry Leadership Summit 2014(平成 26 年 4 月, 東京, 講演「ビッグデータ利活用による医療の質向上」演者)
- 9) 医療ビッグデータ・サミット 2014(平成 26 年 7 月, 東京, 講演「データ活用で医療の質向上」演者)
- 10) 協会けんぽ岐阜支部講演会(平成 26 年 7 月, 岐阜, 講演「ヘルスケア分野におけるビッグデータの活用」演者)
- 11) モダンホスピタルショウ(平成 26 年 7 月, 東京, 講演「ビッグデータを活用した医療の質向上」演者)
- 12) 糖尿病情報学会(平成 26 年 8 月, 岐阜, 講演「地域連携と職域連携を支援する医療情報システムの在り方」演者)
- 13) 日本看護歴史学会(平成 26 年 9 月, 岐阜, 講演「電子カルテシステムの活用」演者)
- 14) 日本鍼灸師全国大会(平成 26 年 10 月, 岐阜, 講演「ビッグデータの活用」演者)
- 15) 栗田静枝診療録管理研究会(平成 26 年 11 月, 東京, 講演「医療の質向上に向けたビッグデータの活用」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

紀ノ定保臣:

- 1) 全国健康保険協会岐阜支部評議会評議員(～現在)
- 2) 岐阜県医師会勤務医部会 IT 委員会委員長(～現在)
- 3) 岐阜県医師会情報システム委員会委員(～現在)
- 4) 岐阜県医師会勤務医部会学術委員(～現在)
- 5) 一般社団法人 SDM コンソーシアム理事長(～現在)

一宮尚志:

- 1) 科学技術振興機構研究開発戦略センター 電子情報通信分野俯瞰プロジェクト 未来研究検討開発委員会委員(～平成 24 年 3 月)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 一宮尚志: 「研究室から 大学はいま」5年後の健康状態を予測: 岐阜新聞(2012年8月28日)
- 2) 紀ノ定保臣: クローズアップ現代 “ムダの見える化で医療の質を上げろ”: NHK 総合(2013年10月2日)
- 3) 紀ノ定保臣: 医療ビッグデータの萌芽 データ活用による “見える化” が大学病院を変えた: 日経デジタルヘルス(2014年6月11日)

- 4) 紀ノ定保臣：データの活用，地域貢献 日本鍼灸師会 岐阜市で全国大会：岐阜新聞(2014年10月13日)

12. 自己評価

評価

直近4年間は連合創薬医療情報研究科の研究科長を担当したため，研究論文の件数を増やすことができなかった。一方，ビッグデータに対する社会の関心が高く，そのような内容についての講演依頼が多く，社会へのメッセージは十分に発信できた。

現状の問題点及びその対応策

研究論文を作成することが大きな課題であるが，次年度は数本の学術論文を投稿できる状況になっている。

今後の展望

学術論文を増やすとともに，学位取得者を多くしたい。

(2) 総合病態内科学分野

1. 研究の概要

1) 肥満によるインスリン抵抗性発現の機序に関する研究

肥満は脂肪細胞の肥大化と過形成にから成っている。しかしこれらがどのように調節されているかは解明されていない。以前の検討から、脂肪組織はまず全身の糖代謝に影響の少ない皮下脂肪、傍精巣脂肪から肥満が始まり、ついで影響の多い腸間膜脂肪の肥満に至る事、若年期には脂肪細胞の増殖が盛んで、特に肥満動物では細胞増殖が多いが、ある一定の増殖を超えるとそれ以上増殖せず、その後細胞の肥大化が進むという事を見出した。現在肥満、非肥満動物に経時的に EdU を投与して、脂肪組織全体の細胞増殖を検討すると共に、細胞表面マーカーに対する免疫染色でどの種類の細胞（脂肪細胞、前脂肪細胞、血管細胞、幹細胞など）の細胞増殖が活発かを解明する。

2) 成熟脂肪細胞の増殖に関する研究

脂肪細胞は前脂肪細胞から細胞増殖停止の後、PPAR γ 、C/EBP のような key regulator となる転写因子を発現し、これが脂肪細胞に特異的な蛋白の発現を促し、最終的な成熟脂肪細胞に分化するとされている。しかし梶田はこのシナリオでは説明ができない、小型で脂肪滴を持たず、増殖しながらも adiponectin などの脂肪細胞特異的蛋白を発現する細胞を見出し、small proliferative adipocyte (SPA) を名付けた。この細胞の性情と糖、脂肪代謝、インスリン感受性における役割を検討している。

3) Sphingosine 1-phosphate (S1P) の脂肪細胞増殖、分化に対する役割

S1P は癌、免疫、循環器、中枢神経など様々な細胞の増殖、生存、遊走、血管新生などにかかわる事が知られているが、脂肪細胞への役割は殆ど知られていない。梶田は慶応大学の石井功准教授から S1P receptor 2 欠損マウスを譲渡され、現在飼育中である。このマウスはやせ形であるが、糖脂肪食負荷で wild type と同程度に体重、脂肪重量が増加するが、脂肪細胞の肥大化はなく、耐糖能、インスリン感受性も良好である。このメカニズムを解明中である。

4) 旋毛虫感染による糖尿病改善機序に関する研究

多くの慢性炎症では耐糖能は悪化する事が多いが、寄生虫感染ではこれが改善した。その機序として、近年注目されている脂肪組織の炎症が、寄生虫感染により改善されたと考えられた。

5) p140-Cap の膵 β 細胞における役割、糖尿病発症への関与に関する研究

愛知県コロニーの永田浩一先生との共同研究で、もともと脳に多く発現している p140-Cap という蛋白が膵 β 細胞にも発現している事が見だし、この機能の解析を行っている。現在、主に糖尿病モデルである、OLETF と GK ラットの膵 β 細胞において、p140-Cap がどのように発現されているかを検討している。

6) ステロイド糖尿病に対する治療に関する研究

グルココルチコイドは、肝での糖新生亢進、筋・脂肪細胞での糖取り込み低下、高グルカゴン血症などを介して耐糖能を低下させ、血糖値を上昇させる。このためしばしばインスリンを使用する必要が出てくるが、それをグルココルチコイド投与前に予測することが可能かどうかについて、またその因子とカットオフ値に関して研究を進めている。また、血糖依存性に血糖低下作用を発現し、グルカゴン分泌を抑制する GLP-1 アナログによるステロイド糖尿病治療の有用性もインスリン治療との比較で検討中である。

7) 腎機能障害とピロリ菌感染に関する研究

江南市の佐藤病院との共同研究で、糖尿病患者や血液透析患者で上部消化管内視鏡検査を行う機会がしばしばあるが、その際ピロリ菌感染率に健常者と差がみられないかについて継時的に研究している。透析患者では非透析患者に比べピロリ菌感染率が低いことは知られているが、その原因については良く知られていない。腎機能との関連で、ピロリ菌感染がどのように減少してゆくのかを検討している。

8) 発熱患者の鑑別診断に関する研究

発熱患者の原因は非常に多岐にわたり、診断にも難渋することが多い。発熱の 3 大疾患は、感染症、膠原病、腫瘍である。細菌感染症に注目し、血液培養陽性予測因子の解明についての研究を行っている。また、最近臨床応用されるようになったプロカルシトニンの発熱患者における臨床的意義についても研究している。

9) ステロイド投与患者におけるデノスマブとアレンドロネート無作為割り付け比較試験

「ステロイド性骨粗鬆症の管理と治療ガイドライン (2014 年度版)」によると、ステロイド骨粗鬆症治療の第 1 選択薬としてアレンドロネートなどのビスホスホネート製剤があるが、顎骨壊死、治療中の骨折、長期使用での大腿骨の非定型骨折が起こるなどの問題点もある。デノスマブは receptor activating NF- κ B ligand (RANKL) の中和抗体で、2013 年に骨粗鬆症治療薬として承認された。6 ヶ月に 1 回の皮下注射薬で、治療継続率の向上が期待され、骨吸収抑制効果はビスホスホネート製剤を上回るとされている。ステロイド投与患者でのアレンドロネートとデノスマブの有効性および安全性を比較検討の臨床試験

を開始している。

2. 名簿

教授：	森田浩之	Hiroyuki Morita
准教授：	梶田和男	Kazuo Kajita
助教：	池田貴英	Takahide Ikeda
助教：	森 一郎	Ichiro Mori
助教：	山内雅裕	Masahiro Yamauchi

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 雨宮伸, 石塚達夫, 岩瀬正典, 植木彬夫, 絵本正憲, 島田朗, 杉山隆, 関口雅友, 成田琢磨, 藤本新平, 間中英夫, 山根公則. 糖尿病療養指導の手びき. 改訂第4版(日本糖尿病学会編); 東京: 日本糖尿病学会・南江堂; 2012年.
- 2) 森田浩之. コラム いつも手から: 内科学研鑽会編集. カルテはこう書け! 目からウロコ「総合プロブレム方式」, 東京: 榊新興医学出版社; 2013年: 14.
- 3) 森田浩之. コラム 気をつけよう、ノートパソコンとのにらめっこ: 内科学研鑽会編集. カルテはこう書け! 目からウロコ「総合プロブレム方式」, 東京: 榊新興医学出版社; 2013年: 45.
- 4) 藤岡 圭. 全身倦怠感、口渇で受診した33歳男性: 内科学研鑽会編集. カルテはこう書け! 目からウロコ「総合プロブレム方式」, 東京: 榊新興医学出版社; 2013年: 32-36.
- 5) 岡田英之. 四肢浮腫、肩関節痛を主訴に来院した75歳男性: 内科学研鑽会編集. カルテはこう書け! 目からウロコ「総合プロブレム方式」, 東京: 榊新興医学出版社; 2013年: 73-78.
- 6) 石塚達夫. 今日の診断・治療の概要: 日本遠隔医療学会編集委員会監修. 遠隔診療実践マニュアル 在宅医療推進のために, 東京: 篠原出版新社; 2013年: 13-45.
- 7) 森田浩之, 林祐一. 遠隔診療の実際 神経・筋・骨格疾患: 日本遠隔医療学会編集委員会監修. 遠隔診療実践マニュアル 在宅医療推進のために, 東京: 篠原出版新社; 2013年: 104-114.
- 8) 池田貴英. 遠隔診療の実際 消化器疾患: 日本遠隔医療学会編集委員会監修. 遠隔診療実践マニュアル 在宅医療推進のために, 東京: 篠原出版新社; 2013年: 136-143.
- 9) 森田浩之. 遠隔診療の実際 内分泌・代謝疾患: 日本遠隔医療学会編集委員会監修. 遠隔診療実践マニュアル 在宅医療推進のために, 東京: 篠原出版新社; 2013年: 144-151.
- 10) 森田浩之, 長谷川高志, 酒巻哲夫. 遠隔診療のカルテから: 日本遠隔医療学会編集委員会監修. 遠隔診療実践マニュアル 在宅医療推進のために, 東京: 篠原出版新社; 2013年: 212-215.
- 11) 石塚達夫. 訴えとしてのコモンディジーズ 不安感: 日本内科学会専門医部会編集. コモンディジーズブック 日常外来での鑑別と患者への説明のために, 東京: 日本内科学会; 2013年: 90-94.
- 12) 石塚達夫. 糖尿病性合併症への対応の展望(発言)がんにからみた糖尿病: 堀田 饒, 清野 裕, 門脇 孝, 柏木厚典, 中村二郎編集. 糖尿病 UP・DATE 賢島セミナー29 糖尿病治療のイノベーション 生活習慣病としての糖尿病, 東京: 時事通信社; 2013年: 210-219.
- 13) 石塚達夫. 糖尿病性合併症への対応の展望(総合討論)糖尿病外来では、毎年がん検診を薦めるべきか がんの合併検査を行う場合の目安は: 堀田 饒, 清野 裕, 門脇 孝, 柏木厚典, 中村二郎編集. 糖尿病 UP・DATE 賢島セミナー29 糖尿病治療のイノベーション 生活習慣病としての糖尿病, 東京: 時事通信社; 2013年: 232-234.
- 14) 石塚達夫. 1型糖尿病はどのように治療するのか: 日本糖尿病学会編集. 糖尿病治療の手びき 改訂第55版増補, 東京: 南江堂; 2013年: 53-66.
- 15) 森田浩之. 副腎皮質ステロイドホルモン抵抗症および過敏症: 小川 聡総編集, 伊藤 裕, 花房俊昭部門編集. 内科学書 改訂第8版 5 内分泌疾患 代謝栄養疾患, 東京: 中山書店; 2013年: 185-187.
- 16) 森田浩之. 国試対策問題編集委員会編集. 医師国家試験のためのレビューブック必修・禁忌 第3版, 東京: 榊メディックメディア; 2014年: V_2-74.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 石塚達夫. 編集後記, 日本遠隔医療学会雑誌 2012; 8巻: 83.
- 2) 石塚達夫, 袴田康弘, 中村真潮, 林登志雄, 森田 浩, 西垣和彦, 山守育雄, 森田浩之. 第14回東海支部内科専門医部会教育セミナー, 生活習慣病への治療戦略, 日本内科学会雑誌 2012年; 101巻: 2342-2349.
- 3) 吉富 淳, 中西孝之, 松下正伸, 海野 啓, 池田貴英, 袴田康弘, 森田浩之. 第15回東海支部内科専門医部会教育セミナー, プロブレムで考える症例検討会 - 著明な腹水を伴った高齢男性, 日本内科学会雑誌 2012年; 101巻: 3577-3584.
- 4) 石塚達夫, 福澤嘉孝, 田中章景, 堅村信介, 堀川幸男, 松林宏行, 保住 功. 第16回東海支部内科専門医部会教育セミナー 内科疾患における遺伝子異常, 日本内科学会雑誌 2013年; 102巻: 1001-1009.

- 5) 石塚達夫, 福沢嘉孝, 加藤義郎, 木村暁夫, 鈴木大介, 堀木紀行, 三輪啓志, 森田浩之, 金子春生. 第17回東海支部内科専門医部会教育セミナー 腫瘍と内科疾患, 日本内科学会雑誌 2013年; 102巻: 2998-3006.
- 6) 石塚達夫. 特集 外来診療のゴールドスタンダードとピットフォール [再診・通院]再診・通院患者の病態別の診かた 2型糖尿病, レジデント 2013年; 6巻: 56-67.
- 7) 森田浩之. 発熱患者の診断アプローチ, 岐阜市医師会だより 2013年; 45巻: 21-22.
- 8) 石塚達夫, 森田浩之, 梶田和男, 森 一郎, 藤岡 圭. 病院総合診療医の未来へのメッセージ, 日本病院総合診療医学会雑誌 2013年; 4巻: 1-9.
- 9) 石塚達夫. 編集後記, 日本遠隔医療学会雑誌 2013年; 9巻: 64.
- 10) 森田浩之. ベーチェット病治療の新たな展開, 医療講演と相談会 ベーチェット病編, 岐阜県希少難病友の会(くぬぎの会) 2013年.
- 11) 石塚達夫, 森田浩之. 特集: 実践的糖尿病療養指導に活かす インスリン読本 注意が必要なインスリン治療 ステロイド使用患者・免疫抑制薬使用患者, 糖尿病診療マスター 2013年; 11巻(増刊号 No.7): 675-681.
- 12) 石塚達夫. 編集後記, 日本遠隔医療学会雑誌 2013年; 9巻: 255.
- 13) 石塚達夫. 2次性高血圧について, 内科会だより. 10月内科会 2013年; 1-2.
- 14) 森田浩之. 画像 de クイズ(主訴: 腰痛 答え: 急性骨髄性白血病), Modern Physician 2014年; 34巻: 231-232.
- 15) 高橋典子. 画像 de クイズ(主訴: 四肢の腫瘍 答え: 尿酸(UA)11.1mg/dL), Modern Physician 2014年; 34巻: 233-234.
- 16) 石塚達夫. 画像 de クイズ(主訴: 有痛性紅斑 答え: 白血球破砕性血管炎), Modern Physician 2014年; 34巻: 345-346.
- 17) 森 一郎. 画像 de クイズ(主訴: 発熱 答え: 横紋筋腫), Modern Physician 2014年; 34巻: 347-348.
- 18) 森田浩之. 先生 こんにちは, ささえ(くぬぎの会=会員交流誌) 2014年: 35.
- 19) 池田貴英. 画像 de クイズ(主訴: 発熱 答え: 基礎疾患として糖尿病が多い), Modern Physician 2014年; 34巻: 437-438.
- 20) 高橋典子. 画像 de クイズ(主訴: 持続する頭痛 答え: 肥厚性硬膜炎), Modern Physician 2014年; 34巻: 439-440.
- 21) 石塚達夫, 福沢嘉孝, 長坂光夫, 谷川高士, 志智大介, 森田浩之, 平松伸朗. 第18回東海支部内科専門医部会教育セミナー 炎症性疾患, 日本内科学会雑誌 2014年; 103巻: 1195-1202.
- 22) 森 一郎. 画像 de クイズ(主訴: 関節可動域制限), Modern Physician 2014年; 34巻: 735-736.
- 23) 梶田和男. 画像 de クイズ(主訴: 白内障手術前検査時の X線像の異常), Modern Physician 2014年; 34巻: 863-866.
- 24) 森田浩之. 画像 de クイズ(主訴: 胸痛, 主訴: 頭痛), Modern Physician 2014年; 34巻: 983-987.
- 25) 石塚達夫, 森 一郎. 専門医部会 シリーズ: 患者の言葉・身体所見を読み解く 不安感と食思不振を認めた1例, 日本内科学会雑誌 2014年; 103巻: 1972-1975.
- 26) 森田浩之. 新任教授紹介, 岐阜大学医学部記念会館だより 2014年; 105.
- 27) 森田浩之. 画像 de クイズ(主訴: 多発関節痛 答え: 強直性脊椎炎), Modern Physician 2014年; 34巻: 1109-1110.
- 28) 谷本真由実. 画像 de クイズ(主訴: こめかみの腫瘍 答え: 急性リンパ性白血病), Modern Physician 2014年; 34巻: 1239-1240.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 長谷川高志, 郡 隆之, 斎藤勇一郎, 酒巻哲夫, 森田浩之, 岡田宏基, 柏木賢治, 辻 正次, 石塚達夫. 訪問診療における遠隔診療の効果に関する多施設前向き研究, 日本遠隔医療学会雑誌 2012; 8巻: 205-208.
- 2) 石塚達夫, 梶田和男, 山内雅裕, 森 一郎, 森田浩之. 研究レポート 第12回中国地区身体疾患とストレス研究会 糖尿病診療-インスリン治療導入時の留意点も含めて-, 分子精神医学 2013年; 13巻: 316-320.
- 3) 郡 隆之, 酒巻哲夫, 長谷川高志, 岡田宏基, 森田浩之, 斎藤勇一郎, 石塚達夫, 辻 正次, 小笠原文雄, 太田隆正. 訪問診療における遠隔診療の事象発生, 移動時間, QOL に関する症例比較多施設前向き研究, 日本遠隔医療学会雑誌 2013年; 9巻: 110-113.
- 4) 長谷川高志, 酒巻哲夫, 岡田宏基, 森田浩之, 郡 隆之, 斎藤勇一郎, 石塚達夫, 辻 正次, 小笠原文雄, 太田隆正. 在宅医療の情報流通と IT化の状況の研究, 日本遠隔医療学会雑誌 2013年; 9巻: 114-117.
- 5) 長谷川高志, 酒巻哲夫, 斎藤勇一郎, 石塚達夫, 森田浩之, 辻 正次, 岡田宏基, 郡 隆之, 太田隆正. 厚生労働科学研究「在宅医療での ICT および遠隔診療活用に関する調査研究(H24 - 医療 - 指定 - 048)」報告, 日本遠隔医療学会雑誌 2013年; 9巻: 48-50.
- 6) 長谷川高志, 酒巻哲夫, 本多正幸, 森田浩之, 山口義生, 木村久美子, 小笠原文雄, 井下秀樹, 宮崎芳子. 遠隔医療の普及手段を考える -現場医療者への遠隔医療スキルの育成-, 医療情報学 2013; 33巻: 66-69.
- 7) 石塚達夫, 岡田英之, 森 一郎, 梶田和男, 森田浩之. 総合診療医として忘れられないこの1例 低血糖

を頻発した関節リウマチ合併インスリン受容体異常症 B 型, 日本病院総合診療医学会雑誌 2014 年; 6 巻: 17-24.

- 8) 長谷川高志, 酒巻哲夫, 本多正幸, 中島直樹, 岡田宏基, 石塚達夫, 森田浩之, 辻 正次, 吉田晃敏, 斉藤勇一郎, 大熊由紀子, 郡 隆之, 煎本正博, 土橋康成, 小笠原敏浩, 小笠原文雄, 太田隆正, 松井英男, 守屋 潔. 遠隔医療の更なる普及・拡大方策の研究 2013 年度厚生労働科学研究成果報告, 日本遠隔医療学会雑誌 2014 年; 10 巻: 234-237.
- 9) 川島実可子, 田口皓一郎, 北田善彦, 森 一郎, 山内雅裕, 谷本真由実, 池田貴英, 梶田和男, 森田浩之, 石塚達夫. 大動脈壁肥厚を呈した顕微鏡的多発血管炎の 2 例, 日本内科学会雑誌 2014 年; 103 巻: 3099-3102.

原著 (欧文)

- 1) Ikeda T, Toyama S, Ogasawara M, Amano H, Takasaki Y, Morita H, Ishizuka T. Rheumatoid arthritis complicated with immunodeficiency-associated lymphoproliferative disorders during treatment with adalimumab. *Mod Rheumatol*. 2012;22:458-462. IF 2.206
- 2) Fujioka K, Kajita K, Zhiliang W, Hanamoto T, Ikeda T, Mori I, Okada H, Yamauchi M, Uno Y, Morita H, Nagano I, Tatakahashi Y, Ishizuka T. Dehydroepiandrosterone reduces preadipocyte proliferation via androgen receptor. *Am J Physiol Endocrinol Metab*. 2012;302:694-704. IF 4.088
- 3) Sekine A, Takahashi N, Watanabe T, Osawa Y, Ikeda T, Mori I, Kaji K, Morita H, Hirose Y, Seishima M, Ishizuka T. Adult intussusception of the descending colon due to inflammatory myofibroblastic proliferation. *Clin J Gastroenterol*. 2012;5:74-78.
- 4) Kajita K, Mori I, Hanamoto T, Ikeda T, Fujioka K, Yamauchi M, Okada H, Usui T, Takahashi N, Kitada Y, Taguchi K, Kajita T, Uno Y, Morita H, Ishizuka T. Pioglitazone enhances small-sized adipocyte proliferation in subcutaneous adipose tissue. *Endocr J*. 2012;59:1107-1114. IF 2.019
- 5) Morita H, Ikeda T, Kajita K, Fujioka K, Mori I, Okada H, Uno Y, Ishizuka T. Effect of royal jelly ingestion for six months on healthy volunteers. *Nutr J*. 2012;11:77. IF 2.635
- 6) Yamauchi M, Sudo K, Ito H, Iwamoto I, Morishita R, Murai T, Kajita K, Ishizuka T, Nagata K. Localization of multidomain adaptor proteins, p140Cap and vinexin, in the pancreatic islet of a spontaneous diabetes mellitus model, Otsuka-Long-Evans-Tokushima fatty rats. *Med Mol Morphol*. 2013;46:41-48. IF 1.070
- 7) Yamada K, Tsunoda K, Kawai K, Ikeda T, Taguchi K, Kajita K, Morita H, Ishizuka T. Mitochondria toxicity of antihyperlipidemic agents bezafibrate and fenofibrate. *Diabetol Int*. 2013;4:126-131.
- 8) Kajita K, Mori I, Kitada Y, Taguchi K, Kajita T, Hanamoto T, Ikeda T, Fujioka K, Yamauchi M, Okada H, Usui T, Uno Y, Morita H, Ishizuka T. Small proliferative adipocytes: identification of proliferative cells expressing adipocyte markers. *Endocr J*. 2013;60:931-939. IF 2.019
- 9) Hanamoto T, Kajita K, Mori I, Ikeda T, Fujioka K, Yamauchi M, Okada H, Usui T, Takahashi N, Kitada Y, Taguchi K, Kajita T, Uno Y, Morita H, Ishizuka T. The role of small proliferative adipocytes in the development of obesity: comparison between Otsuka Long-Evans Tokushima fatty (OLETF) rats and non-obese Long-Evans Tokushima Otsuka (LETO) rats. *Endocr J*. 2013;60:1001-1011. IF 2.019
- 10) Kohri T, Sakamaki T, Hasegawa T, Okada H, Morita H, Saito Y, Ishizuka T, Tsuji M, Ogasawara B, Ota T. Prospective multicenter case-control study of telemedicine for home medical care. *Stud Health Technol Inform*. 2013;192:963.
- 11) Naito T, Mizooka M, Mitsumoto F, Kanazawa K, Torikai K, Ohno S, Morita H, Ukimura A, Mishima N, Otsuka F, Ohyama Y, Nara N, Murakami K, Mashiba K, Akazawa K, Yamamoto K, Senda S, Yamanouchi M, Tazuma S, Hayashi J. Diagnostic workup for fever of unknown origin: a multicenter collaborative retrospective study. *BMJ Open*. 2013:e003971. IF 2.063
- 12) Okada H, Ikeda T, Kajita K, Mori I, Hanamoto T, Fujioka K, Yamauchi M, Usui T, Takahashi N, Kajita T, Taguchi K, Uno Y, Morita H, Wu Z, Nagano I, Takahashi U, Kudo T, Furuya K, Yamada T, Ishizuka T. Effect of nematode *Trichinella* infection on glucose tolerance and status of macrophage in obese mice. *Endocr J*. 2013;60:1241-1249. IF 2.019
- 13) Ohtaki H, Ohkusu K, Ohta H, Miyazaki T, Yonetamari J, Usui T, Mori I, Ito H, Ishizuka T, Seishima M. A case of sepsis caused by *Streptococcus canis* in a dog owner: a first case report of sepsis without dog bite in Japan. *J Infect Chemother*. 2013;19:1206-1209. IF 1.384
- 14) Mune T, Suwa T, Morita H, Isomura Y, Takada N, Yamamoto Y, Hayashi M, Yamakita N, Sasaki A, Takeda N, Takeda J, White PC, Kaku K. 2. Longer HSD11B2 CA-repeat in impaired glucose tolerance and type 2 diabetes. *Endocr J*. 2013;60:671-678. IF 2.019
- 15) Mune T, Morita H, Takada N, Yamamoto Y, Isomura Y, Suwa T, Takeda T, White PC, Kaku K. HSD11B2 CA-repeat and sodium balance. *Hypertens Res*. 2013;36:614-619. IF 2.936
- 16) Usui T, Kajita K, Kajita T, Mori I, Hanamoto T, Ikeda T, Okada H, Taguchi K, Kitada Y, Morita H, Sasaki T, Kitamura T, Sato T, Kojima I, Ishizuka T. Elevated mitochondrial biogenesis in skeletal muscle is associated with testosterone-induced body weight loss in male mice. *FEBS Lett*. 2014;588:1935-1941. IF 3.341

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：森田浩之，研究分担者：石塚達夫，梶田和男，森 一郎；科学研究費補助金基盤研究(C)：メタボリックシンドローム患者の行動変容－携帯電話 EMA の効果－；平成 24 年度；1,430 千円
- 2) 研究代表者：梶田和男，研究分担者：石塚達夫，森 一郎，梶田淑子；群馬大学生体調節研究所内分泌・代謝学共同研究拠点共同研究：成熟脂肪細胞の増殖因子としての、S1P の意義に関する検討；平成 24 年度；350 千円
- 3) 研究代表者：森 一郎，研究分担者：石塚達夫，梶田和男，梶田淑子；群馬大学生体調節研究所内分泌・代謝学共同研究拠点共同研究：成熟脂肪細胞の増殖因子としての、S1P の意義に関する検討；平成 25 年度；350 千円
- 4) 研究代表者：梶田和男；研究科長・医学部長裁量経費による研究費：新たな脂肪細胞分化にモデルに基づくインスリン抵抗性発現の機序の解明；平成 26 年度；850 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

- 1) 石塚達夫，森田浩之，梶田和男，池田貴英：在宅血圧・心電図の長期データとイベント発症との関連；平成 24 年度；1,200 千円；イセット(株)
- 2) 石塚達夫，森田浩之，梶田和男，池田貴英：在宅血圧・心電図の長期データとイベント発症との関連；平成 25 年度；1,200 千円；イセット(株)
- 3) 石塚達夫，森田浩之，梶田和男，池田貴英：在宅血圧・心電図の長期データとイベント発症との関連；平成 26 年度；1,200 千円；イセット(株)

5. 発明・特許出願状況

- 1) 発明者：野方文雄，横田康成，河村洋子，森田浩之，宇野嘉弘．発明の名称：血管破裂指標の算出方法および生体動脈評価装置 出願番号：特願 2008-015386 出願日：平成 20 年 1 月 25 日 登録日：平成 25 年 2 月 1 日

6. 学会活動

1) 学会役員

石塚達夫：

- 1) 日本内科学会評議員(～平成 26 年 3 月)
- 2) 日本内科学会東海支部評議員(～平成 26 年 3 月)
- 3) 日本内科学会専門医部会東海支部長(～平成 26 年 3 月)
- 4) 日本内科学会専門医部会役員(～平成 26 年 3 月)
- 5) 日本糖尿病学会学術評議員(～現在)
- 6) 日本糖尿病学会「治療の手びき」編集委員長(～現在)
- 7) 日本糖尿病学会糖尿病用語集編集委員会委員長(～平成 26 年 5 月)
- 8) 日本糖尿病学会糖尿病対策地域担当委員(～現在)
- 9) 日本糖尿病学会中部支部専門医認定委員会委員(～現在)
- 10) 日本糖尿病協会国際委員(～現在)
- 11) 日本糖尿病療養指導士認定機構認定委員会委員(～現在)
- 12) 日本糖尿病療養指導士認定機構試験委員会委員(～現在)
- 13) 日本内分泌学会評議員(～現在)
- 14) 日本内分泌学会東海支部監事(～現在)
- 15) 日本内分泌学会用語集策定委員会委員(～現在)
- 16) 日本病態栄養学会評議員(～現在)
- 17) 日本遠隔医療学会運営委員(～平成 25 年 5 月)
- 18) 日本遠隔医療学会雑誌編集委員長(～現在)
- 19) 日本病院総合診療医学会雑誌編集委員(～現在)
- 20) 日本病院総合診療医学会理事(～現在)
- 21) 日本老年医学会代議員(～現在)

- 22) 岐阜県内科医会副会長(～平成 26 年 3 月)
- 23) 岐阜県内科医会名誉会長(平成 26 年 4 月～現在)

森田浩之：

- 1) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本糖尿病学会学術評議員(～現在)
- 3) 日本糖尿病学会専門医認定委員会委員(～現在)
- 4) 日本内分泌学会評議員(～現在)
- 5) 日本ステロイドホルモン学会評議員(～現在)
- 6) 日本病態栄養学会評議員(～現在)
- 7) 日本遠隔医療学会理事(～現在)
- 8) 日本遠隔医療学会運営委員(～現在)
- 9) 日本遠隔医療学会雑誌編集委員(～現在)
- 10) 日本病院総合診療医学会評議員(～現在)
- 11) 日本内分泌学会専門医認定部会内科試験小委員会委員(糖尿病領域)(～現在)
- 12) 岐阜県内科医会評議員(～現在)
- 13) 日本プライマリ・ケア連合学会代議員(～現在)

梶田和男：

- 1) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本内分泌学会評議員(～現在)
- 3) 日本病態栄養学会評議員(～現在)
- 4) 日本病院総合診療医学会評議員(～現在)
- 5) 日本糖尿病学会学術評議員(～現在)

2) 学会開催

石塚達夫：

- 1) 第 216 回日本内科学会東海地方会併催第 14 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 24 年 2 月, 名古屋)
- 2) 第 217 回日本内科学会東海地方会併催第 15 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 24 年 6 月, 浜松)
- 3) 第 218 回日本内科学会東海地方会併催第 16 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 24 年 10 月, 名古屋)
- 4) 第 6 回日本病院総合診療医学会学術総会(平成 25 年 3 月, 岐阜)
- 5) 第 220 回日本内科学会東海地方会併催第 17 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 25 年 6 月, 名古屋)
- 6) 第 221 回日本内科学会東海地方会併催第 18 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 25 年 10 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

石塚達夫：

- 1) 日本糖尿病学会「治療の手びき」編集委員長(～現在)
- 2) 日本糖尿病学会糖尿病用語集編集委員会委員長(～現在)
- 3) 日本遠隔医療学会雑誌編集委員長(～現在)
- 4) 日本病院総合診療医学会雑誌編集委員(～現在)

森田浩之：

- 1) 日本遠隔医療学会雑誌；編集委員(～現在)

森 一郎：

- 1) 日本遠隔医療学会雑誌；編集委員(～平成 24 年 3 月)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

石塚達夫 :

- 1) 第 216 回日本内科学会東海地方会併催第 14 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 24 年 2 月, 名古屋, 「生活習慣病への治療戦略」座長)
- 2) 第 46 回糖尿病学の進歩(平成 24 年 3 月, 盛岡, 「糖尿病治療に必要な知識(1) 内分泌疾患と糖尿病」座長)
- 3) 第 5 回日本病院総合診療医学会学術集会(平成 24 年 9 月, 横浜, ランチョンセミナー「プライマリケアでの膝・肩の診方」座長)
- 4) 9th International Diabetes Federation Western Pacific Region Congress, 4th Scientific Meeting of the Asian Association for the Asian Association for the Study of Diabetes(2012.11, Kyoto, Poster Presentations; Genetics Chair)
- 5) 第 47 回糖尿病学の進歩(平成 25 年 2 月, 四日市, 「糖尿病治療に必要な知識 ステロイド糖尿病の治療」演者)
- 6) 第 6 回日本病院総合診療医学会学術総会(平成 25 年 3 月, 岐阜, 会長講演「病院総合医の未来へのメッセージ」演者)
- 7) 第 6 回日本病院総合診療医学会学術総会(平成 25 年 3 月, 岐阜, 特別講演「イブニングセミナー糖尿病治療のパラダイムシフト ~DPP-4 阻害薬によせる期待~」座長)
- 8) 第 6 回日本病院総合診療医学会学術総会(平成 25 年 3 月, 岐阜, シンポジウム「病院総合診療医の現状と未来」座長)
- 9) 第 56 回日本糖尿病学会年次学術集会(平成 25 年 5 月, 熊本, 教育講演「糖尿病関連の臨床指標」座長)
- 10) 第 220 回日本内科学会東海地方会併催第 17 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 25 年 6 月, 名古屋, 「腫瘍と内科疾患」座長)
- 11) 第 7 回日本病院総合診療医学会学術総会(平成 25 年 8 月, 広島, リレーレクチャー1・2・3 座長)
- 12) 第 221 回日本内科学会東海地方会併催第 18 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 25 年 10 月, 岐阜, 「炎症性疾患」座長)
- 13) 第 8 回日本病院総合診療医学会学術総会(平成 26 年 2 月, 大阪, ランチョンセミナー「認知症の包括的管理と糖尿病治療」座長)

森田浩之 :

- 1) 9th International Diabetes Federation Western Pacific Region Congress, 4th Scientific Meeting of the Asian Association for the Asian Association for the Study of Diabetes(2012.11, Kyoto, Poster Presentations, Anti-diabetic Therapy - GLP - 1R Agonists I; Chair)
- 2) 第 6 回日本病院総合診療医学会学術総会(平成 25 年 3 月, 岐阜, シンポジウム「不明熱への挑戦」座長)
- 3) 第 221 回日本内科学会東海地方会併催第 18 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 25 年 10 月, 岐阜, 「自己炎症症候群」演者)
- 4) 第 8 回日本病院総合診療医学会学術総会(平成 26 年 2 月, 大阪, ランチョンセミナー「肥満 2 型糖尿病の臨床像~地域での血管合併症予防を目指して~」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 老田実可子 : 第 222 回日本内科学会東海地方会優秀演題賞(平成 25 年度)
- 2) 浅野元尋 : 第 223 回日本内科学会東海地方会優秀演題賞(平成 26 年度)
- 3) 宇野美香 : 第 224 回日本内科学会東海地方会優秀演題賞(平成 26 年度)

9. 社会活動

石塚達夫 :

- 1) 岐阜県糖尿病対策推進協議会副会長(~現在)
- 2) 岐阜県医師会糖尿病対策委員会委員(~現在)
- 3) 社団法人日本専門医制評価・認定機構研修施設委員会東海・北陸地区責任者(~平成 25 年 10 月)

10. 報告書

- 1) 主任研究者 : 酒巻哲夫, 分担研究者 : 辻 正次, 岡田宏基, 森田浩之, 柏木賢治, 郡 隆之, 斎藤 勇一郎 : 厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業) 遠隔医療技術活用に関する諸

外国と我が国の実態の比較調査研究(H22-医療-指定-043)平成22年度-23年度総合報告書(平成24年3月)

- 2) 酒巻哲夫, 岡田宏基, 森田浩之, 郡 隆之, 斎藤勇一郎, 石塚達夫, 辻 正次, 小笠原文雄, 太田隆正: 厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業) 在宅医療での ICT 及び遠隔診療活用に関する調査研究(H24-医療-指定-048)平成24年度総括研究報告書(平成25年3月)
- 3) 酒巻哲夫, 本多正幸, 中島直樹, 岡田宏基, 石塚達夫, 森田浩之, 辻 正次, 吉田晃敏, 斎藤勇一郎, 大熊由紀子, 郡 隆之, 煎本正博, 土橋康成, 小笠原敏浩, 小笠原文雄, 太田隆正, 松井英男: 厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業) 遠隔医療の更なる普及・拡大方策の研究(H25-医療-指定-009)平成25年度総括研究報告書(平成26年3月)

11. 報道

- 1) 石塚達夫: 第311回医科研究会報告(4.7, 岐阜会館)リウマチ診療の新たな展開: 岐阜県保険医新聞, 412(2012年6月10日)
- 2) 石塚達夫: 患者の診断テーマ 大学院教授が講演 岐阜で「清談会」 患者の診断テーマ: 中日新聞(岐阜県版14面)(2012年6月18日)
- 3) 石塚達夫: 先生こんにちは〜: KNG 385(2012年8月20日)

12. 自己評価

評価

2014年3月で総合診療部開設15年となり, 総合病態内科学分野となつてからでも11年となる。医局員も少しずつ増え, 総合内科として特色のある基礎研究(脂肪細胞関連), 臨床研究(不明熱, 糖尿病, 膠原病関連)などを行っている。国際学会, 国内学会で多数発表し, 大学院生の学位論文もほぼ毎年だしている。しかし, 外部資金の獲得や研究などの報道はまだ少ない。

現状の問題点及びその対応策

医局員は少しずつ増えているものの, 研究立案, 研究費申請, データ収集・解析, 論文記載など, 研究に費やす時間がかかり不足しているのが現状である。研究や論文作成する医局員を増やすために, 学生により実践的に病棟外来実習を行い, 研修医の指導にも力をいれ, 総合内科の魅力を伝えていきたいと考えている。地域医療についての学会発表や論文作成を行い, 社会的な認知度をあげたい。

今後の展望

総合内科では高い診断能力を持ち, 一人の患者の複数の疾患に同時に対応ができるスキルを持った総合内科医の養成に全力を尽くしたい。ひとつには, 総合内科専門医であり, 特定の臓器のみにとらわれずに総合的に内科疾患を診療できる医師を目指します。その後, 他のサブスペシャリティ取得のためのキャリアを積み, 内科の総合的診療を実践します。二つ目は, 新専門医制度による新しい専門医として総合診療専門医ができるため, 当科でも日本プライマリ・ケア連合学会認定の家庭医療後期研修プログラム(ver.2.0)を開始し, 専門医育成に努めていきます。研究では, これまでの基礎研究にとどまらず, 免疫分野などの新たな分野の研究や, 臨床研究でも当分野で多くなっている自己免疫疾患の研究を行っていききたい。

(3) 臨床薬剤学分野

1. 研究の概要

臨床薬剤学分野における研究項目は、1) 医薬品等の定量法の確立に関する研究、2) 薬物体内動態の解析に基づく医薬品適正使用推進に関する研究、3) 医薬品の新規剤型の開発とその臨床応用に関する研究、4) 医療情報システムを活用した医療安全確保に関する研究、5) 抗がん剤による副作用対策の確立に関する研究、6) 既存の医薬品から新規の作用を発見し、医薬品開発に繋げる drug re-profiling 研究などである。医薬品等の定量に関する研究では、高速液体クロマトグラフィー (HPLC) と蛍光検出器、電気化学検出器、紫外吸光度計、エレクトロスプレー・タンデムマスマスペクトロメトリーやガスクロマトグラフィーなどの測定機器を駆使することにより、アセトアミノフェンやベンゾジアゼピンなどの中毒患者での定性ならびに血中濃度測定のみならず、生体内スフィンゴリン脂質の定量に活用している。また、薬物体内動態の解析に基づく医薬品適正使用推進に関する研究では、抗 MRSA 薬のバンコマイシンやテイコプラニンの初期投与設計に関する研究、救急領域における重症患者での腎機能の指標としてシスタチン C を用いた糸球体過剰の推測式から抗菌薬の TDM (投与量や投与法の決定) の確立などの研究を行っている。新規剤型の開発に関する研究では、岐阜県内の企業ツキオカフィルム製薬株式会社との共同研究で制吐剤のデキサメタゾンやプロクロルペラジンを含む超薄型口腔内速溶解フィルム製剤を開発し、これのがん化学療法時における悪心・嘔吐予防薬として適用するための基礎ならびに臨床研究を進めている。一方、医療情報システムを活用した医療安全確保に関する研究では、コンピュータを内蔵した抗がん剤注射薬の混合調製のための安全キャビネットを世界で初めて開発し、抗がん剤の取り間違いや投与量間違いによる医療過誤の防止に役立っている。また、抗がん剤による副作用対策に関する研究では、悪心や嘔吐、末梢神経障害、皮膚障害、腎障害、口内などの予防に有効な薬剤の探索と評価を行っており、特に、放射線療法や大量の抗がん剤治療による口内炎に対して亜鉛含有化合物であるポラプレジックが優れた予防効果を発揮することを見出し、これについては新規剤型の開発に関する研究としてトローチ剤などの口腔内に適用できる剤型の開発に取り組み、さらには drug re-profiling 研究としても取り組んでいる。

2. 名簿

教授： 伊藤善規 Yoshinori Itoh

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 伊藤善規, 岡安伸二(分担執筆). モデル・コアカリキュラムに沿ったわかりやすい病院実務実習テキスト第2版, 東京: じほう; 2012年.
- 2) 伊藤善規(分担執筆). 2012年版 実習に行く前の覚える医薬品集-服薬指導に役立つ-, 東京: 廣川書店; 2012年.
- 3) 飯原大稔, 石原正志, 伊藤善規(分担執筆). 大石了三, 池末裕明, 伊藤善規編集. がん化学療法ワークシート第4版, じほう; 2012年.
- 4) 伊藤善規, 飯原大稔(分担執筆). 石岡千加史, 井上忠夫編集. エビデンスに基づいたがん薬物療法エキスパートマニュアル(第1版), 総合医学社; 2012年.
- 5) 飯原大稔(分担執筆). 青山 剛, 東 加奈子, 川上和宣, 宮田広樹編集. がん化学療法レジメン管理マニュアル(第1版), 医学書院; 2012年.
- 6) 飯原大稔. 標準制吐対策でコントロール不良も非定型抗精神病薬が奏功した症例: 月刊薬事, じほう; 2012年.
- 7) 高橋孝夫, 吉田和弘, 飯原大稔, 高橋 繭. 消化器がん化学療法主要レジメン理解&看護ポイント FOLFIRI±BV および FOLFOX±BV: 消化器外科 NURSING, MC メディカ出版; 2012.
- 8) 伊藤善規, 安田浩二(分担執筆). 実習に行く前の覚える医薬品集-服薬指導に役立つ-2013年版, 廣川書店.
- 9) 飯原大稔, 伊藤善規. プロトコルに基づく薬物治療管理の実践例 がん患者: 薬局, 南山堂; 2014年; 65巻: 2227-2235
- 10) 伊藤善規, 安田浩二(分担執筆). 実習に行く前の覚える医薬品集-服薬指導に役立つ-2014年版, 廣川書店.
- 11) 高橋孝夫, 松橋延壽, 吉田和弘, 飯原大稔, 藤井宏典, 伊藤善規, 高橋 繭, 安藤真由美. 外来化学療法におけるチーム医療-大腸癌治療を中心に-: 消化器外科, へるす出版; 2014年; 37巻: 305-313.
- 12) 丹羽 隆, 伊藤善規(分担執筆). 学ぶ, 取り組む, 実践する! AST(抗菌薬適正使用支援チーム, 東京: 医薬ジャーナル社; 2014年: 119-126,
- 13) 岡安伸二, 小森善文, 伊藤善規(分担執筆). 抗がん薬調製業務/散薬調剤業務におけるバーコードの活用: 月刊薬事 2014年9月臨時増刊号 医療用医薬品のバーコード活用マニュアル, じほう; 2014年: 73-77.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 伊藤善規. 業務に基づく研究の推進による薬剤師の責任と権限の拡大を, ぎふ病葉 2012年; 54巻: 3-11.
- 2) 高橋孝夫, 吉田和弘, 飯原大稔, 伊藤善規. 大腸癌に対するチーム医療で行う外来化学療法-術後補助化学療法を中心に-, 外来癌化学療法 2013年; 4巻: 31-37.
- 3) 丹羽 隆. 抗菌薬適正使用推進プログラム(Antimicrobial Stewardship)の完全実施体制の確立とアウトカム評価, 医療薬学 2013年; 39巻: 125-133.
- 4) 岡安伸二. くすりの効果における「困った」を解決 ビグアナイド薬、チアゾリジン薬、DPP-4 阻害薬, 糖尿病ケア 2013年; 6巻: 534-547.
- 5) 岡安伸二, 堀 聡納, 北市清幸, 諏訪哲也, 堀川幸男, 山本眞由美, 武田 純, 伊藤善規. メトホルミン塩酸塩による下痢発現のリスク要因の解析と下痢予防のための対策立案, 医薬ジャーナル 2013年; 49巻: 1533-1540.
- 6) 丹羽 隆, 伊藤善規. 特集 Infection Control Tips「抗菌薬の適正使用」Tips-①Antimicrobial stewardshipの考え方, 薬局 2013年; 64巻: 2495-2499.
- 7) 安田 満, 丹羽 隆. 特集 2 切り取って使える保存版泌尿器科薬剤ノート①排尿障害・結石・感染の薬 4. 性感染症に用いられる薬, 泌尿器ケア 2013年; 18巻: 968-972.
- 8) 飯原大稔, 鈴木昭夫, 伊藤善規. 1. 抗がん剤投与時の制吐対策, 医薬ジャーナル 2014年; 50巻: 73-80.
- 9) 山田摩耶, 石原正志, 飯原大稔, 伊藤善規. 外来化学療法室における薬剤師の関わりと取り組み, 医薬ジャーナル 2014年; 50巻: 1436-1441.
- 10) 丹羽 隆, 伊藤善規. 病院薬剤師と感染制御, 特集: チーム医療における病院薬剤師の役割, 病院 2014年; 73巻: 770-773.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 丹羽 隆, 篠田康孝, 鈴木昭夫, 大森智史, 太田浩敏, 深尾亜由美, 安田 満, 北市清幸, 松浦克彦, 杉山 正, 村上啓雄, 伊藤善規. Infection Control Team による全入院患者を対象とした注射用抗菌薬適正使用推進実施体制の確立とアウトカム評価, 医療薬学 2012年; 38巻: 273-281.
- 2) 村上啓雄, 深尾亜由美, 丹羽 隆, 太田浩敏, 伊藤善規. 大学病院での取り組み. 適切なチーム医療活動と各職種メンバーの役割-岐阜大学医学部附属病院 ICT における抗菌薬適正使用の取り組み-Antimicrobial Stewardship, 月刊地域医学 2012年; 26巻: 316-321.
- 3) 吉見千明, 山田摩耶, 藤井宏典, 西垣美奈子, 飯原大稔, 北市清幸, 高橋 繭, 倉橋小代子, 高橋孝夫, 吉田和弘, 伊藤善規. 外来がん化学療法室でのチーム医療における薬剤師の役割: 診察前患者面談の有性評価, 癌と化学療法 2013年; 40巻: 349-354.
- 4) 小川裕美, 安田浩二, 兼松哲史, 高井 満, 伊藤善規. フェンタニルパッチの採用と医療過誤対策についての調査, 日本病院薬剤師会雑誌 2013年; 49巻: 971-974.
- 5) 林 寛子, 丹羽 隆, 竹市朱里, 今西義紀, 外海友規, 岡安伸二, 北市清幸, 安田公夫, 村上啓雄, 伊藤善規. 夜勤時におけるバンコマイシン初期投与設計体制の確立とその成果, 医療薬学 2014年; 40巻: 85-93.
- 6) 川上和宜, 吉村知哲, 日置三紀, 組橋由記, 林 稔展, 飯原大稔, 黒田純子, 緒方憲太郎, 米村雅人, 岩本卓也, 松尾宏一. がん診療連携拠点病院を対象とした外来化学療法における薬剤師の業務展開に関する調査結果, 日本病院薬剤師会雑誌 2014年; 50巻: 305-311.
- 7) 丹羽 隆, 外海友規, 鈴木景子, 渡邊珠代, 土屋麻由美, 太田浩敏, 村上啓雄. Defined daily dose (DDD) と Days of therapy (DOT)を用いた抗菌薬使用量の評価, 日本環境感染学会誌 2014年; 29巻: 333-339.
- 8) 石原正志, 池末裕明, 千堂年昭, 荒木博陽, 伊藤善規. オピオイド鎮痛薬による消化管系副作用対策に関する多施設共同研究(J-RIGID study)のサブ解析-各県における緩下剤処方状況と評価, 日本病院薬剤師会雑誌 2014年; 50巻: 1117-1121.

原著 (欧文)

- 1) Ishihara M, Ikeshue H, Matsunaga H, Suemaru K, Kitaichi K, Suetsugu K, Oishi R, Sendo T, Araki H, Itoh Y. The Japanese Study Group for the Relief of Opioid-Induced Gastrointestinal Dysfunction (J-RIGID). A multi-institutional study analyzing effect of prophylactic medication for prevention of opioid-induced gastrointestinal dysfunction. Clin J Pain. 2012;28:373-381. IF 2.703
- 2) Nishigaki M, Kawahara K, Nawa M, Futamura M, Nishimura M, Matsuura K, Kitaichi K, Kawaguchi Y, Tsukioka T, Yoshida K, Itoh Y. Development of fast dissolving oral film containing dexamethasone as an antiemetic medication clinical usefulness. Int J Pharmac. 2012;424:12-17. IF 3.785
- 3) Okayasu S, Kitaichi K, Hori A, Suwa T, Horikawa Y, Yamamoto M, Takeda J, Itoh Y. The evaluation of risk factors associated with adverse drug reactions by metformin in type 2 diabetes mellitus. Biol

- Pharm Bull. 2012;36:933-937. IF 1.778
- 4) Iihara H, Matsuura K, Ishihara M, Takahashi T, Kawaguchi Y, Yoshida K, Itoh Y. Pharmacists contribute to the improved efficiency of medical practices in the outpatient cancer chemotherapy clinic. *J Eval Clin Pract.* 2012;18:753-760. IF 1.580
 - 5) Niwa T, Shinoda Y, Suzuki A, Ohmori T, Yasuda M, Ohta H, Fukao A, Kitaichi K, Matsuura K, Sugiyama T, Murakami N, Itoh Y. Outcome measurement of extensive implementation of antimicrobial stewardship in patients receiving intravenous antibiotics in a Japanese university hospital. *Int J Clin Pract.* 2012;66:999-1008. IF 2.538
 - 6) Endo J, Iihara H, Yamada M, Yanase K, Kamiya F, Ito F, Funaguchi N, Ohno Y, Minatoguchi S, Itoh Y. A randomized controlled noninferiority study comparing antiemetic effect between intravenous granisetron and oral azasetron based on estimated 5-HT₃ receptor occupancy. *Anticancer Res.* 2012;32:3939-3948. IF 1.872
 - 7) Aoki S, Iihara H, Nishigaki M, Imanishi Y, Yamauchi K, Ishihara M, Kitaichi K, Itoh Y. Difference in the emetic control among highly emetogenic chemotherapy regimens: implementation for appropriate use of aprepitant. *Mol Clin Oncol.* 2013;1:41-46.
 - 8) Okamoto R, Itoh Y, Murata U, Kobayashi D, Hosoi M, Mine K. Reduction of group II metabotropic glutamate receptors during development of benzodiazepine dependence. *Pharmacology.* 2013;91:145-152. IF 1.581
 - 9) Fujii H, Iihara H, Ishihara M, Takahashi T, Yoshida K, Itoh Y. Improvement of adherence to guidelines for antiemetic medication enhances emetic control in patients with colorectal cancer receiving chemotherapy of moderate emetic risk. *Anticancer Res.* 2013;33:5549-5556. IF 1.872
 - 10) Niwa T, Watanabe T, Suzuki A, Ohmori T, Tsuchiya M, Suzuki T, Ohta H, Murakami N, Itoh Y. Reduction of linezolid-associated thrombocytopenia by the dose adjustment based on the risk factors such as basal platelet count and body weight. *Diagn Micr Infec Dis.* 2014;79:93-97. IF 2.568
 - 11) Hayashi H, Kobayashi R, Suzuki A, Ishihara M, Nakamura N, Kitagawa J, Kanemura N, Kasahara S, Kitaichi K, Hara T, Tsurumi H, Moriwaki H, Itoh Y. Polaprezinc prevents oral mucositis in patients treated with high-dose chemotherapy followed by hematopoietic stem cell transplantation. *Anticancer Res.* 2014;34:7271-7277. IF 1.872
 - 12) Suzuki A, Kobayashi R, Okayasu S, Kuze B, Aoki M, Mizuta K, Itoh Y. Pharmacotherapy for adverse events reduces the length of hospital stay in patients admitted to otolaryngology ward: a single arm intervention study. *PLoS One* 2014;9:e115879. doi: 10.1371/journal.pone.0115879. eCollection 2014. IF 3.534

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：伊藤善規；科学研究補助金基盤研究(C) (課題番号：25460208)：がん化学療法における口内炎の予防薬としてのポラプレジンク製剤の開発に関する研究；平成 25-27 年度；4,680 千円 (2,730：1,170：780 千円)
- 2) 研究代表者：石原正志；科学研究費奨励研究(平成 25 年度：25929003)：造血幹細胞移植前処置による口内炎に対するポラプレジンクの予防効果に関する研究；500 千円
- 3) 研究代表者：今西義紀；科学研究費奨励研究(平成 25 年度：25929005)：シスプラチンによる腎障害マーカーとしてのシスタチン C の有用性の検討；500 千円
- 4) 研究代表者：鈴木昭夫；科学研究費奨励研究(平成 25 年度：25929013)：シスプラチン投与時の腎障害の発現に及ぼす要因の解析とその予防対策の確立；500 千円
- 5) 研究代表者：石原正志；科学研究費奨励研究(平成 26 年度：26929004)：抗がん剤による悪心・食欲不振に対する抗精神病薬の有効性に関する研究；500 千円
- 6) 研究代表者：飯原大稔；科学研究費奨励研究(平成 26 年度：26929001)：化学放射線療法による食道炎に対するポラプレジンクの予防効果に関する研究；500 千円
- 7) 研究代表者：丹羽 隆；科学研究費奨励研究(平成 26 年度：26929022)：感染対策チームによる抗 MRSA 薬の使用に対する介入効果の検討；500 千円

2) 受託研究

- 1) 伊藤善規：薬剤含有フィルム製剤の開発に関する研究；平成 24 年度；800 千円；ツキオカ(株)
- 2) 伊藤善規：薬剤含有フィルム製剤の開発に関する研究；平成 25 年度；800 千円；ツキオカ(株)

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

伊藤善規：

- 1) 日本薬理学会評議員(～現在)
- 2) 日本医療薬学会評議員(～現在)
- 3) 日本病院薬剤師会理事(～平成 24 年)
- 4) 日本薬学会東海支部会幹事(～現在)
- 5) 日本緩和医療薬学会評議員(平成 24 年～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

伊藤善規：

- 1) 日本薬学会第 132 年会(平成 24 年 3 月, 札幌, シンポジウム「口腔内速溶解フィルムに潜在する製剤開発のシーズ. [次世代型経口製剤に求められる臨床機能性]」シンポジスト)
- 2) 実践的医療薬学教育開発シンポジウム(平成 24 年 5 月, 千葉, 招待講演「臨床現場で遭遇するテーマをどのように研究として取り上げ、エビデンスとしていくか」演者)
- 3) 第 17 回日本緩和医療学会学術大会(平成 24 年 6 月, 神戸, イブニングセミナー「抗がん剤およびオピオイド鎮痛薬使用時の副作用対策～制吐対策・便秘対策を中心に～」演者)
- 4) 医療薬学フォーラム 2012. 第 20 回クリニカルファーマシーシンポジウム(平成 24 年 7 月, 福岡, シンポジウム「医療連携による薬学的エビデンス構築のための臨床研究：医療現場での臨床研究の進め方ー薬学的エビデンス構築に向けてー」演者)
- 5) 岡山県病院薬剤師会北地区学術講演会(平成 25 年 1 月, 津山, 特別講演「がん化学療法に薬剤師は如何に関わるべきか?～最近の悩み～」演者)
- 6) 医薬品の副作用対策研究会(平成 25 年 3 月, 福岡, 招待講演「オピオイド鎮痛薬による消化管症状の予防対策に関する多施設共同研究(J-RIGID study)」演者)
- 7) 第 40 回三重県病院薬剤師会生涯研修講演会(平成 25 年 3 月, 津, 特別講演「抗がん剤治療の薬剤師外来」演者)
- 8) 第 18 回長崎クリニカルファーマシー研究会(平成 25 年 3 月, 長崎, 特別講演「今後の病院薬剤師業務～薬剤業務に基づく研究のすすめ～」演者)
- 9) 第 40 回日本毒性学会学術年会(平成 25 年 6 月, 千葉, シンポジウム「抗がん剤の副作用対策の進歩：抗がん剤による悪心・嘔吐」演者)
- 10) 第 35 回秋田県臨床薬学研究会(平成 25 年 7 月, 秋田, 特別講演「薬剤業務に基づく研究のアウトカム評価の重要性」演者)
- 11) 滋賀県病院薬剤師会総会講演会(平成 26 年 4 月, 守山, 特別講演「病院薬剤業務のアウトプット～医療の質と経営への貢献～」演者)
- 12) 日本薬剤師会主催平成 26 年度病院診療所薬剤師研修会(平成 26 年 6 月, 福岡, 教育講演「病棟薬剤業務のアウトカム」演者)
- 13) 日本薬剤師会主催平成 26 年度病院診療所薬剤師研修会(平成 26 年 7 月, 広島, 教育講演「病棟薬剤業務のアウトカム」演者)
- 14) 日本薬剤師会主催平成 26 年度病院診療所薬剤師研修会(平成 26 年 10 月, 東京, 教育講演「病棟薬剤業務のアウトカム」演者)
- 15) 日本薬剤師会主催平成 26 年度病院診療所薬剤師研修会(平成 26 年 11 月, 大阪, 教育講演「病棟薬剤業務のアウトカム」演者)
- 16) 病院・大学・薬局薬剤師のための臨床研究セミナー2014(平成 26 年 11 月, 東京, 教育講演「病棟薬剤業務の展開とアウトカム評価に関する多施設共同研究実施の提案」演者)

- 17) 第13回香川県癌治療薬剤業務研究会(平成26年11月,高松,特別講演「がん化学療法における薬剤業務について」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

伊藤善規:

- 1) 岐阜県病院薬剤師会会長(～現在)
- 2) 岐阜県薬剤師会副会長(～現在)
- 3) 岐阜県糖尿病対策推進委員(～現在)
- 4) 日本病院薬剤師会理事・薬剤業務委員(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 「薬薬連携から医薬薬連携へ」クレデンシャル 2012年;4月号43巻:12-13
- 2) 「医療の扉」取材. 外来化学療法におけるチーム医療(岐阜大学医学部附属病院):BS日テレ(平成24年4月22日)
- 3) 対談:「受容体占有理論に基づく制吐薬の選択・評価」. メディカルレビュー社(平成24年4月3日)
- 4) 「専門知識と経験を持った薬剤師が積極的に処方提案し、チーム医療に貢献」Farma Chugai 2012年;9巻:6-9
- 5) 対談:「これからの病棟業務はいかにあるべきか」:ファーマスコープ. 田辺三菱(平成25年)
- 6) 「ムダの“見える化”で医療の質を上げろ」クローズアップ現代. No. 3410(平成25年10月2日)
- 7) 論壇「病棟薬剤業務にどう取り組むべきか」:薬事新報. No. 2818(平成26年1月1日号)
- 8) 「つなごう医療」岐阜大病院の外来抗がん剤治療:薬剤師が「診察前面談」:中日新聞(平成26年3月25日)
- 9) Big data の活用「病棟薬剤業務、感染対策」:日経BP社(平成26年5月12日)
- 10) 「新薬の上市相次ぐ抗がん剤:副作用対策は治療の一環」:医薬ジャーナル2014年;50巻:106-165
- 11) 再生医療を題材にした小説執筆およびドラマ化するための病院薬剤師業務に関する情報収集のための取材,瀬名秀明(SF作家),篠原圭(NHK制作局・ドラマ番組部チーフプロデューサー),砂原謙亮(NHK出版編集部)(平成26年5月20日)
- 12) 「病棟における薬剤師業務のアウトカム評価」:キッセイ薬品 KISSEI KUR(平成26年11月7日)
- 13) 岐阜大学病院外来化学療法室における患者面談、お薬手帳を介した病院薬剤師と開局薬剤師の連携について:じほう社(平成26年11月13日)

12. 自己評価

評価

研究については病院薬剤部職員(技術職員)が主体となって取り組んでいる。原著論文数は多くはないが、薬剤業務において医療の質向上への貢献を目指して取り組んだものであり、ほとんどが臨床研究である。競争的研究資金の確保については、最近では科学研究費の基盤研究および技術職員の奨励研究が継続的に確保できている状況である。以上のことから、研究面では一定の成果を上げられたと評価する。

現状の問題点及びその対応策

教授以外に教員がないため、研究ならびに教育については必ずしも十分とは言えない。しかし、薬剤師5名を医学部非常勤講師兼任とし、医学生教育にも取り組んでいる。

今後の展望

研究面では臨床研究を主体に推進することを考えており、他部門(診療科,岐阜薬科大学,他大学)との連携を強化しており、今後は業績に繋げる予定である。医学生教育への関与に比重を置く予定である。

(4) 医療経済学分野

1. 研究の概要

行動科学及び経済学等社会科学の手法に基づく医療評価研究や患者行動、医師・患者関係に関する研究をおこなっている。

1)患者の行動医学研究

がん患者の治療や薬剤に対する患者の意思決定やそれに及ぼす要因の分析を行っている。

2)医療における生産性及び効率性に関する研究

医療における生産性指標及び効率性指標の算出を行い、その影響要因を明らかにするとともに、医療のパフォーマンス指標への応用を研究している。特に、急性期病院に求められる在院日数の短縮化と医療における質を反映できるパフォーマンス指標の開発を目標としている。

3)HPV ワクチン、遺伝子診断の需要分析研究

HPV ワクチン、各種遺伝子診断について、その需要に影響する要因について研究している。

2. 名簿

教授： 永田知里 Chisato Nagata
非常勤講師： 高塚直能 Naoyoshi Takatsuka

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）
なし

総説（和文）
なし

総説（欧文）
なし

原著（和文）
なし

原著（欧文）

- 1) Sawada A, Yamamoto T, Takatsuka N. Randomized crossover study of latanoprost and travoprost in eyes with open-angle glaucoma. *Graefes Arch Clin Exp Ophthalmol.* 2012;250:123-129. IF 2.333
- 2) Matsumoto K, Maeda H, Oki A, Takatsuka N, Yasugi T, Furuta R, Hirata R, Mitsuhashi A, Fujii T, Hirai Y, Iwasaka T, Yaegashi N, Watanabe Y, Nagai Y, Kitagawa T, Yoshikawa H; for Japan HPV And Cervical Cancer (JHACC) Study Group. HLA class II DRB1*1302 allele protects against progression to cervical intraepithelial neoplasia grade 3: a multicenter prospective cohort study. *Int J Gynecol Cancer.* 2012;22:471-478. IF 1.949
- 3) Matsumoto K, Hirai Y, Furuta R, Takatsuka N, Oki A, Yasugi T, Maeda H, Mitsuhashi A, Fujii T, Kawana K, Iwasaka T, Yaegashi N, Watanabe Y, Nagai Y, Kitagawa T, Yoshikawa H; Japan HPV and Cervical Cancer (JHACC) Study Group. Subsequent risks for cervical precancer and cancer in women with low-grade squamous intraepithelial lesions unconfirmed by colposcopy-directed biopsy: results from a multicenter, prospective, cohort study. *Int J Clin Oncol.* 2012;17:233-239. IF 2.170
- 4) Ochi H, Matsumoto K, Kondo K, Oki A, Furuta R, Hirai Y, Yasugi T, Takatsuka N, Maeda H, Mitsuhashi A, Fujii T, Kawana K, Iwasaka T, Yaegashi N, Watanabe Y, Nagai Y, Kitagawa T, Kanda T, Yoshikawa H; Japan HPV And Cervical Cancer (JHACC) Study Group. Do neutralizing antibody responses generated by human papillomavirus infections favor a better outcome of low-grade cervical lesions? *J Med Virol.* 2012;84:1128-1134. IF 2.217
- 5) Fujii T, Takatsuka N, Nagata C, Matsumoto K, Oki A, Furuta R, Maeda H, Yasugi T, Kawana K, Mitsuhashi A, Hirai Y, Iwasaka T, Yaegashi N, Watanabe Y, Nagai Y, Kitagawa T, Yoshikawa H. Association between carotenoids and outcome of cervical intraepithelial neoplasia: a prospective cohort study. *Int J Clin Oncol.* 2013;18:1091-1101. IF 2.170

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：高塚直能，研究分担者：長瀬 清；科学研究費補助金基盤研究(C)：乳がん手術待機期間からみた医療資源適正配分に関する研究；平成 22-24 年度；3,500 千円(1,500：500：1,500 千円)
- 2) 研究代表者：井上真奈美，研究分担者：永田知里；国立がん研究センター研究開発費：わが国において優先すべき予防介入試験のあり方やその実現に必要な体制整備に関する提言；平成 25-26 年度；2,400 千円(1,200：1,200 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

永田知里：
疫学・予防医学分野参照

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

高塚直能：

- 1) 岐阜県保険者協議会(医療費分析相談)(～平成 25 年度)
- 2) 岐阜県国保連合会生活習慣病予防対策検討委員会アドバイザー(～平成 25 年度)
- 3) 岐阜県後期高齢者医療広域連合運営懇話会委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 研究代表者：井上真奈美，研究分担者：永田知里；国立がん研究センター研究開発費：わが国において優先すべき予防介入試験のあり方やその実現に必要な体制整備に関する提言(平成 25-26 年度)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

論文数が少ない。

現状の問題点及びその対応策

論文文化を迅速に進める。共同研究の形も模索する。

今後の展望

小規模であるが応用性の高い研究や方法論に関わる研究などを行い，独自色ある成果を求めていく。
薬剤疫学の分野も包括する。

(5) 救急・災害医学分野

1. 研究の概要

外的侵襲制御について基礎研究，臨床研究を通じて，国際的に通用する自立した研究者を育成することを目的とする。具体的なテーマとしては，外傷，ショック，(含む敗血症)，高気圧酸素治療，救急搬送，救急医療情報などについての臨床専門分野における診断，治療に関するものや，救急医学領域における外傷，敗血症などの外的侵襲のモデルを作成して基礎的な知見を得る。

2. 名簿

教授：	小倉真治	Shinji Ogura
准教授：	豊田 泉	Izumi Toyoda
講師：	牛越博昭	Hiroaki Ushikoshi
講師：	熊田恵介	Keisuke Kumada
助教：	吉田省造	Shouzo Yoshida
助教：	中野通代	Michiyo Nakano
助教：	吉田隆浩	Takahiro Yoshida
助教：	副田明男	Akio Soeda
助教：	長屋聡一郎	Soichiro Nagaya
助教：	岡田英志	Hideshi Okada
助教：	加藤久晶	Hisaaki Katou
助教：	名知 祥	Sho Nachi
助教：	橋本孝治	Kouji Hashimoto
助教：	神田倫秀	Norihide Kanda
助教：	中野志保	Shiho Nakano
助教：	山田法顕	Noriaki Yamada
助教：	川口智則	Tomonori Kawaguchi
医員：	華井竜徳	Tatsunori Hanai
医員：	田中 卓	Taku Tanaka
医員：	館 正仁	Masahito Tachi
医員：	東 賢志	Kenshi Higashi
医員：	池庄司遥	Haruka Ikeshouji
医員：	鈴木浩大	Koudai Suzuki
医員：	吉田明弘	Akihiro Yosida
医員：	小牧久晃	Hisaaki Komaki
医員：	坂林雄飛	Yuuhi Sakabayashi
医員：	北川雄一郎	Yuichirou Kitagawa
医員：	安田 立	Ryu Yasuda
医員：	福田哲也	Tetsuya Hukuta
医員：	水野洋佑	Yousuke Mizuno

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 土井智章. マネジメントの視点から災害対応を考える：病院，東京：医学書院；2012年：73-83.
- 2) 小倉真治. 損傷：救急救命士標準テキスト，東京：へるす出版；2012年：163-170.
- 3) 土井智章. バイオテロ被災者の急性期ケアの指針：救急・集中治療 最新ガイドライン 2012-13，東京：総合医学社；2012年：348-351.
- 4) 神原 淳，山田和憲，名知 祥，豊田 泉，小倉真治. 脳卒中に疑似した食中毒傷病者の搬送事例：プレホスピタル・ケア東京，東京法令出版；2012年：50-51.
- 5) 熊田恵介，小倉真治. 救急医療と IT：救急・集中治療医学レビュー2012-13，東京：総合医学社；2012年：32-35.
- 6) 小倉真治，豊田 泉，熊田恵介，土井智章. 平時の救急医療から災害復興まで使える情報システム「GEMITS」(Global Emergency medical supporting Intelligence Transport System)：災害医療と IT，東京：ライフメディコム；2012年：81-85.
- 7) 吉田省造，齋藤正樹. 2012 増強版呼吸療法認定士：たしかめドリル，名古屋：日総研出版；2012年：1-196.

- 8) 土井智章. 三環系抗うつ薬中毒の治療指針：救急医学, 東京：へるす出版；2012年：1440-1441.
- 9) 吉田省造, 小倉真治. 早期診断の重要性と、重症度判定 -APACHE II score, MODS score など - : sepsis/SIRS - いまを生かす！最新の病態把握に基づく適切な診療へ, 東京：総合医学社；2012年：1081-1087.
- 10) 吉田隆浩, 小倉真治. 救急疾患アトラス, 大阪：メディカ出版；2013年：62-64.
- 11) 吉田隆浩, 小倉真治. 血液凝固第VIIa因子製剤, 東京：へるす出版；2013年：580-583.
- 12) 小倉真治. 血管透過性亢進, 集団災害, トリアージソート, トリアージオフィサー, トリアージポスト, トリアージ用改訂版外傷スコア, 東京：ぱーそん書房；2013年：6-10.
- 13) 土井智章, 小倉真治. 災害時における脱水・低栄養回避 -ドクターヘリとトリアージ-, 東京：医歯薬出版株式会社；2013年：287-291.
- 14) 詫間隆博, 竹末芳生, 土井智章, 中嶋一彦, 榎村浩一, 宮崎泰可, 望月清文, 山岸由佳, 吉田耕一郎. 8.粘膜炎カンジダ症(口腔咽頭カンジダ症, 侵襲性カンジダ症の診断・治療ガイドライン食道カンジダ症-, 東京：一般社団法人日本医真菌学会；2013年：287-291.
- 15) 熊田恵介, 松丸直樹, 吉田省造, 白井邦博, 豊田 泉, 小倉真治, 福田充宏. 重症救急患者におけるバイタルサイン情報の記録の問題点, 東京：一般社団法人日本医真菌学会；2013年：287-291.
- 16) 吉田隆浩, 小児フレイルチェック：エマージェンシー・ケア, 大阪：メディカ出版；2014年：68-69.
- 17) 牛越博昭. 低体温療法適応と実際, 東京：総合医学社；2014年：180-183.
- 18) 小倉真治. 救急医療とIT：救急・集中治療医学レビュー2014-2015, 東京：総合医学社；2014年：35-41.
- 19) 土井智章, 小倉真治. バイオテロ被災者の急性期ケアの指針：救急・集中治療医学レビュー2014-2015, 東京：総合医学社；2014年：387-389.
- 20) 土井智章. 危機管理ブック, 東京：へるす出版；2014年.
- 21) 牛越博昭. 電気ショック(同期・非同期)：救急医学, 東京：へるす出版；2014年：635-639.
- 22) 豊田 泉, 有賀 徹, 奥寺 敬, 坂本哲也, 安心院康彦, 堤 晴彦, 本田 満, 奥地一夫, 東原真奈, 北原孝雄, 黒田泰弘, 永山正雄, 梁 成勲, 本郷 悠, 園生雅弘, 角谷彰子, 汐崎 祐, 中村俊介. 12.精神疾患 13.その他の疾患：意識障害の初期治療の標準化 ACEC ガイドブック 2014, 東京：へるす出版；2014年：117,120,129,131.
- 23) 吉田隆浩, 小倉真治. 救急疾患アトラス 8.デグロウピング損傷に対する局所陰圧閉鎖療法に人口真皮を併用した一例：エマージェンシー・ケア, 大阪：メディカ出版；2014年：86-88.
- 24) 吉田隆浩, 小倉真治. 救急疾患アトラス 9 救急疾患アトラス 9.膝窩動脈を損傷するも患肢を温存できた一例：エマージェンシー・ケア, 大阪：メディカ出版；2014年：32-35.
- 25) 吉田隆浩, 小倉真治. 救急疾患アトラス 9 救急疾患アトラス 10.スノーボード外傷に伴う腎損傷：エマージェンシー・ケア, 大阪：メディカ出版；2014年：60-61.
- 26) 豊田 泉, 橋本孝治, 吉田隆浩, 名知 祥, 山田法顕, 神田倫秀, 小倉真治. ドクターヘリ運用の特別なミッション 山間部での運航：救急医学, 東京：へるす出版；2014年：1499-1501.
- 27) 豊田 泉, 山田法顕, 熊田恵介, 小倉真治. 急性出血性脳卒中：救急医学, 東京：へるす出版；2014年：1375-1377.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 山田法顕, 名知 祥, 小倉真治. 高気圧酸素療法における脳保護効果と今後の展望：心臓救急最前線 2013-2014, 東京：The Japan-Prediction of neurological Outcomes in patients Post cardiac arrest (J-POP) registry；2012年：73-83.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 山田法顕. 急性期からの高気圧酸素療法の併用が効果的であった深頸部膿瘍の一例, 日本集中治療医学会雑誌 2012年；19巻：65-70.
- 2) 白井邦博, 吉田省造, 吉田隆浩, 加藤久晶, 名知 祥, 井原 頌, 豊田 泉, 小倉真治. ALI/ARDS 症例に対するグルタミン強化経腸栄養の効果について, 外科と代謝・栄養 2012年；46巻：1-8.
- 3) 加藤久晶, 山田法顕, 中野志保, 吉田省造, 白井邦博, 豊田 泉, 小倉真治. 腹膜炎で発症した化膿性脊椎炎の1例, 日本救急医学会雑誌 2012年；23巻：163-169.
- 4) 林 賢治, 杉原博子, 吉田省造, 山田法顕, 土井智章, 名知 祥, 小倉真治. 人工呼吸器管理におけるシミュレーション教育の評価-アンケートを用いた検討, 日本呼吸器療法医学会誌 2012年；29巻：70-73.
- 5) 川井 豪, 伊藤芳毅, 小倉真治, 清水克時. 整形外科 最前線/あなたならどうする？(11), 臨床整形外科 2012年；47巻：1099-1102.
- 6) 北川順一, 吉田省造, 中島靖浩, 白井邦博, 豊田 泉, 小倉真治, 村上哲雄. Acute respiratory distress syndrome(ARDS) 合併した腸チフスの1例, 日本救急医学会雑誌 2012年；23巻：781-786.
- 7) 小倉真治. 救急医療の全体最適化システム-GEMITS- Total Optimization in Emergency Medicine -GEMITS-, 機関誌交通工学 2012年；48巻：52-59.

- 8) 小倉真治. 救急医療に対して ICT は何を支援できるか, 新医療 2012 年; 39 巻: 24-28.
- 9) 小倉真治. 地域医療とチーム医療, 救急医学 2012 年; 36 巻: 663-666.
- 10) 山田法顕, 豊田 泉, 小倉真治. 高気圧酸素療法, 総合医学社 2012 年; 24 巻: 929-934.
- 11) 山田法顕, 豊田 泉, 山田実貴人, 玉田佳樹, 山川弘保, 加藤雅康, 熊谷守雄, 吉村紳一, 岩間 亨, 小倉真治. 岐阜県における脳卒中初期診療標準化の取り組み, 日本臨床救急医学会雑誌 2013 年; 16 巻: 643-648.
- 12) 豊田 泉, 山田法顕, 小倉真治, 山内圭太, 野村悠一, 船津奈保子, 石黒光紀, 中山則之, 岩間 亨. 橋下部腹側症候群(Millard-Gubler syndrome)を呈した頭部外傷の 1 例, 日本臨床救急医学会雑誌 2014 年; 37 巻: 32-35.
- 13) 豊田 泉, 福田哲也, 田中義人, 三宅喬人, 名知 祥, 吉田隆浩, 白井邦博, 小倉真治. 鈍的腹部外傷による単独胆嚢損傷に対して手術治療を行った 1 例, 日本外傷学会雑誌 2014 年; 28 巻: 282-285.
- 14) 橋本孝治, 豊田 泉, 熊田恵介, 吉田隆浩, 名知 祥, 小倉真治. 岐阜県ドクターヘリのスポーツ傷病者に対する取り組み, 日本航空医療学会誌 2014 年; 15 巻: 29-33.
- 15) 熊田恵介, 村上哲雄, 白井邦博, 豊田 泉, 小倉真治, 福田充宏. 気管切開に関わる安全管理: 早期合併症事例の特徴と手術切開と経皮切開の比較を踏まえ, 日本臨床救急医学会雑誌 2014 年; 17 巻: 743-747.
- 16) 豊田 泉, 大江直行, 伊藤稔子, 杉原博子, 青木友紀, 岡田弘美, 余語紗代. 神経救急医による院内臓器提供連絡調整員(院内コーディネーター)について, 日本脳神経外科救急学会雑誌 2014 年; 19 巻: 149-153.

原著 (欧文)

- 1) Shigemori M, Abe T, Aruga T, Ogawa T, Okudera T, Ono J, Onuma T, Katayama Y, Kawai N, Kawamata T, Kohmura E, Sakai T, Sakamoto T, Sasaki T, Sato A, Shiogai T, Shima K, Sugiura K, Takasato Y, Tokutomi T, Tomita H, Toyoda I, Nagano S, Nakamura H, Y Park, Mitsunori M, Miki T, Miyake Y, Murai H, Murakami S, Yamaura A, Yamaki T, Yamada K, Yoshimine T. Guidelines for the Management of Severe Head Injury, 2nd Edition Guidelines from the Guidelines Committee on the Management of Severe Head Injury, the Japan Society of Neurotraumatology. *Neurol med chir.* 2012;52:1-30.
- 2) Doi T, Tokuda H, Matsushima-Nishiwaki R, The Cuong N, Kageyama Y, Iida Y, Kondo A, Akamatsu S, Otsuka T, Iida H, Kozawa O, Ogura S. Effect of antithrombin III on glycoprotein Ib/IX/V activation on human platelets: suppression of thromboxane A2 generation. *Prostag Leukotr Ess.* 2012;87:57-62. IF 1.984
- 3) Doi T, Akamatsu S, Kuroyanagi G, Kondo A, Mizutani J, Otsuka T, Tokuda H, Kozawa O, Ogura S. Rac regulates collagen-induced HSP27 phosphorylation via p44/p42 MAP kinase in human platelets. *Int J Mol Med.* 2013;32:813-818. IF 1.880
- 4) Mochizuki K, Sawada A, Suemori S, Kawakami H, Niwa Y, Kondo Y, Ohkusu K, Yamada N, Ogura S, Yaguchi T, Nishimura K, Kishino S. The American Society for Microbiology. *Antimicrob Agents Ch.* 2013;57:4027-4030. IF 4.451
- 5) Cuong NT, Abe C, Binh NH, Hara A, Morita H, Ogura S. Sivelestat improves outcome of crush injury by inhibiting high-mobility group box 1 in rats. *Shock.* 2013;39:89-95. IF 2.732
- 6) Kageyama Y, Doi T, Matsushima-Nishiwaki R, Iida Y, Akamatsu S, Kudo A, Kuroyanagi G, Yamamoto N, Mizutani J, Otsuka T, Tokuda H, Kozawa O, Ogura S. Involvement of Rac in thromboxane A2-induced human platelet activation: Regulation of sCD40 ligand release and PDGF-Abscretion. *Mol Med Rep.* 2014;10:107-112. IF 1.757

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

なし

2) 受託研究

- 1) 小倉真治: リコモジュリン点滴静注用 12800 特定使用成績調査(産婦に対する調査); 平成 22-24 年度; 63 千円: 旭化成ファーマ(株)
- 2) 小倉真治: ジェイスの重症熱傷に対する使用成績調査; 平成 22-26 年度; 105 千円: ジャパンエンジニアリング(株)
- 3) 小倉真治: ゴシン静注用 2.25, 4.5 使用成績調査; 平成 22-24 年度; 105 千円: 大正富山医薬品(株)
- 4) 小倉真治: 平成 23 年度「医療・介護等関連分野における規制改革・産業創出実証事業(緊急医療体制の構築に資する車載 IT システムの導入における課題抽出・分析のための調査事業)」; 平成 23-24 年度; 3,960,449 円: 経済産業省
- 5) 白井邦博: モノづくり技術と IT を活用した高度医療機器の開発の一部「敗血症モニタの開発」; 平成 23-24 年度; 7,643,113 円: 財団法人岐阜県研究開発財団
- 6) 小倉真治: 感染症に伴い発症した汎発性血管内凝固症候群(DIC)患者を対象とした KW-3357 と血漿由来アンチトロンビン製剤の非盲検比較試験; 平成 23-25 年度; 1,852,200 円: 協和発酵キリン(株)

- 7) 小倉真治：ラビット点滴静注バッグ 500mg/20mL 使用成績調査；平成 23-25 年度；105 千円：第一三共株式会社
- 8) 小倉真治：献血グロベニン-I 静注射「重症感染症における抗生物質との併用」に係わる特定使用成績調査ヘリコプター・ピロリ除菌療法の既往歴のある患者；平成 24-26 年度；105 千円：日本製薬株式会社
- 9) 小倉真治：ジェイスの重症熱傷に対する使用成績調査；平成 24-25 年度；21 千円：株式会社ジャパン・ティッシュ・エンジニアリング
- 10) 小倉真治：ユナシン-S(キット)静注用 特定使用成績調査-肺炎, 肺膿瘍, 腹膜炎に対する高用量(1日 6g 超)投与に関する調査；平成 25-26 年度；157 千円：ファイザー株式会社
- 11) 小倉真治：ノイアート静注用 1500 単位 特定使用成績調査 DIC[汎発性血管内凝固症候群]；平成 25-28 年度；157 千円：一般社団法人日本血液製剤機構
- 12) 小倉真治：カンサイダイス点滴静注用 50mg, 70mg 使用成績調査；平成 25-28 年度；63 千円：MSD 株式会社

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

- 1) 小倉真治：ベイジアンネットワークによる推論を実行する推論装置、及び当該推論装置を実現するプログラム(発明)；平成 24 年(特願 2010-070532)
- 2) 小倉真治：位置判断装置及び位置判断方法(発明)；平成 24 年(特願 2010-081846)

6. 学会活動

1) 学会役員

小倉真治：

- 1) 日本救急医学会 ICLS コース企画運営委員会委員長・メディカルコントロール体制検討委員・評議員・指導・専門医制度委員会・将来計画委員会・指導医認定委員会(～現在)
- 2) 日本集中治療医学会評議員(～現在)
- 3) 日本集中治療医学会評議員(～現在)
- 4) 日本 Shock 学会理事・評議員(～現在)
- 5) 日本航空医療学会評議員(～現在)
- 6) 日本外傷学会評議員・将来計画委員会委員・専門医認定委員(～現在)
- 7) 日本救急医学会中部地方会理事(～現在)
- 8) 日本臨床救急医学会評議員・編集委員会委員・会則検討委員・研究倫理委員(～現在)
- 9) 日本集団災害医学会評議員(～現在)
- 10) 日本組織移植学会評議員(～現在)

豊田 泉：

- 1) 日本救急医学会評議員・中部地方会幹事(～現在)
- 2) 日本脳神経外傷学会評議員・編集幹事・ガイドライン作成委員(～現在)
- 3) 日本脳神経外科救急医学会幹事・編集委員(～現在)
- 4) 日本臨床救急医学会 ACEC 委員会委員(～現在)
- 5) 日本航空医療学会評議員(～現在)
- 6) 日本神経救急学会 ISLS 委員会委員(～現在)
- 7) 日本高気圧環境・潜水学会地方会等検討委員(～現在)
- 8) 日本病院前救急診療医学会・評議員(～現在)

熊田恵介：

- 1) 日本救急医学会評議員(～現在)
- 2) 日本航空医療学会評議員(～現在)

吉田省造：

- 1) 日本救急医学会関東地方会幹事(～現在)

- 2) 日本集中医学会東海北陸地方会評議員(～現在)

土井智章：

- 1) 医真菌学会・侵襲性カンジダ症の診療ガイドライン作成委員会委員(～現在)
- 2) 第7回アジア救急医学会運営協力特別委員会委員(～現在)

2) 学会開催

小倉真治：

- 1) 第21回日本集中治療医学会東海北陸地方会(平成25年6月, 岐阜)

3) 学術雑誌

小倉真治：

- 1) 日本救急医学会；編集委員会委員(～現在)
- 2) 日本臨床救急医学会；編集委員会委員(～現在)
- 3) 日本航空医療学会誌；査読委員(～現在)

豊田 泉：

- 1) 日本航空医療学会査読委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

小倉真治：

- 1) 第17回日本集団災害医学会総会・学術集会(平成24年2月, 金沢, 教育講演「平時の救急医療から災害復興まで使える情報システム GEMITS」演者)
- 2) 第39回日本集中治療医学会学術集会(平成24年2月, 千葉, 「敗血症性ショック治療における初期輸液・手術・血液浄化療法の役割」司会)
- 3) 第39回日本集中治療医学会学術集会(平成24年2月, 千葉, 「第39回日本集中治療医学会学術集会教育セミナー16」座長)
- 4) 第15回千葉県救急医療研究会(平成24年4月, 千葉, 特別講演「救急医療の全体最適化」演者)
- 5) 第20回日本集中治療医学会東海北陸地方会(平成24年6月, 「パネルディスカッション」座長)
- 6) 第15回日本救急医学会中部地方会・学術集会(平成24年10月, 長久手, 「セミナー」座長)
- 7) 第40回日本救急医学会総会・学術集会(平成24年11月, 京都, 「イブニングセミナー」座長)
- 8) 第40回日本救急医学会総会・学術集会(平成24年11月, 京都, 「IT・医工学の救急診療への応用」司会)
- 9) 第27回日本外傷学会(平成25年5月, 福岡, 「JPTEC, JATEC 導入10年で外傷診療は変わったか?」司会)
- 10) 第16回日本臨床救急医学会総会・学術集会(平成25年7月, 東京, 「救急と漢方」座長)
- 11) The 7th Asian Conference on Emergency Medicine(平成25年7月, 東京, 「Disaster Management Training Initiatives in India」司会)
- 12) 第24回日本急性血液浄化学会(平成25年9月, 東京, 「分かりやすい急性中毒はどう治療するか」司会)
- 13) 第20回日本航空医療学会(平成25年11月, 東京, 「救急の診断」司会)
- 14) 第29回日本 Shock 学会(平成26年5月, 松山, 「特別講演2」座長)
- 15) 第42回日本救急医学会総会・学術集会(平成26年10月, 松山, シンポジウム7「長期予後を見据えた治療戦略」司会)
- 16) 第21回日本航空医療学会総会(平成26年11月, 大阪, パネルディスカッション2「災害時の航空医療搬送の現状と未来」司会)
- 17) 第42回日本集中治療医学会(平成26年11月, 大阪, 一般演題・ポスター74「外傷症例」座長)

豊田 泉：

- 1) 第40回日本救急医学会総会・学術集会(平成24年11月, 京都, シンポジウム「臓器提供における院内臓器提供連絡調整員(院内コーディネーター)の役割」演者)
- 2) 第16回日本臨床救急医学会総会・学術集会(平成25年7月, 東京, 「血液・凝固線溶異常2」座長)
- 3) 第28回日本神経救急学会(平成26年7月, 東京, ワークショップ「神経救急・集中治療手技のチェ

ックポイント」座長)

- 4) 第42回日本救急医学会総会・学術集会(平成26年10月, 東京, ポスター「病態」座長)

牛越博昭:

- 1) The 7th Asian Conference on Emergency Medicine(平成25年10月, 東京, シンポジウム「Cardiovascular Emergencies」演者)

白井邦博:

- 1) 第16回日本臨床救急医学会総会・学術集会(平成25年7月, 東京, 重症患者に対するプロトコールに基づいた栄養管理療法」座長)

熊田恵介:

- 1) 第16回日本臨床救急医学会総会・学術集会(平成25年7月, 東京, 「病院前救護・MC」座長)
- 2) 第42回日本救急医学会総会・学術集会(平成26年10月, 東京, 「病院前救護・MC9」座長)

土井智章:

- 1) 第15回日本臨床救急医学会総会・学術集会(平成24年6月, 熊本, 教育講演「救急領域における凝固異常の基本知識」演者)

山田法顕:

- 1) 第48回日本高気圧環境・潜水医学学会(平成25年11月, 東京, シンポジウム「岐阜県での高気圧酸素治療における連携体制」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

小倉真治:

- 1) 岐阜県国民保護協議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県メディカルコントロール協議会委員(～現在)
- 3) 岐阜市救急業務対策協議会委員(～現在)
- 4) NPO 法人岐阜救急災害医療研究開発機構常務理事(～現在)
- 5) 救急医療情報連携地域協議会・救急医療情報連絡専門委員会委員(～現在)
- 6) 日本版 EHR 事業推進委員会委員(～現在)
- 7) 医学的検証作業班(～現在)
- 8) 岐阜市消防本部岐阜市救急業務対策協議会(～現在)
- 9) 岐阜県震災対策検証委員会・災害医療分科会委員(～現在)
- 10) 緊急度判定体系実証検証事業実証検証推進会議委員会構成員(～現在)
- 11) 災害時の診療録のあり方に関する合同委員会委員(～現在)
- 12) 地震対策専門委員会委員(～現在)
- 13) 「診療行為に関連した死亡調査分析モデル事業」愛知地域・事例15の協働調査委員会委員(～現在)
- 14) D-NET データ仕様検討委員会委員(～現在)
- 15) ICT 超高齢社会構想会議委員(～現在)
- 16) 高橋尚子杯ぎふ清流ハーフマラソンメディカル委員会委員副委員長(～現在)

豊田 泉:

- 1) 岐阜市救急業務高度化検討委員会委員(～現在)
- 2) 岐阜地域メディカルコントロール協議会委員(～現在)
- 3) NPO 法人岐阜救急災害医療研究開発機構理事(～現在)
- 4) 岐阜地域メディカルコントロール体制に係る検証医師(～現在)

白井邦博:

- 1) 岐阜県南部エリア「事業戦略会議」委員(～現在)

吉田隆浩：

- 1) 岐阜地域メディカルコントロール体制に係る検証医師(～現在)

名知 祥：

- 1) 日本救急医学会 ICLS コース企画運営委員会委員(～現在)
- 2) 岐阜地域メディカルコントロール体制に係る検証医師(～現在)
- 3) 日本臨床救急医学会学校 BLS 教育導入についての普及に関する委員会委員(～現在)
- 4) NPO 法人岐阜救急災害医療研究開発機構理事(～現在)
- 5) 高橋尚子杯ぎふ清流ハーフマラソンメディカル委員会委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 坂本哲也, 浅井康文, 長尾建, 横田裕行, 森村尚登, 田原良雄, 長谷守, 國分宣明, 奈良理, 上妻謙, 福田令雄, 小野雄一, 渥美生弘, 上田敬博, 宮城唯良, 高橋巧, 早川峰司, 遠藤智之, 土佐亮一, 田神隆, 水谷太郎, 安田貢, 阿野正樹, 清田和也, 小野一之, 菊池研, 松島久雄, 北村伸哉, 大谷俊介, 渡辺和宏, 廣瀬晴美, 佐々木勝教, 大友康裕, 吉川和秀, 大澤真木子, 竹田宗和, 矢口有乃, 森川健太郎, 三宅康史, 久野将宗, 丹正勝久, 木下浩作, 新井隆男, 熊坂謙一郎, 堀進吾, 鈴木昌, 杉田学, 大久保浩一, 佐々木純, 和藤幸弘, 松田潔, 小林辰輔, 小倉真治, 牛越博昭, 小塩信介, 前田稔, 卯津羅雅彦, 東岡宏明, 米森輝武, 服部友紀, 北川喜己, 坪井重樹, 立川弘孝, 澤野宏隆, 有本秀樹, 上田恭敬, 柏瀬一路, 浮草実, 村井隆太, 小澤修一, 五十嵐宣明, 佐藤淳哉, 陸城成浩, 安藤維洋, 渡辺友紀子, 小谷穰治, 石原正治, 大谷尚之, 笠岡俊志, 鈴木誠, 山本雄祐, 大坂薫平, 八木正晴, 小橋秀一, 百瀬直樹, 野口裕幸, 玉城聡, 高橋由典, 大川修, 又吉徹, 三木隆弘, 倉島直樹, 真方謙, 菅原浩二, 押山貴則, 東篠圭一, 小山富生, 林輝行, 大平順之, 荒木康幸：厚生労働科学研究費補助金(循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業)研究報告書 心肺停止患者に対する心肺補助装置等を用いた高度救命処置の効果と費用に関するエビデンスを構築するための多施設共同研究：厚生労働省(平成 24 年 3 月)
- 2) 小倉真治：社会全体で共有する緊急度判定(トリアージ)体系のあり方検討会報告書：消防庁(平成 24 年 3 月)
- 3) 小倉真治：平成 24 年度地域新成長産業創出促進事業費補助金「次世代航空宇宙関連産業国際競争力強化支援事業」：社団法人中部航空宇宙技術センター(平成 25 年 3 月)
- 4) 有賀 徹, 石井正三, 奥寺 敬, 日下淳弘, 佐藤慎一, 坂本哲也, 田邊晴山, 中村恵子, 中村充男, 橋本雄太郎, 平中 隆, 星川英一, 松川茂夫, 松田剛明, 松月みどり, 森村尚登, 行岡哲男, 横田順一郎, 吉川清志, 青木則明, 根尾雅弘, 川崎貞男, 泉 裕之, 伊藤重彦, 織田 順, 清武直志, 久保田勝明, 熊井規夫, 桑原正彦, 坂本哲也, 櫻井 淳, 杉田 学, 工廣紀斗司, 田邊晴山, 服部良一, 林 靖之, 平仲 隆, 星川英一, 前田幸宏, 松本 尚, 三宅康史, 森村尚登, 行岡哲男, 横田順一郎, 青木則明, 徳本史郎：平成 24 年度 緊急度判定体系実証検証事業報告書：消防庁(平成 25 年 3 月)

11. 報道

- 1) 小倉真治：救急医療の全体最適化の要、岐阜県ドクターヘリ：日本光電(2012 年 1 月)
- 2) 小倉真治：救急医療の現状と課題・そして展望 地方の場合①：日経ラジオ(2012 年 2 月 16 日)
- 3) 小倉真治：救急医療の現状と課題・そして展望 地方の場合②：日経ラジオ(2012 年 2 月 23 日)
- 4) 小倉真治：NEWS 5 PLUS：岐阜チャン(2012 年 2 月 24 日)
- 5) 小倉真治：救急搬送システム手応え：岐阜新聞(2012 年 2 月 25 日)
- 6) 井原 頌：心肺蘇生法 習得に真剣：中日新聞(2012 年 4 月 25 日)
- 7) 小倉真治：介護 家族救急時に支援：中日新聞(2012 年 5 月 27 日)
- 8) 小倉真治：最適な救急・災害医療供給を支える ICT 活用を提言：デジタルヘルス Online (2012 年 8 月 10 日)
- 9) 名知 祥：CPR・AED 講習会：CBC テレビ(2012 年 8 月 23 日)
- 10) 小倉真治：救急車適正利用のススメ：GIFT (2012 年 9 月 1 日)
- 11) 小倉真治：鵜飼や刃物、文化に触れる：岐阜新聞(2012 年 9 月 20 日)
- 12) 小倉真治：NEWS 5 PLUS：岐阜チャン(2012 年 10 月 4 日)
- 13) 小倉真治：糖尿病患者に IC カード：NHK (2012 年 10 月 4 日)
- 14) 小倉真治：糖尿病患者に IC カード：岐阜新聞(2012 年 10 月 5 日)
- 15) 小倉真治：ほっとイブニングぎふ：NHK (2012 年 10 月 10 日)

- 16) 小倉真治：あなたが主演 50 ボイス「最先端医療ボイス」：NHK (2012年10月13日)
- 17) 小倉真治：医療情報カード救急医療に効果：中日新聞(2012年10月23日)
- 18) 小倉真治：防災事始め関市中1必修で救命講習：中日新聞(2012年11月11日)
- 19) 小倉真治：市場創造健康/医療：日本経済新聞(2013年3月27日)
- 20) 小倉真治：[事例] 救急医療から高齢者の包括的な情報連携までの支援を目指す「GEMAP」：デジタルヘルス Online (2013年3月29日)
- 21) 豊田 泉：県ドクターヘリ活用に地域差：岐阜新聞(2013年4月21日)
- 22) 小倉真治：岐阜大病院救急搬送 IT化を受け入れ可否病院から送信：中日新聞(2013年5月6日)
- 23) 小倉真治：ICTを医療に活用：中日新聞(2013年6月1日)
- 24) 小倉真治：間部の"IT化" カード1枚で病院もバスも：CBCテレビ(2013年6月17日)
- 25) 小倉真治：患者情報カード検討：中日新聞(2013年9月19日)
- 26) 小倉真治：メディカカード導入へ：岐阜新聞(2013年9月19日)
- 27) 小倉真治：ぎふ人もよう岐阜大学孝治救命治療センター長小倉真治：中日新聞(2013年10月14日)
- 28) 小倉真治：ICTで先進の街：読売新聞(2013年11月10日)
- 29) 小倉真治：本地洋一のわくわくワンダーランド：ぎふチャン(2013年11月19日)
- 30) 豊田 泉：岐阜基地医療拠点に：読売新聞(2014年2月12日)
- 31) 小倉真治：救急医療に熱視線：岐阜新聞(2014年6月20日)
- 32) 小倉真治：岐阜大病院大規模災害を想定/医学部生100人、訓練奮闘：岐阜新聞(2014年7月12日)
- 33) 名知 祥：胸骨圧迫、こつつかむ：岐阜新聞(2014年8月12日)
- 34) 小倉真治：岐阜の医療を考える：岐阜新聞(2014年9月7日)
- 35) 小倉真治：岐阜大学病院に遺伝子診療部：岐阜新聞(2014年10月2日)
- 36) 小倉真治：県初の新生生前診断：中日新聞(2014年10月2日)
- 37) 小倉真治：臓器移植登録、随時OK：岐阜新聞(2014年11月5日)

12. 自己評価

評価

前述の目的に沿った研究を、それぞれの分野において少しずつではあるが、結果は出している。

現状の問題点及びその対応策

臨床業務が多忙であり、研究のための時間を取りづらいのが現状である。しかし、ラボの充実をはかることにより徐々に新たな研究に取り組むことが可能になってきている。

今後の展望

前期のような現状であるが、徐々に教育スタッフが増加しており今後はさらに臨床データの解析とのコラボレーションとして研究を促進したい。

(6) 法医学分野

1. 研究の概要

これまでと同様。法医病理学的な研究としては、従来は死後の角膜混濁のため、眼球を剔出しなければ観察できなかった眼内所見を眼科手術的に開発された先端径が 0.9mm の内視鏡を用いて解剖時に観察し、眼底出血等の発生と死因や受けた損傷との関係、その意義等について検討し、眼底出血は頭蓋内出血や頸部圧迫による窒息死例等に高頻度に認められるのに対し、うっ血乳頭は頭蓋内出血死例では認められるが、頸部圧迫による窒息死例では認められないことを明らかにし、また、溺死例においても高頻度に眼底出血が認められることを新知見として報告することができた。また、突然死の原因としての冠動脈奇形の意義や致命的不整脈における心臓の組織学的変化について等の研究を行った。DNA 多型に関する研究では、ミトコンドリア DNA 高変異領域の塩基配列解析ならびに STR(short tandem repeat)多型および INDEL (insertion-deletion)多型の出現頻度や多型構造の解析を行い、DNA 鑑定において必要となる、岐阜県在住の日本人集団を対象としたデータベースを構築することができた。また、ミトコンドリア DNA HVIII 領域に存在する length heteroplasmy の構造を解析し、その法医学的応用について研究したほか、X 染色体上の STR 座位の日本人集団における高度な構造多型を明らかにし、その人類遺伝学的解析も行った。

2. 名簿

教授： 武内康雄 Yasuo Bunai
助教： 永井 淳 Atsushi Nagai

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 永井 淳. DNA 指紋法：岐阜大学教養教育推進センター 編. 世紀の発見・発明, みらい社；2012年：90-91.

著書 (欧文)

- 1) Bunai Y, Akaza K, Nagai A. Hyperthermia: pathological findings and recognition at forensic autopsies. In: Gao XH, Chen HD, eds. Hyperthermia: recognition, prevention and treatment. Nova Science Publishers. 2012;209-214.

総説 (和文)

- 1) 武内康雄, 赤座香予子, 永井 淳. 脂肪塞栓, 法医病理 2013年；19巻：72-81.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 武内康雄, 赤座香予子, 辻中正壮, Mostafa Ali Elmawdy, 永井 淳. 電撃型脂肪塞栓症, 法医病理 2013年；19巻：39-41.
- 2) 永井 淳, 武内康雄, 原 正昭, 木戸 啓. DXS10146 のフランキンゲン領域における INDEL 多型, DNA 多型 2013年；21巻：157-159.
- 3) 永井 淳, 石原知美, Mostafa Ali Elmawdy, 武内康雄. エジプト人集団における 15 種の STR の多型解析, DNA 多型 2014年；22巻：124-125.
- 4) 武内康雄. 法医学から, 日本 SIDS・乳幼児突然死予防学会雑誌 2014年；14巻：47.

原著 (欧文)

- 1) Endo S, Arai Y, Hara A, Kitade Y, Bunai Y, El-Kabbani O, Matsunaga T. Substrate specificity and inhibitor sensitivity of rabbit 20 α -hydroxysteroid dehydrogenase. Biol Pharm Bull. 2013;36:1514-1518. IF 1.778
- 2) Endo S, Matsunaga T, Matsumoto A, Arai Y, Ohno S, El-Kabbani O, Tajima K, Bunai Y, Yamano S, Hara A, Kitade Y. Rabbit 3-hydroxyhexobarbital dehydrogenase is a NADPH-preferring reductase with broad substrate specificity for ketosteroids, prostaglandin D2, and other endogenous and xenobiotic carbonyl compounds. Biochem Pharmacol. 2013;86:1366-1375. IF 4.650
- 3) Nagai A, Hara M, Ishihara T, Tamura A, Kido A, Bunai Y. INDEL polymorphisms at the DXS10146 flanking region in four racial populations. Forensic Sci Int Gene Suppl. 2013;4:318-319.
- 4) Sugiyama S, Chong YH, Shito M, Kasuga M, Kawakami T, Udagawa C, Aoki H, Bonkobara M, Tsuchida S, Sakamoto A, Okuda H, Nagai A, Omi T. Analysis of mitochondrial DNA HVR1 haplotype of pure-bred domestic dogs in Japan. Leg Med. 2013;15:303-309. IF 1.441
- 5) Elmawdy MA, Nagai A, Gomaa GM, Hegazy HM, Shaaban FE, Bunai Y. Investigation of mtDNA control region sequences in an Egyptian population sample. Leg Med. 2013;15:338-341. IF 1.441

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：永井 淳；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：日本人に適したマルチプレックス INDEL 多型検出システムの構築とその法医学的応用；平成 25-27 年度；2,500 千円(1,000：800：700 千円)
- 2) 研究代表者：原 正昭，研究分担者：永井 淳；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：ヒトを吸血した蚊から吸血後の経過時間推定及び個人識別；平成 26-28 年度；300 千円(100：100：100 千円)

2) 受託研究

- 1) 武内康雄：薬毒物検査等受託事業費；平成 24 年度；8,452 千円；岐阜県警察本部
- 2) 武内康雄：薬毒物検査等受託事業費；平成 25 年度；6,668 千円；岐阜県警察本部
- 3) 武内康雄：薬毒物検査等受託事業費；平成 26 年度；7,525 千円；岐阜県警察本部

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

武内康雄：

- 1) 日本法医学会評議員(～現在)
- 2) 日本法医学会理事(平成 25 年 6 月～現在)
- 3) 日本法医学会認定医制度運営委員長(平成 25 年 6 月～現在)
- 4) 日本法医学会用語委員会委員(平成 25 年 6 月～現在)
- 5) 法医病理研究会運営委員(～現在)
- 6) 日本 SIDS・乳幼児突然死予防学会評議員(～現在)
- 7) 日本 SIDS・乳幼児突然死予防学症例検討委員(～現在)
- 8) 日本 SIDS・乳幼児突然死予防学会診断基準検討委員(～現在)
- 9) 日本 SIDS・乳幼児突然死予防学理事(～現在)

永井 淳：

- 1) 日本 DNA 多型学会評議員(～平成 26 年 12 月)
- 2) 日本比較臨床医学会評議員(平成 24 年 7 月～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

武内康雄：

- 1) 法医病理；編集委員長(～平成 26 年 10 月)
- 2) 法医病理；編集委員(平成 26 年 11 月～現在)
- 3) Legal Medicine；Editorial Board(～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

武内康雄：

- 1) 第 49 回医学系大学倫理委員会連絡会議学術集会(平成 26 年 7 月，岐阜，「疫学研究・臨床研究倫理指針の改正について」「再生医療等の安全性の確保等関する法律について」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

年間 60～80 体の法医学解剖の鑑定を嘱託されており、解剖やその後の検査、鑑定書作成等のため研究のための時間が制約されているが、それなりの成果をあげられたと思っている。

現状の問題点及びその対応策

法医学分野では、現在 2 名の教員が教育・研究・実務に従事しており、研究などの面では国内外から相応の評価を受けている。しかしながら、研究領域がやや固定化してきていることは否めず、また、人事が固定化しつつあるという問題点もある。そこで、今後は学外との共同研究を目指しながら、学問の進歩に則し新しい研究手法を取り入れ、時代の傾向に則して研究分野を広げる必要があると考えられる。また、本分野に新しい息吹を引き起こすために、大学院生が入学しやすい環境と設備を整えることが急務であると考えられる。

今後の展望

法医学病理学的な研究として、今後外傷の病理、特に、受傷後早期に起こる変化について、分子病理学的研究を始めたい。DNA 多型に関する研究では、引き続き日本人集団における DNA 多型のデータベースを進めるとともに、個人識別に有用な DNA 多型領域の検討ならびに DNA 多型のより効率的な検出法の開発等、世界の趨勢に遅れず、研究を推進していきたい。

(7) 産業衛生学分野

1. 研究の概要

衛生学は広い意味での環境とヒトの関わりを解析し、ヒトの健康の保持・増進に寄与することを目的とした実学である。衛生学は包括的な応用科学であって、基礎医学に属するものではなく、社会医学の一分野である。従って、社会の要請に積極的に答えていかなくてはならない宿命にある。現在の産業衛生学分野の研究内容は、職場における実践活動を通じたもので、以下のような研究を行っている。

(1) 建設労働者、浄化槽法定検査業務従事者などの屋外労働者を対象に健康問題、作業環境、労働条件の検討を行い、快適職場づくりのための研究、(2) 熱中症、振動障害、騒音性難聴の予防の研究、(3) 各種職場における腰痛をはじめとした筋骨格系障害予防の研究、(4) 職場のメンタルヘルス対策の研究、(5) 医師をはじめとした医療従事者および医療系学生の健康障害予防の研究を行っている。

2. 名簿

准教授： 井奈波良一 Ryoichi Inaba

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 井奈波良一. 振動障害：山口徹編. 今日の治療指針 54 版, 東京：医学書院；2012 年：874-875.
- 2) 井奈波良一. 熱中症(熱射病、熱疲労)：内科外来で診るマイナーエマージェンシー Medical Practice 臨時増刊, 東京：文光堂；2014 年：5-8.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 井奈波良一. 打ち揚げ花火と健康, 日本健康医学会雑誌 2012 年；20 巻：214-217.
- 2) 井奈波良一, 黒川淳一, 大西信行, 萩 典子, 近藤信子. 管理監督者による職場のメンタルヘルス問題への取り組み, 保健の科学 2012 年；54 巻：225-228.
- 3) 井奈波良一. 花火と事故, 日本職業・災害医学会会誌 2013 年；61 巻：319-323.
- 4) 井奈波良一, 田中 耕. 花火と大気微少粒子状物質(PM2.5), 日本職業・災害医学会会誌 2014 年；62 巻：94-95.
- 5) 井奈波良一. 豪雪による人的被害の動向, 日本職業・災害医学会会誌 2014 年；62 巻：364-369.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 井奈波良一, 杉浦春雄. 医学生と薬学生のバーンアウト状況および日常生活習慣, 日本健康医学会雑誌 2012 年；20 巻：228-233.
- 2) 井奈波良一, 井上真人, 日置敦巳. 1 年目研修医の日中の過度の眠気と勤務状況、日常生活習慣および職業性ストレスの関係, 日本職業・災害医学会会誌 2012 年；60 巻：61-69.
- 3) 井奈波良一, 黒川淳一. 管理監督者が期待する労働者のメンタルヘルス不調に対する事業所、産業医および医療機関による早期支援に関する調査, 日本職業・災害医学会会誌 2012 年；60 巻：140-146.
- 4) 黒川淳一, 永井典子, 森本裕己, 木下美雪, 日比野裕文, 末続なつ江, 井上真人, 加藤荘二, 吉田弘道, 井奈波良一, 岩田弘敏. 精神科医療従事者のライフスタイルとストレス対処行動に関する調査, 日本職業・災害医学会会誌 2012 年；60 巻：206-215.
- 5) 井奈波良一, 長縄 孝. 一国立大学法人医学部における職場巡視結果の経年的分析第 2 報, 日本職業・災害医学会会誌 2012 年；60 巻：222-225.
- 6) 黒川淳一, 大澤早苗, 永井典子, 森本裕己, 木下美雪, 日比野裕文, 末続なつ江, 井上真人, 加藤荘二, 吉田弘道, 井奈波良一, 岩田弘敏. 精神科病院における夏期の作業環境測定とストレスに関する調査, 日本職業・災害医学会会誌 2012 年；60 巻：252-263.
- 7) 井奈波良一. わが国の職場のメンタルヘルス対策の経済評価に関する文献研究, 日本職業・災害医学会会誌 2012 年；60 巻：278-281.
- 8) 黒川淳一, 永井典子, 森 直美, 森本裕己, 木下美雪, 大澤早苗, 日比野裕文, 末続なつ江, 井上真人, 加藤荘二, 吉田弘道, 井奈波良一, 岩田弘敏. 抗精神病薬の使用と副作用に関する職員アンケート調査, 日本職業・災害医学会会誌 2012 年；60 巻：332-341.
- 9) 井奈波良一. 医学生の産業医志向に関する調査, 日本職業・災害医学会会誌 2013 年；61 巻：193-198.
- 10) 井奈波良一, 黒川淳一, 井上真人. 埋蔵文化財発掘調査機関における熱中症予防対策実施状況, 日本職業・災害医学会会誌 2013 年；61 巻：225-231.
- 11) 黒川淳一, 永井典子, 末続なつ江, 井上真人, 井奈波良一, 岩田弘敏. 精神科治療における服薬状況に関

するアンケート調査, 日本職業・災害医学会会誌 2013年; 61巻: 382-392.

- 12) 井奈波良一. 花火打ち揚げ事業場における熱中症予防対策実施状況, 日本職業・災害医学会会誌 2013年; 61巻: 393-399.
- 13) 井奈波良一, 黒川淳一, 植木啓文. うつ病労働者が期待する労働者のメンタルヘルス問題への事業場・産業医・医療機関による早期支援に関する調査, 日本職業・災害医学会会誌 2014年; 62巻: 1-7.
- 14) 井奈波良一. 女性看護師のバーンアウトの仕事の生産性への影響, 日本職業・災害医学会会誌 2014年; 62巻: 173-178.
- 15) 井奈波良一. 民家の食堂における焼肉によるPM2.5の経時的変化, 日本職業・災害医学会会誌 2014年; 62巻: 238-241.
- 16) 井奈波良一, 日置敦巳, 近藤剛弘, 中村弘揮, 中村光浩. 病院薬剤師の職業性ストレス, 日本職業・災害医学会会誌 2014年; 62巻: 322-327.

原著 (欧文)

- 1) Inaba R, Kondo Y, Hioki A. Health problems related to drug compounding of pharmacists in dispensing pharmacies. JJOMT. 2012;60:23-31.
- 2) Inaba R, Hioki A. Working conditions and work-related stress among male physicians: A comparison in private and public general hospitals. JJOMT. 2013;61:55-61.
- 3) Iijima S, Yokoyama K, Kitamura F, Fukuda T, Inaba R. Cost-benefit analysis of comprehensive mental health prevention programs in Japanese workplaces: A pilot study. Ind Health. 2013;51:627-633. IF 1.045
- 4) Sako S, Sugiura H, Tanoue H, Kojima M, Kono M, Inaba R. The position of a standard optical computer mouse affects cardiorespiratory responses during the operation of a computer under time constraints. Int J Occup Med Env. 2014;27:547-559. IF 1.094

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 横山和仁, 研究分担者: 井奈波良一; 厚生労働科学研究費補助金: 職場におけるメンタルヘルス対策の有効性と費用対効果に関する研究; 平成 23-24 年度; 900 千円(500 : 400 千円)
- 2) 研究代表者: 井奈波良一; 学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究: 調剤業務伴う薬物曝露に起因する健康障害とその対策に関する研究; 平成 24-26 年度; 3,510 千円(1,430 : 1,430 : 650 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

井奈波良一:

- 1) 日本衛生学会評議員(~現在)
- 2) 日本産業衛生学会代議員(~現在)
- 3) 日本民族衛生学会評議員(~現在)
- 4) 日本温泉気候物理医学会評議委員(~現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

井奈波良一:

- 1) 第 85 回日本産業衛生学会(平成 24 年 5 月, 名古屋, シンポジウム「節電時代の夏期オフィス温熱環

境の課題と対策」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

井奈波良一：

- 1) 岐阜市環境審議会委員(～現在)
- 2) 産業保健相談員(岐阜産業保健推進センター)(～現在)
- 3) 労働衛生指導医(岐阜労働局)(～現在)
- 4) 岐阜県環境影響評価審査会委員(～現在)
- 5) ヘルスプランぎふ21推進会議委員(平成24年度～現在)

10. 報告書

- 1) 井奈波良一：職場のメンタルヘルス対策の有効性および経済評価に関する文献研究：平成23年度厚生労働科学研究費補助金 総括・分担研究報告書(横山班)：51-73(平成24年3月)
- 2) 井奈波良一：職場のメンタルヘルス対策の有効性および経済評価に関する国際文献研究および情報関係事業場におけるメンタルヘルス改善意識調査：平成24年度厚生労働科学研究費補助金 総括・分担研究報告書(横山班)：41-55(平成25年3月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

概要に示した当分野の研究を実施し、論文を作成した。論文については、全体の数は十分だと考えられるが、欧文論文をさらに増やすべく努力が必要である。外部資金については、科学研究費補助金、厚生労働科学研究費補助金、奨学寄付金を得たが、今後も継続して獲得する必要がある。社会活動については十分行われていると考えている。

現状の問題点及びその対応策

教員が1名でマンパワーの面で問題があり、また研究室が手狭のため実験的な研究がほとんどできないという問題点がある。これを打開するために他分野、他施設との共同研究に力を入れている。

今後の展望

今後とも、職場の実践活動を通じた研究を行い、その成果を職場に還元したい。当面、教員数の増員は望めそうもないので、産業衛生の重要性を強く訴え、また大学院生、研究生の受け入れや他分野、他施設との共同研究で当分野の発展の活路を見いだしたい。

(8) 医学教育学分野

1. 研究の概要

大学院医学教育学分野として大学院生 8 名, 研究生 1 名を指導し, 研究を推進している。医学教育学は, 医学・医療教育分野における多面的な課題を究明し, 効果的な教育方法を研究する学問領域であり, 医学・医療教育を行うための具体的知識やスキルの習得を目指している。本課程を修了した者は, 医学教育学の専門家として, 教員・医師・学生等を指導する能力を有し, 教育システムを自ら構築・改善し, 研究を遂行できることを目標とする。医学教育開発研究センターは全国共同利用施設として活動しており, 今後, 全国からの大学院教育希望者の受け皿としても機能していきたいと考えている。

医学教育研究は近年急激な発展を遂げており, 当分野でも卒前から生涯教育に至るまで, 知識・技能・態度教育と多岐にわたる研究を行っており, 特にコミュニケーション, PBL, シミュレーション, プロフェッショナルリズム, 人材育成, 教職員養成, 試験方法などの研究に力を入れている。また医師教育だけでなく, 看護・薬学・歯学など, 多職種の共通課題に取り組んでおり, 多職種連携教育の研究にも力を入れている。研究手法は量的研究と質的研究を組み合わせ, 多面的な分析を行っている。

2. 名簿

教授(併任) :	鈴木康之	Yasuyuki Suzuki
教授(併任) :	藤崎和彦	Kazuhiko Fujisaki
教授(併任) :	丹羽雅之	Masayuki Niwa
准教授(併任) :	西城卓也	Takuya Saiki
助教(併任) :	川上ちひろ	Chihiro Kawakami
助教(併任) :	今福輪太郎	Rintaro Imafuku
助教(併任) :	阪下和美	Kazumi Sakashita

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 田邊政裕, 朝比奈真由美. 新しい医学教育の流れ'11 秋. 第 42 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2012 年: 1-172.
- 2) 若林英樹, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之. 新しい医学教育の流れ'12 冬. 第 43 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2012 年: 1-156.
- 3) 川上ちひろ, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 石川和信. 新しい医学教育の流れ'12 春. 第 44 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2012 年: 1-142.
- 4) 西城卓也, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之. 新しい医学教育の流れ'12 夏. 第 45 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2012 年: 1-240.
- 5) 西城卓也, 鈴木康之, 椎橋美智男, 菊川 誠, 青松棟吉. 新しく医学教育に携わることになった教員のための楽しい医学教育ベースック: 新しい医学教育の流れ'12 夏. 第 45 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2012 年: 79-121.
- 6) 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 1-241.
- 7) Suzuki Y. Perspective for the future medical education in Japan: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 9-15.
- 8) 藤崎和彦. 医学教育専門家養成: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 16-22.
- 9) 鈴木康之, 加藤智美. 問題基盤型学習: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 44-48.
- 10) 藤崎和彦. 医療コミュニケーション教育: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 56-62.
- 11) 西城卓也, 川尻宏昭. 外来における臨床教育: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 114-118.
- 12) 川上ちひろ, 加藤智美, 阿部恵子, 村岡千種, 那波潤美. 初年時における地域基盤型教育: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 146-150.
- 13) Driessen E, Yoshimura M, Suzuki Y. Portfolio in Medical Education: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 194-199.
- 14) 丹羽雅之. e-ポートフォリオシステムの構築と利用: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 200-204.
- 15) 鈴木康之, 加藤智美. 小児 OSCE: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 216-221.
- 16) 丹羽雅之. Faculty Development の企画・運営: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 222-227.

- 17) 鈴木康之. 教務事務職員に知ってほしい 10 のポイント: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 228-232.
- 18) 鈴木康之, 下澤伸行. 副腎白質ジストロフィーの造血幹細胞移植療法: Annual Review 神経 2012, 東京: 中外医学社; 2012 年: 241-245.
- 19) 鈴木康之. 小児科医の役割: 遠藤文夫編. 小児科診療ガイド, 東京: 中山書店; 2012 年: 2-4.
- 20) 鈴木康之. 身体診察の基本: 遠藤文夫編. 小児科診療ガイド, 東京: 中山書店; 2012 年: 8-11.
- 21) 鈴木康之. 副腎白質ジストロフィー: 大生定義編. すべての内科医が知っておきたい神経疾患の診かた, 考え方とその対応, 東京: 羊土社; 2012 年: 265-266.
- 22) 藤崎和彦. 学習方法: 全国歯科衛生士教育協議会編. 全国歯科衛生士教育協議会「平成 24 年度歯科衛生士専任教員講習会 I テキスト」, 名古屋: 全国歯科衛生士教育協議会; 2012 年: 5-16.
- 23) 西城卓也, 錦織 宏, 奈良信雄. 正統的周辺参加論に基づく Clinical Clerkship の構造: McGill 大学の事例研究: 医学教育 第 43 巻, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 2-8.
- 24) 西城卓也, 菊川 誠, 錦織 宏. アジア・太平洋地区における医学教育のコラボレーション: 医学教育 第 43 巻, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 40.
- 25) 西城卓也, 鈴木康之, 藤崎和彦, 田川まさみ, 吉岡俊正. 「医学教育専門家養成を目指したパイロットコースワーク第 3 弾: カリキュラムの開発・評価」報告: 医学教育 第 43 巻, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 66.
- 26) 鈴木富雄, 高見勇一郎, 伴信太郎, 西城卓也, 丹下直幸. 関節炎が 18 年間先行した乾癬性関節炎の 1 例: 日本脊椎関節炎学会 第 4 巻, 2012 年: 53-58.
- 27) 西城卓也. 臨床推論の教育: 大西弘高編. The 臨床推論, 東京: 南山堂; 2012 年: 212-220.
- 28) 西城卓也. 医学教育研究の努力のご褒美: 医学教育 第 43 巻, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 394-395.
- 29) 西城卓也. 医学教育の輸出入と新植民地主義: 医学教育 第 43 巻, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 429-431.
- 30) 藤崎和彦, 鈴木康之, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'12 秋. 第 46 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013 年: 1-170.
- 31) 西城卓也, 尾原晴雄, 錦織 宏, 向原 圭, 石川ひろの, 大滝純司, 伊藤俊之, 鈴木康之. 医学教育研究はじめの一歩—リサーチクエストを立ててみよう: 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'12 秋—第 46 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013 年: 87-97.
- 32) 丹羽雅之, 鈴木康之, 藤崎和彦, 大屋祐輔, 阿部幸恵編. 新しい医学教育の流れ'13 冬. 第 47 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013 年: 1-154.
- 33) 西城卓也, 吉岡俊正, Keh-Min Liu, Ducksun Ahn, 鈴木康之, 奈良信雄, 北村 聖. WFME Global Standard: Perspectives from East Asian Experiences—adaptation, reformation or Quality improvement?: 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'13 冬—第 47 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013 年: 5-28.
- 34) 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 小西靖彦, 錦織宏編. 新しい医学教育の流れ'13 春. 第 48 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013 年: 1-185.
- 35) 西城卓也, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'13 秋. 第 50 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013 年: 1-210.
- 36) 藤崎和彦. 学習方法: 全国歯科衛生士教育協議会編. 全国歯科衛生士教育協議会「平成 25 年度歯科衛生士専任教員講習会 II テキスト」, 名古屋: 全国歯科衛生士教育協議会; 2013 年: 26-36.
- 37) 藤崎和彦. 医療コミュニケーション研究の現状とチーム医療: 石崎雅人, 野呂幾久子編. これからの医療コミュニケーションに向けて, 東京: 篠原出版新社; 2013 年: 23-30.
- 38) 西屋克己, 西城卓也. 1 章: よい教育者とは: 大西弘高監訳, 西屋克己, 西城卓也和訳. 医学教育を学び始める人のために, 東京: 篠原出版新社; 2013 年: 3-9.
- 39) 今福輪太郎, 西城卓也. 2 章: 基本的教育原理の理解: 大西弘高監訳, 今福輪太郎, 西城卓也和訳. 医学教育を学び始める人のために, 東京: 篠原出版新社; 2013 年: 10-21.
- 40) 西城卓也, Yvonne Steinert, 阪下和美. 魅力あるワークショップの構築: 西城卓也, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'13 秋—第 50 回記念医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013 年: 43-65.
- 41) 西城卓也, 尾原晴雄, 錦織 宏, 向原 圭, 石川ひろの, 大滝純司, 伊藤俊之, 鈴木康之. 医学教育研究のスタートを洗練する: 西城卓也, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'13 秋—第 50 回記念医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013 年: 33-42.
- 42) 西城卓也. 英語を必要とする, 明確かつ具体的なゴールが英語力を上達させる: 岐阜大学教養教育推進センター編. 教養ブックレット 大学で「使える」英語を学ぶ方法, 岐阜: みらい; 2013 年: 54-55.
- 43) 鈴木康之. 小児科医の役割: 小児科研修ノート改訂第 2 版, 東京: 診断と治療社; 2014 年: 5-6.
- 44) 鈴木康之. 医学教育研究: 日本医学教育学会編. 医学教育白書 2014 年版, 東京: 篠原出版新社; 2014 年: 109-112.
- 45) 鈴木康之. 教育研究開発委員会: 日本医学教育学会編. 医学教育白書 2014 年版, 東京: 篠原出版新社; 2014 年: 319.
- 46) 平出 敦, 藤崎和彦, 西城卓也, 鈴木康之. 医学教育専門家育成: 日本医学教育学会編. 医学教育白書 2014 年版, 東京: 篠原出版新社; 2014 年: 113-115.
- 47) 藤崎和彦. プロフェッショナルリズム教育: 日本医学教育学会編. 医学教育白書 2014 年版, 東京: 篠原出版新社; 2014 年: 146-154.

- 48) 藤崎和彦. 科学論－命と癒やしの科学論－:国立大学法人岐阜大学教養教育推進センター編. 教員による授業の工夫集, 岐阜: 岐阜大学教養教育推進センター; 2014年: 18-19.
- 49) 丹羽雅之. 抗炎症、免疫関連薬:野村隆英, 石川直久編. シンプル薬理学 改訂第5版, 東京: 南江堂; 2014年: 223-258.
- 50) 丹羽雅之. 痛風治療薬:野村隆英, 石川直久編. シンプル薬理学 改訂第5版, 東京: 南江堂; 2014年: 273-274.
- 51) 川上ちひろ, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'13夏. 第49回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2014年: 1-131.
- 52) 丹羽雅之. 医学教育ユニットの現状:医学教育学会 広報・情報基盤開発委員会編. 医学教育白書 2014年版, 医学教育別冊, 東京: 篠原出版新社; 2014年: 116-118.
- 53) 西城卓也, 丹羽雅之, 川上ちひろ, 今福輪太郎, 阪下和美, 藤崎和彦, 鈴木康之. 医療者教育における教育者養成のこれまでとこれから:医学教育セミナーとワークショップの歴史が示す将来:医学教育 第45巻, 東京: 篠原出版新社; 2014年: 13-24.
- 54) 西城卓也. これからの医療コミュニケーションへ向けて:医学教育 第45巻, 東京: 篠原出版新社; 2014年: 8.
- 55) 西城卓也. プライマリ・ケア医のためのチェックポイント集:医学教育 第45巻, 東京: 篠原出版新社; 2014年: 12.
- 56) 西城卓也, 藤崎和彦, 奈良信雄. 第51回医学教育セミナーとワークショップ in 東京医科歯科大学:医学教育 第45巻, 東京: 篠原出版新社; 2014年: 46-47.
- 57) 西城卓也. 第54回医学教育セミナーとワークショップ in 九州大学:医学教育 第45巻4号, 東京: 篠原出版新社; 2014年: 292.
- 58) 青松棟吉, 大谷 尚, 西城卓也. 医学教育における研究倫理:医学教育 第45巻4号, 東京: 篠原出版新社; 2014年: 249-267.
- 59) 西城卓也. 教育実践への情熱を基にした, 冷静なりサーチクエスションの生成:医学教育 第45巻5号, 東京: 篠原出版新社; 2014年: 331-337.

著書 (欧文)

- 1) Tomatsu S, Montañó AM, Oikawa H, Giugliani R, Harmatz P, Smith M, Suzuki Y, Orii T. Impairment of Body Growth in Mucopolysaccharidoses. In: Preedy VR ed. Handbook of Growth and Growth Monitoring in Health and Disease. Springer; 2012:2091-2117.
- 2) Hara A, Aoki H, Takamatu M, Hatano Y, Tomita H, Kuno K, Niwa M, Kunisada T. Human embryonic stem cells transplanted into mouse retina induces neural differentiation. In: Tumors of the central nervous system, Stem Cells and Cancer Stem Cells, pt2. Part 4. Springer; 2012:291-298.
- 3) Niwa M, Nakashima M, Satoh K, Takamatsu M, Kobayashi K, Hatano Y, Hara A. Hypothermia and Hyperthermia affect neuronal degeneration, delayed neuronal death and microglial activation following transient forebrain ischemia. In: Delgado JIV and Garza VGF, ed Hypothermia:Prevention, Recognition and Treatment. Nova Science Publish; 2012:1-10.
- 4) Stalmeijer RE, Saiki T, Durante E, Strand P, Fernando C. With a little help from your alumni, SHE communicates; 2012:8-9.
- 5) Yoshida T, Fujisaki K. Interpersonal Communication Training in Dental Education. In: David I. Mostofsky, Farida Fortune, eds. Behavioral Dentistry, 2nd ed. Iowa: Blackwell Pub Professional; 2014:283-292.

総説 (和文)

- 1) 鈴木康之. 成人学習, 日本小児科学会雑誌 2012年; 116巻: 133-135.
- 2) 鈴木康之, 関口進一郎. カリキュラムの基本, 日本小児科学会雑誌 2012年; 116巻: 813-815.
- 3) 西屋克己, 鈴木康之. 学習者評価の基本, 日本小児科学会雑誌 2012年; 116巻: 1197-1198.
- 4) 鈴木康之. 医療羅針盤・私の提言ーよりよい後進育成は全ての医療者の責任であり, 今こそティーチャー・トレーニングが求められている, 月刊新医療 2012年; 449巻: 18-21.
- 5) 鈴木康之. モルキオ症候群. VIII代謝くムコ多糖症>, 内科増大号:知っておきたい内科症候群 2012年; 109巻: 1361-1362.
- 6) 鈴木康之. ムコ多糖症 III型, 日本臨床 新領域別症候群シリーズ 2012年; 20巻: 539-542.
- 7) 鈴木康之. ムコ多糖症の治療とケア, 難病と在宅ケア 2012年; 18巻: 20-23.
- 8) 鈴木康之. ムコ多糖症, Brain Medical 2012年; 24巻: 247-254.
- 9) 西城卓也. 行動主義から構成主義, 医学教育 2012年; 43巻: 290-291.
- 10) 西城卓也. 正統的周辺参加と認知的徒弟制, 医学教育 2012年; 43巻: 292-293.
- 11) 辻井正次, 川上ちひろ. 性と関係性の教育～発達障害の子どもとの実践から～ 第10回「バーチャル(仮想)な世界と現実世界のつきあい方を区別する」, 健康教室 2012年; 第734集: 41-43.
- 12) 辻井正次, 川上ちひろ. 性と関係性の教育～発達障害の子どもとの実践から～ 第11回「性的関心があると「誤解」されやすい行動を吟味する」, 健康教室 2012年; 第735集: 43-45.
- 13) 辻井正次, 川上ちひろ. 性と関係性の教育～発達障害の子どもとの実践から～ 第12回「性的問題に対処する」, 健康教室 2012年; 第736集: 48-49.
- 14) 川上ちひろ. 女性の ASD の人たちの思春期の支援について, アスペハート 2012年; 30巻: 22-27.

- 15) 鈴木康之. 医学・歯学教育者の人材育成, 日本歯科医学教育学会雑誌 2013年; 29巻: 7-10.
- 16) 藤崎和彦. 近年の医学生のあるりと卒前医学教育, 民医連医療 2013年; 495巻: 14-17.
- 17) 川上ちひろ, 加藤永歳, 辻井正次. 地域でペアレントトレーニングを始めよう! 発達障害の家族支援の第一歩<2>復興支援発! 地域の事業所を核に地域でペアレントトレーニングを実施する, 地域保健 2013年; 44集: 62-71.
- 18) 川上ちひろ, 加藤永歳, 辻井正次. 地域でペアレントトレーニングを始めよう! 発達障害の家族支援の第一歩<3>復興支援発! 地域の事業所を核に地域でペアレントトレーニングを実施する<2>, 地域保健 2013年; 44集: 62-71.
- 19) 川上ちひろ. 思春期に大切な異性と人間関係の構築の支援, 児童心理 2013年; 67巻: 112-117.
- 20) 川上ちひろ. 関係を創る・築く・繋ぐ: 発達障害のある子どもの成長【第1回】「発達障害のある子ども」と「関係」について: 概論, 子どもの心と学校臨床 2013年; 9号: 99-111.
- 21) 西城卓也, 田川まさみ. 医学教育者が備えるべき教育能力, 医学教育 2013年; 44巻: 90-98.
- 22) 西城卓也, 菊川 誠. 魅力的な学習と効果的な教授方法①, 医学教育 2013年; 44巻: 133-142.
- 23) 菊川 誠, 西城卓也. 魅力的な学習と効果的な教授方法②, 医学教育 2013年; 44巻: 243-252.
- 24) 田川まさみ, 西城卓也. 医学教育における学習者の評価①, 医学教育 2013年; 44巻: 345-357.
- 25) 錦織 宏, 西城卓也. 医学教育における学習者の評価②, 医学教育 2013年; 44巻: 429-438.
- 26) 真嶋由貴恵, 中村裕美子, 丹羽雅之, 木下淳博, 吉田素文. 医療系教育におけるeラーニングの動向-医療系eラーニング全国交流会(JMeL)から-, 教育システム情報学会 2014年; 31巻: 8-18.
- 27) 西城卓也, 丹羽雅之, 川上ちひろ, 今福輪太郎, 阪下和美, 藤崎和彦, 鈴木康之. 医学者教育における教育者養成のこれまでとこれから-医学教育セミナーとワークショップの歴史が示す将来-, 医学教育 2014年; 45巻: 13-24.
- 28) 田川まさみ, 西城卓也, 錦織 宏. カリキュラムの開発, 医学教育 2014年; 45巻: 25-35.
- 29) 錦織 宏, 西城卓也, 田川まさみ. カリキュラム/プログラム評価, 医学教育 2014年; 45巻: 79-86.
- 30) 川上ちひろ. 関係を創る・築く・繋ぐ: 発達障害のある子どもの成長【第2回】「発達障害のある子ども」と「関係」について: 概論, 子どもの心と学校臨床 2014年; 10号: 97-108.
- 31) 川上ちひろ. 関係を創る・築く・繋ぐ: 発達障害のある子どもの成長【第3回】「発達障害のある子ども」と「関係」について: 概論, 子どもの心と学校臨床 2014年; 11号: 117-127.
- 32) 川上ちひろ. 自己理解「性の問題からのアプローチ」, アスペハート 2014年; 37巻: 52-56.
- 33) 川上ちひろ. 看護スタッフが感じる「“対応が難しい”学習者」とは, 看護管理 2014年; 24巻: 932-939.

総説 (欧文)

- 1) Tomatsu S, Mackenzie WG, Theroux MC, Mason RW, Thacker MM, Shaffer TH, Montañó AM, Rowan D, Sly W, Alméciga-Díaz CJ, Barrera LA, Chinen Y, Yasuda E, Ruhnke K, Suzuki Y, Orii T. Current and emerging treatments and surgical interventions for Morquio A syndrome: a review. Research and Reports in Endocrine Disorders. 2012;2:65-77.
- 2) Suzuki Y, Niwa M. e-PBL: possibilities and limitations. J Med Education. 2012;16:1-8.
- 3) Tomatsu S, Alméciga-Díaz CJ, Barbosa H, Montañó AM, Barrera LA, Shimada T, Yasuda E, Mackenzie WG, Mason RW, Suzuki Y, Orii KE, Orii T. Therapies of mucopolysaccharidosis IVA (Morquio A syndrome). Expert Opinion on Orphan Drugs. 2013;1:805-818.

原著 (和文)

- 1) 西城卓也, 久保田伊代, 鈴木康之. 認知的徒弟制に基づいた, 学生による臨床指導医評価: マーストリヒト臨床教育評価表(The Maastricht Clinical Teaching Questionnaire (MCTQ))日本語版, 医学教育 2012年; 43巻: 86.
- 2) 阿部恵子, 若林英樹, 西城卓也, 川上ちひろ, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之. Trait Emotional Intelligence Que-SFとJefferson Scale of Physician Empathyの日本語版開発と信頼性・妥当性の検討, 医学教育 2012年; 43巻: 351-359.
- 3) 大西弘高, 川崎 勝, 椎橋美智男, 阿部幸恵, 大久保由美子, 片岡仁美, 杉本なおみ, 高村昭輝, 内藤 亮, 丹羽雅之. 医学教育情報館(MEAL)の構築プロセス, 医学教育 2012年; 43巻: 215-220.
- 4) 藤崎和彦. 新患アンケートを読む-患者の目線, 医療の課題, 大阪保険医雑誌 2012年; 552巻: 5-11.
- 5) 伊藤友美, 刈谷三月, 中里綾子, 藤崎和彦. 話を聞いて理解し, 自分の思いを伝える力を高める取り組み, 看護 2012年; 64巻: 48-51.
- 6) 志村俊郎, 吉井文均, 吉村明修, 阿部恵子, 高橋優三, 佐伯晴子, 藤崎和彦, 阿曾亮子, 井上千鹿子. 模擬患者・標準模擬患者(SP)養成のカリキュラム, 医学教育 2012年; 43巻: 33-36.
- 7) 阿部恵子, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之. 医学生のEmotional Intelligence (EI)とEmpathy: 性差および学年差の検討, 医学教育 2013年; 44巻: 315-326.
- 8) 木尾哲朗, 俣木志朗, 藤崎和彦, 大西弘高, 小川哲次, 鬼塚千絵, 西原達次. 歯学士教育課程でのプロフェッショナルリズム教育の構築, 日本歯科医学教育学会雑誌 2013年; 29巻: 63-74.
- 9) 會田信子, 半谷眞七子, 阿部恵子, 村岡千種, 久田 満, 鈴木伸一, 青松棟吉, 安井浩樹, 藤崎和彦, 植村和正. 模擬患者用ストレス調査票(SPSSQ)2013年度版の開発と信頼性・妥当性の検証-模擬患者の健康と継続参加を志向したストレス状態の包括的測定-, 看護科学研究 2014年; 12巻: 1-23.

原著 (欧文)

- 1) Tanaka A, Okuyama T, Suzuki Y, Sakai N, Takakura H, Sawada T, Tanaka T, Otomo T, Ohashi T, Ishige-Wada M, Yabe H, Ohura T, Suzuki N, Kato K, Adachi S, Kobayashi S, Mugishima H, Kato S. Long-term efficacy of hematopoietic stem cell transplantation on brain involvement in patients with mucopolysaccharidosis type II: A nationwide survey in Japan. *Molecular Genetics and Metabolism*. 2012;107:513-520. IF 2.827
- 2) Goda W, Satoh K, Nakashima M, Hara A, Niwa M. PBN fails to suppress in delayed neuronal death of hippocampal CA1 injury following transient forebrain ischemia in gerbils. *Neurosci Lett*. 2012;517:47-51. IF 2.055
- 3) Kawakami C, Ohnishi M, Sugiyama T, Someki F, Nakamura K, Tsujii M. The risk factors for criminal behaviour in high-functioning autism spectrum disorders(HFASDs):A comparison of childhood adversities between individuals with HFASDs who exhibit criminal behaviour and those with HFASD and no criminal histories. *Research in Autism Spectrum Disorders*. 2012;6:949-957. IF 2.378
- 4) Abe K, Evans P, Austin EJ, Suzuki Y, Fujisaki K, Niwa M, Aomatsu M. Expressing one's feelings and listening to others increases emotional intelligence: a pilot study of Asian medical students. *BMC Med Educ*. 2013;13:82. IF 1.409
- 5) Dũng VC, Tomatsu S, Montaño AM, Gottesman G, Bober MB, Mackenzie W, Maeda M, Mitchell GA, Suzuki Y, Orii T. Mucopolysaccharidosis IVA: Correlation between genotype, phenotype and keratin sulfate levels. *Mol Genet Metab*. 2013;110:129-138. IF 2.827
- 6) Tomatsu S, Fujii T, Fukushi M, Oguma T, Shimada T, Maeda M, Kida K, Shibata Y, Futatsumori H, Montaño AM, Mason RW, Yamaguchi S, Suzuki Y, Orii T. Newborn screening and diagnosis of mucopolysaccharidoses. *Mol Genet Metab*. 2013;110:42-53. IF 2.827
- 7) Yasuda E, Fushimi K, Suzuki Y, Shimizu K, Takami T, Zustin J, Patel P, Ruhnke K, Shimada T, Boyce B, Kokas T, Barone C, Theroux M, Mackenzie W, Nagel B, Ryerse JS, Orii KE, Iida H, Orii T, Tomatsu S. Pathogenesis of Morquio A syndrome: an autopsied case reveals systemic storage disorder. *Mol Genet Metab*. 2013;109:301-311. IF 2.827
- 8) Patel P, Suzuki Y, Maeda M, Yasuda E, Shimada T, Orii KE, Orii T, Tomatsu S. Growth charts for patients with Hunter Syndrome. *Mol Genet Metab Rep*. 2014;1:5-18. IF 2.827
- 9) Tomatsu S, Shimada T, Mason RW, Kelly J, LaMarr WA, Yasuda E, Shibata Y, Futatsumori H, Montaño AM, Yamaguchi S, Suzuki Y, Orii T. Assay for Glycosaminoglycans by Tandem Mass Spectrometry and its Applications. *J Anal Bioanal Tech*. 2014 DOI: <http://dx.doi.org/10.4172/2155-6121.S2-006>. 2014. IF 3.120
- 10) Taguchi A, Niwa M, Hoshi M, Saito K, Masutani T, Hisamatsu K, Kobayashi K, Hatano Y, Tomita H, Hara A. Indoleamine 2,3-dioxygenase 1 is upregulated in activated microglia in mice cerebellum during acute viral encephalitis. *Neurosci Lett*. 2014;564:120-125. IF 2.055
- 11) Niwa M, Yoshida S, Takamizawa K, Nagaoka S, Kawakubo N, Takahashi Y, Suzuki Y. Facilitation of web-based Internet PBL: what is an adequate group size?. *IeJSME*. 2014;8:4-11. IF 0.500
- 12) Imafuku R, Kataoka R, Mayahara M, Suzuki H, Saiki, T. Students' experiences in interdisciplinary problem-based learning: A discourse analysis of group interaction. *Interdisciplinary Journal of Problem-based Learning*. 2014;8:1-18.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 岐阜大学医学教育開発研究センター; 文科省特別経費教育関係共同実施分: 多職種連携医療教育法の開発とFDの全国展開; 平成23-26年度; 62,000千円(18,500:14,500:14,500:14,500千円)
- 2) 研究代表者: 鈴木康之, 研究分担者: 藤崎和彦, 丹羽雅之, 西城卓也; 科学研究費補助金基盤研究(B): 医学・医療教育指導者の育成システム構築に関する研究; 平成23-25年度; 14,000千円(5,000:4,500:4,500千円)
- 3) 研究代表者: 衛藤義勝, 研究分担者: 鈴木康之; 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業: ライソゾーム病(ファブリー病含む)に関する調査研究; 平成22-26年度; 12,900千円(3,000:3,000:3,000:900千円)
- 4) 研究代表者: 丹羽雅之; 科学研究費補助金基盤研究(C): コバルトクロライド誘発網膜神経障害モデルを用いた再生治療に関する基礎的研究; 平成22-24年度; 4,160千円(1,690:1,560:910千円)
- 5) 研究代表者: 河野健一, 研究分担者: 丹羽雅之; 科学研究費補助金基盤研究(C): 6年一貫プロフェッショナル教育におけるe-ポートフォリオの開発と実践; 平成22-24年度; 3,640千円(1,300:1,170:1,170千円)
- 6) 研究代表者: 阿部恵子(名古屋大学), 研究分担者: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 若林英樹, 西城卓也, 川上ちひろ; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C): 医学生の情動能力育成のための6年間継続

的コミュニケーション教育プログラムの開発；平成 23-25 年度；5,200 千円(2,340：1,430：1,430 千円)

- 7) 研究代表者：伴信太郎(名古屋大学), 研究分担者：西城卓也, 青松棟吉；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：臨床推論学習とコミュニケーション学習を融合した医療面接実習方略の構築とその評価；平成 23-25 年度；3,900 千円(1,820：1,170：910 千円)
- 8) 研究代表者：川上ちひろ；大学活性化経費(研究：科研採択支援)：コミュニケーションが苦手な医療系学生の支援ニーズと援助方法の開発及び啓発；平成 24 年度；500 千円
- 9) 研究代表者：西城卓也；大学活性化経費(研究：教育)：外国人医療スタッフとの映像を通じたインタラクティブな教育方略を基盤とする, 海外臨床実習参加志望医学生向けの, 医療英語・および基本的臨床技能教育プログラム(授業科目：医療英語(必修選択科目))；平成 24 年度；490 千円
- 10) 研究代表者：西城卓也, 研究分担者：鈴木康之, 川上ちひろ；科学研究費補助金基盤研究(B)：小グループ学習における医学生の学習スタイルに関する文化的検証とモデル開発；平成 24-26 年度；3,500 千円(1,300：1,500：700 千円)
- 11) 研究代表者：西城卓也；岐阜大学 COC 地域志向教育プロジェクト：岐阜大学医学部地域体験実習における市民との交流を通じた街づくり；平成 26 年度；200 千円
- 12) 研究代表者：今福輪太郎；科学研究費補助金若手研究(B)：専門職連携における医療人としてのアイデンティティ形成過程の解明とその教育的応用；平成 26-28 年度；3,640 千円(1,560：1,430：650 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

鈴木康之：

- 1) 日本医学教育学会理事, 評議員(～現在)
- 2) 日本小児科学会代議員(～現在)
- 3) 日本先天代謝異常学会, 評議員(～現在)
- 4) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)
- 5) 東海臨床遺伝・代謝懇話会世話人(～現在)
- 6) 日本シミュレーション医療教育学会理事, 評議員(～現在)

藤崎和彦：

- 1) 日本医学教育学会評議員(～現在)
- 2) 日本医学教育学会医学教育専門家制度委員会副委員長(～現在)
- 3) 日本医学教育学会教材開発・SP 委員会副委員長(～現在)
- 4) 医療コミュニケーション研究会会長(～現在)
- 5) 日本ヘルスコミュニケーション学会監事(～現在)
- 6) RIAS 研究会日本支部(RIAS Japan)代表(～現在)

丹羽雅之：

- 1) 日本炎症・再生医学会評議員(～現在)
- 2) 日本薬理学会評議員(～現在)
- 3) 日本医学教育学会評議員(～現在)
- 4) 日本臨床薬理学会評議員(～現在)
- 5) 日本医学教育学会広報・情報基盤委員会委員(～現在)
- 6) 医療系 e-learning 全国交流会 副会長(～現在)

- 7) 教育システム情報学会編集委員(～現在)
- 8) 日本シミュレーション医療教育学会幹事, 評議員(～現在)
- 9) 東海7大学医学教育連絡協議会幹事(～現在)
- 10) 教育システム情報学会人材育成委員会医療・看護部会委員(～現在)

西城卓也:

- 1) 日本医学教育学会医学教育専門家育成検討委員会ワーキングメンバー(平成24年4月～現在)
- 2) 日本医学教育学会編集委員会委員(平成24年4月～現在)
- 3) 日本医学教育学会教育研究開発委員(平成24年4月～現在)

川上ちひろ:

- 1) 日本医学教育学会準備教育・行動科学教育委員会委員(平成26年1月～現在)

今福輪太郎:

- 1) 日本シミュレーション医療教育学会編集委員(～現在)

阪下和美:

- 1) 日本医学教育学会国際関係委員(～現在)

2) 学会開催

鈴木康之:

- 1) 第43回医学教育セミナーとワークショップ(平成24年1月, 岐阜)
- 2) 第44回医学教育セミナーとワークショップ(平成24年5月, 福島)
- 3) 第45回医学教育セミナーとワークショップ(平成24年8月, 岐阜)
- 4) 第46回医学教育セミナーとワークショップ(平成24年10月, 岐阜)
- 5) 第54回日本先天代謝異常学会(平成24年11月, 岐阜)
- 6) 第47回医学教育セミナーとワークショップ(平成25年1月, 沖縄)
- 7) 第48回医学教育セミナーとワークショップ(平成25年6月, 京都)
- 8) 第49回医学教育セミナーとワークショップ(平成25年8月, 岐阜)
- 9) 第50回医学教育セミナーとワークショップ(平成25年11月, 岐阜)
- 10) 第51回医学教育セミナーとワークショップ(平成26年1月, 東京)
- 11) 第52回医学教育セミナーとワークショップ(平成26年5月, 秋田)
- 12) 第53回医学教育セミナーとワークショップ(平成26年8月, 岐阜)
- 13) 第54回医学教育セミナーとワークショップ(平成26年10月, 福岡)

藤崎和彦:

- 1) 第22回医療コミュニケーション研究会例会(平成24年6月, 名古屋)
- 2) 第7回RIASトレーニングワークショップ(平成24年8月, 東京)
- 3) 第23回医療コミュニケーション研究会例会(平成24年12月, 名古屋)
- 4) 第8回RIASトレーニングワークショップ(平成25年3月, 名古屋)
- 5) 第24回医療コミュニケーション研究会例会(平成25年6月, 名古屋)
- 6) 第5回ヘルスコミュニケーション学会(平成25年8月, 岐阜)
- 7) 第25回医療コミュニケーション研究会例会(平成25年12月, 名古屋)
- 8) 第9回RIASトレーニングワークショップ開催(平成26年2月, 東京)
- 9) 第26回医療コミュニケーション研究会例会(平成26年5月, 名古屋)
- 10) 第10回RIASトレーニングワークショップ(平成26年10月, 名古屋)
- 11) 第27回医療コミュニケーション研究会例会(平成26年12月, 名古屋)

丹羽雅之:

- 1) 第6回医療系全国交流会(平成24年1月, 岐阜)
- 2) 第43回医学教育セミナーとワークショップ(平成24年1月, 岐阜)
- 3) 第44回医学教育セミナーとワークショップ(平成24年5月, 福島)
- 4) 第45回医学教育セミナーとワークショップ(平成24年8月, 岐阜)

- 5) 第 46 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 24 年 10 月, 岐阜)
- 6) 第 47 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 1 月, 沖縄)
- 7) 第 48 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 6 月, 京都)
- 8) 第 49 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 8 月, 岐阜)
- 9) 第 50 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 11 月, 岐阜)
- 10) 第 51 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 26 年 1 月, 東京)
- 11) 第 52 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 26 年 5 月, 秋田)
- 12) 第 53 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 26 年 8 月, 岐阜)
- 13) 第 54 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 26 年 10 月, 福岡)

3) 学術雑誌

鈴木康之：

- 1) Medical Education ; Editor(～現在)
- 2) 日本シミュレーション医療教育学会雑誌；編集委員(平成 25 年～現在)

丹羽雅之：

- 1) 教育システム情報学会編集委員(～現在)

今福輪太郎：

- 1) 日本シミュレーション医療教育学会；編集委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

鈴木康之：

- 1) 2nd Asian Congress for Inherited Metabolic Disease. (2012.04, Seoul, Symposium: Hematopoietic Stem Cell Transplantation for X-linked Adrenoleukodystrophy; Symposist)
- 2) 第 37 回日本小児神経学会東海地方会(平成 24 年 7 月, 名古屋, 特別講演「医療者教育 10 年の経験から」演者)
- 3) 第 44 回日本医学教育学会(平成 24 年 7 月, 横浜, シンポジウム「認定医学教育専門家の位置づけと求められる役割」座長)
- 4) 第 44 回日本医学教育学会(平成 24 年 7 月, 横浜, パネルディスカッション「診療参加型臨床実習の評価」座長)
- 5) 第 54 回日本先天代謝異常学会(平成 24 年 11 月, 岐阜, 会長講演「研究生活からの学び」演者)
- 6) 第 26 回日本小児脂質研究会(平成 24 年 11 月, 川越, 特別講演「ペルオキシソームにおける脂肪酸代謝とその異常」演者)
- 7) 第 12 回日本小児医学教育研究会(平成 24 年 12 月, 東京, 特別講演「小児科専門医の能力向上を目指して」演者)
- 8) 平成 24 年度先導的大学の改革推進委託事業「高齢社会を踏まえた医療供給体制見直しに対応する医療系教育の在り方に関する調査研究」医学チーム(平成 24 年 12 月, 東京, シンポジウム「多職種連携教育法の開発と FD の全国展開」シンポジスト)
- 9) 第 32 回日本歯科医学教育学会(平成 25 年 7 月, 札幌, 特別講演「医学・歯学教育者の人材育成」演者)
- 10) 第 45 回日本医学教育学会(平成 25 年 7 月, 千葉, シンポジウム「コンピテンシーを基盤とする専門医認定をめざして：日本小児科学会の取り組み」演者)
- 11) 第 45 回日本医学教育学会(平成 25 年 7 月, 千葉, パネルディスカッション「教育の質の改善をめざして、医学教育の根拠を遣う、創る」座長)
- 12) 第 2 回全国シンポジウム「日本の国情・2 次医療研の実情を熟考して、理想的医師・医療者育成教育の展開を考える」(平成 25 年 11 月, 秋田, 特別講演「医療者教育の人材育成戦略—日本の覚悟と挑戦：MEDC 12 年の経験から」演者)
- 13) 第 127 回関東連合産科婦人科学会(平成 26 年 6 月, 東京, モーニングセミナー「専門医制度改革を視野に入れた日本小児科学会の取組」演者)
- 14) 第 46 回日本医学教育学会大会(平成 26 年 7 月, 和歌山, 日韓医学教育学会交流招請講演「Students' perception of education climate in Korean medical schools」座長)
- 15) 第 46 回日本医学教育学会大会(平成 26 年 7 月, 和歌山, パネルディスカッション「医学教育研究は

じめの一步：論文執筆に向けた 12 Tips」座長)

- 16) 第 46 回日本医学教育学会大会(平成 26 年 7 月, 和歌山, 産学連携セミナー4「国際的医療人育成を視野に入れた臨床医学教育のあり方とオンラインデータベースの活用法」座長)
- 17) 第 46 回日本医学教育学会大会(平成 26 年 7 月, 和歌山, Lunch Talk with the Specialist 2「making research relevant; can we improve on our present position?」座長)
- 18) 3rd Asia -Pacific Joint Conference on Problem-Based Learning (APJC-PBL) 2014(2014.12, Thailand, Debate Session II: e-PBL vs f-PBL; Presenter)
- 19) 第 14 回日本小児医学教育研究会(平成 26 年 12 月, 大阪, 特別講演「小児科指導者として如何に小児科医の総合的能力を伸ばすか?」演者)

藤崎和彦：

- 1) 第 1 回岐阜県歯科衛生士会研修会(平成 24 年 5 月, 岐阜, 特別講演「歯科衛生士に必要なコミュニケーション」演者)
- 2) 第 44 回日本医学教育学会(平成 24 年 7 月, 横浜, シンポジウム「認定医学教育専門家の位置づけと求められる役割」座長)
- 3) 九州大学登録模擬患者 15 周年記念シンポジウム(平成 24 年 8 月, 福岡, 基調講演「わが国の模擬患者 現在・過去・未来」演者)
- 4) COML 模擬患者活動 20 周年記念シンポジウム(平成 24 年 10 月, 大阪, パネルディスカッション「模擬患者の役割と展望-医学教育の立場から-」パネリスト)
- 5) 第 2 回シンポジウム「歯学士教育課程でのプロフェッショナル教育の構築」(平成 24 年 11 月, 北九州市, 特別講演「医療人プロフェッショナル教育は必要か」演者)
- 6) 名古屋 SP 研究会 10 周年記念シンポジウム(平成 24 年 11 月, 名古屋, 基調講演「大学を越えた SP 連携の可能性」演者)
- 7) 第 13 回福岡県薬剤師会ファーマシューティカルケアシンポジウム(平成 25 年 3 月, 福岡, 基調講演「患者支援のためのコミュニケーションスキルアップ」演者)
- 8) 神戸学院大学特別研修会(平成 25 年 3 月, 神戸, 基調講演「SP に求められる演技とフィードバック」演者)
- 9) 第 45 回日本医学教育学会(平成 25 年 7 月, 千葉, シンポジウム「シミュレーション教育資源の有効利用を促す」座長)
- 10) 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部「第 3 回 How to 医療コミュニケーション教育」(平成 25 年 11 月, 徳島, 特別講演「医歯薬学教育アウトカムに応じた模擬患者育成」演者)
- 11) 平成 25 年度第 4 回愛知県女性薬剤師会学術講演会(平成 25 年 11 月, 名古屋, 基調講演「薬剤師のための行動変容援助スキル理論編①」演者)
- 12) 第 3 回シンポジウム「歯学医療人育成におけるプロフェッショナル教育の方略を考える」(平成 26 年 2 月, 北九州, 基調講演「アウトカム基盤型教育時代のプロフェッショナル教育と評価」演者)
- 13) 日本薬学会第 134 年会シンポジウム「先導的薬剤師養成に向けた実践的アドバンス教育プログラムの共同開発」(平成 26 年 3 月, 熊本, 「共用試験で終わらない医療専門職教育—グローバル化の中でアウトカム基盤型教育への対応—」シンポジスト)
- 14) 平成 25 年度第 5 回愛知県女性薬剤師会学術講演会(平成 26 年 3 月, 名古屋, 基調講演「薬剤師のための行動変容援助スキル実戦編②」演者)
- 15) 神戸学院大学模擬患者会 2014 年度特別研修会(平成 26 年 3 月, 神戸, 基調講演「感情の動きに注目した SP の演技とフィードバック」演者)
- 16) 愛知県薬剤師会平成 26 年度第 1 回医療コミュニケーション研修会(平成 26 年 6 月, 名古屋, 基調講演「医療コミュニケーション・スキルの基本を学ぶ」演者)
- 17) 愛知県薬剤師会平成 26 年度第 2 回医療コミュニケーション研修会(平成 26 年 6 月, 名古屋, 基調講演「医療コミュニケーション・スキルの基本を模擬患者演習で身につける」演者)
- 18) 愛知県薬剤師会平成 26 年度第 3 回医療コミュニケーション研修会(平成 26 年 7 月, 名古屋, 基調講演「中上級レベルの医療コミュニケーション・スキルを模擬患者演習で身につける」演者)
- 19) 第 24 回日本医療薬学会年会シンポジウム「今, 考えよう, あなたのコミュニケーション」(平成 26 年 9 月, 名古屋, 基調報告「患者との良好なコミュニケーションをとるうえでのポイント」演者)
- 20) 第 16 回日本歯科医療管理学会九州支部学術大会ワークショップ「チームで目指す, 安心・安全, そして信頼」(平成 26 年 11 月, 佐賀, キーノートスピーチ「医療人であること, そしてチームというこ

と」演者)

- 21) 平成 26 年度島根県立大学模擬患者スキルアップセミナー(平成 26 年 11 月, 出雲, 基調報告「効果的なフィードバックについて」演者)
- 22) 平成 26 年度日本大学学部連携研究推進シンポジウム「学部間協力による芸術学部標準模擬患者養成」(平成 26 年 12 月, 東京, 基調講演「全国における模擬患者・標準模擬患者養成の現状」演者)

丹羽雅之 :

- 1) 第 7 回医療系 e-ラーニング全国交流会(平成 25 年 1 月, 徳島, 招待講演, 座長)
- 2) 第 45 回日本医学教育学会(平成 25 年 7 月, 千葉, パネルディスカッション「ネットワークを活用した医療者教育の情報のあり方」座長)
- 3) 第 46 回日本医学教育学会(平成 26 年 7 月, 和歌山, シンポジウム「e-ラーニングを機能させるためのシステムと考え方」座長)

西城卓也 :

- 1) 第 44 回日本医学教育学会(平成 24 年 7 月, 横浜, シンポジウム「医学教育専門家認定制度を考える」シンポジスト)
- 2) 第 46 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 24 年 10 月, 岐阜, 「教育設計の原理—医学教育への実践的応用」座長)
- 3) 全国シンポジウム『日本の国情・2 次医療圏の実情を熟考して, 理想的医師・医療者育成教育の展開を考える 2012』(平成 24 年 11 月, 秋田, シンポジウム「連携教育が直面する挑戦: 最近の研究と知見から学ぶこと」シンポジスト)
- 4) 第 47 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 1 月, 沖縄, 特別講演「Understanding how we learn: Implications for Educators」座長)
- 5) 学生・研修医のためのプライマリ・ケアの集い in 長崎(平成 25 年 2 月, 長崎, 特別講演「内科医になるための後期研修プログラムをデザインする」演者)
- 6) 第 45 回日本医学教育学会(平成 25 年 7 月, 千葉, シンポジウム「医学教育の根拠を使う、創る」座長)
- 7) 第 45 回日本医学教育学会(平成 25 年 7 月, 千葉, シンポジウム「叡智のフレームワーク」座長・演者)
- 8) 第 45 回日本医学教育学会(平成 25 年 7 月, 千葉, シンポジウム「専門医育成講習会のアウトライン」演者)
- 9) 第 45 回日本医学教育学会(平成 25 年 7 月, 千葉, シンポジウム「専門医育成コースワーク」演者)
- 10) 第 5 回日本ヘルスコミュニケーション学会(平成 25 年 8 月, 岐阜, シンポジウム「継続的な交流と省察を通じた“社会における個人”の理解の深化」シンポジスト)
- 11) 第 50 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 11 月, 岐阜, 特別講演「A journey, not a destination. 終着駅のない旅」座長)
- 12) 第 50 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 11 月, 岐阜, シンポジウム「発信する医療教育. 部門発展, 研究推進, キャリア開発」演者)
- 13) 第 46 回日本医学教育学会(平成 26 年 7 月, 和歌山, 講演「Lunch talk with Specialists2: Making research Relevant: can we improve on our present position?」座長)
- 14) 第 46 回日本医学教育学会(平成 26 年 7 月, 和歌山, シンポジウム「臨床推論の教育」座長)
- 15) 第 46 回日本医学教育学会(平成 26 年 7 月, 和歌山, パネルディスカッション「医学教育研究はじめての一步: 論文執筆に向けた 12Tips」演者)
- 16) 第 47 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 26 年 8 月, 岐阜, セミナー「医学教育における学習者評価」座長)
- 17) Conference of Collaborative Project to Increase Production of Rural Doctor 2014.(2014.09, Khaoyai, Thailand, Invited Lecture: The East meets the West.Cross cultural approach in medical education; Invited Speaker)
- 18) 平成 26 年度大学改革シンポジウム「地域・市民とともに育てる医療人」(平成 26 年 12 月, 岐阜, 総合司会)

阪下和美 :

- 1) 第 2 回全国シンポジウム「日本の国情・2 次医療圏の実情を熟考して, 理想的医師・医療者育成教

育の展開を考える 2013」(平成 25 年 11 月, 秋田, シンポジウム「総合小児科医の作り方～米国レジデンシー教育から日本が応用できるもの～」 演者・シンポジスト)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 西城卓也：医学教育賞(懸田賞)(平成 24 年度)
- 2) 西城卓也：Best Poster Presentation. A finalist Award. (10th Asia Pacific Medical Education Conference)(平成 25 年度)

9. 社会活動

鈴木康之：

- 1) 医師国家試験委員(～平成 24 年)
- 2) 日本ムコ多糖症親の会顧問(～現在)
- 3) ALD 親の会顧問(～現在)
- 4) 東京医科歯科大学医歯学教育システム研究センター運営委員(～現在)
- 5) 社団法人日本専門医制評価・認定機構チーフサーベイヤー(～平成 25 年)
- 6) 科学研究費委員会専門委員(日本学術振興会)(平成 24 年度)
- 7) JICA「ベトナム保健医療従事者の質の改善プロジェクト」(平成 24 年度～現在)
- 8) 国立大学医学部長会議教育制度・カリキュラムに関する小委員会委員(平成 25 年度～現在)
- 9) 国立大学医学部長会議臨床教育合同会議委員(平成 26 年度～現在)
- 10) 日本専門医機構基本領域(小児科)専門医委員会委員(平成 26 年度～現在)
- 11) 日本専門医機構基本領域(小児科)研修委員会委員(平成 26 年度～現在)

藤崎和彦：

- 1) 医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 OSCE 実施小委員会模擬患者標準化専門部会副部長(平成 24 年～現在)
- 2) 多治見市健康づくり計画策定会議アドバイザー(平成 24 年度～現在)

西城卓也：

- 1) NPO 法人卒後臨床研修評価機構サーベイヤー(～現在)

10. 報告書

- 1) 鈴木康之, 田邊政裕, 朝比奈真由美：ニュース, 第 42 回医学教育セミナーとワークショップ in 千葉：医学教育 43：32(平成 24 年 2 月)
- 2) 藤崎和彦：愛知学院大学歯学部における FD 講演会：愛知学院大学大学院歯学研究科未来口腔医療研究センター「未来口腔医療研究センター報告書 2 号」：1-28(平成 24 年 3 月)
- 3) 藤崎和彦：OSCE で終わらない医師の医療面接スキル：鳥取大学医学部総合医学教育センター「地域医療を担う全人的医療人養成事業平成 23 年度成果報告書」：7-9(平成 24 年 3 月)
- 4) 藤崎和彦：SP 参加型医療面接教育の意義と模擬患者の役割：鳥取大学医学部総合医学教育センター「地域医療を担う全人的医療人養成事業平成 23 年度成果報告書」：78-87(平成 24 年 3 月)
- 5) 藤崎和彦, 田川まさみ, 西城卓也, 井内康輝, 錦織 宏, 渡邊洋子, 大谷 尚, 守屋利佳, 吉岡俊正, 吉田素文, 鈴木康之：日本医学教育学会認定医学教育専門家資格制度創設への提言：医学教育 43：221-231(平成 24 年 6 月)
- 6) 丹羽雅之：全国ユニット機関名簿：医学教育 43：253-262(平成 24 年 6 月)
- 7) 鈴木康之：第 54 回日本先天代謝異常学会：特殊ミルク情報 48：61-63(平成 24 年 11 月)
- 8) 丹羽雅之：アナウンスメント, 第 47 回医学教育セミナーとワークショップ：医学教育 43：440(平成 24 年 12 月)
- 9) 丹羽雅之：全国ユニット機関名簿：医学教育 44：198-208(平成 25 年 6 月)
- 10) 藤崎和彦：模擬患者の役割と展望—医学教育の立場から：ささえあい医療人権センターCOML 編「COML 模擬患者活動 20 周年記念シンポジウム報告集」ささえあい医療人権センターCOML：15-19(平成 25 年 10 月)
- 11) 鈴木康之, 錦織 宏：ニュース, 第 48 回医学教育セミナーとワークショップ in 京都大学：医学教育 44：368-369(平成 25 年 10 月)
- 12) 鈴木康之：ムコ多糖症 II 型の成長曲線作成：厚生労働省研究費補助金(難治性疾患克服研究事業)平

- 成 25 年度総括・分担研究年度終了報告書：69-71(平成 26 年 3 月)
- 13) 鈴木康之：ムコ多糖症および副腎白質ジストロフィーの早期診断治療：厚生労働省研究費補助金(難治性疾患克服研究事業)総合研究報告書：109-112(平成 26 年 3 月)
 - 14) 鈴木康之：医学・医療教育指導者の育成システム構築に関する研究：科学研究費補助金基盤研究(B)23390129 平成 23 年度～25 年度研究成果報告書：1-118(平成 26 年 3 月)
 - 15) 藤崎和彦：特別寄稿：模擬患者活動 10 周年おめでとうございます：日本医科大学模擬患者養成と活動 10 年の歩み(日本医科大学教育推進室・日本医科大学 SP の会)：2(平成 26 年 3 月)
 - 16) 丹羽雅之：全国ユニット機関名簿：医学教育 45：224-236(平成 26 年 6 月)
 - 17) 今福輪太郎：意見。特集「多職種連携教育」を読んで：医学教育 45：296-297(平成 26 年 8 月)
 - 18) 今福輪太郎, 長谷川仁志：ニュース。第 52 回医学教育セミナーとワークショップ in 秋田：医学教育 45：300-302(平成 26 年 8 月)
 - 19) 鈴木康之：ニュース。第 53 回医学教育セミナーとワークショップ：医学教育 45：381-383(平成 26 年 10 月)
 - 20) 藤崎和彦：市民とともに良い医師を育てる：平成 26 年度大学改革シンポジウム 地域・市民とともに育てる医療人報告書(国立大学法人岐阜大学医学教育開発研究センター)：18-21(平成 26 年 12 月)
 - 21) 藤崎和彦：世界的な医学教育の流れと成人学習理論：第 9 回岐阜県医師育成・確保コンソーシアム臨床研修指導医講習会報告書(岐阜県医師育成・確保コンソーシアム)：22-24(平成 26 年 12 月)
 - 22) 藤崎和彦：カリキュラム・プランニング 学習目標：第 9 回岐阜県医師育成・確保コンソーシアム臨床研修指導医講習会報告書(岐阜県医師育成・確保コンソーシアム)：25-28(平成 26 年 12 月)
 - 23) 藤崎和彦：カリキュラム・プランニング 学習方略：第 9 回岐阜県医師育成・確保コンソーシアム臨床研修指導医講習会報告書(岐阜県医師育成・確保コンソーシアム)：116-119(平成 26 年 12 月)
 - 24) 藤崎和彦：カリキュラム・プランニング 学習評価：第 9 回岐阜県医師育成・確保コンソーシアム臨床研修指導医講習会報告書(岐阜県医師育成・確保コンソーシアム)：119-123(平成 26 年 12 月)
 - 25) 藤崎和彦：全国における模擬患者・標準模擬患者養成の現状：平成 26 年度日本大学学部間連携推進シンポジウム 学部間協力における芸術学部標準模擬患者養成報告書(日本大学医学部医学教育企画推進)：19-25(平成 26 年 12 月)

11. 報道

- 1) 鈴木康之：お医者さんになるためには？：中日こどもウィークリー(2012 年 3 月 31 日)
- 2) 藤崎和彦：患者との『対話力』向上 医学生への『面接』教育 寄り添う技術を模擬訓練で磨く：中日新聞(2012 年 7 月 24 日)
- 3) 藤崎和彦：地域医療の質アップに貢献 医学生の間診力を育てる『模擬患者』：産経新聞(2012 年 8 月 20 日)
- 4) 川上ちひろ：自閉症スペクトラム障害児への性教育プログラム実践：教育医事新聞(2012 年 9 月 25 日)
- 5) 西城卓也：総合医の育成：NHK テレビ(2012 年 11 月 17 日)
- 6) 藤崎和彦：模擬患者の役割と展望-医学教育の立場から：COML No. 268(2012 年 12 月 15 日)
- 7) 藤崎和彦：クレームを減らし、患者さんと向き合うために:iEst 私と東部を繋ぐ院内報 Vol.02 (2013 年 2 月 28 日)
- 8) 阪下和美：Girls, be ambitious !!米国女性医師の出産・育児事情から：週間医学界新聞 第 3026 号(2013 年 5 月)
- 9) 藤崎和彦：卒前医学教育：医学連新聞 243 号(2013 年 7 月 16 日)
- 10) 藤崎和彦：世界的なレベルのコミュニケーション教育が求められます：COML No. 279 (2013 年 11 月 15 日)
- 11) 藤崎和彦：グローバルスタンダードの導入：医学連新聞 245 号(2013 年 12 月 15 日)
- 12) 藤崎和彦：学生医(student doctor)導入に伴う諸課題：医学連新聞第 246 号(2014 年 2 月 10 日)
- 13) 藤崎和彦：ある日の SP(模擬患者) セミナーの活動報告：より良い医療をつくる会報誌コムル No.282(2014 年 2 月 15 日)
- 14) 医療現場の連携学ぶ 学生ら多職種セミナー：岐阜新聞(2014 年 6 月 14 日)
- 15) 医学教育の拠点、国際化へ 岐阜大学の研究センター来年度以降も文科省認定：朝日新聞(2014 年 9 月 18 日)
- 16) 全国の医学教育共同利用拠点 岐阜大センター再認定：岐阜新聞(2014 年 9 月 18 日)
- 17) 藤崎和彦：納得のいく医学教育を考えよう：Medi-Wing, Vol.60(2014 年 10 月)

- 18) 第 54 回医学教育セミナーとワークショップ in 九州大学：文教ニュース(2014 年 11 月 24 日)
- 19) 藤崎和彦：市民の力で医師育成-岐阜大がシンポ：岐阜新聞(2014 年 12 月 6 日)
- 20) 岐阜大が九大と医学教育セミナーとワークショップ：文教速報(2014 年 12 月 8 日)

12. 自己評価

評価

これまでに社会人大学院生 8 名を日本各地から受け入れることができ、本分野の認知度と必要性は高まっていると判断される。入学者はいずれも中堅の指導医、教員であり、今後それぞれの専門分野で指導者として活躍することが期待される。各大学院生の調査研究は順調に推移しており、まもなく論文として研究成果が出せる段階となっている。以下のようなテーマで教育研究を推進している。

- 1) カリキュラム開発と学生評価法
- 2) コミュニケーション教育と Professionalism 教育法
- 3) 効果的な問題基盤型学習法
- 4) シミュレーション教育法
- 5) 地域基盤型医学教育と総合医の育成法
- 6) 効果的な臨床教育法・指導法
- 7) 日本における医学教育学研究の推進と専門家育成法
- 8) 適切な学生・研修医選抜法
- 9) 専門医・指導医のアウトカム・コンピテンシー
- 10) 緩和医療教育法

現状の問題点及びその対応策

医学教育学の研究の歴史は浅く、また研究手法も一般的な医学生物学領域の研究と大きく異なるが、欧米では 1 つの研究分野として確立している。本邦においても医学教育学分野の存在と意義に関して認識を広める必要がある。また研究手法を確立し、普及する役割も担っていると考えている。現状では医学教育研究分野に関心を示す医師・医療関係者はまだ少ないが、潜在的ニーズは大きいと期待されるので、その発掘に努めたい。また社会人大学院生に対する遠隔指導が重要であり、その方法やサポート体制についても整備を進める必要がある。

今後の展望

医学教育学が大学院の一分野として確立されつつあり、着実な研究成果の発信と人材育成を通して、我が国における医学教育学の確立に貢献することが中長期的な目標である。医学教育専門家育成の裾野を広げるために、平成 27 年度からフェローシッププログラムを開始する予定である。将来的には医療者教育の修士課程構築も視野に入れている。さらに国際交流を通じて、日本の医学教育を世界に発信していきたいと考えている。

7. 学位の授与状況と研究成果

医科学専攻において過去5年間に博士（医学）の学位を授与した数は、次表のとおりである。

区分	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
課程博士	27	25	24	32	26
論文博士	5	6	3	9	8

8. 学生生活支援

(1) 奨学金の申請・採択状況

○日本学生支援機構奨学生出願・採用状況

年 度	第1種		第2種	
	出願者数	採用者数	出願者数	採用者数
平成20年度	2	2	0	0
平成21年度	1	1	1	1
平成22年度	1	1	0	0
平成23年度	0	0	0	0
平成24年度	1	1	0	0
平成25年度	0	0	0	0

(2) 授業料免除実施状況

年 度	在籍者数	前学期			後学期		
		申請	免除		申請	免除	
			全額	半額		全額	半額
平成20年度	184	18	6	9	15	7	8
平成21年度	173	19	10	7	18	12	5
平成22年度	169	18	6	9	14	4	9
平成23年度	193	19	10	7	11	7	4
平成24年度	188	7	5	2	8	6	2
平成25年度	185	12	8	4	12	8	4

9. 自己評価・課題と展望

「教育活動」の項で述べたいくつかの改編・改革の特徴、あるいはそれらの基盤ともなる、本研究科が掲げる教育・研究の理念や目標をより明確化するために、平成23年に、本学に先駆けて3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）を明文化した。今後はこれらのポリシーひとつひとつを実のあるものとするために、現実を検証しながら進めなければならない。

本研究科における具体的な到達実績として「学位論文」があるが、近年いずれもピアレビューのしっかりした国際誌（英文）に掲載されたものが多く、個々の研究の水準は非常に高いものが担保されている点で、定性的にみて高い質的評価が得られている。しかし一方で、論文数という定量的な観点からみれば、年々論文数の減少という現実をみないわけにはいかない。いくつかの原因による複合的な結果の現れと思われるが、新臨床研修医制度によって、MD-PhDの制度新設やスカラシップの創設も効果が現れず、医学部出身者の大学院志願者の大幅な減少は、全国的レベルの問題となってきている。これらはこれまで継続的な検討課題とはいえ、運営上もっとも悩まされるところであろう。これらのことの解決には学内の小手先だけの改編ではすまず、大学間で解決されなければならない重大な問題にも発展してきている。

いずれにせよ現時点では、量的には問題もあるものの、とりあえず質的なレベルは保たれているので、今後この点は維持しながらも、さらに量的な面を充実できるように一丸となって努力していかなければならない。

[医学系研究科再生医科学専攻]

1. 教育・研究の理念, 目標

ヒト全遺伝子の塩基配列の解読が終了した 21 世紀における医学・医療の中心課題の一つは、再生医学・脳科学である。2006 年 8 月にマウスから、2007 年 11 月にはヒトから、受精卵を使わずに体細胞から分化多能性を持つ細胞（iPS 細胞）が樹立され、この領域に大きな進歩が見られた。

再生医科学専攻は医学、生命・情報工学並びに生命倫理学とのユニークな連携の下、細胞生物学・分子遺伝医工学的学問体系に加え、これを臨床に応用するための再生工学・再生応用・倫理学の学問体系からなる。医学部、工学部等の出身者が協力して先端的再生医科学の研究を行い、分子生物学、医用生命・情報工学、臨床医学および社会医学の各分野で再生医科学を中心的に担うことのできる知的創造性・専門性と共に倫理性・人間性・社会性の豊かな人材を育成することを目標としている。

2. 再生医科学専攻の構成

生物学的再生医科学を目指す独立専攻系再生医科学には社会的ニーズ、本学の実績と現状を考慮して 3 つの領域からなる組織を置いている。すなわち、分子生物学、発生学、遺伝子工学をベースとした再生分子統御学、最新の生命工学・情報工学をベースとした再生工学及びこれらをベースとした臨床応用とそれに伴う倫理的問題を扱う再生応用学である。そこで、本専攻は、以下の 3 つの講座で構成し、高度の研究能力がある研究者を分野別に 1 つの有機的統一体となるよう組織している。

平成 23 年 4 月には、本研究科の教育目標に沿って組織の見直しを行い、「循環病態学」及び「呼吸病態学」の 2 分野を医科学専攻に移設し、本専攻に「循環呼吸制御学」を設置した。

(1) 再生分子統御学講座

再生分子統御学講座は 3 つの教育研究分野からなる。幹細胞から組織・器官形成の分子制御を担当する組織・器官形成分野、本学における反射研究施設の伝統を踏まえた神経系の再生を担当する神経生物分野、再生における微生物の役割を担当する病原体制御学分野である。さらに、組織・器官形成分野には、その重要性を考慮して連携講座として岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所発生生物学研究系が参加している。

(2) 再生工学講座

再生工学講座は、2 つの教育研究分野からなる。遺伝子・タンパクの分子構造解析と、それに基づく再生医療に創薬や分子プローブの開発・応用を担当する生命機能分子設計分野と、細胞から組織・器官が形成されるプロセスの 3 次元構築コンピュータによるイメージ化を主に中枢神経系で担当する知能イメージ情報分野である。

(3) 再生応用学講座

再生応用学講座は、2 つの教育研究分野からなる。主に循環器・呼吸器系の再生医科学の臨床応用を担当する循環呼吸制御学、ならびに医学系倫理・社会医学である。

これらの組織は、単に並列する硬直化した組織ではなく、患者並びに学生、企業を含む社会的ニーズに応える新しい再生医療の教育・研究を目指した 1 つの有機的統一体として組織されている。これにより、研究をオープンにすることができ、研究者間の相互チェック体制を整え、研究のレベルアップを図るものである。また、大学院生は自分の研究ばかりではなく、様々なプロジェクトの研究に接触することができ、倫理を含めた広い視野と独創的な思考過程を持つ医科学研究者を養成することが可能となる。

3. 学生定員と入学状況

再生医科学専攻の入学定員、収容定員及び過去5年間の入学状況は次表のとおりである。
 博士前期課程はほぼ毎年定員を充足しているが、博士後期課程にあつては、定員充足が減少傾向あり、今後の努力が必要である。

再生医科学専攻の学生定員及び収容定員

研究科	専攻	課程	入学定員	収容定員
医学系研究科	再生医科学専攻	博士前期課程	11	22
		博士後期課程	6	18
		計	17	40

再生医科学専攻の入学状況

過去5年間の入試統計（博士前期課程）

年度	事項 募集 人員	志願者数		受験者数		合格者数		入学者数	
平成22年度	11	18	(5) <0> 《0》	18	(5) <0> 《0》	17	(5) <0> 《0》	16	(5) <0> 《0》
平成23年度	11	13	(3) <1> 《1》	12	(3) <1> 《1》	11	(3) <1> 《1》	10	(2) <1> 《1》
平成24年度	11	11	-	9	-	9	-	9	-
平成25年度	11	11	(3) 《1》	11	(3) 《1》	10	(3) 《1》	10	(3) 《1》
平成26年度	11	14	(1) <1>	14	(1) <1>	14	(1) <1>	14	(1) <1>

()は女子，<>は社会人，《 》は外国人留学生をすべて内数で表します。

過去5年間の入試統計（博士後期課程）

年度	事項 募集 人員	志願者数		受験者数		合格者数		入学者数	
平成22年度	6	10	(4) <8> 《1》	10	(4) <8> 《1》	10	(4) <8> 《1》	10	(4) <8> 《1》
平成23年度	6	2	(2) <0> 《1》	2	(2) <0> 《1》	2	(2) <0> 《1》	2	(2) <0> 《1》
平成24年度	6	5	(1) <2>	5	(1) <2>	3	(1) <2>	3	(1) <2>
平成25年度	6	0	-	0	-	0	-	0	-
平成26年度	6	3	(1) <1> 《2》	3	(1) <1> 《2》	3	(1) <1> 《2》	3	(1) <1> 《2》

()は女子，<>は社会人，《 》は外国人留学生をすべて内数で表します。

4. カリキュラムの編成方針

本専攻は、生命倫理・医学並びに生命・情報工学両分野が融合した新たな視点からの再生医科学に関する問題解決型能動教育を行い、高邁な生命倫理・社会性、再生医科学・医療の発展に貢献する判断力、実行力及び独創性に富む人間性豊かな研究者（博士後期課程）並びに高度専門職業人（前期課程、後期課程）を育成することを目標として教育課程を編成している。

このカリキュラム編成方針に基づき、生命倫理・再生医療の基本的教養を身に付け、かつ、再生医学の基礎・臨床並びに再生工学についての最先端の技術を有し、新たな再生医科学を先駆的に取り組む能力を有する研究者・高度専門職業人を育成する。

(1) 履修基準

① 博士前期課程

2年間の間に合計30単位以上を修得し学位論文審査に合格しなければならない。ただし、特に優れた研究業績を上げた者は、1年以上在学し所定の要件を満たした場合は2年未満であっても学位を授与することがある。

科目区分	最低履修単位数	備考
共通科目	6	
学際科目	2	
専門科目	10	専攻分野の必修科目
自由選択科目	4	共通科目又は専門科目から選択
特別研究	8	
合計	30	

- 注) 1. 医学又は歯学を履修する課程を卒業した者は、共通科目の履修単位に生命工学及び情報工学の2単位を履修しなければならない。
2. 前項に該当する者以外の者は、共通科目の履修単位に生命工学又は情報工学のいずれか1単位を含めなければならない。

② 博士後期課程

3年間に最低限10単位を取得しなければならない。ただし、特に優れた研究業績を上げた者は、2年以上在籍し所定の要件を満たした場合、3年未満でも学位を授与することがある。

科目区分	最低履修単位数
共通科目	2
学際科目	2
専門科目	2
特別研究	4
合計	10

- 注) 1. 医学又は歯学を履修する課程を卒業した者は、共通科目の生命工学又は情報工学を含めなければならない。
2. 前項に該当する者以外の者は、共通科目の分子生物科学又は構造病態医学を含めなければならない。
3. 共通科目に、イノベーション創出若手人材養成プログラムの「ビジネス英語」を含めることができる。
4. 再生医科学専攻博士前期課程から進学した者は、共通科目及び学際科目の履修を免除する。

(2) 教育研究分野, 指導教員

再生医科学専攻における各領域別の教育研究分野, 指導教員, 主な研究内容は次の表のとおりである。

○再生分子統御学領域 (講座)

分 野	指導教員	研 究 内 容
組織・器官形成	國貞 隆弘	胚性幹細胞 (ES 細胞) ・ iPS 細胞を含む幹細胞から組織・器官形成に至る細胞の増殖・分化のメカニズムについて, 細胞生物学的手法と分子生物学的手法を用いて研究を行う。特定の細胞・組織・臓器にとらわれることなく, 幹細胞からの組織・臓器の形成過程と幹細胞自身の分化・増殖・自己再生機構の解析を通して, 再生現象の分子制御機構の最終的な解明に向けて教育・研究を行う。ヒト ES 細胞・iPS 細胞から組織・臓器を誘導し再生医療へ適用する研究も進めている。
神経生物	中川 敏幸	神経科学領域において, 神経幹細胞の増殖・分化誘導・アポトーシス (変性) 機構の解明は神経疾患の治療法の開発にとり重要な課題である。神経生物分野では神経変性 (アポトーシス) の分子制御機構に関与する遺伝子群を網羅的に同定する方法を確立し, 神経変性関連遺伝子の細胞から固体レベルでの作用機構につき, 分子生物学, 細胞生物学, 及びマウス遺伝学を駆使した研究を行う。さらに, アルツハイマー病に代表される神経変性疾患の病態の解明についても取り組む。
病原体制御学	江崎 孝行	微生物の分子系統学を学習させ, その成果を下記の課題に利用する方法を習得させる。 【博士前期課程】 人・動物・植物・魚介類の病原微生物の取り扱いを習熟させ, これらの感染症を予防制御する方法論を修得させる。特にバイオテロ対策, 高齢化社会の日和見感染症を制御する両極端の感染制御方法を習得させ, 感染制御の指導, 研究指導ができる人材を育成する。 【博士後期課程】 高度病原体の病因・環境での生存方法, 感染制御の方法に関する研究に従事させる。

○再生工学領域 (講座)

分 野	指導教員	研 究 内 容
生命機能分子設計	大沢 匡毅	再生医療の実現には, 幹細胞の基本的特性を理解し, 幹細胞を主体的に制御する技術が必要です。我々は, 研究対象として皮膚や血液の幹細胞を選び, 分子生物学, 細胞生物学, 発生工学, 遺伝子工学等の手法を用いて, 幹細胞制御の分子的基盤を解明し幹細胞生物学を理解することを目的に研究を進めます。同時に, 得られた成果を元に, 再生医療, 癌治療, 抗老化といった新たな医療の発展に貢献することを目指します。博士後期課程では, 生命科学研究遂行に必要な技術の習得と論理的思考法を学習し, 自立した生命科学研究者を育成することを目指します。
知能イメージ情報	藤田 廣志	コンピュータを駆使して, 医用画像情報をいろいろな角度から処理・加工し, 再生医科学をはじめ様々な医療分野における画像情報を取り扱った教育・研究を行う。例えば, コンピュータ支援診断 (CAD) と呼ばれているが, 画像上のがん病変の位置をコンピュータで指摘したり, 病変部位のコンピュータ分析による結果を医師に提供することによって, より正確で確実な医師の画像診断が行えるように支援するシステムの開発である。画像情報処理技術, パーチャルリアリティ (VR, 仮想現実), 人工知能などの最先端の医療画像情報学に関する基礎研究を行い, また, 医工学分野の各種の学際領域の画像研究に応用する。

○再生応用学領域（講座）

分野	指導教員	研究内容
循環呼吸制御学	湊口 信也 西垣 和彦	本分野では培養系、動物モデル並びにヒトの疾患を用いて、心・血管・腎・肺の各種疾患における病態生理解明ならびに新しい治療法の開発を目指して教育と研究を行う。主に再生医科学的アプローチをとるが、幹～前駆細胞による細胞治療のみならず細胞死や変性の制御、組織修復の制御も方法論として重視する。医学系に限らず、工学、農学、理学、薬学系等と幅広く連携しかつ各分野の学生に広く門戸を開く。
医学系倫理・社会医学	塚田 敬義	1978年に「バイオエシックス百科事典」が出版されており、その頃に「生命倫理学」が成立したといわれている。もとより医の倫理学は、安楽死、脳死・臓器移植、人工妊娠中絶など、従来の医療行為の中では禁止されていた行為の許容基準を明らかにする目的で集約されてきたと解される。ところが、生命倫理の重心が個人の自己決定から公共選択に移動も見られる。医学・医療の実際を知る者が、倫理的、法的、社会医学的な問題をターゲットとして、日本での然るべき生命倫理を考究すべくその教育・研究を行う。

(3) 大学院特別講義

各講座の研究発表・特別講演からなる先端再生医科学セミナーを開講している。

5. 教育活動

(1) 教育活動の実施内容と方法

再生医科学専攻が開講している講義科目を以下に示す。

① 博士前期課程

	授 業 科 目	単位数	選択・必修の別
共 通 科 目	生命工学	1	選 択
	情報工学	1	選 択
	構造生物医学	1	選 択
	Advanced English Seminar	2	必 修
学 際 科 目	生物医学倫理	1	必 修
	生物医学倫理演習	1	必 修
主 な 専 門 科 目	組織・器官発生	2	選択必修
	神経生物学	2	選択必修
	病原体制御学	2	選択必修
	遺伝情報創薬	2	選択必修
	医用情報処理	2	選択必修
	臨床再生医学	2	選択必修
	医学系倫理・社会医学	2	選択必修

② 博士後期課程

	授 業 科 目	単位数	選択・必修の別
共 通 科 目	基礎臨床再生医学	1	選 択
学 際 科 目	再生医療倫理	1	必 修
	再生医療倫理演習	1	必 修
専 門 科 目	幹細胞組織工学演習	2	選択必修
	分子神経細胞生物学演習	2	選択必修
	微生物バイオインフォマティクス演習	2	選択必修
	幹細胞発生生物学演習	2	選択必修
	知能イメージ情報応用演習	2	選択必修
	細胞・組織・器官移植・遺伝子治療演習	2	選択必修
	医学系倫理演習	2	選択必修

学生は、予め指導教員の指示を受けて履修する授業科目を決定する。また、指導教員が必要と認める時は、学部の授業科目、他の専攻・研究科等の授業科目を履修することができる。学生は指導教員の指導の下で研究計画書を作成の上、学位論文作成に必要な研究活動を行う。

再生医科学専攻では、教室での講義、実験室での実験指導、セミナー室での実験データの討論、論文の詳読会を毎週行っている。

このほか、本専攻の教育・研究活動の特徴として以下のものを挙げる事ができる。

- ① 講座単位で学生の教育・研究指導に当たっているが、当専攻が学際的分野であることもあり、講座の枠にとらわれず医学基礎系・臨床系・工学系が共同して学生の研究指導を行うなど、柔軟な指導体制を採用
- ② 大学院設置基準第14条特例の昼夜開講制を実施
- ③ 生命・医療倫理を重視し、前期課程では生物医学倫理を、後期課程では再生医療倫理の履修を必修化
- ④ 前期課程では細胞生物学、分子発生学、分子生物学等の基礎生命科学の教育・研究を、後期課程では再生応用等の応用生命科学の教育・研究を実施

6. 研究活動

〔再生分子統御学講座〕

(1) 組織・器官形成分野

1. 研究の概要

幹細胞の分化・増殖・自己再生の分子機構の解明を目標とし、その成果に基づいて各種幹細胞から細胞・組織・器官を分化誘導し再生医療に適用するための基礎研究にも力を入れている。本分野が開設された2000年以降マウス ES 細胞からレンズ、網膜細胞を含む眼様構造を試験管内で誘導する技術の開発に成功し、この前例のない培養系を利用した網膜疾患の再生医療モデルの作成に成功した。2003年にヒト ES 細胞の使用許可を受け（日本で5番目の使用機関）、網膜色素細胞・心筋・血液細胞などの誘導に成功した。

幹細胞の分化・増殖・自己再生の分子機構の解明の一端として神経堤細胞に注目している。神経堤細胞は神経管から発生する外胚葉由来の細胞であり、非常に多様な細胞（色素細胞、平滑筋、骨・軟骨などの間葉系細胞、神経細胞、グリア細胞などの末梢神経系細胞、内分泌器官構成細胞など）に分化増殖する多分化能を有している。我々は ES 細胞から神経堤細胞を誘導することに成功し、さらにこの培養系から神経堤幹細胞を単離することにも成功した。この神経堤幹細胞の分化・増殖・自己再生に必要な各因子を詳細に解析することで、神経堤細胞の発生及び分化のメカニズムを明らかにしつつある。2010年から2014年までに行った JST の CREST 研究では、これらの蓄積を基に線維芽細胞を神経堤細胞にリプログラムすることに成功した。今後、神経堤細胞の異常によって発症する重篤な末梢神経破綻である Hirschsprung disease や Waardenburg syndrome などの神経堤症の細胞治療に結びつけたいと考えている。また、神経堤細胞に由来する色素細胞は、表皮に移動して色素細胞への運命が決定された後も環境に応じて神経細胞への分化能力を維持していること、生体内では色素細胞は表皮型と真皮型の二種類に分類されることを明らかにした。白髪は毛包内の毛包ケラチノサイト幹細胞の異常により色素細胞幹細胞芽失われることが原因であることを示し、色素細胞幹細胞を活性化することで白髪は予防可能であることなどを明らかにした。これらの色素細胞の基礎研究をホーユー株式会社と共同で行い、白髪予防薬の開発が進んでいる。

神経幹細胞・ES 細胞の分化に必要な多数の遺伝子を制御している REST 転写因子の機能に関する研究を進め、REST が ES 細胞の初期分化を促進する作用があるがこれまで考えられていた未分化維持には関与しないこと、REST は神経特異的な遺伝子発現を非神経細胞で広く抑制していること、などを明らかにし、現在多くの細胞の分化過程への REST の関与を明らかにしつつある。

2006年から、口腔病態学との共同で親知らずから間葉系幹細胞を採取し、現在までに約400人分の歯髄幹細胞株を樹立している。この岐阜大学歯髄細胞コレクションを充実させ、医学部附属病院と連携し各種再生医療・細胞療法の臨床応用をめざす基礎実験を行うために、2011年に岐阜大学大学院医学系研究科・医学部先端医療セルプロセッシングセンターが設立された。現在、世界初の試みとなる「ハプロタイプホモ歯髄細胞の他家移植による脊髄損傷の細胞治療」に向けて本学・岐阜薬科大学・ベンチャー企業・製薬企業とコンソーシアムを形成し、2016年を目安に臨床研究の実現化を進めている。

本学口腔病態学、京都大学 iPS 細胞研究所との共同研究（JST 山中 iPS 特別プロジェクト岐阜サテライトチーム、2008年から2012年度まで）によりヒト歯髄幹細胞は他のヒト細胞に比べて人工多能性幹細胞（iPS 細胞）に効率よく誘導されること、誘導効率が酸素濃度に依存すること、誘導効率を決定する新規遺伝子 DLX4 の同定、などの新知見を得た。さらに、iPS 細胞を利用した再生医療の実用化には iPS 細胞を組織適合性抗原に基づいてバンク化することが必須であることを明らかにする一方、学内外の研究機関との共同研究により発がんの危険性の少ない iPS 細胞誘導法の確立、難病患者や希少動物からの iPS 細胞の樹立も行っている。

2. 名簿

教授：	國貞隆弘	Takahiro Kunisada
准教授：	手塚建一	Ken-ichi Tezuka
講師：	本橋 力	Tsutomu Motohashi
講師：	青木仁美	Hitomi Aoki

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 手塚建一, 柴田敏之, 國貞隆弘. 歯髄細胞からの iPS 細胞誘導: 日本再生医療学会監修. 上田 実, 朝比奈 泉編. 再生医療叢書 第8巻, 東京: 朝倉書店; 2012年: 1-14.
- 2) 國貞隆弘. 再生医療の未来: 第22回日本歯科医学会総会記念誌編集委員会編. 口腔と全身の健康 第22回日本歯科医学会総会記念出版, 東京: 医歯薬出版; 2012年: 40-58.
- 3) 青木仁美, 國貞隆弘. 第2章 第8節 [10] 網膜組織への分化誘導, 組織の培養における条件の設定: 《最新》動物細胞培養の手法と細胞死・増殖不良・細胞変異を防止する技術, 東京: 技術情報協会; 2014年: 584, 407-441.

著書 (欧文)

- 1) Motohashi T, Kunisada T. Melanoblasts as Multipotent Cells in Murine Skin. In: Turken K, ed. *Methods in Molecular Biology*, pt 989. New York: Human Press; 2013:183-192.

総説 (和文)

なし

総説 (欧文)

- 1) Kunisada T, Tezuka KI, Aoki H, Motohashi T. The stemness of neural crest cells and their derivatives. *Birth Defects Res C Embryo Today*. 2014;102:251-262.

原著 (和文)

なし

原著 (欧文)

- 1) Aoki H, Hara A, Era T, Kunisada T, Yamada Y. Genetic ablation of *Rest* leads to in vitro-specific derepression of neuronal genes during neurogenesis. *Development*. 2012;139:667-677. IF 6.273
- 2) Takamatsu M, Aoki H, Hirose Y, Kobayashi K, Tomita H, Kuno T, Koumura H, Hara A. Teratoma showing the features of retinal structure: A case of sacrococcygeal teratoma. *Oncol Lett*. 2012;3:1023-1026. IF 0.987
- 3) Aoki H, Kunisada T. Deep into melanocyte stem cells: The role of Kit signaling in their establishment. *Pigment Cell & Melanoma Research*. 2013;26:5. IF 5.641
- 4) Iida K, Takeda-Kawaguchi T, Hada M, Yuriguchi M, Aoki H, Tamaoki N, Hatakeyama D, Kunisada T, Shibata T, Tezuka K. Hypoxia-enhanced Derivation of iPSCs from Human Dental Pulp Cells. *J Dent Res*. 2013;92:905-910. IF 4.144
- 5) Aoki H, Hara A, Motohashi T, Kunisada T. Keratinocyte Stem Cells but Not Melanocyte Stem Cells Are the Primary Target for Radiation-Induced Hair Graying. *J Invest Dermatol*. 2013;133:2143-2151. IF 6.372
- 6) Yoshimura N, Motohashi T, Aoki H, Tezuka K, Watanabe N, Wakaoka T, Era T, Kunisada T. Dual origin of melanocytes defined by Sox1 expression and their region-specific distribution in mammalian skin. *Dev Growth Differ*. 2013;55:270-281. IF 2.178
- 7) Yamada K, Ohno T, Aoki H, Semi K, Watanabe A, Moritake H, Shiozawa S, Kunisada T, Kobayashi Y, Toguchida J, Shimizu K, Hara A, Yamada Y. *EWS/ATF1* expression induces sarcomas from neural crest-derived cells in mice. *J Clin Invest*. 2013;123:600-610. IF 13.765
- 8) Hirata A, Utikal J, Yamashita S, Aoki H, Watanabe A, Yamamoto T, Okano H, Bardeesy N, Kunisada T, Ushijima T, Hara A, Jaenisch R, Hochedlinger K, Yamada Y. Dose-dependent roles for canonical Wnt signalling in de novo crypt formation and cell cycle properties of the colonic epithelium. *Development*. 2013;140:66-75. IF 6.273
- 9) Wakaoka T, Motohashi T, Hayashi H, Aoki M, Mizuta K, Kunisada T, Ito Y. Tracing Sox10-expressing cells elucidates the dynamic development of the mouse inner ear. *Hearing Res*. 2013;302:17-25. IF 2.848
- 10) Tamaoki N, Takahashi K, Aoki H, Iida K, Kawaguchi T, Hatakeyama D, Inden M, Chosa N, Ishisaki A, Kunisada T, Shibata T, Goshima N, Yamanaka S, Tezuka K-i. The homeobox gene *DLX4* promotes generation of human induced pluripotent stem cells. *Scientific Reports*. 2014;4:7283.
- 11) Takeda-Kawaguchi T, Sugiyama K, Chikusa S, Iida K, Aoki H, Tamaoki N, Hatakeyama D, Kunisada T, Shibata T, Fusaki N, Tezuka K. Derivation of iPSCs after Culture of Human Dental Pulp Cells under Defined Conditions. *PLoS One*. 2014;9:e115392.
- 12) Aoki H, Hara A, Oomori Y, Shimizu Y, Yamada Y, Kunisada T. Neonatal lethality of neural crest cell-specific *Rest* knockout mice is associated with gastrointestinal distension caused by aberrations of myenteric plexus. *Genes Cells*. 2014;19:723-742.
- 13) Endou M, Aoki H, Kobayashi T, Kunisada T. Prevention of hair graying by factors that promote the growth and differentiation of melanocyte. *J Dermatol*. 2014;41:716-723. IF 2.354
- 14) Binh NH, Aoki H, Takamatsu M, Hatano Y, Hirata A, Tomita H, Hara A. Time-sensitive effects of hypoxia on differentiation of neural stem cells derived from mouse embryonic stem cells in vitro.

- Neurol Res. 2014;36:804-813. IF 1.449
- 15) Akazaki S, Takahashi T, Nakano Y, Nishida T, Mori H, Takaoka A, Aoki H, Chen H, Kunisada T, Koike K. Three-Dimensional Analysis of Melanosomes Isolated from B16 Melanoma Cells by Using Ultra High Voltage Electron Microscopy. Microscopy Res. 2014;2:1-8. IF 1.593
- 16) Motohashi T, Kitagawa D, Watanabe N, Wakaoka T, Kunisada T. Neural crest-derived cells sustain their multipotency even after entry into their target tissues. Developmental Dynamics. 2014;243:368-380.
- 17) Iio A, Kamishina H, Yumasa Y, Motohashi T, Kunisada K, Maeda S. Preferential gene transcription of Th2 cytokines in peripheral CCR4+CD4+ lymphocytes in dogs. Veterinary Dermatology. 2014;25:199-e50.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：本橋 力；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：神経堤細胞発生をモデルとした上皮-間葉系転換(EMT)メカニズムの解明；平成 23-25 年度；4,000 千円(1,300：1,800：900 千円)
- 2) 研究代表者：本橋 力；岐阜大学活性化経費(研究：研究グループ形成支援)：内耳幹細胞の機能細胞への分化機構の解明・幹細胞移植への応用；平成 24 年度；4,000 千円
- 3) 研究代表者：高橋淑子，研究分担者：國貞隆弘，本橋 力，青木仁美；戦略的創造研究推進事業 CREST：研究領域「人工多能性幹細胞(iPS 細胞)作製・制御等の医療基盤技術」，研究課題「神経堤細胞をモデルとした生体内での細胞リプログラミング法の開発」，研究項目：「生体内における神経堤細胞リプログラミング法に向けた基盤作り(神経堤細胞分化制御因子の検証)」；平成 21-26 年度；49,000 千円(11,500：7,500：7,500：7,500：7,500：7,500 千円)
- 4) 研究代表者：國貞隆弘，研究分担者：手塚建一，本橋 力，青木仁美；JST・山中 iPS 特別プロジェクト (JST・岐阜大学サテライトチーム)：歯胚幹細胞からの iPS 細胞の誘導効率の確認とヒト iPS 細胞の誘導因子減少化の検討；平成 20-24 年度；90,000 千円(10,000：20,000：20,000：20,000：20,000 千円)
- 5) 研究代表者：青木仁美；岐阜大学活性化経費(研究：若手研究支援)：Rest 遺伝子の発現調節による細胞運命決定への修飾；平成 24 年度；2,000 千円
- 6) 研究代表者：手塚建一；平成 24 年度「iPS 細胞等自動培養装置開発加速事業」；平成 24 年度；64,654 千円
- 7) 研究代表者：手塚建一；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：遺伝子工学的的手法による HLA タイプ改変 iPS 細胞の作製技術開発；平成 26-27 年度；2,500 千円(1,300：1,200 千円)
- 8) 研究責任者：手塚建一；A-STEP FS ステージ シーズ頭在化タイプ：HLA ハプロタイプホモ歯髄幹細胞による脊髄損傷治療実用化モデルの構築；平成 26 年度；2,500 千円
- 9) 研究代表者：青木仁美；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：神経堤細胞の多分化能に対する神経分化抑制因子 Rest の機能；平成 25-26 年度；3,300 千円(2,000：1,300 千円)
- 10) 研究代表者：本橋 力；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：上皮-間葉系転換(EMT)モデルシステムを利用とした EMT メカニズムの解明；平成 26-28 年度；5,070 千円(1,560：2,080：1,430 千円)
- 11) 研究代表者：國貞隆弘；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：遺伝子工学的的手法による HLA タイプ改変 iPS 細胞の作製技術開発；平成 25-27 年度；2,900 千円(1,000：1,000：900 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

- 1) 青木仁美，國貞隆弘：幹細胞を標的とした研究；平成 25-27 年度；12,600 千円(3,800：3,800：5,000 千円)：ホーユー (株)

5. 発明・特許出願状況

- 1) Tezuka K, Shibata T, Kunisada T, Tamaoki N, Takeda T, Yamanaka S, Takahashi K：Efficient method for establishing induced pluripotent stem cells.；2011(PCT/JP2008/068320) Canadian National Phase of International PCT Application(CA2732401) / Korean National Phase of International PCT Application(KR10-1372752)
- 2) 手塚建一，玉置也剛，飯田一規，川口知子，青木仁美，國貞隆弘，柴田敏之，五島直樹：人工多能性幹

細胞の作製方法；平成 26 年出願(PCT/JP2014/072564)

- 3) 手塚建一, 川口知子, 國貞隆弘, 柴田敏之, 福光秀文：神経損傷の治療用移植材の製造方法；平成 26 年出願(PCT/JP2014/062881)
- 4) 手塚建一, 柴田敏之, 國貞隆弘, 玉置也剛, 武田知子, 山中伸弥, 高橋和利：効率的な人工多能性幹細胞の樹立方法；平成 20 年出願／平成 26 年登録(特許第 5553178 号)

6. 学会活動

1) 学会役員

國貞隆弘：

- 1) 日本色素細胞学会理事(～現在)
- 2) 日本再生医療学会評議員(～現在)
- 3) International Federation of Pigment Cell Research Council Member(～平成 26 年, 平成 24～26 年 Treasurer)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

手塚建一：

- 1) Journal of Bone and Mineral Metabolism; Associate Editor(～現在)

國貞隆弘：

- 1) ScienceOpen; Editorial Board(2013.12～現在)
- 2) ISRN Stem Cells; Editorial Board(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

手塚建一：

- 1) Keystone symposia (C3) The Life of a Stem Cell: From Birth to Death (2012.03, Keystone, U.S.A., Generation of integration-free human dental-pulp-derived iPS cells from HLA-homozygous donors; co-presenter)
- 2) 第 13 回運動器科学研究会(平成 24 年 9 月, 京都, 招待講演「日本人 HLA ハプロタイプホモ歯髓細胞コレクション」演者)
- 3) 名古屋大学 IGER SEMINAR(平成 25 年 1 月, 名古屋, 招待講演「日本人 HLA ハプロタイプホモ歯髓細胞コレクション」演者)
- 4) 明海大学歯学部研修会(平成 25 年 2 月, 埼玉, 招待講演「日本人 HLA ハプロタイプホモ歯髓細胞コレクション」演者)
- 5) Kyudai Oral Bioscience 2013 -7th International Symposium(平成 25 年 3 月, 福岡, シンポジウム「Dental Pulp Cells as Souce for iPS Cell Banking」演者)
- 6) CiRA Symposium(平成 25 年 3 月, 京都, シンポジウム「Dental Pulp Cells as Souce for iPS Cell Banking」演者)
- 7) 6th International Symposium on the Biology of Tertrate-Resistant Acid Phosphatase(平成 25 年 5 月, 神戸, シンポジウム「Dental Pulp Cells as Source for iPS Cell Banking」演者)
- 8) 歯科基礎医学会サテライトシンポジウム(平成 25 年 9 月, 岡山, シンポジウム「再生医療資源としての歯髓細胞利用」演者)
- 9) 岐阜市母子寡婦福祉大会講演会(平成 25 年 9 月, 岐阜, 招待講演「親知らずから iPS 細胞～歯の中にあるたからもの～」演者)
- 10) 5th Hiroshima Conference on Education and Science in Dentistry(平成 25 年 10 月, 広島, シンポジウム「Dental Pulp Cells as Souce for iPS Cell Banking -A low cost human cell resource for regenerative medicine-」演者)
- 11) 第 27 回岐阜シンポジウム(平成 25 年 11 月, 岐阜, 「再生医療最前線 2013」オーガナイザー)
- 12) 第 68 回日本口腔科学会シンポジウム(平成 26 年 5 月, 東京, 「岐阜歯髓細胞コレクション 未来の再生医療を支える医療資源, 口腔組織に由来する幹細胞の医科への応用」シンポジスト)
- 13) 岐阜歯科学会 40 周年記念大会(平成 26 年 1 月, 岐阜, 招待講演「岐阜歯髓細胞コレクション～未来

の再生医療を支えるためにできること～」演者)

國貞隆弘：

- 1) LO 皮膚化学研究会冬期プログラム(平成 24 年 1 月, 岐阜, 特別講演 2「iPS 細胞から表皮を作る」演者)
- 2) 第 24 回日本色素細胞学会学術大会(平成 24 年 11 月, 長浜, IS-12 シンポジウム「放射線照射後の白髪化誘導では色素細胞幹細胞のニッチを構成するケラチノサイト幹細胞が第一に障害される」青木仁美(演者), 國貞隆弘)
- 3) 第 24 回日本色素細胞学会学術大会(平成 24 年 11 月, 長浜, IFPCS ワークショップ 6, Genetics and Developmental Biology of pigment cells-2, OP-27~32 共同座長)
- 4) Annual meeting of Asian Society for Pigment Cell Research and Asian Society for Dermatological Research (Symposium) (2013.05, Sydney, Dual origin of melanocytes defined by Sox1 expression and their region-specific distribution in mammalian skin.)
- 5) 第 65 回日本細胞生物学会大会 (平成 25 年 6 月, 名古屋, 「幹細胞研究の新展開 ～組織発生から病態まで～」演者)
- 6) The XXII International Pigment Cell Conference (2013.09, Singapore, Conditional Deletion Of Kit Induces White Spotting Phenotype Through Cell-Autonomous Requirement Of Kit Signaling; 演者)
- 7) The XXII International Pigment Cell Conference (2013.09, Singapore, Developmental Biology session; 共同座長)
- 8) The XXII International Pigment Cell Conference (2013.09, Singapore, Pigmentation Of The Regenerated Hair Follicles After Wounding; 共同演者)
- 9) 2013 年度秋期日本病理学会(平成 25 年 11 月, 甲府, シンポジウム「ES 細胞・iPS 細胞を利用した眼疾患の原因解明と再生医療の確立」演者, 青木仁美, 本橋 力, 手塚建一, 柴田俊之(共同演者))
- 10) 第 25 回日本色素細胞学会(平成 25 年 11 月, 大阪, キーノートレクチャー「Kitl(SCF)トランスジェニックマウスと色素細胞研究」演者)
- 11) Master Class in Vitiligo and Pigmentary Disorders (2014.11, Amritsar, India, Kit receptor tyrosine kinase and skin color; 演者)

青木仁美：

- 1) The XXII International Pigment Cell Conference (2013.09, Singapore, Irradiated keratinocytes affect melanocyte stem cells and lead the radiation-induced hair graying; 演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 青木仁美：岐阜医学奨励賞(平成 24 年度)
- 2) Ken-ichi Tezuka, Hitomi Aoki, Takahiro Kunisada: International & American Association for Dental Research: William J. Gies Award-Biological Research (平成 24 年)
- 3) 青木仁美：日本色素細胞学会奨励賞(平成 24 年度)
- 4) Aoki H: The ASPCR-ASDR 2013 meeting (The Asian Society for Pigment Cell Research and the Australasian Society for Dermatology Research 2013 meeting): Irradiated keratinocytes affect melanocyte stem cells to lead hair graying.: Best Oral Presentation Award (Sydney Australia 2013 May 18) (平成 24 年度)

9. 社会活動

國貞隆弘：

- 1) NEDO 技術委員(平成 25 年度)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 手塚建一：「ワールドビジネスサテライト 加速する iPS 細胞ビジネス」：テレビ東京(2012 年 10 月 25 日)

- 2) 手塚建一：「親知らずから iPS 細胞 国際歯学会で受賞」：読売新聞，岐阜新聞，毎日新聞，中日新聞（2012 年 11 月 10 日）
- 3) 手塚建一：「ほっとイブニング 2012 年東海 3 県ハイライト」NHK(2012 年 12 月 28 日)
- 4) 手塚建一：「おはよう東海」(2013 年 1 月 8 日)
- 5) 手塚建一：「脊髄損傷治療に向けて臨床研究申請へ」：中日新聞，朝日新聞他(2013 年 1 月 8 日)
- 6) 手塚建一：「再生医療への期待と不安」：中日新聞(2014 年 4 月 7 日)
- 7) 手塚建一：「岐阜大も iPS 備蓄 親知らずから作製 再生医療に活用」：日本経済新聞(2014 年 7 月 22 日)
- 8) 國貞隆弘：「サンデーコラム」：岐阜新聞(医学生物学に関するエッセイを 2014 年 2 月 2 日より 3 ヶ月に 1 度連載。継続中。)

12. 自己評価

評価

3 年間の研究論文の数，インパクトファクターに関しては十分とはいえなくても不足はない。他分野・機関との共同執筆論文がほとんどであるが実際に当分野のスタッフが重要な役割を担っている。ただ，研究発表に関しては，国内外の学会での発表をさらに増やし，直接専門家から直接評価を受ける必要がある。競争的研究費の獲得は iPS 細胞やマウスを材料にした研究のコストを考えると十分とは言えないが，共同研究・共同利用により経費の節減を図ってもおり，深刻な不足には陥っていない。大型研究費が継続的に獲得できる保証はなく，教職員全員が少額の研究費を確実に得る努力が今後とも必要であろう。社会活動に関しては，記入対象ではないが國貞が 3 年間で 40 報以上の専門誌の査読，国際学会の運営委員をこなした他，手塚も査読を多数行っている。

手塚を中心にした歯髄細胞関連の国際特許の出願，ヒト白血球抗原 (HLA) ハプロタイプホモ歯髄細胞を利用した脊髄損傷の細胞治療の実現化推進の努力は特筆すべきである。本橋は CREST 研究の実質的な中心として成果を挙げ，関連する総説を 2015 年に出版した。日本人人口の約 20%をカバーする iPS ラインの樹立はいずれも特筆すべき業績である。青木は学内外の研究者と精力的に共同研究を進め，記入対象ではないが一般向けの講演等もこなしつつ，多数の国際誌に論文を発表し，学会賞を獲得した。

研究主体の再生医科学独立選考所属の分野としての責任を十分果たしてきたと評価したい。

現状の問題点及びその対応策

研究テーマが拡散気味ではあるが，幹細胞研究と再生医学への応用という観点では統一されている。相変わらず厳しい研究費獲得状況が続いており（当分野の科学研究費採択率が低い），ある程度資金の提供先に合わせた研究をせざるを得ないという状況は変わっていない。

岐阜大学大学院医学系研究科全体で基礎的な研究に実質的に参加している研究者が漸減しており，研究機関としてどう研究能力を維持させていくかを真剣に考えなければ，近い将来現在の潜在的な研究能力さえ失う危機感を抱いている。研究科全体で後継研究者を育成するための具体的で実効性のあるプランの確立が急務と考える。

今後の展望

楽観的な要素は皆無ではあるが，生物学の基礎研究と並行して社会的な注目度の高い再生医療研究にも積極的に取り組み，質の高い基礎研究と社会貢献を目指した応用研究をバランス良く行っていきたい。学内で効果的な共同研究を行い，リソースと情報を有効に活用することも一層積極的に行いたい。現在のホーユー株式会社との共同研究は単なる研究費の提供ではなく，新たなテーマとして発展しており，継続して推進したい。

(2) 神経生物分野

1. 研究の概要

再生医科学専攻 再生分子統御学講座 神経生物分野では、分子生物学および細胞生物学における最新の技術を駆使し、神経変性疾患の病態解明、さらに治療法の開発を目指した教育と研究を行っている。神経変性疾患の多くは難治性であり、治療法の開発が急務である。そのためには病態の解明が最優先課題であり、医学のみならず細胞生物学、分子生物学、生化学など各専門分野を融合した Interdisciplinary Research and Education (学際的研究および教育) が必要である。本分野の教育と研究は研究室のホームページ (<http://www1.gifu-u.ac.jp/~neurobio/>) に記載しているが、以下に最新の(平成 26 年現在) 研究と教育内容を示す。

A. 研究

1. 難治性神経変性疾患における小胞体ストレスの役割の解明

小胞体は細胞内小器官であり、細胞内カルシウム濃度調節およびタンパク質の修飾を行い、生命現象における細胞機能維持および情報伝達に重要な役割を果たしている。その機能が障害されると小胞体ストレスと呼ばれる現象がおこり、小胞体内に折り畳み異常を起こしたタンパク質が蓄積する。細胞は機能を正常な状態に戻すように小胞体膜上に存在するタンパク質を活性化(小胞体ストレス応答)するが、その破綻により細胞死が誘導される(中川等, *Nature* 2000)。本分野では、小胞体ストレス制御因子およびアルツハイマー病におけるアミロイド-ベータ産生に関与するガンマ-セクレターゼ制御因子をゲノムワイドにスクリーニングする方法を確立し、アルツハイマー病、ハンチントン病の治療法開発を目指した教育と研究を行っている。

(ア) アルツハイマー病: 日本国内には、既に予想を超え **462 万人 (2012 年)** の認知症患者が存在すると推計されている。その 7 割を占めるのがアルツハイマー病である。家族性アルツハイマー病の研究から、アミロイド-ベータ産生に関わるガンマ-セクレターゼの病態への関与が示唆されている。しかし、90 パーセント以上は遺伝子変異を認めないため、原因も不明のままである。一方、糖尿病・肥満などのメタボリック症候群がその危険因子として注目されている。そこで、本分野では、メタボリック症候群とガンマ-セクレターゼ活性との関連性の解明からアルツハイマー病の病態解明を目指した研究を行っている。さらに、農水省の受託研究にて、機能性食品成分を多く含む食物に注目し、「栄養と認知症予防」について研究を進めている。

(イ) ハンチントン病: 常染色体優性遺伝様式を示し、不随意運動と精神神経症状を特徴とする神経変性疾患である。遺伝子変異によりグルタミンが多数連続し、神経変性をきたすと考えられているが、その機構の詳細は不明のままである。本分野では、ハンチントン病モデルマウスにおいて、小胞体の形態異常を明らかにし、その異常から病態の解明を目指している。

2. 神経細胞特異的な細胞死関連遺伝子の同定と機能解析

カスパーズ(システインプロテアーゼ)は線虫から哺乳類まで相同遺伝子が存在し、アポトーシス(細胞死)を誘導するプロテアーゼとして中心的な役割を果たしている。本分野では、カスパーズの役割、特に難治性神経疾患(脊髄小脳変性症と運動ニューロン疾患)への関与を解明するため、スモールプール cDNA ライブラリーを使った遺伝子のクローニング法による遺伝子の同定と機能解析を行っている。この解析にて、神経疾患の原因遺伝子(Caytaxin)と新規の遺伝子(Prune2)を同定し、機能および病態の解析から治療法開発に向けた教育と研究を行っている。

3. 大脳皮質運動連合野および前庭神経系の中核機序の研究

電気生理学的手法を用い、神経機能の解析を行っている。

B. 教育

大学院生(博士前期および後期)は、将来(次世代)の研究者になるために、諸外国で行われているプログラムを参考にした教育と研究指導が必要だと考えている。そのため、本分野では以下の能力を修得することを目指した教育指導を行っている。

- 個々の実験結果を考察する能力
- 自分の研究成果をまとめる能力
- 研究成果を発表する能力
- 討論する能力
- 英語能力(英語力を身につけるため、大学院生が中心となり Principles of Neural Science を毎週読んでいます。また、ラボミーティングを含め、可能な限り英語でのコミュニケーションを行っている。)

2. 名簿

教授：	中川敏幸	Toshiyuki Nakagawa
准教授：	川島 卓	Takashi Kawashima
講師：	佐竹裕孝	Hiroataka Satake
助教：	伊藤正徳	Masanori Itoh

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）
なし

総説（和文）
なし

総説（欧文）
なし

原著（和文）
なし

原著（欧文）

- 1) Li S, Hayakawa-Yano Y, Itoh M, Ueda M, Ohta K, Suzuki Y, Mizuno A, Ohta E, Hida Y, Wang M, Nakagawa T. Olfaxin as a novel Prune2 isoform predominantly expressed in olfactory system. Brain Research. 2012;1488:1-13.
- 2) Ueda M, Li S, Itoh M, Hayakawa-Yano Y, Wang MX, Hayakawa M, Hasebe-Matsubara R, Ohta K, Ohta E, Mizuno A, Hida Y, Matsumoto M, Chen H, Nakagawa T. Polyglutamine expansion disturbs the endoplasmic reticulum formation, leading to caspase-7 activation through Bax. Biochem Biophys Res Commun. 2014;443:1232-1238.
- 3) Han J, Jung S, Jang J, Kam TI, Choi H, Kim BJ, Nah J, Jo DG, Nakagawa T, Nishimura M, Jung YK. OCIAD2 activates γ -secretase to enhance amyloid β production by interacting with nicastrin. Cell Mol Life Sci. 2014;71:2561-2576.

IF 2.828

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：中川敏幸；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：発症予防を目指したアルツハイマー病の病態解明；平成 23-25 年度；5,460 千円(2,730：1,300：1,430 千円)
- 2) 研究代表者：川島 卓；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：大脳局所電場電位の $\beta\gamma$ シンクロニールによる上肢運動時のサル・ヒトの脳機能比較；平成 24-25 年度；3,510 千円(2,080：1,430 千円)
- 3) 研究代表者：太田和徳；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：生活習慣病によるアルツハイマー病発症機構の解明；平成 23-24 年度；4,160 千円(2,340：1,820 千円)
- 4) 研究代表者：中川敏幸，研究分担者：大沢匡毅，李 東洙，東 華岳；岐阜大学大学院医学系研究科 多分野共同研究「プロジェクトチーム」：“物忘れ”を科学する遺伝学的解析の発展的戦略；平成 24 年度；2,000 千円
- 5) 研究代表者：太田和徳；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：転写因子 ATF4 を標的とした生活習慣病によるアルツハイマー病発症機構の解明；平成 25-26 年度；3,100 千円(1,800：1,300 千円)
- 6) 研究代表者：中川敏幸，研究分担者：大沢匡毅，李 東洙，東 華岳，李 詩沫，本田 諒；大学活性化経費(研究：研究グループ形成支援)：“シナプス再生”をターゲットにしたアルツハイマー病治療の発展的戦略；平成 25 年度；4,000 千円
- 7) 研究代表者：中川敏幸；文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)：アルツハイマー病病態に基づく発症予防法の解明；平成 26-28 年度；4,000 千円(2,200：900：900 千円)
- 8) 研究代表者：川島 卓，研究分担者：村瀬 忍，佐竹裕孝；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：大脳局所電場電位の $\beta\gamma$ シンクロニールによる上肢運動時のサル・ヒトの脳機能比較；平成 24-26 年度；3,510 千円(1,600：1,100：810 千円)

2) 受託研究

- 1) 研究代表者：中川敏幸, 太田和徳；農林水産物・食品の機能性を解析・評価するための基盤技術の開発(ケルセチン・イソフラボンの生活習慣予防機能の科学的エビデンス強化と高含有農作物の作出)；平成 24 年度；5520 千円：農林水産省
- 2) 研究代表者：中川敏幸, 太田和徳；農林水産物・食品の機能性を解析・評価するための基盤技術の開発(ケルセチン・イソフラボンの生活習慣予防機能の科学的エビデンス強化と高含有農作物の作出)；平成 25 年度；4,620 千円：農林水産省
- 3) 研究代表者：中川敏幸；認知機能障害予防作用を持つケルセチン高含有タマネギの栽培技術及び加工食品の開発(ケルセチン及びケルセチン高含有タマネギの認知機能改善効果の解明)；平成 26 年度；5,832 千円：農林水産省

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

なし

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

- 1) 中川敏幸, 犬塚 貴, 太田和徳：アルツハイマー病原因物質であるアミロイド - β 産生に及ぼすケルセチンの効果と作用機構の解明：農林水産省委託事業「農林水産物・食品の機能性等を解析・評価するための基盤技術の開発」平成 23 年度成果報告書(平成 24 年 2 月)
- 2) 吉川敏一(研究統括者), 研究実施機関：京都府立医科大学, 岐阜大学 その他：ケルセチン・イソフラボンの生活習慣病予防機能の科学的エビデンス強化と高含有農作物の作出：農林水産省委託事業「農林水産物・食品の機能性等を解析・評価するための基盤技術の開発」平成 23 年度研究成果報告書(平成 24 年 2 月)
- 3) 中川敏幸, 犬塚 貴, 太田和徳：アルツハイマー病原因物質であるアミロイド - β 産生に及ぼすケルセチンの効果と作用機構の解明：農林水産省委託事業「農林水産物・食品の機能性等を解析・評価するための基盤技術の開発」平成 24 年度中間評価用研究成果報告書(平成 24 年 7 月)
- 4) 吉川敏一(研究統括者), 研究実施機関：京都府立医科大学, 岐阜大学 その他：ケルセチン・イソフラボンの生活習慣病予防機能の科学的エビデンス強化と高含有農作物の作出：平成 24 年度農水省受託研究中間評価用研究成果報告書(平成 24 年 11 月)
- 5) 中川敏幸, 犬塚 貴, 太田和徳：アルツハイマー病原因物質であるアミロイド - β 産生に及ぼすケルセチンの効果と作用機構の解明：農林水産省委託事業「農林水産物・食品の機能性等を解析・評価するための基盤技術の開発」小課題毎研究成果報告書(平成 24 年 12 月)

- 6) 中川敏幸, 犬塚 貴, 太田和徳: アルツハイマー病原因物質であるアミロイド-β産生に及ぼすケルセチンの効果と作用機構の解明: 農林水産省委託事業「農林水産物・食品の機能性等を解析・評価するための基盤技術の開発」小課題毎研究成果報告書(平成 25 年 2 月)
- 7) 中川敏幸, 犬塚 貴, 太田和徳: アルツハイマー病原因物質であるアミロイド-β産生に及ぼすケルセチンの効果と作用機構の解明: 農林水産省委託事業「ケルセチン・イソフラボンの生活習慣病予防機能の科学的エビデンス強化と高含有農作物の作出」小課題毎研究成果報告書(平成 26 年 2 月)
- 8) 中川敏幸: 発症予防を目指したアルツハイマー病の病態解明: 平成 23~25 年度科学研究費助成事業実績報告書(基盤 C)(平成 26 年 4 月)
- 9) 小堀真珠子(研究代表者), 研究実施機関: 徳島大学, 岐阜大学, その他: 認知機能障害予防作用を持つケルセチン高含有タマネギの栽培技術及び加工食品の開発: 平成 26 年度農水省受託研究実施課題別研究実施計画書(平成 26 年 4 月)
- 10) 小堀真珠子(研究代表者), 研究実施機関: 徳島大学, 岐阜大学, その他: 認知機能障害予防作用を持つケルセチン高含有タマネギの栽培技術及び加工食品の開発: 平成 26 年度農水省受託研究課題別研究進捗報告書(平成 26 年 7 月)
- 11) 小堀真珠子(研究代表者), 研究実施機関: 徳島大学, 岐阜大学, その他: 認知機能障害予防作用を持つケルセチン高含有タマネギの栽培技術及び加工食品の開発: 平成 26 年度農水省受託研究課題別研究進捗報告書(平成 26 年 9 月)
- 12) 小堀真珠子(研究代表者), 研究実施機関: 徳島大学, 岐阜大学, その他: 認知機能障害予防作用を持つケルセチン高含有タマネギの栽培技術及び加工食品の開発: 平成 26 年度農水省受託研究課題別研究進捗報告書(平成 26 年 11 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

科研費(基盤研究)および受託研究費を獲得し, オリジナルな研究を広く行っている。博士後期課程および博士前期課程の大学院生に対しては, 国際・国内学会の発表等により目標を明確にした教育活動を行っている。大学院に関してもバングラディッシュからの国費留学生(10 月から研究生)と中国からの留学生が平成 27 年度以降入学予定である。これら研究および大学院生の入学, さらに大学院教育に関する進捗状況は, 総じて順調に発展している。

現状の問題点及びその対応策

2014 年現在, 本分野の研究は, 教員 2 名(教授, 助教), 特別協力研究員 1 名, 大学院生 3 名(博士後期課程: 1 名; 博士前期課程: 2 名), 研究生(国費留学生) 1 名で研究を行っている。現在の大学院生は, 栄養学系・看護学系・工学系の出身者が多く, 本学医学部出身者の本分野への大学院入学は今のところない。研究を広く展開するためには, 様々な専門分野出身者の集合(融合)体が必要である。そのため今後は他大学・他分野出身者のみならず本学医学部出身の優秀な学生の確保に努力したい。

科研費取得と論文発表は, 大学院生のみならず医学部学生の教育・研究指導にとって極めて重要である。そのため, 学生の教育と研究は教授と助教の 2 名で行っている。より細かな指導と世界に通用する研究者育成を効率よく達成するためにも優秀なスタッフの確保と補充が望まれる。また, 大学院生教育の時間的な充実と国際化を目指し, 毎週木曜日の午前中にラボミーティングを行い, 発表および質疑応答を全て英語で行っている。今後外国人研究者との交流やセミナーの充実をはかりたい。

研究成果に関して, 国際・国内学会で毎年発表している。

今後の展望

分子生物学および細胞生物学を駆使しながら神経変性疾患の病態解明を行っているが, 着実に成果が現れてきている。この科学的根拠に基づき, 介入試験による予防・治療法の開発(トランスレーショナルリサーチ)を目指した研究も推進したいと考えている。

さらに, 教育・研究を通して, グローバルな視野で, 独創的な思考が出来る大学院生・医学生を育成したい。

(3) 病原体制御学分野

1. 研究の概要

病原体制御では分子系統進化の研究を基軸に、細胞内寄生細菌の感染機構の研究、病原微生物感染症の迅速診断、環境や食品の安全性を担保する安全性モニタリングシステムの開発に従事してきた。特に文科省の微生物遺伝子資源の基盤整備事業では、病原微生物を収集、保存分譲することでわが国の研究基盤と医療を支える活動を行っている。この資産を利用し、感染症医療の在り方を根本から変えるための新規技術開発と実用化を図るための研究展開を行っている。さらに腸内細菌叢を形成する微生物を使ってアレルギー対策など社会貢献の大きい新規分野の開拓研究も推進している。

2. 名簿

教授： 江崎孝行 Takayuki Ezaki
講師： 福永 肇 Hajime Fukunaga

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 大楠清文. 梅毒血清反応：ナースのための検査値ガイド すぐわかる！検査とケアのポイント，東京：総合医学社；2012年.
- 2) 大楠清文. カンピロバクター感染症：感染症事典，東京：オーム社；2012年.
- 3) 江崎孝行(分担). 分類：微生物学：臨床微生物学・医動物学，東京：医学書院；2012年：8-11.
- 4) 江崎孝行(分担). 形態・構造. 及び性状：臨床微生物学・医動物学，東京：医学書院；2012年：79-84.
- 5) 江崎孝行(分担). グラム陽性抗酸菌群：臨床微生物学・医動物学，東京：医学書院；2012年：85-86.
- 6) 江崎孝行(分担). 嫌気性グラム陽性球菌：臨床微生物学・医動物学，東京：医学書院；2012年：493-517.
- 7) 五十君静信，江崎孝行，高鳥浩介，土戸哲明編. 微生物の簡易迅速検査法，東京：テクノシステム；2013年.
- 8) 江崎孝行(分担). 病原微生物感染症の簡易迅速診断：微生物の簡易迅速検査法，東京：テクノシステム；2013年：493-517.
- 9) 江崎孝行(分担). バイオテロリズム：微生物学，基礎から臨床へのアプローチ，東京：メディカル・サイエンス・インターナショナル；2013年.
- 10) 江崎孝行(分担). 消毒と滅菌：標準微生物学(第11版)，東京：医学書院；2013年：47-55.
- 11) 江崎孝行(分担). 病原微生物の取り扱い：標準微生物学(第11版)，東京：医学書院；2013年：59-63.
- 12) 江崎孝行(分担). 細菌の分類と同定：標準微生物学(第11版)，東京：医学書院；2013年：131-138.
- 13) 大楠清文. いま知りたい 臨床微生物検査実践ガイドー珍しい細菌の同定・遺伝子検査・質量分析ー，東京：医歯薬出版；2013年.
- 14) 大楠清文，江崎孝行翻訳. 第153章 *Salmonella* 感染症：福井次矢，黒川 清日本語監修. ハリソン内科学 日本語版第4版，東京：メディカル・サイエンス・インターナショナル；2013年.
- 15) 大楠清文，江崎孝行翻訳. 第154章 細菌性赤痢：福井次矢，黒川 清日本語監修. ハリソン内科学 日本語版第4版，東京：メディカル・サイエンス・インターナショナル；2013年.
- 16) 大楠清文，江崎孝行. 非結核菌性抗酸菌の分類・同定 Up to Date -DNA で何がわかるのか？：倉島篤行，小川賢二編. 肺 MAC 症診療 Up to Date-非結核生抗酸菌症のすべてー，東京：南江堂；2013年.
- 17) 大楠清文，江崎孝行(分担). ブラック微生物学(第3版)，東京：丸善出版；2013年.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 江崎孝行. 原核生物の系統分類と細菌及びアーキア(1)，生物の科学. 遺伝 2012年；66巻：220-226.
- 2) 江崎孝行. 原核生物の系統分類と細菌及びアーキア(2)，生物の科学. 遺伝 2012年；66巻：340-347.
- 3) 大楠清文. 最近話題の細菌トップ 12ー珍しい細菌とめぐり逢うコツとノウハウを伝授しますー⑦ *Clostridium tertium*，*Medical Technology* 2012年；40巻：62-67.
- 4) 大楠清文. 最近話題の細菌トップ 12ー珍しい細菌とめぐり逢うコツとノウハウを伝授しますー⑧ *Streptococcus gallolyticus*，*Medical Technology* 2012年；40巻：193-199.
- 5) 大楠清文. 最近話題の細菌トップ 12ー珍しい細菌とめぐり逢うコツとノウハウを伝授しますー⑨ *Campylobacter fetus subsp.fetus*，*Medical Technology* 2012年；40巻：299-306.
- 6) 大楠清文. 最近話題の細菌トップ 12ー珍しい細菌とめぐり逢うコツとノウハウを伝授しますー⑩ *NVS(nutritionally variant streptococci)*，*Medical Technology* 2012年；40巻：397-404.
- 7) 大楠清文. 感染症検査における境界値の取扱い方 感染症診療における遺伝子検査活用のコツとピットホール，*臨床検査* 2012年；56巻：399-405.
- 8) 大楠清文. 最近話題の細菌トップ 12ー珍しい細菌とめぐり逢うコツとノウハウを伝授しますー⑪ *Arcanobacterium haemolyticus*，*Medical Technology* 2012年；40巻：513-520.

- 9) 大楠清文. 最近話題の細菌トップ 12—珍しい細菌とめぐり逢うコツとノウハウを伝授します—⑩ *Bordetella hormesii*, *Medical Technology* 2012年; 40巻: 626—634.
- 10) 大楠清文. 医学検査のあゆみ 質量分析技術を利用した細菌の新しい同定法, *Modern Media* 2012年; 58巻: 113—122.
- 11) 大楠清文. 症例から学ぶ感染症セミナー 血液培養で複数菌が陽性となった妊娠20週の30歳代女性 “本症例の疑問点” から “研究的考察へ”, *感染症学雑誌* 2012年; 86巻: 5—7.
- 12) 大楠清文, 江崎孝行. 特集(1) 細菌検査のパラダイムシフト 3. 核酸増幅法の適応による臨床細菌検査の進歩, *医療と検査機器・試薬* 2012年; 35巻: 677—682.
- 13) 大楠清文. 【微生物検査の将来展望】臨床微生物検査の今後の展望 三大技術革新と患者診療への貢献, *アニムス* 2012年; 17巻: 14—21, 34—35.
- 14) 大楠清文, 江崎孝行. 【微生物に関連した分子生物学的検査の基礎から応用まで】応用編 培養検査を用いない細菌の同定法 16S rRNA 配列のシーケンス解析による細菌の同定, *臨床と微生物* 2012年; 39巻: 601—610.
- 15) 川上秀昭, 犬塚裕子, 望月清文, 高橋伸通, 武藤敏弘, 大楠清文, 矢口貴志, 西村和子. *Paecilomyces* 属による眼感染症における診断, 治療および予後についての検討, *日本眼科学会雑誌* 2012年; 116巻: 613—622.
- 16) 江崎孝行, 林 将大. 標準株など菌株の入手方法, 国内の購入ルートについて教えてください, *BioScan* 2013年; 7巻: 12.
- 17) 江崎孝行. 全ゲノム遺伝子情報を使った細菌の菌種の新しい定義の構築, *IFO RESEARCH COMMUNICATIONS* 2013年; 27巻: 5—16.
- 18) 大楠清文. 【直伝! 救急手技プラチナテクニック】(第1部) ER診療や救急科専門医取得に役立つエッセンス菌は嘘つかない! 「名探偵キヨ」のケースファイルから, レジデントノート(別冊救急ERノート7) 2013年: 169—172.
- 19) 大楠清文. 【次世代の微生物検査】MALDI-TOF MSを利用した菌種同定法, *臨床検査* 2013年; 57巻: 388—396.
- 20) 大楠清文, 江崎孝行. 遺伝子解析技術を活用した感染症診断の実践, *小児感染免疫* 2013年; 25巻: 55—62.
- 21) 大楠清文. 【理解して出そう小児の検査】IV. 免疫・アレルギー・感染症 感染症の遺伝子検査, *小児科診療* 2013年; 76巻(増刊): 223—228.
- 22) 大楠清文, 江崎孝行. 感染症診断における遺伝子解析技術の有用性, *小児科* 2013年; 54巻: 1001—1010.
- 23) 江崎孝行. 病原細菌の分類手法の開発とそれを使った社会基盤の確立, *モダンメディア* 2014年; 2巻: 4—12.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 前田孝子, 田島廣一, 桑原正喜, 山田智恵子, 水谷和子, 谷田部恭, 大楠清文. 菌の同定に難渋した *Trichosporon debeurmannianum* による真菌血症の1症例, *医学検査* 2012年; 61巻: 19—25.
- 2) 大家進也, 小森伸也, 高橋伸通, 堅田利彦, 望月清文, 堀 暢英, 石橋康久, 大楠清文, 呉 志良, 高橋優三, 末松寛之, 浅野裕子. 岐阜大学およびその関連病院におけるアcantアメーバ角膜炎の12症例, *あたらしい眼科* 2012年; 29巻: 117—122.
- 3) 小嶋綾子, 松村由美, 荒川明子, 加藤真弓, 是枝 哲, 大楠清文, 宮地良樹. 発症から診断確定まで6年間を要した *Nocardia brasiliensis* による原発性皮膚ノカルジア症の1例, *臨床皮膚科* 2012年; 66巻: 258—262.
- 4) 奥村陽子, 大楠清文, 宮崎 崇, 太田浩敏, 永井美貴, 清島真理子, 浅野裕子. 犬咬傷後に生じた *Mycobacterium chelonae* 皮膚感染症の1例, *皮膚科の臨床* 2012年; 54巻: 365—368.
- 5) 蓮見純平, 深沢千絵, 星野 直, 浜田洋通, 大楠 清. *Mycobacterium ulcerans* subsp. *shinshuense* による頸部皮膚潰瘍の1例, *小児感染免疫* 2012年; 23巻: 383—388.
- 6) 永松麻希, 高木妙子, 大柳忠智, 黒沢未希, 積田奈津希, 竹村 弘, 大楠清文. *Tsukamurella pulmonis* による腹膜透析関連腹膜炎の1例, *日本臨床微生物学雑誌* 2012年; 22巻: 154—160.
- 7) 菅原芳秋, 大楠清文, 大塚喜人, 坂田英子, 須田武保, 中栄正隆, 柴崎浩一. 再発を繰り返した *Corynebacterium kroppenstedtii* による乳腺炎の1症例, *日本臨床微生物学雑誌* 2012年; 22巻: 161—166.
- 8) 諸戸尚也, 小森伸也, 小國 務, 白木育美, 末森晋典, 望月清文, 天野雄平, 大楠清文. クリのイガ刺入後に生じた *Malassezia* 眼感染症の1例, *臨床眼科* 2012年; 66巻: 623—627.
- 9) 山田美和, 畠山真弓, 山本哲久, 吉崎仁胤, 折田 環, 吉岡睦展, 大楠清文. *Tsukamurella* 感染症の1例, *皮膚科の臨床* 2012年; 54巻: 957—961.
- 10) 堅田利彦, 近藤雄司, 村瀬寛紀, 熊田充起, 望月清文, 大楠清文. 水痘に合併した網膜血管炎の1例, *臨床眼科* 2012年; 66巻: 1245—1251.
- 11) 松下久美子, 津嶋かおり, 金子 優, 磯崎将博, 大楠清文. 結核性手関節炎の1症例, *日本臨床微生物学雑誌* 2012年; 227—230.
- 12) 後藤孝司, 浅野裕子, 森永朝美, 大楠清文. *Cardiobacterium hominis* による感染性心内膜炎の1例, 岐

岐阜県臨床検査技師会誌 2013年;42巻:22-25.

- 13) 浅野裕子, 森永朝美, 鳥居知美, 大楠清文. “*Mycobacterium ulcerans* subsp. *shinshuense*”による難治性の壊死性皮膚潰瘍の3例, 岐阜県臨床検査技師会誌 2013年;42巻:30-36.
- 14) 新美佑介, 黒岩真友子, 大家進也, 大楠清文. 高校入試直前に発症したネコひっかき病の1例, 臨床眼科 2013年;67巻:1289-1294.
- 15) 尾原信行, 浅井克則, 大楠清文, 若山 晁. Broad-range PCR法による16SリボソームRNA解析で起因菌 *Streptococcus intermedius* が同定された培養陰性脳膿瘍の1例, BRAIN and NERVE 2013年;65巻:1199-1203.

原著 (欧文)

- 1) Ezaki T, Hayashi M, Jiwei Z, Mizuno T, Natoeri T, Ohkusu K. Role of Culture Collections in Disasters Disaster Research. 2012;7:768-774.
- 2) Kaneko T, Murotani M, Ohkusu K, Sugita T, Makimura K. Genetic and biological features of catheter-associated *Malassezia furfur* from hospitalized adults. Med Mycol. 2012;50:75-80. IF 2.261
- 3) Yoneda K, Nakai K, Ishikawa E, Demitsu T, Ohkusu K, Kubota Y. *Scedosporium apiospermum* skin infection mimicking tuberculous xanthoma. J Dermatol. 2012;39:316-318. IF 2.354
- 4) Kitamura Y, Sawabe E, Ohkusu K, Tojo N, Tohda S. First report of sepsis caused by *Rhodococcus corynebacterioides* in a patient with myelodysplastic syndrome. J Clin Microbiol. 2012;50:1089-1091. IF 4.232
- 5) Nagamatsu M, Takagi T, Ohyanagi T, Yamazaki S, Nobuoka S, Takemura H, Akita H, Miyai M, Ohkusu K. Neonatal meningitis caused by *Streptococcus gallolyticus* subsp. *pasteurianus*. J Infect Chemother. 2012;18:265-268. IF 1.384
- 6) Ota R, Iwasawa MT, Ohkusu K, Kambe N, Matsue H. Maximum growth temperature test for cutaneous *Mycobacterium chelonae* predicts the efficacy of thermal therapy. J Dermatol. 2012;39:205-206. IF 2.354
- 7) Masaki T, Ohkusu K, Ezaki T, Miyamoto H. *Nocardia elegans* infection involving purulent arthritis in humans. J Infect Chemother. 2012;18:386-389. IF 1.384
- 8) Miyazato A, Ohkusu K, Tabata M, Kawamura T, Tachi Y, Ezaki T, Niinami H, Mitsutake K. Comparative molecular and microbiological diagnosis of 19 infective endocarditis cases in which causative microbes were identified by PCR-based DNA sequencing from the excised heart valves. J Infect Chemother. 2012;18:318-323. IF 1.384
- 9) Matsunami M, Otsuka Y, Ohkusu K, Sogi M, Kitazono H, Hosokawa N. Urosepsis caused by *Globicatella sanguinis* and *Corynebacterium riegliei* in an adult: case report and literature review. J Infect Chemother. 2012;18:552-554. IF 1.384
- 10) Fujita Y, Iikura M, Horio Y, Ohkusu K, Kobayashi N. Pulmonary *Actinomyces graevenitzii* infection presenting as organizing pneumonia diagnosed by PCR analysis. J Med Microbiol. 2012;61:1156-1158. IF 2.266
- 11) Nagaoka K, Izumikawa K, Yamamoto Y, Yanagihara K, Ohkusu K, Kohno S. A case of multiple lung abscesses caused by *Actinomyces graevenitzii* mimicking acute pulmonary coccidioidomycosis. J Clin Microbiol. 2012;50:3125-3128. IF 4.232
- 12) Murata K, Hoshina T, Saito M, Ohkusu K, Yamamura k, Tanoue Y, Ihara K, Hara T. Bacterial pericarditis caused by *Lactobacillus iners* in an infant. Diag Microbiol Infect Dis. 2012;74:181-182. IF 2.568
- 13) Otera H, Yamamoto G, Ohkusu K, Kozuki H, Hashimoto K, Tada K. Necrotizing pneumonia in the community. Inter Med. 2012;51:2463-2467. IF 0.967
- 14) Mochizuki K, Shiraki I, Murase H, Ohkusu K, Nishimura K. Identification and sensitivity of two rare fungal species isolated from two patients with *Fusarium keratomycosis*. J Infect Chemother. 2012;18:939-944. IF 1.384
- 15) Hayashi M, Hayashi S, Natori T, Mizuno T, Miyata M, Yoshida S, Zhang J, Kawamoto K, Ohkusu K, Makino S, Ezaki T. Use of blood-free enrichment broth in the development of a rapid protocol to detect *Campylobacter* in twenty-five grams of chicken meat. Int J Food Microbiol. 2013;163:41-46. IF 3.155
- 16) Hayashi M, Natori T, Hayashi S, Miyata M, Ohkusu K, Kawamoto K, Kurazono H, Makino S, Ezaki T. A New Protocol to Detect Multiple Foodborne Pathogens with PCR Dipstick DNA Chromatography after a Six-Hour Enrichment Culture in a Broad-Range Food Pathogen Enrichment Broth. BioMed Research Inter. 2013:Article ID295050, 10 pages. IF 2.880
- 17) Ogura M, Yano H, Sato M, Nakamura A, Wakimoto Y, Ohkusu K, Ezaki T. Comparative analysis of MRSA strains isolated from cases of mupirocin ointment treatment in which eradication was successful and in which eradication failed. J Infect Chemother. 2013;19:196-201. IF 1.384
- 18) Sawada A, Komori S, Udo K, Ohkusu K. Case of endogenous endophthalmitis caused by *Klebsiella pneumoniae* with *magA* and *rmpA* genes in an immunocompetent patient. J Infect Chemother. 2013;19:326-329. IF 1.384
- 19) Hadano Y, Ito K, Kawamura I, Ohkusu K. *Moraxella osloensis*: an unusual cause of central venous catheter infection in a cancer patient. Int J Gen Med. 2013;5:875-877.
- 20) Suzuki J, Sugiyama T, Hadano Y, Ohkusu K. *Campylobacter showae* bacteremia with cholangitis. J. Infect Chemother. 2013:DOI 10.1007/s10156-012-0524-2. IF 1.384
- 21) Miyata J, Tasaka S, Miyazaki M, Ohkusu K. *Bacillus cereus* necrotizing pneumonia in a patient with

- nephritic syndrome. *Inter Med.* 2013;53:101-114. IF 0.967
- 22) Ohji G, Ohkusu K, Toguchi A. *Burkholderia contaminans*: unusual cause of biliary sepsis. *J Infect Chemother.* 2013;19: DOI 10.1007/s10156-012-0547-8. IF 1.384
- 23) Yajima N, Wada R, Kimura S, Ohkusu K. Whipple disease diagnosed with PCR using formalin-fixed paraffin-embedded specimens of the interstitial mucosa. *Inter Med.* 2013;52:219-222. IF 0.967
- 24) Yamada H, Takahashi N, Hori N, Ohkusu K. Rare case of fungal keratitis caused by *Corynespora cassiicola*. *J Infect Chemother.* 2013;19:1167-1169. IF 1.384
- 25) Higurashi Y, Tatsuno K, Fujimoto F, Ohkusu K. Two cases of bacteremia caused by *Leptotrichia trevisanii* in patients with febrile neutropenia. *J Infect Chemother.* 2013;19:1181-1184. IF 1.384
- 26) Mochizuki K, Sawada A, Suemori S, Ohkusu K. Intraocular penetration of intravenous micafungin in inflamed human eyes. *Antimicrob Agents Chemother.* 2013;57:4027-4030. IF 4.451
- 27) Ohtaki H, Ohkusu K, Ohta H. A case of sepsis caused by *Streptococcus canis* in a dog owner: a first case of sepsis without dog bite in Japan. *J Infect Chemother.* 2013;19:1206-1209. IF 1.384
- 28) Kikuchi M, Ito S, Yasuda M, Tsuchiya T, Hatazaki K, Takanashi M, Ezaki T, Deguchi T. Remarkable increase in fluoroquinolone-resistant *Mycoplasma genitalium* in Japan. *J Antimicrob Chemother.* 2014;69:2376-2382. doi:10.1093/jac/dku164. IF 5.439
- 29) Ahmed A, Fukunaga H, Mizuno T, Ezaki T. Isolation of *Salmonella* from Liquid Whole Eggs Sold in Retail Outlets in Egypt, Bangladesh and not in Japan. *Advances in Animal and Veterinary Sciences.* 2014;2:390-392.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：西淵光昭，研究分担者：江崎孝行；厚生労働科学研究費補助金：アジアのコレラ・腸管感染症の現状把握と問題解決のための研究：国際共同研究との連携を介した日-アジアネットワーク形成を目指して；平成 24 年度；440 千円
- 2) 研究代表者：江崎孝行；科学研究費補助金基盤研究(B)：裁定委員会に高度病原体の新分類法を提案するための根拠とする遺伝情報の収集；平成 20-24 年度；18,200 千円(6,240：3,640：2,730：2,860：2,730 千円)
- 3) 研究代表者：倉園久生，研究分担者：江崎孝行；厚生労働科学研究費補助金：テロの可能性のある病原体等の早期検出・迅速診断法の開発とその評価法の確立に関わる研究；平成 20-26 年度；17,430 千円(3,000：2,800：3,930：3,500：2,000：1,700：500 千円)
- 4) 研究代表者：西淵光昭，研究分担者：江崎孝行；厚生労働科学研究費補助金：平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金地球規模保健課題推進研究事業(国際医学協力研究事業)「アジア地域にまん延している疾病に関する研究」；平成 25-26 年度；400 千円(300：100 千円)

2) 受託研究

- 1) 江崎孝行：病原微生物の収集・保存・提供体制整備事業；平成 20-26 年度；27,450 千円(3,900：3,900：3,800：3,800：5,150：3,500：3,400 千円)：(独)科学技術振興機構
- 2) 江崎孝行：NBRP に登録された 300 菌種の日和見病原体ゲノム解析；平成 24 年度；7,498 千円：(独)科学技術振興機構
- 3) 江崎孝行：食の機能性・安全性に関する高度な技術開発とその事業化によるアグリ・バイオクラスターの形成；平成 21-25 年度；37,501 千円(8,024：6,977：6,500：8,000：8,000 千円)：(財)十勝圏振興機構
- 4) 江崎孝行：バイオハザード検出システムを使った食中毒菌の検出法の検証実験；平成 25-26 年度；4,500 千円(600：3,900 千円)：フルイドウェアテクノロジーズ(株)

3) 共同研究

- 1) 江崎孝行：土壌汚染対策のための技術開発 VOC の微生物等を利用した環境汚染物質浄化技術開発「次世代型バイオレメディエーション普及のためのセーフバイオシステムの研究開発」微生物の安全性評価のための情報基盤の開発；平成 23-26 年度；14,718 千円(3,500：3,181：5,416：2,621 千円)：(独)製品評価技術基盤機構

5. 発明・特許出願状況

- 1) 福永 肇，江崎孝行：サルモネラ菌とシート状 M 細胞；平成 25 年(特許 5420791 号)
- 2) 福永 肇，江崎孝行：IgE を結合するフィラメント状細菌；平成 26 年(特許 2014-161001 号)

6. 学会活動

1) 学会役員

江崎孝行：

- 1) 日本微生物資源学会会長(平成 25 年～現在)
- 2) 日本臨床微生物学会監事(～平成 26 年)
- 3) 日本微生物系統分類研究会会長(～平成 26 年)
- 4) 国際微生物連盟裁定委員(～平成 26 年)
- 5) 国際微生物連盟ブドウ球菌, レンサ球菌命名委員(～平成 26 年)
- 6) 日本学術会議連携委員(～平成 26 年)
- 7) 日本細菌学会監事(平成 25 年～平成 26 年)

大楠清文：

- 1) 日本臨床微生物学会評議員(～現在)
- 2) 日本臨床微生物学会編集委員会・副委員長(～現在)

2) 学会開催

江崎孝行：

- 1) 第 33 回日本微生物系統分類研究会(平成 25 年 11 月, 岐阜)

大楠清文：

- 1) 日本臨床微生物学会第 5 回地区研修会・第 12 回 ICMT 講習会(平成 25 年 6 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

江崎孝行：

- 1) Microbiology and Immunology ; Associate Editor (～平成 26 年)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

江崎孝行：

- 1) 病原体の統合 DATA base(平成 24 年 1 月, 東京, 招待講演 演者)
- 2) BioDefense Conference Washington DC (2012.02, Washington DC, USA, invited lecture: DNA chromatography for rapid screening BSL3 pathogens; Speaker)
- 3) バイオセーフティ学会(平成 24 年 3 月, 東京, 「バイオセーフティ専門家制度へ期待することー日本細菌学会の立場から」シンポジスト)
- 4) 第 19 回日本微生物資源学会総会 シンポジウム(平成 24 年 6 月, 千葉, 「MALDI-TOF・MAS を使った GTC 株の病原性因子保有株の品質保証へ向けた取り組み」シンポジスト)
- 5) 十勝エリア ABC forum (平成 24 年 7 月, 帯広, 招待講演「食品の安全性を検査する新しいアプローチ」演者)
- 6) Food Safety Seminar (2012.09, Thailand, invited lecture: DNA chromatography; Speaker)
- 7) 第 28 回 SCANIC 学術研究会(平成 24 年 10 月, 大阪, 招待講演「学術研究会外来でできる感染症の遺伝子検査」演者)
- 8) 日本性感染症学会(平成 24 年 12 月, 岐阜, 招待講演「外来でわかる性感染症の網羅遺伝子検査法」演者)
- 9) 第 35 回日本分子生物学会年次大会 (平成 24 年 12 月, 博多, 「Reconstruction of taxonomy of family Enterobacteriaceae after genome wide analysis of house keeping genes.」シンポジスト)
- 10) 岐阜シンポジウム(平成 25 年 11 月, 岐阜, 「細菌汚染を排除した新鮮食材の提供で安全をブランド化」演者)
- 11) 岐阜県獣医研修会(平成 26 年 1 月, 岐阜, 「Legionella の生菌検査法と遺伝子検査」演者)
- 12) New Approach to detect pathogenic bacteria with a rapid portable PCR and DNA chromatography.(平成 26 年 3 月, ウランバートル, モンゴル, 演者)
- 13) バイオテック(平成 26 年 5 月, 東京, 「迅速 PCR と核酸クロマトを使った病原体の迅速で簡易な検査法」演者)

大楠清文：

- 1) 第 23 回日本臨床微生物学会総会(平成 24 年 1 月, 横浜, 論文の書き方講習会「論文執筆のエッセンス」演者)
- 2) 2011 年度 JICA 臨床検査技術研修会(平成 24 年 1 月, 東京, 特別講演「血液・髄液検査法」演者)
- 3) 第 161 回結核病学会関東支部学会(平成 24 年 2 月, 東京, ランチョンセミナー「抗酸菌の同定と感染症の迅速診断に関する最新の話題」演者)
- 4) 第 29 回広島県医学検査学会(平成 24 年 3 月, 広島, 教育講演「論文の書き方のコツ&ポイント」演者)
- 5) 第 20 回 Tokyo Lung Conference U40(平成 24 年 3 月, 東京, 特別講演「症例から学ぶ呼吸器感染症の遺伝子診断」演者)
- 6) 第 115 回日本小児科学会(平成 24 年 4 月, 福岡, モーニング実践講座「臨床経過と迅速診断から紐解く感染症診療」演者)
- 7) Planet xMAP Japan 2012(平成 24 年 5 月, 東京, 特別講演「感染症の迅速診断における基礎解析技術の新たな潮流」演者)
- 8) 第 24 回臨床微生物迅速診断研究会(平成 24 年 5 月, 仙台, 「質量分析装置の現状と今後の展開 今後の日常検査での展望」パネリスト)
- 9) 第 3 回ロシユ遺伝子セミナー(平成 24 年 5 月, 名古屋, 特別講演「臨床微生物検査における菌の同定法 Part 2～データベース検索を活用する～」演者)
- 10) 第 3 回ロシユ遺伝子セミナー(平成 24 年 5 月, 名古屋, 特別講演「臨床微生物検査における菌の同定法 Part 2～データベース検索を活用する～」演者)
- 11) 第 10 回三菱化学メディエンス FORUM'12(平成 24 年 6 月, 東京, 特別講演「臨床微生物検査の今後の展望～三大技術革新と患者診療への貢献～」演者)
- 12) 日本臨床微生物学会 第 4 回地区研修会(平成 24 年 7 月, 福島, 教育講演「病原細菌の分類 Up-to-Date」演者)
- 13) 呼吸器 Next Forum(平成 24 年 7 月, 福井, 特別講演「症例から学ぶ呼吸器疾患の遺伝子診断」演者)
- 14) 第 55 回コンタクトレンズ学会(平成 24 年 7 月, 横浜, イブニングセミナー「明日の眼感染症を考える」演者)
- 15) 平成 24 年度結核研究所臨床検査技師研修(抗酸菌検査実習コース)(平成 24 年 9 月, 東京, 特別講演「抗酸菌の菌種同定(シークエンス法)」演者)
- 16) 平成 24 年度四国地区微生物検査研修会(平成 24 年 9 月, 徳島, 教育講演「論文作成のコツ&ポイント」演者)
- 17) 北海道臨床衛生検査技師会 第 4 回臨床検査セミナー(平成 24 年 9 月, 札幌, 特別講演「学会発表と論文作成のコツ&ポイント」演者)
- 18) 秋田県臨床検査技師会 平成 24 年度感染制御部門研修会(平成 24 年 10 月, 秋田, 特別講演「臨床微生物検査における三大技術革新と今後の展望」演者)
- 19) 石川県臨床衛生検査技師会 学術部特別研修会(平成 24 年 10 月, 金沢, 教育講演「臨床検査分野における論文作成のテクニック」演者)
- 20) 第 173 回北海道臨床検査技師会講習会(平成 24 年 10 月, 札幌, 特別講演「最近話題の細菌トップ 12 プラスα」演者)
- 21) 第 177 回沖縄県臨床微生物研修会(平成 24 年 11 月, 那覇, 特別講演「臨床微生物検査の最近の動向～今年の ASM 学会のトピックスを含めて～」演者)
- 22) 第 82 回日本感染症学会西日本地方会学術集会(平成 24 年 11 月, 福岡, 教育講演「感染症の遺伝子診断の実践」演者)
- 23) 第 44 回日本小児感染症学会総会(平成 24 年 11 月, 福岡, 教育講演「感染症診断における遺伝子解析技術の適応」演者)
- 24) 第 59 回日本臨床検査医学会学術集会(平成 24 年 12 月, 京都, シンポジウム「微生物検査で感染症がどこまで診断できるか 検出や同定が困難な病原体の遺伝子診断」シンポジスト)
- 25) 岐阜県臨床検査技師会 第 3 回微生物検査研究班研修会(平成 24 年, 岐阜, 特別講演「一年の総まとめ! 微生物検査最新トピックス 2012」演者)
- 26) 静岡県臨床検査技師会 第 3 回微生物検査研究班研修会(平成 24 年 12 月, 特別講演「病原細菌の同定 Up-to-Date」演者)
- 27) 平成 24 年度兵庫県微生物検査研究班研修会(平成 24 年 12 月, 神戸, 特別講演「最近 話題の細菌トップ 12+α」演者)

- 28) 第 24 回日本臨床微生物学会総会(平成 25 年 2 月, 横浜, 教育講演「臨床的に重要かつ同定困難な細菌」演者)
- 29) 第 24 回日本臨床微生物学会総会(平成 25 年 2 月, 横浜, ランチョンセミナー「感染症の遺伝子検査の新たな潮流: 多項目同時測定の今後の展望」演者)
- 30) 第 24 回日本臨床微生物学会総会(平成 25 年 2 月, 横浜, 論文の書き方講習会「論文執筆のポイント」演者)
- 31) 第 28 回日本環境感染症学会総会(平成 25 年 3 月, 横浜, ランチョンセミナー「感染症検査の最新の潮流と感染制御への適応」演者)
- 32) 第 5 回関東呼吸器真菌症研究会(平成 25 年 3 月, 横浜, 特別講演「遺伝子解析技術を用いた呼吸器真菌症の診断」演者)
- 33) 第 20 回宮崎臨床検査セミナー(平成 25 年 3 月, 宮崎, 特別講演「細菌の分類と同定 Up-to-Date」演者)
- 34) 第 12 回京滋薬剤耐性菌サーベイランス研究会(平成 25 年 3 月, 京都, 特別講演「感染症検査の最新のトピックス」演者)
- 35) 第 1 回広島県東部地区感染制御部門研修会(平成 25 年 4 月, 広島, 特別講演「さあ、論文を書こう! ~いま知りたい論文執筆のポイントとコツ~」演者)
- 36) 第 1 回知の泉・スプリングセミナー(平成 25 年 4 月, 岐阜, 特別講演「症例から学ぶ感染症の遺伝子検査」演者)
- 37) 山口県感染制御部門研修会(平成 25 年 4 月, 山口, 特別講演「臨床微生物学的な思考法のすすめ」演者)
- 38) 第 63 回日本医学検査学会(平成 25 年 5 月, 新潟, 教育講演「臨床微生物検査の新たな潮流と感染制御への対応」演者)
- 39) 感染症遺伝子診断に関する学術講演会(平成 25 年 6 月, 熊本, 特別講演「感染症遺伝子診断の実際~効果的な遺伝子検査の活用法~」演者)
- 40) 大阪府臨床検査技師会微生物検査部門定期講習会(平成 25 年 6 月, 大阪, 特別講演「この菌なんだろう? 症例から学ぶ細菌の同定法」演者)
- 41) 第 63 回日本電気泳動学会(平成 25 年 6 月, 東京, シンポジウム「質量分析法を用いた細菌同定の原理と今後の展望」シンポジスト)
- 42) 平成 25 年度結核研究所臨床検査技師研修(抗酸菌検査実習コース)(平成 25 年 7 月, 東京, 特別講演「抗酸菌の菌種同定(シークエンス法)」演者)
- 43) 第 9 回久留米小児感染症研究会(平成 25 年 7 月, 福岡, 特別講演「臨床経過と迅速診断から紐解く感染症診療 検査の立場から」演者)
- 44) 第 9 回山陰細菌勉強会(平成 25 年 7 月, 松江, 特別講演「いま知りたい 珍しい細菌の同定のコツとノウハウ」演者)
- 45) 第 7 回 BD セミナー(平成 25 年 10 月, 大阪, 特別講演「感染症診療を支える臨床微生物検査の現状と未来」演者)
- 46) 第 45 回日本臨床検査自動化学会(平成 25 年 10 月, 横浜, シンポジウム「質量分析技術を用いた微生物同定の現状と今後の展望」シンポジスト)
- 47) 第 18 回日本神経感染症学会(平成 25 年 10 月, 宮崎, シンポジウム「質量分析法(MALDI-TOF MS)の現状と今後の展望」シンポジスト)
- 48) 第 2 回日臨技北日本支部医学検査学会(平成 25 年 10 月, 仙台, ランチョンセミナー「クイズ形式で学ぶ いま知りたい! 珍しい細菌の同定のコツとノウハウ」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 林 将大: 第 45 回日本無菌生物ノートバイオロジー学会総会 会長奨励賞(平成 24 年度)
- 2) 江崎孝行: 第 49 回小島三郎記念文化賞(平成 25 年度)
- 3) 江崎孝行: 第 64 回岐阜新聞大賞学術部門受賞(平成 25 年度)

9. 社会活動

江崎孝行:

- 1) 日本学術振興科学研究費委員会専門委員(~現在)
- 2) 日本学術会議微生物研究連絡委員(~現在)
- 3) 沖縄先端科学技術大学組換え DNA 委員長(~平成 24 年度)

- 4) 製品技術評価機構遺伝子組換え生物等の検出技術検討委員(～現在)
- 5) 経済産業省産業構造審議会化学・バイオ部会組換え DNA 技術小委員(～現在)
- 6) 経済産業省 GILSP 告示案作成委員(～平成 24 年度)
- 7) 経済産業省産業構造審議会バイオ部会・微生物開放系利用技術小委員(～平成 24 年度)
- 8) 沖縄先端科学技術大学組換え DNA 委員(平成 25 年～現在)
- 9) NASA パネル：国際宇宙ステーション評価委員会(平成 26 年 9 月)

10. 報告書

- 1) 江崎孝行, 倉園久生, 川本恵子：バイオテロ対策：細菌性バイオテロに対する迅速同定法・診断法およびワクチンの開発：平成 23 年度厚生労働省科学研究費補助金総括・分担報告書(倉園班) (平成 24 年 3 月)
- 2) 江崎孝行：病原細菌の核酸クロマト法の開発：平成 23 年度乳酸菌研究会報告書(平成 24 年 3 月)
- 3) 江崎孝行, 大楠清文, 林将大：短時間培養と遺伝子検査を組み合わせた *Campylobacter* の迅速検査法の構築：平成 23 年度地球規模保健課題推進研究事業(国際医学協力研究事業)厚生労働科学研究費補助金(平成 24 年 3 月)
- 4) 江崎孝行：宿主候補株および類縁有害微生物のゲノム情報に基づく病原性、毒素生産性に係る遺伝子の比較解析による安全性評価手法の開発：平成 23 年度独立行政法人製品評価技術基盤機構(平成 24 年 3 月)
- 5) 江崎孝行：次世代バイオレメディエーション普及のためのセーフバイオシステムの研究開発：平成 24 年度独立行政法人製品評価技術基盤機構(平成 25 年 3 月)

11. 報道

- 1) 江崎孝行：輝く功績「病原体特定を簡易化」：岐阜新聞(2014 年 2 月 6 日)
- 2) 江崎孝行：第 64 回岐阜新聞大賞・学術部門受賞：岐阜新聞(2014 年 2 月 16 日)
- 3) 福永 肇：研究室から 大学はいま「食物アレルギー、細菌で治療」：岐阜新聞(2014 年 8 月 19 日)
- 4) 江崎孝行：検査キット開発・病原菌の特定 最短 30 分：中日新聞(2014 年 10 月 23 日)
- 5) 江崎孝行：エボラ出血熱・江崎岐阜大学院教授に聞く：中日新聞(2014 年 12 月 28 日)

12. 自己評価

評価

研究成果を社会基盤として普遍的に保存する活動に従事した。バイオテロ対策の情報基盤(厚生労働省), 病原微生物基盤整備事業(文部科学省), 及びバイレメに伴う安全性の評価手法の作成(経済産業省)の 3 つの公的な事業に従事した。

現状の問題点及びその対応策

大学の病原微生物保存事業は時限付の医学部のセンターであり, 担当している江崎は平成 28 年 3 月に退職するため, 今後は大学のセンターとして支援をいただく体制に持っていかなければ, 安定した維持はできない。

江崎は平成 28 年 3 月に退職することから, 大学院修士, 博士課程の学生の受け入れを中止したため, 研究室の研究体制と教育支援環境は後退している。退職時に研究室のスタッフはすべて退職する準備を進めており, 新任の教授が働きやすい環境を提供し, 退職したい。新しい講座の立ち上げに, 自由にスタッフを募集して新たな分野の研究にスタートを切ってもらいたいと考えている。

今後の展望

研究成果を社会基盤として保存するためにはバイオテロ対策の情報基盤(厚生労働省)では方法をネットで公開するとともに製品化が必要であり, 製品化に取り組んでいる。病原微生物基盤整備事業(文部科学省)では医学部で病原微生物菌株を時限付の病原微生物ゲノムセンターで保有してきた。これは文部科学省が支援する国家的な事業であることから, 岐阜大学で病原微生物保存事業を長期的に支援していただく体制の整備を大学に要請している。保有株の情報公開は国立遺伝学研究所から既に世界に発信されているが, 今後はゲノム情報の付与など国際的な評価を受けるに足る情報発信を計画している。

またバイレメに伴う安全性の評価手法の作成(経済産業省)は今年度で終了する。この情報は経産省のホームページ上で情報公開される予定である。環境浄化作業中に病原微生物をモニターし安全性を評価する事業であり我が国の発展に資する活動として, 今後も情報の蓄積と公開に尽力する。

〔再生工学講座〕

(1) 生命機能分子設計分野

1. 研究の概要

1) 研究の背景

①幹細胞生物学と研究と再生医学への応用

当分野では、私たちの体の多くの組織や臓器は、幹細胞システムによって支えられている。幹細胞とは、組織や臓器にごく僅かに存在する未分化な細胞のことであり、①分化して組織を形成する能力（分化能）と、②新たに幹細胞自身を作り出す能力（自己複製能）、の2つの能力を兼ね備えた細胞であると定義される。すなわち、幹細胞は、組織・臓器を作り出す大元となる細胞であって、個体の一生にわたって未分化な状態で存在する細胞である。体の中の組織や臓器は、常に新陳代謝を行っている。組織は、古くなった細胞が新しい細胞に絶え間なく置き換えられることによって、常に健康な状態に保たれている。幹細胞システムは、このような組織の新陳代謝を可能にするために存在するのである。幹細胞は、それ自身が持つ自己複製能と分化能を使い分け、個体の一生にわたり、組織に分化した細胞を供給し続けることができる。また、組織が損傷を受ければ、幹細胞システムは新陳代謝のスピードを変え、速やかに組織の修復と再生を行う。このように、組織や臓器に対し、柔軟性を与え、さまざまな外的環境変化に対応する能力を持たせることこそが、幹細胞システムの重要な役割であると言える。

幹細胞の重要な特性の一つに、組織を再生する能力がある。例えば、血液の幹細胞（造血幹細胞）は骨髄から分取することが可能であるが、たった一個の造血幹細胞を移植するだけで、数十億個からなる全ての血液系の細胞を再生できることができる。再生医療は、幹細胞が持つこのような驚異的な再生能力を、医療的に応用しようとするものである。例えば、癌化やさまざまな傷害により機能を失ってしまった組織や臓器を、新しく正常な幹細胞を使って、正常な状態に再生させることができれば、再び健康を取り戻すことができる。これまでの医療は、薬物を使った対処療法が主であったが、再生医療が可能になれば、病気の根絶療法が可能になる。このような、再生医療を確実に行うためには、幹細胞の特性を詳しく理解し、幹細胞を自由自在にコントロールする技術を開発する必要がある。

幹細胞は再生医療実現のために有用な細胞であるが、一方で、癌化の原因になる危険性をはらんだ細胞でもある。幹細胞は自己複製能によって永遠に増殖生存する能力を持っている。このことは、仮に幹細胞自身に遺伝子変異が起こった場合には、その変異が生涯に渡り幹細胞に固定化されてしまうことを意味している。その結果、幹細胞には、多数の遺伝子の変異が蓄積してしまう危険性がある。従って、永遠生存能を持つ幹細胞においては、他の細胞に比して、癌化に必要な遺伝子の多重変異が起こる可能性が高いのである。このような推論に基づいて、近年、“癌幹細胞説”が提唱されている。つまり、この説に従えば、癌化は、正常な幹細胞制御機構が遺伝子の多重変異により破綻した結果起こると考えられ、正常な制御を逸脱した癌幹細胞が、異常に増殖分化し、癌組織を形成した状態であるといえる。全ての癌が“癌幹細胞説”によって説明されるのかは、議論が分かれるところであるが、一部の白血病や乳がんでは癌幹細胞の存在が実証されている。これまでの癌治療では、分化した癌組織細胞を標的にして死滅させることを目指していたが、頻繁に癌が再発することがあった。“癌幹細胞説”に従えば、このような癌の再発は、癌幹細胞がもつ再生能力による癌組織再生として説明できる。“癌幹細胞説”が正しいとすると、今後は、癌幹細胞を標的とした、新たな癌の根絶治療法を開発することが必要になる。そのためには、正常な幹細胞の分子的制御機構を理解し、その破綻がどのようにして癌幹細胞を生み出すのかを理解することが重要になる。

近年の研究から個体の加齢とともに幹細胞の性質に変化が生じ、このことが組織・臓器の老化と密接な関連性があることがわかってきた。若い幹細胞と加齢した幹細胞を比較すると、加齢とともに、さまざまな質的な変化が起こっていることがわかった。このような変化は、幹細胞製の増殖や分化に影響を与えると考えられ、その結果、新陳代謝の低下による組織の老化現象が起こるのではないかと推測されている。現時点で、加齢によるこのような幹細胞の変化がなぜ起こるかは解明されていないが、今後、加齢による幹細胞制御機構の変化が詳細に理解され、それを修復できるようになれば、老化の予防が可能になるかもしれない。

以上のように、幹細胞の特性を理解し、その応用方法を開発することは、再生医療、癌治療、および、抗老化といった、次世代の医療的実現する上で欠かすことができないことである。我々は、幹細胞学と称し、発生生物学、分子生物学、遺伝学、生化学的手法を駆使して、幹細胞に関する基礎生物学的研究を推進し、幹細胞の生物学的特性や分子的制御基盤を総合的に理解することを目的に研究を進める。また、幹細胞を用いた医療の実現には、医学的、薬学的、工学的、および、産業的な学際的なアプローチが必須

であり、産・官・学、さまざまな、研究者との共同研究を積極に行う。

②生体内における生命現象を可視化のための化合物合成と新規創薬研究

生体機能や病態の分子レベルでの解明とそれに基づく病態治療薬・診断薬の開発を目標に、*in vitro*でのシグナル解析から*in vivo*での解析・制御を実現する高機能低分子プローブの創製研究を行っている。いずれの研究もヒトへの応用（創薬）を視野に入れた学際的・学融的共同研究を展開している。

2) 研究内容

①皮膚上皮幹細胞制御機構の解明

皮膚上皮は、外部からの有害物質の進入から体を守るとともに体内からの体液の漏洩防ぐ役割を担っている大変重要な臓器である。正常な皮膚上皮の機能の破綻は、さまざまな皮膚疾患を引き起こす。皮膚の異常は美容上または精神上の大きな問題を引き起こし、人間として健康な生活を営む上で大きな障害となる。皮膚上皮は常に新陳代謝を行っており、適切な新陳代謝を保つことは皮膚の健康を維持するために極めて重要である。皮膚上皮の新陳代謝は幹細胞システムによって維持されている。皮膚上皮基底膜上に存在する幹細胞は、緻密な制御のもとに増殖分化し、皮膚の上方に移動しながら、バリア機能を担う分化した角化細胞を供給する。近年、幹細胞の制御機構に関する研究は飛躍的に進んだが、皮膚上皮幹細胞の制御機構の分子的な基盤については未だ不明な点が多い。このような現状を踏まえ、我々は、皮膚上皮幹細胞の制御の分子的基盤を解明し、さまざまな皮膚疾患の原因解明に貢献することを目的とする。我々はこれまでに、皮膚の遺伝子発現解析を行い、Notch および Ephrin シグナル系が上皮幹細胞の増殖分化に重要な役割を果たしていることを証明した (Moriyama et al., *J. Invest. Dermatol* 2009, Moriyama et al., *Dev Cell* 2008)。これら従来の研究を遂行している過程で、Notch シグナル系の下流において発現が制御されている分子として Bnip3 を発見した (Moriyama et al., *J. Invest. Dermatol* 2014)。細胞生物学的解析により Bnip3 はオートファジーを制御することにより皮膚上皮細胞の分化を促進し、皮膚バリア形成に重要な役割を果たしていることがわかった。皮膚バリア形成不全は、アトピー性皮膚炎の主要な要因の一つである。また、Notch シグナル系のノックアウトマウスがアトピー性皮膚炎様の表現系を示すことより、両者の間には何らかの関連性があることが疑われる。現在、Notch シグナル系のノックアウトマウスがアトピー性皮膚炎様病態を示す原因を探索中である。

②色素幹細胞の維持機構の解明

生体内における幹細胞の制御には、周囲の特殊な環境（幹細胞ニッチ）との相互作用が必要である。しかし、幹細胞ニッチを同定することは難しく、どのような仕組みで幹細胞が制御されているのかは不明である。ニッチによる幹細胞の制御機構を解明する目的で、組織の中で幹細胞を同定することが可能な色素幹細胞に注目した。我々は、色素細胞再生の過程を詳しく観察し、毛包内のバルジと呼ばれる部位に色素幹細胞が存在することを発見した (Nishimura et al. *Nature* 2002)。さらに色素細胞を特異的に標識できるトランスジェニックマウスを作成し、このマウスから色素幹細胞を単離してその遺伝子発現解析を行なった (Osawa et al. *Development* 2005)。この遺伝子解析の結果、色素幹細胞において Notch シグナル系が活性化していることを見いだした。Notch シグナル系の役割を明らかにする目的で、色素細胞特異的に Notch シグナル系を破壊したノックアウトマウスを作成したところ、毛色に異常が生じる事を発見し、Notch シグナル系が色素幹細胞の生存維持に必要な不可欠な作用を担っていることを証明した (Moriyama et al., *J Cell Biol.* 2006)。また、未分化な色素前駆細胞を培養する方法を開発するとともに、培養した細胞を移植し、色素幹細胞を再構築させる移植アッセイ系を構築した (Yonetani et al., *J. Invest. Dermatol.* 2008)。これにより、今後、色素幹細胞において、さまざまな、機能解析を行うことが容易になった。現在、色素細胞特異的に遺伝子を阻害した多数のマウスを作成しており、体毛色変化を指標とした表現型スクリーニングを行うことによって、色素細胞幹細胞の制御に関わる分子を同定するプロジェクトを進めている。

③造血幹細胞の分子的制御機構の解明

造血幹細胞は、全ての血液細胞の源となる細胞であり、血液の恒常性の維持のために重要な機能を果たしている。現在、血液系疾患の治療のために造血幹細胞移植が行われていますが、造血幹細胞の生物学的特性は十分に明らかにされてはいない。私は、造血幹細胞移植をより安全に行うとともに、造血幹細胞の増殖分化を主体的に制御できる技術を開発することを目的に、造血幹細胞の分子的な制御基盤を解明することを目指す。我々は、造血幹細胞の機能を調べるために、それを効率的に評価できるアッセイ系を構築した (Osawa et al. *J. Immunol* 1996)。このアッセイ系を用いて、最も未分化な造血幹細胞を単離し、単一の造血幹細胞が全ての血液の細胞に分化できることを実証した (Osawa et al. *Science* 1996)。次に、我々は、造血幹細胞制御の分子的基盤を明らかにするために、純化した造血幹細胞を用いて遺伝子発現解析を行い、増殖シグナル伝達に関わる新規の分子を発見した (Masuhara et al., *BBRC* 2000)。また、マイクロアレー法を用いて、より詳細な遺伝子発現解析を行い、Necdin という分子が造血幹細胞特異的に発

現しているところを発見した。Necdin 遺伝子のノックアウトマウスの解析を行い Necdin が造血幹細胞の増殖制御に必要な不可欠な役割を果たしていることを証明した (Kubota et al, Blood 2010)。今後、さらに多数のノックアウトマウスを作成し、造血幹細胞の制御に関わる分子を同定する。

④簡便な遺伝子操作マウス作成法の開発

幹細胞の制御は、周囲の細胞や環境との相互作用によって行われており、これを体の外で再現することはできない。このような高次元な生命現象の探索研究には、遺伝子変異マウスを活用することが必要不可欠である。遺伝子変異マウスは基礎科学分野ばかりでなく、疾患モデルマウスとして疾患の診断や治療法・治療薬の開発にも大変有用である。従来の変異マウスの作製方法は、多くのステップを含むため、その作成に多大な時間と労力を要することが問題点である。我々は、CRISPR/Cas9 法を用いたゲノム編集技術、ES 細胞を用いた遺伝子操作技術、およびマウス胚操作技術を駆使することで、迅速かつ容易に組織特異的遺伝子ノックアウトマウスを作成する方法を開発した。この新規変異マウス作成法は、さまざまな組織細胞系譜にも応用することができ、広範囲な高次生命現象を解明するための有用な研究基盤技術になる。この方法により、今後、我々の幹細胞研究の加速化を図ることが可能になった。

⑤神経障害性疼痛の発症・維持機構解明と治療・診断薬開発に向けた特異的分子プローブの創製

アロディニアの分子メカニズムの解明と治療薬開発に向けて、特異的分子プローブの設計・合成研究を行っている。これまでに、神経障害性疼痛モデルにおいて鎮痛効果を示す化合物の創製に成功し、新たな機序に基づく神経障害性疼痛治療薬の開発に向けた研究を進めている。

⑥神経細胞死抑制化合物の創製

パーキンソン病やアルツハイマー病などの神経変性疾患治療薬の開発をめざして、神経細胞死抑制作用を示す低分子化合物の設計・合成研究を行っている。これまでに、酸化ストレスおよび小胞体ストレスによる神経細胞死を抑制効果する化合物を合成することに成功している。また、各種の細胞保護因子を誘導・活性化する新たな化合物を見いだしており、創薬に向けて、作用機序の解析と化合物の最適化を進めている。

⑦質量顕微鏡解析に適用するための分子プローブの創製

生体分子や薬剤の生体組織での分布をイメージング質量分析法によって解析するため、イオン化効率の低い低分子化合物を高感度プローブ化するための設計・合成研究を行っている。生体組織切片上での誘導体化を実現するため水中での反応の検討を進めている。

2. 名簿

教授：	大沢匡毅	Masatake Osawa
准教授：	古田享史	Kyoji Furuta
助教：	古山浩子	Hiroko Koyama
助教：	李 東洙	Dongsoo Lee

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

なし

著書 (欧文)

- 1) Suzuki M, Koyama H, Takashima-Hirano M, Doi H. Pd⁰-mediated rapid C-[¹¹C]methylation and C-[¹⁸F]fluoromethylation: revolutionary advanced methods for general incorporation of short-lived positron-emitting ¹¹C and ¹⁸F radionuclides in an organic framework. In *Positron Emission Tomography*; Ed. Chia-Hung Hsieh; InTech; open access publisher; 2012;115-152.

総説 (和文)

- 1) 大沢匡毅, 毛包形成のメカニズムの解明と毛包再生への応用 シーエムシー出版 ファインケミカルシリーズ 毛髪研究の最前線 2013年: 89-91.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

なし

原著 (欧文)

- 1) Hirata Y, Furuta K, Suzuki M, Oh-hashii K, Ueno Y, Kiuchi K. Neuroprotective cyclopentenone

- prostaglandins up-regulate neurotrophic factors in C6 glioma cells. *Brain Res.* 2012;1482:91-100. IF 2.828
- 2) Ishii H, Koyama H, Hagiwara K, Miura T, Xue G, Hashimoto Y, Kitahara G, Aida Y, Suzuki M. Synthesis and biological evaluation of deoxy-hematoxilin derivatives as a novel class of anti-HIV-1 agents. *Bioorg Med Chem Lett.* 2012;22:1469-1474. IF 2.331
 - 3) Kishida Y, Natsume A, Toda H, Toi Y, Motomura K, Koyama H, Matsuda K, Nakayama O, Sato M, Suzuki M, Kondo Y, Wakabayashi T, Correlation between quantified promoter methylation and enzymatic activity of O(6)-methylguanine-DNA methyltransferase in glioblastomas. *Tumour Biol.* 2012;33:373-381. IF 2.840
 - 4) Suzuki M, Takashima-Hirano M, Koyama H, Yamaoka T, Sumi K, Nagata H, Hidaka H, Doi H. Efficient synthesis of [¹¹C]H-1152, a PET probe specific for Rho-kinases, highly potential targets in diagnostic medicine and drug development. *Tetrahedron.* 2012;68:2336-2341. IF 2.817
 - 5) Yamada K, Koyama H, Hagiwara K, Ueda A, Sasaki Y, Kaneshashi S, Ueno R, Nakamura H K, Kuwata K, Shimizu K, Suzuki M, Aida Y. Identification of a novel compound with antiviral activity against influenza A virus depending on PA subunit of viral RNA polymerase. *Microbes Infect.* 2012;14:740-747. IF 2.731
 - 6) Miyazaki S, Minami T, Mizuma H, Kanazawa M, Doi H, Matsumura S, Lu J, Onoe H, Furuta K, Suzuki M, Ito S. The action site of the synthetic kainoid (2S,3R,4R)-3-carboxymethyl-4-(4-methylphenylthio)pyrrolidine-2-carboxylic acid (PSPA-4), an analogue of Japanese mushroom poison acromelic acid, for allodynia (tactile pain). *Eur J Pharmacol.* 2013;710:120-127. IF 2.684
 - 7) Koyama H, Zhang Z, Ijuin R, Siqin, Son J, Hatta Y, Ohta M, Wakao M, Hosoya T, Doi H, Suzuki M. Pd⁰-mediated rapid coupling of methyl iodide with excess amounts of pinacol benzyl- and cinnamylboronic acid esters: efficient method for incorporation of positron-emitting ¹¹C radionuclide into organic frameworks by coupling between two sp³-hybridized carbons. *RSC Advances.* 2013;3:9391-9401. IF 3.708
 - 8) Zhang Z, Tahara T, Koyama H, Doi H, Onoe H, Suzuki M. Efficient synthesis of [¹¹C]zidovudine and its analogues by Pd(0)-Cu(I) co-mediated rapid C-[C-11]methylation. *J Labelled Compd Radiopharm.* 2013;56:S19. IF 1.187
 - 9) Koyama H, Doi H, Suzuki M. Evaluation of TIOH effect for Pd⁰-mediated cross-coupling of methyl iodide and excess boronic acid ester toward fabrication of [¹¹C]CH₃-incorporated PET tracer. *Int J Org Chem.* 2013;3:220-223.
 - 10) Moriyama M, Moriyama H, Uda J, Matsuyama A, Osawa M, Hayakawa T. BNIP3 plays crucial roles in the differentiation and maintenance of epidermal keratinocytes. *J Invest Dermatol.* 2014;134:1627-1635. IF 6.372
 - 11) Zhang Z, Doi H, Koyama H, Watanabe Y, Suzuki M. Efficient syntheses of [¹¹C]zidovudine and its analogs by convenient one-pot palladium(0)-copper(I) co-mediated rapid C-[¹¹C]methylation. *J Labelled Compd Rad.* 2014;57:540-549. IF 1.187
 - 12) Suzuki M, Takashima-Hirano M, Ishii H, Watanabe C, Sumi K, Koyama H, Doi H. Synthesis of ¹¹C-labeled retinoic acid, [¹¹C]ATRA, via an alkenylboron precursor by Pd(0)-mediated rapid C-[¹¹C]methylation. *Bioorg Med Chem Lett.* 2014;24:3622-3625. IF 2.331
 - 13) Suzuki M, Doi H, Koyama H, Zhang Z, Hosoya T, Onoe H, Watanabe Y. Pd⁰-mediated rapid cross-coupling reactions, the rapid C-[¹¹C]methylations, revolutionarily advancing the syntheses of short-lived PET molecular probes. *Chem Rec.* 2014;14:516-541. IF 5.577
 - 14) Kim EY, Lee KB, Yu J, Lee JH, Kim KJ, Han KW, Park KS, Lee DS, Kim MK. Neuronal cell differentiation of mesenchymal stem cells originating from canine amniotic fluid. *Hum Cell.* 2014;27:51-58. IF 1.737

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：David Fisher, 研究分担者：大沢匡毅；National Institute of Health, USA, RO1 Research Grant: 1R01 AR056255-01A1: Role of Notch signaling in the maintenance of melanocyte stem cells.；平成 24-25 年度；\$105,200(\$54,283 : \$50,917)
- 2) 研究代表者：大沢匡毅；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：変異マウスを用いた迅速化表現型スクリーニングによる色素細胞制御遺伝子の同定；平成 24-25 年度；2,900 千円(1,700 : 1,200 千円)
- 3) 研究代表者：大沢匡毅；上原記念生命科学財団研究助成金：皮膚上皮幹細胞系における Ascl2 の機能解析；平成 24 年度；5,000 千円
- 4) 研究代表者：大沢匡毅；ノバルティス科学振興財団研究奨励金：皮膚上皮角質層形成の分子機構の解明；平成 24 年度；1,000 千円
- 5) 研究代表者：大沢匡毅；研究科長・医学部長裁量経費(多分野共同研究)：新規アトピー性皮膚炎治療法開発のための共同研究；平成 24 年度；2,000 千円
- 6) 研究代表者：古田享史；科学研究費補助金基盤研究(B)：アロディニアの発生機構解明に向けたカイ

- ノイド型分子プローブの創製；平成 24-26 年度；15,000 千円(5,600：4,700：4,700 千円)
- 7) 研究代表者：横川隆志，研究分担者：森田洋子，上田 浩，上野義仁，古田享史，大野 敏，大橋憲太郎，古山浩子，鎌足雄司；大学活性化経費(研究：研究グループ形成支援)：機能未知タンパク質の機能解明ルーティンの確立；平成 24 年度；400 千円
 - 8) 研究代表者：大沢匡毅；高橋産業経済研究財団研究助成金：Notch シグナルの破綻によるアトピー性皮膚炎発症のメカニズムの解明；平成 25 年度；1,000 千円
 - 9) 研究代表者：古山浩子；科学研究費補助金基盤研究(B)：短寿命 ^{14}C 放射性核種標識のための $\text{sp}^3\text{-sp}^3$ 炭素間高速 C-メチル化反応の開発；平成 25-27 年度；5,070 千円 (1,690：1,560：1,820 千円)
 - 10) 研究代表者：李 東洙；研究科長・医学部長裁量経費(多分野共同研究)：The study of physiological function of mammalian cleavage factor 1-25 in embryogenesis, organogenesis；平成 25 年度；1,900 千円
 - 11) 研究代表者：大沢匡毅；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：アトピー性皮膚炎の機序解明に向けた遺伝子改変 NC/Nga マウス作成システムの構築；平成 26-27 年度；2,800 千円(1,900：900 千円)
 - 12) 研究代表者：大沢匡毅；コスメトロジー研究振興財団研究助成金：皮膚上皮角質層形成にともなう上皮細胞のダイナミズムを制御するメカニズム；平成 26 年度；1,000 千円
 - 13) 研究代表者：李 東洙；大学活性化経費(科研採択支援)：Development of the innovative strategy for rapid generation of F0 chimera mice completely derived from the embryonic stem cells；平成 26 年度；560 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

- 1) 古山浩子：高速メチル化法：平成 24 年(特願 2012-159725)

6. 学会活動

1) 学会役員

なし

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

大沢匡毅：

- 1) 第 2 回細胞再生医療研究会(平成 24 年 7 月，神戸，招待講演「ノッチシグナル系による皮膚上皮幹細胞系の制御」演者)
- 2) 第 24 回日本色素細胞学会学術大会(平成 24 年 11 月，長浜，招待講演「メラノサイト機能遺伝子を同定するための簡便で迅速な遺伝子改変マウス作成法」演者)
- 3) 第一回幹細胞を制御する微少環境の解明を目指した異分野交流研究会(平成 24 年 11 月，つくば市，招待講演「簡便化ノックダウントランスジェニックマウスによる色素幹細胞制御遺伝子のスクリーニング」演者)
- 4) 第 68 回幹細胞治療フォーラム(平成 26 年 3 月，東京，招待講演「Notch シグナル系による皮膚幹細胞システムの制御」演者)
- 5) 8th World Congress of Hair Research(2014.05, Jeju Island, Korea, 招待講演「Rapid melanocyte-specific gene disruption to identify genes involved in the regulation of melanocyte stem cells in the hair follicle.」演者)

古山浩子：

- 1) 第3回触媒化学融合研究センター講演会(平成25年11月, つくば, 招待講演「高速カップリング反応による短寿命¹⁴C標識のための革新的合成法」演者)
- 2) Bio Tech 2014 第13回国際バイオテクノロジー展/技術会議(平成26年5月, 東京, 「¹¹C標識PETプローブ合成のためのsp³炭素の高速メチル化法」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

大沢匡毅：

- 1) National Institute of Health, USA, ACTS RO1 Study Section, Ad Hoc Member (～現在)
- 2) Swiss National Science Foundation, Switzerland, Interdisciplinary PhD Project Grant, Ad Hoc Member (～現在)
- 3) Frontiers Cell and Developmental Biology, Associate Editor (平成25年～現在)

古田享史：

- 1) 日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員(平成24-25年度)

10. 報告書

- 1) 大沢匡毅：Role of Notch signaling in the maintenance of melanocyte stem cells. 米国 RO1 Research Grant: 1R01 AR056255-01A1 Progress Report (平成24年8月)
- 2) 大沢匡毅：Molecular mechanisms of cornification of the epidermis. : ノバルティス研究奨励金 成果報告書(平成25年5月)
- 3) 大沢匡毅：Role of Notch signaling in the maintenance of melanocyte stem cells. 米国 RO1 Research Grant: 1R01 AR056255-01A1 Final Progress Report (平成25年9月)
- 4) 大沢匡毅：皮膚上皮幹細胞系における Ascl2 の機能解析：上原記念生命科学財団 研究成果報告集 vol.1.27(平成25年12月)
- 5) 研究代表者：大沢匡毅：学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：変異マウスを用いた迅速化表現型スクリーニングによる色素細胞制御遺伝子の同定 成果報告書(平成26年5月)

11. 報道

- 1) 大沢匡毅：「研究室から 大学はいま」幹細胞のメカニズム解明へ：岐阜新聞(2012年6月12日)

12. 自己評価

評価

大沢は、平成23年4月に体制が変わり研究内容が大きく変化したため、研究室を新たに整備した。当初は、研究に必要な機器の購入や人材の確保に苦労したが、科研費や競争的資金を獲得することに注力した結果、十分な研究費を得ることができ、それによって研究機器の充足を図ることができた。現在までに研究室の整備はほぼ完了した。同時に、海外からの奨学研究員や留学生を受け入れることによって積極的に人材を確保したことにより、研究を推進するための人的体制についても構築されつつある。また、文部科学省特別経費・「大学の特性を生かした学術研究機能の充実」に研究プロジェクトが採択され、部局横断的な共同研究体制を構築することができた。以上のことより、研究室の整備および研究体制の構築に関しては順調に推移していると評価している。

一方、研究体制の構築に力を注いだ反面、研究の成果の創出が立ち遅れていると感じている。しかし、研究体制の整備に伴い、徐々にではあるが研究成果が出つつあり、その一部はすでに学会や論文を通じて発表されている。研究成果の量や質ともに満足しているわけではないが、今後のさらなる努力により大幅な改善が見込まれる。

教育については国際化を目指しており、研究室における日常会話からラボミーティングまでの、ほぼ全てのコミュニケーションが英語で行われている。年齢や性別、国籍に関係なく多彩な研究者がフラットな関係を築きあげることができるように配慮をしている。

古田、古山らは、科学研究費を獲得し、病態解明と創薬に向けた基礎研究を行っている。研究成果は学会発表や学術論文による公表の他に特許出願も行っており、社会への還元に努めている。本学工学部

研究室との共同研究による成果として有望な薬剤候補化合物の特許出願を予定しており、企業等との共同研究や外部資金の獲得に向けて、さらに研究を進める計画である。学生の研究指導・教育面では学会発表の他、他大学や長寿医療研究センターとの共同研究に参加させるなど、学際・国際的研究・技術者の育成に向けて努力している。

現状の問題点及びその対応策

大沢は、研究室を発展的に維持していくためには、途切れなく研究費を獲得するとともに優秀な人材を獲得することが必要不可欠である。そのためにも、ポスドクを雇用することが可能な大型の研究費を獲得することが大切である。このためには、学会における研究発表や論文発表を積極的に行い、研究室の存在意義をアピールし、国際的に認知される研究室にする必要がある。

今後の岐阜大・大学院の改組に伴い、大学院生を確保することが困難になることを危惧している。

古田、古山らは、研究科設立時の医工連携の趣旨に基づき、准教授と助教の2名は医学系研究科博士前期課程の学生と工学部生命工学科の卒研究生の研究指導を行っている。また、准教授は創薬医療情報研究科の博士後期課程の担当でもある。大学院学生は工学部の卒研究生の進学によるものであるが、卒研究生の配属人数が決まっており増える見込みはない。さらに、就職状況の好転により大学院進学者の減少も見込まれる。また学位の名称などから学生の就職活動においては若干の困難さが認められる。

今後の展望

(大沢) あらゆるチャンスを活かして、世界から認知される研究室へと発展させていくつもりである。幹細胞生物学の探求をテーマに、細胞生物学、発生生物学、分子生物学および遺伝学を融合させたダイナミックな研究を展開していく。また、企業との共同研究を積極的に推進し、成果の社会還元を目指す。

(古田、古山) 神経変性疾患治療薬としての開発に向けて、創製した化合物の特許出願を急ぐとともに、論文や学会発表等を積極的に行い、共同研究の推進や外部資金の獲得をめざす。また、関西医科大学の病態分子イメージングセンターや長寿医療研究センターとの共同研究による最先端創薬研究を推進したい。教育面でも、工学系の学生が求める専門知識・技術の習得に応えられるようきめ細やかな指導を行い、創薬研究の基盤となる合成技術と十分な基礎学力を備えた学生を育成したい。

(2) 知能イメージ情報分野

1. 研究の概要

再生医学専攻再生工学講座知能イメージ情報分野では、コンピュータを駆使して医用画像情報をいろいろな角度から処理・加工し、再生医学をはじめ様々な医療分野における画像情報を取り扱った教育・研究を行っている。例えば、コンピュータ支援診断 (computer-aided diagnosis, 以下 CAD) と呼ばれるが、画像上の病変の位置をコンピュータ処理で指摘し、あるいは病変部位のコンピュータによる定量的な分析情報を医師に提供することによって、より正確で確実な医師の画像診断が行えるように支援するシステムの開発である。理工学系研究者と医師やコ・メディカルスタッフとの有機的な共同研究が特徴である。画像情報処理、バーチャルリアリティ (VR, 仮想現実)、人工知能などの最先端の工学技術の教育を行い、また医工学的な学際領域の画像研究に応用する。

現在、特に重点をおいている研究項目は、「多元計算解剖学」の関するものである。このテーマは、平成 21 年度から発足した文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究 (研究領域提案型)「医用画像に基づく計算解剖学の創成と診断・治療支援の高度化」(平成 21 年度-25 年度)の後継プロジェクトの主題テーマであり、「医用画像に基づく計算解剖学の多元化と高度知能化診断・治療への展開」(平成 26 年度-30 年度)として、平成 26 年夏に新規にスタートしたものである (<http://www.tagen-compana.org/index.html>)。多元計算解剖学とは、(1) 細胞レベルから臓器レベルまでの空間軸、(2) 胎児から死亡時までの時間軸、(3) 撮像モダリティ、生理、代謝などの機能軸、(4) 正常から疾患までの病理軸といった種々の軸にまたがる医用画像情報に基づき、「生きた人体の総合理解」のための数理的解析基盤を確立し、早期発見や治療困難な疾患に対する高度に知能化された診断治療法実現のための数理的諸手法を開拓する新領域である。従来形状だけの静的な計算解剖モデルではなく、生きた人体を対象とする多元情報から構築される動的な計算解剖モデル (多元計算解剖モデル) を取り扱うための数理統計的手法を開拓する。本領域は、画像工学、計測工学、データ工学、材料工学、応用数学、物理学、機械工学、生体医工学、医学など広範な学問から構成される新しい学術領域である。知能イメージ情報分野では、計画班として「A02-3 多元計算解剖モデルを利用した臓器・組織機能診断支援システム」を分担しており、学内の他の分野の研究室や学外の多くの医療施設との連携を組み、医工連携・産学連携体制で研究を推進している。

研究室の詳細や研究内容などについては、研究室のホームページに掲載してある (<http://www.fjt.info.gifu-u.ac.jp/>)。

2. 名簿

教授： 藤田廣志* Hiroshi Fujita
准教授： 原 武史* Takeshi Hara
助教： 周 向榮* Xiangrong Zhou

*人間医工学研究開発センター併任

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 藤田広志. I. 概論：診療放射線技術(上巻)改訂第 13 版, 東京：南江堂；2012 年：63-64.
- 2) 藤田広志. ①画像の基礎：診療放射線技術(上巻)改訂第 13 版, 東京：南江堂；2012 年：71-77.
- 3) 藤田広志. ③画像の解析と評価：診療放射線技術(上巻)改訂第 13 版, 東京：南江堂；2012 年：80-98.
- 4) 原 武史. 1.3 マンモグラフィ：医用画像ハンドブック, 東京：日本医用画像工学会；2012 年：559-566.
- 5) 原 武史. 2.7 頭部：医用画像ハンドブック, 東京：日本医用画像工学会；2012 年：598-600.
- 6) 藤田広志, 石田隆行, 桂川茂彦監修. 藤田広志, 石田隆行, 桂川茂彦 (編集幹事), 原 武史, 目加田慶人, 加野亜紀子, 羽石秀昭 (編集). 実践 医用画像解析ハンドブック, 東京：オーム社；2012 年.
- 7) 藤田広志. 監修者序文：実践 医用画像解析ハンドブック, 東京：オーム社；2012 年：vii-viii.
- 8) 藤田広志. 6.1 CAD の定義、歴史と現状：実践 医用画像解析ハンドブック, 東京：オーム社；2012 年：518-533.
- 9) 藤田広志. 付録 A 画像データベース：実践 医用画像解析ハンドブック, 東京：オーム社；2012 年：761-767.
- 10) 原 武史. 2 FDG-PET：実践 医用画像解析ハンドブック, 東京：オーム社；2012 年：721-727.
- 11) 周 向榮. 2.3.4 距離変換：実践 医用画像解析ハンドブック, 東京：オーム社；2012 年：141-147.
- 12) 周 向榮. 6.4.8 全身：実践 医用画像解析ハンドブック, 東京：オーム社；2012 年：717-721.
- 13) 村松千左子. 4 類似画像検索による乳房画像における腫瘍の良悪性鑑別：実践 医用画像解析ハンドブック, 東京：オーム社；2012 年：567-572.
- 14) 藤田広志. 3 章 X 線画像の形成：桂川茂彦編. 医用画像情報学(改訂 3 版), 東京：南山堂；2014 年：27-51.

- 15) 藤田広志. 6章 コンピュータ支援診断(CAD): 桂川茂彦編. 医用画像情報学(改訂3版), 東京: 南山堂; 2014年: 196-215.
- 16) 藤田広志. デジタル画像の表示: 遠藤啓吾他編集. 図解 診療放射線技術実践ガイド(第3版), 東京: 文光堂; 2014年: 505-508.
- 17) 藤田広志. マンモグラフィの CAD: 遠藤啓吾他編集. 図解 診療放射線技術実践ガイド(第3版), 東京: 文光堂; 2014年: 518-521.

著書 (欧文)

- 1) Zhou X, Fujita H. Automatic organ localization on X-ray CT images by using ensemble-learning techniques. In: Suzuki K, ed. Machine Learning in Computer-Aided Diagnosis: Medical Imaging Intelligence and Analysis. USA: IGI Global; 2012:403-418.
- 2) Chen H, Hayashi T, Zhou X, Fujita H, Onozuka M, Kubo K. Chap.10 Sophisticated imaging technology in the assessment of osteoporosis risk. In: Dionyssiotis Y. Osteoporosis. Intech Open Access Publisher; 2012:181-194.
- 3) Hayashi T, Chen H, Miyamoto K, Zhou X, Hara T, Fujita H. Chap.7 Computer-aided image analysis for vertebral anatomy on X-ray CT images. In: Suzuki K, ed. Computational Intelligence in Biomedical Imaging. USA: Springer, New York; 2014:159-184.

総説 (和文)

- 1) 内山良一, 張 学軍, 藤田広志. 脳と肝臓の MR 画像のためのコンピュータ支援診断, 画像ラボ 2012年; 23巻: 41-46.
- 2) 藤田広志, 勝又明敏. 歯科領域画像と CAD を利用した新しいスクリーニングパスの提案, 映像情報メディア 2012年; 44巻: 595-597.
- 3) 福岡大輔, 藤田広志. 乳腺超音波における CAD 研究の現状と展望, 乳腺甲状腺超音波医学 2013年; 2巻: 18-24.
- 4) 藤田広志. コンピュータ支援診断(CAD)の技術史, 電気学会誌 2013年; 133巻: 556-559.
- 5) 福岡大輔, 内山良一, 村松千左子, 原 武史, 藤田広志. 頭頸部領域におけるコンピュータ支援診断システムの開発と現状, 日本放射線技術学会雑誌 2013年; 69巻: 1313-1319.
- 6) 藤田広志, 原 武史, 周 向榮, 村松千左子, 神谷直希. 計算解剖モデルの構築, 特集: 医用画像に基づく計算解剖学の創成と診断・治療支援の高度化, INNERVISION 2014年; 29巻: 13-18.

総説 (欧文)

- 1) Chen H, Zhou X, Fujita H, Onozuka M, Kubo K. Age-related changes in trabecular and cortical bone microstructure. International Journal of Endocrinology. 2013;2013:Article ID 213234, 1-9.
- 2) Fujita H, Hara T, Zhou X, Muramatsu C, Kamiya N. Model constructions for computational anatomy: Fundamentals and applications. Medical Imaging Technology. 2013;31:278-286.
- 3) Katsumata A, Fujita H. Progress of computer-aided detection/diagnosis (CAD) in dentistry. Japanese Dental Science Review. 2014;50:63-68.

原著 (和文)

- 1) 松尾 悟, 片渕哲朗, 杜下淳次, 藤田広志. デジタル位相コントラストイメージングにおける拡大率とサンプリングピッチの検討, 医用画像情報学会雑誌 2012年; 29巻: 12-19.
- 2) 松尾 悟, 杜下淳次, 片渕哲朗, 藤田広志. 新しい輝尽性蛍光板を用いた位相イメージングによるエッジ強調効果の評価, 日本放射線技術学会雑誌 2012年; 68巻: 563-572.
- 3) 大野智之, 寺本篤司, 鈴木昇一, 小原 健, 津坂昌利, 藤田広志. 高分解能乳房専用 CT に関する初期の検討: 実験用装置の開発と評価, 医用画像情報学会雑誌 2012年; 29巻: 39-42.
- 4) 吉川り葉, 寺本篤司, 松原友子, 藤田広志. 複数のガボールフィルタを用いた乳房 X 線画像における乳腺構造解析と構築の乱れの検出, Medical Imaging Technology 2012年; 30巻: 287-292.
- 5) 池谷 愛, 寺本篤司, 原 武史, 藤田広志. 円筒型フィルタと肺の構造解析による胸部 CT 画像からの結節検出, Medical Imaging Technology 2012年; 30巻: 293-297.
- 6) 原 武史, 田上元基, 森進太郎, 金田 隆, 勝又明敏, 周 向榮, 村松千左子, 藤田広志. 歯科パノラマ X 線写真における左右差分像技術を用いた上顎洞の異常自動検出法, 電子情報通信学会論文誌 D 2013年; J96-D 巻: 885-891.
- 7) 阿部晃子, 内山良一, 村松千左子, 原 武史, 白石順二, 藤田広志. テンプレートマッチングを用いたラクナ梗塞検出のためのコンピュータ支援診断システムの改良, 医用画像情報学会雑誌 2013年; 30巻: 39-43.
- 8) 小林龍徳, 古川貴裕, 五島 聡, 張 学軍, 原 武史, 周 向榮, 村松千左子, 近藤浩史, 兼松雅之, 藤田広志. EOB 造影 MRI 画像における肝臓輪郭線の自動抽出法の開発, 医用画像情報学会雑誌 2013年; 30巻: 57-62.
- 9) 村松千左子, 水上篤貴, 畑中裕司, 澤田 明, 原 武史, 山本哲也, 藤田広志. 血管モデルのテンプレートマッチングによる眼底画像上の主幹動脈認識精度の改善, 医用画像情報学会雑誌 2013年; 30巻: 63-69.
- 10) 村田千佳, 寺本篤司, 藤田広志. デジタル一眼レフカメラを用いた簡易カラー光 CT 装置の開発, 日本

写真学会誌 2014年;77巻:83-86.

- 11) 高橋 龍, 村松千左子, 原 武史, 林 達郎, 勝又明敏, 周 向榮, 藤田広志. 位置特徴量の導入と特徴量選択による頸動脈石灰化の自動検出法の改良, 日本放射線技術学会雑誌 2014年;70巻:526-533.
- 12) 谷河文香, 内山良一, 村松千左子, 原 武史, 白石順二, 藤田広志. 脳MR画像におけるラクナ梗塞の検出法の改良-AdaBoost テンプレートマッチングを用いた偽陽性削除-, 医用画像情報学会雑誌 2014年;31巻:41-46.
- 13) 堀場一輝, 村松千左子, 林 達郎, 福井達真, 原 武史, 勝又明敏, 藤田広志. 歯科パノラマX線写真を用いた骨粗鬆症早期発見のための下顎皮質骨自動厚み計測法の開発-線状構造の抽出-, MIT(日本医用画像工学会)誌 2014年;32巻:342-346.

原著 (欧文)

- 1) Kamiya N, Zhou X, Chen H, Muramatsu C, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Automated segmentation of psoas major muscle in X-ray CT images by use of a shape model: Preliminary study. Radiol Phys Technol. 2012;5:5-14.
- 2) Matsuo S, Morishita J, Katafuchi T, Honda C, Fujita H. Image-quality assessment method for digital phase-contrast imaging based on two-dimensional power spectral analysis. Radiol Phys Technol. 2012;5:78-85.
- 3) Goshima S, Kanematsu M, Kobayashi T, Furukawa T, Zhang X, Fujita H, Watanabe H, Kondo H, Moriyama N, Bae KT. Staging hepatic fibrosis: Computer-aided analysis of hepatic contours on gadolinium ethoxybenzyl diethylenetriaminepentaacetic acid-enhanced hepatocyte-phase magnetic resonance imaging. Hepatology. 2012;55:328-329. IF 11.190
- 4) Zhou X, Wang S, Chen H, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Fujita H. Automatic localization of solid organs on 3D CT images by a collaborative majority voting decision based on ensemble learning. Computerized Medical Imaging and Graphics. 2012;36:304-313. IF 1.496
- 5) Hatanaka Y, Inoue T, Okumura S, Muramatsu C, Fujita H. Automated microaneurysm detection method based on double-ring filter and feature analysis in retinal fundus images. Proc. of the 25th International Symposium on Computer-Based Medical Systems. 2012;paper#150.
- 6) Lee Y, Tsai D-Y, Hokari H, Minagawa Y, Tsurumaki M, Hara T, Fujita H. Computerized detection of lung nodules by CT for radiologic technologists in preliminary screening. Radiol Phys Technol. 2012;5:123-128.
- 7) Muramatsu C, Nishimura K, Oiwa M, Shiraiwa M, Endo T, Doi K, Fujita H. Correspondence among subjective and objective similarities and pathologic types of breast masses on digital mammography. Breast Imaging, A.D.A.Maidment, P.R.Bakic, and S.Gavenonis (Eds.). Proc. of 11th International Workshop, IWDM 2012, LNCS. 2012;7361:450-457.
- 8) Kamiya N, Osaki H, Kondo J, Chen H, Fujita H. Image interpretation system for informed consent to patients by use of a skeletal tracking. Int J Computer Technology & Applications. 2012;3:1593-1597.
- 9) Hatanaka Y, Muramatsu C, Sawada A, Hara T, Yamamoto T, Fujita H. Glaucoma risk assessment based on clinical data and automated nerve fiber layer defects detection. Proc. of the 34th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society (EMBC'12). 2012:5963-5966.
- 10) Uchiyama Y, Asano T, Kato H, Hara T, Kanematsu M, Hoshi H, Iwama T, Fujita H. Computer-aided diagnosis for detection of lacunar infarcts on MR images: ROC analysis of radiologists' performance. J Digit Imaging. 2012;25:497-503. IF 1.200
- 11) Shiraiishi J, Fukuoka D, Hara T, Abe H. Basic concepts and development of an all-purpose computer interface for ROC/FROC observer study. Radiol Phys Technol. 2013;6:35-41.
- 12) Muramatsu C, Schmidt RA, Shiraiishi J, Endo T, Fujita H, Doi K. Usefulness of presentation of similar images in the diagnosis of breast masses on mammograms: Comparison of observer performances in Japan and the USA. Radiol Phys Technol. 2013;6:70-77.
- 13) Nagashima H, Doi K, Ogura T, Fujita H. Automated adjustment of display conditions in brain MR images: Diffusion-weighted MRIs and apparent diffusion coefficient maps for hyperacute ischemic stroke. Radiol Phys Technol. 2013;6:202-209.
- 14) Zhang M, Mou X, Fujita H, Zhang L, Zhou X, Xue W. Local binary pattern statistics feature for reduced reference image quality assessment. Proc. of IS&T/SPIE Symposium on Electronic Imaging 2013. 2013;8660:8660L-1-8660L-8.
- 15) Jiang H, Ma Z, Zong M, Fujita H, Zhou X. Abdomen CT image segmentation based on MRF and ribs fitting approach. Lecture Notes in Electrical Engineering. 2013;206:75-81.
- 16) Teramoto A, Fujita H. Fast lung nodule detection in chest CT images using cylindrical nodule-enhancement filter. Int J Comput Ass Rad. 2013;8:193-205. IF 1.659
- 17) Kamiya N, Zhou X, Chen H, Muramatsu C, Hara T, Fujita H. Model-based approach to recognize the rectus abdominis muscle in CT images. IEICE T Inf Syst. 2013;E-96-D:869-871. IF 0.191
- 18) Zhao D, Yang B, Zhang L, Zhou X, Chen Y, Fujita H, Jiang H. Research of medical image registration based on RMI-SAPSO algorithm. Lecture Notes in Electrical Engineering 224. Proc. the 2nd International Conference on Green Communications and Networks 2012 (GCN2012). 2013;2:697-704.

- 19) Zhou X, Yamaguchi A, Zhou X, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Fujita H. Automatic organ localizations on 3D CT images by using majority-voting of multiple 2D detections based on local binary patterns and Haar-like features. *Proc. of SPIE Medical Imaging 2013: Computer-Aided Diagnosis*. 2013:8670:86703A-1-86703A-7.
- 20) Zhang M, Zhou X, Chen H, Muramatsu C, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Fujita H. Pulmonary emphysema classification based on an improved texton learning model by sparse representation. *Proc. of SPIE Medical Imaging 2013: Computer-Aided Diagnosis*. 2013:8670:86700F-1-86700F-7.
- 21) Shimizu Y, Hara H, Fukuoka D, Zhou X, Muramatsu C, Ito S, Hakozaiki K, Kumita S, Ishihara K, Katafuchi T, Fujita H. Temporal subtraction system on torso FDG-PET scans based on statistical image analysis. *Proc. of SPIE Medical Imaging 2013: Computer-Aided Diagnosis*. 2013:8670:86703F-1-86703F-6.
- 22) Ikeya A, Teramoto A, Noguchi K, Fujita H. Preliminary study on phase-contrast digital tomosynthesis: Development and evaluation of experimental system. *Proc. of SPIE Medical Imaging 2013: Computer-Aided Diagnosis*. 2013:8668:866853-1-866853-6.
- 23) Yoshikawa R, Teramoto A, Matsubara T, Fujita H. Automated detection scheme of architectural distortion in mammograms using adaptive Gabor filter. *Proc. of SPIE Medical Imaging 2013: Computer-Aided Diagnosis*. 2013:8670:86701Z-1-86701Z-6.
- 24) Mori S, Hara T, Tagami M, Muramatsu C, Kaneda T, Katsumata A, Fujita H. Automated detection of abnormalities in paranasal sinus on dental panoramic radiographs by using contralateral subtraction technique based on mandible contour, *Proc. of SPIE Medical Imaging 2013: Computer-Aided Diagnosis*. 2013:8670:86702R-1-86702R-6.
- 25) Nishimura K, Muramatsu C, Oiwa M, Shiraiwa M, Endo T, Doi K, Fujita H. Psychophysical similarity measure based on multi-dimensional scaling for retrieval of similar images of breast masses on mammograms. *Proc. of SPIE Medical Imaging 2013: Computer-Aided Diagnosis*. 2013:8670:86701R-1-86701R-6.
- 26) Muramatsu C, Nishimura K, Hara T, Fujita H. Preliminary investigation on CAD system update: Effect of selection of new cases on classifier performance. *Proc. of SPIE Medical Imaging 2013: Computer-Aided Diagnosis*. 2013:8670:86701T-1-86701T-8.
- 27) Xu R, Zhou X, Hirano Y, Tachibana R, Hara T, Kido S, Fujita H. Particle system based adaptive sampling on spherical parameter space to improve the MDL method for construction of statistical shape models. *Comput Math Method M*. 2013:2013:Article ID 196259, 9 pages. IF 1.018
- 28) Inoue T, Hatanaka Y, Okumura S, Muramatsu C, Fujita H. Automated microaneurysm detection method based on eigenvalue analysis using Hessian matrix in retinal fundus images. *Proc. of 35th Annual International Conference of the IEEE EMBS*. 2013:5873-5876.
- 29) Muramatsu C, Nishimura K, Endo T, Oiwa M, Shiraiwa M, Doi K, Fujita H. Representation of lesion similarity by use of multidimensional scaling for breast masses on mammograms. *J Digit Imaging*. 2013:26:740-747. IF 1.200
- 30) Jiang H, Tan HQ, Fujita H. A hybrid method for pancreas extraction from CT image based on level-set methods. *Comput Math Method M*. 2013:2013:Article ID:479516, 13 pages. IF 1.018
- 31) Jiang H, He B, Ma Z, Zong M, Zhou X, Fujita H. Liver segmentation based on snakes model and improved GrowCut algorithm in abdominal CT image. *Comput Math Method M*. 2013:2013:Article ID:958398, 12 pages. IF 1.018
- 32) Sawagashira T, Hayashi T, Hara T, Katsumata A, Muramatsu C, Zhou X, Iida Y, Katagi K, Fujita H. An automatic detection method for carotid artery calcifications using top-hat filter on dental panoramic radiographs. *IEICE T Inf Syst*. 2013:E96-D:1878-1881. IF 0.191
- 33) Muramatsu C, Endo T, Oiwa M, Shiraiwa M, Doi K, Fujita H. Effect of reference image retrieval on breast mass classification performance: ROC Analysis. *Proc. of Workshop on Breast Image Analysis in conjunction with MICCAI 2013*, Martel A, Hipwell J, Schnabel J, Neilsen M, Nash M, Kontos D, and Karssemeijer N (Eds). 2013:50-57.
- 34) Muramatsu C, Matsumoto T, Hayashi T, Hara T, Katsumata A, Zhou X, Iida Y, Matsuoka M, Wakisaka T, Fujita H. Automated measurement of mandibular cortical width on dental panoramic radiographs. *Int J Comput Ass Rad*. 2013:8:877-885. IF 1.659
- 35) Zhang M, Xie J, Zhou X, Fujita H. No reference image quality assessment based on local binary pattern statistics. *Proc. of IEEE Conference on Visual Communications and Image Processing (VCIP2013)*. 2013.
- 36) Teramoto A, Fujita H, Takahashi K, Yamamuro O, Tamaki T, Nishio M, Kobayashi T. Hybrid method for the detection of pulmonary nodules using positron emission tomography/computed tomography: A preliminary study. *Int J Comput Assist Radiol Surg*. 2014:9:59-69. IF 1.659
- 37) Zhang M, Katsumata A, Muramatsu C, Hara T, Suzuki H, Fujita H. An automatic early stage alveolar-bone-resorption evaluation method on digital dental panoramic radiographs. *Proc. of SPIE Medical Imaging 2014: Computer-Aided Diagnosis*. 2014:9035:90353G-1-90353G-9.
- 38) Zhou X, Ito T, Zhou X, Chen H, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. A universal approach for automatic organ segmentations on 3D CT images based on organ localization and 3D

- GrabCut. Proc. of SPIE Medical Imaging 2014: Computer-Aided Diagnosis. 2014;9035:90352V-1-9035V-8.
- 39) Muramatsu C, Takahashi R, Hara T, Hayashi T, Katsumata A, Zhou X, Fujita H. Toward early diagnosis of arteriosclerotic diseases: Collaborative detection of carotid artery calcifications by computer and dentists on dental panoramic radiographs. Proc. of SPIE Medical Imaging 2014: Computer-Aided Diagnosis. 2014;9035:903521-1-903521-6.
 - 40) Muramatsu C, Hatanaka Y, Ishida K, Sawada A, Yamamoto T, Fujita H. Preliminary study on differentiation between glaucomatous and non-glaucomatous eyes on stereo fundus images using cup gradient models. Proc. of SPIE Medical Imaging 2014: Computer-Aided Diagnosis. 2014;9035:903533-1-903533-6.
 - 41) Teramoto A, Ohno T, Hashimoto F, Murata C, Takahashi K, Yoshikawa R, Suzuki S, Fujita H. Basic study on the development of a high-resolution breast CT. Proc. of 12th International Workshop (IWDM 2014). 2014;LNCS 8539:494-500.
 - 42) Yoshikawa R, Teramoto A, Matsubara T, Fujita H. Automated detection of architectural distortion using improved adaptive Gabor filter. Proc. of 12th International Workshop (IWDM 2014). 2014; LNCS 8539:606-611.
 - 43) Muramatsu C, Zhang M, Hara T, Endo T, Fujita H. Differentiation of malignant and benign masses on mammograms using radial local ternary pattern. Proc. of 12th International Workshop (IWDM 2014). 2014;LNCS 8539:628-634.
 - 44) Zhou X, Xu R, Hara T, Hirano Y, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Kido S, Fujita H. Development and evaluation of statistical shape modeling for principal inner organs on torso CT images. Radiological Physics and Technology. 2014;7:277-283.
 - 45) Hatanaka Y, Nagahata Y, Muramatsu C, Okumura S, Ogohara K, Sawada A, Ishida K, Yamamoto T, Fujita H. Improved automated optic cup segmentation based on detection of blood vessel bends in retinal fundus images. Proc. of 36th Annual International IEEE EMBS Conference. 2014;126-129.
 - 46) Sugimoto K, Oshiro H, Ogawa S, Honjo M, Hara T, Moriyasu F. Radiologic-pathologic correlation of three-dimensional shear-wave elastographic findings in assessing the liver ablation volume after radiofrequency ablation. World J Gastroentero. 2014;20:11850-11855. IF 2.433

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：藤田廣志，研究分担者：原 武史，周 向栄；科学研究費補助金新学術領域(研究領域提案型)：計算解剖学モデルの構築；平成 24-25 年度；34,700 千円(18,200：16,500 千円)；間接経費 10,410 千円(5,460：4,950 千円)
- 2) 研究代表者：原 武史；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：体幹部代謝アトラス構築と経時変化を自動追跡するがん治療効果の診断支援；平成 24-26 年度；4,000 千円(1,500：1,600：900 千円)；間接経費 1,200 千円(450：480：270 千円)
- 3) 研究代表者：周 向栄；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：大規模医用画像データベースの学習と類似画像検索に基づく汎用臓器抽出手順の開発；平成 24-25 年度；1,800 千円(1,300：500 千円)；間接経費 540 千円(390：150 千円)
- 4) 研究代表者：村松千左子；科学研究費補助金若手研究(B)：乳癌診断支援のための類似症例検索システムの開発；平成 24 年度；500 千円；間接経費 150 千円
- 5) 研究代表者：小畑秀文，研究分担者：増谷佳孝，佐藤嘉伸，藤田廣志，仁木 登，森 健策，清水昭伸，木戸尚治，橋爪 誠，目加田慶人，縄野 繁，井宮 淳，鈴木直樹；科学研究費補助金新学術領域(研究領域提案型)：医用画像に基づく計算解剖学の創成と診断・治療支援の高度化；平成 24-25 年度；分担金額 20 千円(10：10 千円)；間接経費 6 千円(3：3 千円)
- 6) 研究代表者：片淵哲朗，研究分担者：原 武史；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：マルチカメラシンチグラムにおける集積部位の距離測定と高解像度撮影法に関する研究；平成 24-26 年度；分担金額 700 千円(300：200：200 千円)；間接経費 210 千円(90：60：60 千円)
- 7) 研究代表者：藤田廣志；戦略的情報通信研究開発推進制度 地域 ICT 振興型研究開発「知的画像処理の活用による高度歯科遠隔診断システムの研究開発」；平成 24-25 年度；4,200 千円(2,500：1,700 千円)；間接経費 1,260 千円(750：510 千円)
- 8) 研究代表者：周 向栄；財団法人誠仁会の寄附による若手教職員の外国における研究・研修派遣，出張旅費助成金；350 千円
- 9) 研究代表者：村松千左子；立石科学技術振興財団 奨学寄附金；1,100 千円
- 10) 研究代表者：李 亨植，研究分担者：藤田廣志；研究成果最適展開支援プログラム：脳血管疾患の早期発見のためのコンピュータ支援診断システムの開発；平成 25-26 年度；分担金額 950 千円

(570 : 380 千円) ; 間接経費 285 千円

- 11) 研究代表者：藤田廣志；公益財団法人・鈴木謙三記念医科学応用研究財団第 33 回調査研究助成金：クラウド新時代に対応した次世代型コンピュータ支援画像診断システムの開発に関する基礎研究；平成 25 年 11 月；1,000 千円
- 12) 研究代表者：藤田廣志，研究分担者：原 武史，周 向榮；科学研究費補助金新学術領域(研究領域提案型)：多元計算解剖モデルを利用した臓器・組織機能診断支援システム；平成 26 年度；19,500 千円；間接経費 5,850 千円
- 13) 研究代表者：橋爪 誠，研究分担者：清水昭信，本谷秀堅，佐藤嘉伸，藤田廣志，仁木 登，森 健策，正宗英津子，木戸尚治；科学研究費補助金新学術領域(研究領域提案型)：医用画像に基づく計算解剖学の多元化と高度知能化診断・治療への展開；平成 26 年度；分担金額 100 千円；間接経費 30 千円
- 14) 研究代表者：小畑秀文，研究分担者：増谷佳孝，佐藤嘉伸，藤田廣志，仁木 登，森 健策，清水昭伸，木戸尚治，橋爪 誠，目加田慶人，縄野 繁，井宮 淳，鈴木直樹；科学研究費補助金新学術領域(研究領域提案型)：医用画像に基づく計算解剖学の創成と診断・治療支援の高度化；平成 26 年度；分担金額 100 千円；間接経費 30 千円
- 15) 研究代表者：藤田廣志；プレストイメージングに関する第 12 回国際ワークショップ(NICT)；平成 26 年度；3,000 千円；間接経費 300 千円
- 16) 研究代表者：勝又明敏，研究分担者：藤田廣志；科学研究費補助金基盤研究(B)：コンピュータ支援診断・検出を活用した歯科医療情報ライブラリの構築；平成 26 年度；3,000 千円；間接経費 900 千円
- 17) 研究代表者：原 武史；公益財団法人・鈴木謙三記念医科学応用研究財団平成 26 年度調査研究助成金：ドバミントランスポートイメージングにおける線条体集積値の定量評価法；平成 26 年 11 月；1,000 千円
- 18) 研究代表者：周 向榮；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：大規模医用画像データベースの学習と類似画像検索に基づく汎用臓器抽出手順の開発；平成 26 年度；1,600 千円；間接経費 480 千円
- 19) 研究代表者：村松千左子；科学研究費補助金若手研究(B)：乳がん画像診断支援のためのマンモグラム・超音波画像連携システム；平成 26 年度；500 千円；間接経費 150 千円
- 20) 研究代表者：村松千左子；栢森情報科学振興財団研究助成金：緑内障スクリーニングのための眼底画像診断支援ツールの開発；平成 25 年度；700 千円
- 21) 研究代表者：村松千左子；立石科学技術振興財団 2014 年度前期国際交流助成金；平成 26 年度；340 千円
- 22) 研究代表者：村松千左子；財団法人誠仁会の寄附による若手教職員の外国における研究・研修派遣，出張旅費助成金；平成 26 年度；480 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

- 1) 研究代表者：藤田廣志；知的画像処理の活用による高度歯科遠隔診断支援システムの研究開発；平成 25 年契約締結日ー平成 26 年 3 月 31 日；メディア株式会社
- 2) 研究代表者：藤田廣志；知的画像処理の活用による高度歯科遠隔診断支援システムの研究開発；平成 26 年 4 月 1 日ー平成 27 年 3 月 31 日；3,400 千円；間接経費；340 千円；メディア株式会社

5. 発明・特許出願状況

- 1) 藤田廣志，原 武史，他 2 名：DIAGNOSIS ASSISTANCE SYSTEM UTILIZING PANORAMIC RADIOGAPHS, AND DIAGNOSIS ASSISTANCE PROGRAM UTILIZING PANORAMIC RADIOGAPHS(発明)；平成 24 年(国際出願 PCT/JP2012/056375)
- 2) 原 武史，藤田廣志，他 1 名：放射性医薬品の異常集積の検出(発明)；平成 24 年(特願 2012-171926)
- 3) 藤田廣志，原 武史，他 6 名：骨粗鬆症診断支援装置(発明)；平成 25 年(特願 2013-242678)
- 4) 藤田廣志，原 武史，他 6 名：歯周病診断支援装置及びその方法並びにプログラム(発明)；平成 25 年(特願 2013-261393)
- 5) 藤田廣志，原 武史，他 6 名：骨粗鬆症診断支援装置(発明)；平成 26 年(PCT/JP2014/81056)
- 6) 藤田廣志，原 武史，他 5 名：歯科画像処理装置(発明)；平成 26 年(特願 2014-198910)

- 7) 原 武史, 藤田廣志, 他 1 名 : 放射性医薬品の異常集積の検出(発明) ; 平成 26 年(公開番号 2014-032069)

6. 学会活動

1) 学会役員

藤田廣志 :

- 1) 日本医用画像工学会幹事(～現在)
- 2) 日本乳腺・甲状腺超音波診断会議幹事(～現在)
- 3) 日本乳癌画像研究会デジタル分科会委員(～現在)
- 4) 医用画像情報学会会長(～現在)
- 5) 日本スキャンジナビア放射線医学協会幹事(～現在)
- 6) 電子情報通信学会医用画像研究専門委員会顧問(～現在)
- 7) Computer Assisted Radiology and Surgery (CARS 2012), Program Committee member(～平成 24 年 6 月)
- 8) 9th Symposium of the Scandinavian Japan Radiological Society and 12th Nordic Japan PACS Symposium, Scientific Advisory Board member (～平成 24 年 9 月)
- 9) 日本生体医工学会代議員(～現在)
- 10) 岐阜東洋医学研究会世話人(～現在)
- 11) SPIE Medical Imaging, Program committee member (～現在)
- 12) 呼吸機能イメージング研究会世話人(～現在)
- 13) 第 5 回呼吸機能イメージング研究会実行委員会委員(平成 24 年 1 月～平成 25 年 1 月)
- 14) 日本医用画像工学会 JAMIT 大会 2012 プログラム委員会委員(平成 24 年 1 月～平成 24 年 8 月)
- 15) International Symposium on the Project “Computational Anatomy” funded by MEXT Grand-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas, Steering Committee member(～平成 26 年 3 月)
- 16) 大腸 3 次元 CT 研究会顧問(～現在)
- 17) International Forum on Medical Imaging in Asia 2012, Advisory Board member(～平成 24 年 11 月)
- 18) International Conference on Computerized Healthcare (ICCH2012), Steering Committee member (平成 24 年 1 月～平成 24 年 12 月)
- 19) 日本生体医工学会東海支部理事・評議員(～現在)
- 20) International Workshop on Digital Mammography 2012, Scientific Committee member(～平成 24 年 7 月)
- 21) The 2nd International Symposium on Automated Whole Breast Ultrasound, Programme Coordinator(平成 24 年 7 月～平成 24 年 9 月)
- 22) International Workshop on Digital Mammography 2014, Scientific Committee member(平成 24 年 7 月～平成 26 年 7 月)
- 23) MICCAI 2012 (Nice) Workshop on Computational and Clinical Applications in Abdominal Imaging, Program Committee member(平成 24 年 1 月～平成 24 年 10 月)
- 24) 公益社団法人日本放射線技術学会倫理規定・倫理ガイドライン作成特別委員会委員(～平成 25 年 4 月)
- 25) The 25th International Symposium on Computer-Based Medical System, Special track on Image processing for ophthalmology: Challenges in retinal analysis and related fields, Program Committee member (～平成 24 年 6 月)
- 26) 第 28 回国際コンピュータ支援放射線医学・外科学会議 医用画像工学系学術委員会委員(～平成 25 年 6 月)
- 27) Computer Assisted Radiology and Surgery (CARS 2013), Program Committee member(平成 24 年 12 月～平成 25 年 6 月)
- 28) MICCAI 2013 (Nagoya) Workshop on Computational and Clinical Applications in Abdominal Imaging, Workshop Committee & Scientific Review Committee member(平成 25 年 3 月～平成 25 年 9 月)
- 29) The Second MICCAI International Workshop on Breast Image Analysis, Workshop Scientific Committee member (平成 25 年 1 月～平成 25 年 9 月)

- 30) 日本医用画像工学会 JAMIT 大会 2013 プログラム委員会委員(平成 25 年 1 月～平成 25 年 8 月)
- 31) ISEE2013: The 2013 International Symposium on Electrical and Electronics Engineering, Technical Program Committee member(平成 25 年 4 月～平成 25 年 10 月)
- 32) PROGRESS IN RADIOLOGY 2014, Conference Committees: Japanese Board of JSRS(10th Symposium of the Japanese Scandinavian Radiological Society & 12th Nordic Japan PACS Symposium) (平成 25 年 4 月～平成 26 年 6 月)
- 33) International Forum on Medical Imaging in Asia 2015, Advisory Board member(平成 25 年 4 月～現在)
- 34) Computer Assisted Radiology and Surgery (CARS 2014), Program Committee member(平成 25 年 12 月～平成 26 年 6 月)
- 35) 2014 International Conference on Smart Computing (SMARTCOMP 2014), Technical Program Committee member(平成 26 年 1 月～平成 26 年 11 月)
- 36) 日本医用画像工学会 JAMIT 大会 2014 プログラム委員会委員(平成 26 年 1 月～平成 26 年 7 月)
- 37) 第 54 回日本生体医工学会大会・組織委員会組織委員・プログラム副委員長(平成 26 年 2 月～現在)
- 38) MICCAI 2014 (Boston) Workshop on Computational and Clinical Applications in Abdominal Imaging, Workshop Committee & Scientific Review Committee member(平成 26 年 3 月～平成 26 年 9 月)
- 39) International Workshop on Digital Mammography 2016, Scientific Committee member(平成 26 年 7 月～現在)
- 40) Computer Assisted Radiology and Surgery (CARS 2015), Program Committee member(平成 26 年 12 月～現在)

原 武史 :

- 1) 医用画像情報学会理事(～現在)
- 2) 日本放射線技術学会画像分科会委員(～現在)
- 3) 電子情報通信学会医用画像研究専門委員会委員(～現在)
- 4) 日本生体医工学会東海支部評議員(～現在)
- 5) 日本医用画像工学会 JAMIT 大会 2012 プログラム委員(平成 24 年 1 月～平成 24 年 8 月)
- 6) International Workshop on Digital Mammography 2014, Scientific Committee member(平成 24 年 7 月～平成 26 年 7 月)
- 7) 日本医用画像工学会常任幹事(平成 26 年 4 月～現在)

周 向栄 :

- 1) MLMI 2012 - International Workshop on Machine Learning in Medical Imaging, Program Committee Member(平成 24 年 1 月～平成 24 年 10 月)
- 2) MLMI 2013 - International Workshop on Machine Learning in Medical Imaging, Program Committee Member(平成 25 年 1 月～平成 25 年 10 月)
- 3) MLMI 2014 - International Workshop on Machine Learning in Medical Imaging, Program Committee Member(平成 26 年 1 月～平成 26 年 9 月)

2) 学会開催

藤田廣志 :

- 1) 12th International Workshop on Breast Imaging (2014.06, Gifu)

3) 学術雑誌

藤田廣志 :

- 1) 日本放射線技術学会英語論文誌 ; 編集委員(～現在)
- 2) Diagnostic Imaging Asia-Pacific ; Editorial Advisory Board(～現在)
- 3) 電子情報通信学会医用画像小特集号(和文誌 D&英文論文誌 D 合同) ; 編集委員会委員長(～平成 25 年 4 月)
- 4) Breast Imaging ; Editor (Fujita H, Hara T, and Muramatsu C) for Proc. of the 12th International Workshop on Breast Imaging (IWDM 2014), LNCS 8539, 753 pages, Springer(2013～2014)

原 武史：

- 1) 日本放射線技術学会英語論文誌；編集委員(～現在)
- 2) 電子情報通信学会医用画像小特集号(和文誌 D&英文論文誌 D 合同)；編集委員会委員(～平成 25 年 4 月)
- 3) Breast Imaging；Editor (Fujita H, Hara T, and Muramatsu C) for Proc. of the 12th International Workshop on Breast Imaging (IWDM 2014), LNCS 8539, 753 pages, Springer(2013～2014)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

藤田廣志：

- 1) The 2012 International Workshop on Advanced Image Technology (IWAIT2012) (2012.01, Ho Chi Minh City, Vietnam, Keynote, State-of-the-art of computer-aided diagnosis (CAD) for medical images; Speaker)
- 2) メディカルイメージング連合フォーラム(平成 24 年 1 月，沖縄，フェロー記念講演「画像診断の向上を目指すわが医用画像工学研究」演者)
- 3) Third International Symposium on the Project “Computational Anatomy”(2012.03, Fukuoka, Invited talk: Computational Anatomy and Therapy Planning by Prof. Dr. Heinz-Otto Peitgen; Chair)
- 4) 立命館大学グローバル・イノベーション研究機構(R-GIRO)先端医療研究拠点シンポジウム「立命館大学が目指す IT と医療の融合」(平成 24 年 10 月，大津，基調講演「コンピュータ支援画像診断の最先端」演者，およびパネルディスカッション「IT が拓く医療の将来の展望」パネリスト)
- 5) NPO 法人日本歯科放射線学会・第 216 回関東地方会(平成 25 年 1 月，大宮，特別講演「コンピュータ支援診断(CAD)ー医科から歯科領域への広がりー」演者)
- 6) Fourth International Symposium on the Project “Computational Anatomy” (2013.02, Osaka, Special Talk: Challenge the Visible Korean! by Dr. Dong Sun Shin; Chair)
- 7) JRC(日本ラジオロジー協会)2013 大会(平成 25 年 4 月，横浜，JRC 合同シンポジウム 2：コンピュータ支援診断「研究開発の立場からみた現状分析と課題」演者)
- 8) 第 2 回計算解剖学若手ワークショップ(平成 25 年 5 月，名古屋，特別講演「さあ研究しよう！」演者)
- 9) CARS(Computer Assisted Radiology and Surgery) 2013 (2013.06, Heidelberg, Germany, Keynote: CAD applications in diverging diagnostic imaging field; Speaker)
- 10) First Aizu Conference on Biomedical Informatics and Technology (ACBIT'2013)(2013.09, Aizuwakamatsu, Keynote: State-of-the-art of Computer-Aided Detection/Diagnosis (CAD) for Medical Images; Speaker)
- 11) The International Symposium on Electrical-Electronics Engineering (ISEE2013)(2013.11, Ho Chi Minh City, Vietnam, Keynote: State-of-the-art of computer-aided diagnosis (CAD) in medical images; Speaker)
- 12) 日本歯科放射線学会第 33 回関西・九州合同地方会(平成 25 年 12 月，岐阜，特別講演「「計算解剖学」研究とそのパノラマ画像解析への応用」演者)
- 13) メディカルイメージング連合フォーラム 2014(平成 26 年 1 月，沖縄，特別講演「多様な肺疾患の診断・教育を支える類似症例検索技術の開発」(小塚和紀)座長)
- 14) 12th International Workshop on Breast Imaging (IWDM 2014)(平成 26 年 6 月，岐阜，Plenary Lecture: Effectiveness of ultrasonography screening for breast cancer; Up-dated data from the RCT of 76,196 women aged 40-49 (J-START) by Prof. Dr. Noriaki Ohuchi; Chair)
- 15) 社団法人日本工業技術振興会・第 155 回次世代画像入力ビジョンシステム部会定例会(平成 26 年 7 月，東京理科大学，招待講演「コンピュータ支援医用画像診断(CAD)」演者)
- 16) 第 33 回日本医用画像工学会大会・シンポジウム 2「医・工連携」(平成 26 年 7 月，東京慈恵医科大学，「医工連携・産学連携による研究事例の紹介」演者)
- 17) 第 4 回 JIRA(日本画像医療システム工業会)画像医療システム産業研究会(平成 26 年 12 月，東京，招待講演「診断分野：CAD(コンピュータ支援診断システム)の最新動向と将来」演者)

原 武史：

- 1) メディカルイメージング連合フォーラム(平成 24 年 1 月，沖縄，特別講演「核医学画像を対象とした画像診断および検査支援システムの開発」演者)

- 2) 核医学技術学会(平成 24 年 10 月, 札幌, 招待講演「コンピュータ支援診断の現状」演者)
- 3) 35th Annual International Conference of IEEE Engineering in Medicine and Biology Society (IEEE EMBC 2013)(2013.07, Osaka, Workshop: Whole-Body Computational Anatomy and its Application to Computer Aided Diagnosis and Therapy “Fast organ localization and FDG-PET modeling”; Speaker)

周 向栄 :

- 1) 35th Annual International Conference of IEEE Engineering in Medicine and Biology Society (IEEE EMBC 2013)(2013.07, Osaka, Workshop: Whole-Body Computational Anatomy and its Application to Computer Aided Diagnosis and Therapy “Fast organ localization and FDG-PET modeling”; Speaker)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 寺本篤司, 鈴木昇一, 吉川るり葉, 大野智之, 津坂昌利, 藤田広志, 他 : 日本放射線技術学会第 68 回総会学術大会・電子ポスター(CyPos)銅賞(平成 24 年度)
- 2) 澤頭 毅(大学院博士前期課程 2 年) : 電子情報通信学会東海支部・平成 23 年度学生研究奨励賞(平成 24 年度)
- 3) 澤頭 毅, 林 達郎, 原 武史, 勝又明敏, 村松千左子, 周 向栄, 飯田幸弘, 片木喜代治, 藤田広志 : 日本医用画像工学会第 30 回大会・奨励賞(平成 24 年度)
- 4) 渡辺篤人, 周 向栄, 陳 華岳, 原 武史, 横山龍二郎, 周 向栄, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志 : 日本医用画像工学会第 31 回大会・奨励賞(平成 24 年度)
- 5) 寺本篤司, 大野智之, 鈴木昇一, 藤田広志 : 日本医用画像工学会第 31 回大会・奨励賞(平成 24 年度)
- 6) 神谷直希, 大崎裕貴, 近藤 潤, 藤田広志 : 2012 年映像情報メディア学会年次大会・準優秀賞(平成 24 年度)
- 7) 藤田廣志, 中川俊明, 林 佳典 : 小野木科学技術振興財団・最優秀賞(平成 24 年度)
- 8) 周 向栄, 山口昌太郎, 周 欣欣, 陳 華岳, 原 武史, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志 : SPIE Medical Imaging 2013・Honorable Mention Poster Award (平成 24 年度)
- 9) 清水勇介, 原 武史, 福岡大輔, 周 向栄, 村松千左子, 伊藤 哲, 箱崎謙太, 汲田伸一郎, 石原圭一, 片渕哲朗, 藤田広志 : SPIE Medical Imaging 2013・Honorable Mention Poster Award (平成 24 年度)
- 10) 神谷直希, 周 向栄, 陳 華岳, 村松千左子, 原 武史, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志 : Radiological Physics and Technology 誌・優秀論文土井賞(平成 25 年度)
- 11) 村田千佳, 寺本篤司, 藤田広志 : 日本放射線技術学会第 69 回総会学術大会・銅賞(平成 25 年度)
- 12) 村松千左子, 西村公平, 遠藤登喜子, 大岩幹直, 白岩美咲, 土井邦雄, 藤田広志 : 日本放射線技術学会第 69 回総会学術大会・銅賞(平成 25 年度)
- 13) 村松千左子, 高橋 龍, 原 武史, 林 達郎, 勝又明敏, 周 向栄, 藤田広志 : SPIE Medical Imaging 2014・Honorable Mention Poster Award(平成 25 年度)
- 14) Hashimoto F, Murata C, Teramoto A, Fujita H. A basic study on region setting CT system: Development of experimental system : 第 70 回日本放射線技術学会総会学術大会・CyPos 銀賞(平成 26 年度)
- 15) 高橋 龍(大学院博士前期課程 1 年) : 電子情報通信学会東海支部・平成 25 年度学生研究奨励賞(平成 26 年度)

9. 社会活動

藤田廣志 :

- 1) 画像診断分野・コンピュータ診断支援装置開発ワーキンググループ委員(独立行政法人 産業技術総合研究所・同人間福祉医工学研究部門医療機器開発ガイドライン検討実務委員会)(平成 21 年度～平成 24 年度)
- 2) NEDO 技術委員(平成 22 年 4 月～平成 24 年 3 月)
- 3) 独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(平成 23 年 12 月～平成 25 年 11 月)
- 4) 公益財団法人コニカミノルタ科学技術振興財団理事(平成 24 年 6 月～現在)
- 5) 千葉大学フォロンティアメディカル工学研究開発センター外部評価委員(平成 25 年 1 月～平成 25 年 2 月)

- 6) 平成 25 年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(立命館大学)外部評価委員会委員(平成 26 年 4 月～現在)
- 7) 文部科学省科学研究費補助金における評価に関する委員会・評価者(平成 26 年 12 月～現在)

10. 報告書

- 1) Fujita H, Hara T, Zhou X, Hayashi T, Kamiya N, Chen H, Hoshi H. A01-3 Model construction for computational anatomy: Progress overview FY2011, Proc. of the Third International Symposium on the Project “Computational Anatomy” : 24-32, 平成 23 年度科学研究費補助金新学術領域(研究領域提案型) : 計算解剖学モデルの構築として(平成 24 年 3 月)
- 2) Fujita H, Hara T, Zhou X, Muramatsu C, Kamiya N, Zhang M, Fukuoka D, Hatanaka Y, Matsubara T, Teramoto A, Uchiyama Y, Chen H, and Hoshi H. A01-3 Model construction for computational anatomy: Progress overview FY2012, Proc. of the Fourth International Symposium on the Project “Computational Anatomy” : 22-42, 平成 24 年度科学研究費補助金新学術領域(研究領域提案型) : 計算解剖学モデルの構築として(平成 25 年 2 月)
- 3) 藤田広志, 勝又明敏, 原 武史, 林 達郎, 林 佳典 : 文部科学省地域イノベーション戦略支援プログラム(都市エリア型)岐阜県南部エリアにおける「歯科領域における画像診断支援システムの開発」, 医用画像情報学会雑誌 2013 年 ; 30 巻 : 18-30.
- 4) Fujita H, Hara T, Zhou X, Muramatsu C, Kamiya N, Zhang M, Fukuoka D, Hatanaka Y, Matsubara T, Teramoto A, Uchiyama Y, Chen H, Hoshi H. A01-3 Model construction for computational anatomy: Progress overview FY2009-FY2013, Proc. of the Fifth International Symposium on the Project “Computational Anatomy” : 25-35, 平成 25 年度科学研究費補助金新学術領域(研究領域提案型) : 計算解剖学モデルの構築として(平成 26 年 3 月)

11. 報道

- 1) 藤田広志 : 最優秀に画像解析装置 : 中日新聞(2012 年 10 月 30 日)
- 2) 藤田広志 : 優秀な発明者表彰 : 岐阜新聞(2012 年 10 月 30 日)
- 3) 藤田広志 : プレストイメーシングに関する第 12 回国際ワークショップ : 岐阜新聞(2014 年 7 月 3 日)

12. 自己評価

評価

科研費による基礎研究から企業との産学共同による実用化研究まで、幅広く研究活動を行っている。これらのすべてにおいて研究の進捗状況は、総じて極めて順調である。今後もこのペースを維持し、さらに医工連携・産学連携を基調とした共同研究を進める計画であり、医用画像情報処理分野における世界的レベルの学術研究の推進、およびその社会への還元に鋭意努力していく。学生の研究指導・教育面では、年間 100 件規模の国内外の学会等における研究発表を基本にした育成過程を通じて、高いレベルの教育・研究活動を行っており、主な就職企業先からの評判も良好であり、高く評価されている。

現状の問題点及びその対応策

現在、本分野の教員 3 名が、工学部応用情報学科(改組により電気電子・情報工学科 情報コース)に出向き、複数の各種の講義や実験を担当し、かつ卒業研究の指導(毎年学部 3 年次の秋から学生配属(毎年 7-9 名)が始まり、4 年次卒業までの間の 1 年半の期間)を行っている。これらの学生が大学院進学時に再生医科学専攻の博士前期課程に入学している。

問題点としては、工学系からの多くの学生を受け入れているが(2014 年末で、博士後期課程 3 名、博士前期課程 12 名、学部 4 年生 9 名、学部 3 年生 9 名 : 計 33 名)、これらの学生の教育・研究には、教員 3 名が中心となっていて行っているのが現状で、きめ細かな指導をするにはスタッフ不足は否めない状態である。そこで、研究室の客員准教授や学内外の共同研究者にも学生の教育・研究指導に協力をしていただいている状況である。

また、後期課程まで進学する学生は若干名の留学生と社会人学生のみであり(全国的な傾向ではあるが)、一般学生が最近では皆無であるため、幅広く全国規模で優秀な学生の募集に務めたい。

医工学系あるいは医学系の国際会議における発表演題数は毎年多いのが現状であり、展示発表等では複数の賞を毎年受賞しているが、これらの著名な国際誌への論文文化が遅れている状況であり、改善に努める。

今後の展望

コンピュータ支援診断（CAD）システムの基礎開発およびその実用化をさらに進展させる。また、現在は、放射線医学で取り扱われる診断用の画像領域を対象の中心として研究を進めているが、今後は、再生医学関係の画像処理・解析・認識に関する研究テーマへのさらなる積極的な取り組みを検討する。教育面ではさらにきめ細かな指導体制を確立し、自主性、創造性、チャレンジ精神に富んだ学生の育成を目指す。

〔再生応用学講座〕

(1) 循環呼吸制御学分野

1. 研究の概要

1. 再生医学・再生医療

- 1) G-CSF (顆粒球コロニー刺激因子) を用いた狭心症, 心筋梗塞・心不全・閉塞性動脈硬化症に対する再生療法
- 2) Erythropoietin を用いた心筋梗塞・心不全・閉塞性動脈硬化症, に対する再生療法の開発
- 3) Gelatin hydrogel sheet あるいは粒子の Drug Delivery System を用いた G-CSF と erythropoietin による心筋梗塞・心不全・閉塞性動脈硬化症に対する心臓組織再生あるいは血管再生療法の開発
- 4) ナノリボゾームを用いた G-CSF と erythropoietin による心筋梗塞後心筋組織修復再生療法の開発, 下肢閉塞性動脈疾患に対する血管再生療法に関する研究
- 5) ホーミング分子で修飾された内皮前駆細胞あるいは筋芽細胞による心血管再生治療法の開発
- 6) 骨髄細胞移植ならびに G-CSF を用いた COPD 等の肺疾患に対する再生療法
- 7) LOX 遺伝子改変マウスを用いた下肢虚血モデルにおける LOX-1 の血管新生血における LOX の関与に関する研究
- 8) Erythropoietin を用いた重症下肢閉塞性動脈硬化症に対する臨床研究
- 9) Erythropoietin と gelatin hydrogel 粒子を用いた重症下肢閉塞性動脈硬化症に対する臨床研究
- 10) Erythropoietin を用いた COPD モデルマウスおよび培養肺胞上皮細胞に対する再生医学的研究
- 11) PDE-4 阻害薬を用いた COPD モデルマウスに対する有効性の検討

2. 遺伝子治療

- 1) 心不全に対する HGF, sFas, 可溶性 TGF- β II 型受容体, Decorin の遺伝子治療
- 2) 糖尿病性腎症に対する sFas, HGF 遺伝子治療

3. アポトーシス, オートファジー

- 1) 循環器疾患とアポトーシス
筋線維芽細胞のアポトーシスのブロックによる左室リモデリング予防
- 2) 腎疾患とアポトーシス
糖尿病性腎症の発症メカニズムにおけるアポトーシスの役割の解明
- 3) 呼吸器疾患とアポトーシス
COPD における FAS の役割の解明
- 4) 循環器疾患とオートファジー
心筋梗塞・心不全の際のオートファジーの病態生理解明と治療法の開発

4. 虚血心筋保護のメカニズム解明と new drug の開発

- 1) 抗糖尿病薬 miglitol, acarbose, voglibose など α -glucosidase 阻害薬, ピオグリタゾン, ナテグリニド, グリクラジドによる虚血心筋保護作用のメカニズム解明とその臨床応用
- 2) 抗高脂血症薬スタチンの pleiotropic effect としての虚血心筋保護作用のメカニズム解明
- 3) 各種心血管薬 (ARB, Ca 拮抗薬, 抗血小板薬, β 遮断薬) の虚血心筋保護作用のメカニズム解明

5. 心不全

- 1) 不全心筋における angiotensin II type 2 受容体の病態生理学的意義の解明
- 2) 心筋細胞変性の分子病理
- 3) アシアロエリスロポエチンの抗心不全作用の解明
- 4) LOX-1 遺伝子改変マウスを用いた左室圧負荷モデルでの LOX-1 の心筋肥大への関与に関する研究
- 5) LOX-1 遺伝子改変マウスを用いたドキシソビシン誘導性心筋症による心不全に対する LOX-1 関与に関する研究
- 6) インスリン抵抗性改善薬, 食後高血糖改善薬の心不全に対する保護効果

6. 高血圧についての基礎的および臨床的研究

- 1) SHR において塩分負荷が心臓・腎臓組織レニン, プロレニンに与える影響に関する研究
- 2) 高血圧症患者におけるレニン, プロレニンの関与に関する研究
- 3) 家庭血圧測定的重要性と降圧薬の評価に関する臨床研究
DOHSAM 研究, GAIN 研究, GIFT 研究

7. 閉塞性動脈硬化症に対する治療法の開発

- 1) エリスロポエチン, G-CSF 注射による下肢閉塞性動脈疾患の治療
- 2) エリスロポエチン含浸ゲラチンハイドロゲル筋注による下肢閉塞性動脈疾患の治療

8. 肺癌治療法の開発

- 1) 肺癌患者における末梢リンパ球を用いた免疫治療法および予後予測法の開発

2. 名簿

教授： 湊口信也 Shinya Minatoguchi
准教授： 西垣和彦 Kazuhiko Nishigaki

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 西垣和彦. 2. PCI/CABG ガイドライン：平山治雄，横井宏佳，一色高明監修，専門医認定医制度審議会 手引き書制作委員会編. CVIT 専門医試験準拠『インターベンション必携』，2013年：6-9.
- 2) 西垣和彦. 3. わが国のガイドラインを踏まえた左主幹部の治療(ACSを含む)：平山治雄，横井宏佳，一色高明監修，専門医認定医制度審議会 手引き書制作委員会編. CVIT 専門医試験準拠『インターベンション必携』，2013年：121-123.
- 3) 西垣和彦. 5. 安定労作性狭心症：浦部晶夫ら編. 今日の処方 改訂第5版，南江堂；2013年：132-136.
- 4) 西垣和彦. 8. 陳旧性心筋梗塞：浦部晶夫ら編. 今日の処方 改訂第5版，南江堂；2013年：142-146.
- 5) 西垣和彦. 第5章 大学生のための病気の知識-大学生に比較的多い病気を中心に-第2節 心臓の病気：岐阜県大学保健管理研究会企画，山本真由美監修. 2013 大学生の健康ナビ，キャンパスライフの健康管理改訂版，岐阜大学；2013年：108-112.
- 6) 西垣和彦，湊口信也. 心膜液貯留・心タンポナーデ：堀 正二，永井良三編集. 循環器疾患 最新の治療 2014-2015，南江堂；2014年：194-197.
- 7) 小川俊一，鮎澤 衛，石井正浩，荻野廣太郎，佐地 勉，西垣和彦，濱岡建城，深澤隆治，落 雅美，神山浩，高橋 啓，津田悦子，横井宏佳. 川崎病心臓血管後遺症の診断と治療に関するガイドライン(2013年改訂版)：循環器病の診断と治療に関するガイドライン(2012年度合同研究班報告)
http://www.j-circ.or.jp/guideline/pdf/JCS2013_ogawas_h.pdf
- 8) 井澤英夫，西垣和彦，長田尚彦，平敷安希博，伊藤義浩，吉田俊子，池亀俊美，高橋哲也，森尾裕志，河野裕治，小林聖典，宮澤 靖，山田純生. 心臓リハビリテーション標準プログラム(2013年版)-心筋梗塞急性期・回復期-http://square.umin.ac.jp/jacr/program_std/doc/program2013.pdf
- 9) 西垣和彦. 第5章 心不全の特殊な治療とは？ 2. 心臓移植：佐藤幸人編. あなたも名医！ゼッタイ答えが見つかる心不全，一人でGo! チームでGo!，日本医事新報社；2014年：142-149.
- 10) 西垣和彦，湊口信也. 池亀俊美，長山雅俊，大宮一人編，伊東春樹監修. 心臓リハビリテーション医療 先導施設のノウハウとクリニカルパス集，NPO 法人ジャパンハートクラブ；2014年：34-40.
- 11) 西垣和彦. 第6章 重症心不全の特殊な治療 53 究極の重症心不全治療-心臓移植とその本質-：佐藤幸人編. 臨床心不全のいちばん大事なところ 60-そうだったのか！ストンと胸に落ちる基礎知識(CIRCULATION Up-to-Date Books 03)，株式会社メディカ出版；2014年：302-308.

著書 (欧文)

- 1) JCS Joint Working Group: Daida H, Hirayama A, Isshiki T, Kimura T, Masuda I, Mitsudo K, Miyazaki S, Nishida H, Nishigaki K, Ochi M, Ogawa S, Ohno T, Sakata R, Shiba T, Sumiyoshi T, Suzuki T, Takamoto S, Yaku H, Yamazaki T. Guidelines for elective percutaneous coronary intervention in patients with stable coronary artery disease (JCS 2011) published in 2012--digest version. Circ J. 2013;77:1590-1607.
- 2) JCS Joint Working Group: Amano A, Arai H, Asai T, Daida H, Fujiwara H, Horii T, Isshiki T, Kawasuji M, Kimura T, Kobayashi J, Masuda I, Niinami H, Nishida H, Nishigaki K, Ogawa S, Ohno T, Okabayashi H, Okamura Y, Sakata R, Shiba T, Suma H, Sumiyoshi T, Takamoto S, Tashiro T, Yaku H, Yamamoto F, Yamazaki T, Watanabe G. Guidelines for the clinical application of bypass grafts and the surgical techniques (JCS 2011) published in 2012--digest version. Circ J. 2013;77:1608-1641.
- 3) JCS Joint Working Group: Ogawa S, Ayusawa M, Fukazawa R, Hamaoka K, Ishii M, Nishigaki K, Ogino H, Saji T. Guidelines for diagnosis and management of cardiovascular sequelae in Kawasaki disease. (JCS 2013) -Digest Version-. Circ J. 2014;78:2521-2562.

総説 (和文)

- 1) 竹村元三. 心疾患の病理：序文，循環器内科 2012年；72巻：539-540.
- 2) 竹村元三. 心疾患の病理：心筋細胞の死と変性，循環器内科 2012年；72巻：620-628.
- 3) 西垣和彦. 特集 慢性心不全の薬物療法-それぞれのステージでの長期予後を見据えた早期介入-I-2 I. 1 次予防と薬物療法(心イベント前での薬物療法)『虚血性心臓病の心不全予防 ~急性心筋梗塞後の対処法~』，月刊循環器 CIRCULATION 2013年；3巻：13-20.
- 4) 和泉 徹，西垣和彦. 第40回内科学の展望『臓器移植の現状と将来展望』5. 心臓移植について，日本内科学会雑誌 2013年；102巻：565-572.
- 5) 西垣和彦. 特集 心筋症：診断と治療の進歩 IV. 予後・QOL の改善を目指す治療法の選択『心臓移植の現状・未来』，日本内科学会雑誌 2014年；103巻：399-407.

- 6) 西垣和彦, 湊口信也. 特集 心臓リハビリテーション Now : 包括的リハビリテーションと疾病管理プログラムを識る 5. 診る 『外来心臓リハビリテーションをどう立ち上げ、どう運営するか?』, *Heart View* 2014年; 18巻: 34-43.
- 7) 西垣和彦. 特集『高齢者における抗血栓療法』1. 抗血小板療法 4) 抗血小板薬の副作用対策, *Geriatric Medicine 老年医学* 2014年; 52巻: 1433-1438.

総説 (欧文)

- 1) Klionsky DJ, Kanamori H, Takemura G, et al. Guidelines for the use and interpretation of assays for monitoring autophagy. *Autophagy*. 2012;8:445-544.
- 2) Takemura G, Kanoh M, Minatoguchi S, Fujiwara H. Cardiomyocyte apoptosis in the failing heart -A critical review from definition and classification of cell death-. *Int J Cardiol*. 2013;167:2373-2386.

原著 (和文)

- 1) 西垣和彦, 名和隆英, 服部有博, 鈴木貴史, 東 賢志, 今井 一, 山田好久, 高杉信寛, 久保田知希, 青山琢磨, 川崎雅規, 竹村元三, 湊口信也. 造影剤腎症に対する Nicorandil の持続点滴静注効果の検討, *Therapeutic Research* 2013年; 34巻: 340.
- 2) 金森寛充, 竹村元三, 今井 一, 鈴木貴史, 高杉信寛, 久保田知希, 牛越博昭, 服部有博, 青山琢磨, 川崎雅規, 西垣和彦, 湊口信也. 心肥大の成因確定に苦慮した Fabry 病の一例, *心臓* 2013年; 45巻: 440-445.

原著 (欧文)

- 1) Kawaguchi T, Takemura G, Kanamori H, Takeyama T, Watanabe T, Morishita K, Ogino A, Tsujimoto A, Goto K, Maruyama R, Kawasaki M, Mikami A, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Prior starvation mitigates acute doxorubicin cardiotoxicity through restoration of autophagy in affected cardiomyocytes. *Cardiovasc Res*. 2012;96:456-465. IF 5.808
- 2) Kubota T, Kawasaki M, Takasugi N, Imai H, Ishihara Y, Okubo M, Takahashi S, Sato H, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S. Left atrial pathological degeneration assessed by integrated backscatter transesophageal echocardiography as a predictor of progression to persistent atrial fibrillation: Results from a prospective study of three-years follow-up. *Cardiovasc Ultrasound*. 2012;10:28-34. IF 1.283
- 3) Ishihara Y, Kawasaki M, Hattori A, Imai H, Takahashi S, Sato H, Kubota T, Okubo M, Ojio S, Nishigaki K, Takemura G, Fujiwara H, Minatoguchi S. Relationship among coronary plaque compliance, coronary risk factors and tissue characteristics evaluated by integrated backscatter intravascular ultrasound. *Cardiovasc Ultrasound*. 2012;10:32. IF 1.283
- 4) Yamaki T, Kawasaki M, Jang IK, Raffel OC, Ishihara Y, Okubo M, Kubota T, Hattori A, Nishigaki K, Takemura G, Fujiwara H, Minatoguchi S. Comparison between integrated backscatter intravascular ultrasound and 64-slice multi-detector row computed tomography for tissue characterization and volumetric assessment of coronary plaques. *Cardiovasc Ultrasound*. 2012;10:33. IF 1.283
- 5) Ono K, Iwama M, Kawasaki M, Tanaka R, Watanabe T, Onishi N, Warita S, Kojima T, Kato T, Goto Y, Arai M, Nishigaki K, Takemura G, Noda T, Watanabe S, Minatoguchi S. Motion of left atrial appendage as a determinant of thrombus formation in patients with a low CHADS2 score receiving warfarin for persistent nonvalvular atrial fibrillation. *Cardiovasc Ultrasound*. 2012;10:50. IF 1.283
- 6) Takeyama T, Takemura G, Kanamori H, Kawaguchi T, Ogino A, Watanabe T, Morishita K, Tsujimoto A, Goto K, Maruyama R, Ushikoshi H, Kawasaki M, Yamada K, Nikami H, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Asialoerythropoietin, a nonerythropoietic derivative of erythropoietin, displays broad anti-heart failure activity. *Circ Heart Fail*. 2012;5:274-285. IF 5.945
- 7) Warita S, Kawasaki M, Tanaka R, Ono K, Kojima T, Hirose T, Iwama M, Watanabe T, Nishigaki K, Takemura G, Noda T, Watanabe S, Minatoguchi S. Effects of pitavastatin on cardiac structure and function and on prevention of atrial fibrillation in elderly hypertensive patients: a prospective study of 2-years' follow-up. *Circ J*. 2012;76:2755-2762. IF 3.685
- 8) Kojima T, Kawasaki M, Tanaka R, Ono K, Hirose T, Iwama M, Watanabe T, Noda T, Watanabe S, Takemura G, Minatoguchi S. Left atrial global and regional function in patients with paroxysmal atrial fibrillation has already been impaired before enlargement of left atrium: velocity vector imaging echocardiography study. *Eur Heart J Cardiovasc Imaging*. 2012;13:227-234.
- 9) Hirose T, Kawasaki M, Tanaka R, Ono K, Watanabe T, Iwama M, Noda T, Watanabe S, Takemura G, Minatoguchi S. Left atrial function assessed by speckle tracking echocardiography as a predictor of new-onset nonvalvular atrial fibrillation: Results from a prospective study in 580 adults. *Eur Heart J Cardiovasc Imaging*. 2012;13:243-250.
- 10) Nakashima T, Takasugi N, Kubota T, Takasugi M, Kanamori H, Ushikoshi H, Hattori A, Aoyama T, Kawasaki M, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S. 'False-positive' intrathoracic impedance monitor alarm caused by amiodarone-induced hypothyroidism in a patient with cardiac resynchronization therapy-defibrillator. *Europace*. 2012;14:768-769. IF 3.050
- 11) Takasugi N, Kubota T, Kawamura I, Takasugi M, Kanamori H, Ushikoshi H, Hattori A, Aoyama T, Kawasaki M, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S. Sudden reversible pacemaker failure in a patient with cardiac sarcoidosis: an unfortunate case of ventricular septal pacing. *Europace*.

- 2012;14:1061-1062. IF 3.050
- 12) Kawaguchi T, Takasugi N, Kubota T, Takasugi M, Kanamori H, Ushikoshi H, Hattori A, Aoyama T, Kawasaki M, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S, Verrier RL. In-hospital monitoring of T-wave alternans in a case of amiodarone-induced torsade de pointes: clinical and methodologic insights. *Europace*. 2012;14:1372-1374. IF 3.050
 - 13) Baila B, Ohno Y, Nagamoto H, Kotosai K, Yabuuchi Y, Funaguchi N, Ito F, Endo J, Mori H, Takemura G, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Tetomilast attenuates elastase-induced pulmonary emphysema through inhibition of oxidative stress in rabbits. *Biol Pharm Bull*. 2012;35:494-502. IF 1.778
 - 14) Ono K, Iwama M, Kawasaki M, Tanaka R, Watanabe T, Onishi N, Warita S, Kojima T, Kato T, Goto Y, Arai M, Nishigaki K, Takemura G, Noda T, Watanabe S, Minatoguchi S. Motion of left atrial appendage as a determinant of thrombus formation in patients with a low CHADS2 score receiving warfarin for persistent nonvalvular atrial fibrillation. *Cardiovasc Ultrasound*. 2012;10:50. IF 1.283
 - 15) Kanamori H, Takemura G, Goto K, Tsujimoto A, Ogino A, Takeyama T, Kawaguchi T, Watanabe T, Morishita K, Kawasaki M, Mikami A, Fujiwara T, Fujiwara H, Seishima M, Minatoguchi S. Resveratrol reverses remodeling in hearts with large, old myocardial infarctions through enhanced autophagy-activating AMP kinase pathway. *Am J Pathol*. 2013;182:701-713. IF 4.602
 - 16) Yamada Y, Kobayashi H, Iwasa M, Sumi S, Ushikoshi H, Aoyama T, Nishigaki K, Takemura G, Fujiwara T, Fujiwara H, Kiso M, Minatoguchi S. Post-infarct active cardiac-targeted delivery of erythropoietin by liposomes with Sialyl Lewis X repairs infarcted myocardium in rabbits. *Am J Physiol Heart Circ Physiol*. 2013;304:1124-1133. IF 4.012
 - 17) Maeda H, Nagai H, Takemura G, Shintani-Ishida K, Komatsu M, Ogura S, Aki T, Shirai M, Kuwahira I, Yoshida KI. Intermittent-hypoxia induced autophagy attenuates contractile dysfunction and myocardial injury in rat heart. *Biochim Biophys Acta*. 2013;1832:1159-1166. IF 5.089
 - 18) Hattori A, Kawamura I, Yamada Y, Kanamori H, Aoyama T, Ushikoshi H, Kawasaki M, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S. Elevated plasma GLP-1 levels and enhanced expression of cardiac GLP-1 receptors as markers of left ventricular systolic dysfunction: a cross-sectional study. *BMJ Open*. 2013;3:e003201. IF 2.063
 - 19) Ichihara S, Yamamoto K, Asano H, Nakatochi M, Sukegawa M, Ichihara G, Izawa H, Hirashiki A, Takatsu F, Umeda H, Iwase M, Inagaki H, Hirayama H, Sone T, Nishigaki K, Minatoguchi S, Cho MC, Jang Y, Kim HS, Park JE, Tada-Oikawa S, Kitajima H, Matsubara T, Sunagawa K, Shimokawa H, Kimura A, Lee JY, Murohara T, Inoue I, Yokota M. Identification of a glutamic acid repeat polymorphism of ALMS1 as a novel genetic risk marker for early-onset myocardial infarction by genome-wide linkage analysis. *Circ Cardiovasc Genet*. 2013;6:569-578. IF 5.337
 - 20) Tanaka S, Noda T, Iwama M, Tanihata S, Kawasaki M, Nishigaki K, Minagawa T, Watanabe S, Minatoguchi S. Long-term changes in neointimal hyperplasia following implantation of bare metal stents assessed by integrated backscatter intravascular ultrasound. *Heart Vessels*. 2013;28:415-423. IF 2.109
 - 21) Watanabe T, Kawasaki M, Tanaka R, Ono K, Nishigaki K, Takemura G, Arai M, Noda T, Watanabe S, Minatoguchi S. Association among blood pressure control in elderly patients with hypertension, left atrial structure and function and new-onset atrial fibrillation: a prospective 2-years study in 234 patients. *Hypertens Res*. 2013;36:799-806. IF 2.936
 - 22) Ohi Y, Uno Y, Oohira T, Itakura K, Nishigaki K, Minatoguchi S. Cerebral microembolism following coronary angiography--a prospective comparative study between left cardiac catheterization and multidetector computed tomography-. *Intern Med*. 2013;52:1869-1874. IF 0.967
 - 23) Kawasaki M, Yoshimura S, Yamada K, Hattori A, Ishihara Y, Nishigaki K, Takemura G, Iwama T, Minatoguchi S. Carotid artery OCT in cerebral infarction. *JACC Cardiovasc Imaging*. 2013;6:1215-1216. IF 6.986
 - 24) Enomoto Y, Yoshimura S, Yamada K, Kawasaki M, Nishigaki K, Minatoguchi S, Iwama T. Silent coronary artery disease in Japanese patients undergoing carotid artery stenting. *J Stroke Cerebrovasc Dis*. 2013;22:1163-1168. IF 1.993
 - 25) Okuda J, Niizuma S, Shioi T, Kato T, Inuzuka Y, Kawashima T, Tamaki Y, Kawamoto A, Tanada Y, Iwanaga Y, Narazaki M, Matsuda T, Adachi S, Soga T, Takemura G, Kondoh H, Kita T, Kimura T. Persistent overexpression of phosphoglycerate mutase, a glycolytic enzyme, modifies energy metabolism and reduces stress resistance of heart in mice. *PLoS One*. 2013;8:e72173. IF 3.534
 - 26) Sato Y, Minatoguchi S, Nishigaki K, Hirata K, Masuyama T, Furukawa Y, Uematsu M, Yoshikawa J, Otsuji S, Iida M, Fujiwara H; SHYOGI study investigators. Design of prospective study of acute coronary syndrome hospitalization after smoking ban in public places in Hyogo prefecture: comparison with Gifu, a prefecture without a public smoking ban. *J Cardiol*. 2014;63:165-168. IF 2.566
 - 27) Iwama M, Tanaka S, Noda T, Segawa T, Kawasaki M, Nishigaki K, Minagawa T, Watanabe S, Minatoguchi S. Impact of tissue characteristics on luminal narrowing of mild angiographic coronary stenosis: assessment of integrated backscatter intravascular ultrasound. *Heart Vessels*. 2014;29:750-760. IF 2.109
 - 28) Shiraki T, Aoyama T, Yokoyama C, Hayakawa Y, Tanaka T, Nishigaki K, Sawamura T, Minatoguchi S. LOX-1 plays an important role in ischemia-induced angiogenesis of limbs. *PLoS One*. 2014;9:e114542. IF 3.534

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：竹村元三，研究分担者：金森寛充，高橋知之；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：筋線維芽細胞自家移植による大型心筋梗塞後の左室リモデリング治療；平成 24-25 年度；4,160 千円(2,080：2,080 千円)
- 2) 研究代表者：西垣和彦；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：ニコランジルを用いた慢性腎臓病合併冠動脈疾患患者に対する総合的治療法の開発；平成 24-26 年度；5,330 千円(3,250：910：1,170 千円)

2) 受託研究

- 1) 竹村元三：リプレガル特定使用成績調査(長期使用に関する調査)；平成 22-24 年度；31.5 千円：大日本住友製薬(株)
- 2) 西垣和彦：プラザキカプセル特定使用成績調査(長期使用に関する調査)；平成 23-27 年度；630 千円：日本ベーリンガーインゲルハイム(株)
- 3) 西垣和彦：クリアクター静注用 特定使用成績調査「急性肺塞栓症に対する全例調査」(第三期)；平成 23-26 年度；94.5 千円：エーザイ(株)
- 4) 西垣和彦：イオパーク注使用成績調査；平成 25-26 年度；420 千円：コニカミノルタ(株)
- 5) 西垣和彦：エリキュース錠 2.5mg, 5mg 特定使用成績調査(長期使用)；平成 25-30 年度；630 千円：ファイザー(株)
- 6) 西垣和彦：クリアクター静注用 特定使用成績調査「急性肺塞栓症に対する前例調査」(第三期)；平成 26 年度；97.2 千円：エーザイ(株)

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

竹村元三：

- 1) 日本循環器学会評議員(～現在)
- 2) 日本循環器学会東海支部評議員(～現在)
- 3) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 4) 日本心不全学会評議員(～現在)
- 5) 日本臨床分子形態学会評議員(～現在)
- 6) 心筋生検研究会幹事(～現在)
- 7) ISHR 日本部会評議員(～現在)

西垣和彦：

- 1) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本循環器学会幹事：心臓移植委員会・心臓移植適応検討小委員会(～現在)
- 3) 日本循環器学会東海支部評議員(～現在)
- 4) 日本循環器学会正会員代表(～現在)
- 5) 日本心血管インターベンション治療学会評議員(～現在)
- 6) 日本心血管インターベンション治療学会東海北陸支部代議員(～現在)
- 7) 日本心血管インターベンション治療学会専門医試験問題策定委員会委員(～現在)
- 8) 日本心不全学会評議員(～現在)
- 9) 日本心臓病学会評議員(～現在)
- 10) 日本心臓リハビリテーション学会評議員(～現在)
- 11) 日本心臓リハビリテーション学会『急性心筋梗塞の入院心臓リハビリテーション標準プログラム策定部会』委員(～現在)
- 12) 東海地区心臓移植適応症例検討会委員(～現在)

- 13) 心臓移植関連学会協議会委員(日本循環器学会代表)(～現在)
- 14) 心臓移植施設認定審議委員会委員(日本循環器学会代表)(～現在)
- 15) 冠動脈血行再建術協議会(循環器内科代表)委員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

西垣和彦：

- 1) 日本心血管インターベンション治療学会雑誌『CVIT the official journal of Cardiovascular Intervention and Therapeutics』；編集顧問(～現在)

7. 学会招待講演、招待シンポジスト、座長

竹村元三：

- 1) 第76回日本循環器学会総会・学術集会(平成24年3月, 博多, ミート・ザ・エキスパート7:心臓病理と循環器臨床のクロストーク「組織形態学の観点からどこまでわかるか?」座長と演者)
- 2) 第101回日本病理学会(平成24年4月, 東京, コンパニオン・ミーティング:今日の心臓病理学「心筋細胞の変性・細胞死をどう見るか」演者)
- 3) 第21回日本Cell Death学会(平成24年7月, 名古屋, シンポジウム4 循環器疾患と細胞死: Autophagy, apoptosis から necrosis まで「心筋細胞死をめぐる諸問題」演者)
- 4) 第77回日本循環器学会総会・学術集会(平成25年3月, 横浜, ミート・ザ・エキスパート Failing Myocardium: New Insights into its Pathophysiology “Critical Role of Ultrastructural Assessment for Cell Death and Degeneration.” 座長)

西垣和彦：

- 1) 第53回日本脈管学会総会(平成24年10月, 東京, 第4回JCACシンポジウム 脈管疾患におけるガイドラインを考える 第2部 虚血行再建術の適応に関するガイドライン2012 講演I「安定冠動脈疾患に対する待機的PCIもガイドライン」演者)
- 2) 第77回日本循環器学会総会・学術集会(平成25年3月, 横浜, ファイアサイドセミナー20 演題 3 「心腎保護を考慮したPCI治療 -Vascular Organ Protection(VOP)-」演者)
- 3) 第77回日本循環器学会総会・学術集会(平成25年3月, 横浜, 第9回心臓移植セミナー 我が国の小児心臓移植の発展に向けて 講演1「心臓移植の現況」演者)
- 4) 第22回日本心血管インターベンション治療学会(CVIT2013)(平成25年7月, 神戸, パネルディスカッション6 造影剤腎症の新しい治療#3「腎機能障害患者の造影剤腎症に対するニコランジルの持続静注投与の効果」演者)
- 5) 第19回日本心臓リハビリテーション学会(平成25年7月, 仙台, パネルディスカッション4 心臓リハビリテーションの医療職卒前・卒後教育の現状と課題「卒前教育での心臓リハビリ教育の実態～卒前教育改革部会部会 卒前教育での心臓リハビリ教育実態調査から～」演者)
- 6) 第20回日本心血管インターベンション治療学会九州・沖縄地方会(平成25年8月, 石橋, ランチョンセミナー2「今、再び注目される高純度EPA製剤 ～PCI専門医だからこそしておきたいエビデンス～」演者)
- 7) 第49回日本移植学会総会(平成25年9月, 京都, ワークショップ10.心移植候補症例における術前臓器機能評価.「心臓移植レシピエント候補者における臓器障害評価の現況」演者)
- 8) 第61回日本心臓病学会学術集会(平成25年9月, 熊本, モーニングレクチャー4「安定冠動脈疾患に対する待機的PCIのガイドラインを活かす」演者)
- 9) 第61回日本心臓病学会学術集会(平成25年9月, 熊本, ファイアサイドシンポジウム5冠攣縮の最新知見 講演1「冠攣縮性狭心症の治療と予後」演者)
- 10) 日本心血管インターベンション治療学会第30回東海北陸地方会(平成25年10月, 静岡, シンポジウムI「冠動脈複雑病変のインターベンション」講演1『冠動脈複雑病変のインターベンションとPCIガイドライン～その正しい解釈』演者)
- 11) 第78回日本循環器学会学術集会(平成26年3月, 東京, 第10回心臓移植セミナー「心臓移植レシピエントの登録希望者における補助人工心臓使用の現状と問題点 ～日本循環器学会心臓移植委員会報告」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

各分野での研究が順調に進行し、一流のジャーナルに出版され、国際学会での発表も多かった。2014年は英文論数10でインパクトファクターの合計29.779であった。

現状の問題点及びその対応策

多数の大学院生や研究者を抱え、デスクやスペースを確保することに困難している。また臨床、教育、研究のいずれにも時間を費やすため、研究に十分な時間があるとは言い難い。

今後の展望

高齢化ならびに生活様式の欧米化に伴い、循環器疾患、呼吸器疾患、腎臓疾患は増加の一途を辿っている。それぞれの病気のメカニズムを動物実験、臨床研究を通じて解明し、治療に応用していくことが重要である。今後、循環器疾患、呼吸器疾患、腎臓疾患の分野において細胞死ならびに細胞変性（アポトーシス、オートファジー等）、細胞を再生する再生医学などがますます重要な研究テーマとなることが予想される。従って我々はこの点を十分認識し、細胞生物学的手法を駆使し新しいデバイスを導入して、さらに活発な研究活動を行っていかなくてはならないと考える。

(2) 医学系倫理・社会医学分野

1. 研究の概要

当分野は、再生医科学を含む医学・医療全般に関する倫理的諸問題について継続して研究してきた。そして各領域について著作等を通じて情報発信を行ってきた。大学院および学部教育においても最新の生命倫理に関するトピックを収集し、講義、教育に努めてきた。

本点検・評価報告に係る当該年度の研究の概要としては、まず、医事法領域に関する研究として、災害医療に関して、指揮命令体制に基づく医療体制構築のための法的・倫理的・社会的問題について取り上げた。災害対策基本法にある支援体制の在り方について法的な視点から検討、考察を行った。当該研究については、競争的研究資金として地域志向学プロジェクト（平成 26 年度；400 千円）を受けた。また、医療政策領域に関する研究として、がん診療連携拠点病院制度に関する諸問題について引き続き検討を試みた。特に医療社会学の視点から、医療を共有地とみなすコモンズ理論に着目し、がん診療連携拠点病院の医療提供の在り方や意思決定の在り方に関する研究を行った。当該研究については、学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究（平成 23・24 年度；520 千円）の助成を受けて実施した。概ね 2 つの領域に分けて実施してきたが、スタッフ間でコミュニケーションを取りながら一貫して倫理的・法的・社会的問題 (ELSI: ethical, legal and social issues) の視点に立って研究を進めることができた。今後も継続して研究活動を行っていく。

2. 名簿

教授： 塚田敬義 Yuki Yoshi Tsukata
併任講師： 谷口泰弘 Yasuhiro Taniguchi

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 谷口泰弘、バイオエシックスの進展：竹内豊英，野村幸弘編集，教養ブックレット Vol.4 世紀の発明・発見 初版，岐阜：株式会社みらい；2012 年；88-89.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 谷口泰弘、コモンズとしてのがん診療連携拠点病院の役割—正義論の視点から—，社会医療研究 2012 年；10 卷：3-9.
- 2) 谷口泰弘、新型出生前診断についての倫理と技術の公共性，社会医療研究 2013 年；11 卷：11-18.
- 3) 塚田敬義、移植療法と法律的問題，診断と治療 2014 年；102 卷：1465-1475.
- 4) 谷口泰弘、再生医療推進の議論からみた政策的課題への一考察，社会医療研究 2014 年；12 卷：3-10.

原著（欧文）

なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：谷口泰弘；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：がん集学治療体制の構築からみるコモンズ理論の発展と応用に関する研究；平成 23-24 年度；520 千円(260：260 千円)
- 2) 研究代表者：塚田敬義；地域志向学プロジェクト(研究プロジェクト B)：指揮命令体制に基づく災害医療体制構築のための法的・倫理的・社会的問題についての研究；平成 26 年度；400 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

塚田敬義：

- 1) 日本社会医療学会理事(～現在)
- 2) 日本再生医療学会評議員(～平成 24 年 9 月)
- 3) 日本再生医療学会代議員(平成 24 年 10 月～現在)
- 4) 一般社団法人日本移植学会代議員(～現在)
- 5) 日本生命倫理学会評議員(～平成 26 年 10 月)
- 6) 日本 DNA 多型学会代議員(平成 26 年 11 月～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

塚田敬義：

- 1) 日本 DNA 多型学会誌；編集委員(平成 26 年 11 月～現在)

7. 学会招待講演、招待シンポジスト、座長

塚田敬義：

- 1) 独立行政法人産業技術総合研究所生命倫理教育訓練講習会(平成 24 年 2 月，つくば，教育講演「医学・工学研究倫理講習「臨床研究倫理指針を中心にして」演者」)
- 2) 社会医療法人厚生会木沢記念病院倫理研修会(平成 24 年 6 月，美濃加茂，教育講演「医療者が心得ておくべき医学倫理」演者)
- 3) 財団法人岐阜県鍼灸マッサージ師会創立 70 周年記念「市民健康講座」(平成 24 年 9 月，岐阜，特別講演「医の倫理－医療の知っておくべき一般知識」演者)
- 4) 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科ヒト ES 細胞の取扱いにかかる講習会(平成 24 年 9 月，鹿児島，講演「ヒト ES 細胞及びヒト iPS 細胞の取扱いにかかる倫理的事項」演者)
- 5) 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科ヒト ES 細胞の取扱いにかかる講習会(平成 24 年 9 月，鹿児島，講演「①ヒト ES 細胞の樹立及び使用に関する指針の背景，目的及び内容について ②ヒト ES 細胞の取扱いにかかる倫理的事項について」演者)
- 6) 第 22 回日本医療薬学会年会(平成 24 年 10 月，新潟，シンポジウム「倫理審査委員会と薬剤部の連携をめざして－適応外使用をきっかけにして」座長)
- 7) 第 21 回日本柔道整復接骨医学会学術大会(平成 24 年 11 月，福岡，講演「最近の日本での“医の倫理”をめぐる変化について」演者)
- 8) 平成 24 年度岐阜大学公開講座「医療マネジメント講座」(平成 24 年 12 月，岐阜，ラウンド・ディスカッション「地域医療連携の推進を目指して－EMR/HER から PHR へ，そして安心・安全な運用のために－」コメンテーター)
- 9) 第 38 回 CNP 研究会「実践！臨床栄養技能スキルアップセミナー」(平成 24 年 12 月，犬山，講演「医療従事者の研究に必要な生命倫理の知識」演者)
- 10) 社団法人岐阜県獣医師会平成 24 年度学術研修会(平成 25 年 1 月，岐阜，講演「獣医師と生命倫理」演者)
- 11) 伊賀塾(平成 25 年 4 月，伊賀，特別講演「白熱塾 5 医学研究と医療実践－サイエンスとアート－」座長)
- 12) 日本社会医療学会第 14 回学術大会(平成 25 年 10 月，延岡，特別講演「これからの医療・保健・福祉には何が必要か－一個のバイオエシックスと集団のバイオエシックスの視点から－」演者)
- 13) 日本社会医療学会第 14 回学術大会(平成 25 年 10 月，延岡，シンポジウム「各専門職の視点から－これからの医療・保健・福祉には何が必要か」座長)

- 14) 碧南市民病院倫理研修会(平成 26 年 1 月, 碧南, 教育講演「医の倫理をめぐる最近の動向」演者)
- 15) 九州保健福祉大学 FD 研修会(平成 26 年 2 月, 延岡, 講演「疫学研究及び臨床研究の倫理指針とその遵守の必要性について」演者)
- 16) 社会医療法人厚生会木沢記念病院倫理研修会(平成 26 年 5 月, 美濃加茂, 教育講演「医学倫理をめぐる最近の動向」演者)
- 17) 岐阜薬科大学生命倫理特別講演会(平成 26 年 6 月, 岐阜, 講演「生命倫理と審査のポイント」演者)
- 18) 第 49 回医学系大学倫理委員会連絡会議(平成 26 年 7 月, 岐阜, シンポジウム「倫理委員会の現状と問題点—アンケート調査より」座長)
- 19) 鹿児島大学大学院歯学総合研究科ヒト ES 細胞の取扱いにかかる講習会(平成 26 年 9 月, 鹿児島, 講演「ヒト ES 細胞及びヒト iPS 細胞の取扱いにかかる倫理的事項」演者)
- 20) 第 50 回日本医学放射線学会秋季臨床大会(平成 26 年 9 月, 神戸, 教育講演「日本における臨床倫理の倫理的法的問題」演者)
- 21) 近江八幡市立総合医療センター倫理研修会(平成 26 年 12 月, 近江八幡, 教育講演「臨床研究等倫理観や信憑性について」演者)

谷口泰弘 :

- 1) 平成 24 年度岐阜大学出前講義(平成 24 年 5 月, 江南, 講演「ライフサイエンスと生命倫理の交差点」演者)
- 2) 平成 26 年度平成医療短期大学倫理講習会(平成 26 年 6 月, 岐阜, 講演「研究の倫理について」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 谷口泰弘 : 日本社会医療学会学術功労賞(平成 25 年度)

9. 社会活動

塚田敬義 :

- 1) 日本遺伝子診療学会倫理問題委員会委員(～現在)
- 2) 日本移植学会倫理委員会委員(～現在)
- 3) 日本膝・膝島移植研究会世話人・倫理委員会委員(～現在)
- 4) 近畿膝移植検討会世話人(～現在)
- 5) 財団法人がん集学的治療研究財団評議員・倫理委員会委員長(～現在)
- 6) 滋賀医科大学動物生命科学研究倫理委員会委員(～現在)
- 7) 独立行政法人産業技術総合研究所医工学応用実験倫理委員会副委員長(～現在)
- 8) 岐阜県保健所等倫理審査委員会委員長(～現在)
- 9) 日本法医学会医の倫理審査委員会委員(～現在)
- 10) 東洋療法研修試験財団第 8 期あん摩マッサージ指圧師, はり師及びきゅう師試験委員(～平成 26 年 7 月)
- 11) 岐阜県医師会治験(倫理)審査委員会委員(～現在)
- 12) 岐阜東洋医学研究会世話人(～現在)
- 13) 日本手の外科学会倫理委員会アドバイザー(～現在)
- 14) 社団法人日本整形外科学会脊椎内視鏡下手術・技術認定制度委員会アドバイザー(～現在)
- 15) 鹿児島大学大学院歯学総合研究科ヒト ES 細胞研究倫理委員会委員(～現在)
- 16) 京都大学再生医科学研究所物質・細胞統合システム拠点及び iPS 細胞研究所合同医の倫理委員会委員(～現在)
- 17) 日本医学教育学会医学教育のあり方特別委員会倫理委員会委員(～平成 24 年 5 月)
- 18) 医学系大学倫理委員会連絡会議—あり方検討委員会委員(～現在)
- 19) 公立学校共済組合東海中央病院倫理委員会外部委員(～現在)
- 20) 日本臨床腎移植学会利益相反委員会委員(平成 24 年 3 月～現在)
- 21) 日本 DNA 多型学会倫理委員会副委員長(平成 24 年 8 月～現在)
- 22) 滋賀医科大学霊長類研究に関するバイオセーフティ委員会委員(平成 24 年 4 月～現在)
- 23) 朗源会ウエルフェアグループ(おおくま病院・おおくまセントラル病院)ヒト幹細胞臨床研究倫理審査委員会委員(平成 25 年 3 月～平成 26 年 11 月)
- 24) 中部先端医療開発円環コンソーシアム共同倫理審査委員会委員(平成 26 年 4 月～現在)
- 25) 滋賀医科大学倫理委員会委員(平成 26 年 4 月～現在)

- 26) 滋賀医科大学遺伝子解析研究倫理委員会委員(平成 26 年 4 月～現在)
- 27) 一般社団法人日本静脈経腸栄養学会倫理委員会外部委員(平成 26 年 4 月～現在)
- 28) 公益社団法人岐阜県看護協会研究倫理審査委員会委員長(平成 26 年 6 月～現在)

10. 報告書

- 1) 谷口泰弘：がん集学的治療体制の構築からみるコモンズ理論の発展と応用に関する研究：平成 23 年度科学研究費補助事業(学術研究助成基金助成金 挑戦的萌芽研究) 総括：1(平成 24 年 3 月)
- 2) 谷口泰弘：がん集学的治療体制の構築からみるコモンズ理論の発展と応用に関する研究：平成 24 年度科学研究費補助事業(学術研究助成基金助成金 挑戦的萌芽研究) 研究成果報告書：1-4(平成 25 年 5 月)
- 3) 塚田敬義：倫理審査の充実をめざして：財団法人がん集学的治療研究財団第 3 期 10 年の歩み記念誌：40(平成 25 年 3 月)

11. 報道

- 1) 谷口泰弘：生命倫理学の浸透を目指す：岐阜新聞朝刊(研究者はいま)(2014 年 11 月 4 日)

12. 自己評価

評価

研究概要に示したとおり、当分野で掲げた目標に向かってスタッフ各自が研究テーマ毎に継続して研究活動に取り組んできた。学問的な性質から共同研究形式で進める機会は少なく、著作数は少ないが、質の良いものを継続して活字媒体にて発信できるよう、当該分野の方針としている。また、2 人という少ないマンパワーながら、当該領域としては国からの科学研究費補助金（学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究）や競争的外部資金を獲得し、継続して研究活動を行えたこと、また、所属学会から学術活動について表彰されたことから判断して、現状に満足するわけではないがある程度自己目標を達成できたと自己点検・評価する。

現状の問題点及びその対応策

当分野が行う研究は、分野スタッフの専門領域を反映して人文・社会科学の視点から生命倫理に係る諸問題について考察を深めている。所属研究機関が医学系研究科ということもあり、直接的に研究面で他の領域と共同する機会が少ないことから研究機関内での発信力は決して強くはないと言える。しかし、医学研究における生命倫理の視点は今や欠かすことのできない重要課題として挙げられていることから、倫理講習の機会等を含めて何らかの形で機関内でのコミュニケーションを活発に行っていく所存である。特に平成 26 年 12 月に公布された「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に沿った講習、さらには大学院講義・学部教育において研究倫理・臨床倫理に関する知識を学内に還元できるよう配慮していく所存である。

今後の展望

医学・医療の進展はめざましい。生命倫理領域の学問的進歩もその流れに遅れることのないよう、しっかりと研鑽を積んでいきたい。近時は、科学者の研究不正や利益相反にも社会の関心が高まっている。研究倫理等を含めた広義の生命倫理学を学究し、得られた知見を所属機関や社会一般に還元できるように研究と教育に取り組んでいく。そのためにも、学会活動や倫理委員会などの社会活動、さらに講演や出前講義などを継続的かつ精力的に取り組んでいく。

7. 学位の授与状況と研究成果

再生医科学専攻において過去5年間に博士（再生医科学）の学位を授与した数は、次表のとおりである。

区分	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
課程博士	3	6	7	2	2
論文博士	0	1	2	1	1

8. 学生生活支援

(1) 奨学金の申請・採択状況

○日本学生支援機構奨学生出願・採用状況

年 度	課 程	第1種		第2種	
		出願者数	採用者数	出願者数	採用者数
平成20年度	博士前期	1	1	0	0
	博士後期	0	0	0	0
平成21年度	博士前期	2	2	0	0
	博士後期	1	1	1	1
平成22年度	博士前期	6	6	4	4
	博士後期	2	2	0	0
平成23年度	博士前期	4	4	0	0
	博士後期	1	1	0	0
平成24年度	博士前期	5	5	1	1
	博士後期	0	0	0	0
平成25年度	博士前期	4	4	2	2
	博士後期	0	0	0	0

(2) 授業料免除実施状況

年 度	課 程	在籍者数	前学期			後学期		
			申請	免除		申請	免除	
				全額	半額		全額	半額
平成20年度	博士前期	31	6	0	6	6	0	6
	博士後期	55	9	4	3	8	4	4
平成21年度	博士前期	25	1	0	0	0	0	0
	博士後期	46	9	3	6	10	3	7
平成22年度	博士前期	28	2	0	2	2	0	2
	博士後期	51	9	3	6	8	3	4
平成23年度	博士前期	27	6	1	3	4	1	3
	博士後期	22	9	5	2	7	4	2
平成24年度	博士前期	20	3	1	2	3	1	2
	博士後期	17	5	4	0	5	4	0
平成25年度	博士前期	20	4	1	1	5	0	3
	博士後期	14	5	3	2	5	3	2

9. 自己評価・課題と展望

① 教員組織の強化と自己評価の徹底

平成 16 年 6 月に新築された医学部・附属病院への移転に伴い、再生医科学専攻の全教員が同一フロアに集まり、密接な協力が実施可能な態勢もできた。一方、医学系研究科における教員数の絶対的不足は深刻であり、教員数の増員が必要である。

また、自己点検を基礎としつつ、修了生の活動状況等の検証を行い、再生医科学専攻としての自己点検・評価を行わねばならない。

② 研究機能の充実

課題と解決方策については以下のとおりである。

- 1) 若手教員の育成：若手教員が先見性をもってユニークな研究に取り組む体制を作る。そのため、国内並びに国外の研究機関と共同研究を行い、かつ積極的に人事の交流を行う。
- 2) 大学院学生の研究機能の充実：再生医科学専攻の研究機能はかなり充実してきており、国際的一流誌への投稿を目指す。
- 3) 研究費の充実、大型設備の整備：現在も文部科学省、厚生労働省等から大型研究費を得ている教員もいるが、より一層の獲得を目指し、大型設備等の充実を図る。平成 23 年度には先端医療セルプロセッシングセンター及び微生物遺伝資源保存センターを設置した。

また、共通機器センターが設置され、導入された大型機器が再生医科学及び医科学専攻を問わず多くの研究者や大学院生によって活用されている。

③ 教育機能の充実

大学院教育はグローバル化の時代にあわせた人材教育が必要になっている。インターネット・ホームページを介した新しい 21 世紀的大学院教育の開発と充実を行う一方、国際的な研究者との交流だけでなく、在学期間中に国際会議への参加を支援し、かつ義務化させるために、下記のような具体的な教育体制の改革を進めている。

- 1) 英語による専門家の講演を聴講させる機会を増やし、履修単位として取り組む。
病原体制御、神経生物、組織・器官発生、遺伝情報創薬、医用情報処理の各分野でコースの専門教育の 2・3 回を英語による講義を組みこみ、全員が聴講するシステムを構築する。
- 2) 大学院修了までに国際学会での発表を推進し、かつ旅費の一部を支援する体制を構築する。

[医学系研究科看護学専攻]

1. 教育の理念, 目標

看護学専攻では、近年の医療への社会的要請が多様化するなかで、専門性が高く質のよいサービスを提供するために、高い倫理観や科学的思考力を育てるとともに、学際的視野を広げ、看護学と看護実践場面での課題を自発的に・具体的に研究し、質の高い看護の実践能力を有する看護専門職業人を育成することを目的としている。

ディプロマ・ポリシー（教育目標）として、次のような能力を有する修了生の輩出を目指す。

1. 看護学教育及び実践看護学に関する課題を追求していける研究能力
2. あらゆる人々の健康と福祉の充実を目指し、看護学を探究する高度な看護実践能力
3. 看護学教育を体系的に理解し、教育できる教育実践能力
4. 看護専門職としてリーダー的役割を担い、保健医療福祉の変化に対応し行動できる看護マネジメント能力

2. 看護学専攻の構成

看護学専攻の教育理念のもとに、看護学専攻には「看護学教育」と「実践看護学」の2領域を設け、看護学教育領域には継続看護学教育分野を、実践看護学領域には母子看護学分野、成人看護学分野、地域健康援助学分野の3分野を設けている。

(1) 看護学教育領域

看護学教育領域では、質の高い看護実践者が求められている中で、看護専門職の育成における教育理論と方法を探究し、高度な教育実践能力を育成するために必要な知識、技術、態度の探究を中心とした教育・研究を行う。

継続看護学教育分野を置き、望ましい看護基礎教育、看護技術教育及び継続教育のあり方を探究する。また、生体システム学専門分野においては、生体構造と機能及び遺伝情報などについての教育・研究を行う。

(2) 実践看護学領域

実践看護学領域では、生殖医療や高次救命治療の高度先進医療が進む中で、患者主体の医療・看護とは何かを考察しながら、エビデンスに基づいた質の高い看護援助論について探究する。また、地域の人々に対する保健活動や在宅療養者とその家族を対象とした、広領域な看護分野における看護援助論について探究する。

本領域では、母子看護学分野、成人看護学分野、地域健康援助学分野の3分野を置き、様々な環境にある患者やその家族に対する看護援助、地域や職場の人々のヘルスケア等について探究する。

3. 学生定員と入学状況

看護学専攻の入学定員、収容定員及び過去5年間の入学状況は、次表のとおりである。平成22年度より1名ではあるが定員割れが起こり、その後平成26年度入学生まで続いていた。これを受け、平成26年度においては、定員確保を目指し、広報活動等を精力的に行い、その成果として、平成27年度は9名が入学する見込みである。

看護学専攻の入学定員と収容定員

研究科	専攻	課程	入学定員	収容定員
医学系研究科	看護学専攻	修士課程	8	16

看護学専攻の入学状況

年 度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
入学定員	8	8	8	8
志願者数	8	9	6	4
受験者数	8	9	6	4
合格者数	7	6	3	2
入学者数	7	6	3	2

4. カリキュラムの編成方針

看護学専攻（修士課程）の教育課程は、生涯を通じ専門職業人として看護学への追初心や創造性、応用性を重視した看護活動ができるように、臨地実践能力をもった看護職及び基礎的研究能力をもった看護職、看護教育能力をもった看護職を育成することを目指して編成されている。

授業科目は、共通科目と専門科目から成り、学生が主体的に看護活動の実践・教育に必要な基礎的能力が修得できるように科目設定を行っている。

共通科目は、看護専門領域研究の基礎となる科目として、看護学研究方法論、看護理論の 2 科目を必修として設定し、さらに生命倫理・医療倫理学、医療・福祉の経済論、看護マネジメント論など 12 科目を選択として設定している。専門科目は看護学教育、実践看護学の各領域の専門にかかる理論・研究・実践の諸概念に関する科目として特論、特別演習、特別研究を設定している。

また、実践活動に携わっている看護職が、専門職業人として学習ができるように、昼夜開講制を実施し、長期履修にも対応できるようにカリキュラム編成を行い、多様な人材育成の目的に対応している。

(1) 履修基準

本専攻における授業科目は必修科目及び選択科目で構成され、修了に必要な単位数は、30 単位以上となっている。

また、共通科目、専門科目の最低履修単位数は次表のように規定されている。

課程修了に必要な単位数

科 目 区 分		最低履修単位数	備 考
共 通 科 目		12 単位	必修科目 4 単位 選択科目 8 単位以上
専 門 科 目	専攻する分野の 開 講 科 目	14 単位	専門分野の必修科目 12 単位 選択科目 2 単位以上
	自由選択科目	4 単位	専攻する分野を問わず、4 単位以上 ただし、特別演習及び特別研究 I・II を除く
合 計		30 単位	

(2) 教育研究分野, 指導教員

看護学専攻における各領域別の教育研究分野, 指導教員, 主な研究内容は次表のとおりである。

研究指導教員及び研究内容

平成 24 年度

分野	専門分野	氏 名	指 導 内 容
継続看護学教育	看護学教育	滝内 隆子	看護基礎教育及び看護継続教育における教育プログラムの開発研究を行う。また、看護技術教育について理解し、看護専門職の看護実践能力育成に対する効果的な技術教育の方法について開発・研究を行う。
		小松 妙子	看護学教育・看護活動において、より安全で根拠に基づいた看護技術を修得・実践できるよう、安全性や根拠に課題のある看護技術の適切な教育内容・方法に関する研究を行う。
	生体システム学	江村 正一	主に看護教育機関の教員を対象に生体の構造と機能との関係について、電子顕微鏡を使用したミクロの世界に関する研究指導を行う。
		武藤 吉徳	細胞分裂や細胞周期制御タンパク質の遺伝子レベルでの機能解析を行い、各種遺伝子病との関連を考察するための研究指導を行う。また、これらの研究の手順や成果を、看護の基礎領域の教育に資するための指導を行う。
母子看護学	母性看護学	大原 良子	周産期周辺の女性・家族への看護援助、リプロダクティブヘルスや助産師教育に関する研究を行う。
	小児看護学	杉浦 太一	新生児から思春期までの子どもと家族を対象に、主に慢性的な健康障害をもつまたは健康障害の可能性の高い子どもとその家族がより良い生活を送るための看護援助に関する研究指導を行う。
成人看護学	成人急性期看護学	松田 好美	救急看護、手術療法や集学的治療を受ける癌患者とその家族を対象とした看護、及びクリティカルケアに関する研究指導を行う。
		西本 裕	スポーツ看護の役割と機能に関する研究、特に障害者スポーツにおける医療上の問題を対象とした研究を指導する。
	成人慢性期看護学	足立 久子	慢性疾患患者その家族を対象に、患者の自己管理を促すあるいは継続するための看護のあり方などに関する研究の指導を行う。
地域健康援助学	地域看護学	石原 多佳子	地域に住む人々の保健、福祉領域における地域看護活動に関する研究、特に高齢者やその家族を対象とした研究指導を行う。
	精神看護学	奥村 太志	メンタルヘルス、精神保健医療の領域において看護職として適切なケアを提供するための基礎となる研究指導を行う。
		杉浦 浩子	メンタルヘルスの諸問題やそれらに対する看護介入に関して、コミュニケーションや対人関係の視点から課題を捉えて、研究指導を行う。
老年看護学	松波 美紀	高齢者とその家族の健康、心、生活のあり方について理解し、看護職に求められているケアに関する研究指導を行う。	

平成 25 年度

分野	専門分野	氏 名	指 導 内 容
継続看護学教育	看護学教育	滝内 隆子	看護専門職の看護実践能力育成に対する効果的な技術教育に関する研究指導を行う。また、看護技術史・看護教育に関する研究指導を行う。
		小松 妙子	看護学教育・看護活動において、より安全で根拠に基づいた看護技術を修得・実践できるよう、安全性や根拠に課題のある看護技術の適切な教育内容・方法に関する研究を行う。
	生体システム学	江村 正一	主に看護教育機関の教員を対象に生体の構造と機能との関係について、電子顕微鏡を使用したミクロの世界に関する研究指導を行う。
		武藤 吉徳	細胞分裂や細胞周期制御タンパク質の遺伝子レベルでの機能解析を行い、各種遺伝子病との関連を考察するための研究指導を行う。また、これらの研究の手順や成果を、看護の基礎領域の教育に資するための指導を行う。
母子看護学	母性看護学	大原 良子	周産期周辺の女性・家族への看護援助、リプロダクティブヘルスや助産師教育に関する研究を行う。
	小児看護学	杉浦 太一	新生児から思春期までの子どもと家族を対象に、主に慢性的な健康障害をもつまたは健康障害の可能性の高い子どもとその家族がより良い生活を送るための看護援助に関する研究指導を行う。
		田中 千代	子どもと家族を対象とした看護、特に長期的・継続的に医療を要する子どもとその家族への看護に関する研究指導を行う。
成人看護学	成人急性期看護学	松田 好美	救急看護、手術療法や集学的治療を受ける癌患者とその家族を対象とした看護、及びクリティカルケアに関する研究指導を行う。
		西本 裕	スポーツ看護の役割と機能に関する研究、特に障害者スポーツにおける医療上の問題を対象とした研究を指導する。
		高橋 由起子	集中ケア、周手術期、臓器移植など、クリティカルケアを必要とする患者及びその家族を対象とした看護に関する研究指導を行う。
	成人慢性期看護学	足立 久子	慢性疾患患者その家族を対象に、患者の自己管理を促すあるいは継続するための看護のあり方などに関する研究の指導を行います。
地域健康援助学	地域看護学	石原 多佳子	地域に住む人々の保健、福祉領域における地域看護活動に関する研究、特に高齢者やその家族を対象とした研究指導を行う。
	精神看護学	奥村 太志	メンタルヘルス、精神保健医療の領域において看護職として適切なケアを提供するための基礎となる研究指導を行う。
		杉浦 浩子	メンタルヘルスの諸問題やそれらに対する看護介入に関して、コミュニケーションや対人関係の視点から課題を捉えて、研究指導を行う。
	老年看護学	松波 美紀	高齢者への深い理解を背景に、高齢者が直面する健康問題や看護の課題をとらえて、研究の指導を行う。

平成 26 年度

分野	専門分野	氏 名	指 導 内 容
継続看護学教育	看護学教育	滝内 隆子	看護専門職の看護実践能力育成に対する効果的な技術教育に関する研究指導を行う。また、看護技術史・看護教育に関する研究指導を行う。
		小松 妙子	看護学教育・看護活動において、より安全で根拠に基づいた看護技術を修得・実践できるよう、安全性や根拠に課題のある看護技術の適切な教育内容・方法に関する研究を行う。
	生体システム学	江村 正一	主に看護教育機関の教員を対象に生体の構造と機能との関係について、電子顕微鏡を使用したミクロの世界に関する研究指導を行う。
		武藤 吉徳	細胞分裂や細胞周期制御タンパク質の機能解析や、バイオインフォマティクス (Bioinformatics) による分子進化の解析などについて研究指導を行う。
母子看護学	母性看護学	大原 良子	周産期周辺の女性・家族への看護援助、リプロダクティブヘルスや助産師教育に関する研究を行う。
	小児看護学	杉浦 太一	新生児から思春期までの子どもと家族を対象に、主に慢性的な健康障害をもつまたは健康障害の可能性の高い子どもとその家族がより良い生活を送るための看護援助に関する研究指導を行う。
		田中 千代	子どもと家族を対象とした看護、特に長期的・継続的に医療を要する子どもとその家族への看護に関する研究指導を行う。
成人看護学	急性期看護学	松田 好美	救急看護、手術療法や集学的治療を受ける癌患者とその家族を対象とした看護、及びクリティカルケアに関する研究指導を行う。
		西本 裕	スポーツ看護の役割と機能に関する研究、特に障害者スポーツにおける医療上の問題を対象とした研究を指導する。
		高橋 由起子	集中ケア、周手術期、臓器移植など、クリティカルケアを必要とする患者及びその家族を対象とした看護に関する研究指導を行う。
	慢性期看護学	足立 久子	慢性疾患患者その家族を対象に、患者の自己管理を促すあるいは継続するための看護のあり方などに関する研究の指導を行います。
地域健康援助学	地域看護学	石原 多佳子	地域に住む人々の保健、福祉領域における地域看護活動に関する研究、特に高齢者やその家族を対象とした研究指導を行う。
	精神看護学	奥村 太志	メンタルヘルス、精神保健医療の領域において看護職として適切なケアを提供するための基礎となる研究指導を行う。
		杉浦 浩子	メンタルヘルスの諸問題やそれらに対する看護介入に関して、コミュニケーションや対人関係の視点から課題を捉えて、研究指導を行う。
	老年看護学	松波 美紀	高齢者への深い理解を背景に、高齢者が直面する健康問題や看護の課題をとらえて、研究の指導を行う。

5. 教育活動

(1) 教育活動の実施内容と方法

看護学専攻では、実践科学としての看護学を探究する能力とともに、全人的医療を担い得る豊かな感性と人間性を備えた高度な臨地実践能力をもった看護職及び、看護教育能力をもった看護職を育成することを目指して次のような教育活動を行っている。

- ① 看護学教育領域においては、看護専門職の育成における教育理論と方法を探究し、高度な教育実践能力を育成するために必要な知識、技術、態度の探求を中心とした教育・研究を行い、望ましい看護基礎教育、看護技術教育及び継続教育のあり方を探求している。また、看護基礎教育に必須な人体構造や機能、遺伝情報などについての教育・研究を行っている。
- ② 実践看護学領域においては、患者主体の医療・看護とは何かを考察しながら、エビデンスに基づいた質の高い看護援助論について探求している。また、地域の人々に対する保健活動や在宅療養者とその家族を対象とした、広範囲の看護分野における看護援助論について探求し、様々な環境にある患者やその家族に対する看護援助、地域や職場の人々のヘルスケア等について探求している。
- ③ 教育方法は、各看護学分野の内容を深め、幅広い知識を修得させるために、専任教員及び非常勤講師によるオムニバス形式を多く採用し教授している。また講義で修得した知識をもとに、応用・展開・評価し得る高度な専門職業人を育成するために、学内及び地域社会、臨床の場で実習を行い、専門技術や態度を教授している。
- ④ 入学後にオリエンテーションを実施し、カリキュラムの概要、履修に伴う諸手続、学生生活、学生保険、健康診断、各種相談窓口、図書館等について説明し、学習への動機づけを図りながら履修指導を行っている。併せて各専門領域の教員紹介を行い、研究内容について説明している。また、特別研究指導は、原則として学生が選択した該当専門分野を担当する教授等が行うが、より充実した研究指導ができるように学生と面接の上、指導教員を決定している。
- ⑤ 大学院学生が質の高い修士論文を作成するために、「研究計画発表会」として年に2回、研究計画を発表する場を設けている。その後「岐阜大学大学院医学系研究科看護学専攻修士論文倫理審査小委員会」において研究倫理の視点から審査を行い、研究計画書の質を一層高め、研究に取り組めるように助言・指導を行っている。
- ⑥ 社会人学生の修学を可能にするために長期履修制度を導入している。希望する者には、長期履修申請書及び長期履修計画書を提出させ、各分野において面接等により長期履修を希望する理由を聞き指導している。その後看護学専攻学務委員会・看護学専攻教授会議の審議を経て、許可している。
現在、長期履修の許可を受けている大学院学生の人数は、次表のとおりである。

長期履修制度の申請者数及び許可者数

	申請者数	許可者数	備 考
平成 24 年度入学生	4	4	保健師 1, 短期大学教員 2, 専門学校教員 1
平成 25 年度入学生	2	2	看護師 1, 短期大学教員 1
平成 26 年度入学生	2	2	保健師 1, 短期大学教員 1

6. 学位の授与状況と研究成果

看護学専攻における学位の授与は、本研究科に2年以上（標準）在学し、修士論文を作成・提出し、審査に合格した学生に修士（看護学）の学位を授与することになっている。25年度までに、55名に対し学位を授与した。

区 分	23 年度	24 年度	25 年度	備 考
修士（看護学）	6(3)	10(9)	7(5)	()は長期履修学生を内数で示す。

7. 学生生活支援

(1) 奨学金の申請・採択状況

ほとんどの学生が社会人ということもあり、平成 24 年度における日本学生支援機構第 1 種奨学金の 1 名の申請・採用以外は無かった。

(2) 授業料免除実施状況

ほとんどの学生が社会人ということもあり、申請件数は少ないが、平成 25 年度に 3 名（前学期 2 名、後学期 1 名）が申請し、2 名（前学期 1 名、後学期 1 名）が全額免除として採択された。

(3) 学生の保険加入

日本看護学校共済会の看護学校総合補償制度に、各学生が任意で加入している。研究や授業で、賠償責任を負うようなことが考えられる場合は、加入を勧めている。

8. 自己評価・課題と展望

看護を含めた医療技術の発展に伴って、より高度な看護の知識や技術が求められている現在、実践科学としての看護学を探究する能力を有する看護専門職業人の育成が急務である。しかしながら、これまで看護学専攻への入学者のほとんどが、短期大学、専修学校、各種学校等の卒業者で、本研究科において個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者である。こうした人たちへの再教育の場としての必要性もあるが、看護系 4 年制大学を卒業と同時に大学院に入学し、さらに高度な看護の知識や技術を学ぶことも大切なことである。したがって、看護系 4 年制大学および本看護学科卒業生の入学者としての確保が今後の課題である。さらに、本看護学専攻設置以来、平成 23 年度入試まで募集人員 8 名に対して入学者を確保してきたが、最近受験者が減少し平成 24 年度入試は 7 名の応募に対して 5 名の合格者であった。また、平成 24 年度入試は初めて 2 次募集を実施し、以降 2 次募集が続いている。したがって、平成 26 年度においては、今後の対策としてこれまで以上に魅力ある教育内容に改善すると共に、看護学専攻を修了することによりどのようなメリットを生み出せるか、そのために新たな資格を含めどのようなことが必要であるか検討を進めている。（看護系大学の教員養成、看護管理者養成等）。併せて本看護学専攻に関する広報活動としてホームページの充実、説明会の開催、施設訪問なども積極的に実施していく。

各分野の自己評価・課題と展望は次のとおりである。

(1) 看護学教育領域

① 継続看護学教育分野

継続看護学教育分野では、看護専門職育成に必要な教育理論と方法の探求をめざし、高度な看護教育実践能力の育成と、看護基礎教育や看護継続教育に貢献できる人材の育成を目標としている。そこで、看護基礎教育と看護継続教育の関連性をふまえつつ、看護教育のあり方を検討してきた。

最近この分野への応募者の傾向は、看護継続教育に関心を持つ看護職の応募よりは、すでに看護基礎教育に携わっている専門学校や短期大学の看護系教員や、看護基礎教育に携わろうとしている看護職者が増加している。そのため看護学教育分野では看護専門職を育成するための教育理論と教育方法および教育評価を含めた看護学教育の体系的探求の充実が求められている。また、医療機関からは看護管理に焦点を当てた教育・研究の促進も求められている。今後はこれらをふまえ看護継続教育に関心を示す看護職者の応募も鑑み、看護教育の質の追究や、看護管理を含む高度な看護実践能力を備えた看護職の育成をも包含した看護学教育に関する教育・研究活動を進めていくことを課題としている。

(2) 実践看護学領域

① 母子看護学分野

母性看護学専門分野では、平成 24 年度に 1 名が退学し、新たな入学生がいなかったため、平成 26 年度末の在籍者はいないが、平成 26 年に実施された平成 27 年度入試で受験者 2 名が合格している。

小児看護学専門分野では、小児看護学専門分野では、平成 24 年度の在籍生 3 名のうち、平成 25 年度に 1 名が退学し、平成 26 年度在籍者 2 名のうちの 1 名は 9 月に修了した。この 2 名はいずれも、県内の小児医療施設に看護師として勤務しながら学習・研究に取り組んでおり、専門的かつ高度なケアを要する子どもを対象としたユニットにおいてリーダー的役割を担っている。小児を対象とした医療機関が

他府県と比べて少なく、専門的医療の場が限定されている県内において、院生には学習と研究の成果を臨地に還元し、小児看護を発展させていくことが期待される。

なお、現在までに入学した院生は全員社会人入学であり長期履修の形をとっているが、どうしても仕事優先になる傾向があり、3年間で修了することは難しい現状である。院生が履修期間で修了できるよう教員の指導力の向上に努めていく必要がある。

平成22年度以降の入学生はいなかったが、平成26年に実施された入試で受験者1名が合格し、平成27年度から入学することが決まっている。今後も大学院での学びを臨地における小児看護、または教育研究の場において活かせるような人材を輩出し、地域及び国内の小児医療に貢献できることをめざしていく。

② 成人看護学分野

成人看護学分野は、急性期及びスポーツ関連看護学、慢性期看護学の分野から構成されている。当分野は、修士学位授与者を5名送り出し、現在3名の大学院生が就学中である。修了生はいずれも長期履修学生であり、修了後も引き続き看護職として或いは看護学教員として活躍していることから、各職場における指導的役割や教育に修士課程の学びが寄与していると思われる。

急性期及びスポーツ関連看護学には現在2名の大学院生が在籍している。急性期には、多くの医療機器、薬剤が使われる中で、患者、家族、医療職の接点に立つ看護職が、病態、治療内容、治療環境に精通し、説明できる実践看護が要求されている。多領域との連携も大切であり、今後とも他学部、他大学の多くの職種、研究者との連携を保ちつつ、教育・研究を進めていく。また、救急看護では、年々進歩し変更されるガイドラインに習熟することにとどまらず、その根拠を探求し更に有用な対応方法を検討する能力を期待されている。救急看護のレベルアップのためには、救急看護アセスメントの知識と技術、患者及び家族の心理的なアセスメントとケア、救急看護における人材育成・リーダーシップ能力の向上が必要であると考えている。

成人病、障害者にとってスポーツはリハビリテーションとしての意義があり、スポーツ医学は健康増進から競技スポーツまで幅広く関与しているが、スポーツ一般には看護の関与は非常に薄く、現状ではスポーツ現場での救護、スポーツ医学研究のサポートに止まっている。しかし現場では、医療を必要とする場合でも医療職がいないためにトレーナーなど他の職種に頼ることが多く、医学的知識・技術を持ち現場の近くで見守る医療職は必要と考えられる。成人看護学分野では、多くのスポーツ関連職種とともに、スポーツをする人の立場に立った医療者として、説明できる医療を展開する看護師を養成すべく、その基礎となる看護の理論的検討の準備を始めた。この方面の前例はなく、やはり体育学、運動生理学、栄養学、心理学、医学の学際的取り組みが必要と考えている。

慢性期看護学分野において、これまで、修論では生活習慣病を持つ人の自己管理を促す家族からの支援に関する研究に取り組んできた。現在、在籍している1名の大学院生は社会人のため時間の確保が難しいなか、仕事と調整しながら研究に取り組んでいる。

治癒が難しく憎悪と寛解を繰り返すという特徴をもつ慢性的な病を持つ患者数は明らかに増加する傾向にある。医療提供体制も、病院から地域中心の医療と変わってきている。今後は、益々、外来や在宅との関連から、慢性的な病とともに長期間過ごす生活者としての疾病コントロールやセルフアマネジメントの方法などに関する教育・研究が課題となる。

③ 地域健康援助学分野

地域健康援助学分野では、地域看護学分野、精神看護学分野、老年看護学分野の3つの専門分野で構成されている。平成17年度に3名、18年度に3名、19年度に5名、20年度に5名、21年度に5名が入学し、全員が修了し、そのほとんどが看護職として活躍している。さらに、22年度に3名、23年度に3名、24年度に3名、25年度に1名、26年度に2名が入学しており、その全員が長期履修学生であり、病院、地方自治体、教育機関などで働いており多彩な背景を持っている。

老年看護学分野では、研究にあたって、看護の実際の場合に赴き、看護の対象者との相互行為を通して現象の中からその意味を考え、それを言語化していくことを大切にしている。これまでに介護老人保健施設での看取りについて（平成24年修了）、医療施設における身体拘束について（平成24年修了）のテーマを取り上げてきた。研究の結果、実際に該当する病院での身体拘束が減少するなど臨床現場に浸透し、質の向上に貢献している。そして当分野では、現在、医療現場での認知症ケアに焦点を当てた研究に取り組んでいる。臨床現場で蓄積されている認知症ケアに注目し、それを言語化していくことで、看護実践の質の向上に貢献する教育・研究活動を今後も推進していきたいと考えている。

精神看護学分野では、精神障害者施策が地域生活支援を中心とする方向に移行してきていることや、

学校・家庭・職場などにおけるメンタルヘルス問題が増加してきていることなど、多くの取り組むべき課題を抱えている。大学院生は臨床家や教育者といった社会人であるため、それぞれの立場からそれらの課題を捉え、解決の糸口となるような研究テーマに取り組んでいる。いずれの研究も精神看護の発展に貢献できる内容であり、積極的に学会や誌上に公表するようサポートしている。

地域看護学分野は、公衆衛生看護や在宅看護を中心とした研究分野である。公衆衛生看護では、保健師の分散配置が進む中で統括保健師の必要性、さらに地区診断に基づいた計画の策定、評価を見据えた保健活動の展開が期待されているところである。また在宅看護では、地域包括ケアの中で訪問看護師の役割は重要であり、さらに高齢者だけに留まらず重度の障害を抱えた小児や成人など年齢も幅広く療養内容も多様化しており訪問看護の社会的なニーズも高まっている。学生は現場で行き詰った疑問や課題を解決するため、あるいは現在の活動を掘りさげるため研究を進めている。月 1 回の自主ゼミを開催し活発な討議の機会となっている。今後さらに積極的に研究課題に取り組めるような環境を作ることが重要であると考えます。

[その他関連施設等研究活動]

(1) 附属病院輸血部

1. 研究の概要

輸血療法は現代医療に不可欠な治療手段であるが、その実態は最も普及した「移植医療」である。他人の臓器（造血・免疫系・幹細胞）を最小限の検査で移入するので、致死的な副作用・合併症や難治性（致死性）新興・再興感染症の伝搬など、なお今後も引き続いて克服すべき新たな課題は出現すると予想される。既知のウイルス感染症のウインドウ期献血、スクリーニング法が未開発、あるいは問診の無効性の故に、他方では、最小量の輸血療法あるいは安全な代替療法を模索せざるをえない。自己血輸血療法やサイトカインの利用、人工血液などの開発である。

当院では手術患者の自己血をすべて輸血部医師の管理の下に、貯血を行っており、この事は適正な、最小限の輸血療法を推進する上で基礎となっている。また、危機的大量出血の際に適切に凝固因子を補充する目的で、同種フィブリン糊の作成にも着手している。高次救命医療センターを受診する高度外傷患者の救命に少なからず寄与するものと思われる。また、自己フィブリン糊の有効性に関して、そのフィブリノーゲン値などを測定し、凝固および創傷治癒に至る過程を基礎的に検討する予定である。

2. 名簿

講師： 兼村信宏 Nobuhiro Kanemura
助教： 北川順一 Junichi Kitagawa

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 兼村信宏, 鶴見 寿, 森脇久隆. 血小板輸血不応症: 日本臨床 血液症候群(第2版)(II), 大阪: 日本臨床; 2013年: 393-395.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 牧野茂義, 兼村信宏, 藤島直仁, 岡崎 仁, 高橋孝喜, 脇本信博. 自動機器による自己フィブリン糊の使用効果, 自己血輸血 2014年; 27巻: 153-162.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 北川順一, 吉田省造, 中島靖弘, 白井邦博, 豊田 泉, 小倉真治, 村上啓雄. Acute respiratory distress syndrome(ARDS)を合併した腸チフスの1例, 日本救急医学会雑誌 2012年; 23巻: 781-786.
- 2) 兼村信宏, 浅野栄太, 帖佐光洋, 佐藤弦士朗, 北川順一, 清島 満. 肝切除術における自己フィブリン糊の使用効果, 自己血輸血 2014年; 27巻: 163-168.

原著（欧文）

なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 兼村信宏; 平成 24 年度臨床研究推進支援経費: 消化管 GVHD に対する経口 beclomethasone dipropionate (BDP)療法の安全性と有効性に関する研究; 平成 24 年度; 500 千円

2) 受託研究

- 1) 兼村信宏: クリオシールシステム使用成績調査; 平成 26-28 年度; 2,471 千円: 旭化成メディカル(株)

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

兼村信宏：

- 1) 日本自己血学会評議員(平成 26 年 12 月～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

兼村信宏：

- 1) 骨髄移植推進財団の調整医師(～現在)
- 2) 岐阜県合同輸血療法委員会専門部会員(～現在)
- 3) 認定輸血検査技師制度指定施設(～現在)
- 4) 輸血医学認定医制度認定施設(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

平成 24 年度中に輸血管料を取得すべく輸血後感染症検査や輸血前検体保存などの環境整備を行い、平成 25 年 1 月から管理料 I の取得が可能となった。また、同種 FFP からフィブリン糊の作成を開始し、さらに洗浄血小板の作成も確立し、従来以上に輸血部が臨床に寄与する場面が増えてきている。今後も、中央診療部門として各診療科の臨床の手助けが少しでもできればと考えている。

現状の問題点及び対応策

輸血医療はすなわち移植医療であり、そのリスクに関して大学の臨床医といえどもまだ十分に認知されている状況にはない。また適切な輸血療法(赤血球製剤や血小板製剤の輸血適応、新鮮凍結血漿の適正かつ有効な使用方法)に関する教育が、十分なされていない。特にこれからを担う若手医師に対して、適正で安全な輸血療法に関する卒後教育を徹底する必要がある。平成 24 年度から岐阜県合同輸血療法委員会が発足し、今後は各施設のみに教育や啓蒙活動を委ねるのではなく、県全体として均一的に輸血教育を行う方向性が確認された。また、その活動が評価され、平成 26 年度には厚生労働省の血液製剤使用適正化方策調査研究事業に岐阜県として初めて採択された。

平成 24 年度から輸血部の教員が 2 人体制となり、医学研究を推進していく上で、今までと比べると大変改善されたといえるが、専任技士の不足が懸念される。また輸血細胞治療学会の認定医、認定技師が岐阜県は非常に少なく、今後認定資格を持った人材を育てていく上でも常勤技師の増員が必須と思われる。

今後の展望

近年、癌患者の再発に対して DLT (donor lymphocyte transfusion) などの細胞治療が有効な手段となってきた。輸血医療の安全性に対する国民の強い懸念と関心の高まりに加え、今後は DNA レベルで HLA (human leukocyte antigens) を一致させたドナーのリンパ球輸注による固形癌治療など、更なる治療法の開発、研究の必要性は高い。

また iPS 細胞の臨床応用への期待が高まっている昨今の社会状況のなかで、移植医療に元来携わっている輸血部の果たす役割は大きい。具体的には将来の臨床応用 (iPS 細胞バンク) を目指して、輸血部にはバンク業務への関与を要請されている。実現には細胞プロセッシングセンター運営のガイドラインに従い、細胞治療認定管理師 (仮称) 相当の人材が必要であり、かつ保存に際して感染症のチェックのみならず、血液型の一つである組織適合性検査が不可欠であるため、輸血部における人材の確保、検査遂行能力の向上が必須である。

(2) 附属病院病理部

1. 研究の概要

病理部では、病理形態学の知見を駆使した臨床研究を、腫瘍性疾患、炎症性疾患とともに展開するとともに、膠原病モデル組換え近交系マウスを用いた自己免疫疾患の感受性および発症メカニズムに関する基礎研究とともに、共同研究で界面活性剤二重膜によるナノベシクルを用いた新規 drug delivery system の開発、さらには無細胞蛋白合成を用いた蛋白機能の解析や新規治療薬候補の開発を行っている。病理部内のみならず、腫瘍病理学講座、形態機能病理学講座、臨床各科、愛媛大学、ドイツ国立癌研究所との共同研究により研究に幅を持たせている。

2. 名簿

教授： 原 明 Akira Hara
臨床教授： 宮崎龍彦 Tatsuhiko Miyazaki
臨床講師： 酒々井夏子 Natsuko Suzui

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 原 明. 遺伝性疾患および小児の疾患: Vinay Kumar, Abul K. Abbas, Jon C. Aster 著, 豊国伸哉, 高橋雅英監訳. ロビンズ基礎病理学 原書9版, 東京:丸善出版; 2014年: 257-321.

著書 (欧文)

- 1) Hara A, Aoki H, Takamatsu M, Hatano Y, Tomita H, Kuno T, Niwa M, Kunisada T. Human embryonic stem cells transplanted into mouse retina induces neural differentiation. In: Hayat MA, ed. Stem Cells and Cancer Stem Cells, Volume 2. Springer; 2012:291-298.
- 2) Niwa M, Nakashima M, Satoh K, Takamatsu M, Kobayashi K, Hatano Y, Hara A. Hypothermia and hyperthermia affect neuronal degeneration, delayed neuronal death and microglial activation following transient forebrain ischemia. In: Delgado JIV, Garza VGF, eds. Hypothermia: Prevention, Recognition and Treatment. Chapter VII. Nova Science Publish; 2012:15-24.

総説 (和文)

- 1) 川口順敬, 名和正人, 高橋孝夫, 山口和也, 長田真二, 吉田和弘, 森光華澄, 二村 学, 廣瀬善信. 乳癌の検査・診断 センチネルリンパ節生検 外来センチネルリンパ節生検法の意義, 日本臨床 2012年; 70巻増刊: 354-359.
- 2) 橋本恭一, 波多野裕一郎, 原 明, 坂井義治, 山田泰広. 消化器発癌モデルマウスを用いた癌エビジェネティクス研究, 分子消化器病 2012年; 9巻: 62-66.
- 3) 宮崎龍彦. 血管炎症候群の疾患感受性, 日本腎臓学会誌 2014年; 56巻: 124-130.

総説 (欧文)

- 1) Kuno T, Tsukamoto T, Hara A, Tanaka T. Cancer chemoprevention through the induction of apoptosis by natural compounds. J Biophys Chem. 2012;3:156-173.
- 2) Nose M, Komori H, Miyazaki T, Mori S. Genomics of vasculitis: lessons from mouse models. Ann Vasc Dis. 2013;6:16-21.

原著 (和文)

- 1) 清家健作, 亀山紘司, 加藤 卓, 土屋朋大, 安田 満, 横井繁明, 仲野正博, 林 秀治, 出口 隆, 廣瀬善信. 膀胱より発生した Solitary fibrous tumor の1例, 泌尿器科紀要 2012年; 58巻: 105-108.
- 2) 宮崎龍彦. 最新の研究トピックス AP-VAS 2012から 血管炎の基礎研究 MRL/lpr 由来オステオポンチン遺伝子座特異的コンジェニックマウスと糸球体腎炎, 日本臨床 2013年; 71巻増刊: 493-496.
- 3) 堀江憲吾, 亀山紘司, 水谷晃輔, 菅原 崇, 清家健作, 土屋朋大, 安田 満, 横井繁明, 中野正博, 出口隆, 酒々井夏子, 廣瀬善信. 集学的治療にて比較的長期予後を得られている前立腺小細胞癌の1例, 泌尿器科紀要 2014年; 60巻: 517-521.

原著 (欧文)

- 1) Iwashita T, Yasuda I, Doi S, Ando N, Nakashima M, Adachi S, Hirose Y, Mukai T, Iwata K, Tomita E, Itoi T, Moriwaki H. Use of samples from endoscopic ultrasound-guided 19-gauge fine-needle aspiration in diagnosis of autoimmune pancreatitis. Clin Gastroenterol Hepatol. 2012;10:316-322. IF 6.534
- 2) Hata K, Kubota M, Shimizu M, Moriwaki H, Kuno T, Tanaka T, Hara A, Hirose Y. Monosodium glutamate-induced diabetic mice are susceptible to azoxymethane-induced colon tumorigenesis. Carcinogenesis. 2012;33:702-707. IF 5.266
- 3) Kato H, Kanematsu M, Goto H, Mizuta K, Aoki M, Kuze B, Hirose Y. Mucosa-associated lymphoid

- tissue lymphoma of the salivary glands: MR imaging findings including diffusion-weighted imaging. *Eur J Radiol.* 2012;81:e612-617. IF 2.160
- 4) Kato H, Kanematsu M, Mizuta K, Aoki M, Hirose Y. Spontaneous infarction of Warthin's tumor: imaging findings simulating malignancy. *Jpn J Radiol.* 2012;30:354-357. IF 0.742
 - 5) Takamatsu M, Aoki H, Hirose Y, Kobayashi K, Tomita H, Kuno T, Koumura H, Hara A. Teratoma showing the features of retinal structure: A case of sacrococcygeal teratoma. *Oncol Lett.* 2012;3:1023-1026. IF 0.987
 - 6) Hori T, Ohnishi H, Teramoto T, Tsubouchi K, Naiki T, Hirose Y, Ohara O, Seishima M, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. Autosomal-dominant chronic mucocutaneous candidiasis with STAT1-mutation can be complicated with chronic active hepatitis and hypothyroidism. *J Clin Immunol.* 2012;32:1213-1220. IF 2.654
 - 7) Kameda T, Dobashi H, Yoneda K, Susaki K, Kuno T, Murao K, Ishida T. A case of Degos disease successfully treated with corticosteroid combined with cyclophosphamide. *Rheumatol Int.* 2012;32:2169-2173. IF 1.627
 - 8) Matsuhashi A, Ohno T, Kimura M, Hara A, Saio M, Nagano A, Kawai G, Saitou M, Takigami I, Yamada K, Okano Y, Shimizu K. Growth Suppression and Mitotic Defect Induced by JNJ-7706621, an Inhibitor of Cyclin-Dependent Kinases and Aurora Kinases. *Curr Cancer Drug Tar.* 2012;12:625-639. IF 3.582
 - 9) Aoki H, Hara A, Era T, Kunisada T, Yamada Y. Genetic ablation of Rest leads to in vitro-specific derepression of neuronal genes during neurogenesis. *Development.* 2012;139:667-677. IF 6.273
 - 10) Hoshi M, Matsumoto K, Ito H, Ohtaki H, Arioka Y, Osawa Y, Yamamoto Y, Matsunami H, Hara A, Seishima M, Saito K. L-Tryptophan-kynurenine pathway metabolites regulate type I IFNs of acute viral myocarditis in mice. *J Immunol.* 2012;188:3980-3987. IF 5.362
 - 11) Goda W, Satoh K, Nakashima M, Hara A, Niwa M. PBN fails to suppress in delayed neuronal death of hippocampal CA1 injury following transient forebrain ischemia in gerbils. *Neurosci Lett.* 2012;517:47-51. IF 2.055
 - 12) Murakami Y, Hoshi M, Hara A, Takemura M, Arioka Y, Yamamoto Y, Matsunami H, Funato T, Seishima M, Saito K. Inhibition of increased Indoleamine 2,3-Dioxygenase activity attenuates *Toxoplasma gondii* replication in the lung during acute infection. *Cytokine.* 2012;59:245-251. IF 2.874
 - 13) Ohtaki H, Ito H, Hoshi M, Osawa Y, Takamatsu M, Hara A, Ishikawa T, Moriwaki H, Saito K, Seishima M. High susceptibility to lipopolysaccharide-induced lethal shock in encephalomyocarditis virus-infected mice. *Sci Rep.* 2012;2:367. IF 5.076
 - 14) Arioka Y, Yamamoto Y, Hoshi M, Matsumoto K, Takamatsu M, Hara A, Seishima M, Saito K. Pre-administration of L-tryptophan improved ADR-induced early renal failure in mice. *Life Sci.* 2012;91:100-106. IF 2.296
 - 15) Hatano Y, Otsuka S, Chousa M, Saito S, Nollet KE, Ohto H, Shimabukuro K, Takemura H, Hara A. Fatal delayed hemolytic transfusion reaction associated with anti-Di(b) and anti-E. *Transfus Apher Sci.* 2012;47:263-268. IF 1.072
 - 16) Hioki A, Miyamoto K, Kato H, Hatano Y, Asano N, Hirose Y, Fushimi K, Shimizu K. Sudden onset of paraplegia caused by subarachnoid hemorrhage associated with meningeal melanocytoma of the conus medullaris: a case report of intraoperative identification of these two pathological conditions. *Eur J Orthop Surg Traumatol.* 2012;22:593-596. IF 0.181
 - 17) Binh NH, Satoh K, Kobayashi K, Takamatsu M, Hatano Y, Hirata A, Tomita H, Kuno T, Hara A. Galectin-3 in preneoplastic lesions of glioma. *J Neurooncol.* 2013;111:123-132. IF 2.787
 - 18) Kuno T, Hatano Y, Tomita H, Hara A, Hirose Y, Hirata A, Mori H, Terasaki M, Masuda S, Tanaka T. Organomagnesium suppresses inflammation-associated colon carcinogenesis in male Crj: CD-1 mice. *Carcinogenesis.* 2013;34:361-369. IF 5.266
 - 19) Takamatsu M, Hirata A, Ohtaki H, Hoshi M, Hatano Y, Tomita H, Kuno T, Saito K, Hara A. IDO1 plays an immunosuppressive role in 2,4,6-trinitrobenzene sulfate-induced colitis in mice. *J Immunol.* 2013;191:3057-3064. IF 5.362
 - 20) Yamada K, Ohno T, Aoki H, Semi K, Watanabe A, Moritake H, Shiozawa S, Kunisada T, Kobayashi Y, Toguchida J, Shimizu K, Hara A, Yamada Y. EWS/ATF1 expression induces sarcomas from neural crest-derived cells in mice. *J Clin Invest.* 2013;123:600-610. IF 13.765
 - 21) Cuong NT, Abe C, Binh NH, Hara A, Morita H, Ogura S. Sivelestat improves outcome of crush injury by inhibiting high-mobility group box 1 in rats. *Shock.* 2013;39:89-95. IF 2.732
 - 22) Hirata A, Utikal J, Yamashita S, Aoki H, Watanabe A, Yamamoto T, Okano H, Bardeesy N, Kunisada T, Ushijima T, Hara A, Jaenisch R, Hochedlinger K, Yamada Y. Dose-dependent roles for canonical Wnt signaling in de novo crypt formation and cell cycle properties of the colonic epithelium. *Development.* 2013;140:66-75. IF 6.273
 - 23) Kawai G, Ohno T, Kawaguchi T, Nagano A, Saito M, Takigami I, Matsuhashi A, Yamada K, Hosono K, Tezuka K, Kunisada T, Hara A, Shimizu K. Human Dental Pulp Facilitates Bone Regeneration in a Rat Bone Defect Model. *Bone and Tissue Regeneration Insights.* 2013;4:1-10.
 - 24) Komori S, Osada S, Tomita H, Nishio K, Kumazawa I, Tachibana S, Tsuchiya J, Yoshida K. Predictive value of orotate phosphoribosyltransferase in colorectal cancer patients receiving 5-FU-based chemotherapy. *Mol Clin Oncol.* 2013;1:453-460.

- 25) Kato H, Kanematsu M, Ono H, Yano R, Furui T, Morishige K, Hatano Y. Ovarian fibromas: MR imaging findings with emphasis on intratumoral cyst formation. *Eur J Radiol.* 2013;82:e417-421 IF 2.160
- 26) Miyazaki N, Murata I, Takemura G, Okada H, Kanamori H, Matsumoto-Miyazaki J, Yoshida G, Izumi K, Kashi H, Niimi K, Nishiwaki A, Miyazaki T, Ohno M, Ohashi H, Suzuki F, Minatoguchi S. Expression of prorenin receptor in renal biopsies from patients with IgA nephropathy. *Int J Clin Exp Pathol.* 2014;7:7485-7496. IF 1.783
- 27) Aoki H, Hara A, Oomori Y, Shimizu Y, Yamada Y, Kunisada T. Neonatal lethality of neural crest cell-specific Rest knockout mice is associated with gastrointestinal distension caused by aberrations of myenteric plexus. *Genes Cells.* 2014;19:723-742. IF 2.855
- 28) Kuno T, Hata K, Takamatsu M, Hara A, Hirose Y, Takahashi S, Imaida K, Tanaka T. The peroxisome proliferator-activated receptor (PPAR) alpha agonist fenofibrate suppresses chemically induced lung alveolar proliferative lesions in male obese hyperlipidemic mice. *Int J Mol Sci.* 2014;15:9160-9172. IF 2.339
- 29) Taguchi A, Niwa M, Hoshi M, Saito K, Masutani T, Hisamatsu K, Kobayashi K, Hatano Y, Tomita H, Hara A. Indoleamine 2,3-dioxygenase 1 is upregulated in activated microglia in mice cerebellum during acute viral encephalitis. *Neurosci Lett.* 2014;564:120-125. IF 2.055
- 30) Watanabe H, Kanematsu M, Tanaka K, Osada S, Tomita H, Hara A, Goshima S, Kondo H, Kawada H, Noda Y, Tanahashi Y, Kawai N, Yoshida K, Moriyama N. Fibrosis and Postoperative Fistula of the Pancreas: Correlation with MR Imaging Findings-Preliminary Results. *Radiology.* 2014;270:791-799. IF 6.214
- 31) Binh NH, Aoki H, Takamatsu M, Hatano Y, Hirata A, Tomita H, Hara A. Time-sensitive effects of hypoxia on differentiation of neural stem cells derived from mouse embryonic stem cells in vitro. *Neurol Res.* 2014;36:804-813. IF 1.449
- 32) Kuno T, Hata K, Takamatsu M, Hara A, Hirose Y, Takahashi S, Imaida K, Tanaka T. The peroxisome proliferator-activated receptor (PPAR) α agonist fenofibrate suppresses chemically induced lung alveolar proliferative lesions in male obese hyperlipidemic mice. *Int J Mol Sci.* 2014;15:9160-9172. IF 2.339
- 33) Ohtaki H, Ito H, Ando K, Ishikawa T, Hoshi M, Ando T, Takamatsu M, Hara A, Moriwaki H, Saito K, Seishima M. Kynurenine production mediated by indoleamine 2,3-dioxygenase aggravates liver injury in HBV-specific CTL-induced fulminant hepatitis. *BBA-Mol Basis Dis.* 2014;1842:1464-1471. IF 5.089
- 34) Hoshi M, Osawa Y, Ito H, Ohtaki H, Ando T, Takamatsu M, Hara A, Saito K, Seishima M. Blockade of Indoleamine 2,3-dioxygenase reduces mortality from peritonitis and sepsis in mice by regulating functions of CD11b+ peritoneal cells. *Infect Immun.* 2014;82:4487-4495. IF 4.156
- 35) Zhao CM, Hayakawa Y, Kodama Y, Muthupalani S, Westphalen CB, Andersen GT, Flatberg A, Johannessen H, Friedman RA, Renz BW, Sandvik AK, Beisvag V, Tomita H, Hara A, Quante M, Li Z, Gershon MD, Kaneko K, Fox JG, Wang TC, Chen D. Denervation Suppresses Gastric Tumorigenesis. *Sci Transl Med.* 2014;6:250ra115. IF 14.414
- 36) Kobayashi S, Hara A, Isagawa T, Manabe I, Takeda K, MaruYama T. The nuclear I κ B family protein I κ BNS influences the susceptibility to experimental autoimmune encephalomyelitis in a murine model. *PLoS One.* 2014;9:e110838. IF 3.534
- 37) Ono H, Kanematsu M, Kato H, Toyoki H, Hayasaki Y, Furui T, Morishige K, Hatano Y. MR imaging findings of uterine pyomyoma: radiologic-pathologic correlation. *Abdom Imaging.* 2014;39:797-801 IF 1.730

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：宮崎龍彦；文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)：膠原病疾患モデル組換え近交系マウスを用いた膠原病治療法の開発；平成 25-27 年度；5,070 千円(2,080；1,430；1,560 千円)
- 2) 研究代表者：有村義宏(杏林大学医学部)，研究分担者：磯部光章，小室一成，中岡良和，山田秀裕，長谷川均，杉原毅彦，吉藤 元，種本和雄，針谷正祥，本間 栄，佐田憲映，和田隆志，伊藤 聡，土橋浩章，堀田哲也，駒形義紀，中山健夫，勝又康弘，天野宏一，石津明洋，宮崎龍彦，川上民裕，菅野祐幸，高橋 啓，土屋尚之，藤本昭一，濱野慶朋，猪原登志子，小林茂人，古田俊介，高崎芳成，竹内勤，藤井隆夫，要 伸也，杉山 齊；厚生労働省科学研究費補助金(難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業))：難治性血管炎に関する調査研究(H26-難治等(難)-一般-044)；平成 26-28 年度；55,315 千円(31,200；24,115；H28 未定 千円)
- 3) 研究代表者：吉見直己，研究分担者：久野壽也；厚生労働省科学研究費補助金(化学物質リスク研究事業) 課題番号 H23-化学-指定-007：化学物質の安産性と発がん性リスク評価のための短・中期バイオアッセイ系の開発；平成 23-25 年度；6,800 千円(2,800；2,000；2,000 千円)
- 4) 研究代表者：久野壽也；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：PPAR α アゴニストによる肺腫瘍抑制メカニズムの検索；平成 24-26 年度；2,800 千円(1,000；1,000；800 千円)
- 5) 研究代表者：富田弘之；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：器官形成因子制御機構を背景とした幹細胞ニッチ異常による胃発癌浸潤メカニズムの解明；平成 24-26 年度；4,200 千円(1,600；1,400；1,200 千円)

- 6) 研究代表者：永田浩一，研究分担者：原 明；学術研究助成基金助成金基盤研究(B)：大脳皮質発達障害を基盤とする知的障害・自閉症障害の病態メカニズムの解明；平成 25-26 年度；1,050 千円(500：550 千円)
- 7) 研究代表者：富田弘之；膵臓病研究奨励賞助成金(財団法人 膵臓病研究財団)：膵疾患における活性化膵星細胞のエピジェネティック修飾機構の関与の解明と治療への応用；平成 25 年度；1,000 千円
- 8) 研究代表者：富田弘之；岐阜大学大学活性化経費(研究：研究グループ形成支援)：膵線維化及び膵星細胞を標的とした膵癌・慢性膵炎の新たな診断治療法の開発と臨床応用；平成 25 年度；4,000 千円
- 9) 研究代表者：原 明；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：正常及び癌組織幹細胞分化制御機構におけるクロマチン構造調節因子 DEK の役割の解明；平成 26-28 年度；3,900 千円(1,500：1,300：1,100 千円)

2) 受託研究

- 1) 原 明：病理診断のコンサルタント；平成 24 年度；3,412 千円；(株)保健科学研究所
- 2) 原 明：病理診断のコンサルタント；平成 24 年度；600 千円；(株)東海細胞研究所
- 3) 原 明：病理診断のセカンドオピニオン；平成 24 年度；2,895 千円；各医療機関
- 4) 久野壽也：FBRA による BOP 誘発ハムスター膵腫瘍の抑制効果；平成 25 年度；3,488 千円；玄米酵素(株)
- 5) 原 明：病理診断のコンサルタント；平成 25 年度；3,789 千円；(株)保健科学研究所
- 6) 原 明：病理診断のコンサルタント；平成 25 年度；636 千円；(株)東海細胞研究所
- 7) 原 明：病理診断のセカンドオピニオン；平成 25 年度；2,995 千円；各医療機関
- 8) 原 明：病院診断のコンサルタント；平成 26 年；3,820 千円；(株)保健科学研究所
- 9) 原 明：病院診断のコンサルタント；平成 26 年；633 千円；(株)東海細胞研究所
- 10) 原 明：病院診断のセカンドオピニオン；平成 26 年度；3,060 千円；各医療機関

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

- 1) 宮崎龍彦：ソルビタンモノオレエートから調製したベシクルを有する抗癌剤およびベクター(発明)；平成 26 年(特願 2009-66970)

6. 学会活動

1) 学会役員

原 明：

- 1) 日本病理学会評議員(～現在)
- 2) 日本癌学会評議員(平成 24 年 1 月～現在)
- 3) 日本脳神経外科学会評議員(～平成 26 年 12 月)
- 4) 日本再生医療学会評議員(～現在)

廣瀬善信：

- 1) 日本病理学会評議員(～現在)
- 2) 日本病理学会中部支部幹事(～平成 24 年 3 月)
- 3) 日本臨床細胞学会東海連合会幹事(～平成 26 年 3 月)
- 4) 日本臨床細胞学会岐阜県支部幹事(～平成 26 年 3 月)

宮崎龍彦：

- 1) 日本病理学会評議員(～現在)
- 2) 日本臨床細胞学会岐阜県支部幹事(～現在)

2) 学会開催

宮崎龍彦：

- 1) 平成 26 年度第 1 回岐阜県がん検診従事者資質向上事業(細胞診従事者講習会)(平成 26 年 7 月 26 日)

3) 学術雑誌

原 明 :

- 1) Journal of Oncology ; Editorial Board(～現在)
- 2) ISRN Pathology ; Editorial Board(平成 24 年 1 月～現在)
- 3) International Journal of Neurology Research ; Editorial Board(平成 26 年 9 月～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

原 明 :

- 1) The 71st Annual Meeting of the Japanese Cancer Association(2012.09, English Oral Session: In vivo development analysis of tumor; Chairperson)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

原 明 :

- 1) 岐阜県成人病診断管理指導協議会がん登録評価部会委員(～現在)

酒々井夏子 :

- 1) 岐阜県生活習慣病健診指導審議会委員(子宮がん部会)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 宮崎龍彦 : 「研究室から 大学はいま」 病理医が顔の見える存在に : 岐阜新聞(2014 年 7 月 22 日)
- 2) 富田弘之, 原 明 : Severing Nerves May Shrink Stomach Cancers : コロンビア大学医療センタープレス(2014 年 8 月 19 日)
- 3) 宮崎龍彦 : 岐阜大病院に病理外来 12 月開設 専門医が診断説明 : 岐阜新聞(2014 年 10 月 4 日)

12. 自己評価

評価

病理診断業務に忙しい中, コンスタントに研究を進め, 4 報の英語論文に参画, 大学院生の学位取得にも貢献できた。また, 宮崎は自己免疫疾患, 特に全身性血管炎症候群の専門家として認知され, 総説の執筆や依頼原稿, 講演依頼を受け, 厚生労働省科学研究費補助金(難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業)): 難治性血管炎に関する調査研究の班員として活動している。さらに, 界面活性剤二重膜によるナノベシクルを用いた drug delivery system に関する発明で特許を取得し得た。研究に関しても進捗していると考ええる。

現状の問題点及びその対応策

病理診断業務の負担が大きく, 研究に十分な時間が割けないことが一つ目の問題点として挙げられる。研究補助を行う非常勤職員の雇用により対応を図っている。病理部内には十分な研究スペースがとれないことも問題点である。これは, 腫瘍病理学講座, 形態機能病理学講座との共同研究, 動物実験施設のレンタルラボ(机)を借りることにより対応可能である。また, マウスに感染がみられ, 現在クリーンアップ中である。このことも含めて研究費が十分ではない。新たに民間の研究補助金(成人血管病研究振興財団)の交付内定も得て, 来年度は必要最低限の研究費は確保できた。

今後の展望

今後も病理診断と研究のバランスをしっかりととりながら, 臨床研究, 基礎研究を展開していきたい。また, 研究マインドを持った若手医師の育成にもこれらの研究を活かしていくことを考える。

(3) 地域医療医学センター

1. 研究の概要

以下の各項目について研究を進めている。

(1) 地域連携に基づく医療の質改善に関する研究

H24 年度診療報酬改定「感染防止対策加算」による地域連携に基づく、院内感染の改善度調査および特定の地域での予防接種の効果に関する臨床疫学研究：生体支援センターと連携。岐阜県内加算全 55 病院からのデータ収集継続中。

(2) 地域医療実態調査研究

中長期的な医療ニーズと適正な医師配置の根拠となるデータを収集し、提言する（岐阜県全体と、特定の圏域における調査，診療科別分析も含めて）。岐阜県健康福祉部地域医療推進課および岐阜県病院協会等を通じてデータ収集・分析中。

(3) 修学資金制度と岐阜県医師育成・確保コンソーシアムのアウトカム評価研究

医師育成・確保に与える効果と今後の制度・体制の見直し

(4) 医師の就労環境改善に関する研究

とくに女性医師就労支援の取り組みや勤務環境改善によって病院経営に与える影響についての調査研究

(5) 地域基盤型教育の充実

多職種連携教育：IPE(Interprofessional Education)カリキュラム開発

2. 名簿

教授：	村上啓雄	Nobuo Murakami
助教：	操 奈美	Nami Misao
助教：	白木育美	Ikumi Shiraki

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 村上啓雄，渡邊珠代(分担執筆)。「気管支喘息」「肺炎」「慢性閉塞性肺疾患」「結核症第IV章 感染症」「病原微生物」「院内感染症」：中村丁治，川島由起子，加藤昌彦編。臨床栄養学，東京：南江堂；2013年：188-197，227-230。
- 2) 渡邊珠代，村上啓雄。介護における慢性腫瘍部のバイオフィルム症とその対策－褥瘡を中心に－：化学療法領域 29号，東京：医薬ジャーナル社；2013年：2076-2082。
- 3) 村上啓雄(分担執筆)。学部における就職・キャリア形成の取り組み 医学部医学科：岐阜大学教育推進・学生支援機構キャリア支援部門編。未来を切り開き明日にはばたく 岐阜大学キャリア・就職白書 2013，岐阜；2014年：40-41。
- 4) 村上啓雄(分担執筆)。病棟ラウンドとスタッフ教育：尾家重治編。感染制御標準ガイド，東京：(株)じほう；2014年：328-333。
- 5) 村上啓雄(分担執筆)。Chapter 1 病態栄養の基礎 2 栄養評価と栄養スクリーニング：日本病態栄養学会編。認定 NST ガイドブック 2014(改訂第4版)，大阪：(株)メディカルビュー社；2014年：13-18。
- 6) 村上啓雄(分担執筆)。Chapter 2 栄養投与方法 3 経腸栄養 B 経腸栄養剤の適応・禁忌：日本病態栄養学会編。認定 NST ガイドブック 2014(改訂第4版)，大阪：(株)メディカルビュー社；2014年：52-56。
- 7) 渡邊珠代，村上啓雄。4. AST の実例紹介～活動内容と見えてきた課題～実例 3(岐阜大学医学部附属病院)(1)医師の立場から：二木芳人編。学ぶ、取り組む、実践する！AST(抗菌薬適正使用支援チーム)，大阪：医薬ジャーナル社；2014年：110-118。
- 8) 丹羽 隆，渡邊珠代，村上啓雄(分担執筆)。院内ラウンドにまつわる“情報管理”：INFECTION CONTROL，大阪：メディカ出版；2014年：233-237。

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 村上啓雄。地域支援ネットワークの取り組み，INFECTION CONTROL 2014年；23巻：1。
- 2) 村上啓雄。医療関連感染対策～最近の話題，best Nurse 2014年；25巻：12-16。

総説（欧文）

なし

原著 (和文)

- 1) 村上啓雄. これからの NST とは～ICT のおける専任薬剤師による Antimicrobial Stewardship, ヒューマンニュートリション 2012 年; 19 巻: 30-33.
- 2) 北川順一, 吉田省造, 中島靖弘, 白井邦博, 小倉真治, 村上啓雄. Acute respiratory distress syndrome(ARDS)を合併した腸チフスの 1 例, 日本救急医学会雑誌 2012 年; 23 巻: 781-786.
- 3) 丹羽 隆, 篠田康孝, 鈴木昭夫, 大森智史, 太田浩敏, 深尾亜由美, 安田 満, 北市 清, 松浦克彦, 杉山正, 村上啓雄, 伊藤善規. Infection Control Team による全入院患者対象とした注射用抗菌薬適正使用推進実施体制の確立とアウトカム評価, 医療薬学 2012 年; 38 巻: 273-281.
- 4) 村上啓雄, 深尾亜由美, 丹羽 隆, 太田浩敏, 伊藤善規. 大学病院での取り組み 適切なチーム医療活動と各職種メンバーの役割—岐阜大学医学部附属病院 ICT における抗菌薬適正使用の取り組み Antimicrobial Stewardship, 月刊地域医学 2012 年; 26 巻: 316-321.
- 5) 村上啓雄, 深尾亜由美, 渡邊珠代, 土屋麻由美, 丹羽 隆, 太田浩敏. 厚生労働省モデル事業における院内感染対策地域支援ネットワーク, Infection control 2013 年; 22 巻: 1018-1021.
- 6) 操 奈美, 奥村陽子, 松本茂美, 村上啓雄, 犬塚 貴, 清島 満. 活動報告 初期臨床研修 2 年次の地域医療研修に関するアンケート調査, 月間地域医学 2013 年; 27 巻: 890-895.
- 7) 渡邊珠代, 村上啓雄. 感染制御における地域ネットワークの実際, 感染症 2013 年; 43 巻: 217-222.
- 8) 村上啓雄. 第 26 回 慢性閉塞性肺疾患(COPD)①, Medical Practice 2013 年; 30 巻: 2181-2185.
- 9) 村上啓雄. 大学病院における NST の現状と課題, 医学のあゆみ 2013 年; 247 巻: 1143-1148.
- 10) 西村佳代子, 村上啓雄. 第 27 回 慢性閉塞性肺疾患(COPD)②, Medical Practice 2014 年; 31 巻: 161-167.
- 11) 林 寛子, 丹羽 隆, 竹市朱里, 今西義紀, 外海有規, 岡安伸二, 北市清幸, 安田公夫, 村上啓雄, 伊藤善規. 夜勤時におけるバンコマイシン初期投与設計体制の確立とその成果, 医療薬学 2014 年; 40 巻: 85-93.
- 12) 米玉利準, 大瀧博文, 中山麻美, 安藤航平, 宮崎 崇, 太田浩敏, 古田伸行, 渡邊珠代, 兼村信宏, 伊藤弘康, 大楠清文, 村上啓雄, 清島 満. 血液培養好気ボトルより Leptotrichia trevisanii を分離した多発性骨髄腫患者における菌血症の 1 例, 日本臨床微生物学雑誌 2014 年; 24: 31-36.
- 13) 大瀧博文, 大楠清文, 中山麻美, 米玉利準, 安藤航平, 宮崎 崇, 太田浩敏, 古田伸行, 渡邊珠代, 伊藤弘康, 村上啓雄, 清島 満. 中心静脈ライン関連血流感染の判定における細断法を用いた中心静脈カテーテル先端培養の菌量および血液培養結果に関する後方視的な検討, 臨床微生物迅速診断研究会誌 2014 年; 24 巻: 39-43.
- 14) 丹羽 隆, 外海有規, 鈴木景子, 渡邊珠代, 土屋麻由美, 太田浩敏, 村上啓雄. Defined daily dose(DDD)と days of therapy(DOT)を用いた抗菌薬使用量の評価, 環境感染誌 2014 年; 29 巻: 333-339.
- 15) 丹羽 隆, 渡邊珠代, 村上啓雄. 日本版 Antimicrobial stewardship の実際を探る—岐阜大学医学部附属病院の活動, 月刊薬事 2014 年; 56 巻: 697-701.

原著 (欧文)

- 1) Niwa T, Shinoda Y, Suzuki A, Ohmori T, Yasuda M, Ohta H, Fukao A, Kitaichi K, Matsuura K, Sugiyama T, Murakami N, Itoh Y. Outcome measurement of extensive implementation of antimicrobial stewardship in patients receiving intravenous antibiotics in a Japanese university hospital. Int J Clin Pract. 2012;66:999-1008. IF 2.538
- 2) Niwa T, Watanabe T, Suzuki A, Ohmori T, Tsuchiya M, Suzuki T, Ohta H, Murakami N, Itoh Y. Reduction of linezolid-associated thrombocytopenia by the dose adjustment based on the risk factors such as basal platelet count and body weight. Diagn Micr Infec Dis. 2014;79:93-97. IF 2.568

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 八木哲也(名古屋大学医学部), 研究分担者: 村上啓雄; 厚生労働科学研究費補助金 新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業: 医療機関におけるインフルエンザ感染対策の研究; 平成 25-27 年度(3 年計画予定); 1,620 千円(900: 400: 320 千円)
- 2) 研究代表者: 小林寛伊(東京保健医療大学), 研究分担者: 村上啓雄; 厚生労働科学研究費補助金 地域医療基盤開発推進研究事業: 院内感染地域支援ネットワーク事業 ネットワークの整備・支援の推進効果; 平成 25-26 年度; 600 千円(300: 300 千円)

2) 受託研究

- 1) 村上啓雄, 渡邊珠代, 深尾亜由美: 院内感染対策研究事業(平成 17 年度~); 平成 17-26 年度; 6,093 千円(993: 500: 500: 500: 500: 500: 500: 500: 800: 800 千円): 岐阜県医療整備課受託研究費
- 2) 村上啓雄, 寺本貴英, 大西秀典: 岐阜県予防接種センター委託事業(平成 20 年度~); 平成 20-26 年度; 7,160 千円(1,000: 1,000: 1,000: 1,000: 1,000: 1,080: 1,080 千円): 岐阜県医療整備課受託研究費

3) 共同研究

- 1) 村上啓雄：国立大学医学部附属病院共通ソフト“感染症管理システム”を用いた全自動全面電子化医療関連感染サーベイランスに関する研究；平成 12 年～現在；0 円：群馬大学

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

村上啓雄：

- 1) 日本感染症学会評議員(～現在)
- 2) 日本病態栄養学会評議員(～現在)
- 3) 日本環境感染学会評議員(～現在)
- 4) 日本病態栄養学会 NST 委員会委員長(平成 25 年度～現在)
- 5) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 6) 日本感染症学会施設内感染対策相談窓口回答者(～現在)
- 7) 国立大学附属病院感染対策協議会会長(～現在)

2) 学会開催

村上啓雄：

- 1) 第 221 回日本内科学会東海地方会(平成 25 年 10 月，岐阜)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

村上啓雄：

- 1) 第 15 回日本病態栄養学会年次学術集会(平成 24 年 1 月，京都，特別講演「経腸栄養の合併症とその対策」座長)
- 2) 第 15 回日本病態栄養学会年次学術集会(平成 24 年 1 月，京都，合同パネルディスカッション「適切な栄養管理における NST 活動のあり方」パネリスト)
- 3) 第 6 回岐阜感染症・化学療法フォーラム(GICF)(平成 24 年 1 月，岐阜，特別講演 I 「感染症育成と抗菌薬適正使用」座長)
- 4) 第 27 回日本静脈経腸栄養学会(JSPEN)総会 日本静脈経腸栄養学会・日本病態栄養学会合同パネルディスカッション(平成 24 年 2 月，神戸，「NST の現状と課題」パネリスト)
- 5) 第 92 回中部地区老年医学談話会(平成 24 年 2 月，名古屋，特別講演「ワクチンの適正使用を考える～岐阜県予防接種センター相談事例から～」演者)
- 6) 第 27 回日本環境感染学会総会(平成 24 年 2 月，福岡，シンポジウム「電子化サーベイランスに基づく高精度の感染制御提示」演者)
- 7) 第 27 回日本環境感染学会総会(平成 24 年 2 月，福岡，教育セミナー「薬剤耐性菌対策に必要な標準予防策 up to date」司会)
- 8) 岐阜 MRSA 研究会(平成 24 年 2 月，岐阜，特別講演「新しい抗 MRSA 薬ダプトマイシンの臨床位置づけ」座長)
- 9) 第 85 回日本細菌学会総会(平成 24 年 3 月，長崎，シンポジウム「薬剤耐性菌の耐性機構と疫学」演者)
- 10) 第 2 回全国地域医療教育協議会総会 第 4 回全国シンポジウム 地域推薦卒医学生のキャリアアップ構築(平成 24 年 3 月，東京，招待講演「岐阜県医学生修学資金と岐阜県医師育成・確保コンソーシアム」演者)
- 11) 第 25 回岐阜院内感染対策検討会(平成 24 年 4 月，岐阜，総合司会およびシンポジウム「CDC のガイドラインを確認する」座長)
- 12) 救急集中治療領域感染症研究会(平成 24 年 5 月，岐阜，特別講演「劇的救命」座長)
- 13) 平成 24 年度日本病態栄養学会 NST セミナー(平成 24 年 6 月，京都，招待講演「4.補助食品 5.経腸栄養の種類、投与ルート、管理 6.経腸栄養の合併症対策 演習 3 症例による検討 NST 実技講

- 習会」ファシリテーター)
- 14) 岐阜県の感染症予防医療を考える会(平成 24 年 7 月, 岐阜, 特別講演 2「肺炎球菌ワクチンの最新の話題」司会)
 - 15) 国公立大学附属病院感染対策協議会 平成 24 年度 感染管理担当者ブロック別研修会(平成 24 年 7 月, 浜松「アウトブレイク経験から～各施設からの報告～」座長)
 - 16) 第 10 回救急領域感染対策セミナー(平成 24 年 8 月, 岐阜, 招待講演「感染制御 Topics」演者)
 - 17) 第 18 回全国の集い in 高知 2012(平成 24 年 9 月, 高知, 招待講演「誤嚥性肺炎とその予防」演者)
 - 18) 第 11 回東海感染対策セミナー(平成 24 年 9 月, 名古屋, 招待講演「国公立大学附属病院感染対策協議会の院内感染対策取り組みの紹介」演者)
 - 19) 第 14 回適正抗菌化学療法研究会(平成 24 年 10 月, 名古屋, 総合討論「スペシャリストにきく! クラリスロマイシンの今後の展望」司会)
 - 20) 平成 24 年度石川県院内感染対策講習会(平成 24 年 10 月, 石川, 「岐阜県における院内感染対策地域ネットワーク活動について」演者)
 - 21) 第 16 回日本病態栄養学会年次学術集会(平成 25 年 1 月, 京都, 「NST メディカルスタッフセッション初級編－胃腸」座長)
 - 22) 第 16 回日本病態栄養学会年次学術集会(平成 25 年 1 月, 京都, 「NST カンファレンスⅡ NST における管理栄養士のあるべき姿」座長)
 - 23) 平成 24 年度厚生労働省院内感染対策講習会(平成 25 年 1 月, 神戸, 「院内ラウンドの実際とそのポイント」パネリスト)
 - 24) 第 7 回岐阜感染症・化学療法フォーラム(GICF)(平成 25 年 1 月, 岐阜, 特別講演 I 「今日における手術部位感染対策－予防と治療」座長)
 - 25) 第 1 回東海 ICD アカデミー(平成 25 年 1 月, 岐阜, 「感染防止に係る環境ラウンドの実際」座長)
 - 26) 第 1 回地域医療懇話会(平成 25 年 2 月, 三重, 特別講演「誤嚥性肺炎と地域連携」演者)
 - 27) 第 28 回日本環境感染学会総会シンポジウム(平成 25 年 3 月, 横浜, シンポジウム「マンネリ化しない ICT ラウンド」司会)
 - 28) 第 28 回日本環境感染学会総会シンポジウム(平成 25 年 3 月, 横浜, シンポジウム「望ましい地域連携のあり方について」演者)
 - 29) 第 28 回日本環境感染学会総会シンポジウム(平成 25 年 3 月, 横浜, シンポジウム「IT を利用した院内感染対策」司会)
 - 30) 第 28 回日本環境感染学会総会シンポジウム(平成 25 年 3 月, 横浜, シンポジウム「IT により可視化されたデータを用いた高精度の医療関連感染対策」演者)
 - 31) 第 2 回日本感染管理ネットワーク(ICNJ)学術集会(平成 25 年 5 月, 大阪, 教育講演 3「感染制御地域連携～感染防止対策加算を追い風にしたレベルアップへの取り組み」演者)
 - 32) 平成 25 年度日本病態栄養学会 NST セミナー(平成 25 年 6 月, 東京, 招待講演「4.補助食品 5.経腸栄養の種類、投与ルート、管理 6.経腸栄養の合併症対策 演習 3 症例による検討 NST 実技講習会」ファシリテーター)
 - 33) 平成 25 年度日本病態栄養学会 NST セミナー(平成 25 年 6 月, 沖縄, 招待講演「4.補助食品 5.経腸栄養の種類、投与ルート、管理 6.経腸栄養の合併症対策 演習 3 症例による検討 NST 実技講習会」ファシリテーター)
 - 34) 第 2 回救急・集中治療感染症研究会(平成 25 年 6 月, 岐阜, 教育講演「実例から学ぶ抗菌薬の適正使用」座長)
 - 35) 平成 25 年度日本病態栄養学会 NST セミナー(平成 25 年 7 月, 京都, 招待講演「4.補助食品 5.経腸栄養の種類、投与ルート、管理 6.経腸栄養の合併症対策 演習 3 症例による検討 NST 実技講習会」ファシリテーター)
 - 36) 第 5 回 J 感染制御ネットワークフォーラム教育セミナー6(平成 25 年 8 月, 仙台「重症感染症と抗菌薬適正使用」演者)
 - 37) 日本感染症学会第 26 回学術大会 ICD 講習会(平成 25 年 11 月, 岐阜, 特別講演「HCV」演者)
 - 38) 第 2 回東海医療安全研究会(平成 25 年 11 月, 名古屋, 「アナタの常識はワタシの常識ではない!! -報道事例から学ぶ「医薬品使用時の安全管理に必要な新しい視点」」座長)
 - 39) 平成 25 年度厚生労働省院内感染講習会(平成 25 年 12 月, 神戸, 「院内ラウンドの実際とそのポイント」パネリスト)
 - 40) 第 17 回日本病態栄養学会年次学術集会(平成 26 年 1 月, 大阪, パネルディスカッション「大学病院の NST の現状と患者診療動線に寄り添う栄養管理」パネリスト)

- 41) 第 17 回日本病態栄養学会年次学術集会(平成 26 年 1 月, 大阪, 「4.補助食品 5.経腸栄養の種類、投与ルート、管理 6.経腸栄養の合併症対策 演習 3 症例による検討 NST 実技講習会」ファシリテーター)
- 42) 第 25 回日本臨床微生物学会総会(平成 26 年 2 月, 名古屋, 「JANIS データ/2DCM の実践的活用法」コーディネーター)
- 43) 第 29 回日本静脈経腸栄養学会学術集会(平成 26 年 2 月, 横浜, シンポジウム「大学病院の NST の現状と患者診療動線に寄り添う栄養管理」シンポジスト)
- 44) 第 4 回東海 ICD アカデミー(平成 26 年 4 月, 名古屋, シンポジウム「SSI の予防」シンポジスト)
- 45) 第 89 回日本結核病学会総会(平成 26 年 5 月, 岐阜, ワークショップ要望演題「院内発生結核」座長)
- 46) 第 3 回岐阜県の地域医療を考える会(平成 26 年 11 月, 岐阜, パネルディスカッション「地域医療について」パネリスト)
- 47) 平成 26 年度厚生労働省院内感染対策講習会(平成 26 年 12 月, 神戸, 「地域連携ネットワーク構築」演者)
- 48) 平成 26 年度厚生労働省院内感染対策講習会(平成 26 年 12 月, 奈良, パネルディスカッション「アウトブレイク対応+地域連携ネットワーク構築」パネリスト)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

村上啓雄：

- 1) 国公立大学医学部附属病院感染対策協議会委員(～現在)
- 2) 同協議会常任委員・ガイドライン作業部会委員長(～現在)
- 3) 厚生労働省院内感染対策サーベイランス運営委員会委員(～現在)
- 4) 岐阜地方裁判所専門員(～現在)
- 5) 岐阜県感染症予防委員会情報対策部会解析小委員会委員(～現在)
- 6) 岐阜県感染症予防委員会予防接種部会委員(～現在)
- 7) 岐阜県予防接種健康被害調査専門医師集団専門医師(～現在)
- 8) 岐阜県院内感染対策協議会委員(～現在)
- 9) 岐阜県院内感染対策相談窓口回答者(～現在)
- 10) 岐阜県新型インフルエンザ対策委員会委員長(～現在)
- 11) (社)地域医療振興協会シニアプログラム「地域医療のすすめ」専門指導医(～現在)
- 12) 岐阜県へき地地域医療対策委員会委員(～現在)
- 13) 羽島市民病院改革プラン評価委員会委員(～現在)
- 14) 岐阜県立病院医療事故検討会委員(～現在)
- 15) 郡上市地域医療確保検討委員会委員(～現在)
- 16) 市立恵那病院再整備事業設計プロポーザル審査委員会委員(平成 24 年 2 月～平成 24 年 11 月)
- 17) 岐阜県総合医療センター地域医療連携推進協議会委員(～現在)
- 18) 岐阜県立病院医療事故検討委員会委員(～現在)
- 19) 岐阜県医師育成・確保コンソーシアム企画調整委員会委員(～現在)
- 20) 美濃市予防接種健康被害調査委員会委員長(～現在)
- 21) 可児市予防接種健康被害調査委員会委員(～現在)
- 22) 郡上市予防接種健康被害調査委員会アドバイザー(～現在)
- 23) 岐阜県教職員保健審査委員(～現在)
- 24) 岐阜県在宅医療連携推進会議委員(～現在)
- 25) 岐阜県人権懇話会委員(～現在)
- 26) 愛知県立病院医療事故防止対策委員会委員(～現在)
- 27) 岐阜県動物由来感染症情報関連体制整備検討会メンバー(～現在)

10. 報告書

- 1) 村上啓雄：院内感染対策の高精度化を目的とした電子システムの開発と応用に関する研究：厚生労働科学研究費補助金(新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業)「新たな薬剤耐性菌の耐性機構の解明及び薬剤耐性菌のサーベイランスに関する研究」：119-133(平成 25 年 3 月)

- 2) 渡邊珠代, 村上啓雄: 感染対策地域連携に活用できるソフトウェアの開発に関する研究: 厚生労働科学研究費補助金(新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業)「医療機関における感染制御に関する研究」: 32-58(平成 25 年 3 月)
- 3) 渡邊珠代, 村上啓雄: インフルエンザ研究 わが国の医療機関におけるインフルエンザ対策の実態と課題: 厚生労働科学研究費補助金(新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業)「医療機関における感染制御に関する研究」分担研究報告書: 63-82(平成 25 年 3 月)
- 4) 渡邊珠代, 村上啓雄: 岐阜県内感染防止対策加算算定全施設におけるデータ月例収集とフィードバックによる感染制御レベル向上への取り組みとそのアウトカム: 厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業)「感染制御システムのさらなる向上を目指す研究/特に中小医療施設を対象として」 分担研究報告書: 41-45(平成 25 年 3 月)

11. 報道

- 1) 村上啓雄: 羽島中学校で多発しているノロウイルス原因と対策など: 東海テレビ(2012 年 2 月 17 日)
- 2) 村上啓雄, 小倉真治, 吉田省造, 白井邦弘: 患者中心の医療とは何か? - 救急から在宅まで、横断的チーム医療の展開をめざす - : Nutrition Support Journal 26(13) (2012 年)
- 3) 村上啓雄: ポリオとワクチン接種の必要性: 岐阜放送(2012 年 5 月 16 日)
- 4) 村上啓雄: マイコプラズマ肺炎～県内過去最悪の勢い、患者数を上回る、乾いた咳続けば受診を: 中日新聞(2012 年 10 月 17 日)
- 5) 村上啓雄: 鵜の目～予防 マイコプラズマ肺炎: 中日新聞(2012 年 11 月 10 日)
- 6) 後藤忠雄, 村上啓雄: げんばのことば 知事選を前に③医療過疎地を支える仕組みを・医師増に見通し、次は定着: 朝日新聞(2013 年 1 月 6 日)
- 7) 村上啓雄: 「副反応、可能性低い」日本脳炎の予防接種後に男児死亡で(美濃)市調査委: 岐阜新聞他(2013 年 2 月 14 日)
- 8) 村上啓雄, 寺本貴英, 加藤達雄: 岐阜県保険環境研究所および岐阜県健康福祉部保健医療課スタッフ: 風疹予防対策～予防接種の重要性: NHK 岐阜(2013 年 5 月 15 日)
- 9) 操 奈美, 村上啓雄: 医療の仕事 理解深める 岐阜大医学部職員の子ら見学 心肺蘇生法など体験 - サマースクール取材記事: 岐阜新聞(2013 年 8 月 14 日)
- 10) 操 奈美, 村上啓雄: 人体模型を児童観察 サマースクール取材記事: 中日新聞(2014 年 8 月 19 日)
- 11) 操 奈美, 村上啓雄: 医療現場の仕事 児童が体験学習 岐阜大サマースクール取材記事: 岐阜新聞(2014 年 8 月 19 日)

12. 自己評価

評価

平成 19 年度に発足した地域医療医学センター (Center for Regional Medicine : CRM) の業務を継続した。すなわち、地域枠推薦入試、岐阜県医学生修学資金受給学生指導・支援 (第 1 種; 地域枠, 第 2 種とも)、地域医療と触れ合う医学科カリキュラム、とくに M2-3 地域配属実習コーディネート、初期臨床研修における「CRM 地域医療研修」の運営、岐阜県医師育成・確保コンソーシアムの運営、とくに岐阜県医学生修学資金受給者の初期臨床研修および指定勤務期間内の教育・ルールに基づいた適正勤務の管理、岐阜大学医学部・同附属病院女性医師就労支援の会の運営、岐阜県地域医療対策協議会など社会的活動、地域医療振興協会・自治医科大学卒業生との連携などを行ってきた。これらにより、岐阜大学医学部医学科の定員増後の学生確保、在学中の地域医療の重要性の教育、卒業後の地域医療現場での育成、医療の確保、医師の確保等に継続的に貢献できているものと思われる。

現状の問題点及びその対応策

教育職員の定員割れが 2 年程度続き、内科系分野の教授 (兼任) および専任助教 1 名のみとなっていた。平成 27 年 2 月には専任助教 1 名の雇用が確定し、この問題は解消予定である。

地域枠および岐阜県医学生第 2 種修学資金受給者の制度離脱率は、平成 26 年 12 月末現在それぞれ 0.66% (1/150)、10.07% (13/129) になっている。とくに地域枠学生の制度離脱は社会的に大きな問題である。これ以上の離脱を出さないためにも、学生や卒業後初期臨床研修および指定勤務履行中の医師に密なコンタクトをとって、コミュニケーションの質改善による防止を図っていききたい。上記フルメンバーになる CRM 教育職員に加え、現在空席となっている岐阜県医師育成・確保コンソーシアムの教育職員 2 名の雇用努力を行い、より充実したメンバーで対応したい。また、離脱防止のみならず、岐阜県内での勤務における勤務者の充実度を挙げられるよう、育成・教育・指導体制の強化を引き続き最重要

課題としたい。

研究面においては、コンソーシアム事業推進及び大きく膨らんだ地域枠および修学資金受給学生対応に追われ、CRM 地域医療研修の評価に係るアンケート調査研究を月刊地域医学への論文発表、生体支援センターとの共同研究による医療関連感染対策地域連携のアウトカム評価に関する論文の日本環境感染学会雑誌受理は達成できたものの、その他の各課題についてまとめた業績がまだ創生できていない。次期の3年間でこの部分にエフォートを集中していきたい。

今後の展望

岐阜県医師育成・確保コンソーシアム機能をさらに充実させるべく、教育職員の雇用を確保するとともに、研究課題に挙げたもののうち、とくに医師の必要度分析を各圏域別、各診療科別に詳しく実施し、論文など発表していきたい。岐阜県の医療および医師確保について、より一層今までの背作が実を結ぶよう、センター員一同精進する所存である。

(4) 医学教育開発研究センター（チュートリアル部門）

1. 研究の概要

2010年4月に文部科学省から全国唯一の医学教育共同利用拠点として認定され、(1)新しい医学教育の開発研究と普及、(2)医学教育に貢献できる人材育成、(3)国内外の医学教育機関との連携・共同研究、を大きなミッションとして取り組んでいる。

① PBL テュートリアル教育：外部に向けた PBL に関するセミナー・ワークショップを企画するとともに、岐阜大学におけるチュートリアル教育 10 年の経験を検証し、論文化を進めている。医学教育のグローバルスタンダードと分野別認証の観点からも、より進化した PBL テュートリアル教育システムの構築を目指している。

② インターネット PBL：大学や学部垣根を超え、いつでも、どこからでも参加できる能動的双方向性 Web—PBL システムを全国の教員・学生と協力しながら開発し、実際の授業で活用している。学部向けコースの他に、英語コース、大学院コースなど多彩なプログラムを用意している。今後は生涯教育（フェロシップ）への活用を図っていく予定である。

③ 医療コミュニケーション・プロフェッショナルリズム教育：模擬患者による医療面接教育法の研究と実践を進めている。4年生・5年生に対する医療面接実習、外部に向けたセミナー・ワークショップを実施している。平成 20 年度から 1 年生に対する地域体験実習（8 週間）、21 年度からライフサイクル、医師患者関係の授業、23 年度から 4 年生に対する臨床推論の授業など、系統的なプロフェッショナルリズム・行動科学教育の導入を行った。地域体験実習、医療面接実習では電子ポートフォリオによる振り返りとフィードバックを推進している。

④ 医学教育セミナー&ワークショップ：年 4 回、通算 55 回開催し、のべ参加者数は 6000 名を超えている。医学教育分野の全国 FD として定評を得ており、共同研究の推進にも大きな役割を果たしている。今後は、より系統的・高度なワークショップを提供し、一定回数の参加者には資格認定を行っていく予定である。

⑤ 多職種連携医療教育の推進：平成 23 年度から多職種連携医療教育を柱とした医学教育共同利用拠点の予算措置があり、人員と研究体制の充実を図るとともに、5 大学 1 組織からなる共同開発事業を進め、様々なモデルプログラムと教材を開発し、ワークショップ・シンポジウムによって情報発信した。

⑥ 大学院「医学教育学分野」：平成 20 年度（2008 年 4 月）に開設した岐阜大学大学院医学系研究科医療管理学講座医学教育学分野には、現在、大学院生 8 名、研究生 1 名が在籍し、研究を推進している。

⑦ 国際交流：毎年外国人客員教授もしくは特任教授を招聘し、国内における医学教育研究の推進と国際交流に貢献している。平成 24 年度：Farhan Bhanji 先生（McGill 大学）、平成 26 年度：Susan Bridges 先生（香港大学）、Phillip Evans 先生（特任教授）。

⑧ 医療英語教育：医学生の国際交流と海外臨床実習を促進するために、系統的な医療英語教育カリキュラム（課外授業）を構築し、英語模擬患者の育成と医療英語 OSCE による評価を行い、毎年 10 名程度の医学生を 4～8 週間の海外臨床実習に派遣している。

⑨ 医学教育ユニットの会：各大学の医学教育部門（ユニット）の連携組織を形成し、情報交換・共同研究の促進を図り、協力しながら課題解決とより良い教育の開発を進めている。

⑩ 情報発信：ホームページの内容を充実させ、セミナー&ワークショップ、インターネット PBL、医療面接実習、スキルスラボ、医療英語教育、国際交流、学務事務情報などの最新情報を発信している。

なお上記の研究は、すべて医学教育開発研究センター・バーチャル部門と共同して推進した。

2. 名簿

教授：	鈴木康之	Yasuyuki Suzuki
教授(併任)：	丹羽雅之	Masayuki Niwa
助教：	今福輪太郎	Rintaro Imafuku
助教：	阪下和美	Kazumi Sakashita

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 鈴木康之、藤崎和彦、丹羽雅之、田邊政裕、朝比奈真由美. 新しい医学教育の流れ'11 秋. 第 42 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋：三恵社；2012 年：1-172.
- 2) 若林英樹、鈴木康之、藤崎和彦、丹羽雅之. 新しい医学教育の流れ'12 冬. 第 43 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋：三恵社；2012 年：1-156.

- 3) 川上ちひろ, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 石川和信. 新しい医学教育の流れ'12 春. 第 44 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2012 年: 1-142.
- 4) 西城卓也, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之. 新しい医学教育の流れ'12 夏. 第 45 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2012 年: 1-240.
- 5) 西城卓也, 鈴木康之, 椎橋美智男, 菊川 誠, 青松棟吉. 新しく医学教育に携わることになった教員のための楽しい医学教育ベーシック: 新しい医学教育の流れ'12 夏. 第 45 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2012 年: 79-121.
- 6) 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 1-241.
- 7) Suzuki Y. Perspective for the future medical education in Japan: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 9-15.
- 8) 鈴木康之, 加藤智美. 問題基盤型学習: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 44-48.
- 9) Driessen E, Yoshimura M, Suzuki Y. Portfolio in Medical Education: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 194-199.
- 10) 丹羽雅之. e-ポートフォリオシステムの構築と利用: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 200-204.
- 11) 鈴木康之, 加藤智美. 小児 OSCE: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 216-221.
- 12) 丹羽雅之. Faculty Development の企画・運営: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 222-227.
- 13) 鈴木康之. 教務事務職員に知ってほしい 10 のポイント: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 228-232.
- 14) 鈴木康之, 下澤伸行. 副腎白質ジストロフィーの造血幹細胞移植療法: Annual Review 神経 2012, 東京: 中外医学社; 2012 年: 241-245.
- 15) 鈴木康之. 小児科医の役割: 遠藤文夫編. 小児科診療ガイド, 東京: 中山書店; 2012 年: 2-4.
- 16) 鈴木康之. 身体診察の基本: 遠藤文夫編. 小児科診療ガイド, 東京: 中山書店; 2012 年: 8-11.
- 17) 鈴木康之. 副腎白質ジストロフィー: 大生定義編. すべての内科医が知っておきたい神経疾患の診かた, 考え方とその対応, 東京: 羊土社; 2012 年: 265-266.
- 18) 西城卓也, 鈴木康之, 藤崎和彦, 田川まさみ, 吉岡俊正. 「医学教育専門家養成を目指したパイロットコースワーク第 3 弾: カリキュラムの開発・評価」報告: 医学教育 第 43 巻, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 66.
- 19) 西城卓也, 錦織 宏, 奈良信雄. 正統的周辺参加論に基づく Clinical Clerkship の構造: McGill 大学の事例研究: 医学教育 第 43 巻, 東京: 篠原出版新社; 2012 年: 2-8.
- 20) 藤崎和彦, 鈴木康之, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'12 秋. 第 46 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013 年: 1-170.
- 21) 丹羽雅之, 鈴木康之, 藤崎和彦, 大屋祐輔, 阿部幸恵編. 新しい医学教育の流れ'13 冬. 第 47 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013 年: 1-154.
- 22) 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 小西靖彦, 錦織 宏編. 新しい医学教育の流れ'13 春. 第 48 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013 年: 1-185.
- 23) 西城卓也, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'13 秋. 第 50 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013 年: 1-210.
- 24) 西城卓也, 今福輪太郎. 教育的基本原理の理解: Harden R, Laidlaw J. 編著, 大西弘高監訳, 西城, 今福和訳. 医学教育を学び始める人のために, 東京: 篠原出版社; 2013 年: 10-21.
- 25) 鈴木康之. 小児科医の役割: 小児科研修ノート改訂第 2 版, 東京: 診断と治療社; 2014 年: 5-6.
- 26) 鈴木康之. 医学教育研究: 医学教育白書 2014 年版, 東京: 篠原出版新社; 2014 年: 109-112.
- 27) 鈴木康之. 教育研究開発委員会: 医学教育白書 2014 年版, 東京: 篠原出版新社; 2014 年: 319.
- 28) 平出 敦, 藤崎和彦, 西城卓也, 鈴木康之. 医学教育専門家育成: 医学教育白書 2014 年版, 東京: 篠原出版新社; 2014 年: 113-115.
- 29) 丹羽雅之. 抗炎症、免疫関連薬: 野村隆英, 石川直久編. シンプル薬理学 改訂第 5 版, 東京: 南江堂; 2014 年: 223-258.
- 30) 丹羽雅之. 痛風治療薬: 野村隆英, 石川直久編. シンプル薬理学 改訂第 5 版, 東京: 南江堂; 2014 年: 273-274.
- 31) 川上ちひろ, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'13 夏. 第 49 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2014 年: 1-131.
- 32) 丹羽雅之. 医学教育ユニットの現状: 医学教育学会 広報・情報基盤開発委員会編. 医学教育白書 2014 年版, 医学教育別冊, 東京: 篠原出版新社; 2014 年: 116-118.

著書 (欧文)

- 1) Tomatsu S, Montaña AM, Oikawa H, Giugliani R, Harmatz P, Smith M, Suzuki Y, Orii T. Impairment of Body Growth in Mucopolysaccharidoses. In: Preedy VR ed. Handbook of Growth and Growth Monitoring in Health and Disease. Springer; 2012:2091-2117.
- 2) Hara A, Aoki H, Takamatu M, Hatano Y, Tomita H, Kuno K, Niwa M, Takahiro Kunisada. Human embryonic stem cells transplanted into mouse retina induces neural differentiation. In Tumors of the

central nervous system, Stem Cells and Cancer Stem Cells, pt2. Part 4. Springer; 2012:291-298.

- 3) Niwa M, Nakashima M, Satoh K, Takamatsu M, Kobayashi K, Hatano Y, Hara A, Hypothermia and Hyperthermia affect neuronal degeneration, delayed neuronal death and microglial activation following transient forebrain ischemia. In: Delgado JIV and Garza VGF, ed Hypothermia: Prevention, Recognition and Treatment. Nova Science Publish; 2012:1-10.

総説 (和文)

- 1) 鈴木康之. 成人学習, 日本小児科学会雑誌 2012年; 116巻: 133-135.
- 2) 鈴木康之, 関口進一郎. カリキュラムの基本, 日本小児科学会雑誌 2012年; 116巻: 813-815.
- 3) 西屋克己, 鈴木康之. 学習者評価の基本, 日本小児科学会雑誌 2012年; 116巻: 1197-1198.
- 4) 鈴木康之. よりよい後進育成は全ての医療者の責任であり, 医療羅針盤・私の提言-今こそティーチャー・トレーニングが求められている, 月刊新医療 2012年; 449巻: 18-21.
- 5) 鈴木康之. モルキオ症候群. VIII代謝<ムコ多糖症>, 内科増大号: 知っておきたい内科症候群 2012年; 109巻: 1361-1362.
- 6) 鈴木康之. ムコ多糖症 III型, 日本臨床 新領域別症候群シリーズ 2012年; 20巻: 539-542.
- 7) 鈴木康之. ムコ多糖症の治療とケア, 難病と在宅ケア 2012年; 18巻: 20-23.
- 8) 鈴木康之. ムコ多糖症, Brain Medical 2012年; 24巻: 247-254.
- 9) 鈴木康之. 医学・歯学教育者の人材育成, 日本歯科医学教育学会雑誌 2013年; 29巻: 7-10.
- 10) 真嶋由貴恵, 中村裕美子, 丹羽雅之, 木下淳博, 吉田素文. 医療系教育における eラーニングの動向-医療系 eラーニング全国交流会(JMeL)から-, 教育システム情報学会 2014年; 31巻: 8-18.
- 11) 西城卓也, 丹羽雅之, 川上ちひろ, 今福輪太郎, 坂下和美, 藤崎和彦, 鈴木康之. 医学者教育における教育者養成のこれまでとこれから-医学教育セミナーとワークショップの歴史が示す将来-, 医学教育 2014年; 45巻: 13-24.

総説 (欧文)

- 1) Tomatsu S, Mackenzie WG, Theroux MC, Mason RW, Thacker MM, Shaffer TH, Montaña AM, Rowan D, Sly W, Alméciga-Díaz CJ, Barrera LA, Chinen Y, Yasuda E, Ruhnke K, Suzuki Y, Orii T. Current and emerging treatments and surgical interventions for Morquio A syndrome: a review. Research and Reports in Endocrine Disorders. 2012;2:65-77.
- 2) Suzuki Y, Niwa M. e-PBL: possibilities and limitations. J Med Education. 2012;16:1-8.
- 3) Tomatsu S, Alméciga-Díaz CJ, Barbosa H, Montaña AM, Barrera LA, Shimada T, Yasuda E, Mackenzie WG, Mason RW, Suzuki Y, Orii KE, Orii T. Therapies of mucopolysaccharidosis IVA (Morquio A syndrome). Expert Opinion on Orphan Drugs. 2013;1:805-818.

原著 (和文)

- 1) 西城卓也, 久保田伊代, 鈴木康之. 認知的徒弟制に基づいた, 学生による臨床指導医評価: マーストリヒト臨床教育評価表(The Maastricht Clinical Teaching Questionnaire (MCTQ))日本語版, 医学教育 2012年; 43巻: 86.
- 2) 阿部恵子, 若林英樹, 西城卓也, 川上ちひろ, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之. Trait Emotional Intelligence Que-SFと Jefferson Scale of Physician Empathy の日本語版開発と信頼性・妥当性の検討, 医学教育 2012年; 43巻: 351-359.
- 3) 大西弘高, 川崎 勝, 椎橋美智男, 阿部幸恵, 大久保由美子, 片岡仁美, 杉本なおみ, 高村昭輝, 内藤 亮, 丹羽雅之. 医学教育情報館(MEAL)の構築プロセス, 医学教育 2012年; 43巻: 215-220.
- 4) 阿部恵子, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之. 医学生の Emotional Intelligence (EI)と Empathy: 性差および学年差の検討, 医学教育 2013年; 44巻: 315-326.

原著 (欧文)

- 1) Tanaka A, Okuyama T, Suzuki Y, Sakai N, Takakura H, Sawada T, Tanaka T, Otomo T, Ohashi T, Ishige-Wada M, Yabe H, Ohura T, Suzuki N, Kato K, Adachi S, Kobayashi S, Mugishima H, Kato S. Long-term efficacy of hematopoietic stem cell transplantation on brain involvement in patients with mucopolysaccharidosis type II: A nationwide survey in Japan. Molecular Genetics and Metabolism. 2012;107:513-520. IF 2.827
- 2) Goda W, Satoh K, Nakashima M, Hara A, Niwa M. PBN fails to suppress in delayed neuronal death of hippocampal CA1 injury following transient forebrain ischemia in gerbils. Neurosci Lett. 2012;517:47-51. IF 2.055
- 3) Abe K, Evans P, Austin EJ, Suzuki Y, Fujisaki K, Niwa M, Aomatsu M. Expressing one's feelings and listening to others increases emotional intelligence: a pilot study of Asian medical students. BMC Med Educ. 2013;13:82. IF 1.409
- 4) Dũng VC, Tomatsu S, Montaña AM, Gottesman G, Bober MB, Mackenzie W, Maeda M, Mitchell GA, Suzuki Y, Orii T. Mucopolysaccharidosis IVA: Correlation between genotype, phenotype and keratin sulfate levels. Mol Genet Metab; 2013;110:129-138. IF 2.827
- 5) Tomatsu S, Fujii T, Fukushi M, Oguma T, Shimada T, Maeda M, Kida K, Shibata Y, Futatsumori H, Montaña AM, Mason RW, Yamaguchi S, Suzuki Y, Orii T. Newborn screening and diagnosis of

- mucopolysaccharidoses. *Mol Genet Metab*; 2013;111:42-53. IF 2.827
- 6) Yasuda E, Fushimi K, Suzuki Y, Shimizu K, Takami T, Zustin J, Patel P, Ruhnke K, Shimada T, Boyce B, Kokas T, Barone C, Theroux M, Mackenzie W, Nagel B, Ryerse JS, Orii KE, Iida H, Orii T, Tomatsu S. Pathogenesis of Morquio A syndrome: an autopsied case reveals systemic storage disorder. *Mol Genet Metab*; 2013;109:301-311. IF 2.827
- 7) Patel P, Suzuki Y, Maeda M, Yasuda E, Shimada T, Orii KE, Orii T, Tomatsu S. Growth charts for patients with Hunter Syndrome. *Mol Genet Metab*. 2014;1:5-18. IF 2.827
- 8) Tomatsu S, Shimada T, Mason RW, Kelly J, LaMarr WA, Yasuda E, Shibata Y, Futatsumori H, Montaña AM, Yamaguchi S, Suzuki Y, Orii T. Assay for Glycosaminoglycans by Tandem Mass Spectrometry and its Applications. *J Anal Bioanal Tech*. 2014 DOI: <http://dx.doi.org/10.4172/2155-6121.S2-006>. IF 3.120
- 9) Taguchi A, Niwa M, Hoshi M, Saito K, Masutani T, Hisamatsu K, Kobayashi K, Hatano Y, Tomita H, Hara A. Indoleamine 2,3-dioxygenase 1 is upregulated in activated microglia in mice cerebellum during acute viral encephalitis. *Neurosci Lett*. 2014;564:120-125. IF 2.055
- 10) Niwa M, Yoshida S, Takamizawa K, Nagaoka S, Kawakubo N, Takahashi Y, Suzuki Y. Facilitation of web-based Internet PBL: what is an adequate group size?. *IeJSME*. 2014;8:4-11. IF 0.500
- 11) Imafuku R, Kataoka R, Mayahara M, Suzuki H, Saiki, T. Students' experiences in interdisciplinary problem-based learning: A discourse analysis of group interaction. *Interdisciplinary Journal of Problem-based Learning*. 2014;8:1-18.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：岐阜大学医学教育開発研究センター；文科省特別経費教育関係共同実施分：多職種連携医療教育法の開発とFDの全国展開；平成23-26年度；62,000千円(18,500：14,500：14,500：14,500千円)
- 2) 研究代表者：鈴木康之，研究分担者：藤崎和彦，丹羽雅之，西城卓也；科学研究費補助金基盤研究(B)：医学・医療教育指導者の育成システム構築に関する研究；平成23-25年度；14,000千円(5,000：4,500：4,500千円)
- 3) 研究代表者：衛藤義勝，研究分担者：鈴木康之；厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業：ライソゾーム病(ファブリー病含む)に関する調査研究；平成22-26年度；12,900千円(3,000：3,000：3,000：900千円)
- 4) 研究代表者：丹羽雅之；科学研究費補助金基盤研究(C)：コバルトクロライド誘発網膜神経障害モデルを用いた再生治療に関する基礎的研究；平成22-24年度；4,160千円(1,690：1,560：910千円)
- 5) 研究代表者：河野健一，研究分担者：丹羽雅之；科学研究費補助金基盤研究(C)：6年一貫プロフェシヨナリズム教育におけるe-ポートフォリオの開発と実践；平成22-24年度；3,640千円(1,300：1,170：1,170千円)
- 6) 研究代表者：阿部恵子(名古屋大学)，研究分担者：鈴木康之，藤崎和彦，丹羽雅之，若林英樹，西城卓也，川上ちひろ；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：医学生の情動能力育成のための6年間継続的コミュニケーション教育プログラムの開発；平成23-25年度；5,200千円(2,340：1,430：1,430千円)
- 7) 研究代表者：西城卓也，研究分担者：鈴木康之，川上ちひろ；科学研究費補助金基盤研究(B)：小グループ学習における医学生の学習スタイルに関する文化的検証とモデル開発；平成24-26年度；3,500千円(1,300：1,500：700千円)
- 8) 研究代表者：今福輪太郎；大学活性化経費(教育)：コミュニケーション能力の育成と学習のふりかえりを促すためのフィードバックセッションの開発；平成25年度；500千円
- 9) 研究代表者：今福輪太郎；科学研究費補助金若手研究(B)：専門職連携における医療人としてのアイデンティティ形成過程の解明とその教育的応用；平成26-28年度；3,640千円(1,560：1,430：650千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

鈴木康之：

- 1) 日本医学教育学会理事, 評議員(～現在)
- 2) 日本小児科学会代議員(～現在)
- 3) 日本先天代謝異常学会, 評議員(～現在)
- 4) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)
- 5) 東海臨床遺伝・代謝懇話会世話人(～現在)
- 6) 日本シミュレーション医療教育学会理事, 評議員(～現在)

丹羽雅之：

- 1) 日本炎症・再生医学会評議員(～現在)
- 2) 日本薬理学会評議員(～現在)
- 3) 日本医学教育学会評議員(～現在)
- 4) 日本臨床薬理学会評議員(～現在)
- 5) 日本医学教育学会広報・情報基盤委員会委員(～現在)
- 6) 医療系 e-learning 全国交流会 副会長(～現在)
- 7) 教育システム情報学会編集委員(～現在)
- 8) 日本シミュレーション医療教育学会幹事, 評議員(～現在)
- 9) 東海7大学医学教育連絡協議会幹事(～現在)
- 10) 教育システム情報学会人材育成委員会医療・看護部会委員(～現在)

今福輪太郎：

- 1) 日本シミュレーション医療教育学会編集委員(～現在)

阪下和美：

- 1) 日本医学教育学会国際関係委員(～現在)

2) 学会・講習会開催

鈴木康之：

- 1) 第43回医学教育セミナーとワークショップ(平成24年1月, 岐阜)
- 2) 第44回医学教育セミナーとワークショップ(平成24年5月, 福島)
- 3) 第45回医学教育セミナーとワークショップ(平成24年8月, 岐阜)
- 4) 第46回医学教育セミナーとワークショップ(平成24年10月, 岐阜)
- 5) 第54回日本先天代謝異常学会(平成24年11月, 岐阜)
- 6) 第47回医学教育セミナーとワークショップ(平成25年1月, 沖縄)
- 7) 第48回医学教育セミナーとワークショップ(平成25年6月, 京都)
- 8) 第49回医学教育セミナーとワークショップ(平成25年8月, 岐阜)
- 9) 第50回医学教育セミナーとワークショップ(平成25年11月, 岐阜)
- 10) 第51回医学教育セミナーとワークショップ(平成26年1月, 東京)
- 11) 第52回医学教育セミナーとワークショップ(平成26年5月, 秋田)
- 12) 第53回医学教育セミナーとワークショップ(平成26年8月, 岐阜)
- 13) 第54回医学教育セミナーとワークショップ(平成26年10月, 福岡)

丹羽雅之：

- 1) 第6回医療系全国交流会(平成24年1月, 岐阜)
- 2) 第43回医学教育セミナーとワークショップ(平成24年1月, 岐阜)
- 3) 第44回医学教育セミナーとワークショップ(平成24年5月, 福島)
- 4) 第45回医学教育セミナーとワークショップ(平成24年8月, 岐阜)
- 5) 第46回医学教育セミナーとワークショップ(平成24年10月, 岐阜)

- 6) 第 47 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 1 月, 沖縄)
- 7) 第 48 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 6 月, 京都)
- 8) 第 49 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 8 月, 岐阜)
- 9) 第 50 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 11 月, 岐阜)
- 10) 第 51 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 26 年 1 月, 東京)
- 11) 第 52 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 26 年 5 月, 秋田)
- 12) 第 53 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 26 年 8 月, 岐阜)
- 13) 第 54 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 26 年 10 月, 福岡)

3) 学術雑誌

鈴木康之 :

- 1) Medical Education ; Editor(～現在)
- 2) 日本シミュレーション医療教育学会雑誌 ; 編集委員(平成 25 年～現在)

丹羽雅之 :

- 1) 教育システム情報学会 ; 編集委員(～現在)

今福輪太郎 :

- 1) 日本シミュレーション医療教育学会 ; 編集委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

鈴木康之 :

- 1) 2nd Asian Congress for Inherited Metabolic Disease. (2012.04, Seoul, Symposium: Hematopoietic Stem Cell Transplantation for X-linked Adrenoleukodystrophy; Symposist)
- 2) 第 37 回日本小児神経学会東海地方会(平成 24 年 7 月, 名古屋, 特別講演「医療者教育 10 年の経験から」演者)
- 3) 第 44 回日本医学教育学会(平成 24 年 7 月, 横浜, シンポジウム「認定医学教育専門家の位置づけと求められる役割」座長)
- 4) 第 44 回日本医学教育学会(平成 24 年 7 月, 横浜, パネルディスカッション「診療参加型臨床実習の評価」座長)
- 5) 第 54 回日本先天代謝異常学会(平成 24 年 11 月, 岐阜, 会長講演「研究生活からの学び」演者)
- 6) 第 26 回日本小児脂質研究会(平成 24 年 11 月, 川越, 特別講演「ペルオキシソームにおける脂肪酸代謝とその異常」演者)
- 7) 第 12 回日本小児医学教育研究会(平成 24 年 12 月, 東京, 特別講演「小児科専門医の能力向上を目指して」演者)
- 8) 平成 24 年度先導的大学の改革推進委託事業「高齢社会を踏まえた医療供給体制見直しに対応する医療系教育の在り方に関する調査研究」医学チーム(平成 24 年 12 月, 東京, シンポジウム「多職種連携教育法の開発と FD の全国展開」シンポジスト)
- 9) 第 32 回日本歯科医学教育学会(平成 25 年 7 月, 札幌, 特別講演「医学・歯学教育者の人材育成」演者)
- 10) 第 45 回日本医学教育学会(平成 25 年 7 月, 千葉, シンポジウム「コンピテンシーを基盤とする専門医認定をめざして: 日本小児科学会の取り組み」演者)
- 11) 第 45 回日本医学教育学会(平成 25 年 7 月, 千葉, パネルディスカッション「教育の質の改善をめざして, 医学教育の根拠を遣う, 創る」座長)
- 12) 第 2 回全国シンポジウム「日本の国情・2 次医療研の実情を熟考して、理想的医師・医療者育成教育の展開を考える」(平成 25 年 11 月, 秋田, 特別講演「医療者教育の人材育成戦略—日本の覚悟と挑戦: MEDC 12 年の経験から」演者)
- 13) 第 127 回関東連合産科婦人科学会(平成 26 年 6 月, 東京, モーニングセミナー「専門医制度改革を視野に入れた日本小児科学会の取組」演者)
- 14) 第 46 回日本医学教育学会大会(平成 26 年 7 月, 和歌山, 日韓医学教育学会交流招請講演「Students' perception of education climate in Korean medical schools」座長)
- 15) 第 46 回日本医学教育学会大会(平成 26 年 7 月, 和歌山, パネルディスカッション「医学教育研究はじめの一步: 論文執筆に向けた 12 Tips」座長)

- 16) 第46回日本医学教育学会大会(平成26年7月, 和歌山, 産学連携セミナー4「国際的医療人育成を視野に入れた臨床医学教育のあり方とオンラインデータベースの活用法」座長)
- 17) 第46回日本医学教育学会大会(平成26年7月, 和歌山, Lunch Talk with the Specialist 2「making research relevant: can we improve on our present position?」座長)
- 18) 3rd Asia-Pacific Joint Conference on Problem-Based Learning (APJC-PBL) 2014(2014.12, Thailand, Debate Session II: e-PBL vs f-PBL; presenter)
- 19) 第14回日本小児医学教育研究会(平成26年12月, 大阪, 特別講演「小児科指導者として如何に小児科医の総合的能力を伸ばすか?」演者)

丹羽雅之:

- 1) 第7回医療系eラーニング全国交流会(平成25年1月, 徳島, 招待講演, 座長)
- 2) 第45回日本医学教育学会(平成25年7月, 千葉, パネルディスカッション「ネットワークを活用した医療者教育の情報のあり方」座長)
- 3) 第46回日本医学教育学会(平成26年7月, 和歌山, シンポジウム「eラーニングを機能させるためのシステムと考え方」座長)

阪下和美:

- 1) 第2回全国シンポジウム「日本の国情・2次医療圏の実情を熟考して, 理想的医師・医療者育成教育の展開を考える 2013」(平成25年11月, 秋田, シンポジウム「総合小児科医の作り方～米国レジデンシー教育から日本が応用できるもの～」演者・シンポジスト)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

鈴木康之:

- 1) 医師国家試験委員(～平成24年)
- 2) 日本ムコ多糖症親の会顧問(～現在)
- 3) ALD親の会顧問(～現在)
- 4) 東京医科歯科大学医歯学教育システム研究センター運営委員(～現在)
- 5) 社団法人日本専門医制評価・認定機構チーフサーベイヤー(～平成25年)
- 6) 科学研究費委員会専門委員(日本学術振興会)(平成24年度)
- 7) JICA「ベトナム保健医療従事者の質の改善プロジェクト」(平成24年度～現在)
- 8) 国立大学医学部長会議 教育制度・カリキュラムに関する小委員会委員(平成25年度～現在)
- 9) 国立大学医学部長会議 臨床教育合同会議委員(平成26年度～現在)
- 10) 日本専門医機構基本領域(小児科)専門医委員会委員(平成26年度～現在)
- 11) 日本専門医機構基本領域(小児科)研修委員会委員(平成26年度～現在)

10. 報告書

- 1) 鈴木康之, 田邊政裕, 朝比奈真由美: ニュース, 第42回医学教育セミナーとワークショップ in 千葉: 医学教育 43: 32(平成24年2月)
- 2) 藤崎和彦, 田川まさみ, 西城卓也, 井内康輝, 錦織 宏, 渡邊洋子, 大谷 尚, 守屋利佳, 吉岡俊正, 吉田素文, 鈴木康之: 日本医学教育学会認定医学教育専門家資格制度創設への提言: 医学教育 43: 221-231(平成24年6月)
- 3) 丹羽雅之: 全国ユニット機関名簿: 医学教育 43: 253-262(平成24年6月)
- 4) 鈴木康之: 第54回日本先天代謝異常学会: 特殊ミルク情報 48: 61-63(平成24年11月)
- 5) 丹羽雅之: アナウンスメント, 第47回医学教育セミナーとワークショップ: 医学教育 43: 440(平成24年12月)
- 6) 丹羽雅之: 全国ユニット機関名簿: 医学教育 44: 198-208(平成25年6月)
- 7) 鈴木康之, 錦織 宏: ニュース, 第48回医学教育セミナーとワークショップ in 京都大学: 医学教育 44: 368-369(平成25年10月)
- 8) 鈴木康之: ムコ多糖症 II 型の成長曲線作成: 厚生労働省研究費補助金(難治性疾患克服研究事業)平成25年度総括・分担研究年度終了報告書: 69-71(平成26年3月)

- 9) 鈴木康之：ムコ多糖症および副腎白質ジストロフィーの早期診断治療：厚生労働省研究費補助金(難治性疾患克服研究事業)総合研究報告書：109-112(平成 26 年 3 月)
- 10) 鈴木康之：医学・医療教育指導者の育成システム構築に関する研究：科学研究費補助金基盤研究(B)23390129 平成 23 年度～25 年度研究成果報告書：1-118(平成 26 年 3 月)
- 11) 丹羽雅之：全国ユニット機関名簿：医学教育 45：224-236(平成 26 年 6 月)
- 12) 今福輪太郎：意見. 特集「多職種連携教育」を読んで：医学教育 45(4): 296-297(平成 26 年 8 月)
- 13) 今福輪太郎, 長谷川仁志：ニュース. 第 52 回医学教育セミナーとワークショップ in 秋田：医学教育 45(4)：300-302(平成 26 年 8 月)
- 14) 鈴木康之：ニュース. 第 53 回医学教育セミナーとワークショップ：医学教育 45：381-383(平成 26 年 10 月)

11. 報道

- 1) 鈴木康之：お医者さんになるためには？：中日こどもウィークリー(2012 年 3 月 31 日)
- 2) 阪下和美：Girls, be ambitious !!米国女性医師の出産・育児事情から：週間医学界新聞 第 3026 号(2013 年 5 月)
- 3) 医療現場の連携学ぶ 学生ら多職種セミナー：岐阜新聞(2014 年 6 月 14 日)
- 4) 医学教育の拠点, 国際化へ 岐阜大学の研究センター来年度以降も文科省認定：朝日新聞(2014 年 9 月 18 日)
- 5) 全国の医学教育共同利用拠点 岐阜大センター再認定：岐阜新聞(2014 年 9 月 18 日)
- 6) 第 54 回医学教育セミナーとワークショップ in 九州大学：文教ニュース(2014 年 11 月 24 日)
- 7) 岐阜大が九大と医学教育セミナーとワークショップ：文教速報(2014 年 12 月 8 日)

12. 自己評価

評価

2001 年に医学部として初の全国共同利用施設として設置され、2010 年 4 月には文部科学省から全国唯一の医学教育共同利用拠点として認定され、全国的に認知・評価されたと自己評価している。2010 年度には外部評価を受け、高い評価を得た。また外国人客員教授や研究者を積極的に招聘し、国際学会活動、国際共同研究を推進することによって、国際的にも当センターの存在が知られるようになった(ヨーロッパ医学教育連合のウェブサイトにも国際的な医学教育センターの一つとして情報が掲載されている)。近年、各大学に医学教育部門が設置されたが、これらの組織との連携も強まりつつある。2008 年度から大学院が設置され、人材育成・研究体制が整いつつある。2015 年度から更に 5 年間、共同利用拠点として文部科学省の認定を受けた。

現状の問題点及びその対応策

グローバルスタンダードを見据えつつ、日本の特長を活かした医学教育方法を開発してゆくことが今後の課題である。平成 20 年度から導入された新カリキュラムによって教育された学生の成果を institutional research として検証していく必要がある。医学部の学生定員が急増しているが、教育の人的・経済的な裏づけは極めて重要な課題となっており、教育を担当する立場から提言していきたい。人材育成に関しては、教職員スタッフに対する FD の推進と将来の医学教育学を支える人材育成を平行して進める必要がある。後者については大学院が設置され、基盤が整備されつつあるが、更に裾野を広げていく必要があり、国内外の医学教育部門との連携を一層強化させる必要もある。

今後の展望

医学教育分野で解決すべき課題は山積している。教育の重要性は誰もが認識しているが、実際には種々の制約によって、それが実現できない現状がある。教育の重要性を社会に対して発信し、望ましい教育が実現されるよう努力していきたい。

(5) 医学教育開発研究センター（バーチャルスキル部門）

1. 研究の概要

2010年4月に文部科学省から全国唯一の医学教育共同利用拠点として認定され、(1)新しい医学教育の開発研究と普及、(2)医学教育に貢献できる人材育成、(3)国内外の医学教育機関との連携・共同研究、を大きなミッションとして取り組んでいる。

- ① コミュニケーション・プロフェッショナル教育：1年生の地域体験実習、3年生の医師患者関係、4～5年生の医療面接実習において、模擬患者（SP）や地域の保育園児、妊婦、高齢者の協力のもとに実施している。地域体験実習と医療面接実習ではWeb上のe-ポートフォリオを用いてのreflectionも行っている。医療面接実習では実習を円滑に進めるための事前オリエンテーションも導入して成果が上がっている。また、Advanced OSCEの拡充など、増加するSPニードに対応するためにも新たにSP養成講座もスタートさせている。
- ② シミュレーション教育：4年生のOSCE前の臨床入門実習、4～5年生の臨床実習中に、スキルラボを中心に実施しており、卒後も医師育成推進センターが中心になってスキルラボでの研修を実施している。今年度は医学教育学会SP教材開発委員会との共同で、医学生の診療技能とシミュレーション教育の利用に関する調査研究を実施し、現在結果を解析中である。
- ③ OSCE, Advanced OSCE：医師育成推進センターとの協力で4年生の共用試験OSCEだけでなく、5年生に対してもAdvanced OSCEを導入しており、5～6年生の診療参加型実習で効果的に学べるような仕組みとして、模擬患者にも協力してもらいながら実施している。
- ④ 臨床推論実習：4年生の共用試験OSCE後の学生を対象に臨床推論実習を実施しており、OSCEで評価されたインタビュースキルと、CBTで評価された医学知識が有機的に統合された臨床推論能力の開発を目指して、総合診療医学講座とも協力しながら、模擬患者の協力も得て実施している。
- ⑤ 医学教育専門家養成：医学教育学会専門家制度委員会とも協力しながら、わが国で求められる医学教育専門家像の確立とその養成を目指して行っており、医学教育セミナー&WSとリンクした新しい専門家養成制度を模索中である。
- ⑥ 学習や大学生活に困難をかかえる学生の支援：近年、大学教育でも問題になってきている、学習や大学生活に困難をかかえる学生の支援について、問題事例の収集をとっかかりとして、支援システムの確立を目指して活動を始めている。

なお上記の研究は、すべて医学教育開発研究センター・テュートリアル部門と共同して推進した。

2. 名簿

教授： 藤崎和彦 Kazuhiko Fujisaki
准教授： 西城卓也 Takuya Saiki
助教： 川上ちひろ Chihiro Kawakami

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 鈴木康之、藤崎和彦、丹羽雅之、田邊政裕、朝比奈真由美. 新しい医学教育の流れ'11秋. 第42回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋：三恵社；2012年：1-172.
- 2) 若林英樹、鈴木康之、藤崎和彦、丹羽雅之. 新しい医学教育の流れ'12冬. 第43回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋：三恵社；2012年：1-156.
- 3) 川上ちひろ、鈴木康之、藤崎和彦、丹羽雅之、石川和信. 新しい医学教育の流れ'12春. 第44回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋：三恵社；2012年：1-142.
- 4) 西城卓也、鈴木康之、藤崎和彦、丹羽雅之. 新しい医学教育の流れ'12夏. 第45回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋：三恵社；2012年：1-240.
- 5) 西城卓也、鈴木康之、椎橋美智男、菊川 誠、青松棟吉. 新しく医学教育に携わることになった教員のための楽しい医学教育ベーシック：新しい医学教育の流れ'12夏. 第45回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋：三恵社；2012年：79-121.
- 6) 鈴木康之、藤崎和彦、丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京：篠原出版新社；2012年：1-241.
- 7) 藤崎和彦. 医学教育専門家養成：鈴木康之、藤崎和彦、丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京：篠原出版新社；2012年：16-22.
- 8) 藤崎和彦. 医療コミュニケーション教育：鈴木康之、藤崎和彦、丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京：篠原出版新社；2012年：56-62.
- 9) 西城卓也、川尻宏昭. 外来における臨床教育：鈴木康之、藤崎和彦、丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京：篠原出版新社；2012年：114-118.

- 10) 川上ちひろ, 加藤智美, 阿部恵子, 村岡千種, 那波潤美. 初年時における地域基盤型教育: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012年: 146-150.
- 11) 藤崎和彦. 学習方法: 全国歯科衛生士教育協議会編. 全国歯科衛生士教育協議会「平成24年度歯科衛生士専任教員講習会Iテキスト」, 名古屋: 全国歯科衛生士教育協議会; 2012年: 5-16.
- 12) 西城卓也, 菊川 誠, 錦織 宏. アジア・太平洋地区における医学教育のコラボレーション: 医学教育 第43巻, 東京: 篠原出版新社; 2012年: 40.
- 13) 西城卓也, 鈴木康之, 藤崎和彦, 田川まさみ, 吉岡俊正. 「医学教育専門家養成を目指したパイロットコースワーク第3弾: カリキュラムの開発・評価」報告: 医学教育 第43巻, 東京: 篠原出版新社; 2012年: 66.
- 14) 西城卓也, 錦織 宏, 奈良信雄. 正統的周辺参加論に基づく Clinical Clerkship の構造: McGill 大学の事例研究: 医学教育 第43巻, 東京: 篠原出版新社; 2012年: 2-8.
- 15) 鈴木富雄, 高見勇一郎, 伴信太郎, 西城卓也, 丹下直幸. 関節炎が18年間先行した乾癬性関節炎の1例: 日本脊椎関節炎学会 第4巻, 2012年: 53-58.
- 16) 西城卓也. 臨床推論の教育: 大西弘高編. The 臨床推論, 東京: 南山堂; 2012年: 212-220.
- 17) 西城卓也. 医学教育研究の努力のご褒美: 医学教育 第43巻, 東京: 篠原出版新社; 2012年: 394-395.
- 18) 西城卓也. 医学教育の輸出入と新植民地主義: 医学教育 第43巻, 東京: 篠原出版新社; 2012年: 429-431.
- 19) 藤崎和彦. 学習方法: 全国歯科衛生士教育協議会編. 全国歯科衛生士教育協議会「平成25年度歯科衛生士専任教員講習会IIテキスト」, 名古屋: 全国歯科衛生士教育協議会; 2013年: 26-36.
- 20) 藤崎和彦. 医療コミュニケーション研究の現状とチーム医療: 石崎雅人, 野呂幾久子編. これからの医療コミュニケーションに向けて, 東京: 篠原出版新社; 2013年: 23-30.
- 21) 西城卓也, 尾原晴雄, 錦織 宏, 向原 圭, 石川ひろの, 大滝純司, 伊藤俊之, 鈴木康之. 医学教育研究はじめの一歩—リサーチクエストを立ててみよう: 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ12 秋—第46回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013年: 87-97.
- 22) 西城卓也, 吉岡俊正, Keh-Min Liu, Ducksun Ahn, 鈴木康之, 奈良信雄, 北村 聖. WFME Global Standard: Perspectives from East Asian Experiences—adaptation, reformation or Quality improvement?: 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ13 冬—第47回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013年: 5-28.
- 23) 西屋克己, 西城卓也. 1章: よい教育者とは: 大西弘高監訳, 西屋 和訳. 医学教育を学び始める人のために, 東京: 篠原出版新社; 2013年: 3-9.
- 24) 今福輪太郎, 西城卓也. 2章: 基本的教育原理の理解: 大西弘高監訳, 今福, 西城 和訳. 医学教育を学び始める人のために, 東京: 篠原出版新社; 2013年: 10-21.
- 25) 西城卓也, Yvonne Steinert, 阪下和美. 魅力あるワークショップの構築: 西城卓也, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ13 秋—第50回記念医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013年: 43-65.
- 26) 西城卓也, 尾原晴雄, 錦織 宏, 向原 圭, 石川ひろの, 大滝純司, 伊藤俊之, 鈴木康之. 医学教育研究のスタートを洗練する: 西城卓也, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ13 秋—第50回記念医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013年: 33-42.
- 27) 西城卓也. 英語を必要とする, 明確かつ具体的なゴールが英語力を上達させる: 岐阜大学教養教育推進センター編. 教養ブックレット. 大学で「使える」英語を学ぶ方法, 岐阜: みらい; 2013年: 54-55.
- 28) 平出 敦, 藤崎和彦, 西城卓也, 鈴木康之. 医学教育専門家育成: 日本医学教育学会編. 医学教育白書2014年版, 東京: 篠原出版新社; 2014年: 113-115.
- 29) 藤崎和彦. プロフェッショナルリズム教育: 日本医学教育学会編. 医学教育白書2014年版, 東京: 篠原出版新社; 2014年: 146-154.
- 30) 藤崎和彦. 科学論—命と癒やしの科学論—: 国立大学法人岐阜大学教養教育推進センター編. 教員による授業の工夫集, 岐阜: 岐阜大学教養教育推進センター; 2014年: 18-19.
- 31) 川上ちひろ, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ13 夏. 第49回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2014年: 1-131.
- 32) 西城卓也. これからの医療コミュニケーションへ向けて: 医学教育 第45巻, 東京: 篠原出版新社; 2014年: 8.
- 33) 西城卓也. プライマリ・ケア医のためのチェックポイント集. 医学教育 第45巻, 東京: 篠原出版新社; 2014年: 12.
- 34) 西城卓也, 藤崎和彦, 奈良信雄. 第51回医学教育セミナーとワークショップ in 東京医科歯科大学: 医学教育 第45巻, 東京: 篠原出版新社; 2014年: 46-47.
- 35) 西城卓也. 第54回医学教育セミナーとワークショップ in 九州大学: 医学教育 第45巻4号, 東京: 篠原出版新社; 2014年: 292.
- 36) 青松棟吉, 大谷 尚, 西城卓也. 医学教育における研究倫理: 医学教育 第45巻4号, 東京: 篠原出版新社; 2014年: 249-267.
- 37) 西城卓也. 教育実践への情熱を基にした, 冷静なリサーチクエストの生成: 医学教育 第45巻5号, 東京: 篠原出版新社; 2014年: 331-337.

著書 (欧文)

- 1) Stalmeijer RE, Saiki T, Durante E, Strand P, Fernando C. With a little help from your alumni. SHE

communicates; 2012:8-9.

- 2) Yoshida T, Fujisaki K. Interpersonal Communication Training in Dental Education. In: David I. Mostofsky, Farida Fortune, eds. Behavioral Dentistry, 2nd ed. Iowa: Blackwell Pub Professional; 2014:283-292.

総説 (和文)

- 1) 西城卓也. 行動主義から構成主義, 医学教育 2012年; 43巻: 290-291.
- 2) 西城卓也. 正統的周辺参加と認知的徒弟制, 医学教育 2012年; 43巻: 292-293.
- 3) 辻井正次, 川上ちひろ. 性と関係性の教育～発達障害の子どもとの実践から～ 第10回「バーチャル(仮想)な世界と現実世界のつきあい方を区別する」, 健康教室 2012年; 第734集: 41-43.
- 4) 辻井正次, 川上ちひろ. 性と関係性の教育～発達障害の子どもとの実践から～ 第11回「性的関心があると「誤解」されやすい行動を吟味する」, 健康教室 2012年; 第735集: 43-45.
- 5) 辻井正次, 川上ちひろ. 性と関係性の教育～発達障害の子どもとの実践から～ 第12回「性的問題に対処する」, 健康教室 2012年; 第736集: 48-49.
- 6) 川上ちひろ. 女性のASDの人たちの思春期の支援について, アスペハート 2012年; 30巻: 22-27.
- 7) 川上ちひろ, 加藤永歳, 辻井正次. 地域でペアレントトレーニングを始めよう! 発達障害の家族支援の第一歩<2>復興支援発! 地域の事業所を核に地域でペアレントトレーニングを実施する, 地域保健 2013年; 44巻: 62-71.
- 8) 川上ちひろ. 思春期に大切な異性と人間関係の構築の支援, 児童心理 2013年; 67巻: 112-117.
- 9) 川上ちひろ. 関係を創る・築く・繋ぐ: 発達障害のある子どもの成長【第1回】「発達障害のある子ども」と「関係」について: 概論, 子どもの心と学校臨床 2013年; 9号: 99-111.
- 10) 藤崎和彦. 近年の医学生のあるりようと卒前医学教育, 民医連医療 2013年; 495巻: 14-17.
- 11) 西城卓也, 田川まさみ. 医学教育者が備えるべき教育能力, 医学教育 2013年; 44巻: 90-98.
- 12) 西城卓也, 菊川 誠. 魅力的な学習と効果的な教授方法①, 医学教育 2013年; 44巻: 133-142.
- 13) 菊川 誠, 西城卓也. 魅力的な学習と効果的な教授方法②, 医学教育 2013年; 44巻: 243-252.
- 14) 田川まさみ, 西城卓也. 医学教育における学習者の評価①, 医学教育 2013年; 44巻: 345-357.
- 15) 錦織 宏, 西城卓也. 医学教育における学習者の評価②, 医学教育 2013年; 44巻: 429-438.
- 16) 西城卓也, 丹羽雅之, 川上ちひろ, 今福輪太郎, 坂下和美, 藤崎和彦, 鈴木康之. 医学者教育における教育者養成のこれまでとこれから-医学教育セミナーとワークショップの歴史が示す将来-, 医学教育 2014年; 45巻: 13-24.
- 17) 田川まさみ, 西城卓也, 錦織 宏. カリキュラムの開発, 医学教育 2014年; 45巻: 25-35.
- 18) 錦織 宏, 西城卓也, 田川まさみ. カリキュラム/プログラム評価, 医学教育 2014年; 45巻: 79-86.
- 19) 川上ちひろ. 関係を創る・築く・繋ぐ: 発達障害のある子どもの成長【第2回】「発達障害のある子ども」と「関係」について: 概論, 子どもの心と学校臨床 2014年; 10号: 97-108.
- 20) 川上ちひろ. 関係を創る・築く・繋ぐ: 発達障害のある子どもの成長【第3回】「発達障害のある子ども」と「関係」について: 概論, 子どもの心と学校臨床 2014年; 11号: 117-127.
- 21) 川上ちひろ. 自己理解「性的問題からのアプローチ」, アスペハート 2014年; 37巻: 52-56.
- 22) 川上ちひろ. 看護スタッフが感じる「“対応が難しい”学習者」とは, 看護管理 2014年; 24巻: 932-939.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 西城卓也, 久保田伊代, 鈴木康之. 認知的徒弟制に基づいた, 学生による臨床指導医評価: マーストリヒト臨床教育評価表(The Maastricht Clinical Teaching Questionnaire (MCTQ))日本語版, 医学教育 2012年; 43巻: 86.
- 2) 阿部恵子, 若林英樹, 西城卓也, 川上ちひろ, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之. Trait Emotional Intelligence Que-SFとJefferson Scale of Physician Empathyの日本語版開発と信頼性・妥当性の検討, 医学教育 2012年; 43巻: 351-359.
- 3) 藤崎和彦. 新患アンケートを読む-患者の目線, 医療の課題, 大阪保険医雑誌 2012年; 552巻: 5-11.
- 4) 伊藤友美, 刈谷三月, 中里綾子, 藤崎和彦. 話を聞いて理解し, 自分の思いを伝える力を高める取り組み, 看護 2012年; 64巻: 48-51.
- 5) 志村俊郎, 吉井文均, 吉村明修, 阿部恵子, 高橋優三, 佐伯晴子, 藤崎和彦, 阿曾亮子, 井上千鹿子. 模擬患者・標準模擬患者(SP)養成のカリキュラム, 医学教育 2012年; 43巻: 33-36.
- 6) 阿部恵子, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之. 医学生のemotional Intelligence(EI)とEmpathy: 性差及び学年差の検討, 医学教育 2013年; 44巻: 315-326.
- 7) 木尾哲朗, 俣木志朗, 藤崎和彦, 大西弘高, 小川哲次, 鬼塚千絵, 西原達次. 歯学士教育課程でのプロフェッショナルリズム教育の構築, 日本歯科医学教育学会雑誌 2013年; 29巻: 63-74.
- 8) 會田信子, 半谷眞七子, 阿部恵子, 村岡千種, 久田 満, 鈴木伸一, 青松棟吉, 安井浩樹, 藤崎和彦, 植村和正. 模擬患者用ストレス調査票(SPSSQ)2013年度版の開発と信頼性・妥当性の検証-模擬患者の健康と継続参加を志向したストレス状態の包括的測定-, 看護科学研究 2014年; 12巻: 1-23.

原著 (欧文)

- 1) Kawakami C, Ohnishi M, Sugiyama T, Someki F, Nakamura K, Tsujii M. The risk factors for criminal behaviour in high-functioning autism spectrum disorders(HFASDs):A comparison of childhood adversities between individuals with HFASDs who exhibit criminal behaviour and those with HFASD and no criminal histories. Research in Autism Spectrum Disorders. 2012;6:949-957. IF 2.378
- 2) Abe K, Evans P, Austin EJ, Suzuki Y, Fujisaki K, Niwa M, Aomatsu M. Expressing one's feelings and listening to others increases emotional intelligence: a pilot study of Asian medical students. BMC Med Educ. 2013;13:82. IF 1.409
- 3) Imafuku R, Kataoka R, Mayahara M, Suzuki H, Saiki T. Students' experiences in interdisciplinary problem-based learning: A discourse analysis of group interaction. Interdisciplinary Journal of Problem-based Learning. 2014;8:1-18.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：岐阜大学医学教育開発研究センター；文科省特別経費教育関係共同実施分：多職種連携医療教育法の開発とFDの全国展開；平成23-26年度；62,000千円(18,500：14,500：14,500：14,500千円)
- 2) 研究代表者：阿部恵子(名古屋大学)，研究分担者：鈴木康之，藤崎和彦，丹羽雅之，若林英樹，西城卓也，川上ちひろ；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：医学生の情動能力育成のための6年間継続的コミュニケーション教育プログラムの開発；平成23-25年度；5,200千円(2,340：1,430：1,430千円)
- 3) 研究代表者：西城卓也；岐阜大学活性化経費(教育)：外国人医療スタッフとの映像を通じたインタラクティブな教育方略を基盤とする，海外臨床実習参加志望医学生向けの，医療英語・および基本的臨床技能教育プログラム(授業科目：医療英語(必修選択科目))；平成24年度；490千円
- 4) 研究代表者：西城卓也，研究分担者：鈴木康之，川上ちひろ；科学研究費補助金基盤(B)：小グループ学習における医学生の学習スタイルに関する文化的検証とモデル開発；平成24-26年度；3,500千円(1,300：1,500：700千円)
- 5) 研究代表者：伴信太郎(名古屋大学)，研究分担者：西城卓也，青松棟吉；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：臨床推論学習とコミュニケーション学習を融合した医療面接実習方略の構築とその評価；平成23-25年度；3,900千円(1,820：1,170：910千円)
- 6) 研究代表者：鈴木康之，研究分担者：藤崎和彦，丹羽雅之，西城卓也；科学研究費補助金基盤研究(B)：医学・医療教育指導者の育成システム構築に関する研究；平成23-25年度；14,000千円(5,000：4,500：4,500千円)
- 7) 研究代表者：川上ちひろ；大学活性化経費(研究：科研採択支援)：コミュニケーションが苦手な医療系学生の支援ニーズと援助方法の開発及び啓発；平成24年度；500千円
- 8) 研究代表者：西城卓也；岐阜大学COC地域志向教育プロジェクト：岐阜大学医学部地域体験実習における市民との交流を通じた街づくり；平成26年度；200千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

藤崎和彦：

- 1) 日本医学教育学会評議員(～現在)
- 2) 日本医学教育学会医学教育専門家制度委員会副委員長(～現在)
- 3) 日本医学教育学会教材開発・SP委員会副委員長(～現在)
- 4) 医療コミュニケーション研究会会長(～現在)
- 5) 日本ヘルスコミュニケーション学会監事(～現在)

6) RIAS 研究会日本支部(RIAS Japan)代表(~現在)

西城卓也 :

- 1) 日本医学教育学会医学教育専門家育成検討委員会ワーキングメンバー(平成 24 年 4 月~現在)
- 2) 日本医学教育学会編集委員会委員(平成 24 年 4 月~現在)
- 3) 日本医学教育学会教育研究開発委員(平成 24 年 4 月~現在)

川上ちひろ :

- 1) 日本医学教育学会準備教育・行動科学教育委員会委員(平成 26 年 1 月~現在)

2) 学会開催

藤崎和彦 :

- 1) 第 22 回医療コミュニケーション研究会例会(平成 24 年 6 月, 名古屋)
- 2) 第 7 回 RIAS トレーニングワークショップ(平成 24 年 8 月, 東京)
- 3) 第 23 回医療コミュニケーション研究会例会(平成 24 年 12 月, 名古屋)
- 4) 第 8 回 RIAS トレーニングワークショップ(平成 25 年 3 月, 名古屋)
- 5) 第 24 回医療コミュニケーション研究会例会(平成 25 年 6 月, 名古屋)
- 6) 第 5 回ヘルソコミュニケーション学会(平成 25 年 8 月, 岐阜)
- 7) 第 25 回医療コミュニケーション研究会例会(平成 25 年 12 月, 名古屋)
- 8) 第 9 回 RIAS トレーニングワークショップ(平成 26 年 2 月, 東京)
- 9) 第 26 回医療コミュニケーション研究会例会(平成 26 年 5 月, 名古屋)
- 10) 第 10 回 RIAS トレーニングワークショップ(平成 26 年 10 月, 名古屋)
- 11) 第 27 回医療コミュニケーション研究会例会(平成 26 年 12 月, 名古屋)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

藤崎和彦 :

- 1) 第 1 回岐阜県歯科衛生士会研修会(平成 24 年 5 月, 岐阜市, 特別講演「歯科衛生士に必要なコミュニケーション」 演者)
- 2) 第 44 回日本医学教育学会(平成 24 年 7 月, 横浜, シンポジウム「認定医学教育専門家の位置づけと求められる役割」 座長)
- 3) 九州大学登録模擬患者 15 周年記念シンポジウム(平成 24 年 8 月, 福岡市, 基調講演「わが国の模擬患者 現在・過去・未来」 演者)
- 4) COML 模擬患者活動 20 周年記念シンポジウム(平成 24 年 10 月, 大阪市, パネルディスカッション「模擬患者の役割と展望・医学教育の立場から」 パネリスト)
- 5) 第 2 回シンポジウム「歯学士教育課程でのプロフェッショナルリズム教育の構築」(平成 24 年 11 月, 北九州市, 特別講演「医療人プロフェッショナル教育は必要か」 演者)
- 6) 名古屋 SP 研究会 10 周年記念シンポジウム(平成 24 年 11 月, 名古屋, 基調講演「大学を越えた SP 連携の可能性」 演者)
- 7) 第 13 回福岡県薬剤師会ファーマシューティカルケアシンポジウム(平成 25 年 3 月, 福岡, 基調講演「患者支援のためのコミュニケーションスキルアップ」 演者)
- 8) 神戸学院大学特別研修会(平成 25 年 3 月, 神戸, 基調講演「SP に求められる演技とフィードバック」 演者)
- 9) 第 45 回日本医学教育学会(平成 25 年 7 月, 千葉, シンポジウム「シミュレーション教育資源の有効利用を促す」 座長)
- 10) 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部「第 3 回 How to 医療コミュニケーション教育」(平成 25 年 11 月, 徳島, 特別講演「医歯薬学教育アウトカムに応じた模擬患者育成」 演者)
- 11) 平成 25 年度第 4 回愛知県女性薬剤師会学術講演会(平成 25 年 11 月, 名古屋, 基調講演「薬剤師のための行動変容援助スキル理論編①」 演者)
- 12) 第 3 回シンポジウム「歯学医療人育成におけるプロフェッショナルリズム教育の方略を考える」(編成 26 年 2 月, 北九州, 基調講演「アウトカム基盤型教育時代のプロフェッショナルリズムの教育と評価」

演者)

- 13) 日本薬学会第 134 年会シンポジウム「先導的薬剤師養成に向けた実践的アドバンスト教育プログラムの共同開発」(平成 26 年 3 月, 熊本, 「共用試験で終わらない医療専門職教育—グローバル化—」シンポジウム) シンポジスト)
- 14) 平成 25 年度第 5 回愛知県女性薬剤師会学術講演会(平成 26 年 3 月, 名古屋, 基調講演「薬剤師のための行動変容援助スキル実戦編②」演者)
- 15) 神戸学院大学模擬患者会 2014 年度特別研修会(平成 26 年 3 月, 神戸, 基調講演「感情の動きに注目した SP の演技とフィードバック」演者)
- 16) 愛知県薬剤師会平成 26 年度第 1 回医療コミュニケーション研修会(平成 26 年 6 月, 名古屋, 基調講演「医療コミュニケーション・スキルの基本を学ぶ」演者)
- 17) 愛知県薬剤師会平成 26 年度第 2 回医療コミュニケーション研修会(平成 26 年 6 月, 名古屋, 基調講演「医療コミュニケーション・スキルの基本を模擬患者演習で身につける」演者)
- 18) 愛知県薬剤師会平成 26 年度第 3 回医療コミュニケーション研修会(平成 26 年 7 月, 名古屋, 基調講演「中上級レベルの医療コミュニケーション・スキルを模擬患者演習で身につける」演者)
- 19) 第 24 回日本医療薬学会年会シンポジウム「今, 考えよう, あなたのコミュニケーション」(平成 26 年 9 月, 名古屋, 基調報告「患者との良好なコミュニケーションをとるうえでのポイント」演者)
- 20) 第 16 回日本歯科医療管理学会九州支部学術大会ワークショップ「チームで目指す, 安心・安全, そして信頼」(平成 26 年 11 月, 佐賀, キーノートスピーチ「医療人であること, そしてチームということ」演者)
- 21) 平成 26 年度島根県立大学模擬患者スキルアップセミナー(平成 26 年 11 月, 出雲, 基調報告「効果的なフィードバックについて」演者)
- 22) 平成 26 年度日本大学学部連携研究推進シンポジウム「学部間協力による芸術学部標準模擬患者養成」(平成 26 年 12 月, 東京, 基調講演「全国における模擬患者・標準模擬患者養成の現状」演者)

西城卓也 :

- 1) 第 44 回日本医学教育学会(平成 24 年 7 月, 横浜, シンポジウム「医学教育専門家認定制度を考える」シンポジスト)
- 2) 第 46 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 24 年 10 月, 岐阜, 「教育設計の原理—医学教育への実践的応用」座長)
- 3) 全国シンポジウム『日本の国情・2 次医療圏の実情を熟考して, 理想的医師・医療者育成教育の展開を考える 2012』(平成 24 年 11 月, 秋田, シンポジウム「連携教育が直面する挑戦: 最近の研究と知見から学ぶこと」シンポジスト)
- 4) 第 47 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 1 月, 沖縄, 特別講演「Understanding how we learn: Implications for Educators」座長)
- 5) 学生・研修医のためのプライマリ・ケアの集い in 長崎(平成 25 年 2 月, 長崎, 特別講演「内科医になるための後期研修プログラムをデザインする」演者)
- 6) 第 45 回日本医学教育学会(平成 25 年 7 月, 千葉, シンポジウム「医学教育の根拠を使う、創る」座長)
- 7) 第 45 回日本医学教育学会(平成 25 年 7 月, 千葉, シンポジウム「叡智のフレームワーク」座長・演者)
- 8) 第 45 回日本医学教育学会(平成 25 年 7 月, 千葉, シンポジウム「専門医育成講習会のアウトライン」演者)
- 9) 第 45 回日本医学教育学会(平成 25 年 7 月, 千葉, シンポジウム「専門医育成コースワーク」演者)
- 10) 第 5 回日本ヘルスコミュニケーション学会(平成 25 年 8 月, 岐阜, シンポジウム「継続的な交流と省察を通じた“社会における個人”の理解の深化」シンポジスト)
- 11) 第 50 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 11 月, 岐阜, 特別講演「A journey, not a destination. 終着駅のない旅」座長)
- 12) 第 50 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 11 月, 岐阜, シンポジウム「発信する医療教育. 部門発展, 研究推進, キャリア開発」演者)
- 13) 第 46 回日本医学教育学会(平成 26 年 7 月, 和歌山, 講演「Lunch talk with Specialists2: Making research Relevant: can we improve on our present position?」座長)
- 14) 第 46 回日本医学教育学会(平成 26 年 7 月, 和歌山, シンポジウム「臨床推論の教育」座長)
- 15) 第 46 回日本医学教育学会(平成 26 年 7 月, 和歌山, パネルディスカッション「医学教育研究はじめ

の一步：論文執筆に向けた 12Tips」演者)

- 16) 第 47 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 26 年 8 月, 岐阜, セミナー「医学教育における学習者評価」座長)
- 17) Conference of Collaborative Project to Increase Production of Rural Doctor 2014.(2014.09, Khaoyai, Thailand, Invited Lecture: The East meets the West.Cross cultural approach in medical education; Invited Speaker)
- 18) 平成 26 年度大学改革シンポジウム「地域・市民とともに育てる医療人」(平成 26 年 12 月, 岐阜, 総合司会)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 西城卓也：医学教育賞(懸田賞)(平成 24 年度)
- 2) 西城卓也：Best Poster Presentation. A finalist Award. (10th Asia Pacific Medical Education Conference)(平成 25 年度)

9. 社会活動

藤崎和彦：

- 1) 医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 OSCE 実施小委員会模擬患者標準化専門部会副部長(平成 24 年～現在)
- 2) 多治見市健康づくり計画策定会議アドバイザー(平成 24 年度～現在)

西城卓也：

- 1) NPO 法人卒後臨床研修評価機構サーベイヤヤー(～現在)

10. 報告書

- 1) 藤崎和彦：愛知学院大学歯学部における FD 講演会：愛知学院大学大学院歯学研究科未来口腔医療研究センター「未来口腔医療研究センター報告書 2 号」：1-28(平成 24 年 3 月)
- 2) 藤崎和彦：OSCE で終わらない医師の医療面接スキル：鳥取大学医学部総合医学教育センター「地域医療を担う全人的医療人養成事業平成 23 年度成果報告書」：7-9(平成 24 年 3 月)
- 3) 藤崎和彦：SP 参加型医療面接教育の意義と模擬患者の役割：鳥取大学医学部総合医学教育センター「地域医療を担う全人的医療人養成事業平成 23 年度成果報告書」：78-87(平成 24 年 3 月)
- 4) 藤崎和彦, 田川まさみ, 西城卓也, 井内康輝, 錦織 宏, 渡邊洋子, 大谷 尚, 守屋利佳, 吉岡俊正, 吉田素文, 鈴木康之：日本医学教育学会認定医学教育専門家資格制度創設への提言：医学教育 43：221-231(平成 24 年 6 月)
- 5) 藤崎和彦：模擬患者の役割と展望-医学教育の立場から：ささえあい医療人権センターCOML 編「COML 模擬患者活動 20 周年記念シンポジウム報告集」ささえあい医療人権センターCOML：15-19(平成 25 年 10 月)
- 6) 藤崎和彦：特別寄稿：模擬患者活動 10 周年おめでとうございます：日本医科大学模擬患者養成と活動 10 年の歩み(日本医科大学教育推進室・日本医科大学 SP の会)：2(平成 26 年 3 月)
- 7) 藤崎和彦：市民とともに良い医師を育てる：平成 26 年度大学改革シンポジウム 地域・市民とともに育てる医療人報告書(国立大学法人岐阜大学医学教育開発研究センター)：18-21(平成 26 年 12 月)
- 8) 藤崎和彦：世界的な医学教育の流れと成人学習理論：第 9 回岐阜県医師育成・確保コンソーシアム臨床研修指導医講習会報告書(岐阜県医師育成・確保コンソーシアム)：22-24(平成 26 年 12 月)
- 9) 藤崎和彦：カリキュラム・プランニング 学習目標：第 9 回岐阜県医師育成・確保コンソーシアム臨床研修指導医講習会報告書(岐阜県医師育成・確保コンソーシアム)：25-28(平成 26 年 12 月)
- 10) 藤崎和彦：カリキュラム・プランニング 学習方略：第 9 回岐阜県医師育成・確保コンソーシアム臨床研修指導医講習会報告書(岐阜県医師育成・確保コンソーシアム)：116-119(平成 26 年 12 月)
- 11) 藤崎和彦：カリキュラム・プランニング 学習評価：第 9 回岐阜県医師育成・確保コンソーシアム臨床研修指導医講習会報告書(岐阜県医師育成・確保コンソーシアム)：119-123(平成 26 年 12 月)
- 12) 藤崎和彦：全国における模擬患者・標準模擬患者養成の現状：平成 26 年度日本大学学部間連携推進シンポジウム 学部間協力における芸術学部標準模擬患者養成報告書(日本大学医学部医学教育企画推進)：19-25(平成 26 年 12 月)

11. 報道

- 1) 藤崎和彦：患者との『対話力』向上 医学生の『面接』教育 寄り添う技術を模擬訓練で磨く：中日新聞(2012年7月24日)
- 2) 藤崎和彦：地域医療の質アップに貢献 医学生の間診力を育てる『模擬患者』：産経新聞(2012年8月20日)
- 3) 川上ちひろ：自閉症スペクトラム障害児への性教育プログラム実践：教育医事新聞(2012年9月25日)
- 4) 西城卓也：総合医の育成：NHK テレビ(2012年11月17日)
- 5) 藤崎和彦：模擬患者の役割と展望－医学教育の立場から：COML No. 268(2012年12月15日)
- 6) 藤崎和彦：クレームを減らし、患者さんと向き合うために：iEst 私と東部を繋ぐ院内報 Vol.02 (2013年2月28日)
- 7) 藤崎和彦：卒前医学教育：医学連新聞 243号(2013年7月16日)
- 8) 藤崎和彦：世界的なレベルのコミュニケーション教育が求められます：COML No. 279 (2013年11月15日)
- 9) 藤崎和彦：グローバルスタンダードの導入：医学連新聞 245号(2013年12月15日)
- 10) 藤崎和彦：学生医(student doctor)導入に伴う諸課題：医学連新聞第246号(2014年2月10日)
- 11) 藤崎和彦：ある日の SP(模擬患者)セミナーの活動報告：より良い医療をつくる会報誌コムル No.282(2014年2月15日)
- 12) 医療現場の連携学ぶ 学生ら多職種セミナー：岐阜新聞(2014年6月14日)
- 13) 医学教育の拠点、国際化へ 岐阜大学の研究センター来年度以降も文科省認定：朝日新聞(2014年9月18日)
- 14) 全国の医学教育共同利用拠点 岐阜大センター再認定：岐阜新聞(2014年9月18日)
- 15) 藤崎和彦：納得のいく医学教育を考えよう：Medi-Wing, Vol.60(2014年10月)
- 16) 第54回医学教育セミナーとワークショップ in 九州大学：文教ニュース(2014年11月24日)
- 17) 藤崎和彦：市民の力で医師育成-岐阜大がシンポ：岐阜新聞(2014年12月6日)
- 18) 岐阜大が九大と医学教育セミナーとワークショップ：文教速報(2014年12月8日)

12. 自己評価

評価

これまでにバーチャル部門の活性化を図るべく努力を続けている。それに必要な医学教育能力の専門性を高めるための総説シリーズを発刊したり、国内外の研究者とともに議論やワークショップなどを共同開催することでその経験と知見を深めてきている。またバーチャル部門としてシミュレーションやシネメデューション(映画・動画を使った教育)なども、大学院生と共に研究に移行させており、論文を通じた世界への発信を推進している。

現状の問題点及びその対応策

スキルスラボの利用頻度が向上してきてはいるが、より幅広いニーズに応えられるような活動をした。具体的には身体診察・診断学や医療英語、さらには岐阜大学のオープンキャンパスなどにも活動の場を広げてゆきたい。そのためにはスキルスラボ専属のスタッフの雇用が必要であるが、さしあたって担当者が不在であるので、業務の効率性と簡易化をはかって発展させてゆきたいと考えている。

今後の展望

ますます医学教育や模擬患者・スキルスラボを活用した実習、トレーニング、研究が求められる時代に入っている。これらの推進を図るため、平成27年度から開始を予定しているフェローシッププログラムの充実を図り、より多くの医師、および職種や国籍を超えてさまざまな医療従事者らと共に、協同的に実践の開発・普及・研究に順次に取り掛かりたいと考えている。

(6) 生体支援センター

1. 研究の概要

当センターは医学部附属病院の中央診療部門の一つであるが、ICT (感染性制御チーム)、NST (栄養管理チーム)、PUT (褥瘡対策チーム)、RST (呼吸療法支援チーム)、VC (予防接種部門) とともに、日常の診療支援業務のなかで、サーベイランス、医療経済効果分析を行ったり、地域でのネットワーク体制構築に基づいた連携医療機関全体での調査研究をしたりなど、臨床・社会医学研究に積極的に取り組み、その成果を発表している。最近の主な研究テーマを以下に示す。

(ICT)

- ・ 抗菌薬適正使用 (Antimicrobial Stewardship) のアウトカム評価
- ・ 抗菌薬の臨床薬剤学
- ・ 岐阜県内感染防止対策加算および地域連携加算病院におけるサーベイランスシステム構築とそのアウトカム評価
- ・ 医療関連感染対策の医療経済効果
- ・ 医療施設における季節性インフルエンザ対策の標準化
- ・ 薬剤耐性菌株分析等、臨床微生物学的研究
- ・ 電子化全自動感染対策サーベイランスシステムの活用(Medlas-SHIPL)による効果

(NST)

- ・ 慢性肝疾患の栄養アセスメントと治療に関する研究
- ・ 消化器癌患者の術前・術後の栄養管理に関する研究
- ・ Nutrition Support Service System 構築とそのアウトカム評価

(PUT)

- ・ 手術に伴う圧迫性皮膚障害の予防
- ・ 褥瘡患者に対する栄養管理の効果

(RST)

- ・ 人工呼吸器等のリスクマネジメントに関する研究
- ・ RST 活動のアウトカム評価

(VC)

- ・ 教職員・学生の各種ウイルス抗体検査およびワクチン接種の効果

2. 名簿

<専任・専従教育職員>

教授：	村上啓雄	Nobuo Murakami
講師：	飯塚勝美	Katumi Iizuka
助教：	渡邊珠代	Tamayo Watanabe
助教：	高井光治	Kouji Takai
助教：	境 浩康	Hiroyasu Sakai
助教：	佐々木義之	Yoshiyuki Sasaki

<その他の研究担当職員>

教授：	山本眞由美	Mayumi Yamamoto
教授：	田中香お里	Kaori Tanaka
准教授：	岩田 尚	Hisashi Iwata
准教授：	加納宏行	Hiroyuki Kano
講師：	安田 満	Mitsuru Yasuda
講師：	吉田省造	Shozo Yoshida
講師：	熊田恵介	Keisuke Kumada
講師：	大西秀典	Hidenori Ohnishi
講師：	白木 亮	Makoto Shiraki
講師：	大野 康	Yasushi Ohno
講師：	山本拓巳	Takumi Yamamoto
臨床講師：	中野通代	Michiyo Nakano
臨床講師：	長屋聡一郎	Soichiro Nagaya

看護部：	土屋麻由美	Mayumi Tsuchiya
看護部：	深尾亜由美	Ayumi Fukao
看護部：	垣見克紀	Katsunori Kakimi
看護部：	山本昌代	Masayo Yamamoto
看護部：	石川りえ	Rie Ishikawa
看護部：	玉井小百合	Sayuri Tamai
看護部：	安藤真由実	Mayumi Ando
看護部：	松井静子	Shizuko Matsui
看護部：	古市ふみよ	Fumiyo Furuichi
看護部：	杉原博子	Hiroko Sugihara
看護部：	瀧 寛子	Hiroko Taki
薬剤部：	岡安伸二	Shinji Okayasu
薬剤部：	丹羽 隆	Takashi Niwa
薬剤部：	石原正志	Masashi Ishihara
薬剤部：	藤井宏典	Hironori Fujii
薬剤部：	小森善文	Yoshihumi Komori
薬剤部：	原田沙希	Saki Harada
薬剤部：	西田承平	Shohei Nishida
検査部：	太田浩敏	Hirotooshi Ohta
検査部：	中山麻美	Asami Nakayama
栄養管理室：	田村孝志	Takashi Tamura
栄養管理室：	西村佳代子	Kayoko Nishimura
栄養管理室：	荒川静江	Shizue Arakawa
栄養管理室：	田口綾乃	Ayano Taguchi
リハビリ部：	服部 良	Ryo Hattori
リハビリ部：	愛宕良彦	Yoshihiko Atago
MEセンター：	小嶋寛正	Hikomasa Kojima
MEセンター：	和田典子	Noriko Wada

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 村上啓雄, 渡邊珠代(分担執筆). 「気管支喘息」「肺炎」「慢性閉塞性肺疾患」「結核症第IV章 感染症」「病原微生物」「院内感染症」: 中村丁治, 川島由起子, 加藤昌彦編. 臨床栄養学, 東京: 南江堂; 2013年: 188-197, 227-230.
- 2) 渡邊珠代, 村上啓雄. 介護における慢性腫瘍部のバイオフィルム症とその対策-褥瘡を中心に-: 化学療法の領域 29号, 東京: 医薬ジャーナル社; 2013年: 2076-2082.
- 3) 村上啓雄(分担執筆). 学部における就職・キャリア形成の取り組み 医学部医学科: 岐阜大学教育推進・学生支援機構キャリア支援部門編. 未来を切り開き明日にはばたく 岐阜大学キャリア・就職白書 2013, 岐阜; 2014年: 40-41.
- 4) 村上啓雄(分担執筆). 病棟ラウンドとスタッフ教育: 尾家重治編. 感染制御標準ガイド, 東京: (株)じほう; 2014年: 328-333.
- 5) 村上啓雄(分担執筆). Chapter 1 病態栄養の基礎 2 栄養評価と栄養スクリーニング: 日本病態栄養学会編. 認定 NST ガイドブック 2014(改訂第4版), 大阪: (株)メディカルビュー社; 2014年: 13-18.
- 6) 村上啓雄(分担執筆). Chapter 2 栄養投与法 3 経腸栄養 B 経腸栄養剤の適応・禁忌: 日本病態栄養学会編. 認定 NST ガイドブック 2014(改訂第4版), 大阪: (株)メディカルビュー社; 2014年: 52-56.
- 7) 渡邊珠代, 村上啓雄. 4. AST の事例紹介～活動内容と見えてきた課題～事例 3(岐阜大学医学部附属病院) (1)医師の立場から: 二木芳人編. 学ぶ、取り組む、実践する! AST(抗菌薬適正使用支援チーム), 大阪: 医薬ジャーナル社; 2014年: 110-118.
- 8) 丹羽 隆, 渡邊珠代, 村上啓雄(分担執筆). 院内ラウンドにまつわる“情報管理”: INFECTION CONTROL, 大阪: メディカ出版; 2014年: 233-237.
- 9) 村上啓雄(編集協力). みせて説得! みて説得! 図解でわかる! みんなの感染対策キホンノート: INFECTION CONTRL, 大阪: メディカ出版; 2014年: 14-68.

著書（欧文）

なし

総説 (和文)

- 1) 村上啓雄. 地域支援ネットワークの取り組み, *INFECTION CONTROL* 2014年; 23巻: 1.
- 2) 村上啓雄. 医療関連感染対策～最近の話題, *best Nurse* 2014年; 25巻: 12-16.
- 3) 村上啓雄. 外来診療における抗菌薬適正使用, *岐阜県保険医新聞* 2014年; 441巻: 7.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 村上啓雄. これからの NST とは～ICT のおける専任薬剤師による Antimicrobial Stewardship, *ヒューマンニュートリション* 2012年; 19巻: 30-33.
- 2) 北川順一, 吉田省造, 中島靖弘, 白井邦博, 小倉真治, 村上啓雄. Acute respiratory distress syndrome(ARDS)を合併した腸チフスの1例, *日本救急医学会雑誌* 2012年; 23巻: 781-786.
- 3) 丹羽 隆, 篠田康孝, 鈴木昭夫, 大森智史, 太田浩敏, 深尾亜由美, 安田 満, 北市 清, 松浦克彦, 杉山 正, 村上啓雄, 伊藤善規. Infection Control Team による全入院患者対象とした注射用抗菌薬適正使用推進実施体制の確立とアウトカム評価, *医療薬学* 2012年; 38巻: 273-281.
- 4) 村上啓雄, 深尾亜由美, 丹羽 隆, 太田浩敏, 伊藤善規. 大学病院での取り組み 適切なチーム医療活動と各職種メンバーの役割ー岐阜大学医学部附属病院 ICT における抗菌薬適正使用の取り組み *Antimicrobial Stewardship*, *月刊地域医学* 2012年; 26巻: 316-321.
- 5) 村上啓雄, 深尾亜由美, 渡邊珠代, 土屋麻由美, 丹羽 隆, 太田浩敏. 厚生労働省モデル事業における院内感染対策地域支援ネットワーク, *Infection control* 2013年; 22巻: 1018-1021.
- 6) 操 奈美, 奥村陽子, 松本茂美, 村上啓雄, 犬塚 貴, 清島 満. 活動報告 初期臨床研修2年次の地域医療研修に関するアンケート調査, *月間地域医学* 2013年; 27巻: 890-895.
- 7) 渡邊珠代, 村上啓雄. 感染制御における地域ネットワークの実際, *感染症* 2013年; 43巻: 217-222.
- 8) 村上啓雄. 第26回 慢性閉塞性肺疾患(COPD)①, *Medical Practice* 2013年; 30巻: 2181-2185
- 9) 村上啓雄. 大学病院における NST の現状と課題, *医学のあゆみ* 2013年; 247巻: 1143-1148.
- 10) 西村佳代子, 村上啓雄. 第27回 慢性閉塞性肺疾患(COPD)②, *Medical Practice* 2014年; 31巻: 161-167.
- 11) 林 寛子, 丹羽 隆, 竹市朱里, 今西義紀, 外海有規, 岡安伸二, 北市清幸, 安田公夫, 村上啓雄, 伊藤善規. 夜勤時におけるバンコマイシン初期投与設計体制の確立とその成果, *医療薬学* 2014年; 40巻: 85-93
- 12) 米玉利準, 大瀧博文, 中山麻美, 安藤航平, 宮崎 崇, 太田浩敏, 古田伸行, 渡邊珠代, 兼村信宏, 伊藤弘康, 大楠清文, 村上啓雄, 清島 満. 血液培養好気ボトルより *Leptotrichia trevisanii* を分離した多発性骨髄腫患者における菌血症の1例, *日本臨床微生物学雑誌* 2014年; 24巻: 31-36.
- 13) 大瀧博文, 大楠清文, 中山麻美, 米玉利準, 安藤航平, 宮崎 崇, 太田浩敏, 古田伸行, 渡邊珠代, 伊藤弘康, 村上啓雄, 清島 満. 中心静脈ライン関連血流感染の判定における細断法を用いた中心静脈カテーテル先端培養の菌量および血液培養結果に関する後方視野的な検討, *臨床微生物迅速診断研究会誌* 2014年; 24巻: 39-43.
- 14) 丹羽 隆, 外海有規, 鈴木景子, 渡邊珠代, 土屋麻由美, 太田浩敏, 村上啓雄. Defined daily dose(DDD) と days of therapy(DOT)を用いた抗菌薬使用量の評価, *環境感染誌* 2014年; 29巻: 333-339.
- 15) 丹羽 隆, 渡邊珠代, 村上啓雄. 日本版 Antimicrobial stewardship の実際を探るー岐阜大学医学部附属病院の活動, *月刊薬事* 2014年 56巻: 697-701.
- 16) 熊田恵介, 村上啓雄, 白井邦博, 豊田 泉, 小倉真治, 福田充宏. 気管切開に係る安全管理; 早期合併症事例の特徴と手術切開と経費切開の比較を踏まえ, *日本臨床救急医誌* 2014年; 17巻: 743-747.

原著 (欧文)

- 1) Niwa T, Shinoda Y, Suzuki A, Ohmori T, Yasuda M, Ohta H, Fukao A, Kitaichi K, Matsuura K, Sugiyama T, Murakami N, Itoh Y. Outcome measurement of extensive implementation of antimicrobial stewardship in patients receiving intravenous antibiotics in a Japanese university hospital. *Int J Clin Pract.* 2012;66:999-1008. IF 2.538
- 2) Niwa T, Watanabe T, Suzuki A, Ohmori T, Tsuchiya M, Suzuki T, Ohta H, Murakami N, Itoh Y. Reduction of linezolid-associated thrombocytopenia by the dose adjustment based on the risk factors such as basal platelet count and body weight. *Diagn Micr Infec Dis.* 2014;79:93-97 IF 2.568

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 八木哲也(名古屋大学医学部), 研究分担者: 村上啓雄; 厚生労働科学研究費補助金 新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業: 医療機関におけるインフルエンザ感染対策の研究; 平成25-27年度(3年計画予定); 1,300千円(900: 400千円)
- 2) 研究代表者: 小林寛伊(東京保健医療大学), 研究分担者: 村上啓雄; 厚生労働科学研究費補助金 地域医療基盤開発推進研究事業: 院内感染地域支援ネットワーク事業 ネットワークの整備・支援の

推進効果；平成 25-26 年度；600 千円(300：300 千円)

2) 受託研究

- 1) 村上啓雄：院内感染対策研究事業(平成 17 年度～)；平成 17-26 年度；6,093 千円(993：500：500：500：500：500：500：800：800 千円)；岐阜県医療整備課受託研究費
- 2) 村上啓雄，寺本貴英，大西秀典：岐阜県予防接種センター委託事業(平成 20 年度～)；平成 20-26 年度；7,160 千円(1,000：1,000：1,000：1,000：1,000：1,080：1,080 千円)；岐阜県医療整備課受託研究費

3) 共同研究

- 1) 村上啓雄：国立大学医学部附属病院共通ソフト“感染症管理システム”を用いた全自動全面電子化医療関連感染サーベイランスに関する研究；平成 12 年～現在；0 円；群馬大学

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

村上啓雄：

- 1) 日本感染症学会評議員(～現在)
- 2) 日本病態栄養学会評議員(～現在)
- 3) 日本環境感染学会評議員(～現在)
- 4) 日本病態栄養学会 NST 委員会委員長(平成 25 年度～現在)
- 5) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 6) 日本感染症学会施設内感染対策相談窓口回答者(～現在)
- 7) 国立大学附属病院感染対策協議会会長(平成 25 年度～現在)

2) 学会開催

村上啓雄：

- 1) 第 221 回日本内科学会東海地方会(平成 25 年 10 月，岐阜)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

村上啓雄：

- 1) 第 15 回日本病態栄養学会年次学術集会(平成 24 年 1 月，京都，特別講演「経腸栄養の合併症とその対策」座長)
- 2) 第 15 回日本病態栄養学会年次学術集会(平成 24 年 1 月，京都，合同パネルディスカッション「適切な栄養管理における NST 活動のあり方」パネリスト)
- 3) 第 6 回岐阜感染症・化学療法フォーラム(GICF)(平成 24 年 1 月，岐阜，特別講演 I 「感染症育成と抗菌薬適正使用」座長)
- 4) 第 27 回日本静脈経腸栄養学会(JSPEN)総会 日本静脈経腸栄養学会・日本病態栄養学会合同パネルディスカッション(平成 24 年 2 月，神戸，「NST の現状と課題」パネリスト)
- 5) 第 92 回中部地区老年医学談話会(平成 24 年 2 月，名古屋，特別講演「ワクチンの適正使用を考える～岐阜県予防接種センター相談事例から～」演者)
- 6) 第 27 回日本環境感染学会総会(平成 24 年 2 月，福岡，シンポジウム「電子化サーベイランスに基づく高精度の感染制御提示」演者)
- 7) 第 27 回日本環境感染学会総会(平成 24 年 2 月，福岡，教育セミナー「薬剤耐性菌対策に必要な標準予防策 up to date」司会)
- 8) 岐阜 MRSA 研究会(平成 24 年 2 月，岐阜，特別講演「新しい抗 MRSA 薬ダプトマイシンの臨床位置づけ」座長)
- 9) 第 85 回日本細菌学会総会(平成 24 年 3 月，長崎，シンポジウム「薬剤耐性菌の耐性機構と疫学」演

- 者)
- 10) 第2回全国地域医療教育協議会総会 第4回全国シンポジウム 地域推薦卒医学生のキャリアアップ構築(平成24年3月, 東京, 招待講演「岐阜県医学生修学資金と岐阜県医師育成・確保コンソーシアム」演者)
 - 11) 第25回岐阜県院内感染対策検討会(平成24年4月, 岐阜, 総合司会およびシンポジウム「CDCのガイドラインを確認する」座長)
 - 12) 救急集中治療領域感染症研究会(平成24年5月, 岐阜, 特別講演「劇的救命」座長)
 - 13) 平成24年度日本病態栄養学会 NST セミナー(平成24年6月, 京都, 招待講演「4.補助食品 5.経腸栄養の種類、投与ルート、管理 6.経腸栄養の合併症対策 演習3 症例による検討 NST 実技講習会」ファシリテーター)
 - 14) 岐阜県の感染症予防医療を考える会(平成24年7月, 岐阜, 特別講演2「肺炎球菌ワクチンの最新の話」司会)
 - 15) 国立大学附属病院感染対策協議会 平成24年度 感染管理担当者ブロック別研修会(平成24年7月, 浜松「アウトブレイク経験から～各施設からの報告～」座長)
 - 16) 第10回救急領域感染対策セミナー(平成24年8月, 岐阜, 招待講演「感染制御 Topics」演者)
 - 17) 第18回全国の集い in 高知 2012(平成24年9月, 高知, 招待講演「誤嚥性肺炎とその予防」演者)
 - 18) 第11回東海感染対策セミナー(平成24年9月, 名古屋, 招待講演「国立大学附属病院感染対策協議会の院内感染対策取り組みの紹介」演者)
 - 19) 第14回適正抗菌化学療法研究会(平成24年10月, 名古屋, 総合討論「スペシャリストにきく! クラリスロマイシンの今後の展望」司会)
 - 20) 平成24年度石川県院内感染対策講習会(平成24年10月, 石川, 「岐阜県における院内感染対策地域ネットワーク活動について」演者)
 - 21) 第16回日本病態栄養学会年次学術集会(平成25年1月, 京都, 「NST メディカルスタッフセッション初級編－胃瘻」座長)
 - 22) 第16回日本病態栄養学会年次学術集会(平成25年1月, 京都, 「NST カンファレンスII NSTにおける管理栄養士のあるべき姿」座長)
 - 23) 平成24年度厚生労働省院内感染対策講習会(平成25年1月, 神戸, 「院内ラウンドの実際とそのポイント」パネリスト)
 - 24) 第7回岐阜感染症・化学療法フォーラム(GICF)(平成25年1月, 岐阜, 特別講演I「今日における手術部位感染対策－予防と治療」座長)
 - 25) 第1回東海 ICD アカデミー(平成25年1月, 岐阜, 「感染防止に係る環境ラウンドの実際」座長)
 - 26) 第1回地域医療懇話会(平成25年2月, 三重, 特別講演「誤嚥性肺炎と地域連携」演者)
 - 27) 第28回日本環境感染学会総会シンポジウム(平成25年3月, 横浜, シンポジウム「マンネリ化しないICTラウンド」司会)
 - 28) 第28回日本環境感染学会総会シンポジウム(平成25年3月, 横浜, シンポジウム「望ましい地域連携のあり方について」演者)
 - 29) 第28回日本環境感染学会総会シンポジウム(平成25年3月, 横浜, シンポジウム「ITを利用した院内感染対策」司会)
 - 30) 第28回日本環境感染学会総会シンポジウム(平成25年3月, 横浜, シンポジウム「ITにより可視化されたデータを用いた高精度の医療関連感染対策」演者)
 - 31) 第2回日本感染管理ネットワーク(ICNJ)学術集会(平成25年5月, 大阪, 教育講演3「感染制御地域連携～感染防止対策加算を追い風にしたレベルアップへの取り組み」演者)
 - 32) 平成25年度日本病態栄養学会 NST セミナー(平成25年6月, 東京, 招待講演「4.補助食品 5.経腸栄養の種類、投与ルート、管理 6.経腸栄養の合併症対策 演習3 症例による検討 NST 実技講習会」ファシリテーター)
 - 33) 平成25年度日本病態栄養学会 NST セミナー(平成25年6月, 沖縄, 招待講演「4.補助食品 5.経腸栄養の種類、投与ルート、管理 6.経腸栄養の合併症対策 演習3 症例による検討 NST 実技講習会」ファシリテーター)
 - 34) 第2回救急・集中治療感染症研究会(平成25年6月, 岐阜, 教育講演「実例から学ぶ抗菌薬の適正使用」座長)
 - 35) 平成25年度日本病態栄養学会 NST セミナー(平成25年7月, 京都, 招待講演「4.補助食品 5.経腸栄養の種類、投与ルート、管理 6.経腸栄養の合併症対策 演習3 症例による検討 NST 実技講習会」ファシリテーター)

- 36) 第5回J感染制御ネットワークフォーラム教育セミナー6(平成25年8月, 仙台, 「重症感染症と抗菌薬適正使用」 演者)
- 37) 日本感染症学会第26回学術大会 ICD 講習会(平成25年11月, 岐阜, 特別講演「HCV」 演者)
- 38) 第2回東海医療安全研究会(平成25年11月, 名古屋, 「アナタの常識はワタシの常識ではない!! -報道事例から学ぶ「医薬品使用時の安全管理に必要な新しい視点」」 座長)
- 39) 平成25年度厚生労働省院内感染講習会(平成25年12月, 神戸, 「院内ラウンドの実際とそのポイント」 パネリスト)
- 40) 第17回日本病態栄養学会年次学術集会(平成26年1月, 大阪, パネルディスカッション「大学病院のNSTの現状と患者診療動線に寄り添う栄養管理」 パネリスト)
- 41) 第17回日本病態栄養学会年次学術集会(平成26年1月, 大阪, 「4.補助食品 5.経腸栄養の種類、投与ルート、管理 6.経腸栄養の合併症対策 演習3 症例による検討 NST実技講習会」 ファシリテーター)
- 42) 第25回日本臨床微生物学会総会(平成26年2月, 名古屋, 「JANIS データ/2DCM の実践的活用法」 コーディネーター)
- 43) 第29回日本静脈経腸栄養学会学術集会(平成26年2月, 横浜, シンポジウム「大学病院のNSTの現状と患者診療動線に寄り添う栄養管理」 シンポジスト)
- 44) 第4回東海ICDアカデミー(平成26年4月, 名古屋, シンポジウム「SSIの予防」 シンポジスト)
- 45) 第89回日本結核病学会総会(平成26年5月, 岐阜, ワークショップ要望演題「院内発生結核」 座長)
- 46) 第16回国立大学附属病院感染対策協議会総会(平成26年11月, 東京, 「インフルエンザの状況そしてMRSE,エボラ出血熱などについて」 司会)
- 47) 第28回岐阜呼吸器懇話会(平成26年11月, 岐阜, 「呼吸器感染症診療のコツ～インフルエンザ対策も含めて～」 座長)
- 48) 第3回岐阜県の地域医療を考える会(平成26年11月, 岐阜, パネルディスカッション「地域医療について」 パネリスト)
- 49) 平成26年度厚生労働省院内感染対策講習会(平成26年12月, 神戸, 「地域連携ネットワーク構築」 演者)
- 50) 平成26年度厚生労働省院内感染対策講習会(平成26年12月, 奈良, パネルディスカッション「アウトブレイク対応+地域連携ネットワーク構築」 パネリスト)
- 51) 岐阜インフルエンザセミナー(平成26年12月, 岐阜, 「インフルエンザ対策と治療」 座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

村上啓雄：

- 1) 国公立大学医学部附属病院感染対策協議会ガイドライン作業部会委員(～平成25年度)
- 2) 国公立大学医学部附属病院感染対策協議会常任委員・ガイドライン作業部会委員長(～平成25年度)
- 3) 国公立大学医学部附属病院感染対策協議会・会長(平成26年度～現在)
- 4) 厚生労働省院内感染対策サーベイランス運営委員会・運営会議委員(平成24年度～現在)
- 5) 岐阜地方裁判所専門員(～現在)
- 6) 岐阜県感染症予防委員会情報対策部会解析小委員会委員(～現在)
- 7) 岐阜県感染症予防委員会予防接種部会委員(～現在)
- 8) 岐阜県予防接種健康被害調査専門医師集団専門医師(～現在)
- 9) 岐阜県院内感染対策協議会委員(～現在)
- 10) 岐阜県院内感染対策協議会委員長(平成24年度～現在)
- 11) 岐阜県院内感染対策相談窓口回答者(～現在)
- 12) 岐阜県新型インフルエンザ対策委員会委員長(～現在)
- 13) (社)地域医療振興協会シニアプログラム「地域医療のすすめ」 専門指導医(～現在)
- 14) 岐阜県へき地地域医療対策委員会委員(～現在)
- 15) 岐阜県立病院医療事故検討会委員(～現在)
- 16) 郡上市地域医療確保検討委員会委員(～現在)
- 17) 岐阜県総合医療センター地域医療連携推進協議会委員(～平成26年度)
- 18) 岐阜県医師育成・確保コンソーシアム企画調整委員会委員(～現在)

- 19) 岐阜県教職員保健審査委員(平成 26 年度～現在)
- 20) 岐阜県在宅医療連携推進会議委員(平成 25 年度～現在)
- 21) 岐阜県人権懇話会委員(平成 26 年度～現在)
- 22) 愛知県立病院医療事故防止対策委員会委員(平成 26 年度～現在)
- 23) 岐阜県動物由来感染症情報関連体制整備検討会メンバー(平成 26 年度～現在)

10. 報告書

- 1) 村上啓雄：院内感染対策の高精度化を目的とした電子システムの開発と応用に関する研究：厚生労働科学研究費補助金(新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業)「新たな薬剤耐性菌の耐性機構の解明及び薬剤耐性菌のサーベイランスに関する研究」：119-133(平成 25 年 3 月)
- 2) 渡邊珠代，村上啓雄：感染対策地域連携に活用できるソフトウェアの開発に関する研究：厚生労働科学研究費補助金(新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業)「医療機関における感染制御に関する研究」：32-58(平成 25 年 3 月)。
- 3) 渡邊珠代，村上啓雄：インフルエンザ研究 わが国の医療機関におけるインフルエンザ対策の実態と課題：厚生労働科学研究費補助金(新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業)「医療機関における感染制御に関する研究」分担研究報告書：63-82(平成 25 年 3 月)
- 4) 渡邊珠代，村上啓雄：岐阜県内感染防止対策加算算定全施設におけるデータ月例収集とフィードバックによる感染制御レベル向上への取り組みとそのアウトカム：厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業)「感染制御システムのさらなる向上を目指す研究／特に中小医療施設を対象として」 分担研究報告書：41-45(平成 25 年 3 月)

11. 報道

- 1) 村上啓雄：羽島中学校で多発しているノロウイルス原因と対策など：東海テレビ(2012 年 2 月 17 日)
- 2) 村上啓雄，小倉真治，吉田省造，白井邦弘：患者中心の医療とは何か？－救急から在宅まで、横断的チーム医療の展開をめざす－：Nutrition Support Journal 26(13) (2012 年)
- 3) 村上啓雄：ポリオとワクチン接種の必要性：岐阜放送(2012 年 5 月 16 日)
- 4) 村上啓雄：マイコプラズマ肺炎～県内過去最悪の勢い、患者数を上回る、乾いた咳続けば受診を：中日新聞(2012 年 10 月 17 日)
- 5) 村上啓雄：鵜の目～予防 マイコプラズマ肺炎：中日新聞(2012 年 11 月 10 日)
- 6) 後藤忠雄，村上啓雄：げんばのことば 知事選を前に③医療過疎地を支える仕組みを・医師増に見通し、次は定着：朝日新聞(2013 年 1 月 6 日)
- 7) 村上啓雄：「副反応、可能性低い」日本脳炎の予防接種後に男児死亡で(美濃)市調査委：岐阜新聞他(2013 年 2 月 14 日)
- 8) 村上啓雄，寺本貴英，加藤達雄：岐阜県保険環境研究所および岐阜県健康福祉部保健医療課スタッフ：風疹予防対策～予防接種の重要性：NHK 岐阜(2013 年 5 月 15 日)
- 9) 操 奈美，村上啓雄：医療の仕事 理解深める 岐阜大医学部職員の子ら見学 心肺蘇生法など体験－サマースクール取材記事：岐阜新聞(2013 年 8 月 14 日)
- 10) 渡邊珠代：ノロウイルス対策について：中部日本放送イッポウ(2014 年 1 月 23 日)
- 11) 渡邊珠代：ノロウイルス対策について、感染対策の紹介：中京テレビキャッチ(2014 年 1 月 23 日)
- 12) 操 奈美，村上啓雄：人体模型を児童観察 サマースクール取材記事：中日新聞(2014 年 8 月 19 日)
- 13) 操 奈美，村上啓雄：医療現場の仕事 児童が体験学習 岐阜大サマースクール取材記事：岐阜新聞(2014 年 8 月 19 日)

12. 自己評価

評価

ICT 活動に基づく、研究業績をある程度発表できたものと思われる。とくに抗菌薬適正使用(Antimicrobial Stewardship)のアウトカム評価、抗菌薬の臨床薬理学、岐阜県内感染防止対策加算および地域連携加算病院におけるサーベイランスシステム構築とそのアウトカム評価、医療関連感染対策の医療経済効果、医療施設における季節性インフルエンザ対策の標準化、電子化全自動感染対策サーベイランスシステムの活用(Medlas-SHIPL)による効果などについては、国内外の学会誌に論文化できた。結果としてセンター長が平成 26 年度から国公立大学附属病院感染対策協議会会長に就任したことは、これらの評価の一つとしてとらえている。

現状の問題点及びその対応策

ICT 活動に関連した研究業績はある程度残すことができたものの、他の栄養管理、褥瘡対策、呼吸療法支援、予防接種については、学会発表はできたものの、学会誌への投稿は達成できていない。総説や分担執筆がわずかにある程度である。各チームとも日常業務のなかで、臨床研究が進むように、課題を明確化して取り組んでいきたい。

今後の展望

研究活動奨励のためにも、生体支援センターの各チーム活動に加え、医療安全管理室、栄養管理室、診療録管理室等の患者診療支援業務の質向上とさまざまな観点でのリスク管理機能を統合させた、**Quality & Risk Control Center (QRCC)** の設立に向けて、環境整備を行う予定である。

(7) 寄附講座「脊椎骨関節再建外科学講座」

1. 研究の概要

- 1) 椎間板細胞外基質代謝におけるカルパインの役割と解明
ウシおよびヒトの椎間板を用い、炎症・椎間板変性という局面においてカルパインが椎間板基質分解にいかに関与するかについて研究を進めている。
- 2) ヒト腰椎荷重負荷における椎間板・椎間関節の形態変化に関する研究
ヒト腰椎の立位荷重状態をシミュレートする装置を使用し、CT撮影によって得られた腰椎画像を3次元解析し、椎間板・椎間関節の3次元形態変化を解析した。
- 3) 腰椎装具の体幹位置覚、スポーツパフォーマンスに与える影響の検討
腰椎装具がもつ体幹位置覚向上効果がスポーツパフォーマンス（ゴルフ、ウォーキング等）にいかなる影響をあたえるかを3次元画像解析により検証した。
- 4) 腰椎変性側彎症に対する後方椎体間固定術による変形矯正の3次元解析
腰椎変性側彎症に対するブーメラン型スペーサーを用いた後方椎体間固定術による変形矯正が椎間板角、椎間関節形態に与える効果を3次元画像解析により検証している。
- 5) ヒト頸椎の屈曲伸展動態における硬膜管・頸部脊髄の3次元動態解析
脊髄造影検査後のファンクショナルCTを用い、ヒト頸椎の屈曲伸展動態における硬膜管・頸部脊髄の3次元動態解析を各種病態との関連にて検証している。
- 6) 椎間板のアンチエイジングを具現し得る新しい生物学的治療の開発
カルパインが椎間板細胞の細胞外マトリックス分解に関与することに着目し、その働きを制御することにより椎間板の老化予防を図る新しい生物学的治療を開発している。
- 7) 腰椎経椎間孔後方椎体間固定術前術後の椎間孔形態3次元解析
片側進入による腰椎経椎間孔後方椎体間固定術は低侵襲が特徴であるが、その術前術後の進入反対側椎間孔形態3次元解析を行い、椎間孔狭窄発生のリスクなど、合併症の軽減を図る尺度を検証している。
- 8) 腰椎低侵襲後方除圧術の中期長期成績に与える因子の検討
腰部脊柱管狭窄症に対する腰椎低侵襲後方除圧術（片側進入両側除圧）の中期長期成績について、椎間板変性、側弯、多椎間罹患、年齢等の多因子を対象に多変量解析による検証を行っている。
- 9) 超音波を用いた頸椎前方・後方除圧術後の脊髄形態変化
頸椎変性疾患における脊髄前方除圧法、後方除圧法の意義を術中超音波による脊髄形態観察および臨床成績との関連を調査し、検証している。
- 10) ゴルフスイングにおける体幹装具が腰椎挙動に与える影響の3次元解析
ゴルフスイングは非対称な腰椎回旋動作であり、椎間関節への過負荷による腰痛発症が問題となっている。体幹装具装着による腰椎3次元運動への影響の解析を行い、腰痛発症予防への効果の検証を行っている。
- 11) 頸椎前方除圧固定体位における頸椎形態の3次元解析
頸椎前方除圧固定体位における軸椎下の回旋挙動を頸椎変性疾患を有する臨床症例を対象に解析を行い、正確かつ安全な除圧術を施行するうえでの指標を作成している。
- 12) 関節リウマチの薬物治療において、生物学的製剤の効果判定を多彩な血液マーカーより行う試みを行っている。
- 13) 関節リウマチの治療骨関節破壊抑制に対する生物学的製剤の役割を検証している。
- 14) 関節リウマチに対する生物学的製剤を用いた治療において、長期使用による安全性等の検討を行っている。

2. 名簿

准教授： 宮本 敬 Kei Miyamoto
助教： 佐藤正夫 Masao Sato

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）
なし

総説 (和文)

なし

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 佐藤正夫, 四戸隆基, 清水克時. 生物学的製剤使用中に発生した呼吸器疾患の検討, 関節の外科 2012年; 39巻: 6-9.
- 2) 佐藤正夫, 四戸隆基, 清水克時. 関節リウマチに対するメトトレキサートの使用状況, 中部日本整形外科学会雑誌 2012年; 55巻: 563-564.
- 3) 佐藤正夫, 清水克時, 竹村正男. 強直性脊椎炎に対するインフリキシマブ療法の検討, 日本脊椎関節炎学会 2012年; Vol.IV: 35-39.
- 4) 佐藤正夫, 竹村正男, 渡辺恒夫, 福岡大輔, 清水克時. 超音波三次元イメージングを用いた関節リウマチ手指関節内血流数量化の試み, 別冊整形外科 運動器疾患の画像診断 2012年; 62巻: 188-193.
- 5) 佐藤正夫, 清水克時, 竹村正男, 四戸隆基. 関節リウマチに対するアバタセプトの有効性の検討, 臨床リウマチ 2012年; 24巻: 193-198.
- 6) 宮本 敬, 日置 暁, 下川哲哉, 鈴木直樹, 細江英夫, 増田剛宏, 清水克時. 脊椎失状面バランス不良例に対する胸椎~骨盤に至る脊椎矯正固定施行例における術後成績に影響する因子の検討, 日本脊椎インストゥルメンテーション学会誌 2012年: 129.
- 7) 細江英夫, 飯沼宣樹, 清水克時, 宮本 敬. 短縮機能を有する頸椎前方プレートの利点, 日本脊椎インストゥルメンテーション学会誌 2012年: 166.
- 8) 福田章二, 宮本 敬, 鈴木毅一, 井上俊之, 喜久生健太, 清水克時. ヒト椎間板変性における calpain のかわり, 日本整形外科学会雑誌 2012年; 86巻: S1396.
- 9) 伏見一成, 宮本 敬, 日置 暁, 細江英夫, 清水克時. 後方除圧術後に重度の椎麻痺を発症した上位胸椎後縦靭帯骨化症 2 例の検討, 臨床整形外科 2012年; 47巻: 159-164.
- 10) 濱田 知, 日置 暁, 伏見一成, 高澤 真, 宮本 敬, 清水克時. 特発性硬膜外血腫(SSEH)に対する治療法選択, 臨床整形外科 2012年; 47巻: 659-663.
- 11) 青木隆明, 服部 良, 日石智之, 尾藤貴宣, 宮本 敬, 清水克時. 高齢者の脊椎後弯変形と固有背筋の超音波による変化評価, 運動療法と物理療法 2012年; 23巻: 21-24.
- 12) 福田章二, 宮本 敬, 鈴木毅一, 井上俊之, 喜久生健太, 清水克時. ヒト椎間板変性におけるカルパインの影響, 中部日本整形外科学会雑誌 2012年; 55巻: 94.
- 13) 増田剛宏, 鈴木直樹, 山田喜久, 伏見一成, 清水克時, 宮本 敬. MRSA 脊椎炎に対する手術治療, 中部日本整形外科学会雑誌 2012年; 55巻: 275-276.
- 14) 福田章二, 宮本 敬, 鈴木毅一, 前原秀亮, 井上俊之, 喜久生健太, 清水克時. ヒト椎間板組織編制におけるカルパインの影響, 日本軟骨代謝学会誌 2012年: 109.
- 15) 下川哲哉, 宮本 敬, 伏見一成, 日置 暁, 細江英夫, 榮枝裕文, 清水克時. 椎体亜全摘頸椎前方除圧固定術(5-levelACDF)の治療成績, Journal of Spine Research 2012年; 3巻: 332.
- 16) 細江英夫, 飯沼宣樹, 棚橋宏行, 河村真吾, 清水克時, 宮本 敬. 頸椎前方固定術後の軟部腫脹についての検討, Journal of Spine Research 2012年; 3巻: 337.
- 17) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 伏見一成, 飯沼宣樹, 棚橋宏行, 河村真吾. 骨粗鬆症を伴う後弯症に対する胸椎移行部における骨切り術 一成績不良例からの考察一, Journal of Spine Research 2012年; 3巻: 380.
- 18) 増田剛宏, 宮本 敬, 鈴木直樹, 山田喜久, 細江英夫, 清水克時. 化膿性脊椎炎と結核性脊椎炎に対する二期的手術(後方+前方固定)の比較検討, Journal of Spine Research 2012年; 3巻: 429.
- 19) 日置 暁, 宮本 敬, 伏見一成, 細江英夫, 清水克時. 腰椎変性疾患に対する Solid 馬蹄形 Spacer(IFS)を用いた c-TLIF の治療成績, Journal of Spine Research 2012年; 3巻: 497.
- 20) 岩田崇裕, 宮本 敬, 大橋 稔, 酒井浩志, 日置 暁, 伏見一成, 清水克時. Kidney 型スペーサーを用いた片側経椎間孔腰椎椎体間固定術における非侵入側椎間孔の形態学的変化, Journal of Spine Research 2012年; 3巻: 509.
- 21) 下川哲哉, 宮本 敬, 日置 暁, 清水克時. 腰椎関連疾患患者の全脊椎立位側面 XP における第9胸椎の位置の検討 一胸腰椎骨盤広範囲固定の指摘アラインメントの基準を求めて一, 第46回日本側彎症学会演題抄録集 2012年: 144.
- 22) 宮本 敬, 日置 暁, 下川哲哉, 清水克時. 腰椎変性後弯患者の診察における肘・前腕伸側の皮膚観察の重要性について(Kitchen Elbow Sign :KE-Sign), 第46回日本側彎症学会演題抄録集 2012年: 185.
- 23) 宮本 敬, 伊藤芳毅, 清水克時. 脊柱外科 Q&A, THE SPINE 2012年: 8-10.
- 24) 増田剛宏, 鈴木直樹, 山田喜久, 山内高雲, 宮本 敬. 外科的治療を施行した os odontoideum の2例, 東海脊椎外科 2012年; 26巻: 21-24.
- 25) 宮本 敬. アスリートにおける腰痛の留意点、チェックポイント, リトルリーグ 2012年; 350号: 5.
- 26) 貞升 彩, 宮本 敬, 田中健一郎, 細江英夫, 清水克時. 頸椎後縦靭帯骨化症に対する手術治療成績の検討, 岐阜大学医学部紀要 2012年; 57巻: 5-14.
- 27) 細江英夫, 飯沼宣樹, 濱田 知, 清水克時, 宮本 敬, 神田倫秀, 棚橋宏行, 野々村秀彦, 横井達夫. 頸椎前方固定術後の気道閉塞に関する研究, 日本整形外科学会雑誌 2013年: S387.

- 28) 中村 寛, 日置 暁, 下川哲哉, 宮本 敬, 細江英夫, 清水克時. 脊柱側彎症 Lenke type6 に対する前方矯正固定術の検討, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2013年:71.
- 29) 細江英夫, 飯沼宜樹, 河村真吾, 次田雅典, 清水克時, 宮本 敬, 前田雅人. 頸椎前方固定術後の何部腫脹についての検討, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2013年:259.
- 30) 日置 暁, 仙石昌也, 伏見一成, 清水克時, 宮本 敬. 頸椎両側ダンベル腫瘍の1例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2013年:259.
- 31) 宮本 敬, 日置 暁, 伏見一成, 清水克時, 細江英夫. 側弯症(おもに突発性側弯症)に対する外科的治療の当科における治療指針, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2013年:260.
- 32) 下川哲哉, 川口教司, 溝口隆司, 横田 治, 榮枝裕文, 伏見一成, 日置 暁, 清水克時, 宮本 敬. 胸腰椎後方インスツルメンテーションにおける1椎弓クローフックの使用経験, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2013年:260.
- 33) 伏見一成, 山内高雲, 日置 暁, 清水克時, 宮本 敬, 宮本真紀, 飯田宏樹. 悪性高熱既往患者に対する胸椎手術の経験, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2013年:260.
- 34) 増田剛宏, 鈴木直樹, 山田喜久, 佐藤克平, 大西量一郎, 井上俊之, 宮本 敬. 脊髄症を呈し頸椎 OPLL を合併した胸椎巨大 OYL の1例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2013年:265.
- 35) 鈴木直樹, 増田剛宏, 山田喜久, 笹野三郎, 宮本 敬. パーキンソン病に伴う著明な後側弯症に対し広範囲脊柱矯正固定術を施行した1例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2013年:265.
- 36) 小池 玲, 喜久池健太, 前田雅人, 日置 暁, 下川哲哉, 清水克時, 川井 豪, 山口良大, 小倉真治, 宮本 敬. 麻痺を有する脊椎脊髄疾患・外傷に対する緊急手術の手術成績, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2013年:265.
- 37) 下川哲哉, 日置 暁, 清水克時, 宮本 敬, 増田和明, 高澤 真. 脊髄髄内腫瘍に対する手術治療成績, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2013年:266.
- 38) 宮本 敬, 下川哲哉, 日置 暁, 増田剛宏, 清水克時, 大野貴敏. 脊柱矢状面アライメントの異常とその矯正 HAS - HAT9 を用いた胸腰椎骨盤広範囲固定症例の矢状断アライメントの評価, 整形・災害外科 2013年;56巻:839-843.
- 39) 下川哲哉, 日置 暁, 増田剛宏, 大野貴敏, 角島元隆, 小原 明, 小池 玲, 前田雅人, 清水克時, 宮本 敬. 上位胸椎 OPLL に対し Sundaesan アプローチにて前方除圧固定術を施行した1例, 中部整災誌 2013年;56巻:1059-1060.

原著 (欧文)

- 1) Komura S, Miyamoto K, Hosoe H, Iinuma N, Shimizu K. Lower incidence of adjacent segment degeneration after anterior cervical fusion found with those fusing C5-6 and C6-7 than those leaving C5-6 or C6-7 as an adjacent level. J Spinal Disord Tech. 2012;25:23-29. IF 1.888
- 2) Hioki A, Miyamoto K, Sadamasu A, Nozawa S, Ogawa H, Fushimi K, Hosoe H, Shimizu K. Repair of pars defects by segmental transverse wiring for athletes with symptomatic spondylolysis: relationship between bony union and postoperative symptoms. Spine (Phila Pa 1976). 2012;37:802-807. IF 2.447
- 3) Fushimi K, Miyamoto K, Fukuta S, Hosoe H, Masuda T, Shimizu K. The surgical treatment of pyogenic spondylitis using posterior instrumentation without anterior debridement. J Bone Joint Surg Br. 2012;94B:821-824. IF 2.801
- 4) Hioki A, Miyamoto K, Sadamasu A, Nozawa S, Ogawa H, Fushimi K, Hosoe H, Shimizu K. Repair of pars defects by segmental transverse wiring for athletes with symptomatic spondylolysis: relationship between bony union and postoperative symptoms. Spine. 2012;37:802-807. IF 2.447
- 5) Miyamoto K, Hioki A, Shimokawa T, Shimizu K. Pigmentation and /or hypertrophic change in the dorsal side of forearm and dlbw can indicate sagittal imbalance in female patients associated with lumbar degenerative kyphosis-signal cance of KE-sign (Kitchen Elbow sign)-. The 42nd Annual Meeting of the Japanese Society for Spine Surgery and Related Research. 2013:330.
- 6) Fushimi K, Miyamoto K, Hioki A, Hosoe H, Takeuchi A, Shimizu K. Unexpected neurological deterioration due to missed thoracic spinal stenosis after lumbar spinal decompressive surgery: A report of 6 cases of tandem thoracic and lumbar spinal stenosis. Bone Joint J. 2013:1388-1391.
- 7) Iwata T, Miyamoto K, Hioki A, Ohashi M, Inoue N, Shimizu K. In vivo measurement of lumbar foramen during axial loading using a compression device and computed tomography. J Spinal Disord Tech. 2013;26:E177-182. IF 1.888
- 8) Tanahashi H, Miyamoto K, Hioki A, Iinuma N, Ohno T, Shimizu K. Alterations in axial curvature of the cervical spine with a combination of rotation and extension in the conventional anterior cervical approach. Eur Spine J. 2013;22:2850-2856. IF 2.473
- 9) Hashimoto K, Miyamoto K, Yanagawa T, Hattori R, Aoki T, Ohno T, Matsuoka T, Shimizu K. Lumbar corsets can decrease lumbar motion in golf swing. J Sport Sci Med. 2013;12:80-87. IF 0.898

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

なし

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

- 1) 宮本 敬, 藤巻吾朗, 宮川成門, 長谷川良一(生活技術研究所): 椅子の座部構造(特許申請中): 岐阜県総合企画部; 平成 25 年

6. 学会活動

1) 学会役員

宮本 敬:

- 1) 中部日本整形外科災害外科学会評議員(～現在)

佐藤正夫:

- 1) 中部日本整形外科災害外科学会評議員(～現在)
- 2) 日本リウマチ学会評議員(～現在)
- 3) 中部リウマチ学会評議員(～現在)
- 4) 日本画像医学会評議員(～現在)
- 5) 日本線維筋痛症学会評議員(～現在)
- 6) 日本臨床リウマチ学会評議員(～現在)
- 7) リウマチの外科研究会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

宮本 敬:

- 1) 第 17 回岐阜脊椎セミナー(平成 24 年 1 月, 岐阜, 招待講演「LSCS に対するリマプロストを用いた保存的治療の中期～長期成績(第二次中間報告)」演者)
- 2) 下呂背骨の病気セミナー(平成 24 年 2 月, 下呂, 招待講演「腰痛難民にならないために」演者)
- 3) 健康講演会かなめ会セミナー(平成 24 年 2 月, 岐阜, 招待講演「腰痛、神経痛の治療～手術なしで治す方法～」演者)
- 4) 日米脊椎フォーラム(平成 24 年 3 月, 岐阜, 講演「脊椎後方インスツルメンテーションを用いた感染性脊椎炎に対する外科的治療」座長)
- 5) 日米脊椎フォーラム(平成 24 年 3 月, 岐阜, 「『脊椎後方インスツルメンテーションを用いた感染性脊椎炎に対する外科的治療』伏見一成先生」座長)
- 6) 第 21 回岡山脊椎脊髄外科症例検討会(平成 24 年 3 月, 岡山, 招待講演「高齢者の姿勢不良に対する major operation による治療・適応、意義、注意点」演者)
- 7) Japan-USA Spine Forum (平成 24 年 3 月, 岐阜, 講演「Surgical treatment for degenerative lumbar diseases in USA」演者)
- 8) オピオイド鎮痛薬セミナー(平成 24 年 3 月, 岐阜, 講演「脊椎疾患における慢性疼痛治療～オピオイドの可能性～」演者)
- 9) 第 118 回中部日本整形外科災害外科学会・学術集会(平成 24 年 4 月, 大阪, 「case reports 15」座長)
- 10) 第 85 回日本整形外科学会学術総会(平成 24 年 5 月, 京都, 一般演題ポスター英語「spine」座長)
- 11) Aospine Advances Seminar 金沢(平成 24 年 6 月, 金沢, 講演「脊椎 instrumentation 後の創部感染への対応」演者)
- 12) Aospine Advances Seminar 金沢(平成 24 年 6 月, 金沢, 講演「頸椎前方手術のコツとピットフォール」演者)

- 13) 2012 INSPIRATION MEETING 12th ANNUAL MEETING (平成 24 年 6 月, Porto - Portugal, 講演「Burst Fracture Overview and best cases report from the round table discussions」 演者)
- 14) AOSpine Advance Seminar(平成 24 年 6 月, 金沢, 「session 2 : 頸椎」 座長)
- 15) 健康講演会誠広会セミナー(平成 24 年 7 月, 岐阜, 招待講演「“しびれ” はなぜおこるか? どう治すか?」 演者)
- 16) 第 36 回脊椎倶楽部(平成 24 年 7 月, 名古屋, 「症例検討 ①神経性胸郭出口症候群による手の筋萎縮 安藤哲朗先生 ②上肢スポーツ障害における胸郭出口症候群 岩堀裕介先生」 座長)
- 17) 第 20 回西部脊椎・脊髄疾患カンファレンス(平成 24 年 9 月, 姫路, 招待講演「Kidney 型スペーサーを用いた頸椎間孔椎体間固定術(TLIF)～手技上の留意点と各種病態への応用～」 演者)
- 18) 健康講演会かなめ会セミナー(平成 24 年 9 月, 岐阜, 招待講演「姿勢と腰痛について」 演者)
- 19) 第 15 回愛知脊椎脊髄疾患研究会学術講演会(平成 24 年 9 月, 名古屋, 招待講演「頸椎前方手術の実際―常に自分に言い聞かせている注意事項―」 演者)
- 20) 第 12 回からだ向上セミナー(平成 24 年 9 月, 岐阜, 招待講演「スポーツにおける腰部の外傷・障害について」 演者)
- 21) 第 3 回岐阜県慢性疼痛懇話会(平成 24 年 9 月, 岐阜, 「①慢性疼痛治療の基礎知識(神経障害性疼痛を含む)～痛みの評価・薬物療法を中心に～五十嵐寛先生②慢性疼痛治療の薬物治療の現状～慢性疼痛治療薬とオピオイド鎮痛薬の適正使用～鈴木直樹先生」 座長)
- 22) 健康講演会かなめ会セミナー(平成 24 年 11 月, 岐阜, 招待講演「腰痛難民にならないために 2012」 演者)
- 23) 第 17 回岐阜脊椎懇話会(平成 24 年 11 月, 岐阜, 「頸椎後方手術後の C5 麻痺」 座長)
- 24) 第 18 回岐阜脊椎セミナー(平成 25 年 1 月, 岐阜, 「LSCS に対するリマプロストを用いた保存的治療の長期成績および服薬コンプライアンスに関する検討」 演者)
- 25) 第 18 回岐阜脊椎セミナー(平成 25 年 1 月, 岐阜, 「脊椎手術の最近のトレンドー最少侵襲と最大侵襲」 座長)
- 26) AOSpine 脊椎 Instrumentation Cadaver Workshop(平成 25 年 1 月, 栃木, 「胸椎について」 演者)
- 27) AOSpine Advances Cadaver Course, utsunomiya, Japan(平成 25 年 1 月, 栃木, 「Thoracic Spine」 演者)
- 28) 第 49 回脊椎インストゥルメンテーション懇話会(平成 25 年 3 月, 東京, 「変性脊椎に発症した第 12 胸椎圧迫骨折圧潰の 1 例」 演者)
- 29) 第 24 回腰痛シンポジウム(平成 25 年 3 月, 東京, 「腰痛に対する外科的治療の適応と実際―全脊椎アラインメント観察の重要性―」 演者)
- 30) 全日本リトル野球協会リトルリーグ東海連盟第 12 回からだ向上セミナー(平成 25 年 4 月, 日本, 「腰のケガ、障害について」 演者)
- 31) アジア・パシフィック整形外科脊椎外科カンファレンス(平成 25 年 4 月, 岐阜, 招待演題「APOA Travelling Fellows ～アジア諸国から選抜された若手脊椎外科医」 座長)
- 32) NHK カルチャー(平成 25 年 4 月, 岐阜, 「腰部脊柱管狭窄症の治療と自己管理」 演者)
- 33) 第 86 回日本整形外科学会学術総会(平成 25 年 5 月, 広島, 「成人脊柱変形に対する矯正固定術は矢状面下肢アライメントも変えるか・中高齢脊柱後弯変形患者における背筋脂肪変性と歩行障害・側弯症の非手術例における腰椎椎間板変性の検討・腰椎変性側弯症に対する多椎間矯正固定術の長期臨床成績―特に腰仙椎 alignment の推移と各種合併症の影響について―」 座長)
- 34) AOSpine Advances Seminar Nagoya(平成 25 年 6 月, 名古屋, 「腰椎圧迫骨折に起因する腰部脊柱管狭窄症」 演者)
- 35) AOSpine Advances Seminar Nagoya(平成 25 年 6 月, 名古屋, 「固定隣接椎間にあるマイルドな狭窄をどう扱うか」 演者)
- 36) AOSpine Advance Seminar Nagoya 腰部脊柱管狭窄症を極める(平成 25 年 6 月, 名古屋, 「保存療法(コルセット、薬物、リハビリ)とその限界の見極め―稲田充・手術適応とその術式選択(除圧から固定まで)―水谷潤」 座長)
- 37) 2013 INSPIRATION MEETING(2013.06, Malta, 「Surgical treatment for junctional kyphosis after thoracolumbar long fusion using semi-rigid spinal instrumentation」 演者)
- 38) 半田内科医会学術講演会(平成 25 年 7 月, 愛知, 「神経痛を合併する腰部疾患の診断と治療」 演者)
- 39) 第 121 回中部日本整形外科学会災害外科学会(平成 25 年 9 月, 名古屋, 「初診時に転移性脊髄腫瘍との鑑別を要した SAPHO 症候群の 2 例・高齢者の骨脆弱性に伴う仙骨骨折の検討・透析患者の腰椎椎弓切除後に発生した椎間間接嚢腫の 2 例・腰椎術中に馬尾神経嵌頓による脊髄ショックとなった 1 例」

座長)

- 40) 第 20 回日本脊椎・脊髄神経手術手技学会学術集会 Spine Leader's Lecture D(平成 25 年 9 月, 名古屋, 「手術を中心とした骨粗鬆症性脊椎疾患に対する治療戦略」座長)
- 41) 健康講演会かなめ会セミナー(平成 25 年 9 月, 岐阜, 「背骨の病気の最新治療」演者)
- 42) 整形外科長良リバーサイドフォーラム(平成 25 年 9 月, 岐阜, 「矢状面アライメント異常を伴う高齢者の腰痛に対する診断、薬物治療、手術治療—Kitchen - Elbow Sign (KE-Sign)から推し量る患者の QOL—」演者)
- 43) 平成 25 年度岐阜大学医学市民講座(平成 25 年 9 月, 岐阜, 「腰痛の治療と自己管理」演者)
- 44) 第 55 回「みえ脊椎を語る会」(平成 25 年 11 月, 三重, 「高齢者の脊椎疾患に対する我々の治療戦略—腰部脊柱管狭窄症から矢状面バランス異常まで—」演者)
- 45) 健康講演会かなめ会セミナー(平成 25 年 11 月, 岐阜, 「腰にいい椅子とは?」演者)
- 46) 若手を対象とした脊椎内科・脊椎外科の勉強会(平成 25 年 11 月, 岐阜, 「骨粗鬆合併例における脊椎インスツルメンテーション手術の問題例から学んだこと」演者)
- 47) きつつき市民講座(平成 25 年 11 月, 岐阜, 「腰痛、神経痛で困っている方々にお伝えしたいこと」演者)
- 48) 山県市介護予防後援会(平成 25 年 12 月, 岐阜, 「腰痛の治療と自己管理」演者)

佐藤正夫:

- 1) 第 22 回日本脊椎関節炎学会(平成 24 年 9 月, 大阪市, ランチョンセミナー「腰痛にご用心、脊椎関節炎を見逃さない」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

平成 26 年 3 月末日をもって講座閉鎖

(8) 寄附講座「乳腺・分子腫瘍学講座」

1. 研究の概要

乳がんを中心とした癌医療の充実を目指す。チーム医療に根づいた岐阜県の乳癌医療の充実を図り患者の福祉に寄与すると同時に、基礎研究・臨床研究による成果を内外に発信し新たなエビデンスの構築に努める。

2. 名簿

准教授： 二村 学 Manabu Futamura
助教： 森光華澄 Kasumi Morimitsu

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）
なし

総説（和文）
なし

総説（欧文）
なし

原著（和文）

- 1) 森光華澄, 二村 学, 名和正人, 宮崎 崇, 吉田和弘. *Corynebacterium kroppenstedtii* 感染が確認された慢性肉芽腫性乳腺炎の1例, 日本臨床外科学会雑誌 2013年; 74巻: 2679-2683.

原著（欧文）

- 1) Futamura M, Morimitsu K, Nawa M, Kanematsu M, Gotoh N, Yoshida K. Novel navigation surgery using image fusion of PET/CT and sonography for axillary neoplasm: First experience. *International Journal of Surgery Case Reports*. 2013;4:719-722.
- 2) Yano H, Nakayama N, Morimitsu K, Futamura M, Ohe N, Miwa K, Shinoda J, Iwama T. Changes in Protein Level in the Cerebrospinal Fluid of a Patient with Cerebral Radiation Necrosis Treated with Bevacizumab. *Clinical Medicine Insights: Oncology*. 2014;8:153-157. IF 2.613

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：二村 学；臨床研究推進支援経費：乳癌患者における可溶性膜蛋白(GPNMB/Osteoactivin)の予後因子・治療標的の可能性評価に関する研究；平成24年度；1,000千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

二村 学：

- 1) 日本外科学会代議員(～平成24年)
- 2) 日本癌治療学会評議員(～現在)
- 3) 日本乳癌学会中部地方会世話人(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演、招待シンポジスト、座長

二村 学：

- 1) 第 50 回日本癌治療学会学術集会(平成 24 年 10 月, 横浜, ポスターディスカッション「乳癌における GPNMB 発現と血清 GPNMB 測定の意義」演者)
- 2) 第 31 回日本乳腺甲状腺超音波医学会(平成 25 年 9 月, 神戸, バーチャルソノグラフィ研究部会企画「PET/Vnav を navigation とした腋窩手術の試み」演者)
- 3) 第 47 回制癌剤適応研究会(平成 26 年 3 月, 名古屋, シンポジウム 1-2「岐阜県における医師主導臨床研究グループ(PerSeUS)の現状と今後の展望」シンポジスト)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 二村 学: The 9th International Symposium on Cancer Research and Therapy Poster Presentation (平成 26 年)
- 2) 森川あけみ: The 11th International Conference of the ACOS Merit Award(平成 26 年)

9. 社会活動

二村 学：

- 1) JBCRG(Japan Breast Cancer Research Group)臨床試験検討委員会委員(~現在)
- 2) JABTS(Japanese Association of Breast and Thyroid Sonography)バーチャルソノグラフィ研究班班員(~現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

乳癌医療の更なる向上を目指すために、“Bench to Bedside, Basic research to Clinical research”をモットーとして臨床および研究を続けている。(1) 基礎研究では、乳癌のバイオマーカーの同定、乳癌や胃癌を中心とした薬剤耐性メカニズムの解明にスポットを当て現在進行中である。(2) 臨床においては、形成外科との共同にて乳房再建術を標準化した。婦人科と共同にて妊孕性を温存しながら乳癌治療が実践できるようになった。乳がん検診においてマンモグラフィー読影に年間を通して参加し、検診の精度管理を行ってきた。(3) 臨床研究では、診断においてバーチャルソノグラフィーを導入し、化学療法の新規評価法の開発、腋窩手術に対する navigation surgery の開発を行っている。PET-CT による新規腋窩転移診断法の開発も行った。(4) 臨床試験・治験では、Global および全国規模の臨床試験に参加しエビデンス構築に寄与するとともに、関連病院と共に岐阜県における臨床試験を立案・遂行し新たなエビデンスの発信としている。また、遺伝子検索が可能な院内システムを立ち上げた。(5) 他の職種と共同してチーム医療の向上・推進、地域の医療機関との連携の確立に努めている。これらの臨床・研究内容が少しずつ東海地区および全国区レベルで認知されてきている。

現状の問題点及びその対応策

良き臨床研究は豊富な症例数から生まれることは明らかであり、様々な試みを実践するために症例数の増加が望まれる。このためにスタッフ一丸となり、より良い医療の提供に加え患者やスタッフ間の信頼関係を充実させ症例数の増加につなげる努力が欠かせない。日常臨床・臨床研究を両立させるためには、スタッフの充実は不可欠であり、次世代の人材を育成することを常に念頭に置きながら進めていく必要があると考える。研究において、他部署・他施設の基礎研究機関との共同研究、臨床研究における

多施設共同研究（試験）を積極的に推進し、効率よく成果を出せる体制を構築していくことも重要と考える。検診業務においては、乳がん検診受診率は欧米と比較しても明らかに低いことから、住民に対する啓蒙活動の実践と検診精度管理に関与していかなければならない。

今後の展望

岐阜県の乳癌医療の充実を図り、岐阜の乳腺を内外にアピールしていくことが最大の目標である。エビデンスの構築と治療選択幅を広げることは、岐阜の乳癌医療のレベル向上、ひいては治療成績の向上に繋がる。基礎から臨床を広くカバーしながら、上述の内容を地道に実践していくことが有用と考える。そして乳腺医療および研究の魅力を次世代に伝えていきたいと願っている。

(9) 寄附講座「循環呼吸先端医学講座」

1. 研究の概要

当講座は循環病態学分野並びに呼吸病態学分野に随伴した寄附講座であり、両講座の広範な研究分野の一部に係わる形で活動している。それらのおもなものとしては 1) ドラッグデリバリーシステムを用いたエリスロポイエチン投与による心筋梗塞後心組織修復再生療法の開発, 2) 心筋梗塞時の心筋細胞におけるオートファジーの病態生理解明による治療の進歩, 3) 呼吸器悪性新生物の薬物治療に関する臨床研究, 4) 間葉系幹細胞のサブセットである MUSE 細胞を用いた心筋梗塞後心組織再生療法の研究 である。

2. 名簿

准教授： 三上 敦 Atsushi Mikami
助教： 川村一太 Itta Kawamura
助教： 遠渡純輝 Junki Endo

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

なし

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

なし

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 西垣和彦, 名和隆英, 服部有博, 鈴木貴史, 東 賢志, 今井 一, 山田好久, 高杉信寛, 久保田知希, 青山琢磨, 川崎雅規, 竹村元三, 湊口信也. 造影剤腎症に対する Nicorandil の持続点滴静注効果の検討, *Therapeutic Research* 2013 年 ; 34 卷 : 340.

原著 (欧文)

- 1) Kawaguchi T, Takemura G, Kanamori H, Takeyama T, Watanabe T, Morishita K, Ogino A, Tsujimoto A, Goto K, Maruyama R, Kawasaki M, Mikami A, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Prior starvation mitigates acute doxorubicin cardiotoxicity through restoration of autophagy in affected cardiomyocytes. *Cardiovasc Res.* 2012;96:456-465. IF 5.808
- 2) Kanamori H, Takemura G, Goto K, Tsujimoto A, Ogino A, Takeyama T, Kawaguchi T, Watanabe T, Morishita K, Kawasaki M, Mikami A, Fujiwara T, Fujiwara H, Seishima M, Minatoguchi S. Resveratrol reverses remodeling in hearts with large, old myocardial infarctions through enhanced autophagy-activating AMP kinase pathway. *Am J Pathol.* 2013;182:701-713. IF 4.602
- 3) Yamada Y, Kobayashi H, Iwasa M, Sumi S, Ushikoshi H, Aoyama T, Nishigaki K, Takemura G, Fujiwara T, Fujiwara H, Kiso M, Minatoguchi S. Post-infarct active cardiac-targeted delivery of erythropoietin by liposomes with Sialyl Lewis X repairs infarcted myocardium in rabbits. *Am J Physiol Heart Circ Physiol.* 2013;304:1124-1133. IF 4.012
- 4) Hattori A, Kawamura I, Yamada Y, Kanamori H, Aoyama T, Ushikoshi H, Kawasaki M, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S. Elevated plasma GLP-1 levels and enhanced expression of cardiac GLP-1 receptors as markers of left ventricular systolic dysfunction: a cross-sectional study. *BMJ Open.* 2013;3:e003201. IF 2.063
- 5) Watanabe T, Kawasaki M, Tanaka R, Ono K, Nishigaki K, Takemura G, Arai M, Noda T, Watanabe S, Minatoguchi S. Association among blood pressure control in elderly patients with hypertension, left atrial structure and function and new-onset atrial fibrillation: a prospective 2-years study in 234 patients. *Hypertens Res.* 2013;36:799-806. IF 2.936
- 6) Nagaya M, Kawasaki M, Tanaka R, Onishi N, Sato N, Ono K, Watanabe T, Minatoguchi S, Miwa H, Goto Y, Hirose T, Arai M, Noda T, Watanabe S, Minatoguchi S. Quantitative validation of left atrial structure and function by two-dimensional and three-dimensional speckle tracking echocardiography: a comparative study with three-dimensional computed tomography. *J Cardiol.* 2013;62:188-194. IF 2.566
- 7) Watanabe T, Takemura G, Kanamori H, Goto K, Tsujimoto A, Okada H, Kawamura I, Ogino A, Takeyama T, Kawaguchi T, Morishita K, Ushikoshi H, Kawasaki M, Mikami A, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Restriction of food intake prevents postinfarction heart failure by enhancing

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

なし

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

なし

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

1) 山田好久: 日本循環器学会 AHA 年次学術集会の発表に対する国際交流助成(平成 24 年度)

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

当グループの欧文原著は今回 1 報が加わったが, その渡邊らの 2014 年に刊行された論文はマウスモデルを用いて心筋梗塞回復期に食餌摂取を制限することにより, 治癒が促進されることを示したものである。自由摂食の 10 割, 8 割, 6 割, 4 割と減らしていったとき 6 割で最も好結果であった。食事制限で心筋細胞内の自食作用(オートファジー)が亢進しており, オートファジー遮断薬クロロキンで食事制限の効果も消失した。一見病態を悪化するのみでもおかしくない食餌制限は細胞内の代謝を促進して回復を促進した。また心筋梗塞のダメージが 6 割で最小となるような J-カーブを観察することもでき, 各種生理指標や薬物効果と同様の傾向が観察でき, 他の疾患の治療へも洞察を与えるものとなった。実際この研究は国内外の学会発表でも好評を博している。

現状の問題点及びその対応策

当寄附講座発足から 3 年を経て研究費も漸く充足してきた。残る期間にそれに見合った結果を出して

いきたい。

今後の展望

当寄附講座の残りの期間で社会に役立つ結果を残すのが一番の目標となっている。

(10) 寄附講座「周術期侵襲制御講座」

1. 研究の概要

周術期における患者の評価と管理は、適切な治療戦略を選択するだけでなく手術という生体侵襲から良好な回復を図るためにも非常に重要である。ひとたび周術期合併症が発生すれば入院期間は延長し、術後患者の機能や生命予後が増悪することは明らかである。手術侵襲を制御するためには手術室内での麻酔管理だけではなく、術前からの様々な準備や術後の合併症予防などを併せて実施することが必要である。さらに周術期管理は医師だけで行うものではなく、看護師や薬剤師や理学療法士など多くのメディカルが参加したチーム医療によって支えられなければ成立しない。個々の患者を中心として各専門分野から最適な医療を組み立てることができる体制をつくること、そしてその成果を検証することがわれわれに課せられた大きな課題である。

2. 名簿

准教授： 山本拓巳 Takuji Yamamoto
助教： 山田裕子 Yuko Yamada

3. 研究成果の発表

麻酔・疼痛制御学参照

4. 研究費獲得状況

麻酔・疼痛制御学参照

5. 発明・特許出願状況

麻酔・疼痛制御学参照

6. 学会活動

1) 学会役員

麻酔・疼痛制御学参照

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

麻酔・疼痛制御学参照

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

麻酔・疼痛制御学参照

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

麻酔・疼痛制御学参照

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

1) 術前外来の運用

手術室内に術前診察室を設置し、従来は麻酔科医が病室に出向いて行っていた術前評価および麻酔に関する説明・同意書の取得をより円滑に実施できることを目指した。プライベートに配慮した落ち着いた空間を確保するだけでなく、診察予約枠を設定することがもたらす効率的な運用は、同時に麻酔科医の手術室業務への影響を最小限に抑えることにもつながったと評価できる。

2) 術後回復力強化 (ERAS) プロトコールに準じた管理の実践

既に ERAS プロトコールは広く麻酔科領域では浸透しているが、その中でも重要項目として絶飲食時間の短縮、短時間作用型の麻酔薬使用、適切な疼痛管理などが挙げられている。これらのうち、絶飲食時間の短縮については術前の炭水化物負荷がインスリン抵抗性の改善や腸管機能の維持につながることが示され、看護部や栄養管理室と連携し、より積極的な術前補水食の導入として病棟を限定した運用開始に至った。

3) 術後患者の満足度調査

周術期医療の質を評価するためには死亡率や合併症発生頻度などの医師指向型アウトカムだけでなく、患者から提供される情報をもとにした患者指向型アウトカムを測定することが求められる。その代表として挙げられる麻酔満足度について、複数の手術術式を対象に調査を実施した。

現状の問題点及びその対応策

1) 術前評価と周術期外来

現在の術前外来は、原則として入院後の患者を対象としている。しかし周術期合併症の危険因子を抱えた症例の場合、入院前からの積極的な介入（薬物治療、禁煙指導、リハビリテーションなど）が必要となる。患者情報としての危険因子を主治医と共有し、専門外来受診を含めた術前準備を円滑に進めるためには、多職種参加による周術期外来の創設および電子カルテによる医療支援が不可欠である。

2) 術後回復力強化プログラム

術後急性期の疼痛管理は麻酔科主導のオピオイド鎮痛が主体となるが、その後は NSAIDs などの経口鎮痛薬による疼痛管理への移行が一般的である。しかし、鎮痛効果や機序が異なる薬物への変更は必ずしも円滑とはいえず、多系統の鎮痛薬を効果的に組み合わせる方法が推奨されている。術後のリハビリテーションを促進する意味からも、この時期の疼痛管理に対する重要性の認識は増している。院内では、ペインクリニック外来への受診を核とした受け皿づくりを進め一部の診療科を対象にすでに実践されているが、今後はさらに対象を拡大していくことが期待される。

3) 麻酔満足度向上に向けての取り組み

手術からの回復の質に大きな影響を与える要因として、術後の痛みはもちろん悪心・嘔吐の割合が高いことが知られている。不動化にもつながるこれらの要因の重要性は、麻酔満足度調査によりわれわれの施設にも当てはまることが確認できた。術後の悪心・嘔吐を予防するための対策は術前から始められるべきであり、まさに術中・術後と併せた周術期管理によって大いに改善できる領域と考える。周術期管理の成果を検証できるモデルケースとして、病院内外への情報発信に向けて努力していきたい。

今後の展望

当寄附講座は 3 年間の時限措置であり、今後の課題に向けての取り組みは麻酔科疼痛治療科の臨床業務や周術期最適化プロジェクトとして受け継がれることになる。

(11) 寄附講座「がん先端医療開発学講座」

1. 研究の概要

消化器がん、乳がんの手術療法、薬物療法・分子標的療法の技術の普及や臨床試験を展開し、国内はもとより我が国から世界に発信する研究を行うことや、関連施設、医師会、行政、患者会等々も巻き込んだ形での臨床研究の促進、集約化、標準治療の浸透、専門医、メディカルスタッフの育成に貢献する。また大腸内視鏡手術治療における標準化、定型化の時代はわれわれは過ぎており、これを次世代に教育すること、自らを検証した上で新たなエビデンスを発信する研究を行う。

2. 名簿

准教授： 松橋延壽 Nobuhisa Matsuhashi
助教： 加藤順子 Junko Kato

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 長瀬通隆. 腎機能障害を伴う進行再発胃癌の学療法について教えてください：胃癌 perspective 5 巻 2 号, 東京：メディカルレビュー社；2012 年：40-41.
- 2) 松橋延壽. Interview 抗 EGFR 抗体による皮膚障害とその対策 さ瘡様皮疹などの症状改善を目指す - 栄養補助食品『アバンド』による栄養療法 - : CLINIC magazine, ドラッグマガジン；2014 年：16-18.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 松橋延壽, 高橋孝夫, 奥村直樹, 山口和也, 吉田和弘. 特集：外科医が知っておくべき癌治療の薬物療法 II 抗癌薬各論 6 Gastrointestinal stromal tumor の薬物療法, 外科 2013 年；75 巻：1356-1361.
- 2) 松橋延壽, 國枝克行, 前田健一, 田中千弘, 長尾成敏, 河合雅彦. 当院における腹腔鏡下胆嚢摘出術施行後に診断された胆嚢癌の検討, 日本内視鏡外科学会雑誌 2013 年；18 巻：199-204.
- 3) 松橋延壽, 岩田至紀, 館 正仁, 前田健一, 田中千弘, 長尾成敏, 河合雅彦, 國枝克行. 腹腔鏡下に切除した胃癌に併発した後腹膜神経鞘腫の 1 例, 日本外科系連合学会誌 2013 年；38 巻：382-386.
- 4) 福田賢也, 長田真二, 今井 寿, 佐々木義之, 田中善宏, 松橋延壽, 奥村直樹, 野中健一, 吉田和弘. 膵管内進展をきたした TS1 膵癌の 1 例, 日本外科系連合学会誌 2013 年；38 巻：887-890.
- 5) 高橋孝夫, 松橋延壽, 吉田和弘, 飯原大稔, 藤井宏典, 伊藤善規, 高橋 蘭, 安藤真由美. 外来化学療法におけるチーム医療—大腸癌治療を中心に—, 消化器外科 2014 年；37 巻：305-313.
- 6) 松橋延壽, 高橋孝夫, 吉田和弘. 抗 EGFR 抗体薬による皮膚障害と対策 —栄養補助食品を用いた新しい試み—, 臨床腫瘍プラクティス 2014 年；10 巻：386-392.

原著（欧文）

- 1) Matsuhashi N, Nagao N, Iwata Y, Lee S, Tokuhara T, Tanaka C, Kawai M, Kunieda K, Yoshida K. V-shaped lymph node dissection in laparoscopic distal gastrectomy: new technique of intra-abdominal dissection and surgical outcomes. World Journal of Surgical Oncology. 2012;10:205. IF 1.200
- 2) Matsuhashi N, Osada S, Yamaguchi K, Saito S, Okumura N, Tanaka Y, Nonaka K, Takahashi T, Yoshida K. Oncologic outcomes of laparoscopic gastrectomy: a single-center safety and feasibility study. Surgical Endoscopy. 2013;27:1973-1979. IF 3.313
- 3) Matsuhashi N, Takahashi T, Nonaka K, Tanahashi T, Imai H, Sasaki Y, Tanaka Y, Okumura N, Yamaguchi K, Osada S, Yoshida K. Laparoscopic technique and safety experience with barbed suture closure for pelvic cavity after abdominoperineal resection. World Journal of Surgical Oncology. 2013;11:115. IF 1.200
- 4) Matsuhashi N, Maeda K, Kunieda K, Kaiho T, Funahashi K, Sasaki K, Yoshida K, Kon M, Kitagawa Y, Kono T, Hasegawa H, Sakamoto I, Furukawa I, Imazu Y, Morita S, Watanabe M, Saji S, Kanematsu T, Kitajima M. Clinical efficacy of daikenchuto for colon cancer patients having colectomy: 1-year follow-up of a randomized, double-blind, multicenter, placebo-controlled trial (JFMC39-0902). Colorectal Disease. 2013;15:90. IF 2.017
- 5) Matsuhashi N, Osada S, Yamaguchi K, Okumura N, Tanaka Y, Imai H, Sasaki Y, Nonaka RN,

- Takahashi T, Futamura M, Yoshida K. Long-term Outcomes of Treatment of Gastric Gastrointestinal Stromal Tumor by Laparoscopic Surgery: Review of the Literature and Our Experience. Hepatogastroenterology. 2013;60:2011-2013. IF 0.907
- 6) Sasaki Y, Osada S, Mori R, Imai H, Tanaka Y, Matsuhashi N, Okumura N, Nonaka K, Takahashi T, Yoshida K. Determining Timing of Hepatectomy for Colorectal Cancer with Distant Metastasis According to Imaging-Based Tumor Shrinkage Ratio. Int J Med Sci. 2013;10:1231-1241. IF 1.552
- 7) Matsuhashi N, Takahashi T, Nonaka K, Ichikawa K, Yawata K, Tanahashi T, Imai H, Sasaki Y, Tanaka Y, Okumura N, Yamaguchi K, Osada S, Yoshida K. A case report on efficacy of Abound™ for anti-EGFR antibody-associated skin disorder in metastatic colon cancer. World J Surg Oncol. 2014;12:35 IF 1.200

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

なし

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

なし

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

松橋延壽:

- 1) 第 38 回日本外科系連合学会学術集会(平成 25 年 6 月, 東京, ビデオシンポジウム 3「下部直腸がんにおける腹腔鏡下手術の定型化及び手術器具選択の工夫」シンポジスト)
- 2) 第 68 回日本消化器外科学会総会(平成 25 年 7 月, 宮崎, 要望ビデオ 23「当科における腹腔鏡下低位前方切除術における定型化の工夫」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 森川あけみ: The 11th International Conference of the ACOS Merit Award(平成 26 年 5 月)

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

多くの臨床試験に参加しさらに当科の成績を検証し論文にしてきた。今後もこれをさらに継続し国際的に認められたトップジャーナルに掲載されるようにしたい。現在数多くの臨床試験にも参加しており上位登録施設になっているが、まだまだトップを取れるまでには至っていない。今後はトップになれるよう多くの患者治療を行い、臨床試験に参加し日本施設代表として国際学会での発表を得たい。しかしそこでの医療の安全および質は確保した上で実証すべきであると考えている。また次世代の内視鏡外科医を育てるため今後は内視鏡外科における研究会を構築していく必要があり、現在の構築を行っている。

現状の問題点及びその対応策

現在はスタッフが限られている中での奮闘であり、やはり外科医入局者を増やす必要がある。また臨床試験もスタッフは通常業務終了後に CRF など記載従事することになり疲弊感は否めない。また医局秘書に協力してもらい CRF 記載業務など軽減しているが、医局秘書にも負担が多くなるため病院として臨床研究推進センターの充実が望まれる。

今後の展望

次世代内視鏡外科を目指す人材育成および確保が必要であり、現在セミナーおよび研究会を企画中であり 2015 年 5 月よりこれを岐阜地区で行っていく予定である。魅力ある会とすることで今後の大腸内視鏡外科を目指す次世代外科医が増加することで、岐阜地域の医療の底上げ、さらには岐阜地域の患者の利益になることが我々の社会貢献に繋がると考える。さらに集約化が可能になれば国際的な臨床試験および治験においても参加する資格を得ることができ、岐阜大学における大きなメリットとなることが予測される。

(12) 寄附講座「地域腫瘍学講座」

1. 研究の概要

大学を中心とした岐阜地域の主に血液内科、消化器内科領域の悪性疾患に対する診断と治療の質的向上を通して地域に貢献する。また発がんの観点から健康診断患者の血清を用いたデータを収集し、論文発表や講習会を通じて地域への還元を行う。

2. 名簿

助教： 井深貴士 Takashi Ibuka
助教： 久保田全哉 Masaya Kubota

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 安田一朗. ② EPBD(内視鏡的乳頭バルーン拡張術)第3章 ERCP 関連手技 4) ERCP 関連手技に必要な処置具と手技の実際(胆道編)：糸井隆夫編. 胆膵内視鏡の診断・治療の基本手技(改訂第2版), 東京：羊土社；2012年：185-188.
- 2) 安田一朗. 第2章 Interventional EUS の極意 6 EUS-CGN&CPN：小池和彦監. 伊佐山浩通編. 胆膵内視鏡治療—手技の極意とトラブルシューティング, 東京：羊土社；2012年：152-158.
- 3) 安田一朗. 第3章トラブルシューティング EST 後出血に対する Covered metallic stenting：小池和彦監. 伊佐山浩通編. 胆膵内視鏡治療—手技の極意とトラブルシューティング, 東京：羊土社；2012年：192.
- 4) 向井 強, 安田一朗. 第4章トラブルシューティング 2 肝門部用メタリックステント：小池和彦監. 伊佐山浩通編. 胆膵内視鏡治療—手技の極意とトラブルシューティング, 東京：羊土社；2012年：245-250.
- 5) 安田一朗, 中島賢憲. III. 胆膵—膵臓—感染性膵壊死に対する内視鏡的ネクロセクトミー：林 紀夫, 日比紀文, 上西紀夫, 下瀬川徹編. Annual Review 消化器 2013, 東京：中外医学社；2013年：211-215.
- 6) 安田一朗. V. 助手(医師、内視鏡技師、看護師)のポイント Q28. 万全の ERCP 手技のために行うべきことは？：糸井隆夫編. 【消化器内視鏡レクチャー】Vol.1, No. 3「とことん知りたい ERCP の手技のコツ」, 東京：総合医学社；2013年：557-560.
- 7) 土井晋平, 安田一朗. 8章 消化器疾患各論 5. 胆道疾患 3. 急性胆嚢炎：浅香正博, 菅野健太郎, 千葉勉編. カラー版 消化器病学 基礎と臨床, 東京：西村書店；2013年：1388-1390.
- 8) 土井晋平, 安田一朗. II. 治療 6. 胆膵内視鏡治療、腹腔神経叢ブロック：小原勝敏監, 入澤篤志編. 消化器内視鏡プロフェッショナルの技—上級者へのステップアップのために—, 東京：日本メディカルセンター；2013年：287-290.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 安田一朗, 土井晋平, 森脇久隆. 「必携 内視鏡リファレンスブック 2012」EUS ガイド下腹腔神経叢・神経節ブロック, 消化器内視鏡 2012年；24巻：682-686.
- 2) 安田一朗. 「日本胆道学会認定指導医養成講座」総胆管結石治療における EST と EPBD, 胆道 2012年；26巻：162-168.
- 3) 安田一朗. 特集「内視鏡 もう一工夫」各論【EUS】EUS で胆管が描出できなかつたら, 消化器内視鏡 2012年；24巻：1545-1547.
- 4) 向井 強, 安田一朗, 中島賢憲, 土井晋平, 岩下拓司, 富田栄一, 森脇久隆. 特集II「非切除胆道癌の治療」9. 非切除胆道癌に対する胆道ステントの選択方針, 消化器内科 2012年；55巻：382-391.
- 5) 向井 強, 安田一朗, 中島賢憲, 土井晋平, 岩下拓司, 富田栄一, 森脇久隆. 特集：胆道ステントの新しい潮流—開発コンセプトとステント選択を学ぶ—：悪性中下部胆管閉塞に対する大口径(12mm)の Covered Metallic Stent：Niti—STM SUPREMO—12の初期成績, 胆と膵 2012年；33巻：795-802.
- 6) 岩下拓司, 安田一朗, 土井晋平, 森脇久隆, LeeJohn G., ChangKenneth J. 悪性胆管閉塞に対する胆管ドレナージ ランデブー法(解説/特集), 消化器内視鏡 2012年；24巻：303-307.
- 7) 岩下拓司, 安田一朗, 上村真也, 山内貴裕, 土井晋平, 中島賢憲, 向井 強, 富田栄一, 森脇久隆. 特集：胆道ステントの新しい潮流—開発コンセプトとステント選択を学ぶ—：良性胆管狭窄に対する covered self-expandable metallic stent の有用性, 胆と膵 2012年；33巻：827-831.
- 8) 安田一朗, 中島賢憲, 向井 強, 岩下拓司, 土井晋平, 山内貴裕, 上村真也, 森脇久隆, 糸井隆夫. 特集：胆膵内視鏡のビデオライブデモ 2012 マスターによるテクニックの解説とビデオライブデモ 感染性膵壊死に対する内視鏡的ネクロセクトミー (DVD 付き), 胆と膵 2012年；33巻臨時増刊特大号：1081-1084.
- 9) 安田一朗, 糸井隆夫, 伊佐山浩通, 伊藤 啓, 湯沼朗生. 特集：胆膵内視鏡のビデオライブデモ 2012 座談会「進化する胆膵内視鏡をいかに学び、そして伝承していくか」, 胆と膵 2012年；33巻臨時増刊特大号：1119-1131.

- 10) 安田一朗：内視鏡的乳頭バルーン拡張術の治療成績と長期予後，胆道 2012年；26巻：691-698.
- 11) 土井晋平，安田一朗，山内貴裕，河口順二，上村真也，戸田勝久，森脇久隆．経口胆道鏡下レーザー碎石術が有用であった総胆管結石嵌頓の2例，胆道 2012年；26巻：720-726.
- 12) 糸井隆夫，祖父尼淳，糸川文英，栗原俊夫，土屋貴愛，石井健太郎，辻修二郎，池内信人，殿塚亮祐，本定三季，安田一朗，森安史典．特集【急性膵炎の診断と治療:最新の動向】 感染性膵壊死(WOPNを含む)に対する治療 内視鏡的アプローチ，消化器外科 2012年；35巻：1783-1793.
- 13) 安田一朗，岩下拓司，土井晋平，上村真也，馬淵正敏，森脇久隆．特集：消化器疾患における超音波内視鏡検査—現況と将来展望— EUS ガイド下治療の現況と将来展望 EUS ガイド下腹腔神経叢・神経節ブロック，最新医学 2013年；68巻：1751-1755.
- 14) 安田一朗，糸井隆夫，中島賢憲，向井 強，岩下拓司，土井晋平，上村真也，馬淵正敏，森脇久隆．特集：知っていますか？急性膵炎はこう治す！ 感染性膵壊死に対する内視鏡的ネクロセクトミー，胆と膵 2013年；34巻：1079-1083.
- 15) 向井 強，安田一朗，中島賢憲，土井晋平，岩下拓司，富田栄一，森脇久隆．特集【胆膵内視鏡新潮流】膵腫瘍に対する内視鏡的抗腫瘍療法・緩和治療切除不能膵癌に対する胆道ドレナージの現況，肝胆膵 2013年；66巻：39-45.
- 16) 向井 強，安田一朗，中島賢憲，土井晋平，岩下拓司，富田栄一，森脇久隆．特集／ドレナージ大全 I．胆道ドレナージ術：悪性肝門部胆道閉塞非切除例に対する内視鏡的ドレナージ，胆と膵 2013年；34巻：851-862.
- 17) 向井 強，安田一朗，中島賢憲，土井晋平，岩下拓司，富田栄一，森脇久隆．特集【非切除胆道癌の治療】非切除胆道癌に対する胆道ステントの選択方法，消化器内科 2013年；55巻：382-391.
- 18) 岩田圭介，安田一朗，塩屋正道，向井 強，中島賢憲，土井晋平，岩下拓司，富田栄一，森脇久隆．超音波内視鏡下腹腔神経叢ブロックの除痛効果に影響を及ぼす因子の検討，Gastroenterol Endosc 2013年；55巻：1868-1875.
- 19) 岩下拓司，安田一朗，土井晋平，森脇久隆，Lee John G, Chang Kenneth J.【胆膵疾患に対するInterventional EUSの新展開】胆管挿管困難例に対するEUSガイド下ランデブー法(解説/特集)，日本消化器病学会雑誌 2013年；110巻：585-591.
- 20) 岩下拓司，安田一朗，土井晋平，森脇久隆．特集【消化器領域における診断内視鏡・モダリティの進歩とその活用法】内視鏡機器の進歩と活用法 超音波内視鏡(解説/特集)，内科 2013年；111巻：491-494.
- 21) 岩下拓司，安田一朗，土井晋平，上村真也，馬淵正敏，森脇久隆．特集【胆膵内視鏡新潮流】胆道疾患に対する新しい内視鏡手技 胆道狭窄に対する新診断モダリティ：Spy Glass と Confocal laser-induced endomicroscopy(解説/特集)，肝胆膵 2013年；66巻：135-139.
- 22) 土井晋平，安田一朗，森脇久隆．特集：胆管・膵管拡張をみたら内視鏡的治療手技内視鏡的乳頭バルーン拡張術の実際，消化器内視鏡 2013年；25巻：324-327.
- 23) 上村真也，岩下拓司，安田一朗，奥野 充，馬淵正敏，土井晋平，森脇久隆．悪性胆道閉塞に対してEUSガイド下順行性胆管ステント留置術を行った1症例，肝胆膵治研誌 2013年；11巻：70-75.

総説 (欧文)

- 1) Yasuda I, Mukai T, Doi S, Tomita E, Moriwaki H. Temporary placement of covered self-expandable metallic stents in the management of benign biliary strictures. Dig Endosc. 2012;24(Suppl 1):28-33.
- 2) Yasuda I. Histological sampling using the Expect 19ga Flex Needle. Access (Boston Scientific Publication). 2012;Issue 1:6.
- 3) Shirakami Y, Shimizu M, Kubota M, Araki H, Tanaka T, Moriwaki H, Seishima M. Chemoprevention of colorectal cancer by targeting obesity-related metabolic abnormalities. World J Gastroenterol. 2014;20:8939-8946.

原著 (和文)

- 1) 大島靖広，馬淵正敏，小原功輝，岩砂淳平，安藤暢洋，岩田圭介，芋瀬基明，清水省吾，安田一朗，松橋延壽，前田健一，河合雅彦，岩田 仁，國枝克行，杉原潤一．胆道出血を伴う胆嚢小細胞癌の1症例，肝胆膵治研誌 2012年；10巻：67-72.
- 2) 安藤暢洋，加藤潤一，馬淵正敏，小原功輝，岩砂淳平，大島靖広，岩田圭介，芋瀬基明，大西隆哉，清水省吾，杉原潤一，岩田 仁，安田一朗，森脇久隆．膵漿液性嚢胞腺腫に膵腺扁平上皮癌を合併した1例，日消誌 2012年；109巻：442-450.
- 3) 馬淵量子，後藤尚絵，柴田悠平，中村信彦，兼村信宏，高井光治，清水雅仁，原 武志，安田一朗，荒木寛司，鶴見 寿，森脇久隆．R-CHOP療法で治療された濾胞性リンパ腫における治療前血清可溶性インターロイキン2受容体の予後因子としての意義，岐阜県内科医会雑誌 2012年；26巻：33-38.
- 4) 小野木章人，荒木寛司，井深貴士，岩下拓司，末次 淳，白木 亮，高井光治，清水雅仁，内木隆文，原武志，安田一朗，鶴見 寿，森脇久隆．当科における難治性潰瘍性大腸炎に対するTacrolimus投与の治療成績と粘膜治癒の検討，岐阜県内科医会雑誌 2013年；27巻：59-63.

原著 (欧文)

- 1) Yasuda I, Goto N, Tsurumi H, Nakashima M, Doi S, Iwashita T, Kanemura N, Kasahara S, Adachi S, Hara T, Shimizu M, Takami T, Moriwaki H. Endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration biopsy for diagnosis of lymphoproliferative disorders: Feasibility of immunohistological, flow

- cytometric, and cytogenetic assessments. *Am J Gastroenterol.* 2012;107:397-404. IF 9.213
- 2) Goto N, Tsurumi H, Goto H, Shimomura YI, Kasahara S, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Murakami N, Yoshikawa T, Fukuno K, Takahashi T, Kito Y, Takami T, Moriwaki H. Serum soluble interleukin-2 receptor (sIL-2R) level is associated with the outcome of patients with diffuse large B cell lymphoma treated with R-CHOP regimens. *Ann Hematol.* 2012;91:705-714. IF 2.396
 - 3) Goto N, Tsurumi H, Takemura M, Kanemura N, Kasahara S, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Yamada T, Sawada M, Takahashi T, Yamada T, Seishima M, Moriwaki H, Takami T. Serum soluble CD27 level is associated with outcome in diffuse large B-cell lymphoma patients treated with R-CHOP. *Leuk Lymphoma.* 2012;53:1494-1500. IF 2.605
 - 4) Iwashita T, Yasuda I, Uemura S, Moriwaki H. Infected mediastinal cyst following endoscopic ultrasonography-guided fine-needle aspiration with rupture into the esophagus. *Dig Endosc.* 2012;24:386.
 - 5) Iwashita T, Yasuda I, Doi S, Ando N, Nakashima M, Adachi S, Hirose Y, Mukai T, Iwata K, Tomita E, Itoi T, Moriwaki H. Use of samples from endoscopic ultrasound-guided 19-gauge fine-needle aspiration in diagnosis of autoimmune pancreatitis. *Clin Gastroenterol Hepatol.* 2012;10:316-322. IF 6.534
 - 6) Kawaguchi J, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Yoshioka T, Itani M, Kozawa O, Moriwaki H. UVC irradiation suppresses platelet-derived growth factor-BB-induced migration in human pancreatic cancer cells. *Oncol Rep.* 2012;27:935-939. IF 2.191
 - 7) Kawaguchi J, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Nakashima M, Ohno T, Shimizu M, Yoshioka T, Itani M, Kozawa O, Moriwaki H. Cisplatin and ultra-violet-C synergistically down-regulate receptor tyrosine kinases in human colorectal cancer cells. *Mol Cancer.* 2012;11:45. IF 5.397
 - 8) Kawakami H, Maguchi H, Mukai T, Hayashi T, Sasaki T, Isayama H, Nakai Y, Yasuda I, Irisawa A, Niido T, Okabe Y, Ryozaawa S, Itoi T, Hanada K, Kikuyama M, Arisaka Y, Kikuchi S; Japan Bile Duct Cannulation Study Group. A multicenter, prospective, randomized study of selective bile duct cannulation performed by multiple endoscopists: the BIDMEN study. *Gastrointest Endosc.* 2012;75:362-372. IF 4.900
 - 9) Isayama H, Mukai T, Ito T, Maetani I, Nakai Y, Kawakami H, Yasuda I, Maguchi H, Ryozaawa S, Hanada K, Hasebe O, Ito K, Kawamoto H, Mochizuki H, Igarashi Y, Irisawa A, Sasaki T, Togawa O, Hara T, Kamada H, Toda N, Kogure H. Comparison of partially covered nitinol stents with partially covered stainless stents as a historical control in a multicenter study of distal malignant biliary obstruction: the WATCH study. *Gastrointest Endosc.* 2012;76:84-92. IF 4.900
 - 10) Yasuda I. Endoscopic necrosectomy for infected pancreatic necrosis. *Gastrointest Interv.* 2012;1:36-39.
 - 11) Kawaguchi J, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Nakashima M, Ohno T, Shimizu M, Yoshioka T, Itani M, Kozawa O, Moriwaki H. Cisplatin and ultra-violet-C synergistically down-regulate receptor tyrosine kinases in human colorectal cancer cells. *Mol Cancer.* 2012;11:45. IF 5.397
 - 12) Yasuda I, Mukai T, Moriwaki H. Unilateral versus bilateral endoscopic biliary stenting for malignant hilar biliary strictures. *Dig Endosc.* 2013;25 Suppl 2:81-85.
 - 13) Yasuda I. Endoscopic biliary stenting and pancreatitis. *Clin J Gastroenterol.* 2013;6:193-197.
 - 14) Yasuda I, Itoi T. Recent advances in endoscopic management of difficult bile duct stones. *Dig Endosc.* 2013;25:376-385.
 - 15) Yasuda I, Nakashima M, Iwai T, Isayama H, Itoi T, Hisai H, Inoue H, Kato H, Kanno A, Kubota K, Irisawa A, Igarashi H, Okabe Y, Kitano M, Kawakami H, Hayashi T, Mukai T, Sata N, Kida M, Shimosegawa T. Japanese multicenter experience of endoscopic necrosectomy for infected walled-off pancreatic necrosis: The JENIPaN study. *Endoscopy.* 2013;45:627-634. IF 5.196
 - 16) Mukai T, Yasuda I, Nakashima M, Doi S, Iwashita T, Iwata K, Kato T, Tomita E, Moriwaki H. Metallic stents are more efficacious than plastic stents in unresectable malignant hilar biliary strictures: a randomized controlled trial. *J Hepatobiliary Pancreat Sci.* 2013;20:214-222.
 - 17) Osawa Y, Suetsugu A, Matsushima-Nishiwaki R, Yasuda I, Saibara T, Moriwaki H, Seishima M, Kozawa O. Liver acid sphingomyelinase inhibits growth of metastatic colon cancer. *J Clin Invest.* 2013;123:834-843. IF 13.765
 - 18) Osawa Y, Hoshi M, Yasuda I, Saibara T, Moriwaki H, Kozawa O. Tumor necrosis factor- α promotes cholestasis-induced liver fibrosis in the mouse through tissue inhibitor of metalloproteinase-1 production in hepatic stellate cells. *PLoS One.* 2013;8:e65251. IF 3.534
 - 19) Iwashita T, Yasuda I, Doi S, Yamauchi T, Uemura S, Okuno M, Moriwaki H. Endoscopic ultrasound-guided antegrade papillary balloon dilation for treating a common bile duct stone. *Dig Endosc.* 2013;25:89-90.
 - 20) Iwashita T, Yasuda I, Doi S, Uemura S, Mabuchi M, Okuno M, Mukai T, Itoi T, Moriwaki H. Endoscopic ultrasound-guided antegrade treatments for biliary disorders in patients with surgically altered anatomy. *Dig Dis Sci.* 2013;58:2417-2422.
 - 21) Ibuka T, Araki H, Sugiyama T, Nakanishi T, Onogi F, Shimizu M, Hara H, Takami T, Tsurumi H, Moriwaki H. Diagnosis of the jejunoileal lymphoma by double-balloon endoscopy(DBE). *World J Gastrointest Endosc.* 2013;5:111-116. IF 5.210
 - 22) Ibuka T, Tsurumi H, Araki H, Hara T, Onogi F, Goto N, Kojima Y, Kanemura N, Shiraki M, Kasahara

- S, Shimizu M, Ogawa K, Ninomiya S, Nakanishi T, Kato T, Takami T, Moriwaki H. Clinical significance of jejunoileal involvement of non-Hodgkin's lymphoma detected by double-balloon enteroscopy. *Int J Hematol.* 2013;97:369-381. IF 1.679
- 23) Doi S, Yasuda I, Kawakami H, Hayashi T, Hisai H, Irisawa A, Mukai T, Katanuma A, Kubota K, Ohnishi T, Ryozaawa S, Hara K, Itoi T, Hanada K, Yamao K. Endoscopic ultrasound-guided celiac ganglia neurolysis vs. celiac plexus neurolysis: a randomized multicenter trial. *Endoscopy.* 2013;45:362-369. IF 5.196
- 24) Doi S, Yasuda I, Mukai T, Iwashita T, Uemura S, Yamauchi T, Nakashima M, Adachi S, Shimizu M, Tomita E, Itoi T, Moriwaki H. Comparison of long-term outcomes after endoscopic sphincterotomy versus endoscopic papillary balloon dilation: A propensity score-based cohort analysis. *J Gastroenterol.* 2013;48:1090-1096. IF 4.020
- 25) Doi S, Yasuda I. Reply to Dr. Sahai. *Endoscopy.* 2013;45:854. IF 5.196
- 26) Uemura S, Yasuda I, Kato T, Doi S, Kawaguchi J, Yamauchi T, Kaneko Y, Ohnishi R, Suzuki T, Yasuda S, Sano K, Moriwaki H. Preoperative routine evaluation of bilateral adrenal glands by EUS/EUS-FNA in patients with potentially resectable lung cancer. *Endoscopy.* 2013;45:195-201. IF 5.196
- 27) Okuno M, Iwashita T, Yasuda I, Mabuchi M, Uemura S, Nakashima M, Doi S, Adachi S, Mukai T, Moriwaki H. Percutaneous transgallbladder rendezvous for enteroscopic management of choledocholithiasis in patients with surgically altered anatomy. *Scand J Gastroenterol.* 2013;48:974-978.
- 28) Saigo C, Hirose Y, Asano N, Takamatsu M, Fukushima N, Yasuda I, Goshima S, Ozeki M, Osada S. Two rare cases of a solid pseudopapillary neoplasm of the pancreas. *Oncol Lett.* 2013;6:871-874. IF 0.987
- 29) Itoi T, Kasuya K, Sofuni A, Itokawa F, Kurihara T, Yasuda I, Nakai Y, Isayama H, Moriyasu F. Endoscopic ultrasonography-guided pancreatic duct access: Techniques and literature review of pancreatography, transmural drainage and rendezvous techniques. *Dig Endosc.* 2013;25:241-252.
- 30) Itoi T, Nageshwar Reddy D, Yasuda I. New fully-covered self-expandable metal stent for EUS-guided intervention in infectious walled-off pancreatic necrosis (with video). *J Hepatobiliary Pancreat Sci.* 2013;20:403-406.
- 31) Itoi T, Kamisawa T, Igarashi Y, Kawakami H, Yasuda I, Itokawa F, Kishimoto Y, Kuwatani M, Doi S, Hara S, Moriyasu F, Baron TH. The role of peroral video cholangioscopy in patients with IgG4-related sclerosing cholangitis. *J Gastroenterol.* 2013;48:504-514. IF 4.020
- 32) Sasaki T, Isayama H, Nakai Y, Ito Y, Yasuda I, Toda N, Kogure H, Hanada K, Maguchi H, Sasahira N, Kamada H, Mukai T, Okabe Y, Hasebe O, Maetani I, Koike K. A randomized phase II study of gemcitabine and S-1 combination therapy versus gemcitabine monotherapy for advanced biliary tract cancer. *Cancer Chemother Pharmacol.* 2013;71:973-979.
- 33) Sumi T, Shirakami Y, Shimizu M, Kochi T, Ohno T, Kubota M, Shiraki M, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin-3-gallate suppresses hepatic preneoplastic lesions developed in a novel rat model of non-alcoholic steatohepatitis. *SpringerPlus.* 2013;2:690.
- 34) Kubota M, Shimizu M, Baba A, Ohno T, Kochi T, Shirakami Y, Moriwaki H. Combination of Bevacicumab and Acyclic Retinoid Inhibits the Growth of Hepatocellular Carcinoma Xenografts. *J Nutr Sci Vitaminol.* 2014;60:357-362. IF 0.868
- 35) Kochi T, Shimizu M, Ohno T, Baba A, Sumi T, Kubota M, Shirakami Y, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Preventive effects of captopril, an angiotensin-converting enzyme inhibitor, on the development of azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in diabetic and hypertensive rats. *Oncol Lett.* 2014;8:223-229. IF 0.987

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：安田一朗，研究分担者：小澤 修，足立政治；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：膵がんに対する Gemcitabine の作用発現における HSP27 の役割；平成 23-25 年度；3,900 千円(1,500：1,400：1,000 千円)
- 2) 研究代表者：足立政治，研究分担者：安田一朗；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：紫外線による大腸がん制御に関する研究；平成 24-26 年度；4,100 千円(1,600：1,400：1,100 千円)
- 3) 研究代表者：久保田全哉；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：APC 遺伝子ヘテロ変異を有する肥満・糖尿病マウスを用いた大腸発癌機序の解明；平成 25-27 年度；3,000 千円(900：900：1,200 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

- 1) 安田一朗(共願人: オリンパスメディカルシステムズ株式会社): 内視鏡用処置具(特許); 平成 25 年(特願 2013-501462)

6. 学会活動

1) 学会役員

安田一朗:

- 1) 日本消化器内視鏡学会学術評議員(～現在)
- 2) 日本消化器病学会評議員(～現在)
- 3) 日本胆道学会評議員(～現在)
- 4) 日本内科学会支部評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

安田一朗:

- 1) 肝胆膵治療研究会誌; 編集委員(～現在)
- 2) Digestive Endoscopy; Associate Editor(～現在)
- 3) Clinical Journal of Gastroenterology; Associate Editor(～現在)
- 4) Endoscopic Ultrasound; Associate Editor(～現在)
- 5) 日本消化器内視鏡学会誌; 査読委員(～現在)
- 6) 日本胆道学会誌; 査読委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

安田一朗:

- 1) 第 22 回日本消化器内視鏡学会東海セミナー(平成 24 年 1 月, 講演「膵疾患の診断と治療」演者)
- 2) 第 22 回日本消化器内視鏡学会東海セミナー(平成 24 年 1 月, Invited lecture(招待講演)Revival of EPBD: Current role for CBD stones 「Long-term outcomes after EST vs. conventional EPBD for bile duct stones」演者)
- 3) APASL 2012 (Asian Pacific Association for the Study of the Liver)(平成 24 年 2 月, EB2 「Endoscopic management of hepato-biliary obstruction」 Invited Speaker(招待講演)「Endoscopic drainage of Klatskin tumor」演者)
- 4) BONASTENT SUMMIT 2012(平成 24 年 3 月, Keynote lecture(基調講演)「Metal stenting for hilar malignant biliary stricture: resectable & unresectable」演者)
- 5) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, International Symposium I 「EUS-FNA: Current status and new developments」 Combined approach of transesophageal and transbronchial EUS for mediastinal nodal staging of lung cancer. 演者)
- 6) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, 特別企画 IV「海外内視鏡留学者からの若手医師へのメッセージ」 海外留学のススメ: UKE での経験から 演者)
- 7) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, バーチャルライブ IV 「EUS-FNA 関連手技」 EUS 下腹腔神経叢ブロック・神経節ブロック(EUS-CPN/-CGN) 演者)
- 8) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, VTR シンポジウム 1 「内視鏡治療に伴う偶発症の対処法-胆膵病変-」司会)
- 9) International Digestive Endoscopy Network 2012 (IDEN 2012)(平成 24 年 6 月, 講演「膵疾患の診断と治療」演者)
- 10) International Digestive Endoscopy Network 2012 (IDEN 2012)(平成 24 年 6 月, Invited lecture(招待講演)Evaluation and tissue acquisition for indeterminate biliary lesion 「Cholangiopancreatography with targeted biopsy」演者)
- 11) 5th National ERCP Symposium & 4th Eastern Biliary-Pancreatic Endoscopy Forum(平成 24 年 8

- 月, Invited lecture(招待講演)「Endoscopic treatment of common bile duct stones. – Should we cut, dilate, or dilate much larger the papilla?」(演者)
- 12) SGI2012 (The 6th Meeting of the Society of Gastrointestinal Intervention)(平成 24 年 10 月, Session XI “Bilio-pancreatic Drainage in Difficult Situations” Invited Lecture(招待講演)「EUS-guided bilio-pancreatic drainage: when and how?」(演者)
 - 13) DDW2012(第 84 回日本消化器内視鏡学会総会)(平成 24 年 10 月, サテライトシンポジウム「目指せ!! 胆膵マイスター」講演「FNA マイスター」(演者)
 - 14) Tokyo Conference of Asian Pancreato-biliary Interventional Endoscopist 2012 (T-CAP 2012) (平成 24 年 11 月, Session 5 「Management of Benign Biliary Stricture」Moderator 座長)
 - 15) 第 85 回日本消化器内視鏡学会総会 The 4th ESGE-JGES Joint Symposium(平成 25 年 5 月, International Symposium 1 「Endoscopic therapy of pancreatic and biliary diseases」(演者)
 - 16) 第 85 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 25 年 5 月, サテライトセミナー「胆膵内視鏡プロフェッショナルサミット—難治性膵・胆管狭窄はこう攻めろ!—」司会)
 - 17) 第 44 回日本膵臓学会大会(平成 25 年 7 月, 特別企画 2 「急性膵炎・慢性膵炎に対する内視鏡・腹腔鏡治療の最前線」 Walled-off pancreatic necrosis に対する内視鏡的ネクロセクトミー (演者)

向井 強 :

- 1) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, VTR シンポジウム 1 「内視鏡治療に伴う偶発症の対処法—胆膵病変—」 Covered Metallic Stent の治療成績と有効な reintervention (演者)
- 2) JDDW2012(第 54 回日本消化器病学会大会・第 84 回日本消化器内視鏡学会総会合同)(平成 24 年 10 月, シンポジウム 17 「Role of oncologists and endoscopists in the management of biliary tract and pancreatic diseases」 Chemotherapy and endoscopic management for patients with unresectable advanced pancreatic cancer. (演者)

岩田圭介 :

- 1) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, シンポジウム 4 「EUS ガイド下治療の適応と限界」 Peripancreatic fluid collection に対する EUS 下ドレナージの適応と限界 (演者)
- 2) JDDW2012(第 54 回日本消化器病学会大会・第 84 回日本消化器内視鏡学会総会合同)(平成 24 年 10 月, シンポジウム 16 「胆膵疾患に対する therapeutic EUS の現状」 Peripancreatic fluid collection に対する EUS ガイド下治療の現状 (演者)
- 3) 第 85 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 25 年 5 月, VTR シンポジウム 2 「Interventional EUS の進歩」 膵癌性疼痛に対する EUS 下腹腔神経叢/神経節ブロックに関する検討 (演者)

岩下拓司 :

- 1) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, パネルディスカッション 5 「慢性膵炎の内視鏡診断と治療」 自己免疫性膵炎診断における EUS-FNA の有用性と限界 (演者)
- 2) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, 「International oral session」 High single-pass diagnostic yield of a novel 25-gauge biopsy needle for EUS-FNA in pancreatic solid lesion (演者)
- 3) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, シンポジウム「EUS ガイド下治療の適応と限界」 胆管挿管困難例における EUS 下ランデブー法の検討 (演者)
- 4) JDDW2012(第 54 回日本消化器病学会大会・第 84 回日本消化器内視鏡学会総会合同)(平成 24 年 10 月, サテライトシンポジウム「EUS-FNA を基本から学ぶ」 リンパ節に対する EUS-FNA (演者)
- 5) 第 99 回日本消化器病学会総会(平成 25 年 3 月, ワークショップ 12 「胆膵疾患に対する interventional EUS の現状」 上部消化管再建術後症例に対する超音波内視鏡下順行性アプローチによる胆道疾患治療 (演者)
- 6) 第 85 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 25 年 5 月, サテライトセミナー「～難治性膵・胆管狭窄はこう攻めろ!～」 EUS でこう攻めろ! Rendezvous/Antegrade によるアプローチ (演者)
- 7) 第 85 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 25 年 5 月, プースレクチャーEUS 下処置における SonoTip 19gauge 針の有用性 (演者)
- 8) JDDW2013(第 55 回日本消化器病学会大会・第 86 回日本消化器内視鏡学会総会合同)(平成 25 年 10 月, International Session 3 「IgG4-related disease and endoscopy」 EUS-FNA using a standard 19-gauge needle for the diagnosis of autoimmune pancreatitis. (演者)
- 9) JDDW2013(第 86 回日本消化器内視鏡学会総会)(平成 25 年 10 月, ワークショップ 23 「胆膵内視鏡

のトラブルシューティング」ERCP 困難な術後変更解剖症例の胆道病変に対する EUS 下順行性治療
演者)

井深貴士：

- 1) 第 55 回日本消化器内視鏡学会東海支部例会(平成 25 年 12 月, International Session 3「IgG4-related disease and endoscopy」 EUS-FNA using a standard 19-gauge needle for the diagnosis of autoimmune pancreatitis. 演者)
- 2) 第 87 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 26 年 5 月, ワークショップ 9「消化管濾胞性リンパ腫の診断と治療」 当科における消化管濾胞性リンパ腫に関する検討(治療と予後を中心に) 演者)
- 3) 第 21 回日本門脈圧亢進症学会総会(平成 26 年 9 月, ワークショップ 2「カプセル内視鏡」 肝硬変患者に対するカプセル内視鏡による Portal hypertensive enteropathy(PHE)の検討 演者)
- 4) JDDW2014(第 56 回日本消化器病学会大会)(平成 26 年 10 月, ワークショップ 23「小腸疾患診療における内視鏡-カプセル内視鏡, バルーン内視鏡の役割と位置づけ」 ダブルバルーン小腸内視鏡(DBE)・カプセル内視鏡(CE)・FDG-PET を用いた悪性リンパ腫空腸回腸病変評価のストラテジー 演者)

土井晋平：

- 1) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, プレナリーセッション 9「膵臓・胆道」 癌性疼痛に対する超音波内視鏡ガイド下腹腔神経叢ブロックと直接腹腔神経節ブロックの除痛効果比較に関する多施設共同第 2 相試験 演者)
- 2) 第 48 回日本胆道学会学術集会(平成 24 年 9 月, ビデオワークショップ「胆道疾患内視鏡治療困難例に対する手技の工夫」 SpyGlass を用いた YAG レーザーによる胆道結石破碎術 演者)
- 3) JDDW2012(第 54 回日本消化器病学会大会・第 84 回日本消化器内視鏡学会総会合同)(平成 24 年 10 月, ワークショップ 15「総胆管結石症に対する治療法の選択と長期予後」Propensity score matching を用いた EST/EPBD の長期予後の比較検討 演者)
- 4) JDDW2012(第 54 回日本消化器病学会大会・第 10 回日本消化器外科学会大会合同)(平成 24 年 10 月, ワークショップ 16「消化器癌に対する緩和医療」 超音波内視鏡ガイド下腹腔神経叢ブロックの長期成績 演者)
- 5) 第 99 回日本消化器病学会総会(平成 25 年 3 月, シンポジウム 9「非切除胆膵癌に対する内視鏡的 intervention の進歩」 超音波内視鏡ガイド下腹腔神経叢ブロックの Long-term response に関する検討 演者)
- 6) 第 85 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 25 年 5 月, パネルディスカッション 2「慢性膵炎に対する内視鏡治療の現状」 慢性膵炎に対する内視鏡治療の短期・長期成績 演者)
- 7) 第 49 回日本胆道学会学術集会(平成 25 年 9 月, ビデオワークショップ「胆道内視鏡診断のコツとピットフォール」 胆道病変の良悪性鑑別における経口胆道鏡検査の有用性 演者)
- 8) JDDW2013(第 55 回日本消化器病学会大会・第 86 回日本消化器内視鏡学会総会合同)(平成 25 年 10 月, International Session 8「Recent advances in Interventional EUS」 Endoscopic ultrasound-guided direct celiac ganglia versus celiac plexus neurolysis: A randomized multicenter trial. 演者)

中島賢憲：

- 1) JDDW2013(第 55 回日本消化器病学会大会・第 86 回日本消化器内視鏡学会総会・第 11 回日本消化器外科学会大会合同)(平成 25 年 10 月, ワークショップ 14「胆道癌の胆管ドレナージの標準化-手術症例と非手術症例」 非切除胆道癌による肝門部狭窄に対する胆道ステントの種類・留置形態の検討 演者)

上村真也：

- 1) 第 83 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 24 年 5 月, VTR シンポジウム 1「内視鏡治療に伴う偶発症の対処法-胆膵病変-」 総胆管結石切石時のバスケット陥頓に対するトラブルシューティング 演者)

馬淵正敏：

- 1) 第 55 回日本消化器内視鏡学会東海支部例会(平成 24 年 12 月, シンポジウム 2「胆膵疾患関連手技の

Up to Date」バスケット嵌頓に対する EPLBD 演者)

奥野 充 :

- 1) JDDW2013(第 55 回日本消化器病学会大会・第 86 回日本消化器内視鏡学会総会・第 17 回日本肝臓学会大会合同)(平成 25 年 10 月, シンポジウム 4 「IgG4 関連膵胆道疾患の診断と治療」自己免疫性膵炎診断における EUS-FNA の有用性 演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 安田一朗 : 特色ある診療内容 : 診療科・部門紹介ー第 1 内科(消化器内科)ー : 鵜舟(2012 年 1 月 1 日号 2 頁)
- 2) 安田/森脇久隆 : パープルリボン : 中日新聞(2013 年 8 月 19 日(15 面))
- 3) 安田一朗, 土井晋平 : 専門医に聞くすい臓がん治療の今 : 岐阜新聞(2013 年 8 月 23 日(23 面))

12. 自己評価

評価

データベースをもとに糖尿病患者における大腸腫瘍に対するリスク因子を検討した。このような研究成果は非常に高く評価され、現在もさらなる研究課題に取り組んでいる。

現状の問題点及びその対応策

カバーされている地域や医療圏が限定的であるのが問題である。多くの地域を網羅したデータベースを作るために、複数の地域、施設へ協力医師を派遣することが必要で、人員を確保することが急務である。

今後の展望

研究結果を発信することで、悪性疾患の早期発見、早期治療による岐阜地域の医療の向上と発展を目指す。

(13) 寄附講座「地域医療運動器医学講座」

1. 研究の概要

- 1) 椎間板細胞外基質代謝におけるカルパインの役割と解明
ウシおよびヒトの椎間板を用い、炎症・椎間板変性という局面においてカルパインが椎間板基質分解にいかに関与するかについて研究を進めている。
- 2) ヒト腰椎荷重負荷における椎間板・椎間関節の形態変化に関する研究
ヒト腰椎の立位荷重状態をシミュレートする装置を使用し、CT撮影によって得られた腰椎画像を3次元解析し、椎間板・椎間関節の3次元形態変化を解析した。
- 3) 腰椎装具の体幹位置覚、スポーツパフォーマンスに与える影響の検討
腰椎装具がもつ体幹位置覚向上効果がスポーツパフォーマンス（ゴルフ、ウォーキング等）にいかなる影響をあたえるかを3次元画像解析により検証した。
- 4) 腰椎変性側彎症に対する後方椎体間固定術による変形矯正の3次元解析
腰椎変性側彎症に対するブーメラン型スペーサーを用いた後方椎体間固定術による変形矯正が椎間板角、椎間関節形態に与える効果を3次元画像解析により検証している。
- 5) ヒト頸椎の屈曲伸展動態における硬膜管・頸部脊髓の3次元動態解析
脊髓造影検査後のファンクショナルCTを用い、ヒト頸椎の屈曲伸展動態における硬膜管・頸部脊髓の3次元動態解析を各種病態との関連にて検証している。
- 6) 椎間板のアンチエイジングを具現し得る新しい生物学的治療の開発
カルパインが椎間板細胞の細胞外マトリックス分解に関与することに着目し、その働きを制御することにより椎間板の老化予防を図る新しい生物学的治療を開発している。
- 7) 腰椎経椎間孔後方椎体間固定術前術後の椎間孔形態3次元解析
片側進入による腰椎経椎間孔後方椎体間固定術は低侵襲が特徴であるが、その術前術後の進入反対側椎間孔形態3次元解析を行い、椎間孔狭窄発生のリスクなど、合併症の軽減を図る尺度を検証している。
- 8) 腰椎低侵襲後方除圧術の中期長期成績に与える因子の検討
腰部脊柱管狭窄症に対する腰椎低侵襲後方除圧術（片側進入両側除圧）の中期長期成績について、椎間板変性、側弯、多椎間罹患、年齢等の多因子を対象に多変量解析による検証を行っている。
- 9) 超音波を用いた頸椎前方・後方除圧術後の脊髓形態変化
頸椎変性疾患における脊髓前方除圧法、後方除圧法の意義を術中超音波による脊髓形態観察および臨床成績との関連を調査し、検証している。
- 10) ゴルフスイングにおける体幹装具が腰椎挙動に与える影響の3次元解析
ゴルフスイングは非対称な腰椎回旋動作であり、椎間関節への過負荷による腰痛発症が問題となっている。体幹装具装着による腰椎3次元運動への影響の解析を行い、腰痛発症予防への効果の検証を行っている。
- 11) 頸椎前方除圧固定体位における頸椎形態の3次元解析
頸椎前方除圧固定体位における軸椎下の回旋挙動を頸椎変性疾患を有する臨床症例を対象に解析を行い、正確かつ安全な除圧術を施行するうえでの指標を作成している。
- 12) 関節リウマチの薬物治療において、生物学的製剤の効果判定を多彩な血液マーカーより行う試みを行っている。
- 13) 関節リウマチの治療骨関節破壊抑制に対する生物学的製剤の役割を検証している。
- 14) 関節リウマチに対する生物学的製剤を用いた治療において、長期使用による安全性等の検討を行っている。

2. 名簿

准教授：	宮本 敬	Kei Miyamoto
助教：	田中 領	Ryo Tanaka
助教：	下川哲哉	Tetsuya Shimokawa

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

なし

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 下川哲哉, 宮本 敬, 増田剛宏, 花松利昌, 日置 暁, 秋山治彦. 腹臥位で麻痺悪化傾向を呈した胸椎嚙状 OPLL に対し, 前方手術を先行した前後合併手術を施行した 1 例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2014 年; 57 卷: 200.
- 2) 下川哲哉, 宮本 敬, 増田剛宏, 蔵満紀成, 秋山治彦, 森光華澄, et al. 高度四肢麻痺を認めた頸髄内腫瘍(乳癌原発)の 1 例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2014 年; 57 卷: 951.
- 3) 下川哲哉, 宮本 敬, 増田剛宏, 日置 暁, 清水克時, 秋山治彦. JOABPEQ を用いた代償性矢状面バランス維持例における QOL の検討, Journal of Spine Research 2014 年; 5 卷: 469.
- 4) 下川哲哉, 宮本 敬, 増田剛宏, 日置 暁, 清水克時, 秋山治彦. 矢状面バランス中間群における骨盤関連パラメーターの重要性, 日本整形外科学会雑誌 2014 年; 88 卷: S198.
- 5) 下川哲哉, 増田剛宏, 日置 暁, 秋山治彦, 宮本 敬. 感染性脊椎炎に対し経皮的椎弓根スクリューテクニックを応用した小侵襲手術を施行した 2 例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2014 年; 57 卷: 682-683.
- 6) 下川哲哉, 日置 暁, 清水克時, 宮本 敬. 脊柱広範囲矯正固定術における HAS-HT9 角の有用性 脊椎疾患患者の全脊椎立位側面 XP における第 9 胸椎の位置の検討, 東海脊椎外科 2014 年; 28 卷: 63.
- 7) 下川哲哉, 日置 暁, 増田剛宏, 角島元隆, 小原 明, 小池 玲, et al. 上位胸椎 OPLL に対し Sundaresan アプローチにて前方除圧固定術を施行した 1 例, 東海脊椎外科. 2014 年; 28 卷: 67.

原著 (欧文)

- 1) Shimokawa T, Miyamoto K, Hioki A, Masuda T, Akiyama H, Shimizu K. Thorachea-Thoracic Vertebral Body Fistula Causing Spinal Cord Injury: A Case Report. Spine (Phila Pa 1976). 2014;39:E657-659. IF 2.447

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

なし

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

なし

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

宮本 敬:

- 1) 第 122 回中部日本整形外科災害外科学会・学術集会(平成 26 年 4 月, 岡山, 座長)
- 2) 第 43 回日本脊椎脊髄病学会(平成 26 年 4 月, 京都, 座長)

- 3) 第 87 回日本整形外科学会学術総会(平成 26 年 5 月, 神戸, 座長)
- 4) 第 123 回中部日本整形外科災害外科・学術集会(平成 26 年 9 月, 名古屋, 座長)

下川哲哉 :

- 1) 第 71 回岐阜臨床神経集談会(平成 26 年 6 月, 岐阜, 一般演題, 座長)
- 2) 第 16 回岐阜整形外科卒後夏期セミナー(平成 26 年 7 月, 一般演題, 座長)
- 3) 第 72 回岐阜臨床神経集談会(平成 26 年 11 月, 岐阜, 一般演題, 座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

積極的に近隣の病院と連携を取り専門外来を行う等, 専門性の維持と患者獲得を積極的に行っており, 市民講座等を通じて各整形外科疾患の啓蒙にも取り組んでいる。学会活動等の学術的活動も行っているが, より質の高い成果をあげるべく努力を続けたい。

現状の問題点及びその対応策

専門外来を主体としているが, 地域医療への貢献も必要であるため整形一般外来も同時に行っているのが実状である。今後も専門外来受診患者は増加していく事が予想されるため, 専門性を維持していく上でも地域開業医との連携をより円滑していく必要がある。

今後の展望

今後も専門外来診療の充実と大学病院との連携を図ることで, 地域でも最新の医療を受けられる環境を整備していき, 医療格差の是正を図っていく。そのためにも日常診療の質を落とすことなく専門性を維持し, 加えて地域医療を担う開業医とより密で円滑な連携を築けるよう, 日常診療及び市民講座等による啓蒙活動を継続していく。

(14) 寄附講座「肝胆膵・がん集学的治療学講座」

1. 研究の概要

がんの総合的な治療内容としては、近年の化学療法的发展により、根治が困難であるとされてきた固形癌、特に消化器癌においても、技術的に向上した手術療法との組み合わせで治療成績は著しく改善している。しかしその中で、罹患率と死亡率がほぼ同等である胆膵癌や、肝炎ウイルスによる癌化の理解とともに2000年以降明らかな死亡率の上昇がみられないながらも依然として高く推移している肝癌など、治療に難渋し医療進歩の恩恵を甘受しきれていないのが、肝胆膵領域である。この部位における癌は、残念ながらいかなる抗癌剤に対する感受性も低く、解剖学的特性から切除にあたっては高度の技能が必須で、さらに術後合併症が重篤であることが、難治性としてその治療ハードルを著しくあげている所以である。かような状況において、岐阜大学医学部附属病院は、日本肝胆膵外科学会「高度技能専門医」制度の技術認定施設として、若手医師の育成のみならずメディカルスタッフの教育を含むチーム医療の充実に関する任を担い、先進的かつ高品質なシステムの確立とその拡張を推進してきた。さらに難治性癌である肝胆膵領域の治療体系につき、がん診療連携拠点施設として、また学会認定施設として、地域への医療貢献のみならず、先鋭的・戦略的な研究をすすめることを目的として、平成26年4月より「肝胆膵・がん集学的治療学講座」が設立されるに至った。肝癌に対するグリソン鞘一括処理による安全でスピーディ、系統的な切除など臨床的手技の定型化のみならず、外科治療不可あるいは再発状態に対する、世界的にも類をみない抗腫瘍免疫賦活を目的とした低侵襲治療、凍結療法の開発。胆膵癌に対する術後合併症軽減を目指した新しい外科手技・再建法の提案に加え、癌化に関わる組織硬度に関する理念や治療体系を根底から見直した局所治療、Vitamin K3の応用。さらに、煩雑な技術を要するとはいえ、術後経過に躍進的な改善をもたらす腹腔鏡手術の導入を図っている。

2. 名簿

教授： 長田真二 Shinji Osada
講師： 松井 聡 Satoshi Matsui

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）
なし

総説（和文）

- 1) 山口和也, 吉田和弘, 奥村直樹, 田中善宏, 棚橋利行, 高橋孝夫, 長田真二, 二村 学. 胃 特集 サルベージとコンバージョン—集学的治療で外科手術に求められるもの, 臨床外科 2014年; 69巻: 432-440.

総説（欧文）
なし

原著（和文）

- 1) 田中善宏, 加藤順子, 奥村直樹, 野中健一, 高橋孝夫, 山口和也, 長田真二, 吉田和弘. 胃癌、大腸癌開腹手術後の静脈血栓塞栓予防におけるエノキサパリンの有効性・安全性および静脈血栓塞栓症発症予測因子の検討, 日本外科学系連合学会 2014年; 39巻: 1-8.

原著（欧文）

- 1) Osada S, Imai H, Sasaki Y, Tanaka Y, Okumura N, Nonaka K, Takahashi T, Yamaguchi K, Yoshida K. Surgical indications for multiple and synchronous liver metastases from colorectal cancer. *Hepato-gastroenterol.* 2014;61:722-726. IF 0.907
- 2) Watanabe H, Kanematsu M, Tanaka K, Osada S, Tomita H, Hara A, Goshima S, Kondoh H, Kawada H, Noda Y, Tanahashi Y, Kawai N, Yoshida K, Mriyama N. Fibrosis and postoperative fistula of the pancreas: correlation with MR imaging findings-preliminary results. *Radiology.* 2014;270:791-799. IF 6.214

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：長田真二；岐阜大学研究費重点配分；平成26年度；700千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

長田真二：

- 1) 日本外科学会代議員(～現在)
- 2) 日本消化器外科学会評議員(～現在)
- 3) 日本肝胆膵外科学会評議員(～現在)
- 4) 日本臨床外科学会評議員(～現在)
- 5) 日本外科系連合学会評議員(～現在)
- 6) 日本消化器癌発生学会評議員(～現在)
- 7) 東海外科学会評議員(～現在)

松井 聡：

- 1) 日本肝胆膵外科学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

長田真二：

- 1) Anti-Cancer Agents in Medicinal Chemistry ; Editorial Board Member(～現在)
- 2) Journal of Clinical Oncology and Research ; Editorial Member(～現在)
- 3) Case Reports in Anesthesiology ; Editorial Member(～現在)
- 4) Austin Journal of Cancer & Clinical Research ; Editorial Member(～現在)
- 5) Journal of Hepatitis Research ; Editorial Member(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

長田真二：

- 1) 第 114 回日本外科学会定期学術集会(平成 26 年 4 月, 京都, 要望演題「肝臓・胆道」座長)
- 2) 第 35 回癌免疫外科研究会(平成 26 年 5 月, 大阪, 主題「癌免疫療法の臨床評価」演者)
- 3) 岐阜肝臓勉強会(平成 26 年 7 月, 岐阜, 特別講演「転移性肝臓に対する治療戦略: 臨床的・実験的検討からの新たなるコンセプト」演者)
- 4) 第 9 回膵癌術前治療研究会(平成 26 年 10 月, 鹿児島, 主題「個別化治療に向けた取り組み」座長)
- 5) 第 9 回膵癌術前治療研究会(平成 26 年 10 月, 鹿児島, 主題「膵線維化評価の試み」演者)
- 6) 第 27 回日本バイオセラピー学会学術集会総会(平成 26 年 12 月, 大阪, ワークショップ「膵癌進展に関する微小循環」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

長田真二：

- 1) 国保健康保険診療報酬審査委員会委員(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

平成 26 年 4 月に開設され、未だ一年が経過していない現状を鑑みるに、深く評価するには若干困難であると考えている。現在取り組んでいることは、まずは近隣医療機関に講座開設の認知を広くはかり、当該疾患の症例を集積することを目標とし、徐々にではあるが浸透してきているものと実感するところである。また、臨床的あるいは基礎的検討を通し、国内あるいは海外でも、学会雑誌等でその成果を発表することも重要である。その点に関し当該領域からは現在、5 編の英文に加え、国内雑誌へ論文を投稿中であるので、来年度以降には業績内容も充実するものと期待している。

現状の問題点及びその対応策

当該領域からは 4 名の大学院生が、平成 26 年度中に研究を終了することとなり、さらに現時点では補充がないことから、基礎的方面での活動が狭小化することが最も懸念される問題点である。かような状況においても、学位取得後も比較的容易に行うことが可能な実験手技（免疫染色など）を継続することで、可及的に学術的な内容を盛り込んだ学会発表や投稿論文の作成を目指したい。また症例数の絶対的増加を糧に、臨床的分野（手術手技や術後合併症軽減に対する提言）での報告を増やしてゆきたいものと考えている。

今後の展望

当該手術件数を 2 年以内に、100 例（現在最大で 70 例程度）、特に日本肝胆膵外科学会認定の「難易度手術」を 50 例、とすることを当面の目標としており、現在の集約傾向から判断するに達成可能と期待している。また当講座から、年間 2 編以上の筆頭著者での英文論文の作成、5 編以上の和文論文の投稿を目指し努力してゆきたい。

(15) 寄附講座「関節再建外科学先端医療講座」

1. 研究の概要

- 1) 多発性外骨腫と骨粗鬆症との相関に関する研究
外骨腫外来に訪れた患者を対象に、骨密度を測定し、疾患と骨粗鬆症に関する関係を解析中である。
- 2) 変形性膝関節症とコンドロイチン硫酸の相関に関する研究
コンドロイチン硫酸鎖長の相関関係およびコンドロイチン硫酸合成酵素群の遺伝子異常スクリーニングをおこなうシステムの確立を目指している。
- 3) 肩関節疾患に於ける夜間痛と関節血流の相関に関する研究
夜間痛を有する患者に於ける関節血流と痛みの相関を解析した。超音波ドップラーを用いて血流を評価することにより、肩関節疾患の病態の一部を解明した。
- 4) 椎間板細胞外基質代謝におけるカルパインの役割と解明

2. 名簿

准教授： 伊藤芳毅 Yoshiki Ito
助教： 小川寛恭 Hiroyasu Ogawa

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 小川寛恭. Bone Journal Club：骨粗鬆治療 2014年13巻2号，先端医学社；2014年：72(164).
- 2) 小川寛恭. Bone Journal Club：骨粗鬆治療 2014年13巻3号，先端医学社；2014年：80(252).

著書（欧文）

なし

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 寺林伸夫, 伊藤芳毅, 松本 和, 瀧上伊織, 大野貴敏, 渡邊恒夫. 体位変換・肩関節加温下での肩周囲血流変化：健常肩での検討, 肩関節 2014年；38巻：407-410.
- 2) 寺林伸夫, 渡邊恒夫, 松本 和, 瀧上伊織, 伊藤芳毅, 清水克時, 秋山治彦. 変形性膝関節症に対する中膝動脈血流評価, 日本整形外科超音波学会誌 2014年；25巻：42-47.
- 3) 森 博美, 松本 和, 伊藤芳毅, 瀧上伊織, 寺林伸夫, 小林源博, 秋山治彦. 若年の長距離走者に発症した転位を伴う大腿骨頸基部疲労骨折の1例, 臨床整形外科 2014年；49巻：295-299.
- 4) 松本 和, 伊藤芳毅, 瀧上伊織, 寺林伸夫, 秋山治彦. AMK型人工膝関節置換術後の再置換術症例の検討, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2014年；57巻：1267-1268.
- 5) 後藤篤史, 松本 和, 伊藤芳毅, 瀧上伊織, 寺林伸夫, 秋山治彦. TKA後の著明な膝蓋骨低位によるanterior knee painに対し膝蓋骨置換が奏効した1例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2014年；57巻：1273-1274.

原著（欧文）

- 1) Ogawa H, Kozhemyakina E, Hung HH, Grodzinsky AJ, Lassar AB. Mechanical motion promotes expression of Prg4 in articular cartilage via multiple CREB-dependent, fluid flow shear stress-induced signaling pathways. Gene Dev. 2014;28:127-139. IF 12.639
- 2) Matsumoto K, Iwamoto K, Mori N, Yamasaki T, Ito Y, Takigami I, Terabayashi N, Ogawa H, Tomita T, Akiyama H. In vivo kinematics of a low contact stress rotating platform total knee arthroplasty system under weight bearing and non-weight bearing condition. J Orthop Sci. 2014;19:750-755. IF 1.008
- 3) Terabayashi N, Watanabe T, Matsumoto K, Takigami I, Ito Y, Fukuta M, Akiyama H, Shimizu K. Increased blood flow in the anterior humeral circumflex artery correlates with night pain in patients with rotator cuff tear. J Orthop Sci. 2014;19:744-749. IF 1.008

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：小川寛恭；武田科学振興財団医学系研究奨励(基礎)；平成26年度；2,000千円

- 2) 研究代表者：小川寛恭；研究科長・医学部長裁量経費(多分野共同研究)；平成 26 年度；1,300 千円
- 3) 研究代表者：小川寛恭；科学研究費補助金研究活動スタート支援；平成 26-27 年度；2,630 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

なし

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 小川寛恭：第 29 回日本整形外科学会基礎学術集会最優秀演題賞

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

少ないスタッフ数で長時間の外来業務, 多くの手術症例に対応している。研修医がいない現状では中堅医師に多くの負担がかかっているが, 積極的に近隣の関連病院と連携を取り, 専門外来を行う等, 専門性の維持と患者獲得を積極的に行っている。講義, ポリクリなどの教育, 学会発表・論文・講演など学術活動や医学生の教育を積極的に行っている。

現状の問題点及びその対応策

高齢化社会にともない整形外科のニーズは益々高くなり, 関連病院においても外来, 手術件数は増加の一途である。大学での手術件数を増やすことは, 看護スタッフ数の問題で容易ではない。大学に紹介されてくる患者さんの多くが, 数ヶ月～半年以上の長期の待機を余儀なくさせられている。現在, 近隣の関連病院と協力し対応しているが, 関連病院自体の手術件数も増え, 限界に近づいている。大学での手術件数の増加とともに, 関連病院とのより良好な提携を行っていく必要がある。

今後の展望

全国的にみると岐阜県はまだ整形外科医の割合が少なく, 需要を満たしていない。新しい卒後研

修制度が始まり、整形外科が必須ではなくなった現状では、整形外科の魅力を伝える機会が少なく、入局は激減し、関連病院の医師数も減少している。したがって、大学を中心とした関連病院ネットワークの維持が困難となっており、そのネットワークの良好な機能のためには多くの新整形外科医の確保が必須である。

(16) 寄附講座「障がい児者医療学講座（岐阜県）」

1. 研究の概要

当講座は平成 26 年 4 月に岐阜県の寄附講座として、岐阜大学小児病態学教室を協力講座として開設された。目的は障がい児者医療に関わる医師の育成・人材確保、障がい児者医療の在り方の研究、障がい児者医療の普及啓発であり、対象とする障がいは重症心身障がい、発達障がいである。

今年度の主な活動として以下のことを行った。

人材育成では平成 26 年 12 月から医学部医学科 4 年生に対して障がい児者医療を実際に体験実習する目的で重症心身障がい児者施設等での院外ポリクリを開始した。また平成 26 年 7 月に発達障がいについての研修・研究のため、女性小児科医を中心に「岐阜子どもの発達研究会」を立ち上げ、これまで 5 回開催した。平成 26 年 12 月、講師を招いて発達障がいについての講演会を行った。現在、医師、看護師、理学療法士を対象に第 1 回目となる「岐阜県小児在宅医療実技講習会」を準備中（平成 27 年 8 月開催予定）である。

障がい児者医療の在り方の研究では平成 26 年 7 月から実施されている県の重症心身障がい児者の実態調査に協力している。平成 26 年 12 月には岐阜地域の重症心身障がい児者の在宅医療に関わる病院および開業医と当講座が連携し「岐阜重症心身障がい児者医療ネットワーク協議会」を新たに立ち上げて、小児在宅医療に関する課題に取り組んでいくことになった。平成 27 年 3 月、初めての「東海三県小児在宅医療研究会」が愛知県、三重県、岐阜県、名古屋大学大学院医学系研究科障害児（者）医療学寄附講座、三重大学医学部附属病院小児トータルケアセンター、岐阜大学大学院医学系研究科障がい児者医療学寄附講座の連携により開催された。また現在、「自閉症スペクトラム障がいをもつ幼児の日常生活習慣の発達に関するアンケート調査」を岐阜市保育課の協力のもと、岐阜県立希望が丘学園小児科、長良医療センター小児神経科、岐阜地域医療型児童発達支援センターポッポの家小児科との共同研究にて実施中である。

障がい児者医療の普及啓発については「障がい児者医療・福祉・教育を理解する公開連続講座」を県と連携し、月 1 回計 11 回行い、のべ約 1300 人の医療、福祉、教育関係者、ご家族等の参加があった。平成 27 年度も引き続き「障がい児者医療・福祉・教育を理解する公開連続講座」を開催する予定となっている。

2. 名簿

准教授：	西村悟子	Satoko Nishimura
助教：	山本崇裕	Takahiro Yamamoto

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）
なし

総説（和文）
なし

総説（欧文）
なし

原著（和文）
なし

原著（欧文）
なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金
なし

2) 受託研究
なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

なし

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

西村悟子:

1) 岐阜県障害者施策推進協議会委員(平成 26 年 9 月～現在)

2) 岐阜県重症心身障がい児者支援連携会議構成員(平成 26 年 9 月～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

1) 西村悟子:「若手小児科医が語る障がい児医療への思い」座談会:岐阜新聞(2014 年 7 月 12 日)

2) 西村悟子:発達障がいの親支援:県内の女性小児科医 研究会が初会合:岐阜新聞, 岐阜医療 Web (2014 年 7 月 14 日)

3) 障害児医療の課題探る 岐阜市で従事者シンポ:岐阜新聞(2014 年 7 月 29 日)

4) 山本崇裕:岐阜大 4 年生が障害児者医療実習 介護やリハビリに熱視線:岐阜新聞(2014 年 12 月 6 日)

5) 山本崇裕:来年 9 月開所「希望が丘こども医療福祉センター」座談会 障がい児支援にかける夢:岐阜新聞(2014 年 12 月 13 日)

12. 自己評価

評価

当講座は平成 26 年 4 月に岐阜県の寄附講座として開設された。その目的に沿って、まずは平成 26 年度内に医学部医学科 4・5 学生の院外ポリクリが開始できたことは評価できよう。さらにその内容の充実を考えていきたい。

現状の問題点及びその対応策

当講座は准教授, 助教のスタッフ 2 人であるが, 県, 関係諸医療機関, コメディカル, (教育, 福祉) など多職種と連携して仕事を進めていくことが必要な講座であり, 効率的に円滑に活動がすすめられるように心がけたい。

今後の展望

重症心身障害, 発達障がいの医療に関わる関係者が顔の見える連携ができるように当講座の役割を考

えて行く。

まずは平成 27 年 8 月開催予定の医師，看護師，理学療法士対象の岐阜県小児在宅医療実技講習会の実施に向けて準備を行う。

(17) 保健管理センター

1. 研究の概要

- ① 大学生の健康実態調査から新知見を医学的、臨床心理学的に分析、検討する。内容は生活習慣病、ストレス耐性、メンタルスクリーニングとメンタル支援など多様な視点から取り組んでいる。
- ② 職員の健康管理、健康増進のための調査をすすめている。
- ③ 途上国における地域精神保健の成熟度を評価する方法を確立する。
- ④ ひきこもり・ホームレス等、生活困窮者と精神疾患の関係を明らかにし、有益な支援方法について検討を行う。

2. 名簿

教授：	山本眞由美	Mayumi Yamamoto
准教授：	西尾彰泰	Akihiro Nishio
准教授：	加納亜紀	Aki Kanoh
助教：	堀田 亮	Ryo Horita

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 山本眞由美, 田中生雅, 佐渡忠洋. 第1章第1節健康診断とは, 第2節定期健康診断について, 第4章第1節メンタルヘルス, 第2節心の病気, 第5章第8節メタボリック症候群, 動脈硬化症, 肥満とやせ: 岐阜県大学保健管理研究会企画, 山本眞由美監修. 大学生の健康ナビ—キャンパスライフの健康管理—, 岐阜: 岐阜新聞社; 2012年: 8-14, 90-100, 139-142.
- 2) 西尾彰泰. 妄想性パーソナリティ障害: 「臨床精神医学」編集委員会編. 臨床精神医学第40巻増刊号 精神科・わたしの診療手順, 東京: アークメディア; 2012年: 269-271.
- 3) 西尾彰泰. ラカン: ボール＝ロラン・アスン著, 西尾彰泰訳. 東京: 白水社; 2013年.
- 4) 佐渡忠洋. 風景構成法研究の概観: 岸本寛史, 山 愛美編. 臨床風景構成法, 臨床と研究のための見方・入り方, 東京: 誠信書房; 2013年: 44-62.
- 5) 佐渡忠洋. 付録 風景構成法文献一覧 (1970~2012年): 岸本寛史, 山 愛美編. 臨床風景構成法, 臨床と研究のための見方・入り方, 東京: 誠信書房; 2013年: 256-283.
- 6) 堀田 亮. 付属 DVD 「ボストン大学の臨床的デモンストレーション」: 伊藤正哉, 堀越 勝編. 不安とうつの統一プロトコル, パーロウ教授による臨床的デモンストレーション, 東京: 診断と治療社; 2014年: Chapter 1, 2(字幕翻訳)
- 7) 西尾彰泰, 伊藤宗親. 美しい花模様で始めるアートセラピー—アンチストレスぬりえ—, 監修著. 東京: 美術出版社; 2014.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 山本眞由美. 留学生の健康管理支援について, CAMPUS HEALTH 2012年; 49巻: 49-52.
- 2) 岡安伸二, 堀 聡納, 北市清幸, 諏訪哲也, 堀川幸男, 山本眞由美, 武田 純, 伊藤善規. メトホルミン塩酸塩による下痢発現のリスク要因の解析と下痢予防のための対策立案, 医薬ジャーナル 2013年; 49巻: 1533-1540.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 田中生雅, 佐渡忠洋, 磯村有希, 加納亜紀, 臼井るり子, 高井郁恵, 清水克時, 山本眞由美. 大学生の健康への取り組みと QOL, CAMPUS HEALTH 2012年; 49巻: 258-260.
- 2) 佐渡忠洋, 田中生雅, 磯村有希, 宮地幸雄, 臼井るり子, 高井郁恵, 加納亜紀, 清水克時, 山本眞由美. 回答方法の変化が UPI 得点に与える影響についての検討, CAMPUS HEALTH 2012年; 49巻: 268-270.
- 3) 磯村有希, 鶴見広美, 田中生雅, 佐渡忠洋, 臼井るり子, 高井郁恵, 加納亜紀, 宮地幸雄, 清水克時, 山本眞由美. 大学生の AIDS/HIV に関する知識の実態調査, CAMPUS HEALTH 2012年; 49巻: 408-410.
- 4) 佐渡忠洋, 鈴木 壯, 田中生雅, 山本眞由美. バウムの描画プロセスに関する研究—バウムはどこから描かれ、幹はどのように構成されるのか—, 臨床心理身体運動学研究 2012年; 14巻: 59-68.
- 5) 佐渡忠洋, 伊藤宗親, 田中生雅, 山本眞由美. 日本におけるロールシャッハ法黎明期の研究の特徴, 岐阜大学カリキュラム開発研究 2012年; 29巻別冊: 39-45.
- 6) 佐渡忠洋, 田口多恵, 伊藤宗親, 田中生雅, 山本眞由美. 本邦におけるロールシャッハ法に関する文献一覧—1959年までの黎明期—, 岐阜大学カリキュラム開発研究 2012年; 29巻別冊: 24-38.

- 7) 田中生雅, 佐渡忠洋, 山本眞由美. 大学でのメンタルヘルスに係るトラブルとリスク管理上の課題, 愛知教育大学保健環境センター紀要 2012年; 11巻: 35-39.
- 8) 佐渡忠洋. カール・コッホの『Der Baumtest』翻訳史, 岐阜大学心理教育相談室紀要 2012年; 11巻: 149-158.
- 9) 坂本佳織, 佐渡忠洋, 岸本寛史. バウムテストのスポットライト分析, 心理臨床学研究 2012年; 30巻: 41-50.
- 10) 吉田敏, 山本眞由美. ヒト顔面皮膚の *in situ* 赤外スペクトル分析による代謝の状態の診断, 生体医工学 2012年; 50巻: 390.
- 11) 加納亜紀, 松永美紀, 田中生雅, 西尾彰泰, 佐渡忠洋, 磯村有希, 臼井るり子, 邦 千富, 榊原 愛, 堀田容子, 山本眞由美. 唾液中コルチゾール濃度測定を用いた大学女性職員のストレス調査の試み, CAMPUS HEALTH 2013年; 50巻: 289-291.
- 12) 磯村有希, 田中生雅, 西尾彰泰, 佐渡忠洋, 臼井るり子, 邦 千富, 榊原 愛, 堀田容子, 松永美紀, 加納亜紀, 宮地幸雄, 山本眞由美. 大学生の喫煙と飲酒に関する知識と認識の実態調査, CAMPUS HEALTH 2013年; 50巻: 383-385.
- 13) 田中生雅, 三宅恵子, 松井真一, 松藤淑美, 佐渡忠洋, 磯村有希, 加納亜紀, 林 正子, 山本眞由美. 岐阜大学女性研究者支援「メンター制度」取組と課題, CAMPUS HEALTH 2013年; 50巻: 397-399.
- 14) 佐渡忠洋, 田中生雅, 西尾彰泰, 磯村有希, 加納亜紀, 臼井るり子, 松永美紀, 榊原 愛, 邦 千富, 堀田容子, 山本眞由美. BMI と自我強度尺度および UPI との関連についての検討, CAMPUS HEALTH 2013年; 50巻: 513-515.
- 15) 山本眞由美. 英国大学保健管理協会(Student Health Association) 第64回年次集會に参加して, CAMPUS HEALTH 2013年; 50巻: 231-235.
- 16) 山本眞由美, 吉川弘明. 日本, 米国, 英国における大学保健管理, CAMPUS HEALTH 2013年; 50巻: 141-195.
- 17) 伊東宗親, 西尾彰泰, 北川祐美, 佐々木恵理. むり絵によって不安は軽減するのか?, 岐阜大学カリキュラム開発研究 2013年; 30巻: 62-65.
- 18) 植木啓文, 西尾彰泰. 精神科主治医と産業医・衛生担当者との連携を目指して, 臨床精神医学 2013年; 42巻: 1259-1264.
- 19) 佐渡忠洋, 松本香奈, 田口多恵. バウムテストにおける再検査信頼性の見なおし, 岐阜女子大学紀要 2013年; 42巻: 29-39.
- 20) 佐渡忠洋, 田口多恵, 緒賀郷志. 風景構成法研究の特徴と変遷, 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学) 2013年; 61巻: 183-190.
- 21) 岡安伸二, 堀 聡納, 北市清幸, 諏訪哲也, 堀川幸男, 山本眞由美, 武田 純, 伊藤善規. メトホルミン塩酸塩による下痢発現のリスク要因の解析と下痢予防のための対策立案, 医薬ジャーナル 2013年; 49巻: 1533-1540.
- 22) 山本眞由美. 禁煙のためのポピュレーションアプローチ, 呼吸 2014年; 33巻: 248-251.
- 23) 山本眞由美. 生活習慣病・メタボリック症候群, CAMPUS HEALTH 2014年; 51巻: 27-32.
- 24) 山本眞由美. 2013年米国大学保健管理協会年次集會に参加して, CAMPUS HEALTH 2014年; 51巻: 233-238.
- 25) 西尾彰泰, 佐渡忠洋, 加納亜紀, 磯村有希, 臼井るり子, 高井郁恵, 邦 千富, 堀田容子, 松永美紀, 浅野千保, 加藤義弘, 安藤和子, 河田紀子, 齊藤さおり, 田中浩子, 塩内美香, 片岡祐美, 山本眞由美. 岐阜県下大学生のSOC(Sense of Coherence)に関する実態調査, CAMPUS HEALTH 2014年; 51巻: 527-529.
- 26) 佐渡忠洋, 西尾彰泰, 磯村有希, 加納亜紀, 臼井るり子, 松永美紀, 高井郁恵, 宮地幸雄, 邦 千富, 堀田容子, 山本眞由美. 大学生の夢見に関する研究調査-夢見頻度と質問紙との関連-, CAMPUS HEALTH 2014年; 51巻: 572-574.
- 27) 磯村有希, 西尾彰泰, 佐渡忠洋, 加納亜紀, 臼井るり子, 松永美紀, 高井郁恵, 宮地幸雄, 邦 千富, 堀田容子, 山本眞由美. 教員による障害学生支援のニーズ実態調査の報告, CAMPUS HEALTH 2014年; 51巻: 578-580.
- 28) 山本眞由美, 西尾彰泰, 吉川弘明, 中川 克, 林多喜王, 佐藤 武, 河邊博史, 森山敏樹, 鈴木眞理, 馬場久光, 鎌野 寛, 大塚盛男, 富樫 整, 立身政信. 全国大学保健管理協会(JUHA)と米国大学保健管理協会(ACHA)との交流経過報告, CAMPUS HEALTH 2014年; 51巻: 584-586.
- 29) 加納亜紀, 松永美紀, 西尾彰泰, 佐渡忠洋, 磯村有希, 臼井るり子, 高井郁恵, 宮地幸雄, 邦 千富, 堀田容子, 山本眞由美. 大学教職員における感染症4種抗体価の検討, CAMPUS HEALTH 2014年; 51巻: 256-258.
- 30) 山本眞由美. 生涯健康の基礎を築く学校保健活動, 東海学校保健研究 2014年; 38巻: 1-2.
- 31) 佐渡忠洋, 坂本佳織, 岸本寛史. 個別法と集団法のバウムテストにおける幹表面の表現の比較, 臨床心理学 2014年; 14巻: 256-263.
- 32) 佐渡忠洋, 鈴木 壯. バウムテストの幹先端処理について I, 原則と諸問題, 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学) 2014年; 62巻: 217-228.
- 33) 佐渡忠洋, 鈴木壯. バウムテストの幹先端処理について II, 提唱以後の研究動向, 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学) 2014年; 62巻: 227-242.
- 34) 佐渡忠洋. スイスにヘルマン・ロールシャッハをたずねて, 岐阜大学心理教育相談研究 2014年; 13号: 63-68.

原著 (欧文)

- 1) Okayasu S, Kitaichi K, Hori A, Suwa T, Horikawa Y, Yamamoto M, Takeda J, Itoh Y. The Evaluation or Risk Factors Associated with Adverse Drug Reactions by Metformin in Type 2 Diabetes Mellitus. Biol Pharm Bull. 2012;35:933-937. IF 1.778
- 2) Ulzii-Orshikh L, Hirai I, Niki M, Nakata A, Yoshinaga A, Yamamoto A, Yamamoto M, Toyoshima H, Kawakami F, Matsuura N, Yamamoto Y. Fecal carriage of CTX-M β -lactamase-producing Enterobacteriaceae in nursing homes in the Kinki region of Japan. Infection and Drug Resistance. 2013;6:67-70.
- 3) Yoshida S, Yoshida M, Yamamoto M, Takeda J. Optical screening of diabetes mellitus using non-invasive Fourier-transform infrared spectroscopy technique for human lip. J Pharmaceut Biomed. 2013;76:169-176. IF 2.829
- 4) Kawamoto R, Nazir A, Kameyama A, Ichimiya T, Yamamoto K, Tamura S, Yamamoto M, Hayamizu S, Kinoshita Y. Hidden Markov model for analyzing time-series health checkup data. Stud Health Technol Inform. 2013;192:491-495.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：山本眞由美；岐阜大学活性化経費(教育)：キャンパスライフの健康科学－生涯健康のために－(全学共通教育 健康科学・スポーツ演習)；平成 18－24 年度；3,500 千円(500：500：500：500：500：500 千円)
- 2) 研究代表者：山本眞由美，研究分担者：田中生雅；科学研究費補助金基盤研究(C)：大学生の生涯健康指導必要性の科学的根拠を示す～肥満と将来の糖尿病発症の関係から～；平成 21－25 年度；4,790 千円(1,430：1,170：520：1,170：500 千円)
- 3) 研究代表者：田中生雅，研究分担者：山本眞由美，佐渡忠洋，塩入俊樹；科学研究費補助金基盤研究(C)：大学生のセルフメディケーション及び補完代替医療の利用実態とコストパフォーマンス；平成 22－24 年度；5,080 千円(2,540：700：1,840 千円)
- 4) 研究代表者：武田 純，研究分担者：堀川幸男，山本眞由美，山縣和也(熊本大学)，今川彰久(大阪大学)；厚生労働省科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業：MODY1-6 の病態調査と鑑別診断基準の策定；平成 23－24 年度；22,100 千円(13,000：9,100 千円)
- 5) 研究代表者：山縣然太郎(山梨大学)，研究分担者：山本眞由美；厚生労働省科学研究費補助金成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業：母子保健事業の効果的実施のための妊婦健診，乳幼児健診データの利活用に関する研究；平成 24 年度；17,000 千円
- 6) 研究代表者：佐渡忠洋；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：日本におけるロールシャッハ法の輸入過程と発展過程の検討；平成 23－25 年度；2,080 千円(1,600：480 千円)
- 7) 研究代表者：佐渡忠洋；International Visitor Leadership Program(United States Department of State)：Enriching Higher Education in Japan；2012 年 9 月 2－22 日；7,000 US ドル
- 8) 研究代表者：福重八恵(阪南大学)，研究分担者：浅田孝幸(立命館大学)，山本眞由美，前田利之(阪南大学)，金ジェウク(広島大学)；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：医療におけるサービス品質の測定と品質マネジメントへのフィードバックモデルの研究；平成 25－27 年度；3,700 千円(1,100：1,600：1,000 千円)
- 9) 研究代表者：山本眞由美；岐阜大学活性化経費(教育)：自己健康管理能力を養成する実践教育－国際化に対応できる能力育成をめざして－；平成 25 年度；500 千円
- 10) 研究代表者：山本眞由美；厚生労働省科学研究費補助金(政策科学総合研究事業 政策科学推進研究事業)：若い男女の結婚・妊娠時期計画支援に関するプロモーションプログラムの開発に関する研究；平成 25－26 年度；11,306 千円(6,200：5,106 千円)
- 11) 研究代表者：西尾彰泰；大学活性化経費(研究：科研採択支援)：ベトナムにおける精神保健制度の確立；平成 25 年度；700 千円
- 12) 研究代表者：佐渡忠洋，研究分担者：山中康裕，岸本寛史；公益財団法人明治安田こころの健康財団 2013 年度研究助成：今昔の中学生のバウムテスト表現の比較 1960 年代と 2010 年代との発達指標の比較を通して；平成 25 年度；490 千円。
- 13) 研究代表者：堀田 亮；学術研究助成基金助成金研究活動スタート支援：大学生の基礎学力の実態と経年変化に関わる要因の検討：4 年間の追跡調査を用いて；平成 26－27 年度；1,600 千円(1,100：500 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

- 1) 西尾彰泰：ウェブコミュニケーションサイトの運営方法(特許)；平成 25 年(特許出願中)

6. 学会活動

1) 学会役員

山本眞由美：

- 1) 日本内科学会 東海地方会評議員(～現在)
- 2) 日本糖尿病学会 学術評議員(～現在)
- 3) 日本内分泌学会 代議員(～平成 24 年 3 月) 評議員(平成 24 年 4 月～現在)
- 4) 日本内分泌学会 女性医師専門医育成・再教育委員会委員(～平成 26 年 12 月)
- 5) 日本臨床栄養学会 評議員(～現在)
- 6) 日本病態栄養学会 学術評議員(～現在)
- 7) 日本油化学会 代議員(～現在)
- 8) 日本油化学会 東海支部常任幹事(～現在)
- 9) 全国大学保健管理協会 評議員(～平成 24 年 11 月)
- 10) 全国大学保健管理協会 理事(平成 24 年 6 月～現在)
- 11) 全国大学保健管理協会 東海・北陸地方部会幹事(～現在)
- 12) 全国大学保健管理協会 国際連携委員会委員長(平成 25 年～現在)
- 13) 第 50 回全国大学保健管理研究集会 運営委員会委員(平成 24 年)
- 14) 第 51 回全国大学保健管理研究集会 運営委員会副委員長(平成 25 年)
- 15) 第 52 回全国大学保健管理研究集会 運営委員会委員(平成 26 年 1 月～現在)
- 16) 国立大学法人全国大学保健管理施設協議会 国際交流特別委員会委員長(～現在)
- 17) 国立大学法人全国大学保健管理施設協議会 禁煙対策の推進に関する特別委員会委員(～平成 25 年)
- 18) 国立大学法人全国大学保健管理施設協議会 食と心身の健康に関する調査研究班委員(～現在)
- 19) 第 57 回東海学校保健学会 総会会長(平成 26 年)
- 20) 東海学校保健学会 理事(平成 25 年 9 月～現在)

西尾彰泰：

- 1) 第 51 回全国大学保健管理研究集会 運営委員会委員(平成 25 年)
- 2) 全国大学保健管理協会 国際連携委員会委員(平成 25 年 8 月～現在)
- 3) 東海学校保健学会 評議委員(平成 26 年～現在)
- 4) 国際学校保健 コンソーシアム事務局(平成 26 年～現在)

佐渡忠洋：

- 1) 日本臨床心理身体運動学会 研修委員(～平成 24 年)

堀田 亮：

- 1) 第 57 回東海学校保健学会 運営委員会事務局長(平成 26 年)

2) 学会開催

山本眞由美：

- 1) 第 51 回全国大学保健管理研究集会(平成 25 年 11 月, 岐阜)
- 2) 第 57 回東海学校保健学会(平成 26 年 9 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

山本眞由美：

- 1) 学校保健研究；査読委員(～現在)

- 2) CAMPUS HEALTH ; 査読委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

山本眞由美 :

- 1) 第 14 回フィジカルヘルス・フォーラム(PHF)(平成 24 年 3 月, 仙台, 「岐阜大学の敷地内全面禁煙の経験-7 年を経過して-」シンポジスト)
- 2) 第 11 回日本内分泌学会東海支部学術集会(平成 24 年 3 月, 名古屋, 女性会員が企画するセミナー「JES We Can Tokai 企画セッション(東海支部委員からの報告: JES We Can の経緯と活動報告)」追加発言)
- 3) American College Health Association 2012 ANNUAL MEETING (2012.06, Chicago, USA ,Student Health Care on Campuses in Japan: The Approach to Care for the Japanese College Student; Special Session)
- 4) Student health association 64th Annual Conference (2012.07, York, England, Introduction of Japan University Health Association (JUHA); Invited lecture)
- 5) 第 50 回全国大学保健管理研究集会(平成 24 年 10 月, 神戸, 国際シンポジウム「日本, 米国, 英国における大学保健管理」司会)
- 6) 第 12 回日本内分泌学会東海支部学術集会(平成 25 年 2 月, 静岡, 女性会員が企画するセミナー「JES We Can Tokai 企画セッション」座長)
- 7) 第 15 回フィジカルヘルス・フォーラム(PHF)(平成 25 年 3 月, 岡山, 「健康危機管理: 大学への期待」座長)
- 8) 第 56 回日本糖尿病学会年次学術集会(平成 25 年 5 月, 熊本, 「薬物療法(ビッグアナイド薬)」座長)
- 9) 第 51 回全国大学保健管理研究集会(平成 25 年 11 月, 岐阜, 「海外の大学保健管理事情」座長)
- 10) 第 57 回日本糖尿病学会年次学術集会(平成 26 年 5 月, 大阪, 「薬物療法(GLP-1 受容体作動薬 1)」座長)
- 11) 第 1 回日本糖尿病協会療養指導学術集会(平成 25 年 7 月, 京都, 「療養指導の院内連携」座長)
- 12) 第 1 回日本糖尿病協会療養指導学術集会(平成 25 年 7 月, 京都, 「高齢者の糖尿病・栄養」ファシリテーター)
- 13) 第 2 回日本糖尿病協会療養指導学術集会(平成 26 年 7 月, 京都, 「運動療法」座長)
- 14) 第 2 回日本糖尿病協会療養指導学術集会(平成 26 年 7 月, 京都, 「SMBG/高齢者の糖尿病 服薬指導」ファシリテーター)
- 15) 第 52 回全国大学保健管理研究集会(平成 26 年 9 月, 東京, 「『国境なき医師団』海外医療援助活動に参加して」座長)

西尾彰泰 :

- 1) 第 57 回東海学校保健学会総会(平成 26 年 9 月, 岐阜, 「引きこもり支援 18 年の経験から」座長)

加納亜紀 :

- 1) 第 57 回東海学校保健学会総会(平成 26 年 9 月, 岐阜, 「学校検尿の重要性と管理について」座長)

田中生雅 :

- 1) 全国大学保健管理協会東海・北陸地方部会(平成 24 年 7 月, 福井, パネルディスカッション 1 「事例にみる各大学のメンタルヘルスの課題」「連携・協働対応例を振り返る」シンポジスト)

佐渡忠洋 :

- 1) ネットワーク大学コンソーシアム岐阜共同プログラム「人材育成プログラム(大学職員)」(平成 24 年 12 月, 岐阜, 「現代学生の心理学概論」講師)
- 2) 平成 25 年度第 51 回全国大学保健管理協会東海・北陸地方部会研究集会: パネルディスカッション 1 「キャンパスメンタルヘルス周辺の新しい取り組み」(平成 25 年 7 月, 愛知, 「大学生の心理相談における箱庭療法の意義」シンポジスト)
- 3) 心身臨床学研究会(平成 26 年 3 月, 京都, 中学生のバウムの昔と今. 共催シンポジウム「バウムの古今東西: 時空の十字路に佇んでイメージする力」シンポジスト)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 山本眞由美：The 29th international Congress of the Medical Women's International Associationにて優秀発表表彰(平成 25 年)

9. 社会活動

山本眞由美：

- 1) 岐阜県大学保健管理研究会会長(～現在)
- 2) 岐阜県医師会糖尿病対策委員会委員長(～現在)
- 3) 岐阜県医師会男女共同参画委員会委員(～現在)
- 4) 岐阜県医師会代議員(～現在)
- 5) 岐阜県糖尿病対策推進協議会幹事(～平成 24 年度)
- 6) 岐阜県糖尿病対策推進協議会 世界糖尿病デー記念事業「糖尿病県民セミナー」ワーキンググループ委員(～現在)
- 7) 岐阜医学研究協議会専務理事(～現在)
- 8) 岐阜県食育推進会議委員(～現在)
- 9) 日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員(～現在)
- 10) 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(平成 26 年度～現在)
- 11) 岐阜県国民健康保険団体連合会保健事業支援・評価委員会委員(平成 26 年度～現在)
- 12) 学校法人誠広学園外部理事(～現在)

田中生雅：

- 1) 岐阜県障害者施策推進協議会委員(平成 24 年度)
- 2) 岐阜県家庭における暴力防止協議会配偶者暴力等防止専門部会委員(平成 24 年度)

佐渡忠洋：

- 1) 岐阜県スクールカウンセラー(平成 24 年度)

10. 報告書

- 1) 中野 功, 山本眞由美：大学における感染症予防の専門性の向上と連携の促進：全国大学保健管理協会 東海・北陸地方部会報告書(平成 23 年度)：48－50(平成 24 年)
- 2) 山本眞由美：大学における感染症予防の取り組みの現状と問題点：全国大学保健管理協会 東海・北陸地方部会報告書(平成 23 年度)：51－55(平成 24 年)
- 3) 山本眞由美：女性医師専門医育成・再教育(Jes We Can)便り：日本内分泌学会雑誌 Vol.88：21－22(平成 24 年 2 月)
- 4) 山本眞由美：平成 23 年度第 59 期卒業生を祝う会：岐阜大学医学部記念会館だより(発行；岐阜医学研究協議会)：30－31(平成 24 年 5 月)
- 5) 草田典子, 脇 昌子, 山本眞由美：女性医師専門医育成・再教育(Jes We Can)便り：内分泌学会雑誌 JES News Vol.88：19－20(平成 24 年 6 月)
- 6) 田中生雅：連携・協働対応例を振り返る：全国大学保健管理協会 東海・北陸地方部会報告書：20－21(平成 24 年)
- 7) 山本眞由美：岐阜大学の敷地内全面禁煙の経験 ー7 年を経過してー：第 14 回フィジカルヘルス・フォーラム報告書：37－38(平成 25 年 1 月)
- 8) 吉川弘明, 山本眞由美, 足立由美, 笹川寿之, 埴 清美, 北村邦夫, 日本産婦人科医会, 茨城県産婦人科医会：大学における女子学生の健康に関する実態と対策に関する研究：平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金 母子保健事業の効果的実施のための妊婦健診, 乳幼児健診データの利活用に関する研究 総括・分担研究報告書：155－176(平成 25 年 3 月)
- 9) 難民支援協会編, 金井一陽, 西尾彰泰編集協力：2012 年度笹川平和財団助成事業 ワークショップ「難民のメンタルヘルス・ケア」報告書(平成 25 年 3 月)
- 10) 山本眞由美：A Note From Immediate Past President Jenny Haubenreiser：College Health in Action Vol.53, NO.1：8(平成 25 年 9 月)
- 11) 山本眞由美：優秀賞(Award for Excellence)を授与されて：日本女医会誌 復刊第 216 号：6－7(平成 25 年 10 月)
- 12) 山本眞由美：議事 報告事例(2)各種委員会・研究班報告・質疑：国立大学法人保健管理施設協議会 総

会 議事概要：27-28(平成 25 年 11 月)

- 13) 横田千津子, 脇 昌子, 山本眞由美: 女性医師専門医育成・再教育委員会 クロストーク WG より報告ー: 日本内分泌学会雑誌 Vol.89: 14-15(平成 25 年 12 月)
- 14) 山本眞由美: 満足度ベスト授業 スポーツ・健康科学科目: 学生による授業満足度ベスト授業『教員による授業の工夫集』: 66-67(平成 26 年 1 月)
- 15) 山本眞由美: 肥満に関する疾患とその管理: 全国大学保健管理協会 東海・北陸地方部会報告書: 8-10(平成 26 年)

11. 報道

- 1) 佐渡忠洋: 研究室から大学はいま「こころの変容を深く理解」: 岐阜新聞(2012 年 2 月 26 日)
- 2) 山本眞由美: 岐阜大の取り組みを視察ー英, 米国の大学保健管理協会長ー: 岐阜新聞(2012 年 10 月 17 日)
- 3) 山本眞由美: 岐阜大のメンタルサポート施設視察: 中日新聞(2012 年 10 月 20 日)
- 4) 山本眞由美: 岐阜大の保健管理の取組を視察ー米・英大学保健管理協会長が訪問: 文教速報(2012 年 11 月 16 日)
- 5) 山本眞由美: 岐阜大学の保健管理の取り組みー米英両国の大学保健管理協会長が視察ー: 文教ニュース(2012 年 11 月 19 日)
- 6) 山本眞由美: 健康的な食生活知ってー岐阜大 新入生対象に講義ー: 岐阜新聞(2013 年 4 月 17 日)
- 7) 佐渡忠洋: 佐渡岐阜大助教に助成金ー明治安田健康財団, 中学生の心理研究: 岐阜新聞(2013 年 9 月 5 日)
- 8) 山本眞由美: 第 51 回全国大学保健管理研究集会: 教育医事新聞第 349 号(2013 年 9 月 25 日)
- 9) 山本眞由美: 大学保健管理協会, 米英の元会長視察: 中日新聞(2013 年 11 月 13 日)
- 10) 山本眞由美: 大学生の健康管理, 全国の担当者研究: 中日新聞(2013 年 11 月 15 日)
- 11) 山本眞由美: 大学の禁煙: 中日新聞(2013 年 11 月 19 日)
- 12) 西尾彰泰: 精神保健システムを確立へ: 岐阜新聞(2014 年 2 月 18 日)
- 13) 山本眞由美: 岐阜大, 学生相談対応者研修会(FD/SD): 文教ニュース(2014 年 7 月 7 日)
- 14) 山本眞由美: 岐阜大学講演会, キャンパスライフに取り入れるアーユルヴェーダ健康法: 文教ニュース(2014 年 7 月 7 日)
- 15) 山本眞由美: 岐阜大で学生相談対応者研修会(FD/SD): 文教速報(2014 年 7 月 9 日)
- 16) 山本眞由美: 岐阜大で講演会, キャンパスライフに取り入れるアーユルヴェーダ健康法: 文教速報(2014 年 7 月 9 日)
- 17) 山本眞由美: 学生の健康管理学ぶーインドネシアの大学関係者 岐阜大施設を見学ー: 岐阜新聞(2014 年 8 月 6 日)
- 18) 山本眞由美: 健康管理法を視察ーインドネシアの大学科長らー: 中日新聞(2014 年 8 月 7 日)
- 19) 西尾彰泰: ホームレス調査: 朝日新聞(2014 年 11 月 3 日)
- 20) 西尾彰泰: 名古屋で路上生活者調査: 中日新聞(2014 年 11 月 3 日)

12. 自己評価

評価

- ・本センターは、「学生と教職員の健康管理・健康増進」という業務を担っているため、十分な研究時間を確保することが困難な中、研究に資するデータ収集や調査活動を実施してきた。データベースも充実してきている。今後は、このデータベースを活用して論文化、研究成果公表に力を注ぎたい。
- ・外部資金も継続して確保することができている。

現状の問題点及びその対応策

センターが担う業務の多様化とニーズの増加、また、教育ニーズの増加により、研究時間を十分に確保できない現実がある。業務の効率化をはかり、研究への注力を高めたい。

今後の展望

蓄積データを活用し論文化をすすめる。

(18) 生命科学総合研究支援センター（ゲノム研究分野）

1. 研究の概要

ペルオキシソーム病の診断・病態解明・治療法開発（下澤）：細胞内小器官の1つであるペルオキシソームの代謝異常症の研究に長年携わり、国内唯一のペルオキシソーム病診断センターとして国内外より多くの患者解析依頼を受け、いくつかの新規遺伝子病や温度感受性現象の発見、ペルオキシソーム欠損症では岐阜大学の分類を世界に提唱しています。ペルオキシソームの生体内における機能自体、未解明の部分が多くゲノミクス、プロテオミクスにGC/MS, LC-MS/MSを中心とした生体の代謝産物を解析する“メタボロミクス”も加えた解析システムを構築して単一遺伝子病から生活習慣病にいたるペルオキシソーム代謝疾患の総合研究分野を確立し、将来的には代謝病全体を網羅的に解析（オーミクス）できる疾病研究へと発展できればと考えています。ペルオキシソームは酵母から植物、動物にいたるまで広く存在し、共通の生理的機能を有しており、学内外の多くの先生と協力して大型の研究プロジェクトを企画したいと思います。

植物病原性糸状菌における病原性機構の解明（須賀）：近年、食料の安全性や世界規模で見た場合の食糧不足、農薬の環境への影響が問題化しています。それらを解決するためには作物病害を適切に防ぐことが重要で、特に病原菌の性状について深く理解していることが求められています。本研究室では植物病原菌として良く知られたフザリウム菌のゲノム、プロテオーム解析により植物病原性糸状菌における病原性の分子機構ならびにゲノムの進化機構の解明をめざしています。

ペルオキシソーム病発症機構の基礎生物学的研究（高島）：ペルオキシソーム病は細胞内小器官であるペルオキシソームの異常に起因する遺伝性疾患です。原因となる遺伝子が同定されているものの発症の具体的な細胞内、生体内のメカニズムはわかっていません。ペルオキシソーム病患者に由来する培養細胞の状態を詳しく調べることで病態が発症するに至る細胞生物学的な原因を探っています。

一方でペルオキシソーム病は多くの組織、器官に異常が見られる複雑な疾患なため病態を再現する小型脊椎動物（ゼブラフィッシュ、メダカ、マウスなど）を使って組織、器官レベルでの発症機構を明らかにする研究も行っています。

2. 名簿

教授： 下澤伸行 Nobuyuki Shimozawa
准教授： 須賀晴久 Haruhisa Suga
助教： 高島茂雄 Shigeo Takashima

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 下澤伸行. ペルオキシソーム病(Zellweger 症候群, 原発性高シュウ酸尿症 1 型): 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No17 腎臓症候群(第 2 版), 東京: 日本臨床社; 2012 年: 369-373.
- 2) 鈴木康之, 下澤伸行. 副腎白質ジストロフィーの造血幹細胞移植法: Annual Review 神経 2012, 東京: 中外医学社; 2012 年: 241-245.
- 3) 下澤伸行. 副腎白質ジストロフィー: 大関武彦, 古川 漸, 横田俊一郎, 水口 雅編. 今日の小児治療指針 第 15 版, 東京: 医学書院; 2012 年: 212-213.
- 4) 下澤伸行. ペルオキシソーム病(副腎白質ジストロフィー): 最新ガイドライン準拠 小児科 診断・治療指針, 東京: 中山書店; 2012 年: 299-302.
- 5) 下澤伸行. ペルオキシソーム病: 概論: 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No20 先天代謝異常症候群(第 2 版)下, 東京: 日本臨床社; 2012 年: 389-397.
- 6) 下澤伸行. ツェルウェーger(Zellweger)症候群: 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No20 先天代謝異常症候群(第 2 版)下, 東京: 日本臨床社; 2012 年: 398-404.
- 7) 下澤伸行. 新生児型副腎白質ジストロフィー: 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No20 先天代謝異常症候群(第 2 版)下, 東京: 日本臨床社; 2012 年: 405-408.
- 8) 下澤伸行. 乳児型レフサム病: 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No20 先天代謝異常症候群(第 2 版)下, 東京: 日本臨床社; 2012 年: 409-413.
- 9) 下澤伸行. Rhizomelic chondrodysplasia punctata (RCDP) type 1: 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No20 先天代謝異常症候群(第 2 版)下, 東京: 日本臨床社; 2012 年: 414-417.
- 10) 下澤伸行. 副腎白質ジストロフィー: 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No20 先天代謝異常症候群(第 2 版)下, 東京: 日本臨床社; 2012 年: 418-427.
- 11) 下澤伸行. アシル CoA オキシダーゼ(AOX)欠損症: 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No20 先天代謝異常症候群(第 2 版)下, 東京: 日本臨床社; 2012 年: 428-432.
- 12) 下澤伸行. 二頭酵素(D-bifunctional protein: DBP)欠損症: 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No20 先天代謝異常症候群(第 2 版)下, 東京: 日本臨床社; 2012 年: 433-438.

- 13) 下澤伸行. Rhizomelic chondrodysplasia punctata (RCDP) type 2, RCDP type 3 : 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No20 先天代謝異常症候群(第2版)下, 東京: 日本臨床社; 2012年: 439-442.
- 14) 下澤伸行. レフサム病: 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No20 先天代謝異常症候群(第2版)下, 東京: 日本臨床社; 2012年: 443-446.
- 15) 下澤伸行. アカタラセミア: 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No20 先天代謝異常症候群(第2版)下, 東京: 日本臨床社; 2012年: 447-449.
- 16) 下澤伸行. 新たに分類されたペルオキシソーム病: 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No20 先天代謝異常症候群(第2版)下, 東京: 日本臨床社; 2012年: 454-455.
- 17) 下澤伸行. ペルオキシソーム病ハンドブック 2013 ~全てのペルオキシソーム病患者の診断治療を目指して~, 大阪: 日本臨床社; 2013年.
- 18) 下澤伸行監修, 副腎白質ジストロフィー診療ハンドブック 2013 作成委員会編集, 副腎白質ジストロフィー診療ハンドブック 2013 ~ALD患者を支えている関係者の皆様へ~, 岐阜: 西濃印刷; 2013年.
- 19) 下澤伸行. 原発性高シュウ酸血症 I型・II型: 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013年: 106-107.
- 20) 下澤伸行. Zellweger spectrum : 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013年: 248-249.
- 21) 下澤伸行. rhizomelic chondrodysplasia punctate (RCDP) type 1 : 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013年: 250-251.
- 22) 下澤伸行. 副腎白質ジストロフィー: 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013年: 252-253.
- 23) 下澤伸行. ペルオキシソームβ酸化酵素欠損症: 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013年: 254-256.
- 24) 下澤伸行. Refsum 病, rhizomelic chondrodysplasia punctate (RCDP) type 2・3 : 先天代謝異常ハンドブック, 東京: 中山書店; 2013年: 257-259.
- 25) 下澤伸行. ペルオキシソーム病: 今日の神経疾患治療指針第2版, 東京: 医学書院; 2013年: 652-653.
- 26) 下澤伸行. ペルオキシソーム病: 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No28 神経症候群(第2版)Ⅲ, 東京: 日本臨床社; 2014年: 728-736.
- 27) 下澤伸行. ペルオキシソーム病: 日本先天代謝異常学会編. 引いて調べる先天代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2014年: 34-37.
- 28) 下澤伸行. ペルオキシソーム: プログレッシブ生命科学, 東京: 南山堂; 2014年: 60-63.
- 29) 下澤伸行. ペルオキシソーム病: 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No31 神経症候群(第2版)Ⅵ, 東京: 日本臨床社; 2014年: 229-236.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 下澤伸行. ペルオキシソーム代謝異常症, 内分泌・糖尿病・代謝内科 2012年; 34巻: 198-203.
- 2) 下澤伸行. ペルオキシソーム病, Brain Medical 2012年; 24巻: 261-270.
- 3) 下澤伸行. 副腎白質ジストロフィーの診療アップデート, 小児内科 2012年; 44巻: 1667-1672.
- 4) 下澤伸行. ペルオキシソーム病, 小児科診療 2013年; 76巻: 35-43.
- 5) 下澤伸行. ペルオキシソーム病(副腎白質ジストロフィー, ペルオキシソーム形成異常症), 小児科診療 2014年; 77巻増刊号: 548-551.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 塩田睦記, 舟塚 真, 小田絵里, 白戸由理, 竹下暁子, 石垣景子, 斉藤加代子, 下澤伸行, 大澤眞木子. 極長鎖脂肪酸の反復検査で診断し得た D-bifunctional protein 欠損症の1例, 東京女子医科大学雑誌 2013年; 83巻: E103-106.

原著 (欧文)

- 1) Kanzawa N, Shimozawa N, Wanders RJ, Ikeda K, Murakami Y, Waterham HR, Mukai S, Fujita M, Maeda Y, Taguchi R, Fujiki Y, Kinoshita T. Defective lipid remodeling of GPI anchors in peroxisomal disorders, Zellweger syndrome and rhizomelic chondrodysplasia punctata. J Lipid Res. 2012;53:653-663. IF 4.730
- 2) Mizumoto H, Akashi R, Hikita N, Kumakura A, Yoshida Y, Honda A, Shimozawa N, Hata D. Mild case of D-bifunctional protein deficiency associated with novel gene mutations. Pediatr Int. 2012;54:303-304. IF 0.731
- 3) Iwasa M, Yamagata T, Mizuguchi M, Itoh M, Matsumoto A, Hironaka M, Honda A, Momoi M, Shimozawa N. Contiguous ABCD1 DXS1357E deletion syndrome: Report of an autopsy case. Neuropathology. 2013;33:292-298. IF 1.796
- 4) Morita M, Kobayashi J, Yamazaki K, Kawaguchi K, Honda A, Sugai K, Shimozawa N, Koide R, Imanaka T. A novel double mutation in the ABCD1 gene in a patient with X-linked

- adrenoleukodystrophy: Analysis of the stability and function of the mutant ABCD1 protein. *J Inher Metab Dis, Rep.* 2013;10:95-102.
- 5) Ohba C, Osaka H, Iai M, Yamashita S, Suzuki Y, Aida N, Shimozawa N, Takamura A, Doi H, Tomita-Katsumoto A, Nishiyama K, Tsurusaki Y, Nakashima M, Miyake N, Eto Y, Tanaka F, Matsumoto N, Saito H. Diagnostic utility of whole exome sequencing in patients showing cerebellar and/or vermis atrophy in childhood. *Neurogenetics.* 2013;14:225-232. IF 2.658
 - 6) Hama K, Nagai T, Nishizawa C, Ikeda K, Morita M, Satoh N, Nakanishi H, Imanaka T, Shimozawa N, Taguchi R, Inoue K, Yokoyama K. Molecular Species of Phospholipids with Very Long Chain Fatty Acids in Skin Fibroblasts of Zellweger Syndrome. *Lipids.* 2013;48:1253-1267. IF 2.353
 - 7) Matsui S, Funahashi M, Honda A, Shimozawa N. Newly identified milder phenotype of peroxisome biogenesis disorder caused by mutated PEX3 gene. *Brain Dev.* 2013;35:842-848. IF 1.542
 - 8) Dung VC, Shimozawa N, Khanh NN, Thao BP, Ngoc CTB, Dat NP, Hoan NT. Mutations of ABCD1 gene and phenotype of Vietnamese patients with X-linked adrenoleukodystrophy (X-ALD). *Int J Pediatr Endocrin.* 2013;Suppl 1:127.
 - 9) Mizuno Y, Ninomiya Y, Nakachi Y, Iseki M, Iwasa H, Akita M, Tsukui T, Shimozawa N, Ito C, Toshimori K, Nishimukai M, Hara H, Maeba R, Okazaki T, Alodaib ANA, Al Amoudi M, Jacob M, Alkuraya FS, Horai Y, Watanabe M, Motegi H, Wakana S, Noda T, Kurochkin IV, Mizuno Y, Schönbach C, Okazaki Y. Tysnd1 deficiency in mice interferes with the peroxisomal localization of PTS2 enzymes, causing lipid metabolic abnormalities and male infertility. *PLOS Genetics.* 2013;9:e1003286. IF 8.167
 - 10) Yamada M, Tanaka M, Takagi M, Kobayashi S, Taguchi Y, Takashima S, Tanaka K, Touge T, Hatsuta H, Murayama S, Hayashi Y, Kaneko M, Ishiura H, Mitsui J, Atsuta N, Sobue G, Shimozawa N, Inuzuka T, Tsuji S, Hozumi I. Evaluation of SLC20A2 mutations that cause idiopathic basal ganglia calcification in Japan. *Neurology.* 2014;82:705-712. IF 8.303
 - 11) Ohkuma Y, Hayashi T, Yoshimine S, Tsuneoka H, Terao Y, Akiyama M, Ida H, Ohashi T, Okumura A, Ebihara N, Murakami A, Shimozawa N. Retinal Ganglion Cell Loss in X-linked Adrenoleukodystrophy with an ABCD1 Mutation (Gly266Arg). *Neuro-Ophthalmology.* 2014;38:331-335.
 - 12) Isogawa M, Yoshida S, Shimozawa N. Evaluation of fourier transform infrared spectroscopy for diagnosis of peroxisomal diseases with abnormal very-long-chain fatty acid metabolism. *Am J Analytical Chemistry.* 2014;5:359-366. IF 1.330

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：下澤伸行；文部科学省科学研究費基盤研究(B)：網羅的ペルオキシソーム機能解析による神経・代謝性疾患の病態解明；平成 24-26 年度；13,200 千円(6,500：3,600：3,100 千円)
- 2) 研究代表者：下澤伸行；文部科学省科学研究費挑戦的萌芽研究：多角的アプローチによる副腎白質ジストロフィーの脱髄発症・病型規定因子の同定；平成 24-26 年度；2,900 千円(1,300：1,000：600 千円)
- 3) 研究代表者：下澤伸行；小野医学研究助成金：極長鎖脂肪酸代謝異常症の病態解明と治療法の開発；平成 23 年度；2,000 千円(24 年度執行)
- 4) 研究代表者：高島茂雄；文部科学省科学研究費若手研究(B)：ゼブラフィッシュを用いたペルオキシソーム病発症メカニズムの解明；平成 25-26 年度；2,600 千円(1,400：1,200 千円)
- 5) 研究代表者：下澤伸行；大学活性化経費(研究：研究グループ形成支援)：オルガネラ形成異常症患者 iPS 細胞およびモデル生物を用いた中枢神経障害発症機構の解明—新たな基盤技術の確立による学内生命科学研究の活性化—；平成 26 年度；4,000 千円

2) 受託研究

- 1) 分担研究者：下澤伸行；厚生労働省科学研究費補助金(難治性疾患克服研究事業)：ライソソーム病(フアブリ病含む)に関する調査研究；平成 24-26 年度；9,600 千円(4,200：4,500：900 千円)

3) 共同研究

- 1) 下澤伸行：サウジアラビアにおけるペルオキシソーム病の診断に関する研究；平成 24 年度；サウジアラビア国立病院・研究センター

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

下澤伸行：

- 1) 日本小児神経学会評議員(～現在)
- 2) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)
- 3) 日本先天代謝異常学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

下澤伸行：

- 1) Journal of Human Genetics ; Editorial Board(～現在)
- 2) Brain & Development ; Managing Editor(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

下澤伸行：

- 1) 第 54 回日本小児神経学会(平成 24 年 5 月, 札幌, シンポジウム「神経障害をきたす先天代謝異常症 診断・治療の update 副腎白質ジストロフィー 診断・治療の update」招待シンポジスト)
- 2) 第 54 回日本小児神経学会(平成 24 年 5 月, 札幌, English Session 座長)
- 3) 第 42 回小児神経学セミナー(平成 24 年 10 月, 葉山町, 「ペルオキシソーム代謝異常症」セミナー講師)
- 4) 第 54 回日本先天代謝異常学会, 第 11 回アジア先天代謝異常学会(平成 24 年 11 月, 岐阜, シンポジウム「副腎白質ジストロフィー診療の現状と提案—診療ガイドラインの作成に向けて」企画, 座長, 「早期診断・早期介入への現状と診療指針」シンポジスト)
- 5) 第 54 回日本先天代謝異常学会, 第 11 回アジア先天代謝異常学会(平成 24 年 11 月, 岐阜, 一般演題「ペルオキシソーム病」座長)
- 6) 第 55 回日本小児神経学会(平成 25 年 5 月, 大分, English Session 座長)
- 7) 12th Asian and Oceanian Congress on Child Neurology(2013.09, Riyadh, Peroxisomal disorder; 演者)
- 8) 3rd ACIMD & 56th JSIMD(2013.11, Maihama, Diagnosis and treatment of Peroxisomal diseases; 演者)
- 9) 第 56 回日本小児神経学会(平成 26 年 5 月, 浜松, シンポジウム「見逃してはならない治療法のある、あるいは今後期待できる小児神経疾患：診断と治療の最前線」企画, 座長, 「副腎白質ジストロフィー」シンポジスト)
- 10) 第 56 回日本小児神経学会(平成 26 年 5 月, 浜松, 教育講演「ペルオキシソーム病のアップデート～基礎と臨床の融合」演者)
- 11) 第 56 回日本先天代謝異常学会, 第 12 回アジア先天代謝異常学会(平成 26 年 11 月, 仙台, ペルオキシソーム病 座長)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 下澤伸行：2012 年小児医学川野賞

9. 社会活動

下澤伸行：

- 1) 岐阜県児童福祉審議会児童処遇専門部会委員(～現在)
- 2) 独立行政法人医薬基盤研究所基礎的研究評価委員会専門委員(～現在)
- 3) NPO 法人「ALD 未来を考える会」顧問医(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

下澤伸行：

- 1) 難病「ALD」理解し治療を：岐阜新聞(2013年6月8日)
- 2) ラジオ出演「岐阜大学からこんにちは」難病診断研究の紹介：FM ワッチ(2013年7月8日)
- 3) 難病患者の家族、岐阜大医学部で講演、介護体験交え訴え：岐阜新聞(2014年1月15日)
- 4) 医人伝「難病解明で世界をリード」：中日新聞(2014年4月15日)

ゲノム研究分野：

- 1) 高校生が遺伝子学ぶ：岐阜新聞(2012年8月17日)
- 2) 米のDNA抽出体験 岐阜大中学生が品種見分け：中日新聞(2013年8月8日)
- 3) 遺伝子の仕組み学ぶ高校生、岐阜大で抽出実験：岐阜新聞(2013年8月21日)
- 4) 遺伝子の仕組み紹介：中日新聞(2013年8月22日)
- 5) お酒の強い人DNAでわかる、岐阜大高校生28人が実験：毎日新聞(2013年8月23日)
- 6) テレビニュース 中学生ゲノム体験学習：ぎふチャン(2014年8月12日)
- 7) DNA鑑定に挑戦：岐阜新聞(2014年8月13日)
- 8) DNA鑑定に挑戦：毎日新聞(2014年8月14日)
- 9) 遺伝子の仕組み学ぶ：中日新聞(2014年8月20日)
- 10) 高校生、ゲノムに挑戦：岐阜新聞(2014年8月20日)

12. 自己評価

評価

医薬獣における基礎と臨床の融合を視野に、全学的な研究基盤の整備による岐阜大学の生命科学研究の展開を進めている。また国内唯一のペルオキシソーム病診断研究センターとして全国の医療機関に診断結果を提供するとともに、患者リソースをもとに国内外の研究機関と共同で病態解明・治療法開発研究を行っている。

- 1) ゲノム研究分野における生命科学研究基盤整備：24年度以降、細胞解析装置として従来の共焦点レーザー顕微鏡に加えて、セルソーター、セルアナライザー、インセルアナライザーを導入し、講習会、トレーニングコース、技術指導を実施し、より多くの研究者への研究基盤の提供を行っている。さらに、次世代シーケンサ導入を視野にした講習会、バイオインフォマティクス、ゲノム編集技術関連のセミナーも開催している。

ゲノム研究分野ホームページ参照：<http://www1.gifu-u.ac.jp/~lsrc/dgr/portal/>

- 2) 医学地区への研究基盤の提供：現在、医学部棟5階の医学系研究科共通機器センターにDNAシーケンス受託サンプル用の冷蔵庫を設置し、毎朝、サンプルを回収して解析し、翌日午前中には解析結果をファイルサーバーにより提供している。その結果、医学部の解析サンプル数は平成23年度1218件、24年度4158件、25年度7750件と年々、増加している。また距離的な問題はあるものの、共焦点レーザー顕微鏡、リアルタイムPCR、セルソーター、セルアナライザー、LC-MS/MSなどゲノム研究棟にある解析装置を多くの医学部研究者に利用頂いている。
- 3) 医学部テュートリアル選択配属の参加：平成26年度より3人の医学部生を受入れ、ペルオキシソーム病に関わるゲノム編集技術を用いた実験、バイオインフォマティクスの演習に取り組んでいる。
- 4) ペルオキシソーム病の国内診断システムを確立し、迅速な診断から最新の医療情報を主治医に提供し、早期治療に結びつけるとともに、様々なバイオリソースを用いて病因、病態解明、治療法の開発に関する独自、ならびに共同研究を展開し、その成果を国内外に発信している。
- 5) 国際貢献としてアジア、アラブ地域におけるペルオキシソーム病診断支援も継続している。

現状の問題点及びその対応策

- 1) 生命科学技術の進歩とともにシステムバイオロジー関連解析機器の進歩も目覚ましく、学内における生命科学の教育研究水準を高度に維持するためには、集約化した施設に設備や大型機器を設置して更新して利用を広げ、学内におけるソフトやハード面での研究情報システムを整備して部局の垣根を越えた全学的な教育研究の推進が望まれる。
- 2) 全学的研究基盤整備に従事しながら研究者としてのモチベーションを保つためには、自らが率先して研究テーマを設定して学内外との共同研究を展開し、大学院も含めた研究者の教育・育成に関わる姿勢が必要と思われる。

今後の展望

- 1) 岐阜大学，岐阜薬科大学による，医・薬・工・応用生物・獣医が集結した生命科学研究の拠点形成に向け，施設，設備，組織を含めて研究しやすい環境を整備しつつ，学内外の共同研究を支援して基礎と臨床の架け橋を目指す。
- 2) 厚生労働省難病指定の副腎白質ジストロフィーを含めたペルオキシソーム病の診断研究拠点として，国内研究者を集結し，チームジャパンとして大型研究費を獲得し，病態解明，治療法の開発を行い，岐阜大学より「ペルオキシソーム」を発信していく。

(19) 生命科学総合研究支援センター（嫌気性菌研究分野）

1. 研究の概要

当分野は平成15年の改組により前身の医学部附属嫌気性菌実験施設から学内研究支援を主たる業務とする生命科学総合研究支援センターの嫌気性菌研究分野に移行した。支援内容としてはその特殊性から学内外を問わず嫌気性菌の培養、菌株提供、嫌気性菌感染症に関する相談、診断支援、院内感染に関する調査などの支援を行っている。研究面では、臨床微生物学の立場から、嫌気性菌・嫌気性菌感染症に関する研究を進めている。また、系統保存の立場から、嫌気性菌を中心に主に感染症材料からの分離菌の収集・維持を行っている。

2. 名簿

教授： 田中香お里 Kaori Tanaka
助教： 林 将大 Masahiro Hayashi
助教： 後藤隆次 Takatsugu Goto

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 渡邊邦友, 国広誠子, 江成博, 藤原智子, 田中香お里. 嫌気性菌検査ガイドライン 2012: 渡邊邦友監修. 日本臨床微生物学会雑誌, 22(S-1), 東京: 日本臨床微生物学会; 2012年.
- 2) 渡邊邦友. 第15章無芽胞嫌気性グラム陰性桿菌: 平松敬一監修. 標準微生物学 第11版, 東京: 医学書院; 2012年: 215-221.
- 3) 渡邊邦友. 第17章グラム陰性嫌気性球菌: 平松敬一監修. 標準微生物学 第11版, 東京: 医学書院; 2012年: 226-227.
- 4) 渡邊邦友, 田中香お里. 24章感染症・寄生虫疾患, グラム陽性菌による感染症 ③クロストリジウム感染症: 門脇孝, 永井良三総編集. カラー版 内科学, 東京: 西村書店; 2012年: 1783-1789.
- 5) 田中香お里. I 微生物学, 第6章J 嫌気性グラム陰性球菌, K 嫌気性グラム陽性有芽胞桿菌, L 嫌気性グラム陽性無芽胞桿菌, M 嫌気性グラム陰性桿菌: 一山 智, 田中美智雄編. 微生物学・臨床微生物学・医動物学, 東京: 医学書院; 2013年: 87-93.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 田中香お里, 渡邊邦友. 嫌気性菌の薬剤耐性, 薬事 2012年; 54巻: 1255-1258.
- 2) 田中香お里. 臨床医が知っておきたい嫌気性菌の菌名変化, 日本外科感染症学会雑誌 2012年; 9巻: 673-680.
- 3) 田中香お里. 抗菌薬に耐性の嫌気性菌, 化学療法の領域 2013年; 29巻: 2064-2068.
- 4) 田中香お里. *Clostridium difficile*, 臨床検査 2013年; 57巻: 1114-1118.
- 5) 後藤隆次. 腸内常在の嫌気性菌, 化学療法の領域 2013年; 29巻: 2048-2054.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 山岸由佳, 三嶋廣繁, 澤村治樹, 末松寛之, 波田野正和, 太田浩敏, 浅野裕子, 石郷潮美, 松原茂規, 松川洋子, 佐伯浩和, 武藤敏弘, 寺地真弓, 川原佑貴, 宮部高典, 寺田浩史, 森田恵理, 土屋洋子, 宮本佑輝, 毛利哲夫, 秋田茂樹, 岡田雅子, 佐久間孝, 宮本直哉, 山田孝治, 山岡一清, 田中香お里, 渡邊邦友. 岐阜県下および愛知県北部における肺炎球菌の疫学解析~2009年~, *The Japanese Journal of Antibiotics* 2012年; 65巻: 27-47.
- 2) 山田敦子, 山岸由佳, 田中香お里, 澤村治樹, 大野智子, 内藤和香子, 谷 浩也, 渡邊邦友, 三嶋廣繁. 細菌検査機器ライサスの Group B *Streptococcus* 同定精度に関する検討, 臨床微生物迅速診断研究会雑誌 2012年; 23巻: 11-17.
- 3) 山田敦子, 山岸由佳, 田中香お里, 末松寛之, 澤村治樹, 渡邊邦友, 三嶋廣繁. カルバペネム系薬剤耐性 *Bacteroides* 属に関する疫学解析, 日本外科感染症学会雑誌 2013年; 10巻: 277-282.
- 4) 山川英晃, 高柳 昇, 石黒 卓, 田中香お里, 杉田 裕, 渡邊邦友. *Pseudoramibacter alactolyticus* による肺化膿症の1例, 日本呼吸器学会誌 2013年: 380-384.

原著（欧文）

- 1) Efdi M, Ninomiya M, Suryani E, Tanaka K, Ibrahim S, Watanabe K, Koketsu M. Sentulic acid: A cytotoxic ring A-seco triterpenoid from *Sandoricum koetjape* Merr. *Bioorg Med Chem Lett*.

- 2012;22:4242-4245. IF 2.331
- 2) Seki N, Toh U, Kawaguchi K, Ninomiya M, Koketsu M, Watanabe K, Aoki M, Fujii T, Nakamura A, Akagi Y, Kusukawa J, Kage M, Shirouzu K, Yamana H. Tricin inhibits proliferation of human hepatic stellate cells in vitro by blocking tyrosine phosphorylation of PDGF receptor and its signaling pathways. *J Cell Biochem.* 2012;113:2346-2355. IF 3.368
 - 3) Goto T, Ogura Y, Hirakawa H, Tomida J, Morita Y, Akaike T, Hayashi T, Kawamura Y. Complete genome sequence of *Helicobacter cinaedi* strain PAGU611, isolated in a case of human bacteremia. *J Bacteriol.* 2012;194:3744-3745. IF 2.688
 - 4) Tran CM, Tanaka K, Watanabe K. PCR-based detection of resistance genes in anaerobic bacteria isolated from intra-abdominal infections. *J Infect Chemother.* 2013;19:279-290. IF 1.384
 - 5) Goto T, Tanaka K, Tran CM, Watanabe K. Complete sequence of pBFUK1, a carbapenemase-harboring mobilizable plasmid from *Bacteroides fragilis*, and distribution of pBFUK1-like plasmids among carbapenem-resistant *B. fragilis* clinical isolates. *J Antibiot.* 2013;66:239-242. IF 2.041
 - 6) Sari DP, Ninomiya M, Efdi M, Santoni A, Ibrahim S, Tanaka K, Koketsu M. Clerodane diterpenes isolated from *Polyalthia Longifolia* induce apoptosis in human leukemia HL-660 cells. *J Oleo Sci.* 2013;62:843-848. IF 1.201
 - 7) Hayashi M, Natori T, Kubota HS, Miyata M, Ohkusu K, Kawamoto K, Kurazono H, Makino S, Ezaki T. A New Protocol to Detect Multiple Foodborne Pathogens with PCR Dipstick DNA Chromatography after a Six-Hour Enrichment Culture in a Broad-Range Food Pathogen Enrichment Broth. *BioMed Res Int.* 2013;2013:ID295050.
 - 8) Yoshizak S, Umemura T, Tanaka K, Watanabe K, Hayashi M, Muto Y. Genome-wide evidence of positive selection in *Bacteroides fragilis*. *Comput Biol Chem.* 2014;52:43-50. IF 1.595
 - 9) Kakumu A, Ninomiya M, Efdi M, Adfa M, Hayashi M, Tanaka K, Koketsu M. Phytochemical analysis and antileukemic activity of polyphenolic constituents of *Toona sinensis*. *Bioorg Med Chem Lett.* 2014;24:4286-4290. IF 2.331
 - 10) Ishihara Y, Kanda J, Tanaka K, Nakano H, Kanda Y. et al. Severe oral infection due to *Lactobacillus rhamosus* during induction chemotherapy for acute myeloid leukemia. *Int J Hematol.* 2014;100:607-610. IF 1.679
 - 11) Yamakawa H, Yoshida M, Morikawa N, Fujimoto S, Ishikawa T, Sano K, Nishiwaki K, Takagi M, Hayashi M, Kuwano K, Aiba K. Pulmonary *Nocardia nova* Infection after Allogeneic Hematopoietic Stem Cell Transplantation. *Internal Med.* 2014;53:1391-1395 IF 0.967

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：後藤隆次，研究分担者：田中香お里；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：新規カルバペネム耐性因子(バクテロイデス・フラジリス由来)の網羅的同定と機能解析；平成 26-28 年度；3,100 千円(1,000：900：1,200 千円)

2) 受託研究

- 1) 田中香お里：腹腔内感染症に対するメトロニダゾール注射剤の有効性および安全性をセフトリアキソンナトリウムとの併用で検討する多施設共同、非盲検、非対照試験；平成 23-24 年度；2,375 千円；ファイザー(株)

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

渡邊邦友：

- 1) 臨床腸内微生物学会理事(～現在)
- 2) 日本感染症学会評議員(～現在)
- 3) 日本細菌学会評議員(～現在)
- 4) 日本化学療法学会評議員(～現在)
- 5) 日本臨床微生物学会評議員(～現在)
- 6) 日本嫌気性菌感染症研究会運営委員(～平成 25 年)
- 7) 臨床微生物迅速診断研究会幹事(～平成 24 年)

- 8) 日本細菌学会中部支部評議員(～現在)
- 9) 日本化学療法学会嫌気性菌感染症治療のガイドライン改訂委員会委員(平成 24 年～平成 25 年)

田中香お里：

- 1) 日本化学療法学会評議員(～現在)
- 2) 日本臨床微生物学会評議員(～現在)
- 3) 日本細菌学会中部支部評議員(～現在)
- 4) 日本嫌気性菌感染症研究会運営委員(～平成 25 年)
- 5) 日本臨床微生物学会検査法マニュアル作業委員会委員(～平成 25 年)
- 6) 日本臨床微生物学会学術奨励賞委員会委員(～現在)
- 7) 日本化学療法学会嫌気性菌感染症治療のガイドライン改訂委員会委員(平成 24 年～現在)

林 将大：

- 1) 日本微生物資源学会理事(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

渡邊邦友：

- 1) Anaerobe Society of the Americas ; Anaerobe Editorial board(～平成 24 年)
- 2) 臨床微生物迅速診断研究会雑誌；編集委員(～平成 25 年)

田中香お里：

- 1) 日本嫌気性菌感染症学会雑誌(平成 25 年～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

渡邊邦友：

- 1) 第 23 回日本臨床微生物学会(平成 24 年 1 月，横浜，ランチョンセミナー5「*Clostridium difficile* 感染症の細菌学的検査法と結果の解釈」座長)
- 2) 第 42 回日本嫌気性菌感染症研究会(平成 24 年 3 月，大分，教育セミナー2「臨床的に重要なグラム陰性嫌気性菌の分類に関する話題」座長)
- 3) 第 60 回日本化学療法学会総会(平成 24 年 4 月，長崎，教育講演 7「菌叢解析による新しい呼吸器感染症の診断」座長)

田中香お里：

- 1) 第 42 回日本嫌気性菌感染症研究会(平成 24 年 3 月，大分，教育セミナー2「臨床的に重要なグラム陰性嫌気性菌の分類に関する話題」演者)

林 将大：

- 1) 第 33 回日本微生物系統分類研究会年次大会(平成 25 年 11 月，高山，シンポジウム 2「類縁菌種間の分類に有効な遺伝子の選択方法とその意味」演者)
- 2) 日本薬学会東海支部講演会(平成 26 年 1 月，愛知，「細菌の類縁菌種間の分類における新たなアプローチ」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

田中香お里：

- 1) 岐阜県建築審査会委員(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

前身の医学部附属嫌気性菌実験施設の時代から、臨床嫌気性菌学中心とした研究、診断支援を主体とし、医学教育においては微生物分野のサポートを行っている。組織が移行したことと教室員の減少により、以前に比べ臨床細菌学領域での共同研究が後退している点は否めないが、学内外から依頼のある感染症検体の解析、同定困難菌の同定、薬剤感受性情報の提供を行い、診療支援を続けている。こういった支援は症例報告にもつながっており、一般好気性菌に比べて情報が不足している嫌気性菌感染症の疫学情報、薬剤感受性情報の補完に寄与するものと考えられる。また、医学領域以外への研究サポート、共同研究も少しずつではあるが進めている。

現状の問題点及びその対応策

当分野は学内研究支援センターに所属しているが、特殊な分野であるため実質的な研究、診断支援の需要は学内よりも学外に多い。支援業務はセンターの他分野で主に行っている機器、施設の提供による支援とは性質が異なり、知識、技術、作業を提供する支援が主体となっている。系統保存に加え、これらの支援を安定的提供していくためには、経験を積んだスタッフが業務に従事できる態勢が必須である。これらの支援業務は時間と労力を要する反面、研究に繋がりにくいことから、経験のあるスタッフが少ない状況で教員が支援と研究、教育のいずれも不足なく行っていくのは容易ではない。現状では、支援、研究、教育の何れにおいても限られた範囲でしか実施できていない。このため、教員の指導の下、支援業務に従事できる、高い専門性を有する技術職員の育成と継続的確保が必要である。

今後の展望

臨床嫌気性菌学を行っている国内では希な基礎の講座として、対外的にはレファレンスセンターとしての機能を期待されている。スタッフの努力により、一時期よりレファレンス機能は向上しているが、今後、遺伝資源保存に加え分譲業務の拡充が期待されるなか、これらの機能の安定的な維持と拡充については、厳しい状況にある。当面は現状を維持しながら、機能の拡充に向けての体制作りに努力したい。

(20) 大学院連合創薬医療情報研究科 (医療情報学専攻)

1. 研究の概要

創始した論理的創薬法に基づき、ほぼ全ての疾患を網羅できる創薬体制(一網打尽創薬)を構築している。具体的には、プリオン病、インフルエンザウイルス感染症を標的とし、致死性の高い人獣共通感染症に対する創薬を推進している。同時に、抗癌剤、多能性幹細胞誘導分化剤などの戦略的創薬も進めている。

また、論理的創薬に必要な手法(構造生物学的手法(新規NMR測定法)、量子化学計算ソフト、アカデミア初のGMP準拠有機合成、注射剤製造施設等)の構築も同時に行っている。

一方、臓器レベルでの疾患制御という観点から、新規補助人工心臓(LVAD)の開発を行っている。人工心肺装置(泉工医科工業)を用いた本格的な手術設備を整備し、中動物に対するLVADの植え込み手術を可能とした。また、本設備を用いた論理的な外科手術研究を開始し、数理的定式化を試みている。これらは、近未来の超精密ロボット手術(μm 単位の切開、縫合)の基礎となる。

このように、医薬品医療機器開発の基本的要件を整え、近未来の医療を創造することが研究概要である。

2. 名簿

教授： 桑田一夫 Kazuo Kuwata
教授： 丹羽雅之 Masayuki Niwa
教授： 加藤善一郎 Zenichiro Kato

3. 研究成果の発表

著書(和文)

- 1) 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 田邊政裕, 朝比奈真由美編. 新しい医学教育の流れ'11 秋. 第42回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2012年: 1-172.
- 2) 若林英樹, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'12 冬. 第43回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2012年: 1-156.
- 3) 川上ちひろ, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 石川和信編. 新しい医学教育の流れ'12 春. 第44回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2012年: 1-142.
- 4) 西城卓也, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'12 夏. 第45回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2012年: 1-240.
- 5) 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012年: 1-241.
- 6) 丹羽雅之. e-ポートフォリオシステムの構築と利用: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012年: 200-204.
- 7) 丹羽雅之. Faculty Development の企画・運営: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 日本の医学教育の挑戦, 東京: 篠原出版新社; 2012年: 222-227.
- 8) 藤崎和彦, 鈴木康之, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'12 秋. 第46回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013年: 1-170.
- 9) 丹羽雅之, 鈴木康之, 藤崎和彦, 大屋祐輔, 阿部幸恵編. 新しい医学教育の流れ'13 冬. 第47回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013年: 1-155.
- 10) 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 小西靖彦, 錦織 宏編. 新しい医学教育の流れ'13 春. 第48回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013年: 1-185.
- 11) 西城卓也, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'13 秋. 第50回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2013年: 1-210.
- 12) 丹羽雅之. 野村隆英, 石川直久編. シンプル薬理学【改訂第5版】, 東京: 南江堂; 2014年: 1-376.
- 13) 川上ちひろ, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'13 夏. 第49回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2014年: 1-131.
- 14) 丹羽雅之. 医学教育ユニットの現状: 医学教育学会 広報・情報基盤開発委員会編. 医学教育白書 2014年版 医学教育別冊, 東京: 篠原出版; 2014年: 116-118.

著書(欧文)

- 1) Hara A, Aoki H, Takamatu M, Hatano Y, Tomita H, Kuno K, Niwa M, Kunisada T. Human embryonic stem cells transplanted into mouse retina induces neural differentiation. In: Tumors of the central nervous system, Springer, Stem Cells and Cancer Stem Cells, Volume 2, Part 4. 2012:291-298.
- 2) Niwa M, Nakashima M, Satoh K, Takamatsu M, Kobayashi K, Hatano Y and Hara A. Hypothermia and Hyperthermia affect neuronal degeneration, delayed neuronal death and microglial activation following transient forebrain ischemia. In: Delgado JIV, Garza VGF, eds. Hypothermia: Prevention, Recognition and Treatment. Nova Science Publish; 2012:15-24.
- 3) Niwa M, MaruYama T, Hisamatsu K, Kobayashi K, Miyazaki T, Hirata A, Hatano Y, Tomita H, Hara A, The Role of Microglial Galectin-3 in Central Nervous System Disease. In: Giffard ER, ed. Microglia: Physiology, Regulation and Health Implications. Nova Science Publish; 2014:1-10.

総説 (和文)

- 1) 桑田一夫. 量子創薬—論理的形態制御学の原理—(Non-commutative Geometrical Drug Discovery —The Principle of Geometrical Regulation—), YAKUGAKU ZASSHI 2012年; 132巻: 873-879.
- 2) 桑田一夫. 寄稿「数式から物質へ、言語から現実へ」, 「杉田玄白賞」のあゆみ〜第1回から第10回までの記録〜 2012年: 28.
- 3) 真嶋由貴恵, 中村裕美子, 丹羽雅之, 木下淳博, 吉田素文. 医療系教育における e ラーニングの動向—医療系 e ラーニング全国交流会(JMeL)から—, 教育システム情報学会誌 2014年; 31巻: 8-18.
- 4) 西城卓也, 丹羽雅之, 川上ちひろ, 今福輪太郎, 坂下和美, 藤崎和彦, 鈴木康之. 医学者教育における教育者養成のこれまでとこれから: 医学教育セミナーとワークショップの歴史が示す将来, 医学教育 2014年; 45巻: 13-24.

総説 (欧文)

- 1) Suzuki Y, Niwa M. e-PBL: Possibilities and Limitations. J Med Edu. 2012;16:1-8.

原著 (和文)

- 1) 大西弘高, 川崎 勝, 椎橋美智男, 阿部幸恵, 大久保由美子, 片岡仁美, 杉本なおみ, 高村昭輝, 内藤 亮, 丹羽雅之. 医学教育情報館(MEAL)の構築プロセス, 医学教育 2012年; 43巻: 215-220.
- 2) 阿部恵子, 若林英樹, 西城卓也, 川上ちひろ, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之. Trait Emotional Intelligence Que-SF と Jefferson Scale of Physician Empathy の日本語版開発と信頼性・妥当性の検討, 医学教育 2012年; 43巻: 351-359.
- 3) 阿部恵子, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之. 医学生の Emotional Intelligence (EI) と Empathy: 性差および学年差の検討, 医学教育 2013年; 44巻: 315-326.

原著 (欧文)

- 1) Morita H, Kaneko H, Ohnishi H, Kato Z, Kubota K, Yamamoto T, Matsui E, Teramoto T, Fukao T, Kasahara K, Kondo N. Structural property of soybean protein P34 and specific IgE response to recombinant P34 in patients with soybean allergy. Int J Mol Med. 2012;29:153-158. IF 1.880
- 2) Goda W, Satoh K, Nakashima M, Hara A, Niwa M. PBN fails to suppress in delayed neuronal death of hippocampal CA1 injury following transient forebrain ischemia in gerbils. Neurosci Lett. 2012;517:47-51. IF 2.055
- 3) Ishikawa T, Kuwata K. RI-MP2 Gradient Calculation of Large Molecules Using the Fragment Molecular Orbital Method. Journal of Physical Chemistry Letters. 2012;3:375-379. IF 6.687
- 4) Yamada K, Koyama H, Hagiwara K, Ueda A, Sasaki Y, Kaneshashi S, Ueno R, Nakamura HK, Kuwata K, Shimizu K, Suzuki M, Aida Y. Identification of a novel compound with antiviral activity against influenza A virus depending on PA subunit of viral RNA polymerase. Microbes and Infection. 2012;14:740-747. IF 2.731
- 5) Hosokawa-Muto J, Kimura T, Kuwata K. Respiratory and cardiovascular toxicity studies of a novel anti-prion compound, GN8, in rats and dogs. Drug and Chemical Toxicology. 2012;35:264-271. IF 1.098
- 6) Chang L, Ishikawa T, Kuwata K, Takada S. Protein-specific force derived from the fragment molecular orbital method can improve protein-ligand binding interactive. Journal of Computational Chemistry. 2013;34:1251-1257. IF 3.601
- 7) Ishikawa T, Burri RR, Kamatari YO, Sakuraba S, Matubayasi N, Kitao A, Kuwata K. A theoretical study of the two binding modes between lysozyme and tri-NAG with an explicit solvent model based on the fragment molecular orbital method. Physical chemistry chemical physics. 2013;15:3646-3654. IF 4.198
- 8) Takemura K, Burri RR, Ishikawa T, Ishikura T, Sakuraba S, Matubayasi N, Kuwata K, Kitao A. Free-energy analysis of lysozyme-triNAG binding modes with all-atom molecular dynamics simulation combined with the solution theory in the energy representation. Chemical physics letters. 2013;559:94-98. IF 1.991
- 9) Mashima T, Nishikawa F, Kamatari Y, Fujiwara H, Saimura M, Nagata T, Kodaki T, Nishiwaka S, Kuwata K, Katahira M. Anti-prion activity of an RNA aptamer and its structural basis. Nucleic Acids Research. 2013;41:1355-1362. IF 8.808
- 10) Okamoto T, Ishikawa T, Koyano Y, Yamamoto N, Kuwata K, Nagaoka M. A minimal implementation of the AMBER-PAICS interface for Ab initio FMO-QM/MM-MD simulation. Bulletin of the Chemical Society of Japan. 2013;86:210-222. IF 2.222
- 11) Kamatari Y, Hayano Y, Yamaguchi K, Hosokawa-Muto J, Kuwata K. Characterizing anti-prion compounds based on their binding properties to prion proteins: Implications as medical chaperones. Protein Science. 2013;22:22-34. IF 2.861
- 12) Nakagaki T, Satoh K, Ishibashi D, Fuse T, Sano K, Kamatari YO, Kuwata K, Shigematsu K, Iwamaru Y, Takenouchi T, Kitani H, Nishida N, Atarashi R. FK506 reduces abnormal prion protein through the activation of autolysosomal degradation and prolongs survival in prion-infected mice. Autophagy. 2013;9:1386-1394. IF 11.423
- 13) Kimura T, Sako T, Siqin, Hosokawa-Muto J, Cui YL, Wada Y, Kataoka Y, Doi H, Sakaguchi S, Suzuki M, Watanabe Y, Kuwata K. Synthesis of an 11C-Labeled Antiprion GN8 Derivative and Evaluation of

- Its Brain Uptake by Positron Emission Tomography. *ChemMedChem*. 2013;8:1035-1039. IF 3.046
- 14) Endo S, HU D, Suyama M, Matsunaga T, Sugimoto K, Matsuya Y, El-Kabbani O, Kuwata K, Hara A, Kitade Y, Toyooka N. Synthesis and structure-activity relationship of 2-phenyliminochromene derivatives as inhibitors for AKR1B10. *Bioorganic & Medicinal Chemistry*. 2013;21:6378-6384. IF 2.951
- 15) Yamaguchi K, Kamatari YO, Fukuoka M, Miyaji R, Kuwata K. Nearly Reversible Conformational Change of Amyloid Fibrils as Revealed by pH-Jump Experiments. *Biochemistry*. 2013;52:6797-6806. IF 3.194
- 16) Kuwata K. Logical Design of Medical Chaperone for Prion Diseases. *Current topics in medicinal chemistry*. 2013;13:2432-2440. IF 3.453
- 17) Abe K, Evans P, Austin EJ, Suzuki Y, Fujisaki K, Niwa M, Aomatsu M. Expressing one's feelings and listening to others increases emotional intelligence: a pilot study of Asian medical students. *BMC Med Educ*. 2013;13:82. IF 1.409
- 18) Honda RP, Yamaguchi KI, Kuwata K. Acid-induced Molten Globule State of a Prion Protein: Crucial Role of Strand 1-Helix 1-Strand 2 Segment. *J Biol Chem*. pii: jbc.M114.559450 *J boil Chem*. 2014;289:30355-30363. IF 4.600
- 19) Taguchi A, Niwa M, Hoshi M, Saito K, Masutani T, Hisamatsu K, Kobayashi K, Hatano Y, Tomita H, Hara A. Indoleamine 2,3-dioxygenase 1 is upregulated in activated microglia in mice cerebellum during acute viral encephalitis. *Neurosci Lett*. 2014;564:120-125. IF 2.055
- 20) Niwa M, Yoshida S, Takamizawa K, Nagaoka S, Kawakubo N, Takahashi Y, Suzuki Y. Facilitation of web-based Internet PBL: what is an adequate group size?. *IeJSME*. 2014;8:4-11. IF 0.500
- 21) Tsutsumi N, Kimura T, Arita K, Ariyoshi M, Ohnishi H, Yamamoto T, Zuo X, Maenaka K, Park EY, Kondo N, Shirakawa M, Tochio H, Kato Z. The structural basis for receptor recognition of human interleukin-18. *Nat Commun*. 2014;5:5340. IF 10.742
- 22) Yamamoto T, Tsutsumi N, Tochio H, Ohnishi H, Kubota K, Kato Z, Shirakawa M, Kondo N. Functional assessment of the mutational effects of human IRAK4 and MyD88 genes. *Mol Immunol*. 2014;58:66-76. IF 3.003
- 23) Kimura T, Tsutsumi N, Arita K, Ariyoshi M, Ohnishi H, Kondo N, Shirakawa M, Kato Z, Tochio H. Purification, crystallization and preliminary X-ray crystallographic analysis of human IL-18 and its extracellular complexes. *Acta Crystallogr F*. 2014;70:1351-1356. IF 0.568
- 24) Funato M, Uemura O, Ushijima K, Ohnishi H, Orii K, Kato Z, Yamakawa S, Nagai T, Ohara O, Kaneko H, Kondo N. A complement factor B mutation in a large kindred with atypical hemolytic uremic syndrome. *J Clin Immunol*. 2014;34:691-695. IF 2.654

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：丹羽雅之；科学研究費補助金基盤研究(C)：コバルトクロライド誘発網膜神経障害モデルを用いた再生治療に関する基礎的研究；平成 22-24 年度；4,160 千円(1,690：1,560：910 千円)
- 2) 研究代表者：河野健一，研究分担者：丹羽雅之；科学研究費補助金基盤研究(C)：6 年一貫プロフェシヨナリズム教育における e-ポートフォリオの開発と実践；平成 22-24 年度；3,640 千円(1,300：1,170：1,170 千円)
- 3) 研究代表者：阿部恵子(名古屋大学)，研究分担者：鈴木康之，藤崎和彦，丹羽雅之，若林英樹，西城卓也，川上ちひろ；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：医学生の情動能力育成のための 6 年間継続的コミュニケーション教育プログラムの開発；平成 23-25 年度；5,200 千円(2,340：1,430：1,430 千円)
- 4) 研究代表者：鈴木康之，研究分担者：鈴木康之，西城卓也，藤崎和彦，丹羽雅之ら；科学研究補助金基盤研究(B)：医学・医療教育指導者の育成システム構築に関する研究；平成 23-25 年度；19,500 千円(6,500：6,500：6,500 千円)
- 5) 研究代表者：桑田一夫，研究分担者：鎌足雄司；科学研究費補助金基盤研究(B)：カイネティック NMR によるプリオン体立体構造進化過程の解明；平成 23-25 年度；20,020 千円(7,020：6,500：6,500 千円)
- 6) 研究代表者：山田正仁(金沢大学大学院医学系研究科 脳老化・神経病態学(神経内科))，研究分担者：桑田一夫 他 39 名；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：プリオン病及び遅発性ウイルス感染症に関する調査研究(H23-難治-一般-013)；平成 23-25 年度；48,000 千円(16,000：16,000：16,000 千円)
- 7) 研究代表者：桑田一夫，研究分担者：水澤英洋，西田教行，三條伸夫，小野文子，柴田宏昭；厚生労働省難治性疾患等克服研究事業：プリオン病に対する低分子シャペロン治療薬の開発(H24-難治等(難治)-一般-004)；平成 24-26 年度；1,167,801 千円(148,850：319,494：699,457 千円)
- 8) 研究代表者：桑田一夫，研究分担者：鎌足雄司；科学研究費補助金基盤研究(B)：マイクロ流路超高速パルスラベル NMR 装置の開発及びプリオン自己複製過程の解明；平成 26-28 年度；16,510 千円(5,850：5,330：5,330 千円)

2) 受託研究

- 1) 研究代表者：北尾彰朗(東京大学分子細胞生物学研究所細胞機能情報研究センター創生研究分野), 研究分担者：桑田一夫；平成 19 年度戦略的創造研究推進事業(CREST タイプ)研究領域「マルチスケール・マルチフィジックス現象の統合シミュレーション」：研究課題「バイオ分子間相互作用形態の階層的モデリング」；平成 19-24 年度；43,514 千円(3,000：9,421：10,000：10,000：8,000：3,093 千円)(直接経費)(含：間接経費=×1.3)：独立行政法人科学技術振興機構
- 2) 研究代表者：中迫雅由(慶応義塾大学), 研究分担者：山本雅貴, 亀島 敬, 高橋幸生, 難波啓一, 桑田一夫, 河田康志, 松永幸大, 池口満徳；独立行政法人理化学研究所 SACLA 共用ビームライン 利用研究課題(重点戦略課題)：SACLA における低温 X 線回折イメージング実験の展開と標準化；平成 24-28 年度；170,000 千円(85,000：85,000 千円：未定：未定：未定)：独立行政法人理化学研究所

3) 共同研究

- 1) 研究代表者：鈴木正嗣(岐阜大学応用生物科学部 附属野生動物管理学研究センター), 研究分担者：桑田一夫；北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター 特定共同研究：研究課題「人獣共通感染症の診断・予防・治療法の開発研究」；平成 22-28 年度；24,600 千円(18,000：4,000：1,400：700：500 千円：未定：未定)：北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター

5. 発明・特許出願状況

- 1) 研究者名：桑田一夫：抗プリオン化合物のマレイン酸塩及びその製造方法、並びにその医薬組成物(特許)；平成 26 年

6. 学会活動

1) 学会役員

丹羽雅之：

- 1) 日本炎症・再生医学会評議員(～現在)
- 2) 日本薬理学会評議員(～現在)
- 3) 日本医学教育学会評議員(～現在)
- 4) 日本臨床薬理学会評議員(～現在)
- 5) 日本医学教育学会広報・情報基盤委員会委員(～現在)
- 6) 日本シミュレーション医療教育研究会幹事・評議員(～現在)
- 7) 医療系 e-learning 全国交流会 副会長(～現在)
- 8) 東海 7 大学医学教育連絡協議会幹事(～現在)
- 9) 教育システム情報学会人材育成委員会医療・看護部会委員(～現在)

加藤善一郎：

- 1) 日本小児科学会代議員(～現在)
- 2) 日本小児神経学会(～現在)
- 3) 日本人類遺伝学会(～現在)

桑田一夫：

- 1) 日本生理学会評議員(～現在)
- 2) 日本磁気共鳴医学会評議員(～現在)
- 3) 臨床ストレス応答学会評議員(～現在)

2) 学会開催

丹羽雅之：

- 1) 第 43 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 24 年 1 月, 岐阜)
- 2) 第 6 回医療系全国交流会(平成 24 年 1 月, 岐阜)
- 3) 第 44 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 24 年 5 月, 福島)
- 4) 第 45 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 24 年 8 月, 岐阜)
- 5) 第 46 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 24 年 10 月, 岐阜)
- 6) 第 47 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 1 月, 沖縄)
- 7) 第 48 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 6 月, 京都)

- 8) 第 49 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 8 月, 岐阜)
- 9) 第 50 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 25 年 11 月, 岐阜)
- 10) 第 51 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 26 年 1 月, 東京)
- 11) 第 52 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 26 年 5 月, 秋田)
- 12) 第 53 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 26 年 8 月, 岐阜)
- 13) 第 54 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 26 年 10 月, 九州)

桑田一夫 :

- 1) 再生医療と創薬の最前線 第 1 回シンポジウム「心臓外科と神経内科における難治性疾患の克服に向けて」(平成 25 年 3 月, 岐阜)
- 2) 再生医療と創薬の最前線 第 2 回シンポジウム「脳を守る」(平成 26 年 3 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

丹羽雅之 :

- 1) 第 44 回日本医学教育学会大会(平成 24 年 7 月, 横浜, 座長)
- 2) 第 7 回医療系 e-ラーニング全国交流会(平成 25 年 1 月, 徳島, 招待講演 座長)
- 3) 第 45 回日本医学教育学会(平成 25 年 7 月, 千葉, パネルディスカッション「ネットワークを活用した医療者教育の情報のあり方」座長)
- 4) 第 46 回日本医学教育学会(平成 26 年 7 月, 和歌山, シンポジウム「e-ラーニングを機能させるためのシステムと考え方」座長)

桑田一夫 :

- 1) 臨床研究情報センター講演(平成 24 年 4 月, 兵庫, 招待講演「論理的創薬法の確立と抗プリオン化合物の創製 シーズ創製のための戦略的組織-人獣感染防御研究センター-」演者)
- 2) 日本胎盤臨床研究会講演(平成 24 年 5 月, 東京, 招待講演「自己複製する蛋白質‘プリオン’の制御」演者)
- 3) 慶應義塾大学 生命システム情報特別講義 B(平成 24 年 5 月, 神奈川, 招待講演「特殊及び一般形態形成理論-非可換外科学入門-」演者)
- 4) 東京医科歯科大学 大学院領域別特別講義(平成 24 年 6 月, 東京, 招待講演「プリオン蛋白質のコンフォメーションスイッチと核依存性複製機構」演者)
- 5) 蛋白研セミナー「『蛋白質と過飽和』~Impacts of Supersaturation on Protein Science~」(平成 24 年 6 月, 大阪, 座長)
- 6) 蛋白研セミナー「International Workshop on Pharmaceutical NMR-Nucleic Acids and Prion Protein-」(平成 24 年 10 月, 大阪, 「Relaxation Matrix and Prion」演者)
- 7) プリオン病研修会(平成 25 年 2 月, 東京, 招待講演「プリオン病新規治療薬 P092 の開発について」(ノーベルファーマ株式会社内)演者)
- 8) 第二回 岐阜構造生物学・医学・論理的創薬研究会シンポジウム(平成 25 年 3 月, 招待講演「論理的創薬から治験薬 GMP へ」演者)
- 9) プリオンに関する講演会(平成 25 年 3 月, 兵庫, 招待講演「メディカルシャペロンによるプリオン病の治療」演者)
- 10) DRUG DISCOVERY & THERAPY WORLD CONGRESS(平成 25 年 6 月, Boston, 招待講演「MEDICAL CHAPERONE - A NOVEL STRATEGY FOR THE LOGICAL DRUG DESIGN」演者)
- 11) 韓国蛋白質学会(平成 25 年 6 月, 韓国, 招待講演「Logical design of a medical chaperone for prion diseases」演者)
- 12) 国立精神・神経医療研究センター講演(平成 26 年 9 月, 兵庫, 招待講演「プリオン病に対するメディカルシャペロンの医師主導治験に向けて」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

- 1) 桑田一夫：プリオン立体構造変換初期過程の解析：厚生労働科学研究費補助金(難治性疾患克服研究事業) プリオン病及び遅発性ウイルス感染症に関する調査研究班 分担研究報告書：78(平成 24 年 3 月)
- 2) 桑田一夫：カイネティック NMR によるプリオン立体構造進化過程の解明：独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業(科学研究費補助金)基盤研究 B 平成 23 年度研究実績報告書(平成 24 年 4 月)
- 3) 桑田一夫：プリオン天然変性部位の異常立体構造変換における役割：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)「天然変性タンパク質の分子認識と機能発現」平成 23 年度実績報告書(平成 24 年 4 月)
- 4) 桑田一夫：バイオ分子間相互作用形態の階層的モデリング：独立行政法人 科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業(チーム型研究・CREST)「マルチスケール・マルチフィジックス現象の統合シミュレーション」平成 23 年度実績報告書(平成 24 年 4 月)
- 5) 丹羽雅之：全国ユニット機関名簿：医学教育 43：253-262(平成 24 年 6 月)
- 6) 桑田一夫：バイオ分子間相互作用形態の階層的モデリング：独立行政法人 科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業(チーム型研究・CREST)「マルチスケール・マルチフィジックス現象の統合シミュレーション」研究終了報告書(平成 24 年 8 月)
- 7) 丹羽雅之：アナウンスメント. 第 47 回医学教育セミナーとワークショップ：医学教育 43：440(平成 24 年 12 月)
- 8) 桑田一夫：プリオン病に対する低分子シャペロン治療薬の開発：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患等克服研究事業(難治性疾患克服研究事業) 平成 24 年度総括・分担研究報告書(平成 25 年 3 月)
- 9) 桑田一夫：プリオン立体構造変換原理の解明とその制御：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患等克服研究事業(難治性疾患克服研究事業) プリオン病及び遅発性ウイルス感染症に関する調査研究班 分担研究報告書：65(平成 25 年 3 月)
- 10) 桑田一夫：カイネティック NMR によるプリオン立体構造進化過程の解明：独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業(科学研究費補助金)基盤研究 B 平成 24 年度研究実績報告書(平成 25 年 4 月)
- 11) 桑田一夫：SACLA における低温 X 線回折イメージング実験の展開と標準化(X 線回折・NMR・AFM 融合アミロイド繊維イメージング)：文部科学省平成 24 年度科学技術試験研究委託事業 委託業務成果報告書(平成 25 年 5 月)
- 12) 丹羽雅之：全国ユニット機関名簿：医学教育 44：198-208(平成 25 年 6 月)
- 13) 丹羽雅之：全国ユニット機関名簿：医学教育 45：224-236(平成 26 年 6 月)

11. 報道

- 1) 桑田一夫：岐阜大 創薬へ新施設—異常プリオン難病治療法を試験：中日新聞(2013 年 1 月 18 日)
- 2) 桑田一夫：「ヤコブ病」新薬開発へ—岐阜大に研究施設開設：岐阜新聞(2013 年 1 月 24 日)
- 3) 桑田一夫：最新の研究成果紹介 難治性疾患克服 岐阜大でシンポ：岐阜新聞(2013 年 3 月 4 日)
- 4) 桑田一夫：再生医療の最前線伝える講演会：NHK 岐阜放送局(2013 年 3 月 3 日)
- 5) 桑田一夫：“先制医療”で防げ! アルツハイマー病に挑む：NHK 総合「ナビゲーション」(2014 年 8 月 1 日)
- 6) 加藤善一郎他：「リウマチやアトピー治療に光り 原因タンパク質 構造解明」：中日新聞(2014 年 12 月 16 日)
- 7) 加藤善一郎他：「リウマチ、アレルギーなどの原因物質 岐阜大 立体構造解明」：岐阜新聞(2014 年 12 月 16 日)
- 8) 加藤善一郎他：「リウマチなどの原因物質を解明」：NHK 名古屋放送局(2014 年 12 月 19 日)

12. 自己評価

評価

全国の大学にはない医薬品医療機器開発体制を整えることが出来た、と考えている。分子、細胞、臓器を使用した医療技術開発を医学教育の中で(例えば、選択テュトリアルの中で)も体験し、実際に遂

行することが可能となった。事実、医学部学生による JBC 論文も出版されたところである。今後、医学教育においても、新規医薬品医療機器開発（レギュラトリーサイエンス）への対応が必要となるだろう。その意味で、ここ数年で、医学の発展に大きく貢献できた、と考えている。

現状の問題点及びその対応策

基礎研究を希望する学生が極端に減少してきており、このままいくと、基礎研究を支える人材がいなくなるおそれがある。特に、医薬品医療機器開発は、法律に基づく研究であり、論文よりも特許取得が優先される。これらを乗り越え、光り輝く未来に向かって新しい医療を創造することが重要である。これに対する対応策として、医薬品医療機器開発をサイエンスとして確立し、臨床と基礎を橋渡しするための全学的体制の構築を進めている。

今後の展望

既存の医学・医療技術を学ぶだけでは、必ずしも救うことの出来ない生命がたくさんある。未来の医療を変えるための戦略的研究開発体制がまさに出来上がりつつある。新しい医薬品、医療機器、手術手技を開発し、国民の期待に答えられる医療の実現に貢献する計画である。

2 教員組織

1. 専任教員と非常勤講師等の配置状況

(1) 専任教員の配置状況等

平成 17 年度以降、本学では従来の定数制度からポイント制度（総ポイントの範囲内なら、職種（教授＝100P、准教授＝78P、講師＝73P、助教＝60P）、人数は学部の判断に委ねられている。）が導入され、また、本研究科では、18 年度途中から外部資金により雇用する教員（当初は助教のみであったが、19 年度途中から講師・准教授まで拡大した。）制度が導入された。

各分野（部門）の配置状況は、次のとおりである。

分野（部門）等別専任教員・非常勤講師の配置状況

（各年度とも 4 月 1 日現在）

講座	区分／年度		平成 21 年度		平成 22 年度		平成 23 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度	
	分野（部門）等	旧講座等	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤
分子・構造学	細胞情報学	生化学	3	2	3	2	3	2	2	2	2	2	3	2
	分子生理学	生理学第 2	3	1	3	1	3	2	3	1	3	1	3	1
	薬理病態学	薬理学	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1
	寄生虫学・感染学	寄生虫学	3	0	3	1	3	1	2	1	3	1	3	0
	遺伝発生学	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	内分泌代謝病態学	内科学第 3	3	5	2	7	3	7	3	7	3	6	3	5
	小児病態学	小児科学	3	2	2	2	2	1	2	2	1	2	2	2
	病態情報解析医学	臨床検査医学	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4	4
病態制御学	解剖学	解剖学第 1	2	0	2	0	2	0	3	1	3	1	3	1
	分子病態学	分子病態学	3	0	2	0	2	1	2	2	2	1	2	1
	循環病態学	内科学第 2	2	8	2	7	2	8	2	8	1	10	3	10
	呼吸病態学	—	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0
	高度先進外科学	外科学第 1	2	3	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3
	整形外科学	整形外科学	3	4	3	4	3	4	3	4	2	4	3	2
	皮膚病態学	皮膚科学	1	3	2	3	2	2	3	2	3	3	3	3
	泌尿器科学	泌尿器科学	3	8	3	8	3	9	3	6	3	7	2	7
	麻酔・疼痛制御学	麻酔・蘇生学	3	7	2	7	3	7	3	7	3	7	3	7
	蘇生・集中治療学	—	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-
口腔病態学	口腔外科学	3	2	3	2	3	2	3	1	3	1	3	1	
神経統御学	高次神経形態学	解剖学第 2	3	1	3	1	2	0	3	0	3	0	3	0
	生理学	生理学第 1	2	1	2	1	2	1	2	1	3	1	2	1
	スポーツ医科学	スポーツ医・科学	3	1	3	1	3	2	3	1	3	1	3	1
	神経内科・老年学	高齢医学	4	1	4	1	4	1	3	1	3	1	3	1
	精神病理学	神経精神医学	3	0	3	0	3	0	3	3	3	2	3	3
	脳神経外科学	脳神経外科学	3	3	4	3	4	2	4	2	4	2	3	2
	耳鼻咽喉科学	耳鼻咽喉科学	3	5	3	6	3	8	3	5	3	6	3	5
	眼科学	眼科学	3	6	3	5	3	4	3	4	3	4	3	4
腫瘍制御学	腫瘍病理学	病理学第 1	3	0	3	0	4	1	4	1	3	1	3	1
	形態機能病理学	病理学第 2	3	1	2	0	3	0	2	0	3	0	3	0
	腫瘍外科学	外科学第 2	3	0	3	0	4	0	4	0	4	0	3	0
	消化器病態学	内科学第 1	3	3	2	3	2	3	2	3	3	4	1	4
	血液病態学	—	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	産科婦人科学	産科婦人科学	1	7	3	7	3	7	3	8	2	8	3	8
	放射線医学	放射線医学	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	3	3
	疫学・予防医学	公衆衛生学	3	1	3	1	3	1	3	1	2	1	3	1
臨床腫瘍学	—	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	

講座	区分/年度		平成 21 年度		平成 22 年度		平成 23 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度	
	分野 (部門) 等	旧講座等	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤
医療管理 学	医療情報学	医療情報部	2	0	1	0	2	0	2	0	2	0	2	0
	総合病態内科学	総合診療部	3	1	3	1	3	2	3	3	3	3	2	4
	臨床薬剤学	薬剤部	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0
	医療経済学	—	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	救急・災害医学	—	3	4	3	6	3	7	3	6	3	6	3	5
	法医学	法医学	2	0	2	0	2	0	2	0	2	0	2	0
	産業衛生学	衛生学 (2)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
再生 分子 統御学	組織・器官形成	衛生学 (1)	4	2	4	1	4	0	4	0	4	0	4	0
	神経生物	反射研究施設	4	0	4	1	4	1	4	1	4	1	4	1
	病原体制御学	微生物学	3	0	3	0	3	0	2	0	2	0	2	0
再生 工 学	生命機能分子設計	(工) 生体物質工学	2	0	2	0	3	0	4	0	4	0	4	0
	知能イメージ情報	(工) 画像情報	4	0	4	0	4	0	3	1	3	1	3	1
再生 応用学	循環呼吸制御学	—	-	-	-	1	2	1	0	1	0	0	0	
	医学系倫理・社会医学	—	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1
地域医療医学センター・地域医学部門			6	5	7	4	4	5	3	6	2	3	2	3
小 計			126	96	123	99	127	105	124	104	122	104	120	100

医学教育開発研究センター	5	1	5	2	4	2	4	1	6	2	5	2
連合創薬医療情報研究科	1	9	1	9	2	13	2	8	2	15	2	7

看護学科 基礎看護学講座	9	3	7	5	7	11	8	6	8	7	9	3
母子看護学講座	9	5	8	6	8	10	9	4	9	5	9	7
成人・老年看護学講座	14	2	14	3	14	3	13	2	14	3	14	4
地域・精神看護学講座	9	2	9	6	9	7	7	11	8	6	8	11
小 計	41	12	38	20	38	31	37	23	39	21	40	25

合 計	173	118	167	130	171	151	167	136	169	142	167	134
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

※平成 19 年度以降の専任教員には、外部資金雇用教員を含む。

平成 26 年度 (12 月 1 日現在) の大学院医学系研究科・医学部・医学教育開発研究センター及び附属病院の総ポイント、使用ポイント及び充足率は次のとおりである。

区 分	総ポイント	使用ポイント	充足率
医学系研究科	9,854	9,512	96.5%
看護学科	3,187	3,099	97.2%
医学教育開発研究センター	498	498	100.0%
附属病院	5,842	5,294	90.6%

(2) 非常勤講師の配置状況

本学部医学科及び看護学科に毎年二百数十名の非常勤講師を配置しており、分野 (部門)、各コースによっては配置数にばらつきがある。

なお、平成 26 年度の総数は、204 名 945 時間である。

医学部医学科テュートリアル等のコース別非常勤講師の配置状況

コース名	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
プレテュートリアル	2	1	-	-	-
テュートリアル					
人体構造学	1	4	3	2	2

コース名	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
遺伝・発生・発達学	0	0	-	-	-
神経構造機能学	-	-	5	3	3
代謝・機能学	7	6	8	-	-
生体機能学	-	-	-	4	4
生命分子	-	-	-	4	3
病原体学	4	3	1	1	0
薬理・中毒学	5	5	5	4	4
病理学	0	2	1	2	2
神経・精神・行動学	8	7	0	1	1
循環器・呼吸器・尿路学	12	-	-	-	-
循環・呼吸・腎尿路学	-	13	14	11	11
消化器検査・血液腫瘍学	-	1	1	1	1
血液学	0	-	-	-	-
消化器・検査医学	2	-	-	-	-
内分泌代謝学	4	4	4	4	4
成育学	3	7	7	7	7
産科婦人科学	5	0	-	-	-
運動器学	5	5	4	4	6
皮膚科学	0	0	2	3	3
感覚器医学	5	4	4	4	4
免疫・応答学	4	4	4	4	4
麻酔疼痛制御・救急災害	5	3	7	7	4
画像診断・放射線治療	-	-	2	2	2
放射線医学	1	0	-	-	-
地域・産業保健学	4	4	4	4	4
臨床遺伝・臨床倫理	-	-	1	1	1
臨床実習入門	1	1	7	4	5
東洋医学	-	1	7	4	8
合 計	78	75	91	81	83

(3) 客員臨床系医学教授等

医療現場で活動されている学外の医師に、豊富な臨床経験を臨床系医学分野の教育（学内）に協力を依頼するため、平成 8 年度から「客員臨床系医学教授及び客員臨床系医学准教授」の制度を、また、平成 10 年度から 6 年次学生の学外臨床実習を開始したことに伴い、学外実習を対象とする客員臨床系医学教授等制度を設けた。

また、平成 19 年度に地域医療医学センターが設置され、地域医療に特化した臨床教育を行うため、同センターにも地域医療医学系客員臨床教授等制度を設けた。

(4) 臨床教授等

本研究科（医学教育開発研究センター及び附属病院含む。）では、臨床・研究・教育について、優秀な人材を確保するとともに、活性化を図るため、平成 17 年度途中から臨床教授及び臨床准教授の称号付与制度を設けた。

2. 教育補助者と研究補助者の配置状況

(1) ティーチング・アシスタントの実施及び活用状況

本研究科におけるティーチング・アシスタント制度は、平成 5 年 3 月開催の研究科委員会において、博士課程の優秀な学生に対し教育的配慮の下に教育補助業務を行わせることが承認され、実施されている。

また、平成 22 年度に「ティーチング・アシスタント (TA) の採用指針」を策定し、資格、業務の範囲、運用基準などの明確なルールに沿って運用している。

なお、看護学専攻 (修士) にあってはほとんどが社会人入学者であるため、本務の都合上、担当できない状況にあるが、再生医科学専攻 (博士前期) は約 2 割の学生が TA として学部教育の充実を担っている。

(単位：人)

区 分	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
医科学専攻 (博士)	16	18	16	13	6
再生医科学専攻 (博士前期)	10	6	2	1	2
再生医科学専攻 (博士後期)	8	7	5	2	1
看護学専攻 (修士)	1	-	2	2	-
計	35	31	25	18	9

(2) リサーチ・アシスタントの配置状況

リサーチ・アシスタント制度は平成 8 年に設けられ、研究プロジェクト等に優れた大学院生を研究補助者として参画させ、研究活動の効果的推進、研究体制の充実及び若手研究者の育成に成果を上げている。

また、平成 22 年度に「リサーチ・アシスタント (RA) の採用指針」を策定し、資格、業務の範囲、運用基準などの明確なルールに沿って運用している。

次表に示すとおり最近 5 年間の従事者数に大きな変化はない。

(単位：人)

区 分	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
医科学専攻 (博士)	9	9	10	16	5
再生医科学専攻 (博士後期)	5	5	3	4	2
計	14	14	13	20	7

3. 採用、昇任等の方法

(1) 採用、昇任の選考基準と選考方法

大学院医学系研究科教員の採用・昇任の基準については、岐阜大学職員採用規程の中に定められており、これを受けて、岐阜大学大学院医学系研究科教授選考規程、岐阜大学大学院医学系研究科教授選考規程に関する申合せ及び岐阜大学職員採用規程大学院医学系研究科内規等の規程が定められている。

教授の採用・昇任については、全国の関係機関に対し公募を行い、岐阜大学大学院医学系研究科教授選考規程に基づく教授選考委員会で、教授候補者について必要な諸事項を調査し、教授会議に報告することが定められている。

教授会議は、教授選考委員会の報告を参考として教授候補者を選考する。

准教授、講師、助教の採用・昇任については、岐阜大学職員採用規程大学院医学系研究科内規に基づき当該分野の主任教授の推薦した候補者について、履歴事項、業績等を参考とし、教授会議で選考する。

また、看護学科の教員については、岐阜大学医学部看護学科教育職員選考取扱規程、同規程実施細則、岐阜大学医学部看護学科教育職員選考基準及び同選考基準に関する申合せを定めて、公募により候補者を選考している。

(2) 非常勤講師の選考基準と選考方法

非常勤講師の選考基準と選考方法については、岐阜大学職員採用規程等を準用し、教務厚生委員会等で審議の上、教授会議で選考する。

4. 兼業・兼職の基準と状況

(1) 兼業・兼職の基準

職員が報酬を得て、本学以外の事業の団体の役員、顧問若しくは評議員の職を兼ね、その他いかなる事業に従事し、若しくは事務を行うにも、あらかじめ部局長の許可を得て従事することができる。

また、次に掲げる基準のすべてに該当する場合には、勤務時間内に職務として従事 (兼職) することが

できる。

- ① 国、国立大学法人又は地方公共団体におかれる審議会委員又は教育、学術、文化、スポーツの振興を図ることを目的とする特殊法人、公益法人等の各種委員等の業務で特に公益性が高いと認められるものであること。
- ② 無報酬であること。
- ③ 従事回数が年間数回程度であること。など

(2) 兼業・兼職の状況

過去5年間の兼業・兼職の状況は、次表のとおりである。

年 度	非常勤講師	非常勤医師	各種審議会委員等	治験関係	兼 職	合 計
平成 21 年度	156	473	131	5	50	815
平成 22 年度	150	369	138	3	21	681
平成 23 年度	183	407	130	12	31	763
平成 24 年度	160	411	111	12	28	722
平成 25 年度	169	465	180	10	29	853

3 施設・設備

1. 施設・設備の現状・整備状況

(1) 医学部・附属病院の移転整備の経緯

長年の懸案であり、悲願でもあった医学部・同附属病院の移転整備については、昭和62年5月に医学部教授会・附属病院科長会議において、統合移転を基本構想とする「岐阜大学医学部・同附属病院長期計画」が承認され、平成4年9月第35回将来計画委員会において、医学部・同附属病院整備検討専門委員会が取りまとめた「岐阜大学医学部・同附属病院の整備について」の最終報告書が承認され、第655回評議会において、上記最終報告書が承認された。

その後、平成8年8月に文部省の了解を得て、平成10年4月本学、岐阜県、岐阜市、岐阜市土地開発公社の4者による「岐阜大学医学部・同附属病院及び医療技術短期大学の移転に関する覚書」を取り交わし、医学部・同附属病院の移転整備計画が具体化した。

このように、移転整備は非常に長い歴史と多くの人々のたゆまない努力により実現した。

○ 医学部・同附属病院の移転整備の経緯

昭和 62 年 5 月	医学部教授会において「医学部・同附属病院の長期計画」を策定
平成 4 年 9 月	岐阜大学評議会において「医学部・同附属病院の整備について」の報告書を承認
平成 8 年 8 月	文部省から移転整備計画の承認
平成 12 年 5 月	附属病院棟 工事着工
平成 14 年 7 月	医学部臨床研究棟 工事着工
平成 14 年 8 月	医学部総合研究棟 工事着工
平成 15 年 12 月	附属病院棟 竣工
平成 16 年 1 月	医学部本館（臨床研究棟、総合研究棟） 竣工
平成 16 年 4 月	医学部・同附属病院移転開始
平成 16 年 5 月	医学部・同附属病院移転完了
平成 16 年 6 月	附属病院開院
平成 16 年 12 月	医学部教育・福利棟 工事着工
平成 16 年 12 月	医学部記念会館 工事着工
平成 18 年 3 月	医学部教育・福利棟 竣工
平成 18 年 3 月	医学部記念会館 竣工
平成 18 年 8 月	医学図書館 工事着工

平成 19 年 2 月	医学図書館 竣工
平成 24 年 4 月	北診療棟 工事着工
平成 24 年 6 月	ドクターヘリ格納庫 工事着工
平成 24 年 12 月	ドクターヘリ格納庫 竣工, 運用開始
平成 25 年 3 月	北診療棟 竣工

(2) 医学研究科・医学部新施設の特徴

平成 16 年 4 月に大学院医学研究科を部局化した医学研究科・医学部は、同年 6 月附属病院と共に柳戸地区に移転・新築した。

医学部本館は、高度化・多様化する教育・研究に対応できるよう、平面計画は 4 つのブロックで構成した大部屋方式とし、設備計画においても将来の拡充・変化及び発展にも柔軟に対応できる構造であり、各階にリフレッシュスペースを配置し、ゆとりと潤いのある空間を積極的に取り入れ、研究室と廊下の間仕切壁をすりガラスとすることで開放的な中廊下とした。また、医学部各施設へは移動しやすいように、デッキ状の連絡通路（インテリジェントモール）を設け、医学部本館内における臨床研究部門はできる限り病棟に近接させ、病棟との渡り廊下を介してより連続性を確保した。1 年遅れで移転することとなった解剖実習施設、動物実験施設、RI 施設は、医学部本館の南隣りに平成 17 年 3 月に移転・新築した医学部生命科学棟に配置され、デッキ状の連絡通路で繋がっている。

教育・福利棟は、閑静な屋外交流空間であるホスピタルパークに面して設け、人とのコミュニケーションを通じ医療人としての人間性を養えるよう福利施設も取り込んだ複合施設として平成 18 年 3 月に完成した。1 階には医学部食堂と岐阜大学生協医学部店があり、多くの学生や教職員に利用されている。

同じく平成 18 年 3 月には、医学部記念会館が医学部同窓会からの寄付金により医学部本館に隣接して建設された。1 階に事務局、2 階には 400 人収容のホールを備えており、ホールは学会、講演及び授業などに利用されている。

一連の移転統合の最後として、平成 19 年 2 月に医学図書館が完成した。3 階建ての建物は連絡通路により 2 階部分で医学部本館とつながっている。収容可能冊数約 178,000 冊、座席数 158 席、検索コーナー、AV コーナーのほか、グループ学習室 2 室と研究個室を備えている。e-learning や電子コンテンツの利用への対応、収容効率の増強、利用者増への対応及び医学系関連施設からの利用の便を重視された作りとなっている。

平成 21 年 10 月には、岐阜薬科大学が医学部本館に隣接して新築された。医学部本館からはデッキ状の連絡通路を歩いて行き来しやすくなっている。

平成 25 年 2 月には、山間地が多く医療過疎地が課題とされる岐阜県内において、致命率の向上に寄与するドクターヘリの運用が開始された。また、同年 6 月には北診療棟が開設され、従前の光学医療診療部及び化学療法室を拡充・移設した。当該診療棟には人間性豊かな医療人を育成するための医師育成推進センターも含まれる。

これらの整備により、患者や地域住民に最先端の医療とより快適なサービスを提供すると共に、優れた医療人を育成するための体制を強化している。

(3) 附属病院の特徴等

附属病院は、平成 16 年 6 月に移転・新築し開院した。病院施設は、12 万 5 千㎡の医学部・同附属病院の敷地内に、バリアフリーに配慮した免震構造地上 9 階建てで、病棟・中央診療部・外来が棟として一体化した複合施設であり、約 500 台が収容できる患者用駐車場が設置されている。また、1 階アトリウム（床暖房）や多目的ホール（医療ガス等設備）は、大規模災害時の治療スペースとして活用できる構造で、屋上に設置したヘリポートは、ヘリコプターによる救急患者の搬送に活用している。病院開院と同時に医療情報システム（電子カルテを含む。）を稼働させ、診療科・部門の枠を越えた 1 患者 1 カルテにより診療情報の共有を図るとともに、完全電子カルテ化によるペーパーレス・フィルムレスを実現した。また、全国最大規模の高次救命治療センターを設置し、24 時間体制で高度な救命救急医療を提供している。診療体制としては、臓器別診療体制の確立、地域医療との連携強化、予約センターの設置などを行った。その後、セカンド・オピニオン外来の導入、外来化学療法室の設置など、診療機能の強化を図った。

平成 24 年 12 月に、それまで各務原飛行場に格納していたドクターヘリを、本院東駐車場に地上ヘリポート及び格納庫を設置し、本院にドクターヘリを格納できる体制を整備し、ドクターヘリ事業の基地病院としての機能向上を図るとともに、平成 25 年 3 月に、内視鏡治療や化学療法に対する最先端の医療の提供及び患者サービスの向上を図ること、研修医、専門医、生涯教育までの一貫したサポートによる充実した

教育，研修の推進を目的として，新たに北診療棟が完成した。

当病院は，病院の理念・基本方針，患者の権利宣言，個人情報保護方針及び職業倫理綱領を制定し，患者中心のより良い医療の提供に力を注ぐとともに，高度先進医療の研究開発や特徴ある先進医療の導入について予算措置をするなど積極的に取り組んでいる。

(4) 医学部看護学科新施設の特徴

既に柳戸地区に移転していた医学部看護学科及び医学系研究科看護学専攻の施設は，建設中の医学部教育・福利棟に面したホスピタルパークの東に近接し，平成 15 年 3 月には，既設校舎の東側に南北に配置し，連絡通路で繋いだ総合研究棟を新築した。

総合研究棟は，セミナー室，実験・実習室，教官研究室等を配置した一体型建物で，各フロア一既設の建物との動線を図っている。

2 階から 6 階にリフレッシュコーナーを設置し，また，5 階は全学で共用できるプロジェクト的な教育研究活動に供するスペースを有する共同教育研究室等を配置している。

4 国際交流

1. 留学生の受け入れ体制と状況

岐阜大学では国際交流を重点課題の一つとして取り上げており，医学系研究科，医学部においても外国人留学生を積極的に受け入れている。過去 5 年間の外国人留学生の受け入れ状況は次表のとおりであり，受入学生数に大きな変動はないが，平成 18 年度から，本学の学術交流協定大学に在籍する大学院生を特別研究学生として受け入れた。

過去 5 年間の外国人留学生数

区分	平成 22 年度				平成 23 年度				平成 24 年度				平成 25 年度				平成 26 年度			
	国費	県費	私費	計	国費	県費	私費	計	国費	県費	私費	計	国費	県費	私費	計	国費	県費	私費	計
学部生			5	5			3	3			4	4			4	4			3	3
大学院生	2		14	16	1		14	15	1		9	10			9	9	2		9	11
研究生			2	2			2	2			3	3	1			1			1	1
特別聴講学生																				
特別研究学生			1	1			1	1							1	1			1	1

国別内訳

大韓民国			3	3			2	2			3	3			3	3			1	1
台湾																				
中華人民共和国			17	17			16	16			11	11			10	10			10	10
タイ王国			1	1			1	1									1		1	2
ミャンマー																				
シリア																				
バングラデシュ																			1	1
ベトナム	2		1	3	1		1	2	1		1	2								
アメリカ合衆国																				
ブラジル											1	1								
フランス																			1	1
マレーシア													1		1	1				1
スウェーデン															1	1				
計	2		22	24	1		20	21	1		16	17	1		14	15	2		14	16

2. 留学生の教育・研究指導の方法と体制

(1) 留学生センター

岐阜大学には、日本語教育と留学生指導のために留学生センターが設置されており、大学生活に必要な日本語能力を伸ばすことを目的とした日本語補講や、日本語研修コース、日本語・日本文化研修コースなどが実施されている。

(2) チューター

留学生の個別指導に関してはチューター制が採られており、チューターによる留学生特別指導により、日本語、専門教育補充の両面から効果的な指導が行われている。医学部、医学系研究科における留学生の専門教育に関しては、基本的には日本人学生の場合と異なることなく、学部においては授業を通じて各教員が教育・指導を行い、医学系研究科においては各研究科の指導教員が研究を指導している。

3. 在学生の海外留学・研修の状況

医学部学生の海外留学は、医学部の特殊性から基本的に休学により留学することとなるが、英語能力が一定の基準をクリアしている場合には6年時のクリニカルクラークシップ（12週間）を外国で受けることができ、毎年数名が、アジア、オセアニア、北米の病院で実習を受けている。大学院学生については、2年以内に限り、外国における研究指導を在学期間に算入することが認められている。

4. 教員の海外渡航の状況

教員の海外研修も盛んである。

過去5年間の海外渡航状況

区 分	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度
外国出張	155	160	162	172	167
海外研修	36	32	23	26	16
計	191	192	185	198	183

5. 外国人研究者の招致の状況

国際社会の中で経済大国であり、しかも高度先進国として評価の高い我が国での研究や研究協力を希望する外国人研究者は非常に多く、本研究科においても次のとおり関連領域の研究者が専門分野での希望する研究技術修得あるいは情報交換等を目的として来学している。

外国人研究者招致状況（平成 23 年度～平成 25 年度）

氏 名	国 籍（所属・職名）	目 的	期 間
エリザベス ミラー	アメリカ合衆国 カリフォルニア大学デービス校・准教授	講演・討論	H23.5.14～5.14
デシュパンデ ゴータム ア Nil	アメリカ合衆国 聖路加国際病院・客員研究員	講演・討論	H23.6.3～6.3
スタウド タッド	アメリカ合衆国 東京女子医科大学・英語教師	英語指導	H23.6.24～6.24
Martin F.Lavin	オーストラリア クインズランド医学研究所・教授	研究・共同研究	H23.7.3～7.5
QIN Tuanfa	中国 広西大学・教授	研究・共同研究	H23.8.6～8.23
GUAN Qianing	中国 広西大学・教授	研究・共同研究	H23.8.6～8.23

氏名	国籍(所属・職名)	目的	期間
デシュパンデ ゴータム ア Nil	アメリカ合衆国 聖路加国際病院・客員研究員	講演・討論	H23.8.25～8.25
Alexander Köhn	ドイツ フランフォーファ メーデイス 研究 所・教授	講演・討論	H23.9.7～9.7
Raj Rangayyan	カナダ カルガリー大学・教授	講演・討論	H23.10.20～10.21
デシュパンデ ゴータム ア Nil	アメリカ合衆国 聖路加国際病院・客員研究員	講演・討論	H23.10.20～10.20
William S. Blaner	アメリカ コロンビア大学・教授	講演・討論	H23.11.14～11.14
スタウド タッド	アメリカ合衆国 東京女子医科大学・英語教師	英語指導	H23.11.25～11.25
俞力	中国 江蘇大学附属病院・医師	情報収集・視察等	H23.11.28～12.5
フィリップ エバンス	イギリス グラスゴー大学・教授	講演・討論	H23.12.16～12.16
ケネス ミュレン	イギリス グラスゴー大学・講師	講演・討論	H24.1.28～1.28
俞力	中国 江蘇大学附属病院・医師	情報収集・視察等	H24.3.30～4.5
Maryellen Lissak Giger	アメリカ合衆国 シカゴ大学放射線学科・教授	講演・討論	H24.4.15～4.16
アネット ゲッシング	デンマーク コペンハーゲン大学・医師	情報収集・視察等	H24.4.16～4.17
トーベン ハンセン	デンマーク コペンハーゲン大学・医師	情報収集・視察等	H24.4.16～4.17
デシュパンデ ゴータム ア Nil	アメリカ合衆国 聖路加国際病院・客員研究員	講演・討論	H24.7.20～7.20
フィリップ エバンス	イギリス グラスゴー大学・教授	講演・討論	H24.7.24～7.30
陳 延偉	中国 立命館大学情報理工学部メディア情報 学科・教授	講演・討論	H24.8.8～8.8
ダニエル サルチェード	カナダ 日本大学・研究補助員	講演・討論	H24.8.18～8.19
ジェームス トーマス	カナダ 日本大学・講師	講演・討論	H24.8.18～8.19
エリック ハジメ ジェゴ	カナダ 日本大学・助手	講演・討論	H24.8.18～8.19
アラン レフォー	イギリス 自治医科大学・教授	講演・討論	H24.9.14～9.14
Baocheng Chu	米国 ワシントン大学医学部放射線科学分 野・医師	研究・共同研究	H24.9.25～9.26
ダニエル サルチェード	カナダ 日本大学・研究補助員	講演・討論	H24.9.28～9.28

氏 名	国 籍 (所属・職名)	目 的	期 間
ミッシェル フェルドマン	米国 カリフォルニア大学サンフランシスコ校・教授・副学長	講演・討論	H24.10.1～10.1
デシュパンデ ゴータム アニル	アメリカ合衆国 聖路加国際病院・客員研究員	講演・討論	H24.10.11～10.11
ダニエル サルチェード	カナダ 日本大学・研究補助員	講演・討論	H24.10.19～10.20
俞力	中国 江蘇大学附属病院・医師	情報収集・視察等	H24.11.7～11.10
Lluis Montoliu	スペイン CNB-CSIC・教授	講演・討論	H24.11.28～11.29
Lionel Larue	フランス キュリー研究所・教授	講演・討論	H24.11.28～11.30
グラアム・ベル	アメリカ シカゴ大学・医師	情報収集・視察等	H24.12.13～12.13
ダニエル サルチェード	カナダ 日本大学・研究補助員	講演・討論	H24.12.14～12.14
ジェームス トーマス	カナダ 日本大学・講師	講演・討論	H24.12.14～12.14
フィリップ エバンス	イギリス グラスゴー大学・教授	講演・討論	H24.12.18～12.18
Ji Woong Lee	韓国 釜山国際大学・助教授	研修	H25.1.7～1.11
アン ダックサン	韓国 高麗大学・教授	講演・討論	H25.1.25～1.27
劉 克明	台湾 高雄医学大学・教授	講演・討論	H25.1.25～1.27
ジェームス トーマス	カナダ 日本大学・講師	講演・討論	H25.5.18～5.18
ダニエル サルチェード	カナダ 日本大学・研究補助員	講演・討論	H25.5.18～5.18
YI-HUNG CHEN	台湾 国立台湾大学・講師	研究・共同研究	H25.6.28～6.29
ジェームス トーマス	カナダ 日本大学・講師	講演・討論	H25.6.29～6.29
ダニエル サルチェード	カナダ 日本大学・研究補助員	講演・討論	H25.6.29～6.29
LIH-CHU CHIOU	台湾 国立台湾大学・教授	研究・共同研究	H25.7.2～7.3
フィリップ エバンス	イギリス グラスゴー大学・教授	講演・討論	H25.7.27～7.28
Yefeng Zheng	アメリカ合衆国 Senior Staff Scientist Siemens Corporate Research・研究員	講演・討論	H25.9.27～9.27
ジェームス トーマス	カナダ 日本大学・講師	講演・討論	H25.9.28～9.28
ダニエル サルチェード	カナダ 日本大学・研究補助員	講演・討論	H25.9.28～9.28

氏名	国籍(所属・職名)	目的	期間
イボンヌ シュタイナート	カナダ マギル大学・教授	講演・討論	H25.10.29～11.4
劉 克明	台湾 高雄医学大学・教授	講演・討論	H25.10.31～11.4
スーザン ブリッジ	香港 香港大学・准教授	講演・討論	H25.10.31～11.6
チダラト・ブンマース	タイ コンケン大学医学部・准教授	研究・共同研究	H25.11.9～11.12
キャサリン ブーシコット	イギリス ロンドン大学・教授	講演・討論	H25.11.11～11.11
ジェームス トーマス	カナダ 日本大学・講師	講演・討論	H26.1.11～1.11
アン ダックサン	韓国 高麗大学・教授	講演・討論	H26.1.24～1.26
デイジー ロートツォル	ドイツ ライプチヒ大学・教授	講演・討論	H26.2.20～2.20

6. 海外の大学との学術交流協定の締結状況

医学系研究科・医学部では昭和48年に発足した学外・海外協力委員会（平成6年から国際交流委員会に改称）が国際交流の役割を担ってきたが、国立大学法人化を境にして、大学の国際交流活動は大学本部に一元化され、医学部における推進活動は縮小されつつあった。しかしながら、平成24年には、学部間協定を結んでいる大学との交流について医学部全体として支援する体制が必要であるとの方針で、医学部に再度、国際交流委員会を立ち上げることとなった。現在、大学間での学術交流協定は16カ国45大学（平成26年12月現在）と締結している。医学系研究科・医学部としての部局間交流協定は中華人民共和国の浙江大學医学部、タイ王国のコンケン大学医学部及び米国コロラド州立大学と締結（その後、コロラド州立大学とは平成22年8月13日大学間協定を締結）していたが、新たに平成21年4月17日に韓国の忠北大学医学部と、平成23年4月20日に英国のグラスゴー大学と締結し、留学生の受入れ、本学学生の派遣、研究者の交流、共同研究などが行われている。今後もより一層部局間交流を推進していく予定である。

5 社会との連携

1. 公開講座の開設の方針と状況

公開講座は地域社会との連携・協力、地域住民との相互理解などを得る上でひとつの有益な方法であり、本学部及び附属病院に蓄積された医学の知識を広く地域社会に開放することにより、地域住民の医学知識の向上に資することを目的としている。

本学部公開講座は、一般社会人を対象に昭和59年度から毎年開講しており、平成14年度からは地域住民の更なる理解を得るため公開講座を医学市民講座と称して無料開講している。募集人員に対する受講者数は、無料開講を始めて以来ほぼ100%（平成19年度は大幅に募集人員を増やしたため若干下回っている）であり、本学部の公開講座が地域住民に浸透し理解を得られてきたことを示している。また、年齢構成は中・高年層に集中しているため、参加者アンケートの集計結果などを参考に、テーマや開講日等に工夫をして、より一層、幅広く、地域社会に受け入れられる公開講座を目指している。

公開講座の実施状況

	テ ー マ	募集 人員	申 込 者 数			年 齢 構 成						
			男	女	計	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代
平成 14 年度	心身ともに健やかな子供に～ 親の願い～	70	16	60	76	3	11	11	24	17	8	2
			21.10%	78.90%		3.90%	14.50%	14.50%	31.60%	22.40%	10.50%	2.60%
平成 15 年度	心の健康と病気	70	28	56	84	1	5	6	14	30	20	8
			33.3%	66.7%		1.2%	6.0%	7.1%	16.7%	35.7%	23.8%	9.5%
平成 16 年度	身につけたい救急応急手当	70	22	47	69	1	9	3	7	16	22	11
			31.9%	68.1%		1.4%	13.0%	4.4%	10.2%	23.2%	31.9%	15.9%
平成 17 年度	糖尿病	70	27	44	71	1	4	2	7	14	31	12
			38.0%	62.0%		1.4%	5.6%	2.8%	9.9%	19.7%	43.7%	16.9%
平成 18 年度	がん	90	41	49	90	-	7	4	14	20	27	15
			45.5%	54.5%			7.8%	4.4%	15.6%	22.2%	30%	16.7%
平成 19 年度	メタボリックシンドローム	150	72	69	141	-	7	6	22	23	49	32
			51.1%	48.9%			5.0%	4.3%	15.6%	16.3%	34.8%	22.7%
平成 20 年度	認知症	150	78	88	166	-	1	8	24	28	56	45
			47.0%	53.0%			0.6%	4.8%	14.5%	16.9%	33.7%	27.1%
平成 21 年度	心臓病（狭心症・心筋梗塞）を 知る	150	90	82	172	1	-	4	14	25	61	59
			52.3%	47.7%		0.6%		2.3%	8.1%	14.5%	35.5%	34.3%
平成 22 年度	精神疾患・うつ病	150	79	99	178	1	3	7	29	28	54	47
			44.4%	55.6%		0.6%	1.7%	3.9%	16.3%	15.7%	30.3%	26.4%
平成 23 年度	成人に多い目の病気	150	73	83	156	-	3	6	9	26	54	51
			46.8%	53.2%			1.9%	3.8%	5.8%	16.7%	34.6%	32.7%
平成 24 年度	男女の排尿トラブル	150	81	73	154	-	1	1	10	22	52	65
			52.6%	47.4%			0.6%	0.6%	6.5%	14.3%	33.8%	42.2%
平成 25 年度	腰痛症・骨粗しょう症	150	77	82	159	-	2	5	12	21	41	75
			48.4%	51.6%			1.3%	3.1%	7.5%	13.2%	25.8%	47.2%
平成 26 年度	脳卒中（脳梗塞・脳出血）	150	79	90	169	-	-	3	11	22	40	85
			46.7%	53.3%				1.8%	6.5%	13.0%	23.7%	50.3%

※注 年齢構成は未回答者及び四捨五入してあるため合計しても 100%にならない場合があります。

2. 地域社会での活動状況

他大学等の非常勤講師及び病院、診療所の非常勤医師として活動している。

また、岐阜県や他県の看護協会の教育に関する企画や病院の看護職などへの現任者教育に講師として活動及び病院の看護職に対する研究指導を行っている。

3. 生涯学習への対応状況

医療を取り巻く背景が急速に進歩している中で、一般人の健康に対する関心の高まりと共に、医学・看護は社会人教育の重要なテーマの一つとなっており、これに対して、地域や各種団体等における生涯学習への協力について積極的に対応している。

《平成 26 年度における講師としての対応状況》

(医学)

○研究会（犬山エリア CBT 研究会，大阪・紀和神経免疫研究会，関西痛みの診療研究会，関西股関節研究会，北関東上部消化管癌化学療法研究会，岐阜・西濃パーキンソン病研究会，岐阜 IL-6 阻害薬研究会，岐阜エPILEPSY 研究会，岐阜疥癬治療研究会，岐阜緩和医療研究会，岐阜がんセンターペイン研究会，岐阜血液・がん症例検討会，岐阜血液標本検討会，岐阜県小児在宅医療研究会，岐阜県保険医協会医科研究会，岐阜骨疾患・骨代謝研究会，岐阜産科婦人科研究会，岐阜手術手技研究会，岐阜循環器核医学研究会，岐阜循環器疾患研究会，岐阜小児血液免疫アレルギー難病疾患研究会，岐阜神経薬理研究会，岐阜心不全

研究会, 岐阜哮喘科学療法研究会, 岐阜スポーツ整形外科研究会, 岐阜総合内科研究会, 岐阜糖尿病療養指導研究会, 岐阜脳腫瘍研究会, 岐阜脳神経研究会, 岐阜マルチプルリスクファクター研究会, 岐阜リウマチ研究会, 岐阜緑内障の会, 救急・集中治療感染症研究会, 下呂病診連携研究会, 高純度 EPA 研究会, 脂質異常症 Unment Needs 研究会, 小児領域におけるカルニチン欠乏症を考える会, 西濃小児アレルギー研究会, 治療抵抗性統合失調症治療研究会, 東海外来小児科学研究会, 東海循環器核医学研究会, 東海パーキンソン病研究会, 東海皮膚アレルギー研究会, 糖尿病チーム医療を考える会, 西岐阜医療研究会, 西埼玉抗血小板療法研究会, 日本小児股関節研究会, 日本脊椎前方側方進入手術研究会, 兵庫臨床管理栄養士研究会, 広島県めまい研究会, 北勢地区 EPA 研究会, 三重脊椎若手の会, 宮崎県核医学研究会, 屋久島地域医療連携研究会, 山梨県周術期管理研究会, 臨床消化器病研究会)

○講演会 (NPO 法人岐阜県難病団体協議会, 一般社団法人 J ミルク, 香川大学, 金沢医科大学, 唐津赤十字病院, がん化学療法栄養支持療法勉強会, 岐阜県医師会, 岐阜県健康福祉部, 岐阜県市町村保険活動推進協議会, 岐阜県診療放射線技師会, 岐阜県内科医会, 岐阜県脳神経外科懇話会, 岐阜県立大垣北高等学校, 岐阜薬科大学, 郡上市医師会, 群馬産科婦人科学会, 高齢者糖尿病治療を考える会, 国民健康保険関ヶ原病院, 静岡県立大学, 昭和大学, 東海学校保健学会, 東海小児整形外科懇話会, 内藤記念くすり博物館, 名古屋市立大学, 西宮・芦屋産婦人科医会, 日本大学, 日本医学放射線学会, 藤田保健衛生大学, 三重県産婦人科医会, 美濃市)

○学術講演会 (飯田医師会, 揖斐郡医師会, 大垣市民病院, 岐阜県小児科医会, 滋賀県産科婦人科医会, 静岡県病院薬剤師会中部支部, 日本がん看護学会学術集会, 野田市医師会, 東三河小児科医会, 焼津市医師会)

○研修会 (NPO 法人子どもの発達支援を考える会 一歩, 愛知県衣浦東部保健所, 一般社団法人岐阜県知的障害者支援協会, 一般社団法人岐阜県臨床検査技師会, 医療法人徳洲会大垣徳洲会病院, カルチャーアカデミー岐阜新聞・岐阜放送, 岐阜運動器疾患の疼痛を考える会, 岐阜肝臓病勉強会, 岐阜県医師育成・確保コンソーシアム, 岐阜県医師会, 岐阜県環境生活部, 岐阜県国民健康保険団体連合会, 岐阜県耳鼻咽喉科医会, 岐阜県総合医療センター, 岐阜県眼鏡商業協同組合, 岐阜県立希望が丘学園, 岐阜県立下呂病院, 岐阜産科婦人科学会, 岐阜市民病院, 岐阜障害者職業センター, 公益財団法人静岡県腎臓バンク, 公益財団法人日本医業経営コンサルタント協会, 公益信託栗田静枝診療録管理普及基金, 国立がん研究センター中央病院, 滋賀医科大学, 社会福祉法人同朋会障害者支援施設伊自良苑, 社会福祉法人創思苑, 中山道てんかん治療を考える会, 新潟県産婦人科医会, 幡多地区緑内障眼底読影勉強会, 藤田保健衛生大学, 碧南市教育研修会, もとす薬剤師会, 山梨県救急救命士会)

○講習会 (一般社団法人日本感染症学会, 恵那市, 加茂郡川辺町, 岐阜県警察本部, 岐阜県健康福祉部, 岐阜市消防本部, 岐阜ストーリーマリハビリテーション講習会, 岐阜地方検察庁, 土岐市, 名古屋地方検察庁, 羽島市, 瑞浪市, 美濃地区索道協会)

○公開講座・市民講座 (株) 岐阜新聞社, 岐阜県がん情報センター, 愛知県診療放射線技師会, 特定非営利活動法人がんサポートセンター)

○実地指導 (NPO 法人岐阜県難病団体協議会, 高山市)

(看護)

○講演会 (岐阜県教育委員会)

○研修会 (朝日大学, 一般社団法人日本精神科看護協会岐阜県支部, 加茂郡学校保健会, 公益財団法人愛知県労働協会, 社会福祉法人名古屋市社会福祉協議会, 岐阜県総合医療センター, 岐阜県市町村保健活動推進協議会)

○講習会 (一般社団法人海員掖済会名古屋掖済会病院, 羽島郡スポーツ少年団協議会)

○公開講座・市民講座 (独立行政法人環境再生保全機構予防事業部)

4. 奥穂高岳夏山診療所

奥穂高岳夏山診療所は, 岐阜県立医科大学時代の 1958 年 7 月に開設され, 2014 年夏の時点で 57 回目の診療班を派遣したことになる。初年度は資金面での苦労もあったが, 毎年, 7~8 班編成で 7 月 20 日頃から 8 月 20 日頃までの約一ヵ月間, 海拔 3,000 m の雲の上で多くの登山者の応急手当てを行ってきた。

この夏山診療所は, 今田重太郎氏 (平成 5 年 8 月 31 日逝去 94 歳) の冬季避難小屋であり, 夏季の期間, 無償で提供していただいている。夏山診療所の活動は, NHK の日本まんなか紀行「雲の上の診療所~北アルプス奥穂高岳~」に取り上げられるなど, その活動は学内外に知られるところとなり, 本学にとって一つの重要な社会貢献事業となっている。

このように山岳診療活動の功績が認められ、現在、資金面では、GM 会（岐阜大学医学部医学科後援会）、岐阜大学医学部看護学科後援会、財団法人誠仁会、岐阜県山岳遭難対策協議会、長野県山岳遭難対策協議会、長野県松本市、穂高岳山荘及び岐阜県高山市からの援助が得られるようになった。

診療所の運営については、1976年に「奥穂高岳夏山診療所運営に関する申合せ」を制定、さらに、2001年には「岐阜大学医学部奥穂高岳夏山診療所規程」を制定した。これまで、本学医学系研究科・医学部の教職員、附属病院の医師・看護師、及び医学部医学科・看護学科の学生等が多数参加・協力し、学部をあげた継続的な取組みとなっている。また、2014年からは、本学に隣接する岐阜薬科大学の学生からも参加者を募り、医と薬の連携・交流を深めている。

夏山診療所として利用している冬季避難小屋は、1995年に総桧造りで建て替えられ、広さも従来の1.5倍となり北アルプス随一の施設となった。

今後も、職員、学生の協力を得て地元、登山者等の希望に応じて継続していきたい。

なお、1998年11月に（財）ソロプチミスト日本財団より、「平成10年度青少年ボランティア賞」を受賞、2007年3月には長野県警松本警察署より感謝状を授与された。2008年11月30日には、開設50周年（2007年）を記念して、岐阜都ホテルにおいて関係者及び一般の方々を対象に、今田英雄氏（奥穂高岳山荘オーナー）による記念講演会を開催した。

6 岐阜薬科大学との連携

岐阜薬科大学との共同事業の一環として、両大学のシーズを活用して、臨床研究を具体的に推進することを目的として、既に行っている研究課題や計画段階にある研究課題に対し、臨床研究推進支援経費により、審査のうえ支援を行っている。なお、臨床研究推進支援経費による支援を受けた研究者は、臨床研究推進支援経費研究成果発表会において、研究成果の発表を行っている。

平成23年度

大学名	分野等名	氏名	研究課題名
岐阜薬科大学	薬物治療学	保住 功	非アルツハイマー型認知症の髄液診断マーカーの検索
岐阜薬科大学	薬効解析学	原 英彰	脂肪組織由来幹細胞およびその分泌因子を用いた脳虚血、網膜変性疾患に対する治療法の開発
岐阜大学	産科婦人科学	森重 健一郎	卵巣癌におけるHIF-1をターゲットとした治療の開発
岐阜大学	乳腺・分子腫瘍学	二村 学	乳癌患者における可溶性膜蛋白(GPNMB/Osteoactivin)の予後因子・治療標的の可能性評価に関する研究
岐阜大学	循環病態学	湊口 信也	ウサギ心筋梗塞モデルにおける抗血小板薬cilostazolの心筋梗塞サイズ縮小効果に対するadenosineの役割
岐阜大学	輸血部	兼村 信宏	消化管graft-versus-host disease (GVHD)に対する経口beclomethasone dipropionate (BDP)療法の安全性と有効性に関する研究

平成24年度

大学名	分野等名	氏名	研究課題名
岐阜大学	神経内科・老年内科	山田 恵	筋萎縮性側索硬化症患者 (ALS) のiPS細胞から分化させた運動ニューロンを活用した治療薬スクリーニング、新薬開発の研究
岐阜薬科大学	分子生物学	福光 秀文	脊髄損傷の根本治療を目指した歯髄細胞培養・移植法の最適化の試み

大学名	分野等名	氏名	研究課題名
岐阜大学	循環病態学	湊口 信也	左室機能障害患者における血漿アデノシン濃度動態の解明
岐阜薬科大学	薬科学	永澤 秀子	難治性卵巣癌治療を目指すがん微小環境モジュレーターの開発に関する研究
岐阜薬科大学	薬効解析学	嶋澤 雅光	糖尿病網膜症に対するアディポネクチンをターゲットとした新規治療法の開発に関する基礎並びに臨床研究
岐阜大学	脳神経外科	江頭 裕介	脂肪組織由来幹細胞およびその分泌因子を用いた脳虚血および網膜変性疾患に対する治療法の開発
岐阜大学	輸血部	兼村 信宏	消化管 graft-versus-host disease (GVHD) に対する経口 beclomethasone dipropionate (BDP) 療法の安全性と有効性に関する研究
岐阜大学	乳腺・分子腫瘍学	二村 学	乳癌患者における可溶性膜蛋白 (GPNMB / Osteoactivin) の予後因子・治療標的の可能性評価に関する研究

平成 25 年度

大学名	分野等名	氏名	研究課題名
岐阜薬科大学	分子生物学	福光 秀文	歯髄細胞の移植による脊髄損傷治療を目指した前臨床研究
岐阜薬科大学	薬効解析学	嶋澤 雅光	フルオロキノロン系抗菌薬の使用による網膜剥離リスクの上昇に関する研究
岐阜大学	脳神経外科	高木 俊範	出血性脳卒中の病態解明と治療薬の探索研究
岐阜大学	神経内科・老年内科	山田 恵	歯髄細胞を活用した筋萎縮性側索硬化症 (ALS) の再生医療 —犬 ALS からヒト ALS へ—
岐阜大学	乳腺・分子腫瘍学	二村 学	乳癌患者における GPNMB / Osteoactivin 蛋白のバイオマーカーとしての臨床的意義と転移への関与に関する研究
岐阜大学	産科婦人科学	森重 健一郎	卵巣癌における癌幹細胞微小環境の解析と新規分子標的薬の研究開発
岐阜大学	循環病態学	青山 琢磨	両心室収縮及び拡張機能障害心不全患者における血漿アデノシン濃度動態の解明に関する研究

7 管理運営, 財政

1. 教授会（教授会議）、各種委員会の構成と活動状況

(1) 教授会（教授会議）の構成員、任務、意志決定方法、意志伝達方法 教授会（教授会議）

学校教育法に定める教授会は、医学部の管理・運営に関する重要事項を審議・決定する審議機関として、また本学部の自主的自律的意思形成すなわち自治の基礎をなす審議機関として、岐阜大学運営組織規則第

18条第6項の規定に基づき、医学系研究科及び医学部教授会に代議員会等の位置づけとして医学研究科・看護学専攻教授会議並びに医学科・看護学科教授会議を置き、それぞれの専攻・学科の審議機関として機能してきた。

平成26年6月に「学校教育法及び国立大学法人法の一部を改正する法律」が公布され、平成27年度から施行されることを受け、教授会は、教育研究に関する事項について審議する機関であり、また、決定権者である学長に対して、①学生の入学、卒業及び課程の修了 ②学位の授与 ③その他学長が必要と定めるものに関して意見を述べる関係にあることを明確にした。

今後、教授会は、教務厚生委員会、カリキュラム委員会等の各種常置委員会における課題の発掘と改善策の提案を受け、学長に述べる意見及びその根拠を審議することになる。したがって、各種常置委員会は、医学部の学生を含むステークホルダーの意見や地域社会が抱える課題などの調査及び分析に積極的に取り組む必要がある。また、必要に応じ准教授・講師会（准講会）及び助教会に諮問し、その答申を受け、医学研究科・看護学専攻教授会議並びに医学科・看護学科教授会議で審議し、医学系研究科・医学部の意見として決定し、学長に提言することとなる。

組織

1. 教授会議

- (1) 研究科長・専攻長及び学科長が招集する。
- (2) 教授会規程第3条に規定する審議事項のうち、教授会が定める事項については、教授会議で審議した結果をもって教授会の議決とすることができるものとする。
- (3) 構成員：医学研究科教授会議（医学系研究科及び医学教育開発研究センターの専任の教授）看護学科教授会議（看護学科の専任の教授）
- (4) 成立要件：構成員の3分の2以上
- (5) 議決要件：出席者の過半数。ただし、重要な事項（主に教員人事）にあつては出席者の3分の2以上

人事

1. 医学系研究科長の任命について

医学系研究科長の任命にあつては、研究科長候補者を2名以上学長に推薦し、学長が適任者を任命する。医学系研究科長は、医学科長を兼任し、医学系研究科教授会の議長となる。

2. 教員選考

- (1) 医学研究科及び看護学科の自主性を尊重するため、教授以下全ての教員選考をそれぞれの教授会議の審議事項とする。
- (2) 選考規程等については、医学研究科及び看護学科で独自に制定する。

(2) 各種委員会の設置年度、任務（運営方針）、意志決定方法、意志伝達方法

教授会議の審議を円滑にし、医学系研究科及び看護学科の教育研究活動の質向上に向けた改善機能を十分に果たすため、岐阜大学大学院医学系研究科・医学部常置委員会規程により、それぞれ及び共通の各種委員会が組織されている。各種委員会の運営等は部局内細則等により明文化され、各委員会の審議結果等は、各教授会議に諮られた後、各分野・講座等に伝達されている。

各種委員会一覧（平成26年4月時点）

（医学系研究科・医学部）

名称	任期	人数	審議事項等	設置年度
企画委員会	—	12人	医学系研究科・医学部の円滑な管理運営に関すること。	平成16年度
自己評価委員会	2年	15人	中期目標及び中期計画に関すること。	平成16年度
情報委員会	2年	10人	情報ネットワークシステムの利用、広報活動及び国際交流等に関すること。	平成16年度
環境設備・共通スペース委員会	2年	6人	環境保全の実施及び施設設備の活用に関すること。	平成16年度

名称	任期	人数	審議事項等	設置年度
学務委員会	1年	10人	学生の教務・厚生及び学位授与に関すること。	平成16年度
動物実験審査委員会	2年	9人	動物実験施設の利用及び環境保全に関すること。	平成16年度
医学研究等倫理審査委員会	2年	13人	研究の目的及び計画について、倫理的・社会的観点から審査すること。	平成16年度
ヒトES細胞に関する倫理審査委員会	2年	7人	ヒトES細胞に関する研究の目的及び計画について、倫理的・社会的観点から審査すること。	平成16年度
合同防災管理委員会	2年	13人	防災管理に関すること。	平成16年度
教務厚生委員会	1年	13人	学生の教務及び厚生に関すること。	平成16年度
入学試験委員会	1年	5人	入学者選抜と実施方針に関すること。	平成16年度
カリキュラム委員会	2年	11人	教育課程に関すること。	平成16年度
兼業審査委員会	2年	6人	職員の兼業の取扱いに関すること。	平成16年度
オープンラボラトリー利用審査委員会	2年	8人	オープンラボラトリー使用者の評価選考方針に基づく審査に関すること。	平成16年度
医学教育開発研究センター運営協議会	2年	15人	事業の基本方針、研究計画及び共同利用に関すること。	平成16年度
医学教育開発研究センター運営委員会	2年	12人	医学教育開発研究センターの組織運営等及び人事に関すること。	平成16年度
安全衛生管理委員会	2年	9人	職員の安全衛生の確保及び改善に関すること。	平成17年度
遺伝子治療臨床研究倫理審査委員会	2年	18人	遺伝子治療臨床研究について生命倫理及び医療の倫理に関する事項が法令等を遵守しているか審査すること。	平成19年度
医学部附属地域医療医学センター運営委員会	2年	10人	地域医療医学センターの業務・運営及び人事に関すること。	平成19年度
将来計画委員会	—	7人	中期目標計画と将来構想及び分野等の新設・整備に関すること。	平成20年度
国際交流委員会	—	7人	教育、学術研究の国際交流の推進に関すること。	平成24年度
ヒト幹細胞臨床研究倫理審査委員会	2年	16人	ヒト幹細胞に関する研究の目的及び計画について、倫理的・社会的観点から審査すること。	平成25年度

(看護学専攻・看護学科)

名称	任期	人数	審議事項等	設置年度
学務委員会	2年	7人	学生の教務・厚生及び学位授与に関すること。	平成17年度
教務厚生委員会	2年	12人	学生の教務及び厚生に関すること。	平成13年度
入学試験委員会	2年	6人	入学者選抜に関すること。	平成12年度
実習委員会	2年	11人	臨地実習に関すること。	平成14年度

名称	任期	人数	審議事項等	設置年度
将来計画委員会	2年	8人	将来構想に関すること。	平成13年度
広報・情報処理委員会	2年	8人	広報・情報処理に関すること。	平成13年度
修士論文・卒業研究倫理審査小委員会	1年	5人	学生の研究計画の審査、実施中の研究等についての研究計画の変更、研究中止等の意見の進言等に関すること。	平成17年度
ファカルティ・ディベロップメント委員会	2年	6人	FDに関する活動の企画、実施、支援、推進及び情報収集に関すること。	平成19年度
カリキュラム委員会	1年	12人	カリキュラムに関すること。	平成19年度
看護学科・看護学専攻運営委員会	2年	4人	看護学科・看護学専攻の円滑な管理運営に関すること。	平成23年度

2. 教育・研究に関する意志決定方法と体制

(1) 教育に関する意志決定システム

教育内容については、受験希望者及び学生の意見、卒業後の社会貢献度などを国際基準に則り調査・分析し、入学試験、教育カリキュラムの基礎構成や将来計画について医学系研究科又は看護学科で組織するそれぞれの将来計画委員会、教務厚生委員会、入学試験委員会、及び医学系研究科・医学部企画委員会、看護学科実習委員会等の審議に基づいて、最終的に各教授会議を経て決定している。

(2) 研究に関する意志決定システム

研究内容については、国際的動向、地域社会の要請などを踏まえ、各分野・講座・診療科・教育研究施設等で検討し、決定している。

なお、医学系研究科・医学部全体に共通する事項あるいは、他分野との連携研究は、医学系研究科・医学部企画委員会、医学研究等倫理審査委員会等の委員会での検討に基づき、医学系研究科教授会又は医学部教授会で意見を集約し、学長に支援を求めるものとする。

3. 事務組織と事務職員の配置状況

(1) 現状

昭和57年度に医学部及び同附属病院の事務部を統合した医学部事務部4課体制を、国立大学の法人化に伴い、医学研究科・医学部事務部と事務局病院部（平成17年4月より病院事務部）に分離・改編した。

医学研究科・医学部の事務組織は、事務長のもと事務長補佐及び特命の専門員等並びに6係体制としたが、効率的な管理運営を図るため、平成16年7月には特命の専門員等を廃止し、10係体制とした。平成17年4月からは、医学研究科・医学部事務部において担当していた人事関係事務を医学部と附属病院に分離し、病院人事担当係を附属病院事務部に移行等進め9係とし、また、看護学専攻の設置に伴い事務部の名称を「医学系研究科・医学部事務部」と改称、平成18年4月には、業務の統廃合に伴い研究協力係及び企画係の2係を廃止し7係とし、平成19年8月に研究支援体制強化のため新たに研究支援係を設置した。その後、平成21年8月に看護学科担当事務長補佐を新設し、平成22年8月には、学務専門員を新設、大学院係を廃止し、学務第1係を医学科学務係に、学務第2係を看護学科学務係に再構築し、7係体制で現在に至っている。

事務組織は、医学系研究科・医学部の教育プログラムの運営及び改善並びに管理運営に必要な適切な資源配分を確実に実施するために、専門的事項を検討する各種委員会に適宜情報を提供する。（下表参照）

事務部としてさらに効率化を図るため、係等の統合再編を含め、管理職及び専門職並びに講座・分野における研究補助・事務補助員及び実験・実習に係る技術系職員の配置に関する検討を今後も継続していく。

係等名	事務分掌	担当委員会等名	人員
総務係	<ul style="list-style-type: none"> ・組織の設置及び改廃に関する事。 ・儀式及び諸行事に関する事。 ・教授会その他諸会議に関する事。 ・渉外に関する事。 ・公開講座等生涯教育及び大学開放に関する事。 ・諸規則の制定及び改廃に関する事。 ・公印の管守に関する事。 ・概要その他刊行物の編集及び発行に関する事。 ・公文書の接受，発送，整理及び保管に関する事。 ・情報公開に関する事。 ・職員の海外渡航に関する事。 ・調査・統計その他諸報告に関する事。 ・広報に関する事。 ・国際交流に関する事。 ・解剖体の事務に関する事。 ・動物実験に関する事。 ・安全保障貿易管理に関する事。 ・その他他の係の所掌に属しない事務に関する事。 	<ul style="list-style-type: none"> ・企画委員会 ・情報委員会 ・動物実験審査委員会 ・医学部附属地域医療医学センター運営委員会 ・将来計画委員会 ・国際交流委員会 	5 (3)
研究支援係	<ul style="list-style-type: none"> ・中期目標・中期計画及び年度計画に関する事。 ・自己点検・評価に関する事。 ・医学研究に関する事。 ・学術研究に関する事。 ・科学研究費補助金（附属病院事務部総務課の所掌に属するものを除く。）に関する事。 ・寄附金に関する事。 ・内地研究員及び在外研究員に関する事。 	<ul style="list-style-type: none"> ・医学研究等倫理審査委員会 ・ヒト ES 細胞に関する倫理審査委員会 ・遺伝子治療臨床研究倫理審査委員会 ・ヒト幹細胞臨床研究倫理審査委員会 ・自己評価委員会 	3 (1)
管理係	<ul style="list-style-type: none"> ・会計事務の総括に関する事。 ・予算及び決算に関する事。 ・支出（附属病院事務部総務課の所掌に属するものを除く。）に関する事。 ・収入（附属病院事務部総務課の所掌に属するものを除く。）に関する事。 ・給与，旅費及び謝金の経理（附属病院事務部総務課の所掌に属するものを除く。）に関する事。 ・寄附金の経理（附属病院事務部総務課の所掌に属するものを除く。）に関する事。 ・固定資産の維持管理に関する事。 ・職員宿舎に関する事。 ・共済組合（長期給付を除く。）に関する事。 ・職員の安全管理（他の係の所掌に属するものを除く。）に関する事。 	<ul style="list-style-type: none"> ・環境設備・共通スペース委員会 ・合同防災管理委員会 ・オープンラボラトリー利用審査委員会 ・安全衛生管理委員会 	8 (3)

係等名	事務分掌	担当委員会等名	人員
人事係	<ul style="list-style-type: none"> ・配置職員数に関する事。 ・職員任免に関する事。 ・人事記録に関する事。 ・外国人教師等の雇用に関する事。 ・職員の兼業に関する事。 ・初任給、昇格、昇給等に関する事。 ・職員の諸手当に関する事。 ・職員の身分証明に関する事。 ・人事統計・報告及び諸調査に関する事。 ・職員の服務及び勤務時間の管理等に関する事。 ・労使協定・労働協約に係る事務に関する事。 ・職員の倫理及び懲戒に関する事。 ・職員の研修、出張等に関する事。 ・職員の人事評価に関する事。 ・職員の健康・衛生管理及び福利厚生に関する事。 ・退職手当に関する事。 ・共済組合の長期給付に関する事。 ・職員の労働災害補償に関する事。 ・職員の栄典及び表彰に関する事。 	<ul style="list-style-type: none"> ・兼業審査委員会 	3
医学科 学務係	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の募集及び入学試験に関する事。 ・学生の入学、休学、復学、退学、卒業及び修了に関する事。 ・学籍簿等の整理及び保管に関する事。 ・教育課程の編成に関する事。 ・授業及び試験に関する事。 ・授業科目の履修に関する事。 ・共通試験（CBT・OSCE）及び臨床実習に関する事。 ・医師免許の取得に関する事。 ・研究生、聴講生、科目等履修生及び外国人留学生に関する事。 ・学生の留学に関する事。 ・学位に関する事。 ・学外の課外活動に関する事。 ・学生の諸証明に関する事。 ・その他学務事務に関する事。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学務委員会 ・教務厚生委員会 ・入学試験委員会 ・カリキュラム委員会 	7 (3)

係等名	事務分掌	担当委員会等名	人員
看護学科 学務係	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の募集及び入学試験に関すること。 ・学生の入学、休学、復学、退学、卒業及び修了に関すること。 ・学籍簿等の整理及び保管に関すること。 ・教育課程の編成に関すること。 ・授業科目の履修に関すること。 ・看護師等免許の取得に関すること。 ・教育職員免許の取得に関すること。 ・授業及び試験に関すること。 ・臨地実習に関すること。 ・研究生、聴講生、科目等履修生及び外国人留学生に関すること。 ・学生の留学に関すること。 ・学位に関すること。 ・学生の諸証明に関すること。 ・その他学務事務に関すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学務委員会 ・教務厚生委員会 ・入学試験委員会 ・実習委員会 ・将来計画委員会 ・広報・情報処理委員会 ・修士論文・卒業研究倫理審査小委員会 ・ファカルティ・ディベロップメント委員会 ・カリキュラム委員会 	4 (1)
教育企画係	<ul style="list-style-type: none"> ・医学教育開発センターの庶務に関すること。 ・諸会議に関すること。 ・事業計画・研究計画及びその実施に関すること。 ・共同利用計画及びその実施に関すること。 ・調査・統計その他諸報告に関すること。 ・その他センターに関すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・医学教育開発研究センター運営協議会 ・医学教育開発研究センター運営委員会 	3 (2)

(2) 点検・評価

現状に示した事務組織は、管理職及び各係が掌理する業務を適切に遂行しているが、国立大学の運営費交付金が削減される中、医学系研究科・医学部の運営・教育方針を効率的に履行するために、事務組織の機能を強化する必要がある。具体的には、本学の社会的使命達成に向けた取り組み、カリキュラム、入試制度、教員公募の改善及び岐阜県等の外部機関との連携に必要な能力の強化に取り組む。

事務職員に求められる能力には、教育研究の質向上に向けた情報の収集及び分析能力が含まれ、管理職及び専門職には高い資質が求められる。

(3) 改善・改革と展望

研究科長の指導の下、国際的な医学教育基準、教育研究に係る社会からの要請及び学生を含む医学部のステークホルダーの意見を把握し、現状との乖離を分析した情報を各種委員会に提供する。

これらの情報は、入試制度、カリキュラム、学生生活支援、卒後指導の改善及び教員の研究活動支援に活用され、医学系研究科・医学部の強み・特色の伸長に貢献する事務組織となる。

4. 予算編成と執行（配分）の方針と状況

平成15年度までの医学系研究科・医学部及び附属病院の予算は、国立学校特別会計により、運営に必要な経費が歳出予算として、また、附属病院収入・授業料収入等が歳入予算として計上され、予算の編成については、文部科学省から示された概算要求の方針に基づき、医学系研究科・医学部については、教授会、附属病院については科長会議において検討し、文部科学省に概算要求を行っていた。

国立大学法人となった今、予算の編成については、文部科学省から配分される運営費交付金と附属病院収入・授業料収入等の自己収入により運営に必要な支出経費を賄うこととなり、当該年度の事業計画に基づき部局の予算が確定する。

これを受けて、医学系研究科・医学部については、各施設等の運営費を含め企画委員会で審議し、教授会議において審議決定された予算配分方式により各分野に配分を行う。

また、医学部看護学科の予算については、看護学科運営委員会で審議し、教授会議において審議決定された予算配分方式により配分を行う。

当初予算の配分については、以上のとおりであるが、当初予算以外の予算については、それぞれの事項

指定の目的に従い配分する。

現在までの改善見直しと今後に向けての提言

大学を取り巻く社会的環境は、法人化及び医療制度改革などと相まって、非常に厳しいものとなった。

こうした状況の中、医学系研究科・医学部及び附属病院は、平成16年6月に岐阜大学柳戸団地西隣に移転・新築し開院したが、移転後の建物面積、機械・設備等の規模が大幅に増加しており、光熱水料、業務委託費、設備保守料等の管理運営経費が大幅に増加している。

法人化後の運営費は国から配分される運営費交付金と授業料・病院収入等の自己収入で賄うことになったが、国立大学の基盤を支える運営費交付金は長期にわたって減額が続いている。これまで、大学全体で業務の効率化や節約、競争的資金などの外部資金の獲得に努めてきた。また、自己収入の中に占める割合が高い病院収入の増を図るため、病院の経営改善に不断に努めてきたところである。

限られた予算の中で大学運営を行うためには、今後も引き続き、経費の合理化と節減化に努める。さらには、本学の強みや特色を生かした教育研究、診療等の機能強化に繋げる予算編成を図っていくこととしている。

Ⅲ 医学部医学科

1 教育の理念・目標等

1. 教育の理念と目標

医学部は、教育目的を「医学の基礎と高度な専門知識・技能及び態度を教授することにより、人間、自然、社会に対する豊かな感性と洞察力を持って、世界と地域の医学・医療の発展に貢献できる優れた医療人及び医療系研究者を育成すること」としており、さらに医学科では、「医療・医学の専門職として必要な知識・技能・態度・判断力・問題解決力及び生涯学習する姿勢を教育し、地域と世界の医療・医学の発展に貢献できる医師と医学研究者を育成する」こととしている。

これを受けて、教育目標を以下のとおり定めている。

生涯にわたって保健・医療に貢献し、社会と医学の発展に貢献できる医師を育成するために、下記に掲げる医師としての基本的能力を獲得できるように学習機会を提供し、学生自らが能動的に修得することをめざす。

- 医療・保健の専門職としての基本的な知識・判断力・問題解決力を身につける。
- 知識に裏づけされた医師としての基本的技能及び態度を身につけ、実践できる。
- 社会人としての素養を高め、自然科学的・社会心理学的方法を統合して、医学的問題を適切に問題解決できる。
- 生涯にわたって個人・集団としての資質向上をめざし、常に自らを省察し、たゆまず自己主導的な学習を実践できる。

さらに「入学者受入方針」「教育方針」「卒業時までには獲得すべき医師としての基本的資質と能力」を定め、3つのポリシーとしている。

2. 教育の活性化と充実の経過

医学・医療の急速な進展及び多様化する社会的要請に応えることができると期待される医師・創造力豊かな医学研究者を育成するため、常に、基礎的な分析能力技術の修得、幅広い医学・医療の現状認識、歴史的発展過程の把握及び将来への展望を意識させるとともに問題解決への応用能力の育成に力点を置く教育を継続している。

このため1年次生から医学・医療への関心を高める方策として、医学科専任教員による医学概論、医学基礎科目、生命科学実習、初期体験実習、地域体験実習、医学英語などの授業科目を開講している。

現行の医学科の教育形態は、医学科カリキュラム委員会において鋭意検討の上、その基本方針が確立されたもので、平成7年度から「能動型・思考促進型」教育手法であるテュートリアル教育を主体とした少人数教育を採用・実施している。

臨床実習は、平成9年4月から5年次の全学期をクリニカル・クラークシップ型臨床実習とし、10年度から6年次1学期の約40日間を客員臨床系医学教授等の指導の下で、関連教育病院での院外実習（学外実習）を実施してきた。平成13年3月の医学における教育プログラム研究・開発事業委員会から提示された「医学教育モデル・コア・カリキュラム」に基づき、その内容に沿った教育内容の見直しを行い、平成16年度のキャンパス移転、新病院の開院に伴い、院内臨床実習を関連診療科を集約した6週間のブロック制として、クラークシップの一層の推進を図った。

平成20年度から地域枠入試の導入とともに、学生定員が80名から年々増員となり（平成27年度から110名）、最新の知見に基づくカリキュラムの再度の大幅な見直しが行われ、研究体験と選択授業の拡充、6年一貫のプロフェッショナル教育が開始された。特に臨床実習は、開始を4年次2学期後半からとし、現在は、実習期間を院内で42週、院内外実習を5年3学期から20週に拡大し、更なる充実を図っている。

医療系大学間共用試験実施評価機構が実施する臨床実習前OSCEに加え、平成25年度からは大学独自のAdvanced OSCEを実施、附属病院における学内臨床実習後の臨床能力を測り、学生にフィードバックするとともにその後の学外臨床実習の医療機関決定のための基準としている。

以上のような教育体制の改革により、6年間の医学教育を集大成し、学生が、自ら学習する姿勢を修得すること及び個々の患者を通して集学的に学習できるシステムが整った。その効果があつて、医師国家試験合格率は常に良好な成績を達成している。

3. 教育の将来構想

(1) 基本理念

近年の先端技術を含む広範な科学技術の進歩に伴う医学・医療の進歩並びに高齢化社会の到来や生活様式の変化に伴う疾病構造の変化など、医学教育・研究の両面における質的・量的な変化には著しいものがあり、今後も一層進むものと考えられる。

これらに対応すべく、広範で、しかも高度な医学知識・技術を精選して修得させることも必須ではあるが、多様化する社会的要請に応え得る人間性豊かで倫理観に富む良き医師、創造力豊かな医学研究者の育成を医学教育の基本理念としている。

(2) 教育体制

知・情・意が調和し、かつ、全人的立場に立つてものを見ることが出来る医師・医学研究者育成を目指した教育をすることを目標にする。また、世界の中の日本、日本の中の東海地方、東海地方の中の岐阜という位置付けを考慮しながら、地域に密着した医療に貢献できる医師の育成も念頭におき、生命科学としての医学のみならず医の倫理・医療経済等、社会科学的側面を重視して教育する。

以上の方針を基に、次の点を考慮して教育することが必要である。

- ① 医学・医療の進展に伴って、その専門化・細分化が進むとともに医学の枠組を超えた学際的な領域の重要性も増してきたため、必然的に多量の知識及び技術を修得させる必要が生じてきている。しかしながら、単なる知識及び技術を蓄積させることに偏ることなく、主体性や創造性の育成、問題解決能力の涵養、医学・医療に対する総合的視野を持つ人材の育成等に十分配慮する。
- ② 分子生物学・分子遺伝学を始めとして医学周辺科学の著しい進展とそれらの医学・医療への導入によって、ややもすると技術優先の傾向が見られるが、心身両面からの包括的医学・医療を目指し、生命に対して深い畏敬の念をもち、患者や患者の家族の立場に立って診療を行える人間性豊かな医師の育成、すなわち医師としての倫理観の醸成、人格形成に配慮する。
- ③ 医学・医療の進展に対して常時関心を持ち、新しい知識・技術の適用に関する的確な判断力を培うために、生涯にわたって学習を継続していく習慣と広く関連諸科学にも常に向学心を持つ態度を修得させることに配慮する。
- ④ 地域医療に関心を寄せ、地域住民の疾病の予防から治癒後の社会復帰に至る医療全般に責任を有することを自覚させる。必要に応じて地域医療の中での教育的役割を果たしていくことが必要である。また、地域医療に貢献するためにもプライマリ・ケアを重視し、総合的に医学を修得させることに配慮する。
- ⑤ 医学・医療の場における国際交流も急激に増加しており、また、開発途上国に対する国際医療協力の必要性も高まってきている。したがって、これら国際的にも活躍できる医師・医学研究者の育成に配慮する。

2 教育活動

1. 学生の受入れ

(1) 学生募集の方法

- ① 学務部入試課から、全学一括で学生募集要項及び入学選抜に関する要項を県下各高等学校を中心に郵送配布するとともに、希望者に対し直接又は郵送で同要項を配布している。
- ② 医学科紹介パンフレット「医学を志す皆さんへ」を作成し、オープンキャンパス参加者及び高等学校、予備校等に配布している。
- ③ オープンキャンパスにおいて、医学部長、医学科教務厚生委員長の概要説明、模擬授業、施設見学等を実施し、さらに効果的な紹介とするため参加者からのアンケートを参考に、医学科教務厚生委員会において計画立案を行っている。
- ④ 岐阜県下の高等学校へ出向き、本学科教員の研究テーマやトピックスの紹介を出前授業として行っている。
- ⑤ 地域枠入試に関する情報提供のために、高校生を対象とした説明会を実施している。
- ⑥ その他、受験雑誌社等の照会に対応するとともに、私塾主催の入試説明会に資料を送付するなど、積極的に取り組んでいる。

(2) 入学者選抜の方法と方針

医学生として望ましい学生を入学させるため、入試教科・科目の選定を行っている。

大学入試センター試験を導入した平成2年度以降の推移は次のとおりである。

平成2年度	① 推薦選抜を導入	募集人員	5人以内
		募集要件	高校学習成績概評
		推薦枠	2人以内(1校につき)
		選抜方法	入試センター試験、面接、小論文
	② 個別学力検査の教科及びセンター試験を含む教科別配点の見直し		理科を個別学力検査から削除し、入試センター試験(数学、外国語)の傾斜配点
平成5年度	① 推薦選抜の見直し	募集人員	5人
		募集要件	高校学習成績概評A以上
		推薦枠撤廃	
	② 分離・分割制の導入	前期日程	募集人員 65人
		選抜方法	入試センター試験、個別試験(数学、外国語)及び調査書
		後期日程募集人員	10人
		選抜方法	入試センター試験、小論文、面接及び調査書
平成7年度	募集人員の見直し	推薦入学	15人
		前期日程	55人
		後期日程	10人
平成9年度	個別学力検査の教科及び入試センター試験を含む教科別配点の見直し		理科を個別学力検査に取り入れ、入試センター試験(数学、理科、外国語)の傾斜配点
平成14年度	推薦入学Ⅱ特別選抜		傾斜配点した入試センター試験(数学、理科、外国語)の合計85%を基準点として公表
平成19年度	一般選抜の募集人員の変更		
		前期日程	55人⇒30人
		後期日程	10人⇒35人
平成20年度	① 地域枠推薦の導入	推薦入学Ⅱ特別選抜として	10人
		選抜方法	センター試験、面接、小論文
		推薦枠	1校1名
	② 入学定員の増加	地域枠10人追加により入学定員	80人⇒90人
平成21年度	① 地域枠推薦入学	定員の増加	10人⇒15人
		推薦枠	1校2名以内
	② 後期日程	募集人員の増加	35人⇒40人
	③ 入学定員の増加		90人⇒100人
平成22年度	① 地域枠推薦入学	定員の増加	15人⇒25人
		推薦枠	1校7名内
	② 一般選抜の募集人員の変更		
		前期日程	30人⇒32人
		後期日程	40人⇒35人
	③ 入学定員の増加		100人⇒107人
平成24年度	① 一般入試後期日程2段階選抜		
		募集人員(35人)の40倍を超えた場合、大学入試センター試験の成績により実施。	
平成26年度	① 一般入試前期・後期日程2段階選抜		
		前期日程募集人員(32人)・後期日程募集人員(35人)の15倍を超えた場合、大学入試センター試験の成績により実施。	
	② 一般入試前期・後期日程面接試験導入		

(3) 学生の受入れ状況

学生定員充足状況：過去10年間の入学（志願者・入学者）に関する状況は、次表のとおりである。

区分	性別	志願者数	受験者数	入学者数	入学者出身県別内訳			
					岐阜県	愛知県	三重県	その他
17年度	男	436	350	50	16	18	1	15
	女	237	201	31	8	15		8
	計	673	551	81	24	33	1	23
18年度	男	863	751	61	15	19	1	26
	女	327	294	19	4	11		4
	計	1,190	1,045	80	19	30	1	30
19年度	男	2,592	1,981	63	12	18		33
	女	788	645	17	4	6	1	6
	計	3,380	2,626	80	16	24	1	39
20年度	男	2,296	1,845	66	20	19	2	25
	女	751	626	24	9	8		7
	計	3,047	2,471	90	29	27	2	32
21年度	男	2,716	2,101	77	16	19	1	41
	女	861	713	24	8	8	1	7
	計	3,577	2,814	101	24	27	2	48
22年度	男	2,575	1,980	81	24	24		33
	女	881	725	26	9	8		9
	計	3,456	2,705	107	33	32		42
23年度	男	3,084	2,285	87	27	23		37
	女	1,113	866	21	8	7		6
	計	4,197	3,151	108	35	30		43
24年度	男	2,065	1,173	81	26	22	2	31
	女	729	435	27	13	6	0	8
	計	2,794	1,608	108	39	28	2	39
25年度	男	2,188	1,432	82	23	23	1	35
	女	684	444	25	12	7	0	6
	計	2,872	1,876	107	35	30	1	41
26年度	男	1,185	509	79	28	23	0	29
	女	378	183	29	11	10	0	7
	計	1,563	692	108	39	33	0	36

(4) 編入学制度と実態

学則において、再入学、編入学及び転入学による学生の受入制度を定めているが、医学部医学科では当制度は行っていない。しかし、他大学他学部を卒業した学生が毎年数名入学している。

(5) 研究生の受入れと実態

過去8年間にわたる研究生の受入状況は、次表のとおりである。

区分	入学者数			期間延長者数			計
	基礎系	臨床系	社会医学系	基礎系	臨床系	社会医学系	
19年度	2(1)	19(5)		12(1)	61	4	98(7)
20年度	1(1)	13(2)	1	14	42(1)	4	75(4)
21年度	2	13(2)		10	42(1)	8	75(3)
22年度	1(1)	8		9(1)	28(1)	4	50(3)
23年度		8(2)		8	28	3	47(2)
24年度	4(2)	6(1)	1	7	16(1)	2	36(4)
25年度	3(2)	1		7	14	3	28(2)
26年度	3(2)	3(2)		7	11	1	25(4)

()内は、留学生を内数で示す。

大学院研究生を含む。

2. カリキュラム

(1) カリキュラムの編成方針

カリキュラム・ポリシーは以下のとおりである。

<p>1) 学生中心の教育 Student-Centered Education</p> <p>Spoon feeding は高校で終わりました。大学は自ら求めて学ぶ場所です。医師となるためには、常に“自分に求められている能力・資質は何か？”を考え、達成をめざして努力することが求められます。これは生涯にわたって続く医師としての基本的責務です。何を学べば良いか常に考えながら、能動的に学習する姿勢を持ち続けて下さい。</p>
<p>2) 問題解決を通じて能動的・体験的に学ぶ Problem-Based Learning</p> <p>受身で学んだ知識はすぐ忘れてしまいます。自分で苦勞して解決し理解したことは記憶に長くとどまり、応用が利きます。岐阜大学ではテュートリアル教育をはじめとして、能動的に問題解決しながら学ぶ教育を重視します。また臨床実習や種々の体験教育を通じて、真の理解と技能・態度の修得をめざします。</p>
<p>3) 基礎・臨床医学を統合した教育 Integrated Education</p> <p>基礎医学は臨床医学を理解する基盤であり、医学的な問題は基礎医学研究によって解決されてゆきます。臨床医は常に臨床医学と基礎医学を統合的に理解し、医療を実践しています。岐阜大学ではテュートリアル教育と臨床実習を通じて基礎・臨床の統合的な学習を促進し、生きた知識と理解の獲得をめざすとともに、基礎研究の重要性を伝え、リサーチマインドを育みます。</p>
<p>4) 地域に根ざした教育 Community-Based Education</p> <p>プライマリケアから高度専門医療に至るまで、医療はいずれも地域に根ざしたものです。岐阜大学は、初期体験実習（1年次）、地域配属（3年次選択）、院外臨床実習（4～6年次選択）などのカリキュラムを通じ、広い視野を持ち、地域の人々の心を理解し、地域に根ざした医療を実践できる医師づくりに力を入れます。</p>
<p>5) 医師としての全人的成長をめざす教育 Holistic Education</p> <p>医学部の6年間は医師となるための大切な準備期間です。入学時の志を忘れずに、常に向上心をもって有意義に過ごすことを期待します。岐阜大学では知識や技術だけでなく、人間的成長をサポートする様々な教育プログラムを提供します。正規の授業だけでなく種々の自主的学習や課外活動によって豊かな人間性を獲得することを期待します。</p>
<p>6) 英語教育と海外実習 Medical English and Overseas Extern</p> <p>英語力は医学の修得に不可欠であり、海外活動や医学研究をめざす者にとって極めて重要です。岐阜大学は実践的な英語学習プログラムを提供し、希望者に対しては海外臨床実習の機会を提供します。日頃から英語に触れ、英語力を伸ばす努力を期待します。</p>

7) 学び合う文化 Culture of Education

自己学習は学びの基本ですが、人はあらゆる人間関係を通じて学習してゆきます。教員・医師だけでなく、先輩・同僚・後輩・患者・家族・医療チーム・社会の人々からも学んでゆく姿勢が大切です。また学びの受け手としてだけでなく、医療を担う仲間や後輩を積極的に教えてゆく姿勢が求められます。岐阜大学はこのような“学びの文化”をめざします。

また、カリキュラムの基本的な編成方針は、次のような視点に立ち行っている。

- ① 教養教育と専門教育の有機的連携によって6年一貫教育を充実する。
- ② 各専門分野の連携（水平的・垂直的統合）を強化するとともに学際的分野をも考慮しつつ、医学教育の総合性の確立及び学習効率の向上を図る。
- ③ 専門教育においては基礎・社会医学との統合及び臨床実習を重視し、テューリアルシステム主体の教育とする。また、セミナー等の少人数教育を活用して、情動面を含む教員と学生の緊密化及び討議による能動的学習によって問題解決能力の醸成を図り、密度の濃い知識習得をめざす。平成20年度にはカリキュラムの全体的見直しを行い、テューリアルコース等の編成を変更し、その後も一部コースの再編を行った。

- ④ 授業の実施に当たっては、コンピュータ、ビデオ等の学習に効果的な教育機器の活用を図るとともに、学生の自主的利用を推進し、教育の効率化に資している。6年一貫教育としてテューリアル教育のカリキュラムに加え、医学を学ぶに当たっての動機を高め、テューリアル開始前の基礎知識の獲得を目的として、医学概論、初期体験実習、医学英語、基礎生理学、基礎生化学、生命科学実習、地域体験実習などの授業を開講している。

医学概論は、1年次学生（医学科、看護学科合同）を対象とし、医学部長、病院長も加わり、6年間の医学教育課程の開始に当り、医学とは何か、人間（生命）の本質とは何か、医学の成り立ち、医学と看護との関係、医学の現状と将来の展望（高度先進医学、地域医療など）、医療人として求められる能力、国・地域・国際社会の仕組みと医学の関係、薬害被害者の声など、医学の根本に関わる事項を理解することを目標に実施している。また、医学科1年次での初期体験実習では、病院、福祉施設、保健施設等の見学にとどまらず、実際に介護体験などを行う。1年次後期の地域体験実習では保育所園児、妊産婦、高齢者などと8週間にわたり継続的に関わり、コミュニケーションの取り方を学び、ライフサイクルに対する理解を深める。

- ⑤ 教養教育では、平成24年度から再編成が計画され、人文科学、社会科学における必修単位が増えることに伴い、医学部生にとって基盤形成につながる（「生と死の哲学」など）科目を新たに開講することとした。一方、従来の総合科目は、複合領域として再構築されるが、既存の単独講座では組めない科目をあてはめている。すなわち、遺伝医学、先端基礎医学、臨床免疫学、リハビリテーション医学、スポーツ医学、救急医学、老年医学（ターミナル・ケアを含む）、臨床栄養学等に関して、複数の関連講座との調整を図りながら、包括的な科目を組むこととしている。

○ テューリアルコース指導教員等（平成26年度）

	コース名	指導教員	授業週数
1	人体構造学	○千田, 山口	10
2	神経構造機能学	○山口	3
3	生命分子	○中島, 長岡	3
4	生体機能学	○恵良, 森田,	4
5	病原体学	○江崎, 前川	5
6	薬理・中毒学	○小澤, 飯田, 丹羽	4
7	病理学	○原, 竹内	3
8	地域・産業保健学	○永田, 松岡, 小倉	2
9	循環器・呼吸器・腎尿路学	○湊口, 出口, 星	8
10	消化器・検査医学・血液腫瘍学	○吉田, 深尾, 清島（満）, 柴田, 中島, 清島（眞）	6
11	内分泌代謝学	○武田, 清島（満）, 森田（浩）, 山本（眞）	4

コース名		指導教員	授業週数
12	神経・精神・行動学	○犬塚, 岩間, 塩入	6
13	成育	○深尾, 森重, 鈴木, 下澤, 加藤	6
14	生命倫理・法医学	○武内, 塚田	2
15	臨床遺伝・臨床倫理	○深尾	1
16	皮膚科学	○清島 (眞)	2
17	免疫応答学	○武田, 竹内, 森田 (浩), 清島 (眞), 山本 (眞)	2
18	感覚器医学	○伊藤 (八), 山本	4
19	運動器学	○秋山, 松岡	3
20	麻酔疼痛制御・救急災害	○飯田, 小倉	3
21	画像診断・放射線治療	○星	2
		計	83

○印は、コース主任代表を示す。

(2) 教育活動の実施内容と方法

医学科では医学教育の目標として、人間性豊かで生涯学習する医療人及び先端的で創造的研究を推進する医学研究者の育成にポイントを置き、生命科学としての医学のほかに、医の倫理・医療経済等の心理・社会科学的側面を重視する。学生が将来それぞれ保健・医療及び医学分野に貢献し、医学の発展に寄与することができるようになるために、卒業時に以下の10項目を達成することをねらいとする。

－卒業時までには獲得すべき医師としての基本的資質と能力－

大項目	中項目		小項目
基本的知識 判断力 問題解決力	1	人の正常状態	身体の正常な構造と機能 ライフサイクル (発育と老化) 精神機能と行動：人間関係，社会との関わり
	2	人の病的状態	疾病の生物的，環境的，心理社会的要因 病的状態における構造と機能の変化 主要疾患の病態生理，診断・治療原理
	3	人と社会	疾病予防，健康増進 保健・医療システム 地域医療保険，国際医療保険
	4	分析・判断力 問題解決力	学習課題・医学的問題の能動的な同定 問題に対する適確な判断 鑑別診断と臨床判断 自然化学・社会心理学を統合した問題解決 医療安全意識 (問題発生の未然の防止)
基本的技能	5	コミュニケーション	社会人としてのコミュニケーション 患者・家族とのコミュニケーション 医療チームにおける協調性と指導力
	6	診断技能	医療面接 (病歴聴取と説明) 身体診察 (正常と異常所見) 基本的臨床検査の理解と実施 鑑別診断と臨床判断 情報収集とエビデンスに基づいた診療 診療録の記載とプレゼンテーション

大項目	中項目		小項目
	7	治療マネジメント	学習のマネジメント 患者マネジメントプランの立案 基本的治療・処置の実施 救急疾患と救命処置
基本的態度	8	患者に対する責務	患者・家族への理解と信頼関係の構築 患者に対する誠実で責任ある行動 全人的・包括的な診療態度
	9	社会に対する責務	専門職としての地域的・社会的責任 社会規範・倫理観・法規に準拠した行動 探究心（リサーチマインド） 自己の心身の健康管理
	10	実践と省察	学習成果を実践できるレベルに高める努力 自らの実践を省察する習慣 評価・意見を謙虚に受け止める姿勢 自らの能力の限界を知り、他者と協調する姿勢 生涯、自己主導的学習を実践する習慣 教え学びあう姿勢（教育マインド）

本学科では6年一貫教育体制をとり、入学後の早い時期から医学生としての自覚を促し、自主的・積極的な学習態度や医師としての基本的態度を身につけるために、初期体験実習、地域体験実習を実施しており、さらに学生の自主的学習態度を育て、医学研究への意欲を養うために、テュートリアル選択コースとして学生を研究室に配属させ自由研究の期間を設けている。

医学教育方法については、自主学習と問題解決型教育を重視し、講義時間の短縮と重要事項の重点教育、少人数グループによるテュートリアル教育を推進している。さらに、社会的要請が強い教育項目、すなわち、医療倫理、社会医学、情報医学、医用工学、救急医学、プライマリ・ケア、老年医学などを重視している。臨床実習はクリニカル・クラークシップ方式を重視し、院内外の選択実習の拡充に努めているが、臨床実習の充実のためには教育に関与する教員の確保、教育組織の整備、附属病院と関連病院における臨床教育スタッフの確保が今後の問題である。大学病院の組織・施設・整備などの整備拡充及び関連研修病院との協力体制は卒前臨床実習の他、生涯教育を含めての臨床研修のために重要である。

豊富な臨床経験を有する学外の医師に、臨床教育への協力を依頼するため、平成8年度から「客員臨床系医学教授、客員臨床系医学助教授（平成19年度から臨床准教授に名称変更）及び客員臨床系医学講師（平成21年度から講師の制度は廃止）」の制度を設けた。平成10年度からは、6年次学生の学外臨床実習を開始したことに伴い、学外実習を対象とする客員臨床系医学教授等の制度を設けた。平成12年10月1日の医学部看護学科設置に伴い、「岐阜大学医学部医学科客員臨床系医学教授等の称号の付与に関する選考基準」を整備した。

平成15年度以降の称号付与者数とその内訳は、次表のとおりである。

○ 客員臨床系医学教授等称号付与数

区 分	臨床教授	臨床准教授	臨床講師	計
15年度	28	35	43	106
16年度	29	34	43	106
17年度	32	37	46	115
18年度	35	39	47	121
19年度	39	37	47	123
20年度	64	36	43	143
21年度	56	56	21年度から廃止	112
22年度	67	61	—	128
23年度	71	66	—	137

区 分	臨床教授	臨床准教授	臨床講師	計
24年度	92	73	—	165
25年度	90	77	—	167
26年度	107	68	—	175

(3) 課題と展望

本学の医学教育は、かつては講座別に授業科目が設定され、縦割りの授業が実施されていたが、平成7年度からテュートリアル教育法を導入し、基礎・臨床の講座の枠を取り払った統合型の教育法を全国の医学部に先駆けて実施してきた。同教育法を導入後、既に20年近く経過し、その間、教員の教育経験も蓄積され、よりの確で効果的な教育・指導が可能となり、カリキュラムの教材開発も進んできた。

学生のテュートリアルに対する対応も定着してきたが、教員の異動や課題の変更に伴い、年度ごとに発生する様々な問題点に対応し、改革を継続している。導入初期のコースの変更、統廃合、期間の変更等、改革を重ね、現在21コース、83週のテュートリアルが実施されている。

このような医学科のカリキュラムの改革には、長期的展望にたつてカリキュラムの在り方を検討する医学科カリキュラム委員会を常設し、医学教育開発研究センター (MEDC)、医学教育企画開発室、教務厚生委員会と協力し、改革に当たっている。

現在、医学部のカリキュラム改革の大きな流れは、臨床教育の改善、医師としてのプロフェッショナル教育、医学研究者の育成、地域医療などに向いており、社会の新しい要求に沿って、下記のような重点課題を掲げて教育改革を推進してきた。

- 1) 臨床実習開始前の臨床準備教育の拡充とその評価システムの導入
- 2) クリニカル・クラークシップの一層の推進
- 3) 大学病院および地域医療機関における選択臨床実習の拡充
- 4) シミュレーション教育と模擬患者制度の導入
- 5) 6年一貫のプロフェッショナル教育の導入
- 6) テュートリアル選択コースにおける研究体験の拡充
- 7) 地域体験実習、地域配属などの導入

テュートリアル・システムは自学自習を基本にしており、従前にも増して、効率化した医学・医療情報提供システム等の学習支援体制が必要であり、テュートリアル症例・シラバスの提示、OSCE・シミュレーション教育用動画などを提供できるサーバーシステムを構築したが、この活用促進を図ることが求められている。

3. 教育方針

(1) 教育改革

21世紀における医療人育成の考え方は、平成8年6月13日の21世紀医学・医療懇談会の第一次報告「21世紀の命と健康を守る医療人の育成を目指して」に以下のとおり示されている。

- ・ 医療人としての能力・適性に留意した人材選考
- ・ 人間性豊かな医療人
- ・ 患者中心、患者本位の立場に立った医療人
- ・ 多様な環境の中で育つ医療人
- ・ 生涯学習する医療人
- ・ 地球人として活動する医療人

その後、第2次報告(平成9年2月)、第3次報告(平成9年7月)及び第4次報告(平成11年2月)が公表され、この提言を先取りする形で本学の教育改革がなされてきた。

膨大な医学知識を単に教授し、詰め込むだけの教育では急速な医学の進歩と社会のニーズに対応できる医師、医学者を育成することは不可能である。本学部においては、期待される医療人の育成を目指して学部教育の改善に鋭意取り組み、平成7年度入学生から、少人数・問題解決型教育であるテュートリアルシステムを導入し、臨床教育の改革にも取り組んできた。

平成7年度入学生から導入したカリキュラムでは、以下のような改革がなされた。

- ・ 少人数・問題解決型テュートリアル・システム(2~4年次)
- ・ 医療人としての目的意識を高めるための初期体験実習I (Early Exposure I) (1年次)
- ・ リサーチマインドを醸成するための選択テュートリアル(基礎医学・社会医学セミナー) (3年次)

- ・ 医療人に必須な医学英語（1年次）
- ・ 知識・態度・技能の習得を目指した診療参加型クリニカル・クラークシップ（4～6年次）
- ・ 多様な地域医療環境の中での学習経験を図る学外臨床実習（5～6年次）

このカリキュラムの核となるテュートリアルシステムは、暗記に頼る過剰な断片的知識、基礎医学と臨床医学の乖離、学生が積極的に授業参加しない等の教育上の欠陥を改善すべく導入されたもので、患者情報をモデル化した課題を通して、学習への動機を高揚し、問題発見能力、問題解決能力及び洞察力を高め、生涯学習につながる自己学習の習慣を養い、コミュニケーションの熟練を図る教育方略である。

(2) 全学共通教育

岐阜大学では、平成8年9月に教養部が廃止され、地域科学部の発足に伴い、平成9年度から全学体制の教養教育、すなわち全学共通教育が実施されている。大学設置基準第19条「教育課程の編成に当たっては、大学は、学部等の専攻に係る専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない。」を尊重し、社会のニーズに応えることができる教養教育がスタートした。平成12年度からは、総合大学の利点を生かし、「全教員協力体制」のもので「人類や自然との共生を推し進めるための教育」、「学問と社会との開かれた関係を構築するための教育」が実施されてきた。平成24年度からは、教養教育の目的である「社会人として生涯にわたる学習の基礎となる学術的な基盤形成を行うこと」をさらに発展させるため、教育内容の改革と卒業に必要な最低修得単位数の見直しを行った。

(3) 各テュートリアルコースの授業計画（シラバス）の作成及び学習内容の調整

授業計画については、カリキュラム委員会、医学科教務厚生委員会、医学教育企画評価室で基本方針を決定し、テュートリアルコース主任を中心にコースごとに作成し、その概要を授業案内に掲載して学生に周知している。平成23年度からは授業案内の軽量化を図り（サイズ及び紙質の変更）、学生が携帯して活用しやすくなるように改良した。各コースの授業内容の調整は、コースごとの話し合いと企画開発室による各コースFDによりなされている。

(4) 臨床実習

本学部では、クリニカル・クラークシップの導入を中心とした臨床実習の改革を行った。

改革にあたっては、日本医学教育学会臨床能力評価ワーキンググループの臨床教育の教育目標（案）による一般目標「将来、医学医療のいずれの分野に進むにせよ、卒業研修を効果的にするために、基本的臨床能力を身につける」を参考とした。

実習開始時期は、かつては5年次3学期から6年次2学期までであったが、幾多の見直しを行い、平成23年度からは4年次2学期から6年次1学期までに拡充した。さらに臨床実習開始直前に「臨床推論（東洋医学的アプローチ）（西洋医学的アプローチ）」コースを設け、クラークシップの直前訓練を充実した。

また、本学部は医学教育開発研究センターが中心となって全国に先駆けて平成9年に模擬患者（SP）参加型医療面接実習を開始した。開始当初コミュニケーション教育がなされていた医学部はごくわずかで、その中であって学生全員が模擬患者と医療面接実習を行うという画期的な教育法を導入した。

臨床実習期間中の4時間ではあるが、内容のバージョンアップを図りながら現在に至っている。

(5) 新入生合宿研修

平成7年度から1泊2日の「新入生合宿研修」を導入した。同研修は大学生生活スタート時に、医学生として将来医師、研究者となるための学力修得、人間形成確立等の重要性を認識させる目的で入学式直後に行われる。

この研修は、「初年次セミナー」と一連のプログラムとして位置づけ、「医学部長講話、保健管理センターガイダンス、地域医療ガイダンス、研究室紹介、セミナー、グループ討論、教員との交流会」等実施している。

(6) 臨床実習資格総合判定試験（共用試験 CBT, OSCE）等

平成3年5月の「厚生省臨床実習検討委員会最終報告」に沿って、医行為の拡大とクリニカル・クラークシップの導入の条件として、平成8年2月（第4年次3学期）から臨床実習資格総合判定試験を導入した。平成17年度からは、共用試験 CBT, OSCE を導入しこれによって4年次2学期からの臨床実習への進級判定を行っている。

さらに、学内臨床実習と学外臨床実習の間に「Advanced OSCE」を実施し、附属病院における1年間の

実習後の臨床能力を検査している。

(7) 他大学における授業科目の履修の方針と状況

6年次の選択臨床実習で海外の大学・教育病院での臨床実習を希望し、資格ありと判定された学生は、海外での実習を許可して、6年生の実習として認めている。海外で臨床実習を受ける学生の資格条件(TOFEL550点以上、学業成績が一定レベル以上)を満たし、医学教育開発研究センターの実施する海外臨床実習希望者向けプログラム(医療英語ワークショップ)を修了した学生が、海外臨床実習に参加した。医療英語ワークショップでは、合計20時間の医療英語学習及び英語での身体診察トレーニングを行い、その後総括試験として外国人模擬患者に対する医療面接試験(English OSCE)を実施している。

海外における臨床実習(平成24~26年度)

No.	国名	施設名	年	月
1	オーストラリア	ニューサウスウェールズ大学	H24	6
2	米国	UCLA	H24	4~5
3	米国	ハーバード メディカルスクール	H24	4
4	カナダ	マギル大学	H24	6~7
5	オーストラリア	マナシュ大学	H24	5
6	中国	香港大学	H24	5
7	米国	ハワイ大学	H24	4~5
8	米国	ハワイ大学	H25	2
9	米国	UCLA	H25	3~4
10	韓国	延世大学	H24	4
11	米国	UCLA	H25	4
12	米国	デューク大学	H25	4~5
13	米国	メイヨー大学	H25	5
14	米国	ミシガン大学	H25	5
15	米国	UCLA	H25	5~6
16	ニュージーランド	オークランド大学	H25	5
17	ニュージーランド	オークランド大学	H25	6
18	オーストラリア	Royal North Shore Hospital	H25	6
19	フランス	ユニヴェルシテール・ポール・ブルッス病院	H26	7
20	オーストリア	シドニー大学	H26	6
21	タイ	シリラート病院	H26	3~4
22	ニュージーランド	オークランド大学	H26	6~7
23	オーストラリア	シドニー大学	H26	4
24	米国	UCLA	H26	5
25	英国	Royal Cornwall Hospital	H26	2
26	米国	UCLA	H26	4~5
27	米国	UPMC	H26	3~4
28	オーストラリア	フリンダース大学	H26	6
29	フランス	ユニヴェルシテール・ポール・ブルッス病院	H26	7
30	オーストラリア	モナシュメディカルセンター	H26	5
31	英国	National Health Services	H26	2
32	米国	ハワイ大学	H26	3

(8) 在籍, 留年, 休学, 退学の状況

過去 11 年間の状況は次表のとおりである。医学科における過去 3 年間の留年の割合は 3.4% であり, 休学の割合は 2.2% で増加傾向にある。また, 退学者はこの 3 年間で 13 名でこれも増加傾向にあり, 今後, 入試改革後の傾向と比較する必要がある。

区 分	在 籍	留 年	休 学	退学 (除籍を含む)
平成 15 年度	495	7	1	0
平成 16 年度	495	8	4	0
平成 17 年度	492	11	4	0
平成 18 年度	488	10	6	0
平成 19 年度	488	14	10	2
平成 20 年度	498	8	11	4
平成 21 年度	518	17	8	1
平成 22 年度	546	17	10	1
平成 23 年度	562	16	10	7
平成 24 年度	586	23	12	1
平成 25 年度	623	22	17	5

(9) 教育施設・設備の現状

区 分	面 積	用 途	設 備
講義室 (4 室) 2, 3, 4 年生教室 平成 18 度 3 月 医学科・教育福利棟完成に伴い, 4 月から利用開始 5・6 年生教室 医学部本館	151.2 m ² /室 124.0 m ²	講 義	AV 装置一式
テュートリアル室 (30 室) 平成 18 度 3 月 医学科・教育福利棟完成に伴い, 4 月から利用開始	21.7 m ² /室	テュートリアル・コ アタイム 自学・自習室	パソコン, ホワイトボード, シ ャーカテスン, 医学専門図書, 大型ディスプレイ, モニターシ ステムを設置
スキルスラボ	119 m ²	臨床技能教育	AV 装置一式, パソコン, 手洗 い装置, 各種シミュレーターを 設置
解剖実習室 (生命科学棟 1 階)	284 m ²	解剖実習	AV 装置一式, 解剖台
組織・病理実習室 (2N22)	277 m ²	実習・講義	AV 装置一式, 顕微鏡
生化学・病原態実習室 (4S02)	261 m ²	実習・講義	AV 装置一式, 顕微鏡, 実験台
生体機能系実習室 (8N22)	238 m ²	実習・講義	AV 装置一式, 実験台
情報処理演習室 (2S32)	204 m ²	情報処理	パソコン (100 台), AV 装置一 式

(10) 成績の評価、認定の基準

成績の評価・認定については、医学部規則（第5条～第12条）により行われており、試験の成績が60点未満を不合格とする。病気その他やむを得ない理由のため、試験を受験できなかった場合は、その理由を申し出た者に限り、追試験を受けることができる。

試験の結果が不合格と判定された者は1回に限り、再試験を受けることができる。

各授業科目・コースの成績評価基準はシラバスに記載している。

授業科目の成績のうち、優、良及び可は合格とし、不可は不合格とするが、平成24年4月から、成績評価基準が全学的に統一され、4段階から5段階評価（秀、優、良、可、不可）になった。これは、特に優秀な学生を適正に評価するために改正されたものである。

5年次から6年次への進級には成績評価を要する条件はないが、他の学年次への進級には、成績評価・認定の条件が次のように設けられている。

① 1年次から2年次への進級

当該学年に課せられる医学部担当教育、全学共通教育の必要単位を修得しなければならない。

② 2年次から3年次へ、3年次から4年次へ、4年次から5年次への進級

当該学年に課せられるテュートリアルコースのうち、2コース不認定の場合は1年間の留年とし、再度同コースを履修させることとしている。1コース不認定の場合は仮進級とし、翌年までに合格することを条件とする。なお、テュートリアル・コアタイムの出席率80%をコース終了時の総合判定試験の受験資格としている。さらに、4年次臨床実習の進級には、すべてのテュートリアルコースに合格し、共用試験CBT、OSCEに合格し、かつ、臨床実習入門を修得することを義務付けている。

(11) 医師国家試験合格状況

医師国家試験は、現在の医療体制に求められる医師に必要な医学知識を試験によって、医師の能力を社会的に保証しようとしている制度であると思われるが、医学教育の成果の1つとして、国家試験の合格率も軽視することはできない。

過去11年間の合格状況は、次表のとおりであり、テュートリアル教育導入後の合格率は良好に推移している。

医師国家試験合格率

区 分	既 卒 者	新 卒 者	計
平成15年度（98回）	0%	97.4%	93.8%
平成16年度（99回）	50.0%	90.5%	87.8%
平成17年度（100回）	36.4%	97.6%	90.5%
平成18年度（101回）	12.5%	96.3%	88.6%
平成19年度（102回）	62.5%	97.5%	94.3%
平成20年度（103回）	40.0%	98.7%	95.1%
平成21年度（104回）	0.0%	96.2%	91.5%
平成22年度（105回）	57.1%	92.1%	89.6%
平成23年度（106回）	40.0%	96.1%	89.7%
平成24年度（107回）	66.7%	94.2%	91.0%
平成25年度（108回）	50.0%	97.6%	91.5%

4. 学生生活への配慮

(1) 奨学金の種類と採択状況

過去11年間のデータは次表のとおりである。

奨学金の受給内容は、日本人学生を対象にしたものはそのほとんどが貸与であり、留学生は給与である。また、留学生向けの奨学金は希望者に比べその種類が非常に少ないのが現状である。

区 分	日本学生支援機構奨学金				その他の奨学金	
	第 1 種		第 2 種		申請者数	採用者数
	申請者数	採用者数	申請者数	採用者数		
平成 15 年度	12	5	8	8	0	0
平成 16 年度	26	11	25	24	0	0
平成 17 年度	14	8	19	18	0	0
平成 18 年度	18	14	20	20	1	1
平成 19 年度	22	11	21	17	2	2
平成 20 年度	21	9	17	17	0	0
平成 21 年度	24	15	23	22	1	1
平成 22 年度	19	11	23	21	0	0
平成 23 年度	23	13	19	16	1	1
平成 24 年度	15	12	25	24	3	3
平成 25 年度	10	8	10	10	0	0

○ 外国人留学生各種奨学金受給者数

区 分	企業等奨学金	
	志 願 者 数	受 給 者 数
平成 15 年度	45	14
平成 16 年度	45	18
平成 17 年度	47	11
平成 18 年度	31	8
平成 19 年度	36	6
平成 20 年度	29	10
平成 21 年度	52	9
平成 22 年度	43	3
平成 23 年度	32	4
平成 24 年度	26	14
平成 25 年度	25	15

○ 岐阜県医学生修学資金制度

平成 20 年度より地域医療を担う人材育成を目的として、上記制度が設けられた。第 1 種は地域枠推薦入試合格者を対象に入学金・授業料と生活資金が支給される。第 2 種は一般の岐阜県出身者を対象に生活資金が支給される。卒業後、一定期間、岐阜県内の医療に貢献することにより返済が免除される。

修学資金受給開始者数（平成 20～26 年度）

学年	2008 年度		2009 年度		2010 年度		2011 年度		2012 年度		2013 年度		2014 年度		合計
	1 種	2 種	1 種	2 種	1 種	2 種	1 種	2 種	1 種	2 種	1 種	2 種	1 種	2 種	
1 年	10	16	15	3	25	3	25	2	25	6	25	7	25	1	188
2 年		3		1				2		2		1		2	11
3 年		3		1						1		1		2	8
4 年		1		5											6
5 年		4		3											7
6 年		3		8		1		1				1			14
合計	10	30	15	21	24	4	25	5	25	9	25	10	25	5	234

(2) 授業料の免除の状況

過去 11 年間の授業料免除者は次表のとおりである。
例年、申請者のうち約 7 割以上が全額又は半額を免除されている。

区 分	在籍者数	前学期			後学期		
		申請	免除		申請	免除	
			全額	半額		全額	半額
平成 15 年度	495	27(1)	11(1)		29(2)	18(1)	
平成 16 年度	495	24(0)		19(0)	22(1)		18(0)
平成 17 年度	492	26(1)	2	17(1)	26(1)	4	17(1)
平成 18 年度	488	29(1)	2	13	29(1)	2	19
平成 19 年度	488	40	10	16	36	12	17
平成 20 年度	498	36(1)	13	13(1)	27	11	15(1)
平成 21 年度	518	38(1)	11	18(1)	32(1)	15	15(1)
平成 22 年度	546	40(1)	9	26(1)	33(1)	7	22(1)
平成 23 年度	562	49(1)	19	20(1)	43(1)	17	22(1)
平成 24 年度	586	53(2)	31	15(2)	56(2)	30	23(2)
平成 25 年度	623	52(1)	37	9(1)	54(1)	38	16(1)

()内は、留学生を内数で示す。

(3) 学生生活相談の体制と実態

医学科においては、学生の履修、進級及び学生生活に関する相談並びに大学における諸問題について、医学科学務係が窓口となって対応している。

個人的及び分野レベルでの指導事項については、平成 15 年度に制定し導入している「指導教員制」により、医学科教務厚生委員会委員長、選択テュートリアル分野主任及び部活動顧問が相談員として当たっている。平成 18 年度からは「里親制度」を設け、各分野の教授が分担して学生の相談に当たっている。

また、大学全体の制度として、勉学上や学生生活で困っていること、友人関係やセクシュアル・ハラスメントに関する相談の窓口としてキャンパス・ヘルパー制が設けられており、各学部、学務部、全学共通教育事務室等の教職員が相談員となっている。

(4) 課外活動の実態

医学部においては、課外活動を奨励するために、それに係る学生団体を許可しているが、教育目的に沿った医学部生（医学科、看護学科）を対象とする団体の場合には、課外活動団体として教務厚生委員会が認定し、その活動を認めている。

これらの団体への学生の加入状況を次表に示す。

○ 課外活動加入状況

区 分	体育系サークル	文化系サークル	計
平成 15 年度	437(2)	348(0)	785(2)
平成 16 年度	438(3)	277(1)	715(4)
平成 17 年度	432	181	613
平成 18 年度	411	155	566
平成 19 年度	396	220	616
平成 20 年度	436(2)	212	648(2)
平成 21 年度	506	256	762
平成 22 年度	535(3)	245(1)	780(4)
平成 23 年度	612(3)	318(1)	930(4)
平成 24 年度	550(2)	290(2)	840(4)

区 分	体育系サークル	文化系サークル	計
平成 25 年度	596(2)	280(2)	876(4)
平成 26 年度	584(1)	337(2)	921(3)

()内は、留学生を内数で示す。

IV 医学部看護学科

1 教育・研究の理念・目標等

1. 教育・研究の理念と目標

近年の医療・福祉を取り巻く環境の変化に対応し、多様な社会的要請に応えるため、21世紀の医療に向けて、豊かな感性と人間性を備え、日々進歩する知識や技術を修得・発展させる能力や、地域に即した保健医療活動の中心的役割を果たすことのできる資質の高い看護職を育成することを目的に以下のディプロマポリシーを設定している。

- ① 人々の尊厳と権利を擁護できる能力
- ② 総合的・全人的に人間を理解する能力
- ③ 自主性と創造力をもち、主体的に判断・実践できる問題解決能力
- ④ 看護専門職として看護の質の向上を目指し、継続して専門的能力の向上に取り組んでいける能力
- ⑤ 看護の役割を認識し、保健医療福祉における協働と連携をする能力
- ⑥ 国際的な視野と地域医療への貢献を視野に入れた看護を発展できる能力

2. 教育・研究の活性化と充実の経過

急速な少子・高齢化による人口構成の変化、疾病構造の変化、また人々の健康への関心の高まりなどにより、医療を取り巻く社会環境は著しく変貌してきている。慢性疾患や老化による障害を抱えて生活する人々が増加するにつれ、療養生活の質、生命の尊厳の本質が改めて問い直されるようになった。このように拡大し複雑化する社会的ニーズに応じていける看護者を育成するには、豊かな感性と深い倫理観に裏付けられた人間性、専門的知識・技術と実践力を備え、問題解決能力、また、国際的な視野と地域医療への貢献を視野に入れた看護を発展できる能力を身につけることが課題となる。

このため1年次生から医療・看護への関心を高めるため、初期体験実習や総合科目（医療と生命）、また、医学概論は医学科学生との合同授業を開講している。また、専門教育の基盤となる教養教育は1,2年次に全学部生を対象とした全学共通教育を受講する。

問題解決能力、主体的に学習する能力育成のために、少人数によるグループワークを積極的に取り入れている。保健師助産師看護師学校養成所指定規則等の一部改定に伴い、平成24年度からカリキュラムを改正し保健師課程を選択制とし、看護師課程の卒業要件単位数を133単位から127単位に変更した。また、それと同時に英語教育の充実を図り1・2年次に教養科目として履修する英語に引き続き3・4年次に基礎科目として医療英語3科目（3単位90時間）を新規に配置した。これにより、英語教育を一層系統的に行えるようにした。

3. 教育・研究の将来構想

(1) 基本理念

わが国における医療・福祉の状況は、近年大きく変化している。医学の進歩と医学を取り巻く諸科学の発展、さらに急速な人口減少などの社会環境の変化に伴い、医療の世界も多様化し、治療とともに援助サービスが重視されるようになってきた。医療における看護の役割は、今後さらに拡大・複雑化していくことは明らかであり、豊かな感性と人間性を備えた資質の高い看護職の育成が不可欠となる。

これらの社会的要請に応えるため、日々進歩する医療の知識・技術に対応し、さらに発展させる能力を持った人材、地域の実情に即したきめ細やかな保健医療活動の中心的役割を果たせる人材を養成するとともに、看護教育及び研究・研修の拠点となり、生涯学習に貢献することのできる、社会に開かれた看護学科を目指すことを基本理念とする。

(2) 教育体制

現代の医療は、治療水準の向上とともに、あらゆる健康レベルの人々を対象とした、保健・医療・福祉が連携した良質できめ細やかな援助サービスが要請される。医療における看護の責任は今後ますます重く、社会の要請に応えるためにディプロマポリシーを踏まえた上で、将来的に次のような内容を担える人材の育成と学問的基盤の確立を目標とする。

- ① 全人的医療を担い得る豊かな感性と人間性を備えた人材
- ② 高度医療の一環を担い得る資質の高い人材

- ③ 保健・医療活動に指導的役割を果たせる人材
- ④ 看護学における学問的基盤を確立できる人材
- ⑤ 広い視野を持ち、国内外で活躍できる人材

医学部医学科および医学部附属病院との緊密な協力体制を築き、養護教諭 1 種免許取得のための教職課程では総合大学としてのメリットを十分に活かした教育を行っていく。「健康」を視座にすえた統合カリキュラムで育った問題解決能力や判断能力、応用能力のある人材の育成により、地域で保健医療に係わる人々とともにケアチームを作り、生涯学習を続けていける体制整備を目指す。

(3) 研究体制

看護学の研究は、関連諸科学との連携、特に保健・医療分野との共同研究は必須である。臨床、地域における看護職との研究は看護の研究の本質的意義を有するものであり、各講座、分野の特色の中で推進していく。看護の対象や役割の拡大により、健康支援や生活への援助から、教育・福祉・経済・情報などと連携していく必要性が高まっている。総合大学のメリットを活かし、学内外において関連する学問分野、他の専門職との連携を密にすることで学際的かつ効率的な共同研究を推進していく。また、大学院修士課程（看護学専攻）ではより高い専門性を追及した教育・研究の充実を図っている。

2 教育活動

1. 学生の受入れ

(1) 学生募集の方法

- ① 学生募集要項及び入学選抜に関する要項については、学務部から全学一括で県下高等学校を中心に郵送配布するとともに、希望者に対しては学務係から直接又は郵送で配布している。
- ② 看護学科紹介パンフレット「岐阜大学医学部看護学科案内」を作成し、大学紹介（オープンキャンパス、プチ・オープンキャンパス）を参加者に配布している。また、パンフレット希望者には郵送配布の対応を行っている。
- ③ オープンキャンパス、プチ・オープンキャンパスにおいて、看護学科長による看護学科の概要説明並びに各講座が企画する模擬実習等を体験するだけでなく、在学生による相談会や医学部看護学科教務厚生委員と広報・情報処理委員長による進学相談を行っている。参加者からのアンケート内容は、広報・情報処理委員会における次年度以降の計画立案の参考としている。
- ④ 看護学科全教員が 6～8 月にかけて岐阜県・愛知県を中心に高等学校を訪問し、パンフレットや募集要項を手渡すだけでなく、看護学科の紹介及び進路指導担当の教諭と情報交換を実施している。
- ⑤ 私塾主催の入試説明会への教員派遣や、高等学校への「出前講義」、看護学科への高校訪問の受け入れについて積極的に取り組んでいる。

(2) 入学選抜の方法と方針

前期日程および後期日程の一般入試に加え、センター試験を課さない推薦入学 I 特別入試と社会人特別入試を設定している。また 3 年次編入学試験も実施している。入学試験の定員数は、それぞれ次表のように定めている。

試験	募集人員
推薦入学 I 特別入試	10
社会人特別入試	3
一般入試（前期日程）	47
一般入試（後期日程）	20
3 年次編入学試験	10

看護学科では、次のアドミッションポリシーを定めて公開している。

【教育目的】

看護学科は、看護学をはじめ保健・医療・福祉の各分野に貢献できる人間性豊かで倫理観に富む資質の高い看護の専門職を養成するとともに、看護学の教育研究の推進も目指します。

【求める学生像】

人を愛し生命を尊び、全ての人々の健康の向上に寄与する看護職を育成するために以下のような学生を求めています。

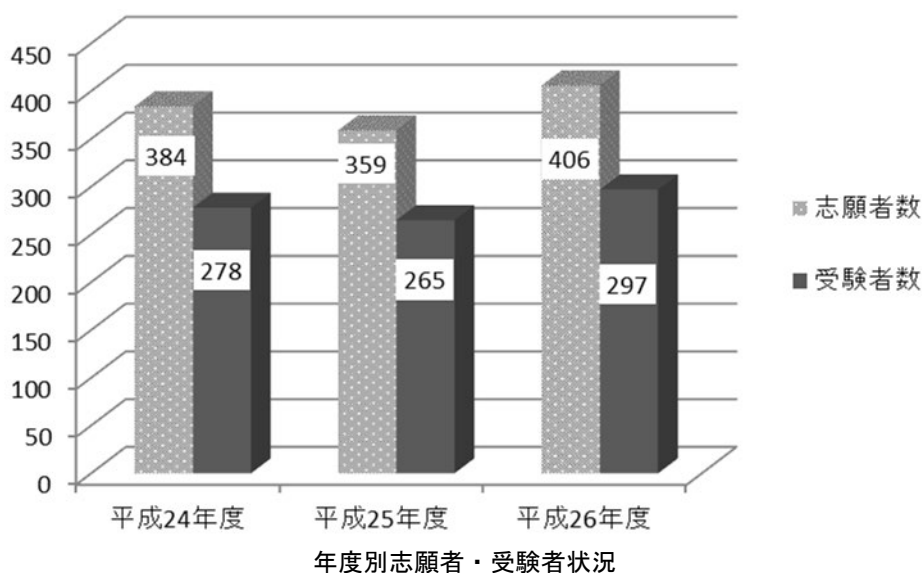
- ①看護への関心があり、看護学の修得に必要、かつ、十分な基礎的学力を有する人
- ②様々な現象に対して、あらゆる角度から観て考え、真実を知ろうという科学的探求心に富み、自己学習意欲が旺盛である人
- ③他者の意見を傾聴し、その気持ちを理解できるように努め、自己の意見を表現できる能力を持っている人
- ④自己の心身の健康に留意し行動できる力を持っている人

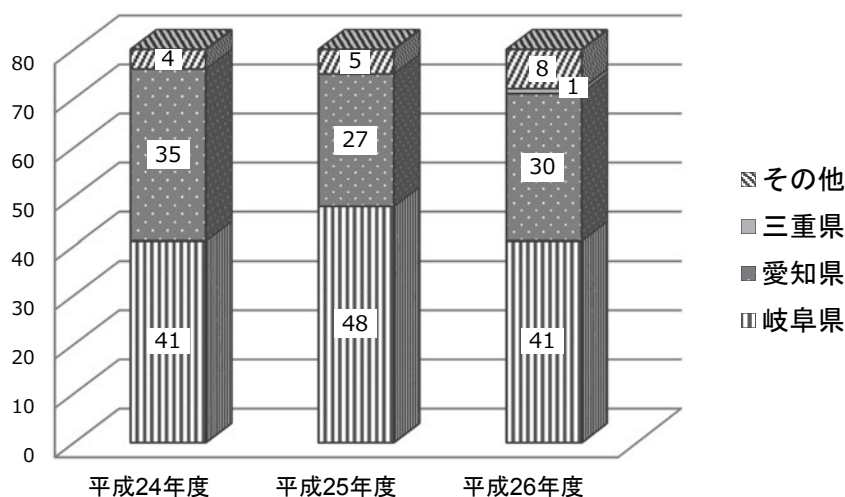
前期日程は基礎的学力により合否判定を行い、後期日程では基礎学力に加えて面接による人物判定を取り入れて合否判定を行っている。推薦入学 I 特別入試と社会人特別入試では小論文による英語読解力と国語力および面接による人物判定を取り入れている。また、3年次編入学試験では国家試験合格レベルの医学・看護に関する基礎専門能力と面接による人物評価によって合否判定を行っている。

(3) 学生の受入れ状況

学生定員充足状況：平成 24 年度から 26 年度までの 3 年間の入学（志願者・入学者）に関する状況は次表のとおりである。

区分		志願者数	受験者数	入学者	県別内訳			
					岐阜県	愛知県	三重県	その他
平成 24 年度	男	28	20	1	0	1	0	0
	女	356	258	79	41	34	0	4
	計	384	278	80	41	35	0	4
平成 25 年度	男	24	21	5	3	2	0	0
	女	335	244	75	45	25	0	5
	計	359	265	80	48	27	0	5
平成 26 年度	男	34	29	7	2	2	1	2
	女	372	268	73	39	28	0	6
	計	406	297	80	41	30	1	8





入学者出身県別内訳

(4) 編入学制度と実態

看護学科では、すでに看護に関する学科あるいは課程において学習してきた学生を対象に、編入学（第3年次）による学生の受け入れ制度を設けている。

平成24年度～平成26年度の編入学（志願者・入学者）に関する状況は次表のとおりである。平成26年度は看護学科の求める条件に該当する入学者は1人であった。

区分		志願者数	受験者数	入学者
平成24年度	男	4	4	0
	女	23	18	0
	計	27	22	0
平成25年度	男	1	1	0
	女	12	6	0
	計	13	7	0
平成26年度	男	3	2	0
	女	11	9	1
	計	14	11	1

(5) 研究生の受入れと実態

学則において研究生の受け入れ制度を設けているが、平成24～26年度に研究生の受け入れは無かった。

2. カリキュラム

看護職の基礎的能力と、科学的思考に裏づけられた看護実践能力、保健・医療・福祉全般にわたる広い見識、そして幅広い教養と豊かな人間性を養うことを目的として、教養教育と専門教育（基礎科目と専門科目）を開講している。

(1) カリキュラムの特徴

- ① 教養科目は、全学共通教育科目として開講
初年次セミナー、人文科学、社会科学、自然科学、複合領域、英語、第2外国語、スポーツ・健康科学及び自由選択科目が開講され、必要単位を考慮しながら、これらの科目から自分の学びたい科目を選択する。
- ② 医学部との合同講義（医学概論）
全人的医療や医療職種の役割などに関して学ぶ。
- ③ 実習や体験に基づいた学習の重視
専門科目は、講義だけでなく体験を踏まえた学習を実施する。

(2) カリキュラムの構築

① 看護実践能力の育成を目指してカリキュラムの構築

- ・平成 23 年 3 月 11 日に文部科学省の「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」から最終報告が出された。その中で「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標（教育内容と学習成果）」が示された。これには看護実践を構成する 5 つの能力群と 20 の実践能力項目が挙げられている。これに基づき、平成 24 年度改正カリキュラムが開始され、看護学科では再度、これらの項目と看護学科での教育内容との整合性を見直し、示された看護実践能力が修得できるように教育内容を各講座間で有機的に関連させながら、看護専門教育を 4 年一貫教育として実施するようにカリキュラムの再構築を目指して検討中である。
- ・1 年次生から 4 年次生までの間に、看護学実習（初期体験実習、基礎看護学実習、急性期看護学実習、慢性期看護学実習、老年看護学実習Ⅰ・Ⅱ、精神看護学実習、小児看護学実習、母性看護学実習、在宅看護学実習、地域看護学実習、統合実習）を通じて看護の計画的な展開能力、特定の健康問題をもつ対象への実践能力、ケアチームの一員として活躍できる基礎的な能力が修得できるように実習を配置している。

② 国家試験受験資格が取得できるカリキュラム構築

1 年次生から 4 年次生までの間に、共通教育及び専門教育の各教科目を学習し、4 年次学年末に実施される看護師国家試験及び保健師国家試験の受験要件を満たす十分な科目と単位数に配慮したカリキュラムを構築してきた。

保健師に関しては、平成 24 年度以降入学生から教育課程を選択制として受験要件を満たすカリキュラムを構築している。

また助産師に関しては、選択科目として助産師国家試験の受験要件を満たすカリキュラムを構築している。

③ テュートリアル教育（少人数によるグループワーク）を取れ入れたカリキュラムを構築

入学当初から社会や医療の変化に伴い生起する多様で複雑な健康問題に対して看護職として自ら課題を探究、その課題の解決に向けて学習できる能力の獲得を目指してテュートリアル教育を取り入れたカリキュラム構築をしている。

④ 看護学専門科目の一部として発展科目を位置づけ、幅広い視野をもった看護実践能力育成に向けて学習する機会を設けること、さらに、科学的思考の修得と将来への発展を期待して、研究方法の講義及び卒業研究の実際を通して、基礎的能力の修得を行うように位置づけている。

(3) 課題と展望

平成 24 年度からの新カリキュラムでは、卒業に必要な単位数を 133 単位から 127 単位に変更し、学生の自己学習に使用できる時間数を確保することを試みた。また、今までの助産師教育課程の選択制（上限 8 名）に加え、保健師教育課程も選択制（上限 20 名）としたことで、保健師として活躍したい学生に焦点をあてた、より効果的な教育・実習内容にできるようにした。将来的な看護学教育認証評価機構（仮）の認証評価の受審に向けて、看護学科のディプロマポリシーとそれに基づく教育内容との整合性を検証していく必要がある。

また、平成 22 年度からは養護教諭 1 種免許取得が可能な教職課程を設置し、平成 24 年度は 7 名、平成 25 年度は 6 名、平成 26 年度は 4 名の学生が教職科目と養護に関する科目を履修している。今後も、4 年次に行われる養護実習等の実習に関する教育環境を全学の教職課程専門委員会と連携しながら整備していく必要がある。

3. 教育方針

(1) 教育改革

看護学科では、平成 24 年度にカリキュラム改正を行った。カリキュラム改正にあたっては、指定規則の変更内容と平成 21 年度からのカリキュラムの問題点を踏まえ以下の改正を行った。①基礎科目を見直し、平成 21 年度カリキュラムの 6 科目から医療英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（医療英語は、20 名の少人数クラス）を新設して 7 科目に精選した。専門科目の見直しを行い、健康の保持増進・治療・回復において様々な役割・機能を担っている医療関係部門（者）の活動の実態を把握し、チーム医療及び看護師として他職種との連携を図るための基礎能力を養う目的で、統合実習を 3 年次後学期から 4 年次前学期へ開講時期を移動した。

(2) 全学共通教育

大学では、専門について深く学ぶとともに、教養を学ぶことが必要である。この目的を達成するため、4年一貫教育体制のもとに、教養教育と専門教育を並行して行っている。教養科目については、全学体制のもとに全学共通教育として進められている。

○全学共通教育の最低修得単位数

科目区分	卒業要件修得単位数
初年次セミナー	2 単位以上
人文科学	4 単位以上
社会科学	4 単位以上
自然科学	4 単位以上
複合領域	4 単位以上
英語	4 単位以上
第 2 外国語	2 単位以上
スポーツ・健康科学	2 単位以上
自由選択科目	4 単位以上
合計	30 単位以上

○全学共通教育の開講時間枠

1 年次前学期

曜日 時限	1	2	3	4	5
月	◎	◎	◎	◎	◎
火	◎	◎	◎	◎	◎
水	◎	◎			
木					
金					

1 年次後学期

曜日 時限	1	2	3	4	5
月	◎	◎	◎	◎	◎
火	◎	◎	◎	◎	◎
水	◎	◎			
木					
金					

◎ : 全学共通教育の開講時間枠

空白 : 専門教育の開講枠

(3) 専門教育

① テュートリアル教育（少人数グループワーク）

従来テュートリアル教育として行ってきた専門教育は、看護学教育独特のカリキュラム特徴と時間割上の過密性、および科目ごとの教員の人数上の問題があり、医学科で実施している本来のテュートリアル教育の方法をとることが難しかった。現在は、テュートリアル教育としていた科目では 5~10 人の少人数グループで課題に取り組む少人数グループワークの形をとっている。グループワークでは教室に加えて 13 のセミナー室を使用して行い、セミナー室では課題に関連した専門書や統計資料を配置してグループワーク中に自由に閲覧可能とした。また、課題に取り組むことや取り組み結果をまとめるために、コンピュータ、プリンタ、スキャナーを各セミナー室に配置して学生が自由に使用できるようにしている。学生が多用しているマイクロソフトワードをセミナー室の全てのパソコンにインストールするなど、学生のニーズにも臨機応変に対応している。

② 看護学臨地実習

必修科目である臨地実習（23 単位）は、卒業要件単位数（127 単位以上）のうち 20%弱を占める非常に重要な専門教育科目であり、看護師・保健師養成には欠かせないものである。そのため、学生の基礎科目や専門科目の学習進度に合わせ、1 年次の初期体験実習による動機付け、2 年生の基礎看護学実習における看護過程の展開、3 年次から 4 年次にかけての分野別実習における看護過程の展開の学習と統合実習というように構成してきた。臨地実習に関わる委員会として実習委員会があり、次世代の看護を担う能力を持った人材を育成するために以下の活動を行ってきた。

- ・臨地実習施設との調整と臨地実習指導者会議の企画および開催
- ・年度ごとの臨地実習計画表の作成

- ・ 臨地実習要項の作成と配布
- ・ 臨地実習ガイドランスの企画と運営
- ・ 臨地実習における病院感染対策マニュアルの改定
- ・ HB 感染症と小児感染症の抗体検査と検査結果の管理
- ・ HB 感染症と小児感染症ワクチン接種の勧奨
- ・ 学生を対象とした感染予防対策に関する特別講義の開催
- ・ 患者および学生の個人情報保護に関する実習記録等取り扱いマニュアルの作成
- ・ 臨地実習に伴う予算に関する検討
- ・ 在学生へのインフルエンザワクチン接種の勧奨と医学科と合同で実施する希望学生へのワクチン接種

平成 25 年には、インフルエンザ等感染症の流行により、臨地実習中の感染症発生に対する予防行動と発生時の対応の詳細について、生体支援センターの協力のもと、内容の見直しを行い改訂した。

地域看護学と母性看護学、助産学の実習は、受け入れ施設の固定化が難しく、施設の変更が多いことが問題点としてあげられるが、他の分野では附属病院以外の施設に関してほぼ安定してきており、施設における指導体制の安定化によって実習における学習効果を高めていくことが可能になってきた。今後、実習指導に関わる教員のさらなる指導能力の向上、実習施設との連携の充実を図ることによって、ディプロマポリシーに合った学生をより多く育成していくことが課題である。

(4) 他大学における授業科目の履修方針と状況

学則第 39 条の規定「教育上有益と認めるときは、他の大学又は短期大学との協議に基づき、学生に当該他大学等の授業科目を履修させることができる。」とあるが、専門科目についての実績はない。

平成 23 年度以降、留学した学生からの申請に基づく単位認定は行っていない。

(5) 在籍、留年、休学、退学の状況

過去 3 年間の状況は次表のとおりである。

区 分	在 籍	留 年	休 学	退学(除籍を含む。)
平成 23 年度	337	9	4	1
平成 24 年度	329	15	3	2
平成 25 年度	326	12	1	1

(6) 教育施設・設備の現状

区 分	面 積	用 途	設 備
看護学科校舎 1 階 講義室 1	134 m ²	講 義	プロジェクター、ビデオ投影装置、マイク設備、資料提示装置
看護学科校舎 3 階 講義室 2	105 m ²	〃	プロジェクター、ビデオ投影装置、マイク設備、資料提示装置
看護学科校舎 3 階 講義室 3	111 m ²	〃	プロジェクター、ビデオ投影装置、マイク設備、資料提示装置
看護学科校舎 4 階 講義室 4	90 m ²	〃 (学部, 大学院)	プロジェクター、ビデオ投影装置、マイク設備
看護学科校舎 5 階 講義室 5	68 m ²	〃	プロジェクター、ビデオ投影装置
総合研究棟 1 階 セミナー室	第 1~9 室 26 m ² ~47 m ²	グループワーク、初期体験実習、自己学習	パソコン、プリンター、スキャナー、書棚 (授業用専門書)
総合研究棟 5 階 セミナー室	第 10~13 室 22 m ² ~45 m ²	グループワーク 自己学習	パソコン、プリンター
総合研究棟 3 階 大学院セミナー室 1・2	2 室 23 m ² ~24 m ²	講 義	
総合研究棟 3 階 大学院生研究室	2 室 23 m ² ~24 m ²	研 究	

区 分	面 積	用 途	設 備
看護学科校舎 2 階 基礎看護実習室 1	258 m ²	基礎看護学実習	ビデオ投影装置, マイク設備, 資料提示装置, ガス乾燥機
看護学科校舎 2 階 老年在宅実習室	92 m ²	老年・在宅看護学実習	バリアフリーモデルルーム
総合研究棟 2 階 成人看護実習室 1	23 m ²	成人看護学実習	
総合研究棟 2 階 成人看護実習室 2	106 m ²	成人看護学実習	ビデオ投影装置, マイク設備, 資料提示装置,
総合研究棟 2 階 成人看護実習室 3	26 m ²	成人看護学実習	書棚
総合研究棟 2 階 基礎看護実習室 2	47 m ²	基礎看護学実習	ビデオ投影装置, マイク設備, 資料提示装置
総合研究棟 3 階 地域看護実習室	94 m ²	地域看護学実習	
総合研究棟 3 階 精神看護実習室 1	53 m ²	精神看護学実習	
総合研究棟 3 階 精神看護実習室 2	26 m ²	精神看護学実習	
総合研究棟 3 階 地域・精神看護実験室 1・2・3・4	4 室 23 m ² ~24 m ²	精神看護学実習	
総合研究棟 4 階 母性・小児看護実習室 1	147 m ²	母性・小児看護学実習	沐浴槽, 乾燥機
総合研究棟 4 階 母性・小児看護実習室 2	26 m ²	母性・小児看護学実習	保育器
総合研究棟 4 階 助産学実習室	93 m ²	助産学実習	沐浴槽, 分娩台
総合研究棟 4 階 母性・小児看護実験室	92 m ²	母性・小児看護学実習	IH クッキングヒーター, パソコン, プリンター

(7) 成績の評価, 認定の基準

成績 (平成 24 年度以降) は, 試験等の結果を総合して以下の区分で評価する。

- 秀 (90 点以上) 合格
- 優 (89 点~80 点) 合格
- 良 (79 点~70 点) 合格
- 可 (69 点~60 点) 合格
- 不可 (60 点未満) 不合格

病気その他正当な理由により定期試験を受けられなかった者について, 願い出により追試験を受けることができる。定期試験及び追試験に不合格となった者について, 1 回に限り再試験を受けることができる。

(8) 看護師等国家試験合格状況

過去 3 年間の合格状況は次表のとおりである。

区分		受験者	合格者	合格率	全国合格率
平成 23 年度	保健師	86	84	97.7	86.0
	助産師	7	7	100.0	95.0
	看護師	76	75	98.7	90.1
平成 24 年度	保健師	80	79	98.8	96.0
	助産師	2	2	100.0	98.1
	看護師	81	75	92.6	88.8
平成 25 年度	保健師	87	85	97.7	86.5
	助産師	4	4	100.0	97.6
	看護師	87	86	98.8	89.8

(9) 学生の就職状況

過去3年間の卒業生の就職状況は次表のとおりである。

区分	看護師	保健師	助産師	進学	その他
平成23年度	70	4	7	3	2
平成24年度	65	3	2	5	6
平成25年度	74	2	4	4	3

4. 学生生活への配慮

(1) 奨学金の種類と採択状況

過去4年間のデータは次表のとおりである。

区分	日本学生支援機構				その他の奨学金	
	第1種		きぼう21		申請者数	採用者数
	申請者数	採用者数	申請者数	採用者数		
平成23年度	20	20	25	25	2	2
平成24年度	9	9	13	13	3	3
平成25年度	11	10	18	18	2	2
平成26年度	21	21	16	16	2	2

(2) 授業料の免除の状況

過去4年間の状況は次表のとおりである。

区分	在籍者数	前学期			後学期		
		申請	免除		申請	免除	
			全額	半額		全額	半額
平成23年度	337	26	9	14	25	10	13
平成24年度	329	27	16	8	24	16	8
平成25年度	326	27	18	5	27	18	7
平成26年度	317	30	15	9	28	22	5

(3) 学生生活相談の体制と実態

学生の個人的な生活に関する相談については、学務係が窓口として対応している。

個人的相談については定められた担当教員が応じ、講座レベルでの指導事項などについては当該講座の教員により対応し、総合的には教務厚生委員会看護学科委員会において対応している。

(4) 課外活動の実態

看護学科で許可している学生団体は存在しないが、岐阜大学教学委員会の認める体育系及び文科系サークル（下表のとおり）、また岐阜大学医学部教務厚生委員会の認める医学部体育系及び文科系サークルに所属して活動する学生は少なくは無く、運動系サークルではマネージャーで活躍する学生が多い。

キャンパスライフが有意義で、健全なものとなるように課外活動を行う学生数の実態の全学サークルについては、次表のとおりであり体育系が40名ほどであり、文科系が30名ほどである。

区分	全学サークル	
	体育系	文化系
平成23年度	41	40
平成24年度	37	28
平成25年度	33	24
平成26年度	43	22

※各年度の5月末での部員数であり、新入部員数を含む。

3 研究活動

〔基礎看護学講座〕

(1) 基礎看護学分野

1. 研究の概要

基礎看護学分野では、看護基礎教育と看護継続教育との関連性の中で、その歴史的背景を踏まえつつ、看護学生及び看護師に必要な看護技術教育に関する研究、看護学生・看護職のキャリア発達、ストレスマネジメントに関する研究、看護師のワークライフバランスに関する研究を行っている。また、看護の場の拡大に伴う在宅における感染管理を含む看護管理に関する研究にも取り組んでいる。更に、19世紀英国における社会の変革を Charles Dickens の *Hard Times* を中心として研究するなど、各自の研究テーマに基づいて取り組んでいる。

- 1) 占領期に焦点をあてた病院管理及び看護技術教育に関する研究に取り組んでいる。
- 2) 看護基礎教育における臨床看護師との協働による看護技術教育、及び身体侵襲を伴う看護技術の教育に関する研究に取り組んでいる。
- 3) 在宅における感染管理に関する教育プログラムの効果検証をテーマに研究に取り組んでいる。
- 4) 19世紀英国における社会の変革を Charles Dickens の *Hard Times* を中心として研究に取り組んでいる。特に労働者階級の人々の生活の視点から、さまざまな社会問題を分析する。また、Charles Dickens がこの時代の社会問題をどのように考え、どのような行動をとり、どのような改革を行うべきとしたかを研究する。
- 5) 基礎看護技術の教育方法の工夫として、教育支援システム AIMS-Gifu を活用した看護技術教育に関する研究に取り組んでいる。また、循環病態学分野の専門家とともに高血圧に関する基礎研究を行っている。
- 6) 看護師のワークライフバランスが実現するための課題、および施策についての研究に取り組んでいる。
- 7) 看護学生、看護職のキャリア発達を促進するためのストレスマネジメント教育のプログラム開発に関する研究に取り組んでいる。

2. 名簿

教授：	滝内隆子	Takako Takiuti
教授：	小松妙子	Taeko Komatsu
准教授：	瀬戸崎康子	Yasuko Setozaki
准教授：	竹下美恵子	Mieko Takeshita
准教授：	飯野矢住代	Yasuyo Iino
助教：	岡本千尋	Chihiro Okamoto
助教：	水野郁子	Ikuko Mizuno

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 滝内隆子. 看護を考え、チームで連携し、実践するための力：看護職としての社会人基礎力の育て方—専門性の発揮を支える3つの能力・12の能力要素— 第1版, 東京：日本看護協会出版会；2012年：15-26.
- 2) 滝内隆子. 「臨床実践能力」と「社会人基礎力」の関係：看護職としての社会人基礎力の育て方—専門性の発揮を支える3つの能力・12の能力要素— 第1版, 東京：日本看護協会出版会；2012年：31-33.
- 3) 滝内隆子. 日本の看護のあゆみ—歴史をつくるあなたへ—第2版改題, 東京：日本看護協会出版会；2014年：140-156.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 田島真智子, 滝内隆子. 新卒看護師の離職要因と離職時期及び新卒看護師・看護学生の職業志望動機—1990年～2010年の文献を通して—, 岐阜看護研究会誌 2012年；第4号：43-48.
- 2) 渡邊郁子, 塚原節子. 職務満足度を高め、働きやすい職場づくりにつながる WLB の取り組み, 看護部長通信 2012年；10巻：65-70.

- 3) 滝内隆子, 小松妙子, 竹下美恵子, 岡本千尋, 渡邊郁子, 小西真人, 伊藤友美, 荻谷三月, 中里綾子. 教員と臨床看護師の協働による看護技術教育の実際, 看護人材教育 2013年; 9巻: 64-71.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 滝内隆子, 小松妙子, 岡本千尋, 渡邊郁子, 中島美奈子, 中川潔美, 田島真智子, 伊藤友美, 荻谷三月. 身体侵襲を伴う看護技術の学生間における体験学習の検討, 岐阜看護研究会誌 2012年; 第4号: 111-119.
- 2) 岡本千尋, 滝内隆子. 実験を導入した看護技術教育の効果—防衛の「皮膚統合性」の授業を通して—, 岐阜看護研究会誌 2012年; 第4号: 121-127.
- 3) 小松妙子, 滝内隆子, 岡本千尋, 渡邊郁子, 中島美奈子, 伊藤友美, 荻谷三月, 中里綾子. 臨床看護師との協働による基礎看護技術教育の実践(第II報), 岐阜看護研究会誌 2012年; 第4号: 137-146.
- 4) 滝内隆子, 大津廣子, 伊藤友美. 占領期の看護技術教育—占領期に使用されたテキストの分析を通して—, 日本看護歴史学会誌 2012年; 25巻: 40-57.
- 5) 前田修子, 滝内隆子, 小松妙子, 河野由美子, 久司一葉. 長期膀胱留置カテーテル管理における訪問看護師の困難経験, 日本在宅ケア学会誌 2012年; 16巻: 68-75.
- 6) 前田修子, 滝内隆子, 小松妙子, 河野由美子, 久司一葉. 長期膀胱留置カテーテル留置舎の訪問看護緊急対応状況の実態, 訪問看護と介護 2012年; 17巻: 888-892.
- 7) 大津廣子, 佐藤美紀, 滝内隆子, 足立みゆき, 学内実習における教員の基礎看護技術の実施状況と指導方法, 愛知県立大学看護学部紀要, 2012年; Vol19: 31-40.
- 8) 長田登美子, 箕浦とき子, 足立久子, 杉浦浩子, 小松妙子. 臨地実習指導場面における看護教員の倫理的意識と倫理的行動の特徴, 岐阜看護研究会誌 2013年; 第5号: 11-21.
- 9) 岡本千尋, 滝内隆子, 小松妙子, 竹下美恵子, 渡邊郁子. 静脈血採血の修得度向上に向けた取り組み—e-learningを活用して—, 岐阜看護研究会誌 2013年; 第5号: 59-64.
- 10) 渡邊郁子, 塚原節子. ワークライフバランスに取り組む病院に勤務する看護師の職務満足度, 日本看護管理学会誌 2013年; 17巻: 37-47.
- 11) 渡邊郁子, 滝内隆子, 小松妙子, 竹下美恵子, 岡本千尋, 伊藤友美, 三輪峰子, 中里綾子. 基礎看護技術演習に協働した臨床看護師の臨地実習指導への影響, 岐阜看護研究会誌 2014年; 第6号: 25-34.
- 12) 滝内隆子, 大津廣子, 伊藤友美, 岡本千尋. 占領期の看護技術教育(その2)—証言に基づく看護教育模範学院における看護技術教育—, 日本看護歴史学会誌 2014年; 27号: 99-109.
- 13) 竹下美恵子, 滝内隆子, 小松妙子, 岡本千尋, 渡邊郁子. 臨床看護師との協働による看護技術教育の学生による評価, 岐阜看護研究会誌 2014年; 第6号: 43-51.

原著 (欧文)

- 1) Maeda S, Takiuti T, Komatsu T, Kohno Y, Kyuji K. Current status of long-term indwelling urinary-catheter management by visiting nurses. Int J Urological Nursing. 2013;7:76-84. IF 0.186
- 2) Maeda S, Takiuti T, Komatsu T, Kohno Y. Efficacy of the 'Long-term Urinary Catheter Management Training Program': A Pilot Study. Int J Urological Nursing Article first. 2014,11(DOI: 10.1111/Ijum.12063)

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 大津廣子, 研究分担者: 滝内隆子, 足立みゆき他; 科学研究費補助金基盤研究(C): 看護技術を教える教員・臨床看護師の看護技術教育力の育成・向上プログラムの開発; 平成 22-25 年度; 4,899 千円(479: 3,938: 328: 154 千円)
- 2) 研究代表者: 前田修子, 研究分担者: 滝内隆子, 小松妙子他; 科学研究費補助金基盤研究(C): 訪問看護師向け「膀胱留置カテーテル管理」研修プログラムの開発と効果検証; 平成 22-24 年度; 4,834 千円(1,504: 1,250: 2,080 千円)
- 3) 研究代表者: 竹下美恵子; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C): 看護学生の二次的ストレスに伴う共感疲労のストレスマネジメント教育プログラムの開発; 平成 24-26 年度; 910 千円(260: 130: 520 千円)
- 4) 研究代表者: 渡邊郁子; 大学活性化経費(科研採択支援): 看護師のワークライフバランスを考慮した生涯就労モデルの開発; 平成 24 年度; 470 千円
- 5) 研究代表者: 岡本千尋; 大学活性化経費(科研採択支援): Blended-Learning を取り入れた看護技術教育システムの開発; 平成 25 年度; 700 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

- 1) 研究者名：滝内隆子，小松妙子，岡本千尋，渡邊郁子，中島美奈子，棚橋一将，内田佳伯：看護技術シミュレーターの開発(1)；平成 23-24 年度；150 千円；(株)タナック

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

滝内隆子：

- 1) 日本看護歴史学会理事(～現在)
- 2) 日本看護学教育学会評議員(～現在)

小松妙子：

- 1) 日本看護歴史学会第 28 回学術集会企画委員，企画委員長(平成 25 年 3 月～平成 26 年 9 月)

竹下美恵子：

- 1) 日本看護歴史学会第 28 回学術集会企画委員，実行委員長(平成 25 年 3 月～平成 26 年 9 月)

岡本千尋：

- 1) 日本看護歴史学会第 28 回学術集会企画委員(平成 25 年 3 月～平成 26 年 9 月)

水野郁子：

- 1) 日本看護歴史学会第 28 回学術集会企画委員(平成 25 年 3 月～平成 26 年 9 月)

2) 学会開催

滝内隆子：

- 1) 日本看護歴史学会第 28 回学術集会(平成 26 年 9 月，岐阜)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

滝内隆子：

- 1) 日本看護歴史学会第 27 回学術集会(平成 25 年 8 月，京都，会長講演「宣教看護婦リンダ・リチャーズが京都で実践した看護教育」座長)
- 2) 日本看護歴史学会第 28 回学術集会(平成 26 年 9 月，岐阜，会長講演「占領期の看護技術の教育 現在の看護技術の始まり」学術集会長)

小松妙子：

- 1) 第 44 回日本看護学会－看護教育－学術集会(平成 25 年 10 月，埼玉，シンポジウム「中堅看護師のキャリア発達支援～実践例からの提案～」シンポジスト)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 竹下美恵子：「研究室から 大学はいま」看護師のストレス管理分析：岐阜新聞(2013年8月13日)

12. 自己評価

評価

- 1) 基礎看護分野では看護技術修得のための教育と研究に力を入れ、中でも臨床看護師との協働による看護技術教育、身体侵襲を伴う看護技術の教育に関する取り組みは、論文として成果を発表している。また、臨床看護師との協働による看護技術教育の取り組みは評価され、県外からの講演や学会のシンポジストの依頼がきている。
- 2) 占領期に焦点をあてた病院管理並びに看護技術教育に関する研究は学会発表や論文として成果を発表している。中でも占領期の看護技術教育については看護史を研究領域とする研究者から史料として残す必要性を要望され、当時の関係者にインタビューを実施するなど研究を進めている。
- 3) 訪問看護師を対象とした在宅の感染管理に関する研修会の効果検証は学会発表及び論文として成果を発表している。
- 4) 看護職のワークライフバランスに関する研究成果を発表している。早急に研究結果を論文にまとめ、看護職の確保定着に貢献できるように研究を継続していく。
- 5) 3年間での本分野の構成員の異動・欠員等で、一定の職場環境、教育活動を高めることに翻弄し、十分な研究活動のできる環境を整えることは十分とは言い切れない状況である。
- 6) 看護学生のストレスマネジメント教育プログラムの開発に関する研究について、データ収集の途中で滞っている。今後は看護職を対象としても研究を進めるとともに学会発表、論文投稿をしていく必要がある。
- 7) 教育支援システム AIMS-Gifu を活用して、授業以外での学生の自己学習を支援している。これらの取り組みは、学生からの支持を得て AIMS-Gifu を活用事例 FD 意見交換会で紹介するに至った。

現状の問題点及びその対応策

- 1) 欠員教員の確保に努め、構成員が十分な中で教育活動及び研究活動に取り組めるように環境を整えていく。
- 2) 看護基礎教育の卒業時に求められている看護技術の到達度に学生を到達させるには自己学習できる環境・教材等が不足している。自己学習できる環境の整備及び教材の確保と併せて臨床看護師や在校生と協働した指導体制の整備をする。
- 3) 教員の看護技術力が低下しているため、臨床研修等の機会を確保し看護技術力を向上させる。
- 4) 研究と教育に費やす時間配分のバランスが悪い。今後は、自己の能力を見極め、バランス良く研究と教育に取り組む必要がある。
- 5) 学会誌やインパクトファクターの高い雑誌への論文投稿を実現させなければならない。そのためには、学会発表や雑誌の購読を積極的に行う。

今後の展望

- 1) 平成24年度からのカリキュラムの見直しを進め、基礎看護学分野の教育内容・方法、学習の順序性を見直しを行い、教育の質の向上に努める。
- 2) 教員それぞれが取り組んでいる研究を推進するとともに、これまで取り組んできた基礎看護学分野の基礎看護技術教育の教育内容・方法の充実、AIMS-Gifu を活用した教育の充実につながる研究をさらに共同で進めていきたい。
- 3) 研究費が獲得できるよう、医療・看護の動向を把握し、意義の高い研究テーマに取り組んでいきたい。

(2) 生命機能学分野

1. 研究の概要

本分野では、電子顕微鏡や蛍光顕微鏡に加え、分子生物学やコンピュータの技術を用いて、組織形態から分子レベルにまで至る研究を行っている。形態レベルの研究では、各種動物の舌乳頭及び上皮剥離後の結合組織の表面構造を走査型電子顕微鏡により観察し、主に比較解剖学的側面から食物及び咀嚼方法との関係について研究している。一方、分子レベルの研究としては、新たに見出した中心体タンパク質 CLERC の解析を通して、中心体や中心子機能の進化的特性の解明を目指している。さらに、ヒトを含めた多様な生物種のゲノム情報を活用することにより、生体分子の分子進化経路の解析や、祖先タンパク質の再現、微生物の病原因子の解析等、コンピュータを用いたバイオインフォマティクスに基づく研究を推進している。

2. 名簿

教授： 江村正一 Shoichi Emura
教授： 武藤吉徳 Yoshinori Muto

3. 研究成果の発表

著書 (和文)
なし

著書 (欧文)
なし

総説 (和文)
なし

総説 (欧文)
なし

原著 (和文)

- 1) 江村正一. カモ科に属する 4 種類の鳥の舌表面の形態について, 医学と生物学 2012 年; 156 巻: 438-442.
- 2) 江村正一. クロヅルの舌表面の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2012 年; 156 巻: 443-446.
- 3) 江村正一. ヒョウモントカゲモドキとフトアゴヒゲトカゲの舌の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2012 年; 156 巻: 650-654.
- 4) 江村正一. ブラックバックの舌の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2012 年; 156 巻: 655-659.
- 5) 江村正一. コサンケイの舌表面の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2012 年; 156 巻: 740-744.
- 6) 江村正一. シュバシコウの舌表面の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2012 年; 156 巻: 745-749.
- 7) 吉崎純夫, 梅村俊彰, 武藤吉徳. パーソナルコンピュータを用いた看護動作の画像解析法, 岐阜看護研究会誌 2012 年; 4 巻: 9-12.
- 8) 江村正一. シロフクロウの舌表面の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2013 年; 157 巻: 38-42.
- 9) 江村正一. ニホンジカの舌の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2013 年; 156 巻: 43-47.
- 10) 江村正一. コジュケイの舌表面の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2013 年; 156 巻: 465-469.
- 11) 江村正一. ラマの舌の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2013 年; 156 巻: 470-474.
- 12) 江村正一. カラフトフクロウの舌表面の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2013 年; 156 巻: 543-547.
- 13) 江村正一. コフランミンゴの舌表面の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2013 年; 156 巻: 548-552.
- 14) 江村正一. バーバリーシープの舌の走査型電子顕微鏡による観察, 形態・機能 2014 年; 12 巻: 64-68.

原著 (欧文)

- 1) Chen H, Emura S, Nagasaki S, Kubo K. Double inferior vena cava with interiliac vein: A case report and literature review. *Okajimas Folia Anat Jpn.* 2012;88:147-151.
- 2) Emura S, Okumura T, Chen H. Scanning electron microscopic study on the tongue in the scarlet macaw (*Ara macao*). *Okajimas Folia Anat Jpn.* 2012;89:57-60.

- 3) Emura S, Okumura T, Chen H. Morphology of the lingual papillae in the Egyptian rousette bat (*Rousettus aegyptiacus*). *Okajimas Folia Anat Jpn.* 2012;89:61-66.
- 4) Emura S, Okumura T, Chen H. Morphology of the lingual papillae in the jaguar. *Okajimas Folia Anat Jpn.* 2013;89:93-97.
- 5) Emura S, Okumura T, Chen H. Morphology of the lingual papillae in the giraffe. *Okajimas Folia Anat Jpn.* 2013;89:99-103.
- 6) Emura S, Okumura T, Chen H. Morphology of the lingual papillae in the fishing cat. *Okajimas Folia Anat Jpn.* 2014;90:79-83.
- 7) Emura S, Okumura T, Chen H. Morphology of the lingual papillae in the brush-tailed rat kangaroo. *Okajimas Folia Anat Jpn.* 2014;90:85-88.
- 8) Emura S, El Bakary N.E.R. Morphology of the lingual papillae of Egyptian buffalo (*Bubalus bubalis*). *Okajimas Folia Anat Jpn.* 2014;91:13-17.
- 9) Emura S, Sugiyama K. Morphology of the lingual papillae of the black-backed jackal (*Canis mesomelas*). *Okajimas Folia Anat Jpn.* 2014;91:19-24.
- 10) Yoshizaki S, Umemura T, Tanaka K, Watanabe K, Hayashi M, Muto Y. Genome-wide evidence of positive selection in *Bacteroides fragilis*. *Comput Biol Chem.* 2014;52:43-50.

IF 1.595

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

なし

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

江村正一：

- 1) 日本解剖学会評議員(～現在)
- 2) 日本臨床分子形態学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

武藤吉徳：

- 1) TSWJ (Bioinformatics domain) ; Editorial Board(～現在)
- 2) Advances in Planar Lipid Bilayers and Liposomes ; Editorial Board(～平成 26 年)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

研究内容は、組織形態から生体分子のレベルまで広範囲に亘るが、分野内の教員間での共同研究は為されていない。また、研究成果は形態及び生体分子レベル共に少数ながら国際的にみても独自の成果が公表されている。しかし、少人数の分野であることもあり、出版数は比較的少ない。

現状の問題点及びその対応策

形態領域（電子顕微鏡）における研究の進行速度は、研究材料としての動物の器官及び組織の確保次第であり、今後これまで以上に全国の動物園及び各自治体の協力を得たいと考えている。一方、生体分子の研究では、ここ一、二年でコンピュータを用いたバイオインフォマティクスに関する研究手法の確立を進めてきており、少しずつ研究成果が得られるようになりつつある。今後は、このバイオインフォマティクス技術を活用して、ゲノム情報を用いた様々な解析を可能にしたい。

今後の展望

電子顕微鏡により各種動物の舌形態をさらに多く観察し、舌の構造と食性との関係を明らかにしたい。他方、生体分子研究については、多様なゲノム情報を活用できるバイオインフォマティクスに基づく解析を積極的に導入し、中心体タンパク質の機能や分子進化について明らかにしたい。また、遺伝子ネットワークについての解析手法を確立し、学内の他の研究室との積極的な共同研究を行い、研究成果の奥行きを深めていきたい。

〔母子看護学講座〕

(1) 母性看護学分野

1. 研究の概要

大法啓子：

母乳育児支援，地域における助産師活動，母性看護教育に関する研究

今田葉子：

助産師が提供する周産期母子ケア，母性看護学教育・技術に関する研究

大原良子：

母性看護学教育・助産学教育に関する研究

金子洋美：

妊娠・出産における安全性と快適さに関する研究，周産期の家族に関する研究，母性看護学教育に関する研究

長谷川文子：

分娩時出血量に関する研究，若年女性に対する健康教育について

三尾亜喜代：

臨地実習における教育方法に関する研究，分娩体位に関する研究

2. 名簿

教授：	大法啓子	Keiko Onori
准教授：	今田葉子	Yoko Imada
准教授：	大原良子	Ryoko Ohara
助教：	金子洋美	Hiromi Kaneko
助教：	長谷川文子	Ayako Hasegawa
助教：	三尾亜喜代	Akiyo Mio

3. 研究成果の発表

著書（和文）

なし

著書（欧文）

なし

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 三尾亜喜代，曾田陽子，小松万喜子．看護学生が認識する看護師の看護職者としてのロールモデル行動とその理由，日本看護学教育学会誌 2014年；23巻：31-45.

原著（欧文）

なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：川崎晴久，連携研究者：西本 裕，今田葉子，後藤多郎；科学研究費補助金基盤研究(B)：ハンドハプティックインターフェイスによる手技伝達の研究；平成 23-25 年度；19,630 千円(7,280：6,630：5,720 千円)
- 2) 研究代表者：川崎晴久，研究分担者：毛利哲也，遠藤孝浩，西本 裕，今田葉子，川合隆光，上木諭；総務省戦略的情報通信研究開発推進事業(SCOPE)：意志合意形成に基づくロボットハンド遠隔操作システムの研究開発；平成 24-26 年度；60,000 千円(20,000：20,000：20,000 千円)
- 3) 研究代表者：長谷川文子；科学研究費助成事業若手研究(B)：女子大学生に対する子宮頸がん教育プ

プログラムの開発；平成 25-27 年度；2,990 千円(1,300：780：910 千円)

- 4) 研究代表者：三尾亜喜代；科学研究費補助金基盤研究(C)：不妊治療を終結した子どもを持たない女性の健康感・幸福感向上に向けた看護支援の検討；平成 25-27 年度；2,470 千円(780：1,040：650 千円)
- 5) 研究代表者：金子洋美；科学研究費補助金基盤研究(C)：マタニティ・ヨガの妊娠・分娩改善効果に関する科学的検証；平成 26-29 年度；3,380 千円(1,040：650：650：1,040 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

- 1) 金子洋美：ストレッチ評価用器具(実用新案登録第 3193887 号)(平成 26 年度)

6. 学会活動

1) 学会役員

大法啓子：

- 1) 岐阜県母性衛生学会幹事(~現在)

三尾亜喜代：

- 1) 日本看護科学学会第 34 回学術集会実行委員(平成 26 年)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

大法啓子：

- 1) 第 29 回岐阜県母性衛生学会学術集会(平成 26 年 1 月，一般演題 A 座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

大法啓子：

- 1) 岐阜県立看護大学研究倫理審査委員(平成 24 年度~現在)
- 2) 岐阜母乳の会幹事(~現在)

今田葉子：

- 1) 人間医工学研究開発センター人間支援ロボティクス部門組織委員(~現在)

金子洋美：

- 1) 岐阜県保健師助産師看護師短期実習指導者講習会特定分野講師(平成 26 年度)

10. 報告書

- 1) 大法啓子：「未来を切り開き明日にはばたく」キャリア・就職白書 2013 岐阜大学 第 2 部 学部における就職・キャリア形成の取り組み 医学部看護学科：42

11. 報道

1) 大法啓子：「研究室から 大学はいま」：岐阜新聞(2014年2月4日)

12. 自己評価

評価

- ・授業や実習内容・方法の充実や改善を行った。
- ・助産師教育課程のカリキュラム改正に伴う準備を進めてきた。研究についてはデータ収集及び分析結果を整理し、学会発表に繋げたい。
- ・学会での発表を実施し、論文にまとめることが出来ている。
- ・研究成果を反映させた実践能力向上にむけた教育の充実を図った。
- ・研究では機器の開発を行い、その有用性と簡便性が実証できた。被験者数を増やしてデータを蓄積している。
- ・カリキュラム変更に伴い来年度より新たに開始される実習に向けての学内外の調整を行ってきた。今後も実習開始に向けた中心的役割を担っていく。
- ・研究に関して、来年度は総括を行う最終年度であるため計画に沿って進めていきたい。

現状の問題点及びその対応

- ・教育活動と研究・社会活動の両立を図る。

今後の展望

- ・分野の一員として円滑な運営，さらなる研究や社会活動発展のために自己研鑽する。
- ・新たな研究分野や学外の研究者との共同研究など新たな研究課題を見いだせるよう努力する。
- ・被験者数を増大してデータを蓄積し，安産に対するヨガ運動の身体的効果を明らかにしていく。

(2) 小児看護学分野

1. 研究の概要

小児看護学分野では、以下に示すような研究、または研究に付随する活動を行ってきた。

- ・ アトピー性皮膚炎をもつ幼児の掻痒感と掻破行動とその母親の蓄積的疲労の特徴に関する研究
- ・ 協働によって食物アレルギーをもつ学童が学校生活に適応していくためのモデルを開発する研究
- ・ アレルギーをもつ子どもと家族への療養能力向上を目指した、アレルギー専門職（アレルギーエデュケーター）への教育および研究支援
- ・ 子どもと家族主体の在宅ケアにおけるケアモデルの開発及び実践推進システムに関する研究
- ・ 小児期発症の慢性疾患患者の成人移行に関する研究
- ・ 障害児入所施設に入所する虐待やネグレクトを受けた子どもに支援を行う専門職が経験する困難に関する研究
- ・ 虐待を受けた子どもへの治療的養育環境と子どもの変化過程に関する研究

2. 名簿

教授： 杉浦太一 Taichi Sugiura
准教授： 田中千代 Chiyo Tanaka
助教： 大橋麗子 Reiko Ohashi

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 杉浦太一. 第4章 治療援助技術 10. 牽引・固定法：浅野みどり編. 根拠と事故防止からみた 小児看護技術, 東京：医学書院；2012年：439-461.
- 2) 杉浦太一. 第5章 救急手技 2. 頭部外傷：浅野みどり編. 根拠と事故防止からみた 小児看護技術, 東京：医学書院；2012年：477-481.
- 3) 杉浦太一. 第5章 救急手技 8. 熱中症(暑熱障害)：浅野みどり編. 根拠と事故防止からみた 小児看護技術, 東京：医学書院；2012年：503-507.
- 4) 杉浦太一. 第2章 幼児期 21. ネフローゼ症候群：石黒彩子, 浅野みどり編著. 発達段階からみた 小児看護過程+病態関連図 第2版, 東京：医学書院；2012年：328-342.
- 5) 杉浦太一. 第3章 学童期～思春期 32. 急性糸球体腎炎(急性腎炎症候群)：石黒彩子, 浅野みどり編著. 発達段階からみた 小児看護過程+病態関連図 第2版, 東京：医学書院；2012年：507-518.
- 6) 杉浦太一. 第3章 学童期～思春期 34. 若年性特発性関節炎：石黒彩子, 浅野みどり編著. 発達段階からみた 小児看護過程+病態関連図 第2版, 東京：医学書院；2012年：545-557.
- 7) 杉浦太一. 第3章 学童期～思春期 35. 骨折：石黒彩子, 浅野みどり編著. 発達段階からみた 小児看護過程+病態関連図 第2版, 東京：医学書院；2012年：562-574.
- 8) 杉浦太一. 第3章 看護学生に伸ばしたい社会人基礎力-4つの能力・13の能力要素と行動指標、教員・指導者の関わり-：箕浦とき子, 高橋 恵編著. 看護職としての社会人基礎力の育て方-専門性の発揮を支える3つの能力・12の能力要素, 東京：日本看護協会出版会；2012年：42-73.
- 9) 杉浦太一. 9章3節 バイタルサインの測定：市江和子編. 小児看護学, 東京：オーム社；2014年：140-148.
- 10) 杉浦太一. 9章4節 身体測定：市江和子編. 小児看護学, 東京：オーム社；2014年：149-153.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 田中千代, 丸光 恵. 成人移行期医療の看護サイドからのサポート, 肝胆膵 2014年；69巻：567-575.
- 2) 大橋麗子, 田中千代. 親・家族になる家庭を支える取組み 医療型障害児入所施設における「親子入所」を通じた支援, 小児看護 2014年；37巻(7月臨時増刊号)：1015-1020.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 杉浦太一, 大橋麗子. 蓄積的疲労からみたアトピー性皮膚炎幼児の母親の特徴, 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌 2014年；12巻：285-293.
- 2) 大橋麗子. 肢体不自由児施設の専門職が経験する被虐待児支援における困難の構造, 子どもの虐待とネグレクト 2014年；16巻：68-77.

原著（欧文）
なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：大橋麗子；科学研究費補助金研究活動スタート支援：肢体不自由児施設における被虐待児の段階的支援システムの解明；平成 23-24 年度；1,040 千円(520：520 千円)
- 2) 研究代表者：山田智子(中部大学生命健康科学部)，研究分担者：浅野みどり(名古屋大学医学系研究科)，杉浦太一，石井真(中部大学生命健康科学部)；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：食物アレルギーを持つ学童の適応的な学校生活にむけた協働モデルの構築；平成 25-27 年度；4,680 千円(2,860：1,040：780 千円)
- 3) 研究代表者：大橋麗子；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：医療型障害児入所施設における被虐待児の地域移行・自立支援に関する研究；平成 25-28 年度；2,600 千円(780：650：650：520 千円)
- 4) 研究代表者：奈良間美保(名古屋大学医学系研究科)，研究分担者：大塚弘子(名古屋大学医学系研究科)，松岡真里(高知大学医学部)，田中千代，堀 妙子(京都橘大学)；科学研究費助成事業基盤研究(B)：子どもと家族主体の在宅ケアを支えるケアモデル開発と実践推進システムの考案；平成 25-28 年度；6,500 千円(2,990：1,170：1,170：1,170 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

杉浦太一：

- 1) 一般社団法人日本看護研究学会社員：評議員(～平成 24 年 4 月)
- 2) 日本看護医療学会評議員(～現在)
- 3) 一般社団法人日本小児看護学会社員(～現在)
- 4) 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会認定小児アレルギーエドゥケーター教育研修委員会委員(平成 24 年 7 月～現在)
- 5) 日本家族看護学会評議員(平成 25 年 4 月～現在)
- 6) 日本看護医療学会理事(平成 26 年 4 月～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

杉浦太一：

- 1) 日本看護研究学会雑誌；編集委員(～現在)

田中千代：

- 1) 日本小児看護学会；編集委員(平成 25 年 9 月～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

杉浦太一：

- 1) 第 15 回日本子ども健康科学会(平成 25 年 12 月，名古屋，シンポジウム④「アレルギーエドゥケーター実践報告：大学のアレルギーエドゥケーターの立場から」シンポジスト)
- 2) 第 3 回岐阜県小児在宅医療研究会(平成 26 年 12 月，岐阜，パネルディスカッション「在宅看護の現

場における取組と課題」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

研究は、少しずつではあるが進められており、その成果を論文として公表することができている。著書は、研究成果に関係するものというよりも看護学生や看護師のための実践に役立つ内容となった。また、学会活動や社会貢献としても実績をあげられてきた。

現状の問題点及びその対応策

3名の教員で、学生や院生の教育、学内運営、研究を行っている現状である。しかし、臨床看護学の研究では研究フィールドが学外にあることと1年の半分をかけて行う臨地実習指導も附属病院だけでなく学外にあり、どうしても研究に割く時間が制限されることから、十分に研究に取り組む時間を確保することができないことが現状である。3名の教員が取り組んでいる研究課題が異なることもあり、教育や学内運営と合わせて行っていく工夫が必要と考えられる。また、岐阜大学の活性化経費を含む競争的研究資金を継続して獲得していくことが課題としてあげられる。

今後の展望

行ってきた研究は今後も継続・発展させていく必要性のあるものばかりであるため、研究に割く時間を確保しながら、取り組みを続けていく予定である。今後、運営交付金の中で使用できる研究費は次第に削減されることが予測されるため、競争的研究資金の獲得関しても積極的に行動していく所存である。

〔成人・老年看護学講座〕

(1) 成人看護学分野（慢性期）

1. 研究の概要

臨床における看護の質の向上のために臨床で得られた知の科学的分析, さらに慢性看護学の学問の確立と発展に貢献できるよう研究に取り組んでいる。具体的には, 1)慢性的な病を持ちながら生活する糖尿病患者の QOL, QOL の向上や再構築に求められる看護の理論的探索とそれに依拠する新たな理論開発, 糖尿病患者の生活習慣改善行動に対するやる気に関する研究, 2)看護学生の死生観を育むための教育のあり方に関する研究, 3)血液・造血器悪性腫瘍疾患により造血幹細胞移植を受ける患者が迎える心理的体験のプロセスの理解と, 移植医療に携わる臨床心理士による支援の現状と課題に関する研究, 4)看護師のキャリア開発を支援するためのプログラムの開発に関する研究, 5) COPD 患者と家族の支援に関する研究, 6)がん患者の症状マネジメントなどである。

2. 名簿

教授： 足立久子 Hisako Adachi
准教授： 石黒千映子 Chieko Ishiguro
助教： 岩屋早苗 Sanae Iwaya
助教： 杉村鮎美 Ayumi Sugimura

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 野田洋子, 足立久子編修. 二分脊椎女性のためのリプロラクティブヘルスケアガイドブック(思春期女性編) 平成 25 年 3 月, 二分脊椎女性のためのリプロラクティブヘルスケア研究会; 2013 年: 1-57.
- 2) 足立久子. 病の慢性性とヒューマンケア: 清水裕子編修. ヒューマンケアと看護, ナカニシヤ出版; 2013 年: 87-94.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 庄(岩屋)早苗, 足立久子. COPD 患者とその家族に関する研究の現状, 岐阜看護研究会誌 2013 年; 5 号: 1-10.
- 2) 水谷聖子, 東野督子, 大野晶子, 柿原加代子, 杉村鮎美, 石黒千映子, 三河内憲子. 教育計画・研究支援環境からとらえた大規模病院における看護師のキャリア支援, 日本赤十字豊田看護大学紀要 2014 年; 9 巻: 95-104.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 庄(岩屋)早苗, 後閑容子. Gender に対する教育への反映 性同一性障害に対する看護学生の認識比較調査, 岐阜看護研究会誌 2012 年; 4 号: 85-92.
- 2) 杉村鮎美, 安藤祥子. 緩和ケア病棟における呼吸困難マネジメントと看護師の知識・技術・態度の関連, 日本がん看護学会誌 2013 年; 27 巻: 52-59.
- 3) 野田洋子, 足立久子. 思春期から性成熟期にある二分脊椎女性の月経の経験, 岐阜看護研究会誌 2013 年; 5 巻: 23-32.
- 4) 長田登美子, 箕浦とき子, 足立久子, 杉浦浩子, 小松妙子. 臨地実習指導場面における看護教員の倫理的意識と倫理的行動の特徴, 岐阜看護研究会誌 2013 年; 5 巻: 11-21.
- 5) 杉村鮎美, 水谷聖子, 柿原加代子, 大野晶子, 東野督子, 石黒千映子, 三河内憲子. 赤十字医療施設における中堅看護師のキャリア開発に関する意識, 日本赤十字豊田看護大学紀要 2014 年; 9 巻: 89-94.
- 6) 岩崎淳子, 足立久子. 家族支援のない糖尿病患者の自己効力感と支援に対する思い, 岐阜看護研究会誌 2014 年; 1 巻: 9-14.
- 7) 野田洋子, 足立久子, 道木恭子, 林 恵子, 鈴木幸子, 松宮良子, 小野敏子, 松野智香子, 廣瀬玲子. 二分脊椎女性のためのリプロダクティブヘルスケアガイドブック(思春期女性編)の作成, 岐阜看護研究会誌 2014 年; 1 巻: 1-7.
- 8) 鈴木幸子, 松野智香子, 野田洋子, 足立久子. 二分脊椎女性とその親の性に対する思い, 思春期学 2014 年; 32 巻: 317-326.

原著（欧文）

なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：野田洋子，研究分担者：足立久子；科学研究費補助金基盤研究(C)：二分脊椎女性のリプロダクティブヘルスケアプログラムの実践と評価；平成 22-24 年度；4,160 千円(2,340：1,040：780 千円)
- 2) 研究代表者：長江美代子，研究分担者：服部希恵，岩瀬貴子，古澤亜矢子，石黒千映子，田中敦子，中村千鶴，安藤智子；科学研究費助成事業(挑戦的萌芽研究)：自殺予防のアウトリーチに関する研究 - 街角メンタルヘルス - ；平成 23-25 年度；2,990 千円(1,300：780：910 千円)
- 3) 研究代表者：長江美代子，研究分担者：服部希恵，田中敦子，石黒千映子，古澤亜矢子，佐藤仁和孩子，坪ノ内千鶴，加納尚美，甘佐京子，土田幸子，平田弘美，石田ユミ，笹原艶子，岸利江子，渡辺正樹，伊藤加奈子，佐藤利子；科学研究費助成事業(基盤研究(B))：暴力被害者に対する被害直後からの継続したケアに関する研究 - 自殺予防アウトリーチ - ；平成 25-27 年度；13,390 千円(5,590：3,900：3,900 千円)
- 4) 研究代表者：杉村鮎美，研究分担者：安藤詳子；平成 26 年度安田記念医学財団癌看護研究助成：肺がん患者の呼吸困難に対するケア実践促進要因；平成 26 年度；1,000 千円
- 5) 研究代表者：小野敏子，研究分担者：足立久子，野田洋子，道木恭子，土居悦子；科学研究費補助金基盤研究(C)：二分脊椎児者のセクシャル／リプロダクティブヘルス／ライツ教育の実践と評価；平成 26-28 年度；4,160 千円(2,080：1,170：910 千円)
- 6) 研究代表者：石黒千映子；科学研究費助成事業(挑戦的萌芽研究)：造血幹細胞移植を受ける患者の心的世界の変遷への理解とその支援に関する研究；平成 26-28 年度；2,343 千円(1,218：620：505 千円)
- 7) 研究代表者：石黒千映子，研究分担者：杉村鮎美，岩屋早苗，足立久子；岐阜大学活性化経費(教育)：看護基礎教育における終末期ケアに関する教育 学生の死生観の醸成をめざして；平成 26 年度；320 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

足立久子：

- 1) 日本慢性看護学会評議員(～平成 24 年 3 月)
- 2) 日本ヒューマン・ケア心理学会理事(～平成 26 年 3 月)
- 3) 日本看護研究学会評議員(平成 26 年 4 月～現在)

石黒千映子：

- 1) 日本緩和医療学会代議員(平成 24 年 2 月～平成 26 年 1 月)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

- ・ 4名の教員で、教育と研究活動を行っている。講義、半年に渡る臨床実習指導など時間的余裕のない厳しい条件の中で、教育に関しては、ほぼ概ね達成できていると思われる。研究に関しては、各教員、少ないながらも業績を積み上げるよう努力している。慢性期分野として取り組んでいる研究も、岐阜大学の助成金を得て1年が過ぎ、その成果は国内の全国的な学会で2つの発表をしており、看護領域の学会誌への投稿を目指して論文にまとめている段階である。研究についてもほぼ概ね達成できていると思われる。
- ・ 平成26年は、研究を行うための準備と、調査の実施が中心であった（看護学生の死生観に関する研究、看護師のキャリア開発の支援に関する研究、暴力被害者への被害直後からの支援に関する研究）。論文等の成果としては現れていないが、来年以降に成果を示すことができると考えている。しかし、競争的資金を獲得している研究（造血幹細胞移植を受ける患者に関する研究）については、研究を行うための準備が進んでおらず、計画の進行が遅れている。来年は、この遅れを挽回し、着実に研究を進めていきたい。

現状の問題点及びその対応策

- ・ 時間的余裕のない厳しい条件の中で、研究活動の時間の確保は難しいが、なんとか教育、研究共にほぼ概ね達成できていると思われる。しかしながら、教育と研究の質の担保と向上を目指して、さらなる努力を継続する必要がある。
- ・ 活動全体に占める研究活動の割合が、予定よりも低い状況にあった（教育活動等に占める割合が、実際には多くなっていた）。それぞれの活動内容と割合を見直し、研究活動に占める割合をきちんと確保できるようにしたい。また、研究活動の中でも占める割合に大きな偏りが生じていた。とくに介入研究の実施にあたってたくさんの研修を受ける必要があり、それによって他の研究活動への配分が減ってしまったことは否めない。来年も研修が続くが、研究活動の中での配分を見直し、予定より進行が遅れている研究に重点的に配分したい。計画通り進んでいる研究については、このまま計画に沿って進めていく。

今後の展望

- ・ 来年度から准教授1名欠員になるゆえ、今年度同様に教育と研究の質をどのように担保していくのが、課題である。ますます、本分野の教員をとりまく環境は厳しくなるが、努力したい。また、このような状況下であっても分野の研究として、臨床との共同研究の推進を図りたい。外部資金の獲得として科学研究費にとどまらず、各種団体の研究助成への申請など積極的に推進していきたい。
- ・ 平成27年3月に投稿論文の掲載が決まっているほか、秋以降には著書（共著）が出版される予定である。そのほか、2編の論文を執筆中であり、平成27年春に投稿する予定である。加えて、平成26年に行った調査についても、年内に投稿したいと考えている。計画が遅れている研究については、平成27年以内に研究倫理審査委員会の審議を経て、調査を実施したいと考えている。

(2) 成人看護学分野（急性期）

1. 研究の概要

成人看護学急性期分野では、看護学教育や看護実践に活かすことを目的とした研究を行っている。研究対象は手術を受ける患者と家族や救急・クリティカルケアを必要とする患者と家族、リハビリテーションを必要とする患者と家族、スポーツ等の運動を行う者など多岐にわたっており、広く家族・地域を含めた健康支援を考えるテーマに取り組んでいる。

主な研究テーマ

- ・成人急性期看護学講義・演習および実習における実践能力の育成と到達度に関する研究
- ・成人急性期看護における看護技術や教育方法に関する研究
- ・e-learning システムを使用した学習効果の検証に関する研究
- ・クリティカルケア領域における継続看護に関する研究
- ・救急蘇生のシミュレーション教育における学習効果に関する研究
- ・救急領域における患者家族のニーズに関する研究
- ・救命救急領域における自殺未遂患者へのケアに関する研究
- ・スポーツにおける看護師の役割に関する研究
- ・障害者スポーツの競技成立に関わる因子の研究
- ・骨軟部腫瘍術後の四肢障害者のリハビリテーションに関する研究
- ・上肢障害者のリハビリテーション機器の効果判定
- ・スポーツ外傷・スポーツ障害に関する研究

2. 名簿

教授：	松田好美	Yoshimi Matsuda
教授：	西本 裕	Yutaka Nishimoto
准教授：	高橋由起子	Yukiko Takahashi
助教：	伊藤美智子	Michiko Itoh
助教：	林 瑞穂	Mizuho Hayashi

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 竹内登美子, 松田好美. 術前検査を受ける患者の看護 - 呼吸機能検査 - : 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 1 外来/病棟における術前看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2012 年: 46-52.
- 2) 松田好美. 術前化学療法を受ける患者の看護: 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 1 外来/病棟における術前看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2012 年: 65-72.
- 3) 竹内登美子, 松田好美. 手術および麻酔侵襲と生体反応 - 恒常性を保つための生体反応 - : 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 2 術中/術後の生体反応と急性期看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2012 年: 70-79.
- 4) 松田好美. 術後急性期における看護過程の展開: 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 2 術中/術後の生体反応と急性期看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2012 年: 154-170.
- 5) 竹内登美子, 高橋由起子. 術前トレーニング: 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 1 外来/病棟における術前看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2012 年: 101-105.
- 6) 高橋由起子. 術前トレーニングとしての含嗽法: 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 1 外来/病棟における術前看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2012 年: 105-106.
- 7) 竹内登美子, 高橋由起子. 咳嗽による排痰法、器具を用いた呼吸法: 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 1 外来/病棟における術前看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2012 年: 106-109.
- 8) 高橋由起子. 早期離床のためのトレーニング: 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 1 外来/病棟における術前看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2012 年: 110-113.
- 9) 西本 裕, 金森昌彦. 運動器疾患で手術を受ける患者の看護に必要な知識 - 正しい形態は正しい機能を生む - : 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 5 運動器疾患で手術を受ける患者の看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2014 年: 1-8.
- 10) 西本 裕, 金森昌彦. 運動器疾患で手術を受ける患者の看護に必要な知識 - 運動器系のフィジカルアセスメント - : 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 5 運動器疾患で手術を受ける患者の看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2014 年: 9-45.
- 11) 西本 裕. 人工関節置換術の周手術期看護 - 疾患に関する基礎知識 - : 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 5 運動器疾患で手術を受ける患者の看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2014 年: 60-70.
- 12) 西本 裕. 人工関節置換術の周手術期看護 - 主な人工関節置換術のアプローチ - : 竹内登美子編. 高齢者

と成人の周手術期看護 5 運動器疾患で手術を受ける患者の看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2014 年: 71-72.

- 13) 西本 裕, 金森昌彦. 四肢の外傷患者の看護-疾患に対する基礎知識-: 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 5 運動器疾患で手術を受ける患者の看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2014 年: 134-142.
- 14) 高橋由起子, 金森昌彦. 周手術期における説明と準備: 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 5 運動器疾患で手術を受ける患者の看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2014 年: 49-53.
- 15) 金森昌彦, 高橋由起子. 周手術期における精神的背景: 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 5 運動器疾患で手術を受ける患者の看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2014 年: 54-55.
- 16) 金森昌彦, 高橋由起子. 周手術期におけるロコモの視点: 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 5 運動器疾患で手術を受ける患者の看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2014 年: 56-57.
- 17) 竹内登美子, 高橋由起子. 人工股関節置換術を受ける患者の看護: 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 5 運動器疾患で手術を受ける患者の看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2014 年: 73-95.
- 18) 竹内登美子, 高橋由起子. 人工膝関節置換術を受ける患者の看護: 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 5 運動器疾患で手術を受ける患者の看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2014 年: 96-99.
- 19) 竹内登美子, 高橋由起子. 看護過程の展開: 竹内登美子編. 高齢者と成人の周手術期看護 5 運動器疾患で手術を受ける患者の看護 第 2 版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2014 年: 158-169.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 高橋由起子. 周手術期における感染対策, 感染防止 2013 年; 23 卷 3 号: 17-24.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 山下達也, 田村哲嗣, 速水 悟, 林 賢二, 西本 裕. 実環境における喀痰検出と肺音解析, 薬理と臨床 2012 年; 22 卷: 69-74.
- 2) 大野貴敏, 大島康司, 永野昭仁, 大野義幸, 西本 裕, 清水克時. 処理骨を用いて再建を行った悪性骨軟部腫瘍の治療成績, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2012 年; 55 卷: 491-492.
- 3) 永野昭仁, 大野貴敏, 大島康司, 西本 裕, 河村真吾, 清水克時. 脂肪腫に対する超音波破碎吸引装置 (CUSA) を用いた小皮切手術の治療成績, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2012 年; 55 卷: 503-504.
- 4) 井上俊之, 清水克時, 西本 裕. 軟骨マトリックス分解酵素としてのカルパイン 成長軟骨板, 変形性膝関節症軟骨でのカルパインによるアグリカン分解について, 岐阜県医師会医学雑誌 2012 年; 25 卷: 71-73.
- 5) 高橋由起子, 松田好美, 加藤直樹, 梅村俊彰, 岩田美智子. ブレンディッドラーニングシステムを活用した e-learning のアクセス履歴の分析, 岐阜看護研究会誌 2012 年; 4 号: 1-7.
- 6) 高橋由起子, 松田好美, 岩田美智子, 西本 裕, 伊藤友美, 梶間和枝. クリティカルケアに関する講演会に参加した看護師の院内外研修への参加状況と研修会への期待, 岐阜看護研究会誌 2013 年; 5 号: 33-41.
- 7) 榮枝裕文, 西本 裕, 青木隆明, 川崎晴久, 毛利哲也, 粥川正康. 前腕切断者を対象にした筋電義手に関する研究 表面筋電信号による筋電義手制御の実験, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2013 年; 56 卷: 103-104.
- 8) 加島卓磨, 山下達也, 田村哲嗣, 速水 悟, 林 賢二, 西本 裕. 心音と環境雑音の低減手法の検討と評価, 電子情報通信学会技術研究報告 (ME とバイオサイバネティクス) 2013 年; 113 卷: 93-98.
- 9) 寺村易予, 加藤博基, 櫻井幸太, 兼松雅之, 大野貴敏, 西本 裕, 大島康司, 永野昭仁, 小林一博, 廣瀬善信. 血管平滑筋腫の 5 例-MRI 所見とアザン染色を含めた病理所見の対比, 臨床放射線 2014 年; 59 卷: 449-453.
- 10) 後藤篤史, 大野貴敏, 西本 裕, 大島康司, 永野昭仁, 秋山治彦. Tumoral calcinosis の 4 例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2014 年; 57 卷: 629-630.
- 11) 永野昭仁, 大野貴敏, 大島康司, 西本 裕, 松本 和, 秋山治彦. 遺伝性多発性外骨腫症に伴う前腕変形に対して延長術を施行した 5 例, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2014 年; 57 卷: 759-760.
- 12) 柴 裕子, 松田好美. 開腹術後患者における早期離床を促進する看護師の判断のプロセス, 日本看護研究学会雑誌 2014 年; 37 卷: 11-22.
- 13) 高橋由起子, 松田好美, 岩田美智子, 林 瑞穂. ブレンディッドラーニングを取り入れた術後室の準備に関する演習後の自己評価の分析, 岐阜看護研究会誌 2014 年; 6 号: 35-42.

原著 (欧文)

- 1) Kato H, Kanematsu M, Ohno T, Nishimoto Y, Oshima K, Hirose Y, Nishibori H. Is "black geode" sign a characteristic MRI finding for extracranial schwannomas?. J Magn Reson Imag. 2012;37:830-835. IF 2.788
- 2) Mizutani N, Watanabe T, Yano K, Aoki T, Nishimoto Y, Kobayashi Y. A wheelchair operation assistance control for a wearable robot using the user's residual function. IEEE Int Conf Rehabil Robot. 2013;1-6.

- 3) Mizutani N, Yamane M, Kato N, Yano K, Aoki T, Nishimoto Y, Kobayashi Y. Control of wearable motion assist robot for upper limb based on the equilibrium position estimation. Conf Proc IEEE Eng Med Biol Soc. 2013;2013:334-337.
- 4) Nagano A, Ohno T, Nishimoto Y, Oshima K, Shimizu K. Malignant solitary fibrous tumor of the lumbar spinal root mimicking schwannoma: a case report. Spine J. 2013;14:e17-20. IF 2.800
- 5) Kawasaki H, Ito S, Nishimoto Y, Ueki S, Ishigure Y, Mouri T. Hand Motion Assist Robot for Rehabilitation Therapy. J Robotics and Mechatronics. 2014;26:103-104.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：松田好美，研究分担者：高橋由起子，岩田美智子；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：心肺蘇生教育のためのポートフォリオ・システムの開発；平成 24-26 年度；2,500 千円(1,300：600：600 千円)
- 2) 研究代表者：高橋由起子，研究分担者：西本 裕，松田好美，岩田美智子；大学活性化経費(教育)：クリティカルケア看護領域の体験型スキルトレーニングプログラムの構築；平成 24 年度；500 千円
- 3) 研究代表者：高橋由起子，研究分担者：松田好美，西本 裕，岩田美智子，伊藤友美，梶間和枝，廣澤寛子；岐阜大学技術交流研究会：Gifu クリティカルケア看護情報研究会；平成 24 年度；150 千円
- 4) 研究代表者：高橋由起子，研究分担者：松田好美，西本 裕，岩田美智子，林 瑞穂，伊藤友美，梶間和枝；岐阜大学技術交流研究会：Gifu クリティカルケア看護情報研究会；平成 25 年度；150 千円
- 5) 研究代表者：高橋由起子，西本 裕，松田好美，岩田美智子，林 瑞穂；大学活性化経費(研究：科研採択支援)：急性期看護学におけるルーブリック評価を取り入れた e ポートフォリオの構築と学習効果；平成 25 年度；700 千円
- 6) 研究代表者：松田好美，研究分担者：西本 裕，高橋由起子，岩田美智子，林 瑞穂；大学活性化経費(教育)：課題解決型学習プログラム：災害時にあなたは どうしますか、何ができますか；平成 25 年度；350 千円
- 7) 研究代表者：松田好美，研究分担者：西本 裕，高橋由起子，岩田美智子，林 瑞穂；大学活性化経費(教育)：課題解決型学習プログラム：災害時・救急時に必要な知識・技術；平成 26 年度；400 千円
- 8) 研究代表者：高橋由起子，研究分担者：松田好美，西本 裕，伊藤美智子，林 瑞穂，三輪峰子，杉原博子，梶間和枝，林久美子，松宮良子；岐阜大学技術交流研究会：Gifu クリティカルケア看護情報研究会；平成 26 年度；150 千円
- 9) 研究代表者：伊藤美智子；科学研究費補助金若手研究(B)：クリティカルケア領域におけるデス・エデュケーションの構築；平成 26-28 年度；1,820 千円(780：650：390 千円)

2) 受託研究

- 1) 研究代表者：川崎晴久，研究分担者：西本 裕 他；平成 24 年度総務省戦略的情報通信研究開発推進制度：意志合意形成に基づくロボットハンド遠隔操作システムの研究開発；平成 24 年度；19,981 千円(分担者分 249,314 円)

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

西本 裕：

- 1) 日本整形外科学会代議員(～現在)
- 2) 中部日本整形外科災害外科学会評議員(～現在)

松田好美：

- 1) 日本看護学教育学会評議員(平成 24 年 8 月～現在)
- 2) 日本看護診断学会評議員(平成 25 年 7 月～現在)
- 3) 日本看護歴史学会第 28 回学術集会実行委員(平成 26 年 9 月)

高橋由起子：

- 1) 岐阜県看護学会副委員長(平成 25 年 6 月～現在)
- 2) 日本看護歴史学会第 28 回学術集会実行委員(平成 26 年 9 月)

伊藤美智子：

- 1) 日本クリティカルケア看護学会第 10 回学術集会実行委員(平成 26 年 5 月)
- 2) 日本看護歴史学会第 28 回学術集会実行委員(平成 26 年 9 月)
- 3) 日本看護科学学会第 34 回学術集会実行委員(平成 26 年 11 月)

林 瑞穂：

- 1) 日本看護歴史学会第 28 回学術集会実行委員(平成 26 年 9 月)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

西本 裕：

- 1) 岐阜県社会保険診療報酬支払基金診療報酬請求審査委員会委員(～現在)
- 2) 岐阜県スポーツドクター協議会理事(～現在)
- 3) 岐阜県体育協会スポーツ医科学委員(～平成 25 年 3 月)
- 4) 岐阜労働局労災保険診療協議会委員(～現在)
- 5) 岐阜県国民健康保険等柔道整復療養費審査委員会委員(平成 24 年 4 月～現在)
- 6) 岐阜県体育協会スポーツ医科学協議会委員(平成 25 年 4 月～現在)
- 7) 岐阜市松籟団地自主防災隊(平成 25 年 4 月～現在)
- 8) 岐阜県体育協会理事(平成 25 年 6 月～現在)
- 9) 岐阜県スポーツ推進審議会委員(平成 26 年 10 月～現在)
- 10) 平成 24 年度岐阜県高校総体ボクシング競技医務(平成 24 年 5 月 20 日)
- 11) 平成 24 年度国民体育大会ボクシング競技岐阜県最終選考会医務(平成 24 年 8 月 24 日)
- 12) 第 67 回国民体育大会ぎふ清流国体ボクシング競技会医事委員(平成 24 年 10 月 3 日～8 日)
- 13) 平成 24 年岐阜県高等学校新人体育大会空手道競技救護(平成 24 年 10 月 20 日)
- 14) 第 25 回いびがわマラソン救護係(平成 24 年 11 月 11 日)
- 15) 平成 25 年度岐阜県高校総体ボクシング競技医務(平成 24 年 5 月 17 日)
- 16) 第 28 回長良川国際トライアスロン大会救護(平成 25 年 7 月 28 日)
- 17) 平成 25 年度国民体育大会ボクシング競技岐阜県最終選考会医務(平成 25 年 8 月 15 日)
- 18) 第 6 回岐阜県民スポーツ大会空手道競技救護(平成 25 年 9 月 15 日)
- 19) 第 68 回国民体育大会スポーツ祭東京 2013 岐阜県選手団総務(平成 25 年 10 月 2 日～4 日)
- 20) 平成 25 年岐阜県高等学校新人体育大会空手道競技救護(平成 25 年 10 月 13 日)
- 21) 第 26 回いびがわマラソン救護係(平成 25 年 11 月 10 日)
- 22) 2014 ジャパンパラ陸上競技大会医務(平成 26 年 9 月 5 日～7 日)
- 23) 第 7 回岐阜県民スポーツ大会空手道競技救護(平成 26 年 9 月 21 日)
- 24) 第 69 回国民体育大会長崎がんばらんば国体岐阜県選手団総務(平成 26 年 10 月)
- 25) 第 27 回いびがわマラソン救護係(平成 26 年 11 月 9 日)

高橋由起子：

- 1) 岐阜県看護協会研究倫理審査委員(平成 26 年 6 月～現在)

伊藤美智子：

- 1) 第 25 回いびがわマラソン AED 係(平成 24 年 11 月 11 日)
- 2) 第 26 回いびがわマラソン AED 係(平成 25 年 11 月 10 日)
- 3) 第 27 回いびがわマラソン AED 係(平成 26 年 11 月 9 日)

林 瑞穂：

- 1) 第 27 回いびがわマラソン AED 係(平成 26 年 11 月 9 日)

学会以外の研修会講師，招待講演

西本 裕：

- 1) 岐阜県認定上級指導者インテレクチュアルトレーナー養成講習会「アスリートの外傷・障害と対策」(平成 24 年 6 月 7 日)
- 2) 羽島郡スポーツ少年団認定員養成講習会「スポーツ指導者に必要な医学的知識」(平成 24 年 6 月 10 日，平成 25 年 6 月 9 日，平成 26 年 5 月 31 日)
- 3) 岐阜県ドーピング防止研修会「ドーピングを犯さないために」(平成 25 年 8 月 30 日，31 日，平成 26 年 6 月 28 日，8 月 30 日)
- 4) 第 3 回岐阜県保健担当者会議「学校における運動器検診を実施するに当たって」(平成 26 年 12 月 5 日)

松田好美：

- 1) 岐阜県立関高等学校 未来創造Ⅱ(先輩を囲む会)(平成 26 年 10 月 2 日)

10. 報告書

- 1) 高橋由起子，松田好美，加藤直樹：看護実践能力育成のためのブレンディッドラーニングシステムの構築とその学習効果：21-23 年度科学研究費補助金(基盤研究 C)総括：1-6(平成 24 年 3 月)
- 2) 糸川保二郎，船橋建司，西本 裕，高木永悟，岸田梨加：スポーツ医科学レポート第 2 回：ぎふ体協：81，72-76(平成 24 年 9 月)
- 3) 安田善治郎，喜久生明男，西本 裕，西脇勝巳，高木永悟：スポーツ医科学レポート第 1 回：ぎふ体協：81，66-71(平成 24 年 9 月)
- 4) 高橋由起子，西本 裕，松田好美，岩田美智子：クリティカルケア看護領域の体験型スキルトレーニングプログラムの構築：大学活性化経費(教育)：1-4(平成 24 年 12 月)
- 5) 高橋由起子，西本 裕，松田好美，岩田美智子，林 瑞穂：急性期看護学におけるルーブリック評価を取り入れた e ポートフォリオの構築と学習効果：大学活性化経費(研究：科研採択支援)：1-4(平成 25 年 12 月)
- 6) 松田好美，西本 裕，高橋由起子，岩田美智子，林 瑞穂：課題解決型学習プログラム；災害時にあなたはどのようにしますか、何ができますか：大学活性化経費(教育)：1-4(平成 26 年 12 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

成人急性期看護学分野の研究は多岐にわたっており，教員各々が主要なテーマを持ち，分野全体で協力しながら研究を実践している。著書・論文数などは著書 19 編，原著論文 13 編と，少しずつ増えてきている。また競争的資金として学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究 1 件，大学活性化経費(研究：科研採択支援) 1 件および岐阜大学活性化経費(教育) 3 件を獲得している。総合的評価としておおむね目標を達成できたと評価するが，看護に関する欧文原著論文の作成が不足している。

現状の問題点及びその対応策

教育活動に主眼を置き研究活動の時間確保が難しいのは例年通りである。しかし教員も定着しつつあ

る（H27年3月より1名産休・育休）。論文執筆の時間の確保が難しい状況であるが、4月からは産休代替教員と協力し、効率を考えた活動により、各々の専門性を生かした研究体制の構築を図りたい。

今後の展望

各々の専門性を生かしながら、分野としての共通テーマに沿った共同研究を推進していく予定である。学内のみならず臨床との共同研究の可能性を図りたい。競争的資金の獲得については、科学研究費、学内競争的資金にとどまらず、各種団体の研究助成への申請を積極的に推進したい。また将来的には若手研究員の研究力向上のためには、内地留学や在外研修への派遣も考慮したい。

(3) 老年看護学分野

1. 研究の概要

老年看護学分野では、高齢者の QOL を維持・向上するためにその「持てる力」を重視し、「その人らしい生活の維持」を目指したケアに関する研究を行ってきた。特に、認知症を有する高齢者ケアに関する研究は、介護施設における認知症ケアばかりでなく、一般病院における認知症ケアをどう進めていったらいいのか明らかにしようとして取り組んでいる。また、平成 25 年度から老年看護学実習にパートナーシップナーシングの考え方を取り入れ、学生による「ペア実習」を実施している。高齢者ケアを担う看護職者には、病態的、身体機能的、精神的、社会的な側面から高齢者を総合的にアセスメントできる観察力が必要である。この実習は観察力の訓練にもつながり、老年看護学教育方法に関する研究の一環として取り組んでいく予定である。

2. 名簿

教授： 松波美紀 Miki Matsunami
准教授： 小木曾加奈子 Kanako Ogiso
助教： 温水理佳 Rika Nukumizu
助教： 吉川美保 Miho Yoshikawa

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 阿部隆春, 安藤邑恵, 伊藤義明, 今井七重, 今津尚人, 白井浪子, 梅田雅子, 小木曾加奈子, 齋藤隆司, 齋藤妙子, 佐藤八千子, 重松義成, 高井道子, 高木房代, 武井浩子, 田村禎章, 温水理佳, 坪井寿夫, 西村志織, 西本 円, 祢宜佐統美, 服部藤高, 彦坂 亮, 平澤泰子, 本荘鈴子, 宮崎則夫, 森由香子, 森永牧子, 山下科子, 吉澤進治, 吉田章子, 渡邊美幸, 佐藤八千子, 小木曾加奈子監修, 阿部隆春, 安藤邑恵, 小木曾加奈子, 佐藤八千子, 祢宜佐統美, 平澤泰子, 山下科子編. 認知症がある人をケアする-BPSD による生活場面の困難さ. 初版, 東京: 学文社; 2012 年: 15-28, 115-128.
- 2) 安藤邑恵, 今井七重, 今井 一, 小木曾加奈子, 乙村 優, 上平公子, 河口尚子, 近藤邦代, 柴田由美子, 正村静子, 高野晃伸, 棚橋千弥子, 樋田小百合, 服部紀子, 林由美子, 松井いづみ, 真野啓子, 八島妙子, 山下科子, 渡辺美幸. 小木曾加奈子監修, 今井七重, 中山かおり編. 看護師必修問題集攻略ブック 13 年度版 初版, 東京: 成美堂出版; 2012 年.
- 3) 安藤邑恵, 今井七重, 今井 一, 小木曾加奈子, 乙村 優, 上平公子, 河口尚子, 近藤邦代, 柴田由美子, 正村静子, 高野晃伸, 棚橋千弥子, 樋田小百合, 中山かおり, 服部紀子, 林由美子, 松井いづみ, 真野啓子, 山下科子, 渡辺美幸. 小木曾加奈子監修, 今井七重, 中山かおり編. 看護師必修問題集攻略ブック 14 年度版 初版, 東京: 成美堂出版; 2013 年.
- 4) 田中貴美子, 児島美都子, 伊藤二紀子, 内山治夫, 小木曾加奈子, 河口尚子, 児島美都子, 近藤修司, 佐藤和子, 谷口亘, 中島留宇子, 祢宜佐統美, 野村文枝, 原田 亘. 児島美都子, 田中貴美子, 青木みか, 内山治夫, 田中貴美子編. 福祉をつむぐ 初版, 名古屋: 風媒社; 2013 年: 120-136.
- 5) 石原多佳子, 今井 一, 今井七重, 小木曾加奈子, ダーリンブル規子, 田中千絵, 玉置真理子, 留田由美, 松野ゆかり, 宮嶋 淳, 矢野 優. 今井七重, 宮嶋 淳編. 子ども・子育て概論 初版, 京都: 久美出版; 2013 年: 60-65.
- 6) 安藤邑恵, 今井七重, 今井 一, 小木曾加奈子, 乙村 優, 上平公子, 河口尚子, 近藤邦代, 柴田由美子, 正村静子, 高野晃伸, 棚橋千弥子, 樋田小百合, フラビエかおり, 服部紀子, 林由美子, 松井いづみ, 真野啓子, 山下科子, 渡辺美幸. 小木曾加奈子監修, 今井七重, フラビエかおり編. 看護師必修問題集攻略ブック 15 年度版 初版, 東京: 成美堂出版; 2014 年.
- 7) 石原多佳子, 今井 一, 今井七重, 小木曾加奈子, ダーリンブル規子, 田中千絵, 玉置真理子, 留田由美, 松野ゆかり, 宮嶋 淳, 矢野 優. 今井七重, 宮嶋 淳編. 子ども・子育て概論 初版, 京都: 久美出版; 2014 年.
- 8) 吉川美保, 分担執筆. 高齢者のこころとからだ事典 初版, 東京: 中央法規出版; 2014 年: 260-261.
- 9) 温水理佳, 分担執筆. 高齢者のこころとからだ事典 初版, 東京: 中央法規出版; 2014 年: 300-303.
- 10) 松波美紀, 分担執筆. 高齢者のこころとからだ事典 初版, 東京: 中央法規出版; 2014 年: 304-307.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 小木曾加奈子. 「なぜ？」研究の出発点, ソーシャルワークぎふ 2014 年; 20 号: 49-53.
- 2) 小木曾加奈子. 特別養護老人ホームにおけるインシデント・アクシデントの実践的研究の試み, ソーシャルワークぎふ 2014 年; 20 号: 54-61.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 平井浩二, 森山あゆみ, 谷口弘子, 山口美江, 大野弘子, 吉川美保. 素材の異なる2つのピーズクッションの有効性・安楽性に関する比較検討, 第42回日本看護学会論文集—成人看護I 2012年: 96-98.
- 2) 小谷真紀子, 足立和代, 伊澤 綾, 松波美紀, 吉川美保. 退院後の施設入所を選択した家族介護者と病棟看護師の介護負担に関する思いのずれ, 第42回日本看護学会論文集—地域看護 2012年: 182-185.
- 3) 温水理佳, 松波美紀, 太田智子, 箕浦とき子, 吉川美保, 安藤恵美, 樋田小百合, 松原 薫, 熊田ますみ. 入院加療中の認知症のある高齢者の看護を考える—岐阜県内病院で働く看護師とのワークショップ—, 岐阜看護研究会誌 2012年; 4巻: 129-135.
- 4) 山下科子, 小木曾加奈子, 平澤泰子, 阿部隆春, 佐藤八千子, 今井七重, 樋田小百合, 棚橋千弥子, 柴田由美子. 看護職が認識する介護老人保健施設での役割-高齢者看護の実践を通して-, 第42回日本看護学会論文集—老年看護 2012年: 69-72.
- 5) 清水美加子, 桑田美穂, 楠原順子, 今井七重, 小木曾加奈子. 看護師の配薬方法の現状と課題, 第42回日本看護学会論文集—老年看護 2012年: 73-76.
- 6) 今井七重, 小木曾加奈子, 佐藤八千子. 地域住民が考える世代間交流に対する認識—世代間交流の体験を視野に入れて-, 日本看護福祉学会誌 2012年; 17巻: 39-50.
- 7) 小木曾加奈子. パーソンド・センタード・ケアに基づく「よい出来事の記録」, ソーシャルワークぎふ 2012年; 18号: 31-46.
- 8) 佐藤八千子, 小木曾加奈子, 山下科子, 平澤泰子, 阿部隆春, 今井七重, 樋田小百合, 棚橋千弥子, 柴田由美子. 介護老人保健施設における認知症ケアで困ったこと—看護職と介護職の認識の違いに着目して-, ソーシャルワークぎふ 2012年; 18号: 47-56.
- 9) 小木曾加奈子. 医療職と福祉職のためのリスクマネジメントの実践—介護・医療サービスの向上を視野に入れて-, 日本福祉図書館学会誌 2012年; 11号: 71-74.
- 10) 小木曾加奈子. フェイススケールを用いた変化の推移による認知症のある高齢者ケアの検討, 人間福祉学会誌 2012年; 12巻: 1-9.
- 11) 橋川健祐, 小木曾加奈子, 田村慎章. 介護職員の確保と定着に向けた介護労働環境への支援に関する一考察—介護老人保健施設における介護職員の職務満足度に関する調査結果から—, 人間福祉学会誌 2012年; 12巻: 99-108.
- 12) 早川巴誉, 小木曾加奈子, 田村慎章, 橋川健祐. 介護サービスの種別による認知症高齢者の受け入れ状況の現状, 社会福祉士会誌 2013年; 20号: 64-72.
- 13) 桑田佐代子, 小木曾加奈子, 今井七重. 中規模病院における看護職種の職務満足度の現状と課題「やりがいを感じる時」「やる気をなくす時」「働きやすい職場とは」, 第43回日本看護学会論文集-看護管理- 2013年: 127-130.
- 14) 小木曾加奈子, 佐藤八千子, 今井七重, 阿部隆春, 祐宜佐統美, 平澤泰子, 樋田小百合, 山科科子, 安藤邑恵. ICFの視点に基づく「認知症ケア尺度」の開発-現任教育における活用に向けて-, 教育医学学会誌 2013年; 58巻: 321-331.
- 15) 小木曾加奈子, 今井七重. 介護老人保健施設の看護職が認識する看護学生に必要な学び, 日本看護福祉学会誌 2013年; 18巻: 55-66.
- 16) 大中美保子, 今井七重, 小木曾加奈子. 地域の中小規模病院における外来看護の方向性; 患者評価を通して, 第43回日本看護学会論文集-地域看護- 2013年: 151-154.
- 17) 小木曾加奈子, 田村慎章, 橋川健祐. 三重県の介護事業所におけるBPSDがある認知症高齢者の受け入れと職務環境整備の関係, 中部社会福祉学研究会誌 2013年; 4号: 1-10.
- 18) 小木曾加奈子, 佐藤八千子, 今井七重. 介護事業所における介護職員の職務満足・転職・離職に関する探索的研究, ソーシャルワークぎふ 2013年; 19号: 37-46.
- 19) 小木曾加奈子, 平澤泰子, 阿部隆春, 山下科子, 佐藤八千子, 棚橋千弥子, 柴田由美子, 祐宜佐統美, 安藤邑恵, 今井七重, 樋田小百合. 介護老人保健施設における「その人らしさ」と「関係性」を大切にされた認知症ケアの実践, 日本社会福祉科学研究 2013年; 2巻: 77-84.
- 20) 小木曾加奈子, 安藤邑恵. パーソン・センタード・ケアの視点に基づく全人的なケアの思想と手法を用いたケアの実践; ケアスタッフが変化し成長を遂げる過程からの検討, 日本社会福祉科学研究 2013年; 2巻: 85-94.
- 21) 小木曾加奈子, 平澤泰子, 阿部隆春, 祐宜佐統美, 山下科子, 安藤邑恵, 佐藤八千子, 今井七重. 認知症高齢者の「易怒・興奮」の言動とよい反応を得られたケア-介護老人保健施設における看護職と介護職の捉え方の違いに着目して-, 人間福祉学研究 2013年; 6巻: 1-14.
- 22) 小木曾加奈子, 佐藤八千子, 安藤邑恵, 祐宜佐統美, 平澤泰子, 今井七重. 認知症がある人をケアする-BPSDによる生活場面の困難さ-, 日本福祉図書館学会誌 2013年; 12号: 75-79.
- 23) 小木曾加奈子, 平澤泰子, 山下科子, 祐宜佐統美, 佐藤八千子, 安藤邑恵, 阿部隆春, 今井七重. 認知症高齢者の行動的攻撃(暴力)の言動とよい反応を得られたケアについて-看護職と介護職の捉え方の違いに着目して-, 人間福祉学会誌 2013年; 13巻: 59-68.
- 24) 小木曾加奈子, 安藤邑恵, 佐藤八千子. ケア実践者が認識する介護老人保健施設における認知症高齢者の「拒薬・拒食・拒絶」の現状, 老年看護学会誌 2013年; 18巻: 74-81.
- 25) 小木曾加奈子, 佐藤八千子, 今井七重. 特別養護老人ホームにおけるユニットケアと職務満足度の関係,

中部社会福祉学研究 2014年；5号：41-50.

- 26) 小木曾加奈子, 佐藤八千子, 今井七重. 特別養護老人ホームのユニットにおける認知症ケアの現状・ユニットケアの効果とICFの視点に基づいた認知症ケアとの関係, 日本看護福祉学会 2014年；19巻：45-57.
- 27) 小木曾加奈子, 安藤邑恵, 佐藤八千子. 介護老人保健施設における認知症高齢者のBPSDに対する認識の傾向-デルファイ法を用いた意見収束の試み-, ソーシャルワークぎふ 2014年；20号：62-73.
- 28) 小木曾加奈子, 阿部隆春, 平澤泰子, 佐藤八千子, 棚橋千弥子, 柴田由美子, 祢宜佐統美, 安藤邑恵, 今井七重. 「その人らしさ」・「関係性」・「個別性」を生かした認知症ケアと職務満足度の関係, 社会福祉科学研究 2014年；3号：47-58.
- 29) 小木曾加奈子, 田村禎章. 介護事業所における職員間のコミュニケーションと職務環境整備の関係-介護人材の教育と研修を視野に入れて-, 日本教育医学 2014年；59巻：231-241.
- 30) 小木曾加奈子, 山下科子, 佐藤八千子, 安藤邑恵, 平澤泰子, 祢宜佐統美. AHP 理論に基づいた BPSD サポート尺度作成における検討, 地域福祉サイエンス 2014年；1号：147-152.
- 31) 小木曾加奈子, 平澤泰子, 阿部隆春, 山下科子, 祢宜佐統美, 佐藤八千子, 安藤邑恵, 今井七重. 医療ニーズが求められる現状に対する課題-介護療養型医療施設・介護老人保健施設・特別養護老人ホームにおけるケア実践者の認識の違い, 人間福祉学 2014年；14巻：51-56.

原著 (欧文)

- 1) Ogiso K, Ando S, Hirasawa Y, Abe T, Yamashita S, Imai N, Negi S, Sato Y. Practice of Dementia Care using the Standards in Dementia Care Nursing Version - A frame work of Dementia Care with a Focus on the "Personhood," "Relationships," and "Individuality" of Patients-. The Journal of Education and Health Science. 2014;59:211-222.
- 2) Ogiso K, Ando S, Hirasawa Y, Negi S, Sato Y, Ando S, Yamashita S, Imai N. The Present situation of "irritability and excitement," "drug refusal, refusal of food, and rejection," "act of aggression (violence)," and "unhygienic behavior" in special nursing homes for the elderly. Japanese Society for the Study Welfare Books and Literature. 2014;14:35-46.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：松波美紀；科学研究費補助金基盤研究(C)：急性期医療における認知症高齢者の「持てる力」を活用した看護ケアプログラムの開発；平成 22-24 年度；2,730 千円(1,170：910：650 千円)
- 2) 研究代表者：小木曾加奈子；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：BPSD サポート尺度によるアウトカムと認知症ケア充実感と職務満足度と離職意向の関係；平成 24-27 年度；4,100 千円(1,300：600：1,100：1,100 千円)
- 3) 研究代表者：松波美紀；科学研究費補助金基盤研究(C)：医療現場における認知症高齢者の「持てる力」を活用したチームケアのあり方；平成 25-28 年度；4,160 千円(2,210：650：650：650 千円)
- 4) 研究代表者：祢宜佐統美，研究分担者：小木曾加奈子；科学研究費補助金基盤研究(C)：特別養護老人ホームの看取り介護の実践と職務満足度；平成 25-28 年度；3,800 千円(1,100：800：800：1,100 千円)
- 5) 研究代表者：平澤泰子，研究分担者：小木曾加奈子；科学研究費補助金基盤研究(C)：医療的ケアに対応できる介護福祉士教育プログラムの創設と実践；平成 25-28 年度；3,700 千円(1,300：600：800：1,000 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

小木曾加奈子：

- 1) 東海学校保健学会会計監査(平成 24 年度)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演、招待シンポジスト、座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

松波美紀：

- 1) 日本学術振興科学研究費委員会専門委員(平成 25 年度)
- 2) 日本学術振興科学研究費委員会専門委員(平成 26 年度)
- 3) 岐阜県教員免許更新講習(平成 26 年 8 月, 岐阜, 「超高齢社会を支える世代に、認知症をどう伝えるか」)

温水理佳：

- 1) 岐阜県教員免許更新講習(平成 26 年 8 月, 岐阜, 「超高齢社会を支える世代に、認知症をどう伝えるか」)

吉川美保：

- 1) 岐阜県教員免許更新講習(平成 26 年 8 月, 岐阜, 「超高齢社会を支える世代に、認知症をどう伝えるか」)

10. 報告書

- 1) 松波美紀：急性期医療における認知症高齢者の『持てる力』を活用した看護ケアプログラムの開発：平成 22-24 年度科学研究費補助金基盤研究(C)報告書(平成 25 年 5 月)
- 2) 平澤泰子, 小木曾加奈子：医療的ケアに対応できる介護福祉士教育プログラムの創設と実践-教育プログラム-：平成 25-28 年度科学研究費補助金基盤研究(C) 教育プログラム：1-189 (平成 26 年 4 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

看護学科の運営に係る諸活動、老年看護学分野における教育活動を中心にして、教育および研究に充実した活動ができた」と評価する。老年看護学分野で取り組んでいる認知症を有する高齢者ケアに関する研究は、医療現場における研究課題、介護施設における研究課題と 2 つの側面から取り組み、それぞれの研究で科学研究費補助金も獲得できている。これらの研究は、地域の医療現場、介護現場で働く看護・介護職との連携なしで行えるものではなく、協働研究として順調に進めることができている。また、研究活動の成果を少しずつであるが、教育にも反映させることができている。

現状の問題点及びその対応策

老年看護学分野には定数 4 名の教員がいるが、看護学教育において老年看護学分野が担う部分は、実習時間数等、他分野に比較すると多い。また超高齢社会という背景の中で、地域一般に向けた教育などの社会的活動の要請も多い。その中で研究活動を円滑に進めていくことは難しい。特に教員 4 名の教育活動と研究活動のバランスがとれていない。研究活動ばかりに偏る教員がいれば、他の教員の教育活動の負担は重くなるという現状がある。今後教員は、自己の能力を見極め、老年看護学分野が担っている教育活動全般を見直し、その内容に応じた個々の役割を認識することが必要である。それぞれの教員が

教育と研究のバランスを上手く保ちながら活動でき、個々の教員が取り組んでいる研究成果を発表していけるような環境を協力し合って作っていけるとよいと考える。

今後の展望

現在取り組んでいる研究課題は、いずれも重要で意義深い内容ばかりである。今後はこれら研究を更に充実させ、研究成果を論文として公表することにつなげていきたいと考える。また、超高齢社会を支える世代への教育活動を充実させること自体も重要である。教育方法等の工夫を重ね、教育面からの発信もしていきたいと考える。

〔地域・精神看護学講座〕

(1) 地域看護学分野

1. 研究の概要

地域看護学分野においては、地域保健、産業保健、学校保健等の公衆衛生看護分野における研究と訪問看護に関する在宅医療看護分野の研究がおこなわれている。いずれの研究も、現場の課題に着目した研究テーマが多く、その成果は、公衆衛生や在宅看護の現場に還元されるものである。研究方法は、広く公衆衛生学・疫学及び看護学の研究手法を用いている研究が多い。具体的な研究テーマとしては、最近の公衆衛生分野の関心事である禁煙に関するもの、例えば地域における禁煙教育の介入効果を把握する研究を始め、地域保健活動に関する研究、保健師とその活動に関する研究、訪問看護ステーションの管理運営に関する研究、高齢者の虐待予防に関する研究、介護予防に関する研究など多岐にわたっている。対象者も保健師や看護師など専門職を対象とした調査、地域住民、高齢者、学生などさまざまな年齢層を対象としている。

このように、地域看護学分野における研究は、あらゆる年代の人々を対象として、健康増進から疾病予防、社会復帰にいたる多様な健康レベルの人々とそれに係る公衆衛生分野の専門職に関する研究など、多彩な研究がなされている。

<主な研究テーマ>

- 1) 保健師教育に関する研究
- 2) 高齢者虐待予防に関する研究
- 3) 青少年の喫煙・飲酒・薬物乱用とライフスタイルの関連性についての研究
- 4) 地域における禁煙教育に関する研究
- 5) 訪問看護ステーションの経営効率化に関する研究
- 6) 現任訪問看護師教育に関する研究
- 7) 訪問看護師のリスクマネジメントに関する研究

2. 名簿

教授：	石原多佳子	Takako Ishihara
准教授：	三好美浩	Yoshihiro Miyoshi
准教授：	瀬瀬朋弥	Tomomi Kouketsu
准教授：	小林和成	Kazunari Kobayashi
助教：	玉置真理子	Mariko Tamaoki

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）
なし

総説（和文）

- 1) 三好美浩. 青少年の喫煙・飲酒・薬物乱用に関するモニタリング調査の過去・現在・未来, 学校保健研究 2012年; 54巻: 135-136.

総説（欧文）
なし

原著（和文）

- 1) 三好美浩, 勝野眞吾. 高校生の喫煙・飲酒・薬物乱用とライフスタイルとの関連における性差 - 2009年 JSPAD 調査からの成果 -, 日本アルコール・薬物医学会雑誌 2012年; 47巻: 211-233.
- 2) 田中千晶, 藤原佳典, 安永正史, 桜井良太, 斎藤京子, 金 憲経, 深谷太郎, 野中久美子, 小林和成, 吉田裕人, 内田勇人, 新開省二, 渡辺修一郎. 複合健康増進プログラムが地域在住高齢者の日常的な身体活動量へ与える影響 - 無作為比較試験による検討 -, 日本老年医学会雑誌 2012年; 49巻: 372-374.
- 3) 王麗華, 磯山 優, 木内妙子, 太田浩子, 小林和成, 大野絢子. 子どもの在宅ケアにおける連携の実態に関する研究 - 訪問看護ステーションを中心に -, 群馬パース大学紀要 2012年; 13号: 15-20.
- 4) 瀬瀬朋弥, 石原多佳子, 玉置真理子, 後閑容子, 大和 浩, 本多 融, 小林鈴香. 家庭における受動喫煙

曝露状況に関する調査, 保健師ジャーナル 2012年; 68巻: 518-523.

- 5) 大和 浩, 本多 融, 額額朋弥, 中瀬勝則. 禁煙の場はどの範囲が適切か, Heart View 2012年; 16巻: 58-62.
- 6) 大和 浩, 本多 融, 額額朋弥. 受動喫煙(2次喫煙)の罪, 日本胸部臨床 2012年; 71巻: 664-674.
- 7) 池上由美子, 後閑容子, 石原多佳子, 額額朋弥. 精神保健福祉業務担当の保健所保健師の精神保健業務についての認識と能力の自己評価—精神保健業務担当年数3群別の比較—, 厚生指標 2012年; 59巻: 23-31.
- 8) 額額朋弥, 石原多佳子, 小林和成, 玉置真理子, 野崎加世子, 山之腰由香, 中川奈緒美, 本間由佳里, 中川みのり. 訪問看護ステーションにおけるスタッフの新任者教育の受講の現状と課題, 第1回岐阜看護学会論文集 2012年: 41-44.
- 9) 玉置真理子, 石原多佳子, 小林和成, 額額朋弥, 野崎加世子, 山之腰由香, 中川奈緒美, 本間由佳里, 中川みのり. 訪問看護ステーションにおける管理者の新任者教育の取り組みの現状と課題, 第1回岐阜看護学会論文集 2012年: 37-40.
- 10) 額額朋弥, 後閑容子, 石原多佳子, 玉置真理子, 後藤忠雄, 小林鈴香. 妊娠判明後のパートナーの喫煙行動の変化と関連要因, 公衆衛生雑誌 2013年; 60巻: 212-221.
- 11) 三好美浩, 勝野眞吾, 和田 清. 全国高校生におけるクラブ活動および運動と喫煙・飲酒・薬物乱用との関連—2004, 2006, 2009年JSPAD調査のボンド・サンプルの結果—, 日本アルコール・薬物医学会雑誌 2013年; 48巻: 426-444.
- 12) 若杉里実, 三好美浩, 今野香織. 保健師の効き脳とチーム活動との関連, 愛知医科大学看護学部紀要 2013年; 12巻: 11-18.
- 13) 森 礼子, 後閑容子, 石原多佳子. 保健師の地域DOTSにおける初回面接時の支援—服薬完遂者と服薬中断者との比較, 結核 2013年; 88巻: 739-746.
- 14) 細井智子, 後閑容子, 石原多佳子. 母親のしつけの認識に関する研究, 保健師ジャーナル 2013年; 69巻: 376-385.
- 15) 細田きく子, 額額朋弥, 石原多佳子, 後閑容子. 豪雪山間地域における女性介護者の介護意思を支える経験と認識—妻・娘・嫁の立場から—, 民族衛生 2013年; 79巻: 159-178.
- 16) 小島ひとみ, 石原多佳子. 児童福祉施設より家庭復帰した後の被虐待児と家族の家族再統合に向けたアセスメントの視点—児童福祉司と保健師に焦点をあてて—, 岐阜看護研究会誌 2014年; 6巻: 15-23.
- 17) 天野菜穂子, 大平邦子, 石原多佳子, 宮本正一. 1人職場である養護教諭のための教職実践演習, 教師教育研究 2014年; 第10号: 119-124.

原著 (欧文)

なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 三好美浩; 科学研究費補助金研究活動スタート支援: 青少年のライフスタイルを評価する筆問項目のための疫学的調査研究; 平成23-24年度; 2,400千円(1,400: 1,000千円)
- 2) 研究代表者: 勝野眞吾, 研究分担者: 鬼頭英明, 西岡伸紀, 三好美浩; 科学研究費補助金基盤研究(B): 青少年の薬物乱用に関するモニタリングとデータアーカイブ構築; 平成24年度; 100千円
- 3) 研究代表者: 額額朋弥, 研究分担者: 後閑容子, 石原多佳子, 玉置真理子; 科学研究費補助金基盤研究(C): 地域で行う妊産婦とパートナーを対象とした禁煙サポートプログラムの開発; 平成22-25年度; 4,000千円(1,340: 970: 650: 1,040千円)
- 4) 研究代表者: 玉置真理子, 研究分担者: 石原多佳子, 額額朋弥, 後閑容子; 学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究: 地域包括支援センターに所属する保健師活動の専門性に関する研究; 平成24-26年度; 351千円(130: 117: 104千円)
- 5) 研究代表者: 三好美浩; 平成25年度大学活性化経費(研究): 青少年の運動習慣が及ぼす薬物乱用への影響に関する研究; 平成25年度; 450千円
- 6) 研究代表者: 石原多佳子, 研究分担者: 額額朋弥, 小林和成, 後閑容子, 表志津子; 科学研究費補助金挑戦的萌芽研究: 高齢者虐待における虐待者と被虐待者分離後の支援プログラムの開発; 平成25-27年度; 2,900千円(700: 1,200: 1,000千円)
- 7) 研究代表者: 額額朋弥, 研究分担者: 小林和成, 石原多佳子, 後閑容子, 野田洋子; 科学研究費補助金基盤研究(C): 地域介入による妊産婦とパートナーを対象とした禁煙サポートプログラムの効果の検証; 平成26-29年度; 4,810千円(1,170: 1,430: 1,040: 1,170千円)
- 8) 研究代表者: 石原多佳子, 研究分担者: 小林和成, 額額朋弥, 小島ひとみ; 平成26年度岐阜大学活性化経費(地域連携): 地域健康福祉推進計画策定に係る学生参加型の官学連携による看護職教育プログラムの構築; 平成26年度; 400千円
- 9) 研究代表者: 小林和成, 研究分担者: 石原多佳子, 額額朋弥, 小島ひとみ, 中島美奈子; 平成26年

度地域志向学プロジェクト(地域志向教育プロジェクト):地域における看護活動の初期体験学習プログラムの構築;平成26年度;200千円

- 10) 研究代表者:三好美浩;平成26年度岐阜大学大学活性化経費(研究):青少年の健康なライフスタイルのあり方を評価するための薬物乱用モニタリングの研究;平成25年度;560千円

2) 受託研究

- 1) 小林和成:平成25年度 草津町における介護予防事業の評価に関する研究;平成25年度;100千円:群馬県草津町役場
- 2) 小林和成:平成26年度 草津町における介護予防事業の評価に関する研究;平成26年度;100千円:群馬県草津町役場

3) 共同研究

- 1) 研究代表者:野崎加世子, 共同研究者:山之腰由香, 中川奈緒美, 中川みのり, 本間由佳里, 石原多佳子, 小林和成, 瀨瀬朋弥, 玉置真理子;平成24年度 日本訪問看護振興財団訪問看護研究助成金:新任時期の訪問看護育成プログラムの検討—育成プログラム開発とその試行—;300千円
- 2) 研究代表者:山之腰由香, 共同研究者:中川みのり, 中川奈緒美, 石原多佳子, 瀨瀬朋弥, 小林和成, 玉置真理子;平成24年度訪問看護等在宅ケア研究助成 勇美記念財団:新任時期の訪問看護師育成プログラムと評価表の開発;1,262千円
- 3) 研究代表者:山崎仁朗, 共同研究者:石原多佳子, 西本 裕, 瀨瀬朋弥, 小林和成, 高木和美;平成26年度地域志向学プロジェクト(研究プロジェクトA):インターネットを介した見守りシステムによる高齢者生活支援と地域コミュニティ再生の可能性にかんする研究;700千円

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

石原多佳子:

- 1) 第1回日本公衆衛生看護学会学術集会実行委員(平成24年)
- 2) 第43回日本看護学会・地域看護実行委員(平成24年)
- 3) 日本地域看護学会国際交流推進委員(平成24年～現在)
- 4) 日本老年看護学会第19回学術集会実行委員(平成26年)
- 5) 日本看護歴史学会第28回学術集会実行委員(平成26年)

小林和成:

- 1) 第1回日本公衆衛生看護学会学術集会実行委員(平成24年)
- 2) 文化看護学会広報委員, HP管理者(~平成25年)
- 3) 日本老年看護学会第19回学術集会実行委員(平成26年)
- 4) 日本看護歴史学会第28回学術集会実行委員(平成26年)
- 5) 第7回文化看護学会実行委員(平成26年)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

石原多佳子:

- 1) 日本地域看護学会誌査読委員(平成24年～現在)
- 2) 日本在宅ケア学会誌査読委員(平成24年～現在)
- 3) 岐阜看護学会論文選考委員(平成25年)
- 4) 日本公衆衛生看護学会誌査読委員(平成24年～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

石原多佳子 :

- 1) 第 56 回老年社会学会(平成 26 年 6 月, 下呂, 座長)
- 2) 第 17 回日本地域看護学会(平成 26 年 8 月, 岡山, 座長)

三好美浩 :

- 1) 第 59 回日本学校保健学会(平成 24 年 11 月, 兵庫, 一般口演「喫煙, 飲酒, 薬物乱用」座長)

額瀨朋弥 :

- 1) 第 16 回日本母性看護学会学術集会(平成 26 年 4 月, 京都, シンポジウム「妊産婦・子育て期の禁煙行動支援」シンポジスト)
- 2) 第 17 回子どもの防煙研究集会(平成 26 年 4 月, 愛知, 講演「地域で行う妊産婦とパートナーを対象とした禁煙サポート」講師)

小林和成 :

- 1) 第 43 回日本看護学会—地域看護—学術集会(平成 24 年 9 月, 岐阜, 一般口演「地域看護教育」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 三好美浩 : 第 20 回日本アルコール・薬物医学会 優秀論文賞 : 全国高校生におけるクラブ活動および運動と喫煙・飲酒・薬物乱用との関連 : 2004, 2006, 2009 年 JSPAD 調査のボンド・サンプルの結果
- 2) 三好美浩 : 第 20 回日本アルコール・薬物医学会優秀論文賞受賞(平成 26 年度)

9. 社会活動

石原多佳子 :

- 1) 滋賀県米原市地域包括支援センター運営協議会委員(～平成 26 年)
- 2) 滋賀県米原市高齢者虐待防止ネットワーク会議委員(～平成 26 年)
- 3) 岐阜県立陽光園経営委員(～平成 26 年)
- 4) 岐阜県看護協会訪問看護支援部会委員(～現在)
- 5) 岐阜県揖斐川町の地域包括支援センター事業への支援協力(平成 25 年)

小林和成 :

- 1) 岐阜県山県市の保健事業への支援協力員(平成 24 年～現在)
- 2) 岐阜県山県市の地域包括支援センター事業への支援協力員(平成 24 年～現在)
- 3) 岐阜県山県市の山県市健康増進計画 健康山県 21 推進委員(平成 25 年～現在)
- 4) 群馬県草津町の保健事業への支援協力員(～現在)
- 5) 群馬県草津町の地域包括支援センター事業への支援協力員(～現在)
- 6) 岐阜県恵みの森づくり推進モデル事業のプロジェクトチームへの参画(平成 25 年)
- 7) 岐阜県揖斐川町の地域包括支援センター事業への支援協力(平成 25 年)
- 8) 有限会社耕グループへの支援協力(平成 26 年)

額瀨朋弥 :

- 1) 19 学会禁煙推進学術ネットワーク会議事務局(～現在)

10. 報告書

- 1) 三好美浩 : 青少年の健康なライフスタイルに関する調査 2011—高校生 A 調査—(研究課題番号 23800028 平成 23～24 年度科学研究費補助金(研究活動スタート支援)研究代表者三好美浩), 報告書(速報), 岐阜大学(平成 24 年)
- 2) 三好美浩 : 青少年の健康なライフスタイルに関する調査 2011—高校生 B 調査—(研究課題番号 23800028 平成 23～24 年度科学研究費補助金(研究活動スタート支援)研究代表者三好美浩), 報告書(速報), 岐阜大学(平成 24 年)
- 3) 勝野眞吾, 中村光浩, 三好美浩, 吉本佐雅子, 和田 清, 西岡伸紀, 鬼頭英明 : 高校生の喫煙, 飲酒, 薬物乱用の実態と生活習慣に関する調査 2009(研究課題番号 21300244 平成 21～24 年度科学研究

費補助金(基盤研究(B))研究代表者勝野眞吾, 報告書, 岐阜薬科大学(平成 24 年)

- 4) 勝野眞吾, 中村光浩, 三好美浩, 和田 清, 薛圭周, 宋昇勲: 韓国高校生の喫煙, 飲酒, 薬物乱用の実態と生活習慣に関する調査 2008 報告書. 岐阜薬科大学(平成 24 年)
- 5) 勝野眞吾, Vu Minh Chau, 杉山 正, 中村光浩, 三好美浩, 和田 清, 西岡伸紀, 鬼頭英明: ベトナム高校生の喫煙, 飲酒, 薬物乱用の実態と生活習慣に関する調査 2011(研究課題番号 21300244 平成 21~24 年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究代表者勝野眞吾), 報告書, 岐阜薬科大学(平成 24 年)
- 6) 野崎加世子, 山之腰由香, 中川奈緒美, 中川みのり, 本間由佳里, 石原多佳子, 小林和成, 瀨瀨朋弥, 玉置真理子: 平成 24 年度 日本訪問看護振興財団訪問看護研究助成金: 新任時期の訪問看護育成プログラムの検討—育成プログラム開発とその試行— 報告書(平成 25 年)

11. 報道

- 1) 瀨瀨朋弥: 妊産婦と夫を対象とした禁煙サポートプログラムを郡上市と共同開発: 岐阜新聞(2013 年 11 月 9 日)
- 2) 地域看護学分野: 心と体を養う木製おもちゃ開発への支援協力: 岐阜新聞(2014 年 3 月 19 日)
- 3) 三好美浩: 酒や薬物 部活で抑制: 中日新聞(2014 年 11 月 5 日)

12. 自己評価

評価

地域看護分野では, 各々の研究テーマで外部資金を獲得している。さらに地域看護分野として岐阜大学の地域志向教育プロジェクトや地域活性化経費を利用し, 保健師教育に関わる研究を進めている。さらに他学部との共同研究にもかかわるなど研究活動においては評価できる。また個々の教員の研究についても, 専門の学会の優秀論文賞を受賞したり, 専門家としてシンポジストとして招聘されたり, 外部から高く評価されている。

学内の研究にとどまらず, 臨地の看護職との共同研究をする中で, 現場の看護の質の充実に貢献している。

現状の問題点及びその対応策

平成 24 年度入学生から保健師選択制になり, カリキュラムや授業内容, 実習内容等について実習施設のかたがたと調整しながら進めている。

保健師選択制の中で, 保健師希望者を拡大する必要がある, 研究を通じて保健師の魅力を広く発信し, さらには大学院に進学する学生の拡大をはかる必要がある。

今後の展望

教員各自が研究テーマをもって, 積極的に研究に取り組むこと, 加えて地域看護学分野としての共通した研究課題をもって, 研究活動をさらに活発化したい。

さらに, 他学部や他大学, さらに関係機関や地域住民を交えた, 視野の広い研究活動を行い, 地域の人々の真の豊かさや暮らしの質に還元できることを目指してゆく。

平成 24 年度入学生からの保健師選択制のもと, 教育活動において, より専門性高めるため, 公衆衛生看護学の実習展開の具体的方法を検討することを課題としている。

(2) 精神看護学分野

1. 研究の概要

精神看護学は様々な状況にある対象に対して、真摯に向き合える「態度」を身につけることを目的にしており、研究や学習を通して内容や方法を探求することと考えている。そのため対象である人を、生物学的・心理学的・社会的側面から捉え、その対象にとって、本質的な支援とは何か、どのように提供するのか追求してきた。具体的な研究テーマとしては、精神機能の障害のために「生活能力」や「対人関係能力」に困難を抱える対象への援助を中心とした内容、広く現代の社会病理に関連したメンタルヘルスの問題、ストレスコーピングやコミュニケーション技術などに関する研究を行っている。

看護教育という点では、これらの研究が、学生の「対人関係を構築し維持する能力の向上」と「人間を深く理解していく力の向上」を意図し、人間的交流に基づいた丁寧な観察や個人の特性を踏まえて、そこで起こる現象を把握し、効果的なケアを追求する研究に取り組んでいる。また、大学院に関する内容としては、社会文化的側面を踏まえて、研究対象者の地域性や臨床の特性を鑑み、看護師としてケア実践能力に繋がるような研究を行っている。

2. 名簿

教授：	奥村太志	Hutoshi Okumura
准教授：	杉浦浩子	Hiroko Sugiura
助教：	大平幸子	Sachiko Ohira

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 杉浦浩子, 他. 大津廣子, 小松万喜子編著. 看護師国試状況設定完全予想問題集 2015年版, 東京: 成美堂出版; 2014年.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 大平幸子, 奥村太志, 杉浦浩子. 新人教員が体験した精神看護学実習における教育的介入-患者の現状に即したアセスメント-, 日本精神科看護学会誌 2012年; 55巻: 40-44.
- 2) 下條美鈴, 伊納真由美, 寺村周康, 加藤洋一, 大野隆之, 加藤幸恵, 奥村太志. 急性精神病状態からの回復過程における看護アプローチ-非定型精神病患者の体験理解と寛解過程にもとづいたケアの検討-, 日本精神科看護学会誌 2012年; 55巻: 210-214.
- 3) 渡邊知也, 加藤直樹, 奥村太志. 性的逸脱行為を繰り返す統合失調症患者へのアプローチ-トククンエコノミー法による行動変容を試みて-, 日本精神科看護学会誌 2012年; 55巻: 266-270.
- 4) 井川恵美, 大平幸子, 奥村太志. 慢性統合失調症患者にとっての音楽療法の意味-, 日本精神科看護学会誌 2012年; 55巻: 256-260.
- 5) 乙村 優, 矢澤 徹, 佐川和代, 山田陽子, 奥村太志, 鈴木竜世. 抑うつ状態患者への集団音楽療法の体験-心拍のゆらぎと患者の行動面の観察と半構成的面接による内容の分析から-, 日本精神科看護学術集会誌 2012年; 55巻: 261-265.
- 6) 大平幸子, 加藤義弘, 箕浦文枝, 和田裕子, 奥村太志. 奥穂高岳中高年(前期高齢者)登山者の登山前後の精神面の影響-POMSを用いて-, 登山医学 2012年; 32巻: 136-140.
- 7) 新床美穂子, 曾我和恵, 杉浦浩子. ヒヤリハット報告の患者影響レベルを判定する「レベル判定フロー図」の作成とその有用性の検討, 地域医学 2012年; 26巻: 944-947.
- 8) 柘植美幸, 奥村志保子, 杉浦浩子. 集団面接から把握した新人看護師の問題解決思考の変化, 日本看護学会論文集: 看護管理 2012年; 42号: 42-45.
- 9) 今井田初実, 前濱景子, 都竹亜弥, 松井千尋, 杉浦浩子. 20代の終末期患者に対する同年代看護師の感情の動き, 日本看護学会論文集: 看護総合 2012年; 42号: 234-237.
- 10) 山中恵美子, 杉浦浩子, 奥村太志. 精神科長期入院患者の退院率に影響する要因の検討-岐阜県と三重県の比較から, 岐阜看護研究会誌 2012年; 4号: 31-41.
- 11) 深江茂美, 松田修, 大平幸子, 奥村太志: 一看護体制で2つの機能を有する病棟を担当する看護の現状-看護師が職務で抱くストレスの聞き取り調査から-, 日本精神科看護学会誌 2012年.

- 12) 井上英夫, 前田貴子, 大平幸子, 奥村太志. 治療抵抗性のある初回入院患者の看護 精神機能回復が進まない患者の退院をどのように理解するか, 日本精神科看護学術集会誌 2013年; 56巻: 258-259.
- 13) 杉山 猛, 川崎英夫, 大平幸子, 奥村太志. 精神科長期入院患者に対する退院支援の充実に向けて カンファレンスにアセスメントガイドを活用して, 日本精神科看護学術集会誌 2013年; 56巻: 217-221.
- 14) 加藤直樹, 山内善智, 早瀬奈美路, 大平幸子, 奥村太志. 慢性期精神障がい者のアセスメントとケアの現状 精神科慢性期病棟に勤務する看護師へのアンケート調査から, 日本精神科看護学術集会誌 2013年; 56巻: 212-216.
- 15) 柚原康幸, 大平幸子, 奥村太志. 療養者の視点で捉えた精神科外来看護師の役割-外来看護師が療養者の入院中から在宅まで継続的にかかわる支援, 日本精神科看護学術集会誌 2013年; 56巻: 87-91.
- 16) 板津多香子, 坂口美保子, 大平幸子, 奥村太志. 精神科長期入院患者に対する退院支援の現状と課題 事例検討と退院支援プログラムの学習を通じた看護師の認識の変化, 日本精神科看護学術集会誌 2013年; 56巻: 8-12.
- 17) 奥村太志, 大平幸子, 杉浦浩子, 秋江真弥, 兼松美秀. 急性精神病患者の回復に関わる看護師の患者理解の視点, 岐阜看護研究会誌 2013年; 5号: 51-57.
- 18) 長田登美子, 箕浦とき子, 足立久子, 杉浦浩子, 小松妙子. 臨地実習指導場面における看護教員の倫理的意識と倫理的行動の特徴, 岐阜看護研究会誌 2013年; 5号: 11-21.
- 19) 栗原浩子, 日下部加奈子, 河合美加, 杉浦浩子. 看護師の嚆下アセスメント能力向上に向けた学習会と嚆下機能評価表の作成・活用の成果-看護計画でのアセスメント能力の比較-, 日本看護学会論文集: 成人看護 I 2013年; 43号: 135-138.
- 20) 市川里恵子, 安藤恵美子, 足立節子, 杉浦浩子. 外来インスリン導入をした II 型糖尿病患者の導入に対する思い, 日本看護学会論文集: 成人看護 II 2013年; 43号: 75-78.
- 21) 木下亜伊, 奥村志保子, 上平直子, 杉浦浩子. 局所麻酔手術中に患者に生じる感情とその誘因について, 日本看護学会論文集: 成人看護 I 2013年; 43号: 11-14.
- 22) 河野裕子, 大坂望美, 藤田清美, 小椋みづえ, 大平幸子, 奥村太志. 認知症患者家族に対する看護師のコミュニケーションの実際 プロセスレコードの分析を通して見えてきたもの, 日本看護学会論文集: 精神看護 2014年; 44号: 82-85.
- 23) 土田和重, 宮川明浩, 大平幸子, 奥村太志. 臨界期・寛解前期患者に対応する患者理解とケアの現状, 日本精神科看護学術集会誌 2014年; 57巻: 566-567.
- 24) 松波秀幸, 馬淵正務, 大平幸子, 奥村太志. 看護ケアに対する入院患者の満足度調査, 日本精神科看護学術集会誌 2014年; 57巻: 332-333.
- 25) 山内博文, 佐分利由紀子, 市川昌代, 伊納真由美, 大平幸子, 奥村太志. 急性期精神病状態で初回入院した患者の家族への看護支援, 日本精神科看護学術集会誌 2014年; 57巻: 172-173.
- 26) 米重友也, 野々村圭一, 大平幸子, 奥村太志. 精神疾患患者の行動制限最小化に向けた取り組み 開放観察評価シートの作成の(第1報), 日本精神科看護学術集会誌 2014年; 57巻: 25-29.
- 27) 森谷奈美子, 深井浩二, 須藤真由, 大平幸子, 奥村太志. 理不尽な言動のある境界性パーソナリティ障害患者の看護, 日本精神科看護学術集会誌 2014年; 57巻: 265-269.
- 28) 西尾朝江, 杉浦浩子, 遠山圭子. 誤嚥性肺炎患者の看護手順の作成とそれを用いて看護介入を行った看護師の意識変化, 日本看護学会論文集: 成人看護 II 2014年; 44号: 145-148.
- 29) 林やよい, 杉浦浩子. 看護師が実施している血液培養採血時の皮膚消毒時間とその感覚, 日本看護学会論文集: 看護総合 2014年; 44号: 278-281.
- 30) 安田ひろみ, 末松有美江, 曾我和恵, 杉浦浩子. 看護業務内容および超過勤務に対する意識からみた超過勤務発生要因の検討, 日本看護学会論文集: 看護管理 2014年; 44号: 141-144.
- 31) 杉浦浩子, 曾我祐子, 杉浦春雄. 看護学生における楽観性・悲観性の違いが認知的評価に与える影響, 健康レクリエーション研究 2014年; 10号: 43-56.
- 32) 杉浦浩子, 小森美咲, 杉浦春雄. 大学生における楽観性とストレス認知との関連, 健康レクリエーション研究 2014年; 10号: 33-41.
- 33) 上平直子, 奥村志保子, 杉浦浩子. 手術室環境の観察における看護師の危険予知に関連した目的意識の分析, 日本看護学会論文集: 成人看護 I 2014年; 44号: 46-49.
- 34) 広瀬貴大, 高木真希, 久世美樹, 杉浦浩子. 急性期病院において退院調整の必要な患者の家族が退院先を決定するまでの思い, 日本看護学会論文集: 地域看護 2014年; 44号: 67-70.
- 35) 伊藤信子, 大野明子, 西尾穂波, 杉浦浩子. 認知症患者の行動障害の理解による病棟スタッフの感情・思考、言葉、行為の変化, 日本認知症ケア学会誌 2014年; 13巻: 512-520.

原著 (欧文)
なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 代表者: 杉浦浩子, 連携研究者: 奥村太志, 大平幸子; 科学研究費補助金基盤研究(C): 对患者コミュニケーションにおける「聴く技術の自己評価ツール」の開発; 平成 25-27 年度; 3,400 千円(2,100: 700: 600 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

奥村太志：

1) 日本精神保健学会評議員

大平幸子：

1) 日本登山医学会評議員

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

奥村太志：

1) 精神保健学会京都大会(平成 25 年 6 月，京都 座長)

8. 学術賞等の受賞状況

1) 奥村太志，大平幸子：第 45 回日本看護学会 精神看護 優秀論文賞(平成 26 年度)

9. 社会活動

奥村太志：

1) 看護職員確保対策連絡協議会委員(岐阜県ナースセンター)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

3名の構成員でありながら、看護学科の運営に関する諸活動、精神看護学に関連する教育・研究活動、対外的な活動を精力的に行ってきた。研究においては、科学研究費補助金基盤研究(C)を獲得したほか、複数の臨床で研究を支援・協働し、多くの成果を上げることができた。また、教育においては、学部生への臨地実習指導、卒業研究指導に加えて、毎年、大学院生を受け入れ、そして着実に修了させることができている。年々、学科運営に携わる時間が増え、臨地実習指導に費やす時間も多い中で、研究、教育ともに一定の成果を上げていると自己評価する。

現状の問題点及びその対応策

学科運営に携わる時間が増え、臨地実習指導に多くの時間を費やす中で、大学院教育にも携わっているため、現在は個々に時間を調整して研究を進めている。そのため、以前から課題としていた分野として研究に取り組む体制づくりは未だ実現できていない。研究の質と効率性を高めることを考えると、可

及的早急に、分野としての研究課題をもち、取り組んでいくことが必要である。

今後の展望

現在行っている臨床との共同研究をさらに発展させるとともに、分野としての研究課題を持ち、精力的に研究活動をおこなっていきたい。

V 附属病院の現状と課題

1 病院の理念・組織・運営等

1. 理念・基本方針等

(1) 理念

平成 15 年 6 月に附属病院の理念を制定し継承している。

理念：あなたとの対話が創る信頼と安心の病院

(2) 基本方針

平成 15 年 6 月に理念と同時に基本方針を制定し、平成 22 年 9 月に一部を修正している。
同時に「患者の権利宣言」の一部修正も行った。

- 基本方針：1 患者中心のチーム医療を提供します。
2 人間性豊かな医療人を育成します。
3 先進医療の研究・開発・提供を実践します。
4 地域との医療連携を強化します。

(3) 職業倫理・臨床指針

平成 17 年 12 月に制定し、継承している。

2. 組織、運営

(1) 組織

本院の基本方針で示すように、医学部附属病院の役割は診療、教育、研究の三本柱であり、これらを基盤として地域との医療連携を強固なものとするのが求められている。

また、国内の医療行政や医療環境は目まぐるしく変化しており、岐阜県唯一の特定機能病院として、岐阜県域を中心とする医療機関や行政機関との連携を主導的に図っていかねばならない。

そのため、病院長の業務は、専門的、複雑かつ多様なものとなっており、その業務を補佐し、病院の管理運営体制の充実を図るため、4 名の副病院長と特定課題に対応するため必要に応じて病院長補佐を配置し、病院長のサポート体制を強化している。

平成 18 年 1 月には、医療情報部の機能及び次期医療情報システムの見直し並びに充実を図るため、電子診療録担当の病院長補佐 1 名を任命した。（任期は平成 22 年 3 月まで）平成 22 年 1 月には、電子カルテシステム及び関連システムの機能向上のため、第二代の医療情報システムが稼働を開始した。

平成 16 年 4 月に始まった新たな臨床研修制度に対応するため、卒後臨床研修センターを設置し運営してきたが、医学部 4 年生から始まる卒前の臨床実習から卒後初期臨床研修、それに続く専門医に向けての後期研修までをサポートし、より事業を円滑、主導的に運営するため、センター長に副病院長を任命し、平成 25 年 4 月に医師育成推進センターとして開設した。また、同時期にセンターを北診療棟 3 階に移設し研修環境の整備を行った。

平成 22 年 1 月に、臨床研修の充実、医師の技術向上や外科医療への関心を高めるために設置された内視鏡外科手術トレーニングセンターを、平成 25 年 4 月からは北診療棟 3 階にセンターを移設し実習環境の整備向上を図った。

平成 23 年 4 月には災害対策マニュアルを改定し、平成 23 年 10 月には、岐阜県基幹災害医療センターの指定を受けた。

平成 23 年 8 月 11 日から 13 日にかけて、医療の質の向上と信頼できる医療の確保に関する事業を行う、中立的・科学的な第三者機関である日本医療機能評価機構の訪問審査が行われ、Ver.6.0 の更新認定を受けた。

平成 24 年 4 月 1 日には、岐阜県における新生児集中治療用病床の確保・新生児医療の充実を図るために、新生児集中治療部を開設した。これまでの新生児室 4 床から新生児集中治療病床（NICU）6 床、新生児回復期病床（GCU）6 床の計 12 床に増床し、新たな体制でのスタートを切った。

平成 24 年 10 月から、救急医療で活用されている『MEDICA カード（医療用 IC カード）』を発展させた「糖尿病の病診連携システム」を開発し、10 月より岐阜市を中心とした医療機関（専門医）と医院（かかりつけ医）で試験運用を開始した。

平成 24 年 12 月に、それまで各務原飛行場に格納していたドクターヘリを、本院東駐車場に地上ヘリポ

ート及び格納庫を設置し、本院にドクターヘリを格納できる体制を整備し、ドクターヘリ事業の基地病院としての機能向上を図った。

平成 25 年 4 月 1 日に、学生から研修医、専門医、生涯教育までの一貫したサポート体制の構築、より充実した教育、研修を推進するため、卒後臨床研修センターを発展的に解消し、医師育成推進センターを設置した。

平成 25 年 6 月 3 日に、従前、混雑をきたしていた光学医療診療部および化学療法室を拡充・移設及び人間性豊かな医療人を育成するための医師育成推進センターの設置を行うべく、平成 24 年 5 月に着工し平成 25 年 3 月に完成した北診療棟の運用を開始した。

平成 26 年 4 月 1 日に、本院における死亡時画像診断を統括的に管理運営することにより、死亡時診断の標準化を推進し、本院における医療の質の向上に貢献することを目的として、オートプシー・イメージングセンターを設置し、7 月から運用を開始した。

同じく、平成 26 年 4 月 1 日に、脳卒中へのより質の高い診療の提供や、急性期からリハビリに至るまでのより高度で包括的なチーム医療を実現することを目的として、脳卒中センターを設置した。

同じく、平成 26 年 4 月 1 日に、本院において行う医薬品等の臨床研究（臨床試験、治験を含みます。）及びトランスレーショナルリサーチ（TR）の適正かつ円滑な実施を支援することを目的として、先端医療・臨床研究推進センターを設置した。

平成 26 年 7 月 1 日に、「都道府県がん診療拠点病院」に指定されている本院において、その中核的な役割を果たすがんセンターについて、これまで 6 部門で構成されていた組織を 8 部門に改組し取組の強化を図った。

平成 26 年 10 月 1 日に、家族性腫瘍遺伝子検査等に関するカウンセリング体制の構築、遺伝子診断への適切な対応、遺伝学的解析を含む臨床研究への対応、臨床遺伝子専門認定研修施設としての機能向上を図るために遺伝子診療部を設置した。

(2) 科長会議

附属病院の管理・運営に関する重要事項を審議・決定する病院内の最高審議機関として科長会議が置かれている。科長会議の組織運営については、岐阜大学医学部附属病院科長会議規程に明文化しており、病院長、各診療科長、中央診療施設等の各部長及び各センター長、薬剤部長、看護部長、診療録管理室長、医師育成推進センター長、内視鏡外科手術トレーニングセンター長、先端医療・臨床研究推進センター長及び事務部長をもって組織している。

病院の管理・運営については、病院を取巻く環境の変化や患者ニーズの多様化により、的確かつ迅速な対応が求められ、特に、法人化後の病院運営・経営や病院改革の推進については、より広範囲な状況の把握や方向性の見極め等、科長会議に課せられた責務は多大である。

また、病院の管理・運営の円滑化を図るため、毎月 1 回医局長等、外来医長、病棟医長合同会議を開催し、病院長から科長会議で審議した案件等について説明し、病院職員への周知・徹底を図っている。

(3) 病院運営会議

病院運営を機動的に行う組織として、平成 17 年 6 月に病院運営会議を設置した。

病院運営会議は、現在、病院長、副病院長（4 名）及び事務部長により構成されている。同会議は病院運営全般に関する企画立案をし、経営企画会議及び科長会議と調整を行っている。これにより、病院長のリーダーシップを増強し、権限をより強固なものとした。

この会議は、毎月 2 回開催しており、病院運営に係る重要な案件については、この会議において審議している。

また、平成 26 年 10 月に、病院運営会議の所掌事項を立案するにあたり、情報収集及び現状調査等を行い、実効性のある施策及び基本構想等を策定することを目的として病院長戦略室を設置した。

(4) 病院経営企画会議

病院経営戦略に関する諸施策、財務及び運営について協議、意見聴取を行うため、病院経営企画会議を毎月 1 回開催している。

この会議は、病院長、副病院長（4 名）、医療情報部長、薬剤部長、事務部長、外部の有識者（公認会計士・税理士、弁護士、民間病院の院長）及び理事（財務担当）の 12 名で構成している。なお、陪席者として学長、大学院医学系研究科長の出席を得ている。

(5) 附属病院各種委員会の設置年度、任務（運営方針）、意志決定方法、意志伝達方法

附属病院科長会議等の意思決定を円滑にし、組織の機能を十分に果たすため、各種委員会が組織されている。各種委員会の運営等は学内規程等により明文化され、各委員会の審議結果等は、科長会議に諮られた後、各診療科・部門等に伝達している。

附属病院各種委員会一覧

名称	任期	委員数	審議事項等	設置年度
研修管理委員会	2年	88人	卒後臨床研修及び研修医に関すること。	平成16年度
歯科研修管理委員会	2年	16人	卒後臨床研修及び研修医に関すること。	平成18年度
医師育成推進センター運営委員会	2年	45人	医師育成推進センターの運営に関すること。	平成25年度
放射線管理運営委員会	2年	41人	放射線取扱施設の管理運営、設備の整備、放射線障害の防止等に関すること。	平成16年度
陽電子断層撮影診療用放射性同位元素使用に関する安全小委員会	2年	9人	FDG-PET検査に関する管理運営、装置の品質保証、品質管理及び医療事故防止対策等に関すること。	平成19年度
臓器提供に係る調整委員会	2年	9人	臓器提供マニュアルの策定、記録開示、臓器移植の適正な実施に関すること。	平成16年度
臨床修練外国医師等受入委員会	2年	6人	臨床修練医の受け入れ等に関すること。	平成16年度
環境対策委員会	2年	7人	環境保全及び公害防止に関すること。	平成16年度
医療ガス安全管理委員会	2年	10人	医療ガス設備の安全管理に関すること。	平成16年度
医療情報部運営委員会	2年	39人	医療情報部の管理運営に関すること。	平成16年度
クリニカルパス委員会	2年	14人	クリニカルパス全般に関すること。	平成16年度
機種選定委員会	1年	9人	物品の調達契約における機種の選定に関すること。	平成16年度
医薬品等受託研究審査委員会	2年	12人	医薬品等の受託研究についての妥当性、有用性及び安全性等に関すること。	平成16年度
先端医療・臨床研究推進センター運営委員会	2年	17人	先端医療・臨床研究推進センターの管理運営に関すること。	平成26年度
医療安全管理委員会	2年	16人	医療の安全確保と医療事故防止対策等に関すること。	平成19年度
脳死判定委員会	2年	4人	脳死判定の適正な実施に関すること。	平成16年度
診療録管理委員会		37人	診療録及びこれに附随する記録等の管理に関すること。	平成16年度
診療情報提供委員会	2年	10人	診療情報の提供に関すること。	平成16年度
社会保険委員会	2年	37人	社会保険診療の取扱いの改善及び指導に関すること。	平成16年度
医療事故対策委員会	2年	8人	医療事故及び医事紛争の防止及び対策に関すること。	平成16年度
さわやかサービス委員会	2年	13人	附属病院における公共施設利用サービスの改善に関すること。	平成16年度
検査部運営委員会	2年	40人	検査部の管理運営に関すること。	平成16年度
放射線部運営委員会	2年	41人	放射線部の管理運営に関すること。	平成16年度
材料部運営委員会	2年	40人	材料部の管理運営に関すること。	平成16年度
輸血部運営委員会	2年	40人	輸血部の管理運営に関すること。	平成16年度

名 称	任 期	委員数	審 議 事 項 等	設置年度
輸血療法委員会	2年	17人	輸血療法の適正化に関すること。	平成16年度
総合診療部運営委員会	2年	37人	総合診療部の管理運営に関すること。	平成16年度
光学医療診療部運営委員会	2年	13人	光学医療診療部の管理運営に関すること。	平成16年度
分娩部運営委員会	2年	10人	分娩部の管理運営に関すること。	平成16年度
病理部運営委員会	2年	27人	病理部の管理運営に関すること。	平成16年度
リハビリテーション部運営委員会	2年	8人	リハビリテーション部の管理運営に関すること。	平成16年度
医療機器センター運営委員会	2年	15人	医療機器センターの管理運営に関すること。	平成16年度
医療連携センター運営委員会	2年	15人	医療福祉支援センターの管理運営に関すること。	平成16年度
生体支援センター運営委員会	2年	23人	生体支援センターの管理運営に関すること。	平成16年度
栄養管理専門委員会	2年	30人	患者用食事の栄養管理に関すること。	平成16年度
院内感染対策専門委員会	2年	39人	院内環境の向上, 院内の感染予防, 院内感染防止に関する調査及び対策に関すること。	平成16年度
院内感染対策小委員会	2年	13人	院内感染対策に関すること。	平成16年度
高次救命治療センター運営委員会	2年	34人	高次救命治療センターの管理運営に関すること。	平成16年度
手術部運営委員会	2年	39人	手術部の運営に関すること。	平成20年度
薬事委員会	2年	40人	使用医薬品, 血液製剤, 検査試薬, 医療材料の採用等に関すること。	平成16年度
患者行動制限最小化委員会		7人	医療保護入院等の入院患者の行動制限等に関すること。	平成17年度
医学系研究科・医学部情報委員会 病院部会		9人	病院の広報に関すること。	平成17年度
医療情報セキュリティ委員会	2年	9人	情報セキュリティポリシー・マネジメントに関すること。	平成18年度
がんセンター運営委員会	2年	37人	がんセンターの管理運営・施設設備に関すること。	平成21年度
エイズ対策推進センター運営委員会	2年	7人	エイズ対策推進センターの管理運営・予算に関すること。	平成19年度
肝疾患診療支援センター運営委員会	2年	5人	肝疾患診療支援センターの管理運営・予算に関すること。	平成20年度
安全衛生委員会	2年	15人	職員の作業場所, 作業方法等における危険を防止するための基本となるべき対策に関すること	平成19年度
静脈注射認定委員会	2年	12人	看護師等が行う業務基準, 認定, 教育に関すること	平成21年度
診療連携改善委員会	2年	11人	病院勤務医の勤務状況や負担軽減を把握し, 改善に関する提言に関すること	平成22年度

名 称	任 期	委員数	審 議 事 項 等	設置年度
内視鏡外科手術トレーニングセンター検討部会	2年	9人	内視鏡外科手術トレーニングセンターの管理運営・予算に関すること。	平成22年度
医療機器安全管理委員会	2年	18人	職員に対する医療機器の安全使用のための研修に関すること。	平成22年度
経営企画会議	2年	12人	病院の中期目標・中期計画、年度計画及び経営に関すること	平成16年度
新生児集中治療部運営委員会	2年	7人	新生児集中治療部の管理・運営に関すること	平成24年度
褥瘡対策専門委員会	2年	38人	褥瘡対策に関連する環境の整備及び調査等の事項に関すること	平成23年度
病院運営会議		7人	病院運営全般に関することについての企画・立案し、経営企画会議及び科長会議との調整を行う	平成17年度
中期目標・中期計画年度計画自己進捗管理委員会	6年	9人	病院の中期計画及び年度計画の策定及び報告に関すること	平成22年度
脳卒中センター運営委員会	2年	10人	脳卒中センターの業務・運営および施設・整備に関すること	平成26年度
オートプシー・イメージングセンター運営委員会	2年	7人	オートプシー・イメージングセンターの管理運営・施設設備に関すること	平成26年度
遺伝子診療部運営委員会	2年	13人	遺伝子診療部の業務・運営および施設・整備に関すること	平成26年度
ベッドコントロールセンター運営委員会	2年	5人	ベッドコントロールセンターの管理運営に関すること	平成26年度

(6) 事務組織と事務職員の配置状況

1) 現状

病院の事務組織は、国立大学の法人化を契機に医療行政や時勢に即応するため、並びに病院の運営・経営管理の充実を図るために改編を行ってきた。

平成16年4月には、病院事務に特化した事務組織として事務局に「病院部」を設置し、病院部長のもと総務課、経営管理課及び医療サービス課の3課体制とした。また、これと併せて全学の共通的な事務（契約・施設関係等）の一元化及び集中化を図るため、契約・施設・設備関係事務を事務局の財務部及び施設管理部で処理することとした。

平成17年4月には、病院の運営上の種々の支障を解消するため、事務局から病院部を切り離し、病院長のもと病院事務部を設置し、総務課、管理課、調達課及び医療サービス課の4課並びに経営分析主幹を配置する体制に再編成した。

平成18年4月には、事務の合理化を図るため管理課と調達課を統合した。

平成19年4月には、新たに情報企画課を設置し、より病院の診療情報等を効率的に運用できるよう組織を改編した。

平成21年度以降においては、病院事務機能をより医療情勢並びに病院の運営・経営管理に即応させるため、改編を行ってきた。

平成22年4月には、病院の企画部門を充実させるため、情報企画課を改編し病院の予算・企画並びに診療情報管理部門を取り込んだ経営企画課を設置した。また、管理課の調達部門を集約化することに併せて、総務課に卒後臨床研修センターや治験等の教育研究支援部門並びに広報担当部門を設置し、医療サービス課には医療支援部門並びに医療安全部門を設置した。

平成23年4月には、医療サービス課に医療連携室を設置し、がん拠点病院事業、県下医療機関との医療連携事業を推進した。併せて、病院内における医療過誤や訴訟に対応する医療安全機能の充実も図った。

平成24年4月には、特定機能病院である大学附属病院としての課題や、地域医療の基幹病院としての高まる期待に対応すべく、業務量が肥大化していた医療サービス課を、従来の医事業務を担当する医事

課と、患者や医療職員の支援を担当する医療支援課に分け、スムーズな診療体制を構築するとともに、総務課、経営企画課、管理課の業務内容を系統的に整理し、総務課、経営企画課に再編した結果、総務課、経営企画課、医事課、医療支援課の4課に事務組織を改編した。

2) 点検・評価

病院の運営及び経営管理の充実を図るため、病院特化度の高い事務を担当するスペシャリストを確保するため、また医事業務及び経営管理業務に精通した即戦力の人材を確保するため、これらの有資格者や外部医療機関等のキャリア職員並びに新卒者を選考採用するなど、人事配置の見直しを進めた。

また、平成21年学長裁定において、一般職員のうち、医学部附属病院の病院に特化した精神保健福祉業務、社会福祉業務、診療情報管理業務、医療情報技術業務、診療報酬請求業務に従事する者については、病院長が病院収入により配置出来ることとなった。

これらにより、25年度には1名、平成26年度には1名の診療情報管理士の選考採用を行い、病院の機能を充実させることが出来た。

3) 改善・改革と展望

病院の運営及び経営管理の充実を図るには、事務組織の充実と業務に精通した人材が重要であるため、今後も不断に事務組織の見直しを行い、人材の確保と育成に努めることとしている。

2 診療活動の現状と課題

1. 診療体制

(1) 臓器別診療

附属病院が平成 16 年 6 月の新築・移転を契機に、旧来のナンバー科から臓器別診療体制に変更し、院内表示も臓器別表示とすることにより患者案内を分かりやすくした。

外来診療科を内科ゾーンと外科ゾーンに分け臓器別に配置し、それぞれのゾーンに中央処置室を設置することにより人員及び処置室の効率的運用を図った。

また、病棟においても内科と外科が臓器別に連携が図れるよう診療科を配置した。

(2) 診療科の連携

附属病院が平成 16 年 6 月の新築・移転を契機に、全ての院内診療情報をペーパーレス・フィルムレスで一元管理すべく、新医療情報システムを導入した。その際、従来の紙カルテから電子カルテに移行し、全診療科で患者情報を共有化できる仕組みとした。電子カルテ化されたことにより 1 患者 1 カルテとなり診療科間での情報のやり取りがスムーズに行われ、情報の共有化を通して診療科間のいわゆる垣根を低くすることを可能にした。さらに、診療科間の連携のみでなく中央診療部門など多職種間での情報共有も進み、チーム医療の推進に大きく寄与している。

なお、情報の一元管理が可能となったことにより、どこにいても、何科の医師・看護師であっても情報を共有できるため、情報を得るために院内を走り回ることがなくなり業務の効率化の点でも大きな改善をみている。

(3) 高度救命救急センター

平成 16 年 4 月、高次救命救急医療を行うため、救急部、集中治療部、手術部及び人工腎室を改組し、新たな組織として地域災害及び救急医療に 24 時間対応可能な「高次救命治療センター」を設置した。高次救命治療センターは、救急、手術、集中治療及び血液浄化治療の 4 部門で構成した国内最大規模の救命治療センターであり、平成 16 年 6 月の新病院開院と同時に活動を開始した。

当病院は、平成 15 年 12 月から岐阜市との間で「救急車医師同乗システムに関する協定書」を締結し、さらに平成 16 年 6 月、「救急自動車への医師搭乗に係る実施要綱に関する契約書」を締結した。また、平成 16 年 5 月、岐阜県との間で「防災ヘリコプターの医師等搭乗に関する協定書」を締結するなど、高次救命治療センターが中心となり、岐阜県及び岐阜地域の救急医療に積極的に取り組んできた。

より一層の救急医療体制を推進するために、平成 22 年度よりドクターヘリ基地病院としての運用開始となった。今後は更に県内の全域重症患者の対応を行うこととなる。

当病院の救急医療の取り組みや実績が認められ、平成 16 年 11 月に「救命救急センター」に指定され、さらに平成 18 年 2 月には岐阜県下で唯一、中部 9 県で 2 施設目となる「高度救命救急センター」に認定された。当病院は、切断指の再接着や広範囲熱症、急性中毒などの特殊疾患に対応できる、高度の救急医療体制を整えた施設であるとの岐阜県からの申請に基づき、厚生労働省の審査を経て岐阜県から認定されたものである。

(4) 北診療棟の開設

平成 25 年 6 月から医学部附属病院北診療棟の運用を開始した。北診療棟は、従前の光学医療診療部および化学療法室を拡充・移設し、また人間性豊かな医療人を育成するための医師育成推進センターを含んでいる。

特に新たに設置された化学療法室は面積も約 5 倍となり、ベッド数も 31 台と大幅に増設した。光学医療診療部も、移設後は約 2 倍の広さとなり、更に最新の機器も導入し、患者さんに最先端の治療や、より快適なサービスを提供している。

また、教育機関の使命として、より充実した教育、研修を推進し、優れた医療人を育成するため、医師育成推進センターでは卒前教育と卒後研修との一貫性を図り、医学部学生および新人医師のサポート体制を強化した。

2. 活動状況

(1) 第一内科

1. 診療の概要

1) 消化管疾患：消化管内視鏡を用いた上下部消化管疾患の診断，治療が中心となる。消化管の早期癌に対しては画像強調システム（NBI, BLI）を併用した拡大内視鏡観察による正確な診断の後，内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）などの治療を行い確実な治療と病理学的診断を行っている。また，小腸疾患に関してはダブルバルーンあるいはシングルバルーン小腸内視鏡，カプセル小腸内視鏡を導入し，従来診断が困難とされた病変の診断も可能となっている。吐血・下血などの緊急症例に対しては積極的に緊急内視鏡を施行し，止血術を行っている。消化管悪性腫瘍治療においては，早期癌に対する内視鏡的治療に加え切除不能進行癌に対しては，エビデンスに基づいた化学療法を積極的に取り入れている。消化管悪性リンパ腫では，血液内科と協力して従来の化学療法のみならず，分子標的療法や造血幹細胞移植まで視野に入れた治療を行っている。切除不能進行癌による苦痛を伴う症状に関しては，ステント留置などの緩和的治療も積極的に行っている。近年増加が著しい潰瘍性大腸炎やクローン病などの炎症性腸疾患には，従来の薬物療法に加えて血球成分除去療法や抗 TNF α 抗体，免疫調節薬などの最新の治療を導入している。また，今後さらに重要性が増すと思われる消化管機能性疾患に関しては，高解像度食道内圧測定検査，24時間 pH モニター検査などで正確な診断を行っている。

2) 肝臓疾患：重症肝炎には循環管理も含めた全身管理を中心に対処している。特に免疫学的観点に立脚して，リンパ球表面マーカー解析やサイトカイン療法なども導入している。慢性肝炎や肝硬変に対しては，積極的にインターフェロンなどの抗ウイルス療法を施行している。肝癌については，腹部超音波検査により微小状態における発見，診断に努め，最新の血管造影装置を使用した肝動脈塞栓術（TAE）や熱凝固療法（ラジオ波）などを行っている。いずれも一部の症例では全国規模の多施設共同臨床試験に参加し，新たなエビデンス確立へ向けて努力している。

3) 胆膵疾患：積極的に低侵襲で安全性が高い内視鏡処置を施行している。内視鏡的に乳頭切開術（EST）やラージバルーンを用いた乳頭拡張（EPLBD）を用いて乳頭処置を行い，手術に頼らない内視鏡的な胆石治療を行っている。手術ができない進行胆道系悪性腫瘍に対しては QOL を重視して，内視鏡的に胆管ステント治療を行っている。超音波内視鏡下吸引針生検（EUS-FNA）を用いた腹腔内・縦隔内病変の診断や，近年では EUS ガイド下の胆道ドレナージや膵のう胞ドレナージなどの治療手技も行っている。

4) 栄養治療：肝疾患をはじめとして消化器疾患全般を対象に，間接カロリーメーターなどを用いた正確な栄養アセスメントを行い，患者 1 人 1 人に対し最適な栄養治療を行っている。慢性肝疾患に対する栄養治療の介入により，その予後の改善が得られている。これらの臨床研究により，消化器病学会・肝臓学会・厚生労働省の肝硬変栄養治療のガイドラインの作製に貢献している。

2. 教育施設

- 1) 日本内科学会認定研修施設
- 2) 日本消化器病学会認定施設
- 3) 日本肝臓学会認定施設
- 4) 日本消化器内視鏡学会認定施設
- 5) 日本がん治療認定医機構研修施設
- 6) 日本呼吸器学会認定施設
- 7) 日本胆道学会指導施設
- 8) 日本静脈経腸栄養学会認定教育施設

3. 診療開発

- 1) 診療名：小腸内視鏡による診断と治療

診療内容：原因不明の消化管出血や消化管悪性リンパ腫を対象に小腸内視鏡を実施，正確な診断と治療を行う。

他病院での導入状況：岐阜県内では当院と村上記念病院に導入。

国内的評価：これまで診断不能と言われた小腸の診断・治療が可能となったことは画期的である。

国際的評価：同上。

2) 診療名 : 超音波内視鏡下生検 (EUS-FNA)

診療内容: 体表より穿刺不能な腫瘍性病変やリンパ節病変に対して, 超音波内視鏡ガイド下にて針生検を行う。

他病院での導入状況: 当院が指導的立場になり, 県内では岐阜市民病院などにて施行。

国内的評価: これまでは, 開腹あるいは開胸術により診断していた深部病変に対して比較的 non-invasive に診断が可能となり, 極めて有用な診断技術である。

国際的評価: 同上。

3) 診療名 : 超音波内視鏡を用いた胆道病変に対する治療

診療内容: ERCP が困難な症例に対して, 超音波内視鏡を用いた胆道病変に対する治療を施行している。

他病院での導入状況: 当院が指導的立場になり, 県内では岐阜市民病院, 岐阜県総合医療センターなどにて施行。

国内的評価: ERCP が困難な症例に対する同治療方法の有用性が報告されている。

国際的評価: 同上。

4. 専門医・認定医・指導医

村上啓雄: 日本内科学会認定医, 日本消化器病学会専門医・指導医, 日本消化器内視鏡学会専門医, 日本呼吸器学会専門医・指導医, 日本感染症学会専門医・指導医, 日本化学療法学会抗菌化学療法指導医, 日本肝臓学会専門医, 日本消化器がん検診学会認定医, 日本静脈経腸栄養学会認定医

荒木寛司: 日本内科学会東海地区評議員・指導医・内科認定医, 日本消化器病学会指導医・専門医, 日本消化器内視鏡学会指導医・専門医, 日本臨床腫瘍学会暫定指導医, 日本がん治療認定医機構暫定教育医

清水雅仁: 日本内科学会東海支部評議員・指導医・内科認定医, 日本肝臓学会評議員・専門医, 日本消化器病学会学会評議員・専門医, 日本消化器内視鏡学会専門医, 日本がん治療認定医・暫定教育医, 日本癌学会評議員, 日本がん予防学会評議員

白木 亮: 日本内科学会指導医・認定医, 日本肝臓学会西部会評議員・専門医, 日本消化器病学会東海支部評議員・専門医, 日本消化器内視鏡学会専門医, 日本静脈経腸栄養学会代議員・指導医

高井光治: 日本内科学会指導医・認定医, 日本肝臓学会専門医, 日本消化器病学会専門医

末次 淳: 日本内科学会指導医・認定医, 日本肝臓学会西部会評議員・専門医, 日本消化器病学会東海支部評議員・専門医, 日本消化器内視鏡学会専門医

井深貴士: 日本内科学会認定医, 日本消化器内視鏡学会指導医, 日本消化器病学会専門医, 日本がん治療認定医機構認定医, 日本門脈圧亢進症技術認定

岩下拓司: 日本内科学会認定医, 日本消化器内視鏡学会専門医, 日本消化器病学会専門医

今井健二: 日本内科学会認定医, 日本肝臓学会専門医, 日本消化器病学会専門医, 日本がん治療認定医機構認定医

境 浩康: 日本内科学会認定医, 日本消化器内視鏡学会専門医, 日本消化器病学会専門医

白上洋平: 日本内科学会認定医・総合内科専門医, 日本消化器内視鏡学会専門医, 日本消化器病学会専門医, 日本肝臓学会専門医

久保田全哉: 日本内科学会認定医, 日本肝臓学会専門医, 日本消化器病学会専門医, 日本消化器内視鏡学会専門医

河内隆弘: 日本内科学会認定医・専門医, 日本肝臓学会専門医, 日本消化器病学会専門医, 日本消化器内視鏡学会専門医

上村真也: 日本内科学会認定医, 日本消化器病学会専門医, 日本消化器内視鏡学会専門医

高田 淳: 日本内科学会認定医, 日本消化器病学会専門医, 日本消化器内視鏡学会専門医

華井竜徳: 日本内科学会認定医, 日本消化器病学会専門医

5. 自己評価

評価

消化器内科: 最新の医療技術として内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD), 小腸内視鏡, 超音波内視鏡下針生検 (EUS-FNA) などを積極的に導入し, 県内外から数多くの患者を紹介いただいている。安全かつ適切な医療を提供することで, 症例数, 検査件数とも着実に増加している。慢性肝炎や肝臓病に対しても最先端の治療を行い, 臨床研究・治験にも積極的に参加することで, ガイドラインの作製や新規エビデンスの構築に貢献している。様々な内視鏡技術の普及に関しては指導的立場にあり, 地域関連病院における技術指導

や、講習会、研修会の依頼も多い。指導者研修として海外からの講演・実技指導も多く行っている。研究成果に関しては、学会や論文で積極的に公表し、国内外から高い評価を得ている。

現状の問題点及びその対応策

消化器内科：治療内視鏡に関しては、患者の高齢化、疾患・病態の複雑化に伴い、技術的に検査・治療手技の困難な症例があること（増えていること）、特にその様な症例では、患者への侵襲が少なからず生じることが問題点として挙げられる。このような症例は、大学病院に検査依頼が集中するため、内視鏡的治療のみならず、他診療科とも連携しより集学的な治療を行っていく必要がある。症例によっては、検査手技に時間を要することもあるが、より安全にそして患者に苦痛を与えることのないように、更なる技術の向上に努める必要がある。

今後の展望

消化器内科：消化管疾患においては、より安全かつ迅速に精度の高い診断が行える内視鏡技術の導入をさらに進めて行きたい。また、より根治度の高い内視鏡治療を実践・推進することで、他科・地域からの要望に積極的に応えたい。慢性肝疾患においては、薬物的アプローチに加え、栄養療法や生活・運動指導を治療に組み込むことで、その予後の一層の改善をはかり、患者の QOL 向上に繋がる新たなエビデンスを確立していきたい。胆膵疾患においては、特に近年増加が著しい膵癌の早期診断技術を磨くとともに、あらゆる内視鏡技術を駆使して、これまで以上に外科的侵襲を回避させた診断・治療を導入し、その成果を世界に発信していきたい。

(2) 血液内科

1. 診療の概要

1) 血液疾患：貧血性疾患、とくに造血の中心となる骨髄の異常に基づく再生不良性貧血や骨髄異形成症候群および白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの造血器悪性腫瘍に対する診療を行っている。入院対象になる疾患の多くは造血器悪性腫瘍であるが、固形癌とは異なり、化学療法が特に奏功する。このため治癒を目指す化学療法の強度は全体的に高度となり、その管理、支持療法は極めて重要である。さらに一部の疾患には造血幹細胞移植（同種骨髄移植、非血縁者間骨髄移植、同種臍帯血移植、同種・自家末梢血幹細胞移植）を導入している。悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などにおいては外来化学療法も積極的にを行い、家族と共に生活し、治療が遂行できるような配慮もしている。基本的にはエビデンスに基づく治療を中心に行っているが、一部は当地区独自の臨床試験や全国規模の多施設共同の臨床試験にも参加し、新たなエビデンスを確立するべく努力を行っている。

2) 感染症内科：院内感染症を含む各種感染症の診療を行っているが、結核のような感染症に関しては関連病院と連携しながら診療を行っている。特にエイズ治療は昭和 63 年の岐阜県第一例目の患者から継続的に診療を行っている。当院は岐阜県のエイズ治療拠点病院に指定されており、岐阜県の HIV 感染症患者の過半数の診療を行っている。エイズ患者においてはさまざまな合併症を伴うことが少なくなく、多くの診療科の協力が必要であるが、ほぼ全科での受け入れ体制が万全な状態であることは特筆できる。院内にはエイズ対策推進センターも設置されており、診療のみならず専門カウンセラーによるカウンセリング活動や教育研修活動も積極的に行っている。エイズは不治の病ではなくなっており、近年では慢性疾患として捉えられるようになってきているからこそ、精神的ケアなどが特に重要である（エイズ対策推進センターの項を参照）。また、針刺し事故の対応は生体支援センターが中心となっているが、当科が受診窓口となっている。

2. 教育施設

- 1) 日本内科学会認定研修施設
- 2) 日本臨床腫瘍学会認定施設
- 3) 日本血液学会認定研修施設
- 4) 臍帯血移植実施施設
- 5) 非血縁者間骨髄移植実施施設

3. 診療開発

1) 診療名：同種臍帯血移植

診療内容：臍帯血バンクより入手した臍帯血を用いて成人の造血器患者を対象として同種臍帯血移植を行う。

他病院での導入状況：岐阜県内では当院と岐阜市民病院のみ。

国内的評価：移植可能な臍帯血の入手は移植希望患者の 90%で可能である。このため同種骨髄移植を求める患者でドナーがない場合には、臍帯血移植が代替治療になる。また、臍帯血移植はコーディネートに時間がかからないため、緊急に移植を必要とする患者にとっては極めて魅力的である。このように骨髄移植の代替治療として国内的評価は確立している。

国際的評価：成人臍帯血移植の成績は本邦が世界的にも高水準である。

2) 診療名：非血縁者間骨髄移植

診療内容：同胞に移植ドナーがない場合に、骨髄バンクを利用して善意の健常ドナーから骨髄を提供していただき、骨髄移植を行う。あわせて骨髄バンクから依頼された健常ドナーからの骨髄採取も行っている（麻酔科を中心に多くの外科系診療科の協力を得ている）。

他病院での導入状況：岐阜県内では当院と岐阜市民病院のみ。

国内的評価：同胞ドナー不在の際の骨髄バンク利用の同種造血幹細胞移植としては非血縁者間骨髄移植の有用性は確立している。

国際的評価：同上。

3) 診療名：ミニ移植または Reduced intensity stem cell transplantation (RIST)

診療内容：高齢者や何らかの合併症のため通常移植ができない患者を対象として、前処置を緩和して同種造血幹細胞移植を行う。GVL（移植片対白血病）効果も期待され、免疫療法としても位置付けられている。多くは臨床試験として行われる。

他病院での導入状況：岐阜県内では当院と岐阜市民病院のみ。

国内的評価：適応に関しては議論があるが、一部の症例における効果は認知されている。
国際的評価：同上。

4. 専門医・認定医・指導医

鶴見 寿：日本内科学会東海地区評議員・指導医・総合内科専門医・内科認定医，日本血液学会代議員・指導医・専門医，日本臨床腫瘍学会評議員・指導医・がん薬物療法専門医，日本がん治療認定医機構暫定教育医・認定医，日本消化器内視鏡学会専門医，日本臨床内科医会専門医，日本エイズ学会指導医・認定医，日本骨髄腫学会代議員，日本造血細胞移植学会移植認定医
原 武志：日本内科学会指導医・総合内科専門医・内科認定医，日本血液学会評議員・指導医・専門医，日本臨床腫瘍学会指導医・がん薬物療法専門医，日本がん治療認定医機構暫定教育医・認定医
兼村信宏：日本内科学会指導医・総合内科専門医・内科認定医，日本血液学会指導医・専門医，日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医，日本がん治療認定医機構認定医，日本輸血細胞学会認定医，日本造血細胞移植学会移植認定医
北川順一：日本内科学会認定医，日本血液学会専門医・指導医，日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医・指導医，日本がん治療認定医機構認定医，日本輸血細胞学会認定医
二宮空暢：日本内科学会認定医，日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医，日本血液学会専門医
中村 博：日本内科学会認定医
中村信彦：日本内科学会認定医，日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医，日本血液学会専門医
柴田悠平：日本内科学会認定医，日本血液学会専門医

5. 自己評価

評価

血液内科としての歴史は比較的新しいが、積極的に同胞からの同種骨髄移植や同種末梢血幹細胞移植の経験をつみ、臍帯血バンク利用の臍帯血移植実施施設（2005年）および骨髄バンク利用の非血縁者間骨髄移植実施施設（2008年）の認定を受けることができた。県内で数少ない最初の認定施設であり、評価に値すると思われる。また、多くの臨床試験を遂行、最近ではリンパ腫に対する Rituximab 併用 THP-COP 療法などの成績および層別化治療に向けた予後因子解析を論文に公表して、国際的評価を得た。急性白血病においては、岐阜県という地方都市の特徴でもあるが、高齢者が比較的多く、先の造血幹細胞移植などの実施は困難な症例が多い。標準的な強力化学療法遂行が困難な症例を対象にサイトカイン併用の少量化学療法の臨床試験などを実施し、論文に公表して国際的評価を得ている。

現状の問題点及びその対応策

高齢者が多いという地域性もあり、急性白血病や悪性リンパ腫において標準的治療の遂行が困難な症例が少なくない。また、推定される予後にバラツキもあり、画一治療に疑問がもたれる症例も多く経験する。このため、合併症や予後因子、年齢などに基づく層別化治療が期待される。

今後の展望

層別化治療のためには安定した簡易な予後因子の抽出が必要である。現在、白血病やリンパ種を対象に、さまざまな予後因子の探索を行っているが、実際の臨床応用ができるような検証的臨床試験を導入したい。また、新たなる治療エビデンスを確立するべくさまざまな臨床試験（phase II, phase III 試験）を進めたい。特に、高齢者や合併症を有する症例に対しても前処置を工夫した造血幹細胞移植術の確立を目指している。一方、治癒指向の標準治療が実施できない症例に対しては、高齢者総合的機能評価（CGA）などを行い QOL を重視した治療を工夫し、エビデンスを構築したい。

(3) 第二内科

1. 診療の概要

当科は循環器、呼吸器及び腎臓病を専門とする診療科であり、外来、入院ともに当院でも患者数の多い診療科の一つである。

外来部門では、月曜から金曜まで循環器、呼吸器及び腎臓病それぞれの専門外来を毎日設けているばかりでなく、24時間緊急症例にも迅速に対応できる体制をとっており、また密接に関与するペースメーカー外来や心臓リハビリテーション外来、禁煙外来、漢方あるいは鍼灸、外来化学療法などの特殊外来も設置している。外来初診は毎日2-3人の初診医をたて、速やかな診療に留意している。再診はすべて予約制であり、患者さんの待ち時間は非常に少なく好評を得ている。

入院部門でも、循環器、呼吸器及び腎臓病の入院患者を中心に、週に50人前後の入院を受け入れている。循環器内科では、心臓カテーテル検査数も旧国立大学病院の中ではトップであり、冠動脈造影を年に1300件以上、経皮的冠動脈形成術を年に300件以上施行している。中央放射線部の連続血管室は2室を第二内科専用室として用い、別の1室では脳神経外科と一緒に脳血管造影も併せて施行することで、患者負担を減らす努力をしている。また、当科で開発した冠動脈内超音波のintegrated backscatter法による冠動脈組織性状の解析により、動脈硬化巣の詳細な分析が可能となり、的確な診断と冠動脈治療が行える先進医療を行っている。呼吸器グループは主に肺癌や慢性閉塞性肺疾患などを治療し、その対象は多岐にわたる。毎週施行される気管内視鏡検査は年間500例以上にわたり、CTガイド下腫瘍生検、局所麻酔下胸腔鏡検査、気管支超音波診断、ガイドシース法を用いた微小病変診断、レーザー治療、ステント治療等の最新の診療技術を用いた診断法を取り入れている。また、呼吸器外科を交えた呼吸器カンファレンスにより、十分なディスカッションのもとに治療法を選択している。看護師、薬剤師と密接に連絡しながら患者さんのQOLを重視した医療を目指し、除痛療法は特に積極的に対応している。腎臓グループは糸球体腎炎、ループス腎炎など腎臓疾患は多いが、超音波ガイド下の腎生検を積極的に施行し、適切な診断を行い、治療法を選択し、透析患者さんには腎臓内科医自らシャント手術や腹膜透析等を行っている。また、腎臓内科その中でも最近著増している糖尿病性腎症の治療に特に力を入れている。

2. 教育施設

- 1) 日本内科学会認定医教育病院
- 2) 日本循環器学会循環器専門医研修施設
- 3) 日本呼吸器学会認定施設
- 4) 日本呼吸器内視鏡学会認定施設
- 5) 日本臨床腫瘍学会認定研修施設
- 6) 日本がん治療認定医機構認定研修施設
- 7) 日本腎臓学会研修施設
- 8) 日本核医学会認定医教育病院
- 9) 日本心血管インターベンション治療学会研修施設
- 10) 日本超音波医学会専門医研修施設
- 11) 日本高血圧学会認定施設
- 12) 日本不整脈学会研修施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : Muse細胞を用いた梗塞心筋組織修復再生療法

診療内容 : 急性心筋梗塞後に Muse細胞 (Multilineage-differentiating stress enduring cells) を静注という非侵襲的な内科的療法による梗塞心筋修復再生療法の確立を目的とする。急性心筋梗塞の治療はできるだけ早期に再灌流を行うことであるが、それに失敗した場合は重症大型心筋梗塞となり、左室リモデリングが進行し心不全に陥るため予後が悪い。この問題を解決するために壊死心筋組織を修復再生し、左室リモデリングを改善させる先進医療の開発が必要。骨髄細胞中に存在する Muse細胞を採取し培養増殖させた製剤を心筋梗塞後に静注投与することにより、梗塞領域に選択的に Muse細胞が集積し心筋と血管に分化することを明らかにした。Muse細胞静注により心筋梗塞後の梗塞サイズ縮小、心機能改善、左室リモデリング低減がもたらされる。このような作用を持つ Muse細胞製剤を開発中である。国内外の評価 : 心筋梗塞に対する Muse細胞による治療法開発は国内外においては我々以外では行われておらず極めて独創的であり、画期的な非侵襲的修復再生療法といえる。

2) 診療名 : 末梢血リンパ球を用いた肺がん患者予後予測法の開発

診療内容 : 腫瘍細胞が自己の免疫系に感知され得る, 複数の抗原物質を持つことは既に明らかになっている。このことを利用し, 肺がん患者の予後を予測するための, 簡便な免疫学的測定法を開発する。近年, 切除不能肺癌に対する化学療法の進歩は目覚ましいものがあるがまだまだ満足いくレベルではない。現在, 肺がんはがん種の中でも死亡原因の第 1 位を占め年間死亡者数は 60,000 人を超えている。このような難治性の肺がん治療には新たな治療の開発や免疫状態により適切な治療薬使用が急務である。肺癌未治療がん患者末梢血 10 ml より分離したリンパ球を用いる。EGFR 阻害薬, VEGF 阻害薬を使用した治療, 免疫細胞療法や樹状細胞療法など, 免疫学的反応を利用する治けん療を受ける症例を解析する。対象には健康ボランティアの血液を使用する。免疫学的な反応は本学免疫病理学 高見剛教授と共同で行い, 既に倫理委員会提出済みである。

国内外の評価 : 手術や化学療法, 免疫学的療法といった治療方法の種類に関わらず, 残存した少量のがん細胞を破壊・排除する免疫反応が, 予後に大きな影響を及ぼすものと考えられる。従来は, 皮膚反応, 末梢血中リンパ球の構成, 刺激末梢血リンパ球の産生サイトカインなどを測定して予後を推測する試みがなされたが, 有用な方法は未だ開発されていない。本研究は多重染色で T リンパ球と産生サイトカインの関連を解き明かし, 個々の T 細胞がどの亜群に属するのかを判定する。これは, 従来の類似法が培養上澄中のサイトカインを一括して測定することと異なり, CD3 抗体が擬似的に特異的刺激した後の T 細胞の polarity を測定することを可能にする。

3) 診療名 : 胸郭インピーダンス法による心臓リハビリテーション中の連続的心拍出量測定モニタリング

診療内容 : 非侵襲的かつ簡便な心拍出量 (CO) 測定法である胸郭インピーダンス法により, 主に重症心不全患者に対する心臓リハビリテーションのモニタリングとして連続的に心拍出量を測定し, そのデータを有効で安全な心臓リハビリテーション施行に役立たせる。現在, 入院・外来における心大血管患者に対し, 心肺運動負荷試験 (CPX) の結果に基づき有効で安全な運動量を決定し, 運動処方を行っている。しかし, 心臓リハビリテーションにより予後の改善を著しく認めると報告されている重症心不全患者に対しては, CPX と主観的症状の程度分類である Borg 指数により決定される運動量では, 突然死や心不全の急性増悪の防止を必ずしも抑制できることが担保できないため, 多くの施設では胸郭インピーダンス法による心臓リハビリテーション中の連続的心拍出量測定モニタリングを行っているのは実情である。

国内外の評価 : より重症な心不全患者に対して, より有効かつ安全に心臓リハビリテーションが施行できることから, 国内外の心臓リハビリテーション施設で導入され, その有益性はすでに評価を受けている。フィジオフローは, フランスで開発された製品である。従来のインピーダンス心拍出量測定装置は, ベースライン (ZO) 法を採用しているため, 測定精度を上げるために電極の装着や被験者への制限が多く, 又体動による測定ミスが多く臨床面で実用的ではなかった。フィジオフローはベースライン法を採用せず, 測定時にインピーダンス・ベースライン (ZO) の変化に起因する不安定要素を排除したことで, 正確かつ再現性が高く, 画期的な製品として評価が高い。

4. 専門医・認定医・指導医

湊口信也 : 日本内科学会認定内科医・総合内科専門医・研修医指導医, 日本循環器学会認定循環器専門医, 日本臨床薬理学会認定医・指導医, 日本医師会認定産業医, 日本高血圧学会専門医, 日本心臓リハビリテーション指導士

西垣和彦 : 日本内科学会認定内科医・研修医指導医, 日本循環器学会認定循環器専門医, 日本医師会認定産業医, 日本医師会認定健康スポーツドクター, 日本心血管カテーテル治療学会認定指導医, 日本高血圧学会指導医, 日本不整脈学会 ICD/CRT 認定医, 日本心臓リハビリテーション指導士, 厚生労働省認定臨床研修指導医, 米国心臓協会 (AHA) 認定 BLS/ACLS インストラクター, 労働衛生コンサルタント

川崎雅規 : 日本内科学会認定内科医・研修医指導医, 日本循環器学会認定循環器専門医, 日本超音波医学会超音波専門医・指導医, 日本心血管カテーテル治療学会認定専門医

青山琢磨 : 日本内科学会認定内科医・研修医指導医, 日本循環器学会認定循環器専門医

大野 康 : 日本内科学会認定内科医・総合内科専門医・研修医指導医, 日本呼吸器学会専門医・指導医,

日本呼吸器内視鏡学会専門医・指導医，日本臨床腫瘍学会暫定指導医，日本がん認定機構暫定教育医

村田一知朗：日本内科学会認定内科医・研修医指導医，日本腎臓学会認定専門医・指導医

金森寛充：日本内科学会認定内科医，日本循環器学会認定循環器専門医

舟口祝彦：日本内科学会認定内科医・総合内科専門医，日本呼吸器学会専門医，日本呼吸器内視鏡学会専門医，日本がん認定医機構教育医

川村一太：日本内科学会認定医・総合内科専門医，日本循環器学会専門医，日本核医学会専門医，日本心臓リハビリテーション指導士

岩佐将充：日本内科学会認定内科医，日本循環器学会認定循環器専門医

久保田知希：日本内科学会認定内科医，日本循環器学会認定循環器専門医，日本不整脈学会 ICD/CRT 認定医

山田好久：日本内科学会認定内科医

高杉信寛：日本内科学会認定内科医，日本循環器学会認定循環器専門医

田中俊樹：日本内科学会認定内科医，日本循環器学会認定循環器専門医

名和隆英：日本内科学会認定内科医，日本循環器学会認定循環器専門医，日本心臓リハビリテーション指導士

伊藤文隆：日本内科学会認定内科医

吉田学郎：日本内科学会認定内科医

遠渡純輝：日本内科学会認定内科医

宮崎 渚：日本内科学会認定内科医

柳瀬恒明：日本内科学会認定内科医

中島 孝：日本内科学会認定内科医

垣内大蔵：日本内科学会認定内科医

馬場慎也：日本内科学会認定内科医

吉田明弘：日本内科学会認定内科医

森下めぐみ：日本内科学会認定内科医，日本禁煙学会認定指導医，日本プライマリーケア連合学会認定医

早川由香：日本内科学会認定内科医，日本循環器学会認定循環器専門医，日本禁煙学会認定指導医

横山ちはる：日本内科学会認定内科医，日本循環器学会認定循環器専門医，日本禁煙学会認定指導医

5. 自己評価

評価

循環器，呼吸器及び腎臓内科とも 24 時間体制で診療に当たっている。数多くある診療科の中でも，当科の果たしている役割は高く評価されており，その収益性もトップクラスである。

現状の問題点及びその対応策

循環器，呼吸器，腎臓と 3 つの分野を担当しているが，助教以上のポジションが少ないため人材確保について困難を伴う。また，臨床，教育，研究のいずれにも時間を費やし，特に臨床，教育においても全力を傾注しているため，研究に十分な時間があるとは言い難い。

今後の展望

現在，循環器疾患，呼吸器疾患，腎臓疾患はますます増加する傾向にあり，それぞれの病気のメカニズムを動物実験，臨床研究を通じて解明し，治療に応用していくことが重要と考えられる。今後，循環器疾患，呼吸器疾患，腎臓疾患の分野において細胞死の一つであるオートファジー，細胞を再生する再生医学，新たなヒト多能性幹細胞である MUSE 細胞などがより重要な研究テーマとなることが予想される。したがって，我々はこの点を十分認識し，分子生物学的手法を駆使し，さらなる活発な研究活動を行っていかなくてはならないと考える。

(4) 第三内科

1. 診療の概要

糖尿病代謝内科では、糖尿病を中心としてインスリン導入、高度な合併症の治療、さらに肥満症や動脈硬化症などの先進検査と予防、糖尿病・生活習慣病の教育入院などを行なっている。免疫・内分泌内科では、全身性エリテマトーデスなどの膠原病、リウマチ性疾患を担当している。治療に難渋することが多くステロイド、免疫抑制剤などを適切に使用し患者の寛解をめざしている。内分泌領域では、最近の画像診断の進歩で偶発的にみつかると下垂体、副腎の腫瘍性病変も多くなり、各種ホルモン負荷検査などの的確に診断すると共に他の関連する診療科と連携して専門治療にあたっている。

2. 教育施設

- 1) 日本内科学会認定内科専門医教育施設
- 2) 日本糖尿病学会認定教育施設
- 3) 日本内分泌学会認定教育施設
- 4) 日本人類遺伝学会認定教育施設

3. 診療開発

1) 診療名 : 遺伝子診療外来

診療内容：全国からの依頼を受けて、単一遺伝子異常に起因した糖尿病（MODY、ミトコンドリア糖尿病など）、肥満症、脂質異常症、内分泌疾患などの遺伝子診断を実施している。病態の改善を目指した治療法の開発や専門資格を有する医師による遺伝カウンセリングを実施している。

国内的評価：国内では、当科の研究グループが最も多くの MODY 遺伝子異常を見出し、現在も数多くの DNA 検査依頼を受けている。特に、重症 MODY3 においてはインスリン依存の 1 型糖尿病との鑑別は重要であり、インスリン治療以外の薬物療法の可能性が得られるので臨床的に意義は大きい。MODY5 においても多様な臓器異常が認められるので、早期の遺伝子診断は重要である。

国際的評価：MODY2, 3, 5, SHP 肥満などの糖尿病/肥満症の原因遺伝子を世界に先駆けて発見しており、当科研究グループは糖尿病遺伝子研究のメッカと言って過言でない。

4. 専門医・認定医・指導医

武田 純：日本内科学会認定医・指導医、日本糖尿病学会専門医・指導医、日本人類遺伝学会 臨床遺伝専門医・指導医、日本病態栄養学会 認定 NST コーディネーター・専門医・指導医

堀川幸男：日本内科学会認定医・指導医、日本糖尿病学会専門医・指導医、日本病態栄養学会 認定 NST コーディネーター・専門医

諏訪哲也：日本内科学会総合内科専門医・指導医、日本糖尿病学会専門医、日本内分泌学会専門医・指導医

飯塚勝美：日本内科学会認定医・指導医、日本糖尿病学会専門医・指導医、日本医師会認定産業医、日本病態栄養学会 認定 NST コーディネーター・専門医、日本糖尿病協会療養指導医

川地慎一：日本内科学会総合内科専門医・指導医、日本糖尿病学会専門医・指導医、日本内分泌学会専門医・指導医、日本甲状腺学会専門医、日本病態栄養学会専門医、日本消化器内視鏡学会専門医、日本体育協会公認スポーツドクター

塩谷真由美：日本内科学会総合内科専門医・指導医、日本医学放射線学会専門医、日本糖尿病学会専門医

廣田卓男：日本内科学会総合内科専門医・指導医、日本糖尿病学会専門医、日本甲状腺学会専門医

橋本健一：日本内科学会認定医・指導医、日本糖尿病学会専門医・指導医、日本内分泌学会専門医・指導医、日本消化器内視鏡学会専門医

丹羽啓行：日本内科学会総合内科専門医、日本糖尿病学会専門医・指導医

5. 自己評価

評価

チーム医療の実践と専門的コメディカル（CDEJ, CDE 岐阜）の育成により、より質の高い医療が提供できている。

当科は岐阜県糖尿病対策推進会議のコア診療科であり、県内の病診連携やチーム医療を推進させてい

る。全国的にも、糖尿病連携手帳の活用推進、指導ツールであるカンパセーションマップの普及、専門誌 DM Ensemble の編集、地域療養指導制度である登録医・療養指導医や CDE ネットワークの推進など、療養指導ツールの開発と普及や制度インフラ整備において主導的役割を果たしている点は高く評価できる。

現状の問題点及びその対応策

糖尿病の増加に伴い、全科に患者が存在し、糖尿病外来や教育入院治療だけでは対応しきれなくなっている。また複雑な合併症例が多く他科の協力のもと診療を行なっている。今後は院内講習会の企画、他科の医師、コメディカルスタッフとより連携を深めていく必要がある。また糖尿病教室は担当病棟のみでなく院内院外にも広く展開していく。

今後の展望

糖尿病などの生活習慣病に対し、岐阜市、医師会などを含む各種自治体や団体と連携し、上記の医療連携インフラの充実と発展を図ることによって地域全体で疾患の理解、予防医療を展開していく。さらに先進医療である遺伝子診断に基づく体質診断とオーダーメイド医療の開発を推進させる。

(5) 神経内科・老年内科

1. 診療の概要

頭痛、めまい、しびれ、手足の不自由、もの忘れなど日常的な問題から比較的稀な神経難病まで神経内科の広範な領域の診断と治療を行っている。パーキンソン病、脳血管障害、認知症など高齢者の患者が多く、老年内科としての大きな側面も担っている。脳炎・脳症などの神経救急疾患においては、高次救急救命センターや他科と連携して対応しているが、人員不足のため脳血管障害の急性期の多くは脳神経外科に依存している。難病拠点病院である本院に配置された難病相談員と協力して、難病患者への社会資源の適応、在宅療養調整まで幅広く対応している。医師、看護師、薬剤師、医療連携センターを交えた多職種共同の定期的病棟会議、地域の医療・福祉スタッフを交えた拡大カンファレンスを随時開催、かかりつけ医との診療連携、地域での難病関連スタッフ教育を推進している。入院診療においては、在院日数の短縮化およびクリニカルパスの積極的利用にむけて努力している。

2. 教育施設

- 1) 日本内科学会認定教育施設
- 2) 日本神経学会認定教育施設
- 3) 日本老年医学会認定施設
- 4) 日本脳卒中学会認定研修教育施設

3. 診療開発

1) 診療名 : ものわすれ外来

診療内容：ものわすれを主訴として来院された患者に対し、神経学的診察・臨床心理士による神経心理検査・血液検査・脳MRI (VSRAD advance 解析) 検査・IMP-SPECT (Z-SAM 解析) 検査・髄液バイオマーカー (アミロイド β 42 およびリン酸化タウ蛋白) の測定を行い、これら検査結果をもとに、ものわすれ外来検討会において認知症およびその原因疾患の確定診断を行う。認知症の診断が確定した患者および家族に対し、疾患に関する説明、治療の開始、地域におけるサポートにつなげるための社会資源の導入を行う。

他病院での導入状況：現在、上記の検査を全て行っている病院は、認知症診療を専門とするごく一部の病院に限られている

国内的評価：現在、アルツハイマー型認知症の診断において、アミロイドPET とならび髄液バイオマーカーの測定は、最も診断精度の高い検査とされている。また軽度認知機能障害患者のうち、アルツハイマー型認知症の発症前段階にある患者の診断も可能とされている。また近年開発されたアルツハイマー型認知症やレビー小体型認知症の診断支援ソフトウェアであるVSRAD advance 解析やZ-SAM 解析の有用性も報告されている。

国際的評価：同上

4. 専門医・認定医・指導医

犬塚 貴：日本内科学会認定内科医・指導医，日本神経学会専門医・指導医，日本老年医学会専門医・指導医，日本老年精神医学会認定医，日本認知症学会専門医

木村暁夫：日本内科学会総合内科専門医・指導医，日本神経学会専門医・指導医

林 祐一：日本内科学会総合内科専門医・指導医，日本神経学会専門医・指導医，日本老年医学会専門医・指導医

香村彰宏：日本内科学会認定内科医・指導医，日本神経学会専門医

山田 恵：日本内科学会認定内科医・指導医，日本神経学会専門医

原田斉子：日本内科学会認定内科医，日本神経学会専門医

吉倉延亮：日本内科学会認定内科医，日本神経学会専門医

竹腰 顕：日本内科学会認定内科医

5. 自己評価

評価

限られた教員/医員数と病床数で規模的には限界があるが、当科における診療内容は日常的な神経障害による問題に加え、神経救急から神経難病の確定診断・社会資源の調整まで幅広く展開してきた。但し、人員不足のため脳血管障害への積極的対応や高次救急救命センターへの出向ができていない。診療一般の目

標値はほぼ満たしているが、地域の神経内科医療の整備が遅れていて、退院後の連携が難しいことが多く在院日数については長期化が避けられないでいる。

医師、看護師、連携センターを交えた定期的病棟会議、地域の医療/福祉スタッフを交えた拡大カンファレンスの随時開催、かかりつけ医との診療連携、地域での難病関連スタッフ教育や啓発活動を継続的にを行い、学内外の神経内科診療の充実に努力した。

難病拠点病院である本院に配置されている難病専門員と共同して福祉行政スタッフ、訪問看護師・ヘルパーの教育、各医療圏における難病のネットワークの構築や災害対策も進めてきた。神経難病等において、かかりつけ医との連携を深め2人主治医を推進してきた。さらに岐阜県難病連の取り組みにも積極的に参加し地域の神経難病対応の底上げに貢献してきた。かかりつけ医の認知症対応力向上研修、地域の認知症ネットワークづくりに、講師や企画の一部を担当するなど積極的に参加し、岐阜県の認知症対応の整備に協力してきた。また学内外の看護師、療法士の養成にも講義等を通じて参加した。大学病院の診療・臨床教育力の向上だけでなく、出張による地域における神経内科診療へのアクセス確保にも努力してきた。

現状の問題点及びその対応策

何よりも人材の確保が急務である。神経内科医療の整備が遅れている地域ほど、その地域の病院研修医に入局の働きかけができず、さらにその整備が遅れるという悪循環は断ち切らなくてはならない。人材不足はすべての問題点の根源である。現在、1) 外来対応力が不十分であり、診察待ち時間が長い。2) 入院在院日数が長く、入院待機者が常時多い。3) 脳血管障害への積極的対応や高次救急救命センターへの出向ができていない。4) 地域の神経内科専門医が非常に不足しており、地域医療機関への外勤によるパート診療サポートもニーズに追いついていない。5) 学生教育において5年生のクリニカルクラークシップの完全実施にまだ遠い。6) 診療の多忙化のため臨床教育・研究に専念できる時間が限られている。以上の解決のため、実習等での学生との緊密な接触とその継続、初期研修医に対して神経疾患対応スキルアップの催しを多く用意しコミュニケーションを図る。連携センターやかかりつけ医との協力をさらに深めていく。

今後の展望

新たな入局者を求めて努力する。多職種による定期的病棟会議、かかりつけ医との連携を更に進め、在院日数の短縮化、日常および救急診療対応力を確保していく。人員が増えれば脳神経外科と協力して、脳血管障害急性期の診療にも寄与していきたい。難病専門員と協力して地域社会の難病対応力を高める努力、地域の認知症対応力の向上、コメディカルスタッフの神経内科・老年科教育を今後も継続し、病院内外の神経疾患対応力を向上させたい。

(6) 総合内科・総合診療部

1. 診療概要

近年の医学の進歩とともに、ますます医師の専門化・細分化が進んでいる。一方で、社会の高齢化とともに複数の疾患を併せ持つ患者が急増してきている。すなわち、患者の実態と医師の診療範囲にミスマッチが生じてきている。その結果、主治医としての診療が十分にできなかつたり、専門外の疾患であると最初から診療を断つたりするといった事態が起こってきている。そのため、地方だけではなく都市部でも、全人的・総合的な診療ができる医師が多く病院で求められるようになってきている。また、原因不明でなかなか診断がつけられなくて医療機関を転々とする患者も多くみられる。そのような患者に対し、病態生理学的な見地から思考し、的確な診断を行うことができる診断能力の高い医師も必要である。我々は、これら2つの社会的ニーズに対して貢献できるような診療と、それに対応できる総合内科医の養成を目指している。

診療面では、1) 初診患者の診療、必要があれば専門診療科への紹介、2) common diseases や複数の疾患を有する患者の診療、3) 診療時間内の1・2次救急患者の診療、4) 専門診療科からの原因不明疾患の依頼診療などを行い、大学病院における中核的な役割を担うことによって、専門診療科の診療効率を高めている。紹介されてくる発熱患者にリウマチ・膠原病疾患が多いため、これらの専門診療にも力を注いでいる。教育面では、1) 医療面接と診察を重要視した卒前・卒後臨床研修の実践、2) 後期臨床研修医を対象とした総合内科医の養成、3) リウマチ専門医の養成、4) 地域医師会との生涯教育に関する連携などに携わっている。また、2004年度から始まった卒後臨床研修制度に合わせ、学内・学外の研修医のレベルアップと交流を目的としたプライマリ・ケアカンファレンスという教育プログラムを、年3回岐阜県内の多くの臨床研修指定病院とともに開催している。新しい専門医制度による総合診療専門医の育成のため、2015年4月から日本プライマリ・ケア連合学会認定の家庭医療後期研修プログラム(ver.2.0)を開始する。

2. 教育施設

- 1) 日本内科学会認定教育施設
- 2) 日本糖尿病学会認定教育施設
- 3) 日本消化器内視鏡学会指導施設
- 4) 日本循環器学会研修施設
- 5) 日本消化器病学会認定施設
- 6) 日本リウマチ学会教育施設
- 7) 日本老年医学会認定施設
- 8) 日本アレルギー学会準認定教育施設

3. 診療開発

1) 診療名 : 不明熱外来

診療内容: 他院での診療において原因が不明であった発熱を主訴とする患者に対し、病態生理学的見地から診断し、迅速に治療方針を決定する。専門的な治療が必要ない場合には、そのまま総合内科外来もしくは病棟にて治療を行う。

他病院での導入状況: 現在、不明熱外来を標榜している病院は、我々が調べた限りない。

国内的評価: スタッフの多くが総合内科専門医を取得している。

国際的評価: 未診断患者の受け皿となる不明熱外来の標榜は、新しい疾患や概念の発見にもつながり、国際的ニーズに応えるものと考えている。

2) 診療名 : リウマチ・膠原病外来

診療内容: リウマチ・膠原病の診断治療は高度先進医療の実践に不可欠である。不明熱外来で診断されたリウマチ・膠原病は、難病に苦しむ患者にとって重要な課題である。現在、内科ゾーンで生物学的製剤による治療患者を最も多く抱えており、特に関節リウマチは整形外科領域と共同して治療する必要がある。

他病院での導入状況: 東海地方では保健衛生大学、愛知医科大学に専門外来はあるが岐阜県下の中核病院では、当医局の関連病院の岐阜市民病院、岐阜県総合医療センター以外にはない。

国内的評価: 日本リウマチ学会総会には毎年臨床的成果を発表している。なお、当科には日本リウマチ学会認定リウマチ専門医2名が在籍して診療を担当している。

国際的評価: 米国、ヨーロッパリウマチ学会と共同して、日本リウマチ学会も臨床疫学研究が進行し

つつある。

4. 専門医・認定医・指導医

石塚達夫：日本内科学会認定医・専門医・指導医，日本消化器病学会専門医・指導医，日本消化器内視鏡学会専門医・指導医，日本糖尿病学会専門医・指導医，日本内分泌学会専門医・指導医，日本老年医学会指導医，日本リウマチ学会専門医・指導医，日本病態栄養学会専門医，日本高血圧学会専門医

梶田和男：日本内科学会認定医・指導医，日本糖尿病学会専門医・指導医，日本内分泌学会専門医

森田浩之：日本内科学会認定医・専門医・指導医，日本内分泌学会専門医・指導医，日本糖尿病学会専門医・指導医，日本リウマチ学会専門医・指導医，日本老年医学会専門医・指導医，日本病態栄養学会専門医，日本アレルギー学会専門医

宇野嘉弘：日本内科学会認定医・専門医・指導医，日本循環器学会専門医，日本糖尿病学会専門医

和田祐爾：日本内科学会認定医・専門医，日本消化器内視鏡学会専門医，日本糖尿病学会専門医，日本消化器病学会専門医

谷本真由実：日本内科学会認定医・専門医，日本糖尿病学会専門医

池田貴英：日本内科学会認定医・専門医，日本リウマチ学会専門医・指導医，日本糖尿病学会専門医

山内雅裕：日本内科学会認定医，日本糖尿病学会専門医

森 一郎：日本内科学会認定医・専門医，日本糖尿病学会専門医

藤岡 圭：日本内科学会認定医・専門医，日本リウマチ学会専門医，日本糖尿病学会専門医

岡田英之：日本内科学会認定医・専門医，日本リウマチ学会専門医，日本糖尿病学会専門医

高橋典子：日本内科学会認定医

白井太郎：日本内科学会認定医

北田善彦：日本内科学会認定医

田口皓一郎：日本内科学会認定医

川島実可子：日本内科学会認定医

5. 自己評価

評価

外来は，月間平均患者数が 1,000～1,300 人となっている。また，開業医や他院からの紹介患者も増加してきており，平均紹介率も平成 23 年度が 36%，25 年度は 40%までアップしてきている。これらのことから，地域においても総合診療外来として認知され活用されつつあると考えている。入院は，2004 年 6 月新病院への移転とともに，東 7 階病棟に 4 床で新規開設し，2007 年 4 月からは 7 床，2011 年 4 月からは 12 床，2014 年 10 月からは西 9 階病棟 13 床に増床した。この増床によって，病床を探すことが少なくなり，比較的スムーズに緊急入院にも対応できるようになったのは当科にとっても患者にとっても朗報である。2014 年度病床稼働率 98.7%，平均在院日数 19.3 日となっている。入院患者の疾患は非常に多岐にわたり，最近では膠原病，リウマチ患者の入院が増加傾向である。また，他の診療科に比べて診断目的の入院が多いのが特徴である。一方，教育では，初期・後期研修医を受け入れ，基本的な臨床スキルが習得できるようなプログラムを実践している。医師免許取得後 4 年目には日本内科学会認定内科医資格を取得できるように指導している。

現状の問題点及びその対応策

2004 年度から卒後臨床研修が必須化され，そのなかでもプライマリ・ケアの実践が強調されている。総合内科・総合診療部はその中心的な役割を担うべき立場にあるが，なかなか入局を希望し総合内科医を目指そうとする若い医師が少ないのが現状である。ベッド数が新病院への移転当初の 3 倍となって明らかに研修の機会は増加しているが，他の研修指定病院で研修をしている研修医たちに総合内科医の魅力や役割について十分に情報が行っているとは考えにくいのが現状である。今後は，研修医が多く在籍する基幹病院に医師を派遣することによって，総合内科医の実力を示して研修医の育成に努めたい。

今後の展望

岐阜県の特徴の 1 つに山間部が多いことが挙げられる。人口が平野部に比べ少ないため，比較的小規模の病院が多く存在する。また，複数の疾患を併せ持つ高齢者が多いのも特徴である。こうした地区や病院において，最もニーズが高い医師は，ある特定の分野に深い知識と技能を持つ専門的な医師ではなく，むしろ幅広い医学知識と技能を持ったヒューマニティあふれる総合内科医であり，多くの学生や研修医が

理想とする医師像の1つでもある。一方、大学病院をはじめとする都市部の基幹病院には、原因が不明の患者も多く紹介されてくるが、それに対応ができる総合内科医が必要となってくる。それは、他の専門診療科の効率的な運営のためにも重要である。

総合内科・総合診療部では、高い診断能力を持ち、一人の患者の複数の疾患に同時に対応ができるスキルを持った総合内科医の養成に全力を尽くし、岐阜県の社会的ニーズに答えてゆきたい。また、遠隔医療を通じてより細やかな診療体制の構築と、他の医療機関や企業との連携によって住民の健康増進による疾病予防にも努めてゆきたい。また、新専門医制度による新しい専門医として総合診療専門医ができるため、当科でも日本プライマリ・ケア連合学会認定の家庭医療後期研修プログラム（ver.2.0）を開始し、専門医育成に努めていく。

(7) 第一外科

1. 診療の概要

当科は心臓血管外科，呼吸器外科，消化器外科（一般外科，甲状腺外科，乳腺外科を含む）の3チームで構成され，外科領域の全臓器疾患の外科治療にあたっている。高齢化社会にあつて，外科手術はさらなる低侵襲化と複雑病変に対して高度な技術がますます求められる。高齢者の特徴は決して一疾患のみに罹患していることはなく，時には心臓手術と呼吸器手術，心臓手術と消化器手術などの同時手術を行わなくてはいけない場合も生じる。同時手術が高侵襲のときの二期手術の順序決定などは多くの経験と実績が必要である。当科ではカンファランスは3チーム合同で行い，お互いにサポート，補完しながら最良の治療戦略を考えている。

心臓血管外科では冠動脈疾患，弁膜症疾患，不整脈疾患，大動脈疾患，末梢動脈疾患，静脈疾患を対象に外科治療を行っている。冠動脈バイパス手術では人工心肺を用いない心拍動下冠動脈バイパス術を第一選択としている。グラフト採取法に関しては，橈骨動脈には内視鏡を用いて手首に約2 cmの切開線のみで採取を行っている。下肢静脈をグラフトとして使用する症例では特殊な器具を用い皮膚切開線を最小限とする方法にて採取を行っている。弁膜症疾患では通常の前正中切開のみではなく症例に応じて小切開肋間開胸アプローチにて人工弁置換術と自己弁温存手術を行っている。僧帽弁逆流症に対しては自己弁を温存する弁形成術を積極的に行っている。胸部・腹部大動脈瘤では症例に応じて人工血管置換術とステントグラフト内挿術を行っている。弓部置換術においては脳合併症を低くするために当科で考案したオリジナルの樹枝状血管を使用し良好な結果をあげている。ハイリスク患者の弓部や胸腹部動脈瘤症例に対しては，頸部や腹腔臓器分枝動脈にバイパスを行った後，瘤の部分をステントグラフトで内腔よりcoverするdebranching TEVARを行っている。動脈瘤破裂の緊急手術症例は高次救命センターと連携し県全域より搬送され迅速な手術対応で良好な成績をあげている。

呼吸器外科では肺悪性腫瘍の症例が年々増加している。当院の原発性肺癌手術症例数は岐阜県下最多となり，年間100例を超えている。東海地方でも先駆的に開始した胸腔鏡下肺葉切除術による低侵襲化に加えて，さらなる低侵襲化を目指したロボット手術を，ロボットが配備されている関連施設に向いて3例施行して良好な結果を得ている。一方で，より切除範囲を少なくしながら肺癌の根治性を損なわない区域切除術は更なる低侵襲な術式である。独自の手法による区域決定法により確実な術式が可能となり，その成績も国内外で評価されている。

消化器外科では1998年から始めている胃癌，大腸癌に対する腹腔鏡下手術のみならず，食道癌，肝癌，良性あるいは低悪性度脾腫瘍に対する内視鏡下手術も行っている。胃癌に対する腹腔鏡下手術はこれまで主に比較的早期の症例を対象にしてきたがリンパ節廓清の精度向上に伴い，進行癌への適応を検討している。大腸癌に対する腹腔鏡下手術は当科においてほぼ「標準術式」となり，従来の開腹術はほとんど行われなくなっている。肛門温存手術であるISR（内肛門括約筋切除）も腹腔鏡下手術との組み合わせで精度を増し，側方リンパ節廓清も腹腔鏡下に行っている。食道癌に対しても鏡視下手術が標準術式となっている。従来の開胸，開腹手術に比べ明らかに低侵襲であり，術後管理に難渋する症例も激減している。肝癌，脾腫瘍に対しては十分な症例検討を経て，症例を選択して行っている。いずれも良好な成績を収めている。開腹肝切除に関しては，これまで取り組んできた，術中超音波造影や，肝切離の手技，デバイスの発展により，より合理的で出血量の少ない手術が可能となっており，術後合併症はさらに減少している。脾癌に対しては化学放射線療法後の症例も増えてきている。症例により胃脾吻合も取り入れており，脾液漏は減っている。また門脈浸潤の症例に対しては当科内の血管外科グループのサポートの元，積極的に合併切除再建を行っており，当科の看板手術の一つになっている。当科は心臓血管外科，呼吸器外科のサポートが得られるのが強みであり，これらの臓器の合併症を有した症例が紹介されることも多い。重度基礎疾患を有する癌症例の治療において，われわれが「最後の砦」という自負を持って診療にあたっている。

2. 教育施設

- 1) 日本外科学会外科専門医制度修練施設指定施設
- 2) 日本胸部外科学会指定施設
- 3) 日本消化器外科学会専門医制度指定修練施設
- 4) 心臓血管外科専門医認定機構基幹施設
- 5) 呼吸器外科専門医合同委員会認定基幹施設
- 6) 日本循環器学会循環器研修施設
- 7) 日本肝胆膵外科学会高度技能医修練施設 B

8) 日本ステントグラフト実施基準管理委員会認定胸部・腹部大動脈瘤ステントグラフト実施施設

3. 診療開発

1) 診療名 : 心不全合併虚血性心疾患に対する血管新生・心筋再生医療

診療内容 : 重症の心不全合併虚血性心疾患, 低左心機能症例に対して, 循環器内科と共同で血行再建可能な部位にはバイパスを行い, 血行再建不可能な部位にはエリスロポイエチン投与による血管新生・心筋再生の臨床応用を目指す。また, バイパスが不可能な症例には胸腔鏡下でのエリスロポイエチン心筋内投与も可能としたい。

他病院での導入状況 : エリスロポイエチンによる心筋再生は岐阜大学循環器内科の発案であり, 他病院での導入はされていない。

国内的評価 : 心筋再生, 血管新生は他の血管新生促進因子での研究がここに来て停滞している。エリスロポイエチンは, 臨床上有害事象は軽微と考えられ, その効果は基礎的研究で確認されている。

国際的評価 : エリスロポイエチンによる臨床応用は例がなく, 新しい治療体系となりうる。

2) 診療名 : 当科の独自開発による区域面の同定法を用いた肺癌に対する区域切除術

診療内容 : 当科で施行してきている肺癌に対する胸腔鏡下肺葉切除術から, より呼吸機能を温存した区域切除術を我々独自に考案した方法で施行することにより, 患者の QOL をより高める。肺葉切除術は, 肺癌に対する標準術式であるが, 近年, より切除肺を少なくする区域切除の妥当性が検討されてきており, 我々もこの手術を胸腔鏡補助下に施行する方法を考案しより高度な医療を患者に提供することを目的にしている。また, 胸腔鏡も年々進歩してきており, 鮮明な画像下での手術が可能となっている。

他病院での導入状況 : 肺癌における積極的領域切除術は臨床研究も開始されており, その妥当性も認められている。当院も多施設共同研究に参画している。

国内的評価 : 当科の胸腔鏡下手術, 区域切除術は, 東海地方では先進的な立場にあると自負している。当科の独自の方法は, 海外雑誌の論文となっており, その成績も海外雑誌の論文となっている。

3) 診療名 : 術中造影超音波検査による至適肝切除術

診療内容 : 肝切除術において腫瘍の遺残がない切除が重要である。一方, 術後肝不全を予防のためには過度な肝切除は避けなければならない。これまでは肝静脈などの構造物を肝区域の境界の目安とし肝切除を行っていたが, 門脈血流域によって規定される真の区域と解離していることや, 亜区域の境界には目安となる構造物がなく亜区域切除の場合の切除ラインの設定は困難な場合がある。不適切な切除ラインによる肝切除から残肝機能の低下, 術後肝不全の発症が危惧される。肝切除術における根治性の向上と残肝機能の温存を保つため, 術中造影超音波を用い至適な肝切除ラインを決定する。

他病院での導入状況 : 超音波用造影剤は肝細胞癌や転移性肝癌の診断で内科領域では普及した検査法である。一方, 外科領域では安全な肝切除のための工夫として, 術中超音波としての使用の報告が散見されるようになったが, まだ一般的ではない。

国内的評価 : 術前診断されなかった微小病変の検出することにより, 追加肝切除など根治性の向上が見込まれる。また, 多発発見例では化学療法への conversion など治療方針の決定にも役立つ。残肝予備能の温存することにより, 術後肝不全の予防に期待できる。

国際的評価 : 前述したように外科領域への応用はまだこれからであるが, 縦中超音波造影により安全で治療効果の高い肝切除術が可能となり, 術後患者の生命予後, QOL の向上につながると思われる。

4) 診療名 : 術中 ICG (インドシアニングリーン) 蛍光造影法による腸管血流の評価

診療内容 : 術中 ICG (インドシアニンググリーン) 蛍光造影法とは, ICG が血中の α_1 リポプロテインと結合することで発する近赤外線を医療用 CCD カメラによって捉え, 血管を始めとする生体内組織を観察する手技である。ICG 蛍光造影法は副作用が極めて少なく, 低侵襲で簡便であることから近年様々な領域で応用され, その有用性が報告されている S 状結腸切除や直腸切除の際, 口側吻合部の血流が問題となる。動脈拍動が必ずしも触知できないことがあるため, 肉眼的に血流を評価する方法として術中 ICG 蛍光造影法が有用である。

他病院での導入状況 : 術中 ICG 蛍光造影法は癌のセンチネルリンパ節の同定に主に使われている。さまざまな臓器の血流評価に用いられつつあるが, まだ一般的でない。

国内的評価 : 客観的に血流評価ができるため, 過不足ない腸管切除が可能となり, 縫合不全を減らす

ことができる。

国際的評価：S 状結腸はアジア人に比較し、欧米人は短い傾向がある。同部をどれだけ温存できるかが、吻合には重要なポイントとなる。血流を客観的に評価できれば、過剰な腸管切除を免れることができるし、安全な吻合につながる。

4. 専門医・認定医・指導医

竹村博文：日本外科学会指導医・専門医・認定医，心臓血管外科専門医，日本胸部外科学会指導医・認定医，日本循環器学会専門医

岩田 尚：日本外科学会指導医・専門医・認定医，呼吸器外科専門医，日本胸部外科学会認定医，日本がん治療認定医機構暫定教育医・がん治療認定医，肺がん CT 検診認定医

關野考史：日本外科学会指導医・専門医・認定医，消化器外科指導医・専門医，日本消化器病学会認定消化器病専門医，日本肝臓学会認定肝臓専門医，日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医，マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定医

島袋勝也：日本外科学会指導医・専門医・認定医，心臓血管外科専門医，日本胸部外科学会認定医，日本循環器学会専門医，日本血管外科学会認定血管内治療医，日本脈管学会認定脈管専門医，胸部・腹部ステントグラフト指導医

村瀬勝俊：日本外科学会指導医・専門医・認定医，消化器外科指導医・専門医・認定医，日本肝胆膵外科学会高度技能指導医，日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医，日本がん治療認定医機構がん治療認定医，マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定医

白橋幸洋：日本外科学会専門医・認定医，呼吸器外科専門医，日本がん治療認定医機構暫定教育医・がん治療認定医，肺がん CT 検診認定医

石田成吏洋：日本外科学会専門医・認定医，心臓血管外科専門医，日本脈管学会認定脈管専門医

木村真樹：日本外科学会専門医・認定医，消化器外科専門医，日本食道学会食道科認定医，日本肝胆膵外科学会高度技能指導医，日本内視鏡外科学会技術認定医，日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医，日本がん治療認定医機構がん治療認定医，マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定医

名知 祥：日本外科学会専門医・認定医，日本救急医学会救急科専門医，マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定医，日本救急医学会認定 ICLS 指導者養成ワークショップディレクター・コースディレクター，日本救急医学会 JPTEC 認定インストラクター，日本臨床救急医学会 ISLS 認定ファシリテーター

關野誠史郎：日本外科学会専門医，消化器外科専門医，日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医，日本がん治療認定医機構がん治療認定医，マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定医

中嶋慎治：日本外科学会専門医

水野裕介：日本外科学会専門医

5. 自己評価

評価

総合外科として、あらゆる臓器の外科治療を行ってきたが、そのテーマは低侵襲であった。人工心肺非使用心拍動下冠動脈バイパス術、腹部・胸部大動脈瘤ステントグラフト内挿術、僧帽弁形成術、MICS（小切開による開心術）、胸腔鏡下肺切除術、腹腔鏡下胃切除術、腹腔鏡下結腸切除術、単孔式胆嚢切除術など、あらゆる低侵襲下に努力してきた。症例数も年々増加してきている。国内外の学会、論文等での発表も量的質的にも増加しており、内外にアピールしてきた。

現状の問題点及びその対応策・今後の展望

症例の増加にともなう外来待機期間が徐々に延びており、悪性疾患や循環器疾患を扱う関係上、許容範囲を逸脱することは許されない。外科治療の質を落とすことなく医療を提供することも今後重要と考える。一方で、より高度な手術室（ハイブリット手術、ロボット手術）の整備も、今後さらなる低侵襲の手術を実現するためには必要となり、病院当局との密な連携を保ちながら実現していきたい。

(8) 第二外科

1. 診療の概要

消化器外科・乳腺外科を専門とし、悪性腫瘍に対する外科的治療はもちろんのこと、手術と化学療法を融合した癌の集学的治療の治療成績向上を目標にして治療にあたっている。目指すところは①低侵襲手術の確立、つまり鏡視下手術の普及、②癌の根治性を担保した機能温存手術、③切除不能・進行癌に対する化学療法を用いた **Adjuvant Surgery**、つまり抗がん剤により腫瘍を縮小させ、根治術を行い、より生存期間延長や、治癒をも目指した治療法である。

具体的には①上部消化管グループ（食道・胃）、②肝・胆・膵グループ、③下部消化管グループ、④乳腺グループに分かれて診療にあたっている。平成 26 年の手術症例件数は食道癌：35 例、胃癌（悪性腫瘍）：91 例、結腸・直腸癌（悪性腫瘍）：160 例、原発性・転移性肝癌（悪性腫瘍）：23 例、胆道・膵癌（悪性腫瘍）：18 例、乳癌（悪性腫瘍）：72 例であった。全ての領域で症例が増える傾向にあり、岐阜県がん診療拠点施設である大学病院として地域に貢献している。またこれらのうち、鏡視下手術症例数は食道癌：5 例、胃癌（悪性腫瘍）：38 例、結腸・直腸癌（悪性腫瘍）：111 例、原発性・転移性肝癌（悪性腫瘍）：5 例で、多くの腹腔鏡手術を施行し、年々腹腔鏡手術の割合が増加している。当科では 4 名の日本内視鏡外科学会が認定する内視鏡外科学会技術認定医が在籍し、安全に質の高い腹腔鏡手術を提供している。加えて一般消化器外科症例としても、良性疾患である胆嚢摘出術や鼠径ヘルニア、虫垂切除術など、あるいは緊急手術例、のみならず婦人科等他科の手術の応援にも積極的に関与している。

各領域悪性腫瘍に対し根治術が可能と判断した症例には積極的に外科治療を試みているが、切除不能例に対しても、例えば食道癌では化学療法（5FU+TXT+CDDP, S1+TXT+CDGP）、胃癌・大腸癌には化学療法（TS-1+CDDP, TS-1+DOC, DCS, XP+分子標的薬あるいは FOLFOX+分子標的薬など）を応用し、腫瘍縮小によって切除可能となった症例も多く経験しており、**Adjuvant Surgery** として当科を発信源とした概念を全国に提唱している。また下部消化管領域では可能な限り自然肛門温存手術（括約筋温存手術）を行っていることに加え、やむなくストーマ（人工肛門）造設が必要となった場合には、ET、WOC ナースの協力の下でストーマ外来を開催し各種相談に応じている。肝胆膵領域では、一般に胆膵癌は根治切除後でも比較的高率に再発するという現実を踏まえ、術前放射線・化学療法を行った上で外科切除を施行しており、現在までの経験症例ではその有用性を示唆する結果を得ている。乳癌の分野では診断から治療、緩和の全ての領域にわたり、地域医療に貢献できる体制を敷いている。診断においては MRI、超音波との融合画像（Vnav）、トモシンセシスなどの最新診断技術を用いて適切な診断を行い、整容性を重視した乳房温存療法を心がけている。また全摘症例や、整容性維持が難しい場合には、形成外科との連携で乳房再建術（人工物、自家組織）を積極的に行っている。術前、術後において最新の薬物治療をチーム医療にて行い予後と QOL の向上に努めている。同時にトランスレーショナルリサーチも積極的に推進している。

また新しい最先端治療開発の一環として多数の臨床試験を施行・参加し、新たな治療の EBM の確立に寄与している。いずれの臓器の癌に対しても、基本的に化学療法は国内での全国多施設共同臨床試験や新規試験に協力・登録を行い、新しい治療の開発や EBM の確立に寄与するようにしているが、それ以上に当科での独自性を発揮する場の展開を心がけ、岐阜から世界への発信を目標としている。

2. 教育施設

- 1) 日本外科学会認定医・専門医制度研修施設
- 2) 日本消化器外科学会専門医修練施設
- 3) 日本肝胆膵外科学会高度技能専門医修練施設
- 4) 日本大腸肛門病学会専門医修練施設
- 5) 日本乳癌学会研修施設
- 6) 日本食道学会食道外科専門医認定施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : StageIII の治癒切除胃癌に対する術後補助化学療法としての TS-1+Docetaxel 併用療法と TS-1 単独療法のランダム化比較第Ⅲ相試験
診療内容 : StageII, III 胃癌根治切除後の補助化学療法は胃癌治療ガイドラインにて 1 年間の S-1 内服が推奨されているが、StageIII は StageII に比べ予後が不良であり、新たな抗がん剤治療の必要性は明白である。そこで、当科は日本がん臨床試験推進機構（JACCRO）の研究代表者として標準治療の S-1 単独療法に対する S-1+ドセタキセル併用療法の優越性を検証する多施設ランダム化比較試験を行い、現在症例集積中である。

- 国内評価：予後不良である StageIII 胃癌の標準治療の確立は急務であり、全国規模で症例集積が進んでおり、この臨床試験の結果は新たな標準治療の確立に向けて非常に重要である。
- 国際評価：胃癌化学療法はいまだ国際的な標準治療が確立していないのが現状である。その中で、この試験によって S-1+ドセタキセル併用療法の安全性と有効性が示された場合は、国際的にも胃癌治療に大きな影響を及ぼすと考えられる。
- 2) 診療名：StageIV 胃癌における Conversion therapy (Adjuvant surgery) の有効性の検討
 診療内容：胃癌治療ガイドラインでは遠隔転移を伴う StageIV 胃癌は、化学療法の適応であり、外科的手術は適応とならない。しかしながら、近年の化学療法の成績の向上は著しく、StageIV でも化学療法が奏効して切除が可能となり、StageIV 胃癌における化学療法奏効例における Conversion Therapy の報告が増加しており近年非常に注目されている。根治切除ができた症例では予後の改善が期待されるが、適応となる症例の転移部位や転移個数、更には化学療法レジメや投与期間など治療におけるコンセンサスが無いのが現状である。そこで当科は、アジア臨床腫瘍学会 (FACO) 主導の国際研究である、StageIV 胃癌における Conversion therapy (Adjuvant surgery) の有効性を後ろ向きに検討する国際臨床試験の試験責任者として計画推進中である。
- 国内評価：大規模な国際研究により StageIV 胃癌における現状を解析し、将来の前向きな臨床試験に向けての課題を明らかとする非常に重要な研究として注目されている。
- 国際評価：アジアにおける臨床腫瘍研究の先駆けとして、国際研究の基盤を確立する重要な臨床研究として位置づけられ、この研究の成果は、胃癌高頻度罹患地域である東アジアにおける胃癌治療に貢献すると考えられる。
- 3) 診療名：高齢者胃癌症例における術後補助化学療法
 診療内容：胃癌根治切除後の補助化学療法は胃癌治療ガイドラインにて1年間の S-1 内服が推奨されているが、80歳以下を対象とした臨床試験に基づいており、80歳以上の高齢者における化学療法の有効性は示されておらず、治療方針が定まっていないのが胃癌治療での大きな問題点である。今後さらなる高齢化が進み、80歳以上の胃癌症例は増加すると予測される現状において、当科は日本臨床腫瘍研究グループ (JCOG) において、高齢者胃癌症例における術後補助化学療法有効性を検討する第3相比較試験の研究代表者として試験の立案と推進を担っている。
- 国内的評価：胃癌のみならず高齢者における癌治療の確立は大きな課題である。しかしながら、高齢者を対象とした臨床試験は前例が無く、この臨床試験は他癌種における治療確立にも影響を与えると考えられ注目を集めている。
- 国際的評価：海外でも高齢者における胃癌治療のエビデンスは乏しく、先進諸国のみならず、途上国でも癌患者の高齢化が問題になっている昨今では、この臨床試験は国際的にも非常に重要な位置づけとなる。
- 4) 診療名：切除可能局所進行直腸癌に対する新レジメンを用いた術前化学放射線療法の開発
 診療内容：切除可能局所進行直腸癌に対し、局所再発を減少させ、さらに遠隔転移を防止することが生存に寄与すると考えられる。よって術前の化学療法レジメンとして切除不能大腸癌に用いる S-1+オキサリプラチン (SOX) を使用し、そこに放射線治療を加えることにより、遠隔転移を予防し、また局所進行直腸癌をより縮小させ、原発巣切除をしやすくする、剥離面を陰性にする、また肛門温存を可能にすると考ええる。この治療法の安全性と有効性を検証する臨床試験を当科が中心となり施行中である。実際、局所進行直腸癌が pCR (Grade3) と著効し、癌が消失した症例も存在する。
- 他病院での導入状況：全国的にも稀で、現在臨床試験中である。
- 国内的評価：オキサリプラチンを追加することで、局所再発のみならず遠隔転移も予防するかどうか注目されている。
- 国際的評価：S-1 は本邦のみで使用されている薬剤であり、これから評価されていく治療法であると考えられる。
- 5) 診療名：超音波ボリュームデータをもちいた乳癌化学療法の新しい効果判定法
 診療内容：術前化学療法の必要な乳癌症例において、薬物療法の効果を、迅速・簡便・正確に判断する方法として注目している。治療前に、通常の超音波測定に加え 3D ボリューム測定を併用する。腫瘍のボリューム測定によって薬物効果を判定している。
- 他病院での導入状況：全国的にも稀、少数の組織のみ (バーチャルソノグラフィ研究会を中心として、当院は同研究会の会員)。県内では当院のみ。

国内的評価：非常に注目度は高く、同技術を導入する施設も増えてきている。研究段階ではあるが極めて有用な技術と言える。

国際的評価：非常に注目度は高い。

6) 診療名：進行膵癌に対する術前化学・放射線治療の有用性

診療内容：進行膵癌，ことに周辺脈管へ浸潤の傾向にあるものは，例え根治切除しても術後化学療法を選択することが標準的で，それであっても未だ良好な予後を確保しにくいのが現状である。そこで当科では，術前に化学療法と放射線療法した上で外科切除することで再発率を減少させる試みを行っている。放射線治療による局所での癒着が手術の難易度を上げるが，合併症としての術後経過に影響なく，現在までの経験症例では予後の明らかな改善をみている。

他病院での導入状況：本研究は当科が主体となり，連携施設である岐阜県総合医療センターおよび岐阜市民病院という一定の技術ないし症例数を期待しうる施設との共同で推進している。

国内的評価：本邦でも未だ散発的な検討しかみられないが，当科からは消化器外科や癌治療領域での学会で精力的に報告することで徐々にではあるが浸透している。

国際的評価：国際的にも未だ積極的に応用される治療内容ではないが，文献上では同等の治療内容に関する論文が散見される。今後は，国際会議・国際雑誌にも当科での結果を提示し評価されるよう質の高い外科医療を追求したい。

7) 診療名：食道癌に対する2つの世界唯一の3剤併用レジメン（Bi-weekly DCFとDGS療法）療法の有用性

診療内容：進行食道癌に対するタキサン・白金製剤・Fu剤の3剤併用レジメンの新規組み合わせレジメンを早期に着手し，術前療法・高度進行再発症例への投与を行っている。

他病院での導入状況：当科独自の治療体系であり，世界的にも類をみない。

国内的評価：PI試験・PII試験を終了しているがResponseRate83.8・72.7%，手術標本の組織学的奏効度でGrade2・3が38.1・40.0%と驚異的な奏効をみる一方で，血液毒性は非常に軽微である。

国際的評価：現在PII試験の投稿作業中であるが，諸家の報告を凌駕する可能性が高い。

8) 診療名：成分栄養剤の化学療法有害事象としての粘膜炎に対する有用性

診療内容：当科では抗腫瘍薬により，腸管絨毛の萎縮を基礎実験で確かめた。その際にアミノ酸の経口投与が絨毛萎縮を改善し，それにリンクして発生する口腔粘膜炎を予防する可能性を発見した。

他病院での導入状況：当科独自の治療体系であり，世界的にも類をみない。

国内的評価：全国学会・紙上報告を重ねている。現在多施設共同前向き試験のFeasibility studyを終了し，PII試験の準備に入っている。

国際的評価：当科独自の治療体系であり，世界的にも類をみない。PIII試験を遂行し評価を待ちたい。

9) 診療名：抗EGFR抗体薬（Panitumumab/Cetuximab）投与に伴い発現する副作用である皮膚障害（ざ瘡様皮膚炎等）に対する対策療法の開発

診療内容：分子標的剤である抗EGFR抗体においては最も一般的な皮膚障害（ざ瘡様皮膚炎等）を予防することが治療を継続する上で重要であるが，現状においては対症療法が主体となっている。今回切除不能大腸癌において抗EGFR抗体使用中に皮膚障害が増悪したためL-グルタミン，L-アルギニン，クエン酸，カルシウムHMB配合栄養補助食品を使用し著効した症例を経験した。今後この副作用予防治療が前向きに検討されれば，多くの大腸癌患者の治療に貢献できると考える。

他病院での導入状況：全国的にもまれで，前向き観察研究を終了し論文執筆中である。

国内的評価：日本大腸肛門病学会で臨床試験の内容を報告し非常に好評であった。また医学雑誌【臨床プラクティス】においても当科の工夫が紹介された。さらに2015年日本がん看護学会においてもその内容をランチョンセミナーで発表する予定である。

国際的評価：現在英文論文執筆中であり，今後国内だけでなく国外から評価されることが期待される。

4. 専門医・認定医・指導医

吉田和弘：日本外科学会専門医・認定医・指導医，日本消化器外科学会認定医・専門医・指導医，日本内視鏡外科学会技術認定医（消化器・一般外科・胃癌），日本乳癌学会認定医，日本癌治療学会臨床試験登録医，日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医，日本癌治療認定医・機構暫定教育医，マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定，日本食道学会食道科認定医，食

道外科専門医, 日本消化管学会胃腸科専門医・認定医

- 二村 学：日本外科学会専門医, 日本乳癌学会乳腺専門医, 日本消化器外科学会専門医, マンモグラフィ一検診精度管理中央委員会読影認定 (A), 日本癌治療認定医, 日本消化器がん外科治療認定医
- 長田真二：日本外科学会認定医・専門医・指導医, 日本消化器外科学会認定医・専門医・指導医, 日本肝胆膵外科学会高度技能指導医, 日本癌治療機構暫定教育医, 日本消化器がん外科治療認定医
- 山口和也：日本外科学会認定医・専門医・指導医, 日本消化器外科学会認定医・専門医・指導医, 日本内視鏡外科学会技術認定医 (消化器・一般外科・胃癌), 消化器がん治療認定医, 日本癌治療暫定教育医
- 高橋孝夫：日本外科学会認定医・専門医・指導医, 日本消化器外科学会認定医・専門医・指導医, 日本大腸肛門病学会専門医・指導医, 日本内視鏡外科学会技術認定医 (消化器・一般外科・大腸癌), 日本消化器がん外科治療認定医, 日本癌治療暫定教育医, 日本癌治療認定医, ICD, 胃腸科認定医・専門医・指導医
- 奥村直樹：日本外科学会認定医・専門医, 日本消化器外科学会専門医, 日本癌治療認定医機構認定医, 日本消化器がん外科治療認定医
- 松橋延壽：日本外科学会認定医・専門医・指導医, 日本消化器外科学会認定医・専門医・指導医, 日本内視鏡外科学会技術認定医 (消化器・一般外科・大腸癌), 日本癌治療認定医機構認定医・暫定教育医, 日本消化器がん外科治療認定医, 日本救急医学会専門医, 日本食道学会食道科認定医, ICD
- 田中善宏：日本外科学会認定医・専門医, 日本消化器外科学会認定医・専門医・指導医, 日本癌治療認定医機構認定医・暫定教育医, 日本麻酔科学会認定医, 日本消化器がん外科治療認定医, マンモグラフィ一検診精度管理中央委員会読影認定医, 日本消化管学会胃腸科専門医・認定医, 指導医
- 佐々木義之：日本外科学会専門医, 日本消化器外科学会専門医, 日本癌治療認定医機構認定医・暫定教育医, 日本消化器がん外科治療認定医, 日本消化器外科学会認定医
- 森光華澄：日本外科学会専門医, 日本乳癌学会乳腺専門医, 日本乳癌学会認定医, マンモグラフィ一検診精度管理中央委員会読影認定医 (SA)
- 森川あけみ：日本外科学会専門医, 日本乳癌学会認定医, マンモグラフィ一検診精度管理中央委員会読影認定医
- 松井 聡：日本外科学会認定医・専門医, 日本消化器外科学会専門医, マンモグラフィ一検診精度管理中央委員会読影認定医
- 棚橋利行：日本外科学会専門医, マンモグラフィ一検診精度管理中央委員会読影認定, 日本消化器外科学会消化器外科専門医, 日本がん治療認定医機構認定
- 森 龍太郎：日本外科学会専門医, マンモグラフィ一検診精度管理中央委員会読影認定
- 加藤順子：日本外科学会専門医, マンモグラフィ一検診精度管理中央委員会読影認定, 日本乳癌学会認定医
- 山田敦子：日本外科学会専門医, 日本乳がん学会認定医, 日本癌治療認定医機構認定医
- 兼松昌子：日本外科学会専門医, マンモグラフィ一検診精度管理中央委員会読影認定, 日本乳癌学会認定医
- 田中善織：日本外科学会専門医
- 櫻谷卓司：日本外科学会専門医
- 田島 J.雄：日本外科学会専門医
- 館 正仁：麻酔科標榜医

5. 自己評価

評価

消化器・乳腺疾患症例数はともに増加の一途をたどっている。手術技術およびその内容としても、各疾患・臓器領域への分化により高い専門性に伴うレベルの向上がみられており、国内でも十分評価される状況である。上述のごとく、低侵襲手術である腹腔鏡手術症例数も急増し、癌の根治性のみならず、低侵襲性を追求した手術の確立ができています。2014年には内視鏡外科学会技術認定医がひとり増え、合計4人となり、レベルの高い腹腔鏡手術を提供しています。大腸癌においては、年間手術症例の約7割の患者さんに腹腔鏡手術を施行している。また、がん治療における新たなエビデンスを発信することはがん診療の質の向上に必須と考えられ、新規先端治療開発のための臨床試験が昨今全国多施設共同で行われるようになったが、吉田教授が赴任した2007年以降上部消化管グループ(食道・胃)では50臨床試験、②肝・胆・

膵グループでは8臨床試験, ③下部消化管グループでは57臨床試験, ④乳腺グループでは16臨床試験に参加・症例登録を行い, 15治験を含め, 合計146の臨床試験・治験に参加している。吉田教授は胃癌の専門家として数々の臨床試験のPIを務めており, その成果を以下の国際的に最も権威のある2つの学会でいずれもLate Breaking Abstractとして口頭発表した。ESMO(欧州臨床腫瘍学会; 2012年“S-1 plus Docetaxel versus S-1 for Advanced Gastric Cancer (START Trial) Update 2012 (JACCRO and KCSG study Group)”)とASCO(米国臨床腫瘍学会; 2013年“A Phase III Randomized Clinical Trial of Adjuvant Paclitaxel Followed by Oral Fluorinated Pyrimidines for Locally Advanced Gastric Cancer –SAMIT Study–”)。

以上より, 消化器・乳腺における悪性腫瘍に対する治療では, 岐阜県がん拠点病院である大学病院の一翼を担うべく腫瘍外科として, その役割を多に果たしている。そればかりでなく岐阜から世界へ癌治療に関するエビデンスが発信されたことは喜ばしい限りである。

現状の問題点及びその対応策

- 1) 病床数に制限があり, 手術, 化学療法に加え緊急入院などにおけるベッドの確保に困窮することが多かったが, 病院の方針としてベッドコントロールの工夫により現在次第に改善しつつある。
- 2) 手術症例の増加に伴いみられるようになった手術枠の制限が最も大きな問題点の一つである。当科としては, 安全性の確保を重視しつつ手術時間の短縮・手術人員のシフトなどの努力に加え月曜日の手術枠も増加し手術待ち期間は短縮傾向にあるが, まだまだ不十分である。
- 3) 全国的な傾向としてみられる若手医師の外科離れが深刻である。大学病院での標準以上の診療レベルを保ちつつ, 一般外科として地域医療への貢献が期待される当科事情から周辺医療圏への人材の供給にも責任を果たす必要があり, 現段階では医局員の献身的な努力でこれを補っている。その対応としては研修医師の確保に他ならず, 外科医療の利点を説きつつ, 現状打開の方策を共に考えていけるよう学生時代からの意識レベルのアップをはかるべく教育にも力を入れている。

今後の展望

消化器・乳腺の悪性腫瘍を中心とした診療が今後も主体となる。岐阜県がん拠点病院である岐阜大学病院として手術症例数を増加させる努力を続けていく方針である。

学会などの動きとして各領域の専門医を設定する方向にあり, 修練施設としての症例数のみならず診療内容の維持が重要で, 医局員に対する経験の提供および教育体制の充実が必ず必要とされる。その上で, 学会活動を拠点とした最新医療の技術の取り入れや概念の理解を継続することを目標としている。さらに当科ではすでに確立した卒後研修システムをも常に見直し, 状況に則した内容を常に検討する努力が必要である。もちろん患者さんの求めに応じた全人的な外科医の育成がどの段階でも必要であることは当然である。

今後とも日常診療に従事する臨床科としての存在のみならず, がん医療に関する基礎的研究部門との強固な繋がりを継続する必要がある。現在は当科スタッフの指導により大学院生が研究の中心となっているが, 学会発表・論文投稿に対する一定の評価をもとに, 医局員一人一人の意識をより向上させ, 組織全体としての発展を臨みたい。

(9) 産科婦人科

1. 診療の概要

産科婦人科のすべての領域を対象としており、婦人科腫瘍の手術（内視鏡手術も実施）および内科的治療、生殖生理的疾患（不妊症、思春期、内分泌疾患、更年期）、感染症、婦人科心身症および周産期診断・治療に関して、県唯一の大学病院として地域医療機関との連携をとりながら施行している。

2. 教育施設

- 1) 日本産科婦人科学会認定施設
- 2) 日本婦人科腫瘍学会認定施設
- 3) 母体保護法指定施設
- 4) 日本周産期・新生児医学会暫定認定施設
- 5) 生殖医療専門医制度認定研修施設
- 6) 日本産科婦人科内視鏡学会認定研修施設
- 7) 日本東洋医学会研修施設

3. 診療開発

- 1) 診療名：癌化学療法時の性腺機能障害に対する GnRH アナログの保護作用

診療内容：癌化学療法剤による性腺ダメージからの回避機構の第一歩として本研究では GnRH アナログの卵巣間質細胞保護作用を臨床的に明らかにする事を試みた。

他病院での導入状況：1) 保険適用がないこと、2) 臨床試験（大規模）がないため、臨床応用がなされていない。この試験の開発は大学病院の使命である。

国内的評価：GnRH アナログは卵巣に直接作用し、化学療法剤に対する反応性を低下させると着目した独創性は高い。しかも、GnRH アナログは性ステロイド依存性疾患の治療薬として広く使用されており、直ちに臨床応用出来る可能性を秘めている。発展性が期待出来る研究課題である。性腺の化学療法剤に対する感受性が高く、治療後に二次的な性腺ダメージをきたす事が多い。この性腺障害は不可逆的であり、若年者にとって極めて深刻な合併症となっている。化学療法時の細胞毒性から性腺を保護する事は、将来的な生殖能力を保持する上で重要である。

国際的評価：総説（Reprod. Med. Biol. 2008;7:17-27）として発表した。また、諸外国では臨床応用が始まっており、国際的な位置付けは高い。

- 2) 診療名：セミオープン化への試み 2（病診連携の促進）

診療内容：患者紹介元であるかかりつけ医と高次機能病院である当院が施設間の垣根を越えて患者の診療を担当する事を目的とする。この事により病診間の連携がより密接となり、患者にとって多大なメリットを有するのみならず、双方の医療従事者間の知識、技術向上にも貢献すると思われる。この事は当院の社会的責任を果たすと同時に収益上の利点も期待できる。

他病院での導入状況：国内他病院では導入されていない。

国内的評価：有床診療所の入院基準の厳格化が今後促進される事により、分娩を始めとする産科入院の取り扱い施設が減少する事が予測される。本計画により、診療所勤務医師の産科診療の関与が継続できる。医師・助産師を始めとした人的資源、施設・設備の集約化による経済効率の改善が見込まれる。この事を婦人科疾患の診療にも拡大する。この事が、診療所医師にとっても、金銭的リスク、スタッフ管理の不安などから解放される事でメリットは大きい。さらに、最終的には、各診療行為における医療スタッフの負担が軽減され安全が確保される。しかしながら、地域の理解および協力が必須であり岐阜地区で本システムが受容されるかどうかの検討も必要である事や、受容された場合のオープンシステムの形態（実際の運用法用に加えて当院が受け持つ役割も含めて）についても極めて慎重に考慮する事が必要である。

国際的評価：諸外国では臨床応用が始まっており、国際的な位置付けは高い。

- 3) 診療名：リゾフォスファチジン酸を用いた胚培養法の開発

診療内容：1) 体外受精（顕微授精を含む）後、または凍結融解胚の初期、分割胚の培養についてリゾフォスファチジン酸の添加を行い、胚盤胞到達率、着床率、臨床的妊娠率の改善を図る。

2) 第2段階として、未受精卵未熟卵の体外成熟時の培養液としての可能性を探索する。

3) 岐阜県配偶子保存センターの設立（他疾患の治療により性腺機能の廃絶が見込まれる

患者の配偶子を保存)

他病院での導入状況：国内他病院では導入されていない。

国内的評価：国内外共通に生殖補助技術の進歩はめざましいものがあり、過去には妊娠の可能性がなかった患者の妊娠も可能となって来ている反面、技術的な進歩も頭打ちになりつつある。それに伴い妊娠率も頭打ちとなっている。また、#3 に関して公的機関が一元的に管理するシステムは現在の所報告がない。

国際的評価：リゾフォスファチジン酸の着床現象に影響を及ぼす可能性が、Nature. 2005;435:104-108 によって示された。

4) 診療名：広汎性子宮頸部摘出術 (vaginal trachelectomy) の導入

診療内容：従来では子宮温存可能な子宮頸癌は臨床進行期 Ia1 期までとされており、挙児希望のある若年者でも子宮全摘が余儀なくされていた。しかし、現在では子宮頸部のみを広い範囲で切除することで子宮を温存し、妊孕性を失わない治療：広汎性子宮頸部摘出術が可能になってきた。しかし、いまだに実験的な治療であり、予後や実際の妊娠率など解決すべき課題は多い。

他病院での導入状況：東海地方の他病院では導入されていない。

国内的評価：1994 年 Dargent らによって、世界初の Radical vaginal trachelectomy が報告された。現在までに 500 例以上の報告があり、その 90% 以上は Radical vaginal trachelectomy である。日本での本格的導入よりまだ 5 年程度しか経過しておらず、実施施設もごく僅かである。

国際的評価：世界的にも実施例は数百例程度である。

5) 診療名：婦人科診療における内視鏡検査、手術の適応増加

診療内容：良性疾患（卵巣腫瘍、子宮筋腫、子宮内膜症、子宮奇形、子宮外妊娠、卵巣出血等）に対する腫瘍摘出術、子宮全摘術、癒着剥離術等の適応を拡げる事。悪性疾患特に子宮体癌におけるリンパ節郭清を内視鏡的に行う事で患者に対する非常に大きな侵襲軽減が期待できる。さらに子宮頸癌に対する腹腔鏡下手術について、現在高度先進医療申請に向け準備をすすめている。【具体例】；腹腔鏡下手術、子宮鏡手術、子宮鏡検査

他病院での導入状況：国内の多くの施設で実施中。

国内的評価：多くの施設で既に施行されているが、婦人科癌に対してはガイドライン上、未だ標準療法とされておらず、保険適応も限られている。開始するには十分な準備とスタッフの修練を必要とする。

国際的評価：諸外国ではすでに臨床応用されており、十分な臨床効果と侵襲の低さで、国際的な位置付けは高い。

4. 専門医・認定医・指導医

森重健一郎：日本産科婦人科学会専門医，日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍専門医，日本がん治療機構がん治療認定医，日本内分泌学会認定内分泌代謝専門医・指導医，母体保護法指定医，日本産科・新生児医学会暫定指導医

古井辰郎：日本産科婦人科学会専門医，日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍暫定指導医，日本がん治療機構がん治療暫定教育医，日本生殖医学会生殖医療指導医，マンモグラフィー検診精度管理中央委員会検診マンモグラフィー読影認定医，母体保護法指定医

豊木 廣：日本産科婦人科学会専門医，母体保護法指定医

早崎 容：日本産科婦人科学会専門医，母体保護法指定医

矢野竜一郎：日本産科婦人科学会専門医，日本産婦人科内視鏡学会技術認定医

川島英理子：日本産科婦人科学会専門医，日本がん治療認定医機構がん治療認定医，日本女性医学学会認定医，マンモグラフィー検診精度中央管理委員会認定読影認定医，母体保護法指定医

牧野 弘：日本産科婦人科学会専門医，母体保護法指定医

杉山三知代：日本産科婦人科学会専門医，母体保護法指定医

操 暁子：日本産科婦人科学会専門医，母体保護法指定医

水野智子：日本産科婦人科学会専門医，母体保護法指定医

鈴木真理子：日本産科婦人科学会専門医

寺澤恵子：日本産科婦人科学会専門医，母体保護法指定医

志賀友美：日本産科婦人科学会専門医，母体保護法指定医

竹中基記：日本産科婦人科学会専門医，母体保護法指定医

森美奈子：日本産科婦人科学会専門医

菊野享子：日本産科婦人科学会専門医

5. 自己評価

評価

メンバーの入れ替わりの時期であり、まずは体制の整備の段階にあるのが現状であるが、臨床部門においては、必要且つ十分なレベルを維持している。

現状の問題点及びその対応策

産婦人科医不足は全国な問題であるが、岐阜県においては特に産婦人科医の不足が顕著と報道されている。研修医に対するアピールも積極的に行っているが、大学および関連病院を含めた必要数は充足されていない。今後は、まずは魅力的な医局であること、研修医からみた評価の高い指導体制であることが必要。その為には、魅力ある診療内容や臨床研究の環境やテーマが必要である。卒前・卒後教育への情熱と新入医局員の数は比例するため、教育は関連病院スタッフを含めた教室員全員で行いたい。このような体制を確立し、出向スタッフや同門会メンバーが実地臨床で困難に直面した時に頼りとなり信頼されるようにしたい。

今後の展望

2010年度に新任主任教授が着任して以降、幅広い専門分野へ進出がなされてきた。総合病院では標準的な医療レベルとされる内視鏡手術は2011年度より積極的に行われるようになり、卵巣腫瘍の茎捻転や異所性妊娠等の緊急手術も対応可能となった。今後は診療開発にも記載したように、現行実施している早期子宮体癌はもちろん、子宮頸癌に対する適応も拡大していく予定である。この地方では行われていない広汎性子宮頸部摘出術も既に十数例の実績があり、その他の分野も含め教室の守備範囲も新たな領域へ拡大していく方針である。

当施設のみでは人員や設備に限りがあり、急速に新知見が明らかになる産科婦人科疾患すべてに対応することは困難である。可能な限り他科や地域の他医療施設との連携を保ち、加速度的に進歩する医学情報を効率的に診療に取り入れるとともに、最先端医療を開発していきたい。そのために、関連病院とは専門性の高い分野の棲み分けを図りながら、緊密に専門領域を補完する体制を築き、卒前・卒後教育の段階からローテーションや人的交流を通して教室の充実を図りたい。

医育機関ということを念頭に置き、優れた医療人を育成する教育、高度・先進的な医療を開発できる研究、そしてその成果を還元し実施する診療のシステムを目指したい。この体制を通して、中核医療施設として地域の医学・医療の発展に寄与したい。

(10) 整形外科

1. 診療の概要

当科病棟は40床（～44床）を持ち、担当医と指導医（専門医）の2人の主治医体制で診療に当たっている。グループは関節、脊椎、腫瘍、手の外科の4つの班に分けられ、各分野とも臨床・研究・教育にバランスを保ちつつ治療に当たっている。紹介先である近隣の関連病院や他府県など遠方の病院との連携を大切にきめ細かい治療をめざしている。専門領域（subspeciality）としては、股関節外科、膝関節外科、小児整形外科、腫瘍外科、リウマチ関節外科、脊椎脊髄外科、末梢神経外科、手の外科、足の外科、マイクロサージャリー、形成外科、外傷外科、スポーツ整形外科、骨粗鬆症、リハビリテーションなどがある。毎朝7時半からのミーティングにより手術患者、術後患者、検査入院患者の検討、各専門部会の検討会、読書会などを行っている。

2. 教育施設

- 1) 日本整形外科学会研修施設
- 2) 日本リハビリテーション医学会研修施設
- 3) 日本リウマチ学会教育施設

3. 診療開発

- 1) 診療名：後縦靭帯骨化症に対する頸椎前方除圧固定術

診療内容：椎体亜全摘により骨化巣を摘出する術式（根治術）である。

他病院での導入状況：当科が東海地区では最も多く施行している。

国内的評価：全国的には、手技が容易な後方除圧手術（間接除圧）が主流である。直接除圧である前方除圧固定は熟練した手技が必要で全国的には数病院が積極的に行っているにすぎない。

国際的評価：後縦靭帯骨化症は日本に患者が多く、日本の手術技術が世界をリードしているのが現状である。

- 2) 診療名：変性側弯及び後弯症に対する脊椎矯正固定術

診療内容：変性側弯及び後弯による姿勢異常や腰痛・背部痛などの症状に対して、pedicle subtraction osteotomy(PSO), Vertebral Column Resection(VCR)などの骨切り術を多数行っており、近年では最小侵襲脊椎固定術の一つであるOblique Lumbar Interbody Fusion (OLIF)を併用した前後合併脊椎矯正固定術も症例に応じて行っている。

他病院での導入状況：PSO, VCRなどの骨切り術は専門的な知識・経験が必要な手技であり、広く普及した手技ではなく、またOLIFを併用した前後合併脊椎矯正固定術は全国的にまだ行える施設が少ない。

国内的評価：OLIFを併用した前後合併脊椎矯正固定術はその良好な成績が多数報告され侵襲の少なさから注目されている。

国際的評価：OLIFと類似したXLIFによる前後合併脊椎矯正固定術の良好な成績が増えてきており、最小侵襲手術の趨勢とともに今後の主流になると考える。

- 3) 診療名：化膿性脊椎炎に対する最小侵襲脊椎後方固定術（MISt）

診療内容：化膿性脊椎炎において抗生剤による保存的加療に抵抗を示し、骨破壊の進行・不安定性に伴う背部痛、感染制御が困難な状況に対し、当科で開発した後方前方二期的手術を行っていたが、後方固定において手術侵襲が少なくないことが問題であった。この術式に最小侵襲脊椎後方固定術（MISt）を導入し、手術侵襲が軽減され、より早期の離床が可能となっている。

他病院での導入状況：全国的にみても比較的早期に導入し、岐阜県内では最も多く施行している。

国内的評価：当科で行っているMIStを応用した術式における術後成績を学会で報告し、良好な反響を得ている。

国際的評価：当科で開発した後方前方二期的手術は既に世界的にもスタンダードとしての地位を確立している。今回の最小侵襲脊椎後方固定術（MISt）の導入により、更に世界をリードする治療法として認識されることになることが期待される。

- 4) 診療名：骨感染症に対する抗生剤含侵ハイドロキシアパタイト療法

診療内容：当科で考案した独自の手法である。人工骨としてのハイドロキシアパタイトに抗生剤をしみこませて、感染部位に設置し感染症を治す手技である。

他病院での導入状況：当科以外ではほとんど行われていない。

- 国内的評価：骨感染症に対しては、持続洗浄療法が一般的であるがベッドに釘付けとなり患者への負担は大きい。この方法では移動が自由であり、その有効性も遜色なく注目されている。
- 国際的評価：骨感染症に対しては、やはり持続洗浄療法が一般的であり、この方法を広めていく必要がある。
- 5) 診療名：足部変形に対する距骨垂全摘術
 診療内容：当科で考案した独自の方法である。距骨を部分切除し短縮し変形を矯正する術式である。他病院での導入状況：当科以外ではほとんど行われていない。
 国内的評価：足部変形に対する矯正術の1つとして簡便な方法であり注目されている。
 国際的評価：足部変形に対する矯正術式は歴史的に極めて多い術式が考案されてきた。この方法は、今後さらに症例を重ね広めていく必要がある。
- 6) 診療名：変形性股関節症に対する低摩耗摺動面材料を使用した人工股関節置換術
 診療内容：軟骨の摩耗・関節変形が進行した場合に行われる手術で除痛効果に優れ、早期機能回復が可能である。当科では低摩耗の摺動面を有する最新のインプラントを使用している。
 他病院での導入状況：徐々に導入されてきている。
 国内的評価：摺動面の摩耗は人工股関節置換術の成績低下に大きく影響する。摩耗を低減しうる摺動面の開発は人工股関節置換術の成績向上のための重要課題の一つである。
 国際的評価：長期成績を向上させる可能性があり注目されている。
- 7) 診療名：リウマチ性前足部変形に対する関節温存型足趾形成術
 診療内容：中足骨骨切りにより、MTP関節機能を温存しつつ前足部変形の矯正を行う。
 他病院での導入状況：岐阜地区では、当科以外ではほとんど行われていない。
 国内的評価：MTXや生物学的製剤により抗リウマチ治療が進歩してきた事で手術成績が向上し、従来施行されてきた切除関節形成術に代わって適応症例が増加している。
 国際的評価：1900年代初頭より骨切り術による前足部変形矯正は行われていたが、関節リウマチ疾患コントロールが可能となった現在、改めて関節温存型足趾形成が見直されてきている。本法は、今後さらに症例を重ね広めていく必要がある。
- 8) 診療名：腱板断裂症性肩関節症に対するリバーズ型人工肩関節置換術
 診療内容：解剖学的な人工肩関節と違い、肩腱板が消失し安定化機構が失われた肩関節に関節窩側が球形・上腕骨側がソケット型の安定化機構を有した人工肩関節を用いた手術手技である。
 他病院での導入状況：2014年4月に本邦に導入されたインプラントで、日本整形外科学会の指定した基準を満たし、認可を受けた肩関節外科を専門とする医師のみが施行可能な手術である。岐阜県下では2名のみ認可を受けており、当院が県下で最初に手術を施行している。
 国内的評価：肩関節は軟部組織に依存した関節であるため、通常のインプラントでは機能改善に限界があった。安定化機構を有する本インプラントでの手術手技は、これまで困難であった機能改善という点において特に注目されている。
 国際的評価：欧米ではすでに10数年前から導入されており、優れた臨床成績から近年ではリバーズ型人工肩関節の数が上回ってきている。しかしながら非解剖学的インプラントゆえの問題点もあり、更なる臨床成績を上げるための研究が盛んにおこなわれている。
- 9) 診療名：類骨骨腫に対するラジオ波焼灼術
 診療内容：類骨骨腫に対してラジオ波焼灼術を行っている。従来の手術治療に比べ非常に低侵襲な治療であり有効性も同等である。
 他病院での導入状況：本治療を行っている施設は全国でも少ない。
 国内的評価：低侵襲で有用な治療法として他施設より依頼を受けている。
 国際的評価：低侵襲治療のひとつとして有用な治療方法と評価されている。
- 10) 診療名：悪性骨腫瘍に対する液体窒素処理骨による再建
 診療内容：悪性骨腫瘍切除後の骨欠損に対して切除した骨を液体窒素で処理したのちに、再建に利用している。
 他病院での導入状況：一定の施設で行われている。
 国内的評価：他の再建法と比較して感染やアレルギーの危険がなく、簡便で良好な適合性が得られる有用な方法と評価されている。
 国際的評価：悪性骨腫瘍切除後再建法のひとつとして有用な治療方法と評価されている。
- 11) 診療名：変形性膝関節症に対する低摩耗摺動面材料を使用した人工膝関節置換術
 診療内容：軟骨の摩耗・関節変形が進行した場合に行われる手術で除痛効果に優れ、早期機能回復が可能である。当科では低摩耗の摺動面を有する最新のインプラントを使用している。

他病院での導入状況：徐々に導入されてきている。

国内的評価：摺動面の摩耗は人工膝関節置換術の成績低下に少なからず影響する。摩耗を低減しうる摺動面の開発は人工膝関節置換術の成績向上のための重要課題の一つである。

国際的評価：長期成績を向上させる可能性があり注目されている。

12) 診療名：変形性膝関節症に対する人工膝関節置換術の工夫

診療内容：正確なインプラントの設置は人工膝関節置換術の長期成績を改善させうる。我々は独自の手術デバイスを開発し、より正確なインプラント設置試みている。

他病院での導入状況：徐々に導入されてきている。

国内的評価：正確なインプラントの設置は人工膝関節置換術の長期成績を改善させうる。現在、さまざまなデバイスが開発され研究が進んでいるが、本デバイスの評価は高い。

国際的評価：国際的にはコンピューター支援手術が普及し始めている。

4. 専門医・認定医・指導医

秋山治彦：日本整形外科学会専門医

西本 裕：日本整形外科学会専門医，日本体育協会公認スポーツドクター，日本障害者スポーツ協会公認障害者スポーツ医

大野貴敏：日本整形外科学会専門医，病理解剖認定医，日本整形外科学会認定リウマチ医，日本リウマチ財団登録医，日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医，日本リウマチ学会専門医，がん治療認定医

伊藤芳毅：日本整形外科学会専門医，日本リウマチ学会専門医，日本整形外科学会認定リウマチ医，日本整形外科学会認定スポーツ医

宮本 敬：日本整形外科学会専門医，日本脊椎脊髄病学会認定脊椎脊髄外科指導医，日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医

青木隆明：日本整形外科学会専門医，日本リハビリテーション学会臨床認定医・専門医・指導医，日本体育協会公認スポーツドクター，日本整形外科学会認定スポーツドクター，日本整形外科学会認定運動器リハビリテーション医，障害者スポーツ認定医，ドーピングコントロールメディカルオフィサー，日本医師会健康スポーツ医

松本 和：日本整形外科学会専門医，日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医，日本整形外科学会認定リウマチ医

増田剛宏：日本整形外科学会専門医，日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医，日本整形外科学会認定リウマチ医，日本整形外科学会認定スポーツ医

永野昭仁：日本整形外科学会専門医，がん治療認定医

平川明弘：日本整形外科学会専門医

瀧上伊織：日本整形外科学会専門医

寺林伸夫：日本整形外科学会専門医，日本体育協会公認スポーツドクター

田中 領：日本整形外科学会専門医，日本リウマチ学会専門医

小川寛恭：日本整形外科学会専門医

下川哲哉：日本整形外科学会専門医

5. 自己評価

評価

少ないスタッフ数で長時間の外来業務，多くの手術症例に対応している。研修医がいない現状では中堅医師に多くの負担がかかっているが，積極的に近隣の関連病院と連携を取り，専門外来を行う等，専門性の維持と患者獲得を積極的に行っている。講義，ポリクリなどの教育，学会発表・論文・講演など学術活動や医学生の教育を積極的に行っている。

現状の問題点及びその対応策

高齢化社会にともない整形外科のニーズは益々高くなり，関連病院においても外来，手術件数は増加の一途である。大学での手術件数を増やすことは，看護スタッフ数の問題で容易ではない。大学に紹介されてくる患者さんの多くが，数ヶ月～半年以上の長期の待機を余儀なくさせられている。現在，近隣の関連病院と協力し対応しているが，関連病院自体の手術件数も増え，限界に近づいている。大学での手術件数の増加とともに，関連病院とのより良好な提携を行っていく必要がある。

今後の展望

全国的にみると岐阜県はまだ整形外科医の割合が少なく、需要を満たしていない。新しい卒後研修制度が始まり、整形外科が必須ではなくなった現状では、整形外科の魅力を伝える機会が少なく、入局は激減し、関連病院の医師数も減少している。したがって、大学を中心とした関連病院ネットワークの維持が困難となっており、そのネットワークの良好な機能のためには多くの新整形外科医の確保が必須である。

(11) 脳神経外科

1. 診療の概要

脳神経外科では脳卒中（くも膜下出血，脳出血，脳梗塞）や重症頭部外傷などの中枢神経救急疾患，脳腫瘍，顔面けいれんや三叉神経痛，不随意運動などの機能的脳疾患，中枢神経系奇形，脊髄脊椎疾患の治療をはじめとして，外来診療では頭痛，めまい，しびれ，意識消失発作などの診断治療，近年増加しつつある脳梗塞の危険因子管理や二次予防，てんかんに対する薬物治療などを行なっている。

2. 教育施設

- 1) 日本脳神経外科学会（基幹施設）
- 2) 日本脳神経血管内治療学会（研修施設）
- 3) 日本脳卒中学会（研修教育病院）

3. 診療開発

- 1) 診療名：蛍光色素フルオレサイトをを用いた悪性脳腫瘍摘出術
診療内容：悪性脳腫瘍と正常脳との境界を術中に視覚的にわかりやすくするため蛍光色素であるフルオレサイトを術中に静脈内投与し，腫瘍の摘出率を上げる。
他病院での導入状況：同法を用いた悪性脳腫瘍の摘出術は東海地方では最も経験豊富である。
国内的評価：その他の蛍光色素と比較し，入手が用意で汎用されやすく，また術中にリアルタイムに蛍光色素を術野で確認しやすいなどの利点があり，また重篤な副作用がほとんどない。
国際的評価：当施設独自の投与量によって，より蛍光色素の認識度が高まり，腫瘍の摘出率が高まったことを国際誌（*Journal of Neurosurgery* 2003;99:597-603）に報告している。

4. 専門医・認定医・指導医

岩間 亨：脳神経外科学会専門医，脳卒中学会専門医
矢野大仁：脳神経外科学会専門医，脳卒中学会専門医，日本がん治療認定医機構暫定教育医，日本がん治療認定医機構認定医
大江直行：脳神経外科学会専門医，脳卒中学会専門医，日本神経内視鏡学会技術認定医，日本がん治療認定医機構暫定認定医
副田明男：脳神経外科学会専門医
中山則之：脳神経外科学会専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医，日本がん治療認定医機構がん治療認定医
榎本由貴子：脳神経外科学会専門医，脳神経血管内治療学会指導医，脳卒中学会専門医
高木俊範：脳神経外科学会専門医，脳神経血管内治療学会専門医，脳卒中学会専門医

5. 自己評価

評価

脳卒中や重傷頭部外傷などの救急患者を積極的に受け入れると共に，一方では慢性脳虚血性疾患や脳腫瘍患者の紹介患者数も増加し，各プロトコールに則った治療が軌道に乗っている。

現状の問題点及びその対応策

本態性振戦やパーキンソン病などに対する機能神経外科やてんかんの外科，頸椎症などに対する脊椎外科，小児奇形に対する頭蓋形成術などは当科では治療経験が少ない。しかし，神経内科と共同して患者の選定を行えば，特に本態性振戦やパーキンソン病に対する外科治療数は増える見込みが高い。当科ではレクセルフレームを用いた機能神経外科に取り組んでおり，パーキンソン病に対する脳深部刺激術を行っている。

今後の展望

来年度以降，定位脳手術を軌道に乗せ，機能神経外科領域を開拓していきたいと考えている。脳血管障害や頭部外傷，脳腫瘍などの疾患もこれまで以上に症例数の増加を見込むと，手術枠の限界や当科の人員配置の問題もあり調整が必要と思われる。

(12) 眼科

1. 診療の概要

山本哲也教授の専門領域である緑内障をメインに据え、診療活動を行っている。東海地区では現在のところ緑内障を専門とする病院は限りなく少ないため、岐阜県内は勿論であるが、愛知県、三重県、静岡県に居住されている患者の来院も数多い。また、緑内障診療のみではなく、水晶体疾患、網膜硝子体疾患、角膜疾患、小児眼疾患などあらゆる眼疾患の患者に携わっている。

外来診療は、初診患者は週 3 日（月、火、木曜日）、再診患者は週 4 日（月、火、木、金曜日）に行っている。また、専門外来は週 2 回（木、金曜日）の緑内障外来をはじめ、網膜硝子体外来（月、火曜日）、内眼炎外来（火、木曜日）、腫瘍形成外来（火曜日）、コンタクト外来（金曜日）など、各医師が有する専門特性を生かして配置されており、高度な知識の下に診療を行っている。

一方入院診療は、19 床の病床数で行っており、手術する疾患としては緑内障、網膜硝子体（網膜剥離、糖尿病網膜症、黄斑前膜など）、白内障が多くを占める。網膜剥離、眼外傷をはじめとした疾患に対する緊急手術が多いのも大学病院の特性の一つに挙げられる。宿直は 365 日 24 時間体制での 2 次救急診療に対応しており、岐阜県内の眼科救急の要となっている。

2. 教育施設

- 1) 日本眼科学会認定施設

3. 診療開発

- 1) 診療名：前眼部光干渉断層計による隅角構造の評価

診療内容：光干渉断層計（Optical Coherence Tomography）は、もともと網膜あるいは視神経微細構造を詳細に観察するために発展した機器である。この機器が前眼部に応用された機器が、前眼部 OCT である。この機器は、非接触型であり、従来の診断機器と比較しより簡便に施行可能であり、より詳細な前眼部構造とくに隅角構造を把握することが可能である。

他病院での導入状況：県内なし

国内的評価：本邦において多いとされる閉塞隅角緑内障は、一旦発症すると失明する危険性の高い疾患の一つである。しかしながら、その成因については未だ充分には理解されていない。この機器は、閉塞隅角緑内障の発症機序の解明、様々な治療効果の判定に極めて有用との評価は一致している。また、緑内障専門施設においては必要不可欠な検査機器である。

国際的評価：欧米（白人）においては、本邦ほど閉塞隅角緑内障の頻度は高くはない。しかしながら、最近とくに東南アジアにおいて閉塞隅角緑内障に関する研究は著明に増加している。閉塞隅角緑内障の発症機序の解明、様々な治療効果判定に有用であるとする報告は多くみられる。また様々な角膜疾患にも応用可能であり、その国際的評価は高い。

- 2) 診療名：Baeveldt glaucoma implant を用いた緑内障インプラント手術

診療内容：術後の組織癒痕のため濾過胞機能を長期的に維持することが困難である症例に対して Baeveldt glaucoma implant を用いた緑内障インプラント手術を行う。

他病院での導入状況：多数あり

国内的評価：本邦にて、Baeveldt glaucoma implant が医療材料として平成 25 年 4 月以降認可され、徐々に普及しつつあるところである。

国際的評価：通常の治療方法では失明を逃れることが困難と考えられる難治性緑内障に対して、既に数多く用いられており（米国では年間数万例）、その従来の手段と比較しての有効性について多くの報告がなされている。

4. 専門医・認定医・指導医

山本哲也：日本眼科学会専門医・指導医
川瀬和秀：日本眼科学会専門医・指導医
望月清文：日本眼科学会専門医・指導医
澤田 明：日本眼科学会専門医・指導医
末森晋典：日本眼科学会専門医・指導医
石澤聡子：日本眼科学会専門医
宇土一成：日本眼科学会専門医
白木育美：日本眼科学会専門医

5. 自己評価

評価

診療に関しては、全体的にある程度充足している。医局員が年数名ずつ近年コンスタントに入局していることにより、マンパワー不足により受け入れ困難であった通常の白内障手術を今後は増加させていくことが可能となりつつある。また各医師が有する専門特性を生かした配置により、緑内障や網膜疾患、眼感染症領域では外来診療から手術療法にいたるまで幅広く対応可能となっている。

その一方で、診療に割く時間の割合が極めて多いために、学生教育（レジデントも含めて）、研究の分野では大学病院としての本来の水準には未だ達しているとはいえない。

現状の問題点及びその対応策

眼科診療の特徴は、外来患者数の過多、自科検査の過多、網膜剥離など突発した疾患に対する緊急手術の過多ということに集約される。ほとんどの医師が、診療のウエートが多く、教育、研究の分野まで手がまわらない。したがって現在の大学病院の姿は、本来求められるはずの姿（診療、教育、研究いずれも充足しておこなっている）からはかけ離れたものに成り下がっている。

眼科全般からすると、外来診療時間短縮することが現状課題を解決する一番の近道であることが推測される。眼科診療は前述したが、自科検査が多く、近年診療機器の発展により益々増加傾向にある。しかしながら、そうした眼科自科検査を遂行する視能訓練士は大学病院クラスとしては、まだまだ人員数が足りないのが現状である。実際公募はしているものの、大学病院での待遇が他病院と比較し圧倒的に悪いという点で敬遠されがちである。この点については病院側にその重要性につき認知するよう働きかける必要がある。

今後の展望

大学附属病院として、臨床診療機関、教育機関、医学研究機関というおおまかに 3 種の主機能を担っていく必要がある。なおかつ、全ての分野において、リーダーシップを求められる機関でもある。

近年では、病院を離れる医師が増加する一方であり、この傾向が政府主導で転換されないかぎり、大学病院としての 3 種の主機能を充足させることは並大抵のことではない。

(13) 耳鼻咽喉科

1. 診療の概要

外来の年間の延べ患者数は約 22,000 人である。新患のほぼ 50-60%が紹介患者である。一般外来とともに専門外来としてめまい外来, 耳鳴・難聴外来, 補聴器外来, 副鼻腔・アレルギー外来, 顔面神経外来, 睡眠時呼吸障害外来, 嚥下外来を設けている。

めまい外来では, 一般平衡機能検査の他に温度刺激検査, 重心動揺検査, 前庭誘発筋電位, 視標追跡検査, 視運動刺激検査, 自律神経機能検査, 前庭眼反射に対する検査を行っている。周辺地域のみならず遠隔地からも紹介・受診があり, 岐阜大学耳鼻咽喉科の中心的専門外来となっている。

耳鳴・難聴外来では, 難治性耳鳴に対して種々の治療を試みている。補聴器外来では, 高齢化社会の福祉を考慮し, 積極的に補聴器適合検査を行っている。新生児聴覚スクリーニングにおいては, 2次医療機関として, 難聴の精査を行っている。また難聴が疑われる児には ABR を行い, 難聴の早期発見に努めている。難聴が指摘された患児に対しては, 難聴幼児通園施設であるみやこ園に紹介し, 早期指導, 補聴器の早期装用を進めている。補聴器を適応できない高度難聴患者に対して人工内耳手術の適応を検討している。

副鼻腔外来では, 近年急速に発展した内視鏡下副鼻腔手術の適応の決定, 術後の定期的な経過観察ならびに内視鏡下の術後処置を行っている。解剖的に通常の手術では危険度が高い部位へのアプローチにはナビゲーションを併用し, 低侵襲な内視鏡手術が可能になっている。さらにアレルギー性鼻炎患者に対する日帰りレーザー手術を施行している。

睡眠時呼吸障害外来では, 最近話題になっている睡眠時無呼吸症候群患者に対して家庭での簡易型アプノモニターの貸し出しとその評価, また中等度・高度障害患者に対する入院での終夜睡眠ポリグラフ検査の適応を決定し, 検査後の手術適応や nasal CPAP 適応の決定, およびその経過観察を行っている。

嚥下外来では, 嚥下障害を来している患者に内視鏡検査に加えて VTR 咽頭食道透視を耳鼻咽喉科医が行い, その嚥下障害の評価をし, 治療・リハビリ方針を決定している。

入院患者は年間延べ約 13,000 人である。頭頸部悪性腫瘍患者がその半数以上を占めている。がんセンターのない岐阜県において, 頭頸部領域のがんセンターの役割を担っている。外科, 脳神経外科との協力のもとに拡大手術を積極的に行い, また機能温存を目指し再建手術を同時に行っている。耳科手術, 副鼻腔手術には内視鏡を積極的に導入し, アプローチが難しい例にはナビゲーションの併用を行っている。

2. 教育施設

- 1) 日本耳鼻咽喉科学会認定研修施設
- 2) 日本気管食道科学会認定研修施設
- 3) 日本頭頸部外科学会認定頭頸部がん研修施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 前庭障害症例に対する Micro current vestibular galvanic stimulation 併用リハビリテーション

診療内容: 高度な平衡障害で日常生活活動に支障をきたしている前庭障害症例に MCGVS 併用めまいリハビリテーションを行うことにより, 残存した前庭神経のシナプス伝達を強化し, 平衡障害が期待できる。

国内的評価: 多系統萎縮症やパーキンソン病などの変性疾患に対し, 閾値以下の GVS を与えることで, 自律神経機能の改善, 身体活動量の亢進が報告されている。しかし, その臨床的評価や基礎的なデータは乏しく, 作用機序もいまだ不明な点が多い。現在まで, 前庭障害症例への臨床応用はない。

- 2) 診療名 : めまい平衡障害のリハビリテーション

診療内容: めまい平衡障害の ADL (日常生活動作能力) 改善のため, 薬物療法と平行して理学療法を行う。

他病院での導入状況: 当院が全国的にも初期に導入した。現在は方法に差はあるが多施設で導入されている。

国内的評価: 現在は方法論的に認められ多施設で施行されているが, 当院の長期的経験は国内で認められている。

国際的評価: 欧米ではリハビリ部門が行う一般的療法となっている。

- 3) 診療名 : 「画像支援ナビゲーション手術」の開発

診療内容: ナビゲーションを用いることによる, これまで手術アプローチが困難, 危険な部位にアプ

ローチが可能とする手術支援システムを導入することで、比較的安全な方法を開発する。さらに外傷や炎症などによる視機能障害の緊急手術での安全な導入をはかる。他病院での導入状況：すでに多くの大学で導入がされているが、緊急手術などでの報告は少ない。国内的評価：現在は方法的に認められ多施設で施行されているが、当科での成績を学会などで報告している。

4. 専門医・認定医・指導医

伊藤八次：日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医，日本めまい平衡医学会専門会員，日本気管食道科学会専門医

水田啓介：日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医，日本めまい平衡医学会専門会員，日本気管食道科学会専門医，日本がん治療認定医機構がん治療認定医，日本頭頸部外科学会頭頸部がん暫定指導医，日本頭頸部外科学会頭頸部がん専門医

青木光広：日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医，日本めまい平衡医学会専門会員，日本頭頸部外科学会頭頸部がん暫定指導医

久世文也：日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医，日本気管食道科学会専門医，日本がん治療認定医機構がん治療認定医，日本頭頸部外科学会頭頸部がん専門医

西堀丈純：日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医

林 寿光：日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医

棚橋重聡：日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医

大橋敏充：日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医

若岡敬紀：日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医

5. 自己評価

評価

紹介患者は増加している。外来受診患者数，病棟稼働状況も良い。新医療の開発，導入が十分とはいえない。

現状の問題点及びその対応策

平成 10 年度に言語聴覚士の国家資格が制度化され国家試験も施行された。定員増は期待しづらい時代ではあるが、難聴や音声言語障害に対する専任の言語聴覚士の複数採用は国民福祉という観点からぜひとも望まれる。また、摂食・嚥下障害に対する関心が高まっており、生活の質の向上のためにはこの障害の改善は不可欠である。現在耳鼻咽喉科医と一部リハビリ担当医師で取り組んでいるが、今後看護師、言語聴覚士などとのチーム医療が求められる。リハビリのみでなく、手術アプローチを積極的に実施しているので、今後慢性嚥下障害を扱う先生方へ広報を行いたいと考えている。

成人聾患者に対する人工内耳埋め込み術はすでに実施しており、多数の手術経験を有しているが、小児に対しての手術はまだ実施していない。言語訓練実施施設との協力体制の構築が必要である。

睡眠時呼吸障害はマスコミに取り上げられる機会が増え、社会的関心事になっており、潜在的患者数はかなり多いと見込まれる。この患者に対して耳鼻咽喉科医のみで検査に対応しているが、夜間の検査であることから扱える患者数は十分でない。今後臨床検査技師の協力を得て病院全体での取り組みとする必要性があると思われる。

主に、副鼻腔領域の手術においては、低侵襲の内視鏡手術を早くから導入し、治療方法を確立させている。さらにナビゲーションの併用により、危険な解剖的部位への到達にも内視鏡での手術を可能にしている。

中耳領域の手術においては、従来の顕微鏡下の手術に加えて、内視鏡下手術の導入を開始した。今後低侵襲の中耳手術の適応を拡大する予定である。

がん診療においては、患者の QOL を重視し、機能温存、臓器温存を可能な限り求める治療を行っている。そのためには、今後さらに有効で、安全な治療法の確立と再建術式の向上をはかる必要があると思われる。現在中咽頭癌のヒト乳頭腫ウイルスの関与に関する他施設研究に参画しているので今後より効果的な治療法の確立に寄与したいと考えている。

今後の展望

高齢化，少子化社会がますます加速する。高齢者への福祉として、従来行ってきた補聴器外来の充実と高齢者の平衡維持，転倒問題に対する平衡医学的アプローチを継続・発展させる。また、摂食・嚥下障害

の評価・治療をリハビリの重点課題の一つとして、他科・コメディカルの協力のもとにシステム作りを実現する。

新生児聴覚スクリーニングが岐阜県行政事業としてパイロット的に始まった。スクリーニング、難聴児発見後の聴能訓練が円滑に稼働するように岐阜大学耳鼻咽喉科がシステムの指導的役割を果たす。

がん拠点病院として、高度な手術治療を行うとともに、有効性の高い治療方法の確立を目指す。

(14) 形成外科

1. 診療の概要

- ・マイクロサージャリーを用いた遊離皮弁による頭頸部癌切除後再建, 乳房再建
- ・小児先天異常の手術, 特に小耳症をはじめとした外耳の異常
- ・顔面神経麻痺に対する外科的治療

上記に対して特に力を入れているが, 形成外科が対象とするどのような疾患にも対応している。

2. 教育施設

- 1) 日本形成外科学会認定施設

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

加藤久和：日本形成外科学会専門医, 日本創傷外科学会専門医, 皮膚腫瘍外科指導専門医, 日本がん治療認定医, 乳房再建用エキスパンダー/インプラント責任医師

神山圭史：日本形成外科学会専門医, 乳房再建用エキスパンダー/インプラント責任医師

5. 自己評価

評価

形成外科ができるまで困難であった頭頸部癌切除後の再建が可能となったことで, 癌の切除に制限を加えることなく, より安全に手術できるようになった。また, 機能面・整容面でも, より質の高い手術を可能とした。

また一昨年, 保険適応となった乳房再建では, 形成外科が常勤で勤務することが必須である。責任医師を務め, 乳がん患者のニーズに応え, 数多くの乳房再建を行ってきた。

小児先天異常でも, これまで県外の病院で手術されてきた小耳症などの困難な手術も, 県外に行くことなく受けるところができるようにした。

地域関連病院における技術指導も, 限られた時間の中で, 積極的に行っている。

研究に関しては, スタッフ2人ではあるが, 学会で積極的に発表している。

現状の問題点及びその対応策

頭頸部再建, 乳房再建, 顔面外傷, 他科とかかわらない形成外科の手術を, 常勤医2人でこなしている。手術が重なってしまうことがあり, 当然無理がある。耳鼻科や乳腺外科, 救急の先生に助手に入っていたき, 綱渡りのようなスケジュールで手術を回している。スタッフ不足が最も大きな問題点である。卒業生から形成外科を志望するものが出てくれるよう, 学生に宣伝をしていくことが, その対策である。

今後の展望

まず, スタッフを増やし, 新しいことに挑戦していく余裕を持てるよう, 宣伝活動をしていきたい。

(15) 皮膚科

1. 診療の概要

1) 外来

一般外来（初診，再診）とともに，レーザー治療，光線治療，乾癬，腫瘍，膠原病，アトピー，水疱症，脱毛症，フットケア，アレルギー検査の各専門外来を充実させて，各担当医が継続的に最先端の医療を提供している。レーザー外来では，日本レーザー学会専門医の指導のもと，色素レーザー，Q スイッチアレキサンダライトレーザー，炭酸ガスレーザー，高周波メス（サージトロン）を用いて種々の母斑治療を行っている。光線治療外来は長波長紫外線を用いた PUVA 療法あるいは中波長紫外線（ナローバンド UVB）治療を行っている。全身照射用ナローバンド UVB 装置により広範囲の皮疹に短時間で照射可能である。乾癬外来では重症例にビタミン A 誘導体や免疫抑制剤内服，生物学的製剤治療を行っている。アフレスシス治療も積極的に導入している。腫瘍外来では，悪性黒色腫をはじめとする皮膚悪性腫瘍の診断から手術後の経過観察まで行っている。膠原病外来では，エリテマトーデス，皮膚筋炎，全身性強皮症，シェーグレン症候群など多数の症例を受け持って治療を行っている。アトピー外来では患者個々の生活環境や治療に対する希望などを十分聞き，柔軟性をもって診療に当たっている。中等症以上のアトピー性皮膚炎に対しては，教育を兼ねた入院治療も行っている。水疱症外来では天疱瘡，類天疱瘡の治療選択に自己抗体価測定を取り入れて効果をあげている。脱毛症外来では局所免疫療法と全身療法を組み合わせる治療し，無効例ではステロイドの外用，局所注射，内服療法あるいはステロイドミニパルス療法を行っている。フットケア外来では糖尿病性壊疽，末梢循環不全，皮膚潰瘍や陥入爪などの症例に対し，治療とともに再発防止のためのスキンケアや生活指導を行っている。アレルギー検査外来では薬剤，金属，食物，化粧品その他のパッチテストおよびブリックテストを行っている。

火曜日に外来カンファレンスとして関連病院からの紹介患者の特別診察を行い，病診連携を充実させている。病診連携に努め他院からの紹介率は 70% 台を維持している。

2) 入院

病床数は 18 床で，稼働率は平均 80% を維持している。平均在院日数は約 11.9 日で平成 21-23 年の 13.7 日と比較して短縮している。疾患は多岐にわたり，悪性黒色腫，有棘細胞癌などの皮膚悪性腫瘍患者は，多くは手術治療（広範囲切除，植皮術あるいは皮弁形成術，リンパ節郭清など）を行い，必要に応じて抗がん治療や放射線療法を行っている。手術は良性疾患に対しても行っており，瘢痕の形成手術，脂肪腫，母斑，あるいは局所麻酔の小手術も多く行っている。アトピー性皮膚炎は，治療とともに，本人および家族に疾患概念から外用剤を中心とした治療方法，生活上の注意点を詳細に説明している。膠原病は全身性強皮症，皮膚筋炎，全身性エリテマトーデスなどを治療している。膠原病や循環障害など難治性皮膚潰瘍を伴う症例では血管拡張剤の点滴や植皮術も行っている。天疱瘡，類天疱瘡など自己免疫性水疱症は，皮膚生検・蛍光抗体法・自己抗体測定により診断し，臨床症状と抗体価の推移を考え合わせて重症度を判定しながらステロイド剤，免疫抑制剤，血漿交換療法，大量ガンマグロブリン療法などを組み合わせる治療している。円形脱毛症の重症例にはステロイドミニパルス療法を行なっている。その他，帯状疱疹や蜂窩織炎などの重症例も入院治療している。

2. 教育施設

1) 日本皮膚科学会認定専門医研修施設

3. 診療開発

1) 診療名 : アフレスシス治療

診療内容 : 難治性皮膚疾患に対する顆粒球・単球吸着療法

他病院での導入状況 : 顆粒球・単球吸着療法は潰瘍性大腸炎や膿疱性乾癬に対して多くの施設で行われているが，他の難治性皮膚疾患に対しては数施設のみで施行されている。

国内的評価 : 当科は学会および論文発表をしており，国内他施設からも報告にも引用されている。

国際的評価 : 当科は欧文誌および国際学会で発表しており，評価されている。

2) 診療名 : 多血小板血漿を用いた難治性皮膚潰瘍の治療

診療内容 : 強皮症や糖尿病など種々の疾患の皮膚潰瘍はしばしば治療抵抗性である。多血小板血漿を用いた治療法は，自己血液から採血し濃縮した血小板分画を潰瘍創部に密封することにより種々の血小板由来成長因子の作用による潰瘍治療を想定した再生医療技術の一つである。

他病院での導入状況 : いくつかの大学病院で行われている。

国内的評価 : すでに数施設で行われ，発表されている。当科でも学会および論文発表を予定している。

国際的評価：欧文誌および国際学会での発表を予定している。

3) 診療名：皮膚筋炎における特異的自己抗体価測定を基にした治療法選択

診療内容：皮膚筋炎では種々の自己抗体（抗 Mi-2, TIF-1γ, MDA-5 抗体など）が検出され、自己抗体特異的な臨床像を呈することが近年明らかになってきた。そこで自己抗体の抗体価を測定することにより実際の臨床において診断および治療の選択に役立てる。

他病院での導入状況：いくつかの大学病院で行われている。

国内的評価：当科は学会および論文発表をしており、国内他施設からも報告されている。

国際的評価：すでに当科は欧文誌および国際学会で発表しており、評価されている。

4. 専門医・認定医・指導医

清島真理子：日本皮膚科学会専門医，日本皮膚科学会皮膚悪性腫瘍指導専門医，日本医真菌学会認定専門医

加納宏行：日本皮膚科学会専門医，日本アレルギー学会専門医，日本褥瘡学会認定師（医師）

周 円：日本皮膚科学会専門医

藤澤智美：日本皮膚科学会専門医

佐藤三佳：日本皮膚科学会専門医

加藤元一：日本皮膚科学会専門医

徳住正隆：日本皮膚科学会専門医

守屋智枝：日本皮膚科学会専門医

佐々木真喜子：日本皮膚科学会専門医，日本レーザー学会専門医

奥村陽子：日本皮膚科学会専門医

水谷陽子：日本皮膚科学会専門医

松山かなこ：日本皮膚科学会専門医

安達由祐子：日本皮膚科学会専門医

5. 自己評価

評価

外来・入院診療とも高度な医療を提供しており、岐阜県内の皮膚科診療の中核として機能していると評価している。外来患者数は1日平均110人以上であり、常に院内の上位に位置している。紹介率も70%以上であり皮膚科のみならず内科，小児科，外科など他科からの紹介も多い。一般外来（初診，再診）の他に，専門外来を充実させて，各担当医が責任をもって診療に当たれる体制を取り効果を得ている。入院の病床稼働率は現在80%以上を維持しており順調である。また，研修期間が終了後，全員が皮膚科学会専門医を取得しており，有効な研修プログラムに基づいて十分に研修できていると考えられる。

現状の問題点及びその対応策

マンパワーおよび新規医療機器不足のため，外来患者数の増加や最新の高度医療の要望に十分に答えられない状況にある。診療以外の業務について医療クラークなどの協力を得て，診療に集中できるような体制を構築したい。また病診連携により当院での治療が必要な，中等症以上の皮膚疾患治療に全力投球できるようなシステム作りを行ないたい。

今後の展望

限られたスタッフであっても，皮膚疾患に対して，国内外から評価される最新の診断・治療レベルを保ちたい。その中で，一定以上の臨床力をもった若手皮膚科医の育成に努めたい。

(16) 泌尿器科

1. 診療の概要

1) 外来診療

月曜日から金曜日まで午前是一般診療を、午後は専門外来若しくは特殊検査を行っている。専門外来としては、腎移植外来、女性泌尿器外来、前立腺腫瘍外来を開設している。女性泌尿器外来は女性が安心して受診出来るように、週1回完全予約制で女性医師による診療を行っている。特殊検査では、膀胱電子スコープ検査をいち早く取り入れており、非浸襲性の検査を心がけている。また、Pressure flow studyの施行により排尿状態の正確な評価を行い、治療法の選択に反映させている。岐阜県下での前立腺癌検診の推進の中心的な役割を果たしており、県下の主な病院との協力の下に統一した基準で2次検査の実施を積極的に行っている。さらに放射線科と連携し、外来での放射線外照射療法(3D-CRT, IMRT)を施行している。また2005年より外来化学療法室が併設されたため当科でも積極的に外来化学療法を導入している。

2) 病棟診療

泌尿器内視鏡手術の急速な進歩により、開腹手術の減少が著しい。2005年に導入したホルミウムレーザー前立腺核出術(HoLEP)は、県内最初の導入施設で従来のゴールドスタンダードであった経尿道的前立腺切除術(TUR-P)に勝る臨床成果をあげている。件数も2014年末現在204例となる。結石治療に関しては破砕効率の高いシーメンス社のESWLを駆使し単回治療で良好な成績を得ている。ESWL対象外の結石に対しても細径の内視鏡と破砕効率の高いホルミウムレーザーを用いることで砕石できない結石はほぼ無い状況である。1998年より副腎摘出術に腹腔鏡手術を導入して以来、内分泌内科との連携もあり県下でもトップクラスの手術件数である。さらに、良性疾患のみならず腎の悪性腫瘍に対しても腹腔鏡を用いた手術を積極的に実施し、2012年からは、小径腎癌に対して腹腔鏡下腎部分切除術も積極的にとりいれている。前立腺癌の治療においては、限局性前立腺癌に対して2004年から東海地区ではじめて小線源療法を導入しており、2014年現在340例となり、良好な成績を得ている。

腎移植では、新しい免疫抑制剤を用いた免疫抑制療法を導入し、生着率の改善を認めており1年生着率98%、5年生着率95%を超えている。これに伴い生体腎移植の例数が増加し、年間20例以上の腎移植を行っており、これは全国国立大学病院の中でもトップクラスの症例数である。

関連施設と共同して尿路生殖器癌の治療方針を策定し、いくつかの分野でclinical studyを実施中である。

2. 教育施設

- 1) 日本泌尿器科学会専門医教育施設
- 2) 日本透析医学会教育認定施設
- 3) 日本内分泌外科学会内分泌・甲状腺外科専門医制度認定施設

3. 診療開発

1) 診療名 : 筋層浸潤膀胱癌に対する腹腔鏡下膀胱全摘除術の開発

診療内容: 筋層浸潤膀胱癌の根治的治療は膀胱全摘であるが、当院では2012年4月1日に腹腔鏡下膀胱全摘除術の施設認定を取得し、保険診療で腹腔鏡下に施行している。同時に骨盤内のリンパ節郭清も行っている。

他病院での導入状況: 当院が岐阜県で最初に導入した。

国内的評価: 2012年4月1日に保険収載されたが、2013年には229例が全国で施行されている。

国際的評価: ロボット手術時代であっても世界的にも治療選択肢の一つとして認識されている。

2) 診療名 : 限局性前立腺癌に対するヨウ素125密封小線源永久挿入療法

診療内容: 限局性前立腺癌の根治的治療法の一つとしてヨウ素125密封小線源を前立腺組織内に挿入し、前立腺内から放射線照射を行う。リスクに応じてホルモン療法、放射線外照射療法を併用する。

他病院での導入状況: 当院が東海地区では最初に導入した。当院では、低リスクの前立腺癌患者には小線源単独療法を行い、中間リスク、高リスクの患者に対しては患者の状態に合わせてホルモン療法、放射線外照射療法を併用して治療を行っている。また、リスクに応じてホルモン療法の実施期間、処方線量を変化させて治療を行っている。

国内的評価: 本邦では2003年7月から開始された治療である。当院では2004年8月から開始している。2014年12月現在、本邦では116施設で実施されている。現時点では重篤な合併症の報告はない。

国際的評価: 米国では約20年の歴史があり、適応となる限局性前立腺癌に対しては前立腺全摘除術と

同等の治療効果と報告されている。米国、欧州のガイドライン（NCCN, AUA, EAU）、本邦でのガイドラインにも限局性前立腺癌に対する標準的な治療選択肢の一つとして記載されている。また、低侵襲治療、性機能、排尿機能の維持等、機能温存に優れた治療と評価されている。

3) 診療名：軟性尿管鏡を用いた経尿道的腎尿管結石破碎摘除術（f-TUL）

診療内容：腎尿管結石に対する手術の一つで、経尿道的に軟性尿管鏡を挿入し、鏡視下に HoYAG レーザーを用いて結石の破碎を行い、結石を摘出する。

他病院での導入状況：岐阜県内では岐阜市民病院、岐阜県総合医療センター、村上記念病院、松波総合病院、大垣市民病院、高山赤十字病院で導入されている。

国内的評価：1900年代より硬性鏡尿管鏡を用いた経尿道的結石破碎術が普及してきていたが、腎臓や上部尿管の結石まで到達するのが困難であった。このため、腎結石や上部尿管の結石に対しては体外衝撃波結石破碎術が多く行われてきたが、近年の内視鏡や破碎装置の進歩に伴い、軟性尿管鏡を用いて腎尿管すべての結石に到達し破碎することが可能となった。2005年頃より全国的に本術式を導入する施設が増加してきており、現在は腎尿管結石に対する標準的治療の一つに位置付けられている。

国際的評価：本邦での普及とほぼ同時期に、内視鏡と破碎装置の進歩に伴って普及してきており、上部尿路結石に対する標準的治療の一つとして認識されている。

4) 診療名：腎移植術

診療内容：生体腎移植および献腎移植、免疫抑制剤の適正化、移植腎の病理学的研究

他病院での導入状況：岐阜県内唯一の腎移植施行医療機関である。

国内的評価：年間20症例以上の腎移植術を施行しており、国立大学病院としてはトップクラスである。さらに免疫抑制剤の適正化として、拒絶反応を防ぎ、日和見感染症を引き起こさない適正な免疫抑制剤の投与方法に関する臨床的研究を行っている。また移植腎の病理学的研究として、移植腎に対して定期的な生検を施行し、移植腎機能に及ぼす潜在的な拒絶反応、ウイルス感染を病理像から研究している。さらに、病理組織像から移植腎の長期生着を目指したテーラーメイドな免疫抑制療法を行っている。

4. 専門医・認定医・指導医

出口 隆：日本泌尿器科学会専門医・指導医，日本がん治療認定医機構暫定教育医，日本性感染症学会認定医

仲野正博：日本泌尿器科学会専門医・指導医，日本泌尿器科学会/日本 Endourology・ESWL 学会腹腔鏡技術認定医，日本内視鏡外科学会技術認定[泌尿器腹腔鏡]，日本がん治療認定医機構がん治療認定医・暫定教育医

横井黎明：日本泌尿器科学会専門医・指導医，日本泌尿器科学会/日本 Endourology・ESWL 学会腹腔鏡技術認定医，日本内視鏡外科学会技術認定[泌尿器腹腔鏡]，日本がん治療認定医機構がん治療認定医・暫定教育医，日本内分泌外科学会内分泌・甲状腺外科専門医

安田 満：日本泌尿器科学会専門医・指導医，ICD，日本化学療法学会抗菌学会療法認定医，日本性感染症学会認定医

土屋朋大：日本泌尿器科学会専門医・指導医，日本透析医学会専門医，日本泌尿器科学会/日本 Endourology・ESWL 学会腹腔鏡技術認定医，日本内視鏡外科学会技術認定[泌尿器腹腔鏡]，日本臨床腎移植学会腎移植認定医

清家健作：日本泌尿器科学会専門医，日本がん治療認定医機構がん治療認定医

水谷晃輔：日本泌尿器科学会専門医

加藤 卓：日本泌尿器科学会専門医

菊地美奈：日本泌尿器科学会専門医，日本がん治療認定医機構がん治療認定医

堀江憲吾：日本泌尿器科学会専門医

高木公暁：日本泌尿器科学会専門医

亀山紘司：日本泌尿器科学会専門医

5. 自己評価

評価

先進的な診断法や治療法を積極的に導入して大学病院における泌尿器科としての役割を果たしている。特に、腹腔鏡下手術、前立腺癌の小線源療法、前立腺肥大症に対する HoLEP、腎移植に関しては地域医療

をリードしている。岐阜県、愛知県、静岡県、滋賀県に渡る関連病院をまとめ、泌尿器科医療の質の向上と均てん化を行い、さらに、大規模な臨床研究を計画・施行している。若手泌尿器科医の育成に力を入れている。

現状の問題点及びその対応策

人員不足のため、スタッフのオーバーワークが心配される。同様の理由で、専門外来の拡充が困難な状況である。関連施設と異なり、出席すべき会合や提出書類が多い。また、以前から医師への臨床・教育以外での業務負担が多かったが、最近特にこの増加を感じる。以上の対応策の一つとして、優秀なプロフェッショナルのクランクの病棟配置が望まれる。

今後の展望

泌尿器科では今後ますます内視鏡下手術の増加が予測される。当科でも、泌尿器科悪性腫瘍に対して内視鏡下手術が導入されており、その適応拡大を目指している。内視鏡手術を関連病院へも普及させるための教育システムの整備を勧めており、今後は他大学とも交流することにより推し進めていく予定である。さらにロボット支援による根治的前立腺全摘除術や腎部分切除術の有用性が国内外で報告されており、当施設への早期導入が望まれる。

より専門的な知識および技術を要する疾患に対しては、専門外来を設けて最新の診断・治療技術を提供できる体制を構築しており、今後はその治療内容の充実を行いたい。

(17) 精神神経科

1. 診療の概要

精神医療に対する関心が高まり、特にうつ病や発達障害に対する知識が、広く社会一般に普及してきた。精神障害に合併する身体疾患への治療の意識も高まり、従来は精神病院で対処されてきた重症患者が当科を訪れるようになってきている。また、電気痙攣療法やクロザピンといった限られた施設で行われる治療についても需要が高まり、当科での対応を拡大してきた。

2. 教育施設

- 1) 日本精神神経学会専門医研修施設
- 2) 日本総合病院精神医学界専門医研修施設
- 3) 日本老年精神医学会認定施設

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

塩入俊樹：日本精神神経学会専門医・指導医，日本臨床精神神経薬理学会専門医・指導医，日本総合病院精神医学会専門医・指導医，厚生労働省精神保健指定医

高岡 健：日本精神神経学会専門医・指導医，日本児童青年精神医学会認定医，日本総合病院精神医学会専門医・指導医，厚生労働省精神保健指定医

植木啓文：日本精神神経学会専門医・指導医，プライマリケア学会認定医，日本総合病院精神医学会専門医・指導医，日本老年精神医学会専門医，日本医師会認定産業医，厚生労働省精神保健指定医

深尾 琢：日本精神神経学会専門医・指導医，厚生労働省精神保健指定医

瀬瀬慎也：厚生労働省精神保健指定医

市川直樹：厚生労働省精神保健指定医

市川千智：厚生労働省精神保健指定医

徳丸淑江：厚生労働省精神保健指定医

中島美千世：厚生労働省精神保健指定医

5. 自己評価

評価

臨床では、身体合併症患者や電気痙攣療法、クロザピン治療を含む他院からの紹介患者が増えており、随時対応している。

研究では性別違和の画像研究を立ち上げ、中部療護センターの放射線部と提携し、東海地区の医療機関や患者団体との連携を図りながら症例の確保にあたっている。

入局者は2009年と2011年にいずれも1人ずつしか確保できず、人材が県外に流出していたが、2012年～2014年は年平均3.7人の入局者を確保しており、一定の改善を得ている。2014年度からは学生実習や研修医の精神科研修のプログラムを刷新し、より積極的な指導体制を整えている。

現状の問題点及びその対応策

2013～14年にかけて精神科病棟の病床利用率が70%台まで低下する期間が徐々に長期化し、外来患者数も微減を示してきている。そこで、病床利用率については、2014年後半からの病診連携強化により、14年11～12月は80%台を維持している。今後は重症患者に限らず、開業医から依頼の多い比較的軽症患者の紹介も積極的に受け入れることで、85～90%前後の利用率を目指したい。また、外来患者数については、初診を2015年初めより現状の1.7倍程度に増やすことにしており、病診連携のさらなる強化によって増加を図りたい。

今後の展望

精神医療に対する需要は、今後ますます大きくなっていくものと思われる。県内の需要に答えていくにはさらなる入局者が必要であり、当科の医師育成プログラムの魅力の向上が不可欠である。

(18) 小児科

1. 診療の概要

小児の全分野にわたる専門医療と小児医療一般を担当している。また、地域医療へも貢献している。外来診療では小児科全体の外来患者数も増加傾向にある。一方、入院患者数も年間 1,000 人を超えている。領域は、小児科全般で、一般として総合診療的要素をもつ一方で、極めて高い専門性要素をもつ。診療は、出生前小児科学、小児の成長発達、アレルギー、免疫、膠原病、代謝、内分泌、神経、心身症、循環器、呼吸器、腎、肝臓、血液腫瘍、感染、新生児、言語発達、遺伝相談など全領域に及ぶ。また、平成 24 年 4 月より NICU が開設され、平成 26 年 4 月からは、障がい児者医療学寄附講座が設置された。

さらに以下のように、高度な先進医療を行っている。

○アレルギー・呼吸器

これまでの岐阜大学小児科の伝統を引き継いで、アトピー性皮膚炎・気管支喘息・じんま疹・食物アレルギーなどアレルギー全般の診療を行っている。当科では、世界的なアトピー遺伝子の解明を行っており、それにもとづく遺伝子診断および予知、予防とテーラーメイド治療を行っている。食物アレルギーでは、レベルの高い病態解析から非即時型反応の概念を打ち出し、抗原特異的リンパ球幼若化反応およびサイトカイン産生、食物負荷試験などを診療に取り入れ、過度な除去食療法を避けるように努めている。食物負荷試験を含めた食物アレルギーの一般的診療に加えて、経口免疫療法等の新規治療開発を行っている。気管支喘息では、アレルギー、肺機能、アラキドン酸代謝産物の解析により、病態に応じた治療の選択を行っている。(テーラーメイド治療・予防。)“気管支喘息のテーラーメイド治療管理法のための手引き”を作成した。重症アトピー性皮膚炎・喘息患者では、簡易クリーン装置を用いた治療で著明な改善を得ている。ハイリスク児を対象とした予防接種も行っている。

○免疫および感染

感染症全般の診断・治療を行っている。かぜや感染症にかかりやすい児、ワクチンの副作用、原発性免疫不全症、自己免疫疾患(膠原病)などの診断と治療を行っている。抗体産生不全症に対して定期的に免疫グロブリン補充療法、また、その他の免疫不全症に対して感染予防対策や骨髄移植や臍帯血移植を行っている。原発性免疫不全症の各病型の病因遺伝子解明、遺伝子診断と治療を **Primary Immunodeficiency Database in Japan (PIDJ)** と連携しつつ精力的に行っている。特に自然免疫不全症、自己炎症性疾患に対し効果的な診断・管理を行っている。自然免疫不全症や自己炎症性疾患のスクリーニング検査方法の開発・応用を行っている。自己炎症性疾患については東海地区でほぼ唯一の診断センターとして機能している。サイトカインプロファイルを利用した自己免疫疾患、自己炎症性疾患の治療、管理を行っている。全身型若年性突発性関節炎等の重篤な全身性炎症性疾患の病因には **IL-18** が関与していることが明らかにされており、**IL-18** 蛋白立体構造を解析しそのデータを基に新たな薬剤の開発を試みている。

○神経・筋疾患

言語、運動発達の遅れから急性、慢性の神経筋疾患、てんかん患者に至るまで **MRI・MRS・SPECT** などの最新画像装置や電気生理、ビデオ脳波同時記録装置さらには遺伝子解析等を用いて診断・治療を行っている。

○先天代謝異常症

各種先天代謝異常症の診断と治療を幅広く行っている。タンデムマスによる新生児マススクリーニングにおいては、メインコンサルタント病院としての機能をはたして、精査をうけ入れ、診断後の治療に当たっている。特にペルオキシソーム病、リゾソーム病、脂肪酸代謝異常症、有機酸代謝異常症については国内でも有数のスクリーニング・診断・研究センターとして機能を果たしている。治療として酵素補充療法や骨髄移植なども行っている。

○遺伝相談

以前より代謝異常・先天性免疫不全症、染色体異常などの診断と遺伝相談を行ってきたが、近年の遺伝子医療の進歩に対応し、患者さんへの正確な情報伝達とカウンセリングを目的として、生まれつきの病気だけでなく、成人してから発病する遺伝病についても対応している。お子さんのこと、ご自分やご家族のことで、遺伝について詳しく知りたい、悩みを相談したい、という方のご相談に応じている。平成 20 年度から岐阜大学医学部附属病院が全国遺伝子医療部門連絡会議の正式会員となり、平成 26 年度に当院で正式に遺伝子診療部として活動を行うことになった。

○心身症

児童の心理的背景をもつ身体症状や行動上の問題、乳幼児の育児に関する心理的な問題について、本人や家族に対する相談を行っている。

○血液・腫瘍

小児がんの代表的疾患である白血病，悪性リンパ腫だけでなく，神経芽腫，横紋筋肉腫，脳腫瘍，骨肉腫などの様々な固形腫瘍の診断治療を行っている。日本小児白血病/リンパ腫研究グループをはじめ，様々な治療研究グループに属し，国内最先端の診断・治療を提供している。また難治性白血病や固形腫瘍，代謝性疾患に対する造血幹細胞移植や，脳外科や整形外科，放射線科など様々な診療科と密接に連携し，様々な小児がんに対応できる診療体制を組んでいる。その他，貧血，血友病などの出血性疾患，溶血性尿毒症症候群など血液疾患全般の診断・治療も行っている。またリンパ管腫症や乳児血管腫などの血管性腫瘍，奇形等に対する先進的な内科療法にも取り組み，国内外へ情報を発信している。

○循環器

学校検診の精査，先天性心疾患，後天性心疾患，不整脈，川崎病の心臓合併症など循環器疾患全般にわたり幅広く診療している。検査はドプラー心エコー，運動負荷心電図等を行っている。心疾患児の学校生活管理について，ホルター心電図や運動負荷心電図検査等をもとに適切な運動処方を行っている。

○腎臓

学校検尿等にて要精密検査となったお子さんを含め，各種腎疾患の治療・生活指導を行っている。

○新生児

在胎 30 週以上の早産児の呼吸循環管理を含めた全身管理や，病的新生児の精査およびその治療をおこなっている。先天代謝異常症スクリーニングで精査が必要な児の受け入れや治療をおこなっている。また，新生児期に入院を必要とされた赤ちゃんのその後の発達チェックおよび治療や，RS ウイルス感染予防のためのシナジス投与などを外来で行っている。

○内分泌

成長障害，糖尿病，甲状腺疾患，思春期の異常，脳下垂体疾患，性腺機能低下症，副腎疾患，骨疾患など，各種内分泌異常の診断・治療を行っている。各種内分泌負荷試験の施行や，1 型糖尿病患者における病因の遺伝学的検討など，各患者に応じた適切な検査・治療管理を行っている。小児がん経験者（Childhood Cancer Survivors : CCS）における内分泌学的な長期フォローアップを要する患者を多く診療している。

○肝臓

黄疸が長引く乳児，種々のウィルス性肝炎の治療，肝疾患の診断と治療を行っている。肝炎ウィルスの母子感染の予防と治療も行っている。

2. 教育施設

- 1) 日本小児科学会専門医認定施設
- 2) 日本アレルギー学会認定施設
- 3) 日本人類遺伝学会認定施設
- 4) 日本小児神経学会認定施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : アレルギーのテラーメイド治療

診療内容 : アレルギー反応の病態の詳細が相当明らかになり，抗原（アレルゲン）の生体への侵入から症状発現に至る病態は免疫学的ならびに分子遺伝学的に解明されてきた。そこで，個人個人のアレルギー疾患のバックグラウンドを迅速かつ簡便に明らかにすることで，個々に応じた治療法を選択することができ，治療法の選択が可能となる。具体的には，アトピー性皮膚炎に対するクリーンルームの活用，LST の臨床応用，薬剤のテラーメイド治療，食物アレルギーの画期的な免疫寛容現象の応用などである。

他病院での導入状況 : 当院にて開発した独自のシステムであり，他病院では導入されていない。

国内的評価 : 遺伝子解析に関しては，インバーダーアッセイ法を利用することで，明らかになった複数の遺伝子異常を組み合わせ，パネル化し迅速に測定することができるようになるようにセッティングした（特許）。これにより個々のアレルギー疾患の病因病態に応じた治療法の選択が可能となる。また，発症前の場合は，環境因子への十分な対応をはかることにより発症予防にも大いに役立つと考える。

国際的評価 : アレルギーの病態解析より，サイトカインの産生と反応性の異常が存在することを明らかにしてきた（Clin Exp Allergy, 2000）。さらに，サイトカインのシグナルに関わる遺伝子を解析し，IgE 産生の抑制系の中で，IL-12 シグナリング中の遺伝子変異の解析をすすめた結果，いくつかの候補遺伝子の同定に成功している（Biochem Biophys Res Commun, 1999, J Allergy Clin Immunol, 2002, Int J Mol Med, 2003, 2010, 2011 他）。

- 2) 診療名 : 免疫基礎研究に基づく食物アレルギー対策食品の画期的創成
 診療内容 : 食物アレルギー患者を的確に診断し、抗原エピトープを明らかにする。さらに、今までは除去食療法しかなかった食物アレルギーに対して、あらたに抗原エピトープを修飾し、積極的に免疫寛容を誘導させ“食べて治す”画期的アレルギー対策食品の開発をおこない、食物アレルギーを予防治療する。
 他病院での導入状況 : 当院にて牛乳アレルギーの抗原エピトープを明らかにしており、牛乳、大豆食品の開発も当院独自のもので、他病院ではおこなわれていない。
 国内的評価 : この診療開発は生物系産業創出のための異分野研究支援事業に選定され、ピーンスタークスノー株式会社などと共同でアレルギー対策食品の開発を進めている。
 国際的評価 : 世界で初めて牛乳の主要アレルゲンであるβ-ラクトグロブリンの抗原エピトープを明らかにした。食物アレルギー患者の抗原エピトープ、免疫学的解析について数多く報告している (Inoue R, et al. Clin Exp Allergy 31: 1126-1134, 2001; Sakaguchi H, et al. Clin Exp Allergy 32: 762-770, 2002; Suzuki K, et al. Clin Exp Allergy 32: 1223-1230, 2002; Morita H, et al. Allergy 66:985-986, 2011; Morita H, et al. Int J Mol Med 29:153-158, 2011)。
- 3) 診療名 : 原発性免疫不全症候群の遺伝子診断
 診療内容 : Ataxia-telangiectasia および Bloom 症候群、選択的免疫グロブリン欠乏症、高IgE症候群、MSMD、自然免疫不全症、自己炎症性疾患などの原発性免疫不全症候群の疑いのある児について、その臨床像、検査所見から疑われる原因遺伝子について遺伝子解析を行い、診断を確定する。
 他病院での導入状況 : 現在日本で Ataxia-telangiectasia および Bloom 症候群、自然免疫不全症の遺伝子診断を行なっている施設は少ない。
 国内的・国際的評価 : 本研究は過去 15 年間以上にわたり、日本各地より依頼を受け研究レベルで解析を行ってきたものであり、その方法や遺伝子変異情報については十分な蓄積がある。この遺伝子解析については過去 Fukao T, et al, Hum Mutat (Suppl 1):S223-225, 1998; Fukao T, et al, Hum Mutat 12:338-343, 1998; Kaneko H, et al, Leukemia Lymphoma 27:539-542, 1996; Kaneko H, et al, Int J Mol Med 14:439-442, 2004; Ohnishi H, et al. PNAS 106:10260-10265, 2009; Ohnishi H, et al. JACI 2012; Ohnishi H, et al. J Clin Immunol 2012; Funato M, et al. J Clin Microbiol 94:3432-3435, 2011; Kubota K, et al. J Clin Immunol 2013; Yamamoto T, et al. Mol Immunol 2014 などに報告している。
- 4) 診療名 : 先天性ケトン体代謝異常症の遺伝子診断
 診療内容 : ミトコンドリアアセトアセチル-CoA チオラーゼ欠損症およびサクシニル-CoA:3keto 酸 CoA トランスフェラーゼ欠損症の疑いのある児について、その臨床像、検査所見から疑われる原因遺伝子について遺伝子解析を行い、診断を確定する。
 他病院での導入状況 : 疾患自体は頻度の高い疾患ではないが、先天性ケトン体代謝異常症の酵素診断と遺伝子診断においては世界で唯一の診断センターとして解析をおこなっている。
 国内的・国際的評価 : 本研究は過去 15 年間にわたり、世界各地より依頼を受け研究レベルで解析をおこなってきたものであり、その方法や遺伝子変異情報については十分な蓄積がある。先天性ケトン体代謝異常症の酵素診断と遺伝子診断においては世界で唯一の診断センターとして解析をおこなってきている。当教室からのこれらの疾患の遺伝子解析の論文発表は数多い。
- 5) 診療名 : 先天性リンパ管腫・血管腫における新規治療
 診療内容 : 先天性リンパ管腫・血管腫の治療は困難であり、有効な治療法がなかったが、βブロッカーであるプロプラノロールによる新規治療法を確立し、内科的にリンパ管腫・血管腫を消失・縮小させる治療を行っている。
 他病院での導入状況 : 疾患頻度の比較的高い疾患であり、患者数も多いもののいままで有効な治療手段に乏しく、現在まで日本での先進的役割を果たしている
 国内的・国際的評価 : 本治療については、世界的にも先進的成果であり、学会等でも高く評価されているが、成果の一部は、Ozeki M, et al. New Engl J Med 364:1380-1382, 2011 にも掲載されている。

4. 専門医・認定医・指導医

深尾敏幸 : 日本小児科学会専門医, 日本アレルギー学会専門医・指導医, 日本人類遺伝学会専門医・指導

医

加藤善一郎：日本小児科学会専門医，日本人類遺伝学会専門医・指導医，日本小児神経学会専門医・指導医

折居建治：日本小児科学会専門医

西村悟子：日本小児科学会専門医

松井永子：日本小児科学会専門医，日本アレルギー学会専門医・指導医

大西秀典：日本小児科学会専門医，日本小児神経学会専門医

川本典生：日本小児科学会専門医，日本アレルギー学会専門医

小関道夫：日本小児科学会専門医，日本血液学会専門医

堀 友博：日本小児科学会専門医，日本内分泌学会専門医

木村 豪：日本小児科学会専門医

浅野 勉：日本小児科学会専門医

山本崇裕：日本小児科学会専門医

篠原和希：日本小児科学会専門医，日本アレルギー学会専門医・指導医

笹井英雄：日本小児科学会専門医

川本美奈子：日本小児科学会専門医，日本アレルギー学会専門医

神田香織：日本小児科学会専門医

伊藤裕子：日本小児科学会専門医

5. 自己評価

評価

大学病院の使命である臨床，教育，研究の立場から考えるとそれなりの実績は評価できる。今後，更に高度先進医療開発の実現が望まれる。

現状の問題点及びその対応策

小児科は小児の総合診療科であるとともに，小児の専門診療科である。小児科が多くの特長領域をもつのに対し，診療科として1つであり，すべての専門領域に対する専門医を常勤医として確保出来ない問題が挙げられる。そのため関連病院からの診療応援などで各専門領域をカバーしているものの，教育病院として十分と言えるかについて考える必要がある。今後県が設置した障がい児者医療学講座のような寄付講座設置などで広い小児科分野をカバー出来るスタッフの確保が必要と考える。

小児科全体の問題点としては，小児科医不足があげられる。現在，若手小児科医育成にむけていくつかの取り組みを行っている。ひとつは専門医制度改正にあたり，後期研修システムとして，岐阜県で小児科医を目指す場合のプログラムを岐阜県全体で統一した1つのプログラムとした。これにより岐阜県全体で小児科医を育てる環境づくりの一端となると考えている。ふたつめは，学生および初期研修医向けの研修会の開催を予定している。この研修会をとおして，小児医療に必要な技術を身につけてもらうとともに，興味をもっていただくことが可能になると思われる。3つめは，競争的資金である外部資金を獲得し，外部資金雇用助教等を採用する試みである。

今後の展望

一般小児科医療全般と各専門分野の医療の更なる充実をはかる。さらに高度に専門化された3次医療（4次医療と仮称する）を追求している。また，病態の解析に基づいた各分野における画期的な治療法の開発を目指す。

(19) 放射線科

1. 診療の概要

放射線科の業務は、画像診断、放射線治療、Interventional Radiology (IVR) に大きく分けられる。画像診断領域では、CT, MRI, RI など大型放射線診断機器の急速な発達により、高精度の診断が可能となった。各種画像診断の撮影法の最適化、プロトコルの選択、適切な造影検査、リスク管理、画像の読影が主たる業務となる。緊急検査も増加しており、画像診断に引き続く緊急 IVR への対応も平日、休日を問わず行っている。機器性能の発達により、検査時間の短縮とスループットの大きな改善が得られ、検査件数は飛躍的に増加した。病院の重要な業務である画像診断病診連携についても、CT, MRI, 核医学検査を主に担当し、外来にて問診、診察を行った後検査施行し、診断結果は紹介元へ速やかに報告を行っている。

放射線治療も件数は増加の一途である。特に IGRT (画像誘導放射線治療) にもとづく高精度照射 (IMRT, 定位照射) 件数も増加し、他施設の治療が困難の症例に対しても綿密な治療計画で精密で精度の高い照射で対応している。また密封小線源照射も前立腺癌、子宮がんを中心に行っている。前立腺がんに対する小線源治療は東海地区で先駆けて行った治療法である。

IVR 治療は放射線科および他の診療科の入院で行っている。回診時のカンファレンスで、症状、画像診断、診断、治療方針の決定などを検討し、十分なインフォームド・コンセントを得よう留意している。また、高次救命治療センターに搬送される救急症例の IVR にも 24 時間体制で取り組んでおり、岐阜県の救急医療に大きく貢献している。

2. 教育施設

- 1) 放射線科専門医総合修練機関
- 2) 日本核医学会専門医教育病院
- 3) 日本インターベンショナルラジオロジー学会専門医修練施設
- 4) 日本放射線腫瘍学会認定施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 高精度放射線治療 (IGRT, IMRT, 定位放射線治療)

診療内容 : 高精度放射線治療とし IGRT (画像誘導放射線治療) をもとに IMRT, 脳, 体幹部定位照射 (3 次元, 4 次元照射) を行う。

他病院での導入状況 : 岐阜大学病院には本邦では大学病院としては初めて 2010 年度から高精度放射線治療装置ノバリス Tx が導入され IGRT (画像誘導放射線治療) での治療が可能となり、それにもとづく IMRT や定位照射が開始された。

国内的評価 : 岐阜大学では脳に関する定位照射は 2000 年から開始している。頭頸部の定位照射は 2004 年から、体幹部定位照射は 2007 年から施行しており、安全で良好な治療法として国内学会にも報告している。2008 年度は IMRT が前立腺癌で 7 月から開始、2010 年からはノバリス Tx 導入にて、定位照射は脳、頭頸部、肺に施行し年間 100 症例を超え、IMRT においても前立腺を対象に年間約 20 例のペースで行っており、蓄積された症例数は 100 例を超えている。今後は頭頸部等他領域への IMRT の適応拡大を進める予定である

国際的評価 : 米国では IMRT はかなり普及した照射法である。本邦においては IMRT および定位放射線治療は徐々に普及してきているが、非常に精密な治療でもあり、時間と労力が必要な治療でもある。IMRT においても保険適応も拡大し、特に IMRT は前立腺癌および頭頸部癌での治療が望まれる。また特に肺癌の定位照射は、本邦がリードしている治療であり、早期非小細胞がんで手術に匹敵する成績が報告されている。

- 2) 診療名 : 乳房トモシンセシス検査

診療内容 : 通常のマモグラフィー検査にて発見が難しい乳腺腫瘍を検出する

他病院での導入状況 : 全国の大学病院ではいち早く導入 (4 番目) された。

国内的評価 : 海外の報告と同様に、検診においては病変の検出率向上や偽陽性の減少に寄与すると言われている。精査機関においても通常のマモグラフィーで描出不可能な多発病変や娘結節の検出においても有用であると言われている。

国際的評価 : 乳癌検診にて病変の検出率向上や偽陽性の減少に寄与すると言われている。

4. 専門医・認定医・指導医

兼松雅之：日本医学放射線学会診断専門医，日本 IVR 学会専門医，日本がん治療認定医機構暫定教育医
星 博昭：日本医学放射線学会診断専門医，日本核医学会専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医
梶浦雄一：日本医学放射線学会診断専門医
浅野隆彦：日本医学放射線学会診断専門医，日本核医学会専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医
富松英人：日本医学放射線学会診断専門医，検診マンモグラフィ読影認定医
加藤博基：日本医学放射線学会診断専門医，日本核医学会専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医，日本
IVR 学会専門医，検診マンモグラフィ読影認定医
五島 聡：日本医学放射線学会診断専門医，日本核医学会専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医，日本
IVR 学会専門医
渡邊春夫：日本医学放射線学会診断専門医，日本核医学会専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医，検診
マンモグラフィ読影認定医
田中秀和：日本医学放射線学会放射線治療専門医
大野裕美：日本医学放射線学会専門医，検診マンモグラフィ読影認定医

5. 自己評価

評価

画像診断領域では，CT, MRI, RI 装置の急速な発達により，高精度の診断が可能となったが，その撮影法は種々のものがあり，各種疾患に対する最適撮像法を開発し，最善の画像診断を提供している。また，スループット改善により，検査件数は飛躍的に増加し，これにより検査予約の待ち日数の短縮に貢献している。病診連携を取り入れ，CT, MRI, 核医学検査を受け入れ，担当し，診断結果の紹介元へ速やかに報告している。

放射線治療件数も飛躍的に増加しており，東海地区の先駆けとして前立腺癌に対する小線源治療を 2005 年 8 月より開始している。また，2000 年から脳定位照射を開始しており，2004 年には頭頸部定位照射を，2007 年には体幹部定位照射を行っている。また，2008 年 7 月からは前立腺癌に対する IMRT を年間約 20 例のペースで行っており，これまでに 100 症例以上の治療経験を蓄積している。2010 年のノバリス Tx 導入により，脳，頭頸部，肺の定位照射を年間 100 症例以上行っている。今後は頭頸部等の他領域へ IMRT の適応拡大を進める予定である。

専門医の育成では，日本医学放射線学会総合修練機関，放射線治療専門医修練機関，日本核医学会専門医教育病院，日本放射線腫瘍学会認定施設，日本 IVR 学会修練施設として，最近多くの専門医，認定医を育成してきた。

現状の問題点及びその対応策

CT, MRI など診断機器の進歩はめざましいが，至適撮像法や新しい撮像法はさらに検討の余地がある。また，画像情報量の大量化及び複雑化に伴い，読影に要する時間が増加し，3 次元画像の後処理やその読影に要する時間も増加している。さらに，IVR においてもその手技が高度化，複雑化しており，一患者の診断，治療に要する時間が増加している。放射線治療においても，高精度照射での治療計画の複雑化，外部照射と密封小線源治療件数の急激な増加により多くの時間と労力を要している。これらの問題を解決するためには，診療に携わる医師の技量の高い水準での平均化及び合理的な診療環境の整備が必要である。また，現時点では放射線科スタッフも少なく人員の増加，充実が望まれる。臨床研究が中心となるが他科との共同研究の拡大がより必要である。

今後の展望

高度の画像診断技術による病態の正確な早期診断と高度技術の IVR 治療による低侵襲治療を推進し，緊急検査から IVR 治療へとシームレスに繋がる体制を確立していく。放射線治療においても，他科との共同で全国レベルの臨床試験の積極参加や高精度照射装置を用いた新たな照射法の開発などに取り組んでいく。

今後の方針として，CT, MRI, PET を補助とする新たな診断・治療法の開発を進め，IVR 治療や放射線治療による非侵襲的治療をさらに推進していく。また，EBM に基づく診療，研究と診療の密接な融合，診療の発展につながる基礎研究，世界基準を念頭に置いた診療，研究が今後の展望である。

(20) 麻酔科疼痛治療科

1. 診療の概要

麻酔科疼痛治療科の診療は以下のように多岐に及ぶ。

手術での麻酔サービス、手術後疼痛の管理、小児科・内科による骨髄移植の麻酔、精神科による電気痙攣療法等、あらゆる麻酔管理を担当している。夜間の緊急手術に対する麻酔管理は勿論、時に 24 時間以上に及ぶ手術の麻酔にも対応し、年間 3,500 件以上に安全で質の高い麻酔を提供している。手術後の急性痛に対しては持続硬膜外鎮痛やエコーガイド下の末梢神経ブロックならびにオピオイドの持続静注等による疼痛管理を行っている。

疼痛治療外来は、痛みを訴えている人や神経麻痺を持った人のための総合外来である。患者の病像は多彩であり、「痛み」が主な症状の病気、あるいは様々な種類、複雑な要素をもった痛みを訴える患者が増えてきた。現在は外来治療ベッド 13 床、入院ベッド 6 床の環境で、月曜日・水曜日には手術室で、また金曜日には放射線透視室で X 線透視を用いて神経ブロックを行っている。

緩和医療チームの構成

当大学病院は、岐阜県がん診療連携拠点病院として活動しており、その一環として緩和医療にも積極的に取り組んでいる。当科はその緩和ケア部門の中心的存在として他診療科と連携のもと活動を行っている。また、入院患者のみならず外来患者に対しても金曜午後に緩和ケア外来（予約制）を開設し、診療を行っている。

2. 教育施設

- 1) 日本麻酔科学会麻酔指導病院
- 2) 日本ペインクリニック学会指定研修施設
- 3) 日本緩和医療学会認定研修施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 頸部・腰部神経根症に対する pulsed radiofrequency 法

診療内容 : 頸部・腰部の神経根症疼痛に対して高周波電流を 42℃以下で間欠的に通電し疼痛軽減を図る治療手段である。

他病院での導入状況 : 岐阜地区では当院のみに施行されている。

国内的評価 : 従来の高周波熱凝固法と比べて、知覚低下・筋力低下を来しにくく疼痛改善効果も優れていると考えられている。

国際的評価 : 欧米では種々の神経痛の治療に数年前から導入されており、筋力低下を来しにくいため、多椎体の神経に対して加療が可能となることに加えて、神経因性疼痛にも有効であるとの報告に則り、広く施行されている。

4. 専門医・認定医・指導医

飯田宏樹 : 日本麻酔科学会指導医・専門医、日本ペインクリニック学会認定医

田辺久美子 : 日本麻酔科学会指導医・専門医

山本拓巳 : 日本麻酔科学会指導医・専門医、集中治療専門、インфекションコントロールドクター、日本呼吸療法医学会専門医

長瀬 清 : 日本麻酔科学会指導医・専門医

熊澤昌彦 : 日本麻酔科学会指導医・専門医

杉山陽子 : 日本麻酔科学会指導医・専門医

福岡尚和 : 日本麻酔科学会指導医・専門医、日本周術期経食道心エコー認定医、日本心臓血管麻酔学会暫定専門医

山口 忍 : 日本麻酔科学会指導医・専門医、日本ペインクリニック学会専門医

山田裕子 : 日本麻酔科学会専門医

吉村文貴 : 日本麻酔科学会専門医、日本ペインクリニック学会専門医

鬼頭和裕 : 日本麻酔科学会専門医

5. 自己評価

評価

大学病院はもとより関連病院の麻酔科の業務の増加などによるマンパワー不足で、研究に避ける時間

が非常に減ったことなどが重なって、研究課題は十分に達成できなかつたと評価している。診療業務に関しては、可能な限り対応しており、中央診療部門としての仕事はかなりの範囲で達成できていると評価している。

現状の問題点及びその対応策

現状の問題点の多くは、マンパワー不足によるところが大きいですが、その充足は必須であるが、大学附属病院が優れた医師を関連の他医療機関に派遣するという社会的責任があるものの、今後は大学内に優れた医師を確保するという視点で教室を運営していく必要もある。専門医を養成するという使命と共に、麻酔科専門医の絶対数が少ないというこの地域の現状のあった現実的な選択をしていく。また、女性医師の有効な活用は今後の円滑な運営の必須条件と考えており、出産等に伴う休暇後の復帰プログラムを確立し、安心して育児・仕事の両立が可能な環境作りに努める方針である。

今後の展望

欧米では、特にアメリカでは手術の約 50%が外来で、日帰り麻酔・手術として行われている。わが国では未だ病院がそのような体制にはないが、手術部の効率的な運用によって、小手術や侵襲的な検査に対する的確で安全な麻酔法を確立し、社会のニーズに対応した麻酔診療を行う。ペインクリニックでの痛みの治療には近郊他大学からの紹介患者も多く評価を得ているが、手術後痛の治療に関しても、一流施設に相応しい痛みの診療システムを構築（急性疼痛管理チーム）していく必要がある。加えて遷延性術後痛の予防・加療のための亜急性期の疼痛管理も重要となっている。また余力の許すかぎり、難治性慢性疼痛や癌性疼痛の管理（緩和医療を含む）にも力を注ぐことを目標に、院内・慢性の疼痛管理システムの確立を目指す。

(21) 歯科口腔外科

1. 診療の概要

当科では、顎・顔面・口腔に関わる口腔外科的疾患に対し診断と治療を行っているとともに、有病者や周術期患者の一般歯科治療にも携わっている。口腔癌では、本地域におけるがん診療拠点病院としての機能を活用し、放射線・化学療法（含む動注化学療法）の併用による組織温存療法や遊離皮弁や遊離骨弁を活用した質の高い機能回復を行っている。その他、顎変形症の施設基準（矯正治療・外科治療の両者）も取得しており、一貫した治療を展開している。顎嚢胞・良性腫瘍（エナメル上皮腫等）では、顎骨を温存する治療を行い、口腔・顎・顔面の機能と形態の保全を図っている。口腔乾燥症・舌痛症では専門外来を開設し治療にあたっている。これらの診療活動により、他の病院歯科・口腔外科、診療所に無い診療機能の強化を図りつつ地域における口腔医療の3次機関としての責務を果たすべく活動している。さらに、紹介率向上のため地区単位のミニ講演会、県・市単位の研究会を主催し相手の顔の見える病・診連携の構築に努め、岐阜市および岐阜県内の歯科医療機関と連携した口腔医療の提供を行っている。

2. 教育施設

- 1) (公社) 日本口腔外科学会研修施設
- 2) 日本顎関節学会指定研修機関
- 3) 歯科医師臨床研修施設（管理型研修施設）

3. 診療開発

- 1) 診療名：周術期口腔機能管理・口腔ケアの導入

診療内容：急性期病院である当院において、歯科医師、歯科衛生士による専門的口腔ケアを導入し、放射線・化学療法時の口内炎・菌性感染症等の予防、および周術期の誤嚥性肺炎・感染の軽減を図り、本来の治療効果、質的向上に寄与することを目的に展開している。

他病院での導入状況：平成 24 年に歯科診療報酬に周術期口腔機能管理料が新設され、多くの病院歯科・口腔外科で周術期口腔機能管理がおこなわれるようになった。当科はそれ以前に周術期口腔機能管理・口腔ケアを導入している。

国内的評価：術前・術後の口腔機能管理が、術後合併症や誤嚥性肺炎の発症を抑制し口腔粘膜炎などの重篤化の防止に有効であることが認知された結果、平成 24 年度歯科診療報酬に周術期口腔機能管理料が新設されたことになった。

国際的評価：2004 年に CDC が公開した「医療ケア関連肺炎防止のためのガイドライン」では、VAP（人工呼吸器関連肺炎）対策の 1 つとして、人工呼吸器装着患者における口腔ケアの重要性が強調されている。また、2007 年に E. Y. Chan らは口腔内の衛生管理を行った群は、衛生管理を行っていない群に比較して有意に VAP の発生率が低いことを報告している。

- 2) 診療名：口腔乾燥症・舌痛症外来

診療内容：シェーグレン症候群の可能性も考慮した系統的な検査（サクソンテスト、唾液腺シンチグラフィ、血液検査、唾液腺造影、口唇生検、CT、MRI）および眼科・皮膚科・膠原病内科など関連諸科への対診に基づく診断を行い、病因に応じた適切な治療法の選択を行なっている。また、唾液を用いた口腔病変の非侵襲的診断法の確立と疼痛計を用いた舌痛の客観的評価の導入を目指している。

他病院での導入状況：中部圏内および全国的にみて、当科は比較的多くの症例を有している。

国内的評価：既に学会発表、講演、論文等で或る程度の国内的評価を得ている。

国際的評価：ラフチジンによる舌痛の緩和に関する論文が国際誌（J Oral Pathol Med）に掲載された。

- 3) 診療名：スタンダード・プリコーションの実施

診療内容：スタンダード・プリコーションの概念に基づく院内感染予防を実地することにより、高次医療機関の歯科口腔外科としての役割とエイズ診療拠点病院としての役割を遂行する。

他病院での導入状況：平成 16 年の調査では、エイズ診療拠点病院で歯科を併設している施設の中で、ハンドピースを患者ごとに取り替えるのに必要な本数だけそろえているのは約半数の施設であった。

国内的評価：「病院感染対策ガイドライン」（国立大学附属病院感染対策協議会編）の内容を満たすレベルに到達している。

国際的評価：米国疾病管理予防センター（CDC）の「歯科臨床における院内感染予防ガイドライン 2003」で推奨しているスタンダード・プリコーションに沿ったレベルの診療体制・システ

ムが構築されている。

4) 診療名 : インプラント専門外来

診療内容 : 埋入インプラント数として 100~150 本/年で推移している。骨移植などの顎堤形成を必要とする例や侵襲の大きいインプラント埋入等を安全に施行する例を中心に、デンタル CT および画像解析システムを外来に設置し、撮影直後の画像診断など詳細な解析を迅速に行い、安全かつ予知性の高い施術を展開している。また、当科は保険診療である広範囲顎骨支持型装置埋入手術に関する施設基準を満たしており、腫瘍、外傷などで広範囲に顎骨もしくは歯槽骨を欠損した症例に対しても保険診療で対応している。

他病院での導入状況 : インプラント治療は一般開業医でも広く行われるようになったが、腫瘍、外傷などで広範囲に顎骨もしくは歯槽骨を欠損した症例や先天性疾患による多数歯欠損や顎堤形成不全に対応できる施設は県内でもまだ少ない。

国内的評価 : 高齢化の社会情勢を受けて、患者数は増加傾向にある。しかし、全身合併症や手術時合併症に留意する必要がある、当科のような総合病院の歯科口腔外科の役割は大きい。平成 24 年に腫瘍、顎骨骨髓炎、外傷などで広範囲に顎骨もしくは歯槽骨を欠損した症例に対して、広範囲顎骨支持型装置埋入手術が保険診療として認められ、当科も対応している。

国際的評価 : インプラントは世界に 100~200 種類が存在すると言われている。インプラントの 10 年生存率はシステム、患者の年齢などにより左右されるがおおむね 90%以上となっている。高齢者のインプラントの治療成績も若年者に対しそれほど劣ったものではない。

4. 専門医・認定医・指導医

柴田敏之 : 日本口腔外科学会専門医・指導医

加藤恵三 : 日本口腔外科学会専門医・指導医

牧田浩樹 : 日本口腔外科学会専門医

畠山大二郎 : 日本口腔外科学会専門医

米本和弘 : 日本口腔外科学会専門医

5. 自己評価

評価

歯科口腔外科としての総合的評価として、概ね目標は達成されていると思われる。

現状の問題点及びその対応策

外来受診者の動向として、年間の紹介(含む院内紹介)による口腔外科的症例数は大きな変動はなく、頭打ちの状態である。代わって有病者の治療や院内の周術期患者の治療や口腔ケアの依頼が増加してきている。よって、入院症例ないし手術症例数の大幅な増加は見込めないところであるが、短時間手術の場合は今まで 1 日 2 件の手術を計画いたところに、1 日 3 件の手術を計画するようにしている。有病者の治療においては、患者の状態と処置の内容を考慮した上で、症例によっては入院下での処置を計画している。周術期口腔機能管理・口腔ケアについては、担当医と歯科衛生士が連携して計画的に管理・ケアを行うようにしている。上述する努力を継続・発展させることが重要と考えられる。

今後の展望

当科の存在意義は、この地区の口腔医療の二次、三次医療機関としての責務を果たすとともに、より質の高い口腔医療を安全かつ快適に提供することである。したがって、これらを満たすため医師 1 人 1 人が使命感をもって、その任を果たすことが重要である。その結果、秀逸な臨床医が育成され、相乗効果的な明るい展望が開くものと考え、地道ではあるが日々の努力を行なっていく所存である。

また、今後の展望として、再生医療(細胞プロセッシング)の構築とこれを活用した細胞治療の導入を計画しており、その達成により大きな転換期を迎えることを期待している。

(22) 検査部

1. 診療の概要

1) 中央採血部門

平成 16 年 6 月に病院が移転して開院したときの採血ブースは 3 レーンであり、混雑時には 4 レーンで対処していた。しかしその後の患者数の増加に伴って待ち時間が大幅に伸びたため、平成 22 年 1 月に 5 レーンに増設し、さらに 26 年 4 月より 6 レーンに増やした。それでもなお混雑することがあるが、採血専門パートの看護師、臨床検査技師を雇用し、検査部技師および看護師と一緒に採血することで何とか対処している。因みに平成 17 年度の件数は 50,903 件だったのに対し 25 年度は 75,927 件で 49%の増加である。また同時に採血順番の進捗状況が患者さんに見えるようにモニター画面を設置し、どのくらい待たばいいか分かるようにした。また、月に 1-2 例程度 VVR (血管迷走神経反射) を起こす例があるが、すべて大事に至らず回復している。医師への速やかな連絡など、連絡網も含めて対応策は適正に機能している。

2) 一般検査・血液検査部門

尿検体数も増加の一途をたどっているが、認定一般検査技師を配置して精度の高いデータを臨床サイドに送信している。因みに 24 年度と 25 年度はそれぞれ 87,561, 90,141 件であった。2013 年に全自動尿中有形成分分析装置を導入し、迅速な結果と泌尿器科との共同で研究論文を作成中である。尿検査結果が外来検体検査のなかでは最も早く電子カルテで結果を見られる。血液部門では染色した標本スライドを目視する検体が多いが、これも血液の二級臨床検査技師を配置して迅速に結果を出し、疑わしい検体については適宜、血液内科の医師に連絡して確認してもらっている。血液検査結果は尿検査に次いで早く結果が得られる。

3) 生化学・免疫血清部門

検査項目数としてはこの部門が最も多く、大型の自動分析装置がフル稼働して処理している。時間外もこの装置を使用しているため日中の値との間に乖離はない。臨床サイドの要望に対応し、セット項目の見直しや、新規項目の院内取り入れを検査部運営委員会において承認された後実施している。反面、利用数の少ない項目等については診療科と話し合って外注にするなど、院内検査項目数が多くなり過ぎないように注意している。また、機器更新に伴って平成 24 年 4 月に総合緊急検査システムを導入し、検体処理能力がアップし、迅速でより精度の高いデータの供出が可能となった。

4) 生理部門

心エコー、腹部エコーともオーダー件数が伸びており、検査部担当の分のみで平成 21 年度は心エコー 1,944 件、腹部エコー 240 件で、22 年度はそれぞれ 2,331 例 374 例であった。心エコーは 20%、腹部エコーは 50%以上の増加率であった。さらに新たに部位別のエコー検査の要望があり、平成 22 年 4 月より皮下腫瘍などの病変部のスクリーニング検査を始めた。また耳鼻科から検査枠を増やしてほしいとの要望があるが、人員不足のため現在のところ対応できないでいる。費用対効果の面からいえば生理部門は最も収益があがる場所であり、検査部としても力をいれているところである。因みに 24 年度は 44,081 件、25 年度は 43,694 件で横ばいであり、最近ではほぼ飽和状態である。そのほか、術中脊髄モニタリングのセットアップのために手術室に検査技師を派遣している (予定手術のみ)。このように各診療科の要望になるべく添えるよう努力しているが、さらなる個々のスキルアップが必要である。

5) 細菌部門

現在は 5 人体制 (うち 1 名は ICT 専任として院内活動に参加) で対応している。検体の受け付けを 24 時間体制とし、生体支援センターと毎週ミーティングを行い、院内感染対策を講じている。ICT 活動などの院内活動にも参加しているが、マンパワーが不足しており、もう 1 名程度の増員が望まれる。また、平成 22 年 1 月より感染症情報支援システムを導入し、データ解析など各診療科からもアクセスが可能となっている。また、随時感受性検査の薬剤については必要に応じて見直しを図っている。また、院内感染などについては生体支援センターと常に情報交換をして対応している。現在の問題点としては、検体 (喀痰など) の質あるいは量の改善があまり見られない点である。なかなか難しい点ではあるが、繰り返し臨床サイドに協力を要請しているところである。

6) 検査情報部門

新規項目の院内取り込みや外注化に伴うオーダー画面の処理、各臨床科のセット検査項目の変更などに随時対応している。検査情報支援システム RefDB (レファランスデータベース)、感染症情報支援システムを更新し、最新の検査情報が得られるよう努めている。

2. 教育施設

1) 日本臨床検査医学会認定病院

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

清島 満：日本臨床検査医学会専門医，臨床検査管理医，認定臨床化学者，日本消化器病学会専門医，日本肝臓学会専門医，認定内科医，動脈硬化専門医

伊藤弘康：日本臨床検査医学会専門医，臨床検査管理医，日本医師会認定産業医

白上洋平：認定内科医，日本消化器病学会専門医，消化器内視鏡学会専門医，日本肝臓学会専門医

岩佐将充：循環器学会専門医，認定内科医，日本プライマリーケア学会専門医

加藤 卓：泌尿器科学会専門医・指導医，日本がん治療認定医貴校がん治療認定医

5. 自己評価

評価

日常業務については精度管理も含め目標レベルに達していると考えている。しかし，尿検体のラベルの貼り間違いなど，不注意によるインシデントは未だなくならないが，少しでもゼロに近づくように二重チェックなどによる努力をしていかなければならない。

職員の業務に対するモチベーションを高めるため，日本臨床検査医学会やその他学会の認定技師資格の取得を個々の努力目標に設定している（備考参照）。今後さらに有資格者が増えるよう指導しており，それにより各部門の検査の質がある程度担保されるようになるかとみている。

備考）二級臨床検査士：循環器 4 名 呼吸生理学 1 名 血液 3 名 微生物 3 名 臨床化学 1 名
免疫血清学 1 名

超音波検査士：循環器 4 名 消化器 1 名 泌尿器 1 名 産婦人科 1 名 体表臓器 1 名

認定技師：一般検査技師 2 名 心電検査技師 1 名 HLA 検査技師 1 名 血液検査技師 2 名

臨床微生物検査技師 1 名

そのほか：2 種 ME 技術者 3 名，ICD1 名，ICMT1 名

（以上延べ人数）

現状の問題点及びその対応策

収益性について検討をすると，24 年度の管理指数（100 円の収入を得るために必要な材料費。但し人件費は含まない）は 27.1 であったが，25 年度は 26.2 と改善した。しかし目標である 25 にはまだ届かず，さらなる試薬節約や生理部門（管理指数が 3.6 と非常に低い）の増収に努める。

精度管理については海外認証機構 CAP (College of American Pathology) や日本医師会，日本臨床検査技師会が行っている評価に参加し，基準レベルに達している。精度管理の最終的なゴールは ISO15189 の取得にあるが，その取得には 1 年以上前から主任クラスの少なくとも一人を通常業務を免除して専門担当として準備しなければ困難だといわれている。さらに認証には初年度に 700-800 万円の経費が必要であり，今後の重要検討課題である。

今後の展望

検査部の使命であるデータの精度，迅速性，経済性はもちろんクリアしたうえで大学病院検査部としてのアイデンティティを確立，堅持することが重要である。すなわち，精度管理や検査項目の基準値統一化については岐阜地区の中心的な立場で活動を継続していくべきであり，院内では各診療科からの研究も含めたさまざまな要望に対しては可能な限りフレキシブルに対応していかなければならないと考えている。

(23) 手術部

1. 診療の概要

手術部は、平成20年7月に高次救命治療センター手術部門から独立し、中央部門として新しく設置された。特定機能病院である岐阜大学医学部附属病院の基幹部署としての役割を果たすため、病院経営方針に従い迅速に懸案事項に対処できる組織体制を整えた。

本院における手術医療の特徴は、悪性腫瘍や心血管手術など大学病院としての役割を期待されている術式に特化していることである。また難易度の高い手術患者だけでなくハイリスク患者や、8時間を超える長時間手術が多い点にある。複数診療科にまたがる複雑な術式も多く、最先端の周術期医療提供を目指している。高次救命治療センターを併設するため、ロードアンドゴーと言われる超緊急手術や多発外傷、重症熱傷等の手術治療も積極的に行っている。

手術部は様々な手術患者を対象とし、予定手術・緊急手術を問わず各種術式を想定して手術室スタッフや医療機器が配置されている。限られた人的資源の中であっても常時即応体制の確保が対外的にも求められており、超緊急手術を含め深夜休日を問わず対応できるよう手術環境を確保している。

チーム医療の推進は周術期医療質向上の重要な鍵であるため、外科医や麻酔科医・手術室看護師のみならず、あらゆる多職種で当院手術部が果たすべき使命を共有し、協働することで当院の手術患者がその恩恵を存分に享受できるようにあらゆる体制や環境を整えている。

2. 教育施設

なし

3. 診療開発

1) 診療名 : 手術医学を支える手術看護の専門性確保

診療内容 : 近隣の国公立大学病院手術部の協力により、専門性の高い技術を備える手術部看護師を中心に施設見学を実施している。視察では、業務内容、勤務体系、手術部運営、機器管理等を中心し、他施設と比較することで当院手術部を客観的に評価し改善案につなげている。今年度は臨床工学技士や薬剤師とのチーム医療推進や、手術室内の感染対策や安全対策に重点を置いた。これらの取り組みにより、手術医学を支える手術看護の専門性を確保し、周術期医療の質向上に努めたい。

他病院での導入状況 : 本事業は、22年度の国立大学病院手術部会議において本院が提案し採択された相互訪問事業の一部であり、この点で先駆的な取り組みである。

国内的評価 : 当院手術部の様々な活動内容は、日本手術医学会、日本手術看護学会等で発表している。

2) 診療名 : 統合診療支援システム(クリニカルフロー)の開発

診療内容 : 手術部は、医療の質を確保しつつ効率化や標準化を追求するため、医療情報部等と共同で医療情報システムの改良や新システムへの提案を行っている。この統合診療支援システム(クリニカルフロー)は、国内ではどこの施設にもない新しい医療情報システムで、様々な患者グループ画面において診療の進捗状況が一覧表示される仕組みである。また医療情報の進歩に伴い、各部門システムに散在する重要な患者情報をシステム連携により集約表示することで、専門性の高い集学的治療とともに、日常生活自立度、食事、疼痛など患者情報も同時に提供することで、より質向上が可能になる。

他病院での導入状況 : このクリニカルフローは本院の提案で開発に至る機能であり、現在ほどの施設にも導入されていない。しかし数年後には多くの施設で標準導入され、医療情報におけるポータル機能として広く活用されると考えられる。

国内的評価 : 27年1月にクリニカルフロー開発の病院発表を行ったところ、日本経済新聞、岐阜新聞、中日新聞など多くのマスメディアに取りあげられ、大きな期待が寄せられている。

4. 専門医・認定医・指導医

飯田宏樹 : 日本麻酔科学会専門医・指導医

長瀬 清 : 日本麻酔科学会専門医・指導医

5. 自己評価

評価

新病院開設以後、岐阜大学医学部附属病院の稼働実績と平行するように手術件数は激増している。平成

16年度新病院開院時に年間3,114件であった手術件数は、平成25年は5,178件と5割近い増加を示し、昼夜を問わず手術室は稼働し、地域医療の拠点である大学病院としての使命を下支えしている。

また急性期病院において手術はその中心となるべき医療行為であり、また病院経営上も高い収益を生み出し、さらには岐阜大学医学部附属病院のブランド力を創造する原動力である。このため手術件数はじめ手術内容は手術部の評価でもありながら当院の評価そのものであり、手術件数増加は当院のブランドを高める重要な要素である。

一方で手術部は、手術件数増加にかかわらずスタッフ増が難しい環境の中で、その業務量に対処しながら使命感を確保することが求められている。このような困難な環境で積極的に手術医療に貢献できたことは、手術部の誇りである。

また「当院で行うべき手術待機患者を減らす」という病院をあげての使命を手術に従事する外科医や麻酔科医と共有することで、高い動機づけを維持し、手術件数増加や手術医療の質向上のために努力し、また離職者を予防していることは特筆すべきである。

とはいえ、近隣の大学病院の手術件数と比較すると手術件数は最少件数となっており、手術件数増加に向けてこれから更に一層の努力を投入する予定である。

現状の問題点及びその対応策

外科医不足など医療従事者不足が叫ばれる中、多くの献身的なスタッフの熱意により、手術医療を昼夜を問わず実施している。今後は、一層の人材確保や専門教育に努め、より高い医療知識や専門技術の習得から職場環境の充実まで、幅広く手術医療の向上に努力したい。

また国立大学で最短と言われる当院の在院日数に裏付けされるように、今後も当院の強みである質の高い手術医療も継続して提供し地域医療に貢献したい。よって、手術医療の範囲だけでなく、病診連携など従来の手術医療の枠組みを超えた取り組みも必要と考える。

この点と同様に、幅広くチーム医療推進に取り組み、医師、看護師、臨床工学技士、薬剤師など幅広い多職種との協働により、新しい手術医学に知見を持つ人材を育成し、業務改善や医療安全を通して質改善に取り組み、代表的な集学的治療である手術医療の進歩に成果を結びつけたい。

今後の展望

一層の手術受け入れ件数増加を目指し、微力ながら地域医療に貢献できる組織として持続発展したい。

(24) 放射線部

1. 診療の概要

放射線部は、患者の安全を第一に考え、画像診断、放射線治療、核医学検査、IVR 治療の 4 領域に係る装置を設置し、各診療科及び診療部等の診療体制をサポートしている。

常に新しい技術を取り入れ、高度な診療内容と情報を提供している画像診断の領域においては、一般撮影、CT 検査、MRI 検査、各種造影検査と血管造影検査に加え、気管支内視鏡的治療や血管内手術、胸腔内・腹腔内血管塞栓術、抗がん剤動注治療等の **Interventional Radiology** を含めた広範囲な領域まで行っている。

放射線治療の領域においては、CT・MRI 画像を用いた高精度の外部照射、腔内照射、組織内照射を行い、根治し得る適応疾患の拡大と治療成績の向上に努めている。さらに、定位放射線治療や強度変調放射線治療 (IMRT) も数多く実施している。

核医学検査の領域においては、臓器イメージングによる腫瘍存在診断、臓器機能診断、臓器血流量定量測定を実施し、治療法の選択、治療効果の評価等に役立てている。また、平成 19 年度より陽電子放射断層法装置 (PET/CT) による検査も開始している。

業務の遂行にあたっては、医療情報システムにより、全ての検査・治療においてオーダーリングシステムを用いて予約から会計処理業務さらに統計業務まで効率良く運用されている。

2. 教育施設

- 1) 放射線科専門医総合修練機関
- 2) 日本核医学会専門医教育病院
- 3) 日本インターベンショナルラジオロジー学会専門医修練施設

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

兼松雅之：日本医学放射線学会診断専門医，日本インターベンショナルラジオロジー学会専門医

浅野隆彦：日本医学放射線学会診断専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医，日本核医学会核医学専門医

富松英人：日本医学放射線学会診断専門医

加藤博基：日本医学放射線学会診断専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医，日本核医学会核医学専門医，日本インターベンショナルラジオロジー学会専門医

5. 自己評価

評価

平成 16 年 6 月に新病院開院後、放射線部は中央診療施設として、一般単純撮影室、CT 検査室、MRI 検査室、乳房撮影室、骨密度測定室、核医学検査室、X 線透視室、血管造影検査室、放射線治療室が全て 1 階に集中して配置されているため、動線上も診療の効率的運用に大いに資している。平成 19 年 11 月には核医学検査室に PET/CT 装置を導入し、院内症例のみならず病診連携を介して院外症例の PET 検査も開始している。

平成 25 年度の CT 検査総数はおよそ 25,600 件、MRI 検査総数はおよそ 13,000 件であり、独立法人化国立大学病院において、病床数当たりの実施検査件数はともにトップクラスである。

また、平成 20 年度より導入された画像管理加算 2 の算定を満たすべく、CT・MRI・RI 検査の 80%以上を翌診療日までに放射線科診断専門医が読影を行っている。

現状の問題点及びその対応策

- 1) サーバーがダウンするなど予期できない障害の発生することがあり、紙運用等により対応しているが、時として検査・治療に支障をきたすことがある。次期医療情報システムでは、サーバー等の仮想化によりこの問題を解決できると考えている。
- 2) 放射線機器の高性能化と診療要求内容の高度化に伴い、それに対応すべく診療放射線技師の技術研修が必要であり、慢性的な時間不足のなか十分な研修が行えるよう工夫していかなければならない。
- 3) CT 検査室、MRI 検査室、核医学検査室等への看護師の配置が不十分である。現在、病院でも医療安全

上の問題として取り上げられている。

- 4) オーダリングシステムを用いて検査・治療の予約を行っているが、核医学検査のみ患者が受付に直接足を運び、検査日の確定を行っている。今後は診療科外来にて検査日の確定ができるようシステムの改善が必要である。
- 5) 同規模の国立大学病院と比較し、CT・MRI 検査総数の過多を指摘されている。今後、長期的に適正な検査数へと是正する必要がある。

今後の展望

平成 27 年度以降は経営状態を考えつつも、病院全体として MRI 装置、一般撮影装置、X 線テレビ装置、放射線治療装置、CT 装置等の更新が望まれており、経営と高度な診療が両立する手段を考え機器更新を進めていかなければならない。

また、それに伴い、技師、看護師、医師の人員確保とともに、各々が医療技術の向上に努め、業務の安全と効率的運用を目指していく必要がある。

(25) 材料部

1. 診療の概要

材料部は、かつて各部署において独自の滅菌業務が行われていたため、滅菌業務を行う最大の部署として中央材料部と呼ばれていた。しかしながら、近年の複雑化する医療現場における滅菌業務を中央化する必要があり、1箇所に機能を集約し、材料部の名称となった。業務の内容としては2つ挙げることができる。1つ目は洗浄滅菌業務である。具体的には、病院全体の診療及び看護に使用する医療用器材等を洗浄・組み立て・滅菌し、安全で質の良い滅菌及び消毒済み各種医療器材を作成する重要な役割を担っている。さらに供給回収業務として、臨床の場に必要なに応じて適切に医材を提供し、かつ、使用済みの医材を回収し次の滅菌に備えて洗浄等の滅菌前処置を行う業務も平行して行っている。2つ目は医療材料の物流管理業務である。国立大学病院が法人化し、医療経営の効率化が重要視される現在、非常に重要であり責務のある業務となっている。具体的には、医療材料等の選定、発注、検収、在庫管理、供給、搬送、消費、ロット・シリアル番号管理、定数補充といった一連の物品の流れを一元的に管理し、不良在庫の抑制、医療材料購入の効率化、円滑化を図る業務である。

2. 教育施設

なし

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

なし

5. 自己評価

評価

効率的な病院経営のため、滅菌業務はすべて外注化し、安全で効率的な滅菌物品の供給ができています。医療用器材等の洗浄業務においても、中央集約化に向け取り組み、今年度は泌尿器科外来及びMEセンターに関しても材料部へ移行でき、ほぼ洗浄業務の一元化ができていていると考えています。

また、物流管理業務についても、すべて専門SPD業者に外注することにより、現場の医療スタッフの物品管理に係る煩雑さが軽減され、本来業務に専念できる環境が整ったと考える。

現状の問題点及びその対応策

近年、厳しくなる医療経営を背景に、全国の他の国立大学病院においても病院全体として全力で取り組んでいるのが医療材料の購入の管理である。医療材料の年間の購入額は病院全体で数億円にのぼり、不良在庫を如何に削減していくかが、病院の収支を考える上で重要な課題となってくる。材料部としては大学病院としての医療レベルを落とすことなく、医療材料の購入額を抑えるという、相反する難題を克服しなければならない。そこで、現在は新規医療材料の採用は、同等の製品がある際には、従来の製品の購入をしないという原則（一増一減）に基づいて新規医療材料の採用を行っている。また、医療材料の部署配置定数の適正化を進めている。各部署の定数が適正に設定されていない場合、部署在庫切れが発生したり、不良在庫の増加や使用期限切れの原因となるため、使用実績、定数補充状況を検討し、随時定数の見直しを行っている。

滅菌業務としては、機器に応じた適切な滅菌方法の確立、洗浄・滅菌記録の保存を重点的に行い、洗浄・滅菌運転記録表の見直しを行った。今後の問題点としては、外注業者が変わる可能性があり、業務に習熟した人材を確保することおよび「プリオン病感染予防ガイドライン」で推奨される処理方法を検討することが挙げられる。また、現在全国国立大学病院材料部長会議の議題として、「単回使用器材(Single-Use Device)の再生処理使用について」が挙げられている。再使用によるコスト削減や資源の有効利用が期待できる反面、性能や感染防止等の安全性の確保が今後の検討課題とされている。

今後の展望

滅菌業務に関しては、経営の効率化を主眼として手術部の8枠フル稼働が期待されており、それに伴い洗浄・滅菌業務の増大もしくは、必要物品の定数の増大が予想され、それに対応する人員の配置、設備の拡大が必要と考えられる。

医療情勢の複雑化に伴い医療業務の安全性のさらなる確保、標準化、コストパフォーマンスの上昇を目指し、病院内での材料部の果たす役割は、さらに大きな物になっていくと考えられる。

(26) 輸血部

1. 診療の概要

輸血部の診療は輸血細胞療法の安全性、適正性、有効性を確保することにある。現在、岐阜大学病院では、手術患者の自己血はすべて輸血部医師の責任の元に貯血している。また、適正な輸血療法推進のために、輸血管理料の取得、適正使用加算の取得を目標として院内周知を行っている。その効果もあり、現在当院は輸血管理料 I を取得しており、さらには適正使用加算の算定要件である赤血球/アルブミン比率を達成し、平成 27 年度から加算取得予定である。さらにアルブミン製剤の払い出しも輸血部で行えるよう準備中である。

輸血療法の実態は移植療法である。輸血部においては造血幹細胞移植療法にも寄与しており、自己および同種末梢血幹細胞採取、ならびに同種骨髄採取後の血球血漿除去などの診療を行っている。さらに採取された幹細胞の保存は輸血部内にて行い、幹細胞の払い出しも管理している。

平成 26 年度からは自己フィブリン糊自動作成機器をいち早く導入した。本邦でも導入施設が限られており（平成 26 年末時点で 4 施設のみ）、使用実績を国に報告中である。

2. 教育施設

1) 日本輸血・細胞治療学会研修指定施設（認定医，認定輸血検査技師，学会認定・臨床輸血看護師）

3. 診療開発

1) 診療名：自動化機器による自己フィブリン糊の作製

診療内容：平成 26 年 8 月に国内に導入された機器である。従来は用手法を用いて自己フィブリン糊の作製を行っていたが、同時に散布するトロンビン製剤は生物由来製品であった。本機器を利用すると自己血から自己トロンビンも作製可能となり、完全自己フィブリン糊を作製できる。自己フィブリン糊は外科手術の際に止血，被覆などを目的として汎用されている。

他病院での導入状況：現在，当院および虎ノ門病院，東京大学，秋田大学のみに限定的に導入。

国内的評価：作製実績は虎ノ門病院に次いで全国 2 位である。現在のところ有害事象は認めていない。

自己血から自己トロンビンも作成可能であり，生物学的製剤の使用量削減が期待される。

国際的評価：本邦での実績が最も多い。

4. 専門医・認定医・指導医

兼村信宏：日本輸血・細胞治療学会認定医，日本造血細胞移植学会認定医，日本血液学会認定血液専門医・指導医，日本内科学会認定内科専門医，日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医・指導医

北川順一：日本輸血・細胞治療学会認定医，日本血液学会認定血液専門医，日本内科学会認定内科専門医，日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医

5. 自己評価

評価

自己フィブリン糊の作製機器を導入できたことは評価されるが，その利点を各診療科に宣伝，理解していただく必要がある。また，輸血管理料 I を取得できたことは，最低限の目標を達成したと考えられる。

現状の問題点及びその対応策

現在の当院における輸血体制の問題点として，血液製剤を運搬機器を用いて搬送している点がある。今後は手渡しにて血液製剤の払い出しを行う必要がある。またアルブミン製剤の使用実績や使用状況の把握は行っているが，払い出し等の管理は依然として薬剤部に依存している。輸血管理料を維持する上では，一元管理が必要となり，現在システム更新に合わせて輸血部での管理を計画中である。

今後の展望

血液製剤の搬送手順の改善，ならびにアルブミンの輸血部一元管理を今後の目標として，輸血・細胞治療学会が勧めている I&A を受審する必要がある。現在岐阜県において I&A 認定施設は 1 施設のみであり，岐阜県の輸血医療全体の底上げのためにも，大学病院が規範となる必要がある。

また，IPS 細胞の臨床応用が近い将来現実味を帯びる中，輸血・細胞治療学会ならびに造血細胞移植学会が細胞治療認定管理士制度を作成中である。当院からも資格をとれる人材を育成していく必要がある。

(27) 病理部・病理診断科

1. 診療の概要

病理部・病理診断科は、大学病院内の病理組織診断および細胞診断（術中迅速を含む）業務および病理解剖業務を担当している。また、院外からのセカンド・オピニオン症例やコンサルテーション症例の診断も担当している。さらに、病理外来を設置してコンサルテーション業務も開始したところである。運営理念としては、「速やか且つ確実な病理診断を臨床側に提供するために、病理業務全体にわたるスピードと精度のたゆまない改善」を掲げている。実績としては下表のごとく、病理組織診断が 10,000 件あまり（うち術中迅速約 600 件）、細胞診 7,000 件余り、病理解剖 25 例程度の実績を上げている。診断には、常勤医師 3 名、非常勤医師（講座所属で病理部・病理診断科兼任）7 名の計 10 名があたっている。

業務内容	2012 年	2013 年	2014 年
組織診断	9,696	10,073	10,092
術中迅速組織診	594	602	598
細胞診	7,282	7,352	7,295
病理解剖	20	27	25

2. 教育施設

- 1) 日本病理学会専門医研修施設（認定施設）
- 2) 日本臨床細胞学会認定施設

3. 診療開発

- 1) 診療名：病理外来設置

診療内容：病理外来の設置を行った。院外からのセカンド・オピニオンのコンサルテーションを主目的に開設した。

他病院での導入状況：岐阜県内では当院のみ。全国的に見ても導入施設は少数である。

国内的評価：日本病理学会は病理外来を推奨しているが、主にマンパワーの問題で導入できていない施設が多い。

国際的評価：不詳

4. 専門医・認定医・指導医

原 明：日本病理学会専門医・病理専門医研修指導医、日本臨床細胞学会専門医

宮崎龍彦：日本病理学会専門医・病理専門医研修指導医

酒々井夏子：日本病理学会専門医・病理専門医研修指導医、日本臨床細胞学会専門医

齊郷智恵美：日本病理学会専門医、日本臨床細胞学会専門医

5. 自己評価

評価

理念に掲げたスピーディーな結果報告のために部内でのターンアラウンドタイムの努力目標を、生検材料 3 日以内、手術材料 7 日以内、細胞診 3 日以内に設定し、その実効性をモニターしたところ、生検材料および細胞診においては概ね目標を達成できた。

病理・細胞診断の精度向上の為に引き続き各種の定期カンファレンスを実施した。病理医向けに症例検討会を週一回開催、様々な難解症例・典型例・貴重症例を一同がディスカッション顕微鏡でレビューし知見を共有することも引き続き行っている。また、病理技師と病理医のための細胞診・組織検討会も週一回開催、細胞像と組織像の対比に主眼を置いた研修としている。これらの部内カンファレンスは診断精度アップに少なからず貢献しており、病理専門医、細胞診専門医、細胞検査士の資格取得の為に勉強会も兼ねており、順調に資格取得者を増やすことができた。現在、新任の技師以外、全病理技師が細胞検査士の資格を取得するに至った。

高度先進医療の担保を支える病理業務の意義に鑑み、病理解剖症例を検討する CPC の開催のみでなく、院内カンファレンス・研究会の開催（臨床各科との共催）、積極的な参加を行ってきた。消化器（内科＋外科）、呼吸器（内科＋外科）、乳腺（外科＋放射線科）、腎臓内科、泌尿器科、脳外科（腫瘍）、整形外科（腫瘍）、皮膚科などと定期的にカンファレンスを行うとともに、院内がんボードでも教育的貢献を果たし、高度先進医療における診断・治療の高度化に寄与できた。

さらに、病理標本作成の精度管理のため、部内での特殊染色・免疫染色勉強会を定期的に行った。病理形態学の基礎となる染色の原理・方法論、染色の意義や解釈についてさらに高度化を図れた。

分子生物学的診断の導入を図り、すでに FISH, DISH などの解析は業務として行っている。さらに、現時点では研究レベルであるが、PCR, RT-PCR, real time PCR を用いたコンパニオン診断の技術も導入中である。

臨床各科との共同臨床研究も積極的に進め、毎年英語論文の発表に寄与できている。一方で、病理技師に本来業務以外の作業を強いてしまうこともあり、その運用の仕方には改善の余地がある。

現状の問題点及びその対応策

手術標本のターンアラウンドタイムが目標よりも長めにかかっている（8-9 日）。大型臓器の追加固定や、硬組織の脱灰といった時間のかかるプロセスが入ることが一因であるが、例えば病変コアのみ標本作成を急ぎ、暫定診断を早期に臨床に返すなどの工夫を行っていききたい。また、固定・脱灰に関してはマイクロウェーブを用いた迅速固定法・脱灰法の導入を図っていききたい。

病理外来を設置し、広報に努めているが、未だ充分数の受診者を得ていない。今後は、外部のみでなく、当院入院患者を対象にした低料金でのコンサルテーションの設定も検討していききたい。

臨床各科との共同研究において、保険診療外の切片作製や特殊染色を病理技師のボランティアに頼らざるを得ない現実がある。共通研究施設に病理標本作成、染色などのサービスがないことが一因であるが、医師が時間外労働で研究にあたるのは当然としても、技師にボランティアでサービス残業させることは大いに問題がある。本来業務として共同研究にも参画できるようなシステム構築を検討していききたい。

今後の展望

運営理念として掲げた「病理業務全般に亘るスピードと精度のたゆまない改善」を今後とも継続し、各種カンファレンスへの開催や積極的参加もこれまで通り行う。標榜科により、ポリクリ選択実習の指導をする機会も得たので、これまで以上に学生・研修医・若手病理医・検査技師の教育に注力する。さらに分子標的薬適応判定のための分子生物学的コンパニオン診断を新たな業務として確立することを旨とする。

そして、無理のないかたちで臨床との共同研究が遂行できる体制づくりを今後の展開目標とする。

(28) 医療情報部

1. 診療の概要

当院の医療情報システムは、ペーパーレス/フィルムレスの **Intelligent Hospital** 構想を実現した電子カルテで、現在でもなお世界最先端の状態にある。このシステムでは患者情報を一元管理し、全診療内容ならびに情報管理をデジタル運用可能なインフラを整備した世界でも数少ない病院となっている。医療情報部は、医療情報システムの安全管理に関するガイドライン第4.2版を遵守し、患者情報の真正性、見読性、保存性を確保しながら、電子カルテシステムの安定稼働に努力をしている。

2. 教育施設

なし

3. 診療開発

1) 診療名 : 新医療情報システム (CIS+) の開発ならびに導入

診療内容: 電子カルテにおけるデスクトップクラウド化を行い、全患者情報データをサーバ側で一元集中管理することで、患者情報を安全に保存し、高いセキュリティを確保できるシステムを設計した。仮想サーバならびに **WEB** カルテを導入し、インターネット経由で院内外いずれにおいてもカルテ上の全診療情報が閲覧可能なシステムを整備することで、他医療機関との地域医療連携システムをあらたに整備する。また、治験管理システムならびに戦略的研究基盤を新たに設けることで、各診療科が行う治験・臨床研究を支援可能とした。

他病院での導入状況: 本システムは **IBM CIS+** を基盤として作成されているため、同様のシステムを使用している大学病院が国内にはいくつか存在する。しかし、本院システムには数多くのカスタマイズされた機能があり、同じシステムは国内外にない。

国内評価: 「NHK のクローズアップ現代」や各種新聞等で取り上げていただき、評価は高い。

4. 専門医・認定医・指導医

青木光広: 日本耳鼻咽喉科学会専門医, 日本めまい平衡医学会専門会員, 日本めまい平衡医学会めまい相談医, 日本耳鼻咽喉科学会補聴器相談医, 日本頭頸部がん認定医制度暫定指導医

5. 自己評価

評価

電子カルテシステムの安定稼働のために、日常診療において起こる不具合などに迅速に対応し、週1回開催される医療情報部会議にて問題提起し、電子カルテシステムに関わるベンダーとの全体会議を月1回開催することで、問題を共有するとともに早急な問題解決に取り組むことができた。

また、国立大学病院災害時バックアップ事業の一環として、東日本大震災のような大規模災害時にインターネット経由で被災病院内外の診療施設や避難所から、過去の診療データを **SS-MIX2** 標準形式保管対象データとして患者診療のために閲覧可能とした。

科学的根拠に基づいた医療 (**Evidence-based medicine : EBM**) に必要なエビデンスの抽出、病院経営ならびに臨床研究に有効活用できるように診療行為で発生するデータを集計した **Data Warehouse (DWH)** の管理運用を行うことができた。

現状の問題点及びその対応策

電子カルテシステムトラブルには対応してきたが、そのなかでも迅速な対応が困難なため、運用でカバーせざるをえない課題がいくつか残存している。現在、残っている課題を整理し、次期医療情報システムに反映できるように開発を進めている。

また、日々の診療で発生する医療情報を完全にかつ高いセキュリティで確保していくための情報通信技術は年々高度化してきている。そのため、それらを扱う医療情報部スタッフにも高度な知識と技術が求められてきている。今後はスタッフ個人の知識・技術向上のための教育も積極的に行っていきたいと考えている。

今後の展望

電子カルテ導入以降、膨大な診療データが蓄積され、病院の運営や診療の質向上に活用されてきたが、十分とはいえない。そのためには、診療データの抽出・分析・診療支援機能へのフィードバックの推進、医

療機能分化の促進に必要な地域連携の強化, 特定機能病院としての治験・臨床試験推進などを支援できるシステムの開発を行っていきたい。

(29) 光学医療診療部

1. 診療の概要

I. 胃腸疾患

- 1) 消化管の早期癌に対しては、超音波内視鏡検査や NBI などの特殊光を併用した拡大内視鏡観察を用いて正確に診断し、食道癌、胃癌、大腸癌、大腸腺腫に対し内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD) を積極的に行う。高齢者や重篤な基礎疾患を有する症例には、より低侵襲のアルゴンプラズマ凝固装置 (APC) を用いた焼灼術も行う。また進行癌には化学療法やステント留置術を行う。
- 2) 消化管出血例には緊急内視鏡検査を行い内視鏡的止血術を施行する。食道胃静脈瘤に対しては内視鏡的硬化療法 (EIS) や結紮術 (EVL) を行う。
- 3) また最近では、これまで診断が困難であった小腸病変に対してダブルバルーン小腸内視鏡、カプセル内視鏡を導入し、より正確な診断を得るようにしている。炎症性腸疾患に対しては、内視鏡を用い積極的に診断、重症度判定を行い、適切な治療を行うこととしている。
- 4) その他、種々の疾患による経口摂取不能患者に対し内視鏡的経皮的胃瘻増設術 (PEG) を行い、消化管狭窄例には内視鏡下でのバルーン拡張術を行う。

II. 胆膵疾患

- 1) 超音波内視鏡検査 (EUS)：早期膵癌、胆嚢癌の拾い上げを目的として、血液・他の画像所見において異常が見られた場合に二次スクリーニング検査として行っている。また、膵嚢胞性病変・腫瘍性病変、胆嚢隆起性病変の鑑別診断、膵癌・胆道癌の病期診断にも取り入れ精密な診断を行っている。
- 2) 超音波内視鏡下針生検 (EUS-FNA)：膵癌の確定診断、膵腫瘍の鑑別診断、消化管粘膜下腫瘍の鑑別診断はもとより、肺癌のリンパ節転移診断や体表からの生検が困難な縦隔・腹腔内の原因不明腫瘍、副腎、脾臓など広範囲かつ多彩な部位・臓器からの組織採取を行っている。
- 3) EUS-FNA を応用した治療手技：膵仮性嚢胞・膵膿瘍・感染性膵壊死に対するドレナージや癌性疼痛に対する腹腔神経叢ブロックを行っている。また、最近では内視鏡的逆行性膵胆管造影 (ERCP) を用いた胆道ドレナージが困難な場合、EUS 下胆道ドレナージを行っている。
- 4) 総胆管結石の治療：内視鏡的乳頭切開術 (EST) や内視鏡的大口径バルーン乳頭拡張術 (EPLBD) を状況によって使い分け治療を行い、また巨大結石や合流部胆石などの内視鏡治療困難例に対しては、経口胆道鏡下のレーザー砕石や経皮経肝胆道鏡下砕石を併用している。
- 5) 胆道狭窄・閉塞に対するステント留置：原疾患や状況に応じて胆道ステントを使い分けて治療を行っている。

III. 呼吸器疾患 (肺癌)

- 1) 従来、気管支内視鏡的診断が困難であった、肺末梢病変に対して、気管支鏡検査前に肺腫瘍の HRCT 画像に 3D 解析を行うことにより仮想内視鏡画像を作成し、内視鏡と同様な気管支の分岐を image し、病変部位を同定し、生検部位を決定することにより、より短い検査時間、より短い透視時間に努めている。また透視で指摘困難な病変も HRCT 画像から仮想透視画像を作成し病変部位に印を付け、透視生検時に部位が同定できる工夫を行っている。
- 2) 透視下生検は必要に応じてガイドシース法を用いた生検を行っている (気管支内視鏡下に透視下誘導子を用いてガイドシースを挿入し、シース内に気管支内視鏡エコーを挿入し、腫瘍部位を同定する。エコーを抜去後、生検やブラッシングを施行する) ことにより診断率向上に努めている。また、検体は必要に応じて、遺伝子解析を行い、より適切な治療を行っている。
- 3) 早期肺癌の中で低肺機能や全身状態不良にて手術困難な症例に対しては、超音波内視鏡検査を用いて進達度診断し、内視鏡レーザー治療を施行する。また、中枢気管支発生肺癌に対しては気管支腔内放射線治療やレーザー治療、エタノール注入療法などを行っている。一方、気道狭窄を来すような進行癌には気管支バルーンによる拡張やステント留置術を行う。また、緊急咯血例には止血用バルーンによる内視鏡的止血術や気管支動脈塞栓術等を行う。
- 4) 縦隔リンパ節転移診断や縦隔型肺癌、縦隔腫瘍に対しては、気管支超音波気管支内視鏡下生検 (EBUS-TBNA) を施行し、エコーガイド下に生検を施行する新たな気管支内視鏡診断法を取り入れた診断を行っている。
- 5) 最近では、これまで診断が困難であった肺末梢微小肺腫瘍病変に対して、極細径気管支鏡を用いた、CT ガイド下気管支内視鏡検査を導入し、より正確な診断を得るようにしている。
- 6) 肺門部肺癌や縦隔リンパ節転移症例において Narrow Band Imaging = 狭帯域フィルター内視鏡 (NBI) を用いることにより病期、進達度診断を行っている。

IV. 呼吸器疾患 (びまん性肺疾患)

- 1) 特発性間質性肺炎やサルコーシス，原因不明のびまん性肺疾患や呼吸器感染症に対して，気管支内視鏡下に BAL（気管支肺胞洗浄法）を施行し，細胞成分，各種サイトカイン，各種ウイルス，細菌検査を施行し，病因を診断する。また，透視下に肺生検を施行し，検査肺組織を陰圧で膨らませ，びまん性肺疾患の診断を行う。
- V. 呼吸器疾患（胸膜疾患）
 - 1) 悪性中皮腫は胸水貯留，胸膜肥厚で難治性，診断の難しい疾患であり，従来全身麻酔下の胸腔鏡検査が診断確定に用いられていた。一方，われわれの施設では局所麻酔下の内科的胸腔鏡を行うことにより，診断の難しい，悪性胸膜中皮腫，肺がん胸膜播種，時には結核性胸膜炎の診断，慢性膿胸の診断，治療を行っている。

2. 教育施設

- 1) 日本内科学会認定内科専門医教育施設
- 2) 日本消化器病学会認定施設
- 3) 日本肝臓学会認定施設
- 4) 日本消化器内視鏡学会指定施設
- 5) 日本呼吸器病学会認定施設
- 6) 日本呼吸器内視鏡学会認定施設
- 7) 日本臨床腫瘍学会認定研修施設
- 8) 日本がん治療認定医機構認定研修施設
- 9) 日本アレルギー学会認定教育施設
- 10) 日本胆道学会指導施設

3. 診療開発

- 1) 診療名：ダブルバルーン小腸内視鏡とカプセル内視鏡による小腸疾患の診断と治療
 診療内容：小腸領域の疾患に関し内視鏡的に診断・治療する。
 他病院での導入：岐阜県内では，ダブルバルーン小腸内視鏡と小腸カプセル内視鏡の両機器を導入し診療している施設は数施設のみ。
 国内的評価：小腸疾患の診断と治療には極めて有用な新しい診断治療技術をして，国際的にも研究評価が進んでいる。
 国際的評価：同上
- 2) 診療名：大腸腫瘍に対する内視鏡的粘膜下層剥離術（大腸 ESD）
 診療内容：内視鏡的粘膜切除術（EMR）で対応不可能で一括切除が望まれる大腸腫瘍に対し，内視鏡的粘膜下層剥離術により治療する。
 他病院での導入：岐阜県内では最も多くの症例を治療している。
 国内的評価：これまで外科切除や再発や正確な病理学的評価が困難である可能性が否定できない分割切除で治療されていた大腸腫瘍に対する新しい内視鏡治療として評価されている。当院では 300 例以上の症例を治療している。
 国際的評価：同上
- 3) 診療名：超音波内視鏡下生検（EUS-FNA）
 診療内容：体表より穿刺不可能な腫瘍性病変やリンパ節病変に対して，消化管より超音波内視鏡ガイド下にて針生検を行う。
 他病院での導入：岐阜県下では数施設で導入されているのみ。
 国内的評価：当施設では年間約 200 例以上に対して本検査を行っており，国内では最多の症例数を誇る。また，これらの診断・治療成績は海外のトップジャーナルに多数掲載されており，国内外からの見学者も多数訪れるなど国際的な評価も高い。
 国際的評価：同上
- 4) 診療名：気管支内視鏡による診断と治療
 診療内容：気管支内視鏡エコー検査を用いた肺腫瘍の組織性状の研究にて H20 年度日本内視鏡財団より研究助成金をいただき，気管支内視鏡エコー検査にて，腫瘍の組織性状，進達度，リンパ節転移有無に対して質的診断を行う。
 他病院での導入：現在，臨床応用されている呼吸器内視鏡エコー検査は岐阜県内では岐阜市民病院，長良医療センターで導入されている。
 国内的評価：平成 17 年日本呼吸器内視鏡学会総会にて呼吸器と再生医学に関するシンポジストとし

て発表を行った、平成 20 年度日本内視鏡財団より気管支内視鏡後方拡散エコー法を用いた、腫瘍の組織性状診断、進達度、リンパ節転移診断に関する研究助成金を受けた。平成 21 年日本呼吸器内視鏡学会総会にて呼吸器内視鏡の進歩のシンポジストとして発表をおこなった。

国際的評価：今後、内視鏡に関する研究成果を欧米雑誌への投稿や世界気管支鏡学会や米国胸部学会等の国際学会で発表を行う予定である。

5) 診療名：気管支超音波内視鏡下生検 (EBUS-TBNA)

診療内容：透視下診断不可能な腫瘍性病変やリンパ節病変に対して、中枢気管支より超音波内視鏡ガイド下にて針生検を行う。

他病院での導入：当科およびほかのいくつかの施設で導入。

国内的評価：これまでは開胸術にて診断していた深部病変に対して、非侵襲的に診断が可能であり、極めて有用な新しい診断技術である。

国際的評価：同上

4. 専門医・認定医・指導医

荒木寛司：日本内科学会認定内科医、日本消化器病学会専門医・指導医、日本消化器内視鏡学会専門医・指導医、日本臨床腫瘍学会・暫定指導医、日本がん認定医機構・暫定教育医

大野 康：日本内科学会認定内科医・総合内科専門医・指導医、日本呼吸器病学会・専門医・指導医、日本呼吸器内視鏡学会・専門医・指導医、日本臨床腫瘍学会・暫定指導医、日本がん認定医機構・暫定教育医

岩下拓司：日本内科学会認定内科医、日本消化器病学会専門医、日本消化器内視鏡学会専門医

井深貴士：日本内科学会認定内科医・日本消化器内視鏡学会指導医、日本消化器病学会専門医、日本がん治療認定医機構認定医

柳瀬恒明：日本内科学会・認定医、日本呼吸器内視鏡学会・専門医

上村真也：日本内科学会認定内科医、日本消化器病学会専門医、日本消化器内視鏡学会専門医

5. 自己評価

評価

消化器領域では、最新の医療技術として内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD)、小腸内視鏡、超音波内視鏡下吸引針生検 (EUS-FNA) などを積極的に導入し、県内外からご依頼を受け、症例の蓄積している。

また、呼吸器領域では最新の医療技術としてガイドシース法を用いた末梢肺病変の診断、極細径気管支鏡を用いた CT ガイド下気管支鏡、中枢気管支に対する気管支腔内照射、気管支超音波内視鏡下吸引針生検 (EBUS-TBNA) などを積極的に導入し、県内外からご依頼を受け、症例の蓄積している。

現状の問題点およびその対応策

技術的に検査・治療の困難な症例もある点と患者様への侵襲が少なからずある点が問題。症例によってはどうしても時間を要するものもあるが、より安全に、そして患者様に苦痛を与えないような技術の習得に努めたい。

今後の展望

より安全かつ最先端な技術を導入するべく努力したい。

(30) 高次救命治療センター

1. 診療の概要

これまでと同様。岐阜大学医学部附属病院の急性期重症患者の治療に当たる中央部門であり、ドクターヘリ基幹病院, DMAT 指定病院・基幹災害拠点センターでもある。

病院内外で発生する重症患者, 他の医療機関・救急救命センターで対処できない高度な治療を必要とする患者に対して, 24 時間体制で総合的, 集学的な高度な診断・治療を行う。

2. 教育施設

- 1) 日本救急医学会指導医認定施設
- 2) 日本集中治療医学会専門医認定施設
- 3) 日本航空医療学会認定施設
- 4) 日本透析医学会専門医制度認定施設
- 5) 日本外傷学会専門医研修施設
- 6) 日本熱傷学会熱傷専門医認定研修施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 高気圧酸素療法
診療内容: 高気圧酸素療法の感染症, 外傷に対する臨床応用
国内的評価: 国内多施設共同研究の事務局として推進している。
国際的評価: 前例が少なく, 有望

4. 専門医・認定医・指導医

小倉真治: 日本救急医学会専門医・指導医, 日本麻酔科学会専門医・指導医, 日本集中治療医学会専門医, 日本外傷学会専門医
豊田 泉: 日本救急医学会専門医・指導医, 日本脳神経外科学会専門医, 高気圧酸素治療専門医, 日本航空医療学会認定指導医
牛越博昭: 日本内科学会認定内科医, 日本内科学会総合内科専門医, 日本内科学会認定臨床研修指導医, 日本循環器学会認定循環器専門医, 米国内科学会フェロー, 日本医師会認定産業医, 日本高血圧学会専門医, 日本プライマリ・ケア連合学会認定医・指導医
吉田省造: 日本救急医学会専門医, ICD 制度協議会認定医, 日本化学療法学会抗菌化学療法認定医, 日本透析医学会専門医
熊田恵介: 日本救急医学会専門医・指導医, 日本集中治療医学会専門医, 日本航空医療学会認定指導医, ICD 制度協議会認定医
中野通代: 日本麻酔科学会専門医, 日本救急医学会専門医
吉田隆浩: 日本外科学会認定医・専門医, 日本救急医学会専門医・指導医, 日本航空医療学会認定指導医
副田明男: 日本脳神経外科学会専門医
長屋聡一郎: 日本救急医学会専門医, 日本小児科学会専門医, ICD 制度協議会認定医
岡田英志: 日本内科学会認定内科医, 日本内科学会総合内科専門医, 日本循環器学会認定循環器専門医
加藤久晶: 日本救急医学会専門医・指導医, 日本熱傷専門医
名知 祥: 日本救急医学会専門医, 日本外科学会専門医・認定医, 日本航空医療学会認定指導医
橋本孝治: 日本整形外科学会整形外科専門医, 日本整形外科学会認定リウマチ医, 日本リウマチ学会専門医, 日本救急医学会専門医, 日本航空医療学会認定指導医
神田倫秀: 日本救急医学会専門医
中野志保: 日本救急医学会専門医, 日本外科学会外科専門医
山田法顕: 日本救急医学会専門医, 高気圧酸素治療専門医, 日本集中治療医学会専門医
華井竜徳: 日本内科学会認定内科医
田中 卓: 日本内科学会認定内科医

5. 自己評価

評価

高度救命救急センター日本救急医学会指導医認定施設として名実ともに中部地方救急医療の最後の砦として若手教育機関として, 岐阜県のみならず他県からも高い評価を受けている。

現状の問題点及びその対応策

医療の高度化，細分化に伴い更なるスタッフの充実が望まれる。

今後の展望

岐阜県のドクターヘリ事業が開始により，県内（一部は県外）のよりよい救急医療体制を支える。

(31) 医療連携センター

1. 診療の概要

概要

医療連携センターの目的は以下のとおりである。

1. 大学病院の高度な先進医療を地域の患者が安心して利用できるための医療環境の整備
2. 大学病院医療の機能分担の明確化と病診・病病連携による効率的な医療を提供できる体制の充実
3. 保健・医療・福祉を一体化した地域完結型の充実
4. 効率的な退院支援のできる体制の整備
5. 患者・家族の抱える様々な問題に対する支援体制の整備
6. 岐阜県難病医療連絡協議会の事務局活動
7. 都道府県がん診療連携拠点病院，肝疾患診療連携拠点病院，エイズ治療中核拠点病院，高次画像診断センターと地域医療ネットワークをリンクさせる統合窓口と管理システム

運用内容

1. 構成職員：センター長，副センター長，センター専任看護師，ソーシャルワーカー，センター専任事務職員

2. 稼働日・時間：月～金曜日 8時30分から17時15分（祝祭日は稼働停止）

3. 業務内容

- 1) 患者紹介の円滑化

他診療機関からの患者紹介を FAX（紹介連絡・予約申込票）で受け，迅速に他診療機関に決定日時を FAX で返信することによって，待ち時間の短縮などの便宜を図っている。診察後には，病診連携報告書を紹介元に送付する。患者紹介を促進させるために，各科の診療内容を把握しやすくしたことに加え，当院の担当医師の顔がわかるようにした病院紹介パンフレット（診療のご案内）を関連病院に配布している。また紹介元によりスムーズで正確な診療情報を提供するために，退院時に電子カルテ上に退院先を入力するシステムを構築し，円滑で透明性のある逆紹介を目指している。セカンドオピニオン（受け入れ）の予約受け付け，他病院へのセカンドオピニオンの予約を行う。

- 2) 地域連携バス運用の支援

地域連携バスの患者登録，各種書類作成，患者・家族への補足説明，連携するかかりつけ医への連絡，次回受診・検査予定の把握と FAX 送信，当院受診の確認，地域連携バスの運用件数等データ収集を行う。当院は，平成 22 年 9 月よりパスコーディネーターを配置し，スムーズな地域連携バス運用に向け取り組んでいる。

- 3) 退院支援

退院支援の目的は，急性期治療を終えた患者が，病気や障害を抱えながらも，退院して家庭や地域の病院・施設など新たな療養の場で，安全に安心して自立した自分らしい療養生活を送ることができるよう，地域の保健医療福祉機関と連携して支援することである。

当院は，入院中の患者が適切な医療機関に向けて退院（転院）できるよう，退院支援リスクスクリーニング票の活用等により退院困難な要因を有する患者を抽出し，退院支援計画を立案している。在宅療養支援は主にセンター専任看護師が担い，転院支援はソーシャルワーカーが担う。

さらに 26 年度より退院サポートラウンドを開始し，病棟で医師含め多職種のスタッフがより多くの患者情報を共有することが可能になり，より機動力のある退院支援の実現を目指している。

- 4) 総合医療相談

- ・女性専門相談：女性医療スタッフによる健康相談
- ・生殖医療相談：がん治療に伴う妊孕性に伴う相談
- ・看護相談：患者と家族の療養についての相談，在宅看護・退院に伴う相談
- ・医療福祉相談：医療費，生活費などの経済的問題や社会福祉制度の相談，療養生活，転院，退院に伴う相談
- ・がん相談：「がん」に関わる医療や，がん患者の生活についての相談
- ・難病相談：難病患者が安心して住み慣れた地域で療養できるための相談
- ・セカンドオピニオン：診断法や治療法について主治医以外の意見を聞くことに関する相談
- ・要望・苦情等の患者支援カンファレンス

- 5) 岐阜県難病医療連絡協議会事務局の業務内容

- ・難病医療の確保に関する関係機関との連絡調整
- ・福祉施設等への医学的指導・助言

- ・協力病院等の医療従事者向けの難病研修会の開催
 - ・難病患者の療養環境改善のための実態調査実施
- 6) がん相談支援センターの業務内容
- ・がん相談（総合医療相談の項参照）
 - ・がんに関する地域の医療機関の情報収集と提供
 - ・地域がん診療連携拠点病院相談支援センターとの情報交換と課題の共有
 - ・がん患者サロン運営の支援
 - ・患者会等 NPO 団体との連携
 - ・就労相談

2. 教育施設

教育施設ではないが、岐阜大学看護学科実習の受け入れ等を行っている。

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

岩間 亨：日本脳神経外科学会専門医，日本脳卒中学会専門医，日本がん治療認定医機構暫定教育医
堀川幸男：日本内科学会認定医・指導医，日本糖尿病学会専門医・指導医，日本病態栄養学会専門医・認定 NST コーディネーター，日本糖尿病協会療養指導医

5. 自己評価

評価

スムーズな地域医療連携のためのネットワークシステムの確立や相談業務の充実に向け、以下について重点的に取り組んだ。

病診・病病連携の強化のために、FAX を使用した紹介システムによる病診連携，初回紹介時の病診連携報告書の整備，さらに紹介患者退院経路入力システムを構築し，前方支援及び後方支援の充実を図った。その結果，平成 25 年度診察予約件数は 7254 件（前年度比+105）と増加し，受診報告の FAX 送信，郵便発送件数も増加傾向にある。セカンドオピニオンは，平成 25 年度の実施件数が 72 件（前年度比+8）と増加した。紹介率は平成 20 年度より徐々に上がり，平成 25 年度の紹介率の年次平均が 70.95%（前年度比+1.1%）となり，病診連携システムが紹介率の上昇に貢献したと考えられる。また，平成 18 年より「岐阜地域医師会連携パス」をはじめとする地域連携パスの運用支援を開始した。更に，当院に平成 22 年 9 月よりパスコーディネーターが配置され，5 大がん地域連携パスを中心にスムーズな連携パス運用に向け取り組んでいる。5 大がん地域連携パスの他，生活習慣病関連の岐阜糖尿病地域連携パスや脳卒中地域連携パスなど他の連携パスの運用を整備した。具体的には，①岐阜地域のがん診療連携拠点病院共通の 5 大がん連携パス説明パンフレットの作成，平成 26 年度は他拠点病院と協働し，がん療養サポートパス（緩和パス）の作成，②糖尿病連携手帳を活用した岐阜糖尿病地域連携パス運用の整備，パス運用の周知のための説明パンフレットの作成と関係者への紹介，③脳卒中地域連携パスの運用（新規登録から回復期病院に転院するまで）を整備し，多職種間でパスを共有する体制をつくる等，地域連携の充実に向け，取り組んでいる。その結果，当院で運用されている地域連携パスの登録件数は，502 件（平成 26 年 12 月まで）と増加傾向にある。

退院調整加算については，平成 24 年度より算定条件が，「患者家族と退院後の生活について話し合い，関連職種と連携し，入院後 7 日以内に退院支援計画の作成に着手する。」ことに変更となった。平成 24 年度は院内に周知を行ったが，入院後 7 日以内に退院支援計画書に着手することが行えなかったケースが多く，退院支援件数は 453 件（前年比+80 件）増加したにも関わらず，算定件数は 238 件と 40 件ほど算定件数が減少した。このため，平成 25 年度からは退院に対する入院時リスクスクリーニング実施の徹底，早期に退院支援計画書に着手することを強化した。病棟看護師への退院支援に関する教育も実施したことで，平成 25 年度の退院支援件数は 571 件，退院調整加算 349 件，26 年度 12 月までで退院支援件数 490 件，退院調整加算 339 件と算定に係る運用の定着に取り組んだ。退院前地域ケアカンファレンスは，患者・家族，地域関係者（かかりつけ医，訪問看護ステーション，在宅療養支援診療所，地域包括支援センターなど），院内関係者間で退院後の医療・福祉サービスについて検討する会議であり，医療依存度の高い患者や終末期の患者等が，安心して在宅で生活する上で重要であり，継続して取り組んだ。さらに平成 26 年度より退院サポートラウンドを開始し，病棟で医師含め多職種のスタッフがより多くの患者情報を共有すること

が可能になり、より機動力のある退院支援が可能になった。

医療連携センターの相談業務には、看護相談、退院・転院相談、医療福祉相談、難病相談、がん相談、就労相談などがある。また患者支援カンファレンスを開始したが、医療安全管理室との協働活動に繋がり、患者サポートの両輪となって院内医療の安全管理を支えている。平成24年度の相談の月平均は641件、平成25年度の相談の月平均は716件、平成26年12月までの相談の月平均は686件である。平成26年度は若干減少したが、前回報告の平成22年度の相談の月平均552件との比較では相談件数が月平均100件以上増加した。その理由として、平成24年度10月から平成25年度末の間は看護師3名、MSWが3名（1名増員）と相談員の増員があげられる。その他にピアサポーターによるがん相談、難病相談の体制が定着した。

難病医療専門員は、県内各地域に出向き、関係者と調整を図り、年に2回**難病ケアコーディネーター研修会を企画**推進した。研修会の内容は主に事例検討が中心であったが、平成24年度からは難病患者への避難支援研修を開催した。研修会を通じて岐阜県難病医療ネットワーク事業の円滑な推進を図っている。更に平成23年度より、災害時要援護者対策（避難支援研修会）を各圏域で実施している。

相談支援センターは、平成25年度より**がん相談支援センターと名称を変更**した。岐阜県がん診療連携拠点病院協議会患者相談専門部会で検討し、県内統一のポスター掲示やがん相談支援の広報に努めた。また、同相談専門部会で岐阜県内のがん相談実務者への研修会を開催し、相談の質の向上に努めた。

医療連携センターの周知に向け、教育として、大学勤務医師、コメディカル対象に**医療連携センター研修会**を毎年開催している。研修内容は、地域医療・保健・福祉を担う医師・訪問看護師・ケアマネジャー等を講師に迎え、事例検討会、地域連携の在り方や在宅医療・継続看護・地域連携パスについての講演等を行った。広報活動として、平成19年度より「**医療連携センター年報**」を院内及び院外医療機関に配布した。また、院内職員対象に医療連携センターニュースの発行を随時行った。

現状の問題点及びその対応策

医療連携センターは、担当医による紹介先への返信状況を把握するシステムを電子カルテ上に有しており、逆紹介の遅延を担当医に指摘してきたが、より効率よく逆紹介状況を管理するため、紹介患者退院経路入力システムを構築し逆紹介の実態をより正確に把握できるようにした。一方、以前より連携先の確保のための地域の医療機関や福祉関連施設の情報整理を進めているがまだ不十分なところもある。退院支援の連携に関するシステムは、院内全体で取り組む体制を整備するために段階的に課題の解決を図っているところである。

本対策として、引き続き院内では、研修会、ホームページなどを通じた医療連携センター活動の周知と、各診療科や中央診療施設の枠組みを超えたワーキンググループの設置による適切な医療情報収集の強化と管理体制の整備をより積極的に図っていく。

一方、院外では、現在種々の地域連携パスの運用を進めており、連携医とのネットワーク構築を進めているが、「顔の見える」連携も同時に進めなければならない。地域医療連携ネットワークの確立のため、地元医師会（岐阜県、岐阜市）、救急隊との連携強化をはかるとともに、定期的に県下の医院・診療所に対し、紹介願や診療のご案内、大学病院広報の作成を行い、紹介・逆紹介のさらなる促進に努める。次期医療システム構築時には、より時間的、空間的に医療情報を共有できるシステムづくりを「かかりつけ医」の目線を持ちながら進めることが重要と考える。

今後の展望

現在、医療は個々の医療機関の特性を活かした連携による「地域完結型医療」の実現が基本概念であり、患者の疾病状況に応じた治療のために地域の中で最適医療が享受できるような連携サービスの提供が求められている。各医療機関との連携強化のためには、病院機能の把握、地域連携パスの円滑運用、ウェブカルテなど新規電子カルテの普及などが優先課題である。これらの課題克服により、最適な退院支援が可能となり、患者、病院両方に利する医療連携が実現し、岐阜県の基幹病院としての大学病院の位置づけをより明確化できると考えている。

(32) 生体支援センター

1. 診療の概要

(感染制御部門：ICT)

- ・ 日常業務
 - ・ 検査部からの検査情報の把握（リアルタイム）
 - ・ 院内感染サーベイランスの実施とアウトブレイクの対応
 - ・ 感染症報告書による臨床情報の把握
 - ・ ICT ミーティングと病院内ラウンド（週 1 回）による医療関連感染対策の徹底
 - ・ 感染症クリニックとコンサルテーション（随時対応）
 - ・ 感染症法に基づく対応支援
 - ・ 針刺し・切創，皮膚・粘膜曝露対策（24 時間体制，夜間，休日の窓口は消化器／血液・感染症内科）
 - ・ 抗菌薬の適正使用の推進
 - ✓ Antimicrobial Stewardship：入院抗菌薬投与全症例処方介入
 - ✓ 抗 MRSA 薬使用届出制と一部許可制，カルバペネム薬およびタゾバクタム・ピペラシリンの使用届出制の徹底）
 - ・ 職員教育（常勤・非常勤・外部委託業者を含む）
- ・ 月例業務
 - ・ 生体支援センター会議
 - ・ 生体支援センターニュースの発行
 - ・ 厚生労働省院内感染対策サーベイランスデータ作成及び報告（JANIS）
 - ・ 電子化全自動感染対策サーベイランスシステムの運用と活用（Medlas-SHIPL）
 - ・ 抗菌薬使用量チェックと Antimicrobial Stewardship 実施内容点検
- ・ その他の通常業務
 - ・ 感染対策マニュアルの随時改訂及び遵守の徹底
 - ・ ホームページの充実
 - ・ 職務感染対策防止策の充実（総務課人事労務係との緊密な連携）
 - －各種予防接種（インフルエンザ，B 型肝炎，麻疹・風疹・ムンプス・水痘等）の実施
 - ・ 教育・啓発活動
 - ・ 国公立大学附属病院感染対策協議会（文部科学省）への参加（平成 26 年度からセンター長が協議会会長）
 - ・ 岐阜院内感染対策検討会の主催（年 2 回，関連病院参加）
 - ・ 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（感染症法）への対応
 - ・ 各種クリニカル・パス作成への参加
 - ・ 岐阜県内の全感染防止対策加算算定病院の連携調整，感染対策品質評価サーベイランスと合同カンファレンスの実施（岐阜県病院協会との連携）
 - ・ 学会発表 日本感染症学会，日本化学療法学会，日本エイズ学会，日本環境感染学会，日本内科学会，日本臨床微生物学会，APIC，SHEA，など
 - ・ 感染制御体制
 - ・ 稼働日及び稼働時間原則として，平日日勤帯（8:30～17:15）
 - ・ 時間外及び休日
 - 夜勤師長等を介してセンター員と連絡を取り合い，24 時間体制で対応（含：抗菌薬使用許可，救急感染症患者対応等）
 - ・ 針刺し・切創，皮膚・粘膜曝露対策については，消化器／血液・感染症内科来及び当直医が 24 時間体制で対応

(栄養管理部門：NST)

- ・ 栄養アセスメント（身体計測，血液検査等による患者の栄養状態の把握・観察）
- ・ 最適な栄養摂取方法の指導・提言（経口・経管・経静脈栄養の選択と処方）
- ・ 栄養摂取量の算出
- ・ 栄養療法クリニック（栄養療法の効果判定と合併症のチェック）
- ・ 疾患別病院食などメニューの改善
- ・ 患者・家族への栄養指導（在宅での管理方法を含めて）
- ・ 栄養療法ガイドラインの制定および遵守の徹底

- ・ホームページの作成及び充実
- ・各種クリニカル・パス作成への参加
- ・NST 会議及びラウンド（毎週火曜日 15:00～17:00）
- ・NCM：全入院患者の栄養管理計画書作成および入院時診療計画書作成への参画，その他症例相談随時受付
- ・学会発表：日本病態栄養学会，日本静脈経腸栄養学会など

(栄養マネジメント部門)

- ・患者の栄養管理に関すること。
- ・患者給食の調理及び配膳に関すること。
- ・NSTによる栄養サポート，栄養食事指導に関すること。
- ・栄養管理・栄養指導の効果判定に関すること。

(教育・研究部門)

- ・医学部医学科および看護学科学生への栄養管理教育ならびに感染制御教育
- ・臨床実習における医療関連感染対策の徹底
- ・各種感染症抗体検査と国内外学外実習・就職時の証明書発行（B 型肝炎，麻疹・風疹・ムンプス・水痘等）- 学務係と連携
- ・各種予防接種（インフルエンザ，B 型肝炎，麻疹・風疹・ムンプス・水痘等）の実施 - 学務係と連携
- ・臨床実習における針刺し・切創，皮膚・粘膜曝露事故に対する迅速な対応
- ・医師及び看護師・栄養士への栄養管理・感染制御教育
- ・地域医療機関との連携と各施設感染制御・栄養管理・褥瘡対策・呼吸療法支援のレベルアップのための指導及び教育
- ・ICD (Infection Control Doctor) 及び ICN (Infection Control Nurse) の育成（外部機関からの教育受け入れ）
- ・各疾患における病態・病期の栄養療法の標準化（ガイドライン）策定のための研究
- ・薬剤耐性菌感染症対策に関する研究
- ・抗菌薬適正使用のあり方についての研究
- ・病院経営効率における生体支援センターの役割に関する研究

(褥瘡対策部門)

- ・全入院患者の日常生活自立度判定と褥瘡発生リスクアセスメントの実施
- ・褥瘡対策に関する診療計画書（褥瘡予防）の作成とこれを用いた褥瘡予防対策の徹底
- ・褥瘡患者の回診および治療方法の検討並びに評価
- ・褥瘡対策ミーティング及びラウンド（毎週木曜日 15:00～17:00）
- ・主治医，看護師への助言，指導
- ・褥瘡対策ガイドラインの策定および遵守の徹底
- ・褥瘡予防に関する物品の整備・管理
- ・学会発表：日本褥瘡学会等

(呼吸療法支援部門)

- ・週 1 回（毎週木曜日 14:00～15:00）の病棟ラウンド（人工呼吸器の運用状況の確認，安全管理など）
- ・人工呼吸器からの離脱支援
- ・各種呼吸療法の指導・支援
- ・呼吸療法コンサルテーション（原則として，平日日勤帯 8 時 30 分から 17 時 15 分）
- ・呼吸療法の標準化
- ・RST 会議（年 4 回）
- ・院内勉強会の開催（年 4 回）
- ・対外活動
 - ✓ 東海 RST 協力会コアメンバーとして参加
 - ✓ 岐阜人工呼吸セミナー（NPO 法人 岐阜救急災害医療研究開発機構主催）
- ・学会発表 呼吸療法医学会，集中治療学会など

2. 教育施設

- 1) 日本感染症学会研修施設
- 2) 日本呼吸器学会認定施設
- 3) 日本栄養療法推進協議会 NST (栄養サポートチーム) 稼働施設
- 4) 日本静脈経腸栄養学会 NST (栄養サポートチーム) 稼働施設
- 5) 日本静脈経腸栄養サポートチーム (NST) 専門療法士取得に係わる実地訓練施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 「感染症管理システム」(電子化感染症サーベイランスシステム)

診療内容 : 感染症管理に必要な情報(患者 ID, 細菌検査結果, 炎症(WBC, CRP 等)反応, ベッド情報, 基礎疾患, 医療器具挿入情報など)を既存病院システムから毎日一定の時間に自動的に収集・蓄積できる。

得られたデータは自動的に解析され, 以下の3つの機能が実現できる。

①Web システムを通して各診療端末でエンドユーザー(主治医や担当スタッフ)が利用できる(過去一定期間の任意の条件での細菌検出状況および抗菌薬感受性, 病棟単位での患者入室状況および, 細菌検査結果の時系列表示, 細菌名や抗菌薬名をクリックすると自動的に文献的知識情報解説がポップアップで表示など)

②ICT として, 本システムのサーバにて細菌の異常集積が有意か否か判定でき, 問題, 疑いの場合は, 感染情報レポート(患者リスト)や抗菌薬感受性リスト, 発生状況の2次元キャリアマップ表示等の種々の統計処理が速やかにできる。またエンドユーザーから任意の統計解析要望の処理も可能であり, さらに月報作成など手作業で行ってきた多くの業務の自動化が可能となった。

③厚生労働省の JANIS 院内感染対策サーベイランス事業のデータを入力なしで媒体に排出できる。

他病院での導入状況 : 当院は群馬大学(現在は東海大学)とともに開発した。なお, 2010年1月の病院電子カルテ更新に合わせて, 本システムを発展的に改良した「Medlas-SHIPL:Medlas-Standardized Hospital Infection Primary Lookout」に更新して稼働中。

国内的評価 : 全病院的感染症サーベイランスを電子カルテシステムと協調して全面電子化したシステムは他に類がなく, 大きな評価を受けた。(平成18年11月17日 第89回日本細菌学会関東支部総会 Best Presentation 賞受賞 : 「国立大学医学部附属病院共ソフト“感染症管理システム”を用いた電子化病院感染サーベイランスを開始して」)東海大学の藤本修平教授と共同で, 感染症関連学会でこのシステム普及のためのワークショップを毎年継続的に開催している。

国際的評価 : 世界的にもこのような診療支援・全自動感染症サーベイランスシステム開発は例がなく, 注目されている。また厚生労働省 JNIS サーベイランスシステムにおいて本システムのノウハウを生かしたデータ処理が実現している。国際学会等では, 東海大学の藤本修平教授と共同で, そのアウトカムについて継続発表している。

- 2) 診療名 : Antimicrobial Stewardship in Gifu University Hospital

診療内容 : 平成21年8月より入院患者において, 抗菌薬処方患者を処方開始日から ICT 専任メンバーである臨床薬剤師(日本病院薬剤師会感染制御専門薬剤師, 日本化学療法学会抗菌薬化学療法認定薬剤師, ICD)が電子カルテで処方監視。「感染病巣の特定あるいは推定」, 「起炎菌の特定あるいは推定」, 「用法」, 「用量」の4つのポイントで適正使用がなされているか判定し, 必要があればこの臨床薬剤師から直接, また場合によっては ICT メンバーの ICD に報告を受けたうえで ICD から主治医と適宜ディスカッションして, より適正な抗菌薬処方, また適正な細菌感染症治療に結びつくようにしている。ICT からの処方変更提案に対して約 95%が変更実現している。また最近では処方変更提案例数を超える主治医からの ICT への抗菌薬処方コンサルテーション件数があり, 主治医と ICT の間の関係は大変良好である。これらの取り組みにより, 抗菌薬の不適切使用は激減しており, 効果を上げている。またこの間院内において薬剤耐性菌のアウトブレイクはほとんど見られない。さらに, 取組前後で抗菌薬使用症例の診療費が有意に減少したことが確かめられた。

他病院での導入状況 : 当院は全国に先駆けてこの本格的な抗菌薬処方介入を開始し, 現状でも同様な介入を行っている施設は国内にはほとんどない。

国内的評価 : 本システムのアウトカムについて国公立大学附属病院感染対策協議会, 各種学会で発表

し、評価を得ている。

国際的評価：SHEA(米国医療疫学学会)2010で発表し、評価を得た。

4. 専門医・認定医・指導医

村上啓雄：日本感染症学会認定感染症専門医・指導医，日本呼吸器学会認定呼吸器専門医・指導医，日本消化器病学会認定消化器専門医・指導医，日本内科学会認定内科医・指導医，日本消化器内視鏡学会認定消化器内視鏡専門医，日本肝臓学会認定肝臓専門医，日本化学療法学会認定抗菌化学療法指導医，ICD制度協議会認定（日本感染症学会推薦）ICD，日本医師会認定産業医，日本消化器がん検診学会認定医，日本病態栄養学会認定NSTコーディネーター，日本静脈経腸栄養学会認定医

渡邊珠代：日本内科学会認定内科医，日本感染症学会認定感染症専門医，日本化学療法学会認定抗菌化学療法認定医・指導医，日本エイズ学会認定医・指導医，ICD制度協議会認定（日本感染症学会推薦）ICD

飯塚勝美：日本糖尿病協会療養指導医，日本病態栄養学会専門医，日本医師会認定産業医

高井光治：日本内科学会認定内科医，日本消化器病学会専門医，日本肝臓学会専門医

境 浩康：日本内科学会認定内科医，日本消化器病学会専門医，日本消化器内視鏡専門医

佐々木義之：日本がん治療認定医機構認定医，日本外科学会専門医，消化器外科学会専門医，日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医

5. 自己評価

(1) 感染制御部門：ICT

評価

- ① 多職種連携による以下の活動の成果として感染症アウトブレイクの減少が得られた。
 - ・ 薬剤耐性菌発生状況の迅速な把握
(検査部からのタイムリーな現場への情報発信，ICNの疫学情報解析)
 - ・ 現場スタッフと院内感染情報及び対策の共有（可視化電子化サーベイランス）
 - ・ 環境整備の徹底（清潔と不潔のゾーニング，整理・整頓・清掃の徹底など）
 - ・ 手指衛生をはじめとした標準＋感染経路別予防策遵守の徹底
 - ・ 抗菌薬適正使用推進改革（全例介入）：上記業績論文発表
- ② 岐阜県内医療施設との強固な連携体制を確立した。
 - ・ 岐阜院内感染対策検討会の定期開催（平成12年～，年2回，31回まで開催）
 - ・ 岐阜県健康福祉部医療整備課との連携（平成17年～，院内感染対策受託研究事業：相談窓口，Q&A集の発行，県内中小病院訪問実地指導，県内アウトブレイク改善支援等）
 - ・ 岐阜県健康福祉部保健医療課との連携（平成20年～，岐阜県予防接種センター委託事業：相談窓口，Q&A集の発行，研修会。3次予防接種の実施）
 - ・ 岐阜県内全感染防止対策加算および地域連携加算算定病院連携システムの確立
(合同カンファランス，共通感染対策質評価サーベイランスの実施，連携調整作業等)
論文発表：渡邊珠代，丹羽隆，土屋麻由美，外海友規，太田浩敏，村上啓雄。岐阜県内感染防止対策加算算定全病院での感染対策活動に関するサーベイランス結果報告。環境感染誌，in press.
- ③ その他
 - ・ センター長が国公立大学附属病院感染対策協議会会長に就任した（平成26～28年度）
 - ・ 感染制御活動の経済的評価に関する論文を発表した。
論文発表：鈴木智之，土屋麻由美，丹羽隆，渡邊珠代，太田浩敏，深尾亜由美，藤本修平，村上啓雄。岐阜大学医学部附属病院におけるMRSA感染制御活動の経済的評価に関する検討。環境感染誌，in press.

現状の問題点及びその対応策

- ① 専従スタッフ不足および次世代育成体制の未確立
- ② 感染症診療体制の脆弱性
- ③ 検査部細菌検査室の検査機器の老朽化および質量分析装置が存在しないこと
- ④ 職員の感染症抗体検査およびワクチン接種記録管理体制の不備
- ⑤ 職員体調不良の把握および勤務シフト体制の不備

今後の展望（努力目標）

- ① 平成 27 年度中に医師・看護師・薬剤師・臨床検査技師・事務職員の専従体制を確立する。
（現状：1・1・0・0・0⇒目標：2・2・2・2・2）
- ② 学内での若手育成カリキュラムの策定（学外からの研修受け入れ体制強化も含め）
- ③ 感染症科の設置
- ④ 検査部細菌検査室の検査機器更新（質量分析装置の導入を早急に）
- ⑤ 職員の感染症抗体検査およびワクチン接種記録管理体制の確立（人事労務係と連携，電子カルテへの反映を含め）
- ⑥ 職員体調不良の把握および勤務シフト体制の不備：周知徹底および平素からの BCP の確立

(2) 栄養管理部門：NST

評価

- ① NCM 体制の確立
 - ・ 全入院患者の栄養管理計画書作成および入院時診療計画書作成への管理栄養士の参画が達成できた。
 - ・ 管理栄養士の増員（退職調理師からの振り替え定員および外部委託業者管理栄養士も含め）と各病棟担当管理栄養士の配置達成
 - ・ 外来栄養指導環境整備（内科外来併設，受け入れ体制強化）
- ② 栄養管理マニュアルの策定とリリース

現状の問題点及びその対応策

- ① NST 専従スタッフ不足（現状では専従スタッフはいない）
- ② 栄養管理室の位置づけが不安定（事務部門と診療部門の中間的存在）
- ③ 次世代育成体制の未確立
- ④ NST 活動の活性化

今後の展望（努力目標）

- ① NST 専従スタッフの確保（少なくとも，医師 1・管理栄養士 1・看護師 1・事務職員 1）
- ② 管理栄養士の更なる増員（2-3 名は最低）
- ③ ①を踏まえ診療部門として栄養管理部への格上げ
⇒当面は生体支援センター内に設置を念頭に
- ④ ①の確立後，NST 活動体制強化（受け入れ患者数のアップと，NST 加算の実現）

(3) 栄養マネジメント部門

評価

- ① 患者給食の質向上への努力
 - ・ 主食の見直し
 - ・ 盛り付け，配膳方法の見直し
 - ・ 患者アンケートの実施と改善努力目標設定

現状の問題点及びその対応策

- ① 患者給食に満足な評価がされていないこと
- ② 経腸栄養剤の採用や運用体制の整備不良
- ③ NST との連携強化

今後の展望（努力目標）

- ① 外部委託業者との品質管理協議体制の強化
- ② 経腸栄養剤採用・運用体制の整備強化
- ③ NST メンバー専従化と合わせ，栄養マネジメント部門業務の統合（栄養管理部の創設も踏まえ）

(4) 教育・研究部門

評価

- ① 職員教育の充実

- ・ 医療安全・感染制御合同全職員研修会の実施（年 2 回）→ほぼ全職員受講達成
- ・ 生体支援センターセミナーの実施（年 9 回）－外部講師招聘も含め実施継続
- ② 医学部医学科および看護学科の感染制御教育の充実
 - ・ 医学科 4 年臨床実習入門の教育内容充実
 - ・ 感染と看護講義
- ③ 医学部医学科および看護学科の体調不良者連絡体制と適切な診療・休養体制の確立
 - ・ 医学科・看護学科学務係、保健管理センターとの強固な連携
- ④ 研究は各部門の項に記載

現状の問題点及びその対応策

- ① 職員教育の質の停滞感
- ② 学生の感染症抗体検査およびワクチン接種体制の整備不良
- ③ 感染症診療に関するカリキュラム不足

今後の展望（努力目標）

- ① 職員教育の質向上（積極的な外部講師の招聘）
- ② 学生の感染症抗体検査およびワクチン接種体制の整備強化
- ③ 感染症診療に関するカリキュラム（テュートリアル教育への参画を視野に）

(5) 褥瘡管理部門：PUT

評価

- ① 褥瘡対策マニュアルの策定とリリース
- ② 褥瘡対策に関する診療計画書の作成とこれを用いた褥瘡予防対策の徹底化
- ③ 褥瘡新規発生率の低値維持
- ④ WOCN の 2 名配置復帰
- ⑤ PUT-aids 1 名の雇用

現状の問題点及びその対応策

- ① PUT 専従スタッフ不足（現状では専従 WOCN1 名のみ）
- ② PUT 専従チーフ医師の不在
- ③ 体圧分散寝具等、褥瘡予防物品の管理体制の整備不足
- ④ 褥瘡対策に関する診療計画書の作成体制の改変（一部の医師に多くの負担がかかっている）

今後の展望（努力目標）

- ① PUT 専従スタッフの確保（少なくとも、医師 1・WOCN2・薬剤師 1・管理栄養士 1・事務職員 1）
- ② PUT 専従チーフ医師の配備（生体支援センター教育職員として）
- ③ 体圧分散寝具等、褥瘡予防物品の管理システムの整備（ME センターと連携して、保管場所の確保と貸出 24 時間体制のシステム化）
- ④ より現場医師と連携し、実効性のより高い褥瘡対策に関わる診療計画書等の作成システムの確立。とくに簡素化。医療情報システム更新のタイミングに期待。

(6) 呼吸療法支援部門：RST

評価

- ① 人工呼吸器等の適正使用推進による医療安全管理品質の向上に貢献、インシデントの予防
- ② 呼吸療法コンサルテーションの実施
- ③ 職員の呼吸管理実務教育

現状の問題点及びその対応策

- ① RST ミーティングおよびラウンド参加メンバーの減少
- ② 呼吸療法マニュアルの未整備

今後の展望（努力目標）

- ① 呼吸療法マニュアルの策定とリリース

- ② RST 専任スタッフの確保
- ③ RST 活動による医療品質向上のアウトカム評価研究

(33) がんセンター

1. 診療の概要

平成 18 年に都道府県がん診療連携拠点病院に指定されたことに伴い、岐阜大学医学部附属病院に腫瘍センターが設立され、平成 21 年 5 月より、がんセンターに名称を変更した。

がんセンターは、がん治療等に関する包括的な審査部門であり、患者さんの身体的・精神的苦痛に対しては緩和ケアやサロンの開設によるトータルケアを実施している。また、がん登録やクリニカルパスの普及にも努めている。

がんセンターには、がんセンターボード部門、放射線治療部門、化学療法部門、緩和ケア部門、臨床研究部門、教育研修部門、情報管理部門、病診連携部門を設置している。

がんセンターボード部門

- ・標準治療の実施に関すること
- ・診療科横断的の外科治療の実施に関すること
- ・光学医療診療部との連携に関すること
- ・病理診断に関すること
- ・画像診断に関すること
- ・がんセンターボードに関すること
- ・その他がん診療に関すること

放射線治療部門

- ・放射線治療の実施に関すること
- ・その他放射線治療等に関すること

化学療法部門

- ・入院及び化学療法室における化学療法の実施に関すること
- ・その他化学療法等に関すること

緩和ケア部門

- ・緩和ケアセンターの整備及び運営に関すること
- ・緩和ケア研修会に関すること
- ・緩和医療チーム活動の実施に関すること
- ・その他緩和ケアに関すること

臨床研究部門

- ・がん臨床試験、臨床研究（臨床試験を含む）の実施に関すること
- ・その他がん診療等に係る臨床研究に関すること

教育研修部門

- ・診療部各部門及びメディカルスタッフ（薬剤師・看護師・検査技師・放射線技師・がん登録実務者）等への専門知識技術取得のための研修に関すること
- ・内外の講師による公開カンファレンスの実施に関すること
- ・臨床腫瘍医、臨床腫瘍薬剤師、臨床腫瘍看護師の育成に関すること
- ・研修会・研究会の開催に関すること
- ・禁煙及びがん予防に関すること
- ・市民公開講座に関すること
- ・その他がん診療等に係る教育研修に関すること

情報管理部門

- ・がん登録に関すること
- ・岐阜県がん情報センターに関すること
- ・ホームページによる情報発信に関すること
- ・その他情報管理に関すること

病診連携部門

- ・がん相談支援センターの運営に関すること
- ・院内及び地域連携のためのクリニカルパスの整備及び実施に関すること
- ・患者、家族及び患者会等に対するサポートに関すること
- ・その他病診連携に関すること

2. 教育施設

- 1) 都道府県がん診療連携拠点病院
- 2) 日本臨床腫瘍学会認定研修施設
- 3) 日本がん治療認定医機構・認定研修施設
- 4) 日本外科学会・外科専門医制度修練施設
- 5) 日本消化器外科学会・専門医修練施設
- 6) 日本食道学会外科専門医認定施設
- 7) 日本消化器病学会専門医制度認定施設
- 8) 日本消化器内視鏡学会認定指導施設
- 9) 日本血液学会専門医制度研修施設
- 10) 日本乳癌学会・認定施設
- 11) 日本肝胆膵外科学会・高度技能専門医認定修練施設
- 12) 日本婦人科腫瘍学会・専門医制度指定修練施設
- 13) 婦人科悪性腫瘍研究機構・登録参加施設
- 14) 日本放射線腫瘍学会・認定施設
- 15) 日本緩和医療学会・認定研修施設
- 16) 日本医療薬学会・がん専門薬剤師研修施設・認定薬剤師制度研修施設
- 17) 日本病院薬剤師会・がん薬物療法認定薬剤師研修事業研修施設
- 18) 日本頭頸部外科学会・頭頸部がん専門医研修施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 当科の独自開発による区域面の同定法を用いた肺癌に対する区域切除術
診療内容 : 当科で施行してきている肺癌に対する胸腔鏡下肺葉切除術から、より呼吸機能を温存した区域切除術を我々独自に考案した方法で施行することにより、患者の QOL をより高める。肺葉切除術は、肺癌に対する標準術式であるが、近年、より切除肺を少なくする区域切除の妥当性が検討されてきており、我々もこの手術を胸腔鏡補助下に施行する方法を考案しより高度な医療を患者に供給することを目的にしている。また、胸腔鏡も年々進歩してきており、鮮明な画像下での手術が可能となっている。
他病院での導入状況 : 肺癌における積極的的区域切除術は臨床研究も開始されており、その妥当性も認められている。当院も多施設共同研究に参画している。
国内的評価 : 当科の胸腔鏡下手術、区域切除術は、東海地方では先進的な立場にあると自負している。当科の独自の方法は、海外雑誌の論文となっており、その成績も海外雑誌の論文となっている。
- 2) 診療名 : StageIII の治癒切除胃癌に対する術後補助化学療法としての TS-1+Docetaxel 併用療法と TS-1 単独療法のランダム化比較第Ⅲ相試験
診療内容 : StageII, III 胃癌根治切除後の補助化学療法は胃癌治療ガイドラインにて 1 年間の S-1 内服が推奨されているが、StageIII は StageII に比べ予後が不良であり、新たな抗がん剤治療の必要性は明白である。そこで、当科は日本がん臨床試験推進機構 (JACCRO) の研究代表者として標準治療の S-1 単独療法に対する S-1+ドセタキセル併用療法の優越性を検証する多施設ランダム化比較試験を行い、現在症例集積中である。
国内的評価 : 予後不良である StageIII 胃癌の標準治療の確立は急務であり、全国規模で症例集積が進んでおり、この臨床試験の結果は新たな標準治療の確に向けて非常に重要である。
国際的評価 : 胃癌化学療法はいまだ国際的な標準治療が確立していないのが現状である。そのなかで、この試験によって S-1+ドセタキセル併用療法の安全性と有効性が示された場合は、国際的にも胃癌治療に大きな影響を及ぼすと考えられる。
- 3) 診療名 : 切除可能局所進行直腸癌に対する新レジメンを用いた術前化学放射線療法の開発
診療内容 : 切除可能局所進行直腸癌に対し、局所再発を減少させ、さらに遠隔転移を防止することが生存に寄与すると考えられる。よって術前の化学療法レジメンとして切除不能大腸癌に用いる S-1+オキサリプラチン (SOX) を使用し、そこに放射線治療を加えることにより、遠隔転移を予防し、また局所進行直腸癌をより縮小させ、原発巣切除をしやすくする、剥離面を陰性にする、また肛門温存を可能にすると考えられる。この治療法の安全性と有効性を検証する臨床試験を当科が中心となり施行中である。実際、局所進行直腸癌が pCR(Grade3) と著効し、癌が消失した症例も存在する。

他病院での導入状況：全国的にもまれで、現在臨床試験中である。

国内的評価：オキサリプラチンを追加することで、局所再発のみならず遠隔転移も予防するかどうか注目されている。

国際的評価：S-1 は本邦のみで使用されている薬剤であり、これから評価されていく治療法であると考えられる。

4) 診療名：癌化学療法時の性腺機能障害に対する GnRH アナログの保護作用

診療内容：癌化学療法剤による性腺ダメージからの回避機構の第一歩として本研究では GnRH アナログの卵巣間質細胞保護作用を臨床的に明らかにする事を試みた。

他病院での導入状況：1) 保険適用がないこと、2) 臨床試験（大規模）がないため、臨床応用がなされていない。この試験の開発は大学病院の使命である。

国内的評価：GnRH アナログは卵巣に直接作用し、化学療法剤に対する反応性を低下させると着目した独創性は高い。しかも、GnRH アナログは性ステロイド依存性疾患の治療薬として広く使用されており、直ちに臨床応用出来る可能性を秘めている。発展性が期待出来る研究課題である。性腺の化学療法剤に対する感受性が高く、治療後に二次的な性腺ダメージをきたす事が多い。この性腺障害は不可逆的であり、若年者にとって極めて深刻な合併症となっている。化学療法時の細胞毒性から性腺を保護する事は、将来的な生殖能力を保持する上で重要である。

国際的評価：総説 (Reprod. Med. Biol. 2008;7:17-27) として発表した。また、諸外国では臨床応用が始まっており、国際的な位置付けは高い。

5) 診療名：婦人科診療における内視鏡検査、手術の適応増加

診療内容：良性疾患（卵巣腫瘍、子宮筋腫、子宮内膜症、子宮奇形、子宮外妊娠、卵巣出血等）に対する腫瘍摘出術、子宮全摘術、癒着剥離術等の適応を拡げる事。悪性疾患特に子宮体癌におけるリンパ節郭清を内視鏡的に行う事で患者に対する非常に大きな侵襲軽減が期待できる。さらに子宮頸癌に対する腹腔鏡下手術について、現在高度先進医療申請に向け準備をすすめている。【具体例】；腹腔鏡下手術、子宮鏡手術、子宮鏡検査

他病院での導入状況：国内の多くの施設で実施中。

国内的評価：多くの施設では既に施行されているが、婦人科癌に対してはガイドライン上、未だ標準療法とされておらず、保険適応も限られている。開始するには十分な準備とスタッフの修練を必要とする。

国際的評価：諸外国ではすでに臨床応用されており、十分な臨床効果と侵襲の低さで、国際的な位置付けは高い。

6) 診療名：高精度放射線治療 (IGRT, IMRT, 定位放射線治療)

診療内容：高精度放射線治療とし IGRT (画像誘導放射線治療) をもとに IMRT, 脳, 体幹部定位照射 (3次元, 4次元照射) を行う。

他病院での導入状況：岐阜大学病院には本邦では大学病院としては初めて 2010 年度から高精度放射線治療装置ノバリス Tx が導入され IGRT (画像誘導放射線治療) での治療が可能となり、それにもとづく IMRT や定位照射が開始された。

国内的評価：岐阜大学では脳に関する定位照射は 2000 年から開始している。頭頸部の定位照射は 2004 年から、体幹部定位照射は 2007 年から施行しており、安全で良好な治療法として国内学会にも報告している。2008 年度は IMRT が前立腺癌で 7 月から開始、2010 年からはノバリス Tx 導入にて、定位照射は脳、頭頸部、肺に施行し年間 100 症例を超え、IMRT においても前立腺を対象に年間約 20 例のペースで行っており、蓄積された症例数は 100 例を超えている。今後は頭頸部等他領域への IMRT の適応拡大を進める予定である

国際的評価：米国では IMRT はかなり普及した照射法である。本邦においては IMRT および定位放射線治療は徐々には普及してきているが、非常に精密な治療でもあり、時間と労力が必要な治療でもある。IMRT においても保険適応も拡大し、特に IMRT は前立腺癌および頭頸部癌での治療が望まれる。また定位照射においては、特に肺癌においては、本邦がリードしている治療であり、早期非小細胞がんでは、手術に匹敵する成績が報告されている。

7) 診療名：乳房トモシンセシス検査

診療内容：通常のマンモグラフィー検査にて発見が難しい乳腺腫瘍を検出する

他病院での導入状況：全国の大学病院ではいち早く導入 (4 番目) された。

国内的評価：海外の報告と同様に、検診においては病変の検出率向上や偽陽性の減少に寄与すると言われている。精査機関においても通常のマンモグラフィーで描出不可能な多発病変や娘結

節の検出においても有用であると言われている。

国際的評価：乳癌検診にて病変の検出率向上や偽陽性の減少に寄与するとされている。

8) 診療名：CT colonography

診療内容：多列検出型 CT (MDCT) を用いて、大腸を観察する手法である。

他病院での導入状況：国立がんセンター中央病院において、大腸がん術前精査として導入されている。

国内的評価：岐阜大学病院での検査施行数は東海地区でトップクラスである。

国際的評価：米国では大腸がんスクリーニングを目的として研究が進んでおり、multicenter trial などにより、大腸ポリープ検出に関する検討が盛んである。英国では、有症状者に対する大腸がん精査目的に導入されている。

4. 専門医・認定医・指導医

小倉真治：日本救急医学会専門医・指導医，日本麻酔科学会専門医・指導医，日本集中治療医学会専門医，日本外傷学会専門医

岩間 亨：脳神経外科学会専門医，脳卒中学会専門医

吉田和弘：日本外科学会認定医・専門医・指導医，日本消化器外科学会認定医・専門医・指導医・消化器がん治療認定医，日本内視鏡外科学会技術認定医（消化器・一般外科・胃癌），日本乳癌学会認定医，日本癌治療学会臨床試験登録医，日本がん治療認定医・機構暫定教育医，マンモグラフィー検診精度管理中央委員会読影認定，日本食道学会食道科認定医，食道外科専門医，日本消化管学会胃腸科認定医

鶴見 寿：日本内科学会東海地区評議員・指導医・総合内科専門医・内科認定医，日本血液学会評議員・指導医・専門医，日本臨床腫瘍学会評議員・指導医・がん薬物療法専門医，日本がん治療認定医機構暫定教育医・認定医，日本消化器内視鏡学会専門医，日本臨床内科医会専門医，日本骨髄腫学会代議員

二村 学：日本外科学会認定医，日本消化器外科学会専門医，マンモグラフィー検診精度管理中央委員会読影認定，日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医，日本がん治療認定医機構認定医

梶浦雄一：日本医学放射線学会診断専門医

原 武志：日本内科学会指導医・総合内科専門医・内科認定医，日本血液学会評議員・指導医・専門医，日本臨床腫瘍学会指導医・がん薬物療法専門医，日本がん治療認定医機構暫定教育医・認定医

竹中元康：日本麻酔科学会指導医・専門医，日本ペインクリニック学会認定医，日本緩和医療学会暫定指導医

古井辰郎：日本産科婦人科学会専門医，日本産婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍暫定指導医，日本がん治療認定医機構暫定教育医，日本生殖医学会生殖医療指導医，マンモグラフィー検診精度管理中央委員会検診マンモグラフィー読影認定医，母体保護法指定医

岩田 尚：日本外科学会指導医・専門医・認定医，日本胸部外科学会認定医，呼吸器外科学会専門医，日本がん治療認定医機構暫定教育医・がん治療認定医，肺がん CT 検診認定医

大野 康：日本内科学会認定内科医・総合内科専門医・研修医指導医，日本呼吸器学会専門医・指導医，日本呼吸器内視鏡学会専門医・指導医，日本臨床腫瘍学会暫定指導医，日本がん治療認定医機構暫定教育医

堀川幸男：日本内科学会認定医・指導医，日本糖尿病学会専門医・指導医，日本病態栄養学会認定 NST コーディネーター・専門医

5. 自己評価

評価

当センターは都道府県がん診療連携拠点病院に認定されたことに伴い、岐阜大学医学部附属病院に設立されている。

がん診療連携拠点病院としての役割を強化することにより、より広範囲な治療体系を確立することを目的として設置されており、厚生労働省健康局長通知第 0301001 号を受けて立ち上げたがん診療連携拠点の充実を主な任務として、より明確な活動を目指している。具体的には、がん診療の協力体制がより一層強くなることを期待し、がん診療への発展を目的として各疾患に対する、定期的な治療前カンファレンスに加え、癌治療戦略検討会と称して拡大がん診療連携拠点・ミーティングを定期的開催しており、治療や管理の質の向上に貢献している。

放射線部門では、高精度放射線治療装置ノバルス Tx を配置し、ミリ単位で正確な定位照射が可能で IMRT にも対応し精密な照射を行っている。放射線治療は、放射線腫瘍医といわれる常勤放射線治療専門

医が診察し、様々な検査情報をもとに患者さんの体力や病気の進み具合に合わせ照射方法を定める。照射は、放射線治療専門技師が行っており、放射線治療専門看護師が常勤している。

化学療法部門では、がん治療を専門とする医師並びにがん専門薬剤師を含む薬剤師、がん化学療法認定看護師を含む看護師によって運用をしている。有効かつ安全な抗がん剤を使用するために、レジメン審査部会にて実際に使用するレジメンの妥当性・安全性などの審査を行っている。また、薬剤師や看護師による治療に関する指導も実施しており、抗がん剤の注意点や副作用の説明をまとめたパンフレットを作成して取り組んでいる。

緩和ケア部門では、終末期や臨死期に限らず早期がん患者にも対応し、症状緩和をより短期間に図り、在宅療養につなぐ短期緩和医療にも重点を置くことを目指している。これらの医療を円滑に遂行するためには、医師・看護師・薬剤師・栄養士からなる緩和医療チームと、各診療部門より推薦のあった医師や看護師から成るサポートチームで構成されたメンバーの協力を得て身体症状、精神症状のある患者及びその家族に対する緩和医療を積極的に行っている。

教育研修部門としては、国立がん研究センターなどとの、テレビ中継カンファレンスの実施により、研修の機会を用意している。がん医療に携わる医療従事者を対象にさまざまな教育研修活動を企画、高度のがん医療に関する研修会や地域がん診療連携拠点病院で専門的ながん医療を行う医師、薬剤師、看護師等を対象とした研修会を実施している。また、各種製薬会社が主催するがんの講演会などにも後援として携わっている。これまで、がん医療総論から各種がんの各論まで幅広く企画してきたが、今後は、より実践的な内容を取り込んだ企画も検討している。なお、がん専門医を目指す方々や大学院生は、がんプロフェSSIONAL養成講座企画の研修会も利用できる。

情報管理部門としては、がん登録の普及・登録精度向上さらにはがん登録実施施設との連携や人材育成を目的に、がん登録実務者研修会を開催しており、専任のがん登録スタッフが医師との協力のもと登録作業をしている。また、地域の方々へがんに関する情報を発信するために、「ぎふがんねっと」を開設し県内の医療機関についてやがんの治療、予防などといった情報をわかりやすく、かつ最新の情報で提供している。さらにはがん相談や特に患者サロンの実施や国立がんセンターなどとのテレビ中継カンファレンスの実施により、研修の機会を用意している。

病診連携部門では、「がん相談支援センター」を設置し、がん患者さんやそのご家族からの相談対応窓口の整備をした。また、がん患者さんやそのご家族の方が気軽に立ち寄れるサロンを開催しており、不安や悩みを語り合える場として、地域の医療機関とも「地域連携クリティカルパス」を介して連携体制を結んでおり、退院後も専門病院とかかりつけ医の共同した診療を受けられることや患者さん自身が治療内容を確認しながら安心して治療に専念できる仕組みを作っている。また、岐阜県がん・生殖医療ネットワークの一環としてのがん・生殖医療相談（外来）を当センター内に設置し、近年その重要性が注目されるようになっているがん治療と妊孕性に関する治療前の情報提供から妊孕性温存処置にいたるまで、県内がん治療施設、生殖医療施設と連携しながら若年がん患者およびがん治療医のサポートセンターの役割を担っている。このシステムは「岐阜モデル」として全国的にも評価を受け、他県からの多くの問い合わせが当センターに寄せられている。

臨床研究部門では、拠点病院としての“がん治療における新たなエビデンスの発信”，および“がん診療の質の向上”という責務を果たすため、全国レベルの臨床試験への多数の症例登録、治験管理センターとともに多くの治験を実施と新薬の開発への貢献を通して、質の高い医療の提供を行っている。これらの臨床活動を通して、がん医療に関連するそれぞれの領域の学会のみならず、日本臨床腫瘍学会学術集会(JSMO)での発表も毎年多数行い、その内容を論文化、臨床腫瘍学領域でのエビデンスを構築している。当センター長は ESMO(欧州臨床腫瘍学会; 2012年“S-1 plus Docetaxel versus S-1 for Advanced Gastric Cancer (START Trial) Update 2012 (JACCRO and KCSG study Group) と ASCO (米国臨床腫瘍学会; 2013年“A Phase III Randomized Clinical Trial of Adjuvant Paclitaxel Followed by Oral Fluorinated Pyrimidines for Locally Advanced Gastric Cancer –SAMIT Study-”) という臨床腫瘍分野において国際的に最も権威のある2つの学会で口頭発表した。特に、ASCOにおいては、BEST of ASCO 演題に選ばれ、まさに岐阜から世界へエビデンスが発信されたことは、当がんセンターの活動の成果であると思われる。今後は、更なる研究の質の向上も目指し、より高いエビデンスを岐阜から発信できるように一層の努力をしたい。

教育研修部門では、地域のがん医療に係る多職種の人材育成、患者家族を対象とした相談支援・情報提供、行政機関及び地域の医療機関（拠点病院、開業医など）との診療連携、化学療法・放射線治療・緩和医療を含めた各種研修会・講演会の開催などを積極的に行っている。さらにはがんプロフェSSIONAL養成講座とも協力の上、多くの若手医師が、緩和医療も含めた多領域にまたがるがん横断的臨床研修を行い、JSMO 認定のがん薬物療法専門医取得している。質の高い診療を提供できるよう自らが努力するのみなら

ず、今後は、各専門医が次の世代の専門医を養成すべき教育を行っていききたい。

これらのことにより本センターが都道府県がん診療拠点病院の役割を担うのに十分な機能を果たしていると評価できる。

現状の問題点及びその対応策

厚生労働省の第2期がん対策推進基本計画における、重点的に取り組むべき課題の一つである「放射線療法、化学療法、手術療法の更なる充実とこれらを専門的に行う医療従事者の育成」について、各専門分野が質の高い充実した医療に向け成果を上げていることは、「評価」に記述したところである。医師・メディカルスタッフ等の人材確保や育成を含め、とりまく環境整備や改善が今後も重要となる。

次に「がんと診断された時からの緩和ケアの推進」について、緩和ケアセンターを設置し体制整備の充実に取り組んでいるところではあるが、患者の QOL 向上に向け、院内においては診療科間、職種間の緻密な連携を強化し、ケアの継続に向け、在宅医療機関等との地域連携推進し、医療従事者ばかりではなく「ピアサポーター」の活用も緩和ケア推進には必要であり、その育成に向ける。

また、「がん登録の推進」については、全国がん登録法により平成 28 年 1 月からすべての病院等で登録が義務づけられることから、県内の実務者育成を求められており、拠点病院として更なる研修会等の充実が必要である。

今後の展望

本センターは年度ごとに目標を持ち、専門部門ごとに活動計画を詳細に示している。これらの実施状況を適時確認し、定期的な評価を行うことが更なる成果に結びつくものと思われる。こうした PDCA サイクルを確保し、人材を含めた環境整備を継続的に推進することにより、さらなる診療、研究、教育を図っていききたい。

(34) エイズ対策推進センター

1. 診療の概要

エイズ診療そのものは、血液感染症内科を窓口として担当させて頂いているが、診療上必要に応じて、他科の全面的な協力のもと全診療科への受け入れも可能となっている。また、針刺し事故などの感染対策上の観点から生体支援センターとの協力体制も万全である。

HIV 診療は、感染しているか否かから始まる。また感染が明らかになった場合は、その患者の状態に応じて抗ウイルス療法を開始する。日和見感染を発症したエイズの状態においては日和見感染の治療が優先される。治療は原則として外来にて行い、日和見感染を発症している場合には入院が必要になるが、最近では治療が進歩し、ほとんどの患者は社会復帰可能である。それゆえ HIV 診療にとって重要なことは、医師による診療のみならず、患者の身体的・精神的ケアであり、看護師による診療サポート、薬剤師による服薬支援、専門カウンセラーによるカウンセリング体制の整備、ソーシャルワーカーによる社会的福祉支援などが求められ、これらの充実化も順調に進んでおり、その体制はほぼ確立している。

当院は昭和 63 年に岐阜県最初のエイズ症例を担当、以後も診療を継続し、平成 7 年 5 月にエイズ拠点病院の指定を受け、さらに平成 19 年 12 月には岐阜県エイズ治療中核拠点病院の指定を受けた。これに基づき平成 19 年 12 月に岐阜大学医学部附属病院エイズ対策推進センターが設置され、血液感染症内科中心の診療のみならず、院内外への教育・研修活動、情報提供活動なども進めている。

2. 教育施設

- 1) 岐阜県エイズ治療中核拠点病院
- 2) 日本血液学会認定研修病院
- 3) 日本病院薬剤師会 HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成研究研修施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 強力抗ウイルス療法 (HAART)、各種日和見感染の治療

診療内容: HIV に対する抗ウイルス療法, HIV 患者とその家族あるいはパートナーへの支援

他病院での導入状況: 欧米でのガイドラインを参考に作成された本邦での治療ガイドラインに準拠して、エイズ拠点病院を中心に施行されている。

国内的評価: ガイドラインではあるが、本領域の治療方針は、欧米での治験結果によって毎年変更されている。すなわち本領域の治療は、新規薬剤の導入とともに日々変遷しており、標準治療も毎年更新されている。

国際的評価: 欧米での治験結果によってガイドラインは毎年変更されている。HIV に対する抗ウイルス療法は、進歩のめざましい領域であり、評価は絶えず変動している。

4. 専門医・認定医・指導医

鶴見 寿: 日本エイズ学会指導医・認定医, 日本内科学会東海地区評議員・指導医・総合内科専門医・内科認定医, 日本血液学会代議員・指導医・専門医, 日本臨床腫瘍学会指導医・がん薬物療法専門医, 日本がん治療認定医機構暫定教育医・認定医, 日本消化器内視鏡学会専門医, 日本臨床内科医会専門医, 日本骨髄腫学会代議員, 日本造血細胞移植学会移植認定医

渡邊珠代: 日本エイズ学会指導医・認定医, 日本内科学会認定医, 日本感染症学会専門医, 日本化学療法学会指導医・認定医, ICD

鶴見広美: 日本エイズ学会認定 HIV 感染症指導看護師

石原正志: 日本病院薬剤師会 HIV 感染症薬物療法認定薬剤師, 日本病院薬剤師会がん薬物療法認定薬剤師, 日本医療薬学会指導薬剤師

5. 自己評価

評価

エイズの治療は、以前では特別な医療機関でのみ行われると思われていたが、当院では昭和 63 年の岐阜県第一例目の症例から関わり、現在では病院全体として通常の患者と分け隔てなく診療できる体制が整っており、また行政とも協力しつつ県内の指導的立場で診療連携などができるようになったことは評価できると思われる。特に HIV 専門薬剤師, HIV 専門カウンセラーも在籍し、その協力・連携が極めて密であることは、診療体制の構築上、評価に値すると思われる。

現状の問題点及びその対応策

今後患者は増加すると思われるが、本領域に直接携わることができる専門医療スタッフの確保、充実が求められる。

今後の展望

今後、岐阜県のさらなるエイズ診療の全人的医療体制の整備を目指し、職員への HIV 感染症の正しい知識の浸透と診療技術向上を推進するとともに、ブロック拠点病院あるいは地域の他の医療機関との連携などをより一層充実化させていく予定である。また、感染者の早期発見・早期治療ができるよう、行政と協力して、地域住民、感染ハイリスク者らへの啓発活動や抗体検査会開催などにも力を入れたい。

(35) 肝疾患診療支援センター

1. 診療の概要

肝臓疾患

- ・ 劇症肝炎：肝臓を中心に循環管理も含めた全身管理にて対処する。特に免疫学的観点に立脚して、サイトカイン療法を視野に入れて、24時間持続透析（CHDF）や各種補充療法を行なう。
- ・ 慢性肝炎・肝硬変：近年治療進歩は著しく、C型慢性肝炎に対して、インターフェロンを組み合わせた3剤併用療法を中心とした抗ウイルス療法や直接作用型抗ウイルス剤を2剤組み合わせた治療を行なう。また、日常管理には単に薬物療法だけではなく、最適な栄養療法を行い、良好なQOLの維持を目指す。臨床栄養面の研究成果を基礎とした間接カロリーメータの測定を行い、最適な栄養治療を行なう。
- ・ 肝癌：
（診断）微小な腫瘍の存在診断、腫瘍の性格診断能力は最新のCT、MRIやPETの導入により飛躍的に向上している。肝腫瘍に対し、造影超音波を用いることにより、今までの超音波では捉えられなかった微小な肝癌の検出と腫瘍の性格診断を行なう。
（治療）造影超音波を使用し、微小な肝癌もラジオ波焼灼術（RFA）で治療している。多発肝癌や門脈腫瘍栓など治療困難症例に対しても、放射線治療を併用するなど集学的治療により、治療効果の向上を試みている。
- ・ 患者の入院受け入れだけでなく、医師の出張による専門的治療を行い、地域医療の発展と人材育成に尽力している。
- ・ 地域の関連病院と、肝炎ウイルス・肝癌のデータベースを作成し、肝炎ウイルス・肝癌患者総数や動態を把握する。
- ・ 肝炎パス・肝癌パスを使用することにより、病院とかかりつけ医の連携を強化し、日常診療はかかりつけ医で行い、肝臓の画像検査（CT、MRIなど）は病院で行なうシステムを構築する。
- ・ 市民公開講座や肝炎友の会での講演を通して肝疾患に対する知識の向上を図る。
- ・ 肝疾患診療支援センター内に相談窓口を設け、専門相談員が肝疾患についての質問への解答や、肝炎治療の助成金、B型肝炎・C型肝炎訴訟についての情報提供を行う。

2. 教育施設

- 1) 日本内科学会認定内科専門医教育施設
- 2) 日本消化器病学会認定施設
- 3) 日本肝臓学会認定施設
- 4) 日本消化器内視鏡学会指定施設

3. 診療開発

- 1) 診療名：進行肝細胞癌に対する集学的治療の試み。
診療内容：進行した肝細胞癌に対して、動注用シスプラチンを繰り返し動注する。近年は、肝細胞癌の治療成績向上のために、マイクロバルーンカテーテルを使用した肝動脈閉塞下の動注化学塞栓療法（B-TACE）を開始している。門脈腫瘍栓例に対しては、放射線治療も併用する。
他病院での導入状況：関連施設にて導入が始まっている。
国内的評価：かつて進行肝細胞癌に対しては、動注リザーバー留置による肝動注が主流であり、留置手技の煩雑さと留置後の管理が問題となっていた。担癌動脈のみ選択的に動注を繰り返すことにより、より細やかな治療が可能となり、従来のリザーバー動注と奏効率は同等であることが証明された。
- 2) 診療名：C型慢性肝炎に対するペグインターフェロン＋リバビリン＋プロテアーゼ阻害剤の治療効果の検討
診療内容：C型慢性肝炎（1型、高ウイルス量）の治療の進歩に伴いインターフェロンを組み合わせた治療成績は向上した。しかし、一部の症例に無効・再燃が認められるため、その原因について検討している。
他病院での導入状況：岐阜大学関連施設との共同研究を行っている。
- 3) 診療名：C型慢性肝炎・肝硬変に対する経口2剤療法の治療効果の検討
診療内容：C型慢性肝炎（1型、高ウイルス量）の治療の進歩に伴い、インターフェロンを用いない経口2剤治療が登場した。しかし、多剤耐性ウイルス出現の報告もあり、その要因について

検討している。

他病院での導入状況：岐阜大学関連施設との共同研究を行っている。

4) 診療名：C型肝炎ウイルス陽性肝細胞癌治療後の再発抑制

診療内容：非環式レチノイドがC型肝炎ウイルス陽性肝細胞癌治療後の再発抑制効果を示すことをすでに報告した。薬剤承認に向けて再評価中である。

他病院での導入状況：国内施設との共同研究を行っている。

4. 専門医・認定医・指導医

清水雅仁：日本内科学会東海支部評議員・指導医・内科認定医，日本肝臓学会評議員・専門医，日本消化器病学会学会評議員・専門医，日本消化器内視鏡学会専門医，日本がん治療認定医・暫定教育医，日本癌学会評議員，日本がん予防学会評議員

末次 淳：日本内科学会認定医・指導医，日本消化器病学会専門医・東海支部評議員，日本肝臓学会専門医・西部会評議員，日本消化器内視鏡学会専門医

5. 自己評価

評価

年々県内外からの治療相談・治療依頼が増加している。

現状の問題点及びその対応策

肝疾患手帳の作成と配布，関連病院との会議を頻回に行うことで，地域としての連携が密になっており，治療成績データを報告できているため，今後も継続していく。

受け入れ困難な状況が発生し，入院については待ちの状況である。可能な限り入院期間を短縮し，受け入れ患者数を増やしている。

今後の展望

より安全で確実な治療を目指し，再発防止も含めた全人的管理を目指す。

(36) リハビリテーション部

1. 診療の概要

当部は、リハビリテーション専門医のもと、13名の理学療法士と3名の作業療法士、3名の言語聴覚士でリハビリテーションの治療に当たっている。運動器疾患、脳血管障害、呼吸器疾患、循環器疾患、小児、神経系疾患の幅広い分野に取り組んでいる。また、疾患に応じて足圧測定や、動作解析、サーモグラフィー、超音波検査など評価し、適切なリハビリが行えるように診療に役立っている。定期的なリハビリカンファレンスをはじめ、関連病院との勉強会など地域のリハビリ活動にも積極的に取り組むとともに、障害者スポーツにもボランティアとして救護・帯同し、参加している。また新しい装具器機の開発にも工学部と連携し取り組んでいる。

2. 教育施設

- 1) 日本リハビリテーション医学会研修施設
- 2) 理学療法士、作業療法士・言語聴覚士実習施設

3. 診療開発

- 1) 工学部との共同開発をすすめ、上肢機能障害に対する日常生活動作訓練のためのロボットや姿勢保持訓練の矯正訓練装置の開発に取り組んでいる。また機能障害に対する訓練ロボットについても開発をすすめている。国内国外で装置の学会発表や、ロボット展示を行い、広く公開している。
- 2) 動作解析を行い、リハビリの質の向上や、機能障害の原因解明にも役立っている。
- 3) 足圧測定や、重心測定、歩行解析による靴装具の開発治蝶を施行している。
- 4) f-MRI を撮像することで、機能改善の評価や予後予想、効果的な訓練の指導評価に利用している。
- 5) 音楽療法も取り組み、意識障害患者の脳刺激活性を促すよう施術している。

4. 専門医・認定医・指導医

秋山治彦：日本整形外科学会専門医

青木隆明：日本リハビリテーション医学会臨床認定医・専門医・指導医、日本整形外科学会専門医、日本整形外科学会スポーツ医・運動器リハビリテーション医、日本体育協会公認スポーツドクター、日本障害者スポーツ認定医、ドーピングコントロールオフィサー、義肢装具判定医

5. 自己評価

評価

1日18単位以上の患者へのリハビリ対応を行い、患者へのリハビリ評価を多方面から取り組んでいる。研究面や装具の開発、学会発表にも積極的に取り組み、障害者へのボランティア活動も盛んに参加している。また中核病院として地域のリハビリテーション活性化を図るための勉強会や研究会・研修についてもすすめている。

現状の問題点及びその対応策

1日の理学療法士一人に対する単位数は限られており、対応に苦慮しているが、増員することで対応している。リハビリの専門医が岐阜には限られており今後リハビリ専門医の育成にも取り組んでいきたい。また、連休へのリハビリ対応についても、検討中である。

今後の展望

リハビリテーション専門医の育成に取り組むとともに、施設や人材の充実をはかり、患者に満足のいくリハビリテーションを提供したい。また障害者スポーツにも積極的に参加し、より社会貢献に尽くしていきたい。

(37) 分娩部

1. 診療の概要

県内唯一の大学病院として、妊娠高血圧症候群・糖尿病・自己免疫疾患・血液疾患・腫瘍など合併症妊娠の管理、胎児中枢神経系・心臓・肺・腹部・四肢・血液などの出生前診断と管理、妊娠初期の染色体検査・代謝異常診断（小児科と提携）、胎児子宮内発育遅延・早期発症双胎児間輸血症候群などハイリスク胎児症例の周産期管理などを行っている。ただし、現在岐阜地区では、すべての異常妊娠を大学一施設で管理するのは困難であり、岐阜県総合医療センター、岐阜市民病院、長良医療センター等が、それぞれの特色を生かす形で、症例により、疾患により、妊娠種数により適切に協力し、円滑に診療がなされている。緊急搬送においても、岐阜県周産期医療に救急搬送マニュアルに沿って、岐阜大学病院の特色を生かして、母体救命症例および、妊娠 30 週以降の早産症例への対応を行い、さらには岐阜県周産期医療のコントロールタワー的な役割をも担っている。この救急体制は現在問題なく稼働している。

2. 教育施設

産科婦人科参照

3. 診療開発

産科婦人科参照

4. 専門医・認定医・指導医

産科婦人科参照

5. 自己評価

評価

合併症妊娠の管理、出生前診断、ハイリスク胎児管理などの診療は地域一次・二次医療機関の要請に応じている。また、周産期母体救急マニュアルもトラブルなく稼働している。当院の高次救命治療センターおよび放射線科の協力により、重傷症例の緊急搬送が円滑に対処できており、他県で問題になったような搬送の問題は解決されている。現状十分な成果をあげていると評価している。

現状の問題点及びその対応策

岐阜県全体の NICU 不足が著しい中、現在、当院では NICU が常設され、岐阜県周産期医療の中で重要な役割を担っている。このため、帝王切開術の増加に対応した手術枠の改善が必要である。更に最近分娩数が増加しており、それとともに産科入院患者数の増加が産婦人科全体の病床管理上大きな問題となっている。

今後の展望

院内の NICU も整備され、ますます岐阜県内の産科医療の充実が望める。今後も岐阜県周産期医療の主たる一員として、産科医療の中心を担いたい。そのためには、これまで築いてきた救急搬送マニュアルを現場に則したように、改善していきたい。

(38) 医療機器センター

1. 診療の概要

平成 16 年、当院の新病院移転と同時に ME センターとして本格的な稼働を開始した。集中治療への技術提供、手術治療への技術提供、医療機器の中央管理など多くの治療や機器管理に貢献している。臨床業務としては、血液浄化室業務、ペースメーカー業務、不整脈治療におけるアブレーション業務、高気圧酸素療法業務、手術室業務、集中治療室業務、病棟業務に携わっている。

集中治療部門においては、高度救命救急センターにおける血液浄化治療に積極的に取り組み、敗血症に対しては、DHP と HDF の同時治療が施行可能な特殊回路を作成し、有効な治療を目指している。急性期における血漿交換療法として、PE では分離不可能な重症高脂血漿患者に対して遠心分離法を用いた血漿交換療法を考案し、治療に成功した。また、補助循環 (PCPS, ECMO) の治療にも積極的に参加し、高度救命救急センターの医師とともに治療にあたっている。補助循環における人工肺機能の長期維持を目標に JV を用いた O₂ コントロールに取り組み学会などに報告している。近年では、V-A・ECMO→V-V-A・ECMO →V-V・ECMO の手法とり患者の病態にあった補助循環、呼吸補助手段への移行に取り組んでいる。人工呼吸器離脱困難な患者に対し、陽・陰圧式体外人工呼吸器を用いた呼吸リハビリも実施し、小児領域では、肺炎により呼吸障害発生患者に対しても RTX 施行することで排痰、陰圧補助により無気肺改善を行い人工呼吸器への移行を防いでいる。

手術部門への技術提供としては、心臓手術における人工心肺操作、自己血液回収操作、レーザー設定操作、内視鏡システム設定を行っている。人工心肺操作は、超低体温手術における脳分離手術など特殊な操作技術を必要とする手術も多く、分離方法による血流量確保に関して、人工心肺操作側で圧力調整を行い血流調整することで安定した手法を用いることが可能となっている。また、CABG では、Off Pump 手術が多いが、急遽人工心肺が必要になった場合でも、迅速に回路準備を行い、サッカー、ベントが使用可能な大学病院独自の半閉鎖回路を考案し、手術に望んでいる。

医療機器中央管理では、ME センター発足時は、人工呼吸器、輸液ポンプ、シリンジポンプなどの管理から始まり、現在では、機種を増大して管理を行っている。管理当初は、医療機器の把握と統一、稼働率上昇、消耗品統一などを目標としていたが、今日、医療機器の安全等が重要視されているため、管理項目の中に従来の使用点検、故障点検、修理点検に加えて、医療機器の定期点検、定期部品交換の項目を取り入れている。さらに、定期点検内容として、電気的安全チェックも取り入れ、漏電流などの対策も行っている。医療機器の長期貸し出しなどにより定期点検が行い事例が発生しないように 3 か月ごとに各病棟へ定期点検お知らせ便を発行し確実な定期点検を行えるようにしている。

血液浄化室業務は、慢性透析患者における手術待機患者を対象に透析を行っている。心臓疾患や消化器系における手術患者も多く、非常に透析困難な患者に対して透析治療を施行している。また、透析困難症例の患者への治療選択として、HF, HDF をはじめ、無酢酸透析の治療も施せるよう技術取得、装置整備を行っている。

ペースメーカー業務としては、埋め込み術をはじめとして、外来ペースメーカーチェック、ペースメーカー埋め込み患者の手術対応チェック等も必要に応じて行っている。不整脈治療においては、アブレーション治療における解析装置、出力装置の操作を行っている。

高気圧酸素療法は、急性期 CO 中毒患者における治療や術創部、感染創部の早期治癒などの治療が多く行われている。毎日、1~2 名の患者の治療を一人 2 hr, 2 atm の治療工程を行なっている。

また、人工呼吸器中央機器管理業務の一環として、RST (呼吸サポートチーム : Respiratory Support Team) に積極的に加わり、患者の疾患にあった人工呼吸器の選択や RTX を用いた長期人工呼吸器からの離脱補助、無気肺改善などの治療も行なっている。平成 26 年度診療報酬の改定により特定集中治療室管理料算定基準に臨床工学技士の 24 時間常駐が義務づけられたため、スタッフの増員を行い夜勤勤務体制 24 時間院内勤務を目指して組織づくりとスタッフの意識改革を行っている。

2. 教育施設

- 1) 東海医療科学専門学校・臨床工学科臨床実習施設
- 2) 鈴鹿医療科学大学・臨床工学科臨床実習施設
- 3) 小松医療短期大学・臨床工学科臨床実習施設
- 4) 名古屋医療専門学校・臨床工学科臨床実習施設

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

袖原利至：日本人工臓器学会・体外循環技術認定士，ME学会・ME2種技術認定士

小島寛正：ME学会・ME2種技術認定士，日本臨床工学技士会・ペースメーカー専門技術認定士

和田典子：ME学会・ME2種技術認定士

大森章二：日本人工臓器学会・体外循環技術認定士，ME学会・ME2種技術認定士

柿田英登：日本人工臓器学会・体外循環技術認定士，ME学会・ME2種技術認定士，3学会合同・呼吸療法技術認定士

広瀬愛理：ME学会・ME2種技術認定士

田中智也：ME学会・ME2種技術認定士

川添将弘：ME学会・ME2種技術認定士

5. 自己評価

評価

医師とともに治療にあたり，MEセンター独自に当番制（オンコール体制）を整えることで，救急患者に対応することが可能となっている。また，27年2月から夜勤体制に向けて医師，看護師とともに更なる迅速な対応と医療機器の安全確保が出来る体制と整えることが出来ている。中央管理においても定期点検（3ヶ月，半年，1年）を行うことで医療機器の使用頻度を把握し，安全性などの確保が出来ている。また，定期点検期日の見落としがないように3か月毎にME機器定期点検お知らせ便を発行することで確実に定期点検の実施が可能となった。集中治療領域において急性血液浄化は欠かせないものとなっており，多種多様の治療技術提供が行えるように技術向上に努めてきた。不整脈治療およびペースメーカー業務は，専属のスタッフを置き技術習得に貢献できているといえる。

現状の問題点及びその対応策

夜勤業務などの臨床工学技士への業務拡大は急速に進み続けている。その要求に対し我々の適正人員，各部署への人員配置などを考慮しなければならない。今後，医療機器が発展するとともに，操作する人材の確保と技術確保が必要となるため，病院内での位置づけを確立し，臨床工学技士の増員，組織作りを進めていかなければならない。さらには，技術向上のために学会，技術講習会などのへの参加も積極的に行う必要がある。集中治療学会，日本体外技術学会，臨床工学技士会などのへ演題，シンポジウムなどの参加はあるが，今後専門臨床工学技士を発足するにあたり，透析技術認定士，人工呼吸療法認定士，体外循環認定士といった資格を取得するために，学会やセミナー等への参加を促していくべきである。

今後の展望

MEセンターの位置づけ，業務内容を明確なものとし，業務の遂行を迅速なものとしていく。また，今後，心臓カテーテル業務への参加の声も多く，技術提供を考慮していく。

(39) 高次画像診断センター

1. 診療の概要

岐阜県における高度かつ先進的な画像診断の拠点として、高精度な画像診断を日々提供することにより、地域医療連携を推進することを使命としている。多列検出器 CT, 3 テスラ装置を含む高磁場 MRI, PET/CT 装置や SPECT/CT 装置を含む核医学診断装置, 乳房 X 線撮影装置, IVR-CT を用いて, 40 名の診療放射線技師と 17 名の放射線画像診断医 (内 8 名は放射線科診断専門医, 1 名は放射線科専門医) が高水準の専門性をもって検査・読影にあたり, 詳細かつわかりやすい画像診断報告書を日々提供している。

また, 医療連携センターを介して, 近隣病院からの CT 及び MRI 検査, FDG-PET/CT によるがん診療, 画像診断に関するご相談にも対応している。

高次救命治療センターと共同で, 24 時間態勢で緊急搬送患者の IVR 治療に当たっている。

画像診断に関する生涯学習を目的として, 他科医師を含む院内・院外医師及び学生を対象に, インターネットのビデオ会議システムを用いた他病院との合同画像カンファレンスを毎日実施している。

2. 教育施設

- 1) 放射線科専門医総合修練機関
- 2) 日本核医学会専門医教育病院

3. 診療開発

1) 診療名 : 大腸 CT (CT colonography)

診療内容: 多列検出型 CT (MDCT) を用いて, 大腸を観察する手法である。

他病院での導入状況: 国立がんセンター中央病院において, 大腸がん術前精査として導入されたのを皮切りにして全国に普及し, 2012 年の大腸 CT 撮影加算を受けて, 便潜血反応検査の 2 次検査として全国の多くの施設で開始されつつある。

国内的評価: 岐阜大学病院では東海地区の旧国立大学の中でいち早く大腸 CT をルーチン検査として導入しており, 年間 200 例程度の検査を行っている。

国際的評価: 大腸スクリーニングへの応用, 有症状者への大腸検査手段として多くの報告, 検討が行われ, 米国, 欧州では一つの大腸検査モダリティとしてガイドラインが設けられつつある。

4. 専門医・認定医・指導医

兼松雅之: 日本医学放射線学会専門医, 日本血管造影・IVR 学会指導医

浅野隆彦: 日本医学放射線学会専門医, 日本核医学会 PET 核医学認定医, 日本核医学会核医学専門医

加藤博基: 日本医学放射線学会専門医, 日本核医学会 PET 核医学認定医, 日本核医学会核医学専門医, 日本血管造影・IVR 学会指導医

5. 自己評価

評価

平成 20 年度より導入された画像管理加算 2 の算定を満たすべく, CT・MRI・RI 検査の 80%以上を放射線科診断専門医による読影を行っている。

緊急 IVR 検査・治療により, 多くの緊急搬送患者の救命に貢献している。

医療連携センターを介した病診連携による多列 CT 検査, 高磁場 MRI 検査, FDG-PET/CT 検査は, 近隣病院・医院より多くの検査依頼を受けており, 検査当日ないしは翌日に画像診断報告書を配信している。

毎日の他病院との合同画像カンファレンスは非常に好評であり, 院内の学生のみならず, 院外実習中の学生や, 初期臨床研修医などの参加が多数見られる。

現状の問題点及びその対応策

放射線科医が CT・MRI・核医学検査室及び PET/CT 検査室に常駐し, 造影検査のリスクチェックや薬剤投与, 撮像プロトコール指示に当たっており, 医師にしかできない業務の遅滞の要因となっている。

画像管理加算 2 の算定を満たすため, CT・MRI・RI 検査の読影業務に追われている。

緊急 IVR 検査・治療のため, 岐阜県中から救急患者が搬送されているが, 年々増加傾向にあり, IVR 施行医の負担が増大している。

今後の展望

平成 28 年 4 月に、3 テスラ MRI 装置の更新し、より高度な MRI 診断を目指す。今後、さらに技師、看護師、医師の人的確保、新しい装置の導入を図り、高度かつ先進的な画像診断を継続していく所存である。

(40) 新生児集中治療部

1. 診療の概要

- 1) 平成 24 年 4 月に新たに新生児集中治療部として NICU 6 床, GCU 6 床を東 4F 病棟北側に設置するために平成 23 年 1 月に NICU 設置準備室が設置され, 平成 22 年 9 月から平成 23 年 2 月にかけて施設整備を行い, 平成 24 年 4 月から患者受け入れを開始した。
- 2) 在胎 30 週以上の早産児や, 呼吸循環障害, 奇形症候群, 先天代謝異常症, 仮死, 高ビリルビン血症などの病的新生児を受け入れ精査, 加療を行っている。
- 3) 人員の配置および研修
平成 22 年度に准教授 1 人および助教 3 人が配置され, さらに医員 5 人および看護師 25 人を配置することになった。
医師を岐阜県総合医療センター新生児センターに順次派遣し研修をおこなっている。
看護師の研修を岐阜県総合医療センター新生児センターおよび名古屋第一赤十字病院総合周産期母子医療センターにおいておこなっている。
- 4) 新生児, 未熟児医療全般を行う。

2. 教育施設

- 1) 日本周産期・新生児医学会新生児専門医研修施設(補完研修施設)
- 2) 日本小児科学会認定施設
- 3) 日本アレルギー学会認定施設
- 4) 日本人類遺伝学会認定施設
- 5) 日本小児神経学会認定施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 先天性代謝性疾患の診断のための検査の確立と治療への応用に向けた研究
診療内容 : 連続した解析が可能な分光光度計を導入やケトン体測定が可能な簡易血糖測定器を導入して新生児領域でみられる先天代謝異常の病態の解析を行う。またこのような微量検体で測定可能な検査機器を導入することで有用な診断方法の確立を目指す。
他病院での導入状況 : 岐阜県内における病院ではおこなわれていない。
国内的評価 : 研究段階の検査法であるが, 有益な情報が得られることが知られている。患者数が少ないため診断施設が少なく検査手技が難しいことが問題である。
国際的評価 : 報告が少ないが論文発表が行われており, 患者数を蓄積することと新たな診断方法の確立をすることが今後必要であると考えられる。
- 2) 診療名 : CGH アレイなどの検査機器を利用した先天性疾患の診断方法の確立
診療内容 : 現行の染色体検査や遺伝子検査法では診断が困難な遺伝病, 遺伝子病, 染色体異常, 胎芽病, 胎児病, 免疫不全症, 代謝性疾患などについて CGH アレイなどの検査を行い, 原因検索をすすめ早期に診断を行うことで, ひいては新規治療開発につなげることを目指している。
特に, 以下の項目に重点をおいて考えている。
 - (1) 染色体異常症の高精度な診断
 - (2) 先天性神経筋疾患の簡便な診断法の確立にむけた研究
 - (3) 先天性代謝性疾患の簡便な診断法の確立にむけた研究
 - (4) 先天性免疫不全症の原因検索および診断にむけた研究これらの疾患について検査法について検討し高度な診断方法の確立し, ひいては新規治療開発に結びつけることを目指している。
他病院での導入状況 : 岐阜県内における病院ではおこなわれていない。一部の疾患については国内でも行っている医療機関はあるが稀である。
国内的評価 : 研究段階の検査法であるが, 有益な情報が得られることが知られている。様々な疾患への応用が期待されている。検査費用が高価であることが問題である。
国際的評価 : 様々な染色体異常症の診断に利用され論文発表が行われており, 今後様々な疾患に応用されることが期待されている有用な検査法と位置づけられている。
- 3) 診療名 : 新生児の持続脳波モニタリング, 近赤外分光法を用いた脳機能解析や超音波 3D 画像を用いた大脳各部位の容積の変化を使用した神経発達評価法の確立と治療への応用に向けた研

究

診療内容：新生児の持続脳波モニタリングにより今まで発見が困難であった新生児けいれんの検出や周産期ストレスの脳への影響を評価しその後の発達と比較する。また同時に近赤外分光法を用いた脳表面の組織酸素飽和度の変化を評価することで低酸素や、脳虚血の影響を検討する。超音波による血流や 3D 画像を用いた大脳各部位の容積の変化を他の検査とあわせて検討する。

他病院での導入状況：岐阜県総合医療センターで導入が検討されている。

国内的評価：研究段階の検査法であるが、有益な情報が得られることが知られている。検査費用が高価であることが問題である。

国際的評価：新生児の脳機能評価法として利用され論文発表が行われており、研究段階の検査法であるが有用な方法と位置づけられている。

4) 診療名：新生児の自律神経機能評価法の確立と治療への応用に向けた研究

診療内容：現行では新生児の自律神経機能検査法はかぎられておりその評価法も確立されていない。新たな心電図、脳波をもちいた自律神経検査を導入し新生児の睡眠や無呼吸発作などを解析することで新生児の生理や病態の解明を目指している。

他病院での導入状況：岐阜県内における病院ではおこなわれていない。

国内的評価：研究段階の検査法であるが、有益な情報が得られることが知られている。検査の評価が難しいことが問題である。

国際的評価：報告が少ないが論文発表が行われており、今後有用な検査法となることが考えられる。

4. 専門医・認定医・指導医

折居建治：日本小児科学会専門医，新生児蘇生法「専門コース」インストラクター

浅野 勉：日本小児科学会専門医，新生児蘇生法「専門コース」修了

矢野竜一郎：日本産科婦人科学会専門医，母体保護法指定医

伊藤裕子：日本小児科学会専門医

5. 自己評価

評価

平成 24 年 4 月に開設後に診療を開始し、平成 25 年度、平成 26 年度と入院数は増加し、受け入れる新生児についても早産児、低出生体重児の割合が増加してきている。それに伴い新生児特定集中治療室管理料 2 および新生児治療回復室入院管理料の算定率も増加している。開設後も医師の研修および看護師の継続的な研修を実施し、医療および看護の質の向上に務めている。

現状の問題点及びその対応策

岐阜大学の新生児集中治療部と岐阜県総合周産期母子医療センター、岐阜県内の地域周産期母子医療センターとの連携を円滑にすすめるために、各医療機関における機能分担をすすめている。岐阜大学においては、先天性代謝性疾患、先天性遺伝性疾患、染色体異常症、胎芽病、胎児病、先天性免疫不全症などの診断および治療などの高度先進医療をおこなっており受け入れる新生児は増加している。また、周産期医療を担う人材育成のための卒後の初期研修の一環として周産期コースを設け、新生児および産科医師の養成し人材の確保をすすめる取り組みをすすめている。

今後の展望

初期研修での周産期プログラムおよび、後期研修における新生児研修を通じ人材育成をさらにすすめ、岐阜県内における新生児専門医育成をおこなうとともに、新生児医学と関連する高度先進医療の研究、治療開発をすすめる。

(41) 薬剤部

1. 診療の概要

薬剤部では薬物治療における安全確保と専門性を活かしたチーム医療への貢献を基本理念として、調剤・注射剤調製、薬剤管理指導（薬物治療支援）、医薬品情報提供、薬物血中濃度解析（TDM）、院内製剤、薬品管理などの業務はもとより、感染コントロールチーム（ICT）、栄養サポートチーム（NST）、緩和ケアチーム、褥瘡対策チームなどのチーム医療の一員も担っている。さらには、外来化学療法室をはじめ、HIV 外来や移植後外来などの外来診療へも積極的に関わることによって、院内の各部門で薬剤師の専門性を発揮すべく努力している。以下に、薬剤部での業務内容の概略を記す。

1) 調剤業務

- ・コンピュータによるチェックシステム（自動鑑査システム）を本院独自で開発し、過量投与、重複投与、相互作用の防止のみならず、電子カルテを自動的に閲覧することにより患者さんの病名や検査値から処方内容をチェックする鑑査システムを充実し、薬物治療における安全性を確保
- ・錠剤の一回量包装（一包化）機や注射薬の自動払い出し機などの医療機器と自動鑑査システムを連動させることによる業務の効率化

2) 注射剤調製業務

- ・全病棟を対象に抗がん剤、中心静脈栄養剤の無菌調製を実施
- ・入院患者においては、平成 25 年 10 月以降より土日休日を含め全ての抗癌剤無菌調製を実施
- ・外来化学療法室で用いられる抗がん剤の無菌調製を 100%達成した
- ・無菌調製を正確に行うためにコンピュータによる鑑査支援システムを内蔵したクリーンベンチ・安全キャビネットを開発し、薬剤の取り違えと分量ミスを起こさないシステムを構築し、正確で安全な調製を実施

3) 外来がん化学療法業務

- ・外来がん化学療法室にがん専門薬剤師を含む薬剤師 4 名を常駐させ、化学療法を施行される全ての患者さんへの治療説明、服薬説明、副作用についての説明と対処法、副作用のチェックと必要に応じて症状緩和のための医師への処方の提案（電子カルテに記載）などの業務を中心に展開
- ・また、平成 23 年 5 月より医師の診察前に薬剤師が患者さんと面談（診察前面談）し、副作用の発現状況や処方提内容を電子カルテに記載することにより、診療効率の向上に寄与
- ・さらに、お薬手帳を利用して、全患者さんに対して処方内容や副作用等の問題点を記入し、患者さんの薬が市中の薬局で調剤される際に調剤薬局の薬剤師に必要な情報が伝わり、安全性を確保するための薬薬連携への取り組み

4) 薬剤管理指導業務（入院患者への薬物療法支援業務）

- ・入院患者さんに対する服薬指導のみならず、医師・看護師に対する医薬品情報提供、処方提案、疼痛治療や副作用対策など治療の支援にも関与
- ・一部の病棟では薬剤師が常駐し、入院時（持参薬確認）から退院まで一貫して治療に関わることによって薬物療法の適正化を推進

5) 感染対策業務

- ・院内感染コントロールチームに感染制御専門薬剤師が専任で関わり、抗菌薬が処方された全入院患者に対して、抗菌薬の適正使用の推進、薬剤耐性菌の出現防止に努めている

6) 医薬品情報提供業務

- ・インターネット及び院内のイントラネットを駆使して医薬品情報の迅速な収集と提供を実施
- ・医薬品情報や処方情報等のデータベースシステムを独自に開発し、適切な医薬品情報を迅速に提供
- ・医薬品情報提供システム（JUS D.I.）を活用して、持参薬チェックや医薬品情報検索を実施

7) 薬物血中濃度解析業務

- ・検査部で測定された血中濃度測定値に基づいて薬物動態のシミュレーションを行うことによって適正な投与量ならびに投与間隔を算出し、医師に対して投与設計の支援情報を提供
- ・抗 MRSA 薬のバンコマイシンおよびテイコプラニン開始時は、全ての患者において薬剤師が初期投与設計を実施

8) 院内製剤業務

- ・市販されていない特殊院内製剤の調製などを行うことによって、患者さんの治療に貢献

9) 薬品管理業務

- ・処方オーダーリングデータを利用して医薬品の使用状況を把握し、院内薬品在庫の適正化を推進
- ・医薬品バーコードを活用して、医薬品の迅速かつ正確な納品・発注業務を実施

- ・各病棟・外来には病棟責任薬剤師および外来責任薬剤師を配置して在庫薬品の管理を行っており、期限切れや不良在庫の防止に努めている
- ・麻薬・向精神薬については法規に基づいて厳密な管理を実施

薬剤部員数は十分な人数を確保できていないが、院内の各種医療チームに積極的に参画し、チーム内で薬剤師の専門性が発揮できるようになっている。その他に、薬剤師が生体支援センター、医療連携センター、エイズ対策推進センター、がんセンター、レジメン検討部会、医療安全管理室、等の構成員を併任し、院内の多くの部門の業務に関わっている。

一方、対外的な活動としては、日本病院薬剤師会がん薬物療法認定薬剤師研修事業認定研修施設および日本医療薬学会がん専門薬剤師研修施設として研修生の受け入れを行っており、がん専門薬剤師の養成に関与している。また、定期的に部内で研修会を開催し、調剤薬局薬剤師との交流を図るなど薬薬連携も推進している。

2. 教育施設

- 1) 日本医療薬学会認定薬剤師制度研修施設
- 2) 日本医療薬学会がん専門薬剤師研修施設
- 3) 日本医療薬学会薬物療法専門薬剤師研修施設
- 4) 日本病院薬剤師会がん薬物療法認定薬剤師研修事業認定研修施設
- 5) 日本病院薬剤師会 HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成研修施設
- 6) 薬学生実務実習受入施設

3. 診療開発

- 1) 診療名：医薬品認証機能を付加した注射剤無菌調製支援システム

診療内容：コンピュータ、モニター、バーコードリーダー、電子天秤を搭載したクリーンベンチ・安全キャビネットを開発し、注射剤の無菌調製の過程を監視することによって注射剤調製の正確性向上に貢献してきた。また、医薬品への RSS コードの掲示に伴い、RSS コードから医薬品の認証を行う機能を付加し、機能を充実した。

他病院での導入状況：注射剤無菌調製支援システムは、本院薬剤部が医療機器メーカーと共同で開発したシステムであり、すでに全国の病院も導入されている。また、医薬品の認証機能を兼ね備えた新システムもすでに実用化が終了しており、順次、他病院にも導入されている。

国内的評価：2004 年度に開発した旧システムは、注射剤調製の過程をコンピュータでチェックできる唯一のシステムとして医療過誤防止の観点から高く評価されてきた。新たに機能付加した本システムは、医薬品の取り間違いを防止することが可能となり、さらに注射剤調製の正確性ならびに安全性の向上に寄与している。

4. 専門医・認定医・指導医

伊藤善規：日本医療薬学会認定薬剤師・指導薬剤師

岡安伸二：日本医療薬学会認定薬剤師・指導薬剤師，日本糖尿病療養指導士，認定実務実習指導薬剤師

安田浩二：日本医療薬学会認定薬剤師

鈴木昭夫：日本化学療法学会抗菌化学療法認定薬剤師

下田浩欣：日本糖尿病療養指導士

丹羽 隆：日本医療薬学会認定薬剤師・指導薬剤師，日本病院薬剤師会感染制御専門薬剤師，日本化学療法学会抗菌化学療法認定薬剤師，インфекションコントロールドクター

飯原大稔：日本医療薬学会認定薬剤師・指導薬剤師，日本病院薬剤師会がん専門薬剤師，日本医療薬学会がん指導薬剤師

石原正志：日本医療薬学会認定薬剤師・指導薬剤師，日本静脈経腸栄養学会栄養サポートチーム専門薬剤師，日本病院薬剤師会 HIV 感染症薬物療法認定薬剤師，日本病院薬剤師会がん薬物療法認定薬剤師

山田紘嗣：認定実務実習指導薬剤師

西垣美奈子：日本生薬学会漢方薬・生薬認定薬剤師，日本アンチ・ドーピング機構スポーツファーマシスト

林 寛子：日本アンチ・ドーピング機構スポーツファーマシスト

5. 自己評価 評価

現在、薬剤部内の薬剤師定員数は41名であるが、定足数に達していないために薬剤師が病棟に常駐し入院患者の初回面談、入院患者への薬物療法支援業務、退院指導までを実施しているのは一部の病棟に限られている。しかし、常駐病棟においては、薬剤師が有害事象の予防および軽減のための対策に関わることにより、医療安全の向上、患者の quality of life の維持、医師の業務負担軽減につながるとともに、長期入院患者の入院期間短縮による医療経済効果も明らかとなった。今後は、他の病棟においても同様の業務を展開していく。

一方、外来化学療法室へは薬剤師4名常駐体制として戦力強化を図り、抗がん剤調製の完全実施、患者さんへの治療説明や服薬指導、副作用対策支援などにより安全性の確保のみならず、診療効率の向上に寄与し、医療収益の増加に貢献した。また、平成23年10月からは、患者来院後の採血から診察までの待ち時間を利用した「診察前患者面談」を実施し、副作用の発現状況や処方提内容を電子カルテに記載することにより、診療効率の向上に寄与している。現在、診察前面談の実施率は50%程度であるため、今後は全患者の実施を目指すとともに、注射薬抗がん剤だけでなく内服抗がん剤への関与を行っていく。

さらに、感染領域の専門的知識と技能を有する専門薬剤師1名を感染コントロールチームの活動に専従させることにより、抗菌薬の医療費削減、感染により長期化する入院期間の短縮、耐性菌出現率の低下に貢献できた。また、注射剤調製業務においては検査値等のチェックにより、不要な薬剤調製の未然回避により医薬品の節減に貢献できた。これらの取り組みを含め総合的に評価すると、医療の安全性の確保ならびに医療費節減、病院経営に貢献ができたと考える。しかし、全病棟に薬剤師を専任で配置し医療安全体制のさらなる強化と患者満足度の向上のために、薬剤師確保さらには増員の課題は急務である。

現状の問題点及びその対応策

新たな薬剤業務が増加する中で薬剤師の人材不足は、現職員の負担増加に繋がり、時間外勤務の増加や休暇の未消化といった問題が生じ、深刻な問題である。薬剤師の定員割れが生じる主な原因となっているのは、身分、給与、就労時間等の待遇面での問題であるが、これについては1部門としての対応策はない。医療はさらに高度化および専門化してきており、薬物治療における有効性と安全性を確保する上では、専門的知識と技能を有する薬剤師のニーズが益々高まる。したがって、専門薬剤師を目指す薬剤師に対しては、学会や研修会への参加等においては惜しめない支援を行い、質の高い薬剤師の育成と新たな人材確保に取り組む必要がある。

なお、現定員数の41名が充足しても全入院患者への十分な薬物療法支援はできず、薬剤業務の医療経済効果や医療安全への貢献度を客観的指標により評価を行い、病院経営者側へ理解を促すことにより、薬剤師の定員数増加ならびに勤務条件や給与等の処遇改善に取り組む必要がある。

今後の展望

高度化かつ専門化する医療において、安全性を確保することは病院にとって極めて大きな課題である。薬剤師は薬の専門家として院内各部署において活躍することが求められている。今後は全病棟および外来診療科、手術部門等を対象に薬剤師を配置し、薬物療法へのより深い関与を推進するとともに、チーム医療に関与することによって生じる明確なアウトカムを追及することが重要である。その実現のためには、厚生労働省が提案している医療スタッフによる医師業務の役割分担の見直しを検討し、医療の質を確保するために薬剤師による新たな業務の展開について検討する必要がある。また、新規医薬品の開発に携わることは大学病院の使命であり、治験管理センターと密接に連携して、治験の円滑な推進を行うとともに、医療者主導の臨床研究にも積極的に取り組む必要があると考える。

(42) 看護部

1. 看護部の概要

看護部理念 「思いやりのある看護の実践」

- 基本方針
- 1) 患者が置かれている状況から必要な看護に気づきます。
 - 2) 科学的根拠に基づいた安全な看護を提供します。
 - 3) 患者の権利を尊重した看護を提供します。
 - 4) 地域と連携した看護を提供します。
 - 5) 思いやりのある看護を提供できる組織文化を醸成します。

当院は、県下唯一の特定機能病院として、また、高度救命救急センター設置病院、都道府県がん診療・難病医療連携・エイズ治療中核・肝疾患診療連携の4つの拠点病院としての役割を果たしつつ、地域の中核病院として医療を展開している。このような病院に、看護職員約600名を、外来部門(1看護単位)、病棟部門(12看護単位)、中央診療施設等(5看護単位)に配置している。また、保健師助産師看護師法に規定されている「診療の補助と療養上の世話」の看護ケア範囲において、看護部理念・基本方針に基づき、24時間365日看護を提供している。

平成26年度新たな看護部運営方針に「一人ひとりが看護に誇りとやりがい感を持ち、組織コミットメントを高める」「ワーク・ライフ・バランスを図りつつ、専門職として自己成長できる組織をつくる」をかかげている。これらの方針を具現化するために、第一点目は、多様な働き方の看護部職員との協働と、チーム間の協力体制の強化、第二点目は、リーダーおよびメンバーの役割の明確化と実践強化を図った。

看護の質向上のために平成20年入院基本料7対1の取得や、平成24年4月NICU開設、平成25年4月外来化学療法室の増床、光学診療部の施設拡大に向け年々看護師の増員を図っている。また、看護師の増員だけではなく、看護師の発揮能力を高めるために「高度医療に対応できる看護実践者の育成」という教育理念のもと、看護実践の保有能力を向上させるための教育を継続的に実施している。同時に、専門看護師や認定看護師、その他看護に関連する糖尿病療養指導士や呼吸療法士、社会福祉士などの有資格者による教育や看護実践への支援も実施している。

専門看護師や認定看護師の育成は、平成17年より計画的に行っており、平成26年度現在、3領域4名の専門看護師、10領域17名の認定看護師が誕生している。これらの看護師は、看護の質向上のためのリソースナースとして、呼吸療法支援チーム・栄養サポートチーム・感染対策チーム・褥そう対策チーム・緩和医療チームなどの高度な専門職チームのメンバーとして組織横断的に活動している。また、専門看護師・認定看護師間の情報共有や活動を支援するために、平成22年度に看護部内にリソースナース委員会を設置し、その人材育成と活動支援を継続的に実施している。さらに、地域における看護の質向上のために、岐阜県看護協会等の教育活動において一役を担っている。

一方、地域医療連携を推し進めるために、看護部からは、介護支援専門員、社会福祉士等の資格を持った4名の看護師を医療連携センターのセンター員として配置している。入院時から退院、退院後の在宅療養を見据えて退院調整・支援を行い、安心して地域に戻れるよう他施設等との連携を図っている。

2. 教育施設

- 1) 看護学臨地実習施設：実習受け入れ4校(平成26年度実績)
- 2) 認定看護師教育課程実習施設：感染管理分野、救急看護分野

3. 専門看護師・認定看護師・その他

荻谷三月：がん看護専門看護師
坂井田笑子：がん看護専門看護師
河村昌子：家族看護専門看護師
瀧めぐみ：精神看護専門看護師
深尾亜由美：感染管理認定看護師
土屋麻由美：感染管理認定看護師
山本昌代：感染管理認定看護師
垣見克紀：感染管理認定看護師
石川りえ：皮膚・排泄ケア認定看護師
松原仁美：皮膚・排泄ケア認定看護師
古市ふみよ：摂食・嚥下障害看護認定看護師
杉原博子：集中ケア認定看護師

瀧 寛子：集中ケア認定看護師, 3学会合同呼吸療法認定士
山下浩司：救急看護認定看護師
辻 俊行：救急看護認定看護師
高橋 繭：がん化学療法認定看護師
市成陽子：がん化学療法認定看護師
奥田久美子：緩和ケア認定看護師
古田 均：糖尿病看護認定看護師, 日本糖尿病療法指導士
岡本知美：新生児集中ケア認定看護師
吉川昌弥：手術看護認定看護師
日本糖尿病療養指導士 10名
介護支援専門員 8名
3学会合同呼吸療法認定士 12名
社会福祉士 3名
日本禁煙学会認定指導看護師 2名
救急医学会認定 ICLS インストラクター 2名
JPTEC インストラクター 1名
JNTEC インストラクター 1名
AHA-BLS インストラクター 1名
救命救急士 1名
日本インターベンショナルラジオロジー看護師 1名
小児アレルギーエドゥケーター 1名

4. 自己評価

評価

現在、平成26年度からの看護部運営方針に沿って、看護部の組織目標を設定し目標到達に向け看護部一丸となって活動している。一年ごとに目標の到達度評価をし、次年度への看護部運営活動につなげることができている。また、看護師個々のキャリア開発のための体制作り、柔軟な勤務体制と育児支援体制は整った。今後、これらの体制を十分に活用し、評価しつつ、看護師一人ひとりのキャリア開発を推し進めると同時に、ワーク・ライフ・バランスの実現のための新たな課題に取り組んでいく必要がある。

現状の問題点及びその対応策

- 1) 特定機能病院、高度救命救急センター設置病院、4つの拠点病院としての機能を果たすために、高度な医療を提供する必要がある。それに伴って幅広い高度な知識・技術を有する看護師の配置が必要である。対応策として、必要とする領域における専門看護師や認定看護師の育成を図り続けると同時に、これらのリソースナースを効果的に活用することにより、個々の看護師のキャリア開発を行い、看護部全体の看護の質向上を図る。
- 2) 看護業務や新入職者の育成を遂行するにあたって、中堅看護師が大きな役割を担っている。しかし、妊娠・出産・育児をする看護師の増加により、看護職員全体に占める中堅看護師の割合は少なくなっている。このことにより実働する中堅看護師に負担がかかり、疲弊し、離職につながっている。対応策として、まず、第一に看護師の離職防止策を実施、第二に優秀な人材の確保、第三に一人前看護師、熟練看護師数の増加を図る。
- 3) 育児支援制度を利用する看護職員が年々増加の一途をたどっている。しかし、育児期に一度入ると、フルタイム看護師として職場復帰することに目標設定がなく、結果キャリアアップできない看護師がいる。育児支援制度利用期間中の看護師のキャリアアップを図れないことは、管理者育成に悪影響となっている。対応策として、制度利用者のキャリアアップ支援の方策を確立する。
- 4) 患者の超高齢化に伴い、病状の重症化、謔妄、認知・知覚障害などによる日常生活支援が必要な患者割合が年々高くなってきている。加齢による様々な機能低下を伴った高齢者の看護には、危険を予知した患者の見守りや話し相手等の看護業務が多く含まれている。これらの業務は、無資格者でも可能な業務であるため、無資格者による看護補助業務を有効に取り入れた看護の実施体制の整備をしていく。さらに、地域完結型医療、在宅医療推進に向けて、地域の医療機関等との連携を深め、高度急性期病院としての役割を果たすべく、看護の役割について再構築していく。

今後の展望

チーム医療の推進が図られている中で、看護師が専門職として任されている看護サービスのより一層の向上を図るために、人材の確保と定着、仕事と生活の調和に関する支援体制の充実と活用を図っていく。また、看護部門として経営的な視点をより重視した病棟運営、部門のマネジメントを強化し、特定機能病院、各種の拠点病院の役割を果たす地域の中核病院としての病院運営に貢献していく。病院は今後、ベッドコントロール機能、周術期外来機能、情報管理機能等も備えた入退院センターへの移行を検討中であり、そのなかで、看護師の役割を果たし地域との連携を図っていく。

(43) 診療録管理室

1. 診療の概要

業務内容は 1) 電子診療録の管理, 2) 診療録の量的・質的 point 検ならびに記載上の指導, 3) 診療録の閲覧・開示, 4) DPC/PDPS のコーディングである。

組織は現在 7 名の医師と 5 名の診療情報担当者によって構成され, 医師による診療録記載業務ならびに事務組織による医事業務の基礎となる部分を支援・指導する立場となっている。

2. 教育施設

なし

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

豊田 泉：日本救急医学会専門医・指導医, 日本脳神経外科学会専門医, 日本高気圧環境潜水医学会・高気圧酸素治療専門医, 日本航空医療学会・認定指導者

古井辰郎：日本産科婦人科学会認定専門医, 日本生殖医学会認定専門医, 日本体育協会公認スポーツドクター, 母体保護法指定医

西垣和彦：日本内科学会認定医・指導医, 日本循環器学会認定循環器専門医, 日本心血管インターベンション治療学会認定専門医・指導医, 日本不整脈学会認定植込み型除細動器/ペースングによる心不全治療認定医, 日本心臓リハビリテーション学会・心臓リハビリテーション指導士, 日本医師会認定産業医, 日本医師会認定健康スポーツドクター, 厚生労働省認定労働衛生コンサルタント

中山則之：日本脳神経外科学会専門医, 日本核医学会 PET 核医学認定医, 日本がん治療認定医機構がん治療認定

望月清文：日本眼科学会認定眼科専門医・指導医

山内雅裕：日本内科学会認定内科医, 日本糖尿病学会専門医

長瀬 清：麻酔科標榜医, 日本麻酔科学会認定医・指導医

川島崇稔：診療情報担当

福田正哉：診療情報担当

三浦亜耶乃：診療情報管理士

吉田知世：診療情報管理士

平野沙知：診療情報管理士

5. 自己評価

評価

診療録の量的・質的 point 検ならびに記載上の指導については, 入職時の研修会や診療録管理委員会等を通じて point 検並びに記載指導を行っている。この評価の詳細に関しては, 次の項で説明する。

診療録の閲覧・開示については, 年間 80 件以上になっており, 年々増加している。全国の大学病院の中でも多い開示数であり, 病院としての診療録の透明性・情報開示の姿勢の表れと思われる。

DPC/PDPS のコーディング業務は, 全退院患者のコーディングの確認・支援を行っており, コーディングの精度向上に一定の役割を果たしている。

電子診療録の管理については, 医療情報部と連携しながら, 正確な記録が残せるように努力しており, 国内外でも高い評価を受けている。

現状の問題点及びその対応策

当院の電子診療録については, その運用を含め国内外で高い評価を受けているが, いくつかの問題点も抱えている。

近年, 勤務医の過重労働が問題となっており, その軽減策として診療の補助者を置く病院がほとんどであり, 大学病院も例外ではない。しかし, 当院の診療録記載業務に関しては医師に任されている。このことは人員削減を可能とし, 経営効率改善には寄与できるが, 時代の要請を考えると今後は医師のみに頼るシステムの維持は難しい面もあり, 引き続き検討が必要と思われる。

また、当院の病院情報システムは、医師などの医療従事者に対する仕組みとしては先進的であるが、事務業務を遂行する仕組みとしては十分とは言えずまだまだ非効率的である。この診療録の事務業務に不足する部分を如何に補うかも重要な課題である。

さらに診療録に関与するマンパワーの問題もある。システムに依存する部分が多く、慢性的な人員不足となっている。そのため他大学に比しシステム的なチェックは行えているが、人的に目で点検を行うことが困難な状態である。また、診療情報担当者は事務組織間で比較的短期間で異動が行われることがあり、技術・知識の蓄積が難しい現状がある。専門性の高い、資格の必要な事務職の確保は急務である。現在のところ、DPC/PDPSのコーディング業務を含め、個々の技術力向上に努めているところである。今後、業務委託の職員との連携や雇用方法ならびに教育方法などを含め、レベルアップのための方策を検討していく必要があると考えられる。

今後の展望

診療録管理室ならびに診療情報管理士の位置づけを明確化し、業務連携の在り方を見直すことにより、より効率的で質の高い医療を展開できるように支援していく予定である。

(44) 先端医療・臨床研究推進センター

1. 診療の概要

これまで臨床研究は、各講座、分野での自助努力により行われていること、治験については治験管理センターを設置しているものの CRC などの人材が不足していること、また、医師が診療業務等に忙殺され研究時間や論文数が全国的に減少している状況や国が治験・臨床研究基盤強化のための拠点整備を進めていることを踏まえ、本院としても臨床研究を支援する組織が必要と考え、平成 26 年度より従来の治験管理センターを発展的に解消し、先端医療・臨床研究推進センターを立ち上げ、先端医療推進部門、臨床研究推進部門、治験管理部門の 3 つの部門により、臨床研究の適正かつ円滑な実施を支援する体制整備を行っている。

新たな医療技術、先進医療の研究・開発は、大学の使命であり、教育診療とも密接に関連しており、臨床研究の活性化は地域住民の健康維持、地域貢献にも繋がる。

こうした社会からの要請に応えるため、臨床研究推進に向けた新たな研究の取り組みを支え、育成し、その活性化を図るため、関連部門を融合させ、基礎系部門との連携を図れる組織を設置することで研究環境を整備し、新しい医療の開発と実践を通して社会に貢献していく。

2. 教育施設

なし

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

湊口信也：日本内科学会認定内科医・総合内科専門医・研修医指導医、日本循環器学会認定循環器専門医、日本医師会認定産業医、日本高血圧学会専門医、日本心臓リハビリテーション指導士

秋山治彦：日本整形外科学会専門医

吉田和弘：日本外科学会認定医・専門医・指導医、日本消化器外科学会認定医・専門医・指導医、日本内視鏡外科学会技術認定医（消化器・一般外科・胃癌）、日本乳癌学会認定医、日本癌治療学会臨床試験登録医、日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医、日本癌治療認定医・機構暫定教育医、マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定、日本食道学会食道科認定医、食道外科専門医、日本消化管学会胃腸科専門医・認定医

伊藤善規：日本医療薬学会認定薬剤師・指導薬剤師

5. 自己評価

評価

平成 26 年度に立ち上がった当センターでは、臨床研究の活性化及び支援のために、まずは基盤整備として、関係規程や手順書の整備、ホームページの作成に着手、今後実施が予想される医師主導治験実施にかかる体制整備を実施した。これらの整備を進めていくにつれ、CRC の人員不足や治験管理部門のスペース不足が明らかとなり、その対策を講じている。また、県内病院が連携し、迅速で質の高い臨床研究・治験を実施することにより、県民へ先端医療や質の高い医療を提供することを目指し、県内のネットワークを構築することに着手した。

平成 26 年 12 月には、立ち上がったばかりの当センターの今後の活動方針の参考とするため、臨床研究や治験において先進的な活動実績のある外部講師を招いて、講演会を開催した。

立ち上がって 1 年も満たない当センターは目指すべき機能を果たせるとはまだまだ言えない。今後は、質的・量的な人材確保とともに、具体的な研究者への支援を実施していく必要があると考える。

現状の問題点及びその対応策

臨床研究の不正があいついで発覚しており、臨床研究の信頼性を確保するためには、企業主導の治験に準じ、国際標準を踏まえた高いクオリティの臨床研究の実施体制の確立が望まれている。

高いクオリティの臨床研究には、管理体制の構築、適切な教育体制の実施、データ管理体制の確立、そして、モニタリング・監査体制の整備が必要となるが、現在それらすべてに対応するだけの人材が質、量共に不足している。

その対策としては、当院の治験実施数を増やすことにより、外部資金を獲得し、雇用財源を確保するこ

とを目指す。さらに、積極的に研修に参加させると共に、OJT による人材育成に努めることにより、現員のレベルアップを図り、人材不足をカバーしていく。

今後の展望

今後の臨床研究を推進していくためには、平成 27 年 4 月 1 日に施行される「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に則り、モニタリング・監査体制等を早急に整備し、臨床研究における信頼性の確保が最低条件となる。そのための CRC やデータマネージャー等の人材確保が必須である。この人材を確保することにより、信頼性を確保することはもちろんのこと、研究者への手厚い支援が可能となり、より高度で先進的な医療の開発が期待できる。

さらに、現在当センターにはまだ配置ができていないプロジェクトマネージャーを確保し、基礎研究から臨床応用までを一気通貫的に行うことにより最先端医療を開発し、社会に還元するまでの支援を行っていく。

また、取り組み始めた県内のネットワークを完成させ、当院を含む岐阜県内の病院における臨床研究・治験の活性化を図ることを目標とする。

3. 診療スタッフ

(1) 診療要員の配置状況

当院の診療は、大学院医学系研究科に所属する臨床系講座の教育職員、医学部附属病院に所属する教育職員及び医学部附属病院に所属する医員及び医員（研修医）等により行われている。

教育職員については、他大学病院と同様、教授・准教授・講師・助教により診療が行われているが、平成17年度からは診療に携わる助教について、「臨床講師」という呼称を与えた（病院長発令による）。これは、講師相当の経験年数を有する助教に対し、講師と同等の給与を支給することによって、当病院の診療業務に、より意欲を持って携わることが出来るよう措置されたものである。

また、平成17年度から、医員については本院の業績を踏まえ、診療業務に対する評価と人材の確保のため、約40%給与をアップし、医員（研修医）については、民間病院等との給与等の格差を是正するため、諸手当等を含めた給与の見直しを実施した。さらに平成21年度から医員（パート）の雇用を開始し、育児中の女性医師の柔軟な勤務が可能となった。

平成26年度診療スタッフの配置状況については下記のとおりである。

(単位：人)

診療科名	研究科所属 教員	病院所属 教員	寄附講座 教員	医員	医員 (パート)	医員 (研修医)	合計
第1内科	1	4	2	9	8		24
第2内科	3	5	3	16	4		31
第3内科	3	3		5	4		15
神経内科・老年内科	3	3		2			8
総合内科	2	3		1	5		11
第1外科	3	6		4			13
第2外科	3	8	6	2	4		23
産科婦人科	3	3		10	1		17
整形外科	3	6	5	5			19
脳神経外科	3	2		6			11
眼科	3	4		8	2		17
耳鼻咽喉科	3	4		5	3		15
形成外科		2					2
皮膚科	3	4		3	5		15
泌尿器科	2	5		6			13
精神神経科	3	4		7	2		16
小児科	2	4	2	3	2		13
放射線科	3	3		11	4		21
麻酔科疼痛治療科	3	5	2	15			25
歯科口腔外科	3	4		2	4	1	14
検査部	4	1					5
放射線部		2					2
輸血部		2					2
手術部		1					1
医療情報部		1					1
材料部		1					1
病理部	1	2			2		5
光学医療診療部		2					2

診療科名	研究科所属 教員	病院所属 教員	寄附講座 教員	医員	医員 (パート)	医員 (研修医)	合計
高次救命治療センター	3	12		12	1		28
医療連携センター		1					1
生体支援センター	1	5					6
肝疾患診療支援センター		1					1
医師育成推進センター		2				25	27
新生児集中治療部		4			1		5
医療安全管理室		1					1
先端医療・臨床研究 推進センター		1					1
合計	61	121	20	132	52	26	412

(2) 診療支援要員の配置状況

平成 17 年度から診療放射線技師，作業療法士，理学療法士，臨床工学技師及び視能訓練士等を順次増員することにより，診療機能の一層の向上，診療報酬の増額による病院運営の発展に寄与してきた。

また，医師の負担軽減及び患者サービス向上のため，平成 24 年度以降病棟クランクの増員を継続している。

(3) 看護要員の配置状況

平成 16 年度から雇用形態を任期付職員として採用することによって，病院機能に沿った看護職を採用できている。また，本院の基本理念を果たすため，他の医療メンバーと協働しながら患者中心の看護活動を行うことにより，地域社会に貢献することを使命としている。

現在，看護師，助産師及び看護助手を合わせて約 560 人体制で看護業務に当たっているが，任期付職員については適正な評価を経て順次任期のない職員とすることで，より良い人材確保に努めている。

また，平成 21 年度より育児短時間勤務及び育児部分休業の制度が開始し，小学校就学前の子供を持つ職員が正規職員のまま短時間勤務することが可能となったため，出産・育児による離職者が減少し，ワーク・ライフバランスの実現と共に看護職としての継続的なキャリア形成に役立っている。

勤務形態が多様化している現在，夜勤要員を含めたバランス良い人材確保と育成が今後の課題となっている。

4. 先進医療

(1) 先進医療

平成 26 年 12 月 1 日現在

術後のホルモン療法及び S-1 内服投与の併用療法 原発性乳がん (エストロゲン受容体が陽性であって，HER2 が陰性のものに限る。)	H24 年 6 月 1 日
実物大臓器立体モデルによる手術支援	H25 年 3 月 1 日

(2) 高度先進医療技術の開発導入

平成 26 年度に設置された先端医療・臨床研究推進センターにおいて，基礎研究・シーズの発掘から始まり，研究開発・臨床研究・治験などを支援することにより，基礎研究から臨床応用までを一貫通貫的に行うことにより最先端医療を開発し，社会に還元するまでの支援を行っていく体制を整備している。

5. 地域医療の取り組み

(1) 地域医療の確保

地域医療の確保として，①岐阜地域の医師不足を緩和し，適正配置するには勤務医の絶対数が必要であること。②特に，これまで地域の医師養成を担ってきた大学（医局）関連医師プールの確保が必須である

こと。③また、高度先進医療を提供し、その能力を備えた医師を育成する大学病院後期研修医師の確保が必要であること。の3点を踏まえ、医師不足に対する当病院の取組みとして、「岐阜方式による新たな後期研修医師養成システム」（病院長直属医員制度）を導入することにより、医局への入局を敬遠する初期卒後臨床研修修了医を後期研修医として採用することとした。

(2) 難病医療拠点病院の指定

県内の基幹病院及び一般協力病院からの要請に応じて、主に特に高度の医療を要する難病患者の受け入れを行うとともに、基幹病院に対して、難病医療に係る情報の提供及び相談に応じる役割を担う「難病医療拠点病院」として、平成17年9月に岐阜県から指定を受けた。岐阜県は、平成18年度から「岐阜県難病医療連絡協議会事業」を当病院へ業務委託することとした。

平成18年度から県内の医療機関等へ出向き、難病ケアコーディネーター研修会を開催するなど難病担当者のネットワークを構築している。

(3) 都道府県がん診療連携拠点病院の指定

質の高い専門的ながん診療や地域の医療機関と連携した医療の提供等を実施するとともに、専門的ながん医療を行う医師・薬剤師・看護師等を対象とした研修の実施や地域がん診療連携拠点病院等に対する情報提供、症例相談、診療支援を行うなど、県のがん診療機能の中心的役割を担っていくことを目的に、平成18年8月に「都道府県がん診療連携拠点病院」として、厚生労働省から指定を受けており、平成27年4月以降も引き続き指定を継続するための更新手続きを行った。

(4) エイズ中核拠点病院の指定

当院は平成19年3月に岐阜県のエイズ治療拠点病院に指定されており、岐阜県のHIV感染症患者の過半数の診療を行っている。エイズ患者においてはさまざまな合併症を伴うことが少なくなく、多くの診療科の協力が必要であるが、ほぼ全科での受け入れ体制が万全な状態であることは特筆できる。院内にはエイズ対策推進センターも設置されており、診療のみならず専門カウンセラーによるカウンセリング活動や教育研修活動も積極的に行っている。エイズは不治の病ではなくなっており、近年では慢性疾患として捉えられるようになってきているからこそ、精神的ケアなどが特に重要である。

(5) 肝疾患診療連携拠点病院の指定

県内における肝疾患診療ネットワークの中心的な役割を果たすため、平成19年11月に「肝疾患診療連携拠点病院」として、岐阜県から選定を受けた。重症肝炎には循環管理も含めた全身管理を中心に対処している。慢性肝炎や肝硬変には、積極的にインターフェロンを組み合わせた抗ウイルス療法を施行し、近年はC型慢性肝炎・肝硬変に対して直接作用型抗ウイルス剤を用いた経口2剤療法を開始している。また院内には肝疾患診療支援センターが設置されており、相談員が患者・家族等からの相談に対応するほか、肝炎に関する情報提供を行っている。

(6) 岐阜県予防接種センターの機能

岐阜県から、平成20年4月に県内における予防接種センター機能を有する医療機関として本院が選定された。

(7) 三次周産期医療ネットワークの機能

平成20年4月に岐阜県周産期医療ネットワーク事業に参画し、「周産期医療支援病院」として参画している

(8) 臓器提供連絡調整員の配置

県内の病院が日常的に臓器提供に関する情報を集めたり、所属する施設の職員に対して臓器移植についての普及・啓発及び臓器提供があった際に臓器移植コーディネーターと緊密な連携を持って患者家族等を支援するなど、臓器移植に関する事業の推進を図るための役割を担う臓器提供連絡調整員として、岐阜県から本院職員7名が委嘱されている。

6. 卒後臨床研修の状況

卒後臨床研修センターを卒後臨床研修の必修化に伴い、平成14年5月に設置した。

平成20年10月には、規程を一部改正し、後期研修医のキャリア形成支援センターとしての機能を持たせた。

平成25年4月からは、医学部4年生から始まる卒前の臨床実習から卒後初期臨床研修、それに続く専門医に向けての後期研修までをサポートし、より事業を円滑、主導的に運営するため、医師育成推進センターとして開設した。また、同時期にセンターを北診療棟3階に移設し研修環境の整備を行っている。

(1) 初期臨床研修

岐阜大学病院プログラムの特徴

- ・未来型病院であるインテリジェントホスピタル（日本で1番先進的IT病院）において、最新の情報システムの医療活用をマスターさせ、新時代を担う医師を養成する。
- ・医局の枠に縛られず、研修センター所属で「病院全体の研修医」として指導する。将来、基幹学会の認定医・専門医申請に対応できるよう疾患群・手術例・剖検例を研修センターが適正な症例配分を行う。
- ・2年一貫大学病院で研修する「単独コース」と、大学病院と協力型病院の2施設で研修する「たすきがけコース」があり、コース選択は柔軟的である。
- ・高次救命治療センターは、救急指導医と救急専門医を含めた専従医師が約30名おり、診療科の壁を取り払った総合的な高度救急研修が可能である。
- ・多様な研修ニーズに対応できる、大学病院の特色（各種医療センター）を活かしたオーダーメイド研修である（幅広い診療科と豊富な専門プログラムからのメニュー選択）。
- ・東濃や飛騨といった出身地区の研修病院とのつながりを早期につくり地域医療を学ぶため、地域病院と岐阜大学病院とのたすきがけ研修を可能としたプログラム（地域連携プログラム）を作成し、平成27年4月から運用を開始。

平成27年度岐阜大学病院卒後臨床研修プログラム

プログラムの募集定員

プログラム名	募集定員	摘要
岐阜大学病院プログラム	27名	
コース1		岐阜大学医学部附属病院 2年一貫研修
コース2		1年目岐阜大学医学部附属病院 2年目協力型臨床研修病院から選択
コース3		1年目協力型臨床研修病院から選択 2年目岐阜大学医学部附属病院
コース4(外科系重点, 急性期)		岐阜大学医学部附属病院 2年一貫研修
岐阜大学病院 地域連携プログラム	6名	1年目岐阜大学医学部附属病院 2年目協力型臨床研修病院から選択
岐阜大学病院 周産期プログラム	4名	岐阜大学医学部附属病院 2年一貫研修
合計	37名	

研修スケジュール

1. 岐阜大学病院プログラム

1年目の研修ローテーション

内科 6ヶ月	救急 3ヶ月	選択必修 1ヶ月	自由科目 2ヶ月
--------	--------	-------------	-------------

2年目の研修ローテーション

地域医療 1ヶ月	自由科目 11ヶ月
-------------	-----------

2. 岐阜大学病院地域連携プログラム

1年目の研修ローテーション

内科 6ヶ月	救急 3ヶ月	選択必修 1ヶ月	自由科目 2ヶ月
--------	--------	-------------	-------------

2年目の研修ローテーション

地域医療 1ヶ月	自由科目 11ヶ月
-------------	-----------

3. 岐阜大学病院周産期プログラム

1年目の研修ローテーション

内科 6ヶ月	救急 3ヶ月	選択必修 1ヶ月	自由科目 2ヶ月
--------	--------	-------------	-------------

2年目の研修ローテーション

地域医療 1ヶ月	周産期 3ヶ月	小児科 1ヶ月	産婦人科 1ヶ月	自由科目 6ヶ月
-------------	---------	------------	-------------	----------

4. 協力型研修病院（35 病院）

岐阜県総合医療センター※	岐阜県立下呂温泉病院※
岐阜市民病院※	大垣市民病院
医療法人蘇西厚生会松波総合病院※	公立学校共済組合東海中央病院
地方独立行政法人岐阜県立多治見病院※	愛知県がんセンター中央病院
土岐市立総合病院※	大雄会第一病院
高山赤十字病院※	一宮市立市民病院
総合病院中津川市民病院※	医療法人社団志聖会犬山中央病院
岐阜赤十字病院※	岐阜県厚生農業協同組合連合会 岐北厚生病院
岐阜県厚生農業協同組合連合会久美愛厚生病院※	朝日大学歯学部附属村上記念病院
特定医療法人厚生会木沢記念病院※	国民健康保険関ヶ原病院
岐阜県厚生農業協同組合連合会中濃厚生病院※	医療法人香徳会関中央病院
岐阜県厚生農業協同組合連合会東濃厚生病院※	独立行政法人国立病院機構長良医療センター
羽島市民病院※	郡上市市民病院
岐阜県厚生農業協同組合連合会揖斐厚生病院※	岐阜県厚生農業協同組合連合会西美濃厚生病院
総合大雄会病院※	美濃市立美濃病院
独立行政法人国立病院機構豊橋医療センター※	聖路加国際病院
彦根市立病院※	大垣徳洲会病院
杉田玄白記念 公立小浜病院※	

※たすきがけ先として選択できる病院。

5. 協力施設（24 施設）

社団医療法人かなめ会山内ホスピタル	揖斐郡北西部地域医療センター
特定医療法人白鳳会鷺見病院	岩手県立磐井病院
特定医療法人録三会太田病院	岩手県立千厩病院
郡上市地域医療センター国保和良診療所	医療法人沖縄徳洲会 与論徳洲会病院
市立恵那病院	滝谷医院
国民健康保険上矢作病院	てらしまクリニック
国民健康保険坂下病院	下呂市立小坂診療所
下呂市立金山病院	東白川村国保診療所
国民健康保険飛騨市民病院	久々野診療所
隠岐広域連立立隠岐島前病院	荘川診療所
岩砂マタニティ（産科研修の協力施設）	清見診療所
総合在宅医療クリニック	朝日診療所

6. 地域保健（10 施設）

一般社団法人ぎふ総合健診センター	岐阜県関保健所
岐阜県赤十字血液センター	岐阜県中濃保健所
岐阜市保健所	岐阜県恵那保健所
岐阜県飛騨保健所	岐阜県東濃保健所
岐阜県岐阜保健所	岐阜県西濃保健所

(2) 後期臨床研修

初期臨床研修の修了者を対象として、入局あるいは非入局のかたちで専門医療の研修や研究を行う。基本的に、各診療科において「専門医コース」と「大学院コース」が設定されており選択される。前者は学会認定の専門医取得をもって到達目標とする。非入局の場合は病院長直属枠に属することによって後期臨床研修に従事する。

平成 20 年度に、岐阜大学を含む東海 7 大学で応募した「大学病院連携型高度医療人養成推進事業」において以下のプログラムが採択されたので、同年度以降は本プログラムに基づいて後期臨床研修を実施することになった。

東海若手医師キャリア支援プログラム

選定された「東海若手医師キャリア支援プログラム」は、東海地域における 7 大学とその関連病院の医師育成システムを相互に補完しながら、当地域で研修する全ての若手医師にキャリアパスを提示し、最終的に当地域全体に専門医を充足させる取組である。実際には、ホームページ上で 7 大学の総数 300 もの研修プログラムを可視化し、研修者を個々に登録させて専門医療を指導する。

7 大学が中心となってキャリアパスを提示することで、当地域の病院で研修中のすべての研修医が幅広い選択肢を得るのみならず、大学院進学をもキャリアパスに組み込むことができる。また、当地域では 7 大学の関連病院の重複が多く、関連病院において他大学指導医からの指導を受けるなど、相互に研鑽することがより推進される。

7. 外来患者数及び入院患者数

(1) 外来患者数

区分	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度
外来患者数	299,571 人	307,512 人	316,020 人	322,869 人	326,665 人
1 日平均患者数	1,238 人	1,265 人	1,295 人	1,318 人	1,339 人

(2) 入院患者数、病床稼働率及び平均在院日数

過去5年間の入院患者数、病床稼働率及び平均在院日数の推移
(平成23年度まで606床、平成24年度から614床)

区分	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
入院患者数	179,456人	178,731人	181,569人	180,003人	184,618人
病床稼働率	81.1%	80.8%	81.9%	80.3%	82.4%
平均在院日数	14.64日	13.80日	13.32日	12.54日	13.03日

8. 診療用施設・設備等の整備

導入年度	施設・設備等	
21年度	電子カルテ・部門システム更新 検査部設備 内視鏡設備	迅速検査・治療システム 手術部設備
22年度	新生児特定集中治療室施設・設備 移動型デジタル式汎用X線透視診断装置 造血幹細胞移植システム	ヘリポート設備 超音波診断装置
23年度	総合緊急検査システム X線コンピュータ断層撮影装置 血管造影検査・治療システム	デジタルX線テレビシステム 全自動免疫染色システム
24年度	北診療棟施設・設備 白内障・硝子体手術システム 乳房X線撮影システム	リハビリテーション部設備 中央監視制御設備
25年度	光学医療診療部設備 外来化学療法室設備 自動洗浄システム	血管造影検査・治療システム デジタルX線一般撮影システム Aiセンター用CT

9. 病院経営・財務の状況

(1) 病院経営について

第2期中期目標期間(平成22～27年度)では、①地域の中核となる医療人の育成、②地域連携の基盤に立ち、高質な医療を提供、③拠点病院の機能を活用し、EBMを確立するための臨床研究の推進と新規医療技術開発を遂行、④迅速な経営判断に基づく経営基盤の強化と効率的な組織運営の実施を目標に掲げ、県内唯一の大学病院として、難病、肝疾患、エイズ、がんなどの診療拠点病院として、県内の中心的な役割を担い、さらなる高度な医療を提供に向けて取り組んでいる。

その中でも、岐阜医療圏の周産期・小児医療においてさらなる貢献をするため、平成24年4月に新生児集中治療室(NICU)を設置し、地域のニーズや医療安全面を強化するため、平成25年6月には、新たに北診療棟を増築し、1階に光学医療診療部、2階に外来化学療法室を拡充・移設し、3階には人間性豊かな医療人を育成するための医師育成推進センター等を設置した。

加えて、平成23年2月から岐阜県ドクターヘリ基地病院として運用を開始し、平成23年10月には基幹災害医療センターに指定され、県内の救急医療の質の向上に取り組み、平成26年度には脳卒中センター、Aiセンター、臨床研究の推進と新規医療技術開発を強化するため、先端医療・臨床研究推進センターを設置し、地域連携の基盤強化のために医療連携センターの強化に向けた検討を行っているところである。

これらの施策に加えて、手術件数の増加(平成17年度:4,172件、平成25年度:5,178件)や入院患者単価の増加、外来患者数、単価の増加により、医業収益は法人化前の平成15年は102億8千万円から、平成25年度には、183億0千万円と80億2千万円増加した。

今後の課題としては、本院は、新築移転時に多額の資金借入れをしており、毎年度、国立大学財務・経営センターへ返済しているが、平成25年度の返済額は支払利息も含めて35億0千万円となっており、平成26年3月末現在の負債残高は284億8千万円となお多額である。また、移転開院後10年を迎え、移転整備時またはそれ以前に整備した医療機器等が耐用年数を超え、老朽化により更新時期を一斉に迎えて

おり今後膨大は設備投資が必要となる。そのため、大学病院の機能維持のために、その財源確保が喫緊の課題である。

(2) 財務状況

業 務 損 益
(自 平成 25 年 4 月 1 日 至 平成 26 年 3 月 31 日)
【附属病院】 (単位：千円)

業務費用	
業務費	
教育経費	40,157
研究経費	280,458
診療経費	12,943,037
受託研究費	172,504
受託事業費	37,303
人件費	7,879,713
一般管理費	163,569
財務費用	408,211
雑損	389
小 計	21,925,345
業務収益	
運営費交付金収益	3,686,884
附属病院収益	18,289,559
受託研究等収益	173,102
受託事業等収益	37,589
補助金等収益	281,829
寄附金収益	136,769
資産見返負債戻入	426,204
雑益	30,983
小 計	23,065,172
業務損益	1,139,827
土地	4,937,841
建物	21,892,410
構築物	726,414
その他	726,414
帰属資産	35,186,629

※財務諸表より抜粋（記載金額は千円未満を切捨てて表示している）

1,139百万円の利益が生じているが、借入金の償還期間と借入金財源で取得した資産の減価償却期間の違いなどによる要因であり、外部資金を除く病院の収支合計は、△131百万円となる。

10. 各種療法等の届出状況

厚生労働大臣が定める施設基準状況 平成 26 年 12 月 1 日現在

名称	承認年月日
ウイルス疾患指導料（特定疾患治療管理料）	平成 18 年 4 月 1 日
植込型除細動器移行期加算（特定疾患治療管理料 心臓ペースメーカー指導管理料）	平成 26 年 4 月 1 日
高度難聴指導管理料（特定疾患治療管理料）	平成 16 年 5 月 20 日
糖尿病合併症管理料（特定疾患治療管理料）	平成 23 年 10 月 1 日
がん性疼痛緩和指導管理料（特定疾患治療管理料）	平成 22 年 4 月 1 日
がん患者指導管理料 1（特定疾患治療管理料）	平成 26 年 9 月 1 日
がん患者指導管理料 2（特定疾患治療管理料）	平成 26 年 9 月 1 日
がん患者指導管理料 3（特定疾患治療管理料）	平成 26 年 9 月 1 日
移植後患者指導管理料 臓器移植後（特定疾患治療管理料）	平成 24 年 4 月 1 日
移植後患者指導管理料 造血幹細胞移植後（特定疾患治療管理料）	平成 25 年 4 月 1 日
糖尿病透析予防指導管理料（特定疾患治療管理料）	平成 25 年 4 月 1 日
外来リハビリテーション診療料	平成 24 年 4 月 1 日
外来放射線照射診療料	平成 24 年 4 月 1 日
ニコチン依存症管理料	平成 21 年 8 月 1 日
地域連携診療計画管理料	平成 20 年 6 月 1 日
がん治療連携計画策定料	平成 23 年 3 月 1 日
がん治療連携管理料	平成 24 年 4 月 1 日
肝炎インターフェロン治療計画料	平成 22 年 6 月 1 日
薬剤管理指導料	平成 22 年 4 月 1 日
医療機器安全管理料 1	平成 20 年 4 月 1 日
医療機器安全管理料 2	平成 21 年 7 月 1 日
医療機器安全管理料（歯科）	平成 25 年 5 月 1 日
歯科治療総合医療管理料	平成 18 年 4 月 1 日
造血器腫瘍遺伝子検査	平成 20 年 4 月 1 日
HPV 核酸検出及び HPV 核酸検出（簡易ジノタイプ判定）	平成 22 年 6 月 1 日
検体検査管理加算（Ⅰ）	平成 20 年 4 月 1 日
検体検査管理加算（Ⅳ）	平成 22 年 4 月 1 日
心臓カテーテル法による諸検査の血管内視鏡検査加算	平成 20 年 4 月 1 日
植込型心電図検査	平成 22 年 4 月 1 日
時間内歩行試験	平成 24 年 4 月 1 日
ヘッドアップティルト試験	平成 24 年 4 月 1 日
皮下連続式グルコース測定	平成 22 年 4 月 1 日
長期継続頭蓋内脳波検査	平成 16 年 5 月 20 日
神経学的検査	平成 20 年 7 月 1 日
補聴器適合検査	平成 16 年 5 月 20 日
ロービジョン検査判断料	平成 24 年 4 月 1 日
コンタクトレンズ検査料 1	平成 20 年 4 月 1 日
小児食物アレルギー負荷検査	平成 18 年 4 月 1 日
センチネルリンパ節生検（単独法）乳がんに係るものに限る	平成 22 年 4 月 1 日
センチネルリンパ節生検（併用法）乳がんに係るものに限る	平成 22 年 4 月 1 日
CT 透視下気管支鏡検査加算	平成 24 年 4 月 1 日
画像診断管理加算 2	平成 20 年 4 月 1 日
ボジトロン断層撮影	平成 20 年 6 月 1 日
ボジトロン断層・コンピューター断層複合撮影	平成 20 年 6 月 1 日
CT 撮影及び MRI 撮影 1.5 テスラ（第 1MRI）	平成 24 年 4 月 1 日
CT 撮影及び MRI 撮影 3.0 テスラ（第 2MRI）	平成 24 年 4 月 1 日
CT 撮影及び MRI 撮影 1.5 テスラ（第 3MRI）	平成 24 年 4 月 1 日
CT 撮影及び MRI 撮影（64 列以上のマルチスライス CT）1 台目 第 238 号（第 3CT 室）	平成 24 年 4 月 1 日
CT 撮影及び MRI 撮影（16 以上 64 列未満のマルチスライス CT）2 台目（CT シミュレータ室）	平成 24 年 4 月 1 日
CT 撮影及び MRI 撮影（16 以上 64 列未満のマルチスライス CT）3 台目（血管造影室）	平成 24 年 4 月 1 日

名称	承認年月日
CT 撮影及び MRI 撮影（16 以上 64 列未満のマルチスライス CT）4 台目 第 239 号（第 2CT 室）	平成 24 年 4 月 1 日
CT 撮影及び MRI 撮影（64 列以上のマルチスライス CT）5 台目（第 1CT 室）	平成 24 年 4 月 1 日
単純 CT 撮影及び単純 MRI 撮影（マルチスライス CT）	平成 19 年 9 月 1 日
冠動脈 CT 撮影加算（第 1CT 室（64 列）・第 3CT 室（64 列））	平成 21 年 4 月 1 日
外傷全身 CT 加算（第 1CT 室（64 列）・第 3CT 室（64 列））	平成 24 年 3 月 1 日
大腸 CT 撮影加算（第 1CT 室）	平成 24 年 4 月 1 日
大腸 CT 撮影加算（第 2CT 室）	平成 24 年 4 月 1 日
大腸 CT 撮影加算（第 3CT 室）	平成 24 年 4 月 1 日
心臓 MRI 撮影加算	平成 21 年 4 月 1 日
外来化学療法加算 1	平成 20 年 4 月 1 日
無菌製剤処理料	平成 20 年 4 月 1 日
心大血管疾患リハビリテーション料（Ⅰ）	平成 21 年 11 月 1 日
心大血管疾患リハビリテーション料 初期加算	平成 24 年 4 月 1 日
脳血管疾患等リハビリテーション料（Ⅰ）	平成 18 年 9 月 1 日
脳血管疾患等リハビリテーション料 初期加算	平成 24 年 4 月 1 日
運動器リハビリテーション料（Ⅰ）	平成 22 年 4 月 1 日
運動器リハビリテーション料 初期加算	平成 24 年 4 月 1 日
呼吸器リハビリテーション料（Ⅰ）	平成 18 年 4 月 1 日
呼吸器リハビリテーション料 初期加算	平成 24 年 4 月 1 日
がん患者リハビリテーション料	平成 26 年 2 月 1 日
集団コミュニケーション療法料	平成 20 年 4 月 1 日
歯科口腔リハビリテーション料 2	平成 26 年 4 月 1 日
抗精神病特定薬剤治療指導管理料（治療抵抗性統合失調治療指導管理料に限る。）	平成 24 年 4 月 1 日
医療保護入院等診療料	平成 18 年 1 月 1 日
歯科技工加算	平成 22 年 4 月 1 日
悪性黒色腫センチネルリンパ節加算	平成 22 年 4 月 1 日
組織拡張器による再建手術（乳房（再建手術）の場合に限る。）二次再建	平成 25 年 8 月 30 日
骨移植術（軟骨移植術を含む。）（自家培養軟骨移植術に限る。）	平成 25 年 11 月 28 日
脳刺激装置植込術（頭蓋内電極植込術を含む。）及び脳刺激装置交換術、脊髄刺激装置植込術及び脊髄刺激装置交換術	平成 16 年 5 月 20 日
緑内障手術（緑内障治療用インプラント挿入術（プレートのあるもの））	平成 26 年 4 月 1 日
人工内耳植込術	平成 16 年 5 月 20 日
植込型骨導補聴器移植術及び植込型骨導補聴器交換術	平成 25 年 2 月 26 日
内視鏡下鼻・副鼻腔手術 V 型（拡大副鼻腔手術）	平成 26 年 4 月 1 日
上顎骨形成術（骨移動を伴う場合に限る。）（歯科）	平成 24 年 4 月 1 日
下顎骨形成術（骨移動を伴う場合に限る。）（歯科）	平成 24 年 4 月 1 日
乳がんセンチネルリンパ節加算 1（併用法）	平成 22 年 4 月 1 日
乳がんセンチネルリンパ節加算 2（単独法）	平成 22 年 4 月 1 日
ゲル充填人工乳房を用いた乳房再建術（乳房切除後）一次二次的再建及び二次再建	平成 25 年 9 月 30 日
経皮的冠動脈形成術	平成 26 年 4 月 1 日
経皮的冠動脈形成術（特殊カテーテルによるもの）	平成 21 年 9 月 1 日
経皮的冠動脈ステント留置術	平成 26 年 4 月 1 日
経皮的中隔心筋焼灼術	平成 24 年 3 月 1 日
ペースメーカー移植術及びペースメーカー交換術	平成 16 年 5 月 20 日
植込型心電図記録計移植術及び植込型心電図記録計摘出術（植込型心電図記録計移植術）	平成 22 年 4 月 1 日

名称	承認年月日
植込型心電図記録計移植術及び植込型心電図記録計摘出術（植込型心電図記録計摘出術）	平成 22 年 4 月 1 日
両心室ペースメーカー移植術及び両心室ペースメーカー交換術	平成 16 年 12 月 1 日
植込型除細動器移植術及び植込型除細動器交換術	平成 16 年 12 月 1 日
両室ペーシング機能付き植込型除細動器移植術及び両室ペーシング機能付き植込型除細動器交換術	平成 21 年 1 月 1 日
大動脈バルーンパンピング法（IABP 法）	平成 16 年 5 月 20 日
補助人工心臓	平成 16 年 12 月 1 日
経皮的動脈遮断術	平成 22 年 4 月 1 日
ダメージコントロール手術	平成 22 年 4 月 1 日
体外衝撃波胆石破砕術	平成 20 年 4 月 1 日
腹腔鏡下肝切除術	平成 23 年 5 月 1 日
体外衝撃波腎石破砕術	平成 26 年 4 月 1 日
腹腔鏡下膝体尾部腫瘍切除術	平成 24 年 4 月 1 日
早期悪性腫瘍大腸粘膜下層剥離術	平成 24 年 4 月 1 日
体外衝撃波腎・尿管結石破砕術	平成 17 年 4 月 1 日
同種死体腎移植術	平成 20 年 4 月 1 日
生体腎移植術	平成 20 年 4 月 1 日
腹腔鏡下膀胱悪性腫瘍手術	平成 24 年 4 月 1 日
腹腔鏡下子宮悪性腫瘍手術（子宮体がんに限る。）	平成 26 年 4 月 1 日
医科点数表第 2 章第 10 部手術の通則 5 及び 6（歯科点数表第 2 章第 9 部の通則 4 を含む。）に掲げる手術	平成 20 年 4 月 1 日
胃瘻造設術（経皮的内視鏡下胃瘻造設術、腹腔鏡下胃瘻造設術を含む。）（医科点数表第 2 章第 10 部手術の通則の 16 に掲げる手術）	平成 26 年 4 月 1 日

名称	承認年月日
輸血管理料 I	平成 25 年 1 月 1 日
貯血式自己血輸血管理体制加算	平成 26 年 6 月 1 日
自己生体組織接着剤作成術	平成 24 年 4 月 1 日
人工肛門・人工膀胱造設術前処置加算	平成 24 年 4 月 1 日
歯周組織再生誘導手術	平成 20 年 4 月 1 日
広範囲顎骨支持型装置埋入手術	平成 24 年 4 月 1 日
麻酔管理料（I）	平成 16 年 5 月 20 日
麻酔管理料（II）	平成 22 年 4 月 1 日
放射線治療専任加算（第 1 リニアック室・第 2 リニアック室）	平成 16 年 5 月 20 日
高エネルギー放射線治療	平成 16 年 5 月 20 日
強度変調放射線治療（IMRT）（第 1 リニアック室・第 2 リニアック室）	平成 21 年 6 月 1 日
画像誘導放射線治療（IGRT）（第 1 リニアック室）	平成 22 年 4 月 1 日
直線加速器による放射線治療（定位放射線治療）（第 2 リニアック室）	平成 16 年 8 月 1 日
定位放射線治療呼吸性移動対策加算（第 1 リニアック室）	平成 24 年 4 月 1 日
保険医療機関間の連携による病理診断	平成 26 年 8 月 1 日
病理診断管理加算 2	平成 26 年 8 月 1 日
口腔病理診断料 病理診断管理加算 2	平成 26 年 8 月 1 日
クラウン・ブリッジ維持管理料	平成 16 年 5 月 20 日
歯科矯正診断料	平成 22 年 8 月 1 日
顎口腔機能診断料〔顎変形症（顎断等）の手術を必要とするものに限る。〕の手術前後における歯科矯正に係るもの〕	平成 18 年 6 月 1 日

11. エイズ拠点病院としての診療体制

当院は、HIV 感染症・エイズ診療に関しては万全の受け入れ体制をとっている。昭和 63 年に岐阜県としては第一例目となる血友病患者におけるエイズ症例を経験して以来、これまでに約 130 例の診療経験があり、岐阜県の過半数の HIV・エイズ患者の診療を担当している。エイズ診療そのものは、当初は第一内科で、病院移転後の平成 16 年からは第一内科の一部として血液感染症内科にて担当しているが、診療上必要に応じて、他科の全面的な協力のもとあらゆる診療科への受け入れも可能となっている。また、針刺し事故などの感染対策上の観点から生体支援センターとの協力体制も万全である。

HIV 治療は近年急激に進歩しており、エイズは致死的な病気ではなく慢性疾患として捉えられるようになってきている。それゆえ HIV 診療にとって重要なことは、医師による診療のみならず、患者の身体的・精神的ケアであり、看護師による診療サポート、薬剤師による服薬支援、専門カウンセラーによるカウンセリング体制の整備などが求められ、これらの充実化も順調に進んでおり、その体制はほぼ確立した。

一方、エイズ診療に関する総合的医療の提供と当地区の他の医療機関への情報提供、医療従事者教育などを目的に、当院は平成 7 年 5 月に岐阜県のエイズ拠点病院の指定を受け、さらに平成 19 年 3 月には岐阜県エイズ治療中核拠点病院の指定を受けた。これに基づき平成 19 年 12 月に岐阜大学医学部附属病院エイズ対策推進センターが設置され、血液感染症内科中心の診療のみならず、院内外への教育・研修活動、情報提供活動なども進めている。

今後、岐阜県のさらなるエイズ診療における全人的医療体制の整備を目指し、職員への HIV 感染症の正しい知識の浸透と診療技術向上を推進するとともに、ブロック拠点病院あるいは地域の他の医療機関との連携などをより一層充実化させていく予定である。

12. 医療関連（院内）感染対策

医療関連感染対策については、平成 9 年 4 月創設の感染対策室を実行機関として、審議機関である院内感染対策委員会（現：院内感染対策専門委員会）およびその下部組織である MRSA 院内感染対策専門部会（現：院内感染対策委員会）と緊密に連絡をとりながら行ってきた。平成 14 年 4 月からは、同室を栄養管理や褥瘡対策、リスクマネジメントの機能をあわせもつ「栄養管理・感染制御サポートセンター」（院内措置）として発展的に改称し、平成 15 年 4 月からは名称を「生体支援センター（NST/ICT）」と変え、

正式に中央診療部門のひとつとして独立した。なお、平成 20 年 4 月からは予防接種部門（岐阜県から委託された予防接種センターとして）を、さらに平成 20 年 10 月からは呼吸療法支援部門（RST）を増設し、より広範囲の横断的診療支援を行っている。

当センター感染制御部門、すなわち ICT の主な役割として、①院内感染発生状況調査（サーベイランス）およびアウトブレイクの早期発見と対応（最優先業務）、②「感染症管理システム（Medlas-SHIPL）」を用いた電子化サーベイランス、③院内感染対策マニュアルの作成・更新（最新版；平成 26 年 4 月発行「岐阜大学医学部附属病院感染対策マニュアル Ver. 1.10. 2014」）、④抗菌薬適正使用への取り組み（Antimicrobial Stewardship in Gifu University Hospital; ASGUH）、⑤感染症外来、⑥病棟巡回、⑦教育・広報活動、⑧職業感染（針刺し・切創、皮膚・粘膜曝露等）防止対策、⑨学会・研究活動、⑩国公立大学医学部附属病院感染対策協議会への参加（平成 26～28 年度会長は当センター長）、⑪厚生労働省院内感染サーベイランス事業（JANIS）への参加、⑫地域連携強化（岐阜県内の病院感染対策の規格統一および情報交換、病診連携などを目的とした「岐阜院内感染対策検討会（年 2 回）」の企画・実施および岐阜県内の全感染防止対策加算病院での感染対策の質に関するサーベイランスの実施）等、多岐にわたる。またバイオテロ対策や SARS、鳥インフルエンザ、新型インフルエンザ、エボラウイルス病などタイムリーな感染対策の整備も行っている。今後、ますます医療が高度・複雑化し、医療関連感染のリスクが増すとともに、新興・再興感染症への対応がさらに重要化することが予想され、ICT の業務範囲は拡大し続けている。さらに独立行政法人化、包括医療などの背景を考慮すると、感染制御による医療経済効果やリスクマネジメントの追求が病院運営にとっても重要課題であることは従前と変わらない。

現在、ICT の構成員は生体支援センター長（兼任；日本感染症学会感染症指導医・専門医、ICD 制度協議会（日本感染症学会推薦）ICD、日本化学療法学会抗菌化学療法指導医の各資格をもつ）1 名、副センター長（専従；ICD 制度協議会（日本感染症学会推薦）ICD、日本感染症学会感染症専門医、日本化学療法学会抗菌化学療法認定医・指導医、日本エイズ学会認定医・指導医）1 名、ICT 専任教育職員（内科および外科各 1 名）2 名、専従副看護師長（日本看護協会認定感染管理看護師：ICN）1 名、専任薬剤師（ICD および日本化学療法学会抗菌化学療法認定薬剤師の資格をもつ薬剤部主任）1 名、専任検査部細菌検査室臨床検査技師（感染制御認定臨床微生物検査技師（ICMT）の資格を持つ副技師長および臨床検査技師）2 名、兼任事務職員 1 名のほか、支援メンバーとして生命科学総合実験センター嫌気性菌実験分野の教育職員 1 名（ICD）、外科系診療科教育職員 3 名（泌尿器科 ICD、麻酔科 ICD および胸部外科医師）、高次救命治療センター教育職員 1 名（ICD）、医療安全管理室教育職員 1 名、GRM1 名（看護師長）、ICN3 名（看護師）、栄養管理室長 1 名および事務補佐員 1 名の合計 21 名となっている。このうち、センター長および副センター長、専従副看護師長、専任薬剤部主任、専任検査部副技師長および臨床検査技師の 6 名は ICT の中でも実務チームとして、よりきめ細かい活動を担当し、週 1 回のミーティングおよびラウンドを実施している（SICT）。

このように、専任職員を含めた多職種によるチーム医療活動が ICT 活動としても展開されてはいるものの、以下の課題を指摘せざるを得ない。

★現状の問題点及びその対応策

- (1) 平成 21 年 8 月から開始した ASGUH は、ICT 活動あるいは多職種チーム医療の在り方に一石を投じる取り組みである。すなわち、抗菌薬適正使用に専任の臨床薬剤師、感染症専門医が中心となり、全注射用抗菌薬が投与されている症例で、抗菌薬の選択や投与量を確認し、必要に応じて主治医へ介入を行っている。それぞれの職種の専門性を発揮し、各々の職種が直接患者にふれあって診療に参加することが真のチーム医療であると考えられ、現状では、電子カルテ上で患者の状態や治療状況を確認し、電話で主治医へ連絡を行っており、患者の状態を直接確認できていない。今後は、医師や薬剤師が複数人体制で ASGUH に関与するとともに、臨床検査技師（細菌検査技師）をはじめとした各職種の専門性をさらに発揮できる体制や取り組みに発展させる必要がある。また、事務職員についても医療技術職員をサポートしつつ、かつ自身もより専門的知識や経験を獲得するために感染症法などを含めたトレーニングを受けるとともに、ICT 事務専門員としてより長期に専任担当することが望ましいと考えられる。国公立大学附属病院感染対策協議会では、医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、事務職員の 5 職種をすべて 2 名専従にすべきとの提言を出しており、それを目標に体制整備を図らなければならない。
- (2) ICT メンバーの次世代に向けての育成も課題と考えられる。現状では以前からのスタッフが長年にわたって活動しており、それらメンバーに頼っているのが現状である。各職種とも次世代メンバーの教育を院内、あるいは他大学と連携して実施していくことが喫緊の課題でありその体制整備が急務であると考えられる。

- (3) 医療関連感染対策は、ICTメンバーのレベルアップやマニュアルの充実のみでは意味がない。感染制御の質向上に不可欠なものは、現場で実際に感染予防策を遵守すべきひとりひとりの職員のレベルアップを継続的にはかることであり、卒前教育も含めた教育・研修体制を改善する必要がある。手指衛生の遵守状況は以前に比べると全国でも決して恥ずかしくないレベルに近づきつつあるものの、感染予防策についての全体の遵守率については、決して高くない現実を認めざるを得ない。したがって他の領域（医療安全など）も含め病院全体として系統立てられた研修管理体制の確立が望まれる。医療安全管理室と生体支援センター合同での年2回のセミナーはそれぞれ数回ずつ同じメニューで開催（VTR開催も併用）し、ほぼ全職員が聴講できるように配慮したり、また新規・中途採用職員の研修の機会を多数設けたりと現場では工夫しているものの、医療監視や病院機能評価への対応においても事務体制の確立は急務と思われる。
- (4) また、院内での情報伝達体制の向上も必要である。感染制御に大きな力を発揮するのはまずは「情報共有」と言い切ってよい。リンクナースのみではなく、リンクドクター制度の制定を目指すとともに、外部委託業者職員も含めた全ての職員に迅速かつ適切に「情報共有」がなされるような院内情報伝達体制のインフラ整備が望まれる。
- (5) ホームページのリニューアルも滞っており、機能を最大限発揮し、地域連携の面でも展開できることを目指したい。

★今後の展望

各事例に迅速かつ的確に対応しながら、横断的に頼りにされるセンターとして貢献できるべく、精進を続けていきたい。上記問題点を少しずつ解消し、より安定した診療支援業務が展開できるよう、人事・組織的基盤の安定化は継続課題であると考えられる。

13. 医療安全対策

概要

医療安全管理室は、平成14年4月に院内に専任リスクマネージャー（General Risk Manager : GRM）として専従看護師長1名が配置され、院内の医療安全対策の実務機関として発足したが、医療安全への社会的ニーズの高まりや、平成18年の医療法改正を背景に、平成19年10月からは教育職員（医師）1名を専従配置し、一層の体制強化を図ったところである。現在の室員構成は、室長（医療安全担当副病院長；兼任）、副室長（医師；専任）、専従GRM（看護師長）、病棟医長代表、外来医長代表、薬剤部副部長がそれぞれ1名（兼任）、看護師長2名（兼任）、医療支援課長補佐1名（兼任）、専従非常勤事務職員1名の計10名で構成されている。医療安全管理室は、院内組織上、診療科、中央診療部門および事務部門からは独立した病院長直属の機関として位置づけられている。主な業務は、診療科・組織横断的に院内の安全管理を担い、医療事故防止及び医療の安全性向上をめざして調査、分析、対策の立案および実行を行うことである。

医療安全管理委員会は、医療安全管理対策及び医療事故防止に関する重要事項の審議を行う常設の月例開催委員会である。具体的には、医療の安全管理対策の検討及び推進、医療安全管理のための職員研修、医療事故及びインシデント報告に関する情報収集及び分析、医療安全マニュアルの作成等について、医療安全管理室からの報告及び提案について審議する。メンバーは医療安全管理室長（以上安全担当副病院長）を委員長に、医療安全管理室GRM、同副室長、薬剤部長、輸血部長、放射線部長、医療情報部長、医療機器センター長、生体支援センター長（院内感染対策担当）、病棟医長代表、外来医長代表、高次救命治療センター副センター長、手術部副部長、検査部技師長、放射線部技師長、副看護部長、医療支援課長の16名から構成されている。

さらに医療安全対策を全職員に周知徹底するために、院内全診療科、中央診療部門、各病棟に配置された全リスクマネージャー82名が一堂に会するリスクマネージャー会議を年2回定期開催している。

また、平成19年4月に制定された岐阜大学医学部附属病院の憲章・基本戦略では、(4)医療安全基本戦略として、

- ・患者参加型の医療安全対策を推進する。
- ・自ら進んで医療講習会に参加し、医療安全に関する意識と知識を高める。
- ・医療安全向上のための改善策を、積極的・速やかに取り入れ実践する。
- ・積極的にインシデントレポートを提出する。
- ・医療職種間のコミュニケーションを円滑化する。
- ・マニュアルを常に見直し周知徹底を図る。

の6項目の行動目標が定められた。平成19年10月には「岐阜大学医学部附属病院医療安全管理指針」が制定され、病院ホームページ、電子カルテオンラインマニュアルに掲載するなどされ、周知徹底を図っている。

このほか、医療法改正に伴い平成19年4月から医薬品安全管理責任者、医療機器安全管理責任者が置かれることとなり、医薬品については薬事委員会、医療機器については医療機器安全管理委員会で安全管理に関する審議も行うよう体制が整備された。また、医薬品の安全使用のための業務手順書や医療機器安全管理マニュアルも策定された。なお、院内感染対策に関しては従前から生体支援センター長（感染制御部門：ICT長）が責任者と位置付けられ、院内感染対策委員会および院内感染対策専門委員会で審議を行っている。

(1) インシデント報告とその対策

インシデント (incident) は「患者の診療やケアにおいて、本来あるべき姿から外れた行為や事態の発生」を意味し、全ての病院職員には積極的な報告を義務付けている。医療安全管理室ではインシデント報告を受け、必要な事例については追加で聞き取り調査等を実施するとともに、集計して統計処理や分析を行っている。平成25年度の総報告件数は2,074件で、これらのインシデント報告は、医療安全管理室員会議（毎週火曜日開催）でレビューし、重要事例の抽出やインシデントレベルの検討、追加調査の必要性の有無、対応方針等を検討している。また、緊急性の高いものについては医療安全管理室と当該部署のリスクマネージャー間で情報交換の上、安全対策を実施している。医療安全管理室内で検討された対応方針や実際に実施した安全対策については、医療安全管理委員会（月1回開催）において審議され、その結果については科長会（月例）、医局長等合同会議（月例）、リスクマネージャー会議（年2回）等で報告し、また、医療安全トピックス等のニュースを発行して職員に周知徹底している。

日本医療機能評価機構へ報告すべき事例は、基本的には国立大学医学部附属病院医療安全管理協議会で提示されている身体影響レベル3b以上の警鐘事例としており、レベルの最終確定は医療安全管理室で行っている。

病院としての対応が必要な事例については、医療安全管理室から病院長へ速やかに報告して医療事故対策委員会の招集を求め、その後の対応を協議している。平成18年以降、外部委員を加えた医療事故調査委員会を開催する事例は4件であり、その他病院長の指示に基づき院内で拡大医療安全管理室員会議を招集し調査・検討した事例は、平成25年度は11件である。

(2) 医療安全に係る職員教育

医療安全に係る研修は、医療安全管理室が中心となり医療法に定められている年2回の全職員を対象とした研修、新規採用者対象の研修、中途採用者対象の研修等を実施している。全職員対象の研修については、平成20年度からは、生体支援センター感染制御部門との合同で月曜日～金曜日までの5日間同一の研修を連日実施し、さらに非常勤職員を対象とし、DVD等を活用した追加研修も実施して受講率の向上を図っている。研修の内容としては院内で発生したインシデント事例や新たに医療安全管理委員会で取り決めた安全対策の紹介を中心に行っている。また新規・中途採用者対象研修については、総務課が担当し、研修設定日に出席できない場合は必要に応じてDVD研修を実施するなど、全職員の出席を必須として出席率向上を図っている。新採用時のほか、看護部を中心に希望する職員に対して別途実技研修を実施しており、このほか人工呼吸器に関しては生体支援センター呼吸療法支援部門（Respiration Support Team: RST）、その他の医療機器については医療機器センター、医薬品に関しては薬剤部と連携して研修を行っている。

(3) 院内ラウンド

平成20年度から、おおむね月1回の院内ラウンドを実施している。院内ラウンドでは、医療安全上問題のある行為や状態の有無の確認や、救急カートや医療機器の点検状況の確認、インシデント報告内容の確認、事故の恐れのある医療機器の回収、医薬品の管理状況の確認等を実施している。院内ラウンドで収集した情報は、医療安全対策の立案や対策の実施状況の確認に役立てている。

(4) 医療安全マニュアルの策定

平成12年6月に「医療事故等防止マニュアル 患者中心・患者主体の医療を目指して」が発行され、平成16年度からは「医療安全マニュアル」と改題し、毎年度ごとに全体的な見直しを図っている。また「医療安全マニュアル」には医療安全管理委員会で審議決定されたさまざまな安全対策を速やかに反映するため、院内に配布されているバインダー内の内容は随時差し替えて最新の状態を保つようにしている。また、「医療安全マニュアル」は電子カルテオンラインマニュアルとして掲載し、院内すべての医療端末から参照

できる。

(5) ニュース・トピックスの発行

医療安全管理室からは、平成 25 年度は医療安全委員会ニュースを 3 回、医療安全トピックスを 5 回発行した。また、日本医療機能評価機構事故収集事業からの医療安全情報を配布するなどの情報発信を行っている。

(6) 国立大学病院間相互チェック・医療法第 25 条による立入検査

平成 18 年度に一時中断した国立大学附属病院間での「医療安全・質向上のための相互チェック」は、平成 19 年度から再開され、国立大学医学部附属病院医療安全管理協議会で指定された担当大学が当院の医療安全の実施状況を確認している。また、東海北陸厚生局、岐阜県、岐阜市保健所が共同して行う「医療法第 25 条による立入検査」においても、近年は医療安全に関する確認事項が増加しており、これらで指摘を受けた項目の中で、医療安全管理室で対応すべきものについては改善策を検討し、医療安全管理委員会に諮った上で実施している。

自己評価

評価

平成 25 年度から専任の医師 GRM が配置され、従来から問題視されていた医師からのインシデント報告数もここ数年は全職種の 10%前後となってきている。また、院内の急変対応に関しては RRS (Rapid Response System 急変対応システム) の体制構築や、より安全な中心静脈穿刺を目指してのマニュアル整備・実技講習会の開催など、医療安全だけでなく医療の質向上に努めている。

現状の問題点

医療安全の文化が浸透していくにあたり、インシデント報告数や重要な事例の報告数は年々増加しているが、それに伴い GRM の負担も増えているのが現状である。また後任 GRM の育成や各部署のリスクマネージャーの育成も重要な案件である。さらに、平成 27 年度秋から予定されている医療事故調査制度に対する準備も必要である。

今後の展望

定期的に行っている医療安全室員会議、医療安全委員会、全職員対象の研修などの継続的な実施だけでなく、検討内容や講習会の質向上に努めていきたい。また、岐阜県内の他の医療機関と連携し、医療安全に関する情報交換も行っていきたい。

14. 入院基本料・入院時食事療養の状況

(1) 入院基本料

平成 26 年 12 月 1 日現在

入院基本料		区分	病棟数	病床数
総病床数			17	614
特定機能病院入院基本料	一般病棟	7 対 1	10	503
	精神病棟	13 対 1	1	37
救命救急入院料		3	1	6
		4	1	6
特定集中治療室管理料		4	1	6
新生児特定集中治療室管理料		2	1	6
新生児治療回復室入院医療管理料			1	6
小児入院医療管理料		2	1	36

施設基準届け出一覧	承認年月日
(初・再診料の施設基準)	
地域歯科診療支援病院歯科初診料	平成 22 年 4 月 1 日
歯科外来診療環境体制加算	平成 20 年 8 月 1 日
(入院基本料の施設基準)	
特定機能病院入院基本料 (一般病棟) (7 対 1)	平成 20 年 5 月 1 日
特定機能病院入院基本料 (精神病棟) (13 対 1)	平成 23 年 7 月 1 日
(入院基本料等加算の施設基準)	
臨床研修病院入院診療加算 (医科)	平成 17 年 3 月 1 日
臨床研修病院入院診療加算 (歯科)	平成 18 年 4 月 1 日
救急医療管理加算	平成 22 年 5 月 1 日
超急性期脳卒中加算	平成 20 年 4 月 1 日
妊産婦緊急搬送入院加算	平成 20 年 4 月 1 日
診療録管理体制加算 2	平成 17 年 3 月 1 日
急性期看護補助体制加算 (50 対 1)	平成 22 年 5 月 1 日
看護補助加算 2 (精神病棟) (50 対 1)	平成 23 年 7 月 1 日
療養環境加算	平成 16 年 5 月 20 日
重症者等療養環境特別加算	平成 17 年 5 月 1 日
無菌治療室管理加算 1	平成 24 年 4 月 1 日
精神科応急入院施設管理加算	平成 18 年 8 月 1 日
精神科身体合併症管理加算	平成 22 年 4 月 1 日
がん診療連携拠点病院加算	平成 18 年 9 月 1 日
医療安全対策加算 1	平成 20 年 4 月 1 日
感染防止対策加算 1	平成 24 年 4 月 1 日
感染防止対策地域連携加算	平成 24 年 4 月 1 日
患者サポート体制充実加算	平成 24 年 4 月 1 日
褥瘡ハイリスク患者ケア加算	平成 18 年 6 月 1 日
ハイリスク妊娠管理加算	平成 20 年 4 月 1 日
ハイリスク分娩管理加算	平成 21 年 5 月 1 日
退院調整加算 1	平成 24 年 4 月 1 日
救急搬送患者地域連携紹介加算	平成 22 年 8 月 1 日
呼吸ケアチーム加算	平成 22 年 5 月 1 日
データ提出加算 2	平成 24 年 10 月 1 日
地域歯科診療支援病院入院加算	平成 20 年 4 月 1 日
(特定入院料の施設基準)	
救命救急入院料 3 (注 3, 注 5, 注 7 の加算) 経過措置 4 : 1 届出 (H25・1・1)	平成 22 年 7 月 1 日
救命救急入院料 4 (注 3, 注 5, 注 7 の加算)	平成 22 年 4 月 1 日
特定集中治療室管理料 4 (注 2 の加算)	平成 22 年 7 月 1 日
新生児特定集中治療室管理料 2	平成 24 年 5 月 1 日
新生児治療回復室入院医療管理料	平成 24 年 5 月 1 日
小児入院医療管理料 2 (注 2 の加算)	平成 23 年 5 月 1 日

(2) 入院時食事療養

区 分	届出年月日
入院時食事療養（I）	平成 16 年 5 月 20 日

15. 病院ボランティア

病院ボランティアは、患者へのサービス向上のために平成 10 年 4 月から開始し、現在に至っている。

ボランティア活動登録者は平成 26 年 11 月現在 36 名である。ボランティアが行っている活動内容は、院内の案内、患者搬送の介助、車椅子等の清掃・修理、病棟での病衣の配布等スタッフの手伝い、院内図書室の図書整理、各種イベントの手伝い等、その活動は多岐にわたり、病院の中で欠くことのできない存在となっている。

ボランティア間の交流と活動の充実のために、院内にボランティア控室が設置されている。また、リーダー・曜日リーダーを中心としたボランティアとの意見交換会を年に数回行い、院内外の研修にも積極的に参加させ、質的向上を図っている。

16. 院内学級

院内学級は、岐阜県教育委員会及び岐阜市教育委員会との協議を経て、附属病院が岐阜市司町に所在する頃、同京町小学校、同伊奈波中学校の病弱児学級として位置付けられ、平成 8 年 4 月に旧病院の小児病棟の一部を改修し、院内学級「むくのき学級」が開設された。

平成 16 年度、柳戸地区への病院移転を契機に、新病棟 4 階の小児科病棟に小学校教室 35 m²、中学校教室 17 m²、職員室 19 m²の院内学級を新設し、併せて設備の充実を図り、岐阜市教育委員会との間で「岐阜大学医学部附属病院の入院児童・生徒に対する義務教育の実施に関する協定書」が締結され、新たに院内学級が開設された。

この院内学級は、岐阜市立黒野小学校、同岐北中学校の病弱児学級と位置付けられ、平成 26 年 12 月 1 日現在、小学校教室 3 名、中学校教室 1 名の児童・生徒が在籍している。

17. 院内図書室

入院患者やその家族が利用できるよう院内図書室が平成 10 年 4 月に開設された。附属病院が平成 16 年 6 月に新築・移転したことに伴い病棟 9 階に院内図書室が設置されました。病院棟の最上階で景観がよく、患者が読書を楽しむだけでなく、家族等との憩いの場所としても大いに果たしている。

図書は、平成 26 年 12 月現在、約 5,000 冊あり、入院されていた患者等多くの方から寄贈され、絵本、児童図書、コミックス、小説、随筆、評論、辞書等多岐にわたっている。図書の整理は病院ボランティアが行っている。また、医学・看護に関する分野にも関心を持って貰うため、医学関係の専門図書を購入し、院内図書室の充実を図っている。

18. 医薬品の臨床試験の実施方針

医薬品の臨床試験（治験）は、新薬の開発を通じ、医療や医学の発展に大きく貢献しており、特定機能病院として高度な医療を提供する大学病院は、治験を実施する医療機関として重要な役割を担っている。

治験は、平成 9 年 4 月に施行された医薬品の臨床試験の実施に関する基準（GCP）を遵守し、安全性、有効性及び治験データの信頼性が確保して行われる必要がある。当病院においても、このことを十分に認識し、倫理的な配慮のもとに科学的にまた適正に治験を実施しているところである。

当病院においては、治験を円滑に実施するために、平成 14 年 4 月に治験管理室を発展的に解消し、治験管理センターを院内措置で設置、さらに平成 26 年度には治験管理センターを発展的に解消し、臨床研究全般（治験を含む）を支援する先端医療・臨床研究推進センターを設置し、その傘下の治験管理部門において、治験の推進に努めている。

この治験管理部門に配置されている治験コーディネーターは、治験責任医師、治験分担医師、治験協力者等及び被験者とその家族との連絡・調整を担っているが、平成 26 年度に増員し、現在 8 名体制となり、よりきめ細やかな対応が可能な実施体制となった。

ただし、まだ経験年数が浅い治験コーディネーターが多いことから、より一層円滑に治験を実施するためには、研修への参加や OJT による教育を積極的に実施し、一人一人のスキルアップを図る必要がある。

また、治験を実施する医師等への教育も充実させ、治験の意義や実施についての知識を身につけていただくことにより、質の高い治験をより多く実施することが期待される。

今後も継続して、治験の受入れ件数増加に向け、治験受入体制の有効な整備、各診療科へ治験受入の促進、治験依頼者へ治験依頼の促進を図っていく方針である。

また、岐阜県内の治験ネットワークを構築し、当院のみならず岐阜県内の治験を活性化させることにより、地域住民へより早く先端的な医療の提供をすることを目指す。

19. 広報

(1) ホームページ

平成 22 年 6 月に、患者向けに分かりやすいよう、ホームページのコンテンツ、サイトマップ、デザインなどの見直しを行い、リニューアルした。また、平成 23 年 9 月には、英語版のホームページを開設した。

平成 23 年 10 月からコンテンツ・マネジメント・システム (CMS) を本格的に運用し、各診療科等のページ更新をスムーズに行えるようにした。

(2) 広報誌「鶴舟」

附属病院広報誌「鶴舟」は、平成 12 年 3 月 1 日に創刊号を発行し、第 6 号 (平成 16 年 3 月 1 日発行) をもって発行を一時休止していた。新病院の新築移転期間中は、「岐阜大学医学部及び医学部附属病院広報委員会ニュース」を発行し、移転の情報を中心に広報していた。

新病院が開院し運営が軌道に乗り、病院情報を内外に発信することは法人化後の病院運営にとって重要であるため、医学系研究科・医学部情報委員会附属病院部会で検討の結果、附属病院広報誌「鶴舟」第 7 号を平成 18 年 1 月に再刊した。

平成 23 年 4 月に掲載内容の充実を検討し、連載記事などを加えた「鶴舟」第 16 号を発行した。平成 27 年 2 月には、より一般向けに分かりやすく、病院に親しみを感じてもらえる広報誌を目指し、掲載内容・レイアウト等を大幅に見直し、ページ数を増やした「鶴舟」第 23 号を発行した。

VI 自己評価

1. 医科学専攻・再生医科学専攻及び医学部医学科

医学系研究科・医学部の自己評価

岐阜大学大学院医学系研究科長・医学部長 清島 満

教育

2014 年度入試から前期後期とも面接を導入した。これまで当医学部は一般推薦と地域枠推薦入試については個人面接を行っていたが、前後期入試についてはセンター試験成績と個別学力試験の合計点数のみで合否判定をしており、しかも後期試験の得点についてはセンター：個別学力＝1：3 の比率にしていたため、センター試験失敗組みや学力試験に自信のある受験生が殺到した。2011 年の後期試験の志願倍率は 98.8 倍という医学部としては未曾有の数字をたたき出した（資料②）。実際の受験生はその 7 割ぐらいであるが、試験場の確保は困難を極め、名古屋市内の予備校校舎を借りて行っていた。そのため試験監督者は名古屋に行かなければならず、危機管理上このままでは無理と判断し、2012 年からは 40 倍での 2 段階選抜とした。当時、全国的に見て前期後期試験で面接をしていない大学は本学と熊本大学、それに東大と九大の 4 大学のみであった。そして 2012 年度入試直後に熊本大学が面接導入するとの情報を得たため、当医学部も 2014 年度入試からの面接導入に踏み切った。短時間の面接では何も分からないのではないかという意見は常に聞かれるところではあるが、短時間でも稀ではあるが明らかにアドミッションポリシーに合わない受験生を見出すこともある。いずれにしてもなるべく受験の機会を多くの者に与えるため、5 人 1 グループの集団面接方式とした。さまざまな討論用テーマを医学部入試委員会で準備し、テーマの選択は各面接委員グループに任せ、面接委員は受験生同士の討論をさせて評価するというものである。この方式は意外と効果的で、面接委員も評価しやすくと好評であった。個人面接もいいが、集団面接もそれなりのメリットはあると考えている。いずれにしても、今回の面接導入の効果判定は入学後の成績や国家試験の合格率（資料①）なども含めて、しばらく追跡調査をする必要がある。また、定員に関しては 2008 年から地域枠定員分が増加し、10、15、25 名と増え、さらに 2015 年度に 3 名が増えたため、一般推薦 15、地域枠推薦 28、前期入試 32、後期入試 35 で、全部で 110 名定員となった（資料③）。

現在国内の医学部は 2023 年問題に揺れている。すなわち「2023 年以降は医学教育の国際的な認証評価を受けた医学部の出身者以外は（アメリカ・カナダでの）医業の資格を認めない」というもので、2010 年に ECFMG から通告された。すなわち、国際認証を受けていない医学部卒業生は ECFMG を受験できないということである。それに対して日本では 2013 年に日本医学教育認証評議会（Japan Accreditation Council of Medical Education, JACME）が設立され、「グローバルスタンダード」に基づいて、2023 年までに全医学部の認証評価をやっていく予定である。当医学部も MEDC という医学教育のメッカとも言うべきセンターがある以上、なるべく早い時期に認証を受ける必要があり、2015 年度中の受審を予定している。今回の動きは結果として全国の医学部の医学教育を見直すいい機会になったと認識している。それまでは各大学独自のカリキュラムで教育されていたが、これから海外の大学と交流を図っていくうえでは国際認証をクリアしておくことが必要であろう。このような医学教育の改革が行われていようとしているなかで、学生には海外での臨床実習を勧め、毎年 6 年生の 10 名前後が選択臨床実習期間に 1-2 ヶ月の予定で行っている。また、国際交流としては 2014 年秋にパリ第 11 大学と大学間交流協定を締結したが、これは医学部間交流がきっかけとなったものである。また、韓国の忠北大学医学部とは 2012 年から正式に毎年交互に交流することになり、8 月の 1 週間の短い期間ではあるが、講義をしたり、さまざまなテーマについて議論をしたりして交流を深めている。2013 年には大学間協定を結んでいる Kasetsart 大学（タイ）、2014 年には Davao 医科大学（フィリピン）より交換留学生の可能性について意見交換のために教員が来訪した。2015 年 3 月には大学間協定を結んでいる Khon Kaen 大学（タイ）から 4 年生の学生 2 名が 1 ヶ月の臨床実習に来ることになった。ただ、今回の学生受け入れで問題になったのは宿泊施設不足である。これからの国際交流の推進には宿泊施設の整備が不可欠と思われる。

ところで、最近の卒業生はマッチングによって研修病院を 6 年生の秋に決定し、その病院で 2 年間の臨床研修をするため、以前のように卒業すぐに基礎医学の大学院に進学する者はいなくなった（資料④）。これは全国的な傾向であり、多くの大学でその対策に頭を悩ませている。医学部としては学生リサーチマインド涵養のため、テュートリアル選択配属として 10 週間を基礎医学分野で実習体験をさせているが、どの程度の効果があるのか疑問であった。そのため 2012 年末に学生研究員制度を取り入れた。これは部活感覚で基礎医学研究室に出入りしてもらい、しかも学生はそれに応じてある程度の時間給を得られるというものである。現在は年間を通して 30~40 名ほどの学生が基礎医学教室に出入りしており、教員からも好評である。経費の

かかることではあるが、基礎医学研究の道に進む者が一人でも生まれることを期待している。

課外活動では2010年に西医学で総合優勝したことが前号で紹介されているが、その後も2012年には総合準優勝し、2014年は総合4位だったが女子軟庭が全医学で優勝するという目覚ましい活躍ぶりである。軟庭部ではその記念としてポプラの樹を敷地内に植えた。また、2014年秋には医学部と附属病院の柳戸移転10周年記念式典を行い、それに合わせてホームカミングデイを開いた。多くの先輩の方たちの参加があり、好評であった。

研究

研究に関しては常に成果が求められるが、そのためにはやはり研究資金獲得が最大の課題である。学内では毎年政策経費や学長裁量経費、あるいは医学研究科長裁量経費として研究者の支援を行ってきているところであるが、特に後者については諸般の事情からかなりの減額となっており、採択件数も以前の半数以下の10件程度に減少している。科研費のみならず、さまざまな競争的外部資金があり、定期的に研究支援係から情報を発信しており、積極的にこれらに応募していく必要がある。文科省科学研究費は採択件数と補助金はやや増加傾向にあるが、大型研究種目を中心にさらなる獲得に努める必要がある(資料⑤、⑥)。また発明・特許出願・登録件数はこの数年低下傾向にあるが、これはなるべく質の高いものに絞って出願するようになったためと考えられる(資料⑦)。一方、医学部に現在9つの寄付講座が設置され、それぞれの研究活動の維持と発展に役立っている。

研究者は当然研究倫理を備えてなければならない。昨今のSTAP細胞や臨床研究の捏造問題などはまさにこれの欠如がなせる業である。医学部では2013年より各分野から1名をCITI (Collaborative Institutional Training Initiative)-Japanプロジェクトに登録し、2014年4月には大学院入学者は全員登録してe-learningを受講することとした。これは研究者育成のための行動規範教育の標準化を目的としたもので、e-learningによって履修することができる。近いうちに有料化になるとのことであるが、大学院の必修単位としている大学もあるようである。研究業績は論文の質と量で評価されることが多いが、その手段としてIF (impact factor) とCI (citation index) が利用されている。その利用法についてはいろいろ議論のあるところであるが、もっとも分かりやすい指標であることには間違いない。そこで医学部では2013年から前年度にpublishした論文(岐阜大学医学部で行った研究)について各分野からトップの論文を提出してもらい、その中で最高の論文の筆頭著者に対して最高IF賞、最高CI賞として表彰することにした。2014年には藤原久義名誉教授から相当額の寄付金があったので「藤原賞」としてこれら筆頭著者に賞状とともに賞金を渡すこととした。若手研究者のインセンティブ向上に少しは役立つのではないかと考えている。最近の英文論文数はやや増加傾向にあるが、まだまだ10年前のレベルには届いていない(資料⑧)。その他の話題としては2014年にテニョアトラック制教員を初めて採用した。工学部ではすでに4名を採用しており、医学部でも公募のうえ助教を1名採用した。

岐阜大学では現在全学レベルで修士課程の改組を検討しており、これは特に工学部と応用生物学部を中心とした改革であり、医学研究科がこれにどのように関わっていくか、現在検討中である。すなわち医学研究科では再生医科学専攻が前期博士課程を有しており、これを機会に何らかの改革を行うのかWGメンバーの一員として議論に加わっているところである。いずれにしても重要なことは結果として研究activityが上がるなければならないことと、学生が効果的に教育を受けつつ研究できる体制にすることが重要である。また、岐阜大学はキャンパス内に医学部、薬科大学、獣医学科があるのが特色で、この3つの特徴を生かすような研究体制を構築していく構想があり、期待したいところである。

臨床

岐阜大学病院の特色は完全電子カルテ化と高次救命治療センターである。前者はシステムを導入してから10年経過し、2016年1月をめどに新しい医療情報システムにするべく現在準備中である。一方、高次救命治療センターではドクターヘリの活動も目立っており、地域の救急活動に大きな役割を果たしている。また、各疾患の拠点病院として、さらに特定機能病院として地域医療に貢献している(資料⑨、⑩)。

大学病院が行うべきもうひとつ重要なものは臨床研究である。当病院では先端医療・臨床研究推進センターが組織されており、治験を推進していくためには不可欠のものである。現在大型の厚労省科研の治験がそろそろ開始され、そのための有能なスタッフを雇用し、本格稼働する予定である。

社会への貢献

医学部の各分野レベルでその専門性から地方自治体にさまざまな委員ないしは委員長としてその専門的知識、技術をもって社会貢献を果たしてきている。また、市民公開講座を開講して市民一般に対して健康づくりの啓発を行っている。地域医療に関しては地域医療医学センターおよび岐阜県医師育成・確保コンソーシ

アムがその任を担っており、地域枠の医師が 2014 年に第 1 期生が卒業し、これから毎年地域医療へ参画していく医師が増加していき、10 年もすれば彼らの活躍ぶりが実感として伝わってくることを期待したい。

環境設備

現在、医学部敷地内職員駐車場の不足が顕著になってきており、駐車場の拡張も含めて対策が必要である。これは外来駐車場も同様で、毎朝駐車場につながる道路に車の長蛇の列が見られる。一部に製薬メーカーの営業車が利用しているケースもあったので、午前中の医学部棟、病院内の営業活動の自粛も合わせて代表者に協力と改善をお願いした。駐車場は相変わらず混雑しているが、午前中に営業活動をしている MR の人をほとんど見かけなくなった。製薬メーカーとは一定の距離を保ってお互いに平等でかつ良好な関係を維持していきたい。

医学部正面玄関から入った建物内の一角が自転車の駐輪場のように使用されていたが、一斉撤去した。外観も訪問者の印象を左右する重要な要素であるので、職員全員が普段から施設内外の美化に努めるよう心掛けなければならない。

資料①

本学の医師国家試験の合格率（第 88 回～第 108 回）

区 分	新卒者合格率
第 88 回（平成 5 年度）	87.8%
第 89 回（平成 6 年度）	91.9%
第 90 回（平成 7 年度）	94.3%
第 91 回（平成 8 年度）	90.4%
第 92 回（平成 9 年度）	98.8%
第 93 回（平成 10 年度）	94.3%
第 94 回（平成 11 年度）	84.1%
第 95 回（平成 12 年度）	97.4%
第 96 回（平成 13 年度）	100.0%
第 97 回（平成 14 年度）	100.0%
第 98 回（平成 15 年度）	97.4%
第 99 回（平成 16 年度）	90.5%
第 100 回（平成 17 年度）	97.6%
第 101 回（平成 18 年度）	96.3%
第 102 回（平成 19 年度）	97.5%
第 103 回（平成 20 年度）	97.5%
第 104 回（平成 21 年度）	98.7%
第 105 回（平成 22 年度）	96.2%
第 106 回（平成 23 年度）	92.1%
第 107 回（平成 24 年度）	94.2%
第 108 回（平成 25 年度）	97.6%

テュトリアル教育 1 期生

資料②

医学科出願者数（受験者数）

年度	前期日程	後期日程	推薦（一般）	推薦（地域枠）	計
	志願者数 (受験者数) 〔志願倍率〕 《受験倍率》	志願者数 (受験者数) 〔志願倍率〕 《受験倍率》	志願者数 (受験者数) 〔志願倍率〕 《受験倍率》	志願者数 (受験者数) 〔志願倍率〕 《受験倍率》	
H18 年度	895 (835) 〔16.3〕 《15.2》	224 (139) 〔22.4〕 《13.9》	71 (71) 〔4.7〕 《4.7》	—	1190 (1045) 〔14.9〕 《13.1》
H19 年度	583 (573) 〔19.4〕 《19.1》	2760 (2053) 〔78.9〕 《58.7》	37 (36) 〔2.5〕 《2.4》	—	3380 (2662) 〔42.3〕 《33.3》
H20 年度	618 (573) 〔20.6〕 《19.1》	2372 (1841) 〔67.8〕 《52.6》	35 (35) 〔2.3〕 《2.3》	22 (22) 〔2.2〕 《2.2》	3047 (2471) 〔33.9〕 《27.5》
H21 年度	658 (588) 〔21.9〕 《19.6》	2871 (2178) 〔71.8〕 《54.5》	20 (20) 〔1.3〕 《1.3》	28 (28) 〔1.9〕 《1.9》	3577 (2814) 〔35.8〕 《28.1》
H22 年度	652 (566) 〔20.4〕 《17.7》	2748 (2083) 〔78.5〕 《59.5》	21 (21) 〔1.4〕 《1.4》	35 (35) 〔1.4〕 《1.4》	3456 (2705) 〔32.3〕 《25.3》
H23 年度	666 (580) 〔20.8〕 《18.1》	3457 (2497) 〔98.8〕 《71.3》	20 (20) 〔1.3〕 《1.3》	54 (54) 〔2.2〕 《2.2》	4197 (3151) 〔39.2〕 《29.4》
H24 年度	602 (542) 〔18.8〕 《16.9》	2097 (964) 〔59.9〕 《27.5》	26 (26) 〔1.7〕 《1.7》	63 (63) 〔2.5〕 《2.5》	2788 (1595) 〔25.8〕 《14.8》
H25 年度	949 (854) 〔29.7〕 《26.7》	1824 (925) 〔52.1〕 《26.4》	30 (30) 〔2.0〕 《2.0》	61 (61) 〔2.4〕 《2.4》	2864 (1870) 〔26.8〕 《17.5》
H26 年度	415 (366) 〔13.0〕 《11.4》	1054 (234) 〔30.1〕 《6.7》	21 (21) 〔1.4〕 《1.4》	67 (66) 〔2.7〕 《2.6》	1557 (687) 〔14.6〕 《6.4》

資料③

医学部医学科の入学者選抜について

入学定員

	前期日程	後期日程	推薦（一般）	推薦（地域枠）	計
H18年度	55	10	15	—	80
H19年度	30	35	15	—	80
H20年度	30	35	15	10	90
H21年度	30	40	15	15	100
H22年度	32	35	15	25	107
H23年度	32	35	15	25	107
H24年度	32	35	15	25	107+1
H25年度	32	35	15	25	107
H26年度	32	35	15	25	107

(注) H24年度+1は震災特別枠

資料④

医学系研究科入学者の推移（医科学専攻＋再生医科学専攻（後期））

	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
定員（計）	59	59	53	53	53	53	53	53	53	53
入学者（計）	52	55	43	58	34	40	39(3)	30	34	36
充足率（計）	88.1%	93.2%	81.1%	109.4%	64.2%	75.5%	73.6%	56.6%	64.2%	67.9%

資料⑤

外部資金受入状況

	平成 20 年度		平成 21 年度		平成 22 年度		
	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	
寄附金	497	452,893	493	373,813	531	400,193	
受託研究 (治験)	143	87,227	158	114,664	218	83,012	
受託研究 (その他)	25	205,082	41	373,506	38	286,769	
民間等との共同研究	51	77,583	28	33,947	31	30,217	
厚生労働科学研究費補助金	26	140,586	30	150,980	28	137,210	
その他助成金等	39	210,139	30	122,602	28	61,691	
科学研究費補助金	106	228,347	110	229,900	114	207,168	
内訳	新学術領域研究	0	0	1	14,690	1	23,140
	特定領域研究	4	29,100	4	30,500	0	0
	基盤研究 (A)	1	8,060	1	8,970	0	0
	基盤研究 (B)	7	40,950	8	36,920	9	44,460
	基盤研究 (C)	50	81,120	47	69,030	64	91,000
	挑戦萌芽	9	11,400	9	8,100	5	4,900
	若手研究 (A)	1	5,590	1	4,810	0	0
	若手研究 (B)	24	40,820	29	47,580	27	37,416
	若手研究 (スタートアップ)	4	7,007	4	5,850	2	2,782
	特別研究員奨励賞	3	2,800	1	800	2	1,400
奨励研究	3	1,500	5	2,650	4	2,070	
合計	887	1,401,857	890	1,399,412	988	1,206,260	

	平成 23 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		
	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	
寄附金	561	487,120	567	556,234	531	574,416	
受託研究 (治験)	219	97,692	102	67,266	131	74,322	
受託研究 (その他)	38	310,489	30	188,280	45	116,590	
民間等との共同研究	23	27,763	9	5,126	14	15,551	
厚生労働科学研究費補助金	31	118,175	28	87,640	22	69,966	
その他助成金等	19	47,826	0	0	0	0	
科学研究費補助金	111	196,492	123	252,030	131	246,526	
内訳	新学術領域研究	2	25,200	3	31,500	2	27,300
	基盤研究 (A)	0	0	0	0	0	0
	基盤研究 (B)	8	38,200	10	48,600	8	46,000
	基盤研究 (C)	62	86,400	70	116,700	73	109,100
	挑戦萌芽	3	3,600	13	20,300	15	19,600
	若手研究 (A)	0	0	0	0	0	0
	若手研究 (B)	24	32,100	18	31,500	27	38,600
	研究活動スタート支援	5	7,000	5	6,400	3	4,300
	特別研究員奨励賞	2	1,400	0	0	0	0
	奨励研究	5	2,600	4	2,100	3	1,500
合計	1,002	1,482,057	859	1,413,676	874	1,343,771	

資料⑥

競争の大型研究費獲得状況

科学研究費助成事業	多元計算解剖モデルを利用した臓器・組織機能診断支援システム	102,960 千円	平成 26～30 年度	知能イメージ情報分野
厚生労働省科学研究費 (補助金, 委託費)	インターロイキン 1 受容体関連キナーゼ 4 (IRAK4) 欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニング・治療法開発に関する研究	23,400 千円	平成 23～24 年度	小児病態学分野
	ウイルス性肝疾患患者の食事・運動療法とアウトカム評価に関する研究	109,395 千円	平成 23～25 年度	消化器病態学分野
	突発性大腿骨頭壊死症における bFGF 含有ゼラチンハイドロゲルによる壊死骨再生治療の開発	99,450 千円	平成 26 年度	整形外科学分野
	新生児タンデムスクリーニング対象疾患の診療ガイドライン改訂, 診療の質を高めるための研究	29,900 千円	平成 26 年度	小児病態学分野
経済産業省 平成 24 年度 iPS 細胞等自動培養装置開発加速事業	ニプロ社製自動培養装置及び閉鎖系バッグ自動培養装置による iPS 細胞の培養評価	63,706 千円	平成 24 年度	組織・器官形成分野
独立行政法人医薬基盤研究所	自己細胞および細胞バンクを用いた神経・筋肉変性疾患の根本的治療法の開発	41,000 千円	平成 24～26 年度	循環病態学分野
独立行政法人科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業 (さきがけ)	脳内分子変化と電気生理学的・行動学的変化の統合解析	70,915 千円	平成 23～26 年度	高次神経形態学分野

その他の大型研究費

総務省	ICT 街づくり推進事業	101,551 千円	平成 24～25 年度	高次救命治療センター
文部科学省	多職種連携医療教育法の開発と FD の全国展開	61,575 千円	平成 23～26 年度	医学教育開発研究センター
	ヒト疾患モデル動物に立脚した医薬獣連携による革新的創薬研究基盤の構築	43,200 千円	平成 25～27 年度	生命機能分子設計分野
国立大学法人名古屋大学 (文部科学省研究開発施設共用等促進費補助金「橋渡し研究加速ネットワークプログラム」における「持続可能なネットワーク型中部先端医療開発拠点の形成」)	非腫瘍性多能性幹細胞 Muse 細胞を用いた心筋再生による心不全治療法開発に関する研究	45,500 千円	平成 26 年度	循環病態学分野

資料⑦

発明・特許の出願・登録件数

(医学部附属病院, 医学教育開発研究センター, 保健管理センター, 人獣感染防御研究センターを含む)

	発明	特許等出願	特許等登録
平成 16 年度	9	7	0
平成 17 年度	26	20	5
平成 18 年度	24	35	3
平成 19 年度	17	19	2
平成 20 年度	20	32	1
平成 21 年度	8	16	0
平成 22 年度	11	22	4
平成 23 年度	11	5	6
平成 24 年度	13	11	6
平成 25 年度	8	16	3

資料⑧

論文数とインパクトファクター

	著書		総説		原著		小計		合計
	和文	欧文	和文	欧文	和文	欧文	和文	欧文	
平成 15 年	154	12	208	15	247	312 (906.91)	609	339	948
平成 16 年	147	12	215	16	236	283 (911.69)	598	311	909
平成 17 年	143	21	190	18	216	332 (833.43)	549	371	920
平成 18 年	215	17	221	10	152	317 (838.41)	588	344	932
平成 19 年	108	16	206	6	224	331 (703.76)	538	353	891
平成 20 年	224	10	140	16	215	261 (624.72)	579	287	866
平成 21 年	139	15	171	4	240	292 (701.73)	550	311	861
平成 22 年	179	12	172	15	212	256 (650.91)	563	283	846
平成 23 年	194	8	154	16	203	273 (713.75)	551	297	848
平成 24 年	216	12	182	12	248	313 (765.91)	646	337	983
平成 25 年	169	14	158	17	207	331 (729.42)	534	362	896

()内はインパクトファクターを示す。

基本領域学会

日本内科学会（認定医教育病院）	日本泌尿器科学会（専門医教育施設）
日本小児科学会（専門医研修施設）	日本脳神経外科学会（研修プログラム認定施設・基幹施設）
日本皮膚科学会（認定専門医主研修施設）	日本医学放射線学会（専門医総合修練機関）
日本精神神経学会（精神科専門医制度研修施設）	日本麻酔科学会（認定病院）
日本外科学会（外科専門医制度修練施設）	日本病理学会（研修認定施設A）
日本整形外科学会（認定医制度研修施設）	日本臨床検査医学会（認定病院）
日本産科婦人科学会（専門医制度専攻医指導施設）	日本救急医学会（救急科専門医指定施設・指導医指定施設）
日本眼科学会（専門医研修施設）	日本形成外科学会（認定施設）
日本耳鼻咽喉科学会（専門医研修施設）	日本リハビリテーション医学会（研修施設）

Subspecialty領域学会

日本消化器病学会（専門医認定施設）	日本アレルギー学会（教育施設）
日本循環器学会（認定循環器専門医研修施設）	日本感染症学会（専門医研修施設）
日本呼吸器学会（認定施設）	日本老年医学会（認定施設）
日本血液学会（認定血液研修施設）	日本神経学会（専門医教育施設）
日本内分泌学会（認定教育施設）	日本消化器外科学会（専門医修練施設）
日本糖尿病学会（認定教育施設）	呼吸器外科専門医合同委員会（基幹施設）
日本腎臓学会（研修施設）	心臓血管外科専門医認定機構（基幹施設）
日本肝臓学会（認定施設）	日本リウマチ学会（教育施設）

その他

日本小児神経学会（小児神経科専門医制度研修施設）	日本口腔外科学会（認定医制度研修機関）
日本消化器内視鏡学会（認定指導施設）	日本病院薬剤師会（がん薬物療法認定薬剤師研修事業研修施設・HIV感染症薬物療法認定薬剤師養成研究研修施設）
日本気管食道科学会（専門医研修施設（咽喉系））	日本呼吸器内視鏡学会（専門医認定施設）
日本周産期・新生児医学会（暫定研修施設）	日本緩和医療学会（認定研究施設）
日本生殖医学会（専門医制度認定研修施設）	婦人科悪性腫瘍化学療法研究機構（登録参加施設）
日本人類遺伝学会（専門医制度研修施設）	日本脊椎脊髄病学会（クリニカルフェロー施設）
日本超音波医学会（認定超音波専門医研修施設）	日本外傷学会（専門医研修施設）
日本集中治療医学会（専門医研修施設）	日本胆道学会（認定指導医制度指導施設）
日本輸血・細胞治療学会（認定医制度指定施設・認定輸血検査技師制度指定施設）	日本医療薬学会（がん専門薬剤師研修施設・認定薬剤師制度研修施設）
日本臨床薬理学会（認定薬剤師制度研修施設）	日本認知症学会（教育施設）
日本透析医学会（認定医認定施設）	日本心臓血管麻酔学会（専門医認定施設）
日本臨床腫瘍学会（認定研修施設）	日本救急撮影技師認定機構（実地研修施設）
日本総合病院精神医学会（一般病院連携精神専門医研修施設）	日本不整脈学会・日本心電学会（認定不整脈専門医研修施設）
日本ペインクリニック学会（指定研修施設）	日本インターベンショナルラジオロジー学会（専門医修練認定施設）
日本脳卒中学会（専門医認定制度研修教育病院）	日本心臓リハビリテーション学会（心臓リハビリテーション研修施設）
日本臨床細胞学会（認定施設）	日本脳神経血管内治療学会（研修施設）
日本放射線腫瘍学会（認定施設）	日本高血圧学会（専門医認定施設）
日本肝胆膵外科学会（高度技能専門医制度認定修練施設）	日本頭頸部外科学会（頭頸部がん専門医研修施設）
日本乳癌学会（認定施設）	日本航空医療学会（認定施設）
日本手外科学会（認定研修施設）	日本栄養療法推進協議会（NST稼働施設）
日本心血管インターベンション治療学会（研修施設）	日本内分泌外科学会（専門医制度認定施設）
日本婦人科腫瘍学会（専門医制度指定修練施設）	日本環境感染学会（教育施設）
日本核医学会（専門医教育病院）	日本病院総合診療医学会（認定施設）
日本静脈経腸栄養学会（実地修練認定教育施設・NST稼働施設認定）	日本熱傷学会（熱傷専門医認定研修施設）
日本老年精神医学会（専門医制度認定施設）	日本消化管学会（胃腸科指導施設（暫定処置））
日本急性血液浄化学会（認定指定施設）	日本動脈硬化学会（専門医認定教育施設）
日本産科婦人科内視鏡学会（認定研修施設）	日本脈管学会（研修指定施設）
日本がん治療認定医機構（認定研修施設）	日本東洋医学会（指定研修施設）
日本大腸肛門病学会（認定施設）	日本臓器移植ネットワーク（臓器移植施設）
日本食道学会（全国登録認定施設・食道外科専門医認定施設）	
日本骨髄バンク（非血縁者間骨髄採取・移植認定施設）	

資料⑩

医療機関の指定承認状況 Legal Authorization of Medical Services

(1) 病院開設許可(承認)等

法令等の名称	承認年月日
医療法第7条第1項による開設許可(承認)	平成16年5月20日
特定機能病院の名称の使用承認	平成16年5月20日

(2) 基幹災害医療センター

指定等の年月日	平成23年10月26日
---------	-------------

(3) 岐阜県難病医療拠点病院

指定等の年月日	平成17年9月21日
---------	------------

(4) 都道府県がん診療連携拠点病院

指定等の年月日	平成18年8月24日
---------	------------

(5) エイズ治療の中核拠点病院

指定等の年月日	平成19年3月1日
---------	-----------

(6) 肝疾患診療連携拠点病院

指定等の年月日	平成19年11月1日
---------	------------

(7) 法令による医療機関の指定等

法令等の名称	指定等の年月日
健康保険法による(特定承認)保険医療機関	平成16年5月20日
国民健康保険法による(特定承認)療養取扱機関	平成16年5月20日
消防法による救急医療(第3次救急病院)	平成2年5月8日
高度救命救急センター	平成18年2月1日
生活保護法による医療機関	昭和42年6月1日
労働者災害補償保険法による医療機関	昭和53年2月1日
地方公務員災害補償法による医療機関	昭和47年4月1日
原爆医療法 一般医療	昭和43年7月1日
原爆被災者医療法による被爆者認定疾病医療	平成21年7月23日
母子保健法 養育医療	昭和42年6月1日
結核指定医療機関	平成16年5月20日
後期高齢者保険取扱機関	平成20年4月1日
精神保健法による医療機関	昭和42年6月1日
更生医療 戦傷病者特別援護法	昭和42年6月1日
育成医療	昭和19年2月1日
障害者自立支援法 更生医療	昭和19年2月1日
精神通院医療	昭和19年4月1日
応急入院指定病院	平成24年6月1日
岐阜県特定不妊治療費助成事業医療機関	平成16年7月1日

(8) 小児慢性特定疾患治療研究事業

疾患名	指定等の年月日
悪性新生物	昭和48年6月1日
慢性腎疾患	昭和48年6月1日
慢性呼吸器疾患	昭和48年6月1日
慢性心疾患	昭和48年6月1日
内分泌疾患	昭和48年6月1日
膠原病	昭和48年6月1日
糖尿病	昭和48年6月1日
先天性代謝異常	昭和48年6月1日
血友病等血液疾患・免疫疾患	昭和48年6月1日
神経・筋疾患	平成2年4月1日
慢性消化器疾患	平成17年4月1日

(9) 先天性血液凝固因子障害等治療研究事業

疾患名	指定等の年月日
先天性血液凝固因子欠乏症	平成2年3月1日
血液凝固因子製剤に起因するHIV感染症	平成2年3月1日

(10) 特定疾患治療研究事業(国指定)

疾患名	指定等の年月日
ベーチェット病	昭和47年4月1日
多発性硬化症(MS)	昭和48年4月1日
重症筋無力症(MG)	昭和47年4月1日
全身性エリテマトーデス(SLE)	昭和47年4月1日
スモン	昭和47年4月1日
再生不良性貧血	昭和48年4月1日
サルコイドーシス	昭和49年10月1日

筋萎縮性側索硬化症(ALS)	昭和49年10月1日
強皮症	昭和49年10月1日
皮膚筋炎及び多発性筋炎	昭和49年10月1日
特発性血小板減少性紫斑病	昭和49年10月1日
結節性動脈周囲炎	昭和50年10月1日
顕微鏡的多発血管炎	昭和50年10月1日
潰瘍性大腸炎(UC)	昭和50年10月1日
大動脈炎症候群	昭和50年10月1日
ピュルガー病(バージャー病)	昭和50年10月1日
天疱瘡	昭和50年10月1日
脊髄小脳変性症(SCD)	昭和51年10月1日
クローン病	昭和51年10月1日
難治性肝炎のうち劇症肝炎	昭和51年10月1日
悪性関節リウマチ	昭和52年10月1日
パーキンソン病 関連疾患	進行性核上性麻痺 大脳皮質基底核変性症 パーキンソン病
アミロイドーシス	昭和54年10月1日
後縦靭帯骨化症	昭和55年12月1日
ハンチントン病	昭和56年10月1日
モヤモヤ病(ウィリス動脈輪閉塞症)	昭和57年10月1日
ウェグナー肉芽腫症	昭和59年1月1日
特発性拡張型(うっ血型)心筋症	昭和60年1月1日
多系統萎縮症	綿条体黒質変性症 オリブ橋小脳萎縮症 シャイ・ドレーガー症候群
表皮水疱症(接合部型及び栄養障害型)	昭和62年1月1日
膿疱性乾癬	昭和63年1月1日
広範脊柱管狭窄症	昭和64年1月1日
原発性胆汁性肝硬変(PBC)	平成2年1月1日
重症急性膵炎	平成3年1月1日
特発性大腿骨頭壊死症	平成4年1月1日
混合性結合組織病(MCTD)	平成5年1月1日
原発性免疫不全症候群	平成6年1月1日
特発性間質性肺炎	平成7年1月1日
網膜色素変性症	平成8年1月1日
プリオン病	クロイツフェルト・ヤコブ病 ゲルストマン・ストロイスラー・シャインカー病 致死性家族性不眠症
肺動脈性肺高血圧症	平成9年1月1日
神経線維腫症Ⅰ型	平成14年6月1日
神経線維腫症Ⅱ型	平成14年6月1日
亜急性硬化性全脳炎(SSPE)	平成10年12月1日
バッド・キアリ症候群	平成10年12月1日
慢性血栓性肺高血圧症	平成10年12月1日
ライソゾーム病	ライソゾーム病(ファブリー病を除く) ライソゾーム病(ファブリー病)
副腎白質ジストロフィー	平成13年5月1日
家族性高コレステロール血症(ホモ接合体)	平成12年4月1日
脊髄性筋萎縮症	平成21年10月1日
球脊髄性筋萎縮症	平成21年10月1日
慢性炎症性脱髄性多発神経炎	平成21年10月1日
肥大型心筋症	平成21年10月1日
拘束型心筋症	平成21年10月1日
ミトコンドリア病	平成21年10月1日
リンパ脈管筋腫症(LAM)	平成21年10月1日
重症多形滲出性紅斑(急性期)	平成21年10月1日
黄色靭帯骨化症	平成21年10月1日
間脳下垂体機能障害	PRL分泌異常症 ゴナドトロピン分泌異常症 ADH分泌異常症 下垂体性TSH分泌異常症 クッシング病 先端巨大症 下垂体機能低下症

(11) 看護体系

区	分	指定等の年月日
特定機能病院入院基本料		平成17年6月1日
特定機能病院 入院基本料	一般病棟 7:1 精神病棟 13:1	平成20年5月1日 平成23年7月1日
急性期看護補助体制加算	50:1	平成22年5月1日
看護補助加算2(精神病棟)	50:1	平成23年7月1日

(12) 厚生労働大臣の定める施設基準状況

区 分	算定開始年月日
(初・再診料の施設基準)	
地域歯科診療支援病院歯科初診料	平成22年4月1日
歯科外来診療環境体制加算	平成20年8月1日
(入院基本料の施設基準)	
特定機能病院入院基本料(一般病棟)(7対1)	平成20年5月1日
特定機能病院入院基本料(精神病棟)(13対1)	平成23年7月1日
(入院基本料加算の施設基準)	
臨床研修病院入院診療加算(医科)	平成17年3月1日
臨床研修病院入院診療加算(歯科)	平成18年4月1日
救急医療管理加算	平成22年5月1日
超急性期脳卒中加算	平成20年4月1日
妊産婦緊急搬送入院加算	平成20年4月1日
診療録管理体制加算2	平成17年3月1日
急性期看護補助体制加算(50対1)	平成22年5月1日
看護補助加算2(精神病棟)(50対1)	平成23年7月1日
療養環境加算	平成16年5月20日
重症者等療養環境特別加算	平成17年5月1日
無菌治療室管理加算1	平成24年4月1日
精神科応急入院施設管理加算	平成18年8月1日
精神科身体合併症管理加算	平成22年4月1日
がん診療連携拠点病院加算	平成18年9月1日
医療安全対策加算1	平成20年4月1日
感染防止対策加算1	平成24年4月1日
感染防止対策地域連携加算	平成24年4月1日
患者サポート体制充実加算	平成24年4月1日
褥瘡ハイリスク患者ケア加算	平成18年6月1日
ハイリスク妊娠管理加算	平成20年4月1日
ハイリスク分娩管理加算	平成21年5月1日
退院調整加算1	平成22年4月1日
救命搬送患者地域連携紹介加算	平成22年8月1日
呼吸ケアチーム加算	平成22年5月1日
データ提出加算2	平成24年10月1日
地域歯科診療支援病院入院加算	平成20年4月1日
(特定入院料の施設基準)	
救命救急入院料3(注3、注5、注7の加算)経過措置4:1届出(H25.1.1)	平成22年7月1日
救命救急入院料4(注3、注5、注7の加算)	平成22年4月1日
特定集中治療室管理料4(注2の加算)	平成22年7月1日
新生児特定集中治療室管理料2	平成24年5月1日
新生児治療回復室入院医療管理料	平成24年5月1日
小児入院医療管理料2(注2の加算)	平成23年5月1日
入院時食事療養(Ⅰ)	平成16年5月20日
ウィルス疾患指導料(特定疾患治療管理料)	平成18年4月1日
植込型除細動器移行加算(特定疾患治療管理料 心臓ペースメーカー指導管理料)	平成26年4月1日
高度難聴指導管理料(特定疾患治療管理料)	平成16年5月20日
糖尿病合併症管理料(特定疾患治療管理料)	平成23年10月1日
がん性疼痛緩和指導管理料(特定疾患治療管理料)	平成22年4月1日
移植後患者指導管理料 臓器移植後(特定疾患治療管理料)	平成24年4月1日
移植後患者指導管理料 造血幹細胞移植後(特定疾患治療管理料)	平成25年4月1日
糖尿病透析予防指導管理料(特定疾患治療管理料)	平成25年4月1日
外来リハビリテーション診療料	平成24年4月1日
外来放射線照射診療料	平成24年4月1日
二コチン依存症管理料	平成21年8月1日
地域連携診療計画管理料	平成20年6月1日
がん治療連携計画策定料	平成23年3月1日
がん治療連携管理料	平成24年4月1日
肝炎インターフェロン治療計画料	平成22年6月1日
薬剤管理指導料	平成22年4月1日
医療機器安全管理料1	平成20年4月1日
医療機器安全管理料2	平成21年7月1日
医療機器安全管理料(歯科)	平成25年5月1日
歯科治療総合医療管理料	平成18年4月1日
造血器腫瘍遺伝子検査	平成20年4月1日
HPV核酸検出及びHPV核酸検出(簡易ジュノタイプ判定) 注意: HPV核酸検出(簡易ジュノタイプ判定)は未届	平成22年6月1日
検体検査管理加算(Ⅰ)	平成20年4月1日
検体検査管理加算(Ⅳ)	平成22年4月1日
心臓カテーテル法による諸検査の血管内視鏡検査加算	平成20年4月1日
植込型心電図検査	平成22年4月1日
時間内歩行試験	平成24年4月1日
ヘッドアップティルト試験	平成24年4月1日
人工関節	平成20年4月1日
皮下連続式グルコース測定	平成22年4月1日
長期継続頭蓋内脳液検査	平成16年5月20日
神経学的検査	平成20年7月1日
補聴器適合検査	平成16年5月20日
ロービジョン検査判断料	平成24年4月1日
コンタクトレンズ検査料1	平成20年4月1日
小児食物アレルギー負荷検査	平成18年4月1日
センチネルリンパ節生検(単独法)乳がんに係るものに限る	平成22年4月1日
センチネルリンパ節生検(併用法) //	平成22年4月1日
C T透視下気管支鏡検査加算	平成24年4月1日
画像診断管理加算2	平成20年4月1日
ボジトロン断層撮影	平成20年6月1日
ボジトロン断層・コンピューター断層複合撮影	平成20年6月1日
C T撮影及びMR I 撮影 1.5テスラ(第1MR I)	平成24年4月1日
MR I 対応植込み型デバイス患者のMR I 検査 [日本メドトロニック株式会社](第1MR I)	平成25年6月3日
C T撮影及びMR I 撮影 3.0テスラ(第2MR I)	平成24年4月1日
C T撮影及びMR I 撮影 1.5テスラ(第3MR I)	平成24年4月1日
MR I 対応植込み型デバイス患者のMR I 検査 [日本メドトロニック株式会社](第3MR I)	平成25年6月3日
C T撮影及びMR I 撮影(64列以上のマルチスライスCT)1台目 第238号(第3CT室)	平成24年4月1日
// (16以上64列未満のマルチスライスCT)2台目(CTシミュレータ室)	平成24年4月1日
// (16以上64列未満のマルチスライスCT)3台目(血管造影室)	平成24年4月1日
// (16以上64列未満のマルチスライスCT)4台目 第239号(第2CT室)	平成24年4月1日
// (64列以上のマルチスライスCT)5台目(第1CT室)	平成24年4月1日
単純C T撮影及び単純MR I 撮影(マルチスライスCT)	平成19年9月1日

冠動脈C T撮影加算(第1CT室(64列)・第3CT室(64列))	平成21年4月1日
外傷全身C T加算(第1CT室(64列)・第3CT室(64列))	平成24年3月1日
大腸C T撮影加算(第1CT室)	平成24年4月1日
大腸C T撮影加算(第2CT室)	平成24年4月1日
大腸C T撮影加算(第3CT室)	平成24年4月1日
心臓MR I 撮影加算	平成21年4月1日
外来化学療法加算1	平成20年4月1日
無菌製剤処理科	平成20年4月1日
心大血管疾患リハビリテーション料(Ⅰ)	平成21年11月1日
心大血管疾患リハビリテーション料 初期加算	平成24年4月1日
脳血管疾患等リハビリテーション料(Ⅰ)	平成18年9月1日
脳血管疾患等リハビリテーション料 初期加算	平成24年4月1日
運動器リハビリテーション料(Ⅰ)	平成22年4月1日
運動器リハビリテーション料 初期加算	平成24年4月1日
呼吸器リハビリテーション料(Ⅰ)	平成18年4月1日
呼吸器リハビリテーション料 初期加算	平成24年4月1日
がん患者リハビリテーション料	平成26年2月1日
集団コミュニケーション療法料	平成20年4月1日
歯科口腔リハビリテーション料2	平成26年4月1日
抗精神病特定薬剤治療指導管理料(治療抵抗性統合失調治療指導管理料に限る。)	平成24年4月1日
医療保護入院等診療料	平成18年1月1日
歯科技工加算	平成22年4月1日
悪性黒色腫センチネルリンパ節加算	平成22年4月1日
組織拡張器による再建手術(乳房(再建手術)の場合に限る。)	平成25年9月30日
組織拡張器による再建手術(乳房(再建手術)の場合に限る。)	平成25年8月30日
骨移植手術(軟骨移植術を含む。)(自家培養軟骨移植術に限る。)	平成25年11月28日
脳刺激装置植込術(頭蓋内電極植込術を含む。)	平成16年5月20日
脊髄刺激装置植込術及び脊髄刺激装置交換術	平成16年5月20日
緑内障手術(緑内障治療用インプラント挿入術(プレートのあるもの))	平成26年4月1日
人工内耳植込術	平成16年5月20日
植込型骨導補聴器移植手術及び植込型骨導補聴器交換術	平成25年2月26日
内視鏡下鼻・副鼻腔手術V型(拡大副鼻腔手術)	平成26年4月1日
上顎骨形成術(骨移動を伴う場合に限る。)(歯科)	平成24年4月1日
下顎骨形成術(骨移動を伴う場合に限る。)(歯科)	平成24年4月1日
乳がんセンチネルリンパ節加算1(併用法)	平成22年4月1日
乳がんセンチネルリンパ節加算2(単独法)	平成22年4月1日
ゲル充填人工乳房を用いた乳房再建術(乳房切除後) 一次一期再建	平成25年9月30日
ゲル充填人工乳房を用いた乳房再建術(乳房切除後) 一次二期再建及び二次再建	平成25年9月30日
経皮的冠動脈形成術	平成26年4月1日
経皮的冠動脈形成術(特殊カテーテルによるもの)	平成21年9月1日
経皮的冠動脈ステント留置術	平成26年4月1日
経皮的隔中隔筋焼灼術	平成24年3月1日
ベースメーカー移植術及びベースメーカー交換術	平成16年5月20日
植込型心電図記録計移植術及び植込型心電図記録計抽出術(植込型心電図記録計移植術)	平成22年4月1日
植込型心電図記録計移植術及び植込型心電図記録計抽出術(植込型心電図記録計抽出術)	平成22年4月1日
両心室ペースメーカー移植術及び両心室ペースメーカー交換術	平成16年12月1日
植込型除細動器移植術及び植込型除細動器交換術	平成16年12月1日
両室ペースメーカー機能付き植込型除細動器移植術及び両室ペースメーカー機能付き植込型除細動器交換術	平成21年1月1日
大動脈バルーンパンピング法(ⅠA B P法)	平成16年5月20日
補助人工心臓	平成16年12月1日
経皮的動脈造断術	平成22年4月1日
ダメージコントロール手術	平成22年4月1日
体外衝撃波胆石破砕術	平成20年4月1日
腹腔鏡下肝切除術	平成23年5月1日
体外衝撃波砕石破砕術	平成26年4月1日
腹腔鏡下痔体尾部腫瘍切除術	平成24年4月1日
早期悪性腫瘍大腸粘膜下層剥離術	平成24年4月1日
体外衝撃波腎・尿管結石破砕術	平成17年4月1日
同種死体腎移植術	平成20年4月1日
生体腎移植術	平成20年4月1日
腹腔鏡下膀胱悪性腫瘍手術	平成24年4月1日
腹腔鏡下子宮悪性腫瘍手術(子宮体がんに限る。)	平成26年4月1日
腹点点数第2章第10部手術の通則5及び6 (歯科点数表第2章第9部の通則4を含む。)	平成20年4月1日
胃瘻造設術(経皮的内視鏡胃瘻造設術、腹腔鏡下胃瘻造設術を含む。) (医科点数表第2章第10部手術の通則16に掲げる手術)	平成26年4月1日
輸血管理料Ⅰ	平成25年1月1日
自己生体組織接着剤作成術	平成24年4月1日
人工肛門・人工膀胱造設術前処置加算	平成24年4月1日
周囲組織再生誘導手術	平成20年4月1日
広範囲骨支持型装置埋入手術	平成24年4月1日
麻酔管理料(Ⅰ)	平成16年5月20日
麻酔管理料(Ⅱ)	平成22年4月1日
放射線治療専任加算(第1リニアック室・第2リニアック室)	平成16年5月20日
高エネルギー放射線治療	平成16年5月20日
強度変調放射線治療(ⅠM R T)(第1リニアック室・第2リニアック室)	平成21年6月1日
画像誘導放射線治療(ⅠG R T)(第1リニアック室)	平成22年4月1日
直線加速器による放射線治療(定位放射線治療)(第2リニアック室)	平成16年8月1日
定位放射線治療呼吸性移動対策加算(第1リニアック室)	平成24年4月1日
クラウン・ブリッジ維持管理料	平成16年5月20日
歯科矯正診断料	平成22年8月1日
顎口腔機能診断料(顎変形症(顎顔面等)の手術を必要とするものに限る。) の手術前後における歯科矯正に係るもの)	平成18年6月1日

(13) 臨床修練指定病院

区 分	指定等の年月日
臨床修練指定病院(外国医師・外国歯科医師)	昭和63年3月29日

(14) 先進医療

区 分	指定等の年月日
術後のホルモン療法及びS-1内服投与の併用療法 原発性乳がん(エストロゲン受容体が陽性であって、HER2が陰性) のものに限る。)	平成24年6月1日
実物大臓器立体モデルによる手術支援	平成25年3月1日

2. 看護学専攻及び医学部看護学科

医学系研究科看護学専攻・医学部看護学科の自己評価

医学部看護学科長 奥村 太志

1. 教育

教育に関しては、入学者数に対する留年者数は数名いるが、学生のほとんどは4年間という修業年限内で看護学科を卒業している。また、看護学科学生にとっての入学目的は、看護師・保健師・助産師の資格を取ることであるが、卒業生の国家試験結果を見てみると、その合格率は非常に高く、毎年全国平均を大きく上回っている。平成25年度の国家試験合格率では、看護師97.8%、保健師97.7%、助産師100%と高い値を示している。このように学生が目的を達成できるように、教職員は実習をはじめ講義・演習など、教育内容のより一層の充実日々努めているところである。一方で、全国規模で看護系大学・学部が急増し看護教員が不足している状況にある。県内でも3校の新設が進められており、岐阜大学も同様に、平成26年度時点で、いくつかの看護学分野に教員の欠員がでている。それにもなって専任教員の負担増は想像を絶するものであり、教育への質の低下が懸念されている。現時点における看護学科の最大の課題は教員の確保である。

平成26年度には保健師教育課程・助産師教育課程の教育内容や順序性を見直し、より充実した看護師教育課程が展開できるようにした。これにより、より一層きめ細かな教育と全人的看護教育が可能となるものと考えている。平成27年度からの看護学教育に期待したい。

2. 研究

研究に関しては、看護系学会に投稿する場合、多くはインパクトファクターなど研究レベルを評価できる基準がないため、学会会員数や設立後の年数、報道や表彰といった内容を基に、掲載論文のレベルとなる規準を作成した。優秀論文としての表彰や研究活動が新聞に報道されるなど、これまで以上の業績が徐々に出てきている。一方、教員数の不足に伴った専任教員の負担から、研究への意欲はあってもそれに取り組む時間を確保できないと、研究活動にも支障が出る可能性が高い。教員確保に努め、看護学科内の他分野との共同研究を推進し、新しい知見を得ることで看護学の更なる発展につなげたい。

3. 社会貢献

社会貢献においては、個々の教員がそれぞれの専門分野で行っている。具体的には、岐阜県看護協会の研修や看護学学会の運営、講師、シンポジストなど、県内看護系学校の専門分野での講義の担当、地方自治体の各種運営委員会などの委員や委員長など、さらに、各種専門の協議会（全国保健師教育機関協議会、全国助産師教育機関協議会の役員など）、県内の病院や施設との共同研究など、多種多様な分野で社会貢献している。

3. 医学部附属病院

医学部附属病院の自己評価

医学部附属病院長 小倉 真治

平成 24 年度から 26 年度の自己評価を行う。

岩間前病院長時代の平成 24・25 年度を含んだ中期目標は第二期中期計画の開始からの 3,4 年目に当たり、①地域の中核となる医療人を育成する。②地域連携の基盤に立ち、高質な医療を提供する。③拠点病院の機能を活用し、EBM (evidence based medicine) を確立するための臨床研究の推進と新規医療技術開発を遂行する。④迅速な経営判断に基づく経営基盤の強化と効率的な組織運営を行う。というものである。それぞれの目標に対し組織としては①では北診療棟の完成に伴い、研修医の居住空間の著しい改善が見られるとともに、医師育成推進センターの設置、内視鏡外科手術トレーニングセンターの設置により、専従教育職員、事務職員が研修医へのきめ細かい対応を行い始めている。数値目標としての研修医マッチング数増加にはまだ結びついてはいないが、少なくとも当院で研修する研修医の満足度が向上していることがアンケートからも読み取れる。また医師以外のメディカルスタッフに対する研修も院内 ICLS コースなど、充実してきている。

②において 25 年度の北診療棟の完成に伴い光学医療診療部及び化学療法室での快適な治療等を開始した。その結果、消化管のがんの内視鏡治療件数は、岐阜県では勿論第 1 位であり、東海地方でも上位 5 位以内となっている。がん診療連携拠点病院として、岐阜県内の医療従事者を対象に「がん治療戦略検討会」等を定期的に開催、また機能強化を図るため、がんセンターの緩和ケア部門に緩和ケアセンターを設置した。病院の医療の質向上に貢献するため、26 年度にオートプシー・イメージングセンターを設置した。

③では 26 年度に先端医療・臨床研究推進センターを設置し、京都大学開花プロジェクトや名古屋大学円環コンソーシアムなど研究の推進が進んでいるところである。今後も臨床研究や基礎研究を支援する体制を病院でも作っていく予定である。また、26 年 12 月に入札の結果、決定した次世代電子カルテにおいては、地域連携のみならず、ビッグデータを生かすことが容易に出来る環境が整う予定であり、研究に有用となるはずである。

④の経営についてだが、病院収益は 24 年度 178 億、25 年 183 億と増加しているが、26 年度は特定共同指導の影響等で大きな伸びは見られていない。一方、26 年度の支出は人員増、消費増税、給与削減廃止などに伴い、大きく増加することが想定された。これに対し、病院運営会議で、病院運営体制の経営基盤強化並びに改善を図るため、新たに病院長戦略室、人材確保対策、周術期（手術部）運営の最適化、病棟運営の最適化に関するタスクホースを設置し、その結果、ベッドコントロールの中央管理化、手術枠の拡大再配分による、ICU の利用拡大、病院全体の病床利用率の拡大等の介入を開始した。また、本院の診療報酬分析及び施設基準分析に関するアドバイザー業務契約を締結した。

以上平成 24 年から 26 年度の目標達成度の自己評価はおおむね良好であるが、現状の病院の構造からすれば、さらに医業収益を上げる必要があり、そのためには地域との連携を基にした病床利用の大きな改善が必要になると思われる。

医学系研究科・医学部自己評価委員会委員名簿

	清 島 満	(研究科長)
	湊 口 信 也	(副研究科長)
委員長	原 明	(副研究科長)
	小 倉 真 治	(病院長)
	奥 村 太 志	(看護学科長)
	千 田 隆 夫	(医学科教務厚生委員長)
	足 立 久 子	(看護学科教務厚生委員長)
	江 崎 孝 行	(医学研究科学務委員長)
	滝 内 隆 子	(看護学専攻学務委員長)
	山 口 瞬	(基礎・社会医学系教授)
	飯 田 宏 樹	(臨床医学系教授)
	杉 浦 太 一	(看護学科将来計画委員長)
	中 島 茂	(岐阜大学評価室員)
	桐 山 敏	(医学研究科・医学部事務長補佐)
	金 永 博 行	(病院総務課長)

医学系研究科・医学部自己評価委員会「現状と課題」作業部会委員名簿

部会長	原 明	(副研究科長)
	千 田 隆 夫	(医学科教務厚生委員長)
	足 立 久 子	(看護学科教務厚生委員長)
	桐 山 敏	(医学研究科・医学部事務長補佐)
	金 永 博 行	(病院総務課長)
事務局	岩 田 英 孝	(医学研究科・医学部研究支援係長)
	浅 井 良 太	(医学研究科・医学部事務職員)